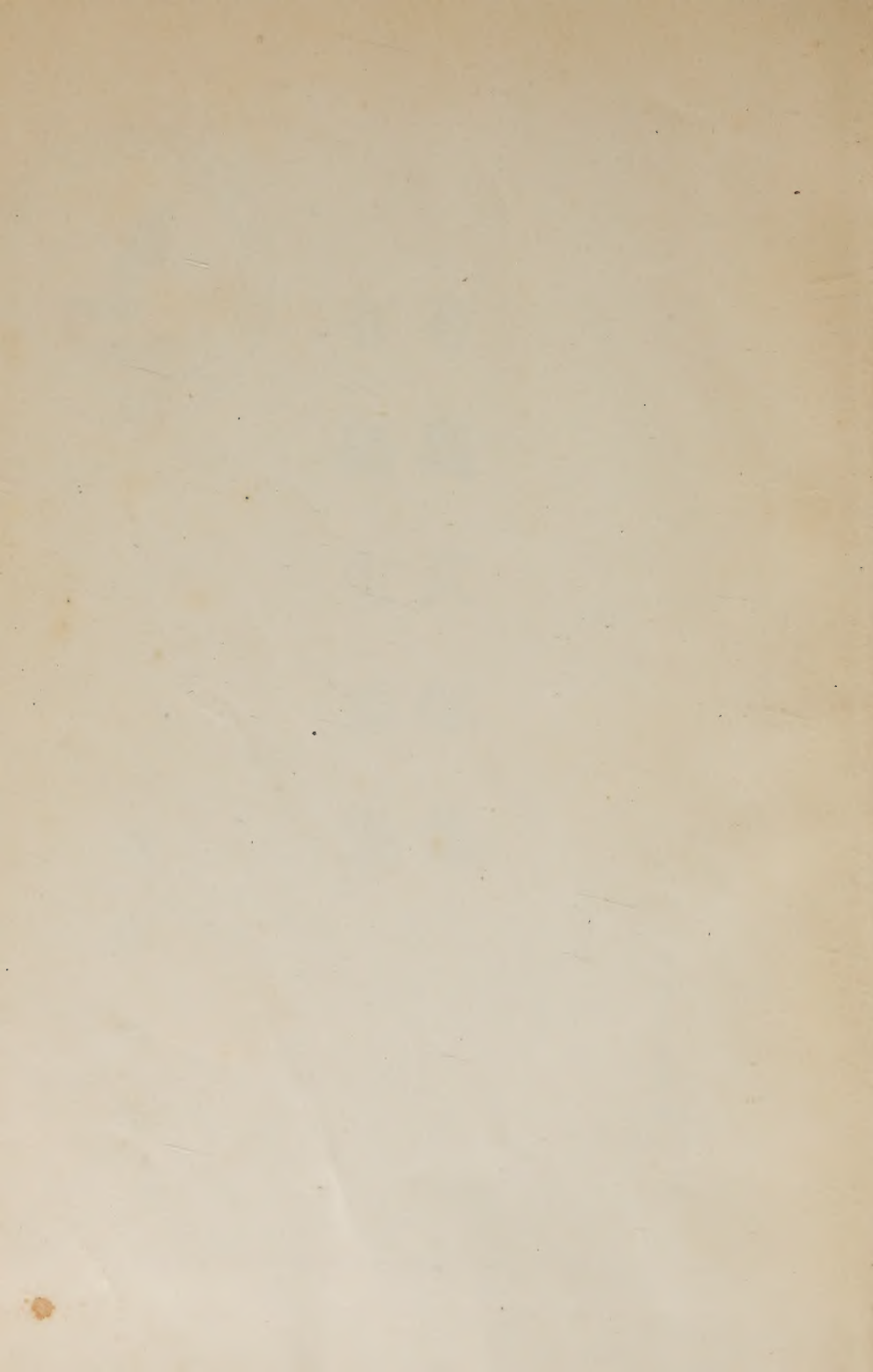


現代文學全集

XXVII







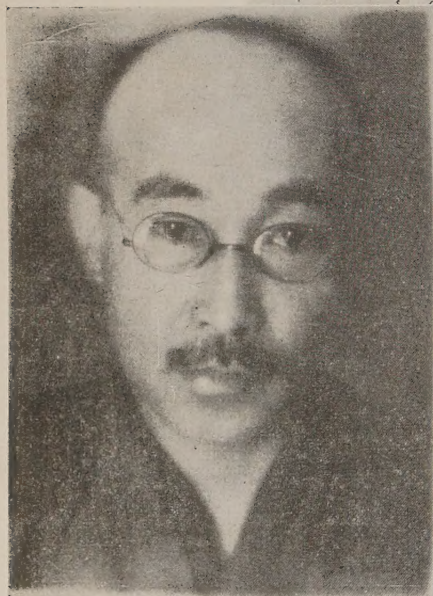
有 有
島 島
生 武
馬 郎
集 集

改
造
社
版

杉浦非水裝幀

凡てが終つた。僕は今日夢を隠くす。これ
 から僕が何をするか又何をするかは君の知つ
 た事やない。
 君のなまぬるい神経に僕等三人の運命の結
 末が映り出した。何か如く映るが。兎に角僕
 は魂の薄抜けになつた。M子と君に告げる。人
 間が一生の間に恐らくは一度より経験しない
 深い深い生命の燃焼を。一片の思ひやりもな
 く、おやけ切つた心で素人だ。君が果して君
 の恋人と死より救ひ得る。いふ、まゝに
 かで衆みに見てゐるぞ。

右、有島武郎氏筆蹟



上、晩年の有島武郎氏

右、最近の有島生馬氏



PL755.6

.G38

v.27

卷一

卷二

卷三

卷四

卷五

卷六

「有島武郎集」目次

卷頭 寫眞 (照影・筆蹟)

小 傳

..... 有島生馬 四

小 さ き 者 へ 五

カ イ ン の 末 裔 二三

生 れ 出 づ る 惱 み 三七

ク ラ ラ の 出 家 七三

或 る 女 八三

ド モ 又 の 死 三〇

惜 み な く 愛 は 奪 ふ 三四三

著 作 年 表 三九九

「有島武郎集」の後に 織田正信 四〇四

有島武郎集

「有島生馬集」目次

卷頭寫眞（照影）

小序（筆蹟）

.....四〇八

鳩はと

飼か

ふ

娘むすめ

.....四〇九

美み

少せう

年ねん

.....四一五

獅子ししウブラジンとエレル老人らうじん

.....四二六

眞ま

晝ひる

の

出で

來き

事こと

.....四三七

嘘うそ

の

果み

.....四四九

年

譜

.....五二三

小 さ き 者

お前たちが大きくなつて、一人前の人間に育ち上つた時、——その時までお前たちの父は生きてゐるかないか、それは分らない事だが——父の書き残したものを繰り擧げて見る機会があるだらうと思ふ。その時この小さな書き物もお前たちの眼の前に現はれ出るだらう。時はどんく／＼移つて行く。お前たちの父なる私がその時お前たちにどう映るか、それは想像も出来ない事だ。恐らく私が今こゝで、過ぎ去らうとする時代を噓ひ憐れんでゐるやうに、お前たちも私の古臭い心持を噓ひ憐れむのかも知れない。私はお前たちの爲めにさうあらん事を祈つてゐる。お前たちは遠慮なく私を踏臺にして、高い遠い所に私を乗り越えて進まなければ間違つてゐるのだ。然しながらお前たちをどんなに深く愛したものがこの世にゐるか、或はゐたかといふ事實は、永久にお前たちに必要なもので私は思ふのだ。お前たちがこの書き物を讀んで、私の思想の未熟で頑固なものを噓ふ間に、私達の愛はお前たちを暖め、慰め、勵ま

し、人生の可能性をお前たちの心に味覺させずにおかないと私は思つてゐる。だからこの書き物を私はお前たちにあてて書く。

お前たちは去年一人の、たつた一人の父を永久に失つてしまつた。お前たちは生れると間もなく、生命に一番大事な養分を奪はれてしまつたのだ。お前達の人生はそこで既に暗い。この間ある雑誌社が「私の母」といふ小さな感想をかけたといつて來た時、私は何んの氣もなく、自分の幸福は母が始めから一人で今も生きてゐる事だと書いてのけた。而して私の萬年筆がそれを書き終へるか終へないに、私はすぐお前たちの事を思つた。私の心は悪事でも働いたやうに痛かつた。しかも事實は事實だ。私はその點で幸福だつた。お前たちは不幸だ。恢復の途なく不幸だ。不幸なものたちよ。

曉方の三時からゆるい陣痛が起り出して不安が家中に擴がつたのは今から思ふと七年前の事だ。それは吹雪も吹雪、北海道ですら、滅多にはないひどい吹雪の日だつた。市街を離れた川

沿ひの一つ家はけし飛ぶ程揺れ動いて、窓硝子に吹きつけられた粉雪は、さらぬだに綿雲に閉ぢられた陽の光を二重に遮つて、夜の暗さがいつまでも部屋から退かなかつた。電燈の消えた薄暗い中で、白いものに包まれたお前たちの母上は、夢心地に呻き苦しんだ。私は一人の學生と一人の女中とに手傳はれながら、火を起したり、湯を沸かししたり、便を走らせたりした。産婆が雪で眞白になつてころげこんで來た時は、家中のものが思はずはつと息氣をついて安堵したが、書になつても書過ぎになつても出産の模様が見えないで、産婆や看護婦の顔に、私だけに見える氣遣ひの色が見え出すと、私は全く慌ててしまつてゐた。書齋に閉ぢ籠つて結果を待つてゐられなくなつた。私は産室に降りていつて、産婦の兩手をしつかり握る役目をした。陣痛が起る度毎に産婆は叱るやうに産婦を勵まして、一分も早く産を終らせようとした。然し暫らくの苦痛の後に、産婦はすぐ又深い嘔りに落ちてしまつた。鮮き／＼かいて安々と何事も忘れたやうに見えた。産婆も、後から驅けつけてくれた醫者も、顔を見合はして吐息をつくばかりだつた。醫師は昏睡が来る度毎に何か非常の手段を用ひようかと案じてゐるらしかつた。

有島武郎小傳

兄は明治十一年三月四日、小石川區水道町の貸家で生れた。當時父武は三十六歳、大藏省書記官を勤めてゐたが、生れは薩摩川内北郷家の家臣であつた。母幸子も南部藩々士の姫だが、祖父が江戸表留守居役をしてゐたので、十歳までは都で育つた。兎も角二人は南と北の果から出て、新帝都に新時代の生計を営む努力を初めたのである。

同十五年父が横濱税關長に轉任し、十年間の官邸生活が続いた。その間兄は長官の長男たる故と天稟の徳望とで、衆童から小さい王子のやうな待遇を受けてゐた。父は兄を米國人の家庭や學校へ送り、専ら英語を學ばしめた。十歳から虎門學醫院へ寄宿せしめた。一體父は子供の教育に就いては自由放任であつたが、兄だけは除外例だつたと云はれてゐる。然し兄の性格等に就いては言葉を極めて常に賞揚してゐた。中學時代は溫良聰明な模範的學生の一人だつた。皇太子殿下の御相手に選ばれた一事でもそれは知られる。

二十九年學醫院中等科を卒業、札幌農學校へ入學、新渡戸博士の家に寄寓してゐた。かく兄

は幼少の頃から家を出、多くは人なかで成人する運命を持つてゐた。

札幌に於ける五年間の大自然の感化と素朴勤勉な學風とは彼に學問と徳性と信仰とを賦與した。かくて學醫院時代の貴族的物質的な教養を脱し、身心鍛錬向上の機會を得た。初め譯に參し、後内村鑑三氏等の感化から基督教に入つた。森本氏と共に著になる「リヴィングストン傳」は即ち當時の信仰の所産である。

三十四年鎌倉幕府初代の農政を残して卒業し、兩親の膝下に歸つたが、席温まる迄なく、志願兵として入營、越えて三十六年米國へ渡り、ハアヴァフォードでマスター・オブ・アーツを授けられた。その夏はフランクフォルト精神病院に至り、狂人の看護をした。その頃から明かに基督教に對し、專攻の歴史經濟に對し懷疑的となり、文學及び社會主義、唯物史觀等に興味を抱くやうになつた。ハーヴァードに遊ぶやうになつて、益々その傾向は顯著になつた。

三十九年の夏、私は米國から渡航して來た兄をナボリの埠頭に迎へた、兄はまだ文學者たる具體的の道を見出してゐなかつたが、既に專攻の學問には全然興味を失つて終つてゐた。ロンドンでクロボトキンに會つた兄は翌年の四月

久々で故郷へ歸り、その十二月から東北帝國大學の教師として赴任した。

四十二年神尾光臣の二女安子と結婚した、三十一歳である。四十四年以後次ぎ／＼に行ハ、敏行、行三の三男が生れた。然し嫂は程なく健康を害したので、兄も職を辭し東京下六區明の松宅へ歸つて來た。安子の病勢は思ふやうに恢復しなかつた、同歲八年大正五年八月平塚の香雪堂病院に瞞目した。兄は最上の努力を盡し自ら看護にあたつた。その十二月父も亦歿した。兄の平安無事だつた生活は一轉し、重荷と煩累とが急にのしかゝつて來た。

結婚の翌年、白樺が發行された。同人は悉く吾等兄弟三人の舊友であつた。その關係上兄も執筆し、四十四年一月から長篇或る女が掲載され出した。それ以後の十三年間は文壇人として、讀者の記憶にまだ新なことを思ふ。

大正十二年春、財産及び農場の譲與を公言し、その六月八日午後三時頃母及び姉に挨拶して家を出た。吾々は今日まで空しく兄の歸を待つた。時に四十六歳。今日生存してゐれば丁度五十歳になる。

昭和二年六月八日

有島生馬

たまらない淋しさに襲はれるのを知りぬいてゐながら、激しい言葉を遣つたり、厳しい折檻をお前たちに加へたりした。

然し運命が私の我儘と無理解とを罰する時が来た。どうしてもお前達を子守に任せておけないで、毎晩お前たち三人を自分の枕許や、左右に臥らして、夜通し一人を寝かしつけたり、一人に牛乳を温めてあてがつたり、一人に小用をさせたりして、碌々熟睡する暇もなく愛の限りを盡したお前たちの母上が、四十一度といふ恐ろしい熱を出してどつと床についた時の驚きもさる事ではあるが、診察に来てくれた二人の醫師が口を揃へて、結核の徴があるといつた時には、私は呻も言もなく青くなつてしまつた。検査の結果は醫師たちの鑑定を裏書きしてしまつた。而して四つと三つと二つとなるお前たちを残して、十月末の淋しい秋の日に、母上は入院せねばならぬ體となつてしまつた。

私は日中の仕事を終ると飛んで家に歸つた。而してお前達の一人か二人を連れて病院に急いだ。私がその町に住まひ始めた頃働いてゐた克明な門徒の婆さんが病室の世話をしてゐた。その婆さんはお前たちの姿を見ると隠し隠し涙を拭いた。お前たちは母上を寢臺の上に見つけると飛んでいつてかじり附かうとした。結核症であるのをまだあかされてゐないお前たちの母上は、實を抱きかゝるやうにお前たちをその胸に集めようとした。私はいゝ加減にあしらつてお前たちを寢臺に近づけないやうにしなればならなかつた。忠義をしようとしながら、周囲の人から極端な誤解を受けて、それを辯解してならない事情に置かれた人の味ひさうな心持を幾度も味つた。それでも私はもう怒る勇氣はなかつた。引きはなすやうにしてお前たちを母上から遠ざけて歸路につく時には、大抵街燈の光が淡く道路を照してゐた。玄關を這入ると雇人だけが留守してゐた。彼等は二三人もゐる癖に残しておいた赤坊のおしめを代へようとしなかつた。氣持ち悪げに泣き叫ぶ赤坊の股の下はよくぐいよ濡れになつてゐた。

お前たちは不思議に他人になつかない子供たちだつた。やう／＼お前たちを寝かしつけてから私はそつと書齋に這入つて調べ物をした。體は疲れて頭は興奮してゐた。仕事をすまして寢つかうとする十一時前後になると、神經の過敏になつたお前たちは、夢などを見ておびえながら眼をさますのだつた。曉方になるとお前たち

の一人は乳を求めて泣き出した。それにおこされと私の眼はもう朝まで閉ぢなかつた。朝食を食ふと私は赤い眼をしながら、堅い心のやうなものの出来た頭を抱へて仕事をすする所に出懸けた。

北國には冬が見る／＼逼つて来た。ある時病院を訪れると、お前たちの母上は寢臺の上に起きかへつて窓の外を眺めてゐたが、私の顔を見ると、早く退院がしたいといひ出した。窓の外の楓があらなになつたのを見ると心細いといふのだ。成るほど入院したてには燃えるやうに枝を飾つてゐたその葉が一枚も残らず散りつくして、花壇の菊も霜に傷められて、萎れる時でもないのに萎れてゐた。私はこの寂しさを毎日見せておくだけでもいけないと思つた。然し母上の本當の心持はそんな所にはなかつて、お前たちから一刻も離れてゐられなくなつてゐたのだ。

今日いよ／＼退院するといふ日は、霞の降る、寒い風のびゆう／＼と吹く悪い日だつたから、私は思ひ止らせようとして、仕事をすますとすぐ病院に行つて見た。然し病室はからつぽで、例の婆さんが、貰つたものやら、座蒲團やら、茶器やらを部屋の間でござ／＼と始末してゐた。

晝過ぎになると戸外の吹雪は段々鎮まつて、
つて、濃い雪雲から漏れる薄日の光が、窓にた
まつた雪に來てそつと戯れるまでになつた。然
し産室の中の人々にはますます「重い不安の雲が
蔽ひ被さつた。醫師は醫師で、産婆は産婆で、
私は私で、鈴々の不安に捕はれてしまつた。
その中で何等の危害をも感ぜぬらしく見えるの
は、一番恐ろしい運命の淵に臨んでゐる産婦と
胎兒だけだつた。二つの生命は昏々として死の
方へ眠つて行つた。

丁度三時と思はしい時に——産氣がついてか
ら十二時間目に——夕べを催す光の中で、最
後と思はしい激しい陣痛が起つた。肉の眼で恐
ろしい夢でも見るやうに、産婦はかつと臉を開
いて、あてどもなく一所を睨みながら、苦しげ
といふよりは恐ろしげに顔をゆがめた。而して
私の上體を自分の胸の上にたくし込んで、背
中を羽がいに抱きすくめた。若し私が産婦と同
じ程度にいきんでゐなかつたら、産婦の腕は私
の胸を押しつぶすだらうと思ふ程だつた。そこ
にゐる人々の心は思はず總立ちになつた。醫師
と産婆は場所を忘れたやうに大きな聲で産婦を
勵ました。
ふと産婦の握力がゆるんだのを感じて私は

顔を舉げて見た。産婆の膝許には血の氣のない
嬰兒が仰向けに横たへられてゐた。産婆は種で
もつくやうにその胸をはげしく敲きながら、葡
萄酒々々々といつてゐた。看護婦がそれを持つ
て來た。産婆は顔と言葉とでその酒を胸の中に
あけろと命じた。激しい芳香と同時に熱の湯は
血のやうな色に變つた。嬰兒はその中に浸され
た。暫らくしてかすかな産聲が息氣もつけない
緊張の沈黙を破つて細く響いた。

大きな天と地との間に一人の母と一人の子と
がその刹那に忽如として現はれ出たのだ。
その時新たな母は私を見て弱々しくほゝそん
だ。私はそれを見ると何んといふ事なしに涙が
眼がしらに滲み出て來た。それを私はお前たち
に何んといつていひ現はすべきかを知らない。
私の生命全體が涙を私の眼から押し出したとて
もいへばいいのかも知らん。その時から生活の諸
相が見て眼の前で變つてしまつた。
お前たちの中最初にこの世の光を見たものは、
このやうにして世の光を見た。二番目も三
番目も、生れやうに難易の差こそあれ、父と母
とに與へた不思議な印象に變りはない。
かうして若い夫婦はつぎ／＼にお前たち三人
の親となつた。

私はその頃心の中に色々な問題をあり餘る
程持つてゐた。而して始終離離しながら何一つ
自分を満足に近づけるやうな仕事をしてゐな
かつた。何事も獨りで嚙みしめて見る私の性質
として、表面には十人並みな生活を生活してゐ
ながら、私の心はやゝともすると突き上げて來
る不安にいら／＼させられた。ある時は結婚を
悔いた。ある時はお前たちの誕生を惡んだ。何
故自分の生活の旗色をもつと鮮明にしない中に
結婚などをしたか。妻のある爲めに後ろに引き
ずつて行かれねばならぬ重みの幾つかを、何故
好んで腰につけたのか。何故二人の肉慾の結果
を天からの賜物のやうに思はねばならぬのか。
家庭の建立に費す勞力と精力とを自分は他に
用ひべきではなかつたのか。

私は自分の心の亂れからお前たちの母上を
屢々泣かせたり淋しがらせたりした。またお前
たちを没義道に取りあつかつた。お前達が少し
執念く泣いたりいがんだりする聲を聞くと、私は
何か殘虐な事をしないではゐられなかつた。
原稿紙にでも向つてゐた時に、お前たちの母上
が、小さな家事上の相談を持つて來たり、お前
たちが泣き騒いだりしたりすると、私は思はず
机をたゝいて立ち上つたりした。而して後では

お前たちだけの尊い所有物だ。それは今は乾いてしまった。大空を互る雲の一片となつてゐるか、谷河の水の一滴となつてゐるか、大洋の泡の一つとなつてゐるか、又は思ひがけない人の涙堂に貯へられてゐるか、それは知らない。然しその熱い涙は兎も角もお前たちだけの尊い所有物なのだ。

自動車のある所に来ると、お前たちの中熱病の豫後にある一人は、足の立たない爲めに下女に背負はれて、一人はよち／＼と歩いて、

一番末の子は母上を苦しめ過ぎるだらうといふ祖父母たちの心遣ひから連れて來られなかつた——母上を見送りに出て來てゐた。お前たちの頑固な、驚きの眼は、大きな自動車にばかり向けられてゐた。お前たちの母上は淋しくそれを見やつてゐた。自動車が動き出すとお前達は女中に勧められて兵隊のやうに舉手の禮をした。母上は笑つて軽く頭を下げてゐた。お前たちは母上がその瞬間から永久にお前たちを離れてしまふとは思はなかつたらう。不幸なものたちよ。

それからお前たちの母上が最後の息氣を引きとるまでの一年と七箇月の間、私たちの間には烈しい戦が闘はれた。母上は死に對して最

上の態度を取る爲めに、お前たちに最大の愛を遺すために、私を加減なしに理解する爲めに、私は母上を病魔から救ふ爲めに、自分に迫る運命を勇しく肩に擔ひ上げるために、お前たちは不思議な運命から自分を解放するために、身にふさはない境遇の中に自分をはめ込むために、闘つた。血まぶれになつて、闘つたといつていい。私も母上もお前たちも幾度弾丸を受け、刀創を受け、倒れ、起き上り、又倒れたらう。

お前たちが六つと五つと四つになつた年の八月の二日に死が殺到した。死が凡てを壓倒した。而して死が凡てを救つた。

お前たちの母上の遺言書の中で一番崇高な部分は、お前たちに與へられた一節だつた。若しこの書き物を讀む時があつたら、同時に母上の遺書も讀んで見るがいい。母上は血の涙を泣きながら、死んでもお前たちに會はない決心を顯わさなかつた。それは病菌をお前たちに傳へるのを恐れたばかりではない。又お前たちを見る事によつて自分の心の破れるのを恐れたばかりではない。お前たちの清い心に残酷な死の姿を見せ、お前たちの一生をいやが上に暗くする事を恐れ、お前たちの伸び伸びで行かなければ

ならぬ靈魂に少しでも大きな傷を残す事を恐れたのだ。幼兒に死を知らせる事は無益であるばかりでなく有害だ。葬式の時はお前たちにつけて楽しく一日を過ごさして貰ひたい。さうお前たちの母上は書いてゐる。

「子を思ふ親の心は日の光世より世を照る大

きさに似て」

とも詠じてゐる。

母上が亡くなつた時、お前たちは丁度信州の山の上にゐた。若しお前たちの母上の臨終にあはせなかつたら一生恨みに思ふだらうと書きいてよこしてくれたお前たちの叔父上に強ひて頼んで、お前たちを山から歸らせなかつた私をお前たちが残酷だと思ふ時があるかも知れない。今十一時半だ。この書き物を草してゐる部屋の隣りにお前たちは枕を列べて寝てゐるのだ。お前たちはまだ小さい。お前たちが私の齡になつたら私のした事を、即ち母上のさせようとした事を、假高く見る時が來るだらう。

私はこの間にどんな道を通つて來たらう。お前たちの母上の死によつて、私は自分の生き行くべき大道にさまよひ出た。私は自分を愛護してその道を踏み迷はずに通つて行けばいいのを知るやうになつた。私は嘗て一つの創作の

急いで家に歸つて見ると、お前たちはもう母上のまはりに集まつて嬉しさうに騒いでゐた。私はそれを見たと涙がこぼれた。

知らない間に私たちは離れられないものになつてしまつてゐたのだ。五人の親子はどん／＼押し寄せて来る寒さの前に、小さく固まつて身を護らうとする雑草の株のやうに、互により添つて、暖みを分かち合はうとしてゐたのだ。然し北國の寒さは私たち四人の暖みでは間に合はない程寒かつた。私は一人の病人と頑足はないお前たちとを勞はりながら旅籠のやうに南を指して通れなければならなくなつた。

それは初雪のどん／＼降りしきる夜の事だつた、お前たち三人を生んで育ててくれた土地を後にして旅に上つたのは。忘れる事の出来ないいくつかの顔は、暗い停車場のプラットフォームから私たちに名残を惜しんだ。陰鬱な津輕海峡の海の色も後ろになつた。東京までついて来てくれた一人の學生は、お前たちの中の一、番小さい者を、母のやうに終夜抱き通してゐてくれた。そんな事を書けば限りがない。兎も角私たちは幸に怪我もなく、二日の物憂い旅の後に晩秋の東京に着いた。

今までゐた所とちがつて、東京には澤山の

親類や兄弟がゐて、私たちの爲めに深い同情を寄せてくれた。それは私にどれ程の力だつたらう。お前たちの母上は程なく下流岸にきゝやかな住別荘を借りて住む事になり、私たちは近所の旅館に宿を取つて、そこから見舞ひに通つた。一時は病勢が非常に衰へたやうに見えた。お前たちと母上と私とは海岸の砂丘に行つて日向ぼつこをして楽しく二三時間を過ごすまでになつた。

どういふ積りで運命がそんな小腰を私たちに與へたのかそれは分らない。然し彼れはどんな事があつても仕遂ぐべき事を仕遂げずにはおこなかつた。その年が暮れに迫つた頃お前達の母上は假初の風邪からぐ／＼悪い方へ向いて行つた。而してお前たちの中の一人も突然原因の解らない高熱に侵された。その病氣の事を私は母上に知らせるのに忍びなかつた。病児は病児で私を暫らくも手放さうとはしなかつた。

お前達の母上からは私の無沙汰を責めて來た。私は遂に倒れた。病児と枕を並べて、今まで経験した事のない高熱の爲めに呻き苦しめばならなかつた。私の仕事？ 私の仕事は私から千里も遠くに離れてしまつた。それでも私はもう私を悔やまうとはしなかつた。お前たちの爲

めに最後まで戦はうとする熱意が病熱よりも高く私の胸の中で燃えてゐるのみだつた。

正月早々悲劇の絶頂が到來した。お前たちの母上は自分の病氣の真相を明かされればならぬ破目になつた。そのむづかしい役目を勤めてくれた醫師が歸つて後の、お前たちの母上の顔を見た私の記憶は一生涯私を驅り立てるだらう。眞蒼な清々しい顔をして枕についたまま母上には冷たい覺悟を微笑に云はして靜かに私を見た。そこには死に對する resignation と共にお前たちに對する根強い執着がまぎ／＼と刻まれてゐた。それは物凄くさへあつた。私は凄慘な感じに打たれて思はず眼を伏せてしまつた。

愈々日海岸の病院に入院する日が來た。お前たちの母上は全快しない限りは死ぬともお前たちに逢はない覺悟の脚を堅めてゐた。二度とは着ないと思はれる——而して實際着なかつた——喘着を着て座を立つた母上は内外の母親の眼の前でさめ／＼と泣き崩れた。女ながらに氣性の勝れて強いお前たちの母上は、私と二人だけゐる場合でも泣顔などは見せた事がないといつてもいい位だつたのに、その時の涙は拭くあとからあとと流れ落ちた。その熱い涙は

ンケチを巻き通しな喉からは鍛煉れた聲しか出なかつた。働けば病氣が重なる事は知れ切つてゐた。それを知りながらU氏は御祈禱を頼みにして、老母と二人の子供との生活を續けるために、勇ましく飽くまで働いた。而して病氣が重つてから、なけなしの金を出して貰つた古賀液の注射は、田舎の醫師の不注意から靜脈を外れて、激烈な熱を引き起した。而してU氏は無資産の老母と幼兒とを後に殘してその爲めに斃れてしまつた。その人たちは私たちの隣りに住んでゐたのだ。何んといふ運命の皮肉だ。お前たちは母上の死をお前たちの愛をその恐ろしい溝を埋める工夫をしなければならぬ。お前たちの母上の死はお前たちの愛をそこまで擴げさすに十分だと思ふから私はいふのだ。

十分人世は淋しい。私たちは唯さういつて澄してゐる事が出来るだらうか。お前たちと私は、血を味つた歌のやうに、愛を味つた。行かう、而して出来るだけ私たちの周圍を淋しきから救ふために働かう。私はお前たちを愛した。而して永遠に愛する。それはお前たちから親としての報酬を受けるためにいふ

ではない。お前たちを愛する事を教へてくれたお前たちに私の要求するものはたゞ私の感謝を受取つて貰ひたいといふ事だけだ。お前たちが一人前に育ち上つた時、私は死んでゐるかも知れない。一生懸命に働いてゐるかも知れない。老衰して物の役に立たないやうになつてゐるかも知れない。然し何れの場合にしろ、お前たちの助けなければならぬものは私ではない。お前たちの若々しい力は既に下り坂に向はうとする私などに煩はされてゐてはならない。斃れた親を喰ひ盡して力を貯へる獅子の子のやうに、力強く勇ましく私を振り捨てて人生に乗り出して行くがよい。

今時計は夜中を過ぎて一時十五分を指してゐる。しんと靜まつた夜の沈黙の中にお前たちの平和な寢息だけが幽かにこの部屋に聞こえて来る。私の眼の前にはお前たちの叔母が母上にとて贈られた薔薇の花が寫眞の前に置かれてゐる。それにつけて思ひ出すのは私があの寫眞を撮つてやつた時だ。その時お前たちの中に一番年たけたものが母上の胎に宿つてゐた。母上は自分でも分らない不思議な望みと恐れとで始終心をなやましてゐた。その頃の母上は殊に美しかった。希臘の母の眞似だといつて、部屋の中

にいゝ肖像を飾つてゐた。その中にミネルヴァの像や、ゲーテや、クロムウェルや、ナイティンゲール女史やの肖像があつた。その少女じみた野心をその時の私は輕い皮肉の心で觀てゐたが、今から思ふとたゞ笑ひ捨ててしまふことはどうしても出来ない。私がお前たちの母上の寫眞を撮つてやらうといつたら、思ふ存分化粧をして一番の晴着を着て、私の二階の書齋に這入つて来た。私は寧ろ驚いてその姿を眺めた。母上は淋しく笑つて私にいつた。産はタの出陣だ。いゝ子を生むか死ぬか、そのどつちかだ。だから死際の装ひをしたのだ。――その時も私は心なく笑つてしまつた。然し、今はそれも笑つてはゐられない。

深夜の沈黙は私を嚴肅にする。私の前には机を隔ててお前たちの母上が坐つてゐるやうにさへ思ふ。その母上の愛は遺書にあるやうにお前たちを護らなすにはゐないだらう。よく眠れ。不可思議な時といふものの作用にお前たちを打ち任してよく眠れ。さうして明日は昨日よりも大きく賢くなつて寢床の中から跳り出して來い。私は私の役目をなし遂げる事に全力を盡すだらう。私の一生が如何に失敗であらうとも、又私が如何なる誘惑に打ち負けようとも、

中に妻を犠牲にする決心をした一人の男の事を書いた。事實に於てお前たちの母上は私の爲めに犠牲になつてくれた。私のやうに持ち合はした力の使ひやうを知らなかつた人間はない。私の周囲のものは私を一個の小心な、魯鈍な、仕事の出来ない、憫れむべき男と見る外を知らなかつた。私の小心と魯鈍と無能力とを徹底さして見ようとしてくれるものはなかつた。それをお前たちの母上は成就してくれした。私は自分の弱さに力を感じ始めた。私は仕事の出来ない所に仕事をみ出した。大膽になれない所に大膽を見出した。鋭敏でない所に鋭敏を見出した。言葉を換へていへば、私は鋭敏に自分の魯鈍を見貫き、大膽に自分の小心を認め、勞役して自分の無能力を體驗した。私はこの力を以て己れを鞭打ち他を生きる事が出来るやうに思ふ。お前たちが私の過去を眺めて見るやうな事があつたら、私も無恥には生きなかつたのを知つて喜んでくれるだらう。

雨などが降りくらしして悵々たる気分が家の中に漲る日などに、どうかするとお前たちの一人が黙つて私の書齋に這入つて来る。而して一言ぱ、といったぎりで、私の膝によりかゝつたままいくく泣き出してしまふ。あゝ何がお前

たちの頑是ない眼に涙を要求するのだ。不濟なものたちよ。お前たちが謂れもない悲しみにくづれるのを見るに増して、此の世を淋しく思はせるものはない。またお前たちが元氣よく私に朝の挨拶をしてから、母上の寫眞の前に駈けて行つて、「マ、ちゃん御機嫌よう」と快活に叫ぶ瞬間ほど、私の心の底までぐさと刮り通す瞬間はない。私はその時、ぎよつとして無助の世界を眼前に見る。

世の中の人々は私の迷懷を馬鹿々々しいと思ふに違ひない。何故なら妻の死とはそこにもここにも厭きはてる程夥しくある事柄の一つに過ぎないからだ。そんな事を重大視する程世の中の人々は散散でない。それは確かにさうだ。然しそれにもかゝらず、私といはず、お前たちも行くくは母上の死を何物にも代へがたく悲しく口惜しいものに思ふ時が来るのだ。世の中の人々が無頓着だといつてそれを恥づてはならない。それは恥づべきことぢやない。私たちはそのありうちの事柄の中からも人生の淋しさに深くづつかつて見ることが出来る。小さなことが小さなことでない。大きなことが大きなことでない。それは心一つだ。

何しろお前たちは見るに痛ましい人生の芽生

えだ。泣くにつけ、笑ふにつけ、面白がるにつけ、淋しがるにつけ、お前たちを見守る父の心は痛ましく傷つく。

然しこの悲しみがお前たちと私とにどれ程の強みであるかをお前たちはまだ知るまい。私たちはこの損失のお蔭で生活に一段と深入りしたのだ。私共の根はいくらかでも大地に延びたのだ。人生を生きる以上人生に深入りしないものは災ひである。

同時に私たちは自分の悲しみにばかり浸つてゐてはならない。お前たちの母上は亡くなるまで、金銭の累ひからは自由だつた、飲みたい薬は何んでも飲む事が出来た。食ひたい食物は何んでも食ふ事が出来た。私たちは偶然な社會組織の結果からこの特權ならざる特權を享樂した。お前たちのあるものはかすかながらU氏一家の模倣を覚えてゐるだらう。死んだ細君から結核を傳へられたU氏があの理智的な性情を有しながら、天理教を信じて、その御祈禱で病氣を癒さうとしたその心持を考へると、私はたまらなくなる。薬がきくものか祈禱がきくものかそれは知らない。然しU氏は醫者の藥が飲みかつたのだ。然しそれが出来なかつたのだ。U氏は毎日下血しながら役所に通つた。ハ

カインの末裔

長い影を地にひいて、瘦馬の手綱を取りながら、彼は黙りこくつて歩いた。大きな汚い風呂敷包みと一緒に、章魚のやうに頭ばかり大きい赤坊をおぶつた彼の妻は、少し跛脚をひきながら三四間も離れてその跡からとぼくとついて行つた。

北海道の冬は空まで通つてゐた。蝦夷富士と云はれるマツカリヌプリの麓に續く膽振の大草原を、日本海から内浦灣に吹きぬける西風が、打寄せる紅濤のやうに跡から跡から吹き拂つて行つた。寒い風だ。見上げると八合目まで雪になつたマツカリヌプリは少し頭を前にこぎめて風に刃向ひながら黙つたまゝ突つ立つて居た。昆布岳の斜面に小さく集まつた雲の塊を眼がけて日は沈みかゝつてゐた。草原の上には一本の樹木も生えてゐなかつた。心細い程眞直な一筋道を、彼れと彼の妻だけが、よろ／＼と歩く二本の立木のやうに動いて行つた。

二人は言葉をおぼれた人のやうにいつまでも黙つて歩いた。馬が溺りをする時だけ彼は不承不承に立ちどまつた。妻はその暇にやうやく追ひついて背の荷をゆすり上げながら溜息をついた。馬が溺りをすまずと二人は又黙つて歩き出した。

「こゝろおやぢ(熊)の雪が出るづら」

四里にわたるこの草原の上で、たつた一度妻はこれだけの事を云つた。慣れたものには時刻と云ひ、所柄と云ひ、熊の襲來を恐れる理由があつた。彼れはいま／＼しきうに草の中に唾を吐き捨てた。

草原の中の道がだん／＼太くなつて國道に續く所まで來た頃には日は暮れてしまつてゐた。物の輪郭が圓味を帯びずに、堅いまゝで黒ずんで行くこちんとした寒い晩秋の夜が來た。

着物は薄かつた。而して二人は餓ゑ切つてゐた。妻は氣にして時々赤坊を見た。生きてゐるのか死んでゐるのか、兎に角赤坊はいびきも立たないで首を右の肩にがくりと垂れたまゝ黙つてゐた。

てゐた。

國道の上にはさすがに人影が一人二人動いてゐた。大抵は市街地に出て一杯飲んでゐたのらしく、行違ひにしたゝか酒の香を透つてよこすものもあつた。彼れは酒の香をかぐと急にゑぐられるやうな渴きと食慾を覺えてすれ違つた男を見送つたりしたが、いま／＼しさに吐き捨てようとする唾はもう出て來なかつた。糊のやうに粘つたものが唇の合せ目をとぢ附けてゐた。

内地ならば庚申塚か石地藏でもある筈の所に、眞黒になつた一丈もありさうな標示杭が斜になつて立つてゐた。そこまで來ると干魚をやく香ひがかすかに彼れの鼻をうつたと思つた。彼れははじめて立ち停つた。瘦馬も歩いた姿勢をそのまゝにのそりと動かなくなつた。鰐と尻尾だけが風に從つてなびいた。

「何んて云ふだ農場は」

春丈の岡抜けて高い彼れは妻を見おろすやうにしてかうつぶやいた。

「松川農場たら云ふだが」

「たら云ふだ、白痴」

彼れは妻と言葉を交はしたのが癢にさはつた。而して馬の鼻をぐんと手綱でしごいて又歩

お前たちは私の足跡に不純な何物をも見出し
得ないだけの事はする。屹度する。お前たちは
私の斃れた所から新らしく歩み出さねばなら
ないのだ。然しどちらの方向にどう歩まねばな
らぬかは、かすかながらにもお前達は私の足跡
から探し出す事が出来るだらう。

小さき者よ。不幸な而して同時に幸福なお前
たちの父と母との祝福を胸にしまて人の世の旅
に登れ。前途は遠い。而して暗い。然し恐れて
はならぬ。恐れない者の前に道は開ける。

行け。勇んで。小さき者よ。

(一九一八年一月、新潮所掲)

き出した。暗くなつた谷を距てて少し此方よりも高い位の平地に、忘れたやうに間をおいてともされた市街地のかすかな灯影は、人氣のない所よりも却つて自然を淋しく見せた。彼れはその灯を見てもう一種のおびえを覺えた。人の氣配をかぎつけると彼れは何んとか身づくろひをしないではゐられなかつた。自然さがその瞬間に失はれた。それを意識する事が彼れをいやが上にも佛頂面にした。「敵が眼の前に來たぞ。馬鹿な面をしてゐやがつて、尻子玉でもひつこぬかれるな」とでも云ひさうな顔を妻の方に向けて置いて、歩きながら帶をしめ直した。良人の顔附きには氣も着かない程眼を落した妻は口をだらりと開けたまゝ一切無頓着でたゞ馬の跡について歩いた。

瓦市街地の町端には空屋が四軒までならんで居た。小さな窓は獨體のそのやうな眞暗な眼を往來に向けて開いてゐた。五軒目には人が住んでゐたがうぐめく人影の間に圍爐裡の根粗朶がちよろ／＼と燃えるのが見えるだけだつた。六軒目には蹄鐵屋があつた。怪しげな煙筒からは風にこきおろされた煙の中にまじつて火花が飛び散つてゐた。店は熔爐の火口を開いたやうに明るくて、馬鹿々々しくだつた廣い北海

道の七間道路が向側まではつきりと照らされてゐた。片側町ではあるけれども、兎に角家並みがあるだけに、強ひて方向を變へさせられた風の脚が意趣に砂を捲き上げた。砂は蹄鐵屋の前の火の光りに照りかへされて滾々と渦巻く姿を見せた。仕事場の繩の圍りには三人の男が働いてゐた。鐵砧にあたる鐵槌の音が高く響くと疲れ果てた彼れの馬さへが耳を立てなほした。彼れはこの店先きに自分の馬を引つ張つて來る時の事を思つた。妻は吸ひ取られるやうに暖かさうな火の色に見惚れてゐた。二人は妙にわくわくした心持になつた。

蹄鐵屋の先きは急に闇が濃くなつて、大抵の家はもう戸じまりをしてゐた。荒物屋を兼ねた居酒屋らしい一軒から食物の香と男女のふざけ返つた濁聲がもれる外には、眞直な家並みは廢村のやうに寒さの前にちひこまつて、電信柱だけが、けうといと唸りを立ててゐた。彼れと馬と妻とは前の通りに押し黙つて歩いた。歩いては時折り思ひ出したやうに立ち停つた。立ち停つては又無意味らしく歩き出した。

四五町歩いたと思ふと彼等はもう町はづれに來てしまつて居た。道がへし折られたやうに曲つて、その先きは、眞闇な窪地に、急な勾配

を取つて下つてゐた。彼等はその突角まで行つて又立ち停つた。遙か下の方からは、うざ／＼する程繁り合つた調葉樹林に風の這入る音の外に、シリベシ川のかすかな水の音だけが聞こえてゐた。

「聞いて見づに」

妻は寒さに身をふるはしながらかううめいた。

「汝聞いて見べし」

いきなりそこにしやごんでしまつた彼れの聲は地の中からでも出て來たやうだつた。妻は荷をゆりあげて鼻をすゝり／＼取つて返した。一軒の家の戸を敲いて、やうやく松川農場のありかを教へてもらつた時は、彼れの姿を見分けかねる程遠くに來てゐた。大きな聲を出す事が何んとなく恐ろしかつた。恐ろしいばかりではな、聲を出す力さへなかつた。そして跛脚をひき／＼又返つて來た。

彼等は眠くなる程疲れ果てながら又三町程歩かねばならなかつた。そこに下見園、板葺の眞四角な二階建が外の家並みを壓して立つてゐた。

妻が黙つたまゝ立ち留つたので、彼れはそれが松川農場の事務所である事を知つた。ほん

た。後は風だけが吹きすさんだ。

夫婦はかじかんた手で荷物を提げながら小屋に這入つた。長く火の氣は絶えてゐても、吹きさらしから這入るとさすがに氣持よく暖かかつた。二人は眞暗な中を手さぐりで有り合せの古席や藁をよせ集めて、どつかと腰を据ゑた。妻は大きな溜息をして背の荷と一緒に赤坊を卸して胸に抱き取つて、乳房をあてがつて見たが乳は涸れて居た。赤坊は堅くなりかゝつた齒齦でいやと云ふほどそれを噛んだ。而して泣き募つた。

「腐孩子！ 乳首食ひちぎるに」

妻は懷食にかう云つて、懷から鹽煎餅を三枚出して、ぼり／＼と噛みくだいては赤坊の口にあてがつた。

「俺らがにも越せ」

いきなり仁右衛門が猿臂を延ばして殘りを奪ひ取らうとした。二人は黙つたまゝで本氣に爭つた。食べるものと云つては三枚の煎餅しかないのだから。

「白痴」

吐き出すやうに良人がかう云つた時勝負はきまつてゐた。妻は争ひ負けて大部分を掠奪されてしまつた。二人は又押し黙つて闇の中で足

しない食物を喰ひ喰つた。然しそれは結局食慾をそゝる媒介になる計りだつた。二人は喰ひ終つてから幾度も同唾を飲んだが、火種のない所では南瓜を煮る事も出来なかつた。赤坊は泣きづかかれに疲れてほつぽり出されたまゝに何時の間にか寢入つてゐた。

居鎮まつて見ると隙間も風は刃のやうに鋭く切り込んで來てゐた。二人は申し合せたやうに兩方から近づいて、赤坊を間に入れて、抱き寝をしながら藁の中でがつ／＼と震へてゐた。然しやがて疲勞は凡てを征服した。死のやうな眠りが三人を襲つた。

遠慮會釋もなく迅風は山と野とをこめて吹きすさんだ。漆のやうな闇が大河の如く東へ東へと流れた。マツカリヌブリの絶巔の雪だけが機光を放つてかすかに光つてゐた。荒くれた大きな自然だけがそこに更へつた。

かうして仁右衛門夫婦は、何處からともなくK村に現はれ出て、松川農場の小作人になつた。

二

仁右衛門の小屋から一町程離れて、K村から俱知安に通ふ道路沿ひに、佐藤與十と云ふ小作人の小屋があつた。與十と云ふ男は小柄で顔色

も青く、何年たつても齡をとらないで、働いても妻なきうに見えたが、子供の多い事だけは農場一だつた。あすこの噂は子種を他所から貰つてでもゐるんだらうと農場の若い者などが奇ると戯談を言ひ合つた。女房と言ふのは體のめに移いでも／＼貧乏してゐるので、だらしない汚い風はしてゐたが、その顔付きは割合に整つてゐて、不思議に男に逼る姪瀧な色を湛へてゐた。

仁右衛門がこの農場に這入つた翌朝早く、與十の妻は拾一枚にぼろ／＼の袖無を着て、井戸——と云つても味噌樽を埋めたのに赤錆の深い上層水が四分目ほど溜つてゐる——の所でアネチヨと云ひ慣はされた舶來の雜草の根に出来る薯を洗つてゐると、そこに一人の男がのそりとやつて來た。六尺近い春丈けを少し前こぎみにして、榮養の悪い土氣色の顔が眞直に肩の上に乘つてゐた。當惑した野獸のやうで、同時に何處か好謫い大きな眼が太い眉の下でぎろりと光つてゐた。それが仁右衛門だつた。彼れは與十の妻を見ると一寸ほゑましい氣分になつて、

「おつかあ、火種べあつたらちよつびり分けて

もの紙を剥がすと、眞黒になつた三文判がころがり出た。彼れはそれに息氣を吹きかけて證書に孔のあく程押しつけた。而して渡された一枚を判と一緒に井の底にしまつてしまつた。是れだけの事で飯の種にありつけるのはありがたい事だつた。戸外では赤坊がまだ泣きやんでゐなかつた。

「俺ら錢こ一文も持たねえからちよびり借りたいだが」

赤坊の事を思ふと急に小錢がほしくなつて、彼れがかう云ひ出すと、帳場は惻れたやうに彼れの顔を見詰めた、——こいつは馬鹿な面をしてゐる癖に油斷のならない横紙破りだと思ひながら。而して事務所では金の借貸は一切しないから縁者になる川森からでも借りるが、いし、今夜は何しろ其處に行つて泊めて貰へと注意した。仁右衛門はもう向腹を立ててしまつてゐた。黙りこくつて出て行かうとすると、そこに居合せた男が一緒に行つてやるか待てとめた。さう云はれて見ると彼れは自分の小屋が何處にあるのか知らなかつた。

「それぢや帳場さん何分宜しう頼むがに、鰯梅よう親方の方に云うてな。廣岡さん、それぢや行くべえかの。何んともまあ孩兒の痛ましくさ

かぶぞい。ぢやまあおやすみ——
彼れは器用に小腰をかどめて古い手提籠と帽子とを取り上げた。裾をからけて砲兵の占靴をはいてゐる様子は小作人と云ふよりも雜穀屋の精取りだつた。

戸を開けて外に出ると事務所のボン／＼時計が六時を打つた。びゅう／＼と風は吹き募つてゐた。赤坊の泣くのに困じ果てて妻はぼつりと寂しさに玉蜀黍薹の雪圍ひの陰に立つてゐた。

足場が悪いから氣を附けると云ひながら彼の男は先きに立つて國道から畦道に這入つて行つた。

大濤のやうなうねりを見せた收穫後の畑地は、廣く遠く荒涼として擴がつてゐた。眼を遮るものは葉を落した防風林の細長い木立だけだつた。ぎら／＼と瞬く無數の星は空の地を殊更ら寒く暗いものにしてゐた。仁右衛門を案内した男は笠井と云ふ小作人で、天理教の世話人もしてゐるのだと云つて聞かせたりした。

七町も八町も歩いたと思ふのに赤坊はまだ泣きやまなかつた。縊り殺されさうな泣き聲が反響もなく風に吹きちぎられて遠く流れて行つた。

やがて畦道が二つになる所で笠井は立ち停つた。
「この道をな、かう行くと左手にさへて小屋が見えようかの。な」

仁右衛門は黒い地平線をすかして見ながら、耳に手を置き添へて笠井の言葉を聞き漏らすまいとした。それほど寒い風は激しい音で募つてゐた。笠井はくどく／＼とそこに行き着く注意を繰り返して、仕舞に金が要るなら川森の保証で少し位は融通すると附け加へるのを忘れなかつた。然し仁右衛門は小屋の所在が知れると後は聞いてゐなかつた。飯と寒さがひし／＼と應へ出してがた／＼身をふるはしながら、挨拶一つせずにさつきと別れて歩き出した。

玉蜀黍薹といたどりの草で圍ひをした二間半四方程の小屋が、前のめりにかしいで、海月のやうな低い勾配の小山の半腹に立つてゐた。物の餽えた香と堆肥の香が恣にたゞよつてゐた。小屋の中にはどんな野獸が潜んでゐるかも知れないやうな氣味悪さがあつた。赤坊の泣き續ける暗い中で仁右衛門が馬の背からだすと重いものを地面に倒す音がした。瘦馬け荷が軽くなると、鬱積した怒りを一時にぶちまけるやうに嘶いた。遙かの遠くでそれに應へた馬があつ

「やばつちい所で」
と云ひながら帳場を煙の横座に請じた。

そこに妻もおづ／＼と這入つて来て、恐る恐る頭を下げた。それを見ると仁右衛門は土間に向けてかつと唾を吐いた。馬はびくんとして耳をたてたが、やがて首をのばしてその香をかいだ。

帳場は妻のさし出す白湯の茶碗を受はした。がそのまゝ飲まずに席の上に置いた。而してむづかしい言葉で昨夜の契約書の内容を云ひ聞かし初めた。小作料は三年毎に書換への一反歩二圓二十錢である事、滞納には年二割五分の利子を附する事、村税は小作に割り宛てる事、仁右衛門の小屋は前の小作から十五圓で買つてあるのだから來年中に償還すべき事、作跡は馬耕して置くべき事、亞麻は貸附地租の五分の一以上作つてはならぬ事、博奕をしてはならぬ事、隣保相助けねばならぬ事、悪作にも小作料は割増しをせぬ代りどんな凶作でも割引は禁する事、場主に直訴がましい事をしてはならぬ事、掠奪農業をしてはならぬ事、それから云々、それから云々。

仁右衛門は云はれる事がよく飲み込めはしなかつたが、腹の中では義を喰らへと思ひながら、

今まで働いてゐた畑を氣にして入口から眺めてゐた。

「お前は馬を持つてる癖に何んだつて馬耕をしねえだ。幾日もなく雪になるだに」

帳場は抽象論から實際論に切り込んで行つた。

「馬はあるが、プラオが無えだ」

仁右衛門は鼻の先きであしらつた。

「借りればいゝでねえか」

「錢子が無えかな」

會話はぶつんと途切れてしまつた。帳場は二度の會見でこの野蠻人をどう取扱はねばならぬかを飲み込んだと思つた。而と向つて埒のあく奴ではない。うつかり女房にでも愛想を見せれば大事になる。

「まあ辛抱してやるがいゝ。こゝの親方は函館の金持で物の解つた人だかな」

さう云つて小屋を出て行つた。仁右衛門も月外に出て帳場の元氣さうな後姿を見送つた。

川森は財布から五十錢銀貨を出してそれを妻の手に渡した。何しろ帳場につけてとけをして置かないと萬事に損が行くから今夜にも酒を買つて挨拶に行ぐがいゝ、プラオなら自分の所のものを貸してやると云つてゐた。仁右衛門は川

森の言葉聞きながら帳場の姿を見守つてゐたが、やがてそれが佐藤の小屋に消えると、突然馬鹿らしい程深い嫉妬が頭を襲つて來た。彼れはかつと喉をからして痰を地べたにいやと云ふ程はきつた。

夫婦きりになると二人は又別々になつてせつせと働き出した。日が傾きはじめると寒さは一入に募つて來た。汗になつた所々は氷るやうに冷たかつた。仁右衛門は然し元氣だつた。彼れの眞摯な頭の中の一線高い所とも覺しいあたり五十錢銀貨がまんまるく光つて何うしても離れなかつた。彼れは銀を動かしながら眉をしがめてそれを拂ひ落さうと試みた。然しいくら試みても光つた銀貨が落ちないのを知ると白痴のやうににつこりと獨笑ひを漏らしてゐた。

昆布居の一角には夕方になると又一縷の雲が湧いて、それを日にかけて日が沈んで行つた。仁右衛門は自分の排した畑の廣さを一わたり満足さうに見やつて小屋に歸つた。手ばしこく銀を洗ひ、馬糞を作つた。而して鉢巻の下にじんだ汗を袖口で拭つて、炊事にかゝつた妻に先刻の五十錢銀貨を求めた。妻はそれをわたすまでには二三度横面をなぐられねばならなかつた。

呉れづに」と云つた。與十の妻は犬に出遇つた猫のやうな敵意と落ち付きを以て彼れを見た。而して見つめたまゝで黙つてゐた。

仁右衛門は脂のたまつた大きな眼を手の甲で子供らしくこすりながら、
「俺らあすこの小屋さ来たもんだのし。乞食では無えだよ」と云つてにこ／＼した。罪のない顔になつた。

與十の妻は黙つて小屋に引きかへしたが、眞暗な小屋の中に臥亂れた子供を乗りこえ／＼圍爐裡の所に行つて粗朶を一本提げて出て來た。仁右衛門は受取ると、口をふくらましてそれを吹いた。而して何か一言二言話しあつて小屋の方に歸つて行つた。

この日も昨夜の風は吹き落ちてゐなかつた。空は隅から隅まで底氣味悪く晴れ渡つてゐた。そのために風は地面にばかり吹いてゐるやうに見えた。佐藤の煙は兎に角秋耕をすましてゐたのに、それに隣つた仁右衛門の煙は見渡す限りかまどがへいとみづひきとあかざととびつかにで茫々としてゐた。ひき残された大豆の殻が風に吹かれて飄輕な音を立ててゐた。あちこちにひよ／＼と立つた白樺はおほかた葉をふるひ

落ちてなよ／＼とした白い幹が風にたわみながら光つてゐた。小屋の前の亜麻をこいだ所だけは、こぼれ種から生えた細い莖が青い色を見せてゐた。後は小屋も如も霜の爲めに白茶けた鈍い狐色だつた。仁右衛門の淋しい小屋からはそれでもやがて白い炊煙がかすかに漏れはじめた。屋根からともなく圍ひからともなく湯氣のやうに漏れた。

朝食をすまずと夫婦は十年も前から住み馴れてゐるやうに、平氣な顔で煙に出かけて行つた。二人は仕事の手配もきめずに働いた。然し、冬を眼の前にひかへて何を先きにすればいいかを二人ながら本能のやうに知つてゐた。妻は、模様のもたなくなつた風呂敷を三角に折つて露西亞人のやうに頬かむりをして、赤坊を背中に背負ひこんで、せつせと小枝や根つこを拾つた。

仁右衛門は一本の鋏で四町にあまる煙の一隅から掘り起しはじめた。外の小作人は野良仕事に片をつけて、今は雪圍ひをしたり薪を切つたりして小屋のまはりで働いてゐたから、煙の中に立つてゐるのは仁右衛門夫婦だけだつた。少し高い所からは何處までも見渡される廣い平坦な耕作地の上で、二人は果に歸り損ねた二匹の蟻のやうにきり／＼と働いた。果敢ない勞

力に句點をうつて、鋏の先きが日の加減でせらつぎらつと光つた。津波のやうな音をたてて風のこもる霜相れの防風林には鳥もゐなかつた。荒れ果てた畑に見切りをつけて鮭の漁場にも移つて行つてしまつたのだらう。
晝少しまはつた頃仁右衛門の畑に二人の男がやつて來た。一人は昨夜事務所にゐた帳場だつた。今一人は仁右衛門の縁者と云ふ川森爺さんだつた。眼をしよう／＼させた一徹らしい川森は仁右衛門の姿を見ると、怒つたらしい顔付をしてづか／＼とその傍によつて行つた。
「汝や辭儀一つ知らねえ奴の、何條云う俺らには來くさらぬ。帳場さんのう知らしてくえずば、いつまでも知んやうも無えだつた。先づもつて小屋さ行くべし」
三人は小屋に這入つた。入口の右手に寢臺を敷いた馬の居所と、皮板を二三枚ならべた穀物置場があつた。左の方には入口の掘立柱から奥の掘立柱にかけて一本の丸太を土の上にわたして土間に麥藁を敷きならしたその上に、處處席が敷けてあつた。その真中に切られた圍爐裡にはそれでも眞黒に煤けた鐵瓶がかゝつてゐて、南瓜のこびりついた鉄杓が二つ三つころがつてゐた。川森は取ち入る如く、

は小さいながら一箇の獨立した農民だつた。十年目には可なり廣い農場を譲り受けてゐた。その時彼れは三十七だつた。帽子を被つて二重マントを着た、護謄長靴はきの彼れの姿が、自分ながら小恥かしいやうに想像された。

とうとう播種時が来た。山火事で焼けた熊笹の葉が眞黒にこげて奇蹟の護符のやうに何處からともなく降つて来る播種時が来た。畑の上は急に活氣立つた。市街地にも種物商や肥料商が人込んで、たつた一軒の曖昧屋からは毎夜に三味線の遺音が響くやうになつた。

仁右衛門は遅い馬に、磨きすましたプラオをつけて、畑におりたつた。翻き起される土壌は適度の濕氣をもつて、裏返るにつれてむせるやうな土の香を送つた。それが仁右衛門の血にぐん／＼と力を送つてよこした。

凡てが順當に行つた。播いた種は伸びをするやうにずん／＼生ひ育つた。仁右衛門はあたり近所の小作人に對して二言目には暗喩面を見せたが、六尺ゆたかの彼れに植つたものは一人もなかつた。佐藤なんぞは彼れの姿を見るとこそそと姿を隠した。「それ「まだか」が来おつたぞ」と云つて人々は彼れを恐れ憚つた。もう顔がありさうなものだと見上げて、まだ顔はそ

の上にあると云ふので、人々は彼れを「まだか」と譚名してゐたのだ。

時々佐藤の妻と彼れとの關係が、人々の噂に上るやうになつた。

一日働き暮すとさすが勞働に慣れた農民達も、眼の廻るやうなこの期節の忙がしさに疲れ果てて、夕飯もそこ／＼に寝込んでしまつたが、仁右衛門ばかりは日が入つても手が痒くてしやうがなかつた。彼れは星の光をたよりに野郎のやうに畑の中で働き廻つた。夕飯は罌壺裡の火の光でそこ／＼にしたゝめた。而してはぶらりと小屋を出た。而して農場の鎮守の社の傍の小作人集會所で女と會つた。鎮守は小高い密樹林の中にあつた。ある晩仁右衛門はそこで女を待ち合はしてゐた。風も吹かず雨も降らず、音のない夜だつた。女の来やうは思ひの外早い事も、腹の立つ程おそい事もあつた。仁右衛門はだだつ廣い建物の入口の所で膝をだきながら耳をそばだててゐた。枝に残つた枯葉が若芽にせきたてられて、時々かさつと地に落ちた。天驚絨のやうに滑かな空氣は動かないまゝに彼れをいたはるやうに押し包んだ。荒くれた彼れの神經もそれを感じ

ない譯には行かなかつた。物なつかしいやうななごやかな心が彼れの胸にも湧いて來た。彼れは闇の中で不思議な幻覺に陥りながら淡くほゝゑんだ。

足音が聞こえた。彼れの神經は一時に聳立つた。然し聴て彼れの前に立つたのはたしかに女の形ではなかつた。

「誰れだ汝や」
低かつたけれども闇をすかして眼を据ゑた彼れの聲は怒りに震へてゐた。

「お主こそ誰れだと思つたら廣岡さんぢやな。何んしに今時こないな所にあるのぞい」

仁右衛門は聲の主が笠井の四國猿奴だを知るとかつとなつた。笠井は農場一の物議りで金持だ。それだけで癪癪の種には十分だ。彼れはいきなり笠井に飛びかゝつて胸倉を引つかんだ。かいつと云つて出した唾を危くその面に吐きつけようとした。

この頃浮浪人が出て毎晩集會所に集まつて焚火などをするから用心が悪いと人々が云ふので、神社の世話役をしてゐた笠井は、おどかしつける積りで見廻りに來たのだつた。彼れは固より柵の棒位の身じたくはしてゐたが、相手が「まだかでは口もきけない程縮んでしまつた。

つた。仁右衛門はやがてぶらりと小屋を出た。妻は獨りで淋しく夕飯を食つた。仁右衛門は一片の銀貨を腹がけの井に入れて見たり、出して見たり、親指で空に弾き上げたりしながら市街地の方に出懸けて行つた。

九時——九時と云へば農場では夜更けだ——を過ぎてから仁右衛門はいゝ酒機嫌で突然佐藤の戸口に現はれた。佐藤の妻も晩酌に酔ひしれてゐた。與十と鼎座になつて三人は圍爐裡をかこんで又飲みながら打ち解けた馬鹿話をした。仁右衛門が自分の小屋に着いた時には十一時を過ぎてゐた。妻は燃えかすれる圍爐裡火に背を向けて、綿のはみ出た蒲團を柵に着てぐつすり寢込んで居た。仁右衛門は悪戯者らしくよろけながら近寄つて、わつと云つて乗りかゝるやうに妻を抱きすくめた。驚いて眼を覺ました妻は然し笑ひもしなかつた。騒ぎに赤坊が眼をさました。妻が抱き上げようとする、仁右衛門は進りとめて妻を横抱きに抱きすくめてしまつた。

「それれまだ肝べ焼けるか。かう可愛がられても肝べ焼けるか。可愛い獸物ぞい汝は。見づに。今にな俺ら汝に絹の衣装を着せてこすぞ。帳場の和郎（彼れは所きはらず唾をはいた）が

寝言べこく暇に、俺ら親方と膝つきあはして話して見せるかな。白痴奴。俺らが事誰れ知るもんで。汝や可愛いぞ。心から可愛いぞ。宜し。宜し。汝や是れ嫌ひでなかんべさ」と云ひながら懷から折木に包んだ大福を取り出して、その一つをぐちゃぐちゃに押しつぶして息氣のつまる程妻の口にあげがつてゐた。

三

から風の幾日も吹きぬいた舉句に雲が青空をかき亂しはじめた。雲と日の光とが追ひつ追はれつして、やがて何處からともなく雪が降るやうになつた。仁右衛門の畑はさうなるまでに一部分しか掘き起されなかつたけれども、それでも秋播小麦を播きつけるだけの地積は出來た。妻の朝勞のお蔭で一冬分の燃料にも差支ない準備は出來た。唯、困るのは食料だつた。馬の背に積んで來ただけでは幾日分の足しにもならなかつた。仁右衛門はある日馬を市街地に引いて行つて賣り飛ばした。而して麥と粟と大豆とを可なり高い相場で買つて歸らねばならなかつた。馬がないので馬車追ひにもなれず、彼れは居食ひをして雪が少し硬くなるまでぼんやりと過ごしてゐた。

根雪になると彼れは妻を残して木樵に出かけた。マツカリヌプリの麓の押下官林に入り込んで彼れは骨身を惜しまず働いた。雪が解けかゝると彼れは岩内に用て鰯場稼ぎをした。而して山の雪が解けてしまふ頃に、彼れは雪焼けと潮焼けで眞黒になつて歸つて來た。彼れの懷は十分重かつた。

仁右衛門は農場に歸るとすぐ逞しい一頭の馬と、プラオと、ハローと、必要な種子を買ひ調へた。

彼れは毎日々々小屋の前に仁王立になつて、五箇月間積り重なつた雪の解けた爲めに農み放題に農んだ畑から、恵み深い日の光に照らされて水蒸氣の滾々と立ち上る様を待ち遠しげに眺めやつた。マツカリヌプリは毎日紫色に暖かく度んだ。林の中の雪の盡消えの間には福壽草の莖が先づ縁をつけた。つぐみとしじふからとが枯枝をわたつてしめやかなさゝ啼きを傳へはじめた。腐るべきものは木の葉と云はず小屋と云はず存分に腐つてゐた。

仁右衛門は眼路の限りに見える小作小屋の何軒かを眺めやつて養でも喰へと思つた。未來の夢がはつきりと頭に浮んだ。三年経つた後には彼れは農場一の大小作だつた。五年の後に

「痛い」

それが聞きたかつたのだ。彼れの肉體は一度に油をそそぎかけられて、そそり立つ血のきほひに眼がくるめいた。彼れはいきなり女に飛びかゝつて、所きはらず殿つたり足跡にしたりました。女は痛いといひつづけたがらも彼れにからまりついた。而して噛みついた。彼れはとうとう女を抱きすくめて道路に出た。女は彼れの顔に鋭く延びた爪をたてて逃れようとした。二人はいがみ合ふ犬のやうに組み合つて倒れた。倒れながら爭つた。彼れはとうとう女を取り逃がした。はね起きて追ひにかゝると、一目散に逃げたと思つた女は、反對に抱きついて來た。二人は互に情に堪へかねて又殿つたり引つ掻いたりした。彼れは女のだぶさを掴んで道の上をずる／＼引つ張つて行つた。集會所に來た時は二人とも傷だらけになつてゐた。有頂天になつた女は一塊の火の肉となつて、ぶる／＼震へながら床の上にぶつ倒れてゐた。彼れは闇の中に突つ立ちながら焼くやうな興奮の爲めによろめいた。

四

春の天氣の順當であつたのに反して、その年

は六月の初めから寒氣と淫雨とが北海道を襲つて來た。早麴に饑饉なしと云ひ慣はしたのは水田の多い内地の事で、畑ばかりの五村などは雨の多い方はまだ仕易いとしたものだが、その年の長雨には溜息を漏らさない農民はなかつた。

森も畑も見渡すかぎり眞青になつて、獨立小屋ばかりが色を變へずに自然をよごしてゐた。時雨のやうな寒い雨が閉ざし切つた鈍色の雲から止處なく降りそゝいだ。低味の畦道に敷きならべたスリツパ材はぶか／＼と水の爲めに浮き上つて、その間から眞菰が長く延びて出た。蛸蚌が畑の中を泳ぎ廻つたりした。郭公が森の中で淋しく啼いた。小豆を板の上に遠くでころがすやうな雨の音が朝から晩まで聞こえて、それが小休むと濕氣を含んだ風が木でも草でも萎ましさに寒く吹いた。

ある日農場主が函館から來て集會所で寄り合ふと云ふ知らせが組長から廻つて來た。仁右衛門はそんな事には頓着なく朝から馬力をひいて市街地に出た。運送店の前にはもう二臺の馬力があつて、脚をつまだてるやうにいよんぱりと立つ轡馬の意は、幾本かの鞭を下げたやうに雨によれて、その先きから水滴が絶えず落

ちてゐた。馬の背からは水蒸氣が立ち昇つた。戸を開けて中に這入ると、馬車追ひを内職にする若い農夫が三人土間に焚火をしてあたつてゐた。馬車追ひをする位の農夫は、農夫の中でも冒險的な氣の荒い手合だつた。彼等は顔にあたる焚火のほてりを手や足を舉げて防ぎながら、長雨につけてこんで村に這入つて來た博徒の群れの噂をしてゐた。捲き上げようとして這入り込みながら散々手を焼いて驛亭から追ひ立てられてゐるやうな事も云つた。

「お前も一番乗つて儲かれや」とその中の一人は仁右衛門をけしかけた。店の中はどんよりと暗く濕つてゐた。仁右衛門は暗い顔をして唾をはき捨てながら、焚火の座に割り込んで黙つてゐた。びしや／＼と氣疎い草鞋の音を立てて、往來を通る者がたまさかにあるばかりで、この季節の賑ひ立つた様子は何處にも見られなかつた。帳場の若いものは筆を持つた手を頬杖にして居眠つてゐた。かうして彼等は荷の來るのをぼんやりして二時間あまり待ち暮した。聞くに堪へないやうな若者其の馬鹿話も自然と陰氣な氣分に抑へつけられて、動もすると、沈黙と欠伸が擴がつた。

「汝や俺らが婦人の邪魔べくく氣だな、俺らがする事に汝が手だしはいんねえだ。首ねつこべひんぬかれんな」

彼れの言葉はせき上る息氣の間に押しひしやげられてぐわら／＼震へてゐた。

「そりや邪推ぢやがなお主」

と笠井は口早に、そこに來合せた子細と、丁度いゝ機會だから折入つて頼む事がある旨をぶひだした。仁右衛門は車下して出た笠井にちよつと興味を感じて胸倉から手を離して、腰に

をすまた。暗闇の中でも、笠井が眼をきよんと

とさせて火場の方の半面を平手で撫でまはしてゐるのが想像された。而してやがて腰を下ろし

て、今までの悦びかたにも似ず悠々と煙草入を出してマツチを擦つた。折入つて頼むと云つた

のは小作一同の地主に對する苦情に就いてであつた。一反歩二圓二十錢の畑地はこの地方

にない高相場であるのに、どんな凶年でも割引きをしないために、小作は一人として借金

をしてゐないものはない。金ではたれないと見ると帳場は立毛の中に押収してしまふ。従つて市

街地の商人からは眼の飛び出るやうな上前をはねられて食代を買はねばならぬ。だから今度

地主が來たら一同で是非とも小作料の値下げを

要求するのだ。笠井はその總代になつてゐるのだが一人で心細いから仁右衛門も出て力になつてくれと云ふのであつた。

「白痴なことくくなてえば。二兩二貫が何高値いべ。汝たちが骨節は稼ぐやうには造つてねえのか。親方には半文の借りもした覚えは無え

からな。俺らその公事には乗んねえだ。汝先づ親方にべなつて見せよ。こゝのがよりも慾にか

かるべえに。……藝も無え事に可愛くも無え面

つんだすなてば」

仁右衛門は又笠井のかゝした顔に唾をはきかけた。御動にさいなまれたが、我慢してそ

れを板の間にき捨てた。

「さうまあ一概には云ふもんでないぞい」

「一概に云つたが何條悪いだ。去ね。去ねべし」

「さうぶへど廣岡さん……」

「汝や拳闘こと喰らひていがか」

女を待ちうけてゐる仁右衛門にとつては、この邪魔者の長居してゐるのがいま／＼しいの

で、言葉も仕打ちも段々荒かになつた。執着の強い笠井も立たなければならなくなつた。その場を取りつくらふ世辭を云つて、怒つた風も見せずに坂を下りて行つた。道の二股になつた所で行かうとすると、闇をすか

してゐた仁右衛門は叫べるやうに、右さ行くだ一と致命した。笠井はそれにも昔かなかつた。左の道を通つて女が通つて來るのだ。

仁右衛門は又獨りになつて闇の中にうづくまつた。彼れは憤りにぶる／＼震へてゐた。生

憎女の來やうがおそかつた。怒つた彼れには我慢が出來切らなかつた。女の小屋に荒れこむ

勢で立ち上ると彼れは白晝大道を行くやうな

足どりで、藪道をぐん／＼歩いて行つた。ふと或る疎藪の所で彼れは野獸の敏感さを以て物の

けはひを嗅ぎ知つた。彼れははたと立ち停つてその奥をすかして見た。しんとした夜の静かさ

の中で悪語やうな嬉らかな女の潛み笑ひが聞こえた。邪魔の這入つたのを氣取つて女はそこに

隠れてゐたのだ。嗅ぎ慣れた女の臭ひが鼻を襲つたと仁右衛門は思つた。

「四つ足めが」

叫びと共に彼れは疎藪の中に飛びこんだ。とげ／＼する觸感が、寝る時のほか脱いだ事のな

い草鞋の底に二足三足感じられたと思ふと、四足目は軟かいむつちりした肉體を踏みつけた。

彼れは思はずその足の力をぬかうとしたが、同時に狂暴な衝動に驅られて、満身の重みをそ

れに託した。

云ひ聞かした。小作者等はげん顔をしながらも、場主の言葉が途切れると尤もらしくなづいた。やがて小作者等の要求が笠井によつて提出せらるべき順番が来た。彼れは先づ親方親で小作は子だと説き出して、小作者側の要求を可なり強く云ひ張つた後で、それは然し無理な御願ひだとか、物の解らない自分達が考へる事だからだとか、そんな事は先づ後廻しでもいい事だとか、自分の云ひ出した事を自分で打ち壊すやうな添言葉を付け加へるのを忘れなかつた。仁右衛門はちやうどそこに行き合せて。彼れは入口の羽目板に身をよせておつと聞いてゐた。

「かうまあ色々とお願ひしたぢやからは、お互も心をしめて帳場さんにも迷惑をかけぬだけにはせすばなあ(こゝで彼れは一同を見渡した様子だつた。)'萬國心をあはせて'と天理教のお歌様にもある通り、定まつた事は定まつたやうにせんとならんぢやが、多い中ぢやに無理もないやうなもの、亞麻などを親方、ぎやうさんにつけたものもあつて、まこと濟まん次第ぢやが、無理が通れば道理もひつこみよるで、なりませんぢやよし」

仁右衛門は場規もかまはず畑の半分を亞麻に

してゐた。で、その言葉は彼れに對するあてこすりのやうに聞こえた。

「今日なども顔を出しやらん横道者もありますぢやで……」

仁右衛門は怒りの爲めに耳がかあんとつた。笠井はまだ何か滑らかにしやべつてゐた。場主がまだ何か訓示めいた事をいふらしかつたが、やがてざわ／＼と人の立つ氣配がした。

仁右衛門は息氣を殺して、出て來る人々を窺つた。場主が帳場と一緒に、後から笠井に傘をさしかけて出て行つた。労働で若年の肉を鍛へたらしい嚴かな場主の姿は、どこか人を憚

からした。仁右衛門は笠井を睨みながら見送つた。稍々暫らくすると場内から急に／＼くろいだ談笑の聲が起つた。而して二三人づつ何か語り

合ひながら小作者等は小屋をさして歸つて行つた。やゝ遅れて伴れもなく出て來たのは佐藤だつた。小さな後姿は若々しくつて青年のやう

だつた。仁右衛門は木の葉のやうに震へながらづか／＼と近づくと、突然後ろからその右の耳

のあたりを殴つつけた。不意を喰つて倒れんばかりによけた佐藤は、後も見ずに耳を押へな

がら、猛獸の遠吠を聞いた兎のやうに、前に行

く二三人の方に一日散にかけ出してその人々を

桶に取つた。

「汝や乞食か盜賊か畜生か。よくも汝が餓鬼共さ教唆けて他人の畑こと踏み荒したな。殴ちのめしてくれつに。來」

仁右衛門は火の玉のやうになつて飛びかゝつた。當の二人と二三人の留男とは秘になつて

赤土の泥の中をころげ廻つた。折り重なつた人

人がやうやく二人を引き分けた時は、佐藤は何

處かした／＼か傷を負つて死んだやうに青くなつ

てゐた。仲裁したもののか／＼合ひから已むな

く、仁右衛門に附添つて語をつけるために佐藤

の小屋まで廻り道をした。小屋の中では佐藤の

長女が隅の方に丸まつて痛い／＼と云ひなが

らまだ泣きつゞけてゐた。爐を間に置いて佐

藤の妻と廣岡の妻とはさし向ひに罵り合つてゐた。佐藤の妻は安坐をかいて長い火箸を右手に握つてゐた。廣岡の妻も背に赤坊を背負つて、早口に云ひ募つてゐた。顔を血だらけにして泥まみれになつた佐藤の後から仁右衛門が這入つて來るのを見ると、佐藤の妻は譯を聞く事もせず

突然仁右衛門がさう云つて一座を見廻した。

彼れはその珍らしい無邪氣な微笑をほゝゑゐる。一同は彼れのにこやかな顔を見ると、吸ひ寄せられるやうになつて、云ふ事をきかないではゐられなかつた。席が持ち出された。四人は車座になつた。一人は氣輕く若い者の机の上から湯呑茶碗を持つて來た。もう一人の男の腹がけの中からは骰子が二つ取り出された。

店の若い者が眼をさまして見ると、彼等は興奮した聲を押しつぶしながら、無氣になつて勝負に耽つてゐた。若い者は一寸訝意を感じたが氣を取り直して、

「困るでねえか、さうした事店頭でおつ廣げて」と云ふと、

「困つたら積荷と探して來う」と仁右衛門は取り合はなかつた。

晝になつても荷の回送はなかつた。仁右衛門は自分から云ひ出しながら、面白くない勝負ばかりしてゐた。何方に變るか自分でも分らないやうな氣分が驕地に悪い方に傾いて來た。

氣を腐らせれば腐らす程彼れのやまは外づれてしまつた。彼れはくさ／＼してふいと座を立つた。相手が何とか云ふのを振り向きもせずに店を出た。雨は小休なく降り續けてゐた。晝餉の

煙が重く地面の上を這つてゐた。

彼れはむい／＼くやしなながら馬力を引つばつて小屋の方に歸つて行つた。だらしなく降りつづける雨に草木も土もふやけ切つて、空までがぼ／＼と地面の上に落ちて來さうにだらけてゐた。面白くない勝負をして焦立つた仁右衛門の腹の中とは全く裏合せな煮え切らない景色だつた。彼れは何か思ひ切つた事をしてでも胸をすかせたく思つた。丁度自分の煙の所まで來ると佐藤の年嵩の子供が三人學校の歸途と見えて、荷物を斜に背中に背負つて、頭からぐ／＼いより濡れながら、近路する爲めに煙の中を歩いてゐた。それを見たと仁右衛門は「待て」と云つて呼びとめた。振り向いた子供達は「まだか」の立つてゐるのを見ると、三人とも恐ろしさに顔の色を變へてしまつた。駭りつけられる時するやうに腕をまげて目八分の所にやつて逃げ出す事もし得ないでゐた。

「童子達は何條云うて他人の煙さ踏み込んだ。百姓の餓鬼だに煙のう大事がる道知んねえだな。來う」

仁王立ちになつて睨みすゑながら彼れは怒鳴つた。子供達はもうおびえるやうに泣き出しなから恐ろ／＼、仁右衛門の所に歩いて來た。待

ちかまへた仁右衛門の鐵拳はいきなり十二程になる長女の瘦せた頬をゆがむ程たゞきつてた。三人の子供は一度に痛みを感じたやうに聲を揚げてわめき出した。仁右衛門は長幼の容赦なく手あたり次第に駭りつけた。

小屋に歸ると妻は蓆の上につつたんに坐つて馬にやる豪をざくり／＼切つてゐた。赤坊はいんち／＼の中で章魚のやうな頭を襤褸から出して、軒から滴り落ちる雨垂れを見やつてゐた。彼れの氣分になふきはない重苦しさが漲つて、運送店の店先に駁べては何かから何まで便所のやうに穢かつた。彼れは駄つたまゝで唾をはき捨てながら馬の始末をしようと又外に出た。雨は膚まで沁み徹つてぞく／＼寒かつた。彼れの痼癪は更につのつた。彼れはすた／＼と佐藤の小屋に出かけた。が、ふと集會所に行つてゐる事に氣がつくとその足ですぐ神社をさして急いだ。

集會所には朝の中ら五十人近い小作者が集まつて場主の來るのを待つてゐたが、晝過ぎまで待ちばけを喰はされてしまつた。場主はがて賑場を伴につれて厚い外套を着てやつて來た。上座に坐ると勿體らしく神社の方を向いて拍手を打つて默升をしてから、居合はせてる者等には半分も解らないやうな事をしたり顔に

に變つた。

「こんなに亞麻をつけては仕様が無えでねえか。烟が枯れて跡地には何んだつて出来はしねえぞ。困るな」

ある時帳場が見廻つて来て、仁右衛門にかう云つた。

「俺らが困るだ。汝れが困ると俺らが困るとは困りやうがど土臺ちがわい。口が干上るんだあぞ俺らがのは」

仁右衛門は突慥食にかう云ひ放つた。彼れの前にあるおきては先づ食ふ事だつた。

彼れは或る日亞麻の束を見上げるやうに馬刀に積み上げて俱知安の製線所に出かけた。製線所では割合に斤目をよく買つてくれたばかりでなく、他の地方が不作な爲めに結實がなかつたので、亞麻種を非常に高値で引き取る約束をしてくれた。仁右衛門の懷の中には手取り百圓の金が暖かくしまはれた。彼れは烟にまだしこたま残つてゐる亞麻の事を考へた。彼れは居酒屋に這入つた。そこには五村では見られない様な綺麗な顔をした女もゐた。仁右衛門の酒は必ずしも彼れをきまつた型には酔はせなかつた。或る時は彼れを怒りつづく、或る時は憎鬱に、或る時は亂暴に、或る時は機嫌よくした。

その日の酒は勿論彼れを上機嫌にした。一緒に飲んでゐるものが利害關係のないのも彼れには心置きがなかつた。彼れは酔ふまゝに大きな聲で戯談口をきいた。さう云ふ時の彼れは大きな愚かな子供だつた。居合せたものは釣り込まれて彼れの周圍に集まつた。女まで引つ張られるまゝに彼れの膝に倚りかゝつて、彼れの頬ずりを無邪氣に受けた。

「汝れがの頬に俺らが髭こ生へたらをかしかなべなし」

彼れはそんな事を云つた。重いその口からこれだけの戯談が出ると女などは腹をかゝへて笑つた。陽がかかる頃に彼れは居酒屋を出て反物屋によつて派手なモスリンの端切れを買つた。又ビールの小瓶を三本と油樽とを馬車に積んだ。俱知安から五村に通ふ國道はマツカリヌブリの山裾の榎松帯の間を縫つてゐた。彼れは馬力の上に安坐をかいて瓶から口うつしにビールを煽りながら濁歌をこだまにひびかせて行つた。幾抱へもある榎松は半箇の中から真直に天を突いて、僅かに頷かれる空には晝月が少し光つて見え隠れに眺められた。彼れは遂に馬力の上に酔ひ倒れた。物慣れた馬は内門の山道を上手に拾ひながら歩いて行つた。馬車はかしい

だり跳ねたりした。その中で彼れは快い夢に入つたり、面白い現に出たりした。

仁右衛門はふと熟睡から破られて眼をさました。その眼にはすぐ川森爺さんの眞面目かつた一徹な顔が寫つた。仁右衛門の悪い気分にはその顔が如何にもをかしかつたので、彼れは起き上りながら聲を立てて笑はうとした。そして自分が馬力の上にて自分の小屋の前に来てゐる事に氣がついた。小屋の前には帳場も佐藤も組長の某も居た。それはこの小屋の前では見慣れない光景だつた。川森は仁右衛門が眼を覺ましたのを見ると、

「早う内さ行くべし。汝れが嬰子はおつ死ぬべえぞ。赤痢き取つたかただ」と云つた。多愛のない夢から一足飛びにこの恐ろしい現實に呼びさまされた彼れの心は、最初に彼れの顔を高笑ひにくづさうとしたが、すぐ次ぎの瞬間に、彼れの顔の筋肉を一時にこきしめてしまつた。彼れは顔ちゆうの血が一時に頭の中に飛び退いたやうに思つた。仁右衛門は酔ひが一時に醒めてしまつて馬力から飛び下りた。小屋の中にはまだ二三人人がゐた。妻はと見ると蟲の息に弱つた赤坊の側に蹲つておいおい泣いてゐた。笠井が例の古靴を膝に引きつ

り上げた。仁右衛門は多愛もなくそれを奪ひ取つた。噛みつかうとするのを押しのけた。而して仲裁者が一杯飲まうと勧めるのも聴かずに宴を促して自分の小屋に歸つて行つた。佐藤の妻は素跣のまゝ仁右衛門の背に罵詈を浴せながら怒精のやうについて來た。而して小屋の前に立ちだかつて、囁るやうに半ば夢中で仁右衛門夫婦を罵りつづけた。

仁右衛門は押し黙つたまゝ、圍爐裡の横座に坐つて佐藤の妻の狂態を見つめてゐた。それは仁右衛門には意外の結果だつた。彼れの氣分は妙にかたづけかないものだつた。彼れは佐藤の妻の自分から突然離れたのを怒つたりをかしく思つたり憎しんだりしてゐた。仁右衛門が取り合はないので彼女はさすがに小屋の中には這入らなかつた。而して皺枯れた牌でをめき叫びながら雨の中を歸つて行つてしまつた。仁右衛門の口の邊にはいかに人も聞らしい皮肉な歪みが現はれた。彼れは結局自分の智慧の足りなさを感じた。而してまゝよと思つてゐた。

凡ての興味が全く去つたのを彼れは覺えた。彼れは少し疲れてゐた。始めて本當の事情を知つた妻から嫉妬がましし執拗い言葉でも聞いたら少しの道樂氣もなく、どれ程な殘虐な事でも

やり兼ねないのを知ると、彼れは少し自分の心を恐れねばならなかつた。彼れは妻に物を云ふ機会を與へない爲めに次から次へと命令を連發した。而して晩い晝飯をしたゝか喰つた。がらつと箸を置くゝと泥だらけなびしよめな着物のまゝで又ぶらりと小屋を出た。この村に這入りこんだ博徒等の張つてゐた賭場をさして彼れの足はしやう事なしに向いて行つた。

五

よく是れほどあるもんだと思はせた長雨も一箇月程降り續いて漸く晴れた。一足飛びに夏が來た。何時の間に花が咲いて散つたのか、天氣になつて見ると、林の間に在る山櫻も、辛夷も、青々とした廣葉になつてゐた。蒸風呂のやうな氣持の悪い暑さが襲つて來て、畑の中の雑草は作物を乗りこえて葎のやうに延びた。雨の爲め傷められたに相違ないと、長雨の只ひとつの功徳に農夫等の云ひ合つた昆蟲も、すさまじい勢で發生した。甘藍のまはりにはえぞいろてふが夥しく飛び廻つた。大豆にはくちかきむしの成蟲がうざ／＼する程集まつた。麥類には黒穂の馬鈴薯にはべと病の徴候が見えた。蛇と蛎とは自然の斥候のやうにもや／＼と飛び

廻つた。濡れたまゝに積み重ねておいた汚れ物をかけわたした小屋の中からは、あらん限りの農夫の家族が武器を持って畑に出た。自然に刃向ふ必死な争鬪の幕は開かれた。

鼻歌も歌はずに、汗を肥料のやうに畑の土に滴らしながら、農夫は腰を二つに折つて地面に嚙り附いた。耕馬は首を下げられるだけ下げて、乾き切らない土の中に脚を深く踏みこみながら、絶えず尻尾で蛇を追つた。しゅつと音をたてて襲つて來る毛の束にしたゝか打たれた蛇は、血を吸つて凡くなつたまゝ、馬の腹からほとりと地に落ちた。仰向けになつて鋼線のやうな脚を伸ばしたり縮めたりして藻掻く様は命の薄れるもののやうに見えた。暫らくすると然しそれはまた器用に翅を使つて起きかへつた。而して十四五分の後はまた翅をはつてうなりを立てながら、眼を射るやうな日の光の中に勇ましく飛び立つて行つた。

夏物が皆無作と云ふ程の不出來であるのに、亞麻だけは平年作位にはまはつた。青人蔞絨の海となり、瑠璃色の絨氈となり、荒くれた自然の中の姫君なる亞麻の畑はやがて小紋のやうな果をその纖細な莖の先きに結んで美しい狐色

らう。仁右衛門の所では川森さへ居残つてゐないのだ。妻はそれを心から寂しく思つてしくしくと泣いてゐた。物の三時間も二人はさうしたまゝで何もせずにぼんやり小屋の前で月の光にあはれな姿をさらしてゐた。

やがて仁右衛門は何を思ひ出したのかのそのと小屋の中に這入つて行つた。妻は眼に角を立てて首だけ後ろに廻して洞穴のやうな小屋の入口を見返つた。暫らくすると仁右衛門は赤坊を背負つて、一挺の鉄を右手に提げて小屋から出て來た。

「ついで來う」

さう云つて彼れはすた／＼と國道の方に出て行つた。簡単な啼聲で動物と動物とが互を理解し合ふやうに、妻は仁右衛門のしようとする事が呑み込めたらしく、のつそりと立ち上つてその後に隨つた。而してめそ／＼と泣き續けてゐた。

夫婦が行き着いたのは、國道を十町も俱知安の方に來た左手の岡の上に在る村の共同墓地だつた。その上からは松川農場を一面に見渡して、ルベシベ、ニセコアン、連山も川向ひの昆布岳も手に取るやうだつた。夏の夜の透明な空氣は青み渡つて、月の光が燐のやうに凡て

の光るものの上に宿つてゐた。蚊の群れがわんわん／＼なつて二人に襲ひかゝつた。

仁右衛門は死體を背負つたまゝ、小さな墓標や石塔の立ち列なつた間の空地に穴を掘りだした。鉄の土に喰ひ込む音だけが景色に少しも調和しない鈍い音を立てた。妻はしやがんだままで時々頬に來る蚊をたゞき殺しながら泣いてゐた。三尺程の穴を掘り終ると仁右衛門は鉄の手を休めて額の汗を手の甲で押拭つた。夏の夜は靜かだつた。その時突然恐ろしい考へが彼れの吐胸を突いて浮んだ。彼れはその考へに自分ながら驚いたやうに慄れて眼を見張つてゐたが、やがて大聲を立てて頑童の如く泣きをめき始めた。その聲は醜く物凄かつた。妻はきよつ／＼として顔中を涙にしながら恐ろしげに良人を見守つた。

「笠井の四國狼めが、妻子事殺しただ。殺しただあ」

彼れは醜い泣き聲の中からさう叫んだ。

翌日彼れは又亞麻の束を馬力に積まうとした。そこには派手なモスリンの端切れが、亂雲の中に現はれた虹のやうにしつとり朝露にしみつたまゝ、穢い馬力の上に仕舞ひ忘れてゐた。

六

狂暴な仁右衛門は赤坊を亡くしてから手がつけられない程狂暴になつた。その狂暴を募らせるやうに烈しい盛夏が來た。春先の長雨を償ふやうに雨は一滴も降らなかつた。秋に收穫すべき作物は稈葉が片端から黃色に變つた。自然に抵抗し切れない失望の聲が、黙りこくつた農夫の姿から叫ばれた。

一刻の暇もない農繁の眞最中に馬市が市街地に立つた。普段ならば人々は見向きもしないのだが、畑作をなげてしまつた農夫等は、捨鉢な気分になつて、馬の賣買にでも多少の儲けを見ようとしたから、前景氣は思ひの外強かつた。當日には近村からさへ見物が來た程賑はつた。丁度農場事務所裏の空地に假小屋が建てられて、爪まで磨き上げられた耕馬が三十頭近く集まつた。その中で仁右衛門の出した馬は殊に人の眼を牽いた。

その翌日には鐵馬があつた。場主までわざわざ函館からやつて來た。屋臺店や見世物小屋がかゝつて祭囃に通有な香ひのむし／＼する間を着飾つた娘達が、刺戟の強い色を振り播いて歩いた。

けてその中から護符のやうなものを取り出してゐた。

「お、廣岡さんえ、所に歸つたぞな」

笠井が逸早く仁右衛門を見附けてかう云ふと、仁右衛門の妻は恐れるやうに怨むやうに訴へるやうに夫を見返つて、黙つたまゝ泣き出した。仁右衛門はすぐ赤坊の所に行つて見た。章魚のやうな大きな頭だけが彼れの赤坊らしい唯一一つのものだった。たつた半日の中にかうも變るかと疑はれるまでにその小さな物は衰へ細つてゐた。仁右衛門はそれを見ると腹が立つ程寂しく心許なくなつた。今まで経験した事のないうかしく可愛さが焼くやうに心に逼つて来た。彼れは持った事のないうものを強ひて押し附けられたやうに當惑してしまつた。その押し附けられたものは恐ろしく重い冷たいものだつた。何よりも先づ彼れは腹の力の抜けて行くやうな心持をいまゝしく思つたが、どうしやうもなかつた。

仁右衛門は腸をむしられるやうだつた。それでも泣いてゐる間はまだよかつた。赤坊が泣きやんで大きな眼を引つちしたまゝ、隣きもなくなると、仁右衛門はおどましくも拜むやうな眼で笠井を見守つた。小屋の中は人いきれで蒸すやうに暑かつた。笠井の弁げ上つた額からは汗の玉がたら／＼と流れ出た。それが仁右衛門には尊くさへ見えた。小半時赤坊の腹を撫で廻すと、笠井は又古靴の中から紙包を出して押しいたゞいた。而して口に手拭を喰はへてそれを開くと、一寸四方程な何か字の書いてある紙片を摘まみ出して指の先きで丸めた。仁水を持つて來さしてそれをその中へ浸した。仁右衛門はそれを赤坊に飲ませろとさし出されたが、飲ませるだけの勇氣もなかつた。妻は甲斐甲斐しく良人に代つた。渴き切つて居た赤坊は喜んでそれを飲んだ。仁右衛門は難有いと思つてゐた。

「わしの子は亡くした覺えがあるで、お主の心持はようわかる。この子を助けようと思つたら何んせ一心に天理王様に頼まつしやれ。な。合點か。人間業では及ばぬ事ぢやでな」

笠井はさう云つてしたり顔をした。仁右衛門の妻は泣きながら手を合せた。

赤坊は泣けさまに血を下した。而して小屋の中が眞暗になつた日のくれ／＼に、何物にか助けを求める成人のやうな表情を眼に現はして、あてどもなくそこらを見廻してゐたが、次第次第に息が絶えてしまつた。

赤坊が死んでから村醫は巡査に作れられて漸くやつて來た。香篋代りの紙包を持つて帳場も來た。提灯と云ふ見慣れないものが小屋の中を出たり這入つたりした。仁右衛門夫婦の嗅ぎつけない石炭酸の香は二人を小屋から追ひ出してしまつた。二人は川森に附添はれて西に廻つた月の光の下にしよんぼり立つた。

世話に來た人達は一人去り二人去り、やがて川森も笠井も去つてしまつた。

水を打つたやうな夜の涼さと静かさとの中にかすかな蟲の音がしてゐた。仁右衛門は何と云ふ事なしに妻が癪にさはつてたまらなかつた。妻は又何と云ふ事なしに良人が憎まれてなかつた。妻は馬力の傍にうづくまり、仁右衛門はあてもなく唾を吐き散らしながら小屋の前を行つたり歸つたりした。他所の農家でこの凶事があつたらしくとも隣近所から二三人の者が寄り合つて、買つて出した酒でも飲みちらしながら、何かと話でもして夜を更かすのだ

直ぐ彼れの馬の所に飛んで行つた。馬はまだ起きてゐなかつた。後脚で反動を取つて起きるにしては、前脚を折つて倒れてしまつた。訓練のない見物人は潮のやうに仁右衛門と馬とのまはりに押し寄せた。

仁右衛門の馬は前脚を二足とも折つてしまつてゐた。仁右衛門は惘然したまゝ、不思議相な顔をして押し寄せた人波を見守つて立つてゐる外はなかつた。

獸醫の心得もある蹄鐵屋の顔を群集の中に見出してやうやく正氣に返つた仁右衛門は馬の始末を頼んですくくと競馬場を出た。彼れは自分で何が何だかちつとも分らなかつた。彼れは夢遊病者のやうに人の間を押し分けて歩いて行つた。事務所の角まで來ると何んといふ事なしにいきなり路の小石を二つ三つ擲んで入口の硝子戸にたゞきつけた。三枚程の硝子は微塵にくだけて飛び散つた。彼れはその音を聞いた。それは然し耳を押へて聞くやうに遠くの方で聞こえた。彼れは悠々として又そこを歩み去つた。

彼れが氣がついた時には、何方をどう歩いたのか、昆布岳の下を流れるシリベシ河の河岸の丸石に腰かけてぼんやり河面を眺めてゐた。彼

れの眼の前を透明な水が後から／＼同じやうな渦紋を描いては消し描いては消して流れてゐた。彼れはちつとその戯れを見詰めながら、遠い過去の記憶でも追ふやうに今日の出来事を頭の中で思ひ浮べてゐた。凡ての事が他人事のやうに順序よく手に取るやうに記憶に甦つた。

然し自分が抛り出される所まで來ると記憶の糸はぶつ切り切れてしまつた。彼れはその所を幾度も無關心に繰返した。笠井の娘——笠井の娘——笠井の娘がどうしたんだ——彼れは自問自答した。段々眼がかすんで來た。笠井の娘——笠井——笠井だ。馬を片輪にしたのは。さう考へても笠井は彼れに全く關係のない人間のやうだつた。其の名は彼れの感情を少しも動かす力にはならなかつた。彼れはさうしたまゝで深い眠りに落ちてしまつた。

彼れは夜中になつてからひよつくり小屋に歸つて來た。入口からばんと石炭酸の香がした。それを嗅ぐと彼れは始めて正氣に返つて改めて自分の小屋を物珍らしげに眺めた。さうなると彼れは夢からさめるやうにつまらない現實に歸つた。鈍つた意識の反動として細かい事にも鋭く神經が働き出した。石炭酸の香は何よりも先づ死んだ赤坊を彼れに思ひ出さした。若

し妻に怪我でもあつたのではなかつたか——彼れは爐の消えて眞闇な小屋の中を手さぐりで妻を尋ねた。眼をさまして起きかへつた妻の氣配がした。

「今頃まで何處さゐただ。馬は村の衆が連れて歸つたに。傷はしい事べおつびろげてはあ——」妻は眠つてゐなかつたやうなはつきりした聲でかう云つた。彼れは闇に慣れて來た眼で小屋の片隅をすかして見た。馬は前脚に重味がかゝらないやうに、腹に席をあてがつて胸の所を梁からつるしてあつた。兩方の膝頭は白い切れで巻いてあつた。その白い色が凡て黒いにはつきりと仁右衛門の眼に映つた。石炭酸の香はそこから漂つて來るのだつた。彼れは火の氣のない圍爐裡の前に、草鞋ばきで頭を垂れたまま安坐をかいだ。馬もこゝそつとも音をさせずに黙つてゐた。蚊のなく聲だけが空氣のさゝやきのやうにかすかに聞こえてゐた。仁右衛門は膝頭で腕を組み合せて、寝ようとはしなかつた。馬と彼れは互に憐れむやうに見えた。

然し翌日になると彼れは又この打撃から跳ね返つてゐた。彼れは前の通りな狂暴な彼れになつてゐた。彼れはブラオを賣つて金に代へつた。雜穀屋からは燕麥が賣れた時事務所から直接

競馬場の埒の周囲は人垣で埋まつた。三四軒の農場の主人達は決勝點の所に一段高く棧敷をしつらへてそこから見物した。松川場主の側には子供に附添つて笠井の娘が坐つてゐた。

その娘は二三年前から函館に出て松川の家に奉公してゐたのだ。父に似て細面の彼女は函館の生活に磨きをかけられて、この邊では際立つて垢抜けがしてゐた。競馬に加はる若い者はその妙齡な娘の前で手柄を見せようと争つた。他人の妾に日星をつけて何になると皮肉を云ふものもあつた。

何しろ鐵馬は非常な景氣だつた。勝負がつく度に揚る喝采の聲は乾いた空氣を傳はつて、人々を家の内におつとさしては置かなかつた。

仁右衛門はその頃博奕に耽つてゐた。始めの中はわざと負けて見せる博徒の手段に甘々と乗せられて、勢ひ込んだのが失敗の基で、深入りする程損をしたが、損をするほど深入りしないではゐられなかつた。亞麻の收利は疾うの昔にけし飛んでゐた。それでも馬は金輪際賣る氣がなかつた。剩す所は燕麥があるだけだつたが、是れは播種時から事務所と契約して、事務所から一手に陸軍糧秣廠に納める事になつてゐた。その方が競争して商人に賣るのよりも

割がよかつたのだ。商人共はこのポイントを何うして見過ごしてゐよう。彼等は農家の戸別訪問をして糧秣廠よりも遙かに高價に引受けると勧誘した。糧秣廠から買入代金が下つてもそれは一應事務所にとまつて下るのだ。その中から小作料だけを差引いて小作人に渡すのだから、農場としては小作料を回収する上には是れほど便利な事はない。小作料を拂ふまいと決心してゐる仁右衛門は、馬鹿な話だと思つた。彼れは腹をきめた。而して鐵馬の爲めに人の注意がおろそかになつた機會を見すまして、商人と結託して、事務所へ廻すべき燕麥をどんな商人に渡してしまつた。

仁右衛門はこの取引をすましてから競馬場によつて來た。彼れは自分の馬で競走に加はる筈になつてゐたからだ。彼れは裸乗りの名人だつた。

自分の番が來ると彼れは鞍も置かずに自分の馬に乗つて出て行つた。人々はその馬を見ると敬意を拂ふやうに互にうなづき合つて、今年の躍では一番物だと賞め合つた。仁右衛門はさういふ私語を聞くといふ氣持になつて、いやでも勝つて見せるぞと思つた。六頭の馬がスタートに近づいた。さつと旗が降りた時仁右衛門はわ

ざと出おくれた。彼れは外の馬の後から内埒へ内埒へとよつて、少し手綱を引きしめるやうにして駆けさした。ほつた彼の顔から耳にかけて埃を含んだ風が息氣のつまる程ふきかゝるのを彼れは、快く思つた。やがて馬場を八分日程廻つた頃を計つて手綱をゆるめると馬は思ひ

存分鬨を延ばしてずん／＼おくれた馬から抜き出した。彼れが鞭とあふりで馬を責めながら最初から日星をつけてゐた先頭の馬に追ひせまつた時には決勝點が近かつた。彼れはいらだつてびし／＼と鞭をくれた。始めは自分の馬の鼻が相手の馬の尻とすれ／＼になつてゐたが、やがて一步步々二頭の距離は縮まつた。狂氣のやうな喚呼が夢中になつた彼れの耳にも明かに響いて來た。もう一息と彼れは思つた。――その時突然棧敷の下で遊んでゐた松川場主の子供

がよた／＼と埒の中へ這入つた。それを見た笠井の娘は我れを忘れて駆け込んだ。『危ねえ――観衆は一度に固唾を飲んだ。その時先頭

にゐた馬は娘の派手な着物に驚いたのか、さつとされて仁右衛門の馬の前に出た。と思ふ暇もなく仁右衛門は空中に飛び上つて、やがて敵きつつけられるやうに地面に轉がつてゐた。彼れは氣丈にも轉がりながらすつくと起き上つた。

でもないと思つた。いまに見かへしてくれるから——さう思つて彼れは冬を迎へた。

然し考へて見ると色々な困難が彼れの前には横はつてゐた。食料は一冬事かゝぬだけはあるが、金は衰へた程より貯へがなかつた。馬は競馬以來廢物になつてゐた。冬の間稼ぎに出れば、その留守に氣の弱い妻が小屋から追ひ立てを喰ふのは知れ切つてゐた。と云つて小屋に居残れば居食ひをしてゐる外はないのだ。來年の種子さへ工面のしやうのないのは今から知れ切つてゐた。

焚火にあたつて、さかなくなつた馬の前脚をぢつと見つめながらも考へこんだまゝ暮すやうな日が幾日も續いた。

佐藤をはじめ彼れの輕蔑し切つてゐる場内の小作者共は、おめくくと小作料を搾り取られ、商人に重い前借をしてゐるにも係はらず、兎に角さした屈託もしないで冬を迎へてゐた。相當の雪圍ひの出來ないやうな小屋は一つもなかつた。貧しいなりに集まつて酒も飲み合へば、助け合ひもした。仁右衛門には人間がよつてたかつて彼れ一人を敵にまはしてゐるやうに見えた。

冬は遠慮なく進んで行つた。見渡す大空が先

づ雪に埋められたやうに何處から何處まで眞白になつた。そこから雪は滾々としてとめ度なく降つて來た。人間の衰へた敗殘の跡を物語る如くも、勝ちほこつた自然の鎮土である森林も等しなみに雪の下に埋もれて行つた。一夜の中に一尺も二尺も積もり重なる日があつた。小屋と木立だけが空と地との間にあつて汚い斑點だつた。

仁右衛門は或る日腰まで這入る雪の中をこいで事務所に出かけて行つた。いくらでもないから馬を買つてくれると頼んで見た。帳場はあざ笑つて、脚の立たない馬は、金を喰ふ機械見たいなものだと云つた。而して竹筥返しに跡釜が出來たから小屋を立退けと逼つた。愚圖々々してゐると今までのやうな煮え切らない事はして置かない、この村の調査でまにあはなければ俱知安からでも頼んで處分するからさう思へとも云つた。仁右衛門は帳場に物を云はれると妙に向腹が立つた。鼻をあかしてくるから見て居れと云ひ捨てて小屋に歸つた。

金を喰ふ機械——それに違ひなかつた。仁右衛門は不便から今まで馬を生かして置いたのを後悔した。彼れは雪の中に馬を引つ張り出した。老いぼれたやうになつた馬はなつかしきに

主人の手に鼻先を持つて行つた。仁右衛門は右手に隠して持つてゐた斧で肩間をこはさうと思つてゐたが、どうしてもそれが出來なかつた。彼れは父馬を牽いて小屋に歸つた。

その翌日彼れは身支度をして函館に出懸けた。彼れは地主と噂囁して空井の仕合せなかつた小作料の輕減を實行させ、自分も農場にゐつて、小作者の感情をも柔らけて少しは自分を居地よくしようと思つたのだ。彼れは汽車の中で自分の云ひ分を十分に考へようとした。然し列車の中の澤山の人の顔はもう彼れの心を不安にした。彼れは敵意をふくんだ眼で一人一人睨めつけた。

函館の停車場に着くと彼れはもうその建物の宏大もなにもに膽をつぶしてしまつた。不恰好な二階建ての板家に過ぎないのだけれども、その一本の柱にも彼れは驚くべき費用を想はした。彼れは父雪のかきのけてある廣い往來を見て驚いた。然し彼れの誇りはそんな事に敗れてはゐまいとした。動々ともするとおびえて胸の中ですくみさうになる心を勵まし、彼れは且人のやうに杖杖高にのそり／＼と道を歩いた。人々は振り廻つて、自然から今切り取つたばかりのやうなこの町を見送つた。

に代價を支拂ふやうにするからと云つて、麥や大豆の前借りをした。然し馬力を頼んでそれを自分の小屋に運ばして置いて、賭場に出かけた。

競馬の日の晩に村では一大事が起つた。その

晩おそくまで笠井の娘は松川の所に歸つて來なかつた。こんな晩に若い男女が煙の奥や森の中に姿を隠すのは珍らしい事でもないで初めの中は打ち捨てておいたが、餘りおそくなるので、笠井の小屋を尋ねさすところにもゐなかつた。

等井は驚いて飛んで來た。然し廣い山野をどう探しやうもなかつた。夜のあけ／＼に大搜索が行はれた。娘は河添の窪地の林の中に失神して倒れてゐた。正氣づいてから聞きたゞすと、

大きな男が無理やりに娘をそこに連れて行つて殘虐を極めた辱かしめかたをしたのだと判つた。笠井は廣岡の名を云つてしたり顔に小首を傾けた。事務所の硝子を廣岡がこはすのを見た

と云ふ者が出來た。

犯人の搜索は極めて秘密に、同時にこんな田舎にしては嚴重に行はれた。場主の松川は少からざる懸賞までした。然し手がかりは皆目つかなくかつた。疑ひは妙に廣岡の方にかゝつて行つた。赤坊を殺したのは笠井だと廣岡の始終云ふのは誰れでも知つてゐた。廣岡の馬を蹊

かしたのは間接ながら笠井の娘の仕業だつた。跡鐵屋が馬を廣岡の所に連れて行つたのは夜の十時頃だつたが廣岡は小屋にゐなかつた。その晩廣岡を村で見かけたものは一人もなかつた。賭場にさへゐなかつた。仁右衛門に不利益な色色な事情は色々に數へ上げられたが、具體的な證據は少しも上らないで夏がくれた。

秋の收穫時になると又雨が來た。乾燥が出來ないために、折角實つたのもまで腐る始末だつた。小作はわや／＼と事務所に集まつて小作料割り引の歟願をしたが無益だつた。彼等は案の定燕麥賣上代金の中から嚴密に小作料を控除された。來春の種子は愚か、冬の間を支へる食料も満足に得られない農夫が澤山出來た。

その間にあつて仁右衛門だけは燕麥の事で事務所に破約したばかりでなく、一文の小作料も納めなかつた。綺麗に納めなかつた。始めの間帳場はなだめづかしつして幾らかでも納めさせようとしたが、如何しても應じないので、財産を差押へると脅威した。仁右衛門は平氣だつた。押へようと云つて何を押へようぞ、小屋の代金もまだ事務所に納めてはなかつた。彼れはそれを知りぬいてゐた。事務所からは最後の手段として多少の損はしても退場さすと迫つて來た。

然し彼れは頑として動かなかつた。ペテンにかけられた雜穀屋をはじめ諸商人は貸金の元金は愚か利子さへ出させる事が出來なかつた。

七

「まだか」、この名は村中に恐怖を播いた。彼れの顔を出す所には人々は姿を隠した。川森さへ疾うの昔に仁右衛門の保證を取消して、仁右衛門に退場を迫る人となつてゐた。市街地でも農場内でも彼れに融通をしようと思ふ者は一人もなくなつた。佐藤の夫婦は幾度も事務所に行つて早く廣岡を退場させてくれなければ自分達も退場すると申し出た。駐在巡查すら廣岡の事件に關係する事を體よく避けた。笠井の娘を犯したものは——何等の證據がないにも係はらず——仁右衛門に相違ないときまつてしまつた。凡て村の中で起つたいかゞはしい出來事は一つ残らず仁右衛門になすりつけられた。

仁右衛門は押し太く腹を据ゑた。彼れは自分の夢をまだ取消さうとはしなかつた。彼れの後悔してゐるものは博奕だけだつた。來年からそれにさへ手を出さなければ、而して今年同様

てゐるやうだつた彼は、何かのきつかけに勢よく立ち上つて、斧を取り上げた。而して馬の前に立つた。馬はなつかしげに鼻先をつき出した。仁右衛門は無表情な顔をして口をもごもごさせながら馬の眼と眼との間をおとなしく撫でてゐたが、いきなり體を浮かすやうに後ろに反らして斧を振り上げたと思ふと、力まかせにその肩間に打ちこんだ。うとましい音が彼れの腹に應へて、馬は聲も立てずに前膝をついて横倒しにどうと倒れた。痙攣的に後脚で蹴るやうなまねをして、渦みを持った眼は可憐にも何かを見詰めてゐた。

「やれ怖い事するでねえ、傷ましいまあ」
すゝぎ物をしてゐた妻が、振り返つてこの様を見と、恐ろしい眼附きをしておびえるやうに立ち上りながらういつた。
「黙れつてば。物いふと汝れもたゞき殺されつぞ」

仁右衛門は殺人者が生き残つた者を有かすやうな低い鐵枯れた聲でたしなめた。
嵐が急にやんだやうに二人の心にはかゝんとした沈黙が襲つて來た。仁右衛門はだらんと下げた右手に斧をぶら下げたまゝ、妻は雑巾のやうに汚い布巾を胸の所に押しあてたまゝ、憚

るやうに顔を見合せて突つ立つてゐた。
「こゝへ來う」

やがて仁右衛門は呻くやうに、斧を一す動かして妻を呼んだ。

彼れは妻に手傳はせて馬の皮を剥ぎ始めた、生臭い匂ひが小屋一杯になつた。厚い舌をだらりと横に出した顔だけの皮を残して、馬はやがて裸身にされて、藁の上に堅くなつて横はつた。白い腱と赤い肉とが無氣味な縞となつてそこに曝された。仁右衛門は皮を棒のやうに卷いて藁細でしばり上げた。

それから仁右衛門のいふまゝに妻は小屋の中を片附けはじめた。背負へるだけは雜穀も荷造りして大小二つの荷が出来た。妻は良人の心持が分ると又長い苦しい漂浪の生活を思ひやつて、おろ／＼と泣かんばかりになつたが、夫の端立つた氣分を濡れて涙を飲みこみ／＼した。

仁右衛門は小屋の真中に突つ立つて隅から隅まで目測でもするやうに見廻した。二人は黙つたまゝ、でつま／＼をはいた。妻が風呂敷を被つて荷を背負ふと仁右衛門は後ろから助け起してやつた。妻はとう／＼身を震はして泣き出した。意外にも仁右衛門は叱りつけなかつた。而して自分は大に大きな荷を軽々と背負ひ上げてその上に馬

の皮を乗せた。人は言ひ合せたやうにもう一度小屋を見廻した。

小屋の戸を開けると顔向けも出来ない程雪が吹き込んだ。荷を背負つて重くなつた一人の體はまだ堅くならない白い泥の中に腰のあたりまで埋まつた。

仁右衛門は一旦戸外に出てから、待てと云つて引き返して來た。荷物を背負つたまゝで、彼れは藁繩の片つ方の端を圍爐裡にくべ、もう一つの端を壁際にもつて行つてその上に細く刻んだ馬櫛の藁をふりかけた。

天も地も一つになつた。颯と風が吹きおろしたと思ふと、積雪は自分の方から舞ひ上るやうに舞ひ上つた。それが横なぐりに靡いて矢よりも早く空を飛んだ。佐藤の小屋やそのまはりの木立は見えたり隠れたりした。風に向つた二人の半身は忽ち白く染まつて、細かい針で絶間なく刺すやうな刺戟は二人の顔を青赤にして感覺を失はしめた。二人は吐毛に氷りつく雪を打ち振ひ／＼雪の中をこいだ。

國道に出ると雪道がついてゐた。踏み始められない深みに落ちないやうに仁右衛門は先きに立つて溜踏みをしながら歩いた。大きな荷を背負つた二人の姿はまるで勝ちに少しづつ動いて

やがて彼れは松川の居敷に這入つて行つた。農場の事務所から想像してゐたのとは話にならない程ちがつた。宏大な邸宅だつた。敷臺を上る時に、彼れはつまごを脱いでから、我れにもなく手拭を腰から抜いて足の裏を綺麗に押し拭つた。澄んだ水の表面の外に、自然には決してない滑らかに光つた板の間の上を、彼れは氣味悪い冷たさを感じながら、奥に案内されて行つた。美しく装飾つた女中が、人の部屋の機をあげると、息氣のつまるやうな強烈な不快な匂ひが彼れの鼻を強く襲つた。而して部屋の中は夏のやうに暑かつた。

板よりも固い畳の上には處々に獸の皮が敷きつめられてゐて、障子に近い大きな白熊の毛皮の上の盛り上るやうな座布團の上に、はつたんの襦袍を着込んだ場主が、大火鉢に手をかざして安坐をかいてゐる。仁右衛門の姿を見るとぎろつと睨みつけた眼をそのまゝ床の方に振り向けた。仁右衛門は場主の一眼でどやし附けられて這入る事も得せずに遑遑みしてゐると、場主の眼が又床の間からこつちに歸つて來さうになつた。仁右衛門は二度睨みつけられるのを恐れるあまりに、無器用な足どりで畳の上にちやつ／＼と音をさせながら場主の鼻先ま

でのを／＼歩いて行つて、出来るだけ小さく窮屈さうに坐りこんだ。

「何しに來た」

度方のある聲に、もう一度どやし附けられて、仁右衛門は思はず顔を舉げた。場主は眞黒な大きな巻煙草のやうなものを口に銜へて、青い煙をほがらかに吹いてゐた。そこからは息氣づまるやうな不快な匂ひが彼れの鼻の奥をつん／＼刺戟した。

「小作料の一文も納めないで、どの面下げて來臭つた。來年からは魂を入れかへろ。而して辭儀一つもする事を覺えてから出直すなら出直して來い。馬鹿」

而して部屋をゆするやうな高笑ひが聞こえた。仁右衛門が自分でも分らない事を寢言のやうにいふのを、始めの間は聞き直したり、補つたりしてゐたが、やがて場主は堪忍袋を切らしたといふ風にかう怒鳴つたのだ。仁右衛門は高笑ひのひとくぎり毎に、たゞかれるやうに頭をすくめてゐたが、辭儀もせずに夢中で立ち上つた。彼れの顔は部屋の暑さの爲めと、のぼせ上つた爲めに湯氣を出さんばかり赤くなつてゐた。

仁右衛門はすつかり打ち摧かれて自分の小さ

な小屋に歸つた。彼れには農場の空の上までも地主の嚴格さうな大きな手が廣がつてゐるやうに思へた。雪を含んだ雲は息氣苦しいまでに彼れの頭を押へつけた。馬鹿！その聲は動もすると彼れの耳の中で怒鳴られた。何んといふ暮しの違ひだ。何んといふ人間の違ひだ。親方が人間なら彼れは人間ぢやない。俺れが人間なら親方は人間ぢやない。彼れはさう思つた。而して唯も惘れて黙つて考へこんでしまつた。

粗袋がぶし／＼と燐ぶるその向座には、寒が襦袢につゝまれて、髪をぼろ／＼と濡したまゝ、愚かな眼と口とを節々のやうに開け放してぼんやり坐つてゐた。しん／＼と雪はとめ度なく降り出して來た。妻の膝の上には赤坊もゐなかつた。

その晩から天氣は激變して吹雪になつた。翌朝仁右衛門が眼をさますと、吹き込んだ雪が足から腰にかけて薄ら積つてゐた。銀い口笛のやうなうなりを立てて吹きまく風は、小屋をめきり／＼とゆすぶりに立てた。風が小風ぐと、滅入るやうな静かさが圍爐裡まで通つて來た。

仁右衛門は朝から酒を欲したけれども一滴もありやうはなかつた。寝起きから妙に思ひ入つ

生れ出づる悩み

私は自分の仕事を神聖なものにしようとしてゐた。ねち曲らうとする自分の心をひつばたいて、出来るだけ仲よくした眞直な明るい世界に出て、そこに自分の藝術の宮殿を築き上げようと藻掻いてゐた。それは私に取つてどれ程喜ばしい事だつたらう。と同時にどれ程苦しい事だつたらう。私の心の奥底には確かに——凡ての人の心の奥底にあるのと同様な——火が燃えてはゐたけれども、その火を煙らさうとする塵芥の堆積は又ひどいものだつた。かき除けても／＼容易に火の燃え立つて来ないやうな瞬間には私は惨憺だつた。私は、机の向うに開かれた窓から、冬が来て雪に埋もれて行く一面の畑を見渡しながら、滯りがちな筆を叱りつけ／＼運ばさうとしてゐた。

寒い。原稿紙の手ざりは氷のやうだつた。陽はぜん／＼暮れて行くのだつた。灰色から鼠色に、鼠色から黒色にぼかされた大きな紙を

眼の前のかけて、上から下へと一気に視線を落して行く時に感ずるやうな速さで、晝の光は夜の間に變つて行かうとしてゐた。午後になつたと思ふ間もなく、どん／＼暮れかゝる北海道の冬を知らないものには、日が遑早く蝕まれるこの氣味悪い淋しさは想像がつくまい。ニセコヤンの丘陵の裂け目から霧地にこの高原の畑地を眼がけて吹きおろして来る風は、割合に粒の大きい軽やかな初冬の雪片を煽り立て／＼横さまに舞ひ飛ばした。雪片は暮れ残つた光の迷子にやうに、ちか／＼した印象を見る人の眼に奥へながら、悪戯者らしく散々飛び廻つた。心算にも似ず、降りたまつた積雪の上に落ちるや否や、あたる雪片だけがさら／＼さら／＼とさ／＼やかに音を立てるばかりで、他の凡ての奴等は残らず啞だ。快活らしい白い雪の群れの舞踏——それは見る人を涙ぐませる。

私は淋しさの餘り筆をとめて窓の外を眺めて見た。而して君の事を思つた。

私が君に始めて會つたのは、私がまだ札幌に住んでゐる頃だつた。私の借りた家は札幌の町端れを流れる豊平川といふ川の右岸にあつた。その家は堤の下の一町歩程もある大きな林檎園の中に建ててあつた。

そこに或る日の午後君は尋ねて來たのだつた。君は少し不機嫌さうな、口の重い、前で存丈けが伸び切らないとぶつたやうな少年だつた。汚い中學校の制服の立襟のホックをうるささうに外づしたまゝにしてゐた、それが妙な事には殊にはつきりと私の記憶に残つてゐる。

君は座につくとぶつ／＼と自分に自分の書いた書を見て貰ひたいと云ひ出した。君は片手では抱へ切れない程油書や水彩畫を持ちこんで來てゐた。君は自分自身を平氣で虐げる人のやうに、風呂敷包みの中から籠裏に總枚かの畫を引か抜いて私の前に置いた。而してづつと探るやうに私の顔を見詰めた。明らかに云ふと、その時私は君をいやに富貴ちきな若者だと思つた。而して君の方には顔も向けないで、据ゑこるなく差出された畫を取り上げて見た。

私は一眼見て驚かすにはゐられなかつた。

行つた。共同墓地の下を通る時、妾に手を合せてそつちを拜みながら歩いた——わざとらしい程高い聲を擧げて泣きながら。二人がこの村に這入つた時は一頭の馬も持つてゐた。一人の赤坊もゐた。二人はそれらのものすら自然から奪ひ去られてしまつたのだ。

その邊から人家は絶えた。吹きつける雪の爲めにへし折られる枯枝がやゝともすると投槍のやうに襲つて來た。吹きまく風にもまれて木と云ふ木は魔女の爰のやうに亂れ狂つた。

二人の男女は重荷の下に苦しみながら少しづつ俱知安の方に動いて行つた。

榎松帯が向うに見えた。凡この樹が裸かになつた中に、この樹だけは幽鬱な暗緑の草色をあらためなかつた。眞直な幹が見渡す限り天を衝いて、怒濤のやうな風の音を籠めてゐた。二人の男女は蟻のやうに小さくその林に近づいて、やがてその中に吞み込まれてしまつた。

(一九一七年 月一三日、雄鳴を聞きつゝ摘筆)

(一九一七年七月、新小説所載)

笑ひらしいものを漏らした。それがまた普通の微笑とも皮肉な癡癡とも思ひなされた。

それから二人はまた二十分程黙つたまゝで向ひ合つて坐りつづけた。

ぢや又持つて来ますから見て下さい。今度はもつといふものを描いて来ます」

その沈黙の後で、君が腹を浮かせながら云つたこれだけの言葉。又僕を驚かせた。丸で別な、初な、素直な子供でもいつたやうな無邪氣な明るい聲だつたから。

不思議なものは人の心の働きだ。この聲一つだつた。この聲一つが君と私とを堅く結びつけてしまつたのだつた。私は結局君を色々に

邪推した事を悔いながらやさしく尋ねた。

「君は學校は何處です」

「東京です」

「東京？ それぢやもう始まつてゐるんぢやないか」

「ええ」

「何故歸らないんです」

「どうしても落第點しか取れない學科があるんでいやになつたんです。……それから少し都合もあつて」

「君は畫をやる氣なんですか」

「やれるでせうか」
さう云つた時、君はまた前と同様な強情らしい、人に迫るやうな顔付きになつた。

私もそれに對して何んと答へやうもなかつた。専門家でもない私が、五六枚の畫を見ただけで、その少年の未來の運命全體を何うして大膽に決定的に云ひ切る事が出来よう。少年の思ひ入つたやうな態度を見るにつけ、私には凡てが恐ろしくつた。私は黙つてゐた。

「僕はその中郷里に——郷里は岩内です——歸ります。岩内のそばに硫黄を掘り出してゐる所があるんです。その景色を僕は夢にまで見ます。その畫を作り上げて送りますから見て下さい。……畫が好きなんだけれども、下手だから駄目です」

私の答へないのを見て、君は自分をたしなめるやうに堅い淋しい調子でかう云つた。而して私の目の前に取り出した何枚かの作品を日茶苦茶に風呂敷に包みこんで歸つて行つてしまつた。

君を木戸の所まで送り出してから、私は一人で手廣い笹畑の中を歩きまはつた。林檎の枝は熟した果實でたわゝになつてゐた。或る樹などは葉がすっかり散り盡して、赤々とした果

實だけが眞裸で黒々と目にさらされてゐた。それは快く空の晴れ渡つた小春日如の一日だつた。私の足下駄に踏まれた落葉は乾いた音をたてて微塵に押しひしやがれた。豐滿の淋しきといふやうなものが空氣の中にいんまりと漂つてゐた。丁度その頃は、私も生活の或る一つの岐路に立つて疑ひ迷つてゐた時だつた。私は冬を眼の前に控へた自然の前に幾度も知らず知らず棒立ちになつて、君の事と自分の事とをまぜこぜに考へた。

兎に角君は妙に力強い印象を私に残して、私から姿を消してしまつたのだ。

その後君からは一度か二度問合せ何かの手紙が來たりではつたり消息が途絶えてしまつた。岩内から來たといふ人などに避ふと、私はよくその港にかういふ名前の青年よりないか、その人を知らないかなぞと尋ねて見たが、更に手がかりは得られなかつた。寧ろ雲霧の風景畫もとうとう私の手許にはついて来なかつた。

かうして二年三年と月日がたつた。而して何うかした拍子に君の事を思ひ出すと、私は人生の旅路の淋しさを味はつた。……兎に角氣を合せて、或る程度まで心を翻れ合つた同志が、一旦別れたが最後、同じこの地上の上に呼吸

少しの修練も経てはゐないらしい幼稚な技巧ではあつたけれども、その中には不思議に力が籠もつてゐてそれが直ぐ私を襲つたからだ。私は畫面から眼を放してもう一度君を見直さないではゐられなくなつた。で、さうした。その時、君は不安らしいその癖意地張りな眼付きをして矢張り私を見續けてゐた。

「どうでせう。それなんかは下らない出来だけれども」

さう君は如何にも自分の仕事を輕蔑するやうに云つた。もう一度明らかに云ふが、私は一方で君の畫に喜ばしい驚きを感じながらも、いかにも思ひ昂つたやうな君の物腰には一種の反感を覺えて、一寸皮肉でも云つて見たくなつた。二下らない出来がこれ程なら、會心の作と云ふのは大したものでせうね」とか何んとか。

然し私は幸にも咄囁にそんな言葉で自分を慰す事を避けたのだつた。それは私の心が美しかつたからではない。君の畫が何んとか云つても君自身に對する私の反感に打ち勝つて私に迫つてゐただ。

君が其の時持つて來た畫の中で今でも私の心の底にまぎ／＼と残つてゐる一枚がある。それは八號の風景に描かれたもので、輕川あたりの

泥炭地を寫したと覺い晩秋の風景畫だつた。

荒涼と見渡す限りに連なつた地平線の低い葦原を一面に蔽うた雲の隙間から午後の日がすかに漏れて、それが、草の茎からたつた二本ひよ／＼と生ひ伸びた白樺の白い樹皮を、弱く照らしてゐた。單色を含んで來た筆の穂が不用に畫布にたゞきつけられて、そのま／＼し飛んだやうな手荒な筆觸で、自然の中には決して存在しないといふはれる純白の色と、他の色と練り合はされずに、そのま／＼ととりとなすり附けてあつたりしたが、それでもちつと見てゐると、そこには作者の鋭敏な色感が存分に實はれた。それはかりか、その畫が與へる全體の効果にもいつかりと纏まつた氣分が行き渡つてゐた。憶ふ、十六七の少年には咄めさうもない重い記憶を、見る者は直ぐ感ずる事が出來た。

一大變い／＼ちやありませんか。畫に對して素直になつた私の心は、私にかう云はさないではおかなかつた。

それを聞くと君は心持ち顔を赤くした。――私は思つた。すぐ次ぎの瞬間に來ると、君は然し私を疑ふやうな自分を冷笑ふやうな冷やかな表情をして、暫らくの間私と畫とを等分に見較べてゐたが、ふいと庭の方へ顔を背けて

しまつた。それは人を馬鹿にした仕打ちと思へば思はれない事はなかつた。二人は氣まづく黙りこくつてしまつた。私は所在なさに黙つたまゝ畫を眺めつゝゐた。

「それは何處ん所が悪いんです」

突然又君の無愛想な聲がした。私は今までの妙にち／＼になつた氣分から、さう自分の意見を見ずば／＼と云ひ出す氣にはなれないでゐた。然し改めて君の顔を見ると、云はさないぢや置かないぞと云つたやうな眞剣さが現れてゐた。少しでも間に合はせを云はうものなら輕蔑してやるぞと云つたやうな鋭きが見えた。好し、それぢや存分に云つてやらうと私もとう／＼本當に腰を据ゑてかゝるやうにされてゐた。

その時私が口に任せてどんな生意氣を云つたかは幸ひな事に今は大方忘れてしまつてゐる。然し兎に角惡口としては技巧が非常に危なつかしい事、自然の見方が不親切な事、モティヴが耽情的過ぎる事などを列べたに違ひない。君は黙つたまゝまじ／＼と眼を光らせながら、私の云ふ事を聴いてゐた。私が云ひたい事だけをあげすけに云つてしまふと、君は暫らく黙りつゝゐたが、やがて口の隅だけに始め

偶然君と云ふものを知つてから丁度十年日だ
——の或る日、雨のいよばく——と降つてゐる午
後に一封の小包が私の手許に届いた。女中がそ
れを持つて来た時、私は干魚が送られたと思つ
た程部屋の中が生臭くなつた。包みの油紙は雨
水と泥とでひどく汚れてゐて、差出人の名前が
漸くの事で讀める位だつたが、そこに記され
た姓名を私は誰れともはつきり思ひ出すことが
出来なかつた。兎も角もと思つて私はナイフで
嚴密な油紙の麻紐を切りほごしにかゝつた。
油紙を皮めくるとその中に又麻紐で堅く結は
れた油紙の包みがあつた。それをほごすと又油
紙で包んであつた。寸腹の立つ程念の入つた
包み方で、百合根を剥がすやうに一枚々々むい
て行くと、やうやく幾枚もの新聞紙の中から、
手垢でよく切つた手製のスケッチ帖が三冊、
きり／＼と棒のやうに巻き上げられたのが出て
来た。私は小氣味悪い魚の匂ひを始末氣にし
ながらその手帖を擴げて見た。
それはどれも鉛筆で描かれたスケッチ帖だつ
た。而してどれも山と樹木ばかりが描かれて
あつた。私は一眼見ると、それが明かに北海
道の風景である事を知つた。のみならず、それ
は明かに本當の藝術家のみが見得る、而して

描き得る深刻な自然の肖像畫だつた。
「やつつけたな！」唯暗に私は少年のまゝの
君の面影を心一杯に描きながら下唇を噛みし
めた。而して思はず微笑んだ。白狀するが、そ
れが若し小説か戯曲であつたら、その時の私の
顔には微笑の代りに苦しい嫉妬の色が濃く漲つ
てゐたかも知れない。
その晩になつて一封の手紙が君から届いて來
た。矢張り厚い書學紙に擦り切れた筆で亂雑に
かう走り書きがしてあつた。
「北海道ハ秋モ晩クナリマシタ。野原ハ、毎
日ノヤウニツメタイ風ガ吹イテキマス。
日頃愛惜シタ樹木ヤ草花ナドガ、イットハ
ナク落葉シテシマツテキル。秋ハ人ノ心ニ
色々ナ事ヲ思ハセマス。
日ニヨリマストアタリノ山々ガ浮キアガツ
タカト思ハレル位空が美シイ時がアリマ
ス。然レ大テイハハト一所ニ雨ガバラ／＼
ヤツテ來テ路ヲ悪クシテキルノデス。
昨日スケッチ帖ヲ三冊送りマシタ。イツカ
あなたニ書ヲ見テモラヒマシテカラ、故郷
デ貧乏漁夫デアル私ハ、毎日忙シイ仕事ト
激シイ勞働ニ追ハレテキルノデ、ツイ今年
マデ畫ヲカイト見タカツタノデスガ、ツイ

描ケナカツタノデス。
今年ノ七月カラ始メテ書用紙ヲトデ畫帖
ヲ作り、鉛筆デ(モノ、ニ向ツテ見マシタ。
併シ勞働ニ害サレタテハ思フヤウニ自分ノ
感力ヲ現ハス事が出来ナイデ困リマス。
コンナツマライイ素描帖ヲ見テ下サイト云
フノハ大ヘンツライノデス。然シハイッ
ハラナイデ始メタ時カラノ全部送りマシ
タ。(中略)
私ノ町ノ智的素養ノ幾分ナリトモアル青年
デモ、自分トイフモノニツイテ思ヒフメグ
ラス人ハ少ナイヤウデス。青年ノ多クハ小
サクサカシクヲサマツテキルモノカ、ツマ
ラナク時ヲ無爲ニ送ツテキマス。デスガ私
ハ私ノ故郷ガカラ好キデス。
色々ナモノガ私ノ心ヲドラセマス。私
ノスケッチニ取ルベキ所ノアルモノガアル
デセウカ
私ハ何トナクコンナツマラスモノヲ／＼な
ニ見テモラフノガハザカシイノデス。
山ハ繪具ヲドツシリ付ケテ、山ガ地上カラ
空ヘモレアガツテキルヤウニ描イテ見タイ
モノダト思ツテキマス。私ノスケッチデハ
私ノ感シガドウモ出ナイデコマリマス、

しながら、未來永劫復たと邂逅はない。それは何んといふ不思議な、淋しい、恐ろしい事だ。人とは云ふまい、大とでも、花とでも、塵とでもだ。孤獨に親しみ易い癖に、何處か殉情的で人なつツこい私の心は、何うかした拍子に、この已むを得ない人間の運命をしみくんと感じて深い懨懨に襲はれる。君も多くの人の中で私にそんな心持を起させる一人だつた。

而かも淺はかな私等人間は猿と同様に物忘れする。四年五年といふ歲月は君の記憶を私の心から綺麗に拭ひ取つてしまはうとしてゐたのだ。君は段々私の意識の關を踏み越えて、潜在意識の奥底に隠れて仕舞はうとしてゐただ。

この短かからぬ時間は私の身の上にも私相當の變化を牽き起してゐた。私は足かけ八年住み慣れた札幌、極く手短かに云つても、そこで私の上にも色々な出来事が湧き上つた。妻も迎へた。三人の子の父ともなつた。永い間の信仰から離れて教會とも縁を切つた。それまでやつてゐた仕事に段々失望を感じ始めた。新しい生活の芽が周囲の拒絶をも無みして、そろそろと芽ぐみかけてゐた。私の眼の前の生活の道にはおぼろげながら氣味悪い不埒の雲が蔽ひ

かゝらうとしてゐた。私は始終私自身の力を信じてゐ、かの疑はねばならぬのかの二筋道に迷ひぬいた——を去つて、私には物足らない都會生活が始まつた。而して眼にあまる不幸のつぎ／＼に足からましく上るのを手を拭いてちつと眺めねばならなかつた。心の中に起つたそんな危機の中で、私は捨て身になつて、見も知らぬ新しい世界に乗り出す事を餘儀なくされた。それは文學者としての生活だつた。私は今度こそは全く獨りで歩かねばならぬと決心の膽を堅めた。又此の道に踏み込んだ以上は、出来ても出来なくても人類の意志と取組む覺悟をしなければならなかつた。私は始終自分の力量に疑ひを感じながら原稿紙に臨んだ。人々が寝入つて後、草木も寝入つて後、獨り目覺めてしんとした夜の寂寞の中に、萬年筆のペン先が紙にきしり込む音だけを聞きながら、私は神がかりのやうに夢中になつて筆を運ばしてゐる事もあつた。私の周囲には亡靈のやうな魂がひしめいて、紙の中に生れ出ようと苦しみあせつてゐるのをはつきりと感じた事もあつた。そんな時氣が付いて見ると、私の眼は感激の涙に漂つてゐた。藝術に溺れたものでなくつて、さういふ時のエクスタシーを誰れ

が味ひ得よう。然し私の心が痛ましく裂け亂れて、純一な氣持が何處の隅にも見付けられない時の淋しさは又何んと喻へやうもない。その時私は全く一塊の物質に過ぎない。私には何んにも殘されない。私は自分の文學者である事を疑つてしまふ。文學者が文學者である事を疑ふ程、世に空虚な頼りないものが復たとあらうか。さういふ時に彼れは明かに生命から見放されてしまつてゐるのだ。こんな瞬間に限つて何時でも決まつたやうに私の念頭に浮ぶのは君のあの時の面影だつた。自分を信じてゐのか悪いのかを涙しかねて、逞ましい意志と冷刻な批評とが互に夾に戰つて、思はず知らず凡てのものに向つて敵意を含んだ君のあの面影だつた。私は筆を捨てて椅子から立ち上り、部屋の中を歩き廻りながら自分につぶやくやうに云つた。

「あの少年は何うなつたらう。道を踏み迷はないうてくれ。自分を誇大して取り返しつかない死出の旅をしないでくれ。若し彼れに獨自の道を切り開いて行く天稟がないのなら、萬望正直な勤勉な凡人として一生を終つてくれ。もうこの苦しみは彼れ、人だけで澤山だ。處が去年の十月——と云へば、川片の家で

てしまつた。自然は何かに氣を障へ出したやうに、夜と共に荒れ始めてゐた。底力の籠もつた鈍い空氣が、音もなく重苦しく家の外壁に肩をあてがつてうんと凭たれかゝるのが、疊の上に乗つてゐても何んとなく感じられた。自然が粉雪を煽りたてて、處きらはすたゝきつけながら、のたちち廻つて呻き叫ぶその物凄ひ氣配はもう迫つてゐた。私は窓ガラスに白木綿のカーテンを引いた。自然の暴威をせき止める爲めに人間が苦心して創り上げたこのみじめな家屋といふ領土が脆く小さく私の周圍に跳めやられた。

突然、ど、ど、ど……といふ音が——運動が（さういふ場合、音と運動との區別はない）天地に起つた。さあ始まつたと私は二つに折つた背中を思はず立て直した。同時に自然は上商を下肩にあてがつて思ひきり長く息氣を吐いた。家がぐら／＼と搖れた。地面から跳り上つた雪が二三度彈みを取つておいて、どつと一氣に天に向つて、謀叛でもするやうに、降りかゝつて行くあの悲壯な光景が、まさ／＼と部屋の中にすくんでゐる私の想像に浮べられた。駄目だ。待つた所がもう君は來やしない。停車場からの雪道はもう疾うに埋まつてしまつたに違ひないから。私は吹雪の底にひたりながら、物淋しくさう思つて、又机の上に眼を落した。筆は益々速るばかりだつた。輕い陣痛のやうなものは時々起りはしたが、大切な文字は生れ出てくれなかつた。かうして私に取つて情けないもどかしい時間が三十分も過ぎた頃だつたらう、農場の男が又のそりと部屋に這入つて來て客來を知らせたのは、私の喜びを君は想像する事が出来る。矢張り來てくれたのだ。私は直ぐに立つて事務室の方へかけ附けた。事務室の障子を開けて、二疊敷程もある大圍爐裡の切られた臺所に出ると、その上間に、二人の男がまだ靴も脱がずに突つ立つてゐた。農場の男も、その男にふさはしく肥つて大きな内儀さん、普通の背丈だけにしか見えない程その客といふ男は大きかつた。言葉通りの巨人だ。頭からすつぽりと頭巾のついた黒つぽい外套を着て、雪まみれになつて、口から白い息氣をむら／＼と吐き出すその姿は、實際人間といふ感じを起させない程だつた。子供までがおびえた眼付きをして内儀さんの膝の上に丸まりながら、その男をうろ／＼しく見詰めてゐた。

君ではなかつたなと思ふと僕は期望に長切られた失望の爲めに、いら／＼しかけてゐた神經のもどかしい感じが更につのるのを覺えた。「さ、ま、ずつとこつちにお上りなすつて」農場の男は僕の客だといふので出来るだけ丁寧にかう云つて、圍爐裡のそばの煎餅布團を裏返した。

その男は一寸頭で挨拶して圍爐裡の座に這入つて來たが、天井の高いだだつ廣い臺所に點された五分心のランプと、ちよろ／＼と燃える木節の圍爐裡火とは、黒い大きな塊的とよりこの男を照らさなかつた。男がぐ／＼しより濕つた兵隊の古長靴を脱ぐのを待つて、私は黙つたまゝ案内に立つた。今はもう、この男によつて無駄な時間がつぶされないやうに、いやな氣分にさせられないやうにと心算かに願ひながら部屋に這入つて二人が座についてから、私は始めて不當にその男を見た。男はぶきつちやうに、それでも四角に下座に坐つて、丁寧に頭を下げた。

「暫らく」八疊の座敷に餘るやうな鏽を帯びた太い聲がした。

「あなたは誰方ですか」大きな男は一寸きまりが窓さうに汗でしどになつた眞赤な額を拭でた。

私ノ山ハ、私が實際ニ感ジルヨリモアマリ
平面ノヤウデス。樹木モドウモ物體感ニト
ボシク思ハレマス。

色ヲツケテ見タラヨカラウト考ヘテキマス
ガ、時間ト金ガナイノデ、コンナモノデ腹
イセヲシテキルノデス。

私ハ色々構圖デ頭ガ一バイニナツテキ
ルノデスガ、何シロマダ描クダケノ腕ガナ
イヤウデス。御忙ガシイあなたニコンナ無
遠リヨラカケテ大ヘンスマナク思ツテキマ
ス。イツカ御ヒマガアツタラ御教示ヲ願ヒ
マス。

十月末

かう思つたまゝを書きなぐつた手紙がどれ程
私を動かしたか、君には一寸想像がつくまい。
自分が文學者であるだけに、私は他人の書い
た文字の中にも眞實と虚偽とを直感する可なり
鋭い能力が發達してゐる。私は君の手紙を
讀んでゐる中に涙ぐんでしまつた。魚臭い油
紙と、立派な藝術品であるスケッチ帖と、君の
文字との間には一分の隙もなかつた。「感力」
といふ君の造語は立派な内容を持つ言葉として
私の胸に響いた。「山ハ繪具ヲドツシリ付ケテ
山ガ地上カラ空ヘモレアガツテキルヤウニ描イ

テ見タイ」……山が地上から空にもれあがる……
それは素晴らしい自然への肉迫を表現した言
葉だ。言葉の中に込み渡つたこの力は、軽く對
象を見て過ぐす微温な心の、眞似にも生み出
し得ない調子を持つた言葉だ。

誰れも氣も付かず注意も拂はない地球の隅つ
こで、尊い一つの魂が母胎を破り出ようとし
て苦しんでゐる」

私はさう思つたのだ。さう思ふとこの地球と
いふものが急により美しいものに感じられたの
だ。さう感ずると何んとなく涙ぐんでしまつた
のだ。

その頃私は北海道行きを計畫してゐたが、
雑用に紛れて躊躇する中に寒くなりかけて來た
ので、もう一層やめようかと思つてゐた所だ
つた。然し君のスケッチ帖と手紙とを見ると、
是非君に會つて見たくなつて、一徹にすぐ旅行
の準備にかゝつた。その日から一週間とたゝ
ない十一月の五日には、もう上野驛から青森
への直行列車に乗つてゐる。私自身を見出だ
した。

凡帳での用事を済まして農場に行く前に、
私は岩内にあてて君に手紙を出して置いた。農
場からはさう遠くもないから、來られるなら來

ないか、成るべくならお目に懸りたいからと云
つて。

農場に着いた日には君は見えなかつた。その
翌日は朝から雪が降り出した。私は窓の所へ
机を持つて行つて、原稿紙に向つて呻吟しな
がら心待ちに君を待つのだつた。而して澁り勝
ちな筆を休ませる間に、今まで書き進めて來た
やうな過去の回想やら當面の期待やらをつぎつ
ぎに胸裡に浮ましてゐたのだつた。

三

夕闇は段々深まつて行つた。事務所をあづか
る男が、ランブを持って來た序でに、夜食の
膳を運ばうかと尋ねたが、私はひよつとすると
君が來はしないかと云ふ心づかひから、わざと
その儘にしておいて貰つて、またかじり附くや
うに原稿紙に向つた。大きな男の姿が軒屋か
らのつそりと消えて行くのを、視覚のはづれに
感じて、都會から久しぶりで來て見ると、物で
も人でも大きくゆつたりしてゐるのに、今更な
がら一種の壓迫をさへ感ずるのだつた。

澁りがちな筆がいくらでもはかどらない中に、
夕闇はどん／＼夜の暗さに代つて、窓ガラスの
先方は雪と闇とのぼんやりした明暗になつ

来た。君の父上と兄上と妹とが氣を描へて水に入らずにせつせと働くにも係はらず、そろりと泥沼の中に滅入り込むやうな家運の衰勢を何うする事も出来なかつた。學問といふものに興味がなく、従つて成績の面白くなかつた君が、藝術に捧著したい熱意を抱きながら、その淋しくなりまざる古い港に歸る心持になつたのはその爲めだつた。さういふ事を考へ合はすと、あの時君が何んとなく暗い顔付きをして、いらしく見えたのがはつきり分るやうだ。君は故郷に歸つても、仕事の暇々には、心あてにしてゐる景色でも描く事を、せめてはの頼みにして札幌を立ち去つて行つたのだらう。

然し君の家庭が君に待ち設けてゐたものは、そんな餘裕のある生活ではなかつた。年のいつた父上と、どつちかと云へば漁夫としての健康は持ち合はせてゐない兄上とが、普通の漁夫と少しも變りのない服装で網をすきながら君の歸りを迎へた時、大きい漁場の持主といふ風が家の中から根こそぎ無くなつてゐるのを眼のあたりに見やつた時、君はそれまでの考への存氣過ぎたのに氣が付いたに違ひない。十分の思慮もせずこんな生活の渦巻きの中に我れから飛び込んだのを、君の藝術的欲求は何處かで悔ん

でゐた。その晩礫臭い空氣の籠もつた部屋の中で、枕にはつきながら、暗室にかゝつた默のやうな焦燥さを感じて、臉を合はす事が出来なかつたと君は私に告白した。さうだつたらう。その晩一晩だけの君の心持を委しく考へただけで、私は一つの力強い小品を作り上げる事が出来ると思ふ。

然し親思ひで素直な心を持つて生れた君は、君を迎へ入れようとする生活から逃れ出る事をしなかつたのだ。諸様のホツクをかけずに着慣れた校服を脱ぎ捨てて、君は厚衣を羽織る身になつた。明鯛から鰯、鰯から鰯、鰯から烏賊といふやうに、四手絶える事のない忙がい漁撈の仕事にたづさはりながら、君は一年中かの北海の荒波や激しい氣候と戦つて、淋しい漁夫の生活に没頭しなければならなかつた。而かも海内に築かれた防波堤が、技師の飛んでもない計算違ひから、波を防ぐ代りに、砂をどんどん港内に流し入れる破日になつてから、船繋りのよかつた海岸は見る／＼淺瀬に變つて、出漁には都合のいい日ぬきの位置にあつた君の漁場は廢れ物同様になつてしまひ、已むなく高い駄賃を出して他人の漁場を使はなければならなくなつたのと、北海道第一と云はれた鰯の群來

が年々減つて行く爲めに、さらぬだに生活の壓迫を感じて來てゐた君の家は、親子が氣心を揃へ力を合はして、命がけに働いても年々貧窮に迫り迫られ勝ちになつて行つた。

親身な、やさしい、而して男らしい、心に生れた君は、黙つてこの有様を見て過ごす事は出来なくなつた。君は君に近いものの生活、爲めに、正しい汗を額に流すのを悔いたり恥ぢたりしてはゐられなくなつた。而して君は藪地に勞働生活の眞中心に乗り出した。寒暑と波濤と方業と荒くれ男等との交りは君の筋骨と皮肉とを鐵のやうに鍛へ上げた。君はすく／＼と大木のやうに逞ましくなつた。

「岩内にも漁夫は多いども腕力にかけて俺らに叶ふものは一人だつてゐねえ」
君はあたり前の事を云つて聞かせるやうにかう云つた。私の前に坐つた君の姿は私にそれを信ぜしめる。

パンの爲めに生活のどん底まで沈み切つた十年の月日——それは短いものではない。大抵の人は恐らくその年月の間にさう云ふ生活から跳ね返る力を失つてしまふだらう。世の中を見渡すと、何百萬、何千萬の人々が、こんな生活にその天授の特異な力を踏みしたかれて、

「一本です。」

「え、木本君!」

これが君なのか。私は驚きながら改めてその男をしげ／＼と見直さなければならなかつた。

滴の爲めに脊丈けも伸び切らない、何處か病質にさへ見えた懨懨な少年時代の君の面影は何處にあるのだらう。又落葉松の幹の表皮からあすこころに覗き出してゐる紅葉の一本をも見逃さず、愛撫し理髪しようとする、スケッチ帳で想像されるやうな鋭敏な神經の所有者らしい姿はどこにあるのだらう。地をつぶしてさしこをした厚衣を二枚重ね着して、どつしりと落ち付いた君の坐り姿は、私より五寸も高く見えた。筋肉で盛り上つた肩の上に正しく嵌め込まれた、牡牛のやうに太い頸に、稍々長めな赤銅色の君の顔は、健康そのもののやうにしつかりと乗つてゐた。筋肉質な君の顔は、何處から何處まで引き締つてゐたが、輪廓の正しい眼鼻立ちの隈には、心の中から湧いて出る寛大な微笑の影が、自然に漂つてゐて、脂肪氣のない甘の容貌をも暖かく見せてゐた。「何んといふ無類な完全な若者だらう。私は心の中にかう感激した。戀人を君に紹介する男は、深い猜疑の眼で戀人の心を見守らずにはゐられまい。君の與へ

る素晴らしい男らしい印象はそんな事まで私に思はせた。

「吹雪いてひどかつたらう。」

「何んの。温くつて／＼汗がはあえらく出ました。けんど道が分んねえで困つてると、仕合せよ。水車番に遇つたからすぐ知れました。あれは親身な人だつけ。」

君の素直な心はすぐ人の心に觸れると見える。あの水車番といふのは實際この邊で珍らしく心持のいい男だ。君は手拭を腰から抜いて湯氣が立たんばかりに汗になつた顔を幾度も押し拭つた。

夜食の膳が運ばれた。「もう我慢がなんねえ」と云つて、君は今まで堅くしてゐた膝を崩して胡坐をかけた。「きちやうめんに坐ることなんぞはあ無えもんだから」二人は子供同士のやうな楽しい心で膳に向つた。君の大食は愉快に私を驚かした。食後の茶を飯茶碗に三杯續けさきに飲む人を私は始めて見た。

夜食をすましてから、夜中まで二人の間に取りはされた楽しい會話を私は今だに同じ樂しさを以て思ひ出す。戶外ではこゝを先途と嵐が荒れまくつてゐた。部屋の中ではストーヴの向座に胡坐をかいて、癖のやうに時折り五分

刈りの濃い頭を逆さに掻で上げる男惚れのする君の顔が部屋を明るくしてゐた。君は盛んな文藝になつて小さな部屋を吹雪から守るやうに見えた。温まるにつれて、君の周囲から蒸れ立つ生臭い魚の香は強く部屋中に籠もつたけれど、それは兎い大海を生々しく聯想させるだけで、何んの不愉快な感じも起さなかつた。人の感覺といふものも氣儘なものだ。

楽しい會話を云つた。然しそれは面白いと云ふ意味では勿論ない。何故なれば君は感心も器用な言葉の尻を消して、曇つた顔をしなければならなかつたから。而して私も君の苦しい立身や、自分自身の迷ひ勝ちな生活を痛感して、暗い心に捕へられねばならなかつたから。

その時君が私に話して聞かしてくれた君のあれからの生活の輪郭を私はこゝにざつと書き連ねずには置けない。

札幌で君が私を訪れてくれた時、君には東京に遊學すべき途が絶たれてゐたのだつた。一時北海道の西海岸で、小樽をより凌駕して賑やかななりさうな氣勢を見せた岩内港は、さしたる理由もなく、少しも發展しないばかりか、段々さびれて行くばかりだつたので、それに

つて君の一家にも生活の苦しさが加へられて

凍つた兵隊長をはいて、黒い外套をいつかり着こんで土間に立つた。北國の冬の日暮しには殊更ら客がなつかしまれるものだ。名残を心から惜しんでだらう、農場の人達も親身に彼れ是れと君を勞つた。すつかり頭巾を被つて、十二分に身支度をしてから出懸けたらうだらうと皆んなが寄つて勸めなければ、君は素朴な憚りから帽子も被らずに重々しい口調で別れの挨拶をすまずと、ガラス戸を引き開けて戸外に出た。

私はガラス窓をこぐいて、外面に降り積んだ雪を落しながら、吹き溜つた眞白な雪の中をこいで行く君を見送つた。君の黒い姿は——矢張り頭巾は被らないまゝで、頭をむき出しにして雪にながらせた——君の黒い姿は、白い地面に腰まで埋まつて、或は濃く、或は薄く、縞になつて横降りに降りしきる雪の中を、たゞ一人段々遠ざかつて、とうとう霞んで見えなくなつてしまつた。

而して君に取り残された事務所は、君の来る前のやうな單調な淋しさと降りつむ雪とに閉ぢこめられてしまつた。

私がそこを發つて東京に歸つたのは、それから三四日後の事だつた。

四

今に東京の冬も過ぎて、梅が咲き格が吹くやうになつた。太陽の生み出す慈愛の光を、地面は胸を張り擡げて吸ひ込んでゐる。君の住む岩内の港の水は、まだ流れこむ解の水に薄濁る程にもなつてはゐるまい。鋼鐵を水で溶かしたやうな海面が、動もすると角立つた波を擧げて、岸を目がけて終日攻めよせてゐるだらう。それにしてももう老いさらばへた雪道を需用に拾ひながら、金魚賣りが天秤棒を擔つて無理にも春を喚び覺ますやうな賣聲を立てる季節にはなつたらう。濱には津輕や秋田邊から集まつて來た旅雁のやうな漁夫達が、鰯の建網の修繕をしたり、大釜の据え付けをしたりして、黒ずんだ自然の中に、毛布の甲がけや外套のけぼししい赤色を播き散らす季節にはなつたらう。この頃私は又妙に君を思ひ出す。君の張り切つた生活の有様を頭に描く。君はまぎと私の想像の視野に現はれ出て來て、見るやうに君の生活とその周囲とを私に見せてくれる。藝術家に取つては夢と現との隔はないと云つていい。彼れは現實を見ながら眠つてゐる事がある。夢を見ながら眼を見開いてゐる事がある。

五

私が私の想像にまかせて、こゝに君の姿を寫し出して見る事を君は拒むだらうか。私の鈍い頭にも同感といふものの力がどの位働き得るかを私は自分で試して見たいのだ。君の寛大はそれを許してくれる事と私はきめてからう。

君を思ひ出すにつけて、私の頭にすぐ浮び出て來るのは、何んと云つても淋しく物すまじい北海道の冬の光景だ。

長い冬の夜はまだ明けない。雷電峠と反對の灣の一角から長く突き出た造り損れの防波堤は、大蛇の亡骸のやうな眞黒い姿を遠く海の面に横たへて、夜目にも白く見える波濤の牙が小休みもなくその胴腹に噛みかゝつてゐる。砂濱に繫はれた百般近い大和船は、舳を沖の方へ向けて、互にしがみ付きながら、長い帆柱を左右前後に振り立ててゐる。その側に、様々の漁具と辨當のお櫃とを持つて集まつて來た漁夫達は、言葉少なに物を云ひ交はしながら、明滅のうの上に建てられた組合の天氣豫報の信號燈を見やつてゐる。暗い闇の中に、白と赤との二つの火が、夜鳥の眼のやうにぎらりと光つてゐる。

空しく墳墓の草となつてしまつたらう。それは全く悲しい事だ。而して不條理な事だ。然し誰れがこの不條理な世相に非難の石を抛つ事が出来るだらう。是れは悲しくも私達の一人々々が肩の上に背負はなければならぬ不條理だ。特異な力を埋め盡してまでも、當面の生活に没頭しなければならぬ人々に對して、私達は尊敬に近い同情をすら捧げねばならぬ悲しい人生の事實だ。あるがままの實相だ。

パンの爲めに精力のあらん限りを用ひ盡さねばならぬ十年——それは短いものではない。それにも保はらず、君は性格の中に植ゑ込まれた憧憬を一刻も捨てなかつたのだ。捨てる事が出来なかつたのだ。

雨の爲めとか、風の爲めとか、一口も安閑としてはゐられない漁夫の生活にも、爲す事なく日を過ごさねばならぬ幾日かが、一年の間には偶に來る。さう云ふ時に、君は一冊のスケッチ帖（小學校用の粗雑な畫學紙を不器用に網絲で綴つたそれ）と一本の鉛筆とを、魚の鱗や肉片がこびりついたまゝ、ごはくに乾いた仕事着の懷ろにねぢ込んで、ぶらりと朝から家を出るのだ。

「逢ふ人は俺ら事違ひだといふんです。けん

ど俺ら山をぢつとかう見てゐると、何かも忘れてしまふです。誰れだつたか何かの雑誌で『愛は奪ふ』と云ふものを書いて、人間が物を愛するのはその物を強奪するだと云つてゐたやうだが、俺ら山を見てゐると、そんな氣は起したくも起らないね。山がしつくり俺ら事引きずり込んでしまつて、俺ら唯々惘れて見てゐるだけです。その心持が描いて見たくつて、あんな下手なものをやつて見るが、から駄目です。あんな山の心持を描いた畫があらば、見るだけでも見たいもんだが、ありませんね。天氣のいゝ氣持のいゝ日にうんと力瘤を入れてやつて見たらと思ふけれど、暮しも忙しいし、やつても俺らにはやつぱり手に餘るだらう。色も付けて見たいが、繪具は國に引つ込む時、繪の好きな友達にくれてしまつたから、俺らのやうな繪には又買ふのも惜しいし。海を見れば海でいゝが、山を見れば山でいゝ。勿體ない位そこいらに素晴らしい好いものがあるんだが、力が足んねえです」

と云つたりする君の言葉も容子も私には忘れる事の出来ないものになつた。その時は胡坐にしたら兩脛を手でつぶれさうに堅く握つて、胸に餘る興奮を靜かな太い聲でおとなしく云ひ現はさ

うとしてゐた。

私共が一時過ぎまで語り合つて寢床に這入つて後、吹きまく吹雪は露ほども力をゆるめなかつた。君は君で、私は私で、妙に寢つかれない一夜だつた。踏まれても踏まれても、自然が興へた美妙な優しい心を失はない、失ひ得ない君の事を思つた。仁王のやうな淫ましい君の肉體に、少女のやうに敏感な魂を見出すのは、この上なく美しい事に私には思へた。

君一人が人生の生活といふものを明るくしてゐるやうにさへ思へた。而して私は段々私の仕事の事を考へた。どんなに藻掻いて見てもまだ本當に自分の所有を見出だす事が出来ないで、動もするとこぢれた反抗や敵愾心から一時的な満足求めたり、生活を歪んで見る事に興味を得ようとしたりする心の貧しさ——それが私を無念がらせた。而してその夜は、君のいかにも自然な大きな生長と、その生長に對して君が持つ無意識な諷刺と執着とが私の心に強い感激を起させた。

次ぎの日の朝、かうしてはゐられないと云つて、君は嵐の中に歸りし度をした。農場の男達すらもう少し模様を見てからにしるゝと強ひて止めるのも聞かず、君は素足にかちん／＼に

その黒い石ころと、模範の艦から一の字を引いて怪火のやうに流れる炭火の火の子とを眺めやる。長い鐵の火箸に火の起つた炭を挟んで高く舉げると、それが風を喰つて盛んに火の子を飛ばすのだ。凡ての船は始終それを口あてにして進退をしなければならぬ。炭火が一つ舉げられた時には、天候の悪くなる印しと見て船を止め、二つ舉げられた時には安全になつた印しとして再び進まねばならぬのだ。噓問を、物々しく立ち騒ぐ風と波との中に、海面低く火花を散らしながら青い焰を放つて、燃え上り燃えかすれるその光は、幾百人の漁夫達の命を勝手に支配する運命の手だ。その光が運命の物凄さを以て海の上に長く尾を引きながら消えて行く。何處からともなく海鳥の群れが、白く長い翼に羽音を立てて風を切りながら、船の上に現はれて来る。猫のやうな聲で小さく呼び交はすこの海の沙汰の漂浪者は、さつと落して来て波に腹を撫でさすかと思ふと、翼を返して高く舞ひ上り、やゝ暫らく風に逆らつてぎつとこたへてから、思ひ直したやうに打ち連れて、小氣味よく風に流されて行く。その白い羽根が或る瞬間には明るく、或る瞬間には暗く見え出すと、長い北國の夜もやうやく明け離れて行かうとする

のだ。夜の闇は暗く濃く沖の方に追ひつめられて、東の空には黎明の新しい光が雲を破り始める。物ささまじい朝焼けだ。過まつて海に落ち込んだ悪魔が、肉付きのいい右の肩だけを波の上に現はしてゐる、その肩のやうな雷電、峠の絶頂を撫でたり敲いたりして叢立ち急ぐ嵐雲は、爐に投げ入れられた紫のやうな光に燃えて、山懷ろの雪までも透明な藤色に染めてしまふ。それにしても明け方のこの暖かい光の色に比べて、何んと云ふ寒い空の風だ。長い夜の爲めに冷え切つた地球は、今その一番冷たい呼吸を呼吸してゐるのだ。

私は君を忘れてはならない。もう港を出離れて木の葉のやうに小さくなつた船の中で、君は配繩の用意をしながら、恐ろしいまでに莊嚴なこの日の序幕を眺めてゐるのだ。君の父上は舵座に胡坐をかいて、時々晴雨計を見やりながら、變化の烈しいその頃の天氣模様を考へてゐる。海の中から生れて来たやうな老漁夫の、體にたゞまれた鋭い眼は、雲一片の微をさへ見落すまいと注意しながら、顔には木彫のやうな深い落ち付きを見せてゐる。君の兄上は、凍つて自由にならない手の平を腰のあたりの荒布に擦りつけて熱を呼び起しながら、帆綱を握つて、

風の向きと早急に應じて帆を立て直してゐる。船はれた二人の漁夫は一人の漁夫で、二等置きに本繩から下がつた針に鉤をつけるのに忙はしい。海の上を見渡すと、港を出てからでん／＼ばら／＼に散らばつて、朝の光に白い帆をかざやかした船といふ船は、等しく沖を眼がけて波を切り開いて走りながら、君の船と同様な仕事にいそしんでゐるのだ。

夜が明け離れると海風と陸風との變り日が来て、さすがに荒れがちな北國の冬の海の上も暫らくは穏かになる。やがて潮は達せられる。君等は水の色を一瞥見たばかりで、海中に空き入つた陸地と海そのものの界とも云ふべき瀬がどう走つてゐるかを直ぐ見て取る事が出来る。帆が下ろされる。勢ひで走りつづける船足は、舵の爲めに右なり左なりに向け直される。同時に浮標の附いた配繩の一端が水のやうな波、中にぎぶん／＼と投げこまれる。二十五町から三十町に餘る長さを持つた繩全體が、海上に長々と横たへられるまでには、朝早くから始めても、日が子午線近く来るまでかゝらねばならぬのだ。君等の船は艦に操られて、横波を食ひながらしぶ／＼進んで行く。ざぶり……ざぶり……寒氣の爲めに比重の高くなつた海の水は、

赤と白との二つ球は、危命警報を標示する信號だ。船を出すには一番鳥が啼きわたる時刻まで待つてからにしなければならぬ。町の方は錠鎖まつて灯一つ見えない。それ等の凡てを被ひくるめて凍つた雲は幕のやうに空低く懸つてゐる。音を立てないばかりに雲は山の方から沖の方へと絶間なく走り續ける。汀まで雪に埋まつた海岸には、見渡せる限り、白波がざぶん／＼碎けて、風が——空氣そのものをつつ凌つてしまひさうな激しい寒い風が雪に閉された山を吹き、漁夫を吹き、海を吹きまくつて、磯地に水と空との閉ぢ目を眼がけて突きぬけて行く。

漁夫達の群れから少し離れて、一團りになつたお内儀さん達の背中から赤子の激しい泣き聲が起る。暫らくしてそれが鎮まると、風の生み出す音の高い不思議な沈黙がまた天と地とに漲り満ちる。

稍二時間を経つたと思ふ頃、綾日も知れない闇の中から、硫黄ヶ嶺の山頂——右肩を聳やかして、左を撫で肩にした——が雲の産んだ鬼子のやうに、空中に現はれ出る。鈍い上がまだ振り向きもしない中に、空は逆早くも曉の光を吸ひ初めたのだ。被錠船（港内に四五艘あるのだが、船も大

いし、それに老練な漁夫が乗り込んでゐて、他の船に駆け引き進退の合圖をする）の船頭が頭を揺めて相談をし始める。何處とも知れず、あの雲には氣疎い羽色を持つた鳥の聲が勇ましく聞こえ出す。漁夫達の群れもお内儀さん達の團りも、石のやうな不動の沈黙から急に生き返つて来る。

「出すべ」

そのさびめきの間に、潮で錆び切つた老船頭の幅の廣い胸辛聲が高く斯う響く。漁夫達は力強い鈍さを以て、互に今まで立ち盡してゐた所を歩み離れて銘々の持ち場につく。お内儀さん達は右に左に良人や兄や情人やを介抱して駆け歩く。今まで陶酔したやうに多愛もなく波に揺られてゐた船の艦には、漁夫達が膝頭まで水に浸つて、喚き始める。罵り騒ぐ聲が一としり聞こえたと思ふと、船は據どころなさきうに、右に左に揺らぎながら、船首を高く擡げて波頭を切り開き、狂ひ暴れる波打際から離れて行く。最後の高い罵りの聲と共に、今までの鈍さに似ず、あらゆる漁夫は狼のやうに船の上に飛び乗つてゐる。動ともすると船を岸に向けようとする船の中からは、長い竿が水の中に幾本も突き込まれる。船は已む

得ず又立ち直つて沖を眼指す。

この出船の時の人々の氣組み、働きは、誰れにでも激烈なアレグロで燃る音楽の一片を思ひ起さすだらう。がや／＼と騒ぐ音楽のやうな雲や波の擾乱の中から、漁夫達の鈍い「motion」とも云ふべき運動が起つて、それが始めの中は周囲の聲音の中に消されてゐるけれども、段々とその運動は熱情的となり力附いて行つて、雲を得たやうに、漁夫の乗り込めた船が波を切り波を切り、段々と早くなる一定のテンポを取つて沖に乗り出して行く様は、力強い樂手の手で思ひ存分大膽に奏でられる「music」の日々を思ひ出させずには置かぬだらう。凡てのものの緊張した其處には、いつでも音楽が生れるものと見える。

船はもう一個の敏活な生き物だ。船縁からは百足蟲のやうに船の足を出し、船からけ船のやうに船の尾を出して、あの物悲しい北國特有な漁夫の懸聲に勵まされながら、眞暗に襲ひかゝる波のしぶきを凌ぎ分けて、沖へ沖へと岸を遠ざかつて行く。海岸に一團りになつて船を見送る女達の群れはもう命のない黒い石ころのやうにしか見えない。漁夫達は船を滑しながら、帆綱を整へながら、浸水を汲み出しながら、

ふ信號がかゝつたので、今までも氣違ひながら仕事を續けてゐた漁船は、打ち込み打ち込む波濤と戦ひながら配繩をたくし上げにかゝつたけれども、吹き始めた暴風は一秒毎に募るばかりで、船頭は已むなく配繩を切つて捨てさせなければならなくなつた。

「又はあ、錢こ海さ捨ててだ」

と君の父上は心から歎息してつぶやきながら君に命じて配繩を切つてしまつた。

海の上は唯一狂ひ暴れる風と雪と波ばかりだ。縦横に吹きまく風が、思ひのまゝに海をひつぱたくので、つるし上げられるやうに高まつた三角波が互に競つて取つ組み合ふと、取つ組み合つただけの波は忽ち眞白な泡の山に變じて、その嶺が風にちぎられながら、すさまじい勢ひで目あてもなく倒れかゝる。眼も向けられないやうな濃い雪の降れば、波を追つたり波から通れたり、宛ら風の怒りを挑む小悪魔のやうに、面憎く舞ひながら右往左往に飛びはねる。吹き落して來た雲のちぎれは、大きな霧のかたまりになつて、海とすれ／＼に波の上を矢よりも早く飛び過ぎて行く。

雪と浸水とで糊よりも滑る船板の上を君は這ふやうにして船の方へにじり寄り、左の手に友

綱の鐵環をいつかりと握つて腰を据ゑながら、右手に鐵石をかまへて、大聲で船の進路を後ろに傳へる。二人の漁火は大竿を風上になつた舷から二本突き出して、動かないやうに結びつける。船の顛覆を少しなりとも防がう爲めだ。

君の兄上は帆綱を握つて、舵座にゐる父上の合圖通りに帆の上げ下げを誤るまいと一心になつてゐる。而してその間にもいつきりなしに打ち込む浸水を急がしく汲んで、舷から捨ててゐる。命懸けに呼びかかはす互々の聲は妙に上ずつて、風に半分がた消されながら、それでも五人の耳には物凄くも心強くも響いて來る。

「おも艦つ」

「右にかはすだつてえば」

「右だ、右だぞつ」

「帆綱をしめろやつ」

「友船は見えねえかよう。ゐたらく、つけやーい」

何う吹かうかと躊躇つてゐたやうな疾風がやがてしつかり方向を定めると、是れまで唯一あてもなく立ち騒いでゐたらしく見える三角波は、段々と丘陵のやうな糾濤に變つて行つた。言葉通りに水平に吹雪く雪の中を、後ろの方から、見上げるやうな大きな水の堆積が、想像も及ば

ない早さでひた押しに押しに來る。

「來たぞーつ」

緊張し切つた五人の心は父更に恐ろしい緊張を加へた。眩しい程早かつた船足が急によんで、後ろに吸ひ寄せられて、艦が薄氣味悪く持ち上つて、船中に置かれた品物がごとくと音をたてて前にのめり、人々も何かに取りついて腰のすわりを定めなほさなければならなくなつた瞬間に、船はひと煽り煽つて、物凄い不動から、全落の底までもと波じい勢で波の背を滑り下つた。同時に耳に餘る大きな音を立てて、糾濤は屏風倒しに倒れかゝる。湧きかへるやうな泡の混亂の中に船を採まねながら行手をみると、一旦壊れた波はすぐ父物凄い丘陵に立ちかへつて、眼の前の空を高くしきりながら、見る／＼悪夢のやうに遠ざかつて行く。

ほとと安堵の息氣をつく隙も與へず、後ろを見れば父糾濤だ。水の山だ。その時、

「危ねえ」

「ばきりつ」

と云ふけた／＼ましい聲を同時に君に聞いた。而して同時に野獸の敏感さを以て身構へたが、後ろを振り向いた。根元から折れて横ばしに倒れかゝる帆柱と、急に命を失つたやうに鐵に

凍りかゝつた油のやうな重さで、物凄く印度藍の底の方に、雲間を漏れる日光で鈍く光る配細の餌を呑み込んで行く。

今まで花のやうな模様を描いて、海面の處々に日光を惹んでゐた空が、急にさつと薄曇ると、何處からともなく時雨のやうに餌が降つて来て海面を泡立たす。船と船とは、見る／＼薄い糊のやうな青白い膜に距てられる。君の周囲には小さな白い粒が乾き切つた音を立てて、慌だしく船板を打つ。君は小賢しい邪魔者から毛糸の襟巻きで包んだ顔そをむけながら、配繩を丹念に下ろし續ける。

すつと空が明るくなる。雲は何處かへ行つてしまつた。而して眞青な海面に、漁船は陰になり日向になり、堅い輪郭を描いて、波にもまれながら淋しく漂つてゐる。

機嫌ひな天氣は、一日の中に幾度となくかうした顔のしがめ方をする。而して日が西に廻るに従つてこの不機嫌は募つて行くばかりだ。

寒暑をかまつてゐられない漁夫達も吹きざらしの寒さにはひるまずにはゐられない。配繩を投げ終ると、身ぶるひしながら五人の男は、舵座におこされた焔爐の火の圍りに暮ひ寄つて、大きなお椀から握り飯を鷺掴みに掴み出して、

食ふ。港を出る時には一とかたまりになつてゐた友船も、今は木の葉のやうに小さく互々からかけ隔たつて、心細い弱々しさうな姿を、涙もなく露鎖に續く海原のこゝかしこに漂はせてゐる。三里の餘も離れた陸地は、高い山々の半腹から上だけを水の上に見せて、降り積んだ雪が、日を受けた所は銀のやうに、雲の陰になつた所は鉛のやうに、妙に険しい輪郭を描いてゐる。

漁夫達は口を食物で賑張らせながら、昨日の漁の有様や、今日の豫想やらをいかにも地味な口調で語り合つてゐる。さういふ時に君だけは自分が彼等の間に不思議な異邦人である事に氣付く。同じ繩を操り、同じ帆綱をあつかひながら、何んといふ悲しい心の距たりだらう。押し潰してしまはうと幾度試みても、すぐ後からまくしかゝつて来る發砲に對する軌道をどうする事も出来なかつた。

とはいへ、飛行機の將校にすらならうといふ人の少い世の中に、生きては人の冒險心を、死んでは萬人にその英雄的な最後を惜しみ仰がれ、潰滅まで生活の保障を與へられる飛行將校にすらならうといふ人の少い世の中に、荒れても咄れても毎日々々、一命を投げてかゝつて、

緊張し切つた終日の勞働に、玉の炊き炊き上げたやうな飯を食つて一生を過ごして行かねばならぬ漁夫の生活、それには聊かも遊戯的な餘裕がないだけに、命とかがへの眞實な仕事であるだけに、言葉には現はし得ない程の尊さと嚴肅さを持つてゐる。況してや彼等がこの日覺ましい健氣な生活を、已むを得ぬ苦しい、然し當然な正しい生活として、誇りもなく、餓餓もなく、不平もなく、素直に受け取り、暢にかゝつた晩牛のやうな柔順な忍耐と覺悟とを以て、勇ましく迎へ入れてゐる、その姿を見ると、君は人間の運命の果敢なさとしに同時に胸をしめ上げられる。

こんな事を思ふにつけて、君の心の眼にはまざ／＼と難破船の痛ましい光景が浮び出る。君は矢張り舵座に坐つて他の漁夫と同様に握り飯を食つてはゐるが何時の間にか人々の會話からは遠のいて、物思はしげに黙りこくつてしまふ。而して果てしもなく回想の迷路を邁つて歩く。

六

それは或る年の三月に君が遭遇した苦がい経験の一つだ。模範船からすぐ引き上げると云

の時船の横面に大きな波が浴びせこんで来たので、片方だけに人の重りの加はつた船はくると裏返つた。舷までひた／＼と水に埋もれながらも兎に角船は眞向きになつて水の面の浮び出た。船が裏返る拍子に五人は五人ながら、すつぽりと水のやうな海の中にもぐり込みながら、急に勢ひづいて船の上に飛び上らうとした。然ししいこたま着込んだ衣服は思ふさま濡れ透つてゐて、動ともすれば人々を波の中に吸ひ込まつとした。それが一方の舷に取りつて力を籠めれば又顛覆するにきまつてゐる。生死の瀬戸際にはまり込んでゐる人々の本能は恐ろしい程敏捷な働きをする。五人の中の二人は咄嗟に反對の舷に廻つた。而して互に顔を見合せながら、一度にやつと聲をかけ合せて半身を舷に乗り上げた。足の方を船底に吸ひ寄せられながらも、半身を水から救ひ出した人々の顔に現はれた何んとも云へない緊張した表情——それを君は忘れる事が出来ない。次ぎの瞬間にはわつと聲をあげて男泣きに泣くか、それとも我れを忘れて狂ふやうに笑ふか、どちらかをしきうな表情——それを君は忘れる事が出来ない。

凡てからした懸命な努力は、降りしきる雪と、荒れ狂ふ水と、海面をこすつて飛ぶ雲とで表は

される自然の憤怒の中で行はれたのだ。怒つた自然の前には、人間は塵一とひらにも及ばない。人間などと云ふ存在は全く無視されてゐる。それにも係はらず君達は頑固に自分達の存在を主張した。雪も風も波も君達を考へにいらてはゐないのに、君達は強ひてもそれらに君達を考へさせようとした。

舷を乗り越越して奔馬のやうな波頭がつき／＼にすり抜けて行く、それに腰まで浸しながら、君達は船の中に取り残された得物を何んでも構はず取り上げて、それを働かしながら、死から逃るべき一路を切り開かうとした。或る者は船を拾ひあてた。或るものは船板を、或るものは水桶杓を、或るものは長いたわしの杓を、何ものにも換へたい武器のやうにしつかり握つてゐた。而して舷から身を乗り出して、子供がするやうに、水を漕いだり、浸水をかき出したりした。

吹き落ちる気配も見えない風は、果てもなく海上を吹きまわくる。眼に見える限りは唯々波頭ばかりだ。犬のやうな敏捷さで方角を嗅ぎ慣れてゐる漁夫達も、今は東西の定めやうがない。東西南北は一つの針の中で振りまぜたやうに渾沌としてしまつた。

薄い暗黒。天からとなく地からとなく湧き起る大叫喚。外には何んにもない。「死にはしないぞ——」そんなはめになつてからも、君の心の底は妙に落ち着いて、薄氣味悪くこの一事を思ひつゝけた。

君の傍には一人の若い漁夫がゐたが、その右の額縁の邊から生々しい色の血が幾條にもなつて流れてゐた。それだけがはつきり君の眼に映つた。「死にはしないぞ——」それを見るにつけても君はまたしみ／＼とさう思つた。

かう云ふ必死な努力が何分続いたのか、何時間續いたのか、時間といふものすつかり無くなつてしまつたこの世界では少しも分らない。然しながら兎に角君が何物も納れ得ない心の中に、疲労といふ感じを覺え出して、これは困つた事になつたと思つた頃だつた、突然一人の漁夫が意味の分らない言葉を大きな聲で叫んだのは、今までも五人が五人ながら始終何か互に叫び續けてゐたのだつたが、この叫び聲は不思議に際立つて皆んなの耳に響いた。

残る四人は思はず云ひ合はせたやうにその漁夫の方を向いて、その漁夫が眼をつけてゐる方へ視線を辿つて行つた。

船！……船！

なつてたゝまる帆布と、その蔭から、飛び出し
さうに眼をむいて、大きく口を開けた君の兄上
の顔とが映つた。

君は咄嗟に身をかはして、頭から打つてかゝ
らうとする帆布から身をかはつた。人々は騒ぎ
立つて櫓を構へようとしめいた。けれども無
二無三な船足の動搖には打ち勝てなかつた。帆
の自由である限りは金輪際船を顛覆させないだ
けの自信を持った人達も、帆を奪ひ取られては
途方に暮れないではゐられなかつた。船足のと
まつた船ではもう舵も利かない。船は波の動搖
のまに／＼勝手放題に荒れ狂つた。

第一の紆濤、第二の紆濤、第三の紆濤には天
運が船を顛覆から庇つてくれた。しかし特別に
大きな第四の紆濤を見た時、船中の人々は観念
しなければならなかつた。

雪の爲めに薄くばかされた眞黒な大きな山、
その頂からは、火が燃え立つやうに、ちらり
ちらり白い波頭が立つては消え、消えては立ち
して、瞬間毎に高さを増して行つた。吹き荒れ
る風すらがその爲めに遮りとめられて、船の周
圍には氣味の悪い静かさが満ち擴がった。それ
を見るにつけても波の反對の側をひた押しに押
す風の激しき強さが思ひやられた。船を波の方

へ向ける事も得しないで、力なく漂ふ船の前
まで来ると、波の山は、いきなり、獲物に襲ひ
かゝる猛獸のやうに思ひきり存延びをした。と
思ふと、波頭は吹きつける風に反りを打つて軽
と崩れこんだ。

はつと思つたその時遅く、君等はもう眞白な
泡に身體を引きちぎられる程もまれながら、船
底を上にして顛覆した船體にしがみ附かうと藻
掻いてゐた。見ると君の眼の届く所には、君の
兄上が頭からずぶ濡れになつて、ぬる／＼と手
がかりのない船に手をあてがつては滑り、手
をあてがつては滑りしてゐた。君は大聲を揚げ
て何かぶつた。兄上も大聲を揚げて何かぶつて
るらしかつた。然しお互に大きく口を開くのが
見えるだけで、聲は少しも聞こえて来ない。
割合に小さな波が後から／＼押し寄せて來
て、船を捲り上げた押し押し押しした。その
度毎に君達は船との縁を絶たれて、水の中に漂
はねばならなかつた。而して君は、着込んだ厚
衣の芯まで水が透つて鐵のやうに重いにもか
かはらず、一心不乱に動かす手足と同じ程の忙
はしきで、眼と鼻の近さに押し逼つた死から
遁れ出る道を考へた。心の上澄みは妙におどお
どとあわててゐる割合に、心の底は不思議に氣

味悪く落ちついてゐた。それは君自身にすら物
凄いくらいだつた。空と云ひ、海と云ひ、船と云ひ、
君の思索と云ひ、一つとして眼あてなく動搖し
ないものはない中に、君の心の底だけが惡落ち
付きに落ち付いて、「死にはしないぞ」とちやん
と決め込んでゐるのが却つて薄氣味惡かつた。

それは「死ぬのがいやだ」「生きてゐたい」「生き
る餘席の有る限りは何うあつても生きなければ
ならぬ」「死にはしないぞ」といふ本能の論理的
結論であつたのだ。この恐ろしい盲目な生の事
實が、而してその結論だけが、眼を見据ゑたやう
に、君の心の底に落ち付き拂つてゐたのだつた。

君はこの物凄く無氣味な衝動に驅り立てられ
ながら、水船なりに顛覆した船を裏返す努力
に力を盡した。残る四人の心も君と變りはな
いと見えて、險しい困苦と戦ひながら、四人と
も君のゐる船の方へ集まつて來た。而して申
し合はしたやうに、一緒に力を合せて、船の胴
腹に這ひ上るやうにしたので、船は一方にかし
ぎ始めた。

それ今と息だぞつ
君の父上が滑り切つた生命を聲にしたやうに叫
んだ。一同は又懸命な力を籠めた。
折りよく――全く折りよく、大運だ――そ

かつた。

やがて行手の波の上に、ばいやりと雷電、峠の突角が現はれ出した。山脚は海の中に、山頂は雲の中に、山腹は雪の中に採みに採まれながら、決して動かないものが始めて君達の前に現はれたのだ。それを見付けた時の漁夫達の心の勇み……魚が水に遇つたやうな、野獸が山に放たれたやうな、太陽が西を見付け出したやうなその喜び……船の中の人達は思はず足爪立たんばかりに總立ちになつた。人々の心までが總立ちになつた。

「峠が見えたぞ……北に取れや舵を……隠れ岩さ乗り上げんな……雪崩にも打たせんなよう……」

さう云ふ聲が、いん／＼に人々の口から喚かれた。それにしても船はひどく流されてゐたものだ。雷電峠から五里も離れた瀬にゐたものが、何時の間にかこんな處に來てゐるのだ。見る見る風と波とに押しやられて船は吸ひ付けられるやうに、吹雪の間から眞黒に天までそより立つ斷崖に近寄つて行くのを、漁夫達はさうはさせまいと、帆をたて直し、櫓を押し、横波を喰はせながら船を北へと向けて行つた。

陸地に近づくとは波はなほ怒る。鬨を風に靡

かして暴れる野馬のやうに、波頭は波の穂になり、波の穂は飛沫になり、飛沫はしぶきになり、しぶきは霧になり、霧はまた眞白い波になつて、息もつかせず後から後からと山裾に襲ひかゝつて行く。山裾の岩壁に打ちつけた波は、煮えくりかへつた熱湯をぶちつけたやうに、湯気のやうな白沫を五丈も六丈も高く飛ばして、反りを打ちながら海の中にどつと崩れ込む。

その猛烈な力を感じてか、斷崖の出鼻に降り積つて、徐々に斜面を這り下つて來てゐた積雪が、地面との縁から離れて、すさまじい地響と共に、何百丈の高さから一氣になだれ落ちる。巔を離れた時には一握りの銀末に過ぎない。

それが見る／＼大きさを増して、限星のやうに白い尾を長く引きながら、音も立てずに巖地に落して來る。あなやと思ふ間にそれは何十里にも互る水晶の大簾だ。ど、ど、どとどしーん……さあーつ……。廣い海面が眼の前で眞白な平野になる。山のやうな五百重の大波は忽ち逐ひ退けられて、連一つ立たない。どつとそこを日懸けて狂風が四方から吹き起る……その物すさまじさ。

君達の船は悪鬼に逐ひ迫られたやうにおびえながら、懸命に東北へと舵を取る。磁石のやう

な陸地の吸引力からやう／＼自由になる事の出來た船は、また揺れ動く波の山と戦はねばならぬ。

それでも岩内の港が波の間に隠れたり見えたりし始めると、漁夫達の力は急に五倍にも十倍にもなつた。今までの人数の二倍も乗つてゐるやうに船は動いた。岸から打ち上げる日標の烽火が、紫だつて暗黒な空の中でばつと躍ると、曇々として火花を散らしながら闇の中に消えて行く。それを日懸けて漁夫達は有る限りの船を駛つたまゝでひた漕ぎに漕いだ。その不思議な沈黙が、互に呼び交はす應たらしい叫び聲よりも却つて力強く人々の胸に響いた。

船が波の上に乗つた時には、波打際に集まつて何か騒ぎ立ててゐる群衆が見られるまゝになつた。やがて嵐の間にも大砲のやうな音が船まで聞こえて來た。と思ふと救助艇が空をかける蛇のやうに曲りくねりながら、船から二三段距つた水の中にぎぶりと落ちた。漁夫達はその方へ船を向けようとしめいた。第二の爆聲が聞こえた。繩は過たず船に届いた。

二三人の漁夫がよろけ轉びながらその繩の方へ駆け寄つた。音は聞こえずに烽火の火花は闇を置いて怪

濃い吹雪の暮のあなたに、さだかには見えな
いが、波の背に乗つて四十五度位の角度に船首
を下に向けながら、帆を一ぱいに開いて、矢よ
りも早く走つて行く一般の如し！

それを見ると何が君の胸をどきんと下から
つき上げて來た。君は思はずなり泣きでもし
たいやうな心持になつた。何はさて措いても
君達はその船を日懸けて助けを求めながら近寄
つて行かねばならぬ筈だつた。餘の人達も君と
同様、確かに何物かを眼の前に認めたらしく、
奇怪な叫び聲を立てた漁夫が、眼を大きく開い
て見つめてゐる邊を等しく見つめてゐた。その
癖一人として自分等の船をそつちの方へ向けよ
うとしてゐるらしい者はなかつた。それを訝か
る君自身すら、心が唯々わく／＼と感傷的に
なりまざるばかりで、急いで働かすべき手は却
つて萎えてしまつてゐた。

白い帆を一ぱいに開いたその船は、依然とし
て船首を下に向けたまゝ、矢のやうに走つて行
く。降りしきる吹雪を隔てた事だから、乗組み
の人の数もはつきりとは見えないうちに、水の上に
割合に高く現はれてゐる船の胴も、木の色とい
ふよりは白堊のやうな生白さに見えてゐた。而
して不思議な事には、波の腹に乗つても波の背

に乗つても、軸は依然として下に向いたまゝで
ある。風の強弱に應じて帆を上げ下げする様
子もない。いつまでも眼の前に見えながら、四
十五度位に船首を下向きにしたまゝ、矢よりも
早く走つて行く。

ぎよつとして氣が付くと、その船はいつの間
にか水から離れてゐた。波頭から一段も上と思
はれる邊を船は傾いだまゝ、矢よりも早く走つて
ゐる。君の頭はかゝんとして疎み上つてしまつ
た。同時に船は段々大きくぼやけて行つた。何
時の間にかその胴體は消えてなくなつて、唯々
眞白い帆だけが矢よりも早く動いて行くのが見
やられるばかりだ。と思ふ間もなくその白い大
きな帆さへが、降りしきる雪の中に薄れて行つ
て、やがてはかき消すやうに見えなくなつてし
まつた。

怒濤。白沫。さつ／＼と降りしきる雪。眼を
かすめて飛び交はす雲の霧。自然の大叫喚……
その眞中心に頼りなく揉みさいなまれる君達の
小さな水船……やつぱりそれだけだつた。

生死の間にさまよつて、疲れながらも緊張
し切つた神經に起る幻覺だつたのだと氣が
付くと、君は急に一種の薄氣味悪さを感じて、
力を一度にもぎ取られるやうに思つた。

先き程奇怪な叫び聲を立てたその若い漁夫
は、やがて眠るやうにおとなしく氣を失つて、
ひよろ／＼とよめく／＼と見る間に、崩れるやう
に胴の間にぶつ付けてしまつた。

漁夫達は何か處でもさしたやうに思はず極度
の不安を眼に現はして互に顔を見合せた。

一死にはしないぞ！

不思議な事にはそのぶつ倒れた男を見るにつ
けて、又漁夫達の不安げな容顔を見るにつけて、
君は懲りずまに薄氣味悪くさう思ひつづけた
君達がほんたうに一般の友船と出帆はしたま
では、どれ程の時間が経つてゐたらう、然し
兎に角運命は君達には無関心ではなかつたと見
える。急に十倍も力を回復したやうに見えた
漁夫達が、必死になつて君達の船とその船とを
繋ぎ合はせ、半分が凍つてしまつた帆を形ば
かりに張り上げて、風の追ふまゝに船を走りせ
た時には、何んとも云へない凄絶な感謝の心が、
抑へても／＼むら／＼と胸の先きにこみ上げて
來た。

着く處に着いてから思ひ存分の手當をする
から暫らく我慢してくれと心の中に詫ひるやう
に云ひながら、君は若い漁夫を牽倒したまゝ、胴
の間の片隅に抱きよせて、すぐ自分の仕事にか

な腰を上げて、そろ／＼その人に近寄つて来る。ガラ／＼蛇に見こまれた小鳥のやうに、その人は逃げも得ないですくんでしまふ。次ぎの瞬間に、その人はもう地の上にはゐない。人の生きて行く姿はそんな風にも思ひなされる。實に果敢ないとも何んとも云ひやうがない。その中にも漁夫の生活の激しさは格別だ。彼等は死に對して喧嘩をしかけんばかりの切羽つまつた心持で出懸けて行く。陸の上では何んとも云つても偽善も綱絛も或る程度までは通用する。ある意味では必要であるときへも考へられる。海の上ではそんな事は樂の足しにしたくもない。眞裸な實力と天運ばかりが凡ての漁夫の頼みどころだ。その生活はほんとに悲壯だ。彼等がそれを意識せず、生きると思ふ事は凡てかうしたものだと思つて、疑ひもせず、不平も云はず、自分の爲めに、自分の養はなければならぬ親や妻や子の爲めに、毎日々々板子一枚の下は地獄のやうな境界に身を放し出して、せつせと骨身を惜しまず働く姿はほんたうに悲壯だ。而して慘めだ。何んだつて人間と云ふものはこんながない苦勞をして生きて行かなければならぬのだらう。

世の中には、殊に君が少年時代を過ごした都

會といふ所には、毎日々々安逸な生を食傷する程食つて一生夢のやうに送つてゐる人もある。都會とは云ふまい。段々とさびれて行くこの岩内の小さな町にも、二三百萬圓の富を祖先から受け嗣いで、小樽には立派な別宅を構へてそこに妾を住まはせ、自分は東京の或る高等な學校を兎も角も卒業して、話でもせればそんなに愚鈍にも見えない癖に、一年中是れと云つてする仕事もなく、退屈をまぎらす爲めの行樂に身を任せて、それでも使ひ切れない精力の餘剰を、富者の淫澤の一つである癡癡に漏らしてゐるのがある。君はその男をよく知つてゐる。小學校時代には教室まで一つだったのだ。それが十年かそこらの年月の間に、二人の生活は恐ろしく懸け隔たつてしまつたのだ。君はそんな人達を一度でも羨ましいと思つた事はなない。その人達の生活の内容の空しさを想像する十分の力を君は持つてゐる。而して彼等の導くやうな生活をするのは道理があると合點がゆく。金があつて才能が平凡だったら勢ひあゝして僅かに生の倦怠から近れる外はあるまいと密かに同情さへされぬではない。その人達が生に飽満して暮すのはそれでいい、然し君の周圍にゐる人達が何故あんな恐ろしい生死の境の中

から生きる事を億億しなければならぬ運命にあるのだらう。何故彼等はそんな境遇へ死ぬ瞬間まで一分の隙を見せずに身構へてゐなければならぬやうな境遇にゐながら、何故生きようとしなければならぬのだらう。これは君に不思議な謎のやうな心地を起させる。ほんたうに生は死よりも不思議だ。

その人達は他人眼にはどうしても不幸な人達と云はなければならぬ。然し君自身の不幸に比べて見ると、遙かに幸福だと君は思ひ入るのだ。彼等には兎に角さう云ふ生活をする事がそのまゝ生きる事なのだ。彼等は綺麗さっぱりと諦めをつけて、さういふ生活の中に頭からはまり込んでゐる。少しも疑つてはゐない。それなのに君は絶えずいら／＼して、目前の生活を疑ひ、それに安住する事は出来ないてゐる。君は喜んで君の両親の爲めに、君の家の苦しい生活の爲めに、君の嚴重な力強い肉體と精力とを提供してゐる。君の父上の假初めの風邪が癒つて暫くぶりで一緒に漁に出て、夕方になつて家に歸つて來てから、一家が静まじくちやぶ臺のまはりを圍んで暗い五燭の電燈の下で箸を取り上げる時、父上が珍らしく木彫のやうな固い顔に微笑を湛へて、

火のやうに遙かの空にぱつと咲いてはすぐ散つて行く。

船は繩に引かれてぐんぐん陸の方へ近寄つて行く。水底が浅くなつた爲めに無二無三に亂れ立ち騒ぐ波濤の中を、互にいつかりしがみ合つた二艘の船は、半分がた水の中を滑りながら、半死の有様で進んで行つた。

君は始めて氣が付いたやうに年老いた君の父上の方を振り返つて見た。父上は膝から下を水に浸して艀座に坐つたまゝ、ちつと君を見詰めてゐた。今まで絶えず君と君の兄上とを見詰めてゐたのだ。さう思ふと君は何んとも云へない骨肉の愛着にきびしく捕へられてしまつた。君の眼には不覺にも熱い涙が浮んで來た。君の父上はそれを見た。

「あなたが助かつてよござんした」

「お前が助かつてよかつた」

兩人の眼は咄嗟の間にも互に親しみを籠めてかう云ひ合つた。而してこの嬉しい言葉を語る眼から互々の眼は離れようとしなかつた。さうしたまゝで暫らく過ぎた。

君は満足し切つて又働きた始めた。もう眼の前には岩内の町が、汚く貧しいながらに、君に取つてはなつかしい岩内の町が、新らしく生れ

出たまゝのやうに立ち列なつてゐた。水難救濟會の制服を着た人達が、右往左往に駆け廻る有様もまぎ／＼と眼に映つた。

何んとも云へない勇ましい新らしい力——潮のやうに、腹のどん底からむら／＼と湧き出して來る新らしい力を感じて、君は「さあ來い」と云はんばかりに、船をひしげる程押し捌んだ。而して矢聲をかけながら消ぎ始めた。涙が後から／＼と君の頬を傳つて流れた。

岬のやうに今まで黙つてゐた外の漁夫達の口からも、矢庭に勇ましい懸りが溢れて出て君の聲に應じた。船は梭のやうに波を切り破つて激しく傾いた。

岸の人達が呼びおこす聲が君達の耳にも這入るまでになつた。と思ふと君は段々夢の中に引き込まれるやうなぼんやりした感じに襲はれて來た。

君はもう一度君の父上の方を見た。父上は艀座に坐つてゐる。然しその姿は前のやうに君に何等の通つた感じを牽き起させなかつた。

やがて船底にじやり／＼と砂の觸れる音が傳はつた。船は滯りなく君が生れ君が育てられたその土の上に引き上げられた。

「死にはしなかつたぞ」

と君は思つた。同時に君の眼の前は見／＼と眞暗になつた。……君はその後を知らない。

七

君は漁夫達と膝をならべて、同じ振り袖を口に運びながら、心だけはまるで異邦人のやうに距たつてこんなことを想ひ出す。何んと云ふ眞剣な而して險しい漁夫の生活だらう。人間と云ふものは、生きる爲めには、厭でも死の御近くまで行かなければならぬのだ。謂はば捨て身になつて、こつちから死に近づいて、死の油斷を見すまして、かつばらひのやうに生の一片をひつたくつて逃げて來なければならぬのだ。死は知らんふりをしてそれを見やつてゐる。人間は奪ひ取つて來た生をたしなみながらし、いぶるけれども、程なくその生はまた盡きて行く。さうすると又死の眼の色を見すまして、死の方々に偷み足で近寄つて行く。ある者は死が餘り無頓着さうに見えるので、つい氣を許して少し大膽に高慢に振舞はうとする。と鬼一口だ。もうその人は地の上にはゐない。ある者は年と共に意氣地がなくなつて行つて、死の姿がいよいよ恐ろしく眼に映り始める。而してそれに近寄る冒險を躊躇する。さうすると死はやをら物憂け

での運命から云つても、俺れは漁夫で一生を終へるのが相當してゐるらしい。Kもあの氣むづかしい父の下で調教師で一生を送る決心を悲しくもしてしまつたらしい。俺れから見るとKこそは立派な文學者になれさうな男けれども、Kは誇張なく自分の運命を諦めてゐる。悲しくも諦めてゐる。待てよ、悲しいと云ふのはほんたうはKの事ではない。さう思つてゐる俺れ自身の事だ。俺れはほんたうに悲しい男だ。親父にも濟まない。兄や妹にも濟まない。この一生をどんな風に過ごしたら、俺れはほんたうに俺れらしい生き方が出来るのだらう」

そこに居ならんだ漁夫達の間に、どつしりと男らしい風流な胡坐を組みながら 君は彼等とは全く異邦の人のやうな淋しい心持になつてこんなことを思ひつづける。

やがて漁夫達はそこらを片付けてやを立ち上ると、胸の間に降り積んだ雪を滴みで、手の平で擦り合はせて、指に粘りついた飯粒を落した。而して配繩の引き上げにかゝつた。

西に春き出すと日脚はどん／＼歩みを早める。おまけに上の方からたるみなく吹き落して来る風に、海面は妙に弾力を持った風ぎ方をし、その上を霞まじりの粉雪がさ／＼と来ては

過ぎ、過ぎては来る。君達は手袋を脱ぎ去つた手を真赤にしなげら、氷點以下の水でぐ／＼しより濡れた配繩をその一端からたぐり上げ始める。三間四間置き位に、眼の下二尺もあるやうな鰐がびち／＼跳ねながら引き上げられて来る。

三十町に餘る位な配繩を全然たくしこんでしまふ頃には、海の上は少し墨汁を加へた牛乳のやうにぼんやり寒れ残つて、そこに胸めやられる漁船の或るものは帆を張り上げて港を口指してゐたり、或るものは淋しい掛け聲をなほ海の上に響かせて、忙はしく配繩を上げてゐるものもある。夕暮れに海上に點々と浮んだ小船を見互すのは悲しいものだ。そこには人間の生活がその果敢ない末梢を淋しくさらしてゐるのだ。

君達の船は、海風が颯々として陸地に變らない中にと帆を立て、鰐を押して陸地を目懸ける。晴れては曇る時雨の間に、岩内の後ろに響える山々が、高いのから先きに、水平線上に現はれ出る。船歌を唄ひつれながら、漁夫達は見慣れた山々の頂きを繋ぎ合せて、港のありかをそれと臆ろげながら見定める。そこには妻や母や娘等が、寒い濱風に吹きさらされながら、取り／＼に汀に立つて君達の歸りを待ちわびて

ゐるのだ。

是れも牛乳のやうな色の寒々しい霧に包まれた雷電峠の突角がいかつく大きく見えて出すと、防波堤の突先きにある燈臺の灯が明滅して船路を照らし始める。毎日の事ではあるけれども、それを見ると、君と云はず人々の胸の中には、今日も先づ命は無事だつたといふ底深い喜びがひとりでに湧き出して来て、陸に對する不思議なノスタルヂヤが感ぜられる。漁夫達の船歌は一段と勇ましくなつて、君の父上は船の艦に漁獲を知らせる旗を揚げる。その旗がばた／＼と風に煽られて音を立てる——その音がいゝ。

段々間近になつた岩内の町は、黄色い街燈の灯の外には、まだ燈火もとまらずに黒く淋しく横たはつてゐる。雪のむら消えた砂濱には、今朝と同様に女達が彼處此處にいくつかの固い群れになつて、石ころのやうにこ／＼と立つてゐる。白波がかすかな潮の香と音をたてて、その足許に行つては消え、行つては消えるのが見え渡る。

帆が卸された。船は海岸近くの波に激しく動搖しながら、鰐を海岸の方に向けかへて段々と汀に近寄つて行く。漁産物會社の印綽子を滑たり、犬の皮か何かを裏につけた外套を深々と

「今夜はあおまんが甘えぞ」

と云つて、飯茶碗を一寸押しいたゞくやうに眼八分に持ち上げるのを見る時などは、君は何んと云つても心から幸福を感じずにはゐられない。君は日前の生活を決して悔やんでゐる譯ではないのだ。それにも係はらず、君は何かにつけてすぐ暗い心になつてしまふ。

「畫が描きたい」

君は寝ても起きても祈りのやうにこの一つの望みを胸の奥深く大事にかき抱いてゐるのだ。その望みをふり捨てて仕舞へる事なら世の中は簡單なのだ。

戀——互に思ひ合つた戀と云つてもこれ程の執着はあり得まいと君は自身の心を憐れみ悲しみながらつくつくと思ふ事がある。君の厚い胸の奥からは深い溜息が漏れる。

雨の日などに土間に坐りこんで、兄上や妹さんなどと一緒に、配繩の繕ひをしたりしてゐると、どうかした拍子に皆んなが仕事に夢中になつて、暗まじく交はしてゐた世間話すら途絶えさして、黙りこんで手先ばかりを忙はしく働かすやうな時がある。かういふ瞬間に、君は我れにもなく手を休めて、茫然と夢でも見るやうに、君の見て置いた山の景色を思ひ出してゐる事が

ある。この山とあの山との距たりの感じは、界の線をかう云ふ曲線で力強く描きさへすれば、屹度いゝに違ひない、そんな事を一心に思ひ込んでしまふ。而して錢を持つた手の先きで、自然に想像した曲線を膝の上に幾度も描いては消し、描いては消ししてゐる。

又ある時は沖に出て、配繩をたぐり上げる大仕事な忙はしい時に、君は板子の上に坐つて、二本ならべて立てられたビール瓶の間から繩をたぐり込んで、釣りあげられた明鯛が瓶にせかれる爲めに、針の縁を離れて胴の間にびつ／＼跳ねながら落ちて行くのをぞつと見やつてゐる。而してクリムソンレーキを水に薄く落かしたよりもつと鮮明な光を持った鯛の目に吸ひつけられて、思はずぼんやりと手の働きをやめてしまふ。

これらの場合は、つと我れに返つた瞬間ほど君を惨めにするものはない。居睡りしたのを見付けられでもしたやうに、君はきよんと恥かしさうにあたりを見廻して見る。ある時は兄上や妹さんが、暗まつて行く夕方の光に、なほ氣ぜはしく眼を細によせて、せつせとほつれを解いたり、切れ目をつないだりしてゐる。ある時は漁夫達が、寒さに手を海老のやうに赤くへし

まげながら、息せき切つて配繩をたくし上げてゐる。君は子供のやうに思はず耳許まで赤面する。

「何んといふだらしない二重生活だ。俺れは一體俺れに與へられた運命の生活に男らしく服従する覺悟でゐるぢやないか。それなのにまだ小つぽけな才能に未練を残して、柄にもない野心を捨てかねゐると見える。俺れはどつちの生活にも眞剣にはなれないのだ。俺れの書に對する熱心だからさふと、書かきになるためには十分過ぎる程なのだ、それなのに才能があるかどうかと云ふ事になると判斷のしやうがなくなる。勿論俺れに書の描き方を教へてくれた人もなければ、俺れの書を見してくれる人もない。岩内の町でつた一人の話相手のKは、俺れの書を見る度毎に感心してくる。而してどんな苦しみを経ても書かきになれと勧めてくれる。然しKは第一俺れの友達だし、第二に書が俺れ以上に判るとは思はれぬ。Kの言葉は何時でも俺れを勵まし鞭つてくれる。然し俺れは何時でもその後ろに目惚れさせられてゐるのではないかといふ疑ひを持たずにはゐない。何うすればこの二重生活を突き抜ける事が出来るのだらう。生れか、死んでも、今ま

吹きちぎられた屋根板が、いつまでもそのまゝで雨の漏れるに任せた所も尠くない。眼鼻立ちの揃つた年頃の娘が、嫁入つたといふ噂もなく姿を消してしまふ家もあつた。立派に家框が立ち直つたと思ふとその家は代が替つたりしてゐた。そろ／＼と地の中に引きこまれて行くやうな薄氣味悪い零落の兆候が町全體に何處となく漂つてゐるのだ。

人々は暗々裡にそれに脅かされてゐる。何時どんな事がまゝし上るかも知れない——さういふ不安は絶えず君達の心を重苦しく押しつけた。家から火事を出すとか、家から出さないまでも類焼の災難に遇ふとか、持船が沈んでしまふとか、働きの盛りの兄上が死病に取りつかれるとか、鯨の群衆がすつかりタづれるとか、ワク船が流されるとか、色々に想像されるこれ等の不幸の一つだけに喧嘩はしても、君の家に取つては足腰の立たない打撃となるのだ。疲れた五體を家路に運びながら、而して厩廐に建物の大きな割合に、それにふさはない暗い灯でそこと知られる柵葺きの君の生れた家屋を眼の前に見やりながら、君の心は運命に對する疑ひの爲めに妙におくれ勝ちになる。それでも関を跨ぐと土間の隅の處には火が

暖かい光を放つて水筒のやうに軟かく撓ひながら燃えてゐる。どこからどこまで眞黒に煤けながら、だだ／＼廣い圍爐裡の間はきちんと片付けてあつて、居心よきさうにしつらへてゐる。

嫂や妹の心づくしを君はすぐ感じてうれしく思ひながら、持つて歸つた漁具——寒さの爲めに凍り果てて、觸れ合へば石のやうに音を立てる——をそれ／＼の處に始末すると、是れもから／＼と音を立てる程凍り果てた仕事着を一枚々々脱いで、庵のあたりに懸けつらねて、普段着に着かへる。一日の寒氣に凍え切つた肉體はすぐ熱を吹き出して、顔などはほせ上る程ぼか／＼して来る。普段着の軽い暖かさ、一握の熱湯の味のよさ。

小氣味よい程した／＼か夕餉を食つた漁夫達

が、「親方さんお休み」と挨拶してぞろ／＼出て行つた後には、水入らずの家族五人が、圍爐裡の火に眞赤に顔を照らし合ひながらさし向ひになる。戸外ではさらさらと音を立てて霞まじりの雪が降りつづけてゐる。じ時といふのにもうその界限は夜更け同様だ。どこの家もしんとして赤子の泣く聲が時折り聞こえるばかりだ。唯、遠くの遊廓の方から

ら、朝寝の出来る人達が寄り集まつてゐるらしい酔狂のさゞめきだけが途切れ／＼に風に送られて傳はつて来る。

「俺らはあゝまるぞ」

僅かな晩酌に長間の疲勞を存分に發して、眼をとろんこにした君の父上が、まづ圍爐裡の側に床をとりして横になる。やがて兄上と嫂とが次ぎの部屋に退くと、圍爐裡の側には、君と君の妹だけが残るのだ。

時が靜かに淋しく、然し陸まじくじり／＼と過ぎて行く。

「寝づに——針の手をやめて、君の妹はおとなしく顔を上げながら君にぶふ。」

「先きに寝れ、いゝから」

胡坐の膝の上にスケッチ帖を擴げて、と見かう見してゐる君は、振り向きもせず、にぶつきらばうにさう答へる。

「朝に又眠むいとつてこづき起されべえに」につと片頬に笑みを湛へて妹は君に惡戯らし眼を向ける。

「何んの」

「何んのでねえよ、そんだもの見こつて何んのたしになるべえさ。皆んなやつて笑つとるで

羽織つたりした男達が、右往左往に走りまはるその邊を目がけて、君の兄上が手慣れたさばきできつと友綱を投げると、それがすぐ幾十人も男女の手で引つ張られる。船は頻りと上下する舳に波のしぶきを喰ひながら、どん／＼砂濱に近寄つて、やがて疲れ切つた魚のやうに黒く横たはつて動かなくなる。

漁夫達は船や舵や帆の始末を簡單にしてしまふと、舢を傳はつて陸に跳り上がる。海産物製造會社の人夫達は、漁夫達と入れ替つて、船の中に猿のやうに飛び込んで行く。而してまだ死に切らない鯨の尾をつかんで、礫のやうに砂の上に抛り出す。濱に待ち構へてゐる男達は、眼にもとまらない早業で数を數へながら、魚を畚の中にたゞき込む。漁夫達は吉例のやうに會社の數取人に對して何かと故障を云ひたててわめく。一日ひつそりかんとしてゐた濱も、この暫らくの間だけは、さすがに賑やかな氣分になる。景氣にまき込まれて、女達の或る者まで男と一緒にたつて喧嘩腰に物を云ひつゝのる。

然しこの華々しい賑はひも長い間ではない。命をなげ出さんばかりの險しい一日の勞働の結果は、僅か十數分の間で多愛もなく會社の人達に處分されてしまふのだ。君が君の妹を女

達の群れの中から見つけ出して、忙はしく眼を見交はし、言葉は交はす暇もなく、濱の上には亂暴に踏み荒らされた砂と、海藻と小魚とが砂まみれになつて残つてゐるばかりだ。而して會社の人夫達は後を見ずに父他の漁船の方へ走つて行く。

かうして岩内中の漁夫達が一生懸命に捕獲して來た魚は瞬く中にさらはれてしまつて、墨のやうに煙突から煙を吐く怪物のやうな會社の製造所へと運ばれて行く。

夕焼けもなく日は、とつぷりと暮れて、紫に、灯は光なくたゞ赤くばかり見える初夜になる。君達は今朝の通りに幾かたまりかの黒い影になつて、疲れ切つた五體を鈍々の家路に運んで行く。寒氣の爲めに五臟まで締めつけられたやうな君達は口をきくのさへ物憎くて出來ない。女達ははしやいだ調子で、その日の中に陸の上で起つた色々な出来事——色々な出来事と云つても、際立つて珍らしい事や面白い事は一つもない——を話し立てるのを、ぶつ／＼押し黙つたまゝで聞きながら歩く。然しそれが何んといふ、快さだらう。

然し君の家が近くなるにつれて妙に君の心を脅かし始めるものがある。それは近年引き續い

て君の家に起つた種々な不幸がさせる果だ。長病ひの後に良人に先立つた君の母上に始まつて、君の家族の周囲には妙に死といふものが執念くつき繼つてゐるやうに見えた。君の兄上の初生兒も取られてゐた。汗水が汗り固まつて出來たやうな銀行の貯金は、その銀行が不景氣のあふりを食つて破産した爲めに、水の泡になつてしまつた。命とかがへの漁場が、間違つた防波堤の設計の爲めに、全然役に立たなくなつたのは前にもぶつた通りだ。耐へ性のない人々の寄り集まりなら、身代が朽木のやうにがつくりと折れ倒れるのはありがちと云はなければならぬ。唯と君の家では父上と云ひ、兄上と云ひ、根性骨の強い正直な人達だつたので、凡ての激しい運命を真正面から受取つて、骨身を惜しまず飼いてゐたから、曲つたなりにも今日々々を事缺かずに過ごしてゐるのだ。然し君の家を襲つたやうな運命の壓迫はそこいら中に起つてゐた。軒を放つて住みなしてゐると、どこの家にもそれ相當な生計が立てられてゐるやうだけれども、一軒々々に立ち人つて見ると、この頃の岩内の町には鼻を酸くしなければならぬやうな事がそこいら中にましくしあがつてゐた。ある家は眼に立つて雲落してゐた。風に

た冬が老いる。——北風も、雪も、圍爐裡も、縮入れも、雪鞋も、等しく老いる。一片の雲のたゞまひにも、自然の目論見と豫言とを人一倍鋭敏に見て取る漁夫達の眼には、朝夕の空の模様が春めいて来た事をまざまざと思はせる。北西の風が東に廻るにつれて、單色に堅く凍りついてゐた雲が、蒸されるやうにもや／＼と崩れ出して、淡いながら暖かい色の晴雲に變つて行く。朝から風もなく晴れ渡つた午後などに波打際に出て見ると、稍々緑色を帯びた青空の遙か遠くの地平線高く、幟幕を貰一文字に張つたやうな雪雲の堆積に日が射して、萬遍なく諸色に輝いてゐる。何んと云ふ美妙な美しい色だ。冬はあすこまで遠退いて行つたのだ。さう思ふと、不幸を突き抜けて幸福に出遇つた人のみが感ずる、あの過去に對する寛大な思ひ出が、ゆるやかに濱に立つ人の胸に流れこむ。五箇月の長い嚴冬のやうに忍耐強く辛かしぬいた北人の心に、もう少しでひねくれた根性にさへなり兼ねた北人の心に、春の約束がほのぼのと恵み深く響き始める。

朝晩の凍み方は大して冬と變りはない。濡れた金物がべた／＼と糊のやうに指先に粘りつく事は珍らしくない。けれども日が高くなると、

さすがに何處か寒さにひびがける。濱邊は急に景氣づいて、納屋の中からは大釜や締め櫃が擔ぎ出され、ホック船やワク船をつとのやうに蔽うてゐた蓆が取りのけられ、旅鳥と一緒に集まつて来た漁夫達が、綫を織るやうに雪の解けた砂濱を行き違つて、目まぐるしい活氣を見せ始める。

鯉の漁獲が一先づ終つて、鯉の先驅もまだ群衆に來ない。海に出て働く人達はこの間に少しの間息をつく暇を見出すのだ。冬の間から一心に眠つてゐたこの暇に、君は或る日朝からふいと家を出る。勿論懷ろの中には手馴れたスケッチ帖と一本の鉛筆とを潛まして。

家を出ると往來には漁夫達や、女でめん、女労働者や、海産物の仲買ひと云つたやうな人々が賑やかに浮き／＼して行つたり來たりしてゐる。根が水やうに船になつて、その上を雪解の水が、一冬の塵埃に染まつて、泥炭地の汚き水のやうな色でど／＼と漂つてゐる。馬棧に材木のやうに大きな生々しい薪をじたま積み載せて、その悪路を引つづつて來た一人の年配な内儀さんは、君を認めると、引綱をゆるめて腰を延ばしながら、戯れた調子で大きな聲をかける。

「はれ兄さんもう濱さ行くだね」
「うんにや」
「濱で無え？ たら久山かい。魚を商賣にする人が暇さへあれば山さ突つばしるだから怪體だあてばさ。い／＼人でもゐるだんべさ。は、は、は、……うんすら始いてこすに、一押し手を貸すもんだよ」
「日はぐつたい事べ云ふと鯉達が群衆てはくねえぞ。をかした婆様よなあお前も一婆様だ？ 人聞きの悪い事べ云はねえもんだ。人様が笑ふでねえか」
「實際この内儀さんの喋いだ雜言には往來の人達が面白がつて笑つてゐる。君は當惑して、櫓の後ろに廻つて三四間ぐん／＼押してやらなければならなかつた。」
「そだ。そだ。兄さんい／＼力だ。濱まで押してくれたら已らお前に惚れてこすに」
「君は憫れて櫓から離れて逃げるやうに行手を急ぐ。面白がつて二人の間答を聞いてゐた群集は思はず一度にどつと笑ひ崩れる。人々のその高笑ひの聲にまじつて、内儀さんがまた誰れかに話しかける大聲がのびやかに聞こえて來る。
「春が來るのだ」
君は何につけても好意に満ちた心持でこの

ねえか、今の兄さんこと暇さへあれば見つたくもない書べえ描いて、何んするだべつて」

君は思はず顔を上げる。

「誰れが云つた」

「誰れつて……皆んな云つてるだよ」

「お前もか」

「私は云はねえ」

「さうだべさ。それならそれでいいでねえか。譯のわからねえ奴さ何んとも云はせておけばいいだ。これを見たか」

「見たよ。……莊園の裏から見た所だなあそれは。山は私氣に入つたども、雲が黒過ぎるでねえか」

「差出口はおけやい」

而して君達二人は顔を見合つて落けるやうに笑み交はす。寒さはしん／＼と脊骨まで徹つて、戸外には風の落ちた空を黙つて雪が降り積んでゐるらしい。

今度は君が發意する。

「おい寝べえ」

「兄さん先きに寝なよ」

「お前寝べし……明日又一番に起きるだから」

戸締りは俺らがするに――

二人はわざと意趣に争つてから、妹はと

う／＼先きに寝る事にする。君はなほ半時間ほ

どスケッチに見入つて居たが、寒さに堪へ切れ

なくなつてやがて身を起すと、蘆草履を引つか

けて土間に降り立ち、庭の火鉢を十分に見届

けて、漁舟の燕顔を一わたり注意し、入口の戸に

鉈前を卸し、雪の吹きこまぬやう窓の隙間を

いつかりと閉ぢ、而して又圍爐座に歸つて見

ると、ちよろ／＼と燃えかすれた根粗柴の火に

臘ろに照らされて、君の父上と妹とが糖縁の

二方に寝くるまつてゐるのが物淋しく眺められ

る。一日々々生命から遠ざかつて行く老人と、

若々しい生命の方に惱まされてゐるとさへ見え

る。妹との寝顔は、明滅する焔の前に幻のやう

な不思議な姿を描き出す。この老人の老先きを

どんな運命が待つてゐるのだらう。この處女の

行末をどんな運命が待つてゐるのだらう。未來

は凡て暗い。そこではどんな事でも起り得る。

君は二人の寝顔を見つめながらつく／＼とさう

思つた。さう思ふにつけて、その人達の行末に

ついては、素直な心で幸あれかしと祈る外はな

かつた。人の力と云ふものがこんな嚴肅な瞬

間には一番便りなく思はれる。

君はスケッチ帖を枕許に引きよせて、垢染み

た床の中にそのまゝもぐり込みながら、氷のや

うな蒲團のたさが體の温みで暖まるまで、ま

じ／＼と眼を見開いて、君の妹の寝顔を、憐

れみとも愛ともつかぬがまじ／＼心持で眺めつ

づける。それは君が妹に對して幼少の時から

何かの折に必ず抱くつかしい感情だつた。

それもやがて疲勞の夢が押し込む。

今岩内の町に日覺めてゐるものは、恐らく朝

寢坊の出来る當んだ倦け者と、遊藝亭りと大位

のものだらう。夜は寒く淋しく更けて行く。

八

君はこんな私の自分勝手な想を、私

が文學者である／＼ふ事から許してくれるだら

うか。私の想像は後から後からと引き續いて湧

いて来る。それが中つてゐるやうが中つてゐない

が、君は私がかうして筆取るその目論見に惡意

のない事だけは信じてくれるだらう。而して無

邪氣な微笑を以て、私の唯一の生命である空想

が勝手次第に育つて行くのを見守つてゐてくれ

るだらう。私はそれに頼つて更に書き續けて行

く。

鯉の漁期――それは北方に住む人の胸にの

みしみ／＼と感ぜられるなつかしい季節の一つ

だ。この季節になると長く地の土を踏みしめて

り返しがかつ／＼と顔を火照らせる程強く射して来る。君の顔は見る／＼雪焼けがして眞赤に汗ばんで来た。今まで巖壁に被つてゐた頭巾をはねのけると、眼界は急に遙々と廣がつて見える。

何んと云ふ宏大な嚴かな景色だ。膽振の分水嶺から分れて西南を指す一連の山波が、地平から力強く伸び上つて段々高くなりながら、岩内の南方へ走つて来ると、そこに圓らざる陸の果てがあつたので、突然水際に走りよつた奔馬が、揃へた前脚を踏み立てて、思はず平頸を高く聳やかしたやうに、山は急にそゝり立つて、沸騰せんばかりに天を摩してゐる。今にもすさまじい響を立てて崩れ落ちさうに見えながら、何百萬年か何千萬年か昔のまゝの姿でそゝり立つてゐる。而して今は唯一色の白さに雪で被はれてゐる。而して雲が空を動く度毎に、山は居住ひを直したかのやうに姿を變へる。君は久し振りで近々とその山を眺めるともう有頂天になつた。而して餘の事は綺麗に忘れてしまふ。

君は唯一一圖にがむしやうに本道から道のな積雪の中に足を踏み入れる。行手に黒ずんで見える樅の切株の所まで腰から下まで雪に塗

れて迫り着くと、君はそれに兵隊長靴を打ちつけて脚の雪を拂ひ落しながら佇む。而して眼を据ゑてもう一度雪野の果てに聳え立つ雷電峰を物珍らしく眺めて、魅入られたやうに茫然となつてしまふ。幾度見ても倦きる事のない山のたたずまひが、この前見た時と相違のある筈はないののに、全く異つた表情を以て君の眼に映つて来る。この前見た来た時は、それは嚴冬の一日のことだつた。矢張り今日と同じ處に立つて、凍える手に鉛筆を運ぶ事も出来ず、黙つたまま立つて見てゐたのだつたが、その時の山は地面から靜々と盛り上つて、雪雲に閉された空を確かと攪んでゐるやうに見えた。その感じは恐ろしく執念深く力強いものだつた。君はその前に立つて押しひしやげられるやうな威壓を感じた。今日見る山はもつと素直な大さと豊かさとして靜かに君を搔き抱くやうに見えた。普段自分の心持が誰れからも理解されないで、一種の變屈人のやうに人々から取扱はれてゐた君には、此の自然が君に對して求めて来る親しめはしみる／＼としたものだつた。君はまた更に眼を擧げて、なつかしい友に向ふやうにしみる／＼と山の姿を眺めやつた。

丁度親しい心と心とが出遇つた時に、互に感ぜられるやうな温かい涙ぐましさで、君の雄々しい胸の中に湧き上つて来た。自然は生きてゐる。而して人間以上に強く高い感情を持つてゐる。君には同じ人間の語る言葉だが英語は解らない。自然の語る言葉は英語よりも遙かに君には解りいゝ。ある時には君が使つてゐる日本語そのものよりももつと感情の表現の豊かな平明な言葉で自然が君に話しかける。君はこの涙ぐましい心持を描いて見ようとした。

そして懷中からいつものスケッチ帳を取り出して、株の上に置いた。開かれた手帳と山とをかたみがはりに見やりながら、君は丹念に鉛筆を削り上げた。而して粗末な書學紙の上には、遅ましく荒くれた君の手に似合はない纖細な線が描かれ始めた。

丁度人の肖像を描かうとする畫家が、その人の耳目鼻口をそれ／＼綿密に觀察するやうに、君は山の一つの皺一つの裏にも君だけが理解すると思へる意味を見出さうと努めた。實際君の眼には山の總ての面は、そのまゝ總ての表情だつた。日光と雲との明暗に彩られた山の重りには、熱愛を以て見極めようと努める人々にのみ説き明かされる貴い謎が潜めてあつた。君は一つの謎を解き得たと思ふ毎に、小躍

人達を思ひやる。

やがて漁師町をつきぬけて、この市街では日ぬきな町筋に出ると、冬中空屋になつてゐた西洋風の二階建の雨戸が繰り開けられて、札幌の或る大きなデパートメント・ストアの臨時出店が開かれようとしてゐる。藁屑や新聞紙のはみが出た大きな木箱が幾個か店先に抛り出されて、廣告のけばくしい色旗が、活動小屋の前のやうに立て列べてある。而して氣の利いた手代が十人近くも忙がしうに働いてゐる。君はこの大きな臨時の店が、岩内中の小賣商人にどれ程の打撃であるかを考へながら、自分達の漁獲が、資本のない爲めに、外の土地から投資された海産物製造會社によつて捨て値で買ひ取られる無念さをも思はないではゐられなかつた。「大きな手には掴まれる」……さう思ひながら君はその店の角を曲つて割合にさびれた横町にそれた。

その横町を一町も行かない所に一軒の藥種店があつて、それについて小さな調劑所がつらへてあつた。君はそのガラス窓から中を覗いて見る。ざらつと列べた藥種瓶の下の調劑卓の前に、凭れない扱拔きの事務椅子に腰かけて、黒い事務マントを羽織つた慥鬱さうな小

柄な若い男が、一心に小樽の書物を読み耽つてゐる。それはKと云つて、君が岩内の町に持つてゐる唯一人の心の友だ。君はくすんだ硝子板に指先を持つて行つてほととと敲く。Kは機械に書物から眼を擧げてこちらを振りかへる。而して驚いたやうに座を立つて来て硝子障子を開ける。

「何處に」

君は黙つたまゝ懷中からスケッチ帖を取り出して見せる。而して二人は互に理解するやうに微笑みかはず。

「君は今日はお出られまい」

君は東京の遊學時代を記念する爲めに、大事にとつて置いた書生の言葉を使へるのが、この友達に會ふ時の一つの楽しみだつた。

「駄目だ。この頃は漁夫で岩内の人數が急に殖えたせめか忙はしい。然し今日はまだ寒いだらう。手が自由に動くまい」

「何書は描けずとも山を見てゐればそれでいいだ。久しく出て見ないから」

「僕は今これを読んでゐたが（と云つてKはミケランジェロの書翰集を君の眼の前にさし出して見せた）素晴らしいもんだ。かうしてゐてはいけないやうな氣がするよ。だけれども逆も及

びもつかない。いゝ加減な藝術家と云ふものになつて納まつてゐるより、この薄暗い藥局で、黙りこくつて一生を送る方が矢張り僕には似合はしいやうだ」

さう云つて君の友は、慥鬱な小柄な顔を、一際懨懨にした。君は斯ま言葉も慰める言葉も知らなかつた。而てし心尤めするもののやうにスケッチ帖を懷中に納めてしまつた。

「ぢや行つて来るよ」

「さうかい。そんなら歸りには寄つて話して行き給へ」

この言葉を取り交はして、君はその薄汚れたガラス窓から離れる。

南へくと道を取つて行くと、節婦橋と云ふ小さな木橋があつて、そこから先きにはもう家並みは續いてゐない。溝泥を掘ね返したやうな雪道は段々綺麗になつて行つて、地面に近い所が水になつてしまつた積雪の中に、君の古い兵隊長靴はやゝともするとすぼりくと踏み込んで。雪に蔽はれた野は雷電峠の麓の方へ爪先上に廣がつて、折から晴れ氣味になつた雲間を漏れる日の光が、地面の蔭日向を銀と藍とでくつきりと彩つてゐる。寒い空氣の中に、雪の照

うに思ひなされる。況してや平原の處々に散在する百姓家などは、山が人に與へる生命の感じに較べれば、慘めな幾個かの無機物に過ぎない。

晝は眞冬からは著しく延びてはゐるけれども、もう夕暮の色はどん／＼催して來た。それと共に肌身に寒さも加はつて來た。落日に彩られて光を呼吸するやうに見えた雲も、煙のやうな白と淡藍との蔭日向を見せ、雲と共に大空の半分を領してゐた山も、見る／＼寒い色に堅くあせて行つた。而して靄とも云ふべき薄い膜が君と自然との間を隔てはじめた。

君は思はず溜息をついた。云ひ解きがたい暗愁——それは若い人が戀人と思ふ時に、その戀が幸に幸福であるにもかゝらず、胸の奥に感ぜられるやうな——が不思議に君を涙ぐましくした。君は鼻をす／＼りながら、ばたんと舌を立ててスケッチ帖を閉ぢて、鉛筆と一緒にそれを懷ろに納めた。凍てた手は懷ろの中の温味をなつかしく感じた。辨當は食ふ氣がしないで、切株の上からそのまゝ取つて腰にぶらさげた。半日立ち盡した脚は、動かさうとすると電氣をかけられたやうに痺れてゐた。やう／＼の事で君は雪の中から爪先をぬいて一歩々々本道の方

へ歸つて行つた。遙か向うを見ると山から木材や薪炭を積み下ろして來た馬車がちらほらと動いてゐて、馬の首につけられた鈴の音が冴えた響きをたてて幽かに聞こえて來る。それは漂浪の人が遙かに故郷の空を望んだ時のやうななつかしい感じを與へる。その消え入るやうな、淋しい、冴えた音が外になつかしい。不思議な誘惑の世界から突然現世に歸つた人のやうに、君の心はまだ夢心地で、藝術の世界と現實の世界との淡々しい境界線を遡つてゐるのだ。而して君は歩きつゞける。

何時の間にか君は町に歸つて例の調剤所の小さな部屋で、友達とKと向き合つてゐる。Kは君のスケッチ帖を興奮した口つきで彼處此處見返してゐる。

「寒かつたらう」
とKが云ふ。君はまだ本當に自分に歸り切らないやうな顔付きで、

「うむ。……寒くはなかつた。……その線の鈍つてゐるのは寒かつたからではないんだ」と答へる。

「鈍つてゐはしない。君がすっかり何もかも忘れてしまつて、駆けまはるやうに鉛筆をつかつた様子がよく見えるよ。今日のは皆んな非常に

僕の氣に入つたよ。君も少しは満足したらう——實際の山の形に較べて見給へ。……僕は親父にも兄貴にもすまない」と君は急いで言ひわけする。

「何んで？」
Kは怪訝さうにスケッチ帖から眼を上げて君の顔をしげ／＼と見守る。

君の心の中には苦がい灰汁のやうなものが湧き出て來るのだ。漁にこそ出ないが、本當を云ふと漁夫の家に一口として安閑としていゝ日とはないのだ。今日も、君が一日を晝に暮らしてゐた間に、君の家では家中で忙はしく働いてゐたのに違ひないのだ。建網に損じの有る無し、網をおろす場所の海底の模様、大釜を据ゑるべき位置、棧橋の改造、薪炭の買入れ、米鹽の運搬、仲買人との契約、肥料會社との交渉……その外鰯漁の始まる前に漁場の持主がして置かなければならない事は有り餘る程あるのだ。

君は自分が晝に親しむ事を道樂だとは思つてゐない。ゐないどころか、君に取つてはそれは、生活よりも更に嚴肅な仕事であるのだ。然し自然と抱き合ひ、自然を晝の上に活かすといふ事は、君の住む所では君一人だけが知つてゐる

りしたい程の喜びを感じた。君の周囲には今
はもう生活の苦情もなかつた。世間に對する
不安も不幸もなかつた。自分自身に對するお
れ勝ちな疑ひもなかつた。子供やうな快活
な無邪氣な一本氣な心。君の唇からは知ら
ず、軽い口笛が漏れて、君の手は躍るやうに
調子を取つて、紙の上を走つたり、山の大きや
角度を計つたりした。

さうして幾時が過ぎたらう。君の前には
「時」といふものさへなかつた。やがて一つのス
ケッチが出来上つて、軽い満足の溜息と共に、
働かし續けてゐた手をとめて、片手にスケッチ
帖を取り上げて眼の前に据ゑた時、君は軽い疲
勞——輕いと云つても、君が船の中で働く時
の半日分の勞働の結果よりは輕くない——を感
じながら、今日が仕事のよい收穫であれかしと
祈つた。書寫紙の上には、吹き變はる風の爲め
に亂れがちな雲の間に、その頂を見せたり隠
したりしながら、眞白にそり立つ岬の姿と、
その手前の廣い雪の野のこゝかしに葉立つ針
葉樹の木立や、薄く炊煙を地に靡かして、處々
に立つ慘めな農家、是等の間を鋭い刃物で斷
ち割つたやうな深い峽間、それ等が特種な深い
感じを以て特種な筆觸で描かれてゐる。君は

稍、暫らくそれを見やつて微笑ましく思ふ。久
し振りで自分の隠れた力が、哀れな道具立てに
よつてではあるが、兎に角形を取つて生れ出た
と思ふと嬉しいのだ。

然しながら狐疑は待ちかまへてゐたやうに、
君が満足の色を十分味はふ暇もなく、足許から
押し寄せて來て君を不安にする。君は自分に誤
ふものに對して警戒の眼を向ける人のやうに、
自分の満足の色を厳しく調べてかゝらうとす
る。そして今描き上げた畫を容赦なく山の姿と
較べ始める。

自分が満足だと思つた所は何處にあるのだら
う。それは謂はば自然の影絵に過ぎないではな
いか。向うに見える山はその儘寛大と希望と
を象徵するやうな一つの生きた埤的であるの
に、君のスケッチ帖に縮め込まれた同じものに
姿は、何んの表情も持たない線と面との集ま
りとなり君の眼には見えない。

この悲しい事實を發見すると君は躍起となつ
て次ぎのページをまくる。而して自分の心持を
一際謙遜な、而して執着の強いものにし、枯り
強い根氣でどうかして山をそのまゝ君の畫帖の
中に生かし込まうとする、新たな努力が始ま
ると、君はまた總ての事を忘れて一心不亂

に仕事の中に魂を打ち込んで行く。而して君
が、寫眞を食ふ事も忘れて、四枚も五枚ものス
ケッチを作つた時には、もう大分日は傾いてゐ
る。

然しとてもそこを立ち去る事は出来ない程、
自然に絶えず美しく薫つて行く。朝の山には
朝の命が、晝の山には晝の命があつた。夕方の
山にけふしめやかな夕方の山の命がある。山の
姿は、その線と陸日向とばかりでなく、色彩に
かけても、日が西に廻ると素晴らしい魔術の
やうな不思議を現はした。岬の或る部分は銅
鐵のやうに堅く硬く、また他の部分は氣化した
色素のやうに透明で消え失せさうだ。夕方に近
づくにつれて、稍々煙り始めた空氣の中に、聲
も立てずに肅然と響いてゐるその姿には、汲ん
でも、盡きない不明な神祕が宿つてゐる。見
ると山の八合目と覺しい空高く、小さな黒い點
が靜かに動いて輪を描いてゐる。それは一羽の
大鷲に違ひない。眼を定めてよく見ると、長く
伸ばした兩の翼を微塵も動かさずに、身體全
體を稍々斜めにして、大きな水の渦に乗つた
枯葉のやうに、その鷲は靜かに伸びやかに輪を
造つてゐる。山が物云はんばかりに生きてると
見える君の眼には、この生物は却つて死物のや

ゐたらしく、さればとてまづい心持で君を選す
 のも堪へられないと思ひなやんでゐた。しかつ
 たので、君の言葉を聞くと活路を見出したや
 うに少し蘇を喘れ、さして調劑室を立つて行
 つた。それも思へば一家の貧窮がKの心に染み
 渡つたしるいだった。君は獨りになると段々暗
 い心になり増さるばかりだった。

それでも夕飯といふ聲を聞き、戸の隙から漏
 れる焼魚の匂ひをかぐと、君は急に空腹を感じ
 出した。そして腰に結び下げた辨當包みを解い
 てストヴに寄り添ひながら、椅子に腰かけた
 まゝの膝の上でそれを開いた。

北海道には竹がないので、竹の皮の代りにへ
 ぎで包んだ大きな握り飯はすつかり凍てしま
 つてゐる。春立つた時節とは云ひながら一日寒
 空に、切株の上にさらされてゐたので、飯粒は
 一粒々々ぼろ／＼に固くなつて、持つた手の中
 から零れ落ちる。試みに口に持つて行つて見る
 と米の持つ甘味はすつかり奪はれてゐて、無味
 な繊維のかたまりのやうな觸覺だけが冷たく舌
 に傳はつて来る。

君の眼からは突然、君自身にも思ひかけな
 かつた熱い涙がぼろ／＼とあふれ出た。ちつと坐
 つたまゝではゐられないやうな寂寥の念が眞暗

に胸中に廣がつた。

君はそつと座を立つた。而して辨當を元通り
 に包んで腰にさげ、スケッチ帖を懷ろにねぢこ
 むと、こそ／＼と入口に行つて長靴をはいた。
 靴の皮は夕方の寒さに凍つて鐵板のやうに堅く
 冷たかつた。

雪は横のやうなかすかな光を放つて、眞黒に
 暮れ果てた家々の屋根を被うてゐた。淋しいこ
 の横町は人の影も見せなかつた。暫らく歩い
 て例のデパートメント・ストアの出店の角近く
 に来ると、一人の男の子がスケート下駄下駄
 の底にスケートの齒をすげたものをはいて、で
 きばく／＼凍つた道の上をが／＼と音をさせな
 がら走つて來た。その兒はスケートに夢中にな
 つて君の側をすりぬけても君には氣が付いてゐ
 ないらしい。

「氷の上がなれ出した時はほんとに夢中になる
 ものだ」
 君は自分の遠い過去を覗き込むやうに淋しい心
 の中にかう思ふ。何事を見るにつけても君の心
 は痛んだ。

デパートメント・ストアの在る本通りに出る
 と打つて變つて賑やかだった。電燈も急に明る
 くなつたやうに、兩側の家を照らして、そこには

店の者と購買者との影が被つた。それは君
 に取つては、その場合の君に取つては、一つ一
 つ見知らぬものばかりのやうだった。そこいら
 から起る人聲や荷物の雑音などがびん／＼と君
 の頭を針のやうに刺戟する。見物人の前に引き
 出された見世物小屋の野獸のやうないらだたし
 さを感じて、君は眉根の所に電光のやうに起
 る痙攣を小うるさく思ひながら、むづかしい顔
 をしてさつさと賑やかな往來を突きぬけて漁師
 町の方へ急ぐ。

然し君の家が見え出すと君の足はひとりでに
 ゆるみ勝ちになつて、君の頭は知らず識らず、
 尙ほ低くうなだれてしまつた。而して君は疑は
 しさうな眼を時々上げて、見知り越しの顔にで
 も遇ひはしないかと氣違つた。然しこの界限は
 もう靜まり返つてゐた。

「駄目だ」

突然君はかう小さく云つて往來の眞中に立ち停
 つてしまつた。さうして立ちすくんだその姿の
 首から肩、肩から背中に流れる線は、若しそこ
 に見守る人がゐたならば、思はずぞつとして異
 常な憂愁と力とを感じるに違ひない不思議に
 強い表現を持つてゐた。

暫らく釘づけにされたやうに立ちすくんでゐ

喜びであり悲しみであるのだ。外の人達は——君の父上でも、兄妹でも、隣り近所の人でも

——唯だ不思議な子供じみた戯れとよりそれを見てゐないのだ。君の考へ通りをその人達の頭

の中には思ひも及ばぬ事だ。

君は理窟では何等泥づべき事がないと思つてゐる。然し實際では決してさうは行かない。藝術の神聖を信じ、藝術が實生活の上に玉座を占むべきものであるのを疑はない君も、その事柄が君自身に關係して來ると、思はず知らず足許がぐらついて來るのだ。

「俺れが藝術家であり得る自信さへ出來れば、俺れは一刻の躊躇もなく實生活を踏みまじつても、親しいものを犠牲にしても、歩み出す方向に歩み出すのだが、家の者共の實生活の眞剣さを見ると、俺れは自分の天才をさう易々と信ずる事が出來なくなつてしまふんだ。俺れのやうなものを描いてゐながら彼等に藝術家の顔をする事が恐ろしいばかりでなく、置越な事に考へられる。俺れはこんな自分が恨めしい、而して恐ろしい。皆んなはあれ程心から満足して今日々々を暮してゐるのに、俺れだけは丸で陰謀でも企らんでゐるやうに始終暗い心をして

ゐなければならぬのだ。どうすればこの苦しさをこの淋しさから救はれるのだらう」

平常のこの考へがKと向ひ合つても頭から離れないので、君は思はず、親父にも兄貴にもすまない」と云つてしまつたのだ。

「どうして？」と云つたKも、君も、そのまゝ黙つてしまつた。Kには、物を言はれないでも君の心はよく解つてゐたし、君は又君で、自分の綺麗に諦めながら何處までも君を藝術の捧腹者たらしめたいと熱望する、Kの淋しい、自己を滅した、温い心の働きをしつくりと感じてゐたからだ。

君等二人の眼は悒鬱な熱に輝きながら、互に瞳を合はすのを憚るやうに、やゝ燃えかすれたストーウの火を眺め入る。

さうやつて黙つてゐる中に君はたまらない程淋しくなつて來る。自分を憐れむともKを憐れむとも知れない哀情がこみ上げて、Kの手を取り上げて撫でて見たい衝動を幾度も感じながら、女々しさを退けるやうにむづがゆい手を腕の所で堅く組む。

ふと横けた天井から垂れ下つた電球が光を放つた。驚いて窓から見るともう往來は眞暗になつてゐる。冬の日の暮き隠れる早さを今さらには君はしみじみと思つた。掃除の行き届かない電球は埃と垢とで殊更ら暗かつた。それが部屋の中をなほ悒鬱にして見せる。

「飯だぞ」

Kの父の荒々しい細走つた聲が廊の方から如何にも突慥に聞えて來る。普段から自分の一人息子の悪友でもあるかの如く思ひなして、君が行くと曾て機嫌のいい顔を見せた事のないその父らしい聲だつた。Kは一寸反抗するやうな顔付きをしたが、陰性なその表情を益々陰性にしただけで、きはくと唇をつく様子もなく、父の心と君の心とを窺ふやうに聲のする方と君の方とを等分に見る。

君は長座をしたのがKの父の氣に障つたのだと推すると座を立たうとした。然しKはさういふ心持に君をしたのを非常に物足らなく思つたらしく、君にも是非夕食を一緒にしろと勧めてやまなかつた。

「おや僕は晝の辨當を喰はずにこゝに持つてゐるからこゝで食はうよ。遠慮なく済まして來たまへ」

と君は云はなければならなかつた。

Kは夕食を君に勧めながら、ほんたうはそれを両親に打ち出して云ふ事を非常に苦にして

に、眠り足りない人が思はず臉をふさぐやうに、崖の底を口がけてまろび落ちようとする。危い……危い……他人の事のやうに思ひながら君の心は君の肉體を崖の際から真逆様に突き落さうとする。

突然君は跳ね返されたやうに、正氣に歸つて後ろに飛び退きつた。耳をつんざくやうな鋭い音響が君の神經をわななくしたからだ。

ぎよつと驚いて今更のやうに大きく眼を見張つた君の前には平地から突然下方に折れ曲つた崖の縁が、地球の傷口のやうに底深い口を開けてゐる。そこに知らず／＼近づいて行きつゝあつた自分を省みて、君は本能的に身の毛をよだてながら正氣になつた。

鋭い音響は眼の下の方の海産物製造會社の汽笛だつた。十二時の交代時間になつてゐたのだ。遠い山の方からその汽笛の音はかすかに反響になつて、二重にも三重にも聞こえて來た。

もう自然はもとの自然だつた。いつの間にか元通りな崩壊したやうな淋しい表情に満たされて涙もなく君の周圍に廣がつてゐた。君はそれを感ずると、ひたと底のない寂寥の念に襲はれ出した。男らしい君の胸をぎゅつと引きしめるやうにして、熱い涙が留度なく流れ始めた。

君は唯々獨り眞夜中の暗闇の中にすゝり上げながら、眞白に積んだ雪の上に蹲つてしまつた、立ち續ける力さへ失つてしまつて。

九

君よ!!

この上君の内部生活を村度したり揣摩したりするのは僕のなし得る所ではない。それは不可能であるばかりでなく、君を讀すと同時に僕自身を讀す事だ。君の談話や手紙を綜合した僕のこれまでの想像は謬つてゐない事を僕に信ぜしめる。然し僕はこの上の想像を避けよう。兎も角君はかゝる内部の葛藤の激しさに堪へかねて、去年の十月にあのスケッチ帖と眞率な手紙とを僕に送つてよこしたのだ。

君よ。然し僕は君の爲めに何を爲す事が出来るやうぞ。君とお會ひした時も、君のやうな人が全然都會の臭味から免疫されて、過敏な神經や過量な人爲的智見に煩はされず、強健な意力と、強靱な感情と、自然に哺まれた睿智とを以て自然を端的に見る事の出来る君のやうな土の子が、藝術の操持者となつてくれるのをどれ程望んだらう。けれども僕は唯々で出さうになる言葉を強ひて抑へて總てを擲つ

て藝術家になつたらいいだらうとは君に勧めなかつた。

それを君に勧めるものは君自身ばかりだ。君が唯々獨りで忍ばなければならぬ煩悶——それは痛ましい陣痛の苦しみであるとは云へ、それは君自身の苦しみ、君自身で癒さなければならぬ苦しみだ。

地球の北端——そこでは人の生活が、荒くれた自然の威力に壓倒されて、瘦地におとされた雑草の種子のやうに弱々しく頭を擡げてゐる、人類の活動の中心からは見逃がされる程隔たつた地球の北端の一つの地角に、今一つのすぐれた魂は憫んでゐるのだ。若し僕がこの小さな記録を公けにしなかつたならば誰れもこのすぐれた魂の憤みを知るものはないだらう。それを思ふと凡ての現象は恐ろしい神祕に包まれて見える。如何なる結果を齎らすかも知れない恐ろしい原因は地球のどの隅つこにも隠されてゐるのだ。人は畏れないではゐられない。

君が一人の漁夫として一生を過ごすのがいいのか、一人の藝術家として終身働くのがいいのか、僕は知らない。それを輕々しく云ふのは餘りに恐ろしい事だ。それは神から直接君に示されなければならぬ。僕はその時が君の上

た君は、やがて自分自身をもぎ取るやうに決然と肩をそびやかして歩き出す。

君は自分でも何處をどう歩いたか知らない。

やがて君が自分に氣が付いて君自身を見出した所は、海産物製造會社の裏の隠しい峠に登りつめた小山の上の平地だつた。

全く夜になつてしまつてゐた。冬は老いて

春は來ない。その壠れ果てたやうな荒涼たる地の上空高く、寒さをかすかな光にしたやうな雲のない空が、息氣もつかずに、凝然として延び廣がつてゐた。色々な光度と色々な光彩でちりばめられた無數の星々の間に、冬の空の誇りなる參宿が、微妙な傾斜を以て三つならんで、何かの凶徴のやうに一際きら／＼と光つてゐた。星は語らない。たゞ遙かな山裾から、干潮になつた無月の潮騒が、海妖の單調な誘惑の歌のやうに、なまめかしく撫でるやうに聞こえて來るばかりだ。風が落ちたので、凍り付いたやうに寒く沈み切つた空氣は、この海のさゝやきの爲めに鈍く震へてゐる。

君はその平地の上に立つてぼんやりあたりを見廻してゐた。君の心の中には先程から恐ろしい企圖が眼ざめてゐたのだ。それは今日に始まつた事ではない。ともすれば君の油斷を見すま

して、泥沼の中からぬるりと頭を出す水の精のやうに、その企圖は心の底から現はれ出るのだ。君はそれを極端に恐れもし、憎みもし、卑しきもした。男と生れながら、そんな誘惑を感じる事さへやぐざな事だと思つた。然し一旦その企圖が頭を擡げたが最後、君は魅入られた者のやうに、藻掻き苦しみながらもじり／＼とそれを成就する爲めには凡てを犠牲にしても悔いないやうな心になつて行くのだ、その恐ろしい企圖とは自殺する事なのだ。

君の心は妙にいんと底冷えがしたやうに棘々しく澄み切つて、君の眼に映る外界の姿は突然全く表情を失つてしまつて、固い、冷たい、無慈悲な物の積み重なり過ぎなかつた。無限な唯一つの荒廢——その中に君だけが呼吸を續けてゐる、それが堪らぬ程淋しく恐ろしい事に思ひなされる荒廢が君の上下四方に廣がつてゐる。波の音も星の瞬きも、夢の中の出來事のやうに、君の知覺の遠く／＼末梢に、感ぜられるともなく感ぜられるばかりだつた。凡ての現象がてん／＼ばら／＼に互の連絡なく散らばつてしまつた。その中で君の心だけが張りつめて死の方へとじり／＼深まつて行かうとした。重錘をかけて深い井戸へ投げ込まれた

燈明のやうに、深みに行く程君の心は、光を増しながら、感じを強めながら、最後には死といふその冷たい水の表面に消えてしまはうとしてゐるのだ。

君の頭が痺れて行くのか、世界が痺れて行くのか、ほんたうに判らなかつた。恐ろしい境界に臨んでゐるのだと幾度も自分を警めながら、君は平氣な氣持でとてつもない平氣な事をやへたりしてゐた。而して君は夜の更けて行くのも寒さの募るのも忘れてしまつて、そろ／＼と山鼻の方へ歩いて行つた。

脚の下遠く黒い岩濱が見えて波の遠音が響いて來る。

唯だ、飛びだ。それで煩悶も疑惑も綺麗さっぱり帳消しになるのだ。

「家の者たちはほんたうに氣が逆つてしまつたとも思ふだらう。頭が先きにくだけるかも知らん。足が先きに折れるかも知らん」君は瞬きもせず、ぼんやり岸の下を覗きこみながら、他人の事でも考へるやうに、さう心中でつぶやく。

不思議な痺れはどん／＼深まつて行く。波の音などは少しづゝかすかになつて、耳に這入つたり這入らなかつたりする。君の心はたゞ一圖

ク拉拉の出家

これも正しく人間生活史の中に起つた實際の出来事の一つである。

又夢に襲はれてク拉拉は暗い中に眼をさました。妹のアグネスは同じ床の中で、姉の胸によりそつてすやくと静かに眠りつゞけてゐた。

千二百十二年の三月十八日、救世主のエルサレム入城を記念する棕櫚の安息日の朝の事。

数多い見知り越しの男達の中で、何う云ふ譯

か三人だけがつき／＼にク拉拉の夢に現はれた。

その一人は矢張りアツシジの貴族で、ク拉拉の家からは西北に當るヴィヤ・サン・パオロに

住むモントルソリ家のパオロだつた。夢の中にも、腰に置いた手の、指から肩に至るしなやか

さが眼についた。ク拉拉の父親は期待をもつた

微笑を頬に浮べて、品よくひかへ日にしてゐる

この青年を、もつと大膽に振舞へと囁ますやう

に見えた。パオロは思ひ入つたやうにク拉拉に近づいて来た。そして佛蘭西から輸入されたと思はれる精巧な頸飾りを、美しい金象眼のしてある青銅の箱から取り出して、ク拉拉の頸に巻かうとした。上品で端麗な若い青年の肉體が近寄るに従つて、ク拉拉は甘い苦痛を胸に感じた。青年が近寄るなと思ふとク拉拉はもう上氣して軽い腹股に襲はれた。胸の皮膚は揉まれ、肉はしまり、血は心臓から早く強く押し出された。胸から下の肢體は感觸を失つたかと思ふほどこぼはつて、その存在を思ふ事にすら、消え入るばかりの羞恥を覺えた。毛の根は汗ばんだ。その美しい暗緑の瞳は、涙よりもつと輝く分泌物の中に浮き漂つた。軽く開いた唇は熱い息氣の爲めにかさ／＼に乾いた。脂汗の沁み出た兩手は氷のやうに冷えて、青年を押しもどさうにも、迎へ抱かうにも、力を失つて垂れ下つた。肉體はやゝともすると後ろに引き倒されさうになりながら、心は遮二無二前の方

に押し進まうとした。

ク拉拉は半分氣を失ひながらもこの恐ろしい魔術のやうな力に抵抗しようとした。破滅が眼の前に迫つた。深淵が胸の下に開けた。さう思つて彼女は何かせねばならぬと悶えながらも何んにもしないでゐた。慌て弱く心は潮のやうに荒れ狂ひながら青年の方に押し寄せた。ク拉拉はやがてかのしなやかなパオロの手を自分の首に感じた。熱い指先と冷たい金屬とが同時に皮膚に觸れると、自制は全く失はれてしまつた。彼女は苦痛に等しい表情を頬に浮べながら、眼を閉ぢて前に倒れかゝつた。そこにはパオロの胸がある筈だ。その胸に抱き取られる時にク拉拉は元のク拉拉ではなくなるべき筈だ。もうパオロの胸に觸れると思つた瞬間は來て過ぎ去つたが、不思議にもその胸には觸れないでク拉拉の體は抵抗のない空間に倒れ倒れ行つた。はつと驚く暇もなく彼女は何處とも判らない深みへ幕地に陥つて行くのだつた。彼女は眼を開かうとした。然しそれは堅く閉ぢられて盲目のやうだつた。眞暗な闇の間を颯風のやうな空氣の抵抗を感じながら、彼女は落ち放題に落ちて行つた。

「地獄に落ちて行くのだ」膽を裂くやうな心咎めが突然ク拉拉を襲つた。それは本當はク拉拉

に一刻も早く来るのを祈るばかりだ。

而して僕は、同時に、この地球の上のそこ
こに君と同じ疑いと悩みとを持つて苦しんで
ゐる人々の上に最上の道が開けよかしと祈るも
のだ。この切なる祈りの心は君の身の上を知る
やうになつてから僕の心の中に殊に激しく強ま
つた。

ほんたうに地球は生きてゐる。生きて呼吸し
てゐる。この地球の生まんとする悩み、この地
球の胸の中に隠れて生れ出ようとするものの悩
み——それを僕はしみくと君によつて感ずる
事が出来る。それは湧き出で跳り上る強い力の
感じを以て僕を涙ぐませる。

君よ！ 今は東京の冬も過ぎて、梅が咲き椿
が咲くやうになつた。太陽の生み出す慈愛の光
を、地面は胸を張り擴げて吸ひ込んでゐる。春
が来るのだ。

君よ、春が来るのだ。冬の後には春が来るの
だ。君の上にも確かに、正しく、力強く、永
久の春が微笑めよかし……僕はたゞさう心から
祈る。

(一九一八年四月、大阪毎日新聞に一部所載)

シスの耳に口をよせて叫んだ。フランシスはついた狐が落ちたやうにきよんととして、石燈から眼をはなして、自分を圍むいくつかの酒にほてつた若い笑顔を苦々しげに見廻した。クララは即興詩でも聞くやうに興味を催して、窓から上體を乗り出しながらそれに眺め入つた。フランシスはやがて自分の纏つたマントや手に持つ笏に氣がつくと、甫めて今まで耽つてゐた歡樂の想ひ出の絲口が見つかつたやうに苦笑ひをした。

「よく飲んで騒いだもんだ。さうだ、私は新妻の事を考へてゐる。然し私が貰はうとする妻は君等には想像も出来ない程美しい、富裕な、純潔な少女なんだ」

さう云つて彼らは笏を上げて青年達に一足先きに行けと眼で合圖した。青年達が騒ぎ合ひながら堂母の蔭に隠れるのを見届けると、フランシスはいま／＼しげに笏を地に投げつけ、マントと晴着とをつた／＼に破りすてた。

次ぎの瞬間にクララは錠のおりた堂母の入口に身を投げかけて、犬のやうにまろびながら、悔恨の涙にむせび泣く若いフランシスを見た。彼女は奇異の思ひをしながらそれを眺めてゐた。春の月は朧ろに霞んでこの光景を初めから仕舞

まで照してゐる。

寺院の戸が開いた。寺院の内部は闇で、その闇は戸の外に溢れ出るかと思ふほど濃かつた。その闇の中から一人の男が現はれた。十歳の童女から、いつの間にか、十八歳の今のクララになつて、年に相當した長い髪を編下げにして寝衣を着たクララは、恐怖の豫覺を持ちながらその男を見つめてゐた。男は入口にうづくまる

フランシスに眼をつけると、きつとクララの方に鋭い眸を向けたが、フランシスの襟元を掴んで引きおこした。ぞろ／＼と華やかな着物だけが宙につるし上つて、肝腎のフランシスは溶けたか消えたのか、影も形もなくなつてゐた。クララは恐ろしい衝動を感じてそれを見てゐた。と、やがてその男の手に残つた着物が二つに分れて、一つはクララの父となり、一つは母となつた。而して二人の間に立つその男は、クララの許婚のオッタヴィアナ・フォルテブラツ

チヨだつた。三人はクララの立つてゐる美しい芝生より一段低い沼地がかつた黒土の上に單調にづらつとならんで立つてゐた——父は着かすやうに、母は歎くやうに、男は怨むやうに。戦の街を幾度もくゞつたらしい、日に焼けて男性的なオッタヴィアナの顔は、飽く事なき功名心

と、強い意志と、生一本な氣性とで、固い輪郭を描いてゐた。而してその上に貴族的な誇りが包んでゐた。今まで誰れの前にも弱味を見せなかつたらしいその顔が、恨みを含んでづつとクララを見入つてゐた。クララは許婚の仲であるくせに、而してこの青年の男らしい強さを尊敬してゐるくせに、その愛をおとなく受けようともしなかつたのだ。クララは夢の中にありながら生れ落ちる中から神に獻げられてゐたやうな不思議な自分の運命を思ひやつた。晩かれ早かれ生みの親を離れて行くべき身の上も考へた。みると三人は自分の方に手を延ばしてゐる。而してその足は黒土の中にじり／＼と沈みこんで行く。着かすやうな父の顔も、歎くやうな母の顔も、怨むやうなオッタヴィアナの顔も見える。變つて眼に遮る雜物を救つてくれと、恥も忘れて叫ばんばかりにゆがめた口を開いてゐる。然し三人とも聲は立てずに死のやうに靜かで陰鬱だつた。クララは芝生の上からそれをたい眺めてはゐられなかつた。口まで泥の中に埋まつて、涙を一ばいたためた眼でづつとクララに物を云はうとする三人の顔の外に、果てしないその泥の沼には多くの男女の頭が靜かに沈んで行きつゝあるのだ。頭が沈みこむとぬるりと四方

が始めから考へてゐた事なのだ。十六の歳から神の子基督の婢女として生き通さうと誓つた、その神聖な誓言を忘れた報に地獄に落ちるのに何んの不思議がある。それは覺悟しなければならぬ。それにしても聖處女によつて世に降誕した神の子基督の御顔を、金輪際拜し得られぬ苦しみを忍びやうがなかつた。クララはとんぼがへりを打つて落ちながら一心不亂に聖母を念じた。

ふと光つたものが眼の前を過ぎて通つたと思つた。と、その兩脇は柵のやうなものに支へられて、膝がしらも堅い足場を得てゐた。クララは改悛者のやうに啜泣しながら、柵らしいものの上に組み合せた腕の間に顔を埋めた。

泣いてる中にクララの心は忽ち輕くなつて、やがては十ばかりの童女の時のやうな何事も華やかに珍らしい氣分になつて行つた。突然華やいだ放膽な歌聲が耳に入つた。クララは首をあげて好奇の眼を見張つた。兩脇は自分の部屋の窓枠に、兩膝は使ひなれた櫓の長椅子の上に乗つてゐた。彼女の髪は童女の習慣どほり、侍童のやうに、肩あたりまでの長さに切下にしてあつた。窓からは、臘夜の月の光に下に、この町の堂母なるサン・ルフキノ寺院とその前の廣場と

が、滑らかな陽春の空氣に柔められて、夢のやうに見渡された。寺院の北側をロツカ・マヂョーレの方に登る坂を、一つの集團となつてよろけながら、十五六人の華やかな青年が、聲をかぎりに青春を讃美する歌をうたつて行くのだつた。クララはこの光景を念から見おろすと、夢の中にありながら、これは前に一度目撃した事があつたのと思つてゐた。

さう思ふと、同時に窓の下の出来事はずんずんクララの思ふ通りにいかどつて行つた。

夏には夏の我れを待て。
春には春の我れを待て。

夏には雫を腕に据ゑよ。
春には花に口を觸れよ。

春なり今は。春なり我れは。
春なり今は。春なり我れは。

春なる、あゝ、この我れぞ春なる。
我がめぐはしき少女。

寝しづまつた町並みを、張りのある男聲の合唱が鳴りひびくと、無頓着な無恥な高笑ひがそれに續いた。あの青年達はもう立ち止まる頃だとクララが思ふと、その通りに彼等は突然坂の中途で足をとめた。互に何か探し合つてゐるやうだつたが、やがて彼等は廣場の方に二フ

ンシスニベルナルドートの若い騎士ニ圓卓子の盟主などと聲々に呼び立てながら、はぐれた伴侶を探しにもどつて來た。彼等は廣場の手前まで來た。而して彼等の方に二十三人に見える一人の青年が夢遊病者のやうに足もともしどろに歩いて來るのを見つけた。クララもH影でへだてたすぐ向うに住むベルナルドニ家のフランチスだつた。華美を極めた晴着の上に定紋をうつた蠅茶のマントを着て、飲み仲間のお權者たる事を現はす笏を右手に握つた様子は、ほかの青年達にまさつた無賴の風俗だつたが、その顔は瘦せ衰へて物凄く青く、眼は足もとから二三間さきの石燈を孔のあく程見入つたまま瞬きもしなかつた。而してよるけるやうな足どりで、見えないものに引きずられながら、堂母の廣場の方に近づいて來た。それを見つけると、引き返して來た青年達は一度にときをついて駆けよりざまにフランチスを取りかこんだ。「フランチス」若い騎士などとその肩まで揺つて呼びかけても、フランチスは恐ろしげな夢からさめる様子はなかつた。青年達はそでいたらくに又どつと高笑ひをした。「新男の事でも想像して魂がもぬけたな」一人がフランチ

ララは明かな意識の中にありながら、凡てのものが夢のやうに見える。彼女から離れて行くのを感じた。無一物な清浄な世界にクララの魂だけが唯一つ感激に震へて燃えてゐた。死を宣告される前のやうな、奇怪な不安と沈静とが交るゝ裏つて來た。不安が沈静に代る度にクララの眼には涙が湧き上つた。クララの處女らしい體は蘆の葉のやうに細かくをゝいて居た。光のやうなその髪も赤細かに震へた。クララの手は自らアグネスの手を覺めた。

「クララ、あなたの手の冷たく震へる事」

「しつ、靜かに」

クララは頼りないものを頼りにしたのを恥ぢて手を放した。而して咽せる程な參詣人の人いされの中で又孤獨に還つた。

「ホザナ、ホザナ……」

内陣から合唱が聞こえ始めた。會衆の動搖は一時に鎮まつて座席を持たない平民達は敷石の上に跪いた。開け放した窓からは、柔かい春の光と空気が流れこんで、壁に垂れ下つた旗や旒を靜かになぶつた。クララはふと眼をあけて祭壇を見た。花に埋められ香をたきこめられてビザンチン型の古い十字架聖像が奥深くすゑられてあつた。それを見るとクララは咽せ

入りながら「アーメン」と心に稱へて十字を切つた。何んと云ふ貧しさ。そして何んと云ふ慈愛。

祭壇を見るとクララはいつでも十六歳の時の出來事を思い出さずにはゐなかつた。殊にこの朝はその回想が厳しく心に逼つた。

今朝の夢で見た通り、十歳の時限のあたり目に撃した、ベルナルドローネのフランシスの面影はその後クララの心を離れなくなつた。フランシスが狂氣になつたと云ふ噂も、父から勘當を受けて乞食の群れに加はつたと云ふ風聞も、クララの乙女心を不思議に強く打つて響いた。フランシスの事になるとシツフキ家の人々は父から下女の末に至るまで、いゝ笑ひ草にした。クララはさう云ふ雜言を耳にする度に、自分でそんな事を口走つたやうに顔を赤らめた。

クララが十六歳の夏であつた、フランシスが十二人の伴侶と羅馬に行つて、イノセント三世から、基督を模範にして生活する事と、寺院で説教する事との印可を受けて歸つたのは、この事があつてからアツシジの人々のフランシスに對する態度は急に變つた。ある秋の末にクララが思ひ切つてその説教を聞きたいと父に數々頼んだ時にも、父は物好きな奴だと云つたばかり

で別にとめはしなかつた。

クララの回想とはその時の事である。クララは矢張りこの堂母のこの座席に坐つてゐた。着物を重ねても寒い秋寒に講壇には眞裸なレオと云ふフランシスの伴侶が立つてゐた。男も女もこの奇異な裸形に奇異な場所であつて笑ひくづれぬものはなかつた。卑しい身分の女などはあからさまに卑猥な言葉をもその若い道士に投げつけた。道士は凡ての反感に打ち克つだけの熱意を以て語らうとしたが、それには未だ少し信仰が足りないやうに見えた。クララは顔を上げ得なかつた。

そこにフランシスが是れも裸形のまゝで這入つて來てレオに代つて講壇に登つた。クララはなほ顔を上げなかつた。

「神、その獨子、聖靈及び基督の御弟子の頭なる法皇の御許しによつて、末世の罪人、神の召によつて人を喜ばす執業師なるフランシスが善良なアツシジの市民に告げる。フランシスは今日教友のレオに堂母で説教するやうにと云つた。レオは神を語るだけの辯才を神から授けられてゐない」と拒んだ。フランシスはそれなら裸かになつて行つて、體で説教しろと云つた。レオは雄々しくも裸かになつて出て行つた。俄て

からその跡を埋めに流れ寄る泥の動搖は身の毛をよだてた。クララは何もかも忘れて三人を救ふために泥の中に片足を入れようとした。

その瞬間に彼女は眞黄に照り輝く光の中に投げ出された。芝生も泥の海ももうそこにはなかった。クララは眼がくらみながらも起き上らうともがいた。クララの胸を掴んで起きせないものがあつた。クララはそれが天使ガブリエルである事を知つた。天國に嫁ぐ爲めにお前は淨められるのだ。さう云ふ聲が聞こえたと思つた。

同時にガブリエルは爛々と燃える炎の劍をクララの乳房の間からずぶりとさし通した。燃えさかつた尖頭は下腹部まで届いた。クララは苦悶の中に眼をあげてあたりを見た。まぶしい光に明滅して、十字架にかゝつた基督の姿が嚴かに見やられた。クララは有頂天になつた。全身は嘗て覺えない苦しい、快い感覺に木の葉の如くをのゝいた。喉も裂け破れる一聲に、全身に張り満ちた力を搾り切らうとするやうな瞬間が來た。その瞬間にクララの夢はさめた。

クララはアゲネスの眼をさまさないやうにそつと起き上つて窓から外を見た。眼の下には夢で見たとほりのルフキノ寺院が曉闇の中に殷かな姿を見せてゐた。クララは扉をあけて柔

かい春の空氣を快く吸ひ入れた。やがてボルト・カプチニの方にかなすかな東明の光が漏れたと思ふと、救世主のエルサレム入城を記念する寺の鐘が一時に鳴り出した。快活な同じ鐘の音は、麓の町からも聞こえて來た、牡鶏が村から村に時鳴を啼き交はすやうに。

今日こそは出家して基督に嫁ぐべき日だ。その朝の淺い眼りを覺ました不思議な夢も、思ひ入つた心には神の御告げに違ひなかつた。クララは涙ぐましい、しめやかな心になつてアゲネスを見た。十四の少女は神のやうに眠りつけてゐた。

部屋は静かだつた。

○

クララは父母や妹達より少しおくれで、朝の禮拜に聖ルフキノ寺院に出かけて行つた。在家の生活の最後の日だと思ふと、さすがに名残が惜しまれて、彼女は心を凝らして化粧をした。「クララの光りの髪」とアツシジで歌はれたその髪を、眞珠紐で纏んで後ろに垂れ、エネチヤの純白な絹を着た。家の者の居ない隙に、手早く置手紙と形見の品物を取りまとめて机の引出しにしまつた。クララの眼にはあとからく

涙が湧き流れた。眼に觸れるものは何から何までなつかしまれた。

一人の婢女を連れてクララは家を出た。コルソの通りには繞るやうに人が置れてゐた。春の日は麗かに輝いて祭日の人心を更に浮き立たした。男も女も、僧侶もクララを振りかへつて見た。「光りの髪」のクララが行く。さう云ふ聲があちらこちらで私語かれた。クララは心の中で主の祈りを念佛のやうに繰返し、一向に眼の前を見つめながら歩いて行つた。この雜閑な往來の中でも障礙になるものは一つもなかつた。廣い秋の野を行くやうに彼女は歩いた。

クララは寺の入口を這入るとまづすぐにシツフキ家の座席に行つてアゲネスの側に座を占めた。彼女はフォルテブラツチョ家の座席からオツタヴィアナが送る襪をすぐに左の頬に感じたけれども、もうそんな事に顧着はしてゐなかつた。彼女は座席につくと面を伏せて眼を閉ぢた。やゝともすると所も辨へずに熱い涙が眼がしらににじまうとした。それは悲しさの涙でもあり喜びの涙でもあつたが、同時にどちらでもなかつた。彼女は今まで知らなかつた涙が眼を熱くし出すと、妙に胸がわく／＼して來て、急に深淵のやうな深い静かさが心を襲つた。ク

又沈黙。
「沈黙は貧しき程に美しく尊い。あなたの沈黙を私は美酒のやうに飲んだ」
それから恐ろしい程の長い沈黙が続いた。突然フランシスは慄へる聲を押し鎖めながらつぶやいた。

「あなたは私を戀してゐる」
クララはぎよつとして更めて聖者を見た。フランシスは澄しい心の動搖から呟嗟の間に立ちなほつてゐた。

「そんなに驚かないでもいゝ」
さういつて靜かに眼を閉ぢた。

クララは自分で知らなかつた自分の秘密をその時フランシスによつて甦めて知つた。長い間の不思議な心の迷ひをクララは種々に解きわづらつてゐたが、それがその時始めて解かれたのだ。クララはフランシスの明察を何んと感謝していゝのか、どう詫言ねばならぬかを知らなかつた。狂氣のやうな自分の泣き聲ばかりがクララの耳にやゝ暫らくいたましく聞こえた。

「わが神、わが凡て」

また長い沈黙がつゞいた。フランシスはクララの頭に手を置きそへたまゝ黙禱してゐた。
「私の心をのゝく。……私はあなたに値し

ない。あなたは神に行く前に私に寄道した。……さりながら愛によつてつまづいた優しい心は神は許し給ふだらう。私の罪をも許し給ふだらう」

かく云つてフランシスはすつと立ち上つた。而して今までは打つて變つて神々しい威嚴でクララを壓しながら言葉を續けた。

「神の御名によりて命ずる。永久に神の清き愛兒たるべき處女よ。腰に帶して立て」

その言葉は今でもクララの耳に燒きついて消えなかつた。而してその時からもう世の常の處女ではなくなつてゐた。彼女はその時の回想に心を上ずらせながら、その時泣いたやうに激しく泣いてゐた。

ふと「クララ」と耳近く囁くアグネスの聲に驚かされてクララは顔を上げた。空想の中に描かれてゐたアプスの淋しきとは打つて變つて、堂内にはひし／＼と群集がひしめいてゐた。祭壇の前に集まつた百人に餘る少女は、棕櫚の葉の代りに、月桂樹の枝と花束とを高くかざしてゐた。夕榮えの雲が棚引いたやうに。クララの前にはアグネスを従へて白い袴を長く胸に垂れた盛裝の僧正が立つてゐる。クララが顔を上げると彼れは慈悲深げにほゝゑんだ。

「嫁に行く處女よ。お前の喜びの涙に祝福あれ。この月桂樹は僧正によつて祭壇から特別に齎されたものだ。僧正の好意と共に受けをさめるがいゝ」

クララが知らない中に祭事は進んで、最後の儀式即ち參詣の處女に僧正手づから月桂樹を渡して、救世主の入城を頌歌する場合になつてゐたのだ。而してクララだけが祭壇に來なかつたので僧正自らクララの所に花を持つて來たのだつた。クララが今夜出家するといふ手筈をフランシスから知らされてゐた僧正は、クララに他所ながら告別を與へるためにこの破格な處置をしたのだと氣が附くと、クララは又更に涙のわき返るのをとめて得なかつた。クララの父母は僧正の言葉をフォルテブラッチョ家との縁談と取つたのだらう、笑ひかまけながら挨拶の辭儀をした。

やがて百人の處女の咲かす華々しい頌歌が起つた。シオンの山の凱歌を千年の後に反響さすやうな熱と喜びのこもつた女聲高音が内陣から堂内を震動さして響き渡つた。會衆は轟惑されて聞き惚れてゐた。底の底から清められ深められたクララの心は、露ばかりの愛のあらはれにも嵐のやうに感動した。花の間に顔

レオが去つた後、レオに斯かる苦行を強ひながら、何事もなげに居残つたこのフランシスを神は厳しく鞭を給うた。眼ある者は見よ。懺悔したフランシスは諸君の前に立つ。諸君はフランシスの裸形を憐れまるゝか。然らば諸君が眼を注いで見ねばならぬものが彼處にある。眼あるものは更に眼をあげて見よ。

クララはいつの間にか男の裸體と相對してゐる事も忘れて、フランシスを見やつてゐた。フランシスは「眼をあげて見よ」と云ふと同時に祭壇に安置された十字架聖像を恭々しく指さした。十字架上の基督は痛ましくも瘦せこけた裸形のまゝで會衆を見下ろしてゐた。二十八のフランシスは何處と云つて際立つて人眼を引くやうな容貌を持つてゐなかつたが、祈禱と、斷食と、勞働の爲めにやつれた姿は、靈化した彼の心をそのまゝ寫し出してゐた。長い説教ではなかつたが、神の愛、貧窮の祝福などを語つて彼がアーメンと云つて口をつぐんだ時には、人々の愛心がどん底からゆすりあげられて思はず互に固い握手をしてすゝり泣いてゐた。クララは人々の泣くやうには泣かなかつた。彼女は自分の眼が燃えるやうに思つた。その日彼女はフランシスに懺悔の席に列なる

事を申しこんだ。懺悔するものはクララの外にも深山居たが、クララはわざと最後を選んだ。クララの番が来て祭壇の後ろのアプスに行く時、フランシスはたゞ一人黙色と云はれる禪色の百衲服を着て、細の帯を結んで、胸の前に組んだ手を見入るやうに首を下げて、壁添ひの腰かけにかけてゐた。クララを見ると手まねで自分の前にある椅子に坐れと指した。二人は向ひあつて坐つた。而して眼を見合はした。曇つた秋の午後のアプスは寒く淋しく暗み渡つてゐた。ステインド・グラスから漏れる光線は、いくつかの細長い窓を暗く彩つて、それがクララの髪の毛に來てしめやかに戯れた。恐ろしい程にあたりは物靜かだつた。クララの燃える眼は命の綱のやうにフランシスの眼にすがりついた。フランシスの眼は落ち着いた愛に満ち満ちてクララの眼をかき抱くやうにした。クララの心は酔ひしれて、フランシスの眼を通してその尊い魂を拜まうとした。やがてクララの眼に涙が溢れる程たまつたと思ふと、ほろ／＼と頬を傳つて流れはじめた。彼女はそれでも眞向にフランシスを見守る事をやめなかつた。かうして又いくらかの時が過ぎた。クララはたゞ黙つたまゝで坐つてゐた。

「神の處女」
フランシスはやがて嚴かにかう云つた。クララは眼を外にうつすことが出来なかつた。「あなたの懺悔は神に達した。神は慈悲を給うた。アーメン」

クララはこの上控へてはゐられなかつた。椅子からすべり下りると敷石の上に身を投げ出して、思ひ存分泣いた。その小さい心臓は無上の歡喜の爲めに破れようとした。思はず身をすり寄せて、素足のまゝのフランシスの爪先に手を觸れると、フランシスは靜かに足を引きすげなげながら、いたはるやうに祝福するやうに、彼女の頭に軽く手を置いて間遠につぶやき始めた。小雨の雨垂れのやうにその言葉は、清く、小さく、鋭く、クララの心を打つた。
「何よりもいゝ事は心の清く貧しい事だ」
獨語のやうなさゝやきがから聞こえた。而して暫らく沈黙が続いた。
「人々は今のまゝで満足だと思つてゐる。私にはさうは思へない。あなたもさうは思はない。神はそれをよしと見給ふだらう。兄弟の日、姉妹の月は輝くの、人は輝く喜びを忘れてゐる。飛雀は歌ふのに人は歌はない。木は跳るのに人は跳らない。淋しい世の中だ」

る小箱を取り出したが、それはこの際になつて何んの用もないものだと思つた。クララは不圖その寶玉に未練を覺えた。その一つ／＼にはそれ／＼の思ひ出がつきまはつてゐた。クララは小箱の蓋に懶に接吻を與へて元の通りにしまひこんだ。淋しい花嫁の身じたくは靜かな夜の中に淋しく終つた。その中に心は段々落着いて力を得て行つた。こんなに泣かれてはいよく／＼家を逃れ出る時にはどうしたらいいだらうと思つた床の中の心配は無用になつた。沈んではゐるがしやんと張り切つた心持になつて、クララは部屋の隅の聖像の前に跪いて燭火を捧げた。而して靜かに身の來し方を顧みた。

幼い時からクララには云ひ現はし得ない不満足が心の底にあつた。いら／＼した氣分はよく髪のかき方、衣服の着せ方に小言を云はせた。さん／＼小言を云つてから獨りになると何んとも云へない淋しさに襲はれて、部屋の隅でたゞ一人半日も泣いてゐた記憶も甦つた。クララはそんな時には大好きな母の顔さへ見る事を嫌つた。ましてや父の顔は野獸のやうに見えた。いまに誰か來て私を助けてくれる。堂母の壁書にあるやうな天國に連れて行つてくれるからいゝとさう思つた。色々な宗教畫が有る

度に自分の行きたい所は何處だらうと思ひながら注意した。その中にクララの心の中には二つの世界が考へられるやうになりだした。一つはアツシジの市民が、僧侶をさへこめて、上から下まで生活してゐる世界だ。一つは市民等が信仰してゐるにせよ、ぬねにせよ、敬意を捧げてゐる基督及び諸聖徒の世界だ。クララは第一の世界に生ひ立つて榮耀繁華を極むべき身分にあつた。第二の世界に何故俯仰の眼を向け出したか、クララ自身も分らなかつたが、當時ベルジャの町に對して勝利を得て獨立と繁盛との誇りに賑やか立つたアツシジの辻を、豪奢の市民に立ち交りながら、一平和を求めよ而して永遠の平和あれ」と叫んで歩く名もない乞食の姿を得女は何んともなく考へ深く胸めないではゐられなかつた。總て死んだのか宗匠代へをしたのか、その乞食は影を見せなくなつて、市民は誰れ憚らず思ふさまの生活に耽つてゐたが、クララはどうしても父や父の友達などの送る生活に従つて活きようと思ふ心地はなかつた。その頃にフランシス——この間まで第一の生活の先頭に立つて雄々しくも第二世界に居をついたフランシス——が百姓の服を着て、子供等に狂人と罵られながらも、聖ダミヤノ寺院

の再建勸進にアツシジの街に現はれ出した。クララは人知れずこの乞食僧の舉動を注意してゐた。その頃にモントルソリ家との婚談も持ち上つて、クララは度々自分の窓の下で夜おそく歌はれる夜曲を聞くやうになつた。それはクララの心を躍らし、ときめかした。同時にクララは何物よりもこの不思議な力を恐れた。

その時分クララは著者の知れない或る古い書物の中に下のやうな文句を見出した。

「肉に溺れんとするものよ。肉は靈への誘惑なるを知らざるや。心の眼鈍きものはまづ肉によりて愛に目ざむるなり。愛に目ざめてそを哺むものは靈に至らざればやまざるを知らざるや。されど心の眼さときものは肉に倚らずして直ちに愛の隠るゝ所を知るなり。聖處女の肉によらずして救主を孕み給ひし如く、汝等心の眼さときものは聖靈によりて諸孽の胎たるべし。肉の世の廣きに恐るゝ事勿れ。一度忘れざれば汝等は神の恩恵によりて心の眼さときと生れたるものなることを覺るべし」

クララは幾度もそこを讀み返した。彼女の迷ひはこの珍らしくもない句によつて不思議に晴れて行つた。而してフランシスに對して好意を

を伏せて彼女が少女の歌聲に揺られながら、無
私の祈禱に浸り切つた。

「クララ：クララ」

クララは眼をさましてゐたけれども返事をし
なかつた。幸に母のゐる方には後ろ向きに、
アグネスに寄り添つて臥てゐたから、そのまゝ
息氣を殺して黙つてゐた。母は二人ともよく寝
たもんだと云ふやうな事を、母らしい愛情に満
ちた言葉で云つて、何か衣裳らしいものを大椅
子の上にそっくり置くと、忍び足に寢臺に近よ
つてしげくと二人の寢姿を見守つた。而して
夜着をかけ添へて軽く二つ三つその上をたゝい
てから靜かに部屋を出て行つた。

クララの枕はしぼるやうに涙に濡れてゐた。
無月の春の夜は次第に更けた。町の諸門をと
ちる合圖の鐘は二時間も前に鳴つたので、コル
ソに集まつて賣買に忙がしかつた村の人々の聲
高な騒ぎも聞こえず、軒なみの店ももう仕舞つ
て寢しづまつたらしい。女猫を慕ふ男猫の思ひ
入つたやうな啼き聲が時折り聞こえる外には、
クララの部屋の時計の鐘子が靜かに下りて商車
をきしらせる音ばかりがした。山の上の春の空

氣はなごやかに靜かに部屋に満ちて、堂母から
二人が持つて歸つた月桂樹と花束の香を隅々ま
で籠めてゐた。

クララは取りすがるやうに祈りに祈つた。眼
をあけると間近にアグネスの眠つた顔があつ
た。クララを姉とも親とも慕ふ無邪氣な、素直
な、天使のやうに淨らかなアグネス。クララが
この二三日やうともすると眼に涙をためてゐる
のを見て、自分も一緒に涙ぐんでゐたアグネス。
：そのアグネスの睫毛はいつでも涙で洗つた
やうに美しくあつた。殊に色白なその頬は寝人つ
てから健康さうに上へ氣して、その間に形よく
盛り上つた小鼻は穏やかな呼吸と共に微細に震
へてゐた。「クララの光りの髪、アグネスの光り
の眼」と言はれた、無類な潤みを持つて童女にし
てはどこか哀れな、大きなその眼は見る事が出
来なかつた。クララは、見つめる程、骨肉のいと
しさがこみ上げて來て、そつと掌で髪から頬
を撫でさすつた。その手に感ずる暖かいなめら
かな觸感にクララの愛欲を火のやうにした。ク
ララは抱きしめて思ひ存分いとしがつてやりた
くなつて半身を起して乗しかゝつた。同時にそ
の場合の大事がクララを思ひとゞまらした。ク
ララは眩をついて半分身を起したまゝで、アグ

ネスを見やりながらほろ／＼と泣いた。死んだ
一人兒を母が撫でさすりながら泣くやうに。
彈條のきしむ音と共に時計が鳴り出した。ク
ララは數を數へないでも丁度夜半である事を知
つてゐた。而して涙を拭ひもあへず靜かに床

からすべり出た。打ち合せておいた時刻が來た
のだ。安息日が過ぎて神聖月曜日が來たのだ。
クララは床から下り立つと昨日堂母に着て行つ
たズネチヤの白絹を着ようとした。それは花嫁
にふさはしい色だつた。然し見ると大椅子の上
に昨夜母の持つて來てくれた外の衣裳が置いて
あつた。それはクララが好んで着た藤紫の一
揃ひだつた。神聖月曜日にも聖ルフキノ学院で
式があるから、昨日のものと違つた服裝をさ
せようと云ふ、母の心盡しがすぐ知れた。クララ
は嬉しく難有く思ひながらそれを着た。而して
着ながら若し是れが兩親の許しを得た結婚であ
つたならばと思つた。父は恐らくあすこの椅子
にかけて微笑しながら自分を見守るだらう。母
と女中とは前に立ち後ろに立ちして化粧を手傳
ふ事だらう。さう思ひながらクララは音を立て
ないやうに用心して、かけにくい背中のボタン
をかけた。而していつもの習慣通りに
小簞笥の引出しから頸飾りと指輪との入れてあ

或る女

新橋を渡る時、發車を知らせる二番目の鈴が、霧とまではいへない九月の朝の、煙つた空氣に包まれて聞こえて来た。葉子は平氣でそれを聞いたが、車夫は宙を飛んだ。而して車が、鶴屋といふ町の角の宿屋を曲つて、いつでも人馬の群がるあの共同井戸のあたりを駈けぬける時、停車場の入口の大戸を閉めようとする驛夫と争ひながら、八分がた閉まりかゝつた月の所につつ立つてこつちを見成つてゐる青年の姿を見た。

「まあおそくなつて済みませんでした事……まだ間に合ひますか知ら」

と葉子が云ひながら階段を昇ると、青年は粗末な麥稈帽子を一寸脱いで、駈つたまゝ背の切岸を渡した。

「おや何故一等になさらなかったの。さうしないといけない譯があるから代へて下さいましな」

と云はうとしたけれども、火がつくばかりに驛夫がせき立てるので、葉子は駈つたまゝ、青年とならんで小刻みな足どりで、たつた一つだけ開いてゐる改札口へと急いだ。改札はこの二人の乗客を苦々しげに見やりながら、左手を延ばして待つてゐた。二人がてん／＼に切符を出さうとする時、

「若奥様、これをお忘れになりました」と云ひながら、羽被の紺の香ひの高くするさつきの車夫が、薄い大柄なセルの膝掛を肩にかけたまゝ、慌てたやうに追つ駈けて来て、オリヅ色の絹ハンケチに包んだ小さな物を渡さうとした。

「早く／＼、早くしないと出づちまひますよ」改札が堪らなくなつて痼癭聲をふり立てた。

青年の前で「若奥様」と呼ばれたのと、改札ががみ／＼怒鳴り立てたので、針のやうに鋭い神經はすぐ彼女をあまのじやくにした。葉子は今まで急ぎ氣味であつた歩みをびつたり止めてしまつて、落ち付いた顔付で、車夫の方に向きな

ほつた。

「さう御苦勞よ。家に歸つたらね、今日は歸りが遅くなるかも知れませんか、お嬢さんただけで校友會にいらつしやいつてさう云つておくれ。それから藤濱の近江屋、西洋小間物屋の近江屋が來たら、今日こつちから出かけたからつて云ふやうにつてね」

車夫はきよ／＼と改札と葉子とを片身がはりに見やりながら、自分が汽車にでも乗りおくれるやうに慌ててゐた。改札の顔は段々險しくなつて、あはや通路を閉めてしまはうとした時、葉子はする／＼とその方に近よつて、

「どうも済みませんでした事」

といつて切符をさし出しながら、改札の眼の先きで花が咲いたやうに微べんで見せた。改札は馬鹿になつたやうな顔付をしながら、それでもおめ／＼と切符に孔を入れた。

プラツトフオームでは、驛員も見送人も立つてゐる限りの人々ばかり、二人の方に眼を向けてゐた。それを全く氣付きもしないやうな物腰で、葉子は親しげに青年と肩を並べて、しづ／＼と歩きながら、車夫の居けた包物の中に何があるか中ててみるとか、權續／＼やうに自分の心を牽く町はないとか、切符を一紙にしきつておいて

持ち出した。フランシスを辯護する人がありてもすると、嫉妬を感じないではゐられない程好意を持ち出した。その時からクララは凡ての縁談を顧みなくなつた。フオルテブラツチョ家との婚約を父が承諾した時でも、クララは一應辭退しただけで、跡は成行きにまかせてゐた。彼女の心はそんな事には止つてはゐなかつた。唯々心を籠めて渾い心身を基督に獻げる機ばかりを窺つてゐたのだ。その中に十六歳の秋が來て、フランシスの前に機嫌をしてから、彼女の心は全く肉の世界から逃れ出る事が出来た。それから一年半の長い天との婚約の試験も今夜で果てたのだ。是れからは一人の主にも心も離れ得る嬉しい境涯が自分を待つてゐるのだ。

クララの顔はほてつて輝いた。聖像の前に最後の祈りを捧げると、いそ／＼として立ち上つた。而して鏡を手に取つて近々と自分の顔を寫して見た。それが自分の肉との最後の別れだつた。彼女の眼にはアゲネスの寝顔が吸ひ附くやうに可憐に映つた。クララは靜かに寢床に近よつて、自分の臥てゐた跡に聖母から持ち歸つた月桂樹の枝を敷いて、その上に聖像を置き、そのまはりには花で飾つた。而してもう一度聖像

に祈禱を捧げた。一御心ならば、主よ、アゲネスをも召し給へ。クララは輕くアゲネスの額に接吻した。もう思ひ残す事はなかつた。

ためらふ事なくクララは部屋を出て、父母の寢室の前の床板に熱い接吻を残すと、戸を開けてバルコンに出た。手欄から下をすかして見ると、暗の中に二人の人影が見えた。「アーメン」と云ふ重い聲が下から響いた。クララも「アーメン」と云つて應じながら用意した綱で道路に降り立つた。

空も露も暗かつた。三人はボルタ・ヌオバの門番に賂ひして易々と門を出た。門を出るとウムブリヤの平野に眞暗に遠く廣く眼の前に展げ渡つた。モンテ・ファルコの山は平野から暗い空に崛起しておごそかにこつちを見つめてゐた。淋しい花嫁は頭巾で深々と顔を隠した二人の男に守られながら、すがりつくやうにエホバに祈禱を捧げつゝ、星の光を便りに山坂を曲りくねつて降りて行つた。

フランシスとその伴侶との禮拜所なるボルチュンクウラの小籠の灯が遙か下の方に見え始める坂の突角に、炬火を持つた四人の教友がクララを待ち受けてゐた。今まで氷のやうに冷たく

落ち着いてゐたクララの心は、瀕死者がこの世に最後の觀看を感じるやうにきびしく烈しく父母や妹を思つた。炬火の光に照されてクララの眼は未練にももう一度涙でかきやいた。いひ知れぬ淋しさがその若い心を襲つた。

私の爲めに祈つて下さい。

クララは炬火を持つた四人にすゝり泣きながら歎願した。四人はクララを中央に置いて黙つたまゝうづくまつた。

平原の平和な夜の沈黙を破つて、遙か下のボルチュンクウラからは、新嫁を迎ふべき教友等が、心をこめて歌ひつれる合唱の聲が、靜にかにかすかにおごそかに聞えて來た。

(一九一七年八月一日、於維米湖)
(一九一七年九月、太臨所感)

古藤はあまりはずんだ葉子の聲にひかされて、まじりとその顔を見守つた。その青年の單純な明らかな心に自分と笑顔の奥の苦い澁い色が見抜かれはしないかと、葉子は思はずたじろいだ程だつた。

「何んにも考へてゐやしないが、蔭になつた帷の色が、餘りに綺麗だもんで……紫に見えるでせう。もう秋がかつて來たんですよ——」

青年は何も思つてゐはしなかつたのだ。

「本當にね——」

葉子は單純に應じて、もう一度ちらつと木部を見た。瘦せた木部の眼は前と同じに鋭く輝いてゐた。葉子は正面に向き直ると共に、その男の眸の下で、憎鬱な険しい色を引きしめた口のあたりに漲らした。木部はそれを見て自分の態度を後悔すべき筈である。

二

葉子は木部が魂を打ちこんだ切實の的だつた。それは丁度日清戦争が終局を告げて、國民一般は誰れ彼れの差別なく、この戦争に關係のあつた事柄や人物やに事實以上の好奇心をそゝられてゐた頃であつたが、木部は二十五といふ若い齡で、ある大新聞社の從軍記者になつ

て支那に渡り、月並みな通信文の多い中に、際立つて觀察の飛び離れた心月のゆらいだ文章を發表して、天才記者といふ名を博して目出度く凱旋したのであつた。その頃女流基督教徒の先覺者として、基督教婦人同盟の副會長をしてゐた葉子の母は、木部の屬してゐた新聞社の社長と親しい交際のあつた關係から、ある日その社の從軍記者を自宅に招いて一應勞の會食を催した。その席で、小柄で西哲で、時々の聲の悲壯な、感情の熱烈なこの少壯從軍記者は始めて葉子を見たのだつた。

葉子はその時十九だつたが、既に幾人もの男に戀をし向けられて、その圍みを手際よく繰りぬけながら、自分の若い心を樂しませて行くタクトは十分に持つてゐた。十五の時に、袴を紐で締める代りに尾錠で締める工夫をして、一時女學生界の流行を風靡したのも彼女である。その紅い唇を吸はして首席を占めたんだと、嚴格で通つてゐる米國人の老校長に、思ひもよらぬ署名を負はせたのも彼女である。上野の音樂學校に這入つてヴァイオリンの稽古を始めてから二箇月程の間にめき／＼上達して、教師や生徒の舌を捲かした時、ケール博士一人は澁い顔をした。而して或る日一お前の樂器は才

で鳴るのだ。天才で鳴るのではない——と無愛想にぶつて退けた。それを聞くと「さうで御座いますか——と無造作に云ひながら、ヴァイオリンを窓の外に抛りなげて、そのまゝ學校を退學してしまつたのも彼女である。基督教婦人同盟の事業、奔走し、社會では男勝りのしつかり者といふ評判を取り、家内では趣味の高い而して意思の強い良人を、く無禮して振舞つたその母の最も深い隠れた弱點を、拇指と食指との間にちやんと押へて、一歩もひけを取らなかつたのも彼女である。葉子の眼には凡ての人が、殊に男が底の底まで見すかせるやうだつた。葉子はそれまで多くの男を可なり近づくまで押り込ませて置いて、もう一歩といふ所で突き放した。戀の始めにはいつでも女性が祭り上げられてゐて、或る機會を絶頂に男性が突然女性を踏み躪るといふ事を直覺つやうに知つてゐた。葉子は、どの男に對しても自分との關係の絶頂が何處にあるかを見ぬいてゐて、そこに來かると情け容赦もなくその男を振り捨ててしまつた。さうして捨てられた多くの男は、葉子を恨むよりも自分達の職性を恥ぢるやうに見えた。而して彼等は等しく葉子を見誤つてゐた事を悔いるやうに見えた。何故といふと彼等は

くれるとか云つて、音楽者のやうにデリケートなその指先で、わざとらしく幾度か青年の手に觸れる會を求めた。列車の中からはある限りの顔が二人を見迎へ見送るので、青年が物慣れない處々のやうに羞かんで、而かも自分ながら自分を怒つてゐるのが葉子には面白く眺めやられた。

一等近い二等車の昇降口の所に立つてゐた車掌は右の手をポケットに突つ込んで、靴の爪先きで待遠しきうに壁石を敲いてゐたが、葉子がデッキに足を踏み入れると、いきなり耳を劈くばかりに呼子を鳴らした。而して青年は青年は名を古藤といつたが葉子に續いて飛び乗つた時には、機關車の應笛が前方で朝の町の賑やかなさざめきを破つて響き渡つた。

葉子は四角なガラスを嵌めた入口の縁戸を古藤が勢よく開けるのを待つて、中に這入らうとして、八分通りつまつた雨側の乗客に稲妻のやうに鋭く眼を走らしたが、左側の中央近く新聞を見入つた、瘦せた中年の男に視線がとまると、はつと立ちすくむ程驚いた。然しその驚きは瞬く暇もない中に、顔からも脚からも消え失せて、葉子、思ひれもせず、取りすましもせず、自信あるか優が喜劇の舞臺にでも現

はれるやうに、軽い微笑を右の頬だけに浮べながら、古藤に續いて入口に近い右側の空席に腰を下ろすと、あでやかに青年を見返りながら、小指を何んとも云へない好い形に折り曲げた左手で、鬢の後れ毛をかき撫でる序でに、地味に装つて来た黒のリボンに觸つて見た。青年の前に座を取つてゐた四十三四の脂ぎつた商人の男は、あたふたと立ち上つて自分の後ろのシェードを下ろして、折ふし横さしに葉子に照りつける朝の光線を遮つた。

紺の飛び白に書下駄をつつかけた青年に對して、素性が知れぬほど顔にも姿にも複雑な表情を湛へたこの女性の對照は、幼い少女の注意をすら牽かずにはおかなかつた。乗客一同の視線は綾をなして二人の上に亂れ飛んだ。葉子は自分が青年の不思議な對照になつてゐるといふ感じを、快く迎へてでもゐるやうに、青年に對して殊更に親しげな態度を見せた。

品川を過ぎて短いトンネルを汽車が出ようとする時、葉子はきびしく自分を見据ゑる眼を眉のあたりに感じて徐ろにその方を見かへつた。それは葉子が思つた通り、新聞に見入つてゐるかの瘦せた男だつた。男の名は木部孤第と云つた。葉子が車内に足を踏み入れた時、誰れよ

りも先きに葉子に眼をつけたのはこの男であつたが、誰れよりも先きに眼を外らしたのもこの男で、すぐ新聞を日八分にさし上げて、それに讀み入つて素知らぬふりをしたのに葉子は氣がついてゐた。而して葉子に對する乗客の好奇心が衰へ始めた頃になつて、彼れけな氣に葉子を見詰め始めたのだ。葉子は豫めこの刹那に對する態度を決めてゐたから慌ても騒ぎもしなかつた。眼を鈴のやうに大きく張つて、親しい姫びの色を浮べながら、黙つたまゝで輕く點頭かうと、少し眉と顔とをそつちにひねつて、心持ち上向き加減になつた時、稲妻のやうに彼女の心に響いたのは、男がその好意に應じて微笑みかはす様子のないと云ふ事だつた。實際男の一字一眉は深くひそんで、その兩眼は一と際鋭さを増して見えた。それを見て取ると葉子の心の中はかすとなつたが、笑みかまけた昨はそのまま、する／＼と男の顔を通り越して、左側の古藤の血氣のいゝ頬のあたりに落ちた。古藤は縁戸のガラス越しに、切割りの唄を眺めてつくねんとしてゐた。

「又何か考へていらつしやるのね」
葉子は瘦せた木部にこれ見よがしと云ふ物陰で華やかに云つた。

葉子はこんな眼もくらむやうな晴れ／＼しいものを見た事がなかった。女の本能が生れて始めて芽をふき始めた。而して解剖刀のやうな目頃の批判力は鉛のやうに鈍つてしまつた。葉子の母が暴力では及ばないのを悟つて、すかしつなだめつ、良人までを道具につかつたり、木部の尊信する牧師を方便にしたりして、あらん限りの智力を搾つた。懐柔策も、何んの甲斐もなく、冷静な思慮深い作戦計畫を根氣よく續ければ潰ける程、葉子は木部を後ろにかばひながら、健氣にもか弱い女の手一つで戦つた。而して木部の全身全霊を爪の先き想ひの果てまで自分のものにしなければ、死んでも死ねない様子が見えたので、母もとう／＼我を折つた。而して五箇月の恐ろしい試煉の後に、両親の立會はない小さな結婚の式が、秋の或る午後、木部の下宿の一間で執行はれた。而して母に對する勝利の分捕品として、木部は葉子一人のものとなつた。

木部はすぐ葉山に小さな隠れ家のやうな家を見付け出して、二人は陸まじくそこに移り住む事になつた。葉子の戀は然しながらそ／＼と冷え始めるのに二週間以上を要しなかつた。彼女は競争すべからぬ關係の競争者に對して見

事に勝利を得てしまつた。日昔戦争といふものの光も太陽が西に沈む度毎に減じて行つた。それ等はそれとして一番葉子を失望させたのは同棲後始めて男といふものの裏を返して見た事だつた。葉子を確實に占領したといふ意識に裏書された木部は、今までおくびにも葉子に見せなかつた女々しい弱點を露骨に現はし始めた。後ろから見た木部は葉子には取り所のない平凡な氣の弱い精力の足りない男に過ぎなかつた。筆一本握る事もせずに朝から晩まで葉子に膠着し、感傷的な癖に恐ろしく我儘で、今日々々の生活にさへ事缺きながら、萬事を葉子の肩になげかけてそれが當然な事でもあるやうな鈍感なお坊ちゃん染みた生活のしかたが葉子の鋭い神經をいら／＼させ出した。始めの中は葉子もそれを木部の詩人らしい無邪氣さからだと思つて見た。而してせつせつと世話女房らしく切り廻す事に興味をつないで見た。然し心の底の恐ろしく物質的な葉子にどうしてこんな辛抱がいつまでも續かうぞ。結婚前までは葉子の方から迫つて見たにも係はらず、崇高と見えるまでに極端な潔癖屋だつた彼れであつたのに、思ひもかけぬ食慾な陋劣な情慾の持主で、而かもその欲求を貧弱な體質で表はさうとするのに出

喰はすと 葉子は今まで自分で、氣が附かずにかた自分を鏡で見せつけられたやうな不快を感じずにはゐられなかつた。夕食を済ますと葉子はいつでも不満と失望とでいら／＼しながら夜を迎へねばならなかつた。木部の葉子に對する愛着が募れば募る程、葉子は一生が暗くならまざるやうに思つた。かうして死ぬために生れて來たのではない筈だ。さう葉子はく／＼しながら思ひ始めた。その心持が又木部に響いた。木部は段々監視の眼を以て葉子の一舉一動を注意するやうになつて來た。同棲してから半箇月もたない中に、木部はやゝもすると高壓的に葉子の自由を束縛するやうな態度を取るやうになつた。木部の愛情は骨に沁みる程知り抜きながら、鈍つてゐた葉子の批判力は父癡きかけられた。その鋭くなつた批判力で見ると、自分と似寄つた姿なり性格なりを木部に見出すといふ事は、自然が巧妙な皮肉をやつてゐるやうなものだつた。自分もあんな事を想ひ、あんな事を云ふのかと思ふと、葉子の自尊心は思ふ存分に傷けられた。

外の原因もある。然しこれだけで十分だつた。二人が一緒になつてから二箇月目に、葉子に突然失踪して、父の親友で、所謂親事のよく解る

一人として葉子に對して怨恨を抱いたり、憤怒を漏らしたりするものはなかつたから。而して少しひがんだ者達は自分の愚を認めるよりも葉子を年不相應にませた女と見る方が勝手だつたから。

それは戀によろしい若葉の六月の或る夕方だつた。日本橋の商店にある葉子の家には七八人の若い従軍記者がまだ戦塵の抜けきらないやうな風をして集まつて來た。十九でゐながら十七にも十六にも見れば見られるやうな華奢な可憐な姿をした葉子が、憤みの中にも才走つた面影を見せて、二人の妹と共に給仕に立つた。而して強ひられるまゝに、ケーベル博士から罵られたヴァイオリンの一手も奏でたりした。木部の全靈はたゞ一と目でこの美しい才氣の漲り溢れた葉子の容姿に吸ひ込まれてしまつた。葉子も不思議にこの小柄な青年に興味を感じた。而して運命は不思議な惡戯をするものだ。木部はその性格ばかりでなく、容貌——骨細な、顔の造作の整つた、天才風に若白い滑らかな皮膚の、よく見ると他の部分の纖麗な割合に下顎骨の發達した——まで何處か葉子のそれに似てゐたから、自意識の極度に強い葉子は、自分の姿を木部に見付け出したやうに思つて、一種の好奇

心を挑發せられずにはゐなかつた。木部は燃え易い心に葉子を焼くやうにかき廻いて、葉子は又才走つた頭に木部の面影を強く宿して、その一夜の饗宴はさりげなく終りを告げた。

木部の記者としての評判は破天荒といつてもよかつた。苟も文學を解するものは木部を知らないものゝなかつた。人々は木部が成した思想を掲げて世の中に出て來る時の華々しさを噂し合つた。殊に日露戰役といふ、その當時の日本にしては絶大な背景を背負つてゐるので、この年少記者は或る人々からは英雄の一人とさへして崇拜された。この木部が度々葉子の家を訪れるやうになつた。その感傷的な、同時に何處か大望に燃え立つたやうなこの青年の活氣は、家中の人々の心を捕へないでは置かなかつた。殊に葉子の母が前から木部を知つてゐて、非常に存爲多望な青年だと讃めそやしたり、公衆の前で自分の子とも弟ともつかぬ態度で木部をもてあつかつたりするのを見るのと、葉子は胸の中でせゝら笑つた。而して心を許して木部に好意を見せ始めた。木部の熱意が見る／＼抑へがたく募り出したのは勿論の事である。

かの六月の夜が過ぎてから程もなく木部と葉

子とは戀といふ言葉で見られねばならぬやうな間柄になつてゐた。かうぶ、場合葉子がどれ程戀の場を技巧化し藝術化するに巧みであつたかはぶふに及ばない。木部、寢ても起きてても夢の中にあるやうに見えた。二十五といふその頃まで熱心な情者で、倫敦徒風の誇りを嘯き、立場としてゐた木部がこの初めに於てこれ程眞剣になつてゐたか想像する事が出来る。葉子は思ひもかけず木部の火のやうな情熱に焼かれようとする自分を見出す事が感心だつた。

その中に二人の間柄はすぐ葉子の母に感づかれた。葉子に對して豫てから或る事では一種の敵意を持つてさへゐるやうに見えるその母が、この事件に對して嫉妬とも思はれる程嚴重な故障を持ち出したのは不思議でない。ぶふべき境を通り越してゐた、世に慣れ切つて、落ち付き拂つた中年の婦人が、心の底の動搖に刺戟されてたくらみ出すと見える淺慮な氣計は、年若い一人の急所をそ／＼と窺ひよつて、腸も通れと突き刺してくる。それと地ひひかれて木部が命に限り業續くめを見／＼、葉子の心に純粹な同情と、男に對する無條件的な捨身な態度が生れ始めた。葉子は自分で造り出した自身の罪に多愛もなく酔ひ始めた。

ケチの包みを押へながら、下駄の先きをぢつと見入つてしまつた。今は車内の人が申合せて侮辱でもしてゐるやうに葉子には思へた。古藤が隣り座にゐるのさへ一種の苦痛だつた。その限想的な無邪氣な態度が、葉子の内部的經驗や苦悶と少しも縁が續いてゐないで、二人の間には金輪際理解が成り立ち得ないと思ふと、彼女は特別に手色の變つた自分の蹠涯にそつと竄ひ寄りうとする探偵をこの青年に見出すやうに思つて、その五分刈りにした地蔵頭までが顧みるにも足りない木の屑か何んぞのやうに見えた。

瘦せた木部の小さな輝いた眼は、依然として葉子を見詰めてゐた。

何故木部はかほどまで自分を侮辱するのだらう。彼れは今でも自分を女とあなどつてゐる。小ぼけな才力を何でも頼んでゐる。女よりも淺ましい熱情を鼻にかけて、今でも自分の運命に差出がましく立ち入らうとしてゐる。あの自信のない臆病な男に自分はさつき娼を見せようとしたのだ。而して彼れは自分がこれ程まで誇りを捨てて與へようとした特別の好意を瞞を反へて退けたのだ。

瘦せた木部の小さな眼は依然として葉子を見

つめてゐた。

この時突然けたましい笑ひ聲が、何か熱心に話合つてゐた二人の中年の紳士の口から起つた。その笑ひ聲と葉子と何んの關係もない事は葉子にも分り切つてゐた。然し彼女はそれを聞くと、もう慾にも我慢がし切れなくなつた。而して右の手を深々と帶の間にさし込んだまゝ立ち上りざま、

「汽車に酔つたんでせうかしらん、頭痛がする」と捨ててのやうに古藤に云ひ残して、いきなり縁戸を開けてデッキに出た。

大分高くなつた日の光がばつと大森田圃に照り渡つて、海が笑ひながら光るのが、並木の向うに廣過ぎる位一どきに眼に這入るので、輕い眩暈をさへ覺える程だつた。鐵の手欄にすがつて振り向くと、古藤が續いて出て來たのを知つた。その顔には心配さうな驚きの色が明らかさまに現はれてゐた。

「ひどく痛むんですか」

「えゝ可なりひどく」

と答へたが面倒だと思つて、

「いゝえ這入つてゐて下さい。大袈裟に見えるといやですから：大丈大危なかりませんと

も……と云ひ足した。古藤は強ひてとめようとはしなかつた。而して、

「それぢや這入つてゐるが本當に危なう御座んすよ……用があつたら呼んで下さいよ」

とだけ云つて素直に這入つて行つた。

「Sim Leon」

葉子は心の中であつたやうと、燒き捨てたやうに古藤の事なんぞは忘れてしまつて、手欄に臂をついたまゝ放心して、晴夏の景色をつゝむ引き締つた空氣に顔をなぶらした。木部の事も思はない。緑や藍や黄色の外、これと云つて輪郭のはつきりした自然の姿も眼に映らない。唯ぞ涼しい風が習々と變つた毛をそよがして通るのを快いと思つてゐた。汽車は目まぐるしい程の快速力で走つてゐた。葉子の心は唯々渾沌と暗く固まつた物の周りを飽きる事もなく幾度も左から右に、右から左に廻つてゐた。かうして葉子に取つては永い時間が過ぎ去つたと思はれる頃、突然頭の中を引つ掻きまはすやうな激しい音を立てて汽車に六郷川の鉤橋を渡り始めた。葉子は思はずきよつとして夢からさめたやうに前を見ると、鉤橋の鉤材が線手になつて上を下へと飛び跳るので、葉子に思はず

高山といふ醫者の病室に閉籠もらしてもらつて、三日ばかりは食ふ物も食はずに、淺ましき男の爲めに眼のくらんだ自分の不覺を泣き慄んだ。木部が狂氣のやうになつて、やうやく葉子の隠れ場所を見つけて會ひに來た時は、葉子は冷靜な態度でしら／＼しく面會した。而して「あなたの將來のお爲めに時度なりませんから」と何氣なげに云つて退けた。木部がその言葉に骨を刺すやうな諷刺を見出しかねてゐるのを見ると、葉子は白く揺つた美しい齒を見せて聲を出して笑つた。

葉子と木部との間柄はこんな多愛もない場而を區切りにははかなくも破れてしまつた。木部はあらんかぎりの手段を用ゐて、なだめたり、すかしたり、強迫までして見たが、凡ては全く無益だつた。一旦木部から離れた葉子の心は、何者も觸れた事のない處女のそののやうにさへ見えた。

それから普通の期間を過ぎて葉子は木部の子を分娩したが、固よりその事を木部に知らせなかつたばかりでなく、母にさへ或る他の男によつて生んだ子だと告白した。實際葉子はその後、母にその告白を信じさす程の生活を敢へてしてゐたのだつた。然し母は眼敏くもその赤坊

に木部の面影を探り出して、基督信徒にあるまじき惡意をこの憐れな赤坊に加へようとした。赤坊は女中部屋に運ばれたまゝ、兩球の膝には一度も乗らなかつた。意地の悪い葉子の父だけは孫の可愛さからそつと赤坊を葉子の乳母の家に引き取るやうにしてやつた。而してそのまじめな赤坊は乳母の手一つに育てられて定子といふ六歳の童女になつた。

その後葉子の父は死んだ。母も死んだ。木部は葉子と別れてから、狂瀾のやうな生活に身を任せた。衆議院議員の候補に立つても見たり、純文學に指を染めても見たり、旅僧のやうな放浪生活も送つたり、妻を持ち子を成し、酒に耽り、雜誌の發行を企てた。而してその凡てに一々不満を感じるばかりだつた。而して葉子が久し振りで汽車の中で出遇つた今は、妻子を里に返してしまつて、或る由緒ある堂上華族の寄食者となつて、これと云つてする仕事もなく、胸の中だけには色々々空想を浮べたり消したりして、兎角回想に耽り易い日送りをしてゐる時だつた。

三

その木部の眼は執念くもつきまづはつた。然

し葉子はそつちを見向かうともしなかつた。而して二等の切符でもかまはないから何故一等に乘らなかつたのだらう。かうぶ事が暇度あると思つたからこそ、乗り込む時もさう云はうとしたのだのに、氣が利かないつちやないと思ふと、近頃になく起さぬけから冴え／＼してゐた氣分が、沈みかけた秋の日のやうに陰つたり滅入つたりし出して、冷たい血がポンプにでもかけられたやうに腦の透間といふ透間をかたく閉ざした。たまらなくなつて向ひの窓から景色でも見ようとすると、そこにはシェードが下ろしてあつて、例の四十三四の男が厚い肩をゆる／＼開けたまゝで、馬鹿な顔をしながらまじ／＼と葉子を見やつてゐた。葉子はむつ／＼としてその男の額から鼻にかけたあたりを、遠慮もなく發矢と眼で鞭つた。兩人は不當に鞭たれた人が泣き出す前にするやうに、笑ふやうな、はにかんだやうな、不思議な顔のゆがめ方をして、さすがに顔を背けてしまつた。その意氣地のない様子がまた葉子の心をいら／＼させた。右に眼を移せば三四人先きに木部がゐた。その鋭い小さな眼は依然として葉子を見守つてゐた。葉子は震へを覺えるばかりに激昂した神經を兩手に集めて、その兩手を握り合せて膝の上にハン

そこを離れようとはしなかった。而してその眼には淋しく涙がたまつてゐた。

「又會ふ事があるだらうか」

葉子はそゝろに不思議な悲哀を覺えながら心の中でさう云つてゐたのだつた。

四

列車が川崎驛を發すると、葉子はまた手欄に倚りかゝりながら木部の事を色々と思ひめぐらした。稍々色づいた田圃の先きに松並木が見えて、その間から低く海の光る、平凡な五十三次風な景色が、電柱で句讀を打ちながら、空洞のやうな葉子の眼の前で閉ぢたり開いたりした。

赤崎崎も飛びかはす時節で、その群れが、燈石から打ち出される火花のやうに、赤い印象を眼の底に残して亂れあつた。何時見ても新開地じみて見える神奈川を過ぎて、汽車が横濱の停車場に近づいた頃には、八時を過ぎた太陽の光が、紅葉坂の櫻並木を黄色く見せる程に暑く照らしてゐた。

煤煙で眞黒にすゝけた煉瓦壁の蔭に汽車が停ると、中から一番先きに出て來たのは、右手にかのオリウ色の包物を持った古藤だつた。葉子はバラソルを杖に弱々しくデツキを降りて、

古藤に助けられながら改札口を出たが、ゆるゆる歩いてゐる間に乗客は先きを越してしまつて、二人は一番あとになつてゐた。客を取りおくれた十四五人の停車場附きの車だが、待合部屋の前にかたまりながら、やつて見える葉子に眼をつけて何かと噂し合ふのが二人の耳にも這入つた。「むすめ」「らしやめん」といふやうな言葉さへそのはしたない言葉の中には交つてゐた。開港場のがさつな卑しい調子はすぐ葉子の神經にびり／＼と感じて來た。

何しろ葉子は早く落ち付く所を見付け出したがつた。古藤は停車場の前方の川添ひにある休憩所まで走つて行つて見たが、歸つて來るとぶり／＼して、驛夫のあがりらしい茶店の主人は古藤の書生つば姿をいかにも馬鹿にしたやうな斷り方をしたといつた。二人は仕方なくうるさく附き纏はる車夫を追ひ拂ひながら、潮の香の漂つた濁つた小さな運河を渡つて、ある狭い穢い町の中程にある一軒の小さな旅人宿に這入つて行つた。横濱といふ所には似もつかぬやうな古風な外構へで、美濃紙のくすぶり返つた置行燈には太い筆付きで相模屋と書いてあつた。葉子は何んとなくその行燈に興味を牽かれてしまつてゐた。悪戯好きなその心は、嘉永

頃の浦賀にでもあればありさうなこの旅館屋に足を休めるのを恐ろしく面白く思つた。店にしがんで番頭と何か話してゐるあばずれたやうな女中までが眼に留つた。而して葉子が體よく物を言はうとしてゐると、古藤がいきなり取りかまはない調子で、

「何處か静かな部屋に案内して下さい」と無愛想に先きを越してしまつた。

「へい／＼、どうぞこちらへ」

女中は二人をまじ／＼と見やりながら、客の前もかまはず、番頭と眼を見合せて、蔑んだらしい笑ひを漏らしして案内に立つた。

ぎし／＼と板ぎしみのする眞黒な狭い階子段を上つて、西に突き當つた六疊程の狭い部屋に案内して、突つ立つたままで荒つぽく二人を不思議さうに女中は見比べるのだつた。油じみた襟元を思ひ出させるやうな、西に出窓のある薄汚い部屋の中を女中をひつくるめて睨み廻しながら古藤は、

「外部よりひどい……何處か他所にしませうか」

と葉子を見返つた。葉子はそれには平を假さずに、思慮深い貴女のやうな物腰で女中の方に向いて云つた。

デッキのパンネルに身を退いて、兩袖で顔を押しへて物を念じるやうにした。

さうやつて氣を静めようと眼をつぶつてゐる中に、眈を通し袖を通して木部の顔と殊にその輝く小さな兩眼とがまざりと想像に浮び上つて來た。葉子の神經は磁石に吸ひ寄せられた砂鐵のやうに、堅くこの一つの幻像の上に集注して、車内にあつた時と同様な緊張した恐ろしい狀態に返つた。停車場に近づいた汽車は段々と歩度をゆるめてゐた。田圃のこゝかしこに、俗惡な色で塗り立てた大きな廣告看板が連ねて建てあつた。葉子は袖を顔から放して、氣持の悪い幻像を拂ひのけるやうに、一つ／＼その看板を見迎へ見送つてゐた。處々に火が燃えるやうにその看板は眼に映つて木部の姿はまたおぼろになつて行つた。その看板の一つに、長い黒髪を下げた姫が經卷を持つてゐるのがあつた。その胸に書かれた「中將湯」といふ文字を、何氣なしに一字づつ讀み下すと、彼女は突然私生兒の定子の事を思ひ出した。而してその父なる木部の姿は、かゝる亂雑な聯想の中心となつて、またまざりと燒きつくやうに現はれ出した。

その現はれ出した木部の顔を、謂はば心の中の

眼で見つめてゐる中に、段々とその鼻の下から露が消え失せて行つて、輝く眸の色は優しい肉感的な溫みを持ち出して來た。汽車は徐々に進行をゆるめてゐた。稍々荒れ始めた三十男の皮膚の光澤は、神經的な青年の蒼白い膚の色となつて、黒く光つた軟かい頭の毛が際立つて白い額を撫でてゐる。それさへがはつきり見え始めた。列車は既に川崎停車場のプラットホームに這入つて來た。葉子の頭の中では、汽車が止り切る前に仕事をし通さねばならぬといふ風に、今見たばかりの木部の姿がどんとん若やいで行つた。而して列車が動かなくなつた時、葉子はその人の傍にでもゐるやうに恍惚とした顔付で、思はず識らず左手を上げて——小指をやさしく折り曲げて——軟かい鬢の後れ毛をかき上げてゐた。これは葉子が人の注意を牽かうとする時にはいつでもする姿態である。

この時練戸がけたましく開いたと思ふと、中から二三人の乗客がどや／＼と現はれ出て來た。

而かもその最後から、涼しい色合のインパネスを羽織つた木部が續くのを感じて、葉子の心臓は思はずはつと處女の血を盛つたやうに時

めいた。木部が葉子の前まで來てすれ／＼にその側を通り抜けたやうとし、時、二人の眼はもう一度しみ／＼と出遇つた。木部の眼は好意を込めた微笑に浸されて、葉子の出やうによつては、直ぐにも物を云ひ出しさうに唇さへ震へてゐた。葉子も今まで續けてゐた回想の筋力に引かされて、思はず微笑みかけたのであつたが、その瞬間燕返しに、見も知りもせぬ路傍の人に與へるやうな、冷刻な驕慢な光をその眸から射出したので、木部の微笑は衰れにも枝を離れた枯葉のやうに、二人の間を空しくひらめいて消えてしまつた。葉子は木部のあわて方を見ると、車内で彼れから受けた侮辱に可なり小氣味よく酬い得たといふ誇りを感じて、胸の中がやゝすが／＼しくなつた。木部は疲れたその右肩を癖のやうに怒らしながら、急ぎ足に瀾歩して改札口の所に近づいたが、切符を懷中から出す爲めに立ち止つた時、深い悲しみの色を眉の間に漲らしながら、振り返つてやつと葉子の顔に眼を注いだ。葉子はそれを知りながら固より侮蔑の一瞥をも與へなかつた。

木部が改札口を出て姿が隠れようとした時、今度は葉子の眼がちつとその後姿を逐ひかけた。木部が見えなくなつた後も、葉子の視線は

下りて来て、危く親佐に打つ突からうとしてその側をすりぬけながら、何か意味の分らない事を早口に云つて走り去つた。その島田指や帯の亂れた後姿が、嘲弄の言葉のやうに眼を打つと、親佐は唇を噛みしめたが、足音だけはしとやかに階子段を上つて、いつもに似ず書齋の戸の前に立ち止つて、しはぶきを一ツとして、それから規則正しく間をおいて三度戸をノックした。

かう云ふ事があつてから五日とたぬ中に、葉子の家庭即ち早月家は砂の上の塔のやうに脆くも崩れてしまつた。親佐は殊に冷静な底氣味悪い態度で夫婦の別居を主張した。而して日頃の柔和に似ず、傷ついた牡牛のやうに元通り入つて色々云ひなさうとした親類達の言葉を、きつぱりと却けてしまつて、良人を金店のだつ廣い住宅にたつた一人残したまゝ、葉子とともに三人の娘を連れて、親佐は仙臺に立ち退いてしまつた。木部の友人等が葉子の不人情を怒つて、木部のとめるのも聴かずに、社會から葬つてしまへといひしめてゐるのを葉子は聞き知つてゐたから、普段ならば一も二もなく父を庇つて母に楯をつくべき所を、素直に母のする通りに

なつて、葉子は母と共に仙臺に埋もれに行つた。母は母で、自分の家庭から葉子のやうな娘の出た事を、出来るだけ世間に知られまいとした。女子教育とか、家庭の尊嚴とかいふ事を折ある毎に口にしてゐた親佐は、その言葉に對して虚偽と云ふ利子を拂はねばならなかつた。一方を採み消す爲めには一方にどんと火の手を擧げる必要がある。早月母子が東京を去ると間もなく、ある新聞は早月ドクトルの女性に關するふいだらを書き立てて、それにつけての親佐の苦心と貞操とを吹聴した序でに、親佐が東京を去るやうになつたのは、熱烈な信仰から来る義憤と、愛兒を父の惡感化から救はうとする母らしい努力に基づくものだ。その爲めに彼女は基督教婦人同盟の副會頭といふ顯要な位置さへ投げ棄てたのだと書き添へた。

仙臺に於ける早月親佐は暫らくの間は深く沈黙を守つてゐたが、見る／＼周囲に人を集めて華々しく活動をし始めた。その客間は若い信者や、慈善家や、藝術家達のサロンとなつて、そこからリバイバルや、慈善市や、音楽會といふやうなものが形を取つて生れ出た。殊に親佐が仙臺支部長として働出した基督敎婦人同盟の運動は、その當時野火のやうな勢で

全國に擴がり始めた赤十字社の勢力にもをさす劣らない程の盛況を呈した。知事令夫人も、名だたる素封家の奥さん達もその集會には列席した。而して三箇年の月日は早月親佐を仙臺には無くてならぬ名物の一つにしてしまつた。性質が母親と何處か似過ぎてゐる爲めか、似たやうに見えて一と調子違つてゐる爲めか、それとも自分を憤しむ爲めであつたか、はたの人に判らなかつたが、兎に角葉子はそんな華やかな雰圍氣に包まれながら、不思議な程沈黙を守つて、碌々晴れの座などには姿を現はさないでゐた。それにも拘らず親佐の客間に吸ひ寄せられる若い人々の多數は葉子に吸ひ寄せられてゐるのだつた。葉子の控目なしをらしい様子がいやが上にも人の噂を引く種となつて、葉子といふ名は、多才で、情緒の細やかな、美しい命兒を誰れにでも思ひ起させた。彼女が立すぐれた眉目形は花柳の人達をさへ羨ましがらせた。而して色々な風聞が、清教徒風に質素な早月の住居の周囲を霞のやうに取り捲き始めた。

突然小さな仙臺市は雷にでも打たれたやうに或る朝の新聞記事に注意を向けた。それはその新聞の商賣敵である或る新聞の社主であり主

「隣室も明いてゐますか……さう。夜までは何處も明いてゐる……さう。お前さんがこゝの世話をしておいで？……なら餘の部屋も序でに見せておもらひませうか知らん」

女中はもう葉子には輕蔑の色は見せなかつた。而して心得顔に次ぎの部屋との間の襖を開ける間に、葉子は手早く大きな銀貨を紙に包んで、

「少し加減が悪いし、又色々お世話になるだらうから」

と云ひながら、それを女中に渡した。而してずつと竝んだ五つの部屋を一つ一つ見て廻つて、掛軸、花瓶、團扇さし、小屏風、机と云ふやうなものを、自分の好みに任せてあてがはれた部屋のとすつかり取りかへて、隅から隅まで綺麗に掃除をさせた。而して古藤を正座に据ゑて小ざつぱりした座布團に坐ると、につこり微笑みながら、

「是れなら半日位我慢が出来ませう」と云つた。

「僕はどんな所でも平氣なんですがね——古藤はかう答へて、葉子の微笑を追ひながら安心したらしく、

「氣分はもうなほりましたね」

と附け加へた。

「え——」

と葉子は何げなく微笑を續けようとしたが、その瞬間につと思ひ返して眉をひそめた。葉子には假病を續ける必要があつたのをつい忘れようとしたのだつた。それで、

「ですけれどもまだこんななんです。こら動悸が」

と云ひながら、地味な風通の單衣物の中にかくれた華やかな襦袢の袖をひらめかして、右手を力なげに前に出した。而してそれと同時に呼吸をぐつとつめて、心臓と覺しいあたりに烈しく力をこめた。古藤はすき通るやうに白い手頸を暫らく撫で廻してゐたが、脈所に探りあてると急に驚いて眼を見張つた。

「どうしたんです、え、ひどく不規則ぢやありませんか……痛むのは頭ばかりですか」

「いゝえお腹も痛みはじめたんです」

「どんな風に——」

「ぎゅつと錐でももむやうに……よくこれがあるんで困つてしまふんですのよ」

古藤は靜かに葉子の手を離して、大きな眼で深々と葉子をみつめた。

「醫者を呼ばなくつても我慢が出来ますか——」

葉子は苦しげに微笑んで見せた。

「あなただつたら屹度出来ないでせうよ……慣れつこですから堪へて見ますわ。その代りあなた、永田さん……永田さん、ね、郵政會社の安店長の……あすこに行つて船の切符の事を相談して来ていたやないでせうか。御迷惑ですわね、それでもそんな事まで御願ひしちやあ……宜う御座んす、私、車でそろそろ行きますから——」

古藤は女といふものはこれ程の健康の變調をよくもかうまで我慢をするものだと思ふやうな顔をして、勿論自分が行つて見ると云ひ張つた。

實はその日、葉子は身のまはりの小道具や化粧品を調へかたんに、米國行き船の切符を買ふ爲めに古藤を連れてこゝに來たのだつた。

葉子はその頃既に米國にゐる或る若い學士と許嫁の間柄になつてゐた。新橋で車夫が若奥様と呼んだのも、この事が出入りのものの間に公然と知れたつてゐたからの事だつた。

それは葉子が私生活を送つてから暫らく後の事だつた。ある冬之夜、葉子の母の親戚が何かの用でその良人の書齋に行かうと附子段を昇りかけると、上から小間使がまっしぐらに駆け

微笑んだらしい語氣で、

「そんな事はもうあなたの方が委しい筈ぢやありませんか：：心のいゝ活動家ですよ」

「あなたは？」

葉子はほん和高飛車に出た。而してにやりとしながらつくりと顔を上向きにはねて、床の間の一蝶のひどい偽物を見やつてゐた。古藤が咄嗟の返事に窮して、少しむつとした様子で答へ盡つてゐるのを見て取ると、葉子は今度は聲を調子落して、如何にも頼りないといふ風に、

「日盛りは暑いから何處ぞでお休みなさいましね。：：なるたけ早く歸つて来て下さいまし、もしかして、病氣でも悪くなると、こんな所で心細う御座んすから：よくつて」

古藤は何か平凡な返事をして、縁板を踏みならしながら出て行つてしまつた。

朝の中だけからつと破つたやうに晴れ渡つてゐた空は、午後から曇り始めて、眞白な雲が太陽の面を撫でて通る度毎に暑氣は薄れて、空一面が灰色にかき曇る頃には、膚寒く思ふほどに初秋の氣候は激變してゐた。時雨らしく照つたり降つたりしてゐた雨の脚も、やがてじめく／＼と降り續いて、煮しめたやうな穢い部屋の中

は殊更しと濕りが強く来るやうに思へた。葉子は居留地の方に在る外國人相手の洋服屋や小間物屋などを呼び寄せて、思ひ切つた贅澤な買物をした。買物をして見ると葉子は自分の財布のすぐ貧しくなつて行くのを怖れないではゐられなかつた。葉子の父は日本橋では一かどの門戸を張つた醫師で、収入も相當にはあつたけれども、理財の道に全く暗いのと、妻の親佐が婦人同盟の事業にばかり奔走してゐて、そのなみなみならぬ才能を少しも家の事に用ゐなかつた爲め、その死後には借金こそ残れ、遺産と云つては隣れな程しかなかつた。葉子は二人の妹を抱へながらこの苦しい境遇を切り抜けて來た。それは葉子であればこそし遂げて來たやうなものだつた。誰れにも貧乏らしい氣色は露ほども見せないでゐながら、葉子は始終貨幣一枚々々の重さを計つて仕拂ひするやうな注意をしてゐた。それなのに眼の前に異國情調の豊かな贅澤品を見ると、彼女の食慾は甘いものを見た子供のやうになつて、前後も忘れて懷中にありつたけの買物をしてしまつたのだ。使をやつて正金銀行で換へた金貨は今歸出されたやうな光を放つて懷中の底にころがってゐたが、それを何うする事も出来なかつた。葉子の心は急に

暗くなつた。戸外の天氣もその心持に合趣を打つやうに見えた。古藤はうまく永田から切符を買ふ事が出来るだらうか。葉子自身が行き得ない程葉子に對して反感を持つてゐる永田が、あの單純なタクトのない古藤をどんな風に扱つたらう。永田の口から古藤の色々な葉子の過去を聞かされはしなかつたらうか。そんな事を思ふと葉子は憎むが生み出す反動的な氣分になつて、湯をわかせて人浴し、震床をしかせ、最上等の三鞭酒を取りよせて、したゝかそれを飲むと前後も知らず眠つてしまつた。

夜になつたら泊り客が有るかも知れないと女中の云つた五つの部屋は矢張り空のまゝで、日がとつぷりと暮れてしまつた。女中がランプを持つて來た物音に葉子はやうやく眼を覺まして、仰向いたまゝ、燃けた大井に描かれたラングの丸い光輪をぼんやりと眺めてゐた。

その時じたつ／＼と濡れた足で階段を昇つて來る古藤の足音が聞こえた。古藤は何かに腹を立ててゐるらしい足どりでづか／＼と縁側を傳つて來たが、ふと立ち止ると大きな聲で相場の方に怒鳴つた。

「早く兩戸を閉めないか：：病人があるんぢやないか。：：」

筆である某が、親佐と葉子との二人に同時に懇
勸を通じてゐるといふ、全紙に互つた不倫極ま
る記事だつた。誰れも意外なやうな顔をしなが
ら心の中ではそれを信じようとした。

この日髪毛の濃い、口の大きい、色白な一
人の青年を乗せた人力車が、仙臺の町中を忙し
く駆け廻つたのを注意した人は恐らく無かつ
たらうが、その青年は名を木村といつて、日頃
から快活な活動好きな人として知られた男
で、その熱心な奔走の結果、翌日の新聞紙の廣
告欄には、二段抜きで、知事令夫人以下十四五
名の貴婦人の連名で、早月親佐の冤罪が雪がれ
る事になつた。この稀有な大袈裟な廣告が又小
さな仙臺の市中をどよめき渡した。然し木村
の熱心も口癖も葉子の名を廣告の中に入れる事
は出来なかつた。

こんな騒ぎが持ち上つてから早月親佐の仙臺
に於ける今までの聲望に急に無くなつてしまつ
た。その頃丁度東京に居残つてゐた早月が病
氣に罹つて藥に親しむ身となつたので、それ
いほに親佐は子供を連れて仙臺を切り上げる事
になつた。

木村はその後すぐ早月母子を追つて東京に
出て來た。而して毎日入りびたるやうに早月家

に出入して、殊に親佐の氣に入るやうになつた。
親佐が病氣になつて危篤に陥つた時、木村は
一生の願ひとして葉子との結婚を申し出た。

親佐はやはり母だつた。死期を前に控へて、一
番氣にせずにはゐられないものは、葉子の將來
だつた。木村ならばあの我儘な、男を男とも
思はぬ葉子に仕へるやうにして行く事が出来る
と思つた。而して基督敎婦人同盟の會頭をし
てゐる五十川女史に後事を託して死んだ。この
五十川女史のまあくんと云ふやうな不思議な饒
味な切盛りで、木村は、何處か不確實ではある
が、兎も角葉子を妻として得る保障を握つたの
だつた。

五

郵船會社の水田は夕方ではなければ會社から
退けまいと云ふので、葉子は宿屋に西洋物店
ものを呼んで、必要な買物をする事になつた。

古藤はそんなら其處らをほつつき歩いて來ると
云つて、例の麥桿帽子を帽子掛から取つて立ち
上つた。葉子は思ひ出したやうに肩越しに振り
返つて、

「あなた先刻バラゾルは骨が五本のがいゝと仰
しやつてね」

と云つた。古藤は冷淡な調子で、

「さういつたやうでしたね」
と答へながら、何か他の事でも考へてゐるらし
かつた。

「まあそんなにとぼけて……何故五本のがお好
き？」

「僕が好きと云ふんぢやないけれども、あなた
は何んでも人と違つたものが好きなんだと思つ
たんですよ」

「何處までも人をおからかひなさる……ひどい
事、行つていらつしやいまし」

と情を迎へるやうに云つて向き直つてしまつ
た。古藤が縁側に出ると又突然呼びとめた。醇
子にはつきり立姿をうつしたまゝ、

「何んです」

と云つて古藤は立ち戻る様子がなかつた。葉子
は惡戯者らしい笑ひを口のあたりに浮べてゐ
た。

「あなたは木村と學校が同じでいらしつたの
ね」

「さうですよ級は木村の……木村君の方が二つ
も上でしたがね」

「あなたはあの人を何うお思ひになつて」
丸で少女のやうな無邪氣な調子だつた。古藤は

と云つた。古藤は短兵急に、

「それにしても中々元氣ですねとたゞみかけた。

「それはお藥にこれを少しいたゞいたからでせうよ」

と三鞭酒を指した。

正面からはね返された古藤は黙つてしまつた。然し葉子も勢に乗つて追ひ迫るやうな事はしなかつた。矢頃を計つてから語氣をかつてずつと下手になつて、

「妙にお思ひになつたでせうね。惡う御座いましたね。こんな所に来てゐて、お酒なんか飲むのは本當に悪いと思つたんですけれども、氣分がふさいで来ると、私にはこれより外にお藥はないんですもの。先刻のやうに苦しくなつて来ると私はいつでもお湯を熱めにして浴つてから、お酒を飲み過ぎる位飲んで寝るんです。さうすると」

と云つて、一寸云ひよんで見せて、

「十分か二十分ぐつすり寝入るんですのよ……痛みも何も忘れてしまつていゝ心持に……。それから急に頭がかつと痛んで來ますの。而してそれと一緒に氣が減入り出して、もう／＼どうしていいか分らなくなつて、子供のやうに泣き

つゞけると、その中に又眠たくなつて一と寝入りしますのよ。さうするとその後はいくらかさつぱりするんです……。父や母が死んでしまつてから、頼みもしないのに親類達から餘計な世話をやかれたり、他人力なんぞを的にせずには、二人を育てて行かなければならないと思つたりすると、私のやうな、他人様と違つて風變りな……それら、五本の骨でせう」と淋しく笑つた。

「それですものどうぞ堪忍して頂戴。思ひきり泣きたむ時でも知らん顔をして笑つて通してゐると、こんな私見たいな氣まぐれ者になるんです。氣まぐれでもしなければ生きて行けなくなるんです。男の方にはこの心持はお分りにはならないかも知れないけれども」

かう云つてる中に葉子は、ふと本部との戀が果敢なく破れた時の、我れにもなく身に沁み渡る淋しみや、死ぬまで日蔭者であらねばならぬ私生子の定子の事や、計らずも今日までのあたり見た本部の、心からやつれた面影などを思ひ起した。而して更に、母の死んだ夜、日頃は見向きもしなかつた親類達が寄り集まつて來て、早月家には毛の末程も同情のない心で、早月家の善後策について、さも重大らしく勝手氣儘な

事を親切ごかしにしゃべり散らすのを聞かされた時、どうにでもなれと云ふ氣になつて、暴れ抜いた事が、自分にさへ悲しい思ひ出となつて、葉子の頭の中を矢のやうに早くひらめき通つた。葉子の顔には人に讀つてはゐない自信の色が現はれ始めた。

「母の初七日の時もね、私はたて續けにビールを何杯飲みましたらう。何んでも瓶がそこいらにごろ／＼轉がりました。そして仕舞には何が何んだか夢中になつて、宅に出入りするお醫者さんの膝を枕に、泣寝入りに寝入つて、夜中をあなた二時間の餘も寝續けてしまひましたわ。親類の人達はそれを見と一人歸り二人歸りして、相談も何も日茶苦茶になつたんですつて。母の眞實の前に置いて、私はそんな事までする人間ですの。お惻れになつたでせうね。いやな奴でせう。あなたのやうな方から御覽になつたら、さぞいやな氣がなさいませうねえ」

「えー」

「それでもあなた」

と葉子は切なさうに半ば起き上つて、

「外面だけで人のする事を何んとか仰しやるの

「この寒いのに何んだつてあなたも言ひ付けないんです」

今度ばかり葉子に云ひながら、建付けの悪い障子を開けていきなり中に這入らうとしたが「その瞬間にはつと驚いたやうな顔をして立ちすくんでしまった。

香水や、化粧品や、酒の香をぐつちやにした暖かいいきれがいきなり古藤に迫つたらしかつた。ランプがほの暗いので、部屋隅々までは見えないが、光りの照り渡る限りは、雑多に置きたらべられたなまめかしい女の服地や、帽子や、造花や、鳥の羽根や、小道具などで、足の踏みたて場もないまでになつてゐた。その一方に床の間に背にして、郡内の布團の上に掻巻を脇の下から羽織つた、今起しかへつたばかりの葉子が、派手な長袴一つで、東歐羅巴の嬢宮の人のやうに、片臂をついたまゝ横になつてゐた。而して入浴と酒とでほんのりほつた顔を仰向けて、大きな眼を夢のやうに見開いてぶつと古藤を見た。その枕許には三鞭酒の瓶が本式に氷の中につけてあつて、飲みさしのコップや、華奢な紙入れや、かのオリヴェ色の包物を、いごきの赤が火の蛇のやうに取り巻いて、その端が指端の二つ盛まつた大理石のやうな葉子の手に

に斥かれてゐた。

「お遅う御座んした事、お待たされなすつたんでせう。……さ、お這入りなさいまし。そんなもの足ででもどけて頂戴散らかしちまつてこの音楽のやうなすべくした調子の聲を聞くと、古藤は始めて「Hein」から口覚めた風で這入つて来た。葉子は左手を二の腕がのどき出るまでずつと延ばして、そこにあるものを一と拂ひに拂ひのけると、花壇の土を掘り起したやうに汚い煙が半煙ばかり現はれた。古藤は自分の帽子を部屋の隅にぶちなけて置いて、拂ひ残された細形の金鎖を片付けると、どつかと胡坐をかいて正面から葉子を見すゑながら、

「行つて来ました。船の切符もたしかに受取つて来ました」
と云つて懷ろの中を探りにかゝつた。葉子は一寸改まつて、

「ほんとに難有う御座いました」
と頭を下げたが、忽ち rough な眼付きをして、

「まあそんな事は何れあとで、ね、……何しろお寒かつたでせう、さ」
と云ひながら飲み残りの酒を盆の上に無造作に捨てて、二三度左手をふつて滴を切つてから、

コップを古藤にさしつけた。古藤の眼は何かに激昂してゐるやうに輝いてゐた。

「僕は飲みません」

「おや何故」

「飲みたくないから飲まないんです」

この角ばつた返答は男を手もなくあやし買れてゐる葉子にも意外だつた。それでその後の言葉は何う繼がうかと、一寸躊躇つて古藤の顔を見やつてゐると、古藤はたゞみかけて口を切つた。

「永田つてのはあれはあなたの知人ですか。思ひ切つて尊大な人間ですね。君のやうな人間から金を受取る理由はないが、兎に角あづかつて置いて、いづれ直接あなたに手紙でぶつてあげるから、早く歸れつてぶふんです、頭から。失敬な奴だ」

葉子はこの言葉に乗じて斜まつい心持を變へようと思つた。而して葛地に何か云ひ出さうとすると、古藤はおつかぶせるやうに言葉を續けて、

「あなたは一體まだ腹が痛むんですか」ときつぱり云つて堅く坐り直した。然しその時に葉子の陣立ては既に出来上つてゐた。始めの微笑みをそのまゝに、
「えゝ、少しはよくなりましてよ」

男の手で思ふ存分兩肩でも抱きすくめて欲しいやうな頼りなさを感じた。而して横腹に深々と手をやつて、さし込む痛みを堪へるらしい姿をしてゐた。古藤はやゝ暫らくしてから何か決心したらしく、ともに墓子を見ようとしたが、墓子の切なさうな衰れた様子を見ると、驚いた顔付をして我れ知らず墓子の方にゐざり寄つた。墓子はすかさず力のうに滑らかに身を起して逸早くもしつかり古藤のさし出す手を握つてゐた。而して、

「義一さん」と震へを帯びてぶつた聲は存分に涙に濡れてゐるやうに響いた。古藤は聲をわなゝかして、

「木村はそんな人間ぢやありませんよ」とだけ云つて黙つてしまつた。

駄目だつたと墓子はその途端に思つた。葉子の心持と古藤の心持とはちぐはぐになつてゐるのだ。何んといふ響きの悪い心だらうと墓子はそれをさげすんだ。然し様子にはそんな心持は少しも見せないで、頭から肩へかけてのなやかな線を風の前のつてせんの蔓のやうに震はせながら、二三度深々とうなづいて見せた。

暫らくしてから墓子は顔を上げたが、涙は少しも眼に溜つてはゐなかつた。而していとし

い弟でもいたはるやうに布圍から立ち上りざま、

「済みませんでした事、義一さん、あなた御飯はまだでしたのね」と云ひながら、腹の痛むを堪へるやうな姿で古藤の前を通りぬけた。湯でほんのりと赤らんだ素足に古藤の眼が鋭くちらつと宿つたのを感じながら、障子を細目に開けて手ををならした。

墓子はその晩不思議に悪魔じみた誘惑を古藤に感じた。童貞で無経験で戀の戯れには何んの面白味もなさうな古藤、木村に對してと云はず、友達に對しては酷しい義務觀念の強い古藤、さう云ふ男に對して墓子は今まで何んの興味をも感じなかつたばかりか、勵きのない没情漢と見限つて、口先ばかりで人間並みのあしらひをしてゐたのだ。然しその晩墓子はこの少年のやうな心を持つて肉の熟した古藤に罪を犯させて見たくつて堪らなくなつた。一夜の中に木村とは顔も合はせる事の出来ない人間にして見たくつて堪らなくなつた。古藤の童貞を破る手を他の女に任せるのが好ましくて堪らなくなつた。幾枚も皮を被つた古藤の心のどん底に隠れてゐる慾念を墓子の蠱惑力で掘り起して見たくつて堪らなくなつた。

氣取られない範圍で墓子があらゝ眼の線を與へたにも拘らず、古藤が慍々となつてしまつてそれに應ずる氣色のないのを見ると墓子は益々いらだつた。而してその晩は腹が痛んで何うしても東京に歸れないから、いやでも横濱に宿つてくれと云ひ出した。然し古藤は頑として聽かなかつた。而して自分で用かけて行つて、品もあらう譯か眞赤な布を一枚買つて歸つて來た。墓子はとうとう我を折つて、最終列車で東京に歸る事にした。

一等の客車には二人の外に乘客はなかつた。墓子はふとした出来心から古藤を陥れようとした目論見に失敗して、自分の征服力に對するかすかな失望と、自分の不快とを感じてゐた。客車の中では又色々と言つたといつて置きながら、汽車が動き出すと古藤の膝の側で毛布にくるまつたまま新橋まで寢通してしまつた。

新橋に着いてから古藤が細の切符を墓子に渡して人力車を二臺儲つて、その二つに乗ると、墓子はそれにかげよつて懷中から取り出した紙入れを古藤の膝に放り出して、左の袖をやさしくかき上げながら、

「今日のお立替へをどうぞその中から……明

は少し殘酷ですわ。……いゝえね」と古藤の何か云ひ出さうとするのを遮つて、今度はきつと坐り直つた。

「私は泣き言を云つて他人様にも泣いて頂かうなんて、そんな事はこれんばかりも思ひませんとも、なるなら何處かに大砲のやうな大きな方の強い人がゐて、その人が眞剣に怒つて、葉子のやうな人非人はかうしてやるぞと云つて、私を押へつけて心臓でも頭でも摧けて飛んでしまふ程折檻をしてくれたらと思ふんです。どの人もどの人もちやんと自分を忘れないで、いゝ加減に怒つたりいゝ加減に泣いたりしてゐるんですからねえ。何んだつてかう生溫いんでせう。

義一さん（葉子が古藤をかう名で呼んだのはこの時が始めてだつた）あなたが今朝、心の正直な何んとかだと仰しやつた木村に縁づくやうになつたのもその晩の事です。五十川が親類中に賛成して、暗れがましくも私を皆んなの前に引き出しておいで、罪人にもぶふやうに宣告してしまつたのです。私が一口でも云はうとすれば、五十川の云ふには母の遺言ですつて。死人に口なし。ほんとに木村はあなたが仰しやつたやうな人間ね。仙臺であんな事があつたで

せう。あの時知事の奥さんはじめ母の方は何とかしようが如くの方は保證が出来ないと仰しやつたんですとさ――

云ひ知らぬ飯茂の色が葉子の顔に漲つた。一所が木村は自分の考へを押し通しもしないで、おめくゝと新聞には母だけの名を出してあの廣告をしたんですの。

母だけがいゝ人になれば誰れだつて私を……さうでせう。その擧句に木村はいやあゝと私を妻にしたいんですつて。義一さん、男つてそれでいゝものなんですか。まあね物の響へがですわ。それとも言葉では何と云つても無駄だから實行的に私の潔白を立ててやらうとでも云ふんでせうか――

さう云つて激昂し切つた葉子は囁み捨てるやうに甲高くいゝと笑つた。

「一體私は一寸した事で好き嫌ひの出来る悪い質なんですからね。と云つて私はあなたのような生一本でもありませんのよ。

母の遺言だから木村と夫婦になれ。早く身を堅めて地道に暮さなければ母の名譽を汚す事になる。妹だつて裸かでお嫁入りも出来まいといはれれば、私立派に木村の妻になつて御覽に入れます。その代り木村が少しつらいだけ。

こんな事をあなたの前で云つては胸を惡くなさるでせうが、眞直なあなただと思ひますから、私もその氣で何もかも打ち明けて申してしまひますのよ。私の性質、境遇はよく御存じですわね。こんな性質でこんな境遇にある私がかう考へるのに若し間違ひがあつたら、どうか遠慮なく仰しやつて下さい。

あゝいやだつた事、義一さん、私こんな事はおくびにも出さずに今の今までしつかり胸にしまつて我慢してゐたのですけれど、今日は何つしたんでせう、何んだか遠い旅にでも出たやうな淋しい氣になつてしまつて――

弓弦を切つて放したやうに言葉が滑して葉子は俯向いてしまつた。日は何時の間にかとつぷりと暮れてゐた。じめ／＼と降り続く秋雨に濕つた夜風が細々と通つて來て、濕氣でたるんだ障子紙をそつと煽つて通つた。古藤は葉子の顔を見るのを避けるやうに、そこに散らばつた服地や障子などを眺め廻して、何んと遊客をしていゝのか、云ふべき事は腹にあるけれども言葉には現はせない風だつた。部屋は息苦しい程しんとなつた。

葉子は自分の言葉から、その時の有様から、妙にやる潮ない淋しい氣分になつてゐた。強い

とすると、廊下に叔母が突つ立つてゐた。

「もう起きたんですね。片付いたかい」と挨拶してまだ何か云ひたさうであつた。両親を失つてからこの叔母夫婦と、六歳になる白痴の一人息子とが移つて来て同居する事になつたのだ。葉子の母が、どこか重々しくつて男らしい風采をしてゐたのに引ひかへ、叔母は愛の毛の薄い、何處までも貧相に見える女だつた。葉子の眼はその帯しる襟かな、肉の薄い胸のあたりをちらつとくすめた。

「おやお早う御座います……あらかた片付きました」

と云つてそのまゝ二階に、かうとすると、叔母は爪に一粒垢のたまつた兩手をもやもやと胸の所でふりながら、遮るやうに立ちはだかつて、「あのお前さんが片付ける時に思つてゐたんだがね、明日のお見送りに私は着て行くものが無いんだよ。お母さんのもので間に合ふのは無いだらうか知らん。明日だけ借れば後はちゃんど始末をして置くんだから一寸見ておくれでないかい」

葉子は又かと思つた。働きのない良人に連れて添つて、十五年の間丸帯一つ買つて貰へなかつた叔母の訓練のない弱い性格が、かうさもし

くなるのを憐れまないでもなかつたが、物乞ひしながら、それでゐて、慾にかゝると圖々しい、人の隙ばかりつけねらふ仕打ちを見ると、蟲唾が走る程憎かつた。然しこんな思ひをするのも今日だけだと思つて部屋の中に案内した。叔母は空々しく氣の毒だとか済まないとか云ひ續けながら錠を下ろした簾を一々開けさせて、色々と勝手、好みを云つた末に、いうとした一と揃へを借る事にして、それから葉子の衣類までを兎や角云ひながら去りがてにいちくり廻した。臺所からは味噌汁の香がして、白痴の鼻がだらしなく泣き廻ける聲と、叔父が叔母を呼び立てる聲とがすが／＼しい朝の空気を濁すやうに聞こえて来た。葉子は叔母に、いゝ加減な返事をしながらその聲に耳を傾けてゐた。而して早月家の最後の離散といふ事をしみ／＼と感じたのであつた。電話は、或る銀行の重役をしてゐる親類がいゝ加減な口實を作つて只持つて行つてしまつた。父の書齋道具や貴重品は蔵書と一緒に纏賣りをされたが、賣上げ代はとう／＼葉子の手には這入らなかつた。住居は住居で、葉子の洋行後には、両親の死後何かに盡力したといふ親類の某が、二束三文で譲り受ける事に親族會議で決つてしまつた。少しばかりある

金銭と所と、葉子とに世に充てる名目で某々が保管する事になつた。そんな勝手放過なまねをされるのを葉子は見向きもしないで黙つてゐた。若し葉子が素直な女だつたら、却つて食ひ残しといふ程の遺産はあてがはれてゐたに違ひない。然し親族會議では葉子を手におへない女だとして、他所に嫁入つて行くのをいゝ事に、遺産の事には一切關係させない相談をした位は葉子は疾うに感付いてゐた。自分の財産となればなるべきものを一部分だけあてがはれて黙つて引つ込んでゐる葉子ではなかつた。それかと云つて、長女ではあるが、女の身として今財産に對する要求をする事の無益なのも知つてゐた。で「犬にやる積りでゐよう」と腹を堅めてかゝつたのだつた。今、後に残つたものは何がある。切り廻しよく見かけを派手にしてゐる割合に、不足勝ちな三人の姉妹の衣類諸道具が少しばかりあるだけだ。それを叔母は容赦もなくそこまで切り込んで来てゐるのだ。白紙のやうなほかない寂しさと、裸になるなら綺麗さつぱり裸になつて見せよう」といふ火のやうな反叛心とが、無茶苦茶に葉子の胸を冷やしたり焼いたりした。葉子はこんな心持になつて、先程の手紙の包を抱へて立ち上りなが

日は屹度入らして下さいますね、お待ち申しますことよ。左様なら」と云つて自分ももう一つの車に乗つた。葉子の紙入れの中には正金銀行から受取つた五十圓金貨八枚が這入つてゐる。而して葉子は古藤がそれをくづして立替へを取る氣遣ひのないのを承知してゐた。

六

葉子が米國に出發する九月二十五日は明日に迫つた。二百二十目の荒れそこねたその年の天氣は、何時までたつても定まらないで、氣違ひ日和とも云ふべき照り降りの亂雑な空合ひが續き通してゐた。

葉子はその朝暗い中に床を離れて、蔵の蔭になつた自分の小部屋に這入つて、前々から片付けかけてゐた衣類の始末をし始めた。模様や縮の派手なのは片端からほどこいて丸めて、次ぎの妹の愛子にやるやうにと片隅に重ねたが、その中には十三になる末の妹の貞世に着せても似合はしうな大柄なものもあつた。葉子は手早くそれをえり分けて見た。而して今度船に持ち込む四季の晴衣を、床の間の前にある眞黒に古ぼけたトランクの處まで持つて行つて、蓋

を開けようとしたが、不圖その蓋の眞中に書いてある「Y・K」といふ白文字を見て忙はしく手を控へた。是れは昨日古藤が油絵具と畫筆とを持つて來て書いてくれたので、驚き切らないうテレビンの香がまだかすかに残つてゐた。古藤は、葉子・早月の頭文字「Y・S・」書いてくれと折り入つて葉子の鞆んだのを笑ひながら退けて、葉子・木村の頭文字「Y・K」と書く前に、「S・K」とある字をナイフの先きで丁寧に削つたのだつた。「S・K」とは木村貞一のイニシャルで、そのトランクは木村の父が歐米を漫遊した時使つたものののだ。その古い色を見ると、木村の父の太つ腹な鋭い性格と、波瀾の多い生涯の極印がすわつてゐるやうに見えた。木村はそれを葉子の用に残して行つたのだつた。木村の面影はふと葉子の頭の中を抜けて通つた。空想で木村を想ふ事は、木村と顔を見合ふ時ほどの厭はしい思ひを葉子に起させなかつた。黒い髪を毛をびつたりと綺麗に分けて、恰かしい中高の細面に、健康らしい薔薇色を帯びた容顔や、甘過ぎる位人情に溺れ易い殉情的な性格は、葉子に一種のなつかしさをさへ感ぜしめた。然し實際顔と顔を向ひ合せると、二人は妙に會話さへはずまなくなるのだつた。その恰かしいのが厭

やだつた。柔和なのが氣に障つた。殉情的な癖に恐ろしく勘定高いのがたまらなかつた。年らしく主僕際まで踏み込んで事業に樂しむといふ父に似た性格さへ小ましくやられて見えた。殊に東京生れと云つてもいい、位に慣れた言葉や身のこなしの間に、ふと市北の郷土の香を嗅ぎ出した時には噁んで捨てたいやうな反感に襲はれた。葉子の心は今、おぼろけな回想から、實際膝つき合せて時に厭やだと思つた印象に移つて行つた。而して手に持つた晴衣をトランクに入れるのを控へてしまつた。長くなり始めた夜もその頃には漸く白み始めて蠟燭の黄色い焰が光の亡骸のやうに、ゆるぎもせずに點つてゐた。夜の問靜まつてゐた西風が思ひ出したやうに降しにぶつかつて、釘居の狭い通りを、河岸で仕出しをした若い者が、大きな掛簾でがらがらと車を牽きながら通るのが聞こえて出した。葉子は今日一日に眼まぐるしい程ある澤山の用事を一寸胸の中で動へて見て、大急ぎで其處を片付けて、錠を下ろすものには錠を下ろし切つて、戸口を一枚繰つて、そこから射し込む光で、片き出した手文庫からぎつしりつまつた男文字の手紙を引き出すと風呂敷に包み込んだ。而してそれを抱へて手燭を吹き消しながら部屋を出よう

しく見える女の生活、男と立ち並んで自分を立てて行く事の出来る女の生活……古い良心が自分の心をさいなむたびに、葉子は外國人の良心といふものを見たかと思つた。葉子は心の奥底でひそかに藝者を羨みもした。日本で女が女らしく生きてゐるのは藝者だけではないかとさへ思つた。こんな心持で年を取つて行く間に葉子は勿論何處も蹠いてゐた。而して獨りて膝の塵を拂はなければならなかつた。こんな生活を續けて二十五になつた今、ふと今まで歩いて來た道を振り返つて見ると、一所に葉子と走つてゐた少女達は、疾うの昔に就常な女になり済ましてゐて、小さく見える程遠くの方から、憐れむやうなさげすむやうな顔付きをして葉子の姿を眺めてゐた。葉子のもと來た道に引き返す事はもう出来なかつた。出來た所で引き返さうとする氣は微塵もなかつた。「勝手にするがよい」とさう思つて葉子は又譯もなく不思議な暗い力に引つ張られた。かう云ふはめになつた今、米國にゐようが日本にゐようが少しばかりの財産があらうが無からうが、そんな事は些細な話だつた。境遇でも變つたら何か起るかも知れない。元のまゝかも知れない。勝手になれ。葉子を心の底から動かしさうなものは一つも身近には見當らなかつた。

然し一つあつた。葉子の涙は唯も譯もなくほろ／＼と流れた。貞世は何事も知らずに罪なく眠りつゝいてゐた。同じ胎を借りてこの世に生れ出た二人の胸にはひとと共鳴する不思議な響きが潜んでゐた。葉子は吸ひ取られるやうにその響きに心を集めてゐたが、この子もやがては自分が通つて來たやうな道を歩くのかと思ふと、自分が悔れむとも妹を憐れむとも知れない切ない心に先き立たれて、思はずいつと貞世を抱きしめながら物を云はうとした。然し何を云ひ得ようぞ。喉もふさがつてしまつてゐた。貞世は抱きしめられたので始めて大きく眼を開いた。而して暫らくの間、涙に濡れた姉の顔をまじ／＼と眺めてゐたが、やがて黙つたまゝ小さい袖でその涙を拭ひ始めて、葉子の涙け新らしく湧き返つた。貞世は痛ましうに姉の涙を拭ひつゞけた。而して仕舞にはその袖を自分の顔に押しあてて何か云ひ／＼しやくり上げながら泣き出してしまつた。

七

葉子はその朝横濱の郵船會社の永田から手紙を受取つた。淺學者らしい風格の上手な字

で唐紙箋に書かれた文句には、自分は故早月氏には格別の交誼を受けてゐたが、貴女に對しては同様の交誼を続ける必要のないのを遺憾に思ふ、明晩(即ちその夜)にお招きにも、出席しかねる、と劍もほろ／＼に書き連ねて、追伸に、先日貴女から一言の紹介もなく訪問して來た素性の知れぬ青年の持參した金は要らないからお返しする。良人の定つた女の行動は、申すまでもないが憤むが上にも殊に憤むべきものだと思ふ、其は聞き及んでゐる、ときつぱり書いて、その金額だけの爲替が同封してあつた。葉子が古藤を連れて横濱に行つたのも、假病をつかつて宿屋に引き籠つたのも、實を云ふと船商賣をする人には珍らしい嚴格なこの永田に會ふ面世を望ける爲めだつた。葉子は小さく舌打ちして、爲替ごと手紙を引き裂かうとしたが、ふと思ひ返して、丹念に墨をすりおろして一字々々考へて書いたやうな手紙だけを残して、破いて屑紙に突つ込んだ。

葉子は地味な他所衣に輕衣を着かへて二階を降りた。朝食は喰へる氣がなかつた。妹達の顔を見るのも氣づよりだつた。

姉妹三人のゝ、藩の、開から開まで、きちんと、綺麗に片付いてゐるのに引きかへて、良母

ら、俯向いて手ざはりのいゝ絹物を撫で廻してゐる叔母を見下ろした。

「それぢや私まだ外に用がありますししますから鏡を下ろさずにおきますよ。御緩り御覽なさいまし。そこにかためてあるのは私が持つて行くんですし、こゝにあるのは愛と貞にやるのですから別にすつておいて下さい。」

と云ひ捨て、ずん／＼部屋を出た。往來には砂埃が立つらしく風が吹き始めてゐた。

二階に上つて見ると、父の書齋であつた十六畳の隣りの六畳に、愛子と貞世とが抱き合つて眠つてゐた。愛子は自分の寢床を早くとゝみながら愛子と呼び起した。愛子は驚いたやうに大きな美しい眼を開くと半分夢中で飛び起きた。愛子はいきなり嚴重な調子で、

「あなたは明日から私の代りをしないぢやならないんですよ。朝寝坊なんぞしてゐてどうするの。あなたがぐ／＼してゐると貞ちゃんがか可哀さうですよ。早く身じまひをして下のお掃除でもなさいまし。」

と睨みつけた。愛子は羊のやうに柔和な眼を眩ゆさうにして、姉を驚かしながら、着物を着かへて下に降りて行つた。愛子は何んとなく性の合はないこの妹が、階下段を降り切つたのを

聞きすまして、そつと貞世の方に近づいた。面ざしの葉子によく似た十三の少女は、汗じみた顔には下駄髪がねばり附いて、頬は熱でもあるやうに上氣してゐる。それを見ると葉子は骨肉のいとしきに思はず微笑させられて、その寢床にゐざり寄つて、その童女を羽がひに軽く抱きすくめた。而してしみ／＼とその寢床に跳め入つた。貞世の軽い呼吸は軽く葉子の胸に傳はつて来た。その呼吸が、傳はる處に、葉子の心は妙に滅入つて行つた。同じ胎を借りてこの世に生れ出た二人の胸には、かたと共鳴する不思議な響きが潜んでゐた。葉子は吸ひ取られるやうにその響きに心を集めてゐたが、果ては寂しい唯々寂しい涙がほろ／＼と留度なく流れ出るのだつた。

一家の離散を知らぬ顔で、女の身姿を唯々獨り米國の果てまでさすらつて行くのを葉子は格別何んとも思つてゐなかつた。長分憂の時分から、仰くまで意地の強い眼はしの利く性質を思ふまゝに増長させて、ぐん／＼と世の中を傍眼もふらずに通して二十五になつた今、こんな時にふと過去を振り返つて見ると、いつの間にかあたり前の女の生活をすりぬけて、たつた一人見も知らぬ野木に立つてゐるやうな思ひを

せずにはゐられなかつた。女學校や音樂學校で、葉子の強い個性に引きつけられて、理想の人でもあるやうに近寄つて来た少女達は、葉子におど／＼しい同性の戀を捧げながら、葉子に inspire されて、我れ知らず大膽な解放、振舞ひをするやうになつた。その頃、國民文學や「文學界」に燃灯をして、新しい思想運動を興さうとした血氣なロマンティックな青年達に歌の心を授けた女の多くは、一方葉子から血脈を引いた少女等であつた。倫理學者や教育家や家庭の主權者などもその頃から猜疑の眼を見張つて少女國を監視出した。葉子の多感な心は自分で知らない革命的とも云ふべき衝動の爲に、的なく格闘した。葉子は他人を笑ひながら、而して自分をさげすみながら、眞摯な大きな力に引きずられて、不思議な道に自覺なく迷ひ入つて、仕舞には驚きに走り出した。誰れも葉子の行く道のしるべをする人もなく、他の正しい道を教へてくれる人もなかつた。何と大きな聲で呼び留める人があるかと思へば、裏表の見えすいたてんにかけて、目のまゝの女であらせようとするものばかりだつた。葉子はその頃から何處か外國に生れてゐればよかつたと思ふやうになつた。あの自由ら

ずる事があつた。葉子は母に黙つて時々内田を訪れた。内田は葉子が來るとどんな忙がしい時でも自分の部屋に通して笑ひ話などをした。時には二人だけで郊外の静かな並木道などを散歩したりした。ある時内田はもう娘らしく生長した葉子の手を握く握つて、「お前は神様以外の私の唯一一人の道伴れだ」と云つた。葉子は不思議な甘い持でその言葉を聞いた。その記憶は永く忘れ得なかつた。

それがあの木部との結婚問題が持ち上ると、内田は否應なしにある日葉子を自分の家に呼びつけた。而して戀人の變心を語り責める嫉妬深い男のやうに、火と涙とを眼から流らせて、打ちもすゑかぬまでに狂ひ怒つた。その時ばかりは葉子も心から激昂させられた。一誰れがもうこんな我儘な人の所に來てやるものか「さう思ひながら、生涯の多い、家並みの疎かな轍の跡の減入りこんだ小石川の往來を歩き、憤怒の尙ざしりを止めかねた。それは夕闇の催した晩秋だつた。然しそれと同時に何んだか大切なものを取り落したやうな、自分をこの世につり上げてゐる縁の一つがぶつんと切れたやうな不思議な淋しさの胸に這入るのを何うする事も出来なかつた。

「基督に水をやつたサマリヤの女の事も思ふから、この上お前には何も云ふまい——他人の失望も神の失望もちつとは考へて見るがいゝ、罪だぞ、恐ろしい罪だぞ」

そんな事があつてから五年を過ぎた今日、郵便局に行つて、永田から來た爲替を引き出して、定子を附てくれてゐる乳母の家に持つて行かうと思つた時、葉子は紙幣の束を算へながら、不圖内田の最後の言葉を思ひ出したのだつた。物のない所に物を探るやうな心持で葉子は人力車を大塚の方に走らした。

五年経つても昔のまゝの構で、まばらにさし代へた屋根板と、めつきり延びた垣添ひの桐の木とが目立つばかりだつた。砂きしみのする格子戸を開けて、帯前を懸へながら出て來た柔和な細君と顔合せた時は、さすがに懷舊の情が二人の胸を騒がせた。細君は思はず知らず「まあどうぞ」と云つたが、その瞬間には、と歸つたやうな様子になつて、急いで内田の書齋に這入つて行つた。暫らくすると噂息しながら物を云ふやうな内田の聲が途切れ／＼に聞えた。「上げるのは勝手だが俺れは會ふ事はないぢやないか」と云つたかと思ふと、はげしい音をたて一讀みさしの書物をばた／＼閉ぢる音が

した。葉子は自分の爪先を見詰めたが下唇をかんてゐた。

やがて細君がおど／＼しながら立ち現はれて、先づと葉子を茶の間に招じ入れた。それと入れ代りに、書齋では内田が格子戸を開けて、やがて内田はづか／＼と格子戸を開けて出て行つてしまつた。

葉子は思はずふら／＼と立ち上らうとするのを、何氣ない顔でぢつと堪へた。てめては電力やうな滑しいその怒りし聲に打たれたかつた。あはよくば自分も思ひ切つてひたひた云つて選けたかつた。何處に行つても取りもせず、鼻であしらひ、鼻であしらはれ慣れた葉子には、何か眞味な力で打ち摧かれるなり打ち擯くなりして見えたかつた。それだつたに思ひ入つて内田の所に來て見れば、内田は世の常の人々よりも一層冷やかに酷く思はれた。

「こんな事を云つては失禮ですけれどもね葉子さん、あなたの事を色々に云つて來る人があるもんですからね、あの通りの性質でせう。どうも私には何んとも云ひなだめやうがないのですよ。内田があなたをお上げ申したのが不思議な程だと私思ひます。この頃は誰より誰れにも云はれないやうなご／＼が家の中に

一家の住まふ下座敷は變に油ぎつて汚れてゐた。白痴の兒が赤坊同様のので、東の縁に干してある襦袢から立つ鹽臭い匂ひや、疊の上に踏みじられたまゝこびりついてゐる飯粒などが、すぐ葉子の神經をいら／＼させた。玄關に出て見ると、そこには叔父が、襟の眞黒に汗じんだ白い飛白を薄寒さうに着て、白痴の子を膝の上に乘せながら、朝つばらから柿をむいてあてがつてゐた。その柿の皮があか／＼と紙屑とごつたになつて敷石の上に散つてゐた。葉子は叔父に一寸挨拶をして草履を探しながら、一愛さん一寸こゝにお出で。玄關が御覽、あんなに汚れてゐるからね、綺麗に掃除して置いて頂戴よ。——今夜はお客様もあるんだのに……」

と駈けて來た愛子にわざとつんけんいふと、叔父は神經の遠くの方であてこすられたのを感じた風で、

「おゝ、それは俺しがしたんぢやて、俺しが掃除しとく。構うて下さるな、おいお俊——お俊」といふに、何しとるぞい」とのろまらしく呼び立てた。帶しろ襟かの叔母がそこにやつて來て、又くだらぬ口論をするのだと思ふと、泥の中でいがみ合ふ豚か何んぞ

を思ひ出して、葉子は踵の塵を拂はんばかりにそこへ家を出た。細い釘店の往來は場所柄だに門並み綺麗に掃除されて、打水をした上を、氣のきいた風體の男女が忙がしうに往き來してゐた。葉子は抜け毛の丸めたのを、卷物草の袋の千切れにのが散らばつて落つてゐない自分の家の前まで眼をつぶつて駆け抜けたい程の思ひをして、ついそぼの日本銀行に這入つてありつたたけの預金を引き出した。而してその前の車庫で始終乗りつけの一番立派な人力車を仕立てさして、その足で買物に出かけた。妹達に買ひ残しておくべき衣服地や、外國人向きの土産品や、新しいどつりりしたトランクなどを買ひ入れると引き出した金はいくらも残つてはゐなかつた。而して午後の日がや／＼傾きかゝつた頃、大塚窪町に住む内田といふ母の友人を訪れた。内田は熱心な基督教の傳道者として、憎む人からは蛇蝎のやうに憎まれるし、好きな人からは豫言者のやうに崇拜されてゐる天才肌の人だつた。葉子は五つ六つの頃母に連れられて、よく其の家に出入りしたが、人を恐れずにいん／＼思つた事を可愛らしい口許から云ひ出す葉子の様子が、始終人から距てをおかれつた内田を喜ばしたので、葉子が來ると内田は、

何か心のこたはつた時でも機嫌を直して、窄つた眉根を少しは開きたがら、「又子狼が來たな」といつて、そのつや／＼したおかつばを無で廻したりなぞした。その中母が基督敎人同盟の事業に關係して、忽ちの中にその半耳を握り、外國宣教師たとか、貴婦人たとかを引き入れて、政略がましく事業の擴張に奔走するやうになると、内田はすぐ機嫌を損じて早月親佐を責めて、基督の諸君は無視した俗惡な意だと思つたが、親佐が一向それに取り合ふ様子がないので、兩家の間は見る／＼疎々しいものになつてしまつた。それで内田は葉子だけには不思議に愛着を持つてゐたと見て、よく葉子の噂をして、「子狼だけは引き取つて子供同様に育ててやつてもいい、などと云つたりした。内田は縁した最初の妻が連れに行つてしまつたつた一人の娘にいつまでも木綿を持つてゐるらしかつた。どこでもいゝその娘に似たらしい所のある少女を見ると内田は口喧の自分を忘れたやうに甘々しい顔付きをした。人が恐れる割合に葉子には内田が恐ろしく思へなかつたばかりか、その峻烈な性格の奥にとちこめられて小さく濃んだ愛情に觸れると、ありきたりの人間からは得られないやうななつかしみを感

れませんつて……あなたどうぞお體をお大事に。太郎さんはまだ學校で御座いますか。大きくおなりでせうね。何んぞ持つて上がればよかつたのに、用がこんなもんですから——と云ひながら、兩手で大きな輪を作つて見せて、若くしくほゝゑみながら立ち上つた。

玄關に送つて出た細君の眼には涙がたまつてゐた。それを見ると、人はよく無意味な涙を流すものだと思つた。けれどもあの涙も内田が無理無體にしぼり出させるやうなものだと思ひ直すと、心臓の鼓動が止る程、葉子の心はかつとなつた。而して、唇を震はしながら、「もう一言をぢさんに仰しやつて下さいまし。七度は七十倍はなさらずとも、せめて三度倍は人の尤も許して上げて下さいましつて……」尤もこれはあなたのお爲めに申します。私は誰れにあやまつていたぐのもいやですし、誰れにあやまるのもいやな性分なんですから、をぢさんに許して頂かうとは頭から思つてなどゐはしません。それも序でに仰しやつて下さいまし」

うに鼻の孔が塞がつた。門を出る時も唇はなほ口惜しさうに震へてゐた。日は植物園の森の上に暮いて、暮方近い空氣の中に今朝から吹き出してゐた風はなきた。葉子は今の心と、今朝早く風の吹き始めた頃に、土藏わきの小部屋で荷造りをした時の心とを較べて見て、自分ながら同じ心とは思ひ得なかつた。而して門を出て左に曲らうとして不圖道傍の捨石にけつまつて、はつと眼が覺めたやうにあたりを見廻した。矢張り二十五の葉子である。いゝえ昔たしかに一度けつまつた事があつた。さう思つて葉子は迷信家のやうにもう一度振り返つて捨石を見た。その時に日は……矢張り植物園の森のあの邊にあつた。而して道の暗さもこの位だつた。自分はその時内田の奥さんに内田の惡口をいつて、ペテロと基督との門に取り交はされた寛恕に對する問答を例へ引いた。いゝえそれは今日した事だつた。今日意味のない涙を奥さんがこぼしたやうに、その時も奥さんの意味のない涙をこぼした。その時にも自分に……五……そんな事はない。そんな事あらう筈がない。……それにしてもあの捨石には覺えがある。あれは昔からあすこにちやんとあつた。かう思ひ續けて來ると、葉子は、いつか

母と遊びに來た時、何か怒つてその捨石に嘔り付いて動かなかつた事をまぎ／＼と心に浮べた。その時は大きな石だと思つてゐたのにこれんぼつちの石ななか。母が當惑して立つた姿がはつきり眼先きに現はれた。と思ふとやがてその輪郭が靨き出して、眼も向けられない程耀いたが、すつと情氣もなく消えてしまつて、葉子は自分の體が中有からどつ／＼大地に下り立つたやうな感じを受けた。同時に鼻血がどく／＼口から頸を傳つて胸の合せ目をよごした。驚いてハンケチを袂から探り出さうとした時、「どうかなさりましたか」といふ聲に驚かされて、葉子は始めて自分の後に人力車がついて來てゐたのに気が付いた。見ると捨石の在る所はもう八九町後ろになつてゐた。「鼻血なの」と應へながら葉子は始めてのやうにあたりを見たら、そこには紺色籠を所せま／＼かけ渡した紙屋の小店があつた。葉子は取りあへずそこに這入つて、人目を避けたが顔は洗はして貰はうとした。四十恰好の克明らしい内儀さんがわが事やうに金盥に水に移して持つて來てくれた。葉

もんですから、餘計むいやくいやしてゐて、本當に私どうしたらいいかと思ふ事がありますの

一 意地も生地も内田 強烈な性格の爲めに存分に打ち碎かれた細君は、上品な顔立てに中絶紀の尻にでも見るやうな思ひ詰めた表情を浮べて、捨て身の生活のどん底にひそむ寂しい不足をほめかした。自分より年下で、而かも良人から散々悪評を掛けられてゐる筈の菓子に對してまで、すぐ心が碎けてしまつて、張りのない言葉で同情を求めるかと思ふと、菓子は自分の事のやうに齒痒かつた。肩と口とのあたりを感ぜながら、それを何うする事も出来なかつた。菓子は急に青味を増した顔で細君を見やつたが、その顔は世故に慣れ切つた三十女のやうだつた。(菓子は思ふまゝに自分の年を五つも上にしたり下にしたたりする不思議な力を持つてゐた。感情次第でその表情は役者の技巧のやうに變つた。)

「齒痒くはいらつしやらなくつて」

と切り返すやうに内田の細君の言葉をひつたかつて、

「私だつたら何うでせう。すぐをぢさんと喧嘩

して出てしまひますわ。それは私、をぢさんを偉い方だとは思つてゐますが、私こんなになれ

ついたんですから何うしやうもありませんわ。一から十まで仰しやる事はいく／＼と聞いては

のられませんわ。をぢさんもあんまりでいらつしやいますのね。あなた見たいな方にさう望に

かゝらずとも、私でもお相手になさればいいのに。でもあなたがいらつしやればこそをぢさん

もあゝやつてお仕事がお出来になるんですのね。私だけは除け物ですけれど、世の中は

中々よく行つてゐますわ。あ、それでも私はもう見放されてしまつたんですものね、いふ

事はありやしません。本當にあなたがいらつしやるのををぢさんはお仕合せですわ。あなたは辛抱なところ方。をぢさんは我儘でお通しになる

方。尤もをぢさんにはそれが御様のお思召しな

んでせうけれどもね。私も御様のお思召しな

か何んかで我儘で通す女なんですからをぢさんとは何うしても茶碗と茶碗ですわ。それでも男

は良う御座んすのね我儘が通るんですもの。女の我儘は通すより仕方がないんですから本當に

情けなくりますのね。何も前世の約束なん

をしみ／＼と聞いてゐるらしかつた。菓子は菓子でしみ／＼と細君の身なりを見ないではゐられなかつた。一昨日あたり結つたまゝの束髪だ

つた。癖のない濃い髪には髪が灰らしい灰がかつてゐた。鬘氣のめけ切つた單衣と袴しか

つた。その柄の細かい所には甲の跡が着占しといふやうな香ひがした。由緒ある京都の一族に

生れたその人の皮肉は美しかつた。それから尙更

らその人を哀れにして見せた。

「他人の事なぞぢへてゐられやしない。暫らくすると菓子は捨鉢にこんな事を思つた。而して

急にはずんだ調子になつて、

「私明日亞米利加に渡りますの、買ひで」

と突拍子もなく云つた。餘りの不意に細君は眼を見張つて顔を擡げた。

「まあ、本當に」

「一はあ本當に」 而かも木村の所に行くやうになり

ました。木村 御存じでせう。細君がうなづいてなほ細を聞かうとする

と、菓子は事もなげに遮つて、

だから今日はお暇をひの廣りでしたの。それ

でもそんな事は何うでも好う御座いますわ。をぢさんがお歸りになつたら宜しく仰しやつて下さいまし、菓子はどんな人間になり下るかも知

霧がたゞよつて、街頭のランプの灯が殊に赤くちらほら／＼と點つてゐた。通り慣れたこの界隈の空氣は特別な親しみを以て葉子の皮膚を撫でた。心よりも肉體の方が餘計に定子のゐる所に牽き付けられるやうにさへ思へた。葉子の肩は暖い桃の皮のやうな定子の頬の膚さしりにあこがれた。葉子の手はもうめれんすの彈力のある軟い觸感を感じてゐた。葉子の膝はいふはりとした軽い重みを覺えてゐた。耳には子供のアクセントが焼き付いた。眼には、曲り角の朽ちかゝつた黒板塀を透して、木部から裏けた笑窪の出来る笑顔が否應なしに吸ひ付いて來た。……乳房はくすむつたかつた。葉子は思はず片頬に微笑を浮べてあたりを偷むやうに見廻した。と丁度そこを通りかゝつた内儀さんが、何かを前掛の下に隠しながらちつと葉子の立姿を振り返つてまで見て通るのに氣がついた。

葉子は悪事でも働いてゐた人のやうに、急に笑顔を引つ込めてしまつた。而してこそ／＼とそこを立ち退いて不忍の池に出た。而して過去も未來も持たない人のやうに、池の端につくねんと突つ立つたまゝ、池の中の蓮の實の一つに眼を定めて、身動きもせず小半時立ち盡してゐた。

八

日の光がとゞまりと隠れてしまつて、往來の灯ばかりが足許の便りとなる頃、葉子は熱病患者のやうに濁り切つた頭をもてあまして、車に揺られる度毎に眉を痛々しく皺めながら、釘店に歸つて來た。

玄關には色々の足駄や靴が列べてあつたが、流行を作らう、少くとも流行に遅れまいといふ華やかな心を誘ふらしい贈物と云つては一つも見當らなかつた。自分の草履を始末しながら、葉子はすぐに二階の客間へ模様を想像して、自分の爲めに親戚や知人が寄つて別れを惜しむといふその席に顔を出すのが、自分自身を馬鹿にし切つたことのやうにしか思はれなかつた。こんな位なら定子の所にでもゐる方が餘程増しだつた。こんな事のある筈だつたのを何うして又忘れてゐたものだらう。何處にあるのもしやだ。木部の室を出て、二度とは歸るまいと決心した時のやうな心持で、拾ひかけた草履をたゞきに戻さうとしたその途端に、

姉さんもういやーいやーと云つながら、身をはして玄關に胸に、抱きついて來て、乳の間の窪みに顔を埋めながら、

成人のするやうな泣きじやくりをして、「もう行つちやいやですと云ふのに」とからい言葉が続けたのは貞世だつた。葉子は石のやうに立ちすくんでしまつた。貞世は朝から不機嫌になつて誰れの云ふ事も耳には入れずに、自分の歸るのばかりを待ちこがれてゐたに違ひないのだ。葉子は機械的に貞世に引つ張られて階下段を昇つて行つた。

階下段を昇り切つて見ると客間はいんとしてゐて、五十川女史の祈禱の聲だけがおごそかに聞こえてゐた。葉子と貞世とは無人のやうに抱き合ひながら、アーメンとぶふ聲の一座の人々から擧げられるのを待つて室に這入つた。列ひんはまだ殊勝らしく頭を首垂れてゐる中に、正座近くすゑられた古藤だけは昂然と眼を見開いて、襖を開けた葉子がしとやかに這入つて來るのを見送つてゐた。

葉子は古藤に一寸眼で挨拶をして置いて、貞世を引いたまゝ、末座に腰をついて、一同に遅刻の詫言をしやうとしてゐると、中座にいらしてゐる叔父が、我子でもたしたゐるやうに威儀を作つて、

何んたら遅い事ぢや 今日はお前の送別會ぢやぞい、皆さんにかうお待たすするが許

子はそれで白粉氣のない顔と思ふ存分に冷やした。而して少し人心地がついたので、帯の間から懷中鏡を取り出して顔を直さうとすると鏡がいつの間にか眞二つに破れてゐた。先刻けつ

まづいた拍子に破れたのか知らんと思つて見たが、それ位で破れる筈はない。怒りに任せて胸がかつとなつた時破れたのだらうか。何んだかさうらしくも思へた。それとも昨日の船出の不幸を告げる何かの業かも知れない。木材との行末の破滅を知らせる悪い辻占かも知れない。又さう思ふと葉子は襟元に凍つた針でも刺されるやうに、ぞく／＼とわけの分らない身慄ひをした。一體自分は何うなつて行くのだらう。葉子はこれまでの見窮められない不思議な自分の運命を思ふにつけ、これから先きの運命が空恐ろしく心に描かれた。葉子は不安な懨懨な眼付きをして店を見廻した。帳場に坐り込んだ内儀さんの膝に凭れて、七つほどの少女が、ちつと葉子の眼を迎へて葉子を見詰めてゐた。瘦せぎすで、細々しいほど眼の大きな、その黒眼の小さな、青白い顔が、薄暗い店の奥から、香料や石鹼の香につままれて、ぼんやり浮き出たやうに見えるのが、何か鏡の破れたのと縁でもあるらしく眺められた。葉子の心は全く普段の落

ち付きを失つてしまつたやうにわく／＼して、立つても坐つてもゐられないやうになつた。馬鹿なと思ひながら怖いものにも追ひすがられるやうだつた。

暫らくの間葉子はこの奇怪な心の動搖の爲めに店を立ち去る事もしないで佇んでゐたが、ふと何うにでもなれといふ捨身な氣になつて、氣を取り直しながら、いくらかづゝを置いてそこを出た。出るには出たがもう車に乗る氣にもなれなかつた。是れから定子に會ひに行つてよそなへ別れを惜しまうと思つてゐた其の心組みさへ物憂かつた。定子に會つた所が何うなるものか。自分の事すら次ぎの瞬間には取りとめもないものを、他人の事——それはよし自分の血を分けた大切な獨子であらうとも——などを考へるだけが馬鹿な事だと思つた。而してもう一度その店から巻紙を買つて、硯箱を借りて、男取し筆跡で、出發前にもう一度乳母を訪れる積りだつたが、それが出来なくなつたから、この後とも定子を宜しく頼む。當座の費用として金を少し送つておくといい意味を簡單に認めて、永田から送つてよこした爲替の金を封入して、その店を出た。而していきなりそこに待ち合はしてゐた人力車の上の膝掛をはぐ

つて、蹴込みに打ち付けてある鎖札に、いつかり眼を通しておいで。

「私はこれから歩いて行くから、この手紙をこへ届けておくれ、返事はいらぬのだから。お金ですよ、少しどつさりあるから大事にしな」

と車夫に云ひつけた。車夫は確に見知りもないものに大金を渡して平氣である女の顔を今更のやうにきよ／＼と見やりながら空俵を引いて立ち去つた。大八車が續けさまに田舎に向いて歸つて行く小石川の夕暮の中を、葉子は傘を杖にしながら思ひに耽つて歩いて行つた。

こもつた哀愁が、發しない酒のやうに、葉子の額顔をちか／＼と痛めた。葉子は人力車の行方を見失つてゐた。而して自分では眞直に釘店の方に急ぐつもりでゐた。ところが實際は眼に見えぬ力で人力車に結び付けられでもしたやうに、知らず／＼人力車の通つたところの道を歩いて、はつと氣がついた時には何時の間にか、乳母が住む下谷池の端の或る曲り角に来て立つてゐた。

そこで葉子はぎよ／＼として立ち停つてしまつた。短くなりよまつた日は本郷の高臺に隠れて、往來には厨の煙とも夕靄ともつかぬ薄い

際まで潜ぎ付けたんだが……」

葉子は隙を見せたら切り返すからと云はんばかりな緊張した、同時に物を物ともしない風でその男の眼を迎へた。

「何しろ私共早月家の親類に取つてはこんな目出度い事は先づない。無いには無いがこれからがあなたに頼み所だ。どうぞ一つ私共の顔を立てて、今度こそは立派な奥さんになつておもらひしたいが如何です。木村君は私もよく知つとるが、信仰も堅いし、仕事も珍らしくはきはき出来るし、若いに似合にぬ物の分つた人だ。こんなことまで比較に持ち出すのは何うか知らないが、木部氏のやうな実行力の件はない夢想家は、私などは始めから不賛成だつた。今度のはぢたい段が違ふ。葉子さんが木部氏の所から逃げ歸つて來た時には、私もけしからんと云つた實は一人だが、今になつて見ると葉子さんはさすがに眼が高かつた。出て來ておいて誠によかつた。いまに見えない木村といふ仁なりや、立派に成功して、第一流の實業家に成り上るにきまつてゐる。是れからは何んと云つても信用と金だ。官界に出ないのなら何うしても實業界に行かなければうそだ。擲身半國は官吏たるものの一特權だが、木村さんのやうな眞面目な信者に……」

日な信者に……金を造つて貰はんぢや、神の道をも日本に傳へ擴げるにしてからが容易な事ぢやありませんよ。あなたも小さい時から米國に渡つて新聞記者の修業をする口癖のやうに妙な事をぶつたもんだが（こゝで一座の人は何んの意味もなく高く笑つた。恐らくは餘りしかつめらしい空気を打ち破つて、何んとかそこに餘裕をつける積りが皆んなに起つたのだらうけれども、葉子に取つてはそれがさうは難かなかつた。その心持は解つても、そんな事で葉子の心とはぐらかさうとする彼等の淺はかさがぐつと癢に障つた）新聞記者は兎も角も……ぢやない、そんなものになられては困り切るが（こゝで一座はまた諷もなく馬鹿らしく笑つた）米國行の願はたしかに叶つたのだ。葉子さんも御満足に違ひなからう。後の事は私共がたしかに引き受けたから心配は無用にして、身をしまめて妹さんの方のしぐしになる程の前後を頼みます。……ええ、と財産の方の處分は私・田中さんとで間違ひなく固めし、愛子さんと貞世さんのお世話は、五十川さん、あなたにお願ひしようぢやありませんか、御迷惑ですが何うでせう皆さん（さう云つて彼れは一座を見渡し、豫め申し合せが出来てゐたらしく、同は

待ち渡けたやうに點頭いて見せた。）どうぢやらう葉子さん——葉子は乞食の嘆顔を聞く女王のやうな心持で、〇〇局長と云はれるこの男の云ふ事を聞いてゐたが、財産の事などは何うでもいいとして、妹達の事が話題に上ると共に、五十川女史を向うに廻して詰問のやうな對話を始めた。何んと云つても五十川女史はその晩ここに集まつた人々の中では一番年配でもあつたし、一番憚られてゐるのを葉子は知つてゐた。五十川女史が四角と思ひ出させるやうな嚴整な骨組みで、がしりと正座に居直つて、葉子の子供あしらひにしようとするのを見て取ると、葉子の心は遠り熱した。

「いゝえ、我儘だとばかりお思ひになつては困ります。私は御承知のやうな生れで御座いますし、是れまでも度々御心配をかけて來て居りますから、人様同様に見ていたゞかうとは是れつばかりも思つては居りません」

と云つて葉子は指の間になぶつてゐた楊枝を老女史の胸にふいと投げた。

然し愛子も貞世も妹で御座います。現在私……で御座います。口幅つたいと思召すかも知れませんが、此の二人だけは私共をひき米國に

まんから、今五十川さんに祈禱をお頼み申して、箸を取つて頂かうと思つた所であつた……一體何處を……

面と向つては、葉子に口小言一つ云ひ切らぬ器量なしの叔父が、場所も折もあらうにこんな場合に、見せびらかしをしようとする。葉子はそつちに見向きもせず、叔父の言葉を全く無視した態度で急に暗やかな色を顔に浮べながら、「ようこそ皆様……遅くなりまして。つい行かなければならない所が二つ三つありましたもんですから……」

と誰れにともなくぶつておいて、する／＼と立ち上つて、釘店の往來に向いた大きな窓を後ろにした自分の席に着いて、妹の愛子と自分との間に割り込んで来る貞世の頭を撫でながら、自分の上にはばかり注がれる満座の視線を小うるささうに拂ひ除けた。而して片方の手で大分亂れた髪のほつれをかき上げて、葉子の視線は人にもなげに古藤の方に走つた。

「暫らくでしたのね……とう／＼明朝になりましたよ。木村に持つて行くものは一緒にお待ちになつて……さう」
と軽い調子で云つたので、五十川女史と叔父とが切り出さうとした言葉は、物の見事に遮られ

てしまつた。葉子は古藤にそれだけの事を云ふと、今度は當の敵とも云ふべき五十川女史に張り向いて、

「伯母さま、今日途中でそれはかきな事がありませんでしたのよ。かうなんですの」

と云ひながら男女を併せて八人程居列んだ親類達にずつと眼を配つて、

車で駆け通つたんですから前も後もよくは解らないんですけれども、大時計の角の所を廣小路に出ようとしたら、その角に大變な人ばかりですの。何んだと思つて見て見ますとね、

禁酒會の大道演説で、大きな旗が二三本立つてゐて、急招へのテーブルに突つ立つて、夢中になつて演説してゐる人があるんですの。それだけなら何も別に珍らしいといふ事はないんですけれども、その演説をしてゐる人が……誰れだと思ひになつて……山脇さんですの……

一同の顔には思はず知らず驚きの色が現はれて、葉子の言葉に耳を缺てゐた。先刻しかつめらしい顔をした叔父はもう白蠟のやうに口を開けたまゝで薄笑ひを漏しながら葉子を見つめてゐた。

「それが父ね、いつもの通りに金時のやうに顎筋まで眞赤ですの。」「諸君とか何んとか云つて

大手を振り立てて饅舌つてゐるのを、肝心の禁酒會員達は呆氣に取られて、黙つたまゝ引きさがつて見てゐるんですから、見物人がわい／＼と面白がつてたかつてゐるのも全く尤もですわ、その中に、あ、叔父さん、箸をお付けになるやうに皆様に仰しやつて下さいまし

叔父が慌てて口の締りをして佛の面に立ち歸つて、何か云はうとすると、葉子は又それには頓着なく五十川女史の方に向いて、
「あのお肩の凝りはすつかりお治りになりました」

と云つたので、五十川女史の答へようとする言葉と、叔父の云ひ出さうとする言葉は氣まづくも銜合せになつて、一人は所在なげに黙つてしまつた。座敷は、底の方に氣持の悪い暗流を溜めながら造り笑ひをし合つてゐるやうな不快な氣分に満たされた。葉子は、さあ来い」と胸の中で身構へをしてゐた。五十川女史の側に坐つて、神經營らしく眉をきらめかす、中老の官吏は、駈るやうないま／＼しけた眼光を時々葉子に浴せかけてゐたが、ゐた／＼れない様子で、寸居仕ひをなほすと、ぎく／＼した調子で口を切つた。

「葉子さん、あなたもいよく身の堅まる瀬戸

ほんとにひどいわー

一座の人々から妙な子だといふ風に眺められてゐるのにも頓着なく、貞世は姉の方に向いて膝の上になだれかゝりながら、姉の左手を長い袖の下に入れて、その掌に食指で假名を一字づつ書いて手の掌で拭き消すやうにした。葉子は黙つて、書いては消し書いては消しする字を逆つて見ると、

「ネーサマハイイコダカラ『アメリカ』ニイツテハイケマセンヨヨヨ」

と讀まれた。葉子の胸は我れ知らず熱くなつたが、強ひて笑ひにまぎらしながら、

「まあ聞きわけのない兄だこと、仕方がない。今になつてそんな事を云つたつて仕方がないぢやないの」

とたしなめ諭すやうに云ふと、

「仕方があるわ」

と貞世は大きな眼で姉を見上げながら、

「お嫁に行かなければよろしいぢやないの」

と云つて、くるりと首を廻して一同を見渡した。

貞世の可憐い眼は「さうでせう」と訴へてゐるやうに見えた。それを見ると一同は唯々何んと云ふ事もなく思ひ遣りのない笑ひ方をした。叔父は殊に大きなときよな聲で高々と笑つた。先

刻から黙つたまゝで俯向いて淋しく坐つてゐた愛子は、沈んだ恨めしさうな眼でちつと叔父を睨めたと思ふと、忽ち湧くやうに涙をほろほろと流して、それを兩袖で拭ひもやらず立ち上つてその部屋を駆け出した。階子段の處で下駄下から上つて來た叔母と行き過つただけはひがして、二人が何か云ひ争ふらしい聲が聞こえて來た。

一座は又白け互つた。

「叔父さんにも申上げておきます」

と沈黙を破つた葉子の聲が妙に殺氣を帯びて響いた。

一是れまで何かとお世話様になつて頼有う御座いましたけれども、この家もたゞんでしまふ事になれば、妹たちも今申した通り塾に入れてしまひますし、この後はこれと云つて大して御厄介はかけない積りで御座います。赤の他人の古藤さんにこんな事を願つてはほんとに濟みませんけれども、木村の親友でいらつしやるのですから、近い他人ですわね。古藤さん、あなた貧乏鐵を背負ひ込んだと思ひして、どうか二人を見てやつて下さいましな。いゝでせう。かう親類の前ではつきり申しておきますから、ちつとも御遠慮なさらずに、いゝとお思ひになつた

やうになさつて下さいまし。あちらへ着いたら私又恥度どうとも致しますから。恥度そんなに長い間御迷惑はかけませんから。いかに引受けて下さいまして。一

古藤は少し躊躇する風で五十川女史を見やりながら

「あなたは先刻から赤阪學院の方がいゝと仰しやるやうに伺つてゐますが、葉子さんの云はれる通りにして差支へないのですか。念の爲めに伺つておきたいのですが」

と尋ねた。葉子は又あんな餘計な事を云ふと思ひながらいら／＼した。五十川女史は日頃の圓滑な人づれのした調子に似ず、何かにひどく激昂した様子で、

「私は亡くなつた親佐さんのお考へはかうもあらうかと思つた所を申したまでですから、それを葉子さんが悪いと仰しやるなら、その上鬼や角云ひともないのですが、親佐さんは堅い昔風な信仰を持つた方ですから、田島さんの樂は前から嫌ひでね。宜しう御座いませうさうなされば。私は兎に角赤阪學院が一番たど何處までも思つとるだけですー

と云ひながら、見上げるやうに葉子の胸のあたりをまじ／＼と眺めた。葉子は貞世を抱いたま

居りましたも立派に手懸にかけて御覽に入れま
すから、どうかお構ひなさらずに下さいまし。
それは赤阪學院も立派な學校には違ひ御座いま
すまい。現在私も伯母さまのお世話ですすこ
育てていたのですから、悪くは申したく
は御座いせんが、私のやうな人間が皆様の
お氣に入らないとすれば、それは生れつきも
御座いませうとも、御座いませうけれども、私
を育て上げたのはあの學校で御座いますからね
え、何しろ現在居て見た上で、私この二人をあ
すこに入れる氣にはなれません。女といふもの
をあの學校では一體何んと見てゐるので御座ん
すか知らん……」

かう云つてゐる中に葉子の心には火のやうな
回想の憤怒が燃え上つた。葉子はその學校の寄
宿舎で二箇の中性動物として取扱はれたのを
忘れる事が出来ない。やさしく愛らしく、しを
らしく、生れたまゝの美しい好意と欲念との命
ずるまゝに、おぼろげながら神といふものを戀
しかけた十二三歳の頃の葉子に、學校は祈禱と
節慾と、殺情とを強制的にたゞき込まうとし
た。十四の夏が秋に移らうとした頃、葉子は不
圖思ひ立つて、美しい四寸幅程の袴帯のやうな
ものを絹絲で編みはじめた。藍の地に白で十字

架と日月とをあしらつた模様だつた。物事に耽
り易い葉子は身も魂も打ち込んでその仕事に
夢中になつた。それを造り上げた上で何うして
神様の御手に届けよう、と云ふやうな事は固よ
り考へもせずに、早く造り上げてお喜ばせま
うとのみあせつて、仕舞には夜の日も碎々合は
さなくなつた。二週間に餘る苦心の末にそれは
あらかた出来上つた。藍の地に簡單に白で模様
を抜くだけならさしたる事でもないが、葉子は
他人のまだしなかつた試みを加へようとして、
模様の周圍に藍と白とを組み合せにした小さな
笹縋のやうなものを浮き上げて編み込んだり、
ひびく仰ひがして模様が變形にならないや
うに、目立たないやうにカタン絲を編み込んで
見たりした。出来上りが近づくに葉子は中時
鐘針を休めてはゐられなかつた。ある時聖書の
講義の講座でそつと机の下で仕事を續けてゐ
ると、悪くも教師に見付けられた。教師は頻
りにその用途を問ひたゞしたが、恥ぢ易い乙女
心にどうしてこの夢よりも果敢ない日論見を白
狀する事が出来よう。教師はその帯の色合から
推して、それは男向きの品物に違ひないと決め
てしまつた。而して葉子の心は早急の態を追ふ
ものだと思定した。而して戀といふものを生來

知らぬけな四十五六の醜い容顏の全體は、葉子
を監禁同様に置いて置いて、順へあればその帯
の持主たるべき人の名を迫り問うた。

葉子はふと心の眼を開いた。而してその心は
それ以來峰から峰を飛んだ十五の春には葉子
はもう十も年上な立派な婦人と持つてゐた。葉
子はその青年を思ふさま鑑みした。青年は開も
なく自殺同様の死方をした。一度直の味とし
めた虎の子のやうな清感が葉子の心を打ちめ
すやうになつたのはそれからの事である。

「青藤さん愛と貞とはあなたに願ひますわ。誰
れがどんな事を云はうと、赤阪學院には入れな
いで下さいまし。私昨日田島さんへ行つ
て、田島さんにお會ひ申してよくよく頼ま
て、來ましたから、少し片付いたら彈弓様でござ
なな御自身で二人を連れていらしつて下さい。
愛さんも只ちやんも分りましたらう。田島さん
の墓に這入るとね、姉さんと一緒にゐた時のや
うな譯には行きませんよ……」

姉さんてば……自分でばかり物を仰じやつ
て……

といきなり根柢しさに、貞世は姉の膝を揺り
ながらその言葉を遮つた。

さつきから何度書いたか分らないのに平氣で

切つた労働者が、そばふる雨の中にぐつたりと喘いでゐるやうに見えた。

靴の先きで甲板をこつ／＼と蹴いて、俯向いてそれを眺めながら、帯の間に手をさし込んで、木村への傳言を古藤は獨語のやうに葉子に云つた。葉子はそれに耳を傾けるやうな様子にしてゐたけれども、本當はさして注意もせず、丁度自分の眼の前に、澤山の見送人に圍まれて、應接に暇もなげな田川法學博士の眼尻の下つた顔と、その夫人の瘦せぎすな肩との描く微細な感情の表現を、批評家のやうな心で鋭く眺めやつてゐた。可なり廣いプロメネード・デッキは田川家の家族と見送人として縁日のやうに賑つてゐた。葉子の見送りに來た筈の五十川女史は先刻から田川夫人の側に付き切つて、世話好きな、人の好い叔母さんといふやうな態度で、見送人の半分がたを自身で引き受けて挨拶してゐた。葉子の方へは見向かうとする模様のなかつた。葉子の叔母は葉子から二三間離れた所に、蜘蛛のやうな白痴の兒を小婢に背負はして、自分は葉子から預かつた手靴と襪紗包みとを取り落さんばかりにぶら下げたまゝ、花らしい田川家の家族や見送人の群を見て、呆氣に取られてゐた。葉子の乳母は、どんな大きな

船でも船は船だといふやうにひどく臆病さうな青い顔付きをして、サルンの入口の戸の底に佇みながら、四角に疊んだ手拭を眞赤になつた眼の所に絶えず押しあてては、偷み見るやうに葉子を見やつてゐた。その他の人々は、みな一團になつて、田川家の威光に壓せられたやうに隅の方にかたまつてゐた。

葉子のはかねて、五十川女史から、田川夫婦が同船するから船の中で紹介してやると云ひ聞かされてゐた。田川と云へば、法曹界では可なり名の聞こえた割合に、何處と云つて取りとめた特色もない政客ではあるが、その人の名は寧ろ夫人の噂の爲めに世人の記憶に鮮かであつた。感受力の鋭敏な而して何等かの意味で自分の顔に過ぎなければならぬ人に對して殊に注意深い葉子の頭には、その夫人の面影は永い事、宿題として考へられてゐた。葉子の頭に描かれた夫人は其の強い、情の恣まゝな、野心の深い割合に玉練の露骨な、良人を輕く見てやゝともすると笠にかゝりながら、それでゐる良人から獨立する事の到底出来ない、謂はば心の弱い強がり家ではないか知らんと云ふのだつた。葉子は今後ろ向きになつた田川夫人の肩の様子と一と目見ればかりで、辭書でも繰り當てたやう

に、自分の想像の裏書きされたのを胸の中で微笑まずにはゐられなかつた。

「何んだか話が混雜したやうだけれどもそれだけ云つて置いて下さい」

ふと葉子は幻想から破れて、古藤の云ふこれだけの言葉を捕へた。而して今まで古藤の口から出た傳言の文句は大抵聞き漏らしてゐた様に、空々しげにもなくしん／＼とした様子で「確かに……けれどもあなた後から手紙でも詳しく書いてやつて下さいませね。間違ひでもしてゐると大變ですから」と古藤を覗き込むやうにして云つた。古藤は思はず笑ひを漏らしながら「間違ふと大變ですから」と云ふ言葉を、時折り葉子の口から聞くチャームに満ちた子供らしい言葉の「つとでも思つてゐるらしかつた。而して、一何、間違つたつて大事はないけれども、……だが手紙は書いて、あなたの寢床の枕の下に置いてきましたから、部屋に行つたら何處にでもしまつておいて下さい。それから、それと一緒にもう一つ……」と云ひかけたが、一何しろ忘れずに枕の下を見て下さい——この時突然田川法學博士「海威」といふ大きな

まじやんと胸をそらして眼の前の壁の方に顔を向けてゐた、例へばばら／＼と投げられるつてを避けるやうとせぜに突つ立つ人のやうに、吉藤は何か自分一人で合點したと思ふと、堅く腕組みをしてこれも自分の前の眼八分の所をぢつと見詰めた。

一座の氣分はほと／＼動きが取れなくなつた。その間で一番早く機嫌を直して相好を變へたのは五十川女史だつた。子供を相手にして腹を立たた。それを年甲斐ないとも思つたやうに、氣を變へてきさ／＼に立ち支度をしながら、「皆さんいかゞもうお暇に致しましたら……お別れする前にもう一度お祈りをして」

「お祈りを私のやうなものの爲めになさつて下さるの御無用に願ひます」

葉子は和らぎかけた人々の氣分には更に頓着なく、壁に向けてゐた眼を貞世に落して、いつの間にか窺入つたその人の艶々しい顔を撫でさすりながらきつぱりと云ひ放つた。

人々は思ひ／＼な別れを告げて歸つて行つた。葉子は貞世がいつの間にか膝の上で寝てしまつたのを口實にして人々を見送りには立たなかつた。

最後の客が歸つて行つた後でも、叔父叔母は

二階を片付けには上つて來なかつた。挨拶一つしようともしなかつた。葉子は窓の方に顔を向けて、煉瓦の通りの上にぼうつと立つ、灯の照り返しを見やりながら、夜風にほてつた顔を冷やさせて、貞世を抱いたまゝ、黙つて坐り續けてゐた。間遠に日本橋を渡る鐵道馬車の音が聞こえるばかりで、釘店の人通りは淋しい程疎らになつてゐた。

姿は見せずに、何處かの隅で愛子がまだ泣き續けて鼻をかんだりする音が聞こえてゐた。

「愛さん……貞ちゃんが寝ましたからね、一寸お床を敷いてやつて頂戴な」

我れながら驚く程やさしく愛子に口をきく口をきいた。葉子はそれを意外に思つた。愛子がいつものやうに素直に立ち上つて、鼻をすゝりながら黙つて床を取つてゐる間に葉子は折折往來の方から振り返つて、愛子のしとやかな足音や、綿を薄く入れた夏蒲團の壁に觸れるさ

さやかな音を見入りでもするやうにその方に眼を定めた。さうかと思ふと又今更のやうに、食ひ荒らされた食物や、敷いたまゝになつてゐる座蒲團のきたならしく散らかつた客間をまじまじと見渡した。父の書棚のあつた部分の壁だけが四角に濃い色をしてゐた。そのすぐ側に西洋曆が昔のまゝに掛けてあつた。七月十六日から先きは剝がされずに残つてゐた。

「姉さま敷けました」
暫らくしてから、愛子がかうかすかに隣りで云つた。葉子は、

「さう御苦勞さまよ」
と又しとやかに應へながら、貞世を抱きかゝへて立ち上らうとすると、又頭がぐら／＼と落ちて、夥しい鼻血が貞世の胸の合せ目に流れ落ちた。

九

底光りのする雲母色の雨雲が縫目なしにどんよりと重く空一杯にはだかつて、本牧の沖合まで東京灣の海は物凄いやうな草色に、小さく波の立ち騒ぐ九月二十五日の午後であつた。昨日の風が風いだから、氣温は急に夏らしい蒸暑さに返つて、横濱の市街は、疫病にかゝつて弱り

して、その降を驚かすやうなためいた姿體や、頼りなげな表情を見せるのを忘れないで、言葉少なにそれらの人に挨拶した。叔父と叔母とは墓の穴まで無事に棺を運んだ人夫のやうに、通り一遍の事を云ふと、預り物を葉子の渡して、手の麻をはたかんばかりにすぎなく、眞先きに靴襪を降りて行つた。葉子はちらつと叔母の後姿を見送つて驚いた、今の今まで何處とて似通ふ所の見えなかつた叔母も、その姉なる葉子の母の着物を帯まで借りて着込んでゐるのを見ると、はつと思ふ程その姉にそっくりだつた。葉子は何んと云ふ事なしにいやな心持がした。而してこんな緊張した場合にこんなちよつとした事にまでこだはる自分を思つた。さう思ふ間もあらせず、今度け親類の人達が五六人づつ、口々に小やかましく何か云つて、憐れむやうな妬むやうな眼付きを投げ與へながら、幻影のやうに葉子の眼と記憶とから消えて行つた。丸髷に結つたり髪飾らしい地味な束髪に上げたりしてゐる四人の學校友達も、今は葉子とはかけ隔たつた境涯の音もつかひをして、昔葉子に誓つた言葉などは忘れてしまつた裏切り者の空々しい涙を見せたりして、雨に濡らすまいと袂を大事にかばひながら、冬にかくれてこ

れも靴襪を消えて行つてしまつた。最後に物乞ぢする様子の乳母が葉子の前に來て腰をかぐめた。葉子はとう／＼行き詰まる所まで來たやうな思ひをしなが、振り返つて古藤を見ると、古藤は依然として手欄に身を寄せたまゝ、氣拔けでもしたやうに、眼を据ゑて自分の二三間先きをぼんやり眺めてゐた。
「義一さん、船の出るのも間が無さうですからどうか此女……私の乳母です……の手を引いて下ろしてやつて下さいました。近りでもすると怖うござんすから」
と葉子に云はれて古藤は始めて我れに歸つた。而して獨語のやうに、
「この船で僕も亞米利加に行つて見たいなあ」と暢氣な事を云つた。
「どうか梯橋まで見てやつて下さいましね。あなたもその中は非いらつしやいませんか。義一さんそれでは是れでお別れ。本當に、本當に」と云ひながら葉子は何んとなく親しみを一番深くこの青年に感じて、大きな眼で古藤をぢつと見た。古藤も今更のやうに葉子をぢつと見た。
「お禮の申しやうもありません。この上のお願ひです、どうぞ妹達を見てやつて下さいまし。あんな人達にはどうしたつて頼んではおけませ

んから……左様なら」
「左様なら」
古藤は覺醒返しに沒義返にこれだけ云つて、ふいと手欄を離れて、夢程帽子を眼深かに被りながら、乳母に附添つた。
葉子は階子の上り口まで行つて二人に傘をかざしてやつて、一段々遠ざかつて行く二人の姿を見送つた。東京で別れを告げた愛子や貞世の姿が、雨に濡れた傘の邊を幻影となつて、見えたり隠れたりしたやうに思つた。葉子には不思議な心の執着から定子にはとう／＼會はないでしまつた。愛子と貞世とは是非見送りがしたいと云ふのを、葉子は叱りつけるやうに云つてとめてしまつた。葉子が人力車で家を出ようとすると、何んの氣なしに愛子が前髪から抜いて髪を掻かうとした櫛が、腕くもぼきりと折れた。それを見ると愛子は堪へ／＼とゐた涙の軀を切つて聲を立てて泣き出した。貞世は始めから腹でも立てたやうに、燃えるやうな眼から止まぬ涙を流して、ぢつと葉子を見詰めてばかりゐた。そんな痛々しい様子がその時まぎ／＼と葉子の眼の前にちらついたので、一人ぼつちで遠い旅に鹿島立つて行く自分といふものがあぢきなくも思ひやられた。そんな心持になると忙は

聲が、棧橋からデッキまでどよみ渡つて聞こえて来た。葉子と古藤とは話の腰を折られて互に不快な顔をしなが、手欄から下の方を覗いて見ると、すぐ眼の下に、その頃人の少し集まる所には何處にでも顔を出す蕨といふ劍舞の師匠だか、鑿劍の師匠だかする嚴乗な男が、大きな五つ紋の黒羽織に白っぽい鯉魚結の袴をはいて、棧橋の板を木の木下駄で踏み鳴らしながら、こゝろ先途と喚いてゐた。その聲に應じて、デッキまでは昇つて来ない壯士の體の政客や某私立政治學校の生徒が一齊に蕨を繰り返した。デッキの上の外國船客は物珍らしさに逸早く、葉子が倚り掛つてゐる手欄の方に押し寄せて来たので、葉子は古藤を促して、急いで手欄の折れ曲つた角に身を引いた。田川夫婦も微笑みながらサルーンから挨拶の爲めに近づいて来た。葉子はそれを見ると、古藤の側に寄り添つたまゝ、左手をやさしく上げて、髻のほつれをかき上げながら、頭を心持ち左にかしげでぎつと田川の眼を見やつた。田川は棧橋の方に氣を取られて急ぎ足で手欄の方に歩いてゐたが、突然見えぬ力にぐつと引きつけられたやうに、葉子の方に振り向いた。

田川夫人も思はず良人の向く方に頭を向け

た。田川の威嚴に乏しい眼にも鋭い光がきらめいて消え、更にきらめいて消えたのを見すまいて、葉子は始めて田川夫人の眼を迎へた。額の狭い、顎の固い夫人の顔は、輕蔑と猜疑の色を漲らして葉子に向つた。葉子は、名前だけを豫てから聞き知つて慕つてゐた人を、今眼の前に見たやうに、慕ひさと親しみのと交り合つた表情でこれに應じた。而してすぐそのそばから、夫人の前にも頓着なく、誘惑の眸を凝らしてその良人の顔顔をぢつと見るのだった。

「田川法學博士夫人萬歲」萬歲「萬歲」田川その人に對してよりも更に聲高な人歡呼が、棧橋にゐて傘を振り帽子を動かす人々の群れから起つた。田川夫人は忙はしく葉子から眼を移して、群衆に取つときの勢を忍びながら、レースで箆袂を取つたハンケチを振らねばならなかつた。田川のすぐ側立つて、胸に何か赤い花をさして型のいふフロック・コートを着て、ほゝゑんでゐた風流な若紳士は、棧橋の歡呼を引き取つて、田川夫人の面前で帽子を高く擧げて萬歲を叫んだ。デッキの上は又一しきりどよめき渡つた。

やがて甲板の上は、こんな騒ぎの外に何んとも忙はしくなつて来た。事務員や水夫達が、

物せはしさに人中を縫うてあちこちする間に、手を取り合はんばかりに近よつて別れを惜む人々の群れがこゝにも彼處にも見え始めた。サルーン・デッキから見ると、三等客の見送人がボーイ長にせき立てられて續々轆門から降り始めた。それと入れ代りに、帽子、手袋、ズボン、襟飾、靴などの調和の少しも取れてゐない癖に、無闇に氣取つた洋装をした非番の下級船員達が、濁れた傘を光らしながら駆けこんで来た。その騒ぎの間に、一種生臭いやうな暖かい蒸氣が甲板の人を取り巻いて、フォクスルの方で今までやかましく荷物をまき上げてゐた扛重機の音が突然やむと、かゝんとする程人々の耳は却つて遠くなつた。隔たつた所から互に呼びかはす水夫等の高い聲は、この船にどんな大危険でも起つたかと思はせるやうな不安を滲き散らした。親しい間の人達は別れの切なさにかがわく／＼して碌に口もきかず、義理一遍の見送人は動ともするとまはりに氣が取られて見送るべき人を見失ふ、そんな慌たしい抜錨の閑際になつた。葉子の前にも急に色々々な人が寄り集まつて来て、思ひ／＼に別れの言葉を殘して船を降り始めた。葉子はこんな混雜な間にも田川の眸が時々自分に向けられるのを意識

は微かな誇りのやうな氣持が湧いて來た。不思議な憎しみといふ感じがこんがらがつて葉子の心の中で渦巻いた。葉子は、

「さ、もう放して下さいまし、船が出ますから」ときびしく云つて置いて、嚙んで含めるやうに、「誰れでも生きてる間は心細く暮すんですよ」

とその耳許にさゝやいて見た。若者はよく解つたといふ風に深々とうなづいた。然し葉子を抱く手はきびしく震へこそすれ、ゆるみさうな様子は少しも見えなかつた。

物々しい銅鑼の響は左舷から右舷に廻つて又船首の方に聞こえて行かうとしてゐた。船員も乗客も申し合はしたやうに葉子の方を見守つてゐた。先刻から手持無沙汰さうに唯々立つて成行きを見てゐた五十川女史は思ひ切つて近寄つて來て、若者を葉子から引き離さうとしたが、若者はむづかる子供やうに地だんだを踏んでます。葉子に寄り添ふばかりだつた。船首の方に群がって仕事をしながら、此の様子を見守つてゐた水夫達は一齊に高く笑ひ聲を立てた。而してその中の一人はわざと船中に聞こえ渡るやうな囁をした。波船の時刻は一秒々々に逼つてゐた。物笑ひの的になつてゐる、さう思ふと

葉子の心はいとしさから激しいとはいしさに變つて行つた。

「さ、お放して下さい、さ」と極めて冷刻に云つて、葉子は助けを求めるやうにあたりを見廻した。

田川博士の側にゐて何か話をしてゐた一人の大兵な船員がゐるが、葉子の當惑し切つた様子を見ると、いきなり大股に近づいて來て、

「どれ私が下までお連れませう」と云ぶや否や、葉子の返事も待たずに若者を事もなく抱きすくめた。若者はこの亂暴にかつとなつて怒り狂つたが、その船員は小さな荷物でも扱ふやうに、若者の腕のあたりを右脇にかい

こんで、易々と舷梯を降りて行つた。五十川女史はあたふたと葉子に挨拶もせず、その後には續いて暫らくすると若者は舷橋の群衆の間に船員の手から下ろされた。

けたまひしい汽笛が突然鳴りはためいた。田川夫妻の見送人たちはこの聲で活を入れられたやうになつて、どよめき渡りながら、田川夫妻の顔を見てもう一度繰り返した。若者を舷橋に連れて行つたかの巨大な船員は、大きな體軀を

猿のやうに軽くもあつかつて、音も立てずに舷橋からしづ／＼と離れて行く船の上に唯々一

條の綱を傳つて上つて來た。人々は又その早業に驚いて眼を見張つた。

葉子の眼は怒氣を含んで手欄から暫らくの間かの若者を見張つてゐた。若者は狂氣のやうに兩手を振上げて船に駆け寄らうとするのを、近所に居合せた三四人の人が慌てて引き留める、それを又すり抜けようとして組み伏せられてしまつた。若者は組み伏せられたまゝ右の腕を口に

にあてがつて思ひ切り嚙みしぼりながら泣き沈んだ。その牛の叫び聲のやうな泣き聲が氣疎く船の上まで聞こえて來た。見送人は思はず鳴りを靜めてこの狂暴な若者に眼を注いだ。葉子

も葉子で、姿も隠さず手欄に片手をかけたまゝ、突つ立つて、同じくこの若者を見張つてゐた。と云つて葉子はその若者の上ばかりを思つてゐるのではなかつた。自分でも不思議だと思ふやうな虚ろな餘裕がそこにはあつた。古藤が若者の

の方には眼もくれずにちつと足許を見詰めてゐるのにも氣が付いてゐた。死んだ如の體軀を情音していゝ心地になつてゐるやうな叔母の姿も眼に映つてゐた。船の方に後ろを向けて、恐ろしくそれは悲しみからばかりではなかつたらう。

その若者の舉動が老いた心をひしひかに違ひない手拭をしつかりと兩眼にあててゐる乳母

しい間にも葉子はふと田川の方を振り向いて見た。中學校の制服を着た二人の少年と、髪をお下げにして帯をおはきみにしめた少女とが、田川と夫人との間からまづ丁度告別をしてゐる所だつた。附添ひの守の女が少女を抱き上げて、田川夫人の肩をその額に受けさせてゐた。葉子はそんな場面を見せつけられると、他人事ながら自分が皮肉で鞭たれるやうに思つた。龍をも化して此豚にするのは母となる事だ。今の今まで焼くやうに定子の事を思つてゐた葉子は、田川夫人に對してすつかり反對の事を考へた。葉子はそのいま／＼しい光景から眼を移して舷梯の方を見た。然しそこにはもう乳母の姿も古藤の影もなかつた。忽ち船首の方からけた／＼ましい銅鑼の音が響き始めた。船の上下は最後のどよめきに揺らぐやうに見えた。長い綱を引きずつて行く水夫が帽子の落ちさうになるのを右の手で支へながら、あたりの空気に激しい動搖を起す程の勢で急いで葉子の傍を通りぬけた。見送人は一齊に帽子を脱いで舷梯の方に集まつて行つた。その際になつて五十川女史ははたと葉子の事を思ひ出したらしく、田川夫人に何か云つておいて葉子のゐる所にやつて來た。

「いよくお別れになつたが、いつぞやお話した田川の奥さんにおひきあはせしようから一寸」葉子は五十川女史の親切振りの犧牲になるのを承知しつゝ、一種の好奇心に牽かされて、その後について行かうとした。葉子は初めて物といふ田川の意度も見てやりたかつた。その時、「葉子さん」と突然云つて、葉子の肩に手をかけたものがあつた。振り返ると麥酒の酔の匂ひがむせかへるやうに葉子の鼻を打つて、眼の心まで紅くなつた知らない若者の顔が近々と鼻先きにあらはれてゐた。はつと身を引く暇もなく、葉子の肩はびしょ濡れになつた醉どれの腕でがつしりと握かれてゐた。「葉子さん覚えてゐますか私を……あなたは私の命なんだ。命なんです」といふ中にも、その眼からはほろ／＼と煮えるやうな涙が流れて、まだうら若い滑かな頬を傳つた。膝から下がふらつくのを葉子にすがつて危く支へながら、「結婚をなさるんですか……お日出度う……お日出度う……だがあなたが日本にゐなくなると思ふと……ゐたまれない程心細いんだ……」

私は……」もう聲さへ續かなかつた。而して深々と息をひいてしやうり上げながら、葉子の肩に顔を伏せてさめ／＼と男泣きに泣き出した。この不意な出来事はさすがに葉子を驚かしもし、きまりも悪くさせた。誰れだとも、何時何處で遇つたとも、思ひ出す由がない。木部篤と別れてから、何と云ふ事なしに捨鉢な心地になつて誰れ彼れの差別もなく近寄つて來る男達に對して勝手氣儘を振舞つたその間に、偶然に出遇つて偶然に別れた人の中の一入でもあらうか。淺い心で弄んで行つた心の中にこの男の心もあつたのであらうか。兎に角葉子には少し思ひ當る節がなかつた。葉子はその男から離れた一心に、手に持つた手帕と包物とを甲板の上に抛りなげて、若者の手をやさしく振りほどかうとして見たが無益だつた。親類や朋輩達の事あれがしな眼が等しく葉子に注がれてゐるのを葉子は痛しい程身に感じてゐた。と同時に、男の涙か薄い單衣の目を透して、葉子の膚に沁みこんで來るのを感じた。割れたつやつやしい愛の匂ひもつゝ鼻の先きで葉子の心を動かさうとした。恥も外聞も忘れ果てて、大空の下ですゝり泣く男の姿を見てゐると、そこに

葉子は又ふと悪戯者らしくこんなことを思つてゐた。が、田川夫妻が自分と反對の舷の藤椅子に腰をかけて、世辭々しく近寄つて来る同船者と何か戯談口でもきいてゐると獨りで決めるゝ安心でもしたやうに幻想は又かの若者に還つて行つた。葉子はふと右の肩に暖みを覺えるやうに思つた。そこには若者の熱い涙が浸み込んでゐるのだ。葉子は夢遊病者のやうな眼付きして、やゝ頭を後ろに引きながら肩の所を見ようとすると、その瞬間、若者を船から縁橋に連れ出した船員の事がはつと思ひ出されて、今まで首ひてゐたやうな眼に、まざ／＼とその大きな黒い顔が映つた。葉子はなほ夢みるやうな眼を見開いたまゝ、船員の濃い眉から黒い口髭のあたりを見守つてゐた。

船はもう可なり速力を早めて、霧のやうに降るともなく降る雨の中を走つてゐた。舷側から吐き出される捨水の音がざあ／＼と聞こえ出したので、遠い幻想の國から一足飛びに返つて返した葉子は、夢ではなく、まがひもなく眼の前に立つてゐる船員を見て、何んといふ事なしにぎよつと本當に驚いて立ちすくんだ。始めてアダムを見たイヴのやうに葉子はまじ／＼と珍らしくもない筈の一人の男を見やつた。

「随分長い旅ですが、何、もうこれだけ日本が遠くなりましたんだ」

と云つてその船員は右手を延べて居留地の鼻を指した。がつしりした肩をゆすつて、勢よく水平に延ばしたその腕からは、強く烈しく海上に生きる男の力が迸つた。葉子は黙つたまま軽くうなづいた。胸の下の方に不思議な肉體的な衝動をかすかに感じながら。

「お一人ですな」

聲がれた強い聲がまたかう響いた。葉子は又黙つたまゝ、軽くうなづいた。

船はやがて乗りたての船客の足許にかすかな不安を興へる程に速力を早めて走り出した。葉子は船員から眼を移して海の方を見渡して見たが、自分の側に一人の男が立つてゐるといふ、強ひ意識から起つて来る不安はどうしても消す事が出来なかつた。葉子にしてはそれは不思議な経験だつた。こつちから何か物を云ひかけて、この苦しい壓迫を打ち破らうと思つてもそれが出来なかつた。今何か物を云つたら形度ひどい不自然な物の云ひ方になるに決つてゐる。さうかと云つてその船員には無聊着にもう一度前かのやうな幻想に身を任せようとしても駄目だつた。神祕が急にさわ／＼と騒ぎ立つて、ぼうつ

と煙つた霖雨の彼方さへ見透せさうに眼がはつきりして、先程のおつかぶさるやうな時惑は、いつの間にか果敢ない出来心の仕事としか考へられなかつた。その船員は傍若無人に衣袋の中から何か書いた物を取り出して、それを鉛筆でチェックしながら、時々思ひ出したやうに顔を引いて眉を擡めながら、襟の折り返しについた汚點を、拇指の爪でごし／＼と削つては弾いてゐた。

葉子の神祕はそこにゐた、いれない程ちかちかと激しく働き出した。自分と自分との間にのそ／＼と遠慮もなく大股で進入り込んで来る邪魔者でも避けるやうに、その船員から遠ざからうとして、つと手櫂から離れて自分の船室の方に階子段を降りて行かうとした。

「何處にお出です」

後ろから、葉子の頭から爪先までを小さなおででもあるやうに一日に籠めて見やりながら、その船員はかう尋ねた。葉子は、

「船室まで参りますの」

と答へない譯には行かなかつた。その聲は葉子の口論風に反して恐ろしくしややかな響きを立ててゐた。するとその男は大股で葉子とすれずれになるまで近づいて来て、

も見逃してはゐなかつた。

何時の間に動いたともなく船は棧橋から遠ざかつてゐた。人の群れが黒蟻のやうに集まつた。その光景は、葉子の眼の前に展けて行く大きな港の景色の中景になるまでに小さくなつて行つた。葉子の眼は葉子自身にも疑はれるやうな事をしてゐた。その眼は小さくなつた人影の中から乳母の姿を探り出さうとせず、一種のなつかしみをもち横濱の市街を見納めに眺めようと思つた。凝然として小さく蹲る若者ののらした黒點を見詰めてゐた。若者の叫ぶ聲が、棧橋の上で打ち振るハンケチの時々きら／＼と光る毎に、葉子の頭の上に張り渡された雨よけの帆布の端から餘滴がぼつ／＼と葉子の頬を打つ度に、斷續して聞こえて来るやうに思はれた。「葉子さんあなたは私を見殺しにするんですか……見殺しにするん……」

十

始めての旅客も物憎れた旅客も、抗鎧したばかりの船の甲板に立つては、落ち付いた心である事が出来ないやうだつた。跡始末の爲めに忙し／＼右往左往する船員の邪魔になりながら、何かなしの興奮におつとしてゐられないやうな顔付きをして、乗客は一人残らず甲板に集まつて、今まで自分達が側近く見てゐた棧橋の方に眼を向けてゐた。葉子もその様子だけでいふと、他の乗客と同じやうに見えた。葉子は他の乗客と同じやうに手欄に倚りかゝつて、静かな春雨のやうに降つてゐる雨の滴に顔をなぶらせながら、波止場の方を眺めてゐたが、けれどもその眸には何んにも映つてはゐなかつた。その代り眼と胸との間と覺しいあたりを、親しい人や疎い人が、何か譯もなくせはしさに現はれ出て、銘々一番深い印象を與へるやうな動作をしては消えて行つた。葉子の知覺は半分眠つたやうにぼんやりして注意するともなくその姿に注意してゐた。而してこの半睡の狀態が破れでもしたら大變な事になると、心の何處かの隅では考へてゐた。その癖、それを物々しく恐れるでもなかつた。身體までが感覺的にしびれるやうな物うさを覺えた。

若者が現はれた。(どうしてあの男はそれ程の因縁もないのに執念く付きまづはるのだらうと葉子は他人事のやうに思つた)その亂れた美しい髪が、夕日とかやく眩しい光の中で、ブロンズのやうにきらめいた。瞋めしめたその左の腕から血がぼた／＼と滴つてゐた。その

滴りが腕から離れて宙に飛ぶ毎に、虹色にきらきらと巴を描いて飛び跳つた。

「……私を見捨てるん……」

葉子はその聲をまぎ／＼と聞いたと思つた時、眼が覺めたやうにふつと更めて港を見渡した。而して、何んの感じも起らない中に、熟睡から一寸驚かされた赤兒が、父多愛なく眠りに落ちて行くやうに、再び夢とも現ともない心へ歸つて行つた。港の景色は何時の間にか消えてしまつて、自分で自分の胸にしがみ附いた若者の姿が、まぎ／＼と現はれ出た。葉子はそれを見ながら何うしてこんな變な心持になるのだらう。血の故とでも云ふのだらうか。事によるとヒステリーに罹つてゐるのではないかも知らんなどと暢氣に自分の身の上を考へてゐた。云はば悠々閑々と澄み渡つた水の隣りに、薄紙の一重の界も置かず、たぎり返つて渦巻き流れる水がある。葉子の心はその静かな方の水に浮びながら、瀧川の中にもまれ／＼と落ちて行く自分といふものを他人事のやうに眺めやつてゐるやうなものであつた。葉子は自分の冷淡さに愕れながら、それでもやつぱり驚きもせず、手牌によりかゝつてちつと立つてゐた。

「田川法學博士」

を待ち兼ねたやうに引き取つて、
「何不慣れは私の妻も同様です。何しろこの船の中には女は二人きりだからお互で」と
と餘り溜りに云つて退けたので、妻の前でも
押るやうに今度は態度を改めながら事務長に向つて、

「チャイニース・ステアレーデには何人程も
すか日本の女に」
と問ひかけた。事務長は例の躰から聲で、
「さあ、まだ船務も碌々整理して見ませんか、
いつかりとは判り兼ねますが、何しろこの頃は
大分航えました。三四十人も居ますか。奥さん
こゝが醫務室です。何しろ九月と云へば舊の二
八月の八月ですから、太平洋の方は暴ける事
もありますんだ。偶にはこゝにも御用が出来ま
すぞ。一寸船務も御紹介しておきますで」

「まあそんなに荒れますか」

と田川夫人は實際恐れたらしく、葉子を顧み
ながら少し色をかへた。事務長は事もなげに、

「暴けますんだ随分」

と今度は葉子の方をまともに見やつて微笑みな
がら、折から部屋を出て來た興録といふ船醫を
三人に引き合はせた。

田川夫妻を見送つてから葉子は自分の部屋に

潛入つた。さらぬだに何處かじめ／＼するやう
な船室には、今日の雨の爲めに蒸すやうな空氣
がこもつてゐて、汽船特有な西洋臭い匂ひが殊
に強く鼻についた。帯の下になつた葉子の胸か
ら背にかけたあたりは汗がじんわり滲み出たら
しく、むし／＼するやうな不愉快を感じるので、
狭苦しい寢臺を取りつたり、洗面臺を掘ゑた
りしてゐるその間に、窮屈に積み重ねられた小
荷物を見過しながら、帯を解き始めた。化粧
鏡の附いた箆笥の上には、果物の籠が一つと花
束が二つ乗せてあつた。葉子は襟前をくつろげ
ながら、誰れからよこしたものとその花束の
一つを取り上げると、その側から厚い紙切れの
やうなものが出て來た。手に取つて見るとそれ
は手札形の寫眞だつた。まだ女學校に通つてゐ
るらしい、髪を束髪にした娘の半身像で、その
裏には、興録さま。取り残されたる千代より」と
してあつた。そんなものを興録が仕舞ひ忘れる
筈がない。わざと忘れた風に見せて、葉子の心
に好奇心なり軽い嫉妬なりを煽り立てようと思
ふ、あまり手許の見え透いたからくりだと思ふ
と、葉子はさげすんだ心持で、大にでもやるや
うに、ぼいとそれを床の上に抛りなげた。一人の
旅の婦人に對して船の中の男の心が何う云ふ

風に動いてゐるかをその寫眞一枚が語り續け
た。葉子は何んと云ふ事なしに小さな皮肉な笑
ひを唇の所に浮べてゐた。

寢臺の下に押し込んである平べったイトラン
クを引き出して其の中から浴衣を取り出してゐ
ると、ノックもせずに突然戸を開けたものがあ
つた。葉子は思はず羞恥から顔を赤らめて、引
き出した華やかな浴衣を裾に、しだらなく庇ぎか
けた長襦袢の姿をかくまひながら立ち上つて振
りかへつて見るとそれは船醫だつた。華やかな
下着を浴衣の所々からのがかせて、帯もなく細
つなりと浴衣に暮れたやうに身を斜にして立つ
た葉子の姿は、男の眼にはほしいまゝな刺激た
つた。懇意づくらしく戸もたゝかなかつた興録
もさすがにどきききして、這入らうにも目よう
にも所低に窮して、闔に片足を踏み入れたまゝ
當惑さうに立つてゐた。

「飛んだ風をしてゐまして御免下さいまし。

さ、お這入り遊ばせ。何んぞ御用でもいらつし

やいましたの」

と葉子は突みかまけたやうに云つた。興録はい

よく／＼度を失ひながら、

「いゝ何、今でなくつてもいいのですが、尤

のお部屋のお枕の下にこの手紙が残つてゐま

「船室ならば永田さんからのお話もありましたし、お狐旅のやうでしたから、醫務室の傍に移しておきました。御覽になつた前の部屋より少し窮屈かも知れませんが、何かに御便利ですよ。御案内しませう」

と云ひながら葉子をすり抜けて先きに立つた。何か芳醇な酒のしみと葉巻煙草との匂ひが、この男個有の膚の匂ひでもあるやうに透く葉子の鼻をかすめた。葉子は、どしんどしと狭い階子段を踏みしめながら降りて行くその男の太い頸から廣い肩のあたりをずつと見やりながらその後に續いた。

二十四五脚の椅子が食卓に背を向けてずつと列べてある食堂の中程から、横丁のやうな暗い廊下を一寸這入ると、右の戸に「醫務室」と書いた嚴整な眞鍮の札がかつてゐて、その向ひの左の戸には「〆〆〆」早月葉子殿と白墨で書いた漆塗りの札が下つてゐた。船員はつかつかとそこに這入つて、いきなり勢よく醫務室の戸をノックすると、高いダブル、カラーの前だけを外づして、上衣を脱ぎ捨てた船醫らしい男が、あたふたと細長いなま白い顔を突き出したが、そこに葉子が立つてゐるのを目ざとく見て取つて、慌てて首を引つ込めてしまつた。

船員は大きな憚りのない聲で、

「おい十二番はすつかり掃除が出来たらうね」と云ふと、醫務室の中からは女のやうな聲で、

「さしておきましたよ。綺麗になつてゐる筈ですが、御覽なすつて下さい。私は今一寸」

と船醫は姿を見せずに答へた。

「こりや一體船醫の私室なんですが、あなたの爲めにお明け申すつて云つてくれたもんですから、ボーイに掃除するやうに云ひつけておきましたんです。ど、綺麗になつとろか知らん」

船員はさうつぶやきながら戸を開けて「わたり中を見廻した。

「む、いゝやうです」

而して道を開いて、衣囊から「日本郵船會社給島丸事務長勳六等倉地三吉」と書いた大きな名刺を出して葉子に渡しなが、

「私が事務長をしります。御用があつたら何んでもどうか」

葉子は又黙つたまゝうなづいてその大きな名刺を手を受けた。而して自分の部屋と定められたその部屋の高い關を越えようとすると、

「事務長さんはここでしたか」

と尋ねながら田川博士がその夫人と打ち連れて廊下の中に立ち現はれた。事務長が帽子を取つ

て挨拶しようとしてゐる間に、洋装の田川夫人は葉子を目指して、スカートの紳士の音を立てながらつかつかと寄つて来て眼鏡の奥から小さく光る眼でじろりと見やりなが、

「五十川さんが噂していらした方はあなたね。何んとか仰しやいましたねお名は」

と云つた。この何んとか仰しやいましたねといふ言葉が、名もないものを憐れんで見てやるといふ腹を十分に見せてゐた。今まで事務長の前で、珍らしく受身になつてゐた葉子は、この言葉を聞くと強い衝動を受けたやうになつて我れに返つた。どう云ふ態度で返事をしてやらうかといふ事が、一番に頭の中で二十日鼠のやうに烈しく働いたが、葉子はすぐ腹を決めてひどく下手に尋常に出た。「あ」と驚いたやうな言葉を投げておいて、丁寧に低くつむりを下げながら、

「こんな所まで、恐れ入ります。私早月葉子と申しますが、旅には不慣れで居りますのに、狐旅で御座いますから……」

と云つて、眸を稱妻のやうに田川に移して、

「御迷惑では御座いませうが何分宜しく願ひます」

と又つむりを下げた。田川はその言葉の終るの

彼女は、子供のやうにそれが楽しめたかつたし、又船中で顔見知りの誰れ彼れが出来来る前に、是れまでの事、是れからの事を心に決めて考へても見たいとも思つた。然し葉子が三日の間船室に引き籠り續けた心持にはもう少し違つたものもあつた。葉子は自分が船客達から濃しい好奇の眼で見られようとしてゐるのを知つてゐた。立役は幕明きから舞臺に出てゐるものではない。観客が待ちに待つて、待ち草臥れさうになつた時分に、しづくと乗り出して、舞臺の空氣を思ふさま動かさねばならぬのだ。葉子の胸の中にはこんな狡猾いいたづらな心も潜んでゐたのだ。

三日目の朝電燈が百合の花の萎むやうに消える頃葉子はふと深い眠りから蒸暑さを感じて眼を覺ました。ステイムの通つて来るラヂエーターから、眞空になつた管の中に蒸氣の冷えた滴りが落ちて立てる激しい響きが聞こえて、部屋の中は輕く汗ばむ程暑まつてゐた。三日の出る部屋の中ばかりにゐて坐り疲れ寝疲れのした葉子は、狭苦しい寢臺の中に窮屈に寝ぢやまつた自分を見出すと、下になつた半身に輕い痺れを覺えて、體を仰向けにした。而して一度開いた眼を閉ぢて、美しく風味を持つた兩の腕を

頭の上に伸して、寝亂れた髪を弄びながら、覺め際の快い眠りに又靜かに落ちて行つた。が、程もなく本當に眼をさますと、大きく眼を見開いて、慌てたやうに腰から上を起して、丁度眼通りの所にある一面に水氣で曇つた眼窓を長い袖で押し拭つて、ほてつた頬をひやくするその窓ガラスに擦りつけながら外を見た。夜は本當には明け離れてゐないで、窓の向うには光の濃い灰色がどんよりと擴がつてゐるばかりだつた。而して自分の體がずつと高まつてやがて父落ちて行くなと思はしい頃に、窓に近い舷にさあつとあたつて碎けて行く波濤が、單調な底力のある震動を船室に與へて、船は隅かに横にかしいだ。葉子は身動きもせず眼にその灰色を眺めながら、嘸みしめるやうに船の動搖を明はつて見た。遠くく來たと云ふ旅情が、さすがにしみんと感ぜられた。然し葉子の眼には女らしい涙け浮ばなかつた。活氣のずんずん恢復しつゝあつた彼女には何かパセイツクな夢でも見てゐるやうな思ひをさせた。

葉子はさうしたまゝで、過ぐる二日の間眼にまかせて思ひ續けた自分の過去を夢のやうに繰り返して、聯絡のない終りのない繪巻が次ぎ／＼に捲げられたり捲かれたりした。基督を

戀ひ戀うて、夜も晝もやみがたく、十字架を編み込んだ美しい帯を作つて獻げようといふ一心に、日課も何もそつちのけにして、指の先きがささくれるまで細針を動かした可憐な少女その幻想の中に現はれた。寄附舎の二階の窓近く大きな花を豊かに開いた木蘭の香までがそこいらに漂つてゐるやうだつた。國分寺跡の、武藏野の一角らしい森の林も現はれた。すつかり少女のやうな無邪氣な素直な心になつてしまつて、孤節の膝に片も、魂も投げかけながら、涙と共にさ／＼やかれる孤節の耳うちのやうに震へた細い言葉、唯「はい／＼」と夢心地になつて吞み込んだ甘い場面は、今の葉子とは違つた人のやうだつた。さうかと思ふと左岸の岬の上から廣瀬川を越えて青葉山を一面に見渡した仙臺の景色がする／＼と開け渡つた。夏のは北國の空にもあふれ輝いて、白い礫の河原の間を眞青に流れる川の中には、赤黒な少年の群れが亦々とした印象を眼に與へた。草を敷かんばかりに低くうづくまつて、華やかな色のパラゾルに目をよけたがら、黙つて思ひに耽ける二人の女——その時には彼女はどの意味からも女だつた——何處までも満足を得られない心で、段々と世間から埋もれて行かね

したのを、ボーイが肩けて來ましたんで、早くさし上げておかうと思つて實は何したんでしたか……」

と云ひながら衣裳から二近の手紙を取り出した、手早く受取つて見ると、一つは古藤が木村に宛てたもの、一つは葉子に宛てたものだつた。興録はそれを手渡すと、一種の意味ありげな笑ひを眼だけに浮べて、顔だけはいかに尤もらしく葉子を見やつてゐた。自分のした事を葉子はさう推量するとかの娘の寫眞を床の上から拾ひ上げた。而してわざと裏を向けながら見向きもしないで、

「こんなものがこゝにも落ちて居りましたの。お妹さんでいらつしやいますか。お綺麗ですこと」

と云ひながらそれをつき出した。

興録は何か云ひ譯のやうな事を云つて部屋を出て行つた。と思ふと暫らくして醫務室の方から事務長のらしい大きな笑ひ聲が聞こえて來た。それを聞くと、事務長はまだそこにゐたかと、葉子は我れにもなくはつとなつて、思はず着かへかけた着物の衣紋に左手をかけたまゝ、俯向き加減になつて横眼をつかひながら耳をそば

だてた。破裂するやうな事務長の笑聲がまた聞こえて來た。而して醫務室の戸をさつと開けたらしく、聲が急に一倍大きくなつて、

「Devil take it! No tuma creature than,

it!」と亂暴に云ふ聲が聞こえたが、それと共にマツチを擦る音がして、やがて要巻をくはへたまゝの口籠りのする言葉で、

「もうぢき検査船だ。準備はい、だらうな」

と云ひ残したまゝ、事務長は船醫の返事も待たずに行つてしまつたらしかつた。かすかな匂ひが葉子の部屋にも通つて來た。

葉子は聞耳をたてながらうなだれてゐた顔を上げると、正面をきつて何と云ふ事なしに微笑を漏らした。而してすぐじよつとしてあたりを見廻したが、我れに返つて自分一人きりなのに安堵して、いそぐと着物を着かへ始めた。

十一

繪島丸が横濱を抜銷してからもう三日たつた。東京灣を出抜けると、黒潮に乗つて、金華

山沖あたりからは航路を東北に向けて、眞直に緯度を上つて行くので、気温は二日あたりから日立つて涼しくなつて行つた。陸の影は何時の間にか船のどの舷からも眺める事は出来なくなつてゐた。背羽根の灰色な腹の白い海鳥が、時々思ひ出したやうに淋しい聲で啼きながら、船の周囲を回れ飛ぶ外には、生き物の影とは見る事も出来ないやうになつてゐた。重い冷たい潮霧が野火の煙のやうに滾々と南に走つて、それが秋らしい爽霧となつて、船體を包むかと思ふと、忽ちからつと晴れた青天を船に残して消えて行つたりした。格別の風もないのに海面は色濃く波打ち騒いだ。三日目からは船の中に盛んにステイームが通じ始めた。

葉子はこの三日といふもの、二度も食堂に出ずに船室にばかり閉ぢ籠つてゐた。船に酔つたからではない。始めて遠い航路を試みる葉子にしては、それが不思議な位にやすい底だつた。普段以上に食欲さへ増してゐた。神経に強い刺戟が與へられて、兎角鬱結し易かつた血液も濃く重たいなりに滑らかに血管の中を循環し、海から來る一種の力が體の隅々まで行き届つて、うづ／＼する程な活力を感じさせた。漏らし所のないその活氣が運動もせずにある葉子の體から心に傳はつて、一種の恒態に變るやうにさへ思へた。

葉子はそれでも船室を出ようとはしなかつた。生れてから始めて孤獨に身を置いたやうな

つた道を歩いてゐる自分を見出だしてしまつてゐた。而して隣では倒れた。まはりの人達は手を取つて葉子を起してやる仕方も知らないやうな顔をして唯々馬鹿らしく嘲笑つてゐる。そんな風にしか葉子には思へなかつた。幾度もそんな苦い経験が葉子に片意地な、少しも人を頼らうとしない女にしてしまつた。而して葉子は謂はば本能の向せるやうに向いてどんく歩くより仕方になかつた。葉子は今更のやうに自分のまはりを見廻して見た。何時の間にか葉子は一番近しい筈の人達からもかけ離れて、たつた一人で崖の上に立つてゐた。そこで唯々一つ葉子を崖の上に繋いでゐる綱には木村との婚約といふ事があるだけだ。そこに踏みとどまればよし、さもなければ、世の中との縁はたちどころに切れてしまふのだ。世の中に活きながら世の中との縁が切れてしまふのだ。木村との婚約で世の中は葉子に對して最後の和睦を示さうとしてゐるのだ。葉子に取つて、この最後の機會をも破り捨てようといふのはさすがに容易ではなかつた。木村といふ首極を受けないでは生活の保障が絶え果てなければならぬのだから。葉子の懷中には百五十弗の米賃があるばかりだつた。定子の養育費だけでも、米國に足る

下すや否や、すぐに木村にたよらなければならぬのは眼の前に分つてゐた。後詰となつてくれる親類の一人もないのは勿論の事、やゝともすれば親切ごかしに無いものまでせびり取らうとする手合ひが多いのだ。たま／＼葉子の姉妹の内實を知つて氣の毒だと思つても、葉子ではと云ふやうに手出しを控へるものばかりだつた。木村——葉子には義理にも愛も戀も起り得ない木村ばかりが、葉子に對する唯一一人の戦士なのだ。あはれな木村は葉子の蠱惑に陥つたばかりで、早月家の人々から否應なしにこの重荷を背負はされてしまつてゐるのだ。

何うしてやらう。葉子は思ひ餘つたその場通れから、簞笥の上に興録から受取つたまゝ放け捨て置いていた古藤の手紙を取り上げて白い西洋封筒の一端を美しい指の爪で丹念に細く破り取つて、手筋は立派ながらまだ何處かたど／＼しい手跡でペンで走り書きした文句を読み下して見た。

「あなたは、おさん、どんになるといふ事を想像して見る事が出来ますか。おさん、どんといふ仕事に女にあるといふ事を想像して見る事が出来ますか。僕はあなたを見る時は何時でもさう思つて不思議な心持になつて

しまひます。一體世の中には人を使つて、人から使はれると云ふ事を全くしないでいいといふ人があるものでせうか。そんな事が出来得るものでせうか。僕はそれをあなたに考へていたぐたいのです。

あなたは奇體な感じを興へる人です。あなたになさる事はどんな危険な事でも危険らしく見えません。行きづまつた末にはかうといふ覺悟がちやんと出来てゐるやうに思はれるからでせうか。

僕があなたに始めてお目に懸つたのは、この夏あなたが木村君と一緒に八幡に避暑をして居られた時ですから、あなたに就いては僕は何んにも知らないといふ位です。僕は第一一般的に女と云ふものについて何んにも知りません。然し少しでも僕にたを知つただけの心持から云ふと、女の人と云ふものは僕に取つては不思議な謎です。あなたは何處まで行つたら行きづまると思つてゐるんです。あなたは既に木村君で行きづまつてゐる人なんだと僕には思はれるのです。結婚を承諾した以上はそれ良人に行きづまるのか女の人の當然な道ではないのでせうか。木村君で行きづまつて

ばならないやうな境遇に押し込められようとする運命。確かに道を踏みちがへたとも思ひ、踏みちがへたのは誰れがさした事だと神をすら詰つて見たいやうな思ひ。暗い産室も隠れてはゐなかつた。その恐ろしい沈黙の中から起る強い快い赤兒の産聲——やみがたい母性の意識——「我れ既に世に勝てり」とでも云つて見たい不思議な誇り——同時に重く胸を抑へつける生の暗い急變。かゝる時思ひも設けず力強く追つて来る振り捨てた男の執着。明日をも頼み

難い命の夕闇にさまよひながら、切れぬ言葉で葉子と最後の妥協を結ぼうとする病床の母——その顔は葉子の幻想を斷ち切る程の強さで現はれ出た。思ひ入つた決心を眉に集めて、日頃の樂天的な性情にも似ず、運命と取組むやうな貞剛な顔付きで、大事の結着を待つ木村の顔。母の死を憐れむとも悲しむとも知れない涙を眼には湛へながら、水のやうに冷え切つた心で、俯向いたまゝ口一つきかない葉子自身の姿——そんな幻像が或はつき／＼に、或は折り重つて、灰色の霧の中に動き現はれた。而して記憶は段々と過去から現在の方に近づいて來た。と、事務長の倉地の淺黒く日に焼けた顔とその廣い肩とが思ひ出された。葉子は思ひもか

けないものを見出したやうにはいつとなると、その幻像は多量もなく消えて、記憶は又遠い過去に歸つて行つた。それが又段々現在の方に近づいて來たと思ふと、最後には吃度倉地の姿が現はれ出た。

それが葉子をいら／＼させて、葉子は始めて夢現の境から本當に醒めて、うるさいものでも拂ひのけるやうに、眼から眼をそむけて寝臺を離れた。葉子の神経は偶からひどく興奮してゐた。ステイムで存分に暖まつて來た船室の中の空氣は涼しい程だつた。

船に乗つてから餘々運動もせずに、野榮氣の極い物ばかりを食ひ食べたので、身内の血には激しい熱がこもつて、毛の尖へまでも通ふやうだつた。寝臺から立ち上つた葉子は腹脹を感ずる程に上氣して、水のやうな冷たいものでもひしと抱きしめたい氣持になつた。で、ふらふらと洗面臺の方に行つて、ビッチャーの水をなみ／＼と陶器製の洗面盤にあけて、ずつぷり浸した手拭をゆるく絞つて、ひやつとするのを構はず、胸をあけて、それを乳房と乳房との間にぐつとあてがつて見た。強い烈しい動悸が押へてゐる手の平へ突き返して來た。葉子はさうしたまゝで前の鏡に自分の顔を近づけて見た。ま

だ夜の氣が薄暗くさまよつてゐる中に、頬をほてらしながら深い呼吸をしてゐる葉子の顔が、自分にすら物凄い程なまめかしく映つてゐた。葉子は物好きらしく自分の顔に譯ののからしい微笑をすら湛へて見た。

それでもその中に葉子の不思議な心のどこめきは鎮まつて行つた。鎮まつて行くにつれ、葉子は今までの引き續きで父願想的な氣分に引き入れられてゐた。然しその時はもう夢現ではなかつた。極く實際的な鋭い頭が針のやうに光つて尖つてゐた。葉子は濡手拭を洗面盤に抛りつけておいて、靜かに長椅子に腰をおろした。笑ひ事ではない。一體自分は何うする積りでゐるんだらう。さう葉子は出發以來の問ひをもう一度自分に投げかけて見た。小さい時からまはりの人達に慣れる程はじけて、同じ年頃の女の子とはいつでも一と調子違つた行き方を、するでもなくして來なければならなかつた自分は、生れる前から運命にでも呪はれてゐるのだらうか。それかと云つて葉子はすべての女の順々に通つて行く道を通る事は何うしても出來なかつた。通つて見ようとした事は幾度あつたか解らない。かうさへ行けばいいのだらうと通つて來て見ると、いつも飛んでもなく逆

老人の繰り言のやうにしか見えなかつた。葉子は長い黙想の中から活々と立ち上つた。而して化粧をすまず爲めに鏡の方に近づいた。

木村を良人とするのに何んの屈託があらう。

木村が自分の良人であるのは、自分が木村の妻であるといふ程に軽い事だ。木村といふ假面；

葉子は鏡を見ながらさう思つて微笑んだ。而して亂れかゝる額際(おでこ)の髪を、振り仰いで後ろに撫でつけたり、兩方の鬢(みづみづ)を器用にかけ上げた

して、良工が細工物でもするやうに樂しみながら元氣よく朝化粧を終へた。濡れた手拭で、

鏡に近づけた眼のまはりの白粉を拭ひ終ると、唇を開いて美しく揃つた齒並みを眺め、兩

方の手の指を壺の口のやうに一所に集めて爪の掃除が行き届いてゐるか確めた。見返ると船

に乗る時着て来た單衣のぢみな衣物は、世捨人のやうにだらりと淋しく部屋の間(ま)の帽子(ぼうし)は、世捨人

にかゝつたまゝになつてゐた。葉子は派手な給をトランクの中から取り出して寝衣と着かへなが

ら、それに眼をやると、肩にいつかりとしがみ附いて泣きをめいた彼の狂氣じみた若者の事を

思つた。と、すぐその側から若者が小脇に抱へた事務長の姿が思ひ出された。小雨の中を、

外套も着ずに、小荷物でも運んで行つたやうに

若者は棧橋の上に下して、ちよつと五十川女史に挨拶して船から投げた網にすがるや否や、靜かに岸から離れて行く船の甲板の上に輕々と上つて来たその姿が、葉子の心をくすぐるやうに樂しませて思ひ出された。

夜はいつの間にか明け離れてゐた。眼窓の外は元のまゝに灰色はしてゐるが、活々とした光

が添ひ加はつて、甲板の上を毎朝規則正しく散歩する白髪(はくぱい)の米人とその娘との聲音がこつ／＼

快活らしく聞こえてゐた。化粧をすました葉子は長椅子にゆつくり腰をかけて、兩脚を眞直に揃へて長々と延ばしたまゝ、うつとりと思ふ

ともなく事務長の事を思つてゐた。その時突然ノックをしてボーイが珈琲を持つて這入つて来た。葉子は何か悪い所でも見附け

られたやうに一寸きよつとして、延ばしてゐた脚の膝を立てた。ボーイは毎時のやうに薄笑ひをして一寸頭を下げて銀色の盆を疊(かさね)椅子の上においた。而して今日も食事は矢張り船室に

運ばうかと尋ねた。一今晩からは食堂にして下さい」葉子は嬉しい事で云つて聞かせるやうにかう云つた。ボーイは眞而目くさつて「はい」と云つたが、ちらりと葉子を上眼で見ても、急ぐやうに

部屋を出た。葉子はボーイが部屋を出てどんな風をしてゐるかがはつきり見えるやうだつた。ボーイはすぐにこゝと不思議な笑ひを漏らしながら、ケーク・ウオークの足つきで食堂の方

に歸つて行つたに違ひない。程もなく、

「え、いよ／＼御來迎！」

「來たね」

と云ふやうな野卑な言葉が、ボーイらしい輕薄な調子で聲高に取引交はされるのを葉子は聞いた。

葉子はそんな事を耳にしながらかゝる事務長の事を思つてゐた。「三日も食堂に出ないで閉ぢ籠つてゐるのに、何んといふ事務長だらう、

一遍も見舞ひに來ないとはあんまりひどいことんな事を思つてゐた。而してその一方では縁も

ゆかりもない馬のやうに唯々嚴乘な一人の男が何んから思ひ出されるのだらうとも思つてゐた。

葉子は輕い溜息をついて何氣なく立ち上つた。而して又長椅子に腰かける時には棚の上から事務長の名刺を持つて來て眺めてゐた。一日本郵船會社給島丸事務長勳六等倉地三吉と明

朝ではつきり書いてある。葉子は片手で珈琲をすゝりながら、名刺を裏返してその裏を眺めた。

下さい。木村君にあなたを全部與へて下さい。木村君の親友として是れが僕の願ひです。

全體同じ年齢でありながら、あなたからは僕などは子供に見えるのでせうから、僕の云ふ事などは頓着ならぬかと思ひますが、子供にも一つの直覺はあります。そして子供はきつぱりした物の姿が見たいのです。あなたが木村君の妻になると約束した以上は、僕の云ふ事にも權威がある筈だと思ひます。

僕はさうは云ひながら一面にはあなたが羨ましいやうにも、憎いやうにも、可哀さうなやうにも思ひます。あなたのなさる事が僕の理性を裏切つて奇怪な同情を喚び起すやうにも思ひます。僕は心の底に起るこんな側きをも強ひて押しつぶして理窟一方に同まらうとは思ひません。それほど僕は道學者ではない積りです。それだからと云つて、今のまゝのあなたでは、僕にはあなたを敬親する氣は起りません。木村君の妻としてあなたを敬親したいから、僕は敢てこんな事を書きました。さういふ時が来るやうにしてほしいのです。

木村君の事を——あなたに熱愛してあなたのみに希望をかけてゐる木村君の事を考へると僕はこれだけの事を言はずにはゐられなくなりです。

木村葉子様

古藤義一

それは葉子に取つては本當に子供っぽい言葉としか響かなかつた。然し古藤は妙に葉子には苦手だつた。今も古藤の手紙を読んで見ると、馬鹿々々しい事が云はれてゐるとは思ひながら、一番大事な急所を偶然のやうにしつかり捕へてゐるやうにも感じられた。本當にこんな事をしてゐると、子供と見くびつてゐる古藤にも憐れまれるはめになりさうな氣がしてならなかつた。葉子は何んと云ふ事なく懺悔になつて古藤の手紙を巻きをさめもせず膝の上に置いたまま眼をすゑて、ぞつと考へるともなく考へた。

それにしても、新しい教育を受け、新しい思想を好み、世事に疎いだけに、世の中の習俗からも飛び離れて自由でありけに見える古藤さへが、葉子が今立つてゐる崖の際から先きには、葉子が足を踏み出すのを懼み恐れる様子を明らかに見えてゐるのだ。結婚といふものが一人の女に取つて、どれ程生活といふ實際問題と結

び付き、女がどれ程その束縛の下に慄んでゐるかを考へて見る事さへしようとはしないのだ。さう葉子は思つても見た。

是れから行かうとする米國といふ上地の生活も葉子はひとりで色々と思ふたではないなかつた。米國の人達はどんな風に自分を迎へ入れようとはするだらう。兎に角今までの狭い構まい過去と縁を切つて、何の欄はりもない社會の中に乗り込むのは面白い。和服よりも遙かに洋服に適した葉子は、その交際社會でも風俗では米國人を笑はせない事が出来る。歡樂でも哀傷でもいづくりと實生活の中に織り込まれてゐるやうな生活がそこにはあるに違ひない。女のチャームといふものが、習慣的な絆から解き放されて、その力だけに働く事の出来る生活がそこにはあるに違ひない。才能と力量さへあれば女でも男の手を借りずに自分を周りの人に認めさせる事の出来る生活がそこにはあるに違ひない。女でも胸を張つて存分呼吸の出来る生活がそこにはあるに違ひない。少くとも交際社會のどこかではそんな生活が女に許されてゐるに違ひない。葉子はそんな事を夢想するとむづ／＼する程快活になつた。そんな心持で古藤の言葉などを考へて見ると、丸で

で、
「さう、その話でしたな。モンロー主義もその主張は始めの中は、北米の獨立諸州に對して歐羅巴の干渉を拒むと云ふだけのものではあつたのです。所がその政策の内容は年と共に段々變つてゐる。モンローの宣言は立派に文字になつて残つてゐるけれども、法律と云ふ譯ではなし、文章も融通がきくやうに出来てゐるので、取りやうによつては、どうにでも伸縮する事が出来るのです。マッキンレー氏などは随分極端にその意味を擴張してゐるらしい。尤も之れにはクリーヴランドといふ人の先例もあるし、マッキンレー氏の下にはもう一人有力な黒幕がある筈だ。どうです齋藤君」
と二人おいた斜向ひの若い男を顧みた。齋藤と呼ばれた、ワシントン公使館赴任の外交官補は、眞赤になつて、今まで葉子に向けてゐた眼を大急ぎで博士の方に外らして見たが、質問の要領をはつきり捕へて、更に赤くなつて術ない身振りをした。これ程な席にさへ當て臨んだ習慣のないらしいその人の素性がその慌て方に十分に見え透いたゐた。博士は見下したやうな態度で暫時その青年のどぎまぎした様子を見てゐたが、返事を待ちかねて、事務長

の方を向かうとした時、突然遙か遠い食卓の一端から、船長が顔を眞赤にして、

「You mean Teddy the roughrider?」

と云ひながら子供げのやうな笑顔を人々に見せた。船長の日本語の理解力をそれ程に思ひ設けてゐなかつたらしい博士は、この不意打ちに今度は自分がまごついて、一寸返事をしかねてゐると、田川夫人がさそくにそれを引き取つて、

「Good hit for you, Mr. Captain!」

と癖のない發音で云つて退けた。これを聞いた一座は、殊に外國人達は、椅子から乗り出すやうにして夫人を見た。夫人はその時人の眼にはつきかねるほどの敏捷さで葉子の方を凝つた。葉子は眉一つ動かさずに、下を向いたまゝでスローを吸つてゐた。

憤み深く大匙を持ちあつかひながら、葉子は自分に何か際立つた印象を與へようとして、色々な眞珠を鏡ひ合つてゐるやうな人々の様を心の中で笑つてゐた。實際葉子が姿を見せてから、食堂の空氣は調子を變へてゐた。殊に若い人達の間には一種の重苦しい波動が傳はつたらしく、物を云ふ時、彼等は知らず／＼激昂したやうな高い調子になつてゐた。殊に一番若く

見える、一人の上品な青年、船長の隣座にゐるので葉子は家柄の高い生れに違ひない。思つた――などは、葉子と一と眼顔を見合はしたが最後、震へんばかりに興奮して顔を得上げないでゐた。それなのに事務長だけは、一向動かさされた様子が見えぬばかりか、どうかした、拍子に齒を合せた時でも、その臆面のない、人を人とも思はぬやうな熟視は、却つて葉子の視線をたじろがした。人間を眺めあきたやうな氣倦るげなその眼は、濃い睫毛の間から insolent な光を放つて人を射た。葉子はいさうして思はず眸をたじろがす度毎に事務長に對して不思議な憎しみを覺えたと共に、もう一度その憎むべき眼を見すゑてその中に潛む不思議を存分に見窮めてやりたい心になつた。葉子はさうした氣分に促されて時々事務長の方に坐き附けられるやうに視線を送つたが、その度毎に葉子の眸は脆くも手きびしく追ひ退けられた。
かうして妙な氣分が食卓の上に繰りなされながらやがて食事は終つた。一同が座を立つ時、物慣らされた物腰で、椅子を引いてくれた田川博士にやさしく微笑を見せて視をしながらも、葉子は矢張り事務長の舉動を子細に見る事に平ば氣を奪はれてゐた。

而して眞白なその裏に何か長い文句でも書いてあるかのやうに、二重になる豊かな額を襟の間に落して、少し眉をひそめながら、永い間まじろぎもせず見詰めてゐた。

十二

その日の夕方、葉子は船に來てから始めて食堂に出た。着物は思ひ切つて地味なくすんだのを選んでけれども、顔だけは存分に若くつてゐた。二十を越すや越さずに見える、眼の大きな沈んだ表情の彼女の燃の藍鼠は、何んともなく見る人の心を縛くさせた。細長い食卓の一端に、カップ・ボードを後ろにして座を占めた事務長の右手には田川夫人がゐて、その向ひが田川博士、葉子の席は博士のすぐ隣りに取つてあつた。その外の船客も大抵は既に卓に向つてゐた。葉子の登音が聞こえると、逸早く眼くばせをし合つたのはボーイ仲間で、その次ぎにひどく落ち付かぬ様子をし出したのは、事務長と向ひ合つて食卓の他の一端にゐた鬚の白い亞米利加人の船長であつた。慌てて席を立つて、右手にナブキンを下げながら、自分の前を葉子に通らせて、顔を眞赤にして座に返つた。葉子はしとやかに人々の物數奇らしい視線を受け流

しながら、ぐつと食卓を廻つて自分の席まで行くと、田川博士は竊むやうに夫人の顔を一寸窺つておいて、肥つた體をよけるやうにして葉子と自分の隣りに坐らせた。

坐り住ひをたゞしてゐる間、澤山の注視の中にも、葉子は田川夫人の冷たい眸の光を浴びてゐるのを心地悪い程に感じた。やがてきちんと慣ましく正面を向いて腰かけて、ナブキンを取り上げながら、先づ第一に田川夫人の方に眼をやつてそつと挨拶すると、今までの角々しい眼にもさすがに申し譯程の笑みを見せて、夫人が何か云はうとした瞬間、その時までぎこちなく話を途切らしてゐた田川博士も事務長の方に向いて何か云はうとした所であつたので、兩方の言葉が氣まづくぶつかりあつて、夫婦は思はず同時に顔を見合せた。一座の人々も、日本人と云はず外國人と云はず、葉子に集めてゐた昨を田川夫妻の方に向けた。「失禮」と云つてひかへた博士に夫人は一寸頭を下げておいて、皆んなに聞こえる程はつきり澄んだ聲で、

「とんと食堂にお出でがなかつたので、お案じ申しましたの。船にはお困りですか」と云つた。さすがに世慣れてさ走つたその言葉は、人の上に立ちつけた重みを見せた。葉子は

にこやかに黙つてうなづきながら、位を一段落して會澤するのをさう不快には思はぬ位だつた。二人の間の挨拶はそれなりで途切れてしまつたので、田川博士は徐ろに事務長に向つてし續けてゐた話の絲目をつなぐうとした。

「それから、その……」

然し話の絲口は思ふやうに出て來なかつた。事もなげに落ち付いた様子に見える博士のの中に、軽い混亂が起つてゐるのを、葉子はすぐ見て取つた。思ひ通りに一座の氣分を動搖させる事が出來るといふ自信が裏書きされたやうに葉子は思つてそつと満足を感じてゐた。而してボーイ長の指圖でボーイ等が手器用に運んで來たポターヂュを吸りながら、田川博士の方の話を耳を立てた。

葉子が食堂に現はれて自分の視界に這入つて來ると、臆面もなくぢつと眼を定めてその顔を見やつた後に、無頓着に食匙を動かしながら、時々食卓の客を見廻して氣を配つてゐた事務長は、下唇を返して鬚の先きを吸ひながら、鹽さびのした太い聲で、

「それからモンロー主義の本體は」と話の絲目を引つ張り出しておいて、まともに博士を打ち見やつた。博士は少し面伏せな様子

だと思つた時にはもう體中は不快な感の爲めにわな／＼と震へてゐた。

「嘔けはい」

さう思つて手欄から身を乗り出す瞬間、體中の力は腹から胸元に集まつて、背は思はずも激しく波打つた。その後はもう夢のやうだつた。

暫らくしてから葉子は力が抜けたやうになつて、ハンケチで口許を拭ひながら、頼りなくあたりを見廻した。甲板の上も波の上のやうに荒涼として人氣がなかつた。明るく灯の光の漏れてゐた窓は残らずカーテンで蔽はれて暗くなつてゐた。右にも左にも人はゐない。さう思つた心のゆるみにつけ込んだのか、胸の苦しみが又急によせ返して來た。葉子はもう一度手欄に乗り出してほろ／＼と熱い涙をこぼした。例へば高くつるした大石を切つて落したやうに、過去といふものが大きな一つの暗い悲しみとなつて胸を打つた。物心を覺えてから二十五の今日まで、張りつめ通した心の絲が、今こそ思ひ存分ゆるんだかと思はれるその悲しい快さ。葉子はその空しい哀感にひとりながら、重ねた兩手の上に額を乗せて手欄によりかゝつたまゝ、重

い呼吸をしながらほろ／＼と泣き續けた。一時性貧血を起した額は死人のやうに冷え切つて、

泣きながらも葉子はどうかするとふつと引き入れられるやうに假睡に陥らうとした。而してはいつと何かに驚かされたやうに眼を開くと、また底の知れぬ哀感が何處からともなく襲ひ入つた。悲しい快さ。葉子は小學校に通つてゐる時分でも泣きたい時には、人前では齒を喰ひしやつてゐて、人のゐない所まで行つて隠れて泣いた。涙を人に見せるといふのは卑しい事にしか思へなかつた。乞食が哀れみを求めたり、老人が愚痴を云ふのと同様に、葉子には穢らはしく思へてゐた。然しその夜に限つては葉子は誰れの前でも素直な心で泣けるやうな氣がした。誰れかの前でさめ／＼と泣いて見たいやうな氣分にさへなつてゐた。しみ／＼と憐れんでくれる人もありさうに思へた。さうした氣持で葉子は小娘のやうに多愛もなく泣きつづけてゐた。

その時甲板のかなた靴の音が聞こえて來た。二人らしい発音だつた。その瞬間までは誰れの胸にでも抱きついてしみ／＼泣けると思つてゐた葉子は、その音を聞きつけるとはつといふ間もなく、張りつめたいいつものやうな心になつてしまつて、大急ぎで涙を押し拭ひながら、踵を返して自分の部屋に戻らうとした。が、その時はもう遅かつた。洋服姿の田川夫妻がはつ

きりと見分けがつく程の距離に迫みよつてゐたので、さすがに葉子もそれを見て見ぬふりでやり過ぐす事は得しなかつた。涙を拭ひ切ると、左手を舉げて髪のはつれをしなをしながらかき上げた時、二人はもうすぐ傍に近寄つてゐた。

「あらあなたでしたの。私共は少し用事が出来ておくれましたが、こんなにこそくまで室外にいらしつてお寒くはありませんでしたか。氣分はいかゞです」

田川夫人は例の目下の者に云ひ慣れた言葉を器用に使ひながら、はつきりとかう云つて覗き込む様にした。夫妻はすぐ葉子が何をしてゐたかを感付いたらしい。葉子はそれをひどく不快に思つた。

「急に寒い所に出ました故ですかしら、何んだか頭がぐら／＼致しまして」

「お嘔しなかつた……それはいけない」

田川博士は大人の言葉を聞くと尤もと云ふ風に「二三度、こつくりと」うなづいた。厚外套にくるまつた肥つた博士と、暖かさうなスコッチの裾長の服に、露西亞頭巾を肩際まで被つた夫人との前に立つと、やさ形の葉子は脊丈けこそ高いが、二人の娘ほどに腫められた。

「どうだ一緒に少し歩いて見ちや」

少し甲板に出て御覽になりました。寒くとも気分は晴々しますから。私も一寸部屋に歸つてシヨールを取つて出て見ます。

かう葉子に云つて田川夫人は良人と共に自分の部屋の方に去つて行つた。

葉子も部屋に歸つて見たが、今まで閉ぢ籠つてばかりゐると左程にも思はなかつたけれども、食堂程の廣さの所からでもそこに來て見ると、思ふまじがしきりに狭苦しかつた。で、

葉子は長椅子の下から、木村の父が使ひ慣れた古トランク——その上に古藤が油繪具でY・R・

と書いてくれた古トランクを引き出して、その中から黒い駝鳥の羽のボアを取り出して、西洋

臭いその匂ひを快く鼻に感じながら、深々と頸を捲いて甲板に出て行つて見た。窮屈な階子段

をやゝよろ／＼しながら昇つて、重い戸を開けようとする和外氣の抵抗が中々激しくつて押

しもどされようとした。きりつと押上げたやうな寒さが、戸の隙から縦まゝに細長く葉子を襲つた。

甲板には外國人が五六人厚い外套にくるまつて、堅いティークの床をかつ／＼と踏みなら

しながら押し駄つて勢よく右往左往に散歩してゐた。田川夫人の姿はその邊にはまだ見出さ

れなかつた。鹽氣を含んだ冷たい空氣は、室内にのみ閉ぢ籠つてゐた葉子の胸を押し擽けて、頬には血液がち／＼と軽く針をさすやうに皮膚に近く突き進んで來るのが感ぜられた。葉子は散歩客には構はずに甲板を横きつて船べりの手欄によりかゝりながら、波また波と果てしもなく連なる水の堆積をはる／＼と眺めやつた。

折り重つた鈍色の雲の彼方に夕日の影は跡形もなく消え失せて、闇は重い不思議な瓦斯のやうに力強く總ての物を押しひしやけてゐた。雪

をたつぷり含んだ空だけが、その闇と僅かに争つて、南方には見られぬ暗い、燐のやうな、淋

しい光を残してゐた。一種のテンポを取つて高くなり低くなりする黒い波濤の方には、更に

黒ずんだ波の總が果てしもなく連なつてゐた。船は思つたより激しく動搖してゐた。赤いガラ

スを嵌めた橋燈が空高く、右から左、左から右へと廣い角度を取つて閃いた。閃く度に船

が横かしぎになつて、重い水の抵抗を受けながら進んで行くのが、葉子の足から體に傳はつて感ぜられた。

葉子はふら／＼と船にゆり上げゆり下げられながら、まんじりともせず、黒い波の峰と波の谷とが交る／＼眼の前に現はれるのを見つめ

てゐた。豐かな髪の毛を透して寒さがしん／＼と頭の中に滲みこむのが、始めの中は珍らしく、氣持だつたが、やがて痺れるやうな頭痛に變つて行つた。……と、急に、何處をどう滑んで來たとも知れないやな滑しさが盜風のやうに葉子を襲つた。船に乗つてから春の草のやうに萌え出した元氣はぼつきりと心を留められてしまつた。頭腦がじん／＼と痛み出して、泣きつかれの後に似た不愉快な睡氣の中に、頭をつ

いて睡氣さへ催して來た。葉子は慌ててあたりを見廻したが、もうそこいらには散歩の人足も絶えてゐた。けれども葉子は船室に歸る氣力

もなく、右手でしつかりと額を押へて、手欄に顔を伏せながら念じるやうに眼をつぶつて見た

が、云ひやうのない滑しさいや増すばかりだつた。葉子はふと定戸を懷疑してゐた時の烈しい悪阻の苦痛を思ひ出した。それは折から痛ま

しい回想だつた。定戸……葉子はもうその筈には堪へないといふやうに頭を振つて、氣

を紛らす爲めに眼を開いて、留度なく動く波の戯れを見ようとしたが、一と眼見るやぐら／＼

と眩暈を感じて一たまりもなく又突つ伏してしまつた。深い悲しい溜息が思はず出るのを留め

ようとしても甲斐がなかつた。一船に酔つたの

こんな悪戯をするのだと思ふと激しい敵意から唇をかんだ。

然しその時田博士がサルーンから漏れて来る灯の光で時計を見て、八時十分前だから部屋に歸らうと云ひ出したので、葉子は別に何も云はずにしまつた。三人が階下段を降りかけた時、夫人は、葉子の氣分には一向氣付かぬらしく、――若しさうでなければ氣付きながらわざと氣付かぬらしく振舞つて、

「事務長はあなたのお部屋にも遊びに見えますか――と突拍子もなくいきなり問ひかけた。それを聞くと葉子の心は何んと云ふ事なしに理不盡な怒りに捕へられた。得意な皮肉でも思ひ存分に浴びせかけてやらうかと思つたが、胸をさすり下してわざと落ち付いた調子で、

「いゝえ、ちつともお見えになりませんが……」と空々しく聞こえるやうに答へた。夫人はまだ葉子の心持には少しも氣付かぬ風で、

「おやさう。私の方へは度々いらして困りますのよ」と小聲で囁いた。一何を生意氣な――葉子は前後なしにかう心の中に叫んだが一言も口には出さなかつた。敵意――嫉妬とも云ひ代へられさう

な――敵意がその瞬間からすつかり根を張つた。その時夫人が振り返つて葉子の顔を見たならば、思はず博士を楯に取つて恐れながら身をかはさずにはゐられなかつたらう、――そんな場合には葉子は固よりその瞬間た稻妻のやうにすばしこく隔意のない顔を見せたには違ひなからうけれども、葉子は一言も云はずに黙禮したまゝ、二人に別れて自分の部屋に歸つた。

室内はむつとする程暑かつた。葉子は驅氣をもう感じてはゐなかつたが、胸元が妙にしめつけられるやうに苦しいので、急いでボアをかいやつて床の上に捨てたまゝ、投げるやうに長椅子に倒れかゝつた。

それは不思議だつた。葉子の神経は時には自分でも持て餘す程鋭く働いて、誰れも氣のつかない匂ひがたまらない程氣になつたり、人々着てゐる衣服の色合が見てゐられない程不調和で不愉快であつたり、周囲の人が勝抜けな木偶のやうに甲斐なく思はれたり、静かに空を渡つて行く雲の脚が腹脹がする程めまぐるしく見えたりして、我慢にもぢつとしてゐられない事は絶えずあつたけれども、その夜のやうに鋭く神経の尖つて來た事は覺えがなかつた。神経の末梢がまるで大風に遇つた柵のやうにざわ／＼と

音がするかとさへ思はれた。葉子は胸と胸とをぎゅつとからみ合せてそれに力をこめながら、右手の指先を四本揃へてその爪先を水晶のやうに固く美しい齒で、思ひに激しく噛んで見たりした。惡寒のやうな小刻みな身ぶるひが絶えず足の方から頭へと波動のやうに傳はつた。

寒いためにさうなるのか、暑い爲めにさうなるのかよく分らなかつた。さうしていら／＼ながらトランクを開いたまゝで取り散らした部屋の中をぼんやり見やつてゐた。眼はうるさく霞んでゐた。ふと落ち散つたものの中に葉子は事務長の名刺があるのに眼をつけて、身をかがめてそれを拾ひ上げた。それを拾ひ上げると眞二つに引裂いてまた床になげた。それはあまりに手應へなく裂けてしまつた。葉子はまた何かもつと／＼と手應へのあるものを求めるやうに熱して輝く眼でまじ／＼とあたりを見廻してゐた。と、カーテンを引き忘れてゐた。車かしい様子を見られはしなかつたかと思ふと胸がいき／＼としていきなり立ち上つたとした拍子に、葉子は窓の外に人の顔を確認したやうに思つた。田博士のやうでもあつた。田川夫人のやうでもあつた。然しそんな筈はない、二人はもう部屋に歸つてゐる。事務長……

と田川博士が云ふと、夫人は、
「好う御座いますせうよ、血液がよく循環して」
と應じて葉子に散歩を促した。葉子は巴むを得ず、かつ／＼と鳴る二人の靴の音と、自分の上草履の音とを淋しく聞きながら、夫人の側にひき添つて甲板の上を歩き始めた。ギーイときしみながら船が大きくかしのにうま／＼中心を取りながら歩かうとすると、また不快な氣持が胸先にこみ上げて来るのを葉子は強く押し靜めて事もなげに振舞はうとした。

博士は夫人との會話の途切れ目を捕へては、話を葉子に向けて慰め顔にあしらはうとしたが、いつでも夫人が葉子のすべき返事をひつたくつて物を云ふので、折角の話は腰を折られた。葉子は然し結句それをいゝ事にして、自分の思ひに耽りながら二人に續いた。暫らく歩きなれて見ると、運動が出来た爲めか、段々嘔氣は感ぜぬやうになつた。田川夫妻は自然に葉子を會話からのけものにして、二人の間で四方山の噂話を取り交はし始めた。不思議な程に緊張した葉子の心は、それらの世間話には些かの興味も持ち得ないで、寧ろその無意味に近い言葉の數々を、自分の臆想を妨げる騒音のやうにうるさく思つてゐた。と、不圖田川夫人が事務長

と云つたのを小耳にはきんで、思はず針でも踏みつけたやうにぎ／＼として、默想から取つて返して聞耳を立てた。自分でも驚く程神經が騒ぎ立つのを何うする事も出来なかつた。
「随分した、か者らしい御座いますね」
さう夫人のぶ／＼聲がした。

「さうらしいね」

博士の聲には笑ひがまじつてゐた。

「賭博が大の上手ですつて」

「さうかねえ」

事務長の話はそれぎりで絶えてしまつた。葉子は何んとなく物足らなくなつて、又何か云ひ出すだらうと心待ちにしてゐたが、その先きを續ける様子がないので、心残りを覺えながら、また自分の心に歸つて行つた。

暫らくすると夫人がまた事務長の噂をし始めた。
「事務長の側に坐つて食事をするのはどうも厭やでなりません」

「そんなら早月さんに席を代つて貰つたらいいでせう」
葉子は闇の中で鏡く眼をかひやかしながら夫人の様子を窺つた。

「でも夫婦がテーブルに列ぶつて法はありません

んわ：ねえ早月さん」

かう戲談らしく夫人は云つて、一寸葉子の方を振り向いて笑つたが、別にその返事を待つといふでもなく、始めて葉子の存在に氣付ききでもしたやうに、色々身の上などを探りを入れるらしく聞き始めた。田川博士も時々親切らしい言葉を添へた。葉子は始めの中心を構まじやかに事實にき程遠くない返事をしてゐたものの、話が段々深入りして行くにつれて、田川夫人と云ふ人は上流の貴婦人だと自分でも思つてゐるらしいに似合はない思ひやりのない人だと思ひ出した。それはあり内の質問だつたかも知れない。けれども葉子にはさう思へた。終もゆかりもない人の前で思ふまゝな侮辱を加へられると、むつとせずにはゐられなかつた。知つた所が何んにもならない話を、本村の事まで根ほり葉ほり問ひたゞして一體何にしようといふ氣なのだ。老人でもあるならば、過ぎ去つた昔を他人にくど／＼と話して聞かせて、せめて慰むといふ事もあらう。「老人には過去を、若い人には未來を」といふ交際術の初歩すら心得ないが、さつた人だ。自分ですらそつと手もつけないで済ませたい血なまぐさい身の上を、自分は老人ではない。葉子は田川夫人が意地にかゝつて、

田川博士の姿が日まぐるしく音律に乗つて動いた。葉子はうるさきうに頭の中に在る手のやうなもので無性に拂ひ除けようと試みたが無駄だった。皮肉な横目をつかつて青味を帯びた田川夫人の顔が、驚き亂された水の中を、小さな泡が逃げてでも行くやうに、ふら／＼とゆらめきながら上の方に遠ざかつて行つた。先づよかつたと思ふと、事務長の incident な眼付きが低い調子の伴奏となつて、ずっと動かない中にも力ある震動をしながら、葉子の晴眼の奥を網膜まで見透す程きゆつと見据えてゐた。「何んで事務長や田川夫人なんぞがこんなに自分を煩はすだらう。憎らしい。何んの因縁で……」葉子は自分をかう卑しみなながらも、男の眼を迎へ慣れた媚びの色を知らず／＼上瞼に集めてそれに應じようとする途端、目に向つて眼を閉ぢた時に綾をなして亂れ飛ぶあの不思議な種々な色の光體、それに似たものが線亂として心を取り圍んだ。星はゆるいテンポでゆらり／＼と靜かにをどつてゐる。「おうい、おい、おい、おい……」葉子は思はずかつと腹を立てた。その憤りの膜の中に凡ての幻影はすうつと吸ひ取られてしまつた。と思ふと、その憤りすらが見る／＼ばやけて、後には感傷の更らない死

のやうな世界が果てしくもどい／＼と濃んだ。葉子は暫らくは氣が遠くなつて何事も辨へないでゐた。やがて葉子はまた徐ろに意識の國に近づいて來てゐた。煙突の中の黒い煤の間を、横すぢかひに休らひながら飛びながら、上つて行く火の子のやうに、葉子の幻想は暗い記憶の洞穴の中を右左によろめきながら奥深く通つて行くのだつた。自分でさへ驚くばかり底の底に又底のある迷路を恐る／＼傳つて行くと、果てしもなく現はれ出る人の顔の一番奥に、赤い衣物を裾長に着て、眩しい程に輝き渡つた男の姿が見え出した。葉子の心の周囲にそれまで響いてゐた音楽はその瞬間ばかり靜まつてしまつて、耳の底がか／＼んとする程空恐しい寂寥の中に、船の舳の方で水をた／＼き破るやうな寒い時鐘の音が聞こえた。「カン／＼、カン／＼、カン／＼……」葉子は何時の鐘だと考へて見る事もしないで、そこに現はれた男の顔を見分けようとしたが、木村に似た容貌がおぼろに浮んで來るだけで、どう見直して見てもはつきりした事はもどかしい程分らなかつた。木村である筈はないんだがと葉子はいら／＼しながら思つた。木村は私

の良人ではないか。その木村が赤い衣物を着てゐるといふ法があるものか。可哀さうに、木村はサン・フランシスコから今頃はシヤトルの方に來て、私の着くのを一日千秋の思ひで待つてゐるだらうに、私はこんな事をしてこゝで赤い衣物を着た男なんぞを見詰めてゐる。千秋の思ひで待つ？ それはさうだらう。けれども私が木村の妻になつてしまつたが最後、千秋の思ひで私を待つたりした木村がどんな良人に變るかは知れ切つてゐる。憎いのは男だ。木村でも倉地でも……又事務長なんぞを思ひ出してゐる。さうだ、米國に着いたらもう少し落ち着いて考へた生き方をしよう。木村だつて打てば響く位はする男だ。彼地に行つて纏まつた金が出来たら、何んと云つて／＼かまはない定子を呼び寄せてやる。あ、定子の事なら木村は承知の上だつたのに。それにしても木村が赤い衣物などを着てゐるのはあんまりをかしい……一ふと葉子はもう一度赤い衣物の男を見た。事務長の顔が赤い衣物の上に似合はしく乗つてゐた。葉子はぎ／＼とした。而してその顔をもつとはつきり見詰めたいた爲めに重い／＼顔を強ひて押し開く努力をした。見ると葉子の前にはまさしく、角燈を持つて

葉子は思はず裸體を見られた女のやうに固くなつて立ちすくんだ。激しい戦きが襲つて來た。而して何んの思慮もなく床の上のボアを取つて胸にあてがつたが、次ぎの瞬間にはトラシクの中からシヨールを取り出してボアと一緒にそれを抱へて、逃げる人のやうに、あたふたと部屋を出た。

船のゆらぐ毎に木と木との擦れあふ不快な音は、大方船客の寐しづまつた夜の寂寞の中に際立つて響いた。自動平衡器の中にもとされた蠟燭は壁板に奇怪な角度を取つて、ゆるぎもせずにはぼんやりと光つてゐた。

戸を開けて甲板に出ると、甲板のあなたは先刻のまゝの波又波の堆積だつた。大煙筒からは吐き出される煤煙は眞黒い天の河のやうに無月の空を立ち割つて水に近く斜めに流れてゐた。

十三

そこだけは星が光つてゐないので、雲のある所がやうやく知れる位思ひ切つて暗い夜だつた。おつかぶさつて來るかと見上げれば、眼のまはる程遠のいて見え、遠いと思つて見れば、今にも頭を包みさうに近く過つては鋼色の沈黙した大空が、隙眼もない羽を垂れたやうに、

同じ暗色の海原に續く所から波が湧いて、闇の中をのたうちまろびながら、見渡す限り喚き騒いでゐる。耳を澄して聞いてゐると水と水とが激しくぶつかり合ふ底の方に、

「おうい、おい、おい、おうい」と云ふかと思はれる聲ともつかない一種の奇怪な響きが、舷をめぐつて叫ばれてゐた。葉子は前後左右に大きく傾く甲板の上を、傾くままに身を斜めにして辛く重心を取りながら、よろけ／＼ブリッヂに近いハッチの物蔭まで辿りついて、シヨールで深々と頭から下を巻いて、白ペンキで塗つた板面に身を寄せて立つた。佇んだ所は風下になつてゐるが、頭の上では、櫓から垂れ下つた索綱の類が風にしなつてうなりを立て、アリューション群島近い高緯度の空氣は、九月の末とは思はれぬ程寒く霜を含んでゐた。氣負ひに氣負つた葉子の肉體は然しとして寒いとは思はなかつた。寒いとしても寧ろ快い寒さだつた。もうどん／＼と冷えて行く衣物の裏に、心臓のはげしい鼓動につれて、乳房が冷たく觸れたり離れたりするのが、なやましい氣分を誘ひ出した。それに佇んでゐるのに脚が爪先から段々に冷えて行つて、やがて膝から下は知覺を失ひ始めたので、氣分は

妙に上ずつて來て、葉子の幼い時からの癖である夢にも知れない音樂的な錯覺に陥つて行つた。五體も心も不思議な熱を覺えながら、一種のリズムの中に揺り動かされるやうになつて行つた。何を見るときもなく凝然と見定めた眼の前に、無數の星が船の動搖につれて光のまたゝきをしながら、ゆるいテンポを測つてゆらりゆらりと靜かにをどると、帆綱の呻りが張り切つたバソの聲となり、その間をおうい、おい、おい、おうい……と心の聲とも波のうめきとも分らぬトレモロが流れ、盛り上り、くづれこむ波又波がテノールの役目を勤めた。聲が形となり、形が聲となり、それから一緒にもつれ合ふ姿を葉子は眼で聞いたり耳で見たりしてゐた。何んの爲めに夜寒を甲板に出て來たか葉子は忘れてゐた。夢遊病者のやうに葉子は霧地にこの不思議な世界に落ちこんで行つた。それでゐて、葉子の心の一部分はいたましい程醒めきつてゐた。葉子は燕のやうにその音樂的な夢幻界を翔け上り潛りぬけて様々な事を考へてゐた。

屋辱、屋辱、屋辱、屋辱、思案の聲は屋辱といふちか／＼と寒く光る色で一面に塗りつぶされてゐた。その表面に田川夫人や事務長や

と葉子は美しく顔をしがめて見せた。岡はそれらの言葉が拳となつて續けさまに胸を打つとでも云つたやうに、暫らくの間とぎまぎ躊躇してゐたが、やがて思ひ切つた風で、黙つたまゝ引き返して来た。身の丈けも肩幅も葉子とさう違はない程な華車な體をわなくと震はせてゐるのが、肩に手をかけない中からよく知れた。事務長は振り向きもしないで靴の踵をこつこつと鳴らしながら早や二三間のかたに遠ざかつてゐた。

鋭敏な馬の皮膚のやうにだち／＼と震へる青年の肩におぶひかゝりながら、葉子は黒い大きな事務長の後姿を仇かたきでもあるかのやうに鋭く見詰めてそろ／＼と歩いた。西洋酒の芳醇な甘い酒の香がまだ酔から醒めきらない事務長の身のまはり毒々しい霧となつて取り捲いてゐた。放縱といふ事務長の心の臓は今無用心に開かれてゐる。あの無頓着さうな肩のゆすりの蔭にすさまじい、leatherの火が激しく燃えてゐる筈である。葉子は禁斷の木の實を始めて喰ひかいだ原人のやうな渴慾を我れにもなく煽りたてて、事務長の心の裏を引つ繰り返して縦目を見窮めようとばかりしてゐた。おまけに青年の肩に置いた葉子の手は、華車とは云

ひながら男性的な強い弾力を持つ筋肉の震へをまぎ／＼と感ずるので、これら二人の男が與へる奇怪な刺激はほしいまゝに絡まりあつて、恐ろしい心を葉子に起させた。木村：何をうるさい、餘計な事を云はずと黙つて見てゐるがよい。心の中を閃き過ぎる斷片的な影を葉子は枯葉のやうに拂ひのけながら、眼の前に見る蠱惑に溺れて行かうとのみした。口からは喘ぎたい程に干からびて、岡の肩に乗せた手は、生理的な作用から冷たく堅くなつてゐた。而して熱をこめて濕んだ眼を見張つて、事務長の後姿ばかり見詰めながら、五體はふら／＼と多変もなく岡の方に倚りそつた。吐き出す息氣は燃え立つて岡の横顔を撫でた。事務長は油斷なく角燈で左右を照らしながら甲板の整頓に氣を配つて歩いてゐる。

葉子はいたはるやうに岡の耳に口をよせて、「あなたはどちらまで」と聞いて見た。その聲はいつものやうに澄んではゐなかつた。而して氣を計した女からばかり聞かれるやうな甘たい親しさが籠つてゐた。岡の肩は感激の爲めに一入震へた。頓には返事もし得ないでゐるやうだつたがやがて臆病さうに、

「あなたは」
とだけ聞き返して熱心に葉子の返事を待つらしかつた。

「シカゴまで参るつもりですの」

「僕も……私もさうです」

岡は待ち設けたやうに聲を震はしながらきつぱりと答へた。

「シカゴの大學にでもいらつしやいますの」
岡は非常に驚てたやうだつた。何んと返事をしたものが恐ろしく蹲ふ風だつたが、やがて暖味に口の中で、
「えゝ」

とだけつぶやいて黙つてしまつた。そのおぼさ……葉子は闇の中で眼をかゞやかして微笑んだ。而して岡を憐れんだ。

然し青年を憐れむと同時に葉子の眼は和妻のやうに事務長の後姿を斜めにかすめた。青年を憐れむ自分は事務長に隣れまれてゐるのではないか。始終一歩づつ一歩手を行くやうな事務長が一種の憎しみを以て眺めやられた。嘗て味はつた事のないこの憎しみの心を葉子はどうする事も出来なかつた。

二人に別れて自分の船室に歸つた葉子は冷んど delirium の状態にあつた。眼晴は大きく開

焦茶色のマントを着た事務長が立つてゐた。而して、

「どうなさつたんだ今頃こんな所に、……今夜はどうかしてゐる。岡さん、あなたの仲間がもう一人ここにゐますよ」

と云ひながら事務長は魂を得たやうに動き始めて、後ろの方を振り返つた。事務長の後ろには、食堂で菓子と一と眼顔を見合はすと、震へんばかりに興奮して顔を得上げないでゐた上品な彼の青年が、眞青な顔をして物に怯ぢたやうに傾ましく立つてゐた。

眼はまざぐと開いてゐたけれども葉子はまだ夢心地だつた。事務長のゐるのに氣付いた瞬間からまた聞こえ出した波濤の音は、前のやうに音楽的な所は少しもなく、唯物狂ほしい騒音となつて船に迫つてゐた。然し葉子は今の境界が本當に現實の境界なのか、先刻不思議な音楽的錯覺にひたつてゐた境界が夢幻の中の境界なのか自分ながら少しも見境がつかない位ぼんやりしてゐた。而してあの荒唐な奇怪な心の adventure を却つてまざぐとした現實の出来事でもあるかのやうに思ひなして、眼の前に見る酒に赤らんだ事務長の顔は妙に蠱惑的な氣味の悪い幻像となつて葉子を脅かさうとした。

少し飲み過ぎた處に、溜めといった仕事を詰めてやつたんで眠れん。で散歩の積りで甲板の見廻りに出ると岡さん」

と云ひながらも一度後ろに振り返つて、

「この岡さんがこの寒いに手欄から體を乗り出して、ぼかんと海を見とるんです。取り押へてケビンに連れて行かうと思つとると、今度はあなたに出喰はす。物好きもあつたもんですね。海を眺めて何が面白いかな。お寒かありませんか、シヨールなんぞも落ちてしまつた」

何處の國訛とも判らぬ一種の調子が囁きた聲で操られるのが、事務長の人と爲りによくそぐつて聞こえる。葉子はそんな事を思ひながら事務長の言葉を聞き終ると、始めてはつきり眼がさめたやうに思つた。而して簡単に、「いゝえ」

と答へながら上眼ぶかひに、夢の中からでも人を見るやうにうつとりと事務長のしぼとさうな顔を見やつた。而してそのまゝ黙つてゐた。

事務長は例の insolent な眼付きで葉子を一瞥に見くろめながら、

「若い方は世話が焼ける……さあ行きませう」と強い語調で云つて、からりと傍若無人に笑ひながら葉子をせき立てた。海の波の荒涼たるをめきの中に聞くこの笑ひ聲は、……なんものだつた。「若い方」老成ぶつた事を云ふと葉子は思つたけれども、然し事務長にはそんな事を云ふ權利でもあるかのやうに葉子は皮肉な竹筴返しもせずに、おとなしくシヨールを拾ひ上げて事務長の云ふまゝにその後を續かうとして驚いた。所が長い間そこ佇んでゐたものと見えて、磁石で吸ひ付けられたやうに、兩脚は固く重くなつて一寸も動きさうにはなかつた。寒氣の爲めに感覺の麻痺しかゝつた膝の關節は強ひて曲けようとする、筋を絶つ程の痛みを覺えた。不用意に歩き出さうとした葉子は、思はずのめり出さした上體を早く後ろに支へて、情けなげに立ち、すくみながら、

「ま、一寸」

と呼びかけた。事務長の後に續かうとした岡と呼ばれた青年はこれを知くと逸早く足を止めて葉子の方を振り向いた。

始めてのお知合ひになつたばかりですのに、すごく心安だてをして本當に何んで御座いますか、一寸お肩を貸していただけませんでせうか。何んですか足の先きが凍つたやうになつてしまつて……」

し實際の處置としては、口惜しくても蟲を殺して、自分を葉子まで引き下げるか、葉子を自分まで引き上げるより仕方なかつた。夫人の葉子に對する仕打ち、戸板を返すやうに違つて來た。葉子は知らん顔をして夫人のするがまゝに任せてゐた。葉子は固より夫人の慌てたこの處置が夫人には致命的な不利益であり、自分には都合のいい仕合せであるのを知つてゐたからだ。案の定田川夫人のこの讓歩は、夫人に何等かの同情なり尊敬なりが加へられる結果とならなかつたばかりでなく、その勢力はますます下り坂になつて、葉子は何時の間にか田川夫人と對等で物を云ひ合つても少しも不思議とは思はせない程の高みに自分を持ち上げてしまつてゐた。落ち目になつた夫人は年甲斐もなく、いかもどろになつてゐた。恐ろしいほどやさしく親切に葉子をあしらふかと思へば、皮肉らしく馬鹿丁寧に物を云ひかけたり、或は突然路傍の人に對するやうなよそ／＼しさを装つて見せたりした。死にかけた蛇のたうち廻るを見やる蛇使ひのやうに、葉子は冷やかにあざ笑ひながら、夫人の心の葛藤を見やつてゐた。

單調な船旅に厭き果てて、した／＼か刺戟に餓ゑた男の群れは、この二人の女性を中心にして

知らず／＼渦巻きのやうにめぐつてゐた。田川夫人と葉子との時間表面には少しも日に立たないで、戦はれてゐただけだとも、それが男達に自然に刺戟を與へないではおめなかつた。平らな水に偶然落ちて來た微風のひき起す小さな波紋ほどの變化でも、船の中では一かどの事件だつた。男達は何故ともなく一種の緊張と興味とを感じるやうに見えた。

田川夫人は微妙な女の本能と直覺とで、じり／＼と葉子の心の隅々を探り廻してゐるやうだつたが、遂にこゝぞと云ふ急所を掴んだらしく見えた。それまで事務長に對して見下したやうな丁寧さを見せてゐた夫人は、みる／＼態度を變へて、食卓でも二人は席が隣り合つてゐるからといふ以上な親しげな會話を取り交はすやうになつた。田川博士までが夫人の意を迎へて、何かにつけて事務長の室に繁く出入りするばかりか、事務長は大抵の夜は田川夫妻の部屋に呼び迎へられた。田川博士は固より船の正客である。それを外らすやうな事務長ではない。會地は船醫の興録までを手向はせて田川夫妻の旅情を慰めるやうに振舞つた。田川博士の船室には夜おそくまで灯がかりやいて、夫人の興ありげに高く笑ふ聲が室外まで聞こえ

る事が珍らしくなかつた。

葉子は田川夫人のこんな仕打ちを受けても、心の中で冷笑つてゐるのみだつた。既に自分が勝味になつてゐるといふ自覺は、葉子に反動的な寛大な心を與へて、夫人が事務長を虜にしたやうとしてゐる事などはてんで問題にはしましとした。夫人は餘計な見當違ひをして、痛くもない腹を探つてゐる。事務長が何うしたと云ふのだ。母の胎を出るとそのまゝ何んの訓練も受けずに育ち上つたやうなぶしつけな、動物性の勝つた、どんな事をして來たのか、どんな事をするのか分らないやうな高が事務長に何んの興味があるものか。あんな人間に氣を引かれる位なら、自分は疾うに喜んで木村の愛になつてゐるのだ。見當違ひもいゝ加減にするがよい。さう齒がみをしたい位な氣分だと思つた。

ある夕方葉子はいつもの通り散歩しようとして甲板に出て見ると、遙か遠い手欄の所に岡がたつた一人しよんぼりと倚りかゝつて、海を見入つてゐた。葉子はいたづら者らしくそつと足音を盗んで、忍び／＼近付いて、いきなり岡と肩をすり合せるやうにして立つた。岡は不意に人が現はれたので非常に驚いた風で、顔をしむけてその場を立ち去らうとするのを、葉子是否應

いたまゝで、盲目同様に部屋の中の物を見る事をしなかつた。冷え切つた手先はをどくどくと兩の袂を掴んだり放したりしてゐた。葉子は夢中でシヨールとボアとをかなぐり捨て、もどかしげに帯だけほどくと、髪も解かず寝臺の上に倒れかゝつて、横になつたまゝ、羽根枕を兩手でひしと抱いて顔を伏せた。何故と知らぬ涙がその時限を切つたやうに流れ出した。而して涙は後から／＼漲るやうにシートを濕しながら、充血した唇は恐ろしい笑ひを湛へてわな／＼と震へてゐた。

一時間程さうしてゐる中に泣き疲れに疲れて、葉子はかけるものもかけずにそのまゝ深い眠りに陥つて行つた。けば／＼しい電燈の光はその翌日の朝までこの媚めかしくもふしだらな葉子の丸寝姿を畫いたやうに照してゐた。

十四

何といつても船旅は單調だつた。縱令日々夜夜に一瞬もやむ事なく姿を變へる海の波と空の雲とはあつても、詩人でもないなべての船客は、それ等に對して途方に暮れた倦怠の視線を投げるばかりだつた。地上の生活からすつかり遮斷された船の中には、極く小さな事で眼

新しい事件の起る事のみが待ち設けられてゐた。さうした生活では葉子が自然に船客の注意の焦點となり、話題の提供者となつたのは不思議もない。毎日々々凍りつくやうな濃霧の間を、東へ東へと心細く走り續ける小さな汽船の中の社會は、あらはには知れないながら、何か淋しい過去を持つらしい、妖艶な、若い葉子の一舉一動を、絶えず興味深くちつと見守るやうに見えた。

かの奇怪な心の動亂の一夜を過ぎすと、その翌日から葉子はまた普段の通りに、如何にも足許があやふく見えながら少しも破綻を示さず、動もすれば他人の勝手になりさうでゐて、よそからは決して動かされない女になつてゐた。始めて食堂に出た時の慣まじやかさに引きかへて、時には快活な少女のやうに晴れやかな顔付きをして船客等と言葉を交はしたりした。食堂に現はれる時の葉子の服姿だけでも、退屈に倦んじ果てた人々には、物好きな期待を與へた。ある時は葉子は慎み深い深窓の婦人らしく上品に、ある時は素養の深い若いデイレタタントのやうに高尚に、又ある時は習俗から解放された adventuresome とも思はれる放膽を示した。その極端な變化が一日の中に起つて來ても、人

人はさして怪しく思はなかつた。それ程葉子の性格には複雑なものが潜んでゐるのを感じさせた。繪島丸が横濱の浅橋に繋がれてゐる間から、人々の注意の中心となつてゐた田川夫人を、海氣にあつて息氣をふき返した人魚のやうな葉子の傍において見ると、身分、開陳、學識、年齡などといふいかめしい資格が、却つて夫人を固い古ばけた輪郭にはめこんで見せる結果になつて、唯、神體のない空虚な宮殿のやうな空いかめしい異なさを感じさせるばかりだつた。女の本能の鋭さから田川夫人はすぐそれを感じたらしかつた。夫人の耳許に響いて來るのは葉子の噂ばかりで、夫人自身の評判は見る／＼薄れて行つた。ともすると田川博士までが、夫人の存在を忘れたやうな振舞をする、さう夫人を思はせる事があるらしかつた。食堂の卓を挟んで向ひ合ふ夫妻が他人同志のやうな顔をして互々に窺み見をするのを葉子がすばやく見て取つた事などもあつた。とゞつて今まで自分の子供でもあしらふやうに振舞つてゐた葉子に對して、今更ら夫人は改まつた態度も取りかねてゐた。よくも假面を被つて人を陥れたといふ女らしいひねくれた妬みひがみが明らかに夫人の表情に讀まれ出した。然

つた。午餐が済んで人々がサルーンに集まる時などは、團樂が大抵三つ位に分れて出来た。田川夫妻の周囲には一番多數の人が集まつた。外國人だけの團體から田川の方に來る人もあり、日本の政治家、實業家達は勿論我れ先きにそこに馳せ参じた。そこから段々細く絲のやうにつながれて若い留學生とか學者とかいふ連中が陣を取り、それから又段々太くつながれて、葉子と少年少女等の群れがゐた。食堂で不意の質問に辟易した外交官補などは第一の連絡の綱となつた。衆人の前では岡は遠慮するやうにあまり葉子に親しむ様子は見せずに不即不離の態度を保つてゐた。遠慮會釋なくそんな所で葉子に怩れ親しむのは子供達だつた。眞白なモスリンの衣物を着て赤い大きなリボンをつけた少女達や、水兵服で身輕に装つた少年達は葉子の周圍に花輪のやうに集まつた。葉子がさういふ人達をかたみがはりに抱いたりかゝへたりして、お伽話などして聞かせてゐる様子は船中の見ものだつた。どうかするとサルーンの人達は自分等の間の話題などは捨てておいてこの可憐な光景をうつとり見やつてゐるやうな事もあつた。

たゞ一つこれらの群れからは全く没交渉な

一團があつた。それは事務長を中心にした四人の群れだつた。いつでも部屋の一隅の小さい卓を圍んで、その卓の上にはウキスキー用の小さなコップと水とが備へられてゐた。一番いゝ香ひの煙草の煙もそこから漂つて來た。彼等は何かひそ／＼と語り合つては、時々傍若無人な高い笑ひ聲を立てた。さうかと思ふとちつと田川の群れの會話に耳を傾けてゐて、遠くの方から突然皮肉の茶々を入れる事もあつた。誰れ云ふとなく人々はその一團を大體派と呼びなした。彼等がどんな種類の人でどんな職業に従事してゐるかを知らず者になかつた。岡などは本能的にその人達を忌み嫌つてゐた。葉子も何かしら氣のおける連中だと思つた。而して表面は一向無頓着に見えながら、自分に對して十分の觀察と注意とを怠つてゐないのを感じてゐた。

どうしても然し葉子には、船にゐる凡ての人の中で事務長が一番氣になつた。そんな管理由のある筈はないと自分をたしなめて見ても何んの甲斐もなかつた。サルーンで子供達と戯れてゐる時でも、葉子は自分のして見せる蠱惑的な姿態が何時でも暗々裡に事務長の爲めになされてゐるのを意識しない譯には行かなかつた。

たゞ事務長がその場にゐない時は、子供達をあやし樂しませる熱意さへ薄らぐのを覺えた。そんな時に小さい人達はきよつてつまらなさうな顔をしたり欠伸をししたりした。葉子はさうした様子を見ると更に興味を失つた。而してそのまゝ立つて自分の部屋に歸つてしまふやうな事をした。それにも係はらず事務長は嘗て葉子に特別な注意を拂ふやうな事はないらしく見えた。それが葉子を益々不快にした。夜など甲板の上を漫步してゐる葉子が、田川博士の部屋の中から例の無遠慮な事務長の高笑ひの聲を漏れ聞いたりなさると、思はずかづとなつて、鐵の壁すら射通しさうな鋭い瞳を聲のする方に送らざるにはゐられなかつた。

ある日の午後、それは雲行きの荒い寒い日だつた。船客達は船の動搖に辟易して自分の船室に閉ぢこもるのが多かつたので、サルーンががら明きになつてゐるのを幸ひ、葉子は岡を訪ひ出して、部屋の角になつた所に折れ曲つて据ゑであるモロッコ皮のデイワンに腰と膝を觸れ合さんばかり寄り添つて腰をかけて、トランプを打つて遊んだ。岡は目頃さういふ遊樂には少しも興味を持つてゐなかつたが、葉子と二人きりでゐられるのを非常に幸福に思ふらしく、

なしに手を握つて引き留めた。岡が迷ひ隠れようとするとその道理、その顔には涙のあとがまざまざと残つてゐた。少年から青年になつたばかりのやうな内氣らしい、小柄な岡の姿は、何もかも荒々しい船の中では殊更だデリケートな可憐なものに見えた。葉子はいたづらばかりでなく、この青年に一種の淡々しい愛を覺えた。

「何を泣いてらしたの」

小首を存分傾けて、少女が少女に物を尋ねるやうに、肩に手を置きそへながら聞いて見た。

「僕……泣いてゐやしません」

岡は兩方の頬を紅く彩つて、かう云ひながらゝるりと體をそつばうに向け換へようとした。抱きしめてやりたいやうなその肉體と、肉體につつまれた心。葉子は更にすり寄つた。

「いゝえ、泣いてらつしやいましたわ」

岡は遂方に暮れたやうに眼の下の方を眺めてゐたが、通れる術のないのを覺つて、大びらにハンケチをズボンのポケットから出して眼を拭つた。而して少し恨むやうな眼付きをして始めてまともに葉子を見た。唇までが莓のやうに紅くなつてゐた。青白い皮膚に嵌め込まれたその紅さを、色彩に敏感な葉子は見逃す事が出来なかつた。

來なかつた。岡は何かしら非常に興奮してゐた。その興奮してぶる／＼震へるしなやかな手を葉子は手欄ごとちつと押へた。

「さ、これでお拭き遊ばせ」

葉子の袂からは美しい香りのこもつた小さなリンネルのハンケチが取り出された。

「持つてるんですから」

岡は恐縮したやうに自分のハンケチを顧み

た。

「何を泣きになつて……まあ私つたら餘計な事まで何つて」

「何いゝんです……唯々海を見たら何んとなく涙ぐんでしまつたんです。體が弱いもんですから下らない事にまで感傷的になつて困ります。……何んでもない……」

葉子はいかにも同情するやうに今點々とした。岡が葉子とかうして一緒にゐるのをひどく嬉しがつてゐるのが葉子にはよく知れた。葉子はやがて自分のハンケチを手欄の上においたま

ま、

「私の部屋へもよろしかつたらいらつしやいまし。又ゆつくりお話しませうね」

となつて云つてそこを去つた。

岡は決して葉子の部屋を訪れる事はしなかつた。

たけれども、この事のあつて後は、二人はよく親しく話し合つた。岡は人なごみの悪い、話の種のない、極く初心な世慣れない青年だつたけれども、葉子は僅かなタクトですぐ隔てを取り去つてしまつた。而して打ち解けて見ると彼れは上品な、どこまでも純粹な、而して賢かしい青年だつた。若い女性にはそのはにかみやな所から今まで絶えて接してゐなかつたので、葉子にはすがり附くやうに親しんで來た。葉子も同じ戀をするやうな氣持で岡を可愛がつた。

その頃から、事務長が岡に近づくやうになつたのは、岡は葉子と話をしない時はいつでも事務長と散歩などをしてゐた。然し事務長の親友とも思はれる二三の船客に對しては口もきかうとはしなかつた。岡は時々葉子に事務長の噂をして聞かした。而して表面はあれ程粗暴のやうに見えながら考へる變つた、年齢や位置などに隔てをおかない、親切な人だと云つたりした。もつと交際して見るといゝとも云つた。その度毎に葉子は激しく反對した。あんな人間を岡が話相手にするのは實際不思議な位だ。あの人の何處に岡と共通するやうな優れた所があらうなどとかからかつた。

葉子に引き付けられたのは岡ばかりではなかつた。

空の下に荒涼として横はつてゐた。それは惨な姿だつた。距りの遠い故か船がいくら進んでも景色にはいさゝかの變化も起らないで、荒涼たるその景色は何時までも眼の前に立ち續いてゐた。古綿に似た薄雲を濡れる朝日の光が力弱くそれを照す度毎に、煮え切らない影と光の變化がかすかに山と海とをなでて通る計りだ。長い長い海洋の生活に慣れた葉子の眼には陸地の印象は寧ろ汚いものでも見るやうに不愉快だつた。もう三日程すると船はいやでもシャトルの棧橋に繋がるのだ。向うに見えるあの陸地の續きにシャトルはある。あの松の林が切り倒されて少しばかりの平地となつた所に、こゝに一つ彼處に一つと云ふやうに小屋が建ててあるが、その小屋の数が東に行くにつれて段々多くなつて、仕舞には一かたまりの家屋が出来る。それがシャトルであるに違ひない。うら寂しく秋風の吹きわたるその小さな港町の棧橋に、野獸のやうな諸國の労働者が群がる處に、この小さな船島丸が疲れ切つた船體を横へる時、あの木村が例の眩しい機敏で、亞米利加風になり済したらしい物腰で、まはりの景色に釣合はない景氣のいゝ顔をして、船梯子を上つて来る様子までが葉子には見るやうに想像された。

「いやだ／＼。どうしても木村と一緒にゐたいやだ。私は東京に歸つてしまはう。葉子はだだづつらしく今更らそんな事を本氣に考へて見たりしてゐた。」
水夫長と一人のボーイとが押し並んで、靴と草履との音をたてながらやつて来た。而して葉子の傍まで来ると、葉子が振り返つたので二人ながら慇懃に、
「お早う御座います」
と挨拶した。その様子がいかにも親しい口上と對するやうな態度で、殊に水夫長は、
「御退屈で御座いましたらう。それでもこれであと二日になりました。今度の航海には然しお蔭様で大助かりをしまして。昨夕から際だつてよくなりましてね」
と附け加へた。
葉子は一等船客の間の話題の的であつたばかりでなく、上級船員の間の噂の種であつたばかりでなく、この長い航海中に何時の間にか下級船員の間にも不思議な勢力になつてゐた。航海の八日目に、ある老年の水夫がフオクスルで仕事をしてゐた時、鐮の鎖に足先を挟まれて骨を挫いた。プロメネード・デッキで偶然それを見つけた葉子は、船醫より早くその場

に駆けつけた。結びつこぶのやうに丸まつて、痛みの爲めに渾身の苦しみむその老人の後に引きそつて、水夫部屋の入口までは澤山の船員や船客が物珍らしさうについて来たが、そこまで行くと船員ですらが中に這入るのを躊躇した。どんな秘密が潜んでゐるか誰れも知る人のないその内部は、船中では機關室よりも危険な一區域と見做されてゐただけに、その入口さへが一種人を脅かすやうな薄氣味悪さを持つてゐた。葉子は然しその老人の苦しみ渾身の姿を見るとそんな事は手もなく忘れてしまつてゐた。ひよつとすると邪魔物扱いにされてあの老人は殺されて了ふかも知れない。あんな齡までこの海上の荒々しい勞働に縛られてゐるこの人には頼りになる縁者もゐないのだらう。こんな思ひやりが留度もなく葉子の心を襲ひ立てるので、葉子はその老人に引きずられてでも行くやうにどんな水夫部屋の中に降りて行つた。薄暗い腐敗した空氣は蒸れ上るやうに人を襲つて、蔭の中にうよ／＼と蠢く群れの中からは太く鈍げた聲が投げかけられた。闇に慣れた水夫達の眼は矢庭に葉子の姿を引つ捕へたらしい。見る／＼一種の興奮が部屋の間々にまで充ち溢れて、それが奇怪な罵りの聲となつて物凄く葉子に通つ

いつになく快活に札をひねくつた。その細いしなやかな手からぶきつ、つように札が捨てられたり取られたりするのを葉子は面白いものに見やりながら、繼續的に言葉を取り交はした。

「あなたもシカゴにいらつしやると仰しやつてね、あの晩」

「ええ、云ひました。……これで切つてもいいでせう」

「あらそんなもので勿體ない……もつと低いものはおありなさらない？……シカゴではシカゴ大學にいらつしやるの？」

「これでいいでせうか……よく分らないんです」

「よく分らないつて、そりやをかしう御座んすわね、そんな事お決めなさらずに米國にいらつしやるつて」

「僕は……」

「これでいたゞきますよ……僕は……何」

「僕はねえ」

「ええ」

葉子はトランプを弄るのをやめて顔を上げた。

阿は懺悔でもする人のやうに、面を伏せて紅くなりながら札をいぢくつてゐた。

「僕の本當に行く所はボストンだつたのです。

そこに僕の家で學費をやつてる書生がゐて僕の監督をしてくれる事になつてゐたんですけれども……」

葉子は珍らしい事を聞くやうに阿に眼をすゑた。

阿は益々云ひ惜さうに、

「あなたにお逢ひ申してから僕もシカゴに行きたくなつてしまつたんです」

と段々語尾を消してしまつた。何んといふ可憐さ……葉子はさらに阿にすり寄つた。阿は真劍になつて顔まで青ざめて來た。

「お氣に障つたら許して下さい……僕は唯……あなたをのいらつしやる所にゐたいんです、どういふ譯だか……」

もう阿は涙ぐんでゐた。葉子は思はず阿の手を取つてやらうとした。

その瞬間にいきなり事務長が激しい勢でそこに這入つて來た。而して葉子には眼もくれずに激しく阿を引つ立てるやうにして散歩に連れ出してしまつた。阿は唯々としてその後を随つた。

葉子はかつとなつて思はず座から立ち上つた。而して思ひ存事務長の無禮を責めようと思つた。その時不意に一つの考へが葉子の頭をひらめき通つた。事務長は何處かで自分達を見守つてゐたに違ひない」

突つ立つたまゝの葉子の顔に、乳房を見せつけられた子供のやうな微笑がほのかに浮び上つた。

十五

葉子はある朝思ひがけなく早起きをした。米國に近づくにつれて緯度は段々下つて行つたので、寒氣も薄らいでゐたけれども、何んと云つても秋立つた空氣は朝毎に冷えん、と引きしまつてゐた。葉子は温室のやうな船室からこのきりつとした空氣に觸れようとして甲板に出て見た。右舷を廻つて左舷に出ると計らずも眼の前に陸影を見つけ出して、思はず足を止めた。そこには十日ほど念頭から絶え果ててゐたやうなもの、海面から淺くもれ上つて續いてゐた。葉子は好奇な眼をかがやかしながら、思はず一旦停めた足を動かして手欄に近づいてそれを見渡した。オレゴン松がすく／＼と白波の激しく嚙みよせる岸邊まで密生したヴァンクーヴァー島の低い山波がそこにあつた。物凄く底光りのする眞青な遠洋の色は、いつの間にか隔れた波の物狂はしく立ち騒ぐ沿海の青灰色に變つて、その先きに見える暗緑の樹林はどんよりとした雨

葉子は實際激しい言葉になつてゐた。

「まだ寝てゐますよ」

「いゝから構はないから起しておやりになればよござんすわ」

岡は自分に親しい人を親しい人に近づける機会が到來したのを誇り、喜ぶ様子を見せて、いそ／＼と駆けて行つた。その後姿を見ると葉子は胸に時ならぬときめきを覺えて、肩の上の所にさつと熱い血の寄つて來るのを感じた。

それがまた憤ろしかつた。

見上げると朝の空を今まで蔽うてゐた綿のやうな初秋の雲は處々ほころびて、洗ひすました青空が眩ゆく切れ目／＼に輝き出してゐた。青灰色に汚れてゐた雲そのものすらが見違へるやうに白く軽くなつて美しい笹縁をつけてゐた。海は眼も線な明暗をなして、單調な鳥影もさすがに頑固な沈黙ばかりを守りつゞけてはゐなかつた。葉子の心は抑へよう／＼としても輕く華やかにばかりなつて行つた。決戦……と葉子はその勇み立つ心の底で叫んだ。木村の事などは疾うの昔に頭の中からこそぎ取るやうに消えてしまつて、その後にはたゞ何とはなしに子供らしい浮き／＼した冒險の念ばかりが働いてゐた。自分でも知らずにゐたやうな

偉大な激しい力が、想像も及ばぬ所にぐんぐんと葉子を引きずつて行くのを、葉子は恐れながらも何處までも跟いて行かうとした。どんな事があつても自分がその中心になつてゐて、先方を牽き付けてやらう。自分をほぐらかすやうな事はしましいといふ始終張り切つてばかりゐた是れまでの心持と、この時湧くが如く持ち上つて來た心持とは比べものにならなかつた。あらん限りの重荷を洗ひざらひ思ひ切りよく投げ棄ててしまつて、身も心も何か大きな力に任し切るその快さ心安さは葉子をすつかり夢心地にした。そんな心持の相違を比べて見る事さへ出來ない位だつた。葉子は子供らしい期待に眼を輝かせて岡の歸つて來るのを待つてゐた。

「駄目ですよ。床の中にゐて戸も開けてくれずに、寢言見たいな事をいつてるんですもの」と云ひながら岡は當惑顔で葉子の傍に現はれた。

「あなたこそ駄目ね。ようござんすわ、私が自分で行つて見てやるから」

葉子にはそこにゐる岡さへなかつた。少し怪訝さうに葉子のいつになくそは／＼した様子を見守る青年をそこに捨ておいたまゝ葉子は險し

く細い階子段を降りた。事務長の部屋は機關室と狭い暗い廊下一つを隔てた所にあつて、日の目を見てゐた葉子には手ざぐりをして歩かねばならぬ程勝手がさがつてゐた。地震のやうに機械の震動が廊下の鐵壁に傳はつて來て、むせ返りさうな生暖かい蒸氣の匂ひと共に人を不愉快にした。葉子は銅屑を塗りこめてざら／＼と手觸りのいやな壁を撫でて進みながらややく事務室の戸の前に來て、あたりを見廻して見て、ノックもせずいきなりハンドルをひねつた。ノックをする隙もないやうなせか／＼した氣分になつてゐた。戸は音も立てずに易々と開いた。「戸も開けてくれずに……」との岡の言葉から、てつきり鍵がか／＼つてゐると思つてゐた葉子にはそれが意外でもあり、當り前にも思へた。然しその瞬間には葉子は我れ知らずはつとなつた。たゞ通りすがりの人にも見付けられまいとする心が先きに立つて、葉子は前後の辨へもなく殆んど無意識に部屋に這入ると、同時にぱたんと音をさせて戸を閉めてしまつた。

もう凡ては後悔にはおそすぎた。岡の聲で今寢床から起き上つたらしい事務長は、荒い棒のホルの筒袖一枚を着たまゝで、眼のはれば

た。だぶ／＼のズボン一つで、筋くれ立つた厚みの有る毛胸に一絲もつけない大男は、やをら人中から立ち上ると、づか／＼葉子に突きあたらんばかりにすれ違つて、すれ違ひざまに葉子の顔を孔の開くほど睨みつけて、聞くにたへない雑言を高々と罵つて、自分の群れを笑はした。然し葉子は死にかけた子にかしづく母のやうに、そんな事には眼もくれずに老人の傍に引き添つて、臥易いやうに寢味を取りなほしてやつたり、枕をあてがつてやつたりして、なほもその場を去らなかつた。そんなむさ苦しい汚い處にゐて老人がほつたらかして置かれるのを見ると、葉子は何んと云ふ事なしに涙が後から／＼流れてたまらなかつた。葉子はそこを出て無理に船醫の興録をそこに引つ張つて來た。而して權威を持つた人のやうに水夫長にはつきりした指圖をして、始めて安心して悠々とその部屋を出た。葉子の顔には自分のした事に對して子供のやうな喜びの色が浮んでゐた。水夫達は暗い中にもそれを見通さなかつたと見える。葉子が出て行く時には一人として葉子に雑言を投げつけるものがゐなかつた。それから水夫等は誰れぶとなしに葉子の事を「姉御々々」と呼んで噂するやうになつた。その時の事を水

夫長は葉子に感謝したのだ。葉子はしんにみに色々と病人の事を水夫長に聞きたゞした。實際水夫長に話しかけられるまでは、葉子はそんな事は思ひ出しもしてゐなかつたのだ。而して水夫長に思ひ出させられて見ると、急にその老夫夫の事が心配になり出したのだつた。足はとう／＼不具になつたらしいが痛みは大抵なくなつたと水夫長がいふと葉子は始めて安心して、又陸の方に眼をやつた。水夫長とボーイとの覺音は廊下の彼方に遠ざかつて消えてしまつた。葉子の足許にはたゞかすかなエンジン音と波が舷を打つ音とが聞こえるばかりだつた。葉子は又自分一人の心に歸らうとして暫くちつと單調な陸地に眼をやつてゐた。その時突然岡が立派な西洋絹の寝衣の上に厚い外套を着て葉子の方に近づいて來たのを、葉子は視角の一端にちらりと捕へた。夜でも朝でも葉子が獨りである時、何處で何うしてそれを知るのが、何時の間にか岡が咫尺身近に現はれるのが常なので、葉子は待ち設けてゐたやうに振り返つて、朝の新しいやさしい微笑を與へてやつた。「朝はまだ随分冷えますね」

と云ひながら、岡は少し人に怯れた少女のやうに顔を赤くしながら葉子の傍に身を寄せた。葉子は黙つてほ／＼笑みながらその手を取つて引き寄せて、互に小さな聲で輕い親しい會話を取り交はし始めた。と、突然岡は大きな事でも思ひ出した様子で葉子の手をふりほどきながら、「倉地さんがね、今日あなたに是非願ひたい用があるつて云つてましたよ」と云つた。葉子は、「さう……」と極く輕く受ける積りだつたが、それが思はず息氣苦しい程の調子になつてゐるのに氣がついた。何んでせう、私になんぞ用つて」「何んだか私ちつとも知りませんが、話をし御覽なさい。あんなに見えてゐるけれども親切な人ですよ」「まだあなた囁きされていらつしやるのね。あんな高慢ききな亂暴な人私嫌ひですわ。……でも先方で會ひたいと云ふのなら會つて上げてほしいから、こゝにいらつしやいつて、あなた今すぐ走つて呼んで來て下さいましな。會ひたいなら會ひたいやうにするが好う御座んすわ」

眞を物珍らしさうに眺めやつて、右手の指先きを軽く器用に動かしながら、煙草の煙が紫色に顔をかすめるのを拂つてゐた。自分を圓にまで使はうとする無禮もあなたなればこそ何んとも云はずにゐるのだといふ心を事務長もさすがに推したらしい。然しそれにも係はらず事務長は言ひ譯一つ云はず、一向平氣なもので、綺麗な飾り紙のついた金口煙草の小箱を手を延ばして棚から取り上げながら、

「どうです一本」

と葉子の前にさし出した。葉子は自分が煙草をのむかのまぬかの問題を彈き飛ばすやうに、

「あれはどなた？」

と寫眞の一つに眼を定めた。

「どれ」

「あれ」

葉子はさういつたまゝで指さしはしない。

「どれ」

と事務長はもう一度云つて、葉子の大きな眼をまじ／＼と見入つてからその視線を逸つて、暫らく寫眞を見分けてゐたが、

「はああれか。あれはね私の妻子ですんだ。荊妻と豚兒共ですよ」

と云つて高々と笑ひかけたが、ふと笑ひやんで、

險しい眼で葉子をちらつと見た。

「まあさう。ちやんと御寫眞をお飾りなすつて、おやさしう御座んすわね」

葉子はいんなりと立ち上つてその寫眞の前に行つた。物珍らしいものを見るといふ様子をしてはゐたけれども、心の中には自分の敵がどんな敵物であるかを見極めてやるぞといふ激しい敵愾心が急に燃えあがつてゐた。前には善者でもあつたのか、それとも良人の心を迎へる爲めにさう造つたのか、何處か玄人じみた綺麗な丸鬚の女が着飾つて、三人の少女を膝に抱いたり側に立たせたりして寫つてゐた。葉子はそれを取り上げて孔の開くほどちつと見やりながら卓の前に立つてゐた。ぎごちない沈黙が暫らくそこに續いた。

「お葉さん」

(事務長は始めて葉子をその姓で呼ばずにかう呼びかけた) 突然震へを帯びた、低い、重い聲が焼きつくやうに耳近く聞こえたと思ふと、葉子は倉地の大きな胸と太い腕とで身動きも出来ないやうに抱きすくめられてゐた。固より葉子はその朝倉地が野獸のやうな assault に出る事を直覺的に覺悟して、寧ろそれを期待して、その assault を、心ばかりでなく、肉體的な好奇

心を以て待ち受けてゐたのだつたが、かくまで突然何んの前觸れもなく起つて来ようとは思ひも設けなかつたので、女の本然の羞恥から起る貞操の防衛に驅られて、熱し切つたやうな冷え切つたやうな血を一時に體內に感じながら、抱へられたまゝ、侮蔑を極めた表情を二つの眼に集めて、倉地の顔を斜めに見返した。その冷やかな眼の光は假初めな男の心をたじろがす筈だつた。事務長の顔は振り返つた葉子の顔に息氣のかゝる程の近さで、葉子を見入つてゐたが、葉子が與へた冷冽な眸には眼もくれぬまで狂はしく熱してゐた。(葉子の感情を最も強く煽り立てるものは寢床を離れた朝の男の顔だつた。一夜の休息に凡ての精氣を十分に回復した健康な男の容貌の中には、女の持つ總てのものを投げ入れても惜しくないと思ふ程の力が籠つてゐると葉子は始終感ずるのだつた) 葉子は倉地に存分な輕侮の心持を見せつけながらも、その顔を鼻の先きに見ると、男性といふものの強烈な牽引の力を打ち込まれるやうに感ぜずにはゐられなかつた。息氣せはしく吐く男の消息は穀のやうに葉子の顔を打つた。火と燃え上らんばかりに男の體からは Ureuro の焔がぐん／＼葉子の血脈にまで擴がつて行つ

つたい顔をして、小山のやうな大きな五體を寢床にくねらして、突然這入つて來た葉子をぎつと見守つてゐた。疾うの昔に心の中は見透し切つてゐるやうな、それでゐて言葉も疎々交はさない程に無頓着に見える男の前に立つて、葉子はさすがに暫らくは云ひ出づべき言葉もなかつた。あせる氣を押し鎮め、顔色を動かさないだけの沈着を持ち續けようと勉めたが、今までに覺えない惑亂の爲めに、頭はぐらぐらとなつて、無意味だと自分でさへ思はれるやうな微笑を漏らす愚さをどうする事も出来なかつた。倉地は葉子がその朝その部屋に來るのを前からちやんと知り抜いてでもゐたやうに落ち付き拂つて、朝の挨拶もせずに、

「さ、おかけなさい。こゝが樂だ」

といつもの通りな少し見下ろした親しみのある言葉をかけて、書間は長椅子代りに使ふ寢臺の座を少し譲つて待つてゐる。葉子は敵意を含んでさへ見える様子で立つたまゝ、

「何か御用がおありになるさうで御座いますか……」

固くなりながら云つて、あゝ又見え透く事を云つてしまつたとすぐ後悔した。事務長は葉子の言葉を追ひかけるやうに、

「用は後で云ひます。まあおかけなさい」と云つてすましてゐた。その言葉を聞くと、葉子はその云ひなり放題になるより仕方になかつた。「お前は結局はこゝに坐るやうになるんだ」と事務長は言葉の裏に未來を豫知し切つてゐるのが葉子の心を一種捨鉢なものにした。

「坐つてやるものか」といふ習慣的な男に對する反抗心は唯々譯もなくひしがれてゐた。葉子はつか／＼と進みよつて事務長と押し並んで寢臺に腰かけてしまつた。

この一つの舉動が——この何んでもない一つの舉動が急に葉子の心を軽くしてくれた。葉子はその瞬間に大急ぎで今まで失ひかけてゐたものを自分の方にたぐり戻した。而して事務長を流し眼に見やつて、一寸ほゝゑんだその微笑には、先刻の微笑の愚しさが滲んでゐないのを信ずる事が出来た。葉子の性格の深みから湧き出る怖ろしい自然さがまともつた姿を現はし始めた。

「何御用でいらつしやいます」

そのわざとらしい造り聲の中にかすかな親しみをこめて見せた言葉も、肉感的に厚みを帯びた、それでゐて賢しげに締りのいゝ二つの唇にふさはしいものとなつてゐた。

「今日船が検査所に着くんです、今日の午後に。所が検査醫がこれなんだ」

事務長は朋輩にでも打ち明けるやうに、大きな食指を鍵形にまげて、たぐるやうな恰好をして見せた。葉子が一寸判じかねた顔付きをしてゐると、

「だから飲ましてやらんならんですよ。それからボーカーにも負けてやらんならん。笑人があれば拜ましてもやらんならん——となほ手まねを續けながら、事務長は枕許においてある頑固なパイプを取り上げて、指の先で灰を押しつけて、吸ひ残りの煙草に火をつけた。

「船をさへ見ればさうした惡戯をしるんだから、海坊主を見るやうな奴です。さういふと頭をつりとした水母じみた入道らしいが、實際は元氣のいい意氣な若い隣者でね。面白い奴だ——一寸會つて御覽。私でからがあらんな所に午中置かれればあゝなるわさ」と云つて、右手に持ったパイプを膝頭に置き添へて、向き直つてまともに葉子を見た。然しその時葉子は倉地の言葉にはそれほど注意を拂つてはゐない様子を見せてゐた。丁度葉子の向側に在る事務卓の上に飾られた何枚かの寫

少し開いた唇の間からはうめくやうな軽い呼吸が漏れ始めた。それを葉子はかすかに意識しながら、ソファの上に俯向きになつたまま、何時とはなしに夢もない深い眠りに陥つてゐた。

どの位眠つてゐたか分らない。突然葉子は心臓でも破裂しやうな驚きに打たれて、はつと眼を開いて頭を擡げた。づきくくく頭の心が痛んで、部屋の中は火のやうに輝いて、面も向けられなかつた。もう甚頃だなど気が付く中にも、雷とも思はれる叫喚が船を震はして響き互つてゐた。葉子はこの瞬間の不思議に胸をどきつかせながら聞耳を立てた。船のをのゝきとも自分ののをのゝきとも知れぬ震動が、葉子の五體を木の葉のやうに弄んだ。暫らくしてその叫喚がやみ、鎮まつたので、葉子はやうやく、横濱を出て以來絶えて用ゐられなかつた汽笛の聲である事を悟つた。検査所が近づいたのだなと思つて、機元をかき合せながら、靜かにソファの上に膝を立てて、眼窓から外面を覗いて見た。今朝までは雨雲に閉ぢられてゐた空も見違へるやうにからつと晴れ互つて、紺青の色は日の光の爲めに奥深く輝いてゐた。松が自然に美しく配置されて生え茂つた岩がかつた岸がすぐ眼の先に見えて、海はいかにも入江らしく可憐

な漣をつらね、その上を繪島丸は機關の動悸を打ちながら徐かに走つてゐた。幾日の荒々しい海路からこゝに來て見るとさすがにそこには人間の隠れ場らしい靜かさがあつた。

岸の奥まつた所に白い壁の小さな家が見られた。その傍には英國の國旗が微風に煽られて青空の中に動いてゐた。「あれが検査官のゐる所なのだ」さう思つた意識の活動が始まるや否や、葉子の頭は始めて生れ代つたやうにはつきりとなつて行つた。而して頭がはつきりして來ると共に、今迄切り放されてゐた凡ての過去があるべき姿を取つて、明瞭に現在の葉子と結び付いた。葉子は過去の回想が今見たばかりの景色からでも來たやうに驚いて、急いで眼窓から顔を引つ込めて、強敵に襲ひかゝられた孤軍のやうに、たじろぎながら又ソファの上に臥し倒れた。頭の中は急に散がり集まる考へを整理する爲めに激しく働き出した。葉子をひとりで、兩手で髪髪の毛の上から顚倒の所を押へた。而して少し上眼をつかつて鏡の方を見やりながら、今まで閉止してゐた亂想の寄せ來るまゝに機敏にそれを送り迎へようと身構へた。

葉子は兎に角恐ろしい岬の隣まで來てしまつた事を、而して殆んど無反省で、本能に引きずられるやうにして、その中に飛び込んだ事を思はない譯には行かなかつた。見煩縁者に促されて、心にもない渡米を餘儀なくされた時に自分で選んだ道——兎も角木村と一緒にならう。而して生れ代つた積りで米國の社會に這入りこんで、自分が見付けあぐねてゐた自分といふものを、探り出して見よう。女といふものが日本とは違つて考へられてゐるらしい米國で、女としての自分がどんな位置に坐る事が出来るか試して見よう。自分はどうしても生るべきでない時代に、生るべきでない處に生れて來たのだ。自分の生るべき時代と處とはどこか別にある。そこでは自分は女王の座になほつても取かしくない程の力を持つ事が出来る筈なのだ。生きてゐる中にそこを探し出したい。自分の周圍によつて來ながらいつの間にか自分を裏切つて、何時どんな處にでも平氣で生きてゐるやうになり果てた女達の鼻をあかましてやらう。若い命を持つた中にそれだけの事を是非してやらう。木村は自分のこの心の企みを助ける事の出来る男ではないが、自分つ後に跟いて來られない程の男でもあるまい。葉子はそんな事と思つてゐた。日清戦争が起つた頃から

た。葉子は我れにもなく異常な興奮にがた／＼震へ始めた。

*

*

*

ふと倉地の手がゆるんだので葉子は切つて落されたやうにふら／＼とよろけながら、危く踏み止つて眼を開くと、倉地が部屋の方に鍵をかけようとしてゐる所だつた。鍵が合はないので、

「幾つ」

と後向きになつてつぶやく倉地の聲が最後の宣告のやうに絶望的に低く部屋の中に響いた。

倉地から離れた葉子は宛ら母から離れた赤子のやうに、總ての力が急に何處かに消えてしまふを感じた。後に残るものとは底のない、頼りない悲哀ばかりだつた。今まで味つて來た

凡ての悲哀よりも更に残酷な悲哀が、葉子の胸をかきむしつて襲つて來た。それは倉地のそこにあるのすら忘れさす位だつた。葉子はいきなり寢床の上に丸まつて仰れた。而して俯伏しになつたまま、痙攣的に激しく泣き出した。倉地がその泣き聲に一寸躊躇つて立つたまま、見てゐる間に、葉子は心の中で叫びに叫んだ。

「殺すなら殺すがいい。殺されたつていい。殺されたつて憎みつけてやるからいい。私は勝

つた。何んと云つても勝つた。そんなに悲しいのを何故早く殺してはくれないのだ。この哀しみにいつまでも浸つてゐたい。早く死んでしまひたい。……」

一六

葉子は本當に死の間を彷徨ひ歩いたやうな不思議な、混亂した感情の狂ひに泥淪して、事務長の部屋から足許も定まらずに自分の船室に戻つて來たが、精も根も盡き果ててそのまゝソファの上に打ち倒された、眼の周りに薄黒い暈の出來たその顔は鈍い鉛色をして、瞳孔は光に對して調節の力を失つてゐた。軽く開いたまゝの唇から漏れる齒並みまでが、光なく、唯ま白く見やられて、死を聯想させるやうな醜い美しさが耳の附根まで漲つてゐた。雪解時の泉のやうに、あらん限りの感情が目まぐるしく湧き上つてゐたその胸には、底の方に暗い悲哀がこちんと濃んでゐるばかりだつた。

葉子はこんな不思議な心の状態から近れ出ようと、思ひ出したやうに頭を働かして見たが、その努力は心にもなく微かな果敢もないものだつた。そしてその不思議に混亂した心の状態も謂はば堪へ切れぬ程の切なさを持つてゐなかつた。葉子はそのなにしてぼんやりと眼を覺ましきうになつたり意識の假睡に陥つたりした。猛烈な胃痙攣を起した患者が、モルヒネの注射を受けて、痙攣的に起る痛みを爲めに無意識に顔をしかめながら、魔藥の恐ろしい力の下に、唯々昏々と奇怪な假睡に陥り込むやうに葉子の心は無理無體な努力で時々驚いたやうに亂れさわぎながら、忽ち物凄い沈黙の淵深く落ちて行くのだつた。葉子の意志は如何に手を延ばしても、もう心の落ち行く深みには届きかねた。頭の中は熱を持って、唯々ぼーと黄色く煙つてゐた。その黄色い眼の中を時々紅い火や青い火がちか／＼と神經をうづかして駆け通つた。息がづまるやうな今朝の光景や、過去のあらゆる回想が、入り亂れて現はれて來ても、葉子はそれに對して己の末程も心を動かされはしなかつた。それは遠く／＼木魂のやうに虚ろにかすかに響いては消えて行くばかりだつた。過去の自分と今の自分とのこれほどな恐ろしい距離を、葉子は恐れげもなく、成るがまゝに任せ置いて、重く濃んだ絶望的な悲哀に唯々黙もなく何處までも引つ張られて行つた。その先きには暗い忘却が待ち敷けてゐた。涙で重つた臉は段々打ち開いたまゝの顔を蔽つて行つた。

く影の薄い一人の男性に過ぎなかつた。母は――母は一番葉子の身近かにゐたと云つていゝ。それだけ葉子は母と兩立し得ない仇敵のやうな感じを持つた。母は新しい型にわが子を取り入れる事を心得てはゐたが、それを取扱ふ術は知らなかつた。葉子の性格が母の備へた型の中で驚くほどする／＼と生長した時に、母は自分以上の法力を憎む魔女のやうに葉子の行く道に立ちはだかつた。その結果二人の間には第三者から想像も出来ないやうな反目と衝突とが續いたのだつた。葉子の性格はこの暗闇のお蔭で曲折の面白さと醜さを加へた。然し何んと言つても母は母だつた。正面からは葉子のする事爲す事に批點を打ちながらも、心の底で一番よく葉子を理解してくれたに違ひないと思ふと、葉子は母に對して不思議ななつかしみを覺えるのだつた。

母が死んでからは、葉子は全く孤獨である事を深く感じた。而して始終張りつめた心持と失望から湧き出る快活さで、鳥が木から木に果實を探るやうに、人から人に歡樂を求めて歩いたが、何處からともなく不意に襲つて來る不安は葉子を底知れぬ懨懨の沼に蹴落した。自分は荒磯に一本流れよつた流木ではない。然し

その流木よりも自分は孤獨だ。自分は一ひら風に散つて行く枯葉ではない。然しその枯葉より自分はいくら淋しい。こんな生活より外にする生活はないのか知らん。一體何處に自分の生活をぢつと見てゐてくれる人があるのだらう。さう葉子はしみ／＼思ふ事がないでもなかつた。けれどもその結果はいつでも失敗だつた。葉子はいかに淋しさに促されて、乳母の家を尋ねたり、突然大塚の内田に遇ひに行つたりして見るが、そこを出て來る時には唯一人の心の空しさが残るばかりだつた。葉子は思ひ餘つて又姪らな満足を求める爲めに男の中に割つて這入るのだつた。然し男が葉子の眼の前で弱味を見せた瞬間に、葉子は驕慢な女王のやうに、その捕虜から面を背けて、その出來事を惡夢のやうに忌み嫌つた。冒險の獲物はきまりきつて取るにも足らないやくざものである事を葉子はしみじみ思はされた。

こんな絶望的な不安に攻めさいなめられながらも、その不安に驅り立てられて葉子は木村といふ隣參人を兎も角その良人に選んで見た。葉子は自分が何んとかして木村にそりを合せる努力をしたならば、一生涯木村と連れ添つて、普通の夫婦のやうな生活が出來ないものでも

ないと一時思ふまでになつてゐた。然しそんなつぎはぎな考へ方が、どうしていつまでも葉子の心の底を蝕む不安を醫す事が出來よう。葉子が氣を落し付けて、米國に着いてからの生活を考へて見ると、かうあつてこそと思ひ込むやうな生活には、木村は除け物になるか、邪魔者になる外はないやうにも思へた。木村と暮さう、さう決心して船に乗つたのではあつたけれども、葉子の氣分は始終ぐらつき通しにぐらつてゐたのだ。手足のちぎれた人形を玩具箱に仕舞つたものか、いつそ捨ててしまつたものかと躊躇する少女の心に似たぞんざいな躊躇ひを葉子はいつまでも持ち續けてゐた。

さういふ時突然葉子の前に現はれたのが倉地事務長だつた。横濱の棧橋に繋がれた輪島丸の甲板の上で、始めて猛獸のやうな男を見た時から、稻妻のやうに鋭く葉子はこの男の優越を感じた。世が世ならば、倉地は小さな汽船の事務長なんぞをしてゐる男ではない。自分と同様に間違つて境遇づけられて生れ來た人間なのだ。葉子は自分の身につまされて倉地を憐れみもし畏れもした。今までも誰れの前に出て平氣で自分の思ふ存分を振舞つてゐた葉子は、この男の前では思はず知らず心にもない

葉子位の年配の女が等しく感じ出した一種の不安、一種の幻滅——それを激しく感じた葉子は、謀叛人のやうに知らず識らず自分の周りの少女達に或る感情的な教唆を與へてゐたのだが、自分自身ですらどうしてこの大事な瀬戸際を乗り抜けるのかは少しも解らなかつた。その頃の葉子は事毎に自分の境遇が氣に喰はないてたゞいらくしてゐた。その結果は唯々思ふ儘を振舞つて行くより仕方がなかつた。自分はどうな物からも本當に訓練されてはゐないんだ。而して自分にはどうにでも働く鋭い才能と、女の強味(弱味とも云はば云へ)になるべき優れた肉體と激しい情緒とがあるのだ。さう葉子は知らず／＼自分を見てゐた。そこから盲滅法に動いて行つた。殊に時代の不思議な目覺めを経験した葉子に取つては恐ろしい敵は男だつた。葉子はその爲めに何度嘆いたか知れない。然し世の中には本當に葉子を扶け起してくれる人がなかつた。一私が悪ければ直すだけの事をして見せて御覽」葉子は世の中に向いてかう云ひ放つてやりたかつた。女を全く奴隸の境界に沈め果てた男はもう昔のアダムのやうに正直ではないんだ。女がぢつとしてゐる間は慙慙に見せるが、女が少しでも自分で

立ち上らうとすると、打つて變つて恐ろしい暴政になり上るのだ。女までがおめ／＼と男の手傳ひをしてゐる。葉子は女學校時代にたゞかその苦い杯を嘗めさせられた。而して八の時木部孤笛に對して、最初の戀愛らし、戀愛の情を傾けた時、葉子の心はもう暴女の心ではなくなつてゐた。外界の壓迫に反抗するばかりに、一時火のやうに何物をも焼き盡して燃え上つた假初めの熱情は、壓迫のゆるむと共に脆くも萎えてしまつて、葉子は冷靜な批評家らしく自分の戀と戀の相手とを見た。どうして失望しないであられよう。自分の一生がこの人に縛りつけられて萎びて行くのかと思ふ時、又色色な男に弄ばれかけて、却つて男の心といふものを裏返してと／＼見極めたその心が、木部といふ、空想の上でこそ勇氣も生彩もあれ、實生活に於ては見下げ果てた程貧弱で簡單な一書生の心と強ひて結びつかねばならぬと思つた時、葉子は身震ひする程失望して木部と別れてしまつたのだ。

葉子の嘗めた凡ての経験は、男に束縛を受ける危険を思はせるものばかりだつた。然し何んといふ自然の惡戯だらう。それと共に葉子は男といふものなしには一刻も過ごされないものと

なつてゐた。砒石の用法を謬つた患者が、その毒の恐ろしさを知りぬきながら、その力を借りなければ生きて行けないやうに、葉子は生すべき男といふものに求めずにはゐられないディレンマに陥つてしまつたのだ。

肉慾の牙を鳴らして集まつて来る男達に對して、さう云ふ男達が集まつて来るのは本當は葉子自身がふり撒く香ひの爲めだとは氣付いてゐて、葉子は冷笑しながら蜘蛛のやうに網を張つた。近づくものは一人残らずその美しい四手網にからめ取つた。葉子の心は知らず／＼残忍になつてゐた。唯々あの妖力ある女郎蜘蛛のやうに、生きてゐたい要求から毎日その美しい網を四つ手に張つた。而してそれに近づきもし得ないで罵り騒ぐ人達を、自分の生活とは關係のない木か石でもあるやうに冷然と尻眼にかけた。

葉子は本當を云ふと、必要に従ふといふ外に何をすればいいのか分らなかつた。

葉子に取つては、葉子の心持を少しも理解してゐない社會ほど愚かしけな醜いものはなかつた。葉子の眼から見た親類といふ一群れは唯々貪慾な賤民としか思へなかつた。父は憐れむべ

廣を着た検査官がボートの艀座に立ち上つて、手欄から葉子と一緒に胸から上を乗り出した船長となほ戯談を取り交した。船梯子の下まで警官を見送つた事務長は、物慣れた様子でポケットからいくらかを水夫の手に握ませておいて、上を向いて合圖をみると、船梯子はきりきりと水平に捲き上げられて行く、それを事もなげに身軽く駆け上つて来た。検査官の眼は事務長への挨拶もそこへ、思ひ切り派手な装ひを凝らした葉子の方に吸ひ付けられるらしかつた。葉子はその眼を迎へて情をこめた流眄を送りかへした。検査官がその忙がしい間にも何かしきりに物を云はうとした時、けたまゝしい汽笛が一抹の白煙を青空に掲げて鳴りはためき、船尾からはすさまじい推進機の震動が起り始めた。この慌たゞしい船の別れを惜むやうに、検査官は帽子を取つて振り動かしながら、噪音にもみ消される言葉を續けてゐたが、固より葉子にはそれは聞こえなかつた。葉子はたゞにこゝと微笑みながら點頭いて見せた。而して唯々一時の惡戯心から髪に挿してゐた小さな造花を授けてやると、それがあはよく検査官の肩に中つて足許に落ちた。検査官が片手に靴紐を操りながら、有頂天になつてそれを拾

はうとするのを見ると、船舷に立ちならんで物珍らしげに陸地を見物してゐたステラレーヂの男女の客は一齊に手をたゝいてどよめいた。葉子はあたりを見廻した。西洋の婦人達は等しく葉子を見やつて、その花々しい服装から、輕率らしい舉動を苦々しく思ふらしい顔付きをしてゐた。それらの外國人の中には田川夫人も交つてゐた。

検査官は繪島丸が殘して行つた白沫の中で、腰をふらつかせながら、笑ひ興ずる群衆にまで幾度も頭を下げた。群衆は又思ひ出したやうに漫罵を放つて笑ひどよめいた。それを聞くと日本語のよく解る白癡の船長は、いつものやうに顔を赤くして、氣の毒さうに恥かしげな眼を葉子に送つたが、葉子はしたない群衆の言葉にも、苦しげな船客の顔色にも、少しも頓着しない風で、微笑み續けながらモーター・ボートの方を見守つてゐるのを見ると、未通安らしく更に眞赤になつてその場を外づしてしまつた。

葉子は何事も屈託なく唯々面白かつた。體中を操るやうな生の歡びから、やゝもすると何んでもなく微笑が自然に浮び出ようとした。一個朝から私はこんなに生れ代りした御覽なさい」といつて誰れにでも自分の喜びを披露し

たいやうな氣分になつてゐた。検査官の官舎の白い壁も、その方に向つて走つて行くモーター・ボートも見る／＼遠ざかつて小さな箱庭のやうになつた時、葉子は船長室での今日の思ひ出し笑ひをしながら、手欄を離れて心あてに事務長を眼で奪へた。と、事務長は、遂に離れた船艀の出口に田川夫人と鼎になつて、何かむづかしい顔をしたがら立ち話をしてゐた。いつもの葉子ならば三人の様子で何事が語られてゐるか位はすぐ見て取るのだが、その日は唯々浮した無邪氣な心ばかりが先きに立つて、誰れにでも好意のある言葉をかけて、同じ言葉で酬いられたい衝動に驅られながら、何んの氣なしにそつちに足を向けようとして、ふと氣がつくと、事務長が来てはいけないと激しく眼に物を言はせてゐるのが覺れた。氣が付いてよく見ると、田川夫人の顔にはまがふかたなき惡意がひらめいてゐた。

「又おせつかいだな一秒の躊躇もなく男のやうな口調で葉子はかう小さくつぶやいた。「構ふものか」さう思ひながら葉子は事務長の誠使ひにも無頓着に、快活な足どりでありそ／＼と田川夫人の方に近づいて行つた。それを事務長もどうすること

矯飾を自分の性格の上に加へた。事務長の
の前では、葉子は不思議にも自分の思つてゐる
のと丁度反對の動作をしてゐた。無條件的な服
従といふ事も事務長に對してだけは唯々望ま
しい事にばかり思へた。この人に思ふ存分打ち
のめされたら自分の命は始めて本當に燃え上る
のだ。こんな不思議な、葉子にはあり得ない慾
望すらが少しも不思議でなく受け入れられた。
その癖表裏では事務長の存在をすら氣が附か
ないやうに振舞つた。殊に葉子の心を深く傷け
たのは、事務長の物傾げな無關心な態度だつ
た。葉子がどれ程人の心を牽きつける事を云つ
た時でも、した時でも、事務長は冷然として見
向かうともしなかつた事だ。さういふ態度に出
られると、葉子は、自分の事は棚に上げておい
て、激しく事務長を憎んだ。この憎しみの心
が日一日と募つて行くのを非常に恐れたけれど
も、どうしやうもなかつたのだ。

然し葉子はとう／＼今朝の出来事に打つ突か
つてしまつた。葉子は恐ろしい帷の際から滅茶
苦茶に飛び込んでしまつた。葉子の目の前で今
まで住んでゐた世界はがらりと變つてしまつ
た。木村がどうした。米國がどうした。養つ
て行かなければならぬ妹や定子がどうした。

今まで葉子を襲ひ續けてゐた不安はどうした。
人に犯されまいと身構へてゐたその自尊心はど
うした。そんなものは木葉微塵に無くなつてし
まつてゐた。倉地を得たらばどんな事でもする。
どんな屈辱でも蜜と思はう。倉地を自分獨りに
得さへすれば……。今まで知らなかつた、捕虜
の受くる蜜より甘い屈辱！

葉子の心はこんなに順序立つてゐた譯では
ない。然し葉子は兩手で頭を押へて鏡を見入リ
ながらこんな心持を果てしもなく噛みしめた。
而して追想は多くの迷路を辿りぬいた末に、不
思議な假睡状態に陥る前まで進んで來た。葉
子はソファを牝鹿のやうに立ち上つて、過去と
未來とを斷ち切つた現在刹那の眩むばかりな變
身に打ちふるひながら微笑んだ。

その時ノックもせず事務長が這入つて來
た。葉子の當ならぬ姿には頓着なく、
「もうすぐ検査官がやつて来るから、さつき
の約束を頼みますよ。資本入らずで大役が勤ま
るんだ。女といふものはいゝものだな。や、然
しあなたのは大分資本がが／＼とるでせうね。
……頼みますよ」
と戯談らしく云つた。
「はあ」

葉子は何んの苦もなく親しみの限りをこめた返
事をした。その一と聲の中には自分でも驚く
程な蠱惑の力が認められてゐた。

事務長が出て行くと、葉子は子供のやうに足
なみ軽く小さな船室の中を小跳りして飛び廻つ
た。而して飛び廻りながら、髪をほこしにかゝ
つて、時々鏡に映る自分の顔を見やりながら、
堪らへ切れないやうに竊み笑ひをした。

十七

事務長のきしがねはうまい坪にはまつた。
検査官は繪島丸の検査事務をすつかり年老つ
た次位の醫官に任せてしまつて、自分は船長
室で船長、事務長、葉子を相手に、話に抱を
咲かせながらトランプを弄り通した。あたり前
ならば、何んとか彼とか必ず苦情の持ち上る
べき英國風の小やかましい検査もあつさり済ん
で、放蕩者らしい血氣盛んな検査官は、船に來
てから二時間そこ／＼で機嫌よく歸つて行く事
になつた。

停るともなく進行を止めてゐた繪島丸は風の
まに／＼少しづつ方向を變へながら、二人の醫
官を乗せて行くモーター・ボートが舳側を離れ
るのを待つてゐた。折り目正しい長めな紺の背

男にはそれがどんな印象を興たへかを顧みる暇もなく、田川夫妻の前といふことも憚らずに、自分では醜いと思ふやうな微笑が、覺えず葉子の眉の間に浮び上つた。事務長は又小むづかしい顔になつて振り返りながら、

「いかゞです」

ともう一度田川夫妻を促した。然し田川博士は自分の妻の大人げないのを憐れむ物わかりのいい紳士といふ態度を見せて、體よく事務長にことわりを云つて、夫人と一緒にそこを立ち去つた。

「一寸いらつしやい」

田川夫妻の姿が見えなくなると、事務長は碌碌葉子を見むきもしないでかう云ひながら先きに立つた。葉子はお娘のやうにいそ／＼とその後について、薄暗い階子段にかゝると男におどひかゝるやうにして小ぜはしく降りて行つた。而して機關室と船員室との間にある例の暗い廊下を通つて、事務長が自分の部屋の前を開けた時、ぱつと明るくなつた白い光の中に、nonchalantな dinbottle な男の姿を今更のやうに一種の畏れとなつたしさを罩めて打ち眺めた。

部屋に這入ると事務長は、田川夫人の言葉で

も思ひ出したらしく面低くささうに吐息一つして、帳簿を事務卓の上に抛りなげておいて、又戸から頭だけつき出して、「ボーイ」と大きな聲で呼び立てた。而して戸を閉めきると、始めて、ともに葉子に向きなほつた。而して腹をゆすり上げて續けさまに思ふ存分笑つてから、

「え」

と大きな聲で、半分は物でも尋ねるやうに、半分はどうだい」と云つたやうな調子で云つて、胸を開いて dinbottle をして突つ立ちながら、ちよいと無邪氣に首をかしげて見せた。

そこにボーイが戸の後ろから顔だけ出した。

「シャペンだ。船長の所にバーから持つて來さしたのが二三／＼残つてるよ。十の字三つぞ(大至急といふ軍隊用語)。……何をかしいかい」

事務長は葉子の方を向いたまゝかうぶつたのであるが、實際その時ボーイは意味ありげににやにや薄笑ひをしてゐた。

餘りに事もなげな倉地の様子を見てゐると葉子は自分の心の切なさ比べて、男の心を恨めしいものに思はずにはゐられなくなつた。今朝の記憶のまだ生々しい部屋の中を見るにつけても、激しく高ぶつて來る情熱が妙にこぢれて、

ゐても立つてもゐられないもどかしさが苦しく胸に逼るのだつた。今までは丸きり眼中になつた田川夫人も、三等の女客の中で、處女とも妻ともつかぬ二人の二十女も、果ては事務長にまづはりつくあの小娘のやうな岡までが、寫眞で見た事務長の細君と一緒にゐて、苦しい敵意を葉子の心に煽り立てた。ボーイにまで笑ひものにされて、男の皮を着たこの好色の野獸のなぶりものにされてゐるのではない

か。自分の身も心も唯／＼と息にひしぎ潰すかと思ふあの恐ろし力は、自分を征服すると共に凡ての女に對しても同じ力で働くのではないか。その澤山の女の中の影の薄い一人の女として彼れは自分を扱つてゐるのではないか。自分には何物にも代へ難く思はれる今朝の出來事があつた後でも、あゝ平氣でゐられるその暢氣さはどうしたものだらう。葉子は物心がついてから始終自分でも言ひ現はす事の出來ない何物かを逐ひ求めてゐた。その何物かは葉子のすぐ手近にありながら、いつかりと握む事は何うしても出來ず、その癖いつでもその力の下に傀儡のやうに動的に動かされてゐた。葉子は今朝の出來事以來何んとなく思ひ昂つてゐたのだ。それはその何物かが臆ろげながら形

も出来なかつた。葉子は三人の前に來ると軽く腰をまげて後れ毛をかき上げながら顔中を蠱惑的な微笑みにして挨拶した。田川博士の頬には逸早くそれに應ずる物やさしい表情が浮ぼうとしてゐた。

「あなたは随分な亂暴をなさる方ですのね、いきなり雲を帯びた冷やかな言葉が田川夫人から葉子に容赦もなく放げつけられた。それは底意地の悪い挑戰的な調子で震へてゐた。田川博士はこの咄嗟の氣まづい場面を繕ふ爲め何か言葉を入れてその不愉快な緊張をゆるめようとするらしかつたが、夫人の惡意はせき立つて募るばかりだつた。然し夫人は口に出してはもう何んにも云はなかつた。

女の間に起る不思議な心と心との交渉から、葉子は何んといふ事なく、事務長と自分との間に今朝起つたばかりの出來事を、輪郭だけではあるとしても田川夫人が感付いてゐるのと直覺した。唯一言ではあつたけれども、それは検校官とトランプを弄つた事を責めるだけにしては、激し過ぎ、惡意が罩められ過ぎてゐることを直覺した。今の激しい言葉は、その事を深く根に持ちながら、檢校醫に對する不謹慎な態度をたしなめる言葉のやうにして使はれ

てゐるのを直覺した。葉子の心の隅から隅まで、溜飲の下るやうな小氣味よさが小躍りしつゝ走せめぐつた。葉子は何をそんなに事々しくたしなめられる事があるのだらうといふやうな少ししいやあゝした無邪氣な顔付きで、首をかしげながら夫人を見守つた。

「航海中は兎に角私葉子さんのお世話をお頼まれ申してゐるんですからね」

初めはしとやかに落ち付いて云ふ積りらしかつたが、それが段々激して途切れ勝ちな言葉になつて、夫人は仕舞には激動から息氣をさへはずましてゐた。その瞬間に火のやうな夫人の瞳と、皮肉に落ち付き拂つた葉子の瞳とが、ぼつたり出喰して小ぜり合ひをしたが、又同時に跳返すやうに離れて事務長の方に振り向けられた。

「御尤もです」

事務長は此に當惑した熊のやうな顔付きで、柄にもない謹慎を装ひながらかう受け答へた。それから突然本氣な表情に返つて、

「私も事務長であつて見れば、どのお客様に對しても責任があるので、御迷惑になるやうな事はせん積りですが」こゝで彼れは急に假面を取り去つたやうにこ

こし出した。

「さう無氣になるが程の事でもないぢやありませんか。高が早月さんに一度か二度愛嬌を云うていたゞいて、それで檢校の時間が二時間から違ふのですもの、いつでもこゝで四時間の以上無駄をせにやならんのです」

田川夫人が益々せき込んで、矢張り早にまくしかけようとするのを、事務長は事もなげに輕々とおつかぶせて、

「それにしてからがお話は如何です部屋で伺ひませうか。外のお客様の手前もいかゞです。博士、例の通り狭つこい所ですが、甲板ではゆつくりも出来ませんで、あそこでお茶でも入れませう。早月さんあなたも如何です」

と笑ひ／＼云つてからくるりつと葉子の方に向き直つて、田川大基には氣が付かないやうな頗る狂な顔を一寸して見せた。

横濱で倉地の後に續いて船室への階子段を下る時始めて嗅ぎ覺えたウキスキと藥巻とのまじり合つたやうな甘じつたるい一種の香が、この時幽かに葉子の鼻をかすめたと思つた。それを嗅ぐと葉子は情熱のほむらが一時に煽り立てられて、人間では考へられもせぬやうな思ひが、旋風の如く頭の中をこそいで通るのを覺えた。

加減に飲みほす間、葉子は盃を手持つたまま、ぐびりぐびりと動く男の喉を見つめてゐたが、いきなり自分の盃を飲まないまゝ、盃の上にかけして、

「よくもあなたはそんなに平気でいらつしやるのね」

と力を罩めるつもりで云つたその聲はいくぢなくも泣かんばかりに震へてゐた。而して喉を切つたやうに涙が流れ出ようとするのを絲切商で噛みきるばかりに強ひて喰ひとめた。

事務長は驚いたらしかつた。眼を大きくして何か云はうとする中に、葉子の舌は自分でも思ひ設けなかつた情熱を帯びて震へながら動いてゐた。

「知つてゐます、知つてゐますとも……。あなたはほんとに……ひどい方ですのね。私何んにも知らないと思つてらつしやるの。え、私は存じません、存じません、ほんとに……」

何を云ふ積りなのか自分でも分らなかつた。唯、激しい嫉妬が頭をぐらぐらさせるばかりに高じて来るのを知つてゐた。男が或る機会には手傷も負はないで自分から離れて行く……さういふ忌々しい豫想で取り亂されてゐた。葉子は生來こんな惨めな眞暗な思ひに捕へられた事

がなかつた。それは生命が見す／＼自分から離れて行くのを見守る程惨めで眞暗だつた。この人を自分から離れさせず位なら殺して見せる、さう葉子は唯暗に思ひつめて見たりした。

葉子はもう我慢にもそこに立つてゐられなくなつた。事務長に倒れかゝりたい衝動を強ひて、つと堪へながら綺麗に整へられた吐臺にやうやく腰を下ろした。美妙な曲線を長く描いて長閑に開いた眉根は痛ましく眉間に集まつて、急に瘦せたかと思ふ程細つた鼻筋は恐ろしく感傷的な痛々しさをその顔に與へた。い

つになく若々しく衰つた服喪までが、皮肉な反語のやうに小股の切れあがつた瘦せ形なその肉を痛ましく虐げた。長い袖の下で兩手の指を折れよとばかり組み合せて、何もかも裂いて捨てたいヒステリックな衝動を懸命に抑へながら、葉子は唾も飲みこめない程狂ほしくなつてしまつてゐた。

事務長は偶然に不思議を見つけた子供のやうな好奇な惻れた顔付きをして、葉子の姿を見やつてゐたが、片方のスリッパを脱ぎ落したその白足袋の足許から、やゝ亂れた束髪までをしげしげと見上げながら、

「どうしたんです」

と訝る如く聞いた。葉子はひつたくるやうにさそくに返事をしようとしたけれども、何うしてもそれが出来なかつた。倉地はその様子を見ると今度は眞面目になつた。而して口の端まで持つて行つた葉子をそのまゝトレイの上に置いて立ち上りながら、

「どうしたんです」
ともう一度聞きなほした。それと同時に、葉子も思ひきり冷刻に、

「どうもしやしません」
といふ事が出来た。二人の言葉がもつれ返つたやうに、二人の不思議な感情ももつれ合つた。もうこんな所にはゐない、葉子はこの上の壓迫には堪へられなくなつて、華やかな裾を蹴亂しながら、落地に戸口の方に走り出ようとした。

事務長はその瞬間に葉子のなややかな肩を遮りとめた。葉子は遮られて是非なく事務長の側に立ちすくんだが、誇りも恥も弱さも忘れてしまつてゐた。どうにでもなれ、殺すか死ぬかするのだ、そんな事を思ふばかりだつた。こらへにこらへてゐた涙を流れるに任せながら、事務長の大きな手を肩に感したまゝで、しやくり上げて恨めしきやうに立つてゐたが、手近に飾つてある事務長の家族の寫眞を見ると、かつと氣

を取つて手に觸れたやうに思つたからだ。然しそれも今から思へば幻影に過ぎないらしくもある。自分に特別な注意も拂つてゐなかつたこの男の出来、心に對して、こつちから進んで情をそゝるやうな事をした自分は何んといふ事をしたのだらう。どうしたらこの取り返しのかな自分の破滅を救ふ事が出来るのだらうと思つて來ると、一秒でもこの思はしい記憶のさまよふ部屋の中にはゐた、まれないやうに思へ出した。然し同時に事務長は斷ちがたい執着となつて葉子の胸の底にこびりついてゐた。この部屋をこのまゝで出て行くのは死ぬよりもつらい事だつた。何うしてもはつきりと事務長の心を握るまでは、葉子は自分の心の矛盾に業を煮やしながら、自分を蔑すみ果てたやうな絶望的な怒りの色を唇のあたりに宿して、黙つたまゝ陰鬱に立つてゐた。今までそれは、と小魔のやうな葉子の心を廻り躍つてゐた華やかな喜び——それは何處に行つてしまつたのだらう。

事務長はそれに氣附いたのか氣が附かないのか、やがて倚りかゝりのない圓い事務櫛に尻をすゑて、子供のやうな罪のない顔をしながら、葉子を見て輕く笑つてゐた。葉子はその顔を見

て、恐ろしい大膽な悪事を赤兒同様の無邪氣さで犯し得る質の男だと思つた。葉子はこんな無自覺な状態にはとてもなつてゐられなかつた。一と足つつ先きを越されてゐるのか知らんといふ不安までが心の平衡をさらに狂はした。「田川博士は馬鹿馬鹿で、田川の奥さんは桐口馬鹿と云ふんだ。はゝゝゝゝ」さう云つて笑つて、事務長は膝頭をはつきと打つた手をかへして、机の上にある葉巻をつまんだ。葉子は笑ふよりも腹立たしく、腹立たしいよりも泣きたい位になつてゐた。唇をぶるぶると震はしながら涙でも溜つたやうに輝く眼は劍を持つて、恨みをこめて事務長を見入つたが、事務長は無頓着に下を向にまゝ、一心に葉巻に火をつけてゐる。葉子は胸に抑へあまる恨みつらみをぶひ出すには、心があまりに震へて喉が乾き切つてゐるので、下唇を噛みしめたまゝ黙つてゐた。

倉地はそれを感じ付けてゐるのだのにと葉子は置きざりにされたやうなやり所のない淋しさを感じてゐた。

ボーイがシャンペンと酒壺とを持つて這入つて來た。而して丁寧にそれを事務卓の上に置いて、先刻のやうに意味ありげな微笑を漏らし

ながら、そつと葉子を窺み見た。待ち構へてゐた葉子の眼は然しボーイを笑はしてはおかなかつた。ボーイはぎよつとして飛んでゐない事をしたといふ風に、すぐ憤み深い給仕らしく、そこへ部屋を出て行つた。

事務長は葉巻の煙に顔をしがめながら、シャンペンをついで盆を葉子の方にさし出した。葉子は黙つて立つたまゝ手を延ばした。何をするにも心にもない作り事をしてゐるやうだつた。この短い瞬間に今までの出来事でいゝ加減亂れてゐた心は、身の破滅がとう／＼來てしまつたのだといふ懼ろしい豫想に押しひしがれて、頭は米で捲かれたやうに冷たく氣うとくなつた。胸から喉元につきあげて來る冷たい而して熱い球のやうなものを嫌々しく飲み込んでも飲み込んでも涙が動ともすると眼頭を熱く潤はして來た。薄手の酒壺に泡を立てて盛られた黄金色の酒は葉子の手の中で細かい漣を立てた。葉子はそれを氣取られまいと、強ひて左の手を輕くあげて鬢の毛をかき上げながら、洋壺を事務長のと打ち合せたが、それをきつかけに顔でもほどけたやうに今まで辛く持ちこたへてゐた自制は根こそぎ崩れてしまつた。事務長が洋壺を器用に唇にあてて、仰向き

倉地の手をすりぬけた。而して遑早く部屋を横筋かひに戸口まで逃げのびて、ハンドルに手をかけながら、

「あなたは今朝この月に鍵をおかけになつて、……それは手籠めです。私……」

と云つて少し情に激して條向いて又何か云ひ續けようとするらしかつたが、突然戸を開けて出て行つてしまつた。

取り残された倉地は惘れて暫らく立つてゐるやうだつたが、やがて英語で亂暴な呪詛を口走りながら、いきなり部屋を出て葉子の後を追つて来た。而して間もなく葉子の部屋の戸の所に來てノックした。葉子は鍵をかけたまゝ、黙つて答へないでゐた。事務長はなほ二三度ノックを續けてゐたが、いきなり何か大膽で物を云ひながら船醫の興録の部屋に這入るのが聞こえた。

葉子は興録が事務長のさしがねで何んとか云ひに來るだらうと竊かに心待ちにしてゐた。

所が何んとも云つて來ないばかりか、船醫室からは時々あたりを憚らない高笑ひさへ聞こえて、事務長は容易にその部屋を出て行きさうな氣配もなかつた。葉子は興奮に燃え立つていらした心でそこにある事務長の姿を色々に想像してゐた。外の事は一つも頭の中には這入

つて來なかつた。而してつく／＼自分の心の變りかたの激しさに驚かずにはゐられなかつた。「定子！ 定子！」葉子は隣りにゐる人を呼び出すやうな氣で小さな聲を出して見た。その最愛の名を聲にまで出して見ても、その響きの中には忘れてゐた夢を思ひ出した程の反應もなかつた。どうすれば人の心といふものはこんなままで變り果てるものだらう。葉子は定子を憐れむよりも、自分の心を憐れむ爲めに涙ぐんでしまつた。而して何んの氣なしに小卓の前に腰をかけて、大切なものの中にしまつておいた、その頃日本では珍らしいフアウンテン・ペンを取り出して、筆の動くまゝにそこにあつた紙きれに字を書いて見た。

「女の弱き心につけ入り給ふはあまりに酷き御心と唯恨めしく存し。妾の運命はこの船に結ばれたる奇しきえにしや候ひけん心がらとは申せ今は過去の凡て未來の凡てを打捨てて唯眼の前の恥かしき思ひに漂ふばかりなる根なし草の身となり果し」を事もなげに見やり給ふが恨めしく／＼死し」

と何んの工夫もなく、よく意味も解らないで一鴻千里に書き流して來たが、「死」といふ字に來

ると、葉子はペンも折れよといは／＼しくその上を塗り消した。思ひのまゝを事務長に云つてやるのは、思ひ存分自分を弄べと云つてやるのと同じ事だつた。葉子は怒りに任せて餘白を亂暴に徒ら書きで汚してゐた。

と、突然船醫の部屋から高々と倉地の笑ひ聲が聞こえて來た。葉子は我れにもなく頭を上げて、暫らく聞耳を立ててから、そつと戸口に歩み寄つたが、後はそれなり又静かになつた。

葉子は恥かしげに座に戻つた。而して紙の上に思ひ出すまゝに勝手な字を書いたり、形の知れない形を書いて見たりしながら、づきん／＼と痛む額をぎひつと肘をついた片手で押へて何んと云ふ事もなく考へつゞけた。

念が肩げば木村にも定子にも何んの用があらう。倉地の心さへ掴めば後は自分の意地一つだ。さうだ。念が肩かなければ……念が肩かなければ……肩かなければ有らゆるものに用がなくなるのだ。さうしたら美しく死なうねえ。

……どうして……私はどうして……けれども……葉子はいつの間にか純粹に感傷的になつてゐた。自分にもこんなおぼかな思ひが潜んでゐたかと思ふと、抱いて撫でさすつてやりたいほど自分が可愛くもあつた。而して木部と別れて

がのぼせて前後の辨へもなく、それを引つたくと共に兩手にあらん限りの力を罩めて、人殺しでもするやうな氣負ひでずた／＼に引き裂いた。而して探みくたになつた寫眞の肩を男の胸も透れと投げつけると、寫眞の中つたその所に噛みつきましたかねまじき狂亂の姿となつて捨て身に武者ぶりついた。事務長は思はず身を退いて兩手を伸ばして走りよる葉子をせき止めようとしたが、葉子是我れにもなく我武者にすり入つて、男の胸に顔を伏せた。而して兩手で肩の腋地を爪も立てよと掴みながら、暫らく齒を喰ひしばつて震へてゐる中に、それが段々すすり泣きに變つて行つて、仕舞にはさめ／＼と聲を立てて泣きはじめた。而して暫らくは葉子の絶望的な泣き聲ばかりが部屋の中の靜かさをかき亂して響いた。

突然葉子は倉地の手を自分の背中に感じて、電氣にでも觸れたやうに驚いて飛び退いた。倉地に泣きながらすがり付いた葉子が倉地からどんなものを受取らねばならぬかは知れ切つてゐたのに、優しい言葉でもかけて貰へるかの如く振舞つた自分の矛盾に倒れて、恐ろしさに兩手で顔を蔽ひながら部屋隅に退つて行つた。倉地はすぐ近寄つて來た。葉子は猫に見込まれ

た金絲鳥のやうに身悶えしながら部屋の中を逃げにかゝつたが、事務長は手もなく追ひすがつて、葉子の二の腕を捕へて力まかせに引き寄せた。葉子も本氣に有らん限りの力を出してきかちつた。然しその時の倉地はもう普段の倉地ではなくなつてゐた。今朝寫眞を見てゐた時、後ろから葉子を抱きしめたその倉地が目ざめてゐた。怒つた野獸に見る狂暴な、防ぎやうのない力が嵐のやうに男の五體をさいなむらしく倉地はその力の下に呻きもがきながら、葉子に墓地に掘みかゝつた。

「又俺れを馬鹿にしやがるな」といふ言葉が喰ひしばつた齒の間から雷のやうに葉子の耳を打つた。

あゝこの言葉——このむき出しな有頂天な興奮した言葉こそ葉子が男の口から確かに聞かうと待ち設けた言葉だつたのだ。葉子は亂暴な地擁の中にそれを聞くと共に、心の隅に輕い餘裕の出來たのを感じて自分といふものが何處かの隅に頭を擡げかけたのを覺えた。倉地の取つた態度に對して作爲のある應對が出來さうにさへなつた。葉子は前通りにすゝり泣きを續けてはゐるが、その涙の中にはもう偽りの滴すら交つてゐた。

「いやです放して」かう云つた言葉も葉子にはどこか戲曲的な不自然な言葉だつた。然し倉地は反對に葉子の一語一語に酔ひしれて見えた。

「誰れが離すか」

事務長の言葉ははじめにもかすれ戰いてゐた。葉子はどん／＼失つた所を取り返して行くやうに思つた。その癖その態度は反對に益々頼りなげなやる瀬ないものになつてゐた。倉地の廣い胸と太い腕との間に羽がひに抱きしめられながら、小鳥のやうにぶる／＼と震へて、
「本當に離して下さいまし」

「いやだよ」

葉子は倉地の接吻を右に左にゆけながら、更に激しく啜り泣いた。倉地は致命傷を受けた歌のやうに呻いた。その腕には惡魔のやうな血の流れるのが葉子にも感ぜられた。葉子は程を見計つてゐた。而して男の張りつめた情慾の絲が絶ち切れんばかりに緊張した時、葉子はふと泣きやんできつと倉地の顔を振り仰いだ。その眼からは倉地が思ひもけなかつた鋭い強い光が放たれてゐた。

「本當に放していただきます」ときつぱり云つて、葉子は機械に一寸ゆるんだ

人のやうに、又二十五年に亙る長い苦しい戦に始めて勝つて兜を脱いだ人のやうに、心に肉にも快い疲勞を覺えて、謂はばその疲勞を夢のやうに味ひながら、なよ／＼とソファに身を寄せて燈火を見つめてゐた。倉地がそこにゐないのが淺い心残りだつた。けれども何んとも云つても心安がつた。ともすれば微笑が唇の上を漣のやうにひらめき過ぎた。

けれどもその翌日から一等船客の葉子に對する態度は掌を返したやうに變つてしまつた。一夜の間にこれほどの變化を惹き起す事の出来る力を、葉子は田川夫人の外に想像し得なかつた。田川夫人が世に時めく良人を持つて、人の眼に立つ交際をして、女盛りと云ひ條、もういくら降り坂であるのに引きかへて、どんな人の配偶にして見ても恥かしくない才能と容貌とを持つた若々しい葉子の便りなげな身の上とが、二人に近づく男達に同情の輕重を起させるのは勿論だつた。然し道徳はいつでも田川夫人のやうな立場にある人の利器で、夫人はまたそれを有利に使ふ事を忘れない種類の人であつた。而して船客達の葉子に對する同情の底に潛む野心——はかない、野心とも云へない程の野心——もう一つ云ひ換へれば、葉子の記憶に

親切な男として、勇悍な男として、美貌な男として残りたいと云ふ程な野心——に絶望の斷定を與へる事によつて、その同情を引つ込めさせる事の出来るのも夫人は心得てゐた。事務長が自己の勢力範圍から離れてしまつた事も不快の一端だつた。こんな事から事務長と葉子との關係は巧妙な手段で逸早く船中に傳へられたに違ひない。その結果として葉子は忽ち船中の社交から葬られてしまつた。少くとも田川夫人の前では、船客の大部分は葉子に對して疎々しい態度をして見せるやうになつた。中にも一番憐れなのは岡だつた。誰れが何んと告げ口したのか知らないが、葉子が朝おそく眼を覺まして甲板に出て見ると、毎時ものやうに手欄に倚りかゝつて、もう内海になつた波の色を眺めてゐた彼れは、葉子の姿を認めるや否や、ふいとその場を外づして、何處へか影を隠してしまつた。それからといふもの、岡はまるで幽霊のやうだつた。船の中にある事だけは確かだが、葉子が何うかしてその姿を見つけたと思ふと、次ぎの瞬間にはもう見えなくなつてゐた。その癖葉子は思はぬ時に、岡が何處かで自分を見守つてゐるのを確かに感ずる事が度々だつた。葉子はその岡を憐れむ事すらもう忘れて

ゐた。結句、船の中の人達から度外視されるのを氣安い事とまでは思はないでも、葉子がかゝる結果には一向無頓着だつた。もう船は今日シャトルに着くのだ。田川夫人やその他の船客達の所謂監視の下に苦々しい思ひをすこゝも今日限りだ。さう葉子は平氣で考へてゐた。然し船がシャトルに着くといふ事は、葉子に外の不安を持ち來さずにはおかなかつた。シカゴに行つて半年か一年木村と連れ添ふ外はあるまいと思つた。然し木部の時でも二箇月とは同様してゐなかつたと思つた。倉地と離れては一日でもゐられさうにはなかつた。然しこんな事を考へるには船がシャトルに着いてからでも三日や四日の餘裕はある。倉地はその事は第一に考へてくれてゐるに違ひない。葉子は今の平和を強ひてこんな問題でかき亂す事を欲しなかつたばかりでなく、進み出來なかつた。葉子はその癖、船客と顔を合せるのが不快でならなかつた。事務長に頼んで船橋に上げてもらつた。船は今瀬戸内のやうな狭い内海を動搖もなく進んでゐた。船長はウィクトリヤで備ひ入れた小先案内と二人並んで立つてゐるが、葉子を見るといつもの通り顔を真赤にしな

以來絶えて味はなかつたこの甘い情緒に自分からほだされ溺れて、心中でもする人のやうな、戀に身をまかせる心安さにひたりながら小机に突つ伏してしまつた。

やがて酔ひつづれた人のやうに頭を擡げた時は、疾に目がかげつて部屋の中には華やかな電燈がともつてゐた。

いきなり船醫の部屋が戸が亂暴に開かれる音がした。葉子ははつと思つた。その時葉子の部屋の戸にどたりと突きたつた人の氣配がして、「早月さん」と濁つて鹽がれた事務長の聲がした。葉子は身のすくむやうな衝動を受けて、思はず立ち上つてたじろぎながら部屋の隅に逃げかくれた。而して體中を耳のやうにしてゐた。

「早月さんお願ひだ。一寸開けて下さい」葉子は手早く小机の上の紙を屋簷になげ棄てて、ファウンテン・ペンを物蔭に抛りこんだ。而してせか／＼とあたりを見廻したが、慌てながら眼窓のカーテンを閉め切つた、而して又立ちすくんだ、自分の心の恐ろしさにまだひながら。

外部では握り拳で續けさまに戸を敲いてゐる。葉子はそ／＼と裾前をかき合せて、肩越しに鏡を見やりながら涙を拭いて眉を撫でつ

けた。

「早月さん!!」

葉子はやゝ暫しといつぱいつ躊躇してゐたが、とう／＼決心して、何か慌てくさつて、鍵をがち／＼やりながら戸を開けた。

事務長はひどく酔つて遠人つて來た。どんなに飲んでも顔色もかへない程の強酒な倉地が、こんなには酔ふのは珍らしい事だつた。締め切つた戸に仁王立ちによりかゝつて、冷然とした様子で離れて立つ葉子をまじ／＼と見すゑながら、

「葉子さん、葉さんが悪ければ早月さんだ。早月さん……僕のする事はするだけの覺悟があつてするんですよ。僕はね、横濱以來あなたに惚れてゐたんだ。それが分らないあなたぢやないでせう。暴力? 暴力が何んだ。暴力は思ふかな事つた。殺したくなれば殺しても進ぜるよ」

葉子はその最後の言葉を聞くとき腹を感ずる程に有頂天になつた。

「あなたに木村さんといふのが附いてる位は、横濱の支店長から聞かされとるんだが、どんな人だか僕は勿論知りませんさ。知らんが僕の方があるに深惚れしとる事だけは、この胸三

寸でちやんと知つとるんだ。それ、それが分らん? 僕は恥も何もさけ出してぶつとるんですよ。これでも分らんですか」

葉子は眼をかじやかしながら、その言葉を食つた。噛みしめた。而して吞み込んだ。

かうして葉子に取つての運命的な一日は過ぎた。

十八

その夜船はヴィクトリヤに着いた。倉庫の立ちならんだ長い棧橋に "On the Town Line" と大きな白い看板に書いてあるのが夜目にもしるく葉子の眼窓から見やられた。米國への上陸が禁ぜられてゐる支那の苦力がこゝから上陸するのと、相當の荷役とで、船の内外は急に騒々しくなつた。事務長は忙がしいと見えてその夜は遂に葉子の部屋に顔を見せなかつた。そこいらが騒々しくなればなる程葉子は嘘へやうのない平和を感じた。生れて以來、葉子は生に固着した不安からこれ程まで綺麗に遠ざかり得るものとは思ひも設けてゐなかつた。而かもそれが空疎な平和ではない。飛び立つて踊りたい程の "crazy" を苦もなく抑へ得る強い力の溜んだ平和だつた。總ての事に飽き足つた

狭く立つたり腰かけたたりしてゐた。そこには興録の顔も見えた。事務長は平氣で葉子の肩に手をかけたまま、這入つて行つた。

それは始終事務長や船醫と一かたまりのグループを作つて、サルーンの小さな卓を圍んでウキスキーを傾けながら、時々他の船客の會話に無遠慮な皮肉や茶々を入れたりする連中だつた。日本人が着るといかに嫌味に見える亞米利加風の背廣も、さして取つてつけたやうには見えない程、太平洋を幾度も往來したらしい人達で、どんな職業に従事してゐるのか、さういふ見分けには人一倍鋭敏な觀察力を持つてゐる葉子にすら見當がつかなかつた。葉子が這入つて行つても、彼等は格別自分達の名前を名乗るでもなく、一番安樂な椅子に腰かけてゐた男が、それを葉子に譲つて、自分は二つに折れるやうに小さくなつて、既に一人腰かけてゐる寢臺に曲りこむと、一同はその様子に聲を立てて笑つたが、すぐ又前通り平氣な顔をして勝手な口をきき始めた。それでも一座は事務長には一目置いてゐるらしく、又事務長と葉子との關係も、事務長から残らず聞かされてゐる様子だつた。葉子はさう云ふ人達の間にあるのを結構氣安く思つた。彼等は葉子を下級船員の

所謂姉御扱ひにしてゐた。

「向うに着いたらこれで擱着ものだぜ。田川の喰め、あいつ、一と味噌擦らずにはおくまいて」

一因業な生れだなあー

「何んでも正面から打つ突かつて、いきさき云はせず決めてしまふ外はないよ」

などと彼等は戯談ぶつた口調で親身な心持を云ひ現はした。事務長は眉も動かさずに、机に倚りかゝつて黙つてゐた。葉子はこれらの言葉からそこに居合はす人々の性質や傾向を読み取らうとしてゐた。興録の外に三人ゐた、その中の一人は甲斐絹のどてらを着てゐた。

「このまゝこの船でお歸りなさるがいゝね」

とそのどてらを着た中年の世渡り功者らしいのが葉子の顔を窺ひ「云ふと、事務長は少し肩計らしい顔をして物憎げに葉子を見やりながら、

「私もさう思ふんだがどうだ」

と訊ねた。葉子は

「さあ……」

と生返事をする外なかつた。始めて口をきく幾人もの男の前で、とつかわ物を云ふのがさすがに億劫だつた。興録は事務長の意向を讀んで取

ると、分別ぶつた顔をさし出して、

「それに限りますよ。あなた一つ病氣におなりなさりや世話なしですき。上陸した處が急に動くやうにはなれない。又さういふ體では檢校が兎や角やかましいに違ひないし、この間のやうに檢校所で眞裸にされるやうな事でも起れば、國際問題だの何んだのつて始末に終へなくなる。それよりは出帆まで船に寝ていらつしやる方がいゝと、そこは私が大丈夫やりますよ。而しておいて船の出際になつて矢張り何うしてもいけないと云へばそれつ限りのものでさあ」

「なに、田川の奥さんが、木村つて云ふのに、味噌さへしこたま擦つてくれれば一番えゝのだ」

と事務長は船醫の言葉を無視した様子で、自分の思ふ通りをぶつきらばうに云つてのけた。

木村はその位な事で葉子から手を引くやうなはき／＼した氣性の男ではない。これまでも随分色々な噂が耳に這入つた筈なのに「僕はあの女の缺陷も弱點も皆んな承知してゐる。私生兒のあるのも固より知つてゐる。唯僕はクリスチャンである以上、何んともして葉子を救ひ上げる。赦はれた葉子を想像して見給へ。僕はその時一番理想的な Butler half を持ち得ると

から帽子を取つて挨拶した。ビスマークのやうな顔をして、船長よりひとがけも二たがけも大きい白髪の水先案内はふと振り返つて、つと葉子を見たが、そのまゝ向き直つて、

「Charm in' little lassie! wha' is that?」

とスコットランド風な強い發音で船長に尋ねた。葉子には解らない積りで云つたのだ。船長が慌てて何かさゝやくと、老人はからりと笑つて一寸首を引つて返ましながら、もう一度振り返つて葉子を見た。

その毒氣なくからりと笑ふ聲が、恐ろしく氣に入つたばかりでなく、乾いて晴れ渡つた秋の朝の空と何んとも云へない調和をしてゐると思ひながら葉子は聞いた。而してその老人の背中でも撫でてやりたいやうな氣になつた。船は小動ぎもせずに亞米利加松の生え茂つた大島小島の間を縫つて、舷側に來てぶつかる連の音も長閑だつた。而して晝近くになつて一寸した岬をぐるりと船がかはすと、やがてポイント・タウンセンドに着いた。そこでは米國官憲の検査が型ばかりあるのだ。崩した崖の土で埋め立てをして造つた、棧橋まで小さな漁村で、四角な箱に窓を明けたやうな、生々しい一色のペンキで塗り立てた二三階建ての家並みが、險

しい斜面に沿つて高く低く立ち連なつて、岡の上には水上げの風車が、青空に白い羽根をゆるゆる動かしながら、かつたんこつとんと暢氣らしく音を立てて廻つてゐた。鵜が群をなして猫に似た聲で啼きながら、船の周りを水に近く長閑に飛び廻るのを見るのも、葉子には絶えて久しい物珍らしさだつた。館屋の呼賣りのやうな聲さへ町の方から聞こえて來た。葉子はチャート、ルームの壁に凭れかゝつて、ぽか／＼と射す秋の日の光を頭から浴びながら、靜かな恵み深い心で、この小さな町の小さな生活を眺めやつた。而して十四日の航海の間に、いつの間にか海の心を心としてゐたのに氣が付いた。放埒な、移り氣な、想像も及ばぬパッションにのたうち廻つて呻き惱むあの大海原——葉子は失はれた樂園を慕ひ望むイヴのやうに、靜かに小さくうねる水の皺を見やりながら、遙かな海上の旅路を思ひやつた。

「早月さん一寸そこからでい、顔を貸して下さい。」
直ぐ下で事務長のかう云ふ聲が聞こえた。葉子は母に呼び立てられた少女のやうに、嬉しさに心をとめかせながら、船橋の手欄から下を見下ろした。そこに事務長が立つてゐた。

「One more over the rail, look!」
かう云ひながら、米國の税關吏らしい人に葉子を指さして見せた。官吏は點頭しながら手帳に何か書き入れた。

船は間もなくこの漁村を出發したが、出發すると間もなく事務長は船橋に昇つて來た。

「Here we are! Seaside is as good as reached now!」

船長にともなく葉子にともなく云つて置いて、水先案内と握手しながら、

「Thanks to you!」

と附け足した。而して三人で暫らく快活に四方山の話をしてゐたが、不圖思ひ出したやうに葉子を顧みて、

「これから又當分は眼が廻る程忙しくなるで、その前に一寸御相談があるんだが、下に來てくれませんか。」

と云つた。葉子は船長に一寸挨拶を残して、すぐ事務長の後に續いた。階下段を降る時でも、眼の先きに見える嚴整な廣い肩から一種の不安が抜け出て來て葉子に逼る事はもうなかつた。自分の部屋の前まで來ると、事務長は葉子の肩に手をかけて戸を開けた。部屋の中には三四人の男が濃く立ち罩めた煙草の煙の中に處

つてゐた。舊い記憶が香のやうに染みこんだそれらの物を見ると、葉子の心は我れにもなくふとぐらつきかけたが、涙もささはずに淡く消えて行つた。

フオクスルで起重機の音がかすかに響いて来るだけで、葉子の部屋は妙に静かだつた。葉子の心は風のない池が沼の面のやうに唯きどんよりと濃んでゐた。體は何んの譯もなくだるく物傾かつた。

食堂の時計が引きしまつた音で三時を打つた。それを合圖のやうに汽笛がすまじく鳴り響いた。港に這入つた合圖をしてゐるのだからと思つた。と思ふと今まで鈍く脈打つやうに見えてゐた胸が急に激しく騒ぎ出した。それが葉子の思ひも設けぬ方向に動き出した。もうこの長い船旅も終つたのだ。十四五の時から新聞記者になる修業の爲めに來たいと思つてゐた米國に着いたのだ。來たいとは思ひながら本當に來ようとは思はなかつた米國に着いたのだ。それだけの事で葉子の心はもうしみるゝとしたものになつてゐた。木村は狂ふやうな心を強ひて押し鎖めながら、船の着くの埠頭に立つて涙ぐみ待つてゐるだらう。さう思ひながら葉子の眼は木村や二人の妹の寫眞の方

方にさまよつて行つた。それと並べて寫眞を飾つておく事も出来ない定子の事までが、哀れ深く思ひやられた。生活の保障をしてくれる父親もなく、膝に抱き上げて愛撫してやる母親にもはぐれたあの子は今あの池の端の淋しい小家で何をしてゐるのだらう。笑つてゐるかと想像して見るのも悲しかった。泣いてゐるかと想像して見るのも憐れだつた。而して胸の中が急にわく／＼と塞がつて來て、堰きとめる暇もなく涙がはら／＼と流れ出た。葉子は人急ぎで寝臺の側に駆けよつて、枕許においといたハンケチを拾ひ上げて眼頭に押しあてた。素直な感情的な涙が唯々還もなく後から／＼流れた。この不意の感情の裏切りにには然し引き入れられるやうな誘惑があつた。段々底深く沈んで哀しくなつて行くその思ひ、何んの思ひとも定めかねた深い、鈍い、悲しい思ひ。恨みや怒りを綺麗に拭き去つて、諦めきつたやうに絶つてのものを唯々しみるゝとなつて見せるその思ひ。いとしい定子、いとしい妹、いとしい父母、……何故こんななつかしい世に自分の心だけがかう哀しく一人坊ちなのだらう。何故世の中は自分のやうなものを憐れむ仕方を知らないのだらう。そんな感じの零細な斷片がつぎ／＼に涙に濡れ

て胸を引きしめながら通り過ぎた。葉子は知らず／＼それらの感じにしつかりすがり附かうとしたけれども無益だつた。感じと感じとの間には、星のない夜のやうな、波のない海のやうな、暗い深い隙縫のない悲哀が、愛憎の凡てを唯々一色に染めなして、どんよりと擴がつてゐた。生を呪ふよりも死が願はれるやうな思ひが、過るでもなく離れるでもなく、葉子の心にまつはり附いた。葉子は果ては枕に顔を伏せて、本當に自分の爲めにさめ／＼と泣き續けた。かうして小半時もたつた時、船は棧橋に繋がれたと見えて、二度目の汽笛が鳴りはためいた。葉子は物傾げに頭を擡げて見た。ハンケチは涙の爲めにしぼる程濡れて丸まつてゐた。水夫等が繫綱を受けたりやつたりする音と、鉤針を打ちつけた紙で甲板を歩き廻る音とが入り亂れて、頭の上は宛ら火事場のやうな騒ぎだつた。泣いて／＼泣き盡した子供やうなぼんやりした取りとめのない心持で、葉子は何を思ふともなくそれを聞いてゐた。と突然戸外で事務長の、「こゝが部屋です」といふ聲がした。それが丸で雷か何かのやうに恐ろしく聞こえた。葉子は思はずぎよとなつ

信じてゐる」と云つた事を聞いてゐる。東北人のねんぢりむつりしたその氣性が、葉子には第一我慢のし切れない嫌惡の種だつたのだ。

葉子は黙つて皆んなの云ふ事を聞いてゐる中に、興録の軍略が一番實際的だと考へた。而して拙れくしい調子で興録を見やりながら、「興録さん、さう仰しやれば私假病ぢやないんですの。この間中から診ていたぢやうか知らずと幾度か思つたんですけれども、あんまり大袈裟らしいんで我慢してゐたんですが、何ういふもんでせう……少しは船に乗る前からでしたけれども……お腹のこゝが妙に時々痛むんですよ」

と云ふと、寢臺に曲りこんだ男はそれを聞きながらにやり／＼笑ひ始めた。葉子は一寸その男を睨むやうにして一緒に笑つた。

「まあ機が悪い時にこんな事を云ふものですから、痛い腹まで探られますわね……ぢや興録さん後程診ていただけて？」

事務長の相談といふのはこんな多愛もない事で済んでしまつた。

二人きりになつてから、

「では私これから本當の病人になりますからね」

葉子は一寸貧地の顔をつゝいて、其の唇に觸れた。而してシャトルの市街から起る煤煙が遠くにぼんやり望まれるやうになつたので、葉子は自分の部屋に歸つた。而して洋風の白い寝衣に着かへて、髪を長い編下げにして寢床に這入つた。戯談のやうにして興録に病氣の話をしたものの、葉子は實際可なり長い以前から子宮を害してゐるらしかつた。腰を冷やしたり、感情が激昂したりした後では、きつと收縮するやうな痛みを下腹部に感じてゐた。船に乗つた當座は、暫らくの間は忘れるやうにこの不快な痛みから遠ざかる事が出来て、幾年ぶりかで申し所のない健康のよろこびを味つたのだつたが、近頃は又段々痛みが激しくなるやうになつて來てゐた。半身が麻痺したり、頭が急にぼーつと遠くなる事も珍らしくなかつた。葉子は寢床に這入つてから、輕い痛みのある所をそつと平手で擦りながら、船がシャトルの波止場に着く時の有様を想像して見た。しておかなければならない事が数かぎりなくあるらしかつたけれども、何をしておくといふ事もなかつた。唯々何んでもいゝせつせと手當り次第度をしておかなければ、それだけの心盡しを見せて置かなければ、目論見通り首尾が運ばないやうに

思つたので、一週横になつたものを又むく／＼と起き上つた。

先づ昨日着た派手な衣類がそのまゝ散らかつてゐるのを感んでトランクの中に仕舞ひこんだ。臥る時まで着てゐた着物は、わざと華やかな長襦袢や裏地が見えるやうに衣紋竹に通して壁にかけた。事務長の置き忘れて行つたパイプや帳簿のやうなものとは丁寧に引出しに隠した。古藤が木村と自分とに宛てて書いた二通の手紙を取り出して、古藤がしておいたやうに枕の下に差しこんだ。鏡の前には二人の妹と木村との寫眞を飾つた。それから大事な事を忘れてゐたのに氣がついて、廊下越しに興録を呼び出して藥瓶や病床日記を調へるやうに頼んだ。興録の持つて來た藥瓶から藥を半分がた痰壺に捨てた。日本から木村に持つて行くやうに託された品々をトランクから取り分けた。その中からは故郷を思ひ出させるやうな色々な物が出て來た。香ひまでが日本といふものをほのかに心に觸れさせた。

葉子は忙はしく働かしてゐた手を休めて、部屋の真中に立つてあたりを見廻して見た。萎んだ花束が取り除けられて無くなつてゐるばかりで、あとは横濱を出た時の通りの部屋の姿にな

もう一度、
「葉子さん」
と愛するものの名を呼んだ。それは先程呼ばれた時のそれに比べると、聞き違へる程美しい聲だった。葉子は、今まで、これ程切な情を籠めて自分の名を呼ばれた事はないやうにさへ思つた。「葉子」といふ名に際立つて傳奇的な色彩が添へられたやうにも聞こえた。で、葉子はわざと木村と握り合せた手に力をこめて、更に何んとか言葉をつがせて見たくなつた。その眼も木村の唇に觸れしを與へてゐた。木村は急に癖力を回復して、
「一日千秋の思ひとはこの事です」
とすら／＼と滑らかに云つて退けた。それを聞くと葉子は見事期待に背負投げを喰はされて、その場の滑稽に思はず吹き出さうとしたが、如何に事務長に對する戀に溺れ切つた女心の殘虐さからも、さすがに木村の多愛ない誠實を笑ひ切る事は得しないで、葉子は唯々心の中で失望したやうにあれだから嫌になつちまふ」とくさ／＼しながら呟つた。
然しこの場合、木村と同様、葉子も恰好な空氣を部屋の中に作る事に當惑せずにはゐられなかつた。事務長と別れて自分の部屋に閉ぢ籠つ

てから、心靜かに考へて置かうとした木村に對する善後策も、思ひよらぬ感情の狂ひからそのまゝになつてしまつて、今になつて見ると、葉子は何う木村をもてあつかつて好いのか、はつきりした目論見は出来てゐなかつた。然し考へて見ると、木部孤第と別れた時でも、葉子には格別これといふ謀略があつた譯ではなく、唯々その時々到我儘を振舞つたに過ぎなかつたのだけれども、その結果は葉子が何か恐ろしく深い企らみと手練を示したかのやうに人に取られてゐた事も思つた。何んとかして漕ぎ抜けられない事はあるまい。さう思つて、先づ落ち付き拂つて木村に椅子をすゝめた。木村が手近にある疊椅子を取り上げて寢臺の側に來て坐ると、葉子は又しなやかな手を木村の膝の上において、男の顔を上げ／＼と見やりながら、
「本當に暫らくでしたわね。少しおやつれになつたやうですわ」
と云つて見た。木村は自分の感情に打ち負かされて身を震はしてゐた。而してわ／＼と流れ出る涙が見る／＼眼から溢れて、顔を傳つて幾筋となく流れ落ちた。葉子は、その涙の「と」零が氣まぐれにも、俯向いた男の鼻の先きに宿つて、落ちないのを見やつてゐた。

「随分色々々と苦勞なすつたらうと思つて、氣がではなかつたんですけれども、私の方も御承知の通りでせう。今度こつちに来るにつけても、それは困つて、有りつたもののものを拂つたりして、漸く間に合せた位だつたもんですから……」
なほ云はうとするのを木村は忙はしく打ち消すやうに遮つて、
「それは十分分つてゐます」
と顔を上げた。拍子に涙の雫がぼたりと鼻の先からズボンの上に落ちたのを見た。葉子は、泣いた爲めに妙に眼れぼつたく赤くなつて、てら／＼と光る木村の鼻の先きが急に氣になり出して、悪いとは知りながらも、兎もするとそこへばかり眼が行つた。
木村は何か何う話し出していか分らない様子だつた。
「私の電報をヴィクトリヤで受取つたでせうね」
などともてれ隠しのやうにぶつた。葉子は受取つた覺えもない辯にいゝ加減に、
「え、難有う御座いました」
と答へておいた。而して一時も早くこんな息氣づまるやうに壓迫して來る二人の間の心のもつ

た。準備をしておく積りでゐながら何んの準備も出来てゐない事も思つた。今の心持は平氣で木村に會へる心持ではなかつた。おろ／＼しながら立ち上つたが、立ち上つても何うする事も出来ないのだと思ふと、追ひつめられた罪人のやうに、頭を毛を兩手で抑へて、髪の毛をむしりながら、寢臺の上にがばと伏さつてしまつた。

戸が開いた。

「戸が開いた」葉子は自分自身に救ひを求めるやうにかう心の中で呻いた。而して息氣もとまる程身内がいやちこばつてしまつてゐた。

「早月さん木村さんが見えましたよ」

事務長の聲だ。あゝ事務長の聲だ。事務長の聲だ。葉子は身を震はせて壁の方に顔を向けた。……事務長の聲だ……

「葉子さん」

木村の聲だ。今度は感情に震へた木村の聲が聞えて來た。葉子は氣が狂ひさうだつた。兎に角二人の顔を見る事は何うしても出来ない。葉子は二人に背を向け益々壁の方に藻掻きよりにながら、涙の暇から狂人のやうに叫んだ。忽ち高く忽ち低いその震へ聲は笑つてゐるやうにさへ聞えた。

「出て……お二人ともどうか出て……この部屋を……後生ですから今この部屋を……出て下さいまし……」

木村はひどく不安げに葉子に寄りそつてその肩に手をかけた。木村の手を感ずる恐怖と嫌惡との爲めに身をちぢめて壁に獅噛みついた。

「痛い……いけません……お腹が……早く出て……早く……」

事務長は木村を呼び寄せて何か暫らくひそひそ話し合つてゐるやうだつたが、二人ながら聲音を盗んでそつと部屋を出て行つた。葉子はなほも息氣も絶えぬに、

「どうぞ出て……あつちに行つて……」と云ひながら、いつまでも泣き續けた。

十九

暫らくの間食堂で事務長と通り一遍の話をしてもしてゐるらしい木村が、頭を見計らつて再度葉子の部屋の戸を敲いた時にも、葉子はまだ林に顔を伏せて、不思議な感情の渦巻きの中に心を浸してゐたが、木村が一人で這入つて來たのに氣付くと、始めて弱々しく横向きに寝なほつて、二の腕まで袖口のまくれた眞白な手をさし延べて、黙つたまゝ木村と握手した。木村

は葉子の激しく泣いたのを見てから、堪へ堪へてゐた感情が更に高じたものか、涙をあふれんばかり眼頭にためて、厚ぼつたい唇を震はせながら、痛々しげに葉子の顔を人づつ突つ立つた。

葉子は、今まで續けてゐた沈黙の情性で第一口をきくのが物慚かつたし、木村は何んと云ひ出したものか迷ふ様子で、二人の間には握手のまゝ意味深げな沈黙が取りかはされた。その沈黙は然し感傷的といふ程度であるには餘りに長く續き過ぎたので、外界の刺激に感じて過敏なまでに満身の出来る葉子の感情は、今まで浸つてゐた痛烈な動亂から一皮々々平調に還つて、果てはその底に、かう高じては厭はしいと自分ですらと思ふやうな冷やかな皮肉が、そろ／＼頭を持ち上げて來るのを感じた。握り合せたむづかゆいやうな手を引つ込めて、眼元まで蒲團を被つて、そこから自分の前に立つ若い男の心の亂れを嘲笑つて見たいやうな心にすならなつてゐた。永く續く沈黙が當然卒き起す一種の壓迫を木村も感じてゐた。何んとかして二人の間の氣まづさを引き裂くやうな、心の切なさを表はす適當の言葉案じ求めてゐるらしかつたが、とう／＼涙に潤つた低い聲で、

れから逃れる術はないかと思案してゐた。

「今始めて事務長から聞いたんですが、あなたが病氣だつたと云つてましたが、一體何處が悪かつたんです。さぞ困つたでせうね。そんな事とはちつとも知らずに今が今まで、祝福された、輝くやうなあなたを迎へられるとばかり思つてゐたんです。あなたは本當に試験の受けつづけと云ふもんですね。何處でした悪いのは」

葉子は、不用意にも女を捕へてぢかづけに病氣の種類を聞きたゞす男の心の粗雑さを思ひながら、當らずさはらず、前からあつた胃病が、船の中で食物と氣候との變つた爲めに、段々高じて來て起きれなくなつたやうに云ひ繕つた。木村は痛ましさに眉を寄せながら聞いてゐた。

葉子はもうこんな程々な會話には堪へ切れなくなつて來た。木村の顔を見るにつけて思ひ出される仙臺時代や、母の死といふやうな事にも可なり惱まされるのをつらく思つた。で、話の調子を變へる爲めに強ひていくらか快活を装つて、

「それはさうとこちらの御事業はいかゞ」と仕事とか様子とか云ふ代りに、わざと事業といふ言葉をつかつてかう尋ねた。

木村の顔付きは見る／＼變つた。而して胸のポケットに覗かせてあつた大きなリンネルのハンケチを取り出して、器用に片手でそれをふはりと丸めておいて、ちんと鼻をかんでから、又器用にそれをポケットに戻すと、

「駄目です」

といかにも絶望的な調子で云つたが、その眼は既に笑つてゐた。桑港の領事が在留日本人の企業に對して全然冷淡で盲目であるといふ事、日本人間に嫉視が激しいので、桑港での事業の目論見は豫期以上の故障に遇つて大體失敗に終つた事、思ひ切つた發展は矢張り想像通り米國の西部よりも中央、殊にシカゴを中心として計畫されなければならぬといふ事、幸に、桑港で自分の話に乗つてくれる或る手堅い獨逸人に取次ぎを頼んだといふ事、シヤトルでも相當の店を見出しかけてゐるといふ事、シカゴに行つたら、そこで日本の名譽領事をしてゐる可なりな鐵物商の店に先づ住み込んで米國に於ける取引きの手心を呑み込むと同時に、その人の資本の一部を動かして、日本との直取引を始める算段であるといふ事、シカゴの住居はもう決つて、借りるべきフラットの圖面まで取り寄せてあるといふ事、フラットは不經濟のやうだけれども

部屋の明いた部分を又貸しをすれば、大して高いものにもつかず、住まひ便利は非常にいといふ事……さう云ふ點にかけては、中々綿密に行き届いたもので、それをいかにも企業家らしい説教的な口調で順序よく述べて行つた。會話の流れがかう變つて來ると、葉子は始めて泥の中から足を拔き上げたやうな氣輕な心持になつて、ずつと木村を見つめながら、聞くともなしにその話に聞耳を立ててゐた。木村の容貌は暫らくの間に見違へる程、柔和されて、元から白かつたその皮膚は何か特殊な洗料で底光りをする程磨きがかけられて、日本人とは思へぬまで滑らかなのに、油で綺麗に分けた濃い黒髪は、西洋人の金髪には又見られぬやうな趣きのある對照をその白皙の皮膚に與へて、カラーとネックタイの關係にも人に氣のつかぬ凝り方を見せてゐた。

「會ひたてからこんな事を云ふのは恥かしいですけれども、實際今度といふ今度は苦闘しました。こゝまで迎へに來るにも碌々旅費がない騒ぎでせう」

と云つてさすがに苦しげに笑ひにまぎらさうとした。その癖木村の胸にはどつしりと重さうな金鎖がかゝつて、兩手の指には四つまで寶石

紙の上では一枚がた男を上げてゐますわね」
木村の意氣込みは然しそんな事ではごまかされさうにはなかつたので、葉子は面倒くさくなつて少し険しい顔になつた。

「古藤さんの仰しやる事は古藤さんの仰しやる事。あなたは私と約束なさつた時から私を信じ私を理解して下さいさつていらつしやるんでせうね」

木村は恐ろしい力をこめて、

「それはさうですとも」と答へた。

「そんならそれで何も云ふ事はないぢやありませんか。古藤さんなどの云ふ事——古藤さんなんぞに分られたら人間も末ですわ——でもあなたはやっぱりどこ處か私を疑つていらつしやるのね」

「さうぢやない……」

「さうぢやない事があるもんですか。私は一旦かうと決めたら何處までもそれで通すのが好き。それは生きてる人間ですもの、こつちの隅あつちの隅と小さな事を捕へて尤めだてを始めたら際限はありませんさ。そんな馬鹿な事つたらありませんわ。私見たいな氣障な我儘者はそんな風にされたら窮屈で窮屈で死んでしまふで

せうよ。私がこんなになつたのも、つまり、みんなて寄つてたかつて私を疑ひ抜いたからです。あなただつてやつぱりその一人かと思ふと心細いもんですのね」

木村の眼は輝いた。

「葉子さんそれは疑ひ過ぎといふもんです」
而して自分が米國に來てから嘗め盡した奮闘生活もつまりは葉子といふものがあればこそ出來たので、若し葉子がそれに同情と鼓舞とを與へてくれなかつたら、その瞬間に精も根も枯れ果ててしまふに違ひないといふ事を繰り返して繰り返し熱心に説いた。葉子はよそ／＼しく聞いてゐたが、

「うまく仰しやるわ」
と留めをさしておいて、暫らくしてから思ひ出したやうに、

「あなた田川の奥さんにお遇ひなさつて」と尋ねた。木村はまだ遇はなかつたと答へた。葉子は皮肉な表情をして、

「いまに此處にお遇ひになつてよ。一緒にこの船でいらしつたんですもの。而して五十川階の小母さんが私の監督をお頼みになつたんですもの。一度お遇ひになつたらあなたは此處私なんぞ見向きもなさなくなりますわ」

「どうしてです—」

「まあお遇ひなさつて御覽なさいまし」

「何かあなた非難を受けるやうな事でもしたんですか」

「え——澤山しましたとも」

「田川夫人に？ あゝの賢夫人の非難を受けるとは、一體どんな事をしたんです」

葉子はささ愛想が盡きたといふ風に、

「あの賢夫人！」

と云ひながら高々と笑つた。二人の感情の線は又も糾れてしまつた。

「そんなにあの奥さんにあなたの御信用があるのなら、私から申しておく方が早手廻しですわね——」

と葉子は半分皮肉な半分眞面目な態度で、横濱に出航以來夫人から葉子が受けた暗々裡の壓迫に尾鰭をつけて語つて來て、事務長と自分の間に何か當り前でない關係でもあるやうな疑ひを持つてゐるらしいと云ふ事を、他人事でも話すやうに冷靜に述べて行つた。その言葉の裏には、然し葉子に特有な火のやうな情熱が閃いて、その眼は鋭く輝いたり涙ぐんだりしてゐた。木村は電火にでも打たれたやうに判斷力を失つて、一部始終をぼんやりと聞いてゐた。

らく風向きを見計らつて立つてゐたが突然部屋を出て行つた。葉子はすばやくその顔色を窺ふと妙にけはしくなつてゐた。

「一寸失禮」

木村の癖で、こんな時まで妙によろしく闊つて、古藤の手紙の封を切つた。西洋罫紙にペンを細かく書いた幾枚かの可なり厚いもので、それを木村が讀み終るまでには暇がかゝつた。その間、葉子は仰向けになつて、甲板で盛んに荷揚げしてゐる人足等の騒ぎを聞きながら、やゝ暗くなりかけた半で木村の顔を見やつてゐた。少し眉根を寄せながら、手紙に讀み耽ける木村の表情には、時々苦痛や疑惑やの色が往つたり來たりした。讀み終つてからほつとした溜息と共に木村は手紙を葉子に渡して、

「こんな事を云つてよこしてゐるんです。あなたに見ても構はないとあるから御覽なさい」と云つた。葉子は別に讀みたくなかつたが、多少の好奇心も手傳ふので兎に角眼を通して見た。

「僕は今度位不思議な經驗を嘗めた事はない。兄が去つて後の葉子さんの一身に關して、責任を持つ事なんか、僕はしたいと思つても出来はしないが、若し明白に云はせ

てくれるなら、兄はまだ葉子さんの心を全然占領したものは思はれない」

「僕は女の心には全く觸れた事がないと云つていゝ程の人間だが、若し僕の仕事だと思ふ事が不當にして事實だとすると、葉子さんの戀には——若しそんなのが戀と云へるなら——大分餘裕があると思ふね」

「これが女のゴマといふものかと思つたやうな事があつた。然し僕には解らん」

「僕は若い女の前行くやうに變にどきまぎしてしまつて碌々物も云へなくなる。所が葉子さんの前では全く違つた感して物が云へる。これは考へものだ」

「葉子さんといふ人は兄が云ふ通りに優れた天賦を持つた人のやうにも實際思へる。然しあの人は何處か片輪ぢやないかい」

「明白に云ふと僕はあゝ云ふ人は一番嫌ひだけれども、同時に又一番牽き附けられる、僕はこの矛盾を解きほごして見たくつて堪らない。僕の單純を許してくれ給へ。葉子さんは今までの何處かで道を間違へたのぢやないか知らん。けれどもそれにしては餘り平氣だね」

「神は惡魔に何一つ與へなかつたが、(一)だけは與へたのだ。こんな事も思ふ。……葉子さんの attachment は何處から來るんだらう。矢張り。僕は亂暴を云ひ過ぎてるやうだ」

「時々憎むべき人間だと思ふが、時々何んだか可哀さうで堪らなくなる時がある。葉子さんがこゝを讀んだら恐らく唾でも吐きかけたくなるだらう。あの人は可哀さうな人の癖に、可哀さうがられるのが嫌ひらしいから」

「僕には結局葉子さんは何が何んだかちつとも分らない。僕は兄が彼女を選んだ自信に驚く。然しかうなつた以上は、兄は全力を盡して彼女を理解してやらなければいけないと思ふ。どうか兄等の生活が最後の榮冠に至らん事を神に祈る」

こんな文句が斷片的に葉子の心に沁みて行つた。葉子は湧しい侮蔑を小鼻に見せて、手紙を木村に戻した。木村の顔にはその手紙を讀み終へた葉子の心の中を見透さうとあせるやうな表情が現はれてゐた。

「こんな事を書かれてあなたどう思ひます」

葉子は事もなげにせうら笑つた。

「どうも思ひはしませんわ。でも古藤さんも手

葉子はふと二度程岡の事を思つてゐた。そんな自分に盛つてゐるはしたが岡も上陸してしまへば、詮方なくボストンの方に旅立つ用意をするだらう。而して總て自分の事もいつとはなしに忘れてしまふだらう。それにしても何んといふ上品な美しい青年だつたらう。こんな事をふと思つたのも然し束の間で、その追憶は心の戸を敲いたと思ふと果敢なくも何處かに消えてしまつた。今は唯木村といふ邪魔な考へが、もや／＼と胸の中に立ち迷ふばかりで、その奥には事務長の打ち勝ちがたい暗い力が、魔王のやうに小動ぎもせず蹲つてゐるのみだつた。

荷役の日まぐるしい騒ぎが二日續いた後の繪島丸は、泣きわめく遺族に取り圍まれた虚ろな死骸のやうに、がらんと靜まり返つて、騒々しい棧橋の雜沓の間に淋しく横はつてゐる。

水夫が、輪切りにした椰子の實で汚れた甲板の板を單調に／＼／＼と擦る音が、時といふものをゆる／＼磨り減らすやすりのやうに日がな日ねもす聞こえてゐた。

葉子は早く／＼／＼を切り上げて日本に歸りたいといふ子供染みた考への外にはをかしい程その外の興味を失つてしまつて、他郷の風景に一瞥を與へる事も厭はしく、自分の部屋の中

に籠り切つて、ひたすら發船の日を待ち侘びた。尤も木村が毎日、米國といふ香を鼻をつくばかり身の廻りに漂はせて、葉子を訪れて來るので、葉子はうつかり寢床を離れる事も出来なかつた。

木村は來る度毎に是非米國の醫者に健康診断を頼んで、大事なければ思ひ切つて検査官の検査を受けて、兎も角も上陸するやうにと勸めて見たが、葉子は何處までもいやを云ひ通すので二人の間には時々危険な沈黙が續く事も珍らしくなかつた。葉子は然し何時でも手際よくその場合々々を操つて、それから甘い敬語を引き出すだけの機才を持ち合してゐたので、この一箇月程見知らぬ人の間に立ち交つて、貧乏の屈辱を存分に嘗め盡した木村は見る／＼溫柔な葉子の言葉や表情に酔ひしれるのだつた。カリフォルニアから來る水々しい葡萄やバナナを器用な經木の小籃に盛つたり、美しい花束を携へたりして、葉子の朝化粧がしまつたかと思ふ頃には木村が缺かさず尋ねて來た。而して毎日／＼と興録に葉子の容態を聞き糺した。興録はいゝ加減な事を云つて一日延ばしに延ばしてゐるので堪らなくなつて木村が事務長に相談すると、事務長は興録よりも更に

要領を得ない受け答へをした。仕方なしに木村は途方に暮れて、又葉子に歸つて來て泣きつくやうに上陸を迫るのであつた。その毎日のいきさつを夜になると葉子は事務長と話し合つて笑ひの種にした。

葉子は何んといふ事なしに、木村を困らして見たい、いちめて見たいといふやうな不思議な殘虐な心を、木村に對して感ずるやうになつて行つた。事務長と木村とを目の前に置いて、何も知らない木村を、事務長が一流のきび／＼した惡辣な手で思ふさま翻弄して見せるのを眺めて樂しむのが一種の痼疾のやうになつた。而して葉子は木村を通して自分の過去の凡てに血の滴る復讐を取へてしようとするのだつた。そんな場合に、葉子はよく何處かであらう覺えにしたクレオパトラの挿話を思ひ出してゐた。クレオパトラが自分の運命の窮迫したのを知つて自殺を思ひ立つた時、幾人も奴隸を目の前に引き出さして、それを毒蛇の餌食にして、その幾人も無幸の人々が悶えながら絶命するのを、眉も動かさずに見てゐたといふ挿話を思ひ出してゐた。葉子には過去の凡ての呪詛が木村の一身に集まつてゐるやうにも思ひなされた。母の虐げ、五十川女史の術數、近親の壓迫、社會の

言葉だけでも何處までも冷靜な調子を持たせ續けて葉子は凡てを語り終つてから、

「同じ親切にも眞底からのと、通り一遍の二つありますわね。その二つが何うかしてぶつかり合ふと、毎時でも本當の親切の方が惡者扱ひにされたり、邪魔者に見られるんだから面白う御座んすわ。横濱を出てから三日ばかり船に酔つてしまつて、どうしませうと思つた時にも、御親切な奥さんは、わざと御遠慮なさつてでせうね、三度々々食堂にはお出になるのに、一度も私の方へはいらしつて下さらないのに、事務長つたら幾度もお醫者さんを連れて來るんですもの、奥さんのお疑ひも尤もと云へば尤もですの。それに私が胃病で寝込むやうになつてからは、船中のお客様がそれは同情して下さつて、色々として下さるのが、奥さんには大のお氣に入らなかつたんですの。奥さんだけは私を親切にして下さつて、外の方は皆んな寄つてたかつて、奥さんを親切にして上げて下さる段取りにさへなれば、何もかも無事だつたんですけれどもね、中でも事務長の親切にして上げ方が一番足りなかつたんでせうよ」と言葉をつなぐ。木村は唇を噛むやうにして聞いてゐたが、いまい／＼しげに、

「判りました／＼」

合點しながらつぶやいた。

葉子は額の生え際の短い毛を引つ張つては指に巻いて上眼で眺めながら、皮肉な微笑を唇のあたりに浮ばして、

「おわかりになつた？ ふん、何うですかね」と空囁いた。

木村は何を思つたかひどく感傷的な態度になつてゐた。

「私が惡かつた。私は何處までもあなたを信ずる積りでゐながら、他人の言葉に多少とも信用をかけようとしてゐたのが惡かつたのです。……考へて下さい、私は親類や友人の凡ての反對を冒して此處まで來てゐるのです。もうあなたなしには私の生涯は無意味です。私を信じて下さい。屹度十年を期して男になつて見せますから。若しあなたの愛から私が離れなければならぬやうな事があつたら……私はそんな事を思ふに堪へない……葉子さん」

木村はかう云ひながら眼を輝いてすり寄つて來た。葉子はその思ひつめたらしい態度に一種の恐怖を感じる程だつた。男の誇りも何も忘れ果て、捨て果てて、葉子の前に誓を立ててゐる木村を、うま／＼偽つてゐるのだと思ふと、

葉子はさすがに針で突くやうな痛みを鋭く深く良心の一隅に感ぜずにはゐられなかつた。然しそれよりもその瞬間に葉子の胸を押ししげやうに狭めたものは、底のない物凄く不安だつた。木村とは何うしても連れ添ふ心はない。その木村に……葉子は溺れた人が岸邊を望むやうに事務長を思ひ浮べた。男といふものの女に興へる力を今更に強く感じた。こゝに事務長がゐてくれたらどんなに自分の勇氣は加はつたらう。然し……何うにでもなれ。どうかしてこの大事は瀕身を消ぎぬけなければ浮べ溺はない。葉子はそれだけ謀反人の心で木村の心を愛くべき身構へ心構へを案じてゐた。

二十

船の着いたその晩、田川夫妻は見舞の言葉も別れの言葉も残さずに、大勢の出迎人に圍まれて堂々威儀を整へて上陸してしまつた。その餘の人々の中にはわざ／＼葉子の部屋を訪れて來たものが數人はあつたけれども、葉子は如何にも親しみをこめた別れの言葉を與へはしたが、後まで心に残る人としては一人もゐなかつた。その晩事務長が來て、狹つこい *l'audoir* のやうな船室で晩くまでしめ／＼と打ち語つた間に、

まるで命の取りやりでもし兼ねない談判の仕方ですのよ。その頃は母は大病で臥つてゐましたの。何とか母に仰しやつてね、母に。私忘れちゃならない言葉がありましたわ。えゝとさううゝ（木村の口調を上手に真似ながら）「私もし外のの人に心を動かすやうな事がありましたら神様の前に罪人です」ですつて……さういふ調子ですもの」

木村は少し怒氣をほめかす顔付きをして遠くから葉子を見詰めたまゝ、口もきかないでゐた。事務長はからりと笑ひながら、

「それぢや木村さん今頃は神様の前にいゝくら加減罪人になつとるでせう」

と木村を見返したので、木村も已むなく苦り切つた笑ひを浮べながら、

「己れを以て人を計る筆法ですね」

と答へはしたが、葉子の言葉は皮肉と解して、人前でたしなめるにしては稍と過過ぎるし、冗談と見て笑つてしまふにしては確かに強過ぎるので、木村の顔色は妙にぎどちなくこだはつてしまつて何時までも晴れなかつた。葉子は唇だけに軽い笑ひを浮べながら、膽汁の漲つたやうなその顔を下眼で、快げにまじりと眺めやつた。而して苦い清涼神でも飲んだやうに胸の

つかへを透かしてゐた。

やがて事務長が座を立つと、葉子は、眉をひそめて、快からぬ顔をした木村を、強ひて父舊のやうに自分の側近く坐らせた。

「いやな奴つちやないの。あんな話でもしてゐないと、外に何んにも話の種のない人ですの：あなたさぞ御迷惑でしたらうね」

と云ひながら、事務長にしたやうに上眼に媚を集めてぢつと木村を見た。然し木村の感情はひどくほつて容易に解ける様子になかつた。葉子を故意に感服しようと思はむわざとな改まり方も見えた。葉子は悪戯者らしく腹の中でくすくす笑ひながら、木村の顔を好意をこめた眼付きで眺め續けた。木村の心の奥には何かび出して見たい癖に、何んとなく腹の中が見透かされさうで、云ひ出しかねてゐる物があるらしかつたが、途切れ勝ちながら話が小半時も進んだ時、とてつもなく、

「事務長は、何んですか、夜になつてまであなたの部屋に話しに來る事があるんですか」

とさりげなく尋ねようとするらしかつたが、その語尾は我れにもなく震へてゐた。葉子は附塞にかゝつた無智な歌を惻み笑ふやうな微笑を唇に浮べながら、

「そんな事がされますものかこの小さな船の中で。考へても御覽なさいまし。さき程私が云つたのは、この頃は毎晩夜になると暇なので、あの人が食堂に集まつて來て、酒を飲みながら大きな聲で、色んな下らない話をするんです。それがよくこゝまで聞こえるんです。それに昨夜あの人が來なかつたからからかつてやつただけなんですのよ。この頃は質の悪い女までが隊を組むやうにしてどつさり船に來て、それは騒々しいんですの。……ほゝゝゝあなたの苦勞作つたらない」

木村は取りつく鳥を見失つて二の句がつけなないでゐた。それを葉子は可愛い眼を上げて、無邪氣な顔をして見やりながら笑つてゐた。而して事務長が這入つて來た時途切らした話の絲口を見事に忘れずに拾ひつけて、東京を發つ時の模様を父子細に話しつづけた。

かうした風で葛藤は葉子の手一つで勝手に紛らされたりほごされたりした。

葉子は一人の男をいつかりと自分の把持の中に置いて、それを猫が鼠でも斥がるやうに、勝手に斥ぶつて楽しむのをやめる事が出来なかつたと同時に、時々木村の顔を一一眼見たばかりで、蟲唾が走る程厭惡の情に驅り立てられて、

環視、女に對する男の覬覦、女の苟合などといふ葉子の敵を木村の一身におつかぶせて、それに女の心が企らみ出す殘虐な仕打ちのあらん限りを瀉ぎかけようとするのであつた。

「あなたは丑の刻參りの蠟人形よ」

こんな事を何うかした拍子に面と向つて木村に云つて、木村が怪訝な顔でその意味を斟みかねてゐるのを見ると、葉子は自分にも譯の分らない涙を眼に一杯溜めながらヒステリカルに笑ひ出すやうな事もあつた。

木村を拂ひ捨てる事によつて、蛇が殺を抜けて出ると同じに、自分の凡ての過去を葬つてしまふ事が出来るやうにも思ひなして見た。

葉子は又事務長に、どれ程木村が自分の思ふまゝになつてゐるかを見せつけようとする誘惑も感じてゐた。事務長の眼の前では随分亂暴な事を木村に云つたりさせたりした。時には事務長の方が見兼ねて二人の間にだめにかゝる事さへある位だつた。

ある時木村の來てゐる葉子の部屋に事務長が來合せて事があつた。葉子は枕許の椅子に木村を腰かけさせて、東京を發つた時の様子を委しく話して聞かせてゐる所だつたが、事務長を見るといきなり様子をかへて、さもく木村を

疎んじた風で、

「あなたは向うにいらしつて頂戴」

と木村を向うのソファに行くやうに眼で指圖して、事務長をその跡に坐らせた。

「さ、あなたこちらへ」

と云つて仰向けに寝たまゝ上眼をつかつて見やりながら、

「いゝお天氣のやうですことね。……あの時々、ぐいつと雷のやうな言のするのは何？ 私うるさい」

「トロですよ」

「さう……お客様がたんとおありですつてね」

「さあ少しは知つとるものがあるもんだで」

「昨夕もその美しいお客様がいらしたの？」

うゝお話にお見えにならなかつたのね」

木村を前に置きながら、この無謀とさへ見える言葉を遠慮會釋もなくぶひ出すのは、さすがの事務長もきよつとしたらしく、返事も碌々しないで木村の方に向いて、

「どうですマツキンレーは。驚いた事が持ち上りをつたもんですね」

と話題を轉じようとした。この船の航海中シヤトルに近くなつた或る日、當時の大統領マツキンレーは兇徒の短銃に斃れたので、この事件は

米國での噂の中心になつてゐるのだつた。木村はその當時の模様を委しく新聞紙や人の噂で知り合せてゐたので、乗氣になつてその話に身を入れようとするのを、葉子は腰もなく遮つて、

「何んですねあなたは貴婦人の話の腰を折つたりして。そんなごまかし位ではだまされてはゐませんよ。倉地さん、どんな美しい方です。アメリカ生粋の人つてどんななんですらうね。私、見たい。逢はして下さいましな今度來たら。ここに連れて來て下さるんですよ。他のものなんぞ何んにも見たくないけれども、是ればかりは是非見たう御座んすわ。そこに行くとなね、木村なんぞはそりやあ野暮なもんですことよ」

と云つて木村のゐる方を遙かに下眼で見やりながら、

「木村さんどう？ こつちに入らしつてから、つとは女のお友達が出來になつて。 Lady Friend といふのが」

「それが出來んで堪るか」

と事務長は木村の内行を見抜いて裏書きするやうに大きな聲で云つた。

「所が出來てゐたらお慰み、さうでせう？ 倉地さんまあかうなの。木村が私を貰ひに來た時にはね。石のやうに堅く張りこんでしまつて、

分の憶(おぼ)ひの程(ほど)を打ち明けたので、木村は自分の云はうとする告白を、他人の口からまぎ／＼と聞くやうな切(きつ)な情(なさけ)にほだされて、貰(もら)ひ泣(な)きまでしてしまつた。二人は互(たがひ)に相憐(あはれ)れむといふやうななつかしきを感じた。是(こ)れを縁(ゆかり)に木村は何處までも岡を弟とも思(おも)つて親(おや)しむ積(つ)りだ。が、日本に歸(かへ)る決心(けつしん)だけは思(おも)ひ止(とど)まざるやうに勸(すす)めて置(お)いたと云つた。岡はさすがに育(そだ)ちだけに事務長と葉子との間のいきさつを想像に任(まか)せては、いなく木村に語る事はしなかつたらしい。木村はその事に就(つ)いては何んとも云はなかつた。葉子の期待は全く外(はず)れてしまつた。役者(やくしや)下手(うへ)な爲(ため)に折角(せきかく)の芝居(しばい)が芝居にならずにしまつた事を物足(ものたり)なく思(おも)つた。然(しか)しこの事があつてから岡の事が時々葉子の頭に浮(う)ぶやうになつた。女にしてのみまほしいかの華草(くわく)な青春(せいしゆん)の姿(すがた)がどうかするといふと思(おも)ひ出(で)となつて葉子の心の隅(すみ)に潜(ひそ)むやうになつた。

船(ふね)がシャトルに着(つ)いてから五六日(にち)経(へ)つて、木村は田川(たがわ)夫妻(ふさい)にも面(まへ)會(あ)する機(き)會(あ)を造(つく)つたらしかつた。その頃から木村は突然(とつぜん)傍(わが)目(め)にもそれと氣(き)が附(つ)く程(ほど)考(かん)へ深(ふか)くなつて、ともすると葉子の言葉(ことば)すら聞(き)き落(お)して慌(わづ)てたりする事があつた。而(しか)して或(ある)時(とき)と／＼一人胸(うち)の中(なか)には納(おさ)めてゐ

られなくなつたと見えて、

「私(わたし)にやあなたが何故(なぜ)あんな人と近(き)しくするかわりませうがね」

と事務長の事を噂(うわさ)のやうに云つた。葉子は少し腹部(ふぶ)に痛(いた)みを覺(おぼ)えるのを殊(こと)更(さら)に誇(こ)張(ちやう)して脇腹(わきぶ)を左手(ひだりて)で抑(おさ)へて、眉(まゆ)をひそめながら聞(き)いてゐたが、尤(もと)もらしい幾度(いくど)も點頭(うなづ)いて、

「それは本當(ほんとう)に仰(お)しやる通りですから何も好(こう)んで近(き)づきたいとは思(おも)はないんですけれども、これまで随分(ずいぶん)世話(せわ)になつてゐますしね、それにあゝ見(み)えてゐて思(おも)ひの外(ほか)親切(せふせつ)氣(き)のある人(ひと)ですから、ボーイでも水夫(みづう)でも怖(おそ)がりながらなつてゐますわ。おまけに私(わたし)お金(かね)まで借(か)りてゐますもの。」

ときさ當惑(どうわく)したらしく云ふと、

「あなたお金(かね)は無(な)しですか」

木村は葉子の當惑(どうわく)さを自分の顔(かほ)にも現(あらわ)はしてゐた。

「それはお話(わなし)したぢやありませんか」

「困(こま)つたなあ」

木村は餘程(よほど)困(こま)り切(き)つたらしく握(にぎ)つた手(て)を鼻(はな)の下(した)にあてがつて、下(した)を向(む)いたまゝ暫(しば)らく思案(しあん)に暮(く)れてゐたが、

「いくら程(ほど)借(か)りになつてゐるんです」

「さあ診察料(しんさつりょう)や滋養品(じやうひん)で百圓(ひゃくえん)近くにもなつてゐますか知らん」

「あなたは金(かね)は全く無(な)しですね」

木村は更に繰(くり)り返(かへ)してぶつて溜息(ためいき)をついた。

葉子は物慣(ものな)れぬ弟(あに)を教(おし)へたはるやうに、

「それに萬(まん)一(いち)私の病氣(びやうき)がよくならないで、一(ひと)先(まづ)日本(にっぽん)へでも歸(かへ)るやうになれば、なほ／＼歸(かへ)るの船(ふね)の中(なか)では世話(せわ)にならなければならぬでせう。……でも大丈夫(だいじやうぶ)そんな事(こと)はないとは思(おも)ひますけれども、先(まづ)き／＼までの考(かん)へをつけておくのが旅(たび)にあれば一番(いちばん)大事(だいじ)ですもの」

木村はなほも握(にぎ)つた手(て)を鼻(はな)の下(した)に置(お)いたなり、何んにも云(い)はず、身動(みどう)きもせず考(かん)へ込んでゐた。

葉子は術(じゆつ)なさうに木村のその顔(かほ)を面白(おもしろ)く思(おも)ひながらまじ／＼と見(み)やつてゐた。

木村はふと顔(かほ)を上げてしげ／＼と葉子を見(み)た。何かそこに字(じ)でも書(か)いてありはしないかとそれを讀(よ)むやうに。而(しか)して黙(だま)つたまゝ深々(ふか／＼)と歎(なげ)息(いき)した。

「葉子(えいこ)さん。私(わたし)は何(なん)から何(なん)まであなたを信(しん)じてゐるのがいゝ事(こと)なのでせうか。あなたの身の爲(ため)めばかり思(おも)つても云(い)ふ方がいゝかとも思(おも)ふんです」

我れながら何うしていか分らない事もあつた。そんな時には唯一つ、腹痛を口實にして、一人になつて、腹立ち紛れに有り合せたものを取つて床の上に抛つたりした。もう何もかも云つてしまはう。弄ぶにも足らない木村を近づけておくには當らない事だ。何もかも明らかにして気分だけでもさつぱりしたいとさう思ふ事もあつた。然し同時に葉子は戦術家の冷靜さをもつて、實際問題を勘定に入れる事も忘れはしなかつた。事務長をいつかり自分の手の中に握るまでは、早計に木村を逃がしてはならない。「宿屋きめずに草鞋を脱ぐ」……母がこんな事を葉子の小さい時に教へてくれたのを思ひ出したりして、葉子は一人で苦笑ひもした。

さうだ、まだ木村を逃がしてはならぬ。葉子は心の中に書き記してでも置くやうに、上眼を使ひながらこんな事を思つた。

また或る時葉子の手計に米國の右手の貼られた手紙が届いた事があつた。葉子は船へなぞ宛てて手紙をよこす人はない筈だがと思つて開いて見ようとしたが、又例の惡戯な心が動いて、わざと木村に開封させた。その内容がどんなものであるかの想像もつかないので、それを木村に讀ませるのは、武器を相手に渡して置いて、

自分は素手で格闘するやうなものだつた。葉子はそこに興味を持つた。而してどんな不意な難題が持ち上がるだらうかと、心をときめかせながら結果を待つた。その手紙は葉子に簡單な挨拶を残したまゝ、上陸した岡から來たものだつた。如何にも人柄に不似合ひな下手な字體で、葉子がひよつとすると上陸を見合せてそのまゝ歸るといふ事を聞いたが、若しさうなつたら自分も斷然歸朝する。氣違ひじみた仕業とお笑ひになるかも知れないが、自分には何う考へて見てもそれより外に道はない。葉子に離れて路傍の人の間に伍したらそれこそ狂氣になるばかりだらう。今まで打ち明けなかつたが、自分は日本でも屈指な豪商の身内に一人子として生れながら、體が弱いのと母が繼母である爲めに、父の慈悲から洋行する事になつたが、自分には故國が慕はれるばかりでなく、葉子のやうに親しみを覺えさしてくれた人はないので、葉子なしには一刻も外國の土に足を止めてゐる事は出来ぬ。兄弟のない自分には葉子が前世からの姉とより思はれぬ。自分を橋れんで弟と思つてくれ。せめては葉子の聲の聞こえる所顔の見える所にゐるのを許してくれ。自分はそれだけの憐れみを得たいばかりに、家族や後見人の譏

りも何んとも思はずに歸國するのだ。事務長にもそれを許してくれるやうに頼んで貰ひたい。といふ事が、少し甘い、然し眞率な熱情をこめた文體で長々と書いてあつたのだつた。

葉子は木村が問ふまゝに包まず岡との關係を語して聞かせた。木村は考へ深くそれを聞いてゐたが、そんな人ならば非會つて語をして見たいと云ひ出した。自分より一段若いと見ると、かくばかり寛大になる木村を見て葉子は不快に思つた。よし、それでは岡を通して倉地との關係を木村に知らせてやらう。而して木村が嫉妬と憤怒とで眞黒になつて歸つて來た時、それを思ふまゝ、操つて又元の鞘に納めて見せよう。さう思つて葉子は木村の云ふまゝに任せて置いた。

次ぎの朝、木村は深い感激の色を湛へて船に來た。而して岡と會見した時の様子を委しく物語つた。岡はオリエンタル・ホテルの立派な一室にたつた一人であたが、そのホテルには田川夫妻も同宿なので、日本人の出入りがうるさいと云つて困つてゐた。木村の訪問したといふのを聞いて、ひどくなつかしさうな様子で出迎へて、兄でも敬ふやうにもてなして、稍と落ちついてから隠し立てなく眞率に葉子に對する白

人の憐れを誘ふ程だつた。背水の陣と自分でも云つてゐるやうに、亡父の財産をありつた借金に代へて、手つ拂ひに日本の雜貨を買ひ入れて、こちらから通知書一つ出せば、何時でも日本から送つてよこすばかりにしてあるものの、手許には些かの錢も残つてはゐなかつた。葉子が来たならばと金の上にも心の土にもあてにしてゐたのが見事に外れてしまつて、葉子が歸るにつけては、無けなしの所から又々何んとかしなければならぬといふに立つた木村は、二三日の中に、練習も一時の間で、孤獨と冬とに圍まれなければならなかつたのだ。

葉子は木村が結局事務長にすがり寄つて来る外に道のない事を察してゐた。

木村は果して事務長を葉子の部屋に呼び寄せでもらつた。事務長はすぐやつて来たが、服なども仕事着のまゝで何か餘程せはしうに見えた。木村はまあと云つて倉地に椅子を與へて、今日は毎時のすげない態度に似ず、折り入つて色々葉子の身の上を頼んだ。事務長は始めの忙はしさうだつた様子に引きかへて、どつしりと腰を据えて正面から例の大きく木村を見やりながら、眞身に耳を傾けた。木村の様子の方が却つてそれはしく眺めやられた。

木村は大きな紙入れを取り出して、五十弗の紙を葉子に手渡しした。

「何んかも御承知だから倉地さんの前で云ふ方が世話なしだと思ひますが、何んと云つてもこれだけしか出来ないんです。こ、これです」

と云つて淋しく笑ひながら、兩手を出して擴げて見せてから、チョッキをたゝいた。胸にかゝつてゐた重さうな金鎖も、四つまで嵌められてゐた指輪の三つまでも失くなつてゐて、たつた一つ婚約の指輪だけが貧乏臭く左の指にはまつてゐるばかりだつた。葉子はさすがに「まあ」と云つた。

「葉子さん、私はどうにでもします。男一匹なりや何處にころがり込んだからつて、——そんな経験も面白い位のもんですが、これんばかりぢやあなたが足りなからうと思ふと、面目もないんです。倉地さん、あなたにはこれまででさへいゝ加減世話をしていたゞいて何んとも済みませんが私共二人は打ち明け申した所、かうぶふていたら、横濱へさへおとどけ下さればその先きは又どうにでもしますから、若し旅費にでも不足しますやうでしたら、御迷惑序でに何んとかしてやつて頂く事は出来ないでせうか」

事務長は腕組みをしたまゝ、まじ／＼と木村の顔を見やりながら聞いてゐたが、

「あなたはちつとも持つとらんのですか」

と聞いた。木村はわざと快活に強ひて聲高く笑ひながら、

「綺麗なんんです」

と又チョッキをたゝくと、

「そりやいかん。何船貨なんぞ入りますものか。東京で本店にお拂ひになればいゝんぢや

し、横濱の支店長も萬事心得とられるんだで、御心配入りませんわ。そりやあなたお持ちになるがいゝ。外國にゐて文なしでは心細いもんですよ」

と例の鹽漬でやゝ不機嫌らしく云つた。その言葉には不思議に重々しい力が罩つてゐて、木村は暫らく彼是れと押問答をしてゐたが、結局事務長の親切を無にする事の氣の毒さに、直な心からなほ色々旅中の世話に頼みながら、又大きな紙入れを取り出して切手をたゝみ込んでしまつた。

「よし／＼それで何も云ふ事はなし。早月さんは俺しが引き受けた」と不敵な微笑を浮べながら、事務長は始めて葉子の方を見返つた。

「では仰しやつて下さいましな何んでも」
葉子の口は少し親しみを籠めて「元談らしく答

へてゐたが、その眼からは木村を黙らせるだけの光が射られてゐた。輾はずみな事を荷くも云つて見るがいゝ、頭を下げさせないでは置かないから。さうその眼はたしかに云つてゐた。

木村は思はず自分の眼をたじろがして黙つてしまつた。葉子は片意地にも眼で續けさまに木村の顔を輾つた。木村はその管の一つくを感じずるやうにどぎまぎした。

「さ、仰しやつて下さいまし……さ」

葉子はその言葉には何處までも好意と信頼とを罩めて見せた。木村は矢張り躊躇してゐた。葉子はいきなり手を延ばして木村を襟裏に引きよせた。而して半分起き上つてその耳に近く口を寄せながら、

「あなた見たいに水臭い物の仰しやり方をなさる方もないもんね。何んとも思つていらつしやる事を仰しやつて下さればいゝぢやありませんか。……あ、痛い……いゝえさして痛くもないの。何を思つていらつしやるんだか仰しやつて下さいまし、ね、さ。何んでせうねえ。伺ひたい事ね。そんな他人行儀は ああ、痛い、おゝ痛い……一寸此處のところを押へて下

さいまし……さし込んで来たやうで……あ、あ、

と云ひながら、眼をつぶつて、床の上に寝倒れと、木村の手を持ち添へて自分の臍腹を押へさして、つらさうに齒を噛ひしはつてシートに顔を埋めた。肩でつく息氣がかすかに雪白のシートを震はした。

木村はあたふたしながら、今までの言葉などはそつちのけにして允地にかゝつた。

二十一

鴛島丸はシャトルに着いてから十二日目に纜を解いて歸航する筈になつてゐた。その出發があと三日になつた十月十五日に木村は船醫の興録から、葉子は何うしても一先づ歸國させる方が安全だといふ最後の宣告を下されてしまつた。木村はその時にはもう大體覺悟を決めてゐた。歸らうと思つてゐる葉子の下心を臆げながら見て取つて、それを離へす事は出来ないと諦めてゐた。運命に従順な羊のやうに、然し執念く將來の希望を命にして、現在の不満に服従しようとしてゐた。

緯度の高いシャトルに冬の襲ひかゝつて来る様はすさまじいものだつた。海岸線に沿うて遙

か遠くまで連續して見渡されるロッキーの山々

はもうたつぷりと雪がかゝつて 穏やかな夕空に現はれ慣れた雲の峰も、古綿のやうに形の崩れた色の寒い雲に變つて、人をおびやかす白いものが、今にも地を拂つて降りおろして来るかと思はれた。海沿ひに生え揃つた亜米利加松の翠ばかりが毒々しい程黒ずんで眼に立つばかりで、潤葉樹の類は何時の間にか、葉を拂ひ落した枝先を針のやうに鋭く空に向けてゐた。シャトルの町並みがあると思はれる邊からは――

船の繋がれてゐる處から市街は見えなかつた――急に煤煙が立ち増さつて、忙はしく冬支度

を整へながら、やがて北半環を包んで攻め寄せ来る噴白な寒氣に對して覺えない抵抗を用意するやうに見えた。ポケットに兩手をこすり入れて、頭を縮め氣味に 波止場の石燈を歩き廻る人々の姿にも、不安と焦燥との影はれる忙

しい自然の移り變りの中に、鴛島丸は備たいしい發航の準備をし始めた。絞船の齒車のきしむ音が船首と船尾とからやかましく浮え返つて聞こえ始めた。

木村はその目も朝から葉子を訪れて来た。殊に青白く見える顔付きは、何かわく／＼と胸の中に煮え返る想ひをまぎ／＼と裏切つて、見る

を勝手氣儘にこづき廻す威力を備へた自分は又誰れに何者に勝手にされるのだらう。何處かで大きな手が情けもなく容赦もなく冷然と自分の運命を操つてゐる。木村の希望が果敢なく断ち切れる前、自分の希望が遂早く断たれてしまはないとどうして保障する事が出来よう。木村は善人だ、自分は悪人だ。葉子はいつの間にか純な感情に捕へられてゐた。

「木村さん。あなたは屹度、仕舞には屹度祝福をお受けになります……どんな事があつても失望なさつちやいやですよ。あなたのやうな善い方が不幸にばかりお遇ひになる譯がありませんわ。……私は生れるとから呪はれた女なんですもの。神、本當は神様を信ずるより……信ずるより憎む方が似合つてゐるんです……ま、聞いて。でも私卑怯はいやだから信じます……神様は私見たいなものを何うなさるか、いつかり眼を明いて最後まで見てゐます」と云つてゐる中に誰れにもなく口惜しさが胸一杯にこみ上げて来るのだつた。

「あなたはそんな信仰はないと仰しやるでせうけれども……でも私にはこれが信仰です。立派な信仰ですもの」と云つてきつぱり思ひ切つたやうに、火のやう

に熱く眼に溜つたまゝで流れずにゐる涙を、ハンケチでぎゅつと押し拭ひながら、黙然と頭を垂れた木村に、

「もうやめませうこんなお話。こんな事を云つてると、ぶへば云ふ程先きが暗くなるばかりです。ほんとに思ひ切つて不仕合せな人はこんな事をつべこべと口になんぞ出しはしませんわ。ね、いや、あなたは自分の方から滅入つてしまつて、私の云つた事位で何んですねえ、男の癖に」

木村は返事もせずに眞青になつて俯向いてゐた。

そこに「御免なさい」と云ふかと思ふと、いきなり戸を開けて這入つて来たものがあつた。木村も葉子も不意を打たれて氣先きをくじかれながら、見ると何日ぞや銅網で足を怪我した時、葉子の世話になつた老水夫だつた。彼れはとうとう跛脚になつてゐた。而して水夫のやうな仕事には逆も役に立たないから、幸ひオークランドに小農地を持つて兎や角暮しを立ててゐる甥を尋ねて厄介になる事になつたので、禮かたがた暇乞ひに來たといふのだつた。葉子は紅くなつた眼を少し恥かしげにまたゝかせながら、色々と慰めた。

「何ねかう老いぼれちや、こんな稼業をやつてるがでんでうそなれど、事務長さんとボンズン(永夫長)とが可哀さうだと云つて、使つてくれるで、いゝ氣になつたが罰あたつたんだね」

と云つて臆病に笑つた。葉子がこの老人を憐れみいたはる様は傍目にもいぢらしかつた。日本には傳言を頼むやうな近親さへない身だといふやうな事を聞く度に、葉子は泣き出しさうな顔をして今點々してゐたが、仕舞には木村の止めるのも聞かず寢床から起き上つて、木村の持つて來た果物をありつたけ籃につめて、

「陸に上ればいくらもあるんだらうけれども、これを持つてお出で。而してその中に果物でなく這入つてゐるものがあつたら、それもお前さんに上げたんだからね、人に取られたりしちやいけませんよ」

と云つてそれを渡してやつた。

老人が來てから葉子は夜が明けたやうに始めて晴れやかな普段の氣分になつた。而して例の悪戯らしいにこ／＼した愛嬌を顔一面に湛へて、

「何んといふ氣さくなんでせう。私あんなお爺さんのお内儀さんになつて見たい……だから

葉子は二人を眼の前に置いて、いつものやうに見比べながら二人の會話を聞いてゐた。當り前なら、葉子は大抵の場合、弱いものの味方をして見るのが常だつた。如何な時でも、強いものがその強味を振りかざして弱い者を壓迫するのを見ると、葉子がかつとなつて、理が非でも弱いものを勝たしてやりたがつた。今の場合木村は單に弱者であるばかりでなく、その境遇も惨めな程便りない苦しいものである事は存分に知り抜いてゐながら、木村に對しての同情は不思議にも湧いて來なかつた。齡の若さ、姿のしなやかさ、境遇のゆたかさ、才能の華やかさといふやうなものを便りする男達の蠱惑の力は、事務長の前では吹けば飛ぶ塵の如く對照された。この男の前には、弱いものの哀れよりも醜さがさらけ出された。

何んといふ不幸な青年だらう。若い時に父親に死に別れてから、萬事思ひのまゝだつた生活からいきなり不自由な浮世のどん底に抛り出されながら、めげもせずにつつと働いて、後指をさへないだけの世渡りをして、誰れからも働きのある行末頼母しい人と思はれながら、それでも心の中の淋しさを打ち消す爲めに思ひ入つた戀人は仇し男に反いてしまつてゐる。そ

れを又さうとも知らずに、その男の情けにすがつて、消えるに決つた約束をのがすまいとしてゐる。……葉子は強ひて自分を説服するやうにかう考へて見たが、少しも身にしみた感じは起つて來ないで、動もすると笑ひ出したいやうな氣にすならつてゐた。

「よし／＼それで何も云ふ事はなし。早月さんは俺しが引き受けた」

といふ聲と不敵な微笑とがどやすやうに葉子の心の戸を打つた時、葉子と思はず微笑を浮べてそれに應じようとした。が、その瞬間、眼ざとく木村の見てゐるのに氣がついて、顔には笑ひの影は微塵も現はさなかつた。

「俺しへの用はそれだけでせう。ぢや忙しいで行きますよ」

とぶつきらばうにぶつて事務長が部屋を出て行つてしまふと、残つた二人は妙にでれて、暫らくは互に顔を見合はすのも憚つて黙つたまゝでゐた。

事務長が行つてしまふと葉子は急に力が落ちてちたやうに思つた。今までの事が丸で芝居でも見て楽しんでゐたやうだつた。木村のやる瀟ない心の中が急に葉子に逼つて來た。葉子の眼には木村を憐れむとも自分を憐れむとも知れない

涙がいつの間にか宿つてゐた。

木村は痛ましげに黙つたまゝで暫らく葉子を見やつてゐたが、

「葉子さん今になつてさう泣いて貰つちや私が堪りませんよ。機嫌を直して下さい。又いゝ日も廻つて來るでせうから。神を信するもの——」

さう云ふ信仰が今あなたにあるか何うか知らないが——お母さんがあゝいふ堅い信者でありなかつたし、あなたも仙臺時分には確かに信仰を持つてゐられたと思ひますが、こんな場合には尙更ら同じ神様から來る信仰と希望とを持つて進んで行きたいものだと思ひますよ。何事も神様は知つてゐられる。……そこに私は癒まな希望をつないで行きます」

決心した所があるらしく力強い言葉でかう云つた。何の希望——葉子は木村の事については、木村の所謂神様以上に木村の未來を知りぬいてゐるのだ。木村の希望といふのはやがて失望に而して絶望に終るだけのものだ。何の信仰——何の希望——木村は葉子が据ゑた道を——行きどまりの袋小路を——天使の昇り降りする雲の梯のやうに思つてゐる。あゝ何の信仰——葉子はふと同じ眼を自分に向けて見た。木村

性分を知り抜いてゐた。で、云はず語らずのうちに、その金は品物にして持つて歸らすより外に道のない事を観念したらしかつた。

その晩事務長が仕事を終へてから葉子の部屋へ來ると、葉子は何か氣に障へた風をして碌々もてなしもしなかつた。

「とうとう」形がついた。十九日の朝の十時だよ出航は」

と云ふ事務長の快活な言葉に返事もしなかつた。男は怪訝な顔付きで見やつてゐる。

「惡黨」

と暫らくしてから、葉子は一言これだけ云つて事務長を睨めた。

「何んだ？」

と尻上りに云つて事務長は笑つてゐた。

「あなた見たいな残酷な人間は私始めて見た。

木村を御覽なさい可哀さうに。あんなに手ひどくしなかつたつて：恐ろしい人つてあなたの事ね」

「何？」

と又事務長は尻上りに大きな聲で云つて寢床に近づいて來た。

「知りません」

と葉子はなほ怒つて見せようとしたが、いかにも刻みの荒い、單純な、他意のない男の顔を見ると、體の何處かが搖られる氣がして來て、わざと引き締めて見せた唇の邊から思はずも笑ひの影が滲み出た。

それを見ると事務長は苦い顔と笑つた顔とを一緒にして、

「何だい下らん」

と云つて、電燈の近所に椅子をよせて、大きな長い脚を投げ出して、夕刊新聞を大きく開いて眼を通し始めた。

木村とは引きかへて事務長がこの部屋に來ると、部屋が小さく見える程だつた。上向けた靴の大きさは葉子は吹き出したい位だつた。葉子は眼で撫でたりさすつたりするやうにして、この大きな子供供いたやうな暴君の頭から足の先きまでを見やつてゐた。ごわつくと時々新聞を折り返す音だけが聞こえて、積荷が荒かた片付いた船室の夜は靜かに更けて行つた。

葉子はさうしたまゝでふと木村を思ひやつた。

木村は銀行に寄つて切手を現金に換へて、店の締らない中にくらか胃物をしてそれを小脇に抱へながら、夕食もしたゝめずに、ジャクソ

ン街にあるといふ日本人の旅店に歸り着く頃には、町々に燈がともつて、寒い露と煙との間を労働者達が被れた五體を引きずりながら歩いて行くのに澤山出遇つてゐるだらう。小さなストーヴに煙の多い石炭がぶし／＼燃えて、けばけらしい電燈の光だけが、鞭つやうにがらんとした部屋の薄穢さを煌々と照してゐるだらう。その光の下で、ぐら／＼する椅子に腰かけて、ストーヴの火を見つめながら木村が考へてゐる。暫らく考へてから淋しうに見るともなく部屋の中を見廻して、又ストーヴの火に眺め入るだらう。その中にある涙の出易い眼からは涙がほろほろと留度もなく流れ出るに違ひない。

事務長が音をたてて新聞を折り返した。

木村は膝頭に手を置いて、その手の中に顔を埋めて泣いてゐる。祈つてゐる。葉子は倉地から眼を放して、上眼を伺ひながら木村の祈りの聲に耳を傾けようとした。途切れ／＼な切ない祈りの聲が深にしめつて確かに：確かに聞こえて來る。葉子は眉を寄せて注意力を集中しながら、木村が本當にどう葉子を考えてゐるかはつきり見定めようとしたが、どうしても思ひ浮べて見る事が出来なかつた。

事務長がまた新聞を折り返す音を立てた。

ね、いゝものを造つちまつた」
きよとりとしてまじく木村のむつとりとした顔を見やる様子は大きな子供とより思へなかつた。

「あなたから頂いたエンゲージ・リングね、あれをやりましてよ。だつて何んにも無いんですもの」

何んとも云へない媚をつゝむおとがひが二重になつて、綺麗な齒並みが笑ひの連のやうに唇の江に寄せたり返したりした。

木村は、葉子といふ女は何うしてかうむら氣で上すべりがしてしまふのだらう、情けないと云ふやうな表情を顔一面に漲らして、何かぶべき言葉を胸の中で整へてゐるやうだつたが、急に思ひ捨てたといふ風で、黙つたまゝでほつと深い溜息をついた。

それを見ると今まで珍らしく抑へつけられてゐた反抗心が又もや旋風のやうに葉子の心に起つた。「ねちくさつたらない」と胸の中をいらささせながら、序での事に少しいぢめてやらうといふ企みが頭を擡げた。然し顔は何處までも前のまゝの無邪氣さで、

「木村さんお土産を買つて頂戴な 愛や貞もですけれども、親類達や古藤さんなんぞにも何

かしないぢや顔が向けられませんか。今頃は田川の奥さんの手紙が五十川の小船さんの所に着いて、東京では屹度大騒ぎをしてゐるに違ひありませんわ。發つ時には世話を焼かせ、留守は留守で心配させ、ぽかんとしてお土産一つ持たずに歸つて来るなんて、木村も一體木村ぢやないかと云はれるのが、私死ぬよりつらいから、少しは驚く程のものを買つて頂戴 先程のお金で相當のものが買れるでせう」

木村は駄々兒をなだめるやうにわざとおとなしく、

「それは宜しい、買へとなら買ひますが、私はあなたがあれを纏つたまゝ持つて歸つたらと思つてゐるんです。大抵の人は横濱に着いてから土産を買ふんですよ。その方が實際恰好ですからね。持ち合せもなしに東京に着きなされる事を思へば、土産なんかどうでもいゝと思ふんですがね」

「東京に着きさへすればお金はどうにでもしませけれども、お土産は……あなた横濱の仕入れものはすぐ知れますわ。御覽なさいあれを一つづつ棚の上に在る帽子入れのボール箱に眼をやつた。

「古藤さんに連れて行つて頂いてあれを買つた

時は、随分吟味した積りでしたけれども、船に來てから見てゐる中にすぐ厭きてしまひましたの。それに田川の奥さんの洋服姿を見たら、我慢にも日本で買つたものを被つたり着たりする氣にはなれませんわ」

さう云つてる中に木村は棚から箱をおろして中を覗いてゐたが、

「成程型はちつと古いやうですね。だが品はこれならこゝちでも上の部ですぜ」

「だからいやですわ。流行おくれとなると値段の張つたものほど見つともないんですもの」
暫らくしてから、

「でもあのお金はあなた御入用ですわね」
木村は慌てて辯解的に、

「いゝえあれはどの道あなたに上げる積りでゐたんですから……」
と云ふのを葉子は耳にも入れない風で、

「ほんとに馬鹿ね 私は……思ひやりも何んにもない事を申上げてしまつてどうしませうねえ……もう私どんな事があつてもそのお金だけは頂きません事よ。かう云つたら誰れが何ん

と云つたつて駄目よ」
ときつぱり云ひ切つてしまつた。木村は固より一度云ひ出した後へは引かない葉子の口頭の

に思つて葉子は快い眠りから眼を覺ました。自分の側には、倉地が頭からすつぱりと蒲團を被つて、鼾も立てずに熟睡してゐた。料理屋を兼ねた旅館のに似合はしい華やかな縮緬の夜具の上にはもう大分高くなつたらしい秋の日の光が降り越しに射してゐた。葉子は往復一箇月の餘を船に乗り續けてゐたので、船脚の揺めきの名残りが残つてゐて、體がふらり／＼と搖れるやうな感じを失つてはゐなかつたが、廣い煙の間に大きな軟かい夜具をのべて、五體を思ふまゝ延ばして、一晩ゆつ／＼と眠り通したその心地よさは格別だつた。仰向けになつて、寒からぬ程度に暖まつた空氣の中に兩手を二の腕までむき出しにして、軟かい髪の手で快い觸覺を感じながら、何を思ふともなく天井の木目を見やつてゐるのも、珍らしい事のやうに快かつた。

霜と小半時もさうしたまゝであると、帳場でぼん／＼時計が九時を打つた。三階にゐるのだけれどもその音はほがらかに乾いた空氣を傳つて葉子の部屋まで響いて來た。と、倉地がいきなり夜具をはね除けて床の上に上體を立てて眼をこすつた。

「九時だな今打つたのは」と陸で聞くのをかしい程大きな鹽がれ聲で云つた。どれ程熟睡してゐても、時間には鋭敏な船員らしい倉地の様子が何んの事はなく葉子を微笑ました。

倉地が立つと、葉子も床を出た。而してその邊を片付けたり、煙草を吸つたりしてゐる間に（葉子は船の中で煙草を吸ふ事を覺えてしまつたのだつた）倉地は手早く顔を洗つて部屋に歸つて來た。而して制服に着かへゐた。葉子はいそ／＼とそれを手傳つた。倉地特有な西洋風に甘つたるいやうな一種の匂ひがその體にも服にもまつはつてゐた。それが不思議に何時でも葉子の心をときめかした。

「もう飯を喰つるとる暇はない。又暫らく忙がいので木つ葉微塵だ。今夜は晩いかも知れんよ。俺れ達には天長節も何もあつたもんぢやない一さうぶはれて見ると葉子は今日が天長節なのを思ひ出した。葉子の心はなほ／＼寛濶になつた。

倉地が部屋を出ると葉子は縁側に出て手欄から下を覗いて見た。兩側に櫻並木のすつとならんだ紅葉坂は急勾配をなして海岸の岸に傾いてゐる、そこを倉地の紺羅紗の姿が勢よく歩いて行くのが見えた。半分がた散り盡した櫻の葉は眞紅に紅葉して、軒並みに掲げられた日章

旗が、風のない空氣の中に鮮やかに列んでゐた。その間に英國の國旗が一本交つて眺められるのも開港場らしい風情を添へてゐた。

遠く海の方を見るに税關の棧橋に繋はれた四般程の汽船の中に、葉子が乗つて歸つた納島丸もまじつてゐた。眞青に澄み渡つた海に對して今日の祭日を祝賀する爲めに櫓から櫓にかけわたされた小旗が玩具のやうに眺められた。

葉子は長い航海の始終を一場の夢のやうに思ひやつた。その長旅の間に、自分の一身に起つた大きな變化も自分の事のやうではなかつた。葉子は何がなしに希望に燃えた活々とした心で手欄を離れた。部屋には小ざつぱりと身支度をした女中が來て寢床を擧げてゐた。一間半の大床の間に飾られた大花清けには、菊の花が一抱へ分も活けられてゐて、空氣が動く度毎に仙人じみた香を漂はした。その香を嗅ぐと、ともするとまだ外國にゐるのではないかと思はれるやうな旅心が一気にくだけて、自分はもう確かに日本の上の土にゐるのだと云ふ事がいつかり思はされた。

「い／＼お目醒め。今夜あたりは忙がしんでせう」と葉子は朝飯の膳に向ひながら女中に云つて見た。

葉子ははつとして淀みに支へられた木の葉が又流れ始めたやうにすら／＼と木村の所作を想像した。それが段々岡の上に移つて行つた。哀れな岡！ 岡もまだ寂ないでゐるだらう。木村

なにか岡なにかいつまでも／＼寂ないで火の消えかゝつたストーヴの前に蹲つてゐるのは、

更けるまゝにしみ込む寒さはそつと床を傳はつて足の先きから這ひ上つて来る。男はそれにも

気が付かぬ風で椅子の上になだれてゐる。凡ての人は眠つてゐる時に、木村の葉子も事務長

に抱かれて安々と眠つてゐる時に……

こゝまで想像して來ると小説に讀み耽つてゐた人が、ほつと溜息をしてばたと書物をふせるやうに、葉子も何とはなく深い溜息をしては

つきりと事務長を見た。葉子の心は小説を讀んだ時の通り無關心の「こゝろ」をかすかに感じ

てゐるばかりだつた。

「おやすみにならない？」

と葉子は鈴のやうに涼しい小さい聲で倉地に云つて見た。大きな聲をするのも憚られる程あたりはしんと静まつてゐた。

「う」

と返事はしたが事務長は煙草をくゆらしたまま新聞を見續けてゐた。葉子も黙つてしまつ

た。やゝ暫らくしてから事務長もほつと溜息をして、

「どれ寐るかな」と云ひながら椅子から立つて寢床に這入つた。

葉子は事務長の廣い胸に集喰ふやうに丸まつて少し震へてゐた。

やがて子供のやうにすや／＼と安らかな小さな聲が葉子の脛から漏れて來た。

倉地は暗闇の中で長い間まんじりともせず大きな眼を開いてゐたが、やがて、

「おい惡黨」と小さな聲で呼びかけて見た。

然し葉子の規則正しく樂しげな寢息は露ほども亂れなかつた。

眞夜中に、恐ろしい夢を葉子は見た。よくは覺えてゐないが

葉子は殺してはいけないいけなと思ひながら人殺しをしたのだつた。一方の眼は尋常に眉の下にあるが一方のは不思議

にも眉の上にある、その男の額から黒血がどくどくと流れた。男は死んでも物凄くにやりにやりと笑ひ續けてゐた。その笑ひ聲が木村々と聞こえた。始めの中は聲が小さかつたが段々大きくなつて數も殖えて來た。その「木村々々」と

いふ數限りもない聲がうざ／＼と葉子を取り捲き始めた。葉子は一心に手を振つてそこから遁れようとしたが手も足も動かなかつた。

木村……

木村……

木村……

木村……

木村……

木村……

木村……

木村……

木村……

木村……

木村……

木村……

木村……

木村……

二十二

何處から菊の香がかすかに通つて來たやう

の様子が見えた。若し葉子の銀のやうに澄んだ涼しい聲が、古藤を選んで哀訴するらしく響かなかつたら、古藤は葉子の云ふ事を聞いてはゐなかつたかも知れないと思はれる程だつた。

朝から何事も忘れたやうに、快かつた葉子の氣持はこの電話一つの爲めに妙にこぢれてしまつた。東京に歸れば今度こそは中々容易ならざる反抗が待ちうけてゐるとは十二分に覺悟して、その備へをしておいた積りでゐるたけれども、古藤の口うらから考へて見ると、面とぶつた實際は空想してゐたよりも重大であるのと思はずにはゐられなかつた。葉子は電話室を出ると今朝始めて顔を合はした内儀に帳場格子の中から挨拶されて、部屋にも何ひに來ないで恒々しく言葉をかけるその仕打ちにまで不快を感じながら、勿々三階に引き上げた。

や箒の音を立てた。而して唯一人この旅館では居残つてゐるらしい葉子の部屋を掃除せず、いきなり縁側に雑巾をかけたたりした。それが出て行けがしの仕打ちのやうに葉子には思へば思はれた。

「何處か掃除の済んだ部屋があるんでせう。暫らくそこを貸して下さいな。而してこゝも綺麗にして頂戴。部屋の掃除もしないで雑巾がけなぞしたつて何んにもなりはしないわ」と少し剣を持たせて云つてやると、今朝來たのとは違ふ、横濱生れらしい、惡づれのした中年の女中は、始めて縁側から立ち上つて小面ほさうに葉子を疊廊下一つを隔てた隣りの部屋に案内した。

今朝まで客がゐたらしく、掃除は済んでゐたけれども、火鉢だの、炭取りだの、古い新聞だの、部屋の隅にはまだ置いたまゝになつてゐた。開け放した障子から乾いた暖かい光線が疊の表三分ほどまで射しこんでゐる、そこに膝を横崩しに坐りながら、葉子は眼を細めて眩しい光線を避けつゝ、自分の部屋を片付けてゐる女中の氣配に用心の氣を配つた。どんな所にあつても大事な金目なものをくだらないものと一緒に抛り出しておくのが葉子の癖だつた。葉

子はそこにいかにも伊達で寛瀾な心を見せてゐるやうだつたが、同時に下らない女中づれが出来心でも起しはしないかと思ふと、細心に監視するの忘れはしなかつた。かうして隣りの部屋に氣を配つてゐながらも、葉子は部屋の隅に几帳面に折りたゝんである新聞を見ると、日本に歸つてからまだ新聞と云ふものに眼を通さなかつたのを思ひ出して、手に取り上げて見た。

テレビン油のやうな香がぱん／＼するのでそれが今日の新聞である事がすぐ察せられた。果して第一面には「聖壽萬歳」と肉太に書かれた見出しの下に貴顯の肖像が掲げられてあつた。葉子は一箇月の餘も遠退いてゐた新聞紙を物珍らしいものに思つてざつと眼をとほし始めた。

一面にはその年の六月に伊藤内閣と交迭して出來た桂内閣に對して色々な註文を提出した論文が掲げられて、海外通信には支那領土内に於ける日露の經濟的關係を説いたチリコフ伯の演説の梗概などが見えてゐた。二面には富口といふ文學博士が「最近日本に於ける所謂婦人の覺醒」と云ふ續き物の論文を載せてゐた。福田と云ふ女の社會主義者の事や、歌人として知られた與謝野晶子女史の事などの名が現はれてゐるのを葉子は注意した。然し今の葉

「はい今夜は御宴會が二つばかり御座いましてね。でも濱の方でも外務省の夜會にいらつしやる方も御座いますから、たとひ込み合ひは致しますまいけれども」

さう應へながら女中は、昨晚遅く着いて來た、一寸得體の知れないこの美しい婦人の素性を探らうとするやうに注意深い眼をやつた。葉子は葉子で、濱と云ふ言葉などから、横濱と云ふ土地を形にして見るやうな氣持がした。

短くなつてはゐても、何んにもする事なしに一日を暮らすかと思へば、その秋の一日の長さが葉子にはひどく氣になり出した。明後日東京に歸るまでの間に、買物でも見て歩きたいのだけれども、土産物は木村が例の銀行切手を崩して有り餘る程買つて持たしてよこしたし、手許には衰れた程より金は残つてゐなかつた。一寸でもちつとしてゐられない葉子は、日本で着ようとは思はなかつたので、西洋向きに註文した華手過ぎるやうな緋入れに手を通しなから、とつ追ひつ考へた。

「さうだ古藤に電話でもかけて見てやらう」

葉子はこれはいゝ思案だと思つた。東京の方で親類達がどんな心持で自分を迎へようとしてゐるか、古藤のやうな男に今度の事がどう響

いてゐるだらうか、これは單に慰みばかりではない、知つておかなければならぬ大事な事だつた。さう葉子は思つた。而して女中を呼んで東京に電話を繋ぐやうに頼んだ。

祭日であつた故か電話は思ひの外早く繋がつた。葉子は少し惡戯らしい微笑を笑窪のいるその美しい顔に軽く浮べながら、階段を足早に降りて行つた。今頃になつて漸く床を離れたらし男女の客がしどけない風をして、廊下の此處彼處で葉子とすれ違つた。葉子はそれらの人々には眼もくれずに轆場に行つて電話室に飛び込むとびつしりと戸をしめてしまつた。而して受話器を手取るが早い、電話に口を寄せて、

「あなた義一さん？ あゝさう。義一さんそれは滑稽なよ」

とひとりですら／＼と云つてしまつて我れながら葉子ははつと思つた。その時の浮々した輕い心持から云ふと、葉子にはさう云ふより以上に自然な言葉はなかつたのだけれども、それでは餘りに自分といふものを明白にさらけ出してゐたのに氣が付いたのだ。古藤は案の定答へ盡つてゐるしなかつた。顔には返事もしないで、ちやんと聞こえてゐるらしいのに、唯「何んです？」と聞き返して來た。葉子はすぐ東京の

様子を呑み込んだやうに思つた。

「そんな事どうでもよござんすわ。あなたお丈大でしたの」

と云つて見ると「ええ」とだけすけない返事が、機械を通してであるだけに殊更らげなく響いて來た。而して今度は古藤の方から、

「木村、木村君はどうしてゐます。あなた會つたんですか」

とはつきり聞こえて來た。葉子はすかさず、

「はいあ會ひましてよ。相變らず丈夫でゐます。難有う。けれども本當に可哀相でしたの。義一さん。聞こえますか。明後日私東京に歸りますわ。もう叔母の所には行けませんからね、

あすこには行きたくありませんから……あのね、透矢町のね、雙鶴館……つがひの鶴さう、お分りになつて？ ……雙鶴館に行きますから……あなた來て下される？ ……でも是非聞いていたゞかなければならない事があるんですから……よくつて？ ……さう是非どうぞ。

明々後日の朝？ 難有うきつとお待ち申してゐますから是非ですのよ」

葉子がさう云つてゐる間、古藤の言葉は仕舞まで奥に物のはさまつたやうに重かつた。而して動ともすると葉子との會見を拒まうとす

しく思つた。

帯の間に挟んだまゝにしておいた新聞の切抜きが胸を焼くやうだつた。葉子は歩き／＼それを引き出して手提げに仕舞ひかへた。旅館は出たが何處に行かうと云ふあてもなかつた葉子は俯向いて紅葉坂を下りながら、さしもしないバラゾルの石突きで精解になつた土を一足々々突きさして歩いて行つた。何時の間にかじめじめした薄汚い狭い通りに來たと思ふと、端なくもいつか古藤と一緒に上つた相模屋の前を通つてゐるのだつた。「相模屋」と古めかしい字體で書いた置行燈の紙までがその時のまゝで煤けてゐた。葉子は見覺えられてゐるのを恐れるやうに足早にその前を通りぬけた。

停車場前はすぐそこだつた。もう十二時近い秋の日は華やかに照り満ちて、思つたより數多い群衆が運河にかけ渡したいくつかの橋を賑やかに往來してゐた。葉子は自分一人が皆んなから振り向いて見られるやうに思ひなした。それが當り前の時ならば、どれ程多くの人にじろじろと見られようと度を失ふやうな葉子ではなかつたけれども、たつた今忌々しい新聞の記事を見た葉子ではあり、いかにも西洋じみた野暮臭い綿入れを着てゐる葉子であつた。服装に應

ほどでも疵の打ちどころがあると思ひ付けてならない葉子としては、旅館を出て來たのが悲しい程後悔された。

葉子はとう／＼税關波止場の入口まで來てしまつた。その入口の小さな煉瓦造りの事務所には、年の若い監視補達が一重金鎖の背廣に、海軍帽を被つて事務を取つてゐたが、そこに近づくと葉子の様子を見るのと、昨日上陸した時から葉子を見知つてゐるかのやうに、その飛び放れて華手造りな姿に眼を定めるらしかつた。物好きなその人達は早くも新聞の記事を見て問題となつてゐる女が自分に違ひないと日星をつけてゐるのではあるまいかと葉子は何事につけても愚痴つぽくひけ目になる自分を見出した。葉子は然しさうした風に見つめられながらもそこを立ち去る事が出来なかつた。若し倉地が晝飯でも喰べにあの大きな五體を重々しく動かしながら船の方から出て來はしないかと心持がされたからだ。

葉子はそろ／＼と海岸通りをグランド・ホテルの方に歩いて見た。倉地が出て來れば、倉地の方でも自分を見つけるだらうし、自分の方でも後ろに眼はないながら、出て來たのを感付いて見せるといふ自信を持ちながら、後ろも振り

向かずに段々波止場から遠ざかつた。海沿ひに立て連れた石杭を繋ぐ嚴密な鐵鎖には、西洋人の子供達が慣れた洋犬やあまに付き添はれて事もなげに遊び戯れてゐた。而して葉子を見ると心安立てに無邪氣に微笑んで見せたりした。小さな可愛い子供を見るとどんな時どんな場合でも、葉子は定子を思ひ出して、胸がしめつけられるやうになつて、すぐ涙ぐむのだつた。この場合は殊更さうだつた。見てゐられない程それらの子供達は悲しい姿に葉子の眼に映つた。

葉子はそこから避けるやうに足をかへして又税關の方に歩み近づいた。監視課の事務所の前を來たり往つたりする人数は絡繹として絶えなかつたが、その中に事務長らしい姿は更に見えなかつた。葉子は繪島丸まで行つて見る勇氣もなく、そこを幾度もあちこちして監視補達の眼にかゝるのもうさかつたので、すぐ／＼と税關の表門を縣廳の方に引き返した。

二十三

その夕方倉地が埃にまぶれ汗にまびれて紅葉坂をすた／＼と登つて歸つて來るまでも葉子は旅館の關を跨がずに櫻の並木の下などを徘徊して待つてゐた。さすがに十一月となると夕暮

子にはそれが不思議に自分とはかけ離れた事のやうに見えた。

三面に來ると四號活字で書かれた木部孤節と云ふ字が眼に着いたので思はずそこを讀んで見る葉子はあつと驚かされてしまった。

○某汽船會社船中の大怪事

事務長と婦人船客との道ならぬ戀――

船客は木部孤節の先妻、

かう云ふ大仰な標題が先づ葉子の眼を小痛く射つけた。

「本邦にて最も重要な位置にある某汽船會社の所有船○丸の事務長は、先頃米國航路に勤務中、嘗て木部孤節に嫁して程もなく姿を晦ましたる英連女某が一等船客として乗り込みたるをそゝのかし、その女を米國に上陸せしめず竊かに連れ歸りたる怪事實あり。而かも某女と云へるは米國に先行せる婚約の夫まである身分のものなり。船客に對して最も重き責任を擔ふべき事務長に對する不埒の舉動ありしは、事務長一個の失體のみならず、其汽船會社の體面にも影響する由々しき大事なり。事の子細は漏れなく本紙の探知したる所なれども、改悛の餘地を與へん爲め、

暫らく發表を見合せおくれし。若しある期間を過ぎてても、兩人の醜行改まる模様なき時は、本紙は容赦なく詳細の記事を掲げて寄生道に陥りたる二人を懲戒し、併せて汽船會社の責任を問ふ事とすべし。讀者請ふ、刮目してその時を待て」

葉子は下唇を噛みしめながらこの記事を読んだ。一體何新聞だらうと、その時まで氣にも留めないでゐた第一面を繰り戻して見ると、麗麗と「報正新報」と書してあつた。それを知ると葉子の全身は怒りの爲めに爪の先きまで青白くなつて、抑へつけてもくくぶるくく震へ出した。「報正新報」と云へば田川法學博士の機關新聞だ。その新聞にこんな記事が現はれるのは意外でもあり當然でもあつた。田川夫人と云ふ女は何處まで執念く卑しい女なのだらう。田川夫人からの通信に違ひないのだ。報正新報はこの通信を受けると、報道の先鞭をつけておく爲めと、讀者の好奇心を煽る爲めとに、逸早くあれだけの記事を載せて、田川夫人から更に委しい消息の來るのを待つてゐるのだらう。葉子は鋭くもかう推した。若しこれが外の新聞であつたら、倉地の一身上の危機でもあるのだから、葉子はどんな秘密な運動をしても、この上の記

事の發表は採み消さなければならぬと胸を定めたに相違なかつたけれども、田川夫人が惡意を籠めてさせてゐる仕事だとして見ると、どの道書かずにはおくれまいと思はれた。郵船會社の方で高壓的な交渉でもすれば兎に角、その外には道がない。くれぐれも憎い女は田川夫人だ：「かう一圖に思ひめぐらすと葉子は船の中の屈辱を今更にまざぐと心に浮べた。

「お掃除が出来ました」

さう横越しに云ひながら先の女中は顔も見せずにさつきと階下に降りて行つてしまつた。葉子は結局それを氣安い事にして、その新聞を持つたまゝ、自分の部屋に歸つた。何處を掃除したのだと思はれるやうな掃除の仕方ではたきまでが違ひ棚の下におき忘られてゐた。過敏に几帳面で綺麗な葉子はもう堪らなかつた。自分でてきぱきとそこいらを片付けて置いて、バラゾルと手提げを取り上げるが否やその宿を出た。

往來に用ゐるとその旅館の女中が四五人早仕舞をして晝間の中を野毛山の大神宮の方にでも散歩に行くらしい後姿を見た。そそくさと朝の掃除を急いだ女中達の心も葉子には讀めた。葉子はその女達を見送ると何んといふ事なしに淋

道を一人で降つて行つた。

停車場に着いた頃にはもう瓦斯の灯がそこらに點つてゐた。葉子は知つた人に遇ふのを極端に恐れ避けながら、汽車の出るすぐ前まで停車場前の茶店の一と間に隠れてゐて一等室に飛び乗つた。だだつ廣いその客車には外務省の夜會に行けらしい三人の外國人が銘々、デコルテーを着飾つた婦人を介抱して乗つてゐるだけだつた。いつもの通りその人達は不思議に人を牽き付ける葉子の姿に眼を凝てた。けれども葉子はもう左手の小指を器用に折り曲げて、左の鬢のほつれ毛を美しくかき上げるあの嬌態をして見せる氣は無くなつてゐた。室の隅に腰かけて手提げとパラゾルとを膝に引きつけないが、たつた一人その部屋の中にあるもののやうに鷹揚に構へてゐた。偶然顔を見合せても、葉子は張りのあるその眼を無邪氣に（本當にそれは罪を知らない十六七の乙女の眼のやうに無邪氣だつた）大きく見開いて相手の視線をはにかみもせず迎へるばかりだつた。先方の人達の年齢がどの位で容貌がどんな風だなどといふ事も葉子は少しも注意してはゐなかつた。その心の中には唯々倉地の姿ばかりが色々に描かれたり消されたりしてゐた。

列車が新橋に着くと葉子はしとやかに車を出たが、丁度そこに、唐棧に角帯を締めた、箱丁とでも云へば云へさうな、氣の利いた若い者が電報を片手に持つて、眼さとく葉子に近づいた。それが雙鶴館からの出迎へだつた。

横濱にも増して見るものにつけて聯想の群が起る光景、それから来る強い刺激、葉子は宿から廻された人力車の上から銀座通りの夜の有様を見やりながら、危く幾度も泣き出さうとした。定子の住む同じ土地に歸つて來たと思ふだけでももう胸はわく／＼した。愛子も貞世もどんな恐ろしい期待に震へながら自分の歸るのを待ち侘びてゐるだらう。あの叔父叔母がどんな激しい言葉で自分をこの二人の処に擯いて見せてゐるか。構ふものか。何んともぶふがいて。自分は何うあつても二人を自分、手に取り戻して見せる。かうと思ひ定めた上は指もさゝせはしないから見てゐるがよい。……ふと人力車が尾張町の角を左に曲ると暗い細い通りになつた。葉子は目指す旅館が近づいたのを知つた。その旅館といふのは、倉地が色沙汰でなく品屋にしてゐた藝者が或る財産家に落籍されて開いた店だと云ふので、倉地から豫め懸け合つておいたのだつた。人力車がその店に近づくと

に従つて葉子はその女將といふのにふりした悪念を持ち始めた。未知の女同志が出遇ふ前に感ずる一種の軽い敵愾心が葉子の心を暫くは餘の耳柄から切り放した。葉子は車の中で衣紋を氣にしたり、束髪の流れを直したりした。

昔の煉瓦建てをそのまゝ改造したと思はれる漆喰塗の嚴やかな、角地面の一階へ來て、煌々と明るい入口の前に車夫が泥棒を降ろすと、そこにはもう二三人の女の人達が走り出て待ち構へてゐた。葉子は裾前をかばひながら車から降りて、そこに立ち竝んだ人達の中からすぐ女將を見分ける事が出来た。春丈けが思ひ切つて低く、顔形も整つてはゐないが、三十女らしく分別の備はつた、きかん氣らしい、垢ぬけのした人がそれに違ひないと思つた。葉子は思ひ散けた以上の好意をすぐその人に對して持つ事が出来たので、殊更ら快い親しみを持ち前の愛嬌に添へながら、挨拶をしようすると、その人は事もなげにそれを通つて、

「いづれ御挨拶は後ほど、嘸お寒う御座います。お二階へどうぞ」

と云つて自分から先きに立つた。居合せた女中は達は眼はしを利かして色々と世話に立つた。入口の突當りの壁には大きなぼん／＼時計が、つ

を催した空は見る／＼薄寒くなつて風さへ吹き出してゐる。一日の行樂に遊び疲れたらしい人の群れに交つて不機嫌さうに顔をしかめた倉地は眞向に坂の頂上を見つめながらづいて来た。それを見やると葉子は一時に力を恢復したやうになつて、すぐ跳り出して来る悪戯心のまゝに、一本の櫻の木を柵に倉地をやり過しておいて、後ろから靜かに近づいて手と手が觸れ合はんばかりに押し列んだ。倉地はさすがに不意を喰つてまじ／＼と寒さの爲めに少し涙ぐんで見える大きな涼しい葉子の眼を見やりながら、何處から湧いて出たんだと云はんばかりの顔付きをした。一つ船の中に朝となく夜となく一緒にゐて寢起きしてゐたものを、今日始めて半日の餘も顔を見合はさずに過して来たのが思つた以上に物淋しく、同時にこんな所で思ひもかけず出遇つたが豫想の外に満足であつたらしい倉地の顔付きを見て取ると、葉子は何もかも忘れて唯々嬉しかつた。その眞黒に汚れた手をいきなり引つ掴んで熱い唇で噛みしめて勞つてやりたいた程だつた。然し思ひのまゝに寄り添ふ事すら出来ない大道であるのを何うしよう。葉子はその切ない心を拗ねて見せるより外なかつた。

「私もうあの宿屋には泊りませんわ。人を馬鹿にしてゐるんですもの。あなたお歸りになるなら勝手に獨りでいらつしやい」
「どうして……」
と云ひながら倉地は當惑したやうに往來に立ち止つてしげ／＼と葉子を見なほすやうにした。
「これぢや（と云つて埃に塗れた兩手を擦げ襟頭を抜き出すやうに延ばして見せて澁い顔をしながら）何處にも行けやせんわな」
「だからあなたはお歸りなさいましと云つてるぢやありませんか」
さう目頭をして葉子は倉地と押し並んでそろそろ歩きながら、女將の仕打ちから、女中のふしだらまで尾鰭をつけて讒訴けて、早く雙鶴館に移つて行きたいとせがみにせがんだ。倉地は何か思案するらしくそつぽを見／＼と耳を傾けてゐたが、やがて旅館に近くなつた頃もう一度立ち止つて、
「今日雙鶴館から電話で部屋の都合を知らしてよこす事になつてゐたが前聞いたか……（葉子はさう云ひ附けられながら今まですつかり忘れてゐたのを思ひ出して、少しくてれたやうに首を振つた）……えゝわ、ぢや電報を打つてから先きに行くがよい。俺は荷物をして今夜後

から行くで」
さう云はれて見ると葉子は又一人だけ先きに行くのがいやでもあつた。と云つて荷物の始末には二人の中心どちらか、人居残ればならぬ。
「どうせ二人一緒に汽車に乗る筈にも行くまい」
倉地がかう云ひ足した時葉子は危く、では今日の報正新聞を見たかと云はうとする所だつたが、はつと思ひ返して喉の所で抑へてしまつた。
「何んだ」
倉地は見かけの割りに恐ろしい程敏捷に側く心で、顔にも現はさない葉子の躊躇を見て取つたらしくかう詰るやうに尋ねたが、葉子が何んでもないと應へると、少しも拘泥せずに、それ以上を問ひ詰めようとはしなかつた。
何うしても旅館に歸るのがいやだつたので、非常な物足らなさを感ぜながら、葉子はそのまゝそこから倉地に別れる事にした。倉地は月の満つた眼で葉子をずっと見て一寸點頭くと後を見ないでどん／＼と旅館の方に闊歩して行つた。葉子は残り惜しくその後姿を見送つてゐたが、それに何んと云ふ事もない輕い誇りを感じて微かな微笑みながら、倉地が登つて来た坂

とばかり決めてゐたので、あんなものを作つて見たんですけれども、我慢にもう着てゐられなくなりましたわ。後生、あなたの所に何か普段着の明いたのでもないでせうか」

「どうしてあなた。私はこれで御座んすもの」と女將は懇然にも氣輕くちやんと立ち上つて自分の春丈の低さを見せた。そして立つたまま、で暫らく考へてゐたが、踊りで仕込み抜いたやうな手つきではたと膝の上をたゝいて、

「ようございます。私一つ倉地さんをびつぐらさして上げますわ。私の妹分に當るのに柄と云ひ年恰好といひ、失禮ながらあなた様とそっくりなのがゐますから、それを取寄せて見ませう。あなた様は洗ひ髪でいらつしやるなりいかゞ、私がすばかり仕立てて差上げますわ。この思ひ付きは葉子には強い誘惑だつた。葉子は一も二もなく勇み立つて承知した。

その晩十一時を過ぎた頃に、纏めた荷物を人力車四臺に積み乗せて、倉地が雙鶴館に着いて来た。葉子は女將の入れ智慧でわざと玄關には出迎へなかつた。葉子は悪戯者らしく、獨笑ひをしながら立て膝をして見たが、それには自分ながら氣がひけたので、右足を左の襪の上に積み乗せるやうにしてその足先きをとんびにし

て坐つて見た。丁度そこに可なり酔つたらしい様子で、倉地が女將の案内も待たずにずしんずしんといふ足どりで這入つて来た。葉子と顔を見合はした瞬間には部屋を間違へたと思つたらしく、少し慌てて身を引かうとしたが、直ぐ櫛巻きにして黒襟をかけたその女が葉子だつたのに氣が付くと、いつもの誰いやうに顔を崩して笑ひながら、

「何んだ馬鹿をしくさつて」

とぼざくやうにぶつて、長火鉢の向座にどつかと胡坐をかいた。跟いて来た女將は立つたまま、暫らく二人を見較べてゐたが、

「よう／＼、髪でこなお内裏雛様」

と陽氣にかけ聲をして笑ひこけるやうにべちやんとそこに坐り込んだ。三人は聲を立てて笑つた。

と、女將は急に眞面目に返つて倉地に向ひ、

「こちらは今日つ報正新報を……」

と云ひかけるのを、葉子はすばやく眼で遮つた。女將は危い土地場で踏み止つた。倉地は酔眼を女將に向けながら、

「何、

と尻上りに問ひ返した。

「さう早耳を走らすと聲と間違へられますと

さ」と女將は事もなくに受け流した。三人は又聲を立てて笑つた。

倉地と女將との間に一別以來の噂話が暫らくの間取り交はされてから、今度は倉地が眞面目になつた。而して葉子に向つてぶつきらぼうに、

「お前もう寝ろ」

と云つた。葉子は倉地と女將とを並べて一と眼見たばかりで、二人の間の潔白なつを見て取つてゐたし、自分が寝て後の相談と云うても、今度の事件を上手に纏めようといふについての相談だと云ふ事が呑み込めてゐたので、素直に立つてその座を外した。

中の十疊を隔てた十六疊に二人の寢床は取つてあつたが、二人の會話は折々可なりはつきり漏れて来た。葉子は別に疑ひをかけると云ふのではなかつたが、矢張りちつと耳を傾けないではゐられなかつた。

何かの話の序でに入用な事が起つたのだらう、倉地は頻りに身のまはりを探つて、何かを取り出さうとしてゐる様子だつたが、「あいつの手提げに入れたか知らん」といふ聲が……で葉子ははつと思つた。あれには報正新報の切抜

かゝつてゐるだけで何んにもなかつた。その右手の巖乗な踏み心地のいゝ嚙子段を上りつめると、他の部屋から廊下で切り放されて、十六疊と八疊と六疊との部屋が鏝形に續いてゐた。廳一つをすずにきちんと掃除が届いてゐて、三箇所位置かれた鐵瓶から立つ湯氣で部屋の中は軟かく暖まつてゐた。

「お座敷へと申す所ですが、御氣散告にこちらでおくつろぎ下さいまし。三間ともつて御座います。」

さう云ひながら女將は長火鉢の置いてある六疊の間へと案内した。

そこに坐つて一通りの挨拶を言葉少なに済ますと、女將は葉子の心を知り抜いてゐるやうに、女中を連れて階下に降りて行つてしまつた。葉子は本當に暫らなくなりとも一人になつて見たかつたのだつた。軽い暖かさを感ずるまゝに重い縮緬の羽織を脱ぎ捨て、ありたけの懷中物を帶の間から取り出して見ると、凝りがちな肩も、重苦しく感じた胸もすが／＼しくなつて、可なり強い疲れを一時に感じながら、猫板の上に肘を持たせて居住ひを刷して凭れかゝつた。占びを帯びた蘆屋爺から鳴りを立てて白く湯氣の立つのも、綺麗にかきならされた灰の中に、堅さ

うな熨炭の火が白い被衣の下でほんのりと赤らんでゐるのも、精巧な川簞笥の嵌め込まれた一間の壁に續いた器用な三尺床に、白菊を挿した唐津燒きの釣花活けがあるのも、幽かにたきこめられた沈香の匂ひも、口のつんだ杉柁の天井板も、細つそりと磨きのかゝつた皮付きの柱も、葉子に取つては——重い、硬い、堅い船室から漸く解放されて來た葉子に取つてはなつかしくばかり眺められた。こゝこそは居竟の避難所だとぶふやうに葉子がつく／＼とあたりを見廻した。而して部屋の隅にある生漆を塗つた糸の廣簾を引き寄せて、それに手提げや懷中物を入れ終ると、飽く事もなくその縁から底にかけての圓味を持つた微妙な手觸りを愛で慕ひんだ。

場所柄としてそこゝからこの界隈に特有な樂器の聲が聞こえて來た。天長節であるだけに今日は殊更それが賑やかなのかも知れない。戸外にはぼくりやあづま下駄の音が少し冴えて絶えずしてゐた。着飾つた藝者達が磨き上げた顔をびり／＼するやうな夜寒に惜げもなく傳法に曝して、さすがに寒氣に足を早めながら、招かれた所に繰り出して行くその様子が、まざまざと履物の音を聞いたばかりで葉子の想像には描かれるのだつた。合乗りらしい人力車の轍の

音も威勢よく響いて來た。葉子はいち度、これは居竟な避難所に來たものだと思つた。この界隈では葉子は脚を反して人から見られる事はあるまい。

珍らしくあつさりした、魚の鮮しい夕食を済ますと葉子は風呂につかつて、思ひ存分處を洗つた。足しない船の中の淡水では洗つても洗つてもぬち／＼と垢の取り切れなかつたものが、觸れば手が切れる程さば／＼と油が投げて、葉子は頭の中まで軽くなるやうに思つた。そこに女將も食事を終へて話相手になりに來た。

「大變お廻り御座いますこと、今夜の中にお歸りになるでせうか。」

さう女將は葉子の思つてゐる事を廻けにぶつた。「さあ」と葉子もはつきりしない返事をしたが、小寒くなつて來たので浴衣を着かへようとすると、そこに袖だたみにしてある自分の衣物につく／＼愛想が盡きてしまつた。この邊の女中に對してもそんないつつこいけば／＼しい柄の衣物は二度と着る氣にはなれなかつた。さうなると葉子は遮々それが堪らなくなつて來るのだ。葉子はうんざりした様子をして自分の衣物から女將に眼をやりながら、一見て下さいこれを。この冬は米國にゐるのだ

涙を聲にしたやうに葉子は思はず呼んだ。定子が喫驚して後ろを振り向いた時には、葉子は月を開けて入口を駆け上つて定子の側にすり寄つてゐた。父に似たのだらう痛々しい程華車作りの定子は、何處をどうしてしまつたのか、聲も姿も消え果てた自分の母が突然側近くに現はれたのに氣を奪はれた様子で、頓には聲も出さずに驚いて葉子を見守つた。

「定ちやんママだよ。よく丈夫でしたね。そしてよく一人でおとなにして……」

もう聲が續かなかつた。

「ママちゃん」

さう突然大きな聲で云つて定子は立ち上りざま臺所の方に駆けて行つた。

「婆やママちゃんが來たのよ」
と云ふ聲がした。

「え……」

と驚くらしい婆やの聲が裏庭から聞こえた。

と、慌てたやうに臺所を上つて、定子を横抱きにした婆やが、被つてゐた手拭を頭から外づしなげに轉がり込むやうにして座敷に這入つて來た。二人は向き合つて坐ると兩方とも涙ぐみながら無言で頭を下げた。

「ちよつと定ちやんをこつちにお貸し」

暫らくしてから葉子は定子を婆やの膝から受取つて自分懷ろに抱きしめた。

「お嬢さま……私にはもう何が何だかちつとも分りませんが、私は唯もう口惜う御座います。……どうしてかう早くお歸りになつたんで

御座いますか……皆様の仰しやる事を伺つてゐるとあんまり業腹で御座いますから……もう私は耳をふさいで居ります。あなたから伺つた所がどうせかう年を取りますと胸に落ちる氣遣ひは御座いせん。でもまあお體がどうかと思つてお案じ申して居りましたが、御丈夫で何よりで御座いました……何しろ定子様がお可哀さうで……」

葉子に溺れ切つた婆やの口からさも口惜さうにかうした言葉がつぶやかれるのを、葉子は淋しい心持で聞かねばならなかつた。老練したと自分では云ひながら、若い時に亭主に死別れて立派に後家を通して後指一本指されたかつて昔氣質のしつかり者だけに、親類達の藤口や噂で聞いた葉子の簡行には惻れ果てゐながら、この世での唯一一人の秘藏物として葉子の頭から足の先きまでも自分の誇りにしてゐる婆やの切ない心持は、ひし／＼と葉子にも通じるのだつた。婆やと定子……こんな純粹な愛情の中に

取り囲まれて、落ち着いた、いやかな、而して安穩な一生を過ごすのも、葉子は望ましいと思はないではなかつた。殊に婆やと定子とを眼の前に置いて、つましやかな過不足のない生活眺めると、葉子の心は知らず／＼なじんで行くのを覺えた。

然し同時に倉地の事を一寸でも思ふと葉子の血は一時に湧き立つた。平穩な、その代り死んだも同然な一生が何んだ。純粹な、その代り冷えもせず熱しもしない愛情が何んだ。生きる以上は生きてゐるらしく生きないでどうしよう。愛する以上は命と取り代へつことをする位に愛せずにはゐられない。さうした衝動が自分でも何うする事も出来ない強い感情になつて、葉子の心を本能的に煽ぎ立てるのだつた。この奇怪な二つの矛盾が葉子の心の中には平氣で兩立しようとしてゐた。葉子は眼前の境界でその二つの矛盾を割合に困難もなく使ひ分ける不思議な心の廣さを持つてゐた。ある時には極端に涙脆く、ある時には極端に殘虐だつた。丸で二人の人が一つの肉體に宿つてゐるかと自分ながら疑ふやうな事もあった。それが時には忌々しかつた、時には誇らしくもあつた。

「定ちやま。よう御座いましたね、ママちゃん

きが入れてあるのだ。もう飛び出して行つても遅いと思つて葉子は斷念してゐた。やがて果して二人は切抜きを見つけ出した様子だつた。

「何んだあいつも知つとつたのか」

思はず少し高くなつた倉地の聲がかう聞こえた。

「道理でさつき私がこの事を云ひかけるとあの方が眼で留めたんです。矢張り先方でもあなたに知らせまいとして。いぢらしいぢやありませんか」

さう云ふ女將の聲もした。而して二人は暫らく黙つてゐた。

葉子は寢床を出てその場に行かうかと思つた。然し今夜は二人に任せておく方がいゝと思ひ返して蒲團を耳まで被つた。而して大分夜が更けてから倉地が寢に來るまで快い安眠に前後を忘れてゐた。

二十四

その次ぎの朝女將と話をしたり、呉服屋を呼んだりしたので、日が可なり高くなるまで宿にゐた葉子は、いや／＼ながら例のけば／＼しい綿入れを着て、羽織だけは女將が借りてくれた、妹分といふ人の烏羽黒の縮緬の紋付きにして

旅館を出た。倉地は昨夜の後更しにも係はらずその朝早く横濱の方に出懸けた後だつた。今日も空は菊日初とでも云ふ美しい晴れ方をしてゐた。

葉子はわざと宿で車を頼んで貰はずに、煉瓦通りに出てから綺麗さうな辻待ちを備つてそれに乗つた。そして池の端の方に車を急がせた。定子を眼の前に置いて、その小さな手を撫でたり、絹絲のやうな髪の毛を弄ぶ事を思ふと葉子の胸は我れにもなく唯々／＼とせき込んで來た。眼鏡橋を渡つてから突當りの大時計は見えながら中々／＼そこまで、車が行かないのをもどかしく思つた。膝の上に乘せた土産の玩具や小さな帽子などをやきもきしながらひねり廻したり、膝掛けの厚い地をぎ／＼と押し締めたりして、逸る心を押し鎮めようとして見るけれどもそれを何うする事も出来なかつた。車が漸く池の端に出ると葉子は右、左、と細い道筋の角々で指圖した。而して岩崎の屋敷裏にあたる小さな横町の曲角で車を乗り捨てた。

一箇月の間來ないだけなのだけれども、葉子にはそれが一年にも二年にも思はれたので、その界限が少しも變化しないで元の通りなのが却つて不思議なやうだつた。じめ／＼した小溝に

沿うて根際の腐れた黒板塀の立つてゐる小さな寺の境内を突つ切つて裏に廻ると、寺の住地面にぼつ／＼立つた一戸建ての小家が乳母の住む所だ。没義道に頭を切り取られた高野槁が二本舊の麥で臺所前に立つてゐる、その二本に竹竿を渡して小さな襦袢や、丸洗ひにした胸着が暖かい日の光を受けてぶら下つてゐるのを見る。葉子はもう堪らなくなつた。涙がぼろ／＼と多愛もなく流れ落ちた。家の中では定子の聲もなかつた。葉子は氣を落し着ける爲めに案内を求めず入口に立つたまゝ、そつと垣根から庭を覗いて見ると、日あたりのいゝ縁側に定子がたつた一人、葉子にはしごき帯を長く結んだ後姿を見せて、一心不乱にせつせと少しばかりの壊れ玩具をいぢくり廻してゐた。何事にまれ眞剣な様子を見せつけられると、――傍日もふらず畑を耕す農夫、踏切りに立つて子を背負つたまゝ、旗をかざす女房、汗をしとに垂らしながら坂道に荷車を押す具様ぎの大婦――譯もな涙につまされる葉子は、定子のさうした姿をひと眼見たばかりで、人間力ではどうする事も出来ない悲しい出来事にでも出遇つたやうに、しみ／＼と寂しい心持になつてしまつた。

「定ちゃん」

るのを見て、もう妹達が来て待つてゐるのを知つた。早速に出迎へに出た女將に、今夜は倉地が歸つて來たら他處の部屋で寝るやうに用意をして置いて貰ひたいと頼んで、靜々と二階に上つて行つた。

襖を開けて見ると二人の姉妹はびつたりとくつき合つて泣いてゐた。人の足音を姉のそれだとは十分に知りながら、愛子の方は泣き顔を見せるのが氣まがひが悪い風で、振り向きもせずに入首垂れてしまつたが、貞世の方は葉子の姿をひと眼見るなり、跳るやうに立ち上つて激しく泣きながら葉子の懷ろに飛びこんで來た。葉子も思はず飛び立つやうに貞世を迎へて、長火鉢の傍の自分の座に坐ると、貞世はその膝に突つ伏してすうり上げ、可憐な背中に涙を打たした。これ程までに自分の歸りを待ち控びてゐる、喜んでくれるのかと思ふと、骨肉の愛着からも、妹だけは少くとも自分の掌握の中にあるとの満足からも、葉子はこの上なく嬉しかつた。然し火鉢から遙か離れた向側に、恭しく居住ひを正して、愛子がひそく泣きながら、規則正しくお辭儀をするのを見ても葉子はすぐ癪に障つた。どうして自分はこの妹に對して優しくする事が出来ないのだらうとは

思ひつゝも、葉子は愛子の所作を見ると一々氣に障らないではゐられないのだ。葉子の眼は意地悪く劍を持つて冷やかに小柄で堅肥りな愛子を激しく見据ゑた。

「會ひたてからつけく、云ふのも何んだけれども、何んですねえそのお辭儀のしかたは、他人行儀らしい。もつと打ち解けてくれたつていぢやないの」

と云ふと愛子は當惑したやうに黙つたまゝ眼を上げて葉子を見た。その眼は然し恐れても恨んでもゐるらしくはなかつた。小羊のやうな、毛の長い、形のいい大きな眼が、涙に美しく濡れて夕月のやうにほつかりと列んでゐた。悲しい眼付きのやうだけれども、悲しいと云ふのでもない。多恨な眼だ。多情な眼でさへあるかも知れない。さう皮肉な批評家らしく葉子は愛子の眼を見て不快に思つた。大多數の男はあんな眼で見られると、この上なく詩的な靈的な一瞥を受取つたやうにも思ふのだらう。そんな事さへ素早く考への中に附け加へた。貞世が廣い帯をして來てゐるのに、愛子が少し古びた袴をはいてゐるのさへ蔑れた。そんな事はどうでもよう御座んすわ。さ、夕飯にしませうね」

葉子はやがて自分の妄念をかき拂ふやうにかう云つて、女中を呼んだ。

貞世は寵兒らしくすつかりはしやき切つてゐた。二人が古藤に作れられて始めて田島の熟

に行つた時の様子から田島先生が非常に二人を可愛がつてくれる事から、部屋、事、食物の事、さすがに女の子らしく細かい事まで自分の一人の興に乗じて談り續けた。愛子も言葉少なに要領を得た口をきいた。

「古藤さんが時々來て下さるの？」

と聞いて見ると、貞世は不平らしく、

「いゝえ、ちつとも」

「では御手紙は？」

「來てよ、ねえ愛姉さま。二人の所に同じ位づつ來ますわ」

と、愛子は控へられしく微笑みながら上日越しに貞世を見て、

「貞ちゃんの方に餘計來る癖に」

と何んでもない事で争つたりした。愛子は姉に向つて、

「一氣に入れて下さると古藤さんが私達に、もうこれ以上私のして上げる事はないと思ふから、用がなければ來ません。その代り用があつたら何時でもさうぶつておよこしなさいと仰し

が早くお歸りになつて。お立ちになつてからでもお聞き分けよくママのマの字も仰しやらなかつたんですけれども、どうかするとかうぼんやり考へてでもいらつしやるやうなのがとお可哀さうで、一時はお體でも悪くなりはいしないかと思ふ程でした。こんなでも中々心は働いていらつしやるんですからねえ。

と婆やは、葉子の膝の上に渠喰ふやうに抱かれて、黙つたまゝ、澄んだ瞳で母の顔を下から覗くやうにしてゐる定子と葉子とを見較べながら、述懐めいた事をぶつた。葉子は自分の頬を、暖かい桃の膚のやうに生毛の生えた定子の頬にすりつけながら、それを聞いた。

「お前のその氣性で分らないとお云ひなら、くどく云つた所が無駄かも知れないから、今度の事については私何んにも話さないが、家の親類達の云ふ事などは吃と氣にしないでおくれよ。今度の船には飛んでもない一人の奥さんが乗り合はしてゐてね、その人が一寸した氣まぐれから有る事無い事取りまぜてこつちに云つてよこしたので、事あれがしと待ち構へてゐた人達の耳に這入つたんだから、これから先きだつてどんなひどい事を云はれるかも知れたもんぢやないんだよ。お前も知つての通り私は生れ

落ちるとから旋毛曲りぢやあつたけれども、あらんなに周囲からこづき廻されさへしなければこんなになりはしなかつたのだよ。それは誰れよりもお前が知つてお呉れだわね。これからだつて私は私なりに押し通すよ。誰れが何んと云つたつて構ふもんですか。その積りでお前も私を見てゐておくれ。廣い世の中に私がどんな失策をしでかしても、心から思ひやつてくれるのは本當にお前だけだわ。今度からは私もちよい／＼來るだらうけれども、この上とも此子を頼みますよ。ね、定ちゃん。よく婆やの云ふ事を聞いていゝ子になつて頂戴よ。ママちゃんはこの處にゐる時でもゐない時でも、いつでもあなたを大事に大事に思つてゐるんだからね。……さ、もうこんなむづかしいお話はよしてお畫のお支度でもしませうね。今日はママちゃんがおいしい御馳走を作らへて上げるから定ちゃんも手傳ひして頂戴ね。」

さう云つて葉子は氣輕さうに立ち上つて臺所の方に定子と連れだつた。婆やも立ち上りはしたがその顔は妙に浮えなかつた。そして臺所で働きながらも動もすると内所で鼻をすうつてゐた。

そこには葉山で木部孤第と同棲してゐた時に

使つた調度品が今だに古びを帯びて保存されてゐた。定子を側においてそんなものを見るにつけ、少し感傷的になつた葉子の心は涙に動かうとした。けれどもその日は何んと云つても近頃覺えない程しみ／＼とした樂しさだつた。何事にでも器用な葉子は不足勝ちな臺所道具を巧みに利用して、西洋風な料理と菓子とを三品ほど作つた。定子はすつかり喜んでしまつて小さな手足をまめ／＼しく働かしながら、「はい／＼」と云つて庖丁をあつちに運んだり、皿をこつちに運んだりした。三人は樂しく畫飯の卓に就いた。而して夕方まで水人らずにゆつ／＼暮した。

その夜は妹達が學校から來る宮になつてゐたので葉子は婆やの勤める晩飯も斷わつて夕方その家を出た。入口の所につくねんと立つて婆やに兩肩を支へられながら婆の消えるまで葉子を見送つた定子の姿がいつまでも／＼葉子の心から離れなかつた。夕闇にまぎれた帳の中で葉子は幾度かハンケチを眼にあてた。

宿に着く頃には葉子の心持は變つてゐた。玄關に這入つて見ると、女學校でなければ腹かれないやうな安下駄の汚くなつたのが、お客や女中達の氣取つた履物の中に交つて置いてあ

いふ事なんぞをそのまゝ受取つて貰つちや困りますよ。姉さんを信じてお呉れ、ね、よござんすか。私はお嫁なんぞに行かないでもいい、あなた方とかうしてゐる程嬉しい事はないと思ひますよ。木村さんの方にお金でも出来て、私の病氣が治りさへすれば結婚するやうになるかも知れないけれども、それは何時の事とも分らないし、それまでは私はかうしたまゝで、あなた方と一緒に何處かにお家を持つて楽しく暮しませうね。いゝだらう貞ちゃん。もう寄宿なんぞにゐなくつてもよう御座んすよ」

「お姉さま私寄宿では夜になると本當は泣いてばかりゐたのよ。愛姉さんはよくお寝になつても私は小さいから悲しかったんですもの」

さう貞世は白状するやうに云つた。先刻まではいかにも楽しさうに云つてゐたその可憐な同じ肩から、こんな哀れな告白を聞くと葉子は一入しんかりした心持になつた。

「私だつてもよ。貞ちゃんは宵の口だけくすくす泣いても後はよく寝てゐたわ、姉様私は今まで貞ちゃんにもぶはないでゐましたけれども、皆さんが聞かえよがしに姉様の事を彼是れ云ひますのに、偶に悪いと思つて貞ちゃんと叔母さんの所に行つたりなんぞすると、それは

本當にひどい……ひどい事を仰しやるので、ひつちに行つても口惜しう御座いましたわ。古藤さんだつてこの頃はお手紙さへ下さらないし、田島生先だけは私達二人を可哀相がつて下さいましたけれども……」

葉子の思ひは胸の中で煮え返るやうだつた。「もういゝ勘忍して下さいよ。姉さんが左振り至らなかつたんだから。お父さんがいらつしやればお互にこんないやな目には遇はないんだらうけれども（かう云ふ場合葉子はおくびにも母の名は出さなかつた）親のない私達は肩身が狭いわね。まああなた方はそんなに泣いちや駄目。愛さん何んですねあなたから先きに立つて。姉さんが歸つた以上は姉さんに何んでも任して安心して勉強して下さいよ。そして世間の人を見返しておやり」

葉子は自分の心持を憤らしく云ひ張つてゐるのに氣が付いた。何時の間にか自分までが激しく興奮してゐた。

火鉢の火は何時か灰になつて、夜寒が秘やかに三人の姉妹に這ひよつてゐた。もう少し睡氣を催して來た貞世は、泣いた後の誰い眼を手の甲でこすりながら、不思議さうに興奮した青白い姉の顔を見やつてゐた。愛子は瓦斯の灯に顔を

を背けたがらしくノノと泣き始めた。

葉子はもうそれを止めようとはしなかつた。自分ですら聲を出して泣いて見たいやうな衝動をつき返し、水月の所に感じながら、火鉢の中を見入つたまゝ細かく震へてゐた。

生れかはらなければ恢復しやうのないやうな自分の越し方行く末が絶望的につきりと葉子の心を寒く引き締めてゐた。

それでも三人が十六疊に床を敷いて寝てゐたつてから、横濱から歸つて來た倉地が廊下を隔てた隣りの部屋に行くのを聞き知ると、葉子はすぐ起きかへつて暫らく妹達の寝息氣を窺つてゐたが、二人がいかに無心に赤々とした頬をしてよく寝入つてゐるのを見窺めると、そつとどてらを引つかけながらその部屋を脱け出した。

二十五

それから一日置いて次ぎの日に古藤から九時頃に來るがいゝかと電話がかゝつて來た。葉子は十時過ぎにしてくれと返事をさせた。古藤に會ふには倉地が横濱に行つた後がいゝと思つたからだ。

東京に歸つてから叔母と五十川女史の所へ

やつたきり入らつしやいませんのよ。而してこちらでも古藤さんにお願ひするやうな月は何んにもないんですよ」

と云つた。葉子はそれを聞いて微笑みながら古藤が二人を塾に件れに行つた時の様子を想像して見た。例のやうに何處の女關番かと思はれる風體をして、髪を刈る時の外剃らない顎鬚を一二分程も延ばして、嚴整な容貌や體格に不似合な羞かんだ口端で、田島といふ、男のやうな女學者と話をしてゐる様子が見えるやうだつた。

暫らくそんな表面的な噂話などに時を過ごしてゐたが、いつまでもさうはしてゐられない事を葉子は知つてゐた。この年齒の違つた二人の妹に、どつちにも堪念の行くやうに今の自分の立場を話して聞かせて、悪い結果をその幼い心に残さないやうに仕向けるのはさすがに容易な事ではなかつた。葉子は先刻から頻りにそれを案じてゐたのだ。

「これでも召上がれ」
食事が済んでから葉子は米國から持つて來たキャンディーを二人の前に置いて、自分は煙草を吸つた。貞世は眼を丸くして姉のする事を見やつてゐた。

「姉さまそんなもの吸つていいの？」

と解釋なく幸れた。愛子も不思議さうな顔をしてゐた。

「え、こんな悪い癖がついてしまつたの。けれども姉さんにはあなたの方の考へても見られないやうな心配な事や困る事があるものだから、つい愛さず晴らしにこんな事も覺えてしまつたの。今夜はあなたの方に判るやうに姉さんが話して上げて見るから、よく聞いて頂戴よ」

倉地の胸に抱かれながら、酔ひしれたやうにその嚴整な、日に焼けた、男性的な顔を見やる葉子の、乙女と云ふよりもつと子供らしい様子に、二人の妹を前に置いてきちんと居住ひを正した葉子の何處にも見出されなかつた。その姿は三十前後の、十分分別のある、いつかりした一人の女性を思はせた。貞世もさう云ふ時の姉に對する手心を心得てゐて、葉子から離れて眞面目に坐り直した。こんな時うっかりその威厳を目すやうな事でもすると、貞世にでも誰れにでも葉子は少しの容赦もしなかつた。然し見た所はいかにも慈愍に口を開いた。

「私が木村さんの所にお嫁に行くやうになつたのはよく知つてますね。米國に出懸けるやうになつたのもその爲めだつたのだけれども、もと／＼木村さんは私のやうに一度前にお嫁入

りした人を貰ふやうな方ではなかつたんだしするから、本當は私どうしても心は進まなかつたんですよ。でも約束だからちゃんと守つて行くには行つたの。けれどもね先方に着いて見ると私の體の具合が何うもよくなくつて上陸は迎も出来なかつたから仕方なしに又同じ船で歸るやうになつたの。木村さんは何處までも私をお嫁にして下さる積りだから、私もその氣ではゐるのだけれども、病氣では仕方がないでせう。それに恥かしい事を打ち明けるやうだけれども、木村さんにも私にも有り餘るやうなお金がないものだから、行きも歸りもその船の事務長といふ大切な役目の方にお世話にならなければならなかつたのよ。その方が御親切にも私をこゝまで連れて歸つて下さつたばかりで、もう一度あなたの方にも遇ふ事が出来たんだから、私はその倉地と云ふ方——倉はお倉の倉で、地は地球の地と書くの。吉といふお名前は貞ちゃんにも分るでせう——その倉地さんには本當にお禮の申しやうもない位なんです。愛さんなんかはその方の事で叔母さんなんだから色々な事を聞かされて、姉さんを疑つてゐやしないかと思ふけれども、それにけ又それで面倒な譯のある事なのだから、夢にも人の

新聞だからだと説明した。倉地は田川と新聞との關係を始めて知つたらしい様子で意外な顔付きをした。

「俺れは又興録の奴……あいつはべら／＼した奴で、右左のはつきりしない油斷のならぬ男だから、あいつの仕事かとも思つて見たが、成程それにしては記事の出かたが少し早過ぎるて」

さう云つてやをら立ち上りながら次ぎの間に着かへに行つた。

女中が膳部を片付け終らぬ中に古藤が來たと云ふ案内があつた。

葉子は一寸當惑した。眺へておいた衣類がまだ出来ないのと、着具合がよくつて、倉地からもしつくり似合ふと讃められるので、その朝も藝者のちよい／＼着らしい、黒縹子の襟の着いた、傳法な棒結の身幅の狭い着物に、黒縹子と水色西田の晝夜帯をしめて、どてらを引つかけてゐたばかりでなく、髪まで矢張り櫛巻きにしてゐたのだつた。えゝ、いゝ構ふものか、どうせ鼻をあかさせるならのつけからあかさせてやらう、さう思つて葉子はそのまゝの姿で古藤を待ち構へた。

昔のまゝの姿で、古藤は旅館といふよりも

料理屋と云つた風の家の様子に少し鼻しろみながら這入つて來た。而して飛び離れて風體の變つた葉子を見ると、尙更ら勝手が違つて、これがあの葉子なのかと云ふやうに驚きの色を隠し立てもせずに顔に現はしながら、ぢつとその姿を見た。

「まあ義一さん暫らく。お寒いのね、どうぞ火鉢によつて下さいましな。一寸御免下さいよ」さう云つて、葉子はあでやかに上體だけを後ろにひねつて、廣蓋から紋付きの羽織を引き出して、坐つたまゝどてらと着直した。なまめかしい匂ひがその動作につれて密やかに部屋の中に動いた。葉子は自分服装がどう古藤に印象してゐるかなどを考へても見ないやうだつた。十年も着慣れた普段着で昨日も會つたばかりの弟のやうに親しい人に向ふやうなとりなしをした。古藤は頼には口もきけないやうに思ひ惑つてゐるらしかつた、多少垢になつた薩摩緋の衣物を着て、觀世燃の羽織紐にも、きちんとはいた袴にもその人の氣質が明らかに書き記してあるやうだつた。

「こんなので大變へんな所ですけれどどうか氣樂になさつて下さいまし。それでないと何んだか改まつてしまつてお話がし憎くつていけま

せんから」

心置かない、而して古藤に信頼してゐる様子を巧みにもそれとなく氣取らせるやうな葉子の態度は段々古藤の心を靜めて行くらしかつた。古藤は自分の長所も短所も無自覺でゐるやうな、その癖何處かに鋭い光のある眼を舉げてまじ／＼と葉子を見始めた。

「何より先きにお禮。難有う御座いました妹達を。昨日二人でこゝに來て大變喜んでゐましたわ」

「何んにもしやしない、唯々聲に連れて行つて上げただけです。御丈夫ですか」

古藤はありのまゝをありのまゝに云つた。そんな序曲的な會話を少し續けてから葉子は徐ろに探り知つておかなければならないやうな事柄に話題を向けに行つた。

「今度こんなひよんな事で私亞米利加に上陸もせずに歸つて來る事になつたんですが、本當を仰しやつて下さいよ、あなたは一體私をどう

お思ひになつて」

葉子は火鉢の縁に兩肘をついて、兩手の指先を鼻の先きを集めて紐なりほいほいたりしながら、古藤の顔に浮び出る總ての意匠を讀まうとした。

は歸つた事だけを知らせては置いたが、どつちからも訪問は元よりの事一言半句の挨拶もなかつた。責めて来るなり慰めて来るなり、何んとかしさうなものだ。餘りと云へば人を踏みつけにした仕業だとは思つたけれども、葉子としては結構それが面倒がなくていいとも思つた。そんな人達に會つていきさ口をきくよりも、古藤と話しさへすればその口裏から東京の人達の心持も大體は判る。積極的な自分の態度はその上で決めても遅くはないと思案した。

雙鶴館の女將は本當に眼から鼻に抜けるやうに落度なく、葉子の影身になつて葉子の爲めに盡してくれた。その後ろには倉地がゐて、あの如何にも疎大らしく見えながら、人の氣もつかないやうな綿密な所にもまで氣を配つて、采配を振つてゐるのは判つてゐた。新聞記者などが何處を何うして探り出したか、始めの中は押し強く葉子に面會を求めて來たのを、女將が手際よく追ひ拂つたので、近付きこそはしなかつたが遠巻きにして葉子の舉動に注意してゐる事などを、女將は眉をひそめながら話して聞かせたりした。本部の戀人であつたといふ事がひどく記者達の興味を牽いたやうに見えた。葉子は新聞記者と聞くと、震へ上る程いやな感じを受

けた。小さい時分に女記者にならうなどと人にも口外した覚えがある癖に、探訪などに来る人達の事を考へると一番腹しい種類の人間のやうに思はないではゐられなかつた。仙臺で、新聞社の社長と親佐と葉子との間に起つた事として不倫な捏造記事（葉子はその記事の中心母に關してはどの邊までが捏造であるか知らなかつた。少くとも葉子に關しては捏造だつた）が掲載されたばかりでなく、母の所謂冤罪は堂々と新聞紙上で雪がれたが、自分のほうううそのまゝになつてしまつた、あの苦い経験などが益々葉子の考へを頑にした。葉子が報正新報の記事を見た時も、それほど田川夫人が自分を迫害しようとするなら、こちらも何處かの新聞を手に入れて田川夫人に致命傷を與へてやらうかと云ふ（道德を米の飯と同様に見て生きてゐるやうな田川夫人に、その點に傷を與へて眞出しが出來ないやうにするのは容易な事だと葉子は思つた）企みを自分獨りで考へた時でも、あの記者といふものを手なづけるまでに自分を墮落させたくないばかりにその目論見を思ひ止つた程だつた。

その朝も倉地と葉子とは女將を話相手に朝飯を食ひながら新聞に出たあの奇怪な記事の話

をして、葉子が疾うにそれをちやんと知つてゐた事などを語り合ひながら笑つたりした。一忙がしいにかまけて、あれはあのまゝにして居つたが、一つは餘り短兵急にこつちから出しやばると足許を見やがるで、あれは何んとかせんと面倒だつたと倉地はがらつと箸を膳に捨てながら、葉子から女將に眼をやつた。

「さうですともさ。下らない、あなた、あれであつたの御職掌にでもけちが附いたら本當に馬鹿々々しく御座んすわ。報正新報社になら私御懇意の方も二人や三人はいらつしやるから、何んなら私からそれとなくお話して見てもよろしく御座いますわ。私は又お二人とも今まであんまり不氣でいらつしやるんで、もう何んとかお話がついたのだとばかり思つてゐたの」と女將は恰しさうな眼に眞味な色を見せてかう云つた。倉地は無頓着に「さうさなと」云つたきりだつたが、葉子は二人の意見が略々一致したらしのを見ると、いくら女將が巧みに立ち廻つてもそれを採み消す事は出來ないといふ出た。何故と云へばそれは田川夫人が何か葉子を深く意趣に思つてさせた事で、報正新報にそれが現はれた譯は、その新聞が田川博士の機關

れた感情が時々きら／＼とひらめくやうな脈を、少し物怖げに大きく見開いて葉子の顔をつれ／＼と見やつた。初対面の時には人並み外づれて遠慮勝ちだった癖に、少し憎れて来ると人を見徹さうとするやうに凝視するその眼は、いつでも葉子に一種の不安を與へた。古藤の凝視にはづう／＼しいと云ふ所は少しもなかった。又故意にさうするらしい様子も見えなかつた。少し鈍と思はれる程世事に疎く、事物の本當の姿を見て取る方法に暗いながら、真正直に悪意なくそれをなし遂げようとするらしい眼付きだった。古藤なんぞに自分の秘密が何んで發かれてたまるものかと高をく／＼りつゝも、その物軟らかながらどん／＼人の心の中に這入り込まうとするやうな眼付きに遇ふと、何時か秘密のどん底を過たず擲まれさうな氣がしてならなかつた。さうなるにしても然しそれまでには古藤は長い間忍耐して待たなければならぬのだらう、さう思つて葉子は一面小氣味よくも思つた。

こんな眼で古藤は、明らかな疑ひを示しつつ葉子を見ながら、更に語り續けた所によれば、古藤は木村の手紙を読んでから思案に餘つて、その足で、まだ釘店の家の留守番をし

てゐた葉子の叔母の所を尋ねてその考へを尋ねて見ようとした所が、叔母は古藤の立場がどちらに同情を持つてゐるか知れないので、うつかりした事は云はれないと思つたか、何事も打ち明けずに、五十川女史に尋ねて貰ひたいと逃げを張つたらしい。古藤は已むなく又五十川女史を訪問した。女史とは築地の或る教會堂の執事の部屋で會つた。女史の云ふ所によると、十日程前に田川夫人の所から船中に於ける葉子の不埒を詳細に知らしてよこした手紙が来て、自分としては葉子の獨旅を保護し監護する事は逆も力に及ばないから、船から上陸する時でも何んの挨拶もせず別れてしまつた。何んでも噂で聞くやうな病氣だとぶつてまだ船に残つてゐるさうだが、萬一そのまゝ歸國するやうにでもなつたら、葉子と事務長との關係は自分達が想像する以上に深くなつてゐると斷定しても差支へない。折角依頼を受けてその責を果さなかつたのは誠に濟まないが、自分達の力では手に餘るのだから推想していただきたいと書いてあつた。で、五十川女史は田川夫人がいゝ加減な捏造などする人でないのをよく知つてゐるから、その手紙を重立つた親類達に示して相談した結果、若し葉子が繪島丸で歸つて

來たら、回復の出来ない罪を犯したものと見て、木村に手紙をやつて破約を斷行させ、一面には葉子に對して親類一同は絶縁する申合せをしたといふ事を聞かされた。さう古藤は語つた。

「僕はこんな事を聞かされて途方に暮れてしまひました。あなたは先刻から合地といふその事務長の事を平氣で口にしてゐるが、こつちではその人が問題になつてゐるんです。今日でも僕はあなたにお會ひするのがいゝのか悪いのか散々迷ひました。然し約束ではあるし、あなたから聞いたらもつと事柄もはつきりするかと思つて、思ひ切つて何ふ事にしたんです。……あつちになつた一人ゐて五十川さんから恐ろしい手紙を受取らなければならぬ、木村君を僕は心から氣の毒に思ふんです。若しあなたが誤解の中にゐるのなら聞かせて下さい。僕はこんな重大な事を一方口で判斷したくはありませんから。」

と話を結んで古藤は悲しいやうな表情をして葉子を見つめた。小癪な事を云ふもんだと葉子は心の中で思つたけれども、指先で弄びながら少し振仰いだ顔はそのまゝに、憐れむやうな、からかふやうな色を微かに浮べて、

「えい、本當を云ひませう」

さう決心するもののやうに古藤は云つてから一と膝乗り出した。

「この十二月に兵隊に行かなければならないものだから、それまでに研究室の仕事を片付くものだけは片づけて置かうと思つたので、何もかも打ち捨ててゐましたから、この間横濱からあなたの電話を受けるまでは、あなたの歸つて來られたのを知らないでゐたんです。尤も歸つて來られるやうな話は何處かで聞いたやうでしたが、而して何かそれには重大な譯があるに違ひないとは思つてゐましたが、所があなたの電話を切ると間もなく木村君の手紙が届いて來たんです。それは多分船島丸より一日か二日早く大北汽船會社の船が着いた筈だから、それが持つて來たんでせう。こゝに持つて來ましたが、それを見て僕は驚いてしまつたんです。随分長い手紙だから後で御覽になるなら置いて行きませう。簡単に云ふと（さう云つて古藤はその手紙の必要な要點を心の中で要約するらしく暫らく黙つてゐたが）木村君はあなたが歸るやうになつたのを非常に悲しんでゐるやうです。而してあなた程不幸な運命に弄ばれる人はない。又あなた程誤解を受ける人はない。誰れも

あなたの複雑な性格を見窮めて、その底にある尊い點を拾ひ上げる人がないから、色々な風にあなたは誤解されてゐる。あなたが歸るについては日本でも種々さまざまな風説が起る事だらうけれども、君だけはそれを信じてくれちや困る。それから……あなたは今でも僕の妻だ、病氣に苦しめられながら、世の中の迫害を存分に受けなければならぬ憐れむべき女だ。他人が何んと云はうと君だけは僕を信じて……若しあなたを信ずる事が出来なければ僕を信じて、あなたを妹だと思つてあなたの爲めに戰つてくれ……本當はもつと最大級の言葉が使つてゐるのだけれども大體そんな事が書いてあつたんです。それで……」

「それで？」
葉子は眼の前で、こんがらかつた絲が靜かにほごれて行くのを見つめるやうに、不思議な興味を感じながら、顔だけは打ち沈んでかう促した。

「それでですね。僕はその手紙に書いてある事とあなたの電話の『滑稽』だつたと云ふ言葉とをどう結び付けて見たらいいか分らなくなつてしまつたんです。木村の手紙と見ない前でもあなたのあの電話の口調には……電話だ……た故か丸

で體氣な冗談口のやうにしか聞こえなかつたものだから……本當を云ふと可なり不快を感じてゐた所だつたのです。思つた通りを云ひますから怒らないで聞いて下さい」

「何を怒りませう。ようこそはつきり仰しやつて下さるわね。あれは私も後で本當に濟まなかつたと思ひましたのよ。木村が思ふやうに私は他人の誤解なんぞそんなに氣にしてはゐないの。小さい時から憎れつになつてゐるんですもの。だから昔……さんが勝手なあて推量などをしてゐるのが少しは癪にさはつたけれども、滑稽に見えて仕方がなかつたんですのよ。そこに以て來て電話であなたのお聲が聞こえたもんだから、飛び立つやうに嬉しくつて思はずしらずあんな輕はずみな事を云つてしまひましたの。木村から頼まれて私の世話をき……下……つた倉地といふ事務長の方もそれはきこくんな親切な人ぢやありますけれども、船で始めて知り合ひになつた方だから、お心安立てなんぞは出來ないでせう。あなたのお聲がした時には本當に敵の中から救ひ出されたやうに思つたんですもの……まあ然しそんな事は歸解するにも及びませんわ。それから何うなさつて？」

古藤は例の厚い理想の被の下から、深く隠さ

「それで結構、五十川の母さんは始めからいやだ／＼と云ふ私を無理に木村に添はせようと置いて置きながら、今になって私の口から一言の辯解も聞かずに、木村に離縁を勧めようと云ふ人なんですから、そりや私恨みもします。腹も立てます。え、私はそんな事をされて黙つて引つ込んでゐるやうな女ぢやない積りですわ。けれどもあなたは初手から私に疑ひをお持ちになつて、木村にも色々御忠告なさつた方ですもの、木村にどんな事を云つておやりにならうとも私にはねつか／＼不服はありませんことよ。……けれどもね、あなたが木村の一番大切な親友でいらつしやると思へばこそ、私は人一倍あなたを頼りにして今日もわざ／＼こんな所まで御迷惑を願つたりして……でもをかしいものね、木村はあなたも信じ、私も信じ、私は木村も信じ、あなたも信じ、あなたは木村は信ずるけれども私を疑つて……そ、まあ待つて……疑つてはいらつしやりません。さうです。けれども信ずる事が出来ないでいらしやるんですわね……かうなると私は倉地さんにでもおすがりして相談相手になつていただく外仕様がありません。いくら私娘の時から周囲から責められ通しに責められてゐても、今だに女手一

つで二人の妹まで背負つて立つ事は出来ませんからね……」
古藤は二重に折つてゐたやうな腰を立てて、少しせきこんで、
「それはあなたに不似合な言葉だと僕は思ひますよ。若し倉地と云ふ人の爲めにあなたが誤解を受けてゐるのなら……」
さう云つてまだ言葉を切らない中に、もう疾うに横濱に行つたと思はれてゐた倉地が、和服のまゝで突然六疊の間に這入つて来た。これは葉子にも意外だつたので、葉子は鋭く倉地に眼くばせしたが、倉地は無頓着だつた。そして古藤のあるなどは度外視した傍若無人さで、火鉢の向座にどつか／＼胡坐をかいた。
古藤は倉地をひと眼見るとすぐ倉地と悟つたらしかった。いつもの癖で古藤はすぐ極度に固くなつた。中斷された話の續きを持ち出しもしないで、黙つたまゝ少し伏眼になつてひかへてゐた。倉地は古藤から顔の見えないのをいゝ事に、早く古藤を返してしまへと云ふやうな顔付きを葉子に見せた。葉子は譯は分らないままにその注意に従はうとした。で、古藤の黙つてしまつたのをいゝ事に、倉地と古藤とを引き合せる事もせず、自分も黙つたまゝ靜かに鐵

瓶の湯を土瓶に移して、茶を二人に勧めて自分も悠々と飲んだりしてゐた。
突然古藤は居住ひをなほして、
「もう僕は歸ります。お話は中途ですけれど何んだか僕は今日はお暇がしたくなりました。あとは必要があつたら手紙で書きます」
さう云つて葉子にだけ挨拶して座を立つた。葉子は例の錢者のやうな姿のまゝで古藤を女關まで送り出した。
失禮しましてね、本當に今日は。もう一度でよう御座いますから是非お會ひになつて下さいましな。一生の御願ひですから、ね」と耳打ちするやうに囁いたが古藤は何んとも答へず、雨の降り出したのに傘も借りずに出て行つた。
「あなたつたらまづいぢやありませんか、何んだつてあんな様に顔をお出しなさるのかう詰るやうに云つて葉子が座につくと、倉地は飲み終つた茶碗を箱杓の上にとんと音をたてて伏せたが、
「あの男はお前、馬鹿にしてかゝつてゐるが、話を聞いてゐると妙に粘り強い所があるぞ。馬鹿もあの位眞直に馬鹿だ、油断の出来ない

「え、それはお聞き下さればどんなにでもお話をしませうとも。けれども天から私を信じて下さらないんならどれ程口を酸くしてお話をしたつて無駄ね」

「お話を伺つてから信じられるものなら信じようとしてゐるのです僕は」

「それはあなたの方のなさる學問ならそれでよう御座んせうよ。けれども人情づくの事はそんなものぢやありませんわ。木村に對して疾まじい事は致しませんが云つたつてあなたが私を信じてゐて下さらなければ、それまでのものではない、倉地さんとはお友達といふだけですと誓つた所が、あなたが疑つていらつしやれば何んの役にも立ちませんからね。……さうしたもんぢやなくつて？」

「それぢや五十川さんの言葉だけで僕にあなたを判斷しろと仰しやるんですか」

「さうね。……それでもよう御座いますえうよ。兎に角それは私が御相談を受ける事柄ぢやありませんわ」

さう云つて葉子の顔は、言葉に似合はず何處までも優しく親しけだつた。古藤はさすがに忸しく、かう縫れて來た言葉を何處までも追はうとせず黙つてしまつた。而して「何事も明ら

さまにしてしまふ方が本當はいゝのだがな」と云ひたげな眼付きで、格別虐げようとするでもなく、葉子が鼻の先きで組んだりほいたりする手先きを見入つた。さうしたまゝでやゝ暫らくの時が過ぎた。

十二時近いこの邊の町並みは一番静かだつた。葉子はふと雨樋を傳ふ雨垂れの音を聞いた。日本に歸つてから始めて空は時雨れてゐたのだ。部屋の中は盛んな鐵瓶の湯氣でさう寒くはないけれども、戸外は薄ら寒い日和になつてゐるらしかつた。葉子はぎごちない二人の間の沈黙を破りたいばかりに、ひよつと首を擡けて腰窓の方を見やりながら、

「おや何時の間にか雨になりましたのねと云つて見た。古藤はそれには答へもせず、五分刈りの地蔵頭を俯垂れて深々と溜息を吐いた。

「僕はあなたを信じ切る事が出来ればどれ程幸だか知れないと思ふんです。五十川さんなぞより僕はあなたと話してゐる方がずつと氣持がよいんです。それはあなたが同じ年頃で、大變美しいといふ爲めばかりぢやないと（そ

目で見えるから僕はイヤなんです。けれどもあなたは……どうしてあなたはそんな氣性でゐながらもつと大膽に物を打ち明けて下さらないんです。僕はほんと云つてもあなたを信ずる事が出来ません。こんな冷淡な事を云ふのを許して下さい。然しこれにはあなたにも責めがあると僕は思ひますよ。……仕方がない僕は木村君に今日あなたと會つたこのまゝを云つてやります。

僕には何う判斷のしやうもありませんもの……然しお願いしますがねえ。木村君があなたから離れなければならぬものなら、いつでも早くそれを知るやうにしてやつて下さい。僕は木村君の心持を思ふと苦しくなります」

一でも木村は、あなたに來たお手紙によると私を信じ切つてくれてゐるのではないんですか。さう葉子に云はれて、古藤は又返す言葉もなく黙つてしまつた。葉子は見る／＼非常に興奮して來たやうだつた。抑へ／＼ゐる葉子の氣持が抑へ切れなくなつて激しく働き出して來ると、それは何時でも惻々として人に迫り人を壓した。顔色一つ變へないで元のまゝに親し

込めて相手を見やりながら、胸の奥底の心持を傳へて來るその聲は、不思議な力を電氣のやうに感じて震へてゐた。

だが今は葉子の心を鞭つ管となつた。而かも倉地の妻と子とはこの東京にちやんと住んでゐる。倉地は毎日のやうにその人達に遇つてゐるのに相違ないのだ。

思ふ男を何處から何處まで自分のものにして、自分のものにしたと云ふ證據を握るまでは、心が責めて／＼責めぬかれるやうな戀愛の殘虐な力に葉子は晝となく夜となく打ちのめされた。船の中での何事も打ち任せ切つたやうな心易い氣分は他人事のやうに、遠い昔の事のやうに悲しく思ひやられるばかりだつた。どうしてこれほどまでに自分といふものの落き付き所を見失つてしまつたのだらう。さう思ふ下から、かうしては一刻もゐられない。早く／＼する事だけをして仕舞はなければ、取り返しがつかなくなる。何處からどう手をつければいゝのだ。敵を斃さなければ、敵は自分を斃すのだ。何んの躊躇。何んの思案。倉地が去つた人達に未練を残すやうならば自分の戀は石や瓦と同様だ。自分の心で何もかも過去は一切焼き盡して見せる。木部もない、定子もない。まして木村もない。皆んな捨てる、皆んな忘れる。その代り倉地にも過去といふ過去を悉皆忘れさせずにおくものか。それ程の蠱惑の力と情熱の炎とが

自分にあるかないか見てゐるがいゝ。さうした一圖な熱意が身をこがすやうに燃え立つた。葉子は新聞記者の來襲を恐れて宿にとど籠つたまま、火鉢の前に坐つて、倉地の不在の時はこんな妄想に身も心もかきまわしられてゐた。段々募つて来るやうな腰の痛み。肩の凝り。そんなものさへ葉子の心をます／＼焦立たせた。

殊に倉地の歸りのおそい晩などは、葉子は座にも居た／＼まねなかつた。倉地の居間になつてゐる十疊の間に行つて、そこに倉地の面影を少しでも忍ぼうとした。船の中での倉地との樂しい思ひ出は少しも浮んで来ずに、何んな構へとも想像は出来ないが、兎に角倉地の住居の或る部屋に、三人の娘達に取り捲かれて、美しい妻にかしづかれて、杯を干してゐる倉地ばかりが想像に浮んだ。そこに脱ぎ捨てて在る倉地の普段着は益々葉子の想像を握まゝにさせた。いつでも葉子の情熱を引つ掴んでゆすぶり立てるやうな倉地特有な膚の香、芳醇な酒や煙草から香ひ出るやうなその香を葉子は衣類をかき寄せて、それに顔を埋めながら、麻痺して行くやうな氣持で嗅ぎに嗅いだ。その香の一番奥に、中年の男に特有なふけのやうな不快な香、他人ののであつたなら葉子は一たまりもなく鼻を

掩ふやうな不快な香を嗅ぎつけると、葉子は肉體的にも一種の陶醉を感じて来るのだつた。その倉地が妻や娘達に取り捲かれて樂しく一夕を過ごしてゐる。さう思ふと有り合せるものを取つて打ち毀すか、掴んで引き裂きたいやうな衝動が體もなく高して来るのだつた。

それでも倉地が歸つて来ると、それは夜おそくなつてからであつても葉子は唯々子供のやうに幸福だつた。それまでの不安や焦燥は何處かに行つてしまつて、惡夢から幸福な世界に目覺めたやうに幸福だつた。葉子はすぐ走つて行つて倉地の胸に多愛なく抱かれた。倉地も葉子をも自分の胸に引き締めた。葉子は廣い厚い胸に抱かれながら、單調な宿屋の生活の一日中に起つた些細な事までを、その表情の格かな、鈴のやうな涼しい聲で、自分を樂しませてゐるものゝ如く語つた。倉地は倉地でその聲に酔ひしれて見えた。二人の幸福は何處に絶頂があるのか判らなかつた。二人だけで世界は完全だつた。葉子のする事は一つ／＼倉地の心がするやうに見えた。倉地のかうあり度いと思ふ事は葉子が豫めさうあらせてゐた。倉地のしたいと思ふ事は、葉子がちやんと仕掛けてゐた。茶碗の置き場所まで、着物の仕舞所まで、倉地は自分の

ものなのだ。も少し話を續けてゐて見る、お前の遣り繰りでは間に合はなくなるから。一體何んでお前はあんな男をかまひつける必要があるんか、解らないぢやないか。木村にでも未練があれば知らない事。」

かう云つて不敵に笑ひながら押し付けるやうに葉子を見た。葉子はぎくりと針を打たれたやうに思つた。倉地をいつかり握るまでは木村を離してはいけないと思つてゐる胸算用を倉地に偶然に云ひ當てられたやうに思つたからだ。然し倉地が本當に葉子を安心させる爲めには、しなければならぬ大事な事が少くとも一つ残つてゐる。それは倉地が葉子と表向き結婚の出来るだけの始末をして見せる事だ。手取り早く云へばその妻を離縁する事だ。それまではどうしても木村をのがしてはならない。そればかりではない、若し新聞の記事などが問題になつて、倉地が事務長の位置を失ふやうな事にでもなれば、少し氣の毒だけれども木村を自分の鎖から解き放さずにおくのが何かにつけて便宜でもある。葉子は然し前の理由はおくびにも出さずに後の理由を巧みに倉地に告げようと思つた。一今日は雨になつて出かけるのが大儀だ。晝には湯豆腐でもやつて寝てくれようか」

二十六

さう云つて早くも倉地がそこに横にならうとするのを葉子は強ひて起き返らした。

「水戸とかでお座敷に出てゐた人ださうですが、倉地さんに落籍されてからもう七八年にもなりませうか、それは舊當ない、奥さんで、逆も商賣をしてゐた人のやうではありません。尤も水戸の士族のお姫御で出るのが早いから倉地さんの所にいらつしやるやうになつたんださうですからその筈でもあります、ちつとも擦れていらつしやるやうにゐて、氣もお附きにはなるし、しとやかでもあり、……」

ある晩雙鶴館の女將が話に來て四方山の噂の序でに倉地の妻の様子を語つたその言葉は、はつきり、葉子の心に焼きついてゐた。葉子はそれが優れた人であると聞かされれば聞かされる程好ましさを増すのだつた。自分の眼の前には大きな障礙物が眞暗に立ちふさがつてゐるのを感じた。嫌惡の情にかきむしられて前後の事も考へずに別れてしまつたのではあつたけれども、假にも戀らしいものを感じた木部に對して葉子が抱く不思議な情緒、——普段は何事もなかつたやうに忘れ果ててはゐるものの、

思ひも寄らないきつかけに、不圖胸を引き締めて捲き起つて來る不思議な情緒、——一種の絶望的なノスタルジア——それを葉子は倉地にも倉地の妻にも寄せて考へて見る事の出来る不幸を持つてゐた。又自分の生んだ子供に對する執着。それを男も女も同じ程度に應しく感ずるものか何うかは知らない。然しながら葉子自身の實感から云ふと、何んと云つても喻へやうもなくその愛着は深かつた。葉子は定子を見ると知らぬ間に木部に對して戀に等しいやうな強い感情を動かしてゐるのに氣が附く事が屢々だつた。木部との愛着の結果定子が生れるやうになつたのではなく、定子といふものがこの世に生れ出る爲めに、木部と葉子とは愛着の羈に繋がれたのだとさへ考へられもした。葉子は又自分の父がどれ程葉子を溺愛してくれたかを思つて見た。葉子の経験から云ふと、両親共になくなつてしまつた今、慕はしさなつかしさを餘計感じさせるものは、格別是れと云つて情愛の徴を見せはしなかつたが、始終軟かい眼色で自分達を見守つてくれてゐた父の方だつた。それから思ふと男と云ふものも自分の生ませた子供に對しては女に譲らぬ執着を持ち得るものに相違ない。こんな過去の甘い回想ま

な様子にも似ず、襦袢の袖を引き出す隙もなく眼に涙を一杯ためてしまつてゐた。葉子にはそれが恨めしくも憎くもなかつた。唯、何んともなく親身な切なさが自分の胸にもこみ上げて來た。

「悪く取るところですか。世の中の人が一人でもあなただのやうな心持で見てくれたら、私はその前に泣きながら頭を下げて難有う御座いますと云ふ事でせうよ。これまでのあなたの用心盡して私はもう十分。又いつか御恩返しの出来る事もありませう。……それではこれで御免下さいまし。お妹御にもどうか着物のお禮をくれ。……もよろしく」

少し泣き聲になつてさう云ひながら、葉子は女將とその妹分にあたるといふ人に禮心に置いて行かうとする米國製の二つの手提げをしまひこんだ違ひ棚を一寸見やつてそのまゝ座を立つた。

雨風の爲めに夜は賑やかな往來もさすがに人通りが絶えくだつた。車に乗らうとして空を見上げると、雲はさう濃くはかゝつてゐないと見えて、新月の光が朧ろに空を明るくしてゐる中を嵐模様の雲が恐ろしい勢で走つてゐた。部屋の中の暖かさに引きかへて、濕氣を十分に含んだ風は裾前を煽つてぞくぞくと肩に逼つた。ばた／＼と風に弄られる前幌を車夫がかけようとしてゐる隙から、女將がみづ／＼しい丸霏を雨にも風にも思ふまゝ打たせながら、女中のさしかざさうとする雨傘の蔭に隠れようともせず、何か車夫に云ひ聞かせてゐるのが大事らしく見やられた。車夫が梶棒を舉げようとする時女將が祝儀袋をその手に渡すのが見えた。

「左様なら」

「お大事に」

向ひ風がうなりを立てて吹きつけて來ると、車夫は思はず車を煽らせて足を止める程だつた。この四五日火鉢の前ばかりにゐた葉子に取つては身を切るかと思はれるやうな寒さが、厚い膝かけの口まで通して襲つて來た。葉子は先程女將の言葉聞いた時には左程とも思つてゐなかつたが、少し程立つた今になつて見ると、それがひし／＼と身に應へるのを感じ出した。自分はひよつとするとあざむかれてゐる、弄びものにされてゐる。倉地は矢張り何處までもあの妻子と別れる氣はないのだ。唯、長い航海中の氣まぐれから、出來心に自分を征服して見ようとして企てたばかりなのだ。この戀のいきさつが葉子から持ち出されたものであるだけに、こんな心持になつて來ると、葉子は矢も楯もたまたま自分ひひけ目を覺えた。幸福——自分が夢想してゐた幸福がとう／＼來たと誇りがにかつたらしい。倉地は船の中で同様の喜びでまだ葉子を喜んではゐる。それに疑ひを入れよう餘地はない。けれども美しい貞節な妻と可憐な娘を三人まで持つてゐる倉地の心がいつまで葉子に牽かされてゐるか、それを誰れが語り得よう、葉子の心は幌の中に吹きこむ風の寒さと共に冷えて行つた。世の中から綺麗に離れてしまつた孤獨な魂がたつた一つそこには見出されるやうにも思へた。何處に嬉しさがある、樂しさがある。自分は又一つの今までに味はなかつたやうな苦惱の中に身を投げ込もうとしてゐるのだ。又うま／＼と悪戯者の運命にしてやられたのだ。それにしてももうこの瀬戸際から引く事は出來ない。死ぬまで……さうだ死んでもこの苦しみに浸り切らずに置くのか。葉子には樂しさが苦しきなの、苦しさが樂しきなの、全く見界がつかなくなつて

手でした通りを葉子がしてゐるのを見出してゐるやうだつた。

「然し倉地は妻や娘達を何うするのだらう」こんな事をそんな幸福の最中にも葉子は考へない事もなかつた。然し倉地の顔を見ると、そんな事は思ふも恥かしいやうな些細な事に思はれた。葉子は倉地の中にすつかり融け込んだ自分のを見出すのみだつた。定子までも犠牲にして倉地をその妻子から切り放さうなどぶふくらみは餘りに馬鹿らしい取越苦勞であるのを思はせられた。

「さうだ、生れてからこのかた私が求めてゐたものはとう／＼来ようとしてゐる。然しこんな事がかう手近にあらうとは本當に思ひもよらなかつた。私見たいな馬鹿はない。この幸福の頂上が今だと誰れか教へてくれる人があつたら、私はその瞬間に喜んで死ぬ。こんな幸福を見てから下り坂にまで生きてゐるのはいやだ。それにしてもこんな幸福でさへが何時かは下り坂になる時があるのだらうか」そんな事を葉子は幸福に浸り切つた夢心地の中に考へた。

葉子が東京に着いてから一週間に、宿の女將の周旋で、芝の紅葉館と道一つ隔てた苔香園

といふ藝妓専門の植木屋の裏にあたる二階建の家を借りる事になつた。それは元紅葉館の女中だつた人が或る豪商の妾になつたについて、その豪商といふ人が建ててあてがつた一構へだつた。雙鶴館の女將はその女と懇意の間だつたが、女に子供が幾人か出来て少し手狭過ぎるので他所に移転しようかと云つてゐたのを聞き知つてゐたので、女將の方で適當な家を探し出してその女を移らせ、その跡を葉子が借りる事に取計らつてくれたのだつた。倉地が先きに行つて中の様子を見て来て、杉林の爲めに少し日當りはよくないが、當分の隠れ家としては屈竟だと云つたので、直ぐさまそこに移る事に決めたのだつた。誰れにも知れないやうに引越さねばならぬといふので、荷物を小別けして持ち出すのにも、女將は自分の女中達にまで、それが倉地の本宅に運ばれるものと云つて知らせた。運搬人は凡て芝の方から頼んで来た。而して荷物があらかた片付いた所で、ある夜遅く、而かもびし／＼と吹き降りのする寒い雨風の折を選んで、葉子は轎車に乗つた。葉子としてはそれ程の警戒をするには當らないと思つたけれども、女將がどうしても聴かなかつた。安全な所に送り込むまでは一旦お引受けした手前、

氣が済まないといふひ服つた。

葉子が逃へておいた仕立おろしの衣類を着かへてゐるとそこに女將も來合せて脱ぎ返しの世話を見た。襟の合せ目をヒンで留めながら葉子が着がへを終へて座につくのを見て、女將は嬉しうに採み下をしながら、

「これですここに大丈夫着いて下さりさへすれば私は重荷が一つ降りると申すものです、然しこれからがあなたは御大抵や御座いませんね。あちらの奥様の事など思ひますと、どちらにどうお仕向けをしいやら私には判らなくなりま。あなたの心持も私は身にしてみても察し申しますが、何處から見ても批點の打ち所のない奥様のお身の上、私には御不便で涙がこぼれてしまふんで御座いますよ。でね、これからの事についてちや私はかう決めました。何んでも出来ま。事ならと申上げたいんで御座いますけれども、私には心底をお打ち明け申しました處、どちら様にも義理が立ちませんから、薄情でも今日かぎりこのお話には手をひかせていたいただきます。どうか悪くお取りになりませんやうにね。どうも私はこんなでゐながら甲斐性が御座いませんで。」

さう云ひながら女將は口を切つた時の嬉しげ

に上つて来る葉子を見出すだらうとばかり思つてゐたらしい倉地は、この理由も知れぬ葉子の狂體に驚いたらしかつた。

「どうしたと云ふんだな、え」

と低く力を罩めて云ひながら葉子は自分の胸から引き離さうとするけれども、葉子は唯も無上にかぶりを振るばかりで、駄々兒のやうに、倉地の胸にしがみついた。出来るならその肉の厚い男らしい胸を噛み破つて、血みどろになりながらその胸の中に顔を埋めこみたい——さう云ふやうに葉子は倉地の着物を噛んだ。

徐かにはあるけれども倉地の心は段々葉子の心持に染められて行くやうだつた。葉子をかき抱く倉地の腕の力は靜かに加はつて行つた。その息氣づかひは荒くなつて來た。葉子は氣が遠くなるやうに思ひながら、締め殺すほど引きしめてくれと念じてゐた。そして顔を伏せたまゝ涙の隙から切れぬに叫ぶやうに聲を放つた。

「捨てないで頂戴とは云ひません……捨てるなら捨てて下さつてもよう御座んす……その代り……その代り……はつきり仰しやつて下さい、ね、……私は唯も引きずられて行くのがいやなんです……」

何を云つてゐるんだお前は……」倉地の噛んでふくめるやうな聲が耳許近く葉子にからさうやいた。

「それだけは……それだけは誓つて下さい……ごまかすのは私はいや……いやです」

「何を……何を……ごまかすかい」

「そんな言葉が私は嫌ひです」

「葉子！」

倉地はもう熱情に燃えてゐた。然しそれは何時でも葉子を抱いた時に倉地に起る野獸のやうな熱情とは少し違つてゐた。そこにはやさしく女の心をいたはるやうな影が見えた。葉子はそれを嬉しくも思ひ、物足らなくも思つた。

葉子の心の中は倉地の妻の事を云ひ出さうとする熱意で一杯になつてゐた。その妻が貞淑な美しい女であると思へば思ふ程、その人が二人の間に挟まつてゐるのが呪はしかつた。縱令捨てられるまでも一度は倉地の心をその女から根こそぎ奪ひ取らなければ堪念が出来ないやうなひた向きに狂暴な欲念が胸の中ではち切れさうに煮えくり返つてゐた。けれども葉子はどうしてもそれを口の端に上せる事は出来なかつた。その瞬間に自分に對する誇りが塵芥のやうに踏み躪られるのを感じたからだ。葉子

は自分ながら自分の心がじれつたかつた。倉地の方から一言もそれを云ひはないのが恨めしかつた。倉地はそんな事は云ふにも足らないと思つてゐるのかも知れないが……いゝえそんな事はない、そんな事のあらう筈はない。倉地は矢張り二股かけて自分を愛してゐるのだ。男の心にはそんな嫌な未練がある筈だ。男の心とは云ふまい、自分も倉地に出遇ふまでは、異性に對する自分の愛を勝手に三つにも四つにも裂いて見る事が出来たのだ。……葉子はこゝにも自分の暗い過去の經驗の爲めに責めさいなまれた。進んで戀の處となつたものが當然陥らなければならぬ。噓へやうのない程暗く深い疑惑は後から後から口實を作つて葉子を襲ふのだつた。葉子の胸は言葉通りに張り裂けようとしてゐた。

然し葉子の心が傷めば傷むほど倉地の心は熱して見えた。倉地は何うして葉子がこんなに機嫌を悪くしてゐるのかを思ひ迷つてゐる様子だつた。倉地はやがて強ひて葉子を自分の胸から引き放してその顔を強く見守つた。

「何をさう理窟もなく泣いてゐるのだ……お前は俺れを疑つてゐるな」

葉子は「疑はないでゐられますか」と答へよう

しまつてゐた。魂を締め木にかけてその油でも搾りあげるやうな悶えの中に已むに已まれぬ執着を見出して我れながら驚くばかりだつた。

ふと車が停つて梶棒が卸されたので葉子はつと夢心地から我れに返つた。恐ろしい吹き降りになつてゐた。車夫が片足で梶棒を踏まへて、風で車のよろめくのを防ぎながら、前幌をはづしにかゝると眞暗だつた前方から幽かに光が漏れて來た。頭の上ではざあ／＼と降りしきる雨の中に、荒海の潮騒のやうな物凄ひ響きが何か變事でも湧いて起りさうに聞こえてゐた。葉子は車を出ると風に吹き飛ばされさうになりながら、髪や新調の着物の濡れるのもかまはず空を仰いで見た。漆を流したやうに雲で固く鎖された雲の中に、漆よりも色濃くむら／＼と立騒いでゐるのは古い杉の木立だつた。花壇らしい竹垣の中の灌木の類は枝先を地につけんばかりに吹き靡いて、枯葉が渦のやうにばら／＼と飛び廻つてゐた。葉子は我れにもなくそこにべつたり坐り込んでしまひたくなつた。

「おい早く這入らんかよ、濡れてしまふぢやないか」
倉地がランプの灯をかばひつゝ家の中から怒鳴

るのが風に吹きちぎられながら聞こえて來た。倉地がそこにあると云ふ事さへ葉子には意外のやうだつた。大分離れた所でどたん／＼と戸が何か外づれたやうな音がしたと思ふと、風はまた一しきり／＼なりを立てて杉叢をこそいで通りぬけた。車夫は葉子を助けようにも梶棒を離れれば車をけし飛ばされるので、提灯の尻を風上の方斜に向けて眼八分に上げながら何か大聲に後ろから聲をかけてゐた。葉子はす／＼として玄關口に近づいた。一杯機嫌で待ちあぐんだらしい倉地の顔の酒ほてりに似ず、葉子の顔は透き通る程青ざめてゐた。な／＼と先づ敷臺に腰を下して、十歩ばかり歩くだけで泥になつてしまつた下駄を、足先きで手傳ひながら脱ぎ捨てて、やうやく板の間に立ち上つてから、虚ろな眼で倉地の顔をちつと見入つた。

「どうだつた寒かつたらう。まあこつちにお上り」
さう倉地は云つて、そこに合はしてゐた女中らしい人に手ランプを渡すと華車な少し急な階子段を昇つて行つた。葉子は吾妻コートも脱がずにいゝ加減濡れたまゝで黙つてその後から跟いて行つた。

二階の間は電燈で晝間より明るく葉子には思はれた。月といふ月がたゞしと鳴りはためいてゐた。板葺きらしい屋根に一寸釘でも敲きつけるやうに雨が降りつけてゐた。座敷の中は暖かくいきて、飲み食ひする物が散らかつてゐるやうだつた。葉子の注意の中にはそれだけの事が辛うじて入つて來た。そこに立つたまゝの倉地に葉子は吸ひつけられるやうに身を投げかけて行つた。倉地も迎へ取るやうに葉子を抱いたと思ふとそのまゝそこにどつかと胡坐をかけた。そして自分の火照つた頬を葉子ののにすり附けるとさすがに驚いたやうに

「こりやどうだ冷えたにも水のやうだ」
と云ひながらその顔を見入らうとした。然し葉子は無上／＼に自分の顔を倉地の廣い暖かい胸に埋めてしまつた。なつかしみと憎しみとのもつれ合つた嘗て経験しない激しい情緒がすぐに葉子の涙を誘ひ出した。ヒステリーのやうに間歇的に牽き起る吸り泣きの聲を噛みしめても咽みしめても止める事が出来なかつた。葉子はさうしたまゝ倉地の胸で息氣を引き取る事が出来たらと思つた。それとも自分の嘗めてゐるやうな魂の悶えの中に倉地を捲き込む事が出来たらばと思つた。

いそ／＼と世話女房らしく喜び勇んで二階

ゐた事を思つた。倉地と關係がなかつた以上、いつでも一人で寝てゐたのだが、好くもそんな事が永年に亘つて出来たものだつたと自分ながら不思議に思はれる位、それは今の葉子を物足らなく心淋しくさせてゐた。かうして静かな心になつて考へると倉地の葉子に對する愛情が誠實であるのを疑ふべき餘地は更になかつた。日本に歸つてから幾日にもならないけれども、今までは兎に角倉地の熱意に少しも變りが起つた所は見えなかつた。如何に戀に眼がふさがつても、葉子はそれを見極める位の冷靜な眼力は持つてゐた。そんな事は十分に知り抜いてゐる癖に、おぞましくも昨夜のやうな馬鹿な眞似をしてしまつた自分が自分ながら不思議な位だつた。どんなに情に激した時でも大抵は自分を見失ふやうな事はしないで通して來た葉子にそれがひどく恥かしかつた。船の中にある時にヒステリーになつたのではないかと疑つた事が二三度ある——それが本當だつたのではないか知らんとも思はれた。而して夜着にかけた洗ひ立てのキャリコの裏の冷えくするのをふくよかな頰に感じながら心の中で獨語した。

「何を私は考へてゐたんだらう。どうかして

心が狂つてしまつたんだ。こんな事はつひでない事なのに——さう云ひながら葉子は肩だけ起き直つて、枕頭の水を手さぐりでしたゝか飲みほした。氷のやうに冷え切つた水が咽詰を靜かに流れ下つて胃の腑に擴がるまではつきりと感じられた。酒も飲まないのだけれども、酔後の水と同様に、胃の腑に味覺が出來て舌の知らない味を味ひ得たとと思ふ程、快く感じた。それほど胸の中は熱を持つてゐたに違ひない。けれども脚の方は反對に恐ろしく冷えを感じた。少しその位置を動かすと白さをそのまゝな寒い感じがシューツから通つて來るのだつた。葉子は又きびしく倉地の胸を思つた。それは寒さと愛着とから葉子を追ひ立てて二階に走らせようとする程だつた。然し葉子は既にそれをやつと耐へるだけの冷靜さを恢復してゐた。倉地の妻に對する處置は昨夜のやうであつては手際よくは成し遂げられぬ。もつと冷めたい智慧に力を借りなければならぬ。かう思ひ定めながら曉の白むのを知らずに又眠りに誘はれて行つた。

翌日葉子はそれでも倉地より先きに眼を覺まして手早く着がへをした。自分で板戸を繰り開けて見ると、總先には枯れた花壇の草や灌木が風の爲めに吹き亂された小庭があつて、その先きは、杉、松、その他の喬木の茂みを隔てて苔香園の手廣い庭が見やられてゐた。昨日までゐた雙鶴館の周圍とは全く違つた、同じ東京の内とは思はれないやうな靜かな隅がた自然の姿が葉子の眼の前には見互された。まだ暗れ切らない狭霧を罩めた空氣を辿り、杉の葉越しに射しこむ朝の日の光が、雨にいつとりと潤つた庭の黒土の上に、眞直な杉の幹を棒綸のやうな影にして落してゐた。色さまざまな櫻の落葉が、日向では黄に紅に、日蔭では靉に紫に庭を彩つてゐた。彩つてゐると云へば菊の花もあちこちにしつけられてゐた。然し一帯の趣味は葉子の喜ぶやうなものではなかつた。塵一つさへない程、貧しく見える瀟灑な趣味か、何處にでも金銀がそのまゝ捨ててあるやうな驕奢な趣味でなければ満足が出來なかつた。残つたのを捨てるのが惜しいとか勿體ないとか云ふやうな心持で、簡訥な石や植木なゝを入れたんだらしい庭の造り方を見たりすると、すぐさまむしり取つて眼にかゝらない所に投げ捨てたく思ふのだつた。その小庭を見ると葉子の心の中にはそれを自分の思ふやうに造り變へる計畫がうずくする程湧き上つて來た。

としたが、どうしてもそれは自分の面目にかけ
て口には出せなかつた。葉子は涙に解けて漂
ふやうな眼を恨めしげに大きく開いて黙つて倉
地を見返した。

「今日俺れはとう／＼本店から呼び出されたん
だつた。船の中でのをそれとなく聞き組さう
としをつたから、俺れは残らず云つて退けたよ。
新聞に俺れ達の事が出た時でもが、慌てるがも
のはないと思つとつたんだ。どうせ何時かは知
れる事だ。知れる程なら、大つびらで早いがい
位のものだ。近い中に會社の方は首になら
うが、俺れは、葉子、それが満足なんだぞ。自
分で自分の面に泥を塗つて喜んで俺れが馬鹿
に見えような」
さう云つてから倉地は激しい力で再び葉子を
自分の胸に引き寄せようとした。

葉子は然しさうはさせなかつた。素早く倉地
の膝から飛び退いて疊の上に頬を伏せた。倉地
の言葉をそのまゝ信じて、素直に嬉しがつて、
心を涙に溶いて泣きたかつた。然し萬一倉地
の言葉がその場通れの勝手な造り事だったら：
何故倉地は自分の妻や子供達の事を云つては
聞かせてくれないのだ。葉子は譯の解らない涙
を泣くより術がなかつた。葉子は突つ伏したま

までさめ／＼と泣き出した。

戸外の嵐は氣勢を加へて、物凄じく更けて
行く夜を荒れ狂つた。

「俺れの云うた事が解らんならまあ見とるがい
いさ。俺れはくどい事は好かんからな」

さう云ひながら倉地は自分を抑制しようとする
やうに強ひて落ち着いて、葉巻を取り上げて煙
草盆を引き寄せた。

葉子は心の中で自分の態度が倉地の氣をまづ
くしてゐるのをはら／＼しながら思ひやつた。

氣をまづくするだけでもそれだけ倉地から離れ
さうなのがこの上なくつらかつた。然し自分で
自分をどうする事も出来なかつた。

葉子は嵐の中に我れと我が身をさいなみな
がらさめ／＼と泣き續けた。

二十七

「何を私は考へてゐたんだらう。どうかして
心が狂つてしまつたんだ。こんな事はつひぞ無
い事だのに」

葉子はその夜倉地と部屋を別にして床に就い
た。倉地は階上に、葉子は階下に。繪島丸以來
二人が離れて寝たのはその夜が始めてだつた。
倉地が眞心をこめた様子で彼れ是れ云ふのを、

葉子はすげなく跳ねつけて、折角とつてあつた
二階の寢床を、女中以下に運ばしてしまつた。

横になりはしたが何時までも寝付かれないで二
時近くまで言葉通りに輾轉反側じつ／＼、繰返し
繰返し倉地の夫婦關係を種々に安想したり、自
分にまくしかゝつて来る將來の運命をひたすら
に黒く塗つて見たりしてゐた。それでも果ては
頭も體も疲れ果てて夢ばかりな眠りに陥つて
しまつた。

うつら／＼とした眠りから、突然唸へやうの
ない淋しさにひし／＼と襲はれて——それはそ
の時見た夢がそんな暗示になつたのか、それと
も感覺的な不満が眼を覺ましたのか分らなかつ
た——葉子は暗闇の中に眼を開いた。嵐の爲め
に電線に故障が出来たと見えて、眠る時には點
け放しにしておいた灯が何處も此處も消えてゐ
るらしかつた。嵐は然し何時の間に風が吹きてし
まつて嵐の後の晩秋の夜は殊更靜かだつた。
山内一面の杉森からは深山のやうな鬼氣がしん
しんと吐き出されるやうに思へた。蟋蟀が隣り
の部屋の隅でかすれ／＼に聲を立ててゐた。儼々
かな面かも淺い睡眠には過ぎなかつたけれども
葉子の頭は、曉前の冷えを感じて冴え／＼と澄
んでゐた。葉子は先づ自分がたつた一人で寝て

さ。葉子は思はず自分の頬を倉地のにすり附けると、寝起きの倉地の頬は火のやうに熱く感ぜられた。

「もう八時……お起きにならないと横濱の方がおそくなるわー」

倉地は矢張り物憎げに、袖口からいよきんと現はれ出た太い腕を延べて、短い散切頭をごし／＼と掻き廻しながら、

「横濱……横濱にはもう用はないわい。何時首になるか知れない俺れがこの上の御奉公をしてたまるか。是れも皆んなお前のお蔭だぞ。業つくばり奴」

と云つていきなり葉子の頸筋に腕をまいて自分の胸に押しつけた。

暫らくして倉地は寢床を出たが、昨夜の事などはけろりと忘れてしまつたやうに平氣でゐた。二人が始めて離れ／＼に寝たのにも一言も云はないのがかすかに葉子を物足らなく思はせたけれども、葉子は胸が廣々として何んと云ふ事もなく喜ばしくつて堪らなかつた。で、倉地を残して臺所に下りた。自分で自分の食べるものを料理するといふ事にも嘗てない物珍らしさと嬉しさを感じた。

臺一疊がた日の射しこむ茶の間の六疊で二

人は朝餉の膳に向つた。嘗ては葉山で木部と二人でかうした楽しい膳に向つた事もあつたが、その時の心持と今の心持とを比較する事も出来ない。葉子は思つた。木部は自分でこの／＼と臺所まで出かけて来て、長い自炊の経験などを得意げに話して聞かせながら、自分で米を磨いだり、火を燃きつけたりした。その當座は葉子もそれを楽しいと思はないではなかつた。然し暫らくの中にそんな事をする木部の心持がさもしくも思はれて来た。おまけに木部は日々々々と物臭きになつて、自分では手を下しめせずに、邪魔になる所に突つ立つたまま、指圖がましい事を云つたり、葉子には何等の感興も起させない長詩を例の御自慢の美しい聲で朗々と吟じたりした。葉子はそんな日に遇ふと輕蔑し切つた冷やかな眸でじろりと見かへしてやりたいやうな氣になつた。倉地は始めからそんな事はしてゐでしなかつた。大きな駄々兒のやうに、顔を洗ふといきなり膳の前に胡坐をかいて、葉子が作つて出したものを片端からむしや／＼と綺麗に片付けて行つた。これが木部だつたら、出す物の一つ／＼に知つたか振りの講釋をつけて、葉子の腕前を感傷的に賞めちぎつて、可なり澤山を喰はずに残してしまふだらう。さう思ひな

がら葉子は眼で撫でさするやうにして倉地が一心に箸を動かすのを見守らずにはゐられなかつた。

やがて箸と茶碗とをかりりと投げ捨てると、倉地は所在無きやうに葉巻をふかして暫らくこれを眺め廻してゐたが、いきなり立ち上つて尻つばいよりをしながら裸足のまゝ庭に飛んで降りた。而してハーキューリーズが針仕事でもするやうなぶきつちやうな様子で、狭い庭を歩き廻りながら片隅から片隅に出した。まだびしやびしやするやうな土の上に大きな足跡が縦横に印された。まだ枯れ果てない菊や萩などが雜草と一緒にたに情けも容赦もなく根こぎにされるのを見るとさすがの葉子もはら／＼した。而して縁際にしやがんで柱に凭れながら、時には餘りのをかしさに高く聲を擧げて笑ひこけずにはゐられなかつた。

倉地は少し胸が疲れると香煙園の方を窺つたり、臺所の方に氣を配つたりしておいて、大急ぎで葉子のゐる所に寄つて来た。而して泥になつた手を後ろに廻して、上體を前に折り曲げて、葉子の鼻の先きに自分の顔を突き出してお壺口をした。葉子も惡戯らしく周圍に眼を配つてその顔を兩手に挟みながら自分の唇を與

それから葉子は家の中を隅から隅まで見て廻つた。昨日玄關口に葉子を出迎へた女中が、戸を練る音を聞きつけて、逸早く葉子の所に飛んで來たのを案内に立てた。十八九の小綺麗な娘で、きび／＼した氣性らしいのに、如何にも蓮葉でない、主人を持てば主人思ひに違ひないのを葉子はひと目で見貫いて、これはいゝ人だと思つた。それは矢張り雙鶴館の女將が周旋してよこした、宿に出入りの豆腐屋の娘だつた。つや（彼女の名はつやと云つた）は階子段下の玄關に續く六疊の茶の間から始めて、その隣りの床の間附きの十二疊、それから十二疊と廊下を隔てて玄關と並ぶ茶席風の六疊を案内し、廊下を通つた突き當りにある思ひの外手廣い事所、風呂場を経て張り出しになつてゐる六疊と四疊半（そこがこの家を建てた主人の居間となつてゐたらしく、總ての造作に特別な贅寄が凝らしてあつた）に行つて、その兩戸を繰り明けて庭を見せた。そこの前栽は割合に荒れずにゐて、眺めが美しかったが、葉子は垣根越しに苔香園の母屋の下の便所らしい汚い建物の屋根を見附けて困つたものがあると思つた。その外には臺所の側につやの四疊半の部屋が西向きにいつてゐた。女中部屋を除いた五つの部屋はいづ

れもなげしつ附きになつて、三つまでは床の間さへあるのに、何うして集めたものか兎に角掛物なり置物なりがちやんと飾られてゐた。家の造りや庭の様子などには可なりの註文も相當の眼識も持つてゐるが、繪畫や書の事になると葉子はおどましくも鑑識の力がなかつた。生れつき機械に働く／＼氣のお蔭で、見たり聞いたりした所から、美術を愛好する人々と膝を並べても、兎に角餘りぼろらしいぼろは出さなかつたが、若い美術家などが讃める作品を見ても何處が優れて何處に美しさがあるのか葉子には少しも見當のつかない事があつた。繪と云はず字と云はず、文學的の作物などに對しても葉子の頭は憐れな程通俗的であるのを葉子は自分で知つてゐた。然し葉子は自分の負けじ魂から自分の見方が凡俗だとは思ひたくなかつた。藝術家など云ふ連中には、骨董などをいぢくつて古味と云ふやうなものを難有がる風流人と共通したやうな氣取りがある。その似而非氣取りを葉子は幸にも持ち合はしてゐないのだと決めてゐた。葉子はこの家に持ち込まれてゐる幅物を見て廻つても、本當の値打ちがどれ程のものだか更に見當がつかなかつた。唯とあるべき所にさういふ物のある事を満足に思つた。

つやの部屋のきちんと手際よく片付いてゐるのや、二三日突家になつてゐたのにも係はらず、臺所が綺麗に拭き掃除がされてゐて、布巾などが清々しくから／＼に乾かして懸けてあつたりするのは一々葉子の眼を快く刺戟した。思つたより住まひ勝手の良い家と、はき／＼した清潔好きな女中とを得た事が先づ葉子の寢起きの心持をすが／＼しくさせた。

葉子はつやの汲んで出した丁度いゝ加減の湯で顔を洗つて、輕く化粧をした。昨夜の事などは氣にもかゝらない程心は輕かつた。葉子はその輕い心を抱きながら靜かに二階に上つて行つた。何とはなしに倉地に甘えたいやうな、詫びたいやうな氣持でそつと襖を明けて見ると、あの強烈な倉地の膚の香が暖かい空氣に満たされて鼻をかすめて來た。葉子は我れにもなく駆けよつて、仰向けに熟睡してゐる倉地の上に羽がひのにしかゝつた。

暗い中で倉地は眼覺めたらしかつた。而して黙つたまゝ葉子の髪や着物から花瓣のやうにとぼれ落ちるなまめかしい香を夢心地に嗅いでゐるやうだつたが、やがて物恰げに、「もう起きたんか。何時だな」と云つた。丸で大きな子供のやうなその無邪氣

來なかつた。それほど世間から自分達を切り放してゐるのを二人とも苦痛とは思はなかつた。苦痛どころではない、それが幸ひであり誇りであつた。門には「木村」とだけ書いた小さい門札が出してあつた。木村と云ふ平凡な姓は二人の樂しい巢を世間に發くやうな事はないと倉地が云ひ出したのだつた。

然しこんな生活を倉地に永い間要求するのは無理だと云ふ事を葉子は遂に感付かねばならなかつた。ある夕食の後食地は二階の一と間で葉子を力強く膝の上に抱き取つて、甘い私語を取り交はしてゐた時葉子が情に激して倉地に與へた熱い接吻の後にすぐ、倉地が思はず出た欠伸をぢつと噛み殺したのを遙早く見て取ると、葉子はこの種の歡樂が既に峠を越した事を知つた。その夜は葉子には不幸な一夜だつた。辛うじて築き上げた永遠の城塞が、果敢なくも瞬時の盛氣樓のやうに見る／＼崩れて行くのを感じて、倉地の胸に抱かれながら殆んど一夜を眠らずに通してしまつた。

それでも翌日になると葉子は快活になつてゐた。殊更ら快活に振舞はうとしてゐたには違ひないけれども、葉子の倉地に對する溺愛は葉子をして殆んど自然に近い容易さを以てそれ

をさせるに十分だつた。

「今日は私の部屋で面白い事をして遊びませう。いらつしやいな」

さう云つて少女が少女を誘ふやうに牝牛のやうに大きな倉地を誘つた。倉地は煙つたい顔をしながら、それでもその後から跟いて來た。

部屋はさすがに葉子のものであるだけ、何處

となく女性的な軟味を持つてゐた。東向きの腰高窓には、もう冬といつて十一月末の日は熱のない強い光を射つけて、亞米利加から買つて歸つた上等の香水をふりかけた匂ひ玉から幽かながら極めて上品な芳芬を靜かに部屋の

中にまき散らしてゐた。葉子はその匂ひ玉の下つてゐる壁際の柱の下に、自分にあてがはれたきらびやかな縮緬の座蒲團を移して、それに倉地を坐らせておいて、遊び馴れた郵便の束をい

くつとなく取り下ろして來た。「さあ今朝は岩戸の隙から世の中を覗いて見るのよ。それも面白いでせう」

と云ひながら倉地に寄り添つた。倉地は幾十通とある郵便物を見たばかりでいゝ加減げんなりした様子だつたが、段々と興味を催して來たらしく、日の順に一つの束からほどき始めた。

如何につまらない事務用の通信でも、交通遮

斷の孤島か、障壁で高く圍まれた美しい牢獄に閉ぢこもつてゐたやうな二人に取つては豫想以上の氣散じだつた。倉地も葉子も有り觸れた文句にまで思ひ存分の批評を加へた。かう云ふ時の葉子はその、迷るやうな暖かい才氣の爲めに世にすぐれて面白味の多い女になつた。口を衝いて出る言葉々々がどれもこれも絢爛な色彩に包まれてゐた。二日目の所には岡から來た手紙が現はれ出た。船の中の禮を述べて、とうとう葉子と同じ船で歸つて來てしまつた爲めに、

家元では相變らずの薄志弱行と人毎に思はれるのが彼れを深く責める事や、葉子に手紙を出したいと思つてあらゆる手がかりを尋ねたけれども、何うしても解らないので會社に聞き合せ

て事務長の住所を知り得たからこの手紙を出すと云ふ事や、自分は唯々葉子を姉と思つて尊敬もし慕ひもしてゐるのだから、せめてその心を通はすだけの自由が與へて貰ひたいと云ふ事

だのが、思ひ入つた調子で、下手な字體で書いてあつた。葉子は忘却の廢址の中から生々とした少年の大理石像を掘りあてた人のやうに面白がつた。

「私が愛子の年頃だつたらこの人と心中位してゐるかも知れませぬ。あんな心を持つた人

へてやつた。倉地は勇み立つやうにして又土の上にしやがみこんだ。

倉地はかうして一日働き続けた。日がかげる頃になつて葉子も一緒に庭に出て見た。唯、亂暴な、せう事なしの悪戯仕事とのみ思はれたものが、片附いて見ると何處から何處までも要領を得てゐるのを發見するのだつた。葉子が氣にしていたる便所の屋根の前には、庭の隅にあつた堆の木が移してあつたりした。玄關前の兩側の花壇の牡丹には、薔薇で器用に霜圍ひさへしつらへてあつた。

こんな淋しい杉森の中の家にも、時々紅葉館の方から音曲の音がくぐるやうに聞こえて來たり、苔香園から薔薇の香りが風の具合でほんのりと香つて來たりした。こゝにかうして倉地と住み續ける喜ばしい期待はひと向きに葉子の心を奪つてしまつた。

平凡な人妻となり、子を生み、葉子の姿を魔物か何かのやうに嘲笑はうとする、葉子の舊友達に對して、嘗て葉子が抱いてゐた火のやうな憤りの心、腐つても死んでもあんな眞假はして見せるものかと誓ふやうに心であざけつたその葉子は、洋行前の自分といふものを何處かに置き忘れたやうに、そんな事は思ひも出さない

で、舊友達の通つて來た道筋にひた走りに走り込まうとしてゐた。

二十八

こんな夢のやうな樂しさが多愛もなく一週間程は何んの故障も牽き起さずに續いた。歡樂に耽溺し易い、従つて何時でも現在を一番樂しく過ごすのを生れながら本能としてゐる葉子は、こんな有頂天な境界から一步でも踏み出す事を極端に憎んだ。葉子が歸つてから一度しか會ふ事の出来ない、妹達が、休日にかけて頻りに遊びに來たいと訴へ來るのを、病氣だとか、家の中が片附かないとか、口實を設けて拒んでしまつた。木村からも古藤の所か五十川女史の所かに宛てて便りが來てゐるに相違ないと思つたけれど、五十川女史は固より古藤の所にさへ住所が知らしてないので、それを廻送してよこす事も出来ないのを葉子は知つてゐた。定子——この名は時々葉子の心を未練がましくさせないではなかつた。然し葉子は何時でも思ひ捨てるやうにその名を心の中から振り落さうと努めた。倉地の妻の事は何かの拍子につけて心を打つた。この瞬間だけは葉子の胸は呼吸も出来ない位引き締められた。それでも葉子は

現在目前の歡樂をそんな心痛で破らせまいとした。而してその爲めには倉地にあらん限りの媚びと親切とを捧げて、倉地から同じ程度の愛撫を食らうとした。さうする事が自然にこの難題に解決をつける導火線にもなると思つた。

倉地も葉子に譲らない程の畏着を以て葉子が捧げる一杯から歡樂を飲み飽きようとするらしかつた。不休の活動を命としてゐるやうな倉地ではあつたけれども、この家に移つて來てから、家を明けるやうな事は一度もなかつた。

それは倉地自身が告白するやうに破天荒な事だつたらしい。二人は、初めて戀を知つた少年少女が世間も義理も忘れ果てて、生命さへ忘れ果てて肉體を破つてまでも、魂を一つに溶かし度いとあせる、それと同じ熱情を捧け合つて互々を樂しんだ。樂しんだとぶふよりも苦しんだ。

その苦しみを樂しんだ。倉地はこの家に移つて以來新聞も配澤させなかつた。郵便だけは移轉通知をして置いたので倉地の手許に届いたけれども、倉地はその表書きさへ眼を通さうとはしなかつた。毎日の郵便はつやの手によつて來にされて、葉子が自分の部屋に定めた玄關側の六疊の違ひ棚に空しく積み重ねられた。葉子の手許には、妹達からの外には一枚の葉書きさへ

一人より無いんだからな。離縁状は横濱の土を踏むと一緒に喉に向けてぶつ飛ばしてあるんだ」と云つて胡坐の膝で貧乏ゆすりをし始めた。さすがの葉子も息氣をつめて、泣きやんで、惘れて倉地の顔を見た。

「葉子、俺れが木村以上にお前に深惚れしてゐるといつか船の中で云つて聞かせた事があつたな。俺れはこれでいざとなると心にもない事は云はない積りだよ。雙鶴館にゐる間も俺れは幾日も濱には行きはしなんだのだ。大抵は家内の親類達との談判で頭を悩ませられてゐたんだ。だが大抵鬼がついたから、俺れは少しばかり手廻りの荷物だけ持つて一と足先きにこゝに越して来たのだ。……もうこれでええや。氣がすつぱりしたわ。これには雙鶴館のお内儀も驚きくさるだらうて……」

會社の辭令ですつかり倉地の心持をどん底から感じ得た葉子は、この上倉地の妻の事を疑ふべき力は消え果ててゐた。葉子の顔は涙に濡れひたりながらそれを拭き取りもせず、倉地にすり寄つて、その兩肩に手をかけて、びつたりと横顔に胸にあてた。夜となく書となく思ひ悩みぬいた事が既に解決されたので、葉子は喜

んでも喜んで喜び足りないやうに思つた。自分も倉地と同様に胸の中がすつきりすべき筈だつた。けれどもさうは行かなかつた。葉子はいつの間にか去られた倉地の妻その人のやうな淋しい悲しい自分になつてゐるのを發見した。

倉地はいと自分につてならぬやうにエポニー色の雲のやうに眞黒にふつくりと亂れた葉子の髪を毛をやさしく撫で廻した。而して毎時にも似ずいんまりした調子になつて、

「とうとう俺れも埋れ木になつてしまつた。これから地面の下で濕氣を喰ひながら生きて行くより外にはない。……俺れは負け惜みを云ふは嫌ひだ。かうしてゐる今でも俺れは家内や娘達の事を思ふと不便に思ふさ。それがない事なら俺れは人間ぢやないからな。……だが俺れはこれでいい。満足この上なしだ。……自分ながら俺れは馬鹿になり腐つたらしいて」

さう云つて葉子の首を固くかき抱いた。葉子は倉地の言葉と酒のやうに酔ひ心地に呑み込みながら「あなただけにさうはさせておきませんよ。私だつて定子を見事に捨てて見せますからね」と心の中で頭を下げつゝ幾度も詫びるやうに繰り返してゐた。それが又自分で自分を泣かせる暗示となつた。倉地の胸に横たへられた葉子の

顔は、締入れと桶杓とを通して倉地の胸を暖かく侵す程熱してゐた。倉地の眼も珍らしく曇つてゐた。而して泣き入る葉子を大事さうにかゝへたまゝ、倉地は上體を前後に搖すぶつて、赤子でも寝かしつけるやうにした。戸外では又東京の初冬に特有な風が吹き出たらしく、杉森が

「うう」と鳴りを立てて、枯葉が明るい障子に飛鳥のやうな影を見せながら、から／＼と音を立てて乾いた紙にぶつかつた。それは埃立つた、寒い東京の街路を思はせた。けれども部屋の中は暖かだつた。葉子は部屋の中が暖かなの

が寒いのかさへ解らなかつた。唯々自分の心が幸福に淋しさに燃え爛れてゐるのを知つてゐた。唯々このまゝで永遠は過ぎよかし。唯々このまゝで眠りのやうな死の淵に陥れよかし。とう／＼倉地の心と全く融け合つた自分の心を見出した時、葉子の魂の願ひは生きようといふ事よりも死なうと云ふ事だつた。葉子はその悲しい願ひの中に剪み甘んじて溺れて行つた。

二十九

この事があつてから又暫らくの間、倉地は葉子と唯々二人の孤獨に没頭する興味を新らしくしたやうに見えた。而して葉子が家の中をい

でも少し齡を取ると男はあなた見たいになつちまふのね」

「あなたとは何んだ」

「あなた見たいな悪黨に」

「それはお門が違ふだらう」

「違ひませんとも：御同様にと云ふ方がいゝわ。私は心だけあなたに来て、體はあの人に遣るとほんととはよかつたんだが」

「馬鹿！ 俺れは心なんぞに用はないわい」

「ぢや心の方をあの人にやらうか知らん」

「さうしてくれ。お前にはいくつも心がある筈だから、有りつたしてくれてしまへ」

「でも可哀さうだから一番小ささうなのを一つだけあなたの分に殘して置きませうよ」

さう云つて二人は笑つた。倉地は返事を出す方に岡のその手紙を仕分けた。葉子はそれを見て

軽い好奇心が湧くのを覺えた。

澤山の中からは古藤のも出て來た。宛名は倉地だつたけれども、その中からは木村から葉子に送られた分厚な手紙だけが封じられてゐた。

それと同時に木村の手紙が後から二本まで現はれた。葉子は倉地の見てゐる前で、その凡てを讀まない中にずく／＼に引き裂いてしまつた。

「馬鹿な事をするぢやない。讀んで見ると面白かつたに」

葉子を占領し切つた自信を誇りがな微笑に見せながら倉地はかう云つた。

「讀むと折角の書御飯がおいしくなくなりますもの」

さう云つて葉子は胸糞の悪いやうな顔付きをして見せた。二人は又多愛なく笑つた。

報正新報社からのもあつた。それを見ると倉地は、一時は採消しをしようと思つてわたりを附けたりしたのでこんなものが來てゐるのだが

もう用はなくなつたので見るには及ばないと云つて、今度は倉地が封のまゝに引き裂いてしまつた。葉子はふと自分が木村の手紙を裂いた心持を倉地のそれにあてはめて見たりした。然し

その疑問もすぐ過ぎ去つてしまつた。

やがて郵船會社から宛てられた江戸川紙の大きな封書が現はれた。倉地は一寸眉に皺をよせて少し躊躇した風だつたが、それを葉子の手に渡して葉子に開封させようとした。何んの

氣なしにそれを受取つた葉子は魔がさしたやうにはつと思つた。とう／＼倉地は自分の爲めに

葉子は少し顔色を變へながら封を切つて中から卒業證書のやうな紙を一枚と、書記が丁寧

に書いたらしい書簡一封とを探り出した。

果してそれは免職と退職慰勞との會社の辭令だつた。手紙には退職慰勞金の受取方に關する注意が事々しい行書で書いてあるのだつた。葉子は何んと云つていゝか分らなかつた。こんな戀の戯れの中から斯程な打撃を受けようとは夢にも思つてはゐなかつたのだ。倉地

がこゝに滑いた翌日葉子に云つて聞かせた言葉は本當の事だつたのか。これ程までに倉地は親

身になつてくれてゐたのか。葉子は辭令を膝の上に置いたまゝ下を向いて黙つてしまつた。眼

がしらの所が非常に熱い感じを得たと思つた、鼻の奥が暖かく寒がつて來た。泣いてゐる場合

ではないと思ひながらも、葉子は泣かずにはゐられないのを知り抜いてゐた。

「本當に私が悪い御座いました：許して下さいまし：（さう云ふ中に葉子はもう泣き始めてゐた）：私はもう日陰の妾としてでも

圍ひ者としてでもそれで十分に満足します。えゝ、それで本當によろ御座んす。私は嬉し

い……」

倉地は今更な何を云ふと云ふやうな平氣な顔で葉子の泣くのを見守つてゐたが、

「妾も圍ひ者もあるかな、俺れには女はお前

題として胸に忍ばせてあるのに違ひない。事務長位の給料で餘財が出来てゐるとは考へられない。まして倉地のやうに身分不相應な金遣ひをしてゐた男にはなほの事だ。その點だけから見てもこの孤獨は破られなければならぬ。而してそれは結局二人の爲めにいゝ事であるに相違ない。葉子はさう思つた。

或る晩それは倉地の方から切り出された。長い夜を所在なさうに讀みもしない書物などをしていぢくつてゐたが、ふと思ひ出したやうに、「葉子。」つお前の、妹達を家に呼ぼうぢやないか。それからお前の子供つて云ふのも是非こゝで育てたいもんだな。俺れも急に三人まで子を失くしたら淋しくつてならんから……」

飛び立つやうな思ひを葉子は逸早くも見事に胸の中で押し鎮めてしまつた。而して、「さうですね」と如何にも興味なげに云つてゆつくり倉地の顔を見た。

「それよりあなたのお子さんを一人なり二人なり来て貰つたらいかい……私奥さんの事を思ふといつても泣きます。(葉子はさう云ひながらもう涙を一杯に眼にためてゐた)けれど私は生きてる間は奥さんと呼び戻して上げて下さ

いなんて……そんな僞善者じみた事は云ひません。私にはそんな心持は微塵もありませんもの。お氣の毒なといふ事と、二人がかうなつてしまつたといふ事とは別物ですものねえ。せめては奥さんが私を誼ひ殺さうとでもして下されば少しは氣持がいゝんだけれども、しとやかにしてお里に歸つていらつしやると思ふとついに身につまされてしまひます。だからと云つて私は自分が命を投げ出して築き上げた幸福を人に上げる氣にはなれません。あなたが私をお捨てになるまではね、喜んで私は私を通すんです。けれどもお子さんなら私本當にちつとも構ひはしない事よ。どう、お呼び寄せになつては？」

一馬鹿な。今更らそんな事が出来てたまるか」倉地は喚んで捨てるやうにさう云つて横を向いてしまつた。本當を云ふと倉地の妻の事を云つた時には葉子は心の中をそのまゝ云つてゐたのだ。その娘達の事を云つた時にはまぎ／＼とした虚言をついてゐたのだ。葉子の熱意は倉地の妻を香はせるものは凡て憎かつた。倉地の家の方から持ち運ばれた調度すら憎かつた。況してその子が誼はしくなくつて何うしよう。葉子は單に倉地の心を引いて見たいばかりに怖々なが

ら心にもない事を云つて見たのだつた。倉地の喚んで捨てるやうな言葉は葉子を満足させた。同時に少し強過ぎるやうな語調が慥念でもあつた。倉地の心底をすつかり見て取つたといふ自信を得た積りでゐながら、葉子の心は何かの機につけてかうぐらついた。

「私が是非といふんだから構はないぢやありませんか」

「そんな負け惜みを云はんで、妹達なり定子なりを呼び寄せようや」

さう云つて倉地は葉子の心を隅々まで見抜いてるやうに、大きく葉子を包みこむやうに見やりながら、いつもの少し澁いやうな顔をして微笑んだ。

葉子はいゝ潮時を見計つて攻めにも不承不承さうに倉地の言葉に折れた。而して田島の塾からいよ／＼妹達二人を呼び寄せる事にした。同時に倉地はその近所に下宿するのを餘儀なくされた。それは葉子が倉地との關係をまだ妹達に打ち明けてなかつたからだ。それはもう少し先きに適當な時機を見計つて知らせる方がいゝといふ葉子の意見だつた。倉地にもそれに不服はなかつた。而して朝から晩まで一緒に寝起きをするよりは離れた所に住んでゐ

やが上にも整頓して、倉地の爲めに住み心地のいい集を造る間に、倉地は天氣さへよければ庭に出て、菓子や遊具を樂しませる爲めに精魂を盡した。何時若香園との話をつけたものか、庭の隅に小さな大戸を作つて、その花園の母屋からずつと離れた小徑に通ひ得る仕掛けをしたりした。二人は時々その大戸をぬけて日立たないやうに、廣々とした若香園の庭の中をさまよつた。店の人達は二人の心を察するやうに、成るべく二人から遠ざかるやうに勉めてくれた。十二月の薔薇の花園は淋しい廢園の姿を目の前に擡げてゐた。可憐な花を開いて可憐な匂を放つ癖にこの灌木は何處か強い執着を持つ植木だつた。寒さにも霜にもめげず、その枝の先きにはまだ裏吹きの小きな花を咲かせようと藻掻いてゐるらしかつた。種々な色の薔が大方葉の散り盡した梢にまで残つてゐた。然しその花薔は存分に霜に虐げられて、黄色に變色して互に膠着して、恵み深い日の目に遇つても開きやうがなくなつてゐた。そんな間を二人は靜かな豊かな心でさまよつた。風のない夕暮れなどには若香園の表門を抜けて、紅葉館前のだらだら坂を東照宮の方まで散歩するやうな事もあつた。冬の夕方の事として人通りは稀れて二人が彷彿

ふ道としてはこの上もなかつた。葉子はまたま行き過ふ女の人達の衣裳を物珍らしく眺めやつた。それがどんなに粗末な不恰好な、いでたちであらうとも、女は自分以外の女の服裝を眺めなければ満足出来ないものだと思ふ葉子は思ひながらそれを倉地に云つて見たりした。つやの髪から衣服までを毎日のやうに變へて装はしてゐた自分の心持にも葉子は新しい発見をしたやうに思つた。本當は二人だけの孤獨に苦しみ始めたのは倉地だけではなかつたのか。ある時にはその淋しい坂道の上下から、立派な馬車や抱へ車が續々坂の中段を日ざして集まるのに過ふ事があつた。坂の中段から紅葉館の下に當る邊に導かれた廣い道の奥からは、能樂のはやいの音が床しげに漏れて來た。二人は能樂堂での能の催しが終りに近づいてゐるのを知つた。同時にそんな事を見たのでその日が日曜日である事にも氣が付いた位二人の生活は世間からかけ離れてゐた。

かうした楽しい孤獨も然しながら永遠には續き得ない事を續かしてゐてはならない事を鋭い葉子の神經は眼ざとく覺つて行つた。ある日倉地が例のやうに庭に出て土いぢりに精を出してゐる間に、葉子は悪事でも働かやうな心持

で、つやに云ひつけて反故紙を集めた箱を自分の部屋に持つて來さして、いつか讀みもしないで破つてしまつた木村からの手紙を還り出さうとする自分を見出してゐた。色々な形に寸斷された厚い西洋紙の斷片が木村の書いた文句の斷片をいくつも、葉子の眼に曝し出した。暫らくの間葉子は引きつけられるやうにさうぶ紙片を手當り次第に手に取り上げて讀み耽つた。半成の畫が美しいやうに斷簡にはぶひ知れぬ情緒が見出された。その中に正しく織り込まれた葉子の過去が多少の力を集めて葉子に逼つて來るやうにさへ思へ出した。葉子は我れにもなくその思ひ出に浸つて行つた。然しそれは長い時が過ぎる前に壞れてしまつた。葉子はすぐ現實に取つて返してゐた。而して凡ての過去に嘔氣のやうな不快を感じて箱ごと臺所に持つて行くと、つやに命じて裏庭でその全部を焼き捨てさせてしまつた。

然しこの時も葉子は自分の心で倉地の心を思ひやつた。而してそれが何うしてもいゝ微候でない事を知つた。そればかりではない。二人は霞を喰つて生きる仙人のやうにしては生きてゐられないのだ。職業を失つた倉地には、口こそ出さないが、この問題は遠からず大きな問

(愛子は從順に落ち着いてうなづいて見せた)
 「あの方が今木村さんに成りかはつて私の世話を見てゐて下さるのよ。木村さんから頼まれなかつたものだから、迷惑さうにもなく、こんないゝ家まで見付けて下さつたの。木村さんは米國で色々事業を企てていらつしやるんだけれども、どうもお仕事がうまく行かないで、お金が注ぎ込みにばかりなつてゐて、逆もこつちには送つて下されないので、私の家はあなたも知つての通りでせう。どうしても暫らくの間は御迷惑でも倉地さんに萬事を見ていたゞかなければならないのだから、あなたもその積りでゐて頂戴よ。ちよく／＼こゝにも来て下さるからね。それに付けて世間では何かくだらない噂をしてゐるに違ひないが、愛さんの熱心なかでは何んにもお聞きではなかつたかい」
 「いゝえ、私達に面と向つて何か仰しやる方は一人もありませんわ。でも一と愛子は例の多恨らしい美し眼を上限に使用つて葉子を窺ひ見るやうにしながら、
 「でも何しろあんな新聞が出たもんですから」「どんな新聞？」
 「あらお姉様御存じなしなの。報正新報に續き物でお姉様とその倉地といふ方の事が長く出て

みましたのよ」

「へーえ」

葉子は自分の無智に惻れるやうな聲を出してしまつた。それは實際思ひもかけぬと云ふよりは、ありさうな事ではあるが今の今まで知らずにゐた、それに葉子は惻れたのだつた。然しそれは愛子の眼に自分を非常に無事らしく見せただけの利益があつた。さすがの愛子も驚いたらしい眼をして姉の驚いた顔を見やつた。

「何時？」

「今月の始め頃でしたか知らん。だもんですから皆さん方の間では大變な評判らしいんです。今度も筆を出て來年から姉の所から通ひますと田島先生に申上げたたら、先生も家の親類達に手紙や何んかで大分お聞き合せになつたやうですよ。而して今日私達を自分のお部屋にお呼びになつて「私はお前さん方を塾から出したくはないけれども、筆に居續ける氣はないかと仰しやるのよ。でも私達は何んだか塾にゐるのが肩身が……どうしてもいやになつたもんですから、無理にお願ひして歸つて来てしまひましたの」
 愛子は普段の無口に似ずかうぶ事を話す時は、ちやんと筋目が立つてゐた、葉子には愛子の

沈んだやうな態度がすつかり賣めた。葉子の憤怒は見る／＼その血相を變へさせた。田川夫人といふ人は何處まで自分に対して執念を寄せようとするのだらう。それにしても夫人の友達には五千川と云ふ人もある筈だ。若し五千川のお母さんが本當に自身の改悛を望んでゐてくれるなら、その記事の中止なり訂正なりを夫、田川の手を経てさせる事は出来る筈なのだ。田島さんも何んとかしてくれやうがありさうなものだ。そんな事を妹達に云ふ位なら何故自分に言中告でもしてはくれないのだ。(こゝで葉子は歸朝以來妹達を預つてもらつた禮をしに行つてゐなかつた自分を顧みた、然し事情がそれを許さないのだらう位は察してくれてもよささうなものだと思つた)それほど自分は今世間から見くびられ除け者にされてゐるのだ。葉子は何かたゞき附けるものでもあれば、而して世間と云ふものが何か形を備へたものであれば、力の限り得物をたゞきつけてやりたかつた。葉子は小刻みに震へながら、言葉だけはしとやかに、

「古藤さんは」

たまにお便りを下さいます」

「あなた方も上げるの」

て、氣の向いた時に遇ふ方がどれ程二人の間の戯れの心を満足させるか知れないのを、二人は暫らくの間の言葉通りの同棲の結果として認めてゐた。倉地は生活を支へて行く上にも必要であるし、不休の活動力を放射するにも必要なので、解職になつて以來何か事業の事を時々思ひ耽つてゐるやうだつたが、いよく計畫が立つたので、それに着手する爲めには、當座の所、人々の出入りに葉子の顔を見られない所で事務を取るのを便宜としらしかつた。その爲めにも倉地が暫らくなりとも別居する必要があつた。

葉子の立場は段々と固まつて來た。十二月の本に試験が済むと、妹達は田島の塾から少しばかりの荷物を持つて歸つて來た。殊に貞世の喜びと云つてはなかつた。二人は葉子の部屋だつた六疊の腰窓の前に小さな二つの机を並べた。今まで何んとかく遠慮勝ちだつたつやも生れ代つたやうに快活なはきくした少女になつた。唯、愛子だけは少しも嬉しさを見せないで、唯々憤み深く素直だつた。

「愛姉さん嬉しいわねえ」
貞世は勝ち誇るものの如く、縁側の柱に倚りかかつて涙と冬枯れの庭を見詰めてゐる姉の肩に

手をかけながら寄り添つた。愛子は一所を瞬きもしないで見詰めながら、

「えゝ」
と齒切れ惡く答へるのだつた。貞世はじれつたさうに愛子の肩をゆすりながら、

「でもちつとも嬉しさうぢやないわ」
と責めるやうに云つた。

「でも嬉しんですよすもの」
愛子の答へは冷然としてゐた。十疊の座敷に持ち込まれた行李を明けて、汚れ物などを選び分けてゐた葉子はその様子をちらと見たばかりで腹が立つた。然し來たばかりのものをたしなめるでもないと思つて蟲を殺した。

「何んて静かな所でせう。望よりも屹度靜かよ。でもこんな森があつちや夜になつたら淋しいわねえ。私ひとりでお便所に行けるか知らん、……愛姉さん、そら、あすこに木戸があるわ。屹度隣りのお庭に行けるよ。あのお庭に行つてもいゝお姉様。誰れのお家むかうは？……」

貞世は眼に這入るものはどれも珍らしいと云ふやうに獨りでしゃべつては、葉子にとり愛子にとりもなく質問を連發した。そこが薔薇の花園であるのを葉子から聞かされると、貞世は愛子を

誘つて庭下駄をつつかけた。愛子は貞世に續いてそつちの方に出かける様子だつた。

その物音を聞くと葉子はもう我慢が出来なかつた。

「愛さんお待ち。お前さん方のものがまだ片附いてはゐませんよ。遊び廻るのは始末をしてからになさいな」

愛子は從順に姉の言葉に従つて、その美しい眼を伏せながら座敷の中に這入つて來た。それでもその夜の夕食は珍らしく賑やかだつた。貞世がはしやぎ切つて、胸一杯のものを前後も連絡もなくしやべり立てるので愛子さへも思はずにやりと笑つたり、自分の事を容赦なく云はれたりすると恥かしさうに顔を赤らめたりした。

貞世は嬉しさに疲れ果てて夜の浅い中に寢床に這入つた。明るい電燈の下に葉子と愛子と向ひ合ふと、久しく遇はないでゐた骨肉のひたひたの間にも感ぜられる淡い心置きを感じた。葉子は愛子にだけは倉地の事を少し具體的に知らしておく方がいゝと思つて、話のきつかけに少し言葉を改めた。

「まだあなた方にお引き合せがしてないけれど、倉地つて云ふ方ね、繪島丸の事務長の……」

に懸つておかうよ。寫眞——船の中にあつたね——で見て可からしい子達だつたが……二人はやをらその部屋を出た。而して十疊と茶の間との隔ての襖をそつと明けると、二人の姉妹は向ひ合つて別々の寢床にすや／＼と眠つてゐた。緑色の笠のかゝつた、電燈の光は海の底のやうに部屋の中を思はせた。

「あつちは」

「愛子」

「こつちは」

「貞世」
葉子は心竊かに、世にも艶やかなこの少女二人を妹に持つ事に誇りを感じて暖かい心になつてゐた。而して静かに膝をついて、切り下げにした貞世の前髪をそつと撫であげて倉地に見せた。倉地は聲を殺すのに少からず難儀な風で、

「さうやるとこつちは、貞世は、お前によく似てるわい。……愛子は、ふむ、これは又素的な美人ぢやないか。俺れはこんなのは見た事がない：お前の二の舞でもせにや結構だが……」
さう云ひながら倉地は愛子の顔ほどもあるやうな大きな手をさし出して、さうしたい誘惑を退けかねるやうに、紅梅のやうな紅いその唇に

觸れて見た。

その瞬間に葉子はぎよつとした。倉地の手が愛子の唇に觸れた時の様子から、葉子は明らかに愛子がまだ目覺めてゐて、寢たふりをしてゐるのを感付いたと思つたからだ。葉子は大きく急ぎで倉地に目くばせしてそつとその部屋を出た。

三十

「僕が毎日——毎日とは云はず毎時間貴女に筆を執らないのは執りたくないから執らないではありません。僕は一日貴女に書き續けてゐてもなほ飽き足らないのです。それは今の僕の境界では許されない事です。僕は朝から晩まで機械の如く働かねばなりませんから。」

貴女が米國を離れてから此の手紙は多分じつと一回の手紙として貴女に受取られると思ひます。然し僕の手紙はいつまでも暇を竊んで少しづつ書いてゐるのですから、僕から云ふと日に二度も三度も貴女にあてて書いてる譯になるのです。然し貴女はあの後一回の音信を惠んでは下さらない。僕は繰り返しく云ひます。縱令貴女にど

んな過失、んな誤謬があらうとも、それを耐へ忍び、それを許す事に於ては、神が貴女に上の忍耐を持てゐるのを僕は自ら信じてゐます。誤解しては困ります。僕が如何なる人に對してもかゝる力を持つてゐると云ふのではないのです。唯々貴女に對してです。貴女は何時でも僕の品性を尊く導いてくれます。僕は貴女によつて人がどれ程愛し得るかを學びました。貴女によつて世間で云ふ墮落とか罪惡とか云ふ者がどれ程まで寛容の餘餘があるかを學びました。而してその寛容によつて、寛容する人自身がどれ程品性を陶冶されるかを學びました。僕は又自分の愛を成就する爲めにはどれ程の勇者になり得るかを學びました。これほどまでに僕を神の眼に誇めました。これほどまでに僕を神の眼に誇めて下さつた貴女が、僕から萬一にも失はれると云ふのは想像が出来ません。神がそんな試験を人の子に下される残虐はなさらないのを僕は信じてゐます。そんな試験に堪へるのは人力以上ですから。今の僕から貴女が奪はれると云ふのは神が奪はれるのと同じ事です。貴女は神だとは云ひますまい。然し貴女を通してのみ僕は神を拜

「えゝたまに」

「新聞の事を何か云つて來たかい」

「何んにも」

「こゝの番地は知らせて上げて」

「いゝえ」

「何故」

「お嬢様の御迷惑になりはしないかと思つて」

この小娘はもう皆んな知つてゐる、と葉子は一種の怖れと警戒とを以て考へた。何事も心得ながら白々しく無邪氣を装つてゐるらしいこの妹が敵の間諜のやうにも思へた。

「今夜はもうお休み。疲れたでせう」

葉子は冷然として、燈の下に俯向いてきちんと坐つてゐる妹を尻眼にかけた。愛子はしとやかに頭を下げて從順に座を立つて行つた。

その夜十一時頃倉地が下宿の方から通つて來た。裏庭をぐるつと廻つて、毎夜月じまりを

せずにおく張出しの六疊の間から上つて來る音が、じれながら鐵瓶の湯氣を見てゐる葉子の神經にすぐ通じた。葉子はすぐ立ち上つて猫のやうに足音を盗みながら急いでそつちに行つた。丁度敷居を上らうとしてゐた倉地は暗い中に葉子の近づく氣配を知つて、いつもの通り、立ち上りざまに葉子を抱擁しようとした。然し葉子

はさうはさせなかつた。而して急いで戸を締め切つてから、電燈のスイッチをひねつた。火の氣のない部屋の中は急に明るくなつたけれども身を刺すやうに寒かつた。倉地の顔は酒に酔つてゐるやうに赤かつた。

「どうした、顔色がよくないぞ」

倉地は訝るやうに葉子の顔をまじ／＼と見やりながらさう云つた。

「待つて下さい、今私こゝに火鉢を持つて來ますから。妹達が寢ばなだからあすこでは起こすといけませんから」

さう云ひながら葉子は手あぶりに火をついで持つて來た。而して酒肴もそこにとのへた。

「色が悪いぞ……今夜はまたすつかり向つ腹が立つたんですもの。私達の事が報正新聞に皆んな出てしまつたのを御存じ？」

「知つるととも」

倉地は不思議でもないといふ顔をして眼をしばだいたいた。

「田川の製さんといふ人は本當にひどい人ね」葉子は齒を噛みくだくやうに鳴らしながら云つた。

「全くあれは法圖のない捌巧馬鹿だ」さう吐き捨てるやうに云ひながら倉地の語る

所によると、倉地は葉子に、屹度々の中掲載

される報正新聞の記事を見せまい爲めに引越して來た當座わざと新聞はどれも購讀しなかつた

が、倉地だけの耳へは或る男、それは綿島丸の中で葉子の身の上を相談した時、甲斐絹のどて

らを着て寢床の中に二つに折れ込んでゐたその男であるのが後で知れた。その男は名を正井

と云つた）からつやの取次ぎで内訥に知らされてゐたのださうだ。郵船會社はこの記事が出る

前から倉地の爲めに又會社自身の爲めに、極力、探み消しをしたのだけれども、新聞社で

は一向應ずる色がなかつた。それから考へるとそれは當時新聞社の慣用手段の懐金を貪

らうといふ目論見ばかりから來たのでない事だけは明らかになつた。あんな記事が現はれては

もう會社としても黙つてはゐられなくなつて、大急ぎで詮議をした結果、倉地と船醫の興銀と

が處分される事になつたと云ふのだ。

「田川の噂の惡戯に決つとる。馬鹿に口惜しかつた」と見えるて……がかうなりや結局パン

となつた方がいゝわい。皆んな知つとるだけ一申し譯を云はずと済む。お前はまたまだそれ

しきの事にくよく／＼しとるんか。馬鹿な……それより妹達は來とるんか。寢顔にでもお目

り寄せて自分の店で捌かして見ようと云つてくれました。これで僕の財政は非常に餘裕が出来た譯です。今まで店がなかつたばかりに、取り寄せても荷厄介だつたものですが、ハミルトン氏の店で取扱つてくれれば相當に賣れるのは分つてゐます。さうなつたら今までと違つて貴女の方にも足りないながら仕送りをして上げる事が出来ませう。早速電報を打つて一番早い船便で取り寄せる事にしましたから不日着荷する事と思つてゐます。

今は夜も大分更けました。ハミルトン氏は今夜も饗應に呼ばれて出かけました。大嫌ひなテーブル・スピーチになやまされてゐるのでせう。ハミルトン氏は實にシャープなビジネススマンライキな人です。而して熱心な正統派の信仰を持つた慈善家です。僕は殊の外信頼され重寶がられてゐます。そこから僕のライフ・キャリアを踏み出すのは大なる利益です。僕の前途には確かに光明が見え出して來ました。貴女に書く事は底止なく書く事です。然し明日の奮闘的生活（これは大統領ルーズヴェルトの著書の“ strenuous life ”を譯

して見た言葉です。今この言葉は當地の流行語になつてゐます）に備へる爲めに筆を止めねばなりません。この手紙は貴女にも喜びを分けていたゞく事が出来るかと思ひます。

昨日聖ルイスから歸つて來たら、手紙が可なり多數届いてゐました。郵便局の前を通るにつけ、郵便物を見るにつけ、脚夫に行き過ふにつけ、僕は貴女を聯想しない事はありません。自分の机の上に来信を見出した時は猶更らの事です。僕は手紙の束の間をかき分けて貴女の手紙を見出さうと勉強しました。然し僕は又絶望に近い失望に打たれなければなりません。僕は失望はしませう。然し絶望はしません。出來ません。葉子さん、信じて下さい。僕はロングフエローのエヴァンジェリンの忍耐と謙遜とを以て貴女の心を本當に汲み取つて下さる時を待つてゐます。然し手紙の束の中から僕は俄かに失望から救ふ爲めに古藤君と岡君との手紙が見出されました。古藤君の手紙は兵營に行く五日前に書かれたものでした。未だに貴女の居所を知る事が出來ないので、僕の手紙は矢張り倉地氏

にあてて廻送してゐると書いてあります。古藤君はさうした手續きを取るのを甚しく不快に思つてゐるやうです。岡君は人に漏らし得ない家庭内の紛擾や周囲から受ける誤解を、岡君らしく過敏に考へ過ぎて弱い體質を益々弱くしてゐるやうです。書いてある事には處々僕の持つ常識では判斷しかねるやうな所があります。貴女から何時か必ず消息が来るのを信じ切つて、その時を唯一つの救ひとして待つてゐます。その時の感謝と喜悦とを想像で描き出して、小説でも讀むやうに書いてあります。僕は岡君の手紙を讀むと、何時でも僕自身の心がそのまゝ書き現はされてゐるやうに思つて涙を感じます。何故貴女は自分をそれ程まで踞蹌して居れるのか、それには深い譯がある事と思ひますけれども、僕にはどちらの方面から老へても想像がつきません。日本からの消息はどんな消息も待ち遠しい。然しそれを見終つた僕は屹度憂鬱に襲はれます。僕に若し信仰が興へられてゐなかつたら、僕は今何うなつてゐたかを知りません。

む事が出来るのです。

時々僕は自分で自分を憐れんでしまふ事があります。自分自身だけの力と信仰とで凡てのものを見る事が出来たらどれ程幸福で自由だらうと考へると、貴女を煩はさなければ一歩を踏み出す力をも感じ得ない自分の束縛を詛ひたくもなります。同時にそれ程慕はしい束縛は他にない事を知るのです。束縛のない所に自由はないと云つた意味で貴方の束縛は僕の自由です。

貴女は——一旦僕に手と與へて下さると約束なさつた貴女は、遂に僕を見捨てようとして居られるのですか。何うして一回の音信も悪くでは下さらないのです。然し僕は信じて疑みません。世に若し眞理があるならば、而して眞理が最後の勝利者ならば貴女は必ず僕に還つて下さるに違ひないと。何故ならば僕は誓ひます。——主よこの僕を見守り給へ——僕は貴女を愛して以來斷じて他の異性に心を動かさなかつた事を。この誠意が貴女によつて認められない譯はないと思ひます。

貴女は從來暗いいくつかの過去を持つてゐます。それが知らず識らず貴女の向上心を

を躊躇させ、貴女を稍々絶望的にしてゐるのではないのですか、若しさうなら貴女は全然誤謬に陥つてゐると思ひます。凡ての救ひは思ひ切つてその中から飛び出す外にはないのでせう。そこに停滯してゐるのはそれだけ貴女の暗い過去を暗くするばかりです。貴女は僕に信頼を置いて下さる事は出来ないのですせうか。人前の中に少くも一人、貴女の凡ての事を喜んで忘れようと兩手を掲げて待ち設けてゐるもののあるのを信じて下さる事は出来ないでせうか。

こんな下らない理窟はもうやめませう。昨夜書いた手紙に續けて書きます。今朝ハミルトン氏の所から至急に來いといふ電話がかゝりました。シカゴの冬は豫期以上に寒いです。仙臺どころの比ではありません。雪は少しもないけれども、イリー湖を多湖地方から渡つて來る風は身を切るやうでした。僕は外套の上に又大外套を重ね着してゐながら、風に向いた皮膚に沁み透る風の寒さを感じました。ハミルトン氏の用と云ふのは來年聖ルイスに開催される大規模な博覽會の協議の爲め急にそこに赴くやうになつたから同行しろと云ふの

でした。僕は旅行の用意は何等してゐなかつたが、こゝにアメリカニズムがあるのだと思つてそのまゝ同行する事にしました。自分の部屋の前鍵もかけずに飛び出したのですからバビコック博士の奥さんは驚いてゐるでせう。然しさすがに米國です、着のみ着のみでこゝまで來ても何一つ不自由を感じません。鎌倉あたりまで行くのなら怪しから旅カバンまで用意しなければならぬのですから、日本の文明はまだ中々のものです。僕達は此の地に着くと、停車場内の化粧室で髪を剃り、靴を磨かせ、夜會に出ても恥かしくない支度が出來てしまひました。而してすぐ協議會に出席しました。貴女も知つて居らるゝ通り獨逸人のあの邊に於ける勢力は偉いものです。博覽會が開けたら、我々は米國に對してよりも寧ろこれらの獨逸人に對して緊要一番する必要があります。ランチの時はハミルトン氏に例の日本に買ひ占めてあるキノモノその他の話をもう一度しました。

博覽會を前に控へてゐるのでハミルトン氏も今度は乗氣になつてくれまして、高島屋と連絡をつけておく爲めに兎に角品物を取

らし勝ちで寝付きも悪かつたので、ぞくぞく沁み込んで来るやうな寒さにも係はらず、火鉢の側にゐた。而して所在ないまゝにその日倉地の下宿から届けて来た小村の手紙を読んで見る氣になつたのだ。

葉子は猫板に片肘を持たせながら、必要もない程高價だと思はれる厚い書翰に大きな字で書き綴つてある小村の手紙を一枚々々読み進んだ。大人びたやうで子供っぽい、さうかと思ふと感情の高潮を示したと思はれる所も妙に打算的な所が離れ切らないと葉子に思はせるやうな内容だつた。葉子は一々精讀するのが面倒さで行から行に飛び越えながら讀んで行つた。而して日附けの所まで来ても格別な情緒を誘はれはしなかつた。然し葉子はこの以前倉地に見てゐる前でしたやうにずた／＼に引き裂いて捨ててしまふ事はしなかつた。しなかつた所ではない、その中には葉子を考へさせるものが含まれてゐた。小村は遠からずハミルトンとか云ふ日本の名譽領事をしてゐる人の手から、日本を去る前に思ひ切つてして行つた放資の回收をして貰へるのだ。不即不離の關係を破らずに別れた自分のやり方は矢張り岡に中つてゐたと思つた。「宿屋きめずに草鞋を脱ぐ」馬鹿

をしない必要はもうない、倉地の愛は確かに自分の手に握り得たから。然し口にくそ出しはしないが、倉地は金の上では可なりに苦しんでゐるに違ひない。倉地の事業と云ふのは日本中の開港場にある水先案内業者の組合を作つて、その實權を自分の手に握らうとするのらしかつたが、それが仕上るのは短い日月には出来る事ではなささうだつた。殊に時節が時節がら正月にかゝつてゐるから、さう云ふものの設立には一番不便な時らしくも思はれた。小村を利用してやらう。

然し葉子の心の底には何處かに痛みを覺えた。散々小村を苦しめ抜いた擧句に、なほあの根の正直な人間をたぶらかしてなげなしの金を搾り取るのは俗に云ふつゝもたせの所業と違つてはゐない。さう思ふと葉子は自分の陥落を痛く感ぜずにはゐられなかつた。けれども現在在の葉子に一番大事なものは倉地と云ふ情人の外にはなかつた。心の痛みを感じながらも倉地の事を思ふとなほ心が痛かつた。彼れは妻子を犠牲に供し、自分の職業を犠牲に供し、社會上の名譽を犠牲に供してまで葉子の愛に溺れ、葉子の存在に生きようとしてくれてゐるのだ。それを思ふと葉子は倉地の爲めには何ん

でもして見せてやりたかつた。時によると我れにもなく侵して来る涙ぐましい感じをぢつと堪へて、定子に會ひに行かずにゐるのも、さうする事が何か宗教上の願がけで、倉地の愛を繋ぎとめる禁厭のやうに思へるからしてゐる事だつた。小村にだつて何時かは物質上の償ひ目に對して物質上の返禮だけはする事が出来るだらう。自分のする事は「つゝもたせ」とは形が似てゐるだけだ。やつてやれ。さう葉子は決心した。讀みでもなく讀まぬでもなく手に持つて眺めてゐた手紙の最後の一枚を葉子は無意識のやうにぼたりと膝の上に落した。而してそのまゝぢつと鐵瓶から立つ湯氣が電燈の光の中に多様な渦紋を描いては消え暫いては消えするのを見つめてゐた。

暫らくしてから葉子は物憂げに深い吐息を一つして、上體をひねつて棚の上から手文庫を取り下ろした。而して筆を噛みながら又上眼でぢつと何か考へるらしかつた。と、急に生きかへつたやうにはき／＼なつて、上等の支那紙を眼の三つまで這入つた真圓い硯にすり下ろした。そして輕く騎香の香の漂ふなかで男の字のやうな健筆で、精巧な厚皮紙の巻紙に、一氣に、次ぎのやうに認めた。

前の手紙との間に三日が経ちました。僕はバビコック博士夫婦と今夜ライシラム座にウエルシ嬢の演じたトルストイの「復活」を見物しました。そこには基督教徒として眼を背けなければならないやうな場面がないではなかつたけれども、終りの方に近づいて行つての莊嚴さは見物人の凡てを捕捉してしまひました。ウエルシ嬢の演じた女主人公は眞に迫り過ぎてゐる位でした。貴女が若しまだ「復活」を読んで居られないのなら僕は是非それをお勧めします。僕はトルストイの懺悔を玉氏の邦文譯で日本にある時讀んだだけですが、あの芝居を見てから、暇があつたらもつと深く色々研究したいと思ふやうになりました。日本ではトルストイの著書はまだ多くの人に知られてゐないと思ひますが、少くとも「復活」だけは丸善からでも取り寄せて讀んでいただくたい、貴女を啓蒙する事が必ず多いのは適合しますから。僕等は等しく神の前に罪人です。然しその罪を悔い改める事によつて等しく選ばれた神の僕となり得るのです。この道の外には人の子の生活を天國に結び付ける道は考へられませんか。神を

敬む人を愛する心の養へてしまはない中にお互に光を仰がうではありませんか。葉子さん、貴方の心に空虚なり汚點なりがあつても萬望絶望しないで下さい。貴女をそのまゝに喜んで受け入れて、苦しみがあれば貴女と共に苦しみ、貴女に悲しみがあれば貴女と共に悲しむものがここに一人ある事を忘れないで下さい。僕は職つて見えます。どんなに貴女が傷いてゐても、僕は貴女を庇つて勇ましくこの人生を戦つて見えます。僕の前に事業が、而して後ろに貴女があれば、僕は神の最も小さい僕として人類の祝福の爲めに一生を獻げます。嗚呼、筆も言語も遂に無益です。火と熱する誠意と祈りとを籠めて僕はこゝにこの手紙を封じます。この手紙が倉地氏の手から貴女に届いたら、倉地氏にも宜しく傳へて下さい。倉地氏に迷惑をおかけした金銭上の事については前便に書いておきましたから見て下さつたと思ひます。願はくは神我等と共に在し給はん事を。

明治三十四年十二月十三日
倉地は事業の爲めに奔走してゐるのでその夜

は年越しに來ないと下宿から知らせて來た。妹達は除夜の鐘を聞くまでは寝ないなどと云つてゐたが何時の間にか睡くなつたと見えて、餘り静かなので二階に行つて見ると、二人とも寢床に這入つてゐた。つやには暇が出してあつた。葉子に内證で報正新報を倉地に取り次いだのは、縱令葉子に無益な心配をさせない爲めだと云ふ倉地の注意があつた爲めであるにもせよ、葉子の心持を損じもし不安にもした。つやが葉子に對しても素直な敬愛の情を抱いてゐたのは葉子もよく心得てゐた。前にも書いたやうに葉子は一と眼見た時からつやが好きだつた。臺所などをさせずに、小間使として手廻りの用事でもさせたら顔容と云ひ、性質と云ひ、取り廻しと云ひこれ程理想的な少女はないと思ふ程だつた。つやにも葉子の心持はすぐ通じたらしく、つやはこの家の爲めに蔭日向なくせつせと働いたのだつた。けれども新聞の小さな出来事一つが葉子を不安にしてしまつた。倉地が雙鶴館の女將に對しても氣の毒がるのを構はず、妹達に働かせるのが却つていゝからとの口實の下に暇をやつてしまつたのだつた。で勝手の方にも人氣はなかつた。葉子は何を原因ともなくその頃氣分がいら

に見えてゐて、剃刀のやうに日端の利く人だつた。その人が玄關から這入つたら、そのあとに行つて見ると、廊下は一つ残らず揃へてあつて、傘は傘で一隅にちやんと集めてあつた。葉子も及ばない素早さで花瓶の花の萎れかけたのや、茶や菓子のはしくなつたのを見て取つて、翌日は忘れずにそれを買ひ調へて來た。無口の癖に何處かに愛嬌があるかと思ふと、馬鹿笑ひをしてゐる最中に不思議に陰險な眼付きをちらつかせたりした。葉子はその人を觀察すればする程その正體が分らないやうに思つた。それは葉子をもどかしさせる程だつた。時々葉子は倉地がこの男と組合設立の相談以外の秘密らしい話合ひをしてゐるのに感付いたが、それは何うしても明確に知る事が出来なかつた。倉地に聞いて見ても、倉地は例の暢氣な態度で事もなげに話題を外らしてしまつた。

葉子は然し何んとも云つても自分が望み得る幸福の絶頂に近い所にゐた。倉地を喜ばせる事が自分を喜ばせる事であり、自分を喜ばせる事が倉地を喜ばせる事である、さうした作爲のない調和は葉子の心をしやかに快活にした。何にでも自分がしよとさへ思へば適應し得る葉子に取つては、抜け目のない世話女房に

なる位の事は何んでもなかつた。妹達もこの姉を無二のものとして、姉のしてくれる事は一も二もなく正しいものと思ふらしかつた。始終葉子から細子あつかひにされてゐる愛子さへ、葉子の前には唯々従順なしとやかな少女だつた。愛子としても少くとも一つは何うしてもその姉に感謝しなければならぬ事があつた。それは年齢のお蔭もある。愛子は今年で十六になつてゐた。然し葉子がゐなかつたら、愛子はこれ程美しくはなれなかつたに違ひない。

二三週間のうちに愛子は山から掘り出されたばかりのルビーと磨きをかけた上げたルビーと程に變つてゐた。小肥りで着丈けは姉よりも遙かに低いが、びち／＼と締つた肉付きと、抜け上るほど白い艶のある皮膚とはいひ、均整を保つて、細くはあるが類のない程肉感的な手足の指の先き細な處に利點を見せつてゐた。むつくりと牛乳色の皮膚に包まれた地蔵肩の上に据ゑられたその顔は又葉子の苦心に十二分に酬いるものだつた。葉子が頸際を剃つてやるとそこに新しい美が生れ出た。髪を自分の意匠通りに束ねてやるとそこに新しい靈感が湧き上つた。葉子は愛子を美しくする事に、成功した作品に對する藝術家と同様の誇りと喜びを感じた。

暗い處にゐて明るい方に振り向いた時などの愛子の卵形の顔形は美の神ヴィーナスをさへ好まず事が出来たらう。顔の輪郭と、稍も頰際を狭くするまでに厚く生え揃つた黒漆の髪とは闇の中に溶けこむやうにぼかされて、前からみ来る光線の爲めに鼻筋は、希臘人のそれに見るやうな、規則正しく細長い前面の平面を際立たせ、潤ひ切つた大きな一つの瞳と、締つて厚い上下の唇とは、皮膚を切り破つて現はれ出た二対の魂のやうになま／＼しい感で見る人を打つた。愛子はさうした時に一番美しいやうに闇の中に淋しく獨りでゐて、その多恨な眼でずつと明るみを見詰めてゐるやうな少女だつた。

葉子は倉地が葉子の爲めにして見せた大きな英斷に酬いる爲めに、定子を自分の愛撫の胸から裂いて捨てようと思ひきはめながらも、どうしてもそれが出来なかつた。あれから一度も訪れこそしないが、時折り金を送つてやる事と、乳母から安否を知らさせる事だけは續けてゐた。乳母の手紙は何時でも恨みつらみで満たされてゐた。日本に歸つて來て下さつた甲斐が何處にある。親がなくて子が子らしく育つものか育たぬものか一寸でも考へて見て貰ひたい。

「書けばきりが御座いせん。何へばきりが御座いせん。だから書きも致しませんでした。あなたのお手紙も今日いたいたものまでは拜見せずにずた／＼に破つて捨ててしまひました。その心をお察し下さいまし。」

噂にもお聞きとは存じますが、私は見事に社会的に殺されてしまひました。何うして私がこの上あなたの妻と名乗れませう。自業自得と世の中では申します。私も確かにさう存じてゐます。けれども親類縁者、友達にまで突き放されて、二人の妹を抱へて見ますと、私は眼もくらんで仕舞ひます。倉地さんだけが何う云ふ御縁かお見捨てなく私共三人をお世話下さつてゐます。からして私は何處まで沈んで行く事で御座いませう。本當に自業自得で御座います。今日拜見したお手紙も本當は讀まずに裂いてしまふので御座いましたけれども……私の居所を誰方にもお知らせしない譯などは申し上げるまでも御座いますまい。この手紙はあなたに差上げる最後のものかとも思はれます。お大事にお越し遊ばしませ。蔭ながら御成功を祈り上げます。

只今除夜の鐘が鳴ります。

大晦日の夜

木村様

葉より

葉子はそれを日本風の布袋に收めて、毛筆で器用に表記を書いた。書き終ると急にいらいらし出して、いきなり兩手に握つて一と思ひに引き裂かうとしたが、思ひ返して捨てるやうにそれを壁の上に投げ出すと、我れにもなく冷やかな微笑が口尻をかすかに引きつらした。

葉子の胸をどきんとさせる程高く、すぐ最寄りにある増上寺の除夜の鐘が鳴り出した。遠くから何處の寺のとも知れない鐘の聲がそれに應ずるやうに聞こえて來た。その音に引入れられて耳を澄ますと夜の沈黙の中にも聲はあつた。十二時を打つぽん／＼時計、「かるた」を讀み上げるらしいはいやいだ聲、何に驚いてか夜啼きをする鶏……葉子はそんな響きを探り出すと、人の生きてゐるといふのが恐ろしい程不思議に思はれ出した。急に寒さを感じて葉子は寝衣度になち上つた。

三十一

寒い明治三十五年の正月が來て、愛子達の

冬期休暇も終りに近づいた。葉子は妹達を再び田島塾の方に歸してやる氣にはなれなかつた。田島といふ人に對して反感を抱いたばかりではない。妹達を再び預かつて貰ふ事になれば葉子は當然挨拶に行つて來べき義務を感じたけれども、どうぶふものかそれが憚られて出來なかつた。横濱の支店長の永井とか、この田島とか、葉子には自分ながら譯の分らない苦手の人があつた。その人達が格別偉い人だとも、恐ろしい人だとも思ふのではなかつたけれども、どうぶふものかその前に出る事に氣が引けた。葉子は父妹達が不語不語の中に生徒達から受けねばならぬ通告を思ふと不便でもあつた。で、毎日通學するに遠すぎると云ふ理由の下にそこをやめて、飯倉にある隣女學校といふのに通はせる事にした。

二人が學校に通ひ出すやうになると、倉地は朝から葉子の所で退校時間まで過ごすやうになつた。倉地の腹心の仲間たちもちよい／＼出入りした。殊に正井といふ男は倉地の影のやうに倉地のゐる所には必ず居た。例の水先案内業者組合の設立について正井が一番動いてゐるのらしかつた。正井と云ふ男は、一見放漫なやう

金よりもこの金を使ふ事に寧ろ心安さを覺えた。葉子はすぐ思ひ切つた散財をして見たい誘惑に驅り立てられた。

ある日當りのいゝ日に倉地とさし向ひて酒を飲んでゐると昔香園の方から藪鶯の啼く聲が聞えた。葉子は軽く酒ほてりのした顔を舉げて倉地を見やりながら、耳では鶯の啼き続けるのを注意した。

「春が来ますわ」

「早いもんだな」

「何處かへ行さませうか」

「まだ寒いよ」

「さうねえ……組合の方は」

「うむあれが片付いたら出かけようわい。いゝ加減くさくしをつた」

さう云つて倉地はさも面倒さうに杯の酒を一

煽りに煽りつけた。

葉子はすぐその仕事がうまく運んでゐないのを感じ付いた。それにしてもあの毎月の多額な金は何處から来るのだらう。さうちらつと思ひながら素早く話を他にそらした。

三十二

それは二月初旬の或る日の晝頃だつた。か

らつと晴れた朝の天氣に引きかへて、朝日が暫らく東向きの窓に射す間もなく、空は薄曇りに曇つて西風がごろ／＼と杉森にあたつて物凄いい音を立て始めた。何處かに春をほめかすやうな日が来たたりした後なので、殊更世の中が晴濤と見えた。雪でもまわしかけて来さうに底冷えがするので、葉子は茶の間に置火鉢を持ち出して、倉地の着替へをそれにかけたりした。土曜だから妹達は早退けだと知りつゝも倉地は物臭ささうに外出の友度にかゝらないで、どてらを引つかけたまゝ火鉢の側にうづくまつてゐた。葉子は食器を臺所の方に運びながら、來たり行つたりする序でに倉地と物を云つた。臺所に行つた葉子に茶の間から大きな聲で倉地が云ひかけた。

「おいお葉(倉地は何時の間にか葉子をかう呼ぶやうになつてゐた)俺れは今日は二人に對面して、これから勝手に出這入りの出来るやうにするぞ」

葉子は布巾を持つて臺所の方からいそ／＼と茶の間に歸つて來た。

「何んだつてまた今日……」

さう云つてつき膝をしながらちやや臺を拭つた。

「いつまでもかうしてゐるが氣づまりでしやうないからよ」

「さうねえ」

葉子はそのまゝそこに坐り込んで布巾をちやや臺にあてがつたまゝ考へた。本當はこれは疾うに葉子の方から云ひ出すべき事だつたのだ。妹達のゐない隙か、寝てからの暇を窺つて、倉地と會ふのは、始めの中こそあひびきのやうな興味を起させないでもないと思つたのと、葉子は自分の通つて來たやうな道はどうしても妹達には通らせたくない所から、自分の裏面を窺はせまいと云ふ心持とで、今までついずるに妹達を倉地に近づかせないで置いたのだつたが、倉地の言葉を用いて見ると、さうしておくのが少し延び過ぎたと氣が附いた。又新しい局面を二人の間に開いて行くにもこれは悪い事ではない。葉子は決心した。

「ちや今日にしませう。……それにしても遺物だけは着替へてゐて下さいましな」

「よし來た」

と倉地はにこ／＼しながらすぐ立ち上つた。葉子は倉地の後ろから着物を羽織つておいて羽がひに抱きながら、今更に倉地の嚴來な雄々しい體格を自分の胸に感じしつゝ、

乳母も段々年を取つて行く身だ。麻疹にかゝつて定子は毎日々々、の名を呼び續けてゐる、その聲が葉子の耳に聞こえないのが不思議だ。こんな事が消息の度毎にたど／＼しく書き連ねてあつた。葉子はゐても立つても堪らないやうな事があつた。けれどもそんな時には倉地の事を思つた。一寸倉地の事を思つただけで、齒を喰ひしぱりながらも、昔香園の表門からそつと家を抜け出る誘惑に打ち勝つた。

倉地の方から手紙を出すのは忘れたと見えて、岡はまだ訪れては來なかつた。木村にあれば切な心持を書き送つた位だから、葉子の住所さへ分れば尋ねて來ない筈はないのだが、倉地にはそんな事はもう念頭に無くなつてしまつたらしい。誰れも來るなと願つてゐた葉子もこの頃になつて見ると、ふと岡の事などを思ひ出す事があつた。横濱を立つ時に葉子にかじり附いて離れなかつた青年を思ひ出す事などもあつた。然しかう云ふ事がある度毎に倉地の心の動き方を、屹度推察した。而しては何時でも願をかけるやうにそんな事は夢にも思ひ出すまいと心に誓つた。

倉地が一向に無頓着なので、葉子はまだ籍を移してはゐなかつた。尤も倉地の先妻が果し

て籍を抜いてゐるか何うかも知らなかつた。それを知らうと求めるのは葉子の誇りが許さなかつた。凡てさう云ふ習慣を天から考への中に入れてゐない倉地に對して今更らそんな形式事を迫るのは、自分の度胸を見透かされるといふ上からもつらかつた。その誇りといふ心持も、度胸を見透かされるといふ恐れも、本當を云ふと葉子が何處までも倉地に對してひげ目になつてゐるのを語るに過ぎないとは葉子自身存分に知り切つてゐる癖に、それを勝手に踏み躪つて、自分の思ふ通りに倉地にして退けさす不敵さを持つ事はどうしても出來なかつた。それなのに葉子は動もせずと倉地の先妻の事が氣になつた。倉地の下宿の方に遊びに行く時でも、その近所で人妻らしい人の往來するのを見かけると葉子の眼は知らず識らず監視の爲めにかじやいた。一度も顔を合せないが、僅かな時間の寫眞の記憶から、屹度その人を見分けて見せると葉子は自信してゐた。葉子は何處を歩いても嘗てそんな人を見かけた事はなかつた。それが又妙に裏切られてゐるやうな感じを與へる事もあつた。

航海の初期に於ける批點の打ち處のないやうな健康の意識はその後葉子にはもう歸つて來な

かつた。寒氣が募るにつれて下腹部が鈍痛を覺えるばかりでなく、腰の後ろの方に冷たい石でも釣り下げてあるやうな、重苦しい氣分を感じずるやうになつた。日本に歸つてから足の冷え出すのも知つた。血管の中には血の代りに文火でも流れてゐるのではないかと思ふ位寒氣に對して平氣だつた葉子が、床の中で倉地に足のひどく冷えるのを注意されたりすると不思議に思つた。肩の凝るのは幼少の時から、腹痛の痛みが月經と關係があるのを氣付いて、葉子は葉子はちよい／＼按摩を呼んだりした。腹部の婦人病であるに相違ないとは思つた。然しさうでもないと思ふやうな事が葉子の胸の中にはあつた。若しや懷妊では、葉子は喜びに胸を躍らせてさう思つても見た。牝豚のやうに幾人も子を生むのは逆も耐へられない。然し一人は何うあつても生みたいものだと思ふ葉子は祈るやうに願つてゐたのだ。定子の事から考へると自分には案外子運があるのかも知れないとも思つた。然し前の懷妊の経験と今度の徴候とは色色な點で全く違つたものだつた。

一月の末になつて木村からは果して金を送つて來た。葉子は倉地が潤澤につけ居ける

も美しいねえ」

さう云つて貞世の顔をちよつと見てからぢつと眼を愛子にさだめた。愛子は格別恥ぢる様子もなくその柔和な多恨な眼を大きく見開いてまんじりと倉地を見やつてゐた。それは男女の區別を知らぬ無邪氣な眼とも見えた。先天的に男といふものを知りぬいてその心を試みようとする嫁姑の眼とも見られない事はなかつた。それほどその眼は奇怪な無表情の表情を持つてゐた。

「始めてお目に懸るが、愛子さんおいくつ」
倉地はなほ愛子を見やりながら尋ねた。

「私始めてでは御座いません。……いつぞやお目に懸りました」

愛子は静かに眼を伏せてはつきりと無表情な聲でかう云つた。愛子があの年頃で男の前にはつきりあゝ受け答へて出来るのは葉子にも意外だつた。葉子は思はず愛子を見た。

「はて、何處でね」

倉地もいぶかしげにかう問ひ返した。愛子は下を向いたまゝ口をつぐんでしまつた。そこにはかすかながら憎惡の影がひらめいて過ぎたやうだつた。葉子はそれを見逃がさなかつた。

一瞬の間を見せた時に矢張り彼女は眼を覺まして

ゐたのだな。それを云ふのか知らん——と思つた。倉地の顔にも思ひかけず一寸どぎまぎしたらしい表情が浮んだのを葉子は見た。「なあに……」
激しく葉子は自分で自分を打消した。

貞世は無邪氣にも、この熊のやうに大きな男が親しみ易い遊び相手と見て取つたらしい。貞世がその日學校で見聞きして來た事などを例の通り残らず姉に報告しようとして、何んでも構はず、何んでも隠さず、云つてのけるのに倉地が興に入つて合槌を打つので、こゝに移つて來てから客の味を全く忘れてゐた貞世は嬉しがつて倉地を相手にしようとした。倉地は散々貞世と戯れて、書近く立つて行つた。

葉子は朝食がおそかつたからと云つて、妹達だけが晝食の膳についた。

「倉地さんは今、ある會社をお立てになるので色々相談事があるのだけれども、下宿では周りがやかましくつて困ると仰しやるから、これくらいいつでもこゝで御用をなさるやうに云つたから、屹度これからはちよつといらつしやるだらうが、貞ちゃん、今日のやうに遊びのお相手にばかりしてゐては駄目よ。その代り英語なんぞで分らない事があつたら何んでもお聞きするといふ、姉さんより色々な事をよく知つていら

つしやるから。……それから愛さんは、これから倉地さんのお客様も見えらだらうから、そんな時には一々姉さんの指圖を待たないではききお世話をして上げるのよ」

と葉子は豫め二人に釘をさした。

妹達が食事を終つて二人で後始末をしてゐると又玄關の格子が静かに開く音がした。

貞世は葉子の所に飛んで來た。

「お姉様又お客様よ。今日は随分澤山入らつしやるわね。誰れでせう」

と物珍らしさうに玄關の方に注意の耳をそばだてた。葉子も誰れだらうと訝つた。やゝ暫くして靜かに案内を求める男の聲がした。それを聞くとき貞世は姉から離れて駆け出して行つた。愛子が襖を外づしながら案所から出て來た時分には、貞世はもう一枚の名刺を持つて葉子の所に取つて返してゐた。名刺のついた高價らしい名刺の表には岡一と記してあつた。

「まあ珍しい」
葉子は思はず聲を立てて貞世と共に玄關に走り出た。そこには處女のやうに美しく小柄な岡が室のかゝつた傘をつぼめて、外食の瀧りを紅をさしたやうに赤らんだ指の先きではじきながら、女のやうにはいかんで立つてゐた。

「それは二人ともいゝ子よ。可愛がつてやつて下さいましよ。……けれどもね、木村とのあ的事だけはまだ内證よ。いゝ折を見つけて、私から上手に云つて聞かせるまでは知らん振りをしてね……よくつて……あなたはうっかりするとあけすけに物を云つたりなさるから……今度だけは用心して頂戴」

「馬鹿だなどうせ知れる事を」

「でもそれはいけません……是非」

葉子は後ろから倉延びをしてそつと倉地の後頭を吸つた。而して二人は顔を見合はせて微笑みかはした。

その瞬間に勢よく玄關の格子戸ががらつと開いて「おゝ寒い」と云ふ貞世の聲が潮高く聞こえた。時間でもないで葉子は思はずぎよつとして倉地から飛び離れた。次いで玄關口の障子が開いた。貞世は茶の間に駆け込んで来るらしかった。

「お姉様雪が降つて来てよ」

さう云つていきなり茶の間の襖を開けたのは貞世だった。

「おやさう……寒かつたでせう」

とでも云つて迎へてくれる姉を期待してゐたらしい貞世は、置火爐に這入つて胡坐をかいてゐ

る途方もなく大きな男を姉の外に見附けたので、驚いたやうに大きな眼を見張つたが、そのまゝすぐに玄關に取つて返した。

「愛姉さんお客様よ」

と聲をつぶすやうに云ふのが聞こえた。倉地と葉子とは顔を見合はして又微笑みかはした。

「こゝにお下駄があるぢやありませんか」

さう落ち付いていふ愛子の聲が聞こえて、やがて二人は靜かに這入つて来た。而して愛子はし

とやかに、貞世はべちやんと坐つて、聲を揃へて「只今」とぶひながら辭儀をした。愛子の年頃の時、厳格な宗教學校で無理強ひに男の子のやうな無趣味な服装をさせられた、それに復讐

をするやうな氣で葉子の装はした愛子の身なりはすぐ人の眼を牽いた。お下げをやめさせて、束髪にさせた項とたばの所には、その頃米國での流行そのまゝに、蝶結びの大きな黒いリボン

がとめられてゐた。古代紫の紬地の着物に、カシミヤの袴を裾短かにはいて、その袴は以前葉子が發明した例の尾錠どめになつてゐた。

貞世の髪は又思ひ切つて短くおみづばに切りつけて、横の方に深紅のリボンが結んであつた。

それがこの才はじけた童女を、膝まで位な、わざと知く仕立てた袴と共に可憐にもいたづらいた

づらしく見せた。二人は寒さの爲めに頬を眞紅にして、眼を少し涙ぐましてゐた。それが殊更ら二人に別々な可憐な趣を添へてゐた。

葉子は少し改まつて二人を火鉢の座から見やりながら、

「お歸りなさい。今日はいつもより早かつたのね。……お部屋に行つてお包みをおいて袴を取つていらつしやい、その上でゆっくりお話する事があるから……」

二人の部屋からは貞世が獨りではしやいでゐる聲が暫らくしてゐたが、やがて愛子は廣い帯を普段着と着かへた上にしめて、貞世は袴をぬいだけで歸つて来た。

「さあこゝにいらつしやい。(さう云つて葉子は妹達を自分の身近に坐らせた)この方がい

つか雙鶴館でお噂した倉地さんなのよ。今までも時々いらしたんだけれどもつひにお目に懸る折がなかつたわね。これが愛子、これが貞世です」

さう云ひながら葉子は倉地の方を向くともうくすいすいやうな顔付きをせずにはゐられなかつた。倉地は誰い笑を笑ひながら案外眞面目

に、

「お初に」と云つて一寸頭を下げた。二人と

だつた岡(おか)様……愛(あい)さんあなたお知り申(まう)してゐないの。あの失禮(しつれい)ですが何(なん)んと仰(おほ)しやいますの、お従妹(じゆうまい)御(ご)さんのお名前(な)は――と岡(おか)に尋(たず)ねた。岡(おか)は言葉(ことば)通りに神經(しんけい)を顛倒(てんたう)させてゐた。それはこの青年(せいねん)を非常に醜(みにく)く且(かつ)つ美(うつく)しくして見(み)せた。急に(きん)で坐(ま)り直(ただ)した居住(ゐ)ひをすぐ意味(いみ)もなく崩(くづ)して、それを又(また)非常に後悔(ごかい)したらしい顔付(かおづき)を見(み)せたりした。

「は？」

「あの私共(わたくしども)の噂(うわさ)をなさつたそのお嬢様(ぢやうさま)のお名前(な)は――」

「あの矢張り岡(おか)と云(い)ひます」

「岡(おか)さんならお顔(かほ)は存(ぞん)じ上げてをりますわ。――」

つ上の絨(じゆう)にいらつしやいます――

愛子(あいこ)は少しも騒(さわ)がずに、倉地(くらぢ)に對(たい)した時(とき)と同じ調子(てうし)でぢつと岡(おか)を見(み)やりながら即座(いそくざ)にかう答(こた)へた。その眼(め)は相變(あひら)らず嬌濁(けうだく)と見える程(ほど)極端(ごくたん)に純潔(じゆんけつ)だつた。純潔(じゆんけつ)と見える程(ほど)極端(ごくたん)に嬌濁(けうだく)だつた。

岡(おか)は怖(おそ)おながらその眼(め)から自分の眼(め)を外(そと)らす事(こと)が出来(こ)ないやうにまともに愛子(あいこ)を見(み)て

みるゝ耳たぶまでを與赤(よあか)にしてゐた。葉子(えいこ)はそれを氣取(きと)ると愛子(あいこ)に對(たい)して一段(いちだん)の憎(にく)しみを感(かん)

ぜずにはゐられなかつた。

「倉地(くらぢ)さんは……」

岡(おか)は一路(いちろ)の逃げ路(にげみち)をやうやく求め出(で)したやうに葉子(えいこ)に眼(め)を轉(く)じた。

「倉地(くらぢ)さん？ たつた今(いま)お歸(かへ)りになつたばかり

惜(お)しい事(こと)をしましてねえ。でもあなたこれから

はちよくゝゝ入(い)らして下さいますわね。倉地(くらぢ)

さんもすぐお近所(きんじよ)にお住(ま)ひですから何時(なんじ)か御(ご)

一緒に御飯(ごはん)でもいたゞきませう。私(わたくし)日本(にっぽん)に歸(かへ)つて

からこの家(いへ)にお客様(きやくさま)をお上げするのは今日(けふ)が始(はじ)

めてですのよ。ねえ眞(ま)ちゃん。……本當(ほんとう)によく來

て下さいました事(こと)。私(わたくし)疾(はや)うから來(き)ていたゞきた

くつて仕様(しやう)がなかつたんですけれども、倉地(くらぢ)さ

んから何(なん)んとか云(い)つて上げて下さるだらうと、

そればかりを待(まち)つてゐたのですよ。私(わたくし)からお手

紙(し)を上げるのはいけませんもの。そこで葉子(えいこ)は

解(わか)つて下さるでせうと云(い)ふやうな優(やさ)しい眼付(めづき)を

強い表情(へいしやう)を添(そ)へて岡(おか)に送(おく)つた。木村(きむら)からの手紙(てがは)

であなたの事(こと)は委(わ)しく何(なん)つてゐましたわ。色々(いろいろ)

お苦(くる)しい事(こと)がおありになるんですつてね――」

岡(おか)はその頃(ころ)になつてやうやく自分を恢復(くわいふく)し

たやうだつた。しどろもどろになつた考(かん)へや言(い)

葉(え)も稍(しやう)と整(ととの)つて見(み)えた。愛子(あいこ)は一度(いちど)しげゝと

岡(おか)を見(み)てしまつてからは、決(けつ)して二度(にど)とはその

方(かた)を向(む)かずに、眼(め)を疊(かさね)の上に伏(ふ)せてぢつと千里(せんり)

も離(はな)れた事(こと)でも考(かん)へてゐる様子(ようす)だつた。

「私の意氣地(いいきち)のないのが何(なん)よりもいけないんです。親類(しんるい)の者(もの)達(たち)は何(なん)んと云(い)つても私(わたくし)を實業(じつぎやう)の

方面(かたへ)に入れて父(ちち)の事業(じしやう)を嗣(ついで)がせようとするんで

す。それは多分(たぶん)本當(ほんとう)にいゝ事(こと)なんではせう。けれ

ども私(わたくし)には何(なん)うしてもさう云(い)ふ事(こと)が判(は)らない

から困(こ)ります。少しも判(は)れば、どうせこんな

に病身(びやうみ)で何(なん)も出来(こ)ませんから、母(はは)はじめの云(い)

ふ事を聽(き)きたいんですけれども……私(わたくし)は時

時(とき)を食(た)にでもなつて仕舞(しま)ひたいやうな氣(き)がしま

す。皆(みな)んなの主人(しゅじん)思(おも)ひな眼(め)で見(み)つめられてゐる

と、私(わたくし)は皆(みな)んなに濟(たす)まなくなつて、何(なん)故(ゆ)自分(おれ)見

たいな屑人(くずびと)人間(にんげん)を惜(お)しんでゐてくれるのだらう

とよくさう思(おも)ひます……こんな事(こと)今(いま)まで誰(だれ)に

も云(い)ひはしませんけれども。突然(とつぜん)日本(にっぽん)に歸(かへ)つて

來(き)たりなぞしてから私(わたくし)は内々(うちうち)監視(かんし)までされる

やうになりました。……私(わたくし)のやうな家(いへ)に生(な)れる

と友達(ともだち)といふものは一人(ひとり)も出来(こ)ませんし、皆(みな)

などは表面(へいめん)だけで物(もの)を云(い)つてゐなければならな

いんですから……心(こころ)が淋(さび)しくつて仕(し)方があり

ません」

さう云(い)つて岡(おか)はすがるやうに葉子(えいこ)を見(み)やつた。

岡(おか)が少し震(ふる)へを帯(お)びた、汚(よご)れつ氣(き)の座(ま)ほどもな

い摩(ま)の調子(てうし)を落(お)してしんみりと物を云(い)ふ様子(ようす)に

は自(みづか)らな氣高(けだか)い淋(さび)しみがあつた。戸障子(とじ)をき

「いゝ所でせう、お出でには少しお寒かつたかも知れないけれども、今日はほんとにいい、折柄でしたわ。隣りに見えるのが有名な苔香園、あすこの森の中が紅葉館、この杉の森が私大好きですの。今日は雪が積つて猶更ら綺麗ですわ」

葉子は岡を三階に案内して、その硝子戸越しにあちこちの雪景色を誇りがに指呼して見せた。岡は言葉少なながら、ちか／＼と眩しい印象を眼に残して、降り下り降り煽る雪の向うに隠見する山内の木立の姿を嘆賞した。

「それにしても何うしてあなたはこゝを……倉地から手紙でも行きましたか」
岡は神秘的に微笑んで葉子を顧みながら「はいえ」と云つた。

「そりやをかしい事……それでは何うして」

縁側から座敷へ戻りながら徐ろに、
「お知らせがないもんで上つては屹度いけないとは思ひましたけれども、こんな雪の日ならお客もなからうからひよつとかすると會つて下さるかと思つて……」

さう云ふ云ひ出しで、岡が語る所によれば、岡の従妹に當る人が幽蘭女學校に通學してゐて、正月の學期から旦月と云ふ姉妹の美しい生

徒が来て、それは芝山内の裏坂に美人屋敷と云つて界隈で有名な家の三人姉妹の中の二人であるといふ事や、一番の姉に當る人が報正の報で喉を立てられた優れた美貌の持主だと云ふ事やが、早くも口さがない生徒間の評判になつてゐるのを何かの折に話したのですぐ思ひ當つたけれども、一日々々と訪問を躊躇してゐたのだ

の事だつた。葉子は今更に世間の案外に狭いのを思つた。愛子と云はず貞世の上にも、自分の行跡がどんな影響を與へるかも知へずにはゐられなかつた。そこに貞世が、愛子が調へた茶器をあぶなつかしい手附きで、眼八分に持つて来た。貞世はこの日淋しい家の内に幾人も客を迎へる物珍らしさに有頂天になつてゐたやうだつた。満面に偽りのない愛嬌を見せながら、丁寧につちやんとお辭儀をした。而して顔にたれかゝる黒髪を振り仰いで頭を後ろにさばきながら、岡を無邪氣に見やつて、姉の方に寄り添ふと大きな聲で「どなたと聞いた」

「一緒にお引き合しますからね、愛さんにもお出でなさいと云つていらつしやい」
二人だけが座に落ち付くと岡は涙ぐましいやうな顔をして、ちつと手あぶりの中を見込んでゐた。葉子の思ひなしかその顔にも少しやつれが

見えるやうだつた。普通の男ならば多分左程にも思はないに違ひない家の中のいさくきなどに繊細過ぎる神経をなやまして、それにつけても葉子の黒髪を殊更にあこがれてゐたらしい様子は、そんな事については、言ふはなないが、岡の顔にははつきりと描かれてゐるやうだつた。

「そんなにせいたつていやよ貞ちゃんは。せつかちな人ねえ」
さう穩かにたしなめるらしい愛子の聲が降下して。

「でもそんなにおしやれしなかつたつていいわ。お姉様が早くつて仰しやつてよ」
無遠慮にかう云ふ貞世の聲もはつきり聞こえた。葉子はほゝゑみながら岡を暖かく見やつた。岡もさすがに笑ひを宿した顔を上げたが、葉子と見交はすと急に頬をほつと赤くして眼を障子の方に外らしてしまつた。手あぶりの縁に置かれた手の先きが幽かに震ふのを葉子は見のがさなかつた。

やがて、妹達二人が葉子の後ろに現はれた。葉子は坐つたまゝ手を後ろに廻して、
「そんな人のお尻の所に坐つて、もつとこつちにお出でなさいな。……これが妹達ですの。どうかお友達にして下さいまし。お前が御一緒

伴はれて若香園の表門の方から三田の通りなどに散歩に出た。人々はそのきらびやかな群れに物好きな眼をかがやかした。

三十三

岡に住所を知らせてから、すぐそれが古藤に通じたと見えて、二月に這入つてからの木村の消息は、倉地の手を経ずに直接葉子にあって古藤から廻送されるやうになった。古藤は然し頑固にもその中に一言も自分の消息を封じ込んでよこすやうな事はしなかつた。古藤を近づかせる事は一面木村と葉子との關係を斷絶さす機會を早める恐れがないでもなかつたが、あの古藤の單純な心をうまく操りさへすれば、古藤を自分の方になづけてしまひ、従つて木村に不安を起させない方便になると思つた。葉子は例のいたづら心から古藤を手なづける興味をそゝられないでもなかつた。然しそれを實行に移すまでにその興味は高じては來なかつたのでそのまゝにしておいた。

木村の仕事は思ひの外都合よく運んで行くしかつた。「日本に於ける未來のビーボデー」といふ標題に木村の肖像まで入れて、ハミルトン氏配下の敏腕家の一人として、又品性の高潔な

公共心の厚い好箇の青年實業家として、やがては日本に於て、米國に於けるビーボデーと同様の名譽を贏ち得べき約束にあるものと賞讃したシカゴ・トリビューンの青年實業家「前判記」の切抜きなどを封入して來た。思ひの外巨額の爲替をちよいと送つてよこして、倉地氏に支拂ふべき金額の全體を知らせてくれたら、どう工面しても必ず送付するから、一日も早く倉地氏の保護から獨立して世評の誤謬を實行的に訂正し、併せて自分に對する葉子の眞情を證明してほしいなどと云つてよこした。葉子は——倉地に溺れ切つてゐる葉子は鼻の先きでせゝら笑つた。

それに反して倉地の仕事の方はいつまでも鼻がつかないらしかつた。倉地の云ふ所によれば日本だけの水先案内業者の組合と云つても、東洋の諸港や西米國の沿岸にあるそれらの組合とも交渉をつけて連絡を取る必要があるのに、日本の移民問題が米國の西部諸州でやかましくなり、排日熱が過度に煽動され出したので、何事も米國人との交渉は思ふやうに行かずにその點で行きなやんでゐるとの事だつた。さう云へば米國人らしい外國人が處々倉地の下宿に出入りするのを葉子は氣がついてゐた。或る時

はそれが公使館の館員でもあるかと思ふやうな、禮装をして見事な馬車に乗つた紳士である事もあり、或る時はズボンの折り目もつけな程だらしの無い風をした人相のよくない男でもあつた。

兎に角二月に這入つてから倉地の様子が少しづつ荒んで來たらしいのが目立つやうになつた。酒の量も著しく増して來た。正井が嘔みつくやうに怒鳴られてゐる事もあつた。然し葉子に對しては倉地は前にも勝つて溺愛の度を加へ、あらゆる愛情の證據を掴むまでは執拗に葉子を虐げるやうになつた。葉子は眼もくらむ火酒を煽りつけるやうにその虐げを喜んで迎へた。

ある夜葉子は妹達が就寝してから倉地の下宿を訪れた。倉地はたつた一人で淋しさうにソーダ・ビスケットを肴にウキスキーを飲んでゐた。ちややぶ臺の周圍には書類や港灣の地圖やが亂暴に散らけてあつて、臺の上の虚のコップから察すると、正井が浦れか、今客が歸つた所らしかつた。煙を明けて葉子の這入つて來たのを見ると倉地は毎時にもなく一寸險しい眼付きをして書類に眼をやつたが、そこにあるものを猿轡を延ばして引き寄せて忙はしく一まとめ

しませながら雪を吹きまく戸外の荒々しい自然の姿に比べては殊更それが目立つた。葉子には岡のやうな消極的な心持は少しも分らなかつた。然しあれでゐて、米國くんだから乗つて行つた船で歸つて来る所などには、粘り強い意力が潜んでゐるやうにも思へた。平凡な青年なら出来ても出来なくとも周囲のものに煽てあげられれば疑ひもせずに父の遺業を嗣ぐ眞似をして喜んでゐるだらう。それが何うしても出来ないといふ所にも何處か違つた所があるのではない。葉子はさう思ふと何んの理解もなくこの青年を取捲いて唯々わい／＼騒ぎ立ててゐる人達が馬鹿々々しくも見えた。それにしても何故もつとはき／＼とそんな下らない障礙位打ち破つてしまはないのだらう。自分ならその財産を使つてから、「かうすればいいのかい」とでも云つて、圍りて世話を焼いた人間達を胸のすき切るまで思ひ存分笑つてやるのに。さう思ふと岡の煮え切らないやうな態度が齒がゆくもあつた。然し何んと云つても抱きしめた程可憐なのは岡の繊美な滑しさうな姿だつた。岡は上手に入れたれた甘露を吸ひ終つた茶碗を手の先きに据ゑて綿密にその作りを賞讃してゐた。

「御覺えになるやうなものぢや御座いません事よ」
岡は悪い事でもしてゐたやうに顔を赤くしてそれを下においた。彼れはいゝ加減な世辭は云へないらしかつた。
岡は始めて來た家に長居するのは失禮だと來た時から思つてゐて、機會ある毎に座を立たうとするらしかつたが、葉子はさう云ふ岡の遠慮に感付けば感付く程巧みにも凡ての機會を岡に與へなかつた。
「もう少しお待ちになると雪が小降りになりました。今、こなひだ印度から來た紅茶を入れて見ますから召上つて見て頂戴。普段いゝものを召上りつけていらつしやるんだから、鑑定をしていただきますわ。一寸、……ほんの一寸待つていらしつて頂戴よ」
さう云ふ風にいつて岡を引き止めた。始めの間こそ倉地に對してのやうにはなつかなかつた貞世も段々と岡と口をきくやうになつて、仕舞には岡の穩やかな間に對して思ひのまゝを可愛らしく語つて聞かせたり、話題に窮して岡が黙つてしまふと貞世の方から無邪氣な事を聞き糺して、岡をほゝゑましたりした。何んと云つても岡は美しい三人の姉妹が（その中愛子だけ）

けは他の二人とは全く違つた態度で、心を籠めて親しんで来るその好意には敵し兼ねて見えた。盛んに火を起した暖かい部屋の中の空氣にこもる若い女達の暖かからとも、懐ろからとも、膚からとも知れぬ柔軟な香りだけでも去りがたい思ひをさせたに違ひなかつた。何時の間にか岡はすっかり腰を落着けて、云ひやうなく快く胸の中のわだかまりを一掃したやうに見えた。
それからと云ふもの、岡は美人屋敷と略される葉子の隠れ家に折々出入りするやうになつた。倉地とも顔を合はせて、互に「快く船の中の思ひ出し話などをした。岡の眼の上には葉子の眼が義眼されてゐた。葉子のよしと見るものは岡もよしと見た。葉子の憎むものは岡も無條件で憎んだ。唯々一つその例外となつてゐるのは愛子といふものらしかつた。勿論葉子とて性格的には何うしても愛子と納れ合はなかつたが、骨肉の情として矢張り互に云ひやうのない執着を感じあつてゐた。然し岡は愛子に對しては心からの愛着を持ち出すやうになつてゐる事が知れた。
兎に角岡の加はつた事が美人屋敷の彩りを多様にした。三人の姉妹は時折り、倉地、岡に

してそれが父倉地の要求でもある事を本能的に感じてゐた。

「いゝわねえ。何故もつと早くこんな所に來なかつたでせう。すっかり苦勞も何も忘れてしまひましたわ」

葉子はすべ／＼とほてつて少しこはばるやうな頬を撫でながら、とろけるやうに倉地を見た。もう大分酒の氣のまはつた倉地は、女の肉感をそゝり立てるやうな匂ひを部屋中に撒き散らす葉巻をふかしながら、葉子を尻目にかけた。

「それは結構。だが俺れにはさつきの話が喉につかへて残つとるて。胸糞が悪いぞ」

葉子はあきれたやうに倉地を見た。

「木村の事？」

「お前は俺れの金を心任せに使ふ氣にはなれないんか」

「足りませんもの」

「足りなきや何故云はん」

「云はなかつたつて木村がよこすんだからいゝぢやありませんか」

「馬鹿！」

倉地は右の肩を小山のやうに聳やかして、上體を斜に構へながら葉子を睨つけた。葉子はその眼の前で海から出る夏の月のやうに微笑んで

見せた。

「木村は葉ちやんに惚れとるんだよ」

「而して葉ちやんは嫌つてゐるんですわね」

「冗談は措いてくれ：俺り眞剣で云つとるんだ。俺れ達は木村に用はない筈だ。俺れは用のないものは片つ端から捨てゐるのが立て前だ。噂だらうが子だらうが：見る俺れを：よく見ろ。お前はまだこの俺れを疑つとるんだな。後釜には木村を何時でもなほせるやうに喰ひ残しをしとるんだな」

「そんな事はありませんわ」
「では何んで手紙の遣り取りなどし居るんだ」
「お金が欲しいからなの」
葉子は平氣な顔をして又話をあとに戻した。而して獨酌で杯を傾けた。倉地は少し吃る程怒りが募つてゐた。

「それが悪いと云つとるのが解らないか：俺れの面に泥を塗りこくつとる……こつちに來い。(さう云ひながら倉地は葉子の手を取つて自分の膝の上に葉子の上體をたくし込んだ)云へ、隠さずに。今になつて木村に未練が出て來をつたんだらう。女と云ふはさうしたもんだ。木村に行きたくば行け、今行け。俺れのやうなやくざを構つとると芽は出やせんから。：：お

前は太て腐れがいつちよく似合つとるよ：：但し俺れをだましにかゝると見當違ひだぞ」

さう云ひながら倉地は葉子をつつ放すやうにした。葉子はそれでも少しも平靜を失つてはゐなかつた。あでやかに微笑みながら、

「あなたもあんまり分らない……」
と云ひながら今度は葉子の方から倉地の膝に後向きに凭れかゝつた。倉地はそれを退けようとはしなかつた。

「何が分らんかい」

暫らくしてから、倉地は葉子の肩越しに杯を取り上げながら尋ねた。葉子には返事がなかつた。又暫らくの沈黙の時間が過ぎた。倉地がもう一度何か云はうとした時、葉子は何時の間にかしく／＼と泣いてゐた。倉地はこの不意打ちに思はずはつとしたやうだつた。

「何故木村から送らせるのが悪いんです」

葉子は涙を氣取らせまいとするやうに、然し打ち沈んだ調子でかう云ひ出した。

「あなたの御様子でお心持が讀めない私だとお思ひになつて？ 私故に會社をお引きになつてから、どれ程暮し向きに苦しんでいらつしやるか。その位は馬鹿でも私にはちやんと響いてゐます。それでもしみついた事をする

に床の間に移すと、自分の隣りに座蒲團を敷いて、それに坐れと顎を突き出して合圖した。而して激しく手を鳴らした。

「コップと炭酸水を持つて来い」
用を聞きに來た女中にかう云ひ附けておいて、激しく葉子をまともに見た。

「葉ちゃん（これはその頃倉地が葉子を呼ぶ名前だった。妹達の前で葉子と呼び捨てにも出来ないで倉地は暫らくの間お葉さん〜と呼んでゐたが、葉子が貞世を貞ちゃんと呼ぶのから思ひついたと見えて、三人を葉ちゃん、愛ちゃん、貞ちゃんと呼ぶやうになつた。而して差向ひの時には葉子をさう呼ぶのだつた）は木村に貢がれてゐるな。白狀しつちまへ」

「それがどうして？」

葉子は左の片肘をちやぶ臺について、その指先で鬢のほつれをかき上げながら、平氣な顔で正面から倉地を見返した。

「どうしてがあるか。俺れは赤の他人に俺れの女を養はす程附拔けではないんだ」

「まあ氣の小さい」

葉子はなほも動じなかつた。そこに婢が這入つて來たので話の腰が折られた。二人は暫らく黙つてゐた。

「俺れはこれから竹柴へ行く。な、行かう」
「だつて明朝困りますわ 私が残守だと妹達が學校に行けないもの」

「一筆書いて學校なんざ休んで留守をしろと云つてやれい」

葉子は勿論一寸そんな事を云つて見ただけだつた。妹達の學校に行つた後でも、荳香園の婆さんに言葉をかけておいて家を明ける事は常始終だつた。殊にその夜は木村の事について倉地に合點させておくのが必要だと思つたので、云ひ出された時から一緒に下心ではあつたのだ。葉子はそこにあつたベンを取り上げて紙切れに走り書きをした。倉地が急病になつたので介抱の爲めに今夜はこゝで泊る。明日の朝學校の時刻までに歸つて來なかつたら、戸締りをして出懸けていゝ。さういふ意味を書いた。その間に倉地は手く着替へをして、書類を大きな支那靴に突つ込んで錠を下ろしてから、綿密に開くか開かないかを調べた。而して考へこむやうに俯向いて上服をしながら、兩手を懷ろにさし込んで錠を腹帶らしい所に仕舞ひ込んだ。

九時過ぎ十時近くなつてから二人は連れ立つて下宿を出た。増上寺前に來てから車を傭つ

た。満月に近い月がもう大分空高くかうくとかうつてゐた。

二人を迎へた竹柴館の女中は倉地を心得てゐて、すぐ庭先きに離れになつてゐる二間はかりの一軒に案内した。風はないけれども月の白さでひどく冷え込んだやうな味だつた。葉子は足の先きが氷で付まれた程感覚を失つてゐるのを感じた。倉地の浴した後で、熱い湯にゆつくり浸つたのでやうやく心地がついて戻つて來た時には、素早い女中の働きで酒肴が調へられてゐた。葉子が倉地と這出らしい事をしたのはこれが始めてなので、旅先きにあるやうな氣分が妙に二人を親しみ合はせた。況してや座敷に續く芝生のはづれの石垣には海の波が來て靜かに音を立ててゐた。空には月が冴えてゐた。妹達に取り捲かれたり、下宿人の眼をかねたりしてゐなければならなかつた二人は、くつろいだ姿と心とで火鉢に倚り添つた。世の中は二人きりのやうだつた。いつの間にか良人とかばかり倉地を考へ慣れてしまつた葉子は、ここに再び情人を見出したやうに思つた。而して何とはなく倉地をじらしてじらしてじらした挙句に、その反動から來る蜜のやうな歡語を思ひ切り味ひたい衝動に驅られてゐた。向

ようとしてゐた。葉子は自分の乗つた船は毎時でも相客諸共に轉覆して沈んで底知れぬ泥土の中に深々と潜り込んで行く事を知つた。賣國奴、國賊、り、或はさう云ふ名が倉地の名に加へられるかも知れない……と思つただけで葉子は怖毛を振つて、倉地から飛び退かうとする衝動を感じた。ぎよつとした瞬間に唯々瞬間だけ感じた。次ぎに何うかしてそんな恐ろしいはめから倉地を救ひ出さなければならぬと云ふ殊勝な心にもなつた。然し最後に落ち着いたのは、その深みに倉地を殊更に突き落して見たい惡魔的な誘惑だつた。それ程までの葉子に對する倉地の心盡しを、臆病な驚きと躊躇とで迎へる事によつて、倉地に自分の心持の不徹底なのを見下げられはしないかと云ふ危惧よりも、倉地が自分の爲めにどれ程の踏落でも汚辱でも甘んじて犯すか、それをさせて見て、満足しても満足しても満足し切らない自分の心の不足を満たしたかつた。そこまで倉地を突き落すことは、それだけ二人の執着を強める事だとも思つた。葉子は何事を犠牲に供しても灼熱した二人の間の執着を続けるばかりでなく更に強める術を見出さうとした。倉地の告白を聞いて驚いた次ぎの瞬間には、葉子は意識こそせねこれだ

けの心持に働かれてゐた。一そんな事で愛想が盡きてたまものかと思ひあしらふやうな心持に葉早くも自分を落ち着けてしまつた。驚きの表情はすぐ葉子の顔から消えて、妖婦にのみ見る極端に肉的な蠱惑の微笑がそれに代つて浮み出した。
「一寸驚かされはしましたわ。……いゝわ、私だつて何でもしますわ」
倉地は葉子が不言不語の中に感激してゐるのを感じてゐた。

一よしそれで話は分つた。木村……木村からも擡り上げろ、構ふものかい。人間並みに見られない俺れ達が人間並みに振舞つてゐてたまふかい。葉ちゃん……命……
「命……命……命……」
葉子は自分の激しい言葉に眼もくるめくやうな酔ひを覺えたが、あらん限りの力を籠めて倉地を引き寄せた。膝の上のものが音を立てて覆へるのを聞いたやうだつたが、その後は色も音もない灼の天地だつた。すさまじく焼け爛れた肉の欲念が葉子の心を全く暗ましてしまつた。天國か地獄かそれは知らない。而かも何もかも微塵につき置いて、びり／＼と震動する炎たる焔に燃や上げたこの有頂天の歡樂の

外に世に何者があらう。葉子は倉地を引き寄せた。倉地に於て今まで自分から離れてゐた葉子自身を引き寄せた。而して切るやうな痛みと、痛みからのみ來る奇怛な快感とを自分自身に感じて陶然と酔ひしれながら、倉地の二の腕に齒を立てて、思ひ切り弾力性に富んだ熱したその肉を噛んだ。

その翌日十一時過ぎに葉子は地の底から掘り起されたやうに地球の上に眼を開いた。倉地はまだ死んだもの同然にいぎたなく眠つてゐた。戸板の杉の赤みが鯨節の心のやうに半透明に眞赤に光つてゐるので、日が高いのも天氣が美しく晴れてゐるのも察せられた。甘酸ばく立ち罩つた酒と煙草の餘蘊の中に、隙間漏る光線が、汚明に輝く節色の板となつて微かに薄暗さの中を周切つてゐた。いつもならば眞赤に充血して、精力に充ち満ちて、眠りながら働いてゐるやうに見える倉地も、その朝は周體に死色をさへ注してゐた。むき出しにした腕には青筋が病的と思はれる程高く飛び出て這ひずつてゐた。泳ぎ廻る者でもあるやうに頭の中がぐらぐらする葉子には、殺人者が兇行から眼覺めて行つた時のやうな底の知れない氣味悪さを感じられた。葉子は密やかにその部屋を抜け出して

のはあなたもお嫌ひ、私も嫌ひ……私は思ふやうにお金をつかつてはゐました。ゐましたけれども……心では泣いてたんです。あなたの爲めならどんな事でも喜んでしよう……さうこの頃思つたんです。それから木村にとつて手紙を書きました。私が木村を何んと思つてるか、今更らそんな事をお疑ひになるのあなたは。そんな水臭い廻し氣をなさるからつい口惜しくなつちまいます。……そんな私だから私ではないか……（そこで葉子は倉地から離れてきちんと坐り直して扶で顔を被うてしまつた）泥棒をしるゝ仰しやる方がまだ増しです……あなたお一人でよくゝなさつて……お金の出所を……暮し向きが張り過ぎるなら張り過ぎると……何故相談に乗らせては下さらないの……矢張りあなたは私を親身には思つていらつしやらないのね……」

倉地は一度は眼を張つて驚いたやうだったが、やがて事もなげに笑ひ出した。

「そんな事を思つとつたのか。馬鹿だなあお前は。御好意は感謝します……全く。然しなれば瘦せても枯れても、俺は女の子の二人や三人養ふに事は決かんよ。月に三百や四百の金が手廻らんやうなら首をくゝつて死んで見せる。

お前をまで相談に乗せるやうな事はいらんのだよ。そんな話にはつた心配事はせん事にせうや。この暢氣坊の俺れまでがいらん氣を揉ませられるで……」

「そりや虚言です」

葉子は顔を被うたまゝ、つばりと矢繼早に云ひ放つた。倉地は黙つてしまつた。葉子もそのまゝ暫らくは何んとも云ひ出でなかつた。

母屋の方で十二を打つ柱時計の聲が幽かに聞えて來た。寒さもしん／＼と募つてゐたには相違なかつた。然し葉子はその何れをも心の戸の中までは感じなかつた。始めは一種の企らみから狂言でもするやうな氣でかゝつたのだつたけれども、かうなると葉子は何時の間にか自分で自分の情に溺れてしまつてゐた。木村を犠牲にしてまでも倉地に溺れ込んで行く自分が憐れまれた。倉地が費用の出所をつひぞ打ち明けて相談してくれないのが恨みがましく思はれもした。知らず識らずの中にどれ程葉子は倉地に喰ひ込み、倉地に喰ひ込まれてゐたかをしみ／＼と今更に思ひ知つた。何うならうと何うあらうと倉地から離れる事はもう出来ない。倉地から離れる位なら自分は屹度死んで見せる。倉地の胸に齒を立ててその心臓を噛み破つ

てしまひたいやうな狂暴な執念が葉子を底知れぬ悲しみへ誘ひ込んだ。

心の不思議な作用として倉地も葉子の心持は割青をされるやうに自分の胸に感じて行くらしかつた。稍々程経つてから倉地は無感情のやうな鈍い聲で云ひ出した。

「全くは俺れが悪かつたのかも知れない。一時は全く金には弱り込んだ。然し俺れは早や世の中の底潮にもぐり込んだ人間だと思ふと度胸が据わつてしまひ居つた。毒も血も喰つてくれよう、さう思つて（倉地はあたりを憚るやうに更に聲を落した）やり出した仕事があの組合の事よ。水先案内の奴等は委しい海圖を自分で作つて持つとる。要塞地の様子を、玄人以上ださ。それを集めにかゝつて見た。思ふやうには行かんが、食ふだけの金は餘程出る」

葉子は思はずぎよつとして息氣がつまつた。

近頃怪しげな外國人が倉地の所に出入りするの心當りになつた。倉地は葉子が倉地の言葉を理解して驚いた様子を見ると、ほと／＼惡魔のやうな顔をしてやりと笑つた。掠奪な不敵さと力が漲つて見えた。

「愛想が盡きたか……」

愛想が盡きた。葉子は自分自身に愛想が盡き

が葉子を未練にした。それからと云ふもの葉子は忘我渾沌の儘に浸る爲めには、凡てを犠牲としても惜しまない心になつてゐた。而して倉地と葉子とは互々を樂しませ而して牽き寄せる爲めにあらん限りの手段を試みた。葉子は自分の不犯性(女が男に對して持つ一番強大な靈惑物)の凡てまで惜しみなく投げ出して、自分を倉地の眼に如婦以下のものに見せるとも悔いようとはしなくなつた。二人は、傍眼には酸鼻だとさへ思はせるやうな肉慾の腐敗の末遠く、互に娯樂の實を互々から奪ひ合ひながらずるずると壊れこんで行くのだつた。

然し倉地は知らず、葉子に取つてはこの忘しい腐敗の中にも一縷の期待が潜んでゐた。一度きゆつと掴み得たらもう動かない或る物がその中に横はつてゐるに違ひない、さう云ふ期待を心の隅から拭ひ去る事が出来なかつたのだつた。それは倉地が葉子の蠱惑に全く迷はされてしまつて再び自分を恢復し得ない時期があるだらうといふそれだつた。戀をしかけたもののひけめとして葉子は今まで、自分が倉地を愛する程倉地が自分を愛してゐないとはかり思つた。それが何時でも葉子の心を不安にし、自分といふものの居振所までぐらつかせた。

どうかして倉地を廢呆のやうにしてしまひたい。葉子はそれが爲めには有る限りの手段を取つて悔いながつたのだ。妻子を離縁させても、社會的に死なしてしまつても、まだ物足らなかつた。竹柴館の夜に葉子は倉地を極印附きの兎狀持ちにまでした事を知つた。外界から切り離されるだけそれだけ倉地が自分の手に落ちるやうに思つてゐた葉子はそれを知つて有頂天になつた。而して倉地が忍ばねばならぬ屈辱を埋め合せる爲めに葉子は倉地が欲すると思はしい潔しい情慾を提供しようとしたのだ。而してさうする事によつて、葉子自身が結局自己を銷盡して倉地の興味から離れつゝある事には氣附かなかつたのだ。

兎にも角にも二人の關係は竹柴館の一夜から面目を革めた。葉子は再び妻から情熱の若々しい情人になつて見えた。さう云ふ心の變化が葉子の肉體に及ぼす變化は驚くばかりだつた。葉子は急に三つも四つも若やいだ。二十六の春を迎へた葉子はその頃の女としてはそろ／＼老いの微候をも見せる筈なのに、葉子は一とつだけ年を若く取つたやうだつた。ある天氣のいゝ午後、それは梅の蕾がもう少しづつふくらみかゝつた午後の事だつたが――

――葉子が縁側に倉地の肩に手をかけて立ち並びながら、うつとりと上氣して往の交はるのを見てゐた時、玄關に訪れた人の氣配がした。

「誰れでせう」

倉地は物惜ささうに、
「岡だらう」
と云つた。

「いゝえ此處正井さんよ」

「ななに岡だ」

「ぢや賭けよ」

葉子は丸で少女のやうに甘つたたれ口調で云つて玄關に出て見た。倉地が云つたやうに岡だつた。葉子は挨拶も碌々しないでいきなり岡の手をしっかりと取つた。而して小さな聲で、
「よく入らしてね。その間着のよくお似合ひになる事。春らしいいゝ色地ですわ。今倉地と賭けをしてゐたところ。早くお上り遊ばせ」

葉子は倉地にしてゐたやうに岡のやさし肩に手を廻してならびながら座敷に這入つて來た。
矢張りあなたの勝ちよ。あなたはあて事かお上手だから岡さんを誤つて上げたたらうまく中つたわ。今御褒美を上げるからそこで見ていらつしやいよ」

さう倉地に云ふかと思ふと、いきなり岡を抱き

戸外に出た。

降るやうな眞実の光線に遇ふと、兩眼は胸心の方に遮二無二引きつけられて堪らない痛さを感じた。乾いた空氣は息氣をとめる程喉を干からばした。葉子は思はずよけて入口の下見板に寄りかゝつて、打撲を避けるやうに兩手で顔を隠して俯向いてしまつた。

聽て葉子は人を避けながら芝生の先きの海際に出て見た。満月に近い頃の事として潮は遠く退いてゐた。蘆の枯葉が目を溶びて立つ沮湖地のやうな平地が眼の前に擴がつてゐた。然し自然は少しも昔の姿を變へてはゐなかつた。自然人も昨日のまゝの營みをしてゐた。葉子は不思議なものを見せつけられたやうに茫然として潮干潟の泥を見、鱗雲で飾られた靑空を仰いだ。昨夜の事が眞實ならこの景色は夢であらねばならぬ。この景色が眞實なら昨夜の事は夢であらねばならぬ。二つが兩立しよう筈はない。……葉子は茫然としてなほ眼に這入つて来るものを眺め續けた。

麻痺し切つたやうな葉子の感覺は段々恢復して來た。それと共に眩暈を感じる程の頭痛を先づ覺えた。次いで後腰部に鈍重な痛みがむくむくと頭を擡げるのを覺えた。肩は石のやうに凝

凝つてゐた。足は氷のやうに冷えてゐた。

昨夜の事は夢ではなかつたのだ。……而して今見るこの景色も夢ではあり得ない。……それは餘りに殘酷だ、殘酷だ。何故昨夜を界にして、世の中は加留多を裏返したやうに變つてゐてはくれなかつたのだ。

この景色の何處に自分は身を措く事が出来よう。葉子は痛切に自分が落ち込んで行つた深淵の深みを知つた。而してそこにしやごんでしまつて、苦い涙を泣き始めた。

懺悔の門を堅く閉ざされた暗い道がたゞひと筋、葉子の心の眼には行く手に見やられるばかりだつた。

三十四

兎も角も一家の主となり、妹達を呼び迎へて、その教育に興味と責任とを持ち始めた葉子は、自然々々に妻らしく又母らしい本能に立ち歸つて、倉地に對する情念にも何處か肉から精神に移らうとする傾きが出來て来るのを感じた。それは楽しい無事とも考へれば考へられぬ事はなかつた。然し葉子は明かに倉地の心がさう云ふ状態の下には少しづつ硬ばつて行き

き冷えて行くのを感じずにはゐられなかつた。

それが葉子には何よりも不満だつた。倉地を選んだ葉子であつて見れば、日が經つて從つて葉子にも倉地が感じ始めたと同様な物足らなさが感ぜられて行つた。落ち着くのか冷えるのか、兎に角倉地の感情が白熱して動かないのを見せつけられる瞬間は深い淋しみを誘ひ起した。

こんな事で自分の今我を投げ入れた戀の花を散つてしまはせてなるものか。自分の戀には絶頂があつてはならない。自分にはまだどんな難路でも舞ひ狂ひながら登つて行く熱と力とがある。その熱と力とが續く限り、ぼんやり腰を据ゑて周囲の平凡な景色などを眺めて満足してはゐられない。自分の眼には絶頂のない絶頂ばかりが見えてゐたい。さうした衝動は小休みなく葉子の胸に踊つてゐた。繪島丸の船倉で倉地が見せてくれたやうな、何もかも無視した、神のやうな狂暴な熱心——それを繰返して行きたかつた。

竹柴館の一夜は正しくそれだつた。その夜葉子は、次ぎの朝になつて自分が死んで見出されようとも満足だと思つた。然し次ぎの朝生きたまゝで眼を開くと、その場で死ぬ心持にはもうなれなかつた。もつと高じた權樂を追ひ試みようといふ慾念、而してそれが出來さうな期待

になつてゐる六疊の部屋を綺麗に片付けて、火鉢の中に香を焚きこめて、心静かに口論見をめぐらしながら古藤の来るのを待った。暫らく會はない中に古藤は大方手硬くなつてゐるやうにも思へた。そこを自分の才力で丸めるのが時に取つての興味のやうにも思へた。若し古藤を軟化すれば木村との關係はへよりも繋ぎがよくなる……

三十分程たつた頃一ツ木の兵營から古藤は岡に伴はれてやつて來た。葉子は六疊にゐて、貞世を取次ぎに出した。

「貞世さんだね。大きくつたねー」

丸で前の古藤の聲とは思はれぬやうな大人びた黒ずんだ聲がして、がちゃ／＼と佩剣を取るらしい音も聞こえた。やがて岡の先きになつて恰好の悪い汚い黒の軍服を着た古藤が、皮類の腐つたやうな香ひをぷん／＼させながら葉子のゐる所に這入つて來た。

葉子は他意なく好意を籠めた眼つきで、少女のやうに暗れやかに驚きながら古藤を見た。

「まあこれが古藤さん？ 何んて怖い方になつてお仕舞ひなすつたんでせう。元の古藤さんはお額のお白い所だけにしか残つちやゐませんわ。がみ／＼と叱つたりなすつちやいやです事

よ。本當に暫らく。金輪際來ては下さらないものと諦めてゐましたのに、よく……よく入らしつて下さいました。岡さんのお手柄ですわ……難有う御座いました」

と云つて葉子はそこに竝んで坐つた二人の青年をかたみ代りに見やりながら軽く挨拶した。

「さぞお辛いでせうねえ。お湯は？ お召しに

ならない？ 丁度沸いてゐますわ」

「大分臭くつてお氣の毒ですが、一度や二度湯につかつたつてなほりはしませんから……まあ這入りません」

古藤は這入つて來た時のしかつめらしい様子に引きかへて顔色を和らげせられてゐた。葉子は

心の中で相變らずの「mutton」だと思つた。

「さうねえ何時まで門限は？……え、六時？

それぢやもういくらもありませんわね。ぢやお湯はよしていただいてお話の方をたんとしませうねえ。いかゞ軍隊生活は、お氣に入つて？」

「這入らなかつた前以上に嫌ひになりました」

「岡さんはどうなさつたの

「私まだ猶豫中ですが検査を受けたつて此度駄目です。不合格のやうな健康を持つと、私軍

隊生活の出来るやうな人が羨ましくつてなり

ません。……體でも強くなつたら私、もう少し

心も強くなるんでせうけれども……」

「そんな事はありませんねえ」

古藤は自分の經驗から岡を諷伏するやうにさう云つた。

「僕もその一人だが、鬼のやうな體格を持つてゐて、女のやうな弱蟲が隊にゐて見ると澤山ゐますよ。僕はこんなんでこんな體格を持つてゐるのが先天的の二重生活を強ひられるやうで

苦しんでです。これからも僕はこの矛盾の爲めに此度苦しむに違ひない」

「何んですねお二人とも、妙な所で謙遜のしつこをなさるのね。岡さんだつてさうお強くはな

いし、古藤さんと來たらそれは意志堅固……」

「さうなら僕は今日もこゝなんかには來やしません。木村君にも疾うに決心をさせてゐる筈なんです」

葉子の言葉の中途から奪つて、古藤はしたゝか自分自身を鞭つやうに激しくかう云つた。葉子

は何もかも解つてゐる癖にいらを切つて不思議さうな顔付きをして見せた。

「さうだ、思ひ切つてふふだけの事は云つてしまひませう。……岡君立たないで下さい。君が

ゐて下さると却つていゝんです」

さう云つて古藤は葉子を暫らく熟視してから云

すくめてその頬に強い接吻を與へた。岡は少女のやうに恥ぢらつて強ひて葉子から離れようと藻掻いた。倉地は例の溢いやうに口許をねぢつて微笑みながら、

「馬鹿！……この頃この女は少しどうかしとりますよ。岡さん、あなた一つ背中でもどやしてやつて下さい。……まだ勉強か」

と云ひながら葉子に天井を指して見せた。葉子は岡に背中を向けて「さあどやして頂戴」と云ひながら、今度は天井を向いて、

「愛さん、貞ちゃん、岡さんが入らしつてよ。

勉強が済んだら早く下りておいで」

と澄んだ美しい聲で蓮葉に叫んだ。

「さうお」

と云ふ聲がしてすぐ貞世が飛んで下りて來た。

「貞ちゃんは今勉強が済んだのか」

と倉地が聞くと言世は平氣な顔で、

「え、今済んでよ」

と云つた。そこにはすぐ華やかな笑ひが破裂した。愛子は中々下に降りて來ようとはしなかつた。それでも三人は親しくちやぶ豪を圍んで茶を飲んだ。その日岡は特別に何か云ひ出したさうにしてゐる様子だったが、やがて、

「今日は私少しお願ひがあるんですが皆様聽いて下さるでせうか」

重苦しく云ひ出した。

「え、あなたあの仰しやる事なら何んでも：ねえ貞ちゃん（とこゝまでは冗談らしく云つたが急に眞面目になつて……何んでも仰しやつて下さいましな、そんな他人行儀をして下さると變ですわ」

と葉子が云つた。

「倉地さんもゐて下さるので却つて云ひよいと思ひますが古藤さんをこゝにお連れしちやいけないでせうか。

木村さんから古藤さんの事は前から伺つてゐたんですが、私は初めてのお方にお會ひするのが何んだか億劫な質なもので二つ前の日曜日までとう／＼お手紙も上げないでゐたら、その日突然古藤さんの方から尋ねて來て下さつたんです。古藤さんも一度お尋ねしなければいけないんだがと云つてゐなさいました。で私、今日は水曜日だから用便外出

の日だから、これから迎へに行つて來たいと思ふんです。いけないでせうか」

葉子は倉地だけに顔が見えるやうに向き直つて自分に任せると云ふ眼付きをしながら、

「いゝわね」

と念を押した。倉地は祕密を傳へる人のやうに

顔色だけでよしと答へた。葉子はくるりと岡の方に向き直つた。

「よう御座いますとも（葉子はそのやうにアクセントを附けた）あなたにお迎ひに行つて頂いてはほんとに済みませんけれども、さうして下さると本當に結構、貞ちゃんもいゝでせう。又もう一人お友達が赦えて……前かも珍らしい兵隊さんのお友達……」

「愛姉さんが岡さんに連れていらつしやいつこの間さう云つたのよ」

と貞世は遠慮なく云つた。

「さう／＼愛子さんもさう仰しやつてでしたね。」

と岡は何處までも上品な言葉で事の序の序のやうに云つた。

岡が家を出ると暫らくして倉地も座を立つた。

「いゝでせう。うまくやつて見せるわ。却つて出入りさせる方がいゝわ」

玄陽に送り出してさう葉子は云つた。

「どうか彼奴、古藤の奴は少し骨張り過ぎてゐる……が惡かつたら元々だ……兎に角今日俺れのぬい方がよからう」

さう云つて倉地は出て行つた。葉子は張出しに

さう云つて古藤も肩章越しに岡を顧みた。
「本當に何も云ふ事はないんですけれど……
木村さんには私口に云へない程御同情してゐ
ます。木村さんのやうない方が今頃どんなに
獨りで淋しく思つて居られるかと思ひやつた
だけで私淋しくなつてしまひます。けれども世
の中には色々な運命があるのではないでせう
か。而して銘々には黙つてそれを耐へて行くよ
り仕方がないやうに私思ひます。そこで無理を
しようとする、凡ての事が悪くなるばかり……
それは私だけの考へですけれども。私さう
考へないと一刻も生きてゐられないやうな氣
がしてなりません。葉子さんと木村さんと倉地
さんとの關係は私少しは知つてゐるやうにも思
ひますけれども、よく考へて見ると却つてちつ
とも知らないのかも知れませんか。私は自
分自身が少しも解らないんですからお三人の事
なども、分らない自分の、分らない想像だけ
の事だと思ひたいんです。……古藤さんにはそ
までお話ししませんでしけれども、私自分
の家の事情が大變苦しいので心を打ち開ける
やうな人を持つてゐませんでした、殊に
母とか姉妹とか云ふ女の人に……葉子さんにお
目にかゝつたら、何んでもなくそれが出来たん

です。それで私は嬉しかつたんです。而して葉
子さんが木村さんと何うしても氣がお合ひにな
らない、その事も失禮ですけれども今の所
で私は私想像が違つてゐないやうにも思ひます。
けれどもその外の事は私何んとも自信を以て
云ふ事が出来ません。そんな所まで他人が想
像をしたり口を出したりしていいものか何うか
も私判りません。大變獨善的に聞こえるかも
知れませんが、そんな氣はなく、運命に出来る
だけ従順にしてゐたいと思ふと、私進んで
物を云つたりしたりするのが恐ろしいと思ひま
す。……何んだか少しも役に立たない事を云つ
てしまひまして……私矢張り力がありませ
んから、何も云はなかつた方がよかつたんです
けれども……」
さう絶え入るやうに聲を細めて岡は言葉は結
ばぬ中に口をつぐんでしまつた。その後には沈
黙だけがふさはしいやうに口をつぐんでしまつ
た。
實際その後には不思議な程しめやかな沈黙が
續いた。たき込めた香の香ひがすかに動くだ
けだつた。
「あんなに謙遜な岡君も（岡は慌ててその謙辭
らしい古藤の言葉を打ち消さうとしさうにした

が、古藤がどん／＼言葉を續けるのでそのまゝ
顔を赤くして黙つてしまつた。あなたと木村と
が何うしても折合はない事だけに少くとも認め
てゐるんです。さうでせう」
葉子は美しい沈黙をがさつな手でかき隠され
た不快をかすかに物足らなく思ふらしい表情
をして、
「それは洋行する前、いつぞや横濱に一緒に行
つていた位いた時委しくお話ししたぢやありませ
んか。それは私誰方にでも申上げてゐた事で
すわ」
「そんなら何故……その時は木村の外には保護
者はゐなかつたから、あなたとしてはお妹さん
達を育てて行く上にも自分を犠牲にして木村
に行く氣で出でたつたかも知れませんが何故
……何故今になつても木村との關係をそのま
まにしておく必要があるんです」
岡は激しい言葉で自分が責められるかのやう
にはら／＼しながら首を下げたり、葉子と古藤
の顔とを片身代りに見やつたりしてゐたが、と
う／＼居たゝまれなくなつたと見えて、靜かに
座を立つて人のゐない二階の方に行つてしまつ
た。葉子は岡の心持を思ひやつて引き止めな
かつたし、古藤は、ゐて貰つた所が何んの役にも

ひ出す事を纏めようとするやうに下を向いた。岡も一寸形を改めて葉子の方を窺ひ見るやうにした。葉子は肩一つ動かさなかつた。而して側にある貞世に耳うちして、愛子を手傳つて五時に夕食の食べられる用意をするやうに、而して三線亭から三皿程の料理を取り寄せるやうに云ひつけて座を外づさした。古藤は躍るやうにして部屋を出て行く貞世を、つと眼のはづれで見送つてゐたが、やがて徐ろに顔を擧げた。目に焼けた顔が更に赤くなつてゐた。「僕はね……さう云つておいて古藤は又考へた……あなたが、そんな事はないとあなたは云ふでせうが、あなたが倉地と云ふその事務長の人の奥さんになれると云ふのなら、それが悪いって思つてる譯ぢやないんです。そんな事があるとするりやそりや仕方のない事なんだ。……而してですね、僕にもそりや解るやうです……解るつて云ふのは、あなたがさうなればなりさうな事だと、それが解るつて云ふんです。然しそれならそれでいいから、それを木村にはつきりと言つてやつて下さい。そこんだ僕の云はむとするのは、あなたは怒るかも知れませんが、僕は木村に幾度も葉子さんとはもう縁を切れつて勸告しました。これまで僕があなたに黙つ

てそんな事をしてゐたのは悪かつたからお断りをします。(さう云つて古藤は一寸誠實に頭を下げた。葉子も黙つたまゝ眞面目に合點いて見せた)けれども木村からの返事は、それに對する返事はいつでも同一なんです。葉子から破約の事を申出て来るか、倉地といふ人との結婚を申出て来るまでは、自分は誰れの言葉よりも葉子の言葉とばかりに信用をおく。親友であつてもこの問題に就いては君の勸告だけでは心は動かない。かうなんです。木村つてのはそんな男なんです。(古藤の言葉は一寸曇つたがすぐ元のやうになつた)それをあなたは黙つておくのは少し變だと思ひます」「それで……」葉子は少し座を乗り出して古藤を睨ますやうに言葉を續けさせた。木村からは前からあなたの所に行つてよく事情を見てやつてくれ、病氣の事も心配でならないからと云つて來てはゐるんですが、僕は自分ながら何うしやうもない妙な潔癖があるもんだからつて何ひおくれてしまつたのです。成程あなたは先よりは瘦せましたね。而して顔の色もよくありませんね——さう云ひながら古藤はぢつと葉子の顔を見やつ

た。葉子は姉のやうに一段の高みから古藤の眼を迎へて鷹揚に微笑んでゐた。ふふだけふはせて見よう、さう思つて今度は岡の方に眼をやつた。「岡さん。あなた今古藤さんの仰しやる事をすつかりお聞きになつてゐて下さいましたわね。あなたはこの頃失禮ながら家族の一人のやうにこちらに遊びにお出で下さるんですが、私を何うお思ひになつて入らつしやるか、御遠慮なく古藤さんにお話しなすつて下さいましな。決して御遠慮なく、私どんな事を伺つても決して……何んとも思ひは致しませんから」それを聞くと岡はひどく當惑して顔を眞赤にして處女のやうに羞恥かんだ。古藤の側に岡を置いて見るのは、青銅の花瓶の側に咲きかけの櫻を置いて見るやうだつた。葉子はふと心に浮んだその對比を自分ながら面白いと思つた。そんな餘裕を失はないでゐた。「私かう云ふ事柄には物を云ふ力はないやうに思ひますから……」——さう云はないで本當に思つた事を云つて見て下さい。僕は一徹ですからひどい思ひ間違ひをしてゐないとも限りませんから。どうか聞かして下さい」

だつて倒れたつてそんな事を世間のやうに彼れは是れよく／＼せずに、轉んだら立つて、倒れたら起き上つて行きたいと思ひます。僕は少し人並み外づれて馬鹿のやうだけれども、馬鹿者でさへがさうして行きたいと思つてゐるんです。古藤は眼に涙をためて痛ましげに葉子を見やつた。その時電燈が急に部屋を明るくした。

「あなたは本當にどこか悪いやうですね。早く治つて下さい。それぢや僕はこれで今日は御免を蒙ります。左様なら」

牝鹿のやうに敏感な岡さへが一向注意しない葉子の健康状態を、鈍重らしい古藤が逆早く見て取つて察じてくれるのを見ると、葉子はこの素朴な青年になつかし味を感じるのだった。

葉子は立つて行く古藤の後から、

「愛さん貞ちゃん古藤さんがお歸りになるといけないから早く来ておとめ申しておくれ」と叫んだ。玄關に出た古藤の所に臺所口から貞世が飛んで来た。飛んで来たはしたが、倉地に對してのやうにすぐ躍りかゝる事は得しない

で、口もきかずに、少し恥かしげにそこに立ちすくんだ。その後から愛子が手拭を頭から取りながら急ぎ足で現はれた。玄關のなげしの所に照り返しをつけて置いてあるランプの光

をまともに受けた愛子の顔を見ると、古藤は魅られたやうにその美に打たれたらしく、目禮もせずにその立姿に眺め入つた。愛子はこりと左の口尻に笑窪の出る微笑を見せ、右手の指先きが廊下の板にやつと觸るほど膝を折つて軽く頭を下げた。愛子の顔には羞恥らしいものは少しも現はれなかつた。

「いけません、古藤さん。妹達が御恩返しに積りで一生懸命にしたんですから、おいしくはありませんが、是非、ね。貞ちゃんお前さんそのお帽子と劍とを持つてお逃げ」

葉子にさう云はれて貞世はすばしく帽子だけ取り上げてしまつた。古藤はおめ／＼と居残る事になつた。

葉子は倉地をも呼び迎へさせた。

十二畳の座敷にはこの家に珍らしく賑やかな食卓がしつらへられた。五人がおの／＼座に就いて箸を取らうとする所に倉地が這入つて来た。

「さあ入らっしゃいませ、今夜は賑やかですよ。こゝへどうぞ。（さう云つて古藤の隣りの座を眼で示した）倉地さん、この方がいつもお噂をする木村の親友の古藤義一さんです。今日珍らしく入らして下さいましたの。これが事

務長をしていらした倉地と古さんです」

紹介された倉地は心置きない態度で古藤の傍に坐りながら、

「私はたしか雙鶴館で一寸お目に懸つたやう思ふが御挨拶もせず失敬しました。こちらには始終お世話になつとります。以後宜しく」と云つた。古藤は正面から倉地をぢつと見やりながら一寸頭を下けたきり物も云はなかつた。

倉地は輕々しく出した自分の今の言葉を不快に思つたらしく、苦り切つて顔を正面に直したが、強ひて努力するやうに笑顔を作つてもう一度古藤を顧みた。

「あの時からすると見違へるやうに變なれたな。私も日清戦争の時は半分軍人のやうな生活をしたが、中々面白かつたですよ。然し苦しい事も偶にはおありだらうな」

古藤は食卓を見やつたまゝ、

えー

とだけ答へた。倉地の我儘はそれまでだった。

一座はその氣分を感じて何んとなく白け渡つた。葉子の手拭れたままでもそれは中々一掃されなかつた。岡はその氣まづきを強烈な電氣のやうに感じてゐるらしかつた。獨り貞世だけはしやぎ返つた。

立たないと思つたらしくこれも引き止めはしなかつた。挿す花もない青銅の花瓶一つ……葉子は心の中で皮肉に微笑んだ。

「それより先きに何はして頂戴な、倉地さんはどの位の程度で私達を保護していらつしやるか御存じ？」

古藤はすぐぐつと詰つてしまつた。然しすぐ盛り返して来た。

「僕は岡君と違つてブルジョアの家に生れたものですからデリカシーと云ふやうな美德を餘り澤山持つてゐないやうだから、失禮な事を云つたら許して下さい。倉地つて人は妻子まで離縁した……而かも非常に貞節らしい奥さんまで離縁したと新聞に出てゐました」

「さうね新聞には出てゐましたわね。……よう御座いますわ、假りにさうだとしたらそれが何か私と關係のある事だとも仰しやるの」

さう云ひながら葉子は少し氣に障へたらしく、炭取りを引き寄せて火鉢に火をつき足した。櫻炭の火花が激しく飛んで二人の間に弾けた。

「まあひどいこの炭は、水をかけずに持つて來たと見えるのね。女ばかりの世帯だと思つて出入りの御用聞きまで人を馬鹿にするんですよ」

葉子はさう云ひ／＼眉をひそめた。古藤は胸をつかれたやうだつた。

「僕は亂暴なもんだから……云ひ過ぎがあつたら本當に許して下さい。僕は實際如何に親友だからと云つて木村ばかりをいゝやうにと思つてゐる譯ぢやないんですけれども、今くあの境遇には同情してしまふもんだから……僕はあなたも自分の立場さへはつきり云つて下さればあなたの立場も理解が出来ると思ふんだけれどもな。……僕は餘り直線的過ぎるんでせうか。僕は世の中を sun-clear に見たいと思ひますよ。出来なないものでせうか」

葉子は撫でるやうな好意のほゝゑみを見せた。

「あなたが私本當に羨ましう御座んすわ。平和な家庭にお育ちになつて素直に何んでも御覽になれるのは難有い事なんですわ。そんな方ばかりが世の中にいらつしやると面倒がなくなつてそれはいゝんですけれども、岡さんなんかはそれから見ると本當にお氣の毒なんです。私見たいなものをさへあゝして頼りにしていらつしやるのを見るといぢらしくつて今日は倉地さんの見てゐる前でキスして上げつちまつたの……他、事ぢやありませんわね。(葉子の顔は

すぐ曇つた) あなたと同様にき／＼した事の好きな私がこんな意地をこぢらしたり、人の氣をかねたり、好んで誤解を買つて出たりするやうになつてしまつた、それを考へて御覽になつて頂戴。あなたには今はお分りにならないかも知れませんが……それにしてももう五時。愛子に手料理を作らせておきましたから久し振りで、妹達にも會つてやつて下さいまし、ね、いゝでせう。

古藤は急に固くなつた。

「僕は歸ります。僕は木村にはつきりした報告も出来ない中に、こちらで御飯をいたゞいたりするのは何んだか氣が尤めます。葉子さん頼みます、木村を救つて下さい。而してあなた自身を救つて下さい。僕は本當をふぶと遠くに離れてあなたを見てゐると何うしても嫌ひになつちまふんですが、かうやつてお話ししてゐると失禮な事を云つたり自分で怒つたりしながらも、あなたは自分でもあざむけないやうなものを持つて居られるのを感じるやうに思ふんです。境遇が悪いんだ屹度。僕は一生が大事だと思ひますよ。來世があらうが過去世があらうがこの一生が大事だと思ひますよ。生き甲斐があつたと思ふやうに生きて行きたいと思ひますよ。轉ん

ず識らず自分をそれに適應させ、且つは自分が倉地から同様な狂暴な愛撫を受けたい欲念から、先きの事も後の事も考へずに、現在の可能の凡てを盡して倉地の要求に應じて行つた。腦も心臓も振り廻して、ゆすぶつて、敲きつけて、一氣に猛火であぶり立てるやうな激情、魂ばかりになつたやうな、肉ばかりになつたやうな、極端な神経の混亂、而してその後には續く死滅と同然の倦怠疲勞。人間が有する生命力をどん底から驗めし試みるさう云ふ虐待が日に二度も三度も繰返された。さうしてその後では倉地の心は蛇度野獸のやうに更に荒んでゐた。葉子は不快極まる病理的の變態に襲はれた。靜かに鈍く生命を脅かす腰部の痛み、二匹の小魔が肉と骨との間に這入り込んで、肉を肩にあてて骨を踏んばつて、うんと力任せに反り上るかと思はれる程の肩の凝り、段々鼓動を低めて行つて、呼吸を苦しめて、今働きを止めるかと危むと、一時に耳にまで音が聞こえる位激しく動き出す不規則な心臓の動作、もや／＼と火の霧で包まれたり、透明な氷の水で満たされるやうな頭腦の狂ひ、……かう云ふ現象は一日ひと生命に對する、而して人生に對する葉子の猜疑を激しくした。

有頂天の溺樂の後に襲つて来る淋しいとも、悲しいとも、果敢ないとも、形容の出来ないその空虚さは何よりも葉子につらかつた。假令その場で命を絶つてもその空虚さは永遠に葉子を襲ふもののやうにも思はれた。唯これから逃れる唯一つの道は捨鉢になつて、一時的のものだとは知り抜きながら、而してその後には更に苦しい空虚さが待ち伏せしてゐるとは覺悟しながら、次ぎの溺樂を逐ふ外はなかつた。氣分の荒んだ倉地も同じ葉子と同じ心で同じ事を求めてゐた。かうして二人は底止する所のない何處かへ手をつないで迷ひ込んで行つた。

ある朝葉子は朝湯を使つてから、例の六疊で鏡臺に向つたが一日々々に變つて行くやうな自分の顔には唯驚くばかりだつた。少し縦に長く見える鏡ではあるけれども、そこに映る姿は餘りに細つてゐた。その代り眼は前にも増して大きく鈴を張つて、化粧焼けとも思はれぬ薄い紫色の色素がその周りに現はれて來てゐた。それが葉子の眼に例へば森林に圍まれた澄んだ湖のやうな深みと神秘とを添へるやうにも見えた。鼻筋は瘦せ細つて精神的な敏感さを際立たしてゐた。頬の傷々しくこけた爲めに、葉子の顔に云ふべからざる暖かみを與へる笑窪

を失はうとしてゐるが、その代りにそこには惱ましく物思はしい張りを加へてゐた。唯葉子がどうしても辯護の出来ないのは益々眼立つて來た圓い下顎の輪郭だつた。然し兎にも角にも肉膚の興奮の結果が顔に妖艶な精神美を附け加へてゐるのは不思議だつた。葉子はこれまでの化粧法を全然改める必要をこの朝になつてしみ／＼と感じた。而して今まで着てゐた衣類までが残りず氣に喰はなくなつた。さうなると葉子は矢も所もたまらなかつた。

葉子は紅の交つた紅粉を殆んど使はずに化粧をした。顎の兩側と眼の圍りとの紅粉をわざと薄く拭き取つた。枕を入れずに前髪を取つて、束髪髻の髻を思ひきり下げて結つて見た。髻だけを少しふくらましたので顎の張つたのも眼立たず、顔の細くなつたのもいくらか調節されて、そこには葉子自身が期待もしなかつたやうな魔術的な同時に神祕的な凄く美しい一つの顔面が創造されてゐた。有り合はせぬものの中から出来るだけ地味な一揃ひを選んでそれを着る。葉子はすぐ後屋に車を走らせた。晝過ぎまで葉子は後屋にゐて計文や買物に時を過ごした。衣服や身の周りのものの見立てについては葉子は天才と云つてよかつた。自

「このサラダは愛姉さんがお醋とオリウ油を間違つて油を澤山かけたから屹度油つくつてよ」

愛子はおだやかに貞世を睨むやうにして、「貞ちゃんはいどい」

と云つた。貞世は平氣だつた。

「その代り私が又お醋を後から入れたから酸ば過ぎる所があるかも知れなくなつてよ。もう少し序でにお茶も入れればよかつてねえ、愛姉さん」

皆んなは思はず笑つた。古藤も笑ふには笑つた。然しその笑ひ聲はすぐ鎮まつてしまつた。

やがて古藤が突然箸を措いた。

「僕が悪い爲めに折角の食卓を大變不愉快にしたやうです、済みませんでした。僕はこれです礼します」

葉子は慌てて、

「まあそんな事はちつともありません事よ。古藤さんそんな事を仰しやらずに仕舞までいらしつて頂戴どうぞ。皆さんで途中までお送りしますから」

ととめたが古藤は何うしても聴かなかつた。人は食事半ばで立ち上らねばならなかつた。古藤は靴を履いてから、帯革を取り上げて劍をつ

ると洋服の袖を延ばしながら、ちらつと愛子に鋭く眼をやつた。始めから殆んど物を云はなかつた愛子は、この時も黙つたまゝ、多恨な柔らかな眼を大きく見開いて、中座をして行く古藤を美しくしためるやうに、つと見返してゐた。それを葉子の鋭い視覚に見逃がさなかつた。

「古藤さん、あなたこれから屹度度々いらしつて下さいましよ。まだ中上げの事が澤山残つてゐますし、妹達もお待ち申してゐますから、屹度ですことよ」

さう云つて葉子も親しみを込めた眸を送つた。古藤はいやちこ張つた軍隊式の立禮をして、さく／＼と砂利の上に靴の音を立てながら、夕闇の備した杉森の下道の方へト消えて行つた。

見送りに立たなかつた倉地が座敷の方で獨語のやうに誰れに向つてともなく「馬鹿！」と云ふのが聞こえた。

三十五

葉子と倉地とは竹藪館以來度々家を明けて小さな戀の冒険を楽しみ合ふやうになつた。さう云ふ時に倉地の家に入出入する外國人や正井などを同伴する事もあつた。外國人は主に米國の人だつたが、葉子は倉地がさう云ふ人達を同

座させる意味を知つて、その清らかな英語と、誰れでも一程に顔や手の表情に本能的な興味を持つ外國人を——羅惑しないでは置かない華やかな接客りとして彼等を處にする事に成功した。それは倉地の仕事を少から下助けたに違ひなかつた。倉地の金まはりには益々潤澤になつて行くらしかつた。葉子一家は倉地と木村とから貰がれる金で中流階級にはあり得ない程餘裕のある生活が出来たのみならず、葉子は十分の仕送りを定子にして、なほ餘る金を女らしく毎月銀行に預け入れるまでになつた。

然しそれと共に倉地は益々荒んで行つた。眼の光にさへ舊のやうに大海にのみ見る寛大な無慮な而して恐ろしく力強い表情はなくなつて、いら／＼と宛てもなく燃えさかる石炭の火のやうな熱と不安とが見られるやうになつた。動々ともすると倉地は突然譯もない事にきびしく腹を立てた。正井などは葉微塵に叱り飛ばされたりした。さう云ふ時の倉地は嵐のやうな狂暴な威力を示した。

葉子も自分の健康が段々悪い方に向いて行くのを意識しないではゐられなくなつた。倉地の心が荒めば荒む程葉子に對して要求するものは燃え爛れる情熱の肉體だつたが、葉子も亦知ら

「へえ、それぢや岡さん、あなたは又大したリ
アリストね」

葉子は愛子を眼中にもおかぬ風でかう云つた。去年の下半年の思想界を震撼したやうなこの書物と続編とは倉地の貧しい書架の中にもあつたのだ。而して葉子は面白く思ひながらその中を時々拾ひ讀みしてゐたのだつた。

「何んだか私とはすつかり違つた世界を見るやうでゐながら、自分の心持が残りず云つてあるやうでもあるんで……私それが好きなんです。リアリストと云ふ譯ではありませんけれども……」

「でもこの本の皮肉は少し瘦せ我慢ね。あなたのやうな方には一寸不似合ですわ」

「さうでせうか」

岡は何とはなく今にでも腫物に觸られるかのやうにはそはくしてゐた。會話は少しもいつものやうには弾まなかつた。葉子はいら／＼しながらもそれを顔には見せないで今度は愛子の方に槍先を向けた。

「愛さんお前こんな本をいつお買ひだつたのと云つて見ると、愛子は少し躊躇つてゐる様子だつたが、すぐに素直な落着きを見せて、一買つたんぢやないんですの。古藤さんが送つ

て下さいましたの」

と云つた。葉子はさすがに驚いた。古藤はあの會食の晩、中座したつきり、この家には足踏みもしなかつたのに……葉子は少し激しい言葉になつた。

「何んだつて又こんな本を送つておよこしなかつたんだらう。あなたお手紙でも上げたのね」

「えゝ、……下さいましたから」

「どんなお手紙を」

愛子は少し俯向き加減に黙つてしまつた、かう云ふ態度を取つた時の愛子のしぶとさを葉子はよく知つてゐた。葉子の神経はびり／＼と緊張して來た。

「持つて來てお見せ」

さう嚴格に云ひながら、葉子はそこに岡のある事も意識の中に加へてゐた。愛子は執拗に黙つたまゝ坐つてゐた。然し葉子がもう一度催促の言葉を出さうとすると、その瞬間に愛子はつと立ち上つて部屋を出て行つた。

葉子はその隙に岡の顔を見た。それはまだ無垢童貞の青年が不思議な戦慄を胸の中に感じて、反感を催すか、牽き付けられかしないではゐられないやうな眼で岡を見た。岡は少女のやうに顔を赤めて、葉子の視線を受け切れないで

眸をたじろがしつゝ眼を伏せてしまつた。葉子はいつまでもそのデリケートな横顔を注視めつづけた。岡は喉を飲みこむのも憚るやうな様子をしてゐた。

「岡さん」

さう葉子に呼ばれて、岡は已むを得ずおづ／＼頭を上げた。葉子は今度は詰るやうにその若若しい上品な岡を見詰めてゐた。

そこに愛子が白い西洋封筒を持つて歸つて來た。葉子は岡にそれを見せつけるやうに取り上げて、取るにも足らぬ軽いものでも扱ふやうに飛び／＼に讀んで見た。それには唯々當り前な事だけが書いてあつた。暫らくめで見た二人の大きくなつて變つたのには驚いたとか、折角寄つて作つてくれた御馳走をすつかり賞味しない中に歸つたのは残念だが、自分の性分としてはあの上我慢が出来なかつたのだから許してくれとか、人間は他人の見やう見真似で育つて行つたのでは駄目だから、総合どんな境遇にゐても自分の見識を失つてはいけなしいとか、二人には倉地といふ人間だけは何かして近づかせたくないと思ふとか、而して最後に、愛子さんは詠歌が中々上手だつたがこの頃出来るか、出来るならそれを見せてほしい、軍隊生活の乾燥無

分でもその才能には自信を持つてゐた。従つて思ひ存分の金を懐ろに入れてゐて買物をする位興の多いものは葉子に取つては他になかつた。越後屋を出る時には、感興と興奮とに自分を傷めちぎつた藝術家のやうにへとへとに疲れ切つてゐた。

歸りついた玄關の靴抜き石の上には岡の細長い華車半靴が脱ぎ捨てられてゐた。葉子は自分の部屋に行つて懐中物などを仕舞つて、湯呑でなみ／＼と一杯の白湯を飲むと、すぐ二階に上つて行つた。自分の新しい化粧法がどんな風に岡の眼を刺戟するか、葉子は子供らしくそれを試みて見たかつたのだ。彼女は不意に岡の前に現はれよう爲めに裏階子からそつと登つて行つた。而して襖を開けるとそこに岡と愛子だけがゐた。貞世は香春園にでも行つて遊んでゐるのか、そこには姿を見せなかつた。

岡は詩集らしいものを開いて見てゐた。そこにはなほ二三冊の書物が散らばつてゐた。愛子は縁側に出て欄から庭を見下ろしてゐた。然し葉子は不思議な本能から、階子段に足をかけた頃には、二人は決して今のやうな位置に、今のやうな態度でゐたのではないと云ふ事を直覺してゐた。二人が一人は本を読み、一人が縁

に出てゐるのは、如何にも自然でありながら非常に不自然だつた。

突然——それは本當に突然何處から飛び込んできたのか知れない不快の念の爲めに葉子の胸はかきむしられた。岡は葉子の姿を見ると、わざつと寛がせてゐたやうな姿勢を急に正して、讀み耽つてゐたらしく見せた詩集を餘りに惜しめもなく閉ぢてしまつた。而していつもより少し慥れ／＼しく挨拶した。愛子は縁側から靜かにこつちを振り向いて平生と少しも變らない態度で、柔順に無表情に縁板の上に一寸膝をついて挨拶した。然しその沈着にも係はらず、葉子は愛子が今まで涙を眼にためてゐたのをつきとめた。岡も愛子も明らかに葉子の顔や髪の様子の變つたのに氣附いてゐない位心に餘裕のないのが明らかだつた。

「真ちゃんば」

と葉子は立つたまゝで尋ねて見た。二人は思はず慌てて答へようとしたが、岡は愛子を窺み見るやうにして控へた。

「隣の庭に花を買ひに行つて貰ひましたの」さう愛子が少し下を向いて簡だけを葉子に見えるやうにして素直に答へた。「ふん」と葉子は腹の中でせうら笑つた。而して始めてそこに坐

つて、ぢつと岡の眼を見つめながら、

「何々 讀んでいらしたの」

と云つて、そこに在る四六細雪の美しい表装の書物を取り上げて見た。黒髪を亂した妖艶な女の頭、矢で貫かれた心臓、その心臓からぼた／＼落ちる血の滴りが自ら字になつたやうに岡案された亂れ髪といふ標題——文字に親しむ事の大嫌ひな葉子も啞で聞いてゐた有名な鳳晶子の詩集だつた。そこには明星といふ文藝雜誌だの、保雨の「無花果」だの、北民居士の「一年有半」だのと云ふ新刊の書物も散らばつてゐた。

「まあ岡さんの中々のリマンティストね、こんなものを愛讀なさるの」

と葉子は少し皮肉なものを口尻に見せながら尋ねて見た。岡は靜かな調子で訂正するやうに、「それは愛子さんのです。私今一寸拝見しただけです」

「これは——と云つて葉子は今度は「一年有半」を取り上げた。

「それは岡さんが今日貸して下さいましたの」

私利りさうもありませんわ、愛子は姉の毒舌を微め防がうとするやうに。

子にはなかつた。

「あなたは愛子(あいこ)を愛(あい)してゐて下さるのね。さうでせう。私がこゝに來る前(まえ)愛子(あいこ)はあんなに泣いて何を申(まを)上げてゐたの？……仰(おほ)しやつて下さいな。愛子(あいこ)があなたのやうな方に愛(あい)していたけるのは勿(あた)ない位(くらい)ですから、私(わたし)喜(よろこ)ぶとも、尤(も)め立てなどはしません、吃(く)度(ど)。だから仰(おほ)しやつて頂(たま)戴(だい)……いゝえ、そんな事を仰(おほ)しやつてそれや駄目(だめ)、私の眼(め)はまだこれでも黒(くろ)う御座(ござ)んすから。……あなたそんな水臭(みずくさ)いお仕向(しむか)いを私(わたし)になさらうと云ふの？ まさかとは思(おも)ひますがあなた私(わたし)に仰(おほ)しやつた事を忘(わす)れなかつちや困(こま)りますよ。私はこれでも真(ま)剣(けん)な事(こと)には真(ま)剣(けん)になる位(くらい)誠實(せいじつ)はある積(つも)りです事(こと)よ。私(わたし)あなたのお言葉(ことば)は忘(わす)れてはをりませんわ。姉(あね)だと今(いま)でも思(おも)つてゐて下さるなら本當(ほんとう)の事を仰(おほ)しやつて下さい。愛子(あいこ)に對しては私(わたし)は私(わたし)だけの事(こと)をして御覽(ごらん)に入(い)れますから……さ」

して右手(みぎて)を握(にぎ)つた葉子(えきこ)の手の上(うへ)に左(ひだり)の手(て)を添(そ)へながら、上下(じやうげ)から挟(はさ)むやうに押(お)へて、岡(おか)は震(ふる)へ聲(こゑ)で靜(しず)かに云(い)ひ出(だ)した。

「御(ご)存(ぞん)じぢやありませんか、私(わたし)、戀(こひ)の出來(でき)るやうな人間(にんげん)ではないのを。年(とし)こそ若(わか)う御座(ござ)いますけれども心(こゝろ)は妙(たぎ)にいぢけて老(おい)いてしまつてゐるんです。どうしても戀(こひ)の選(えら)べられないやうな女(をんな)の方にでなければ私(わたし)の戀(こひ)は動(うご)きません。私(わたし)を戀(こひ)してくれる人(ひと)があるとしたら、私(わたし)、心(こゝろ)が即座(いそ)に冷(ひや)えてしまふのです。一度(いちど)自分の手(て)に入(い)れたら、どれ程(ほど)尊(たか)しいものでも大(だい)事(じ)なものでも、もう私(わたし)には尊(たか)しくも大(だい)事(じ)でもなくなつて仕舞(しま)ふんです。だから私(わたし)、淋(さび)しいんです。何(なん)んにも持(も)つてゐない、何(なん)んにも空(く)しい……その癖(くせ)さう知(し)り抜(ぬ)けながら私(わたし)何(なん)か何處(どこ)かにあるやうに思(おも)つて掴(つか)む事(こと)の出來(でき)ないものに驚(おどろ)れます。この心(こゝろ)さへなくなれば淋(さび)しくつてもそれでいゝのだからと思(おも)ふ程(ほど)苦(くる)しくもあります。何(なん)にでも自分の理(り)想(さう)をすぐあてはめて熱(あつ)するやうな、そんな若い心(こゝろ)が欲(ほ)しくもありますけれども、そんなものは私(わたし)には來(き)はしません……春(はる)にでもなつて來ると餘計(よけい)世(よ)の中(なか)は空(く)しく見(み)えて堪(た)りません。それを先刻(さきど)ふと愛子(あいこ)さんに申(まを)上げたんです。さうしたら愛子(あいこ)さんがお泣(な)きになつたんです。私(わたし)、あ

ですぐ悪いと思(おも)ひました、人に云(い)ふやうな事(こと)ぢやなかつたのを……

かう云(い)ふ事を云(い)ふ時(とき)の岡(おか)は、云(い)ふ言(ことば)葉(えき)にも似(に)ず冷酷(れいこ)とも思(おも)はれる程(ほど)唯(ただ)淋(さび)しい顔(かほ)になつた。葉子(えきこ)には岡(おか)の言(ことば)葉(えき)が解(わか)るやうでもあり、妙(たぎ)にからんでも聞(き)こえた。而(も)して一寸(いっそう)すかされたやうに氣(き)勢(せい)を殺(ころ)されたが、どん／＼湧(わ)き上(あ)るやうに内部(うちぶ)から襲(おそ)ひ立てる力(ちから)はすぐ葉子(えきこ)を理(り)不(ふ)盡(じん)にした。

「愛子(あいこ)がそんなお言(ことば)葉(えき)で泣(な)きましたつて？ 不思議(ふしぎ)ですわねえ。……それならそれでよう御座(ござ)んす。……(こゝで葉子(えきこ)は自分(じぶん)にも堪(た)へ切れずにさめ／＼と泣(な)き出(だ)した) 岡(おか)さん私も淋(さび)しい……淋(さび)しくつて、淋(さび)しくつて……」

「お察(さつ)し申(まを)します」

岡(おか)は案外(あんがい)しんみりした言(ことば)葉(えき)でさう云(い)つた。

「お判(はん)りになつて？」

と葉子(えきこ)は泣(な)きながら取(と)りすがるやうにした。

「判(はん)ります。……あなたは墮落(だらく)した天使(てんし)のやうな方(かた)です。御免(ごめん)下さい。船(ふね)の中(なか)で始(はじ)めてお眼(め)にかゝつてから私(わたし)、ちつとも心(こゝろ)持(も)が變(か)つてはゐないんです。あなたがいらつしやるんで私(わたし)、やうやく淋(さび)しさからのがれます」

「嘘(うそ)！……あなたはもう私(わたし)に愛想(あいさう)をおつかし

味なのには堪へられないからとしてあつた。而して宛名は愛子、貞世の二人になつてゐた。

「馬鹿ぢやないの愛さん、あなたのお手紙でいゝ氣になつて、下至蕪なぬたでもお見せ申したんでせう……いゝ氣なものを……この御本と一緒に……お手紙が来た答ね」

愛子はすぐ又立たうとした。然し葉子はさうはさせなかつた。

「一本々々お手紙を取りに行つたり歸つたりしたんぢや日が暮れますわ。……日が暮れると云へばもう暗くなつたわ。貞ちゃんは何をしてゐるだらう……あなた早く呼びに行つて一緒に……お夕飯の支度をして頂戴」

愛子はそこに在る書物を一と抱へに胸に抱いて、俯向くと愛らしく二重になる顔で押へて座を立つて行つた。それが如何にもしとくと、細かい舉動の一つ一つで岡に哀訴するやうに見れば見なされた。互に見交はすやうな事をして見るがいゝさう葉子は心の中で二人をたしなめながら、二人に氣を配つた。岡も愛子も申合はしたやうに監視もし合はなかつた。けれども葉子は二人がせめては眼だけでも慰め合ひたい願ひに胸を震はしてゐるのをはつきりと感ずるやうに思つた。葉子の心はおどましくも

苦々しい猜疑の爲めに苦しんだ。若さと若さが互ひにきびしく求め合つて、葉子などを易々と袖にするまでにその情炎は高じてゐると思ふと耐へられなかつた。葉子は強ひて自分を押し鎮める爲めに帯の間から煙草入れを取り出して、ゆつくり煙を吹いた。煙管の先きが端なく火鉢にかざした岡の指先に觸れると電氣のやうなものが葉子に傳はるのを感じた。若さ……若さ……

そこには二人の間に暫らくぎこちない沈黙が続いた。岡が何を云へば愛子は泣いたんだらう。愛子は何を泣いて岡に訴へてゐたのだらう。葉子が数へ切れぬ程経験した幾多の戀の場面の中から、激情的な色々の光景がづきづきに頭の中に描かれるのだつた。もうさうした年齢が岡にも愛子にも來てゐるのだ。それに不思議はない。然しあれほど葉子にあこがれ溺れて、謂はば戀以上の戀とも云ふべきものを崇拜的に捧げてゐた岡が、あの純直な上品な而して極めて内氣な岡が見る／＼葉子の抱持から離れて、人もあらうに愛子——妹の愛子の方に移つて行かうとしてゐるらしいのを見なければならぬのは何んと云ふ事だらう。愛子の涙——それは察する事が出来る。愛子は屹度涙ながらに葉

子と倉地との間にこの頃募つて行く奔放な放埒な醜行を訴へたに違ひない。葉子の愛子と貞世とに對する偏頗な愛憎と、愛子の上に加へられる御殿女中風な壓迫とを敷いたに違ひない。而かもそれをあの女に特有な多恨らしい、冷やかな、寂しい表現法で、而して息氣づまるやうな若さと若さとの共鳴の中に……

勃然として焼くやうな嫉妬が葉子の胸の中に堅く凝りついて來た。葉子はすり寄つておどおどしてゐる岡の手を力強く握りしめた。葉子の手は氷のやうに冷たかつた。岡の手は火鉢にかざしてあつた故か、珍らしく火照つて、臆病らしい脂汗が掌にしとぐに滲み出てゐた。

「あなたは私がお怖いの」

葉子はさりげなく岡の顔を覗き込むやうにしてから云つた。

「そんな事……」

岡はせう事なしに腹を据ゑたやうに割合にいやんとした聲でかう云ひながら、葉子の眼をゆつくり見やつて、握られた手には少しも力を籠めようとはしなかつた。葉子は裏切られたと思ふ不満の爲めにもうそれ以上冷静を装つてはゐられなかつた。昔のやうに何處までも自分を失はない、粘り氣の強い、鋭い神經はもう葉

け、吸収し、飽満するやうに見えた。愛子はその
 脚に堪へないで春の來たのを恨むやうなけ
 るさと淋しさとを見せた。貞世は生命そのもの
 だつた。秋から冬にかけてによき／＼と延び上
 った細々した體には、春の精のやうな豊麗な
 脂肪がしめやかに沁み互つて行くのが眼に見え
 た。葉子だけは春が來ても瘦せた。來るにつけ
 て瘦せた。ゴム紐の弧線のやうな肩は骨ばつた
 輪郭を、薄着になつた着物の下から覗かせて、
 潤澤な髪の毛の重みに堪へないやうに頸筋も
 細々となつた。瘦せて飽鬱になつた事から生
 じた別種の美——さう思つて葉子が便りにして
 ゐた美もそれは段々冷え増さつて行く種類の美
 ではない事を氣附かねばならなくなつた。その
 美はその行手には夏がなかつた。寒い冬のみが
 待ち構へてゐた。

歡樂ももう歡樂自身の歡樂は持たなくなつ
 た。歡樂の後には必ず病理的な苦痛が伴ふや
 うになつた。或る時にはそれを思ふ事すらが失
 望だつた。それでも葉子は凡ての不自然な方法
 によつて、今は振り返つて見る過去にばかり眺
 められる歡樂の絶頂を幻影としてでも現在に
 描かうとした。而して倉地を自分の力の支配の
 下に繋がうとした。健康が衰へて行けば行く程

この焦燥の爲めに葉子の心は休まなかつた。全
 盛期を過ぎた伎藝の女にのみ見られるやうな、
 傷ましく廢弛した、腐菌の燐光を思はせる凄慘
 な羸弱力を僅かな力として葉子は何處までも
 倉地を處にしやうとあせりにあせつた。

然しそれは葉子の儼ましい自覺だつた。美と
 健康との凡てを備へてゐた葉子には今の自分が
 さう自覺されたのだけれども、始めて葉子を見
 る第三者は、物凄く程冷切つて見える女盛
 りの葉子の感力に、日本には見られないやうな
 コケットの典型を見出しつらう。おまけに葉子
 は肉體の不足を極端に人目を牽く衣服で補ふ
 やうになつてゐた。その當時は日露の關係も
 日米の關係も嵐の前のやうな暗い微候を現
 はし出して、國人全體は一種の壓迫を感じ出し
 てゐた。臥薪嘗膽といふやうな合ひ言葉が頻
 りと言論界には説かれてゐた。然しそれと同時
 に日清戦争を相當に遠い過去として眺め得るま
 でに、その戦役の重い負擔から氣のゆるんだ人
 人は、漸く調整され始めた經濟狀態の下で、
 生活の美装といふ事に傾いてゐた。自然主義
 は思想生活の根柢となり、當時病天才の名を
 擅まゝにした高山樗牛等の一團はニイチュの思
 想を標榜して「美的生活」とか「清盛論」と云ふや

うな大膽奔放な言説を以て思想の維新を叫んで
 ゐた。風俗問題とか女子の服裝問題とか云ふ議
 論が守舊派の人々の間には暗しく持ち出され
 てゐる間に、その反對の傾向は、鼓を破つた芥
 子の種のやうに四方八方に飛び散つた。かうし
 て何か今までの日本にはなかつたやうなもの
 の出現を待ち設け見守つてゐた若い人々の眼に
 は、葉子の姿は一つの天啓のやうに映つたに違
 ひない。女優らしい女優を持たず、カフエー
 しいカフエーを持たない當時の路上に葉子の
 姿は眩しいものの一つだ。葉子を見た人は男女
 を問はず眼を凝らした。

或る朝葉子は装ひを凝らして倉地の下宿に
 出かけた。倉地は寝ごみを襲はれて眼を覺まし
 た。座敷の隅には夜を更かして楽しんだらしい
 酒者の残りが敗れたやうにかためて置いてあつ
 た。例の支那靴だけはちやんと鋭がおりて床
 の間の隅に片付けられてゐた。葉子は毎時の通
 り知らん振りをしながら、そこらに散らばつて
 ゐる手紙の差出人の名前に鋭い觀察を與へる
 のだつた。倉地は宿醉を不快がつて頭を敲き
 ながら寢床から半身を起すと、
 「何んで今朝は又そんなにいやれ込んで早くか
 らやつて來をつたんだ」

なのよ。私のやうに墮落したものは……」葉子は岡の手を放して、とう／＼ハンケチを顔にあてた。

「さう云ふ意味で云つた譯ぢやないんですけれども……」

稍／＼暫らく沈黙した後に、當惑し切つたやうに淋しく岡は獨語ちて又黙つてしまつた。岡はどんなに淋しさうな時でも中々泣かなかつた。それが彼れを一層淋しく見せた。

三月末の夕方の空はなごやかだつた。庭先きの一重櫻の梢には南に向いた方に白い花瓣が何處からか飛んで来て粘着いたやうにちらほら見え出してゐた。その先きには赤く霜枯れた杉森がゆるやかに暮れ初めて、光を含んだ青空が靜かに流れるやうに漂つてゐた。若香園の方から園丁が間違に鉢をならす音が聞こえるばかりだつた。

若さから置いて行かれる……さうした淋しみが嫉妬に代つてひし／＼と葉子を襲つて來た。

葉子はふと母の親佐を思つた。葉子が木部との戀に深入りして行つた時、それを見守つてゐた時の親佐を思つた。親佐のその心と思つた。自分の番が來た……その心持は堪らないものだつた。と、突然定子の姿が何よりもなつかしい

ものとなつて胸に逼つて來た。葉子は自分にもその突然の聯想の徑路は判らなかつた。突然も餘りに突然——然し葉子に逼るその心持は、更に葉子を疊に突伏して泣かせる程強いものだつた。

玄關から人の這入つて來る氣配がした。葉子はすぐそれが倉地である事を感じた。葉子は倉地と思つただけで、不思議な憎惡を感じながらその動靜に耳をすました。倉地は臺所の方に行つて愛子を呼んだやうだつた。二人の聲音が玄關の隣りの六疊の方に行つた。而して暫らく靜かだつた。と思ふと、

「いや」と小さく退けるやうに云ふ愛子の聲が確かに聞こえた。抱きすくめられて、もがきながら放れた聲らしかつたが、その聲の中には憎惡の影は明らかに薄かつた。

葉子は雷に撃たれたやうに突然泣きやんで頭を擧げた。

すぐ倉地が階子段を昇つて來る音が聞こえた。

「私臺所に參りますからね」何も知らなかつたらしい岡に、葉子は僅かにそれだけを云つて、突然座を立つて裏階子に急い

だ。と、かけ違ひに倉地は座敷に這入つて來た。強い酒の香がすぐ部屋空氣を汚した。

「やあ春になり居つた。櫻が咲いたぜ。おい葉子」

いかにも氣さくらしく鹽がれた聲でかう叫んだ倉地に對して、葉子は返事も出来ない程興奮してゐた。葉子は手に持つたハンケチを口に押し込むやうに衝へて、震へる手で壁を細かく敲くやうにしながら階子段を降りた。

葉子は頭の中に天地の壞れ落ちるやうな音を聞きながら、そのまゝ縁に出て庭下駄を履かうとあせつたけれども何うしても履けないので、跣足のまゝ庭に出た。而して次ぎの瞬間に自分を見出した時には何時戸を開けたとも知らず物置小屋の中に這入つてゐた。

三十六

底のない憎鬱がともすると烈しく葉子を襲ふやうになつた。謂はれのない激怒がつまらない事にもふと頭を擡げて、葉子はそれを押し鎮める事が出来なくなつた。春が來て、木の芽から疊の床に至るまで凡てのものが膨らんで來た。愛子も貞世も見違へるやうに美しくなつた。その肉體は細胞の一つ／＼まで素早く變を喫きつ

から……あなたは本當にひどい……」
葉子はそのまま倉地の胸に顔をあてた。而して始めの中は、いめやかに、いめに泣いてゐたが、急に激しい、ステリー風な啜り泣きに變つて、汚いものにも觸れてゐたやうに倉地の熱氣の強い胸許から飛びしぎると、寢床の上にはばと突伏して激しく聲を立てて泣き出した。

この咄嗟の激しい脅威に、近頃さう云ふ動作には慣れてゐた倉地だつたけれども、慌てて葉子に近づいてその肩に手をかけた。葉子はおびえるやうにその手から飛び退いた。そこには獸に見るやうな野性のまゝの取り亂し方が美しい衣裳にまとはれて演ぜられた。葉子の齒も爪も尖つて見えた。體は激しい痙攣に襲はれたやうに痛ましく震へをのゝいてゐた。憤怒と恐怖と嫌惡とがもつれ合ひがみ合つての打ち廻るやうだつた。葉子は自分の五體が青空遠くかきさらはれて行くのを懸命に喰ひ止める爲めに蒲團でも疊でも爪の立ち齒の立つものに獅子噛みついた。倉地は何よりもその激しい泣き聲が隣り近所の耳に這入るのを恥ぢるやうに背に手をやつてなだめようとして見たけれども、その度毎に葉子は更に泣き募つて通れようとはかりあせつた。

「何を思ひ違ひをしとる、これ」
倉地は喉笛を開けつ放した低い聲で葉子の耳許にかう云つて見たが、葉子は理不盡にも激しく頭を振るばかりだつた。倉地は決心したやうに力任せにあらがふ葉子を抱きすくめて、その口手に手をあてた。

「えゝ、殺すなら殺して下さい……下さいともし」

といふ狂氣じみた聲をいつと制しながら、その耳許にさゝやかうすると、葉子は我れながら夢中で、あてがつた倉地の手を骨も挫けよと噛んだ。

「痛い……何しやがる」

倉地はいきなり一方の手で葉子の細頸を取つて自分の膝の上に乘せて締めつけた。葉子は呼吸が段々苦しくなつて行くのをこの狂亂の中にも意識して快く思つた。倉地の手で死んで行くのだなと思ふとそれが何んとも云へず美しく心安かつた。葉子の五體からはひとりでに力が抜けて行つて、震へを立てて噛み合つてゐた齒がゆるんだ。その瞬間をすかさず倉地は噛まれてゐた手を振りほどくと、いきなり葉子の頬げたをひし／＼と五六度続けさまに平手で打つた。葉子はそれがまた快かつた。そのびり／＼

と神經の末梢に應へて来る感覺の爲めに體中に一種の陶酔を感じるやうにさへ思つた。「もつとお打ちなさい」と云つてやりたかつたけれども聲は出なかつた。その癖葉子の手は本能的に自分の頬を庇ふやうに倉地の手の下のを支へようとしてゐた。倉地は兩肘まで使つて、ばたばたと裾を蹴亂して暴れる兩脚の外には葉子を身動きも出来ないやうにしてしまつた。酒で心臓の興奮し易くなつた倉地の呼吸は霰のやうにせはしく葉子の顔にかゝつた。

「馬鹿が……靜かに物を云へば判る事だに……俺れがお前を見捨てるか見捨てないか……靜かに考へても見ろ、馬鹿が……恥辱しな眞似をしやがつて……顔を洗つて出直して来い」
さう云つて倉地は捨てるやうに葉子を寢床の上にとんと抱り投げた。

葉子の力は使ひ盡されて泣き続ける氣力さへないやうだつた。而してそのまゝ昏々として眠るやうに仰向いたまゝ眼を閉ぢてゐた。倉地は肩で激しく息氣をつきながら俯ましく取り亂した葉子の姿をまんじりと眺めてゐた。

一時間程の後には葉子は然しつた今迄起きされた亂脈騒ぎをけろりと忘れたもののやうに快活で無邪氣になつてゐた。而して二人は

とそつぽに向ひて、欠伸でもしながらのやうに云つた。これが一箇月前だつたら、少くとも三箇月前だつたら、一夜の安眠に、あの逞ましい精力の全部を回復した倉地は、いきなり寢床の中から飛び出して来て、さうはさせまいとする葉子を否認なしに床の上に振ち伏せてゐたに違ひないのだ。葉子は昨日にもこそくとうるさく見えるやうな敏捷さでその邊に散らばつてゐる物を、手紙は手紙、懐中物は懐中物、茶道具は茶道具とどろ／＼月付けながら、倉地の方も見ずに、

「昨日の約束ぢやありませんか」

と無愛想につぶやいた。倉地はその言葉で始めて何か云つたのをかすかに思ひ出した風で、「何しろ俺れは今日は忙がしいで駄目だよ」と云つて、やうやく伸びをしながら立ち上つた。葉子はもう腹に据ゑかねる程怒りを發してゐた。

一怒つてしまつてはいけな。これが倉地を冷淡にさせるのだ——さう心の中には思ひながらも、葉子の心にはどうしてもその云ふ事を聞かぬ惡戯好きな小惡魔があるやうだつた。即座にその場を一人だけで飛び出して仕舞ひたい衝動と、もつと巧みな手練でどうしても倉地を

おびき出さなければいけないと云ふ冷靜な思慮とが激しく軋ひ合つた。葉子は暫らくの後に辛うじてその二つの心持を混ぜ合はせる事が出来た。

一それでは駄目ね……又にしませうか。でも口惜しいわ、このいゝお天氣に、いけない、あなただの忙がしいは嘘ですわ。忙がしい／＼つて云つときながらお酒ばかり飲んでいらつしやるんだもの。ね、行きませうよ。こら見て「貞藏」さう云ひながら葉子は立ち上つて、兩手を左右に廣く開いて、袂が延びたまゝ兩腕からすりりと垂れるやうにして、稍々險を持つた笑ひを笑ひながら倉地の方に近寄つて行つた。倉地もさすがに、今更らその美しさに見惚れるやうに葉子を見やつた。天才が持つと稱せられるあの青色をさへ帯びた乳白色の皮膚、それがやゝ淺黒くなつて、眼の縁に愛ひの雲をかけたやうな薄紫の暈、霞んで見えるだけにそつと刷いた白粉、際立つて赤く彩られた唇、黒い焰を上げて燃えるやうな眸、後ろにさばいて束ねられた黒漆の髪、大きな西班牙風の琥珀の飾り櫛、くつかりと白く細い喉を攻めるやうにきりつと重ね合はされた藤色の襟、胸の凹みに一寸覗かせた、燃えるやうな緋の帯上げの外は、

濡れたかとはばかり體にそぐつて底光りのする紫紺色の袴、その下に慎ましく潜んで消える程薄い紫色の足袋、（かう云ふ足袋は葉子が工夫し出した新らしい試みの一つだつた）さう云ふものが互々に溶け合つて、長閑やかな朝の空氣の中にほつかりと、葉子と云ふ世にも稀れた程濃麗な一つの存在を浮き出さしてゐた。その存在の中から黒い焰を上げて燃えるやうな二つの眸が生きて動いて倉地をちつと見やつてゐた。

倉地が物を云ふか、身を動かすか、死に角次ぎの動作に移らうとするその前に、葉子は氣味の悪い程滑らかな足取りで、倉地の眼の先きに立つてその胸の所に、兩手をかけてゐた。一もう私に愛想が盡きたら盡きたとはつきり云つて下さい、ね。あなたは確かに冷淡におなりぬ。私は自分が憎う御座んす、自分に愛想を盡かしてゐます。さあ云つて下さい、……今……この場で、はつきり……でも死ねと仰しやい、殺すと仰しやい。私は喜んで……私はどんなにうれしか知れないのに。……よ、御座んすわ、何んでも私本當が知りましたでせうから。さ、云つて下さい。私どんなきつい言葉でも尊厳してゐますから。悪びれななかに……

しやいますから……今一寸切符を買ひに……お連れ申しませうか」

田川夫人は見る／＼眞青になつてしまつてゐた。折返して云ふべき言葉に窮してしまつて、拙くも、

「私はこんな所であなたとお話するのは存じがけません。御用でしたら宅へお出でを願ひませう」

と云ひつゝ今にも倉地がそこに現はれて來るかと思つた。只答へそれを怖れる風だつた。葉子はわざと夫人の言葉をとり違へたやうに、

「いゝえどう致しまして私こそ……一寸お待ち下さい直ぐ倉地さんをお呼び申して參りますから」

さう云つてどん／＼待合所を出てしまつた。後に残つた田川夫人がその貴婦人達の前でどんな顔をして當惑したか、それを葉子は眼に見るやうに想像しながら悪戯者らしくほくそ笑んだ。丁度そこに倉地が切符を買つて來かゝつてゐた。

一等の客室には他に二三人の客があるばかりだつた。田川夫人以下の人達は誰れかの見送りか出迎へにでも來たのだと見えて、汽車が出るまで影も見せなかつた。葉子は早速倉地に事

の始終を話して聞かせた。而して二人は思ひ存分胸をすかして笑つた。

「田川の奥さん可哀さうにまだあすこで今にもあなたが來るかと思つて／＼してゐるでせうよ、外の人達の手前あゝ云はれてこそ／＼と逃げ出す譯にも行かないし」

「俺れが一つ顔を出して見れば又面白かつたにな」

「今日は妙な人に遇つて仕舞つたから又屹度誰れかに遇ひますよ。奇妙ねえ、お客様が來たとなると不思議にたて續くし……」

「不仕合せなんぞも來出すと束になつて來くさるて」

倉地は何か心ありげにかう云つて澁い顔をしたが、この笑ひ話を結んだ。

葉子は今朝の發作の反動のやうに、田川夫人の事があつてから唯何となく心が浮々して仕やうがなかつた。若しそこに客があるなかつたら、葉子は子供のやうに單純な愛嬌者になつて、倉地に澁い顔ばかりはさせておかなかつたらう。「どうして世の中には何處にでも他人の邪魔に來ましたと云はんばかりにかう澤山人があるんだらう」と思つたりした。それすらが葉子には笑ひの種となつた。自分達の向座にしか

つめらしい顔をして老年の夫婦者が坐つてゐるのを、葉子は暫らくまじ／＼と見やつてゐたが、その人達のしかつめらしいのが無性にグロテスクな不思議なものに見え出して、とう／＼我慢がし切れずに、ハンケチを口にあててきゅつきゅつと噴き出してしまつた。

三十七

天心に近くぼつりと一つ白く湧き出た雲の色にも形にもそれと知られるやうな閑はな春が、所々の別荘の建物の外には見渡すかぎり古く寂びれた鎌倉の谷々にまで溢れてゐた。重い砂上の白ばんだ道の上には落椿が一重櫻の花とまじつて無残に落ち散つてゐた。櫻の梢には紅味を持つた若葉がきら／＼と日に輝いて、浅い影を地に落した。名もない雜木までが美しかった。

蛙の聲が眠むく田圃の方から聞こえて來た。休暇でない故か、思ひの外に人の雜聞もなく、時折り、同じ花簪を、女は髪に男は襟にさして先達らしいのが紫の小旗を持つた、遠い所から春を逐つて經めぐつて來たらしい田舎の人達の群

れが、酒の氣も借らずにしめやかに話し合ひながら通るのに行き遇ふ位のものでつた。倉地も汽車の中から自然に氣分が晴れたと見

樂しげに下宿から新橋驛に車を走らした。葉子が薄暗い婦人待合室の色の剥けたモロッコ皮のディアンに腰かけて、倉地が切符を買つて来るのを待つてゐた。そこに居合はせた貴婦人と云ふやうな四五人の人達は、すぐ今までの話を捨ててしまつて、こそ／＼と葉子に就いて私語き交はすらしかつた。高慢と云ふのでもなく謙遜といふのでもなく、極めて自然に落ち着いて真直に腰かけたまま、柄の長い白の琥珀のパラゾルの握りに手を乗せてゐながら、葉子にはその貴婦人達の中の一人がどうも見知り越しの人らしく感ぜられた。或は女學校にゐた時に葉子を崇拜してその風俗をすら眞似た連中の一人であるかとも思はれた。葉子がどんな事を噂されてゐるかは、その婦人に耳打ちされて、見るやうに見ないやうに葉子を窺ひ見る他の婦人達の眼色で想像された。

「お前達は惻れ返りながら心の中の何處かで私を羨んでゐるのだらう。お前達の、その物乞ちしながら金目をかけた派手作りな衣裳や化粧は、社會上の位置に恥ぢないだけの作りののか、良人の眼に快く見えよう爲めなのか。そればかりなのか。お前達を見る路傍の男達の眼は勘定に入れてゐないのか。……臆病卑怯

な偽善者共め！」

葉子はそんな人間からは一段も二段も高い所にゐるやうな氣位を感じた。自分の扮相がその人達のどれよりも立ち勝つてゐる自信を十二分に持つてゐた。葉子は女王のやうに誇りの必要もないと云ふ自らの鷹揚を見せて坐つてゐた。

そこに一人の婦人が這入つて來た。田川夫人——葉子はその影を見るか見ないかに見て取つた。然し顔色一つ動かさなかつた。(倉地以外の人に對しては葉子はその時でも可なり勝れた自制力の持主だつた) 田川夫人は元よりそこに葉子がゐるやうなとは思ひもかけないので、葉子の方に一寸眼をやりながらも一向に氣付かずに、

「お待ちせ致しまして済みません」

と云ひながら貴婦人等の方に近寄つて行つた。互の挨拶が済むか済まない中に、一同は田川夫人によりそつてひそ／＼と私語いた。葉子は靜かに機會を待つてゐた。ぎよつとした風で、葉子に後ろを向けてゐた田川夫人は、肩越しに葉子の方を振り返つた。待ち設てゐた葉子は今まで正面に向けてゐた顔をしとやかに向けかねた。田川夫人と眼を見合はした。葉子の眼は憎むやうに笑つてゐた。田川夫人の眼は笑ふやうに

憎んでゐた。「生意氣な……」葉子は田川夫人が眼を外さない中に、すつ／＼と立つて田川夫人の方に寄つて行つた。この不意打ちに度々失つた夫人は(明らかに葉子が眞紅になつて顔を伏せるとばかり思つてゐたらし、屈合はせた婦人達もその様を見て、容貌でも服装でも自分等を蹴落さうとする葉子に對して溜飲を下ろさうとしてゐるらしかつた) 少し色を失つて、そつ／＼を向かうとしたけれどももう遅かつた。葉子は夫人の前に軽く頭を下げてゐた。夫人も已むを得ず挨拶の眞似をして、高飛車に出る積りらしく、

「あなたは誰方？」

いかにも横柄に翹げて口を切つた。

「早月葉で御座います」

葉子は對等の態度で惡びれもせずかう受けた。「繪島丸では色々お世話様になつて難有う存じました。あのう……報正新報も拜見させていただきました。あの方……夫人の顔色が葉子の言葉一つ毎に變るのを葉子は珍らしいものでも見るやうにまじ／＼と眺めながら」大層面白う御座いました事。よくあんなに委しく御通信になりましたねえ、お忙がしく入らつしやいましたらうに。……倉地さんも折よくこゝに來合はせていらつ

「海の聲：人を呼ぶやうな：お互で呼び合ふやうな」

「何んにも聞こえやせんぢやないか」

「その時聞いたのよ：こんな浅い所では何が聞こえますものか」

「俺れは永年海の上で暮したが、そんな聲は一度だって聞いた事はないわ」

「さうお。不思議ね。音楽の耳のない人には聞こえないのかしら。確かに聞こえましたよ、あの晩に：それは氣味の悪いやうな物凄いやうな：謂はばね、一緒になるべき筈なのに一緒にになれなかつた：その人達が幾億萬と海の底に集まつてゐて、銘々死にかけたやうな低い音で、おーい、おーいと呼び立てる、それが一緒にになつてあんなぼんやりした大きな聲になるかと思ふやうなそんな氣味の悪い聲なの：何處かで今でもその聲が聞こえるやうよ」

「木村がやつてゐるのだらう」

さう云つて倉地は高々と笑つた。葉子は妙に笑へなかつた。そしてもう一度海の方を眺めやつた。眼も届かないやうな遠くの方に、大島が山の腰から下は夕露にぼかされて無くなつて、上の方だけがへの字を描いてぼんやりと空に浮んでゐた。

二人は何時か滑川の川口の所まで來着いてゐた。稻瀬川を渡る時、倉地は、横濱埠頭で葉子にまつはる若者にしたやうに、葉子の上體を右手に輕々とかゝへて、苦もなく細い流れを跳り越してしまつたが、滑川の方はさうは行かなかつた。二人は川幅の狭さうな所を尋ねて段々上流の方に流れに沿つて上つて行つたが、川幅は廣くなつて行くばかりだつた。

一面倒臭い、歸りませうか」

大きな事を云ひながら、光明寺までには半分道も來ない中に、下駄全體が減入りこむやうな砂道で疲れ果てて仕舞つた葉子のかうぶひ出した。

「あすこに橋が見える。兎に角あすこまで行つて見ようや」

倉地はさう云つて、海岸線に沿つてむづくり盛れ上つた砂丘の方に續く砂道を昇り始めた。葉子は倉地に手を引かれて息氣をせい／＼づはせながら、筋肉が強直するやうに疲れた足を運んだ。自分の健康の衰退が今更にはつきり思はせられるやうなそれは疲れ方だつた。今にも破裂するやうに心臓が鼓動した。

一寸待つて、辨慶蟹を踏みつけさうで歩けやしませんわ」

さう葉子は申し諒らしく云つて幾度か足を停めた。實際その邊には紅い甲良を背負つた小さな蟹がいかめしい鉢を上げて、ざわ／＼と音を立てる程夥しく横行してゐた。それが如何にも晩春の夕暮れらしかつた。

砂丘を上り切ると材木座の方に續く道路に出た。葉子はどうも不思議な心持で、濱から見えるる亂橋の方に行く氣になれなかつた。然し倉地がどん／＼そつちに向いて歩き出すので、少しすねたやうにその手に取りすがりながらもつれ合つて人氣のないその橋の上まで來てしまつた。

橋の手前の小さな掛茶屋には主人の婆さんが蔑で團つた薄暗い小部屋の中で、こそ／＼と店をたむ支度でもしてゐるだけだつた。

橋の上から見ると、滑川の水は輕く薄濁つて、まだ芽を吹かない兩岸の枯草の根を靜かに洗ひながら音も立てずに流れてゐた。それが向うに行くと吸ひ込まれたやうに砂の盛れ上つた後ろに隠れて、又その先きに光つて現はれて、穩やかなりづを立えて寄せ返す海邊の波の中に溶けこむやうに注いでゐた。

ふと葉子は眼の下に枯草の中に動くものがあるのに氣が付いて見ると、大きな麥稈の海水帽

えて、いかにも屈託なくなつて見えた。二人は停車場の附近にある或る小綺麗な旅館を兼ねた料理屋で中食をしたゝめた。日朝様とどんぶく様とも云ふ寺の屋根が庭先に見えて、そこから眼病の祈禱だと云ふ團扇太鼓の音がどんぶくどんぶくと單調に聞こえるやうな所だつた。東の方はその名ながらの屏風山が若葉で花よりも美しく装はれて霞んでゐた。短く美しく薊り込まれた芝生の芝はまだ萌えてはゐなかつたが、處疎らに立ち連なつた小松は緑をふきかけて、八重櫻はのぼせたやうに花で首垂れてゐた。もう拾一枚になつて、そこに食物を運んで来る女中は幾前を寛げながら夏が来たやうだとぶつて笑つたりした。

「こゝはいゝわ。今日はこゝで宿りませう」
葉子は計畫から計畫で頭を一杯にしてゐた。而してそこに用らないものを預けて、江ノ島の方まで車を走らした。
歸りにには極楽寺坂の下で二人とも車を捨てて海岸に出た。もう日は稲村ヶ崎の方に傾いて砂濱はやゝ暮れ初めてゐた。小坪の鼻の岨の上に若葉に包まれてたつた一軒建てられた西洋人の白ペンキ塗りの別荘が夕日を受けて緑色に染めたコケツトの、髪の中のダイヤモンドのやう

に輝いてゐた。その岨下の民家からは炊煙が夕霧と一緒にたつて海の方に棚引いてゐた。波打際の砂はいゝ程に濕つて葉子の吾妻下駄の齒を吸つた。二人は別荘から散歩に出て來たらしい幾組かの上品な男女の群れと出遇つたが、葉子は自分の容貌なり服装なりが、そのどの群れのどの人にも立ち勝つてゐるのを意識して、輕い誇りと落ち付きを感じてゐた。倉地もさう云ふ女を自分の伴侶とするのを強く無頓着には思はぬらしかつた。
「誰れかひよんな人に遇ふだらうと思つてゐましたが甘く誰れにも遇はなかつてね。向うの小坪の人家の見える所まで行きませうね。而して光明寺の櫻を見て歸りませう。さうすると丁度お腹がいゝ空き具合になるわ」
倉地は何んとも答へなかつたが、無論承知でゐるらしかつた。葉子はふと海の方を見て倉地に又口を切つた。
「あれは海ね」
「仰せの通り」
倉地は葉子が時々途轍もなく判り切つた事を少女見たいな無邪氣さでぶふ、又それが始まつたといふやうに澁さうな笑ひを片頬に浮べて見せた。

「わたし一度あの真只中に乗り出して見たい」
「してどうするのだい」
倉地もさすがに長かつた海の上の生活を遠く思ひやるやうな顔をしながらぶつた。
「たい乗り出して見たいの。どーつと見界もなぐ吹きまく風の中を、大波に思ひ存分揺られながら、顔覆へりさうになつては立ち直つて切り抜けて行くあの船の上の事を思ふと、胸がどきどきする程もう一度乗つて見たくなりますわ。こんな所嫌やねえ、住んで見ると」
さうぶつて葉子はバラゾルを開いたまゝ柄の先きで白い砂をざく／＼と刺し通した。
「あの寒い晩の事、私が甲板の上で考へ込んでゐた時、あなたが灯をぶら下げて岡さんを連れて、やつて入らしたあの時の事などを私は誇もなく思ひ出しますわ。あの時私は海でなければ聞けないやうな音楽を聞いてゐましたわ。陸の上にはあんな音楽は聞かうとぶつたつてありやしない。おーい、おーい、おい、おい、おい、おーい、あれは何？」
「何んだそれは」
倉地は怪訝な顔をして葉子を振り返つた。
「あの聲」
「どの」

ますよ。防風草でも摘みながらいらつしやい。
河へ渡れます、御案内しませう」

と云つた。葉子は一時も早く木部から通れたくもあつたが、同時にしんみりと一別以來の事などを語り合つて見たい氣もした。いつか汽車の中で遇つてこれが最後の對面だらうと思つた、あの時からすると木部はずつとさばけた男らしくなつてゐた。その服装がいかにも生活の不規則なものと窮迫してゐるのを思はせると、葉子は親身な同情にそゝられるのを拒む事が出来なかつた。

倉地は四五歩先立つて、その後から葉子と木部とは間を隔てて並びながら、又辨慶蟹のうざうざゐる砂道を濱の方に降りて行つた。

「あなたの事は大抵噂や新聞で知つてゐましたよ。人間てものはをかしなものですね。……私はいから落伍者です。何をして見ても成り立つた事はありません。妻も子供も里に返してしまつて今は一人でこゝに放浪してゐます。毎日釣をやつてね……あゝやつて水の流れを見てゐると、それでも晩飯の酒の肴位なものは釣れて來ますよハ、ハ、ハ、」

木部は又虚ろに笑つたが、その笑ひの響きが傷口にでも應へたやうに急に黙つてしまつた。砂

に喰ひ込む二人の下駄の音だけが聞こえた。

「然しこれでゐて空くの孤獨でもありませんよ。ついこの間から知り合ひになつた男だが、砂山の砂の中に酒を埋めておいて、ぶらりとやつて來てそれを飲んで酔ふのを楽しみにしてゐるのと知り合ひになりましてね……そいつのアイ・アイが馬鹿に面白いです。徹底した運命論者ですよ。酒を呑んで運命論を吐くんです。丸で仙人ですよ」

倉地はどん／＼歩いて二人の話を耳に入らぬ位遠ざかつた。葉子は木部の口から例の感傷的な言葉が今出るかと思つて待つてゐたけれども、木部には些かもそんな風はなかつた。笑ひばかりでなく、凡てに虚ろな感じがする程無感情に見えた。

「あなたは本當に今何をなさつて入らつしやいますの」

と葉子は少し木部に近寄つて尋ねた。木部は近寄られただけ葉子から遠退いて又虚ろに笑つた。

「何をやるもんですか。人間に何が出来るもんですか。……もう春も末になりましたね」

途轍もない言葉を強ひてくつ附けて木部はそのよく光る眼で葉子を見た。而してすぐその眼を

返して、遠ざかつた倉地をこめて遠く海と空との境目に眺め入つた。

「私あなたとゆつくりお話がして見たいと思ひますが……」

かう葉子はしんみり竊ひやうに云つて見た。木部は少しもそれに心を動かされないやうに見えた。

「さう……それも面白いかな。……私はこれでも時折はあなたの幸福を祈つたりしてゐますよ、をかしなもんですね。ハ、ハ、ハ、（葉子がその言葉につけ入つて何か云はうとするのを木部は悠々とおつかぶせて）あれが、あすこに見えるのが大鳥です。ぼつんと一つ雲か何かのやうに見えるでせう空に浮いて……大鳥つて云ふ伊豆の先きの瀧鳥です。あれが私の釣をする所から正面に見えるんです。あれでゐて、日によつて色がさまざまに變ります。どうかすると噴煙がぼ／＼と見える事もありますよ」

又言葉がぼつんと切れて沈黙が続いた。下駄の音の外に波の音も段々と近く聞こえた。もう一度どうしてもゆつくり木部に遇ひたい氣になつてゐた。

「木部さん……あなたさぞ私を恨んでいらつ

を被つて、枕に腰かけて、釣竿を握つた男が、帽子の庇の下から眼を光らして葉子をぢつと見つめてゐるのだつた。葉子は何んの氣なしにその男の顔を眺めた。

木部孤第だつた。

帽子の下に隠れてゐる故か、その顔は一寸見忘れる位年がいつてゐた。而して服装からも、様子からも落魄といふやうな一種の氣分が漂つてゐた。木部の顔は假面のやうに冷然としてゐたが、釣竿の先きは不注意にも水に浸つて、釣絲が女の髪の毛を流したやうに水に浮いて軽く震へてゐた。

さすがの葉子を胸をどきんとさせて思はず身を退らせた。「おーい、おい、おい、おい、おーい……それがその瞬間に耳の底をすゝつと通つてすゝつと行方も知らず過ぎ去つた。怯づ怯づと倉地を窺ふと、倉地は何事も知らぬげに、喉かに暮れて行く青空を振り仰いで眼一杯に眺めてゐた。

一歸りませう」

葉子の聲は震へてゐた。倉地は何んの氣なしに葉子を顧みたが、

「寒くでもなつたか、肩が白いぞ」

と云ひながら欄干を離れた。二人がその男の後

ろを見せて五六歩歩み出すと、

「一寸お待ち下さい」

と云ふ聲が橋の下から聞えた。倉地は始めてそこに人のゐたのに氣が付いて、眉をひそめながら振り返つた。ざわ／＼と聲を分けながら小路を登つて来る覺音がして、ひよつこり眼の前に木部の姿が現はれ出た。葉子はその時は然し凡てに對する身構へを十分にしまつてゐた。

木部は少し馬鹿丁寧な位に倉地に對して帽子

を取るも、すぐ葉子に向いて、

「不思議な所でお目に懸りましたね。暫らく」と云つた。一年前の木部から想像してどんな激

情的な口調で呼びかけられるかも知れないと危ぶんでゐた葉子は、案外冷淡な木部の態度に安心もし、不安も感じた。木部はどうかすると居直るやうな事をしかねない男だと葉子は豫て思つてゐたからだ。然し木部といふ事を先方から云ひ出すまでは包めるだけ倉地には事實を包んで見ようと思つて、唯々にこやかに、

「こんな所でお目に懸らうとは……私も本當に驚いてしまひました。でもまあ本當にお珍らしい……只今こちらの方にお住ひで御座いますの？」

「住ふといふ程もない……くすぶりこんでゐま

すよハ、ハ、ハ」

と木部は虚ろに笑つて、鎧の廣い帽子を畫生つぼらしく阿彌陀に被つた。と思ふと又急いで取つて、

「あんな所からいきなり飛び出して來てかう粗れ／＼しく早月さんにお話をしかけて變にお思ひでせうが、僕らは下らんや／＼者で、これでも元は早月家には色々御厄介になつた男です。申上げる程の名もありませんから、まあ御覽の通りの奴です。……どちらにお出でですと倉地に向いて云つた。その小さな眼には勝れた才氣と、白け嫌ひらしい氣性とが逆つては

ゐたけれども、ぢぢむむい顎髭と、伸びるまゝに伸ばした髪の毛とで、葉子でなければその特徴は見えないらしかつた。倉地は何處の馬の骨かと思ふやうな調子で、自分の名を名乗る事は固よりせずに、軽く帽子を取つて見せただけだつた。而して、

「光明寺の方へでも行つて見ようかと思つたのだが、河が渡れんで……この橋を行つても行かれますだらう」

三人は橋の方を振り返つた。眞直な土堤道が白く山の際の方まで續いてゐた。

一行けますがね、それは濱傳ひの方が趣があり

「だから愛想が盡きたでせう」
 突如として又云ひやうのない淋しき、哀しき、
 口惜しさが暴風のやうに襲つて來た。又來たと
 思つてもそれはもう遅かつた。砂の上に突伏し
 て、今にも絶え入りさうに身もだえする葉子を、
 倉地は聞こぬ程度に舌打ちしながら介抱せね
 ばならなかつた。

その夜旅館に歸つてからも葉子はいつまでも
 眠らなかつた。そこに來て働く女中達を一人
 一人突慥に厳しくしためた。仕舞には一人
 として寄りつくものが無くなつて仕舞ふ位。倉
 地も始めの中はしぶくつき合つてゐたが、遂
 には勝手にするがいと云はんばかりに座敷を
 代へて獨りて寢てしまつた。

春の夜は唯、事もなくいめやかに更けて行
 つた。遠くから聞こえて來る蛙の鳴き聲の外に
 は、目勝様の森あたりで啼くらしい泉の聲が
 するばかりだつた。葉子とは何んの關係もない
 夜鳥でありながら、その聲には人を馬鹿にし切
 つたやうな、それでゐて聞くに堪へない程淋し
 い響きが潜んでゐた。ほう、ほう……ほう、ほ
 うほうと間遠に單調に同じ木の枝と思はしい所
 から聞こえてゐた。人々が寢鎮まつて見ると、
 憤怒の情は何時か消え果てて、云ひやうのない

寂寞がその後に残つた。

葉子のする事云ふ事は一つ、葉子を倉地か
 ら引き離さうとするものばかりだつた。今夜も
 倉地が葉子から待ち望んでゐたものを葉子は明
 らかに知つてゐた。而かも葉子は譯の分らない
 怒りに任せて自分の思ふまゝを振舞つた結果、
 倉地には不快極まる失望を與へたに違ひない。

かうしたまゝで日がたつに従つて、倉地は否應
 なしに更に新しい性的興味の對象を求め
 やうになるのは目前の事だ。現に愛子はその候
 捕者の一人として倉地の眼には映り始めてゐる
 ではないか。葉子は倉地との關係を始めか
 ら考へ辿つて見るに連れてどうしても間違つ
 た方向に深入りしたのを悔いないではゐられな
 かつた。然し倉地を手なづける爲めにはあの道
 を擇ぶより仕方がなかつたやうにも思へる。倉
 地の性格に缺點があるのだ。せうではない。倉
 地に愛を求めて行つた自分の性格に缺點がある
 のだ。……そこまで理窟らしく理窟を辿つて來
 て見ると、葉子は自分といふものが踏みまじつ
 ても飽き足りない程いやな者に見えた。

「何故私は木部を捨て木村を苦しめなければな
 らないのだらう。何故木部を捨てた時に私は心
 に望んでゐるやうな道を驀地に進んで行く事が

出来なかつたのだらう。私を木村に強ひて押し
 附けた五十川の小母さんは悪い……私の恨みは
 どうしても消えるものか。……とぶつておめお
 めとその策略に乗つてしまつた私は何んといふ
 腑甲斐ない女だつたのだらう。倉地にだけは私
 は失望したくないと思つた。今までの凡ての失
 望をあの一人で全部取り返してまだ餘り切るやう
 な喜びを持たうとしたのだつた。私は倉地と
 は離れてはゐられない人間だと確かに信じてゐ
 た。而して私の持つてゐる凡てを……醜いもの
 の凡てを倉地に與へて悲しいとも思はなかつた
 のだ。私は自分の命を倉地の胸にたゞきつけ

た。それなのに今は何が残つてゐる……何が残
 つてゐる。今夜かぎり私は倉地に見放され
 るのだ。この部屋を出て行つてしまつた時の冷
 淡な倉地の顔！……私は行かう。これから行
 つて倉地に詫びよう、奴隷のやうに疊に身をこ
 すり附けて詫びよう……さうだ。……然し倉地
 が冷冽な顔をして私の心を見も返らなかつたら
 ……私は生きてゐる間にそんな倉地の顔を見る勇
 気はない。……木部に詫びようか……木部は居
 所さへ知らさうとはしないのだもの……」
 葉子は瘦せた肩を痛ましく震はして、倉地から
 絶縁されてしまつたもののやうに、淋しく哀し

だに」

倉地は倉地にしては特にやさしい聲でかう云つた、ワイシャツを着ようとしたまゝ葉子に背を向けて立ちながら。葉子は飛んでもない失策でもしたやうに、シャツの背部につけるカラーボタンを手に持ったまゝおろ／＼してゐた。

「ついシャツを仕替へる時それだけ忘れてしまつて……」

「言ひ譯なんぞはいゝわい。早く頼む」

「はい」

葉子はしゝやかにさう云つて寄り添ふやうに倉地に近寄つてそのボタンをボタン孔に入れようとしたが、糊が硬いのと、氣おくれがしてゐるので一寸は這入りさうになかつた。

「済みませんが一寸脱いで下さいましな」

「面倒だな、このまゝで出来ようが」

葉子はもう一度試みた。然し思ふやうには行かなかつた。倉地はもう明らかにいら／＼し出してゐた。

「駄目か」

「まあ一寸」

「出せ、貸せ俺れに。何んでもない事だに」

さう云つてくるりと振返つて一寸葉子を睨みつけながら、ひつたくくるやうにボタンを受取つた。

而して又葉子に後ろを向けて自分でそれを嵌めようとかゝつた。然し中々うまく行かなかつた。見る／＼倉地の手は烈しく震へ出した。

「おい、手傳つてくれてもよからうが」

葉子が慌てて手を出すに機みにボタンは煙の上に落ちてしまつた。葉子がそれを拾はうとする間もなく、頭の上から倉地の聲が雷のやうに鳴り響いた。

「馬鹿！ 邪魔をしろと云ひやせんぞ」

葉子はそれでも何處までも優しく出ようとした。

「御免下さいね、私お邪魔なんぞ……」

「邪魔よ。これで邪魔でなくて何んだ……ええ、そこぢやありませんよ。そこに見えとるぢやないか」

倉地は口を失はして頭を突き出しながら、どいんと足を舉げて盤を踏み鳴らした。

葉子はそれでも我慢した。而してボタンを拾つて立ち上ると倉地はもうワイシャツを脱ぎ捨ててゐる所だつた。

「胸糞の悪い……おい日本服を出せ」

「橘袴の襟がかけずにありますから……洋服で我慢して下さいましね」

葉子は自分が持つてゐると思ふ程の妍びがある

限り眼に集めて数願するやうにからう云つた。

「お前には頼まんまよ……愛ちゃん」

倉地は大きな聲で愛子と呼びながら階下の方に耳を澄ました。葉子はそれでも根かぎり我慢しようとした。階下段をいゝやかに昇つて愛子がいづものやうに柔順に部屋に這入つて來た。倉地は急に相好を崩してにこやかになつてゐた。

「愛ちゃん頼む、シャツにそのボタンをつけておくれ」

愛子は何事の起つたかを露知らぬやうな顔をして、男の肉感をそゝるやうな堅肉の肉體を美しく折り曲げて、雪白のシャツを手に取り上げるのだつた。葉子がちやんと倉地にかしづいてそこにゐるのを全く無視したやうなづ／＼しい態度が、ひがんでしまつた葉子の眼には憎々しく映つた。

「餘計な事をおしでない」

葉子はとう／＼かつとなつて愛子をたしなめながらいきなり手にあるシャツをひつたくつてしまつた。

「貴様は……俺れが愛ちゃんに頼んだに何故餘計な事をしくさるんだ」

とさう云つて威文高になつた倉地には葉子はお

く涙の涸れるかと思ふまで泣くのだった。静まり切つた夜の空氣の中に、時々鼻をかみながらすうり上げ／＼泣き伏す痛ましい聲だけが聞こえた。葉子は自分の聲につまされて猶更ら悲哀から悲哀のどん底に沈んで行つた。

稍々暫らしてから葉子は決心するやうに、手近にあつた硯箱と料紙とを引き寄せた。而して震へる手先を強ひて練りながら簡單な手紙を乳母にあてて書いた。それには乳母とも定子とも斷然縁を切るから以後他人と思つてくれ。若し自分が死んだらこゝに同封する手紙を木部の所を持つて行くがいゝ。木部は屹度どうしてでも定子を養つてくれるだらうからと云ふ意味だけを書いた。而して木部あての手紙には、

「定子はあなたの子です。その顔を一日御覧になつたらすぐお分りになります。私は今まで意地からも定子は私一人の子で私一人のものとする積りでゐました。けれども私が世にないものとなつた今は、あなたはもう私の罪を許して下さいさかとも思ひます。せめては定子を受入れて下さいませう。

葉子の死んだ後

憐れなる定子のマ、より

定子のお父様へ――

と書いた。涙は笥紙の上に留度なく落ちて字をにじました。東京に歸つたら溜めて置いた預金の全部を引出してそれを爲替にして同封する爲めに封を閉ぢなかつた。

最後の犠牲……今までとつおいつ捨て兼ねてゐた最愛のものを最後の犠牲にして見たら、多分は倉地の心がもう一度自分に戻つて来るかも知れない。葉子は荒神に最愛のものを生牲として願ひを聴いて貰はうとする太古の人のやうな必死な心になつてゐた。それは胸を張り裂くやうな犠牲だった。葉子は自分の眼からも英雄的に見えるこの決心に感激して又新らしく泣き崩れた。

「どうか、どうか、……どう一か」

葉子は誰れにともなく手を合はして、一心に念じておいて、雄々しく涙を押し拭ふと、そつと座を立つて、倉地の寢てゐる方へと忍びよつた。廊下の明りは大半消されてゐるので、硝子窓から臘光にさし込む月の光が便りになつた。廊下の半分がた爍の燃えたやうなその光の中を、瘦せ細つて一層春丈けの伸びて見える葉子は、影が歩むやうに音もなく静かに歩みながら、そつと倉地の部屋を歩いて中に這入つた。薄暗く點つた有明けの下に倉地は何事も

知らぬげに快く眠つてゐた。葉子はそつとその枕許に座を占めた。而して倉地の寝顔を見守つた。

葉子の眼にはひとりでに涙が湧くやうに溢れ出て、厚ぼつたいやうな感じになつた。唇は我れにもなくわな／＼と震へて來た。葉子はさうしたまゝで黙つてなほも倉地を見續けてゐた。葉子の眼に溜つた涙の爲めに倉地の姿は見る見るにじんだやうに輪郭がぼやけてしまつた。葉子は今更ら人が違つたやうに心が弱つて、受身身にはばかりならずにはゐられなくなつた自分が悲しかった。何んと云ふ情けない可哀さうな事だらう。さう葉子はしみ／＼と思つた。

段々葉子の涙はすうり泣きに代つて行つた。倉地が眠りの中でそれを感じたらしく、うるさうに叫き聲を小さく立てて寢返りを打つた。葉子はぎ／＼として息氣をつめた。然しすうり泣きは又歸つて來た。葉子は何事も忘れ果てて、倉地の床の側にきちんと坐つたまゝいつまでも／＼泣き續けてゐた。

三十八

「何をさう怯／＼してゐるのかい。そのボタンを後ろにはめてくれさへすればそれでいゝの

て、内膜炎は内膜炎を扶掖する事によつて、それが器械的の發病である限り全治の見込みはあるが、位置矯正の場合などに施術者の不注意から子宮底に穿孔を生じた時などには、往々にして激烈な腹膜炎を結果する危険が伴ないでもないなどと書いてあつた。葉子は倉地に事情を打ち明けて手術を受けようかとも思つた。普段ならば常識がすぐそれを葉子にさせたに違ひない。然し今はもう葉子の神経は極度に脆弱になつて、あらゆる方向にばかり我れにもなく鋭く働くやうになつてゐた。倉地は疑ひもなく自分の病氣に愛想を盡かすだらう。縱令そんな事はないとしても入院の期間に倉地の肉の要求が倉地を思はぬ方に連れて行かないとは誰れが保證出来る。それは葉子の僻見であるかも知れない。然し若し愛子が倉地の注意を牽いてゐるとすれば、自分の留守の間に倉地が彼女に近づくのは唯一の事だ。愛子があの年であるの無経験で、倉地のやうな野性と暴力とに興味を持たぬのは勿論、一種の厭惡をさへ感じてゐるのは察せられないではない。愛子は恥度倉地を退けるだらう。然し倉地には恐ろしい無恥がある。而して一度倉地が女を己の力の下に取り拉いだら、如何なる女も二度と倉地から

通れる事の出来ないやうな奇怪な麻酔の力を持つてゐる。思想とか禮儀とかに煩はされない、無盡蔵に強烈で征服的な生のまゝな男性の力は如何なる女をもその本能に立ち歸らせる魔術を持つてゐる。而かもあの柔順らしく見える愛子は葉子に對して生れることからの敵意を挾んでゐるのだ。どんな可能でも描いて見る事が出来る。さう思ふと葉子は我が身で我が身を焼くやうな末練と嫉妬の爲めに前後も忘れてしまつた。何んとかして倉地を縛り上げるまでは葉子は甘んじて今の苦痛に堪へ忍ばうとした。その頃からあの正井と云ふ男が倉地の留守を窺つては葉子に會ひに来るやうになつた。「あいつは大だつた。危く手を噛ませる所だつた。どんな事があつても寄せ付けるではないぞ。」と倉地が葉子に云ひ聞かせてから一週も経たない後に、ひよつこ正井が顔を見せた。中々のしやれ者で、寸分の隙もない身なりをしてゐた男が、どこかに貧窮を否はすやうになつてゐた。カラーには薄つすり汗じみが出来て、ズボンの膝には焼けこげの小さな孔が明いたりしてゐた。葉子が上げる上げないも云はない中に、懇意づくらしくどん／＼玄關から上りこんで

座敷に通つた。而して高價らしい西洋葉子の美しい箱を葉子の目の前に風呂敷から取り出した。「折角お出で下さいましたのに倉地さんは留守ですから、憚りですが出直してお遊びに入らして下さいます。これはそれまでお預りおきを願ひますわ。」さう云つて葉子は顔には如何にも懇意を見せながら、言葉には二の句がつけない程の冷淡さと強さとを示してやつた。然し正井はいや／＼として平氣なものだつた。ゆつくり內衣簍から谷煙草入れを取り出して、金口を一本摘まみ取ると、炭の上に溜つた灰を靜かにかき除けるやうにして火をつけて、長閑かに香りのいい煙を座敷に漂はした。「お留守ですか。それは却つて好都合でした。もう夏らしくなつて來ましたね、隣の薔薇も咲き出すでせう。遠いやうだがまだ去年の事です。ねえ、お互様に太平洋を往つたり來たりしたのは、あの頃が面白い盛りでしたよ。私達の仕事もまだ脱まれずにゐたんでしたから。時に奥さん。」さう云つて折入つて相談でもするやうに正井は煙草盆を押し退けて膝を乗り出すのだつた。人

う眼もくれないかつた。愛子ばかりが葉子の眼には見えてゐた。

「お前は下にゐればそれでいゝ人間なんだよ。おさんどんの仕事も碌々出来はしない癖に餘計な所に申し出しゃばるもんぢやない事よ。……下に待つてお出で」

愛子はいくらまで姉にたしなめられても、逆でもなく怒るでもなく、黙つたまゝ柔順に、多恨な眼で姉をぢつと見て静々とその座を外づしてしまつた。

こんなもつれ合つたいさかひがともすると葉子の家で繰返されるやうになつた。獨りになつて氣が鎮まると葉子は心の底から自分の狂暴な振舞ひを悔いた。而して氣を取直した積りで何處までも愛子をいたはつてやらうとした。愛子に愛情を見せる爲めには義理にも貞世につらく當るのが當然だと思つた。而して愛子の見てゐる前で、愛するものが愛する者を憎んだ時ばかりに見せる残酷な呵責を貞世に與へたりした。葉子はそれが理不盡極まる事だとは知つてゐながら、さう偏頗に傾いて来る自分の心持を何うする事も出来なかつた。そののみならず葉子には自分の鬱憤を漏らす爲めの對象が是非一つ必要になつて來た。人でなければ動物、

動物でなければ草木、草木でなければ自分自身に何かなしに傷害を與へてゐなければ氣が休まなくなつた。庭の草などを摘んでゐる時でも、ふと氣が付くと葉子はいやがんだまゝ一葉の名もない草をたつた一本摘みとつて、眼に涙を一保留めながら爪のきで寸々に切り虎んでゐる自分を見出したりした。

同じ衝動は葉子を驅つて倉地の抱擁に自分自身を思ふ存分虐げようとした。そこには倉地の愛を少しでも多く自分に繋ぎたい欲求も手傳つてはゐたけれども、倉地の手で極度の苦痛を感じる事に不満足極まる満足を見出さうとしてゐたのだ。精神も肉體も甚しく病に蝕まれた葉子は抱擁によつての有頂天な歡樂を味ふ資格を失つてから可なり久しかつた。そこには唯ぞ地獄のやうな呵責があるばかりだつた。凡てが終つてから葉子に残るものは、嘔吐を催すやうな肉體の苦痛と、強ひて自分を忘我に誘はうと藻掻きながら、それが裏切られて無益に終つた、その後に襲つて來る呟嘆すべき倦怠ばかりだつた。倉地が葉子のその悲惨な無感覺を分け前して喰へやうもない憎惡を感じるのには勿論だつた。葉子はそれを知ると更に云ひ知れない便りなきを感じて又烈しく倉地に挑みかゝるの

だつた。倉地は見る／＼歩々々葉子から離れて行つた。而して益々氣分は荒んで行つた。「貴様は俺れに厭きたな。男でも作り居つたんだらう」

さう唾でも吐き捨てるやうに忌々しげに倉地があらはに云ふやうな日も來た。

「どうすればいゝんだらう」

さう云つて額の所に手をやつて頭痛を忍びながら葉子は獨り苦しまねばならなかつた。

或る日葉子は思ひ切つて竊かに醫師を訪れた。醫師は手もなく、葉子の凡ての惱みの原因は子宮後屈症と子宮内膜炎とを併發してゐるからだ云つて聞かせた。葉子は餘りに分り切つた事を醫師がさも知つたか振りに云つて聞かせるやうにも、又そのつべりした白い顔が、恐ろしい運命が葉子に對して裝うた假面で、葉子はその言葉によつて眞暗な行手を明らかに示されたやうにも思つた。而して怒りと失望とを抱きながらその家を出た。歸途葉子は本屋に立ち寄つて婦人病に關する大部な醫書を買ひ求めた。それは自分の病症に關する徹底的な知識を得よう爲めだつた。家に歸ると自分の部屋に閉ぢ籠つて大體を讀んで見た。後屈症は外科手術を施して位置矯正をする事によつ

子にも何うしてもその人達の職業を推察し得なかつた。数人の人達の仲間に倉地が這入つて始め出した秘密な仕事の巨細を漏らした。正井が葉子を脅やかす爲めに、その話には誇張が加へられてゐる、さう思つて聞いて見ても、葉子の胸をひやつとさせる事ばかりだつた。倉地が日清戦争にも参加した事務長で、海軍の人達にも航海業者にも割合に廣い交際がある所から、材料の蒐集者としてその仲間の牛耳を取るやうになり、露國や米國に向つて漏らした祖國の軍事上の秘密は中々容易ならざるものらしかつた。倉地の氣分が荒んで行くのも、尤だと思はれるやうな事柄を数々葉子は聞かされた。葉子は仕舞には自分自身を護る爲めにも正井の機嫌を取り外づしてはならないと思ふやうになつた。而して正井の言葉が一語々々思ひ出されて、夜なぞになると眠らせぬ程に葉子を苦しめた。葉子はまた一つの重い秘密を背負はなければならぬ自分を見出した。このつらい意識はすぐに又倉地に響くやうだつた。倉地は兎もすると敵の間諜ではないかと疑ふやうな險しい眼で葉子を睨むやうになつた。而して二人の間には又一つの溝がふえた。

そればかりではなかつた。正井に秘密な金を

融通する爲めには倉地がらのあてがひだけでは通す足りなかつた。葉子はあるもしない事を誠しやかに書き連ねて木村の方から送金させねばならなかつた。倉地の爲めなら兎にも角にも、倉地と自分の妹達とが豊かな生活を導く爲めになら兎にも角にも、葉子は一種の癡癡な誇りを以てそれをして、男の爲めになら何事でもと云ふ捨銭な満足を買ひ得ないではなかつたが、その金が太抵正井の懐ろに吸収されてしまふのだと思ふと、いくら間接には倉地の爲めだとは云へ葉子の胸は痛かつた。木村からは送金の度毎に相變らず長い消息が添へられて來た。木村の葉子に對する愛着は日を追うてまきるとも衰へる様子は見えなかつた。仕事の方にも手違ひや誤算があつて始めの見込み通りには成功とは云へないが、葉子の方に送る位金は何うしてでも都合がつく位の信用は得てゐるから構はず云つてよこせとも書いてあつた。こんな信實な愛情と熱意を絶えず示されるこの頃は葉子もさすがに自分のしてゐる事が苦しくなつて、思ひ切つて木村に凡てを打ち開けて、關係を絶たうかと思ひ悩むやうな事が時々あつた。その矢先きなので、葉子は胸に殊更な痛みを覺えた。それが益々葉子の神經をいらだたせて、

その病氣にも影響した。而して花の五月が過ぎて、青葉の六月にならうとする頃には、葉子は痛ましく疲れ細つた、眼ばかりいびきつい絶然たるヒステリー症の女になつてゐた。

三十九

巡査の制服は一氣に夏服になつたけれども、その年の氣候はひどく不順で、その白服が羨ましい程暑い時と、氣の毒な程惡冷えのする日が入れ代り立ち代り續いた。従つて晴雨も定めがたかつた。それがどれ程葉子の健康にさし響いたか知れなかつた。葉子は絶えず腰部の不愉快な鈍痛を覺ゆるにつけ、暑くて苦しい頭痛に悩まされるにつけ、何一つ身體に中分の無かつた十代の昔を思ひ忍んだ。晴雨寒暑といふやうなものもこれほど氣分に影響するものとは思ひも寄らなかつた。葉子は、寢起きの天氣を何よりも氣にするやうになつた。今日こそは一日氣が晴れ、するだらうと思ふやうな日は一日も無かつた。今日も亦つらい一日を過ごさねばならぬと云ふその思はしい豫想だけでも葉子の氣分を害ふには十分過ぎた。

五月の始め頃から葉子の家に通ふ倉地の足は段々遠退いて、時々何處へとも知れぬ旅に出

を侮つてかゝつて來ると思ふと葉子はぐつと癪に障つた。然し以前のやうな葉子はそこにはゐなかつた。若しそれが以前であつたら、自分の才氣と力量と美貌とに十分の自信を持つ葉子であつたら、毛の末ほども自分が失ふ事なく、優婉に圓滑に男を自分のかけた陥穽の中に陥れて、自縄自縛の苦い目に遇はせてゐるに違ひない。然し現在の葉子は多愛もなく敵を手許まで潛りこませてしまつて唯々いら／＼とあせるだけだつた。さう云ふ破目になると葉子は存外力のない自分であることを知らねばならなかつた。

正井は膝を乗り出してから、暫らく黙つて敏捷に葉子の顔色を窺つてゐたが、これなら大丈夫と見極めをつけたらしく、

「少しばかりでいゝんです、一つ融通して下さい」と切り出した。

「そんな事を仰しやつたつて、私にどうしやうもない位は御存じぢやありませんか。それや餘人ぢやなし、出来るものなら何んとか致しますけれども、姉妹三人が何うか斯うかして倉地に養はれてゐる今日のやうな境界では、私に何が出來ませう。正井さんにも似合はない的違ひ

を仰しやるのね。倉地なら御相談にもなるでせうから面と向つてお話し下さいまし。中に這入ると私が困りますから」

葉子は取りつく島もないやうにと嫌味な調子でつけ／＼とかう云つた。正井はせゝら笑ふやうに微笑んで、金口の灰を靜かに灰吹きに落した。

「もう少しざつ／＼ばらんに云つて下さいよ昨日今日のお交際ぢやなし。倉地さんとまづくなつた位は御承知ぢやありませんか。……知つていらしつてさう云ふ口のきゝかたは少しひど過ぎますぜ、（こゝで假面を取つたやうに）正井は不貞腐れた態度になつた。然し言葉はどこまでも穩當だつた）嫌はれたつて私は何も倉地さんを何うしようのかうしようのと、そんな薄情な事はしない積りです。倉地さんに怪我があれば私だつて同罪以上ですからね。……然し……一つ何んとかならないものでせうか」

葉子の、怒りに興奮した神經は正井のこの一言にすぐおびえてしまつた。何もかも倉地の裏面を知り抜いてる筈の正井が、捨鉢になつたら倉地の身の上にどんな災難が降りかゝらぬとも限らぬ。そんな事をさせては飛んだ事になるだらう。そんな事をさせては飛んだ事になる。葉

子は益々弱身になつた自分を救ひ出す術に困じ果ててゐた。

「それを御承知で私の所に入らしつたつて……縦令私に都合がついたとした所で、何うしやうもありませんぢやないの。なんぼ私だつても、倉地と仲たがへをなさつたあなたに倉地の金を何する……」

「だから倉地さんのものをおねだりはしません。木村さんからもたんまり來てゐる筈ぢやありませんか。その中から……たんとたあ云ひま

せんから、窮境を助けてと思つてどうか、正井は葉子を男たらしと見くびつた態度で、情夫を持つてゐる姿にでも迫るやうな圖々しい顔色を見せた。この押問答の結果葉子はとうとう正井に三百圓程の金をむざ／＼とせり取られてしまつた。葉子はその晩倉地が歸つて來た時もそれを云ひ出す氣力はなかつた。貯金は全部定子の方に送つてしまつて、葉子の手許にはいくらか残つてはゐなかつた。

それからと云ふもの正井は一週間とおかずに葉子の所には金をせびつた。正井はその折に、繪島丸のサルンの一隅に陣取つて酒と煙草とにひたしながら、何か知らんひそ／＼話を

してゐた數人の人達——人を見貫く眼の鋭い葉

葉子にはさだかにそれと分らなかつたが、どうも雙鶴館の女將らしくもあつた。葉子はかつてとなつて足早にその後をつけた。二人の間は半町とは離れてゐなかつた。段々二人の距離がぢやまつて行つて、その女が街燈の下を通る時などに氣を付けて見ると何うしても思つた通りの女らしかつた。彼は今までの女を眞正直に信じてゐた自分はまんまと詐られてゐたのだつたか。倉地の妻に對しても義理が立たないから、今夜以後葉子とも倉地の妻とも關係を絶つ。悪く思はないでくれと確かにさう云つた、その義侠らしい口車にまんまと乗せられて、今まで殊勝な女だとばかり思つてゐた自分の愚かさは何うだ。葉子はさう思ふと眼が廻つてその場に倒れてしまひさうな口惜しさ恐ろしさを感じた。而して女の形を目がけてよろ／＼となりながら駈け出した。その時女はその邊に辻待ちをしてゐる車に乗らうとする所だつた。取り廻がしてなるものと、葉子はひた走りに走らうとした。然し足は思ふやうにはかどらなかつた。さすがにその静けさを破つて聲を立てる事も憚られた。もう十間と云ふ位の所まで來た時車はがら／＼と音を立てて砂利道を動きはじめた。葉子は息氣せき切つてそれに追ひつかうと

あせつたが、見る／＼その距離は遠ざかつて、葉子は杉森で圍まれた淋しい時間の中にたゞ一人取り残されてゐた。葉子は何んと云ふ事なくその辻車のゐた處まで行つて見た。一臺よりゐなかつたので飛び乗つて後を追ふべき車もなかつた。葉子はぼんやりそこに立つて、そこに字でも書き残してあるかのやうに、暗い地面をぢつと見詰めてゐた。確かにあの女に違ひなかつた。春恰好と云ひ、詰の形と云ひ、小刻みな歩き振りと云ひ、あの女に違ひなかつた。旅行に出ると云つた倉地は疑ひもなくうそを使つて下宿にくすぶつてゐるに違ひない。而してあの女を仲人に立てて先妻とのよりを戻さうとしてゐるに決つてゐる。それに何んの不思議があらう。永年連れ添つた妻ではないか。可愛い三人の娘の母ではないか。葉子と云ふもの一日々々疎くならうとする倉地ではないか。それに何んの不思議があらう。それにしても餘りと云へば餘りな仕打ちだ。何故それならさうと明らかに云つてはくれないのだ。云つてさへくれれば自分になつて戀する男に對しての女らしい覺悟はある。別れるとならば綺麗さつぱりと別れても見せる。…何んと云ふ踏みつけ方だ。何んと云ふ恥曝しだ。倉地の妻はおほそ

れた貞女振つた顔を震はして、涙を流しながら、「それではお葉さんといふ方ににお氣の毒だから、私はもう亡いものと思つて下さいまし：：」…見てゐられぬ、聞いてゐられぬ。：：葉子と云ふ女はどんな女だか、今夜こそは倉地にしつかり思ひ知らせてやる…。

葉子は酔つたもののやうにふら／＼した足でりでそこから引き返した。而して下宿屋に來着いた時には、息氣苦しさの爲めに聲も出ない位になつてゐた。下宿の女達は葉子を見ると又あの氣狂ひが來た一と云はんばかりの顔をして、その夜の葉子の殊更に取りつめた顔色には注意を拂ふ暇もなく、その場を外づして姿を隠した。葉子はそんな事には氣もかけずに物泣い笑顔で殊更らしく帳場にある男に一寸頭を下げて見せて、そのまゝふら／＼と階子段を昇つて行つた。こゝが倉地の部屋だと云ふその棟の前に立つた時には、葉子は泣き聲に氣がついて驚いた程、我れ知らず吸り上げて泣いてゐた。身の破滅、戀の破滅は今夜の今、さう思つて荒々しく襖を開いた。部屋の中には案外にも倉地はゐなかつた。隅から隅まで片付いてゐて、倉地のあの強烈な膚の香ひも更に残つてはゐなかつた。葉子は思は

るやうになつた。それは倉地が葉子のしつこい挑みと、激しい嫉妬と、理不盡な癡癡の發作とを避けるばかりだと葉子自身にさへ思へない節があつた。倉地の所謂事業には何か可なり致命的な内場破れが起つて、倉地の力でもそれを何うする事も出来ないらしい事はおぼろげながら葉子にも判つてゐた。債權者であるか、商賣仲間であるか、兎に角さう云ふ者を避ける爲めに不意に倉地が姿を隠さねばならぬらしい事は確かだつた。それにしても倉地の跡は一向に葉子には憎かつた。

或る時葉子は激しく倉地に迫つてその仕事の内容をつかり打ち明かせようとした。倉地の情人である葉子が倉地の身に大事が降りかかるうとしてゐるのを知りながら、それに助力もし得ないと云ふ法はない、さう云つて葉子はせがみにせがんだ。

「こればかりは女の知つた事ぢやないわい。俺れが喰ひ込んでお前にはとばかり行ぐやうにはしたくないで、打ち明けないのだ。何處に行つても知らないで一點張りに通すがいいぜ。……二度と聞きたいとせがんで見ろ、俺れはうそほんなしにお前とは手を切つてみせるから」

その最後の言葉は倉地の平生に似合はない重苦しい響きを持つてゐた。葉子は息氣をつめてそれ以上を何うしても迫る事が出来ないと思ふ程重苦しいものだつた。正井の言葉から判じても、それは女手などでは實際どうする事も出来ないものらしいので葉子はこれだけは斷念して口をつぐむより仕方がなかつた。

墮落と云はれようと、不貞と云はれようと、他人手待つてゐても自分の思ふやうな道は開けないと見切りをつけた本能的の衝動から、知らず識らず自分で選び取つた道の行手に眼も眩むやうな未来が見えたと有頂天になつた繪島丸の上の出来事以來一年もたない中に、葉子が命も名も捧げてかゝつた新しい生活は見る／＼土臺から腐り出して、もう今は一陣の風さへ吹けば、さしもの高樓ももんどり打つて地上に崩れてしまふと思ひやると、葉子は屢々眞鍮に自殺を考へた。倉地が旅に出た留守に倉地の下宿に行つて、急用あり直ぐ歸れといふ電報をその行く先きに打つてやる。而して自分ばかり心靜かに倉地の寢床の上で刃に伏してゐよう。それは自分の一生の幕切れとしては、一番ふさはしい行爲らしい。倉地の心にもまだ自分に對する愛情は燃えかすれながらも残つてゐる。そ

れがこの最期によつて一時なりとも美しく燃え上るだらう。それでいい、それで自分は満足だ。さう心から涙ぐみながら思ふ事もあつた。

實際倉地が留守の筈のある夜、葉子はふらふらと普段空想してゐたその心持に厳しく捕へられて前後も知らず家を飛び出した事があつた。葉子の心は緊張し切つて天氣のやら曇つてゐるのやら、暑いのにやら寒いのにやら更に差別がつかなくなつた。盛んに羽蟲が飛びかはして往來の邪魔になるのをかすかに意識しながら、家を出てから小半町裏坂を下りて行つたが、不圖自分の體が穢れてゐて、この三四日湯に這入らない事を思ひ出すと、死んだ後の醜さを恐れてそのまゝ家に取つて返した。而して妹達だけが這入つたまゝになつてゐる湯殿に忍んで行つて、さめかけた風呂につかつた。妹達は疾に寢入つてゐた。手拭掛けの竹竿に濡れた手拭が二筋だけかゝつてゐるのを見ると、寢入つてゐる二人の妹の事がひし／＼と心に通るやうだつた。葉子の決心は然しその位の事では動かなかつた。簡単に身仕舞をして又家を出た。

倉地の下宿近くなつた時、その下宿から急ぎ足で出て来る脊丈の低い丸髷の女がゐた。夜の事ではあり、その邊は街燈の光も暗いので、

た。本當に雙鶴館の女將が來たのではないらしくもあり、番頭までが倉地とぐりになつてゐてしら／＼い虚言を吐いたやうにもあつた。

何事も當てにはならない。何事もうそから出た誠だ。葉子は本當に生きてゐる事がいやになつた。

……そこまで來て葉子は始めて自分が家を出て來た本當の目的が何人であるかに氣付いた。凡てに疑いて凡てに見限られて、凡てを見限らうとする、苦しみぬいた一つの魂が、虚無の世界の幻の中から消えて行くのだ。そこには何んの未練も執着もない。嬉しかつた事も、悲しかつた事も、悲しんだ事も、苦しんだ事も、畢竟は水の上に浮いた泡がまたはじけて水に歸るやうなものだ。倉地が、死骸になつた葉子を見て歎かうが歎くまいが、その倉地さへ、幻の影ではないか。雙鶴館の女將だと思つた人が、他人であつたやうに、他人だと思つたその人が、案外雙鶴館の女將であるかも知れないやうに、生きたと云ふ事がそれ自身幻影でなくつて何んであらう。葉子は覺め切つたやうな、眠りほうけてゐるやうな意識の中であう思つた。しん／＼と底も知らず澄み透つた心が唯一つぎり／＼と死の方に傾いて行つた。葉子の眼には一と

半の涙も宿つてはゐなかつた。妙に冴えて落ち付き拂つた眸を靜かに働かして、部屋の中を靜かに見廻してゐたが、やがて夢遊病者のやうに立ち上つて、戸柵の中から倉地の寢具を引き出して來て、それを部屋の中に敷いた。而して暫らくの間その上に靜かに坐つて眼を瞑つて見た。それから又立ち上つて、く無感情な顔付きをしなげながら、もう一度戸柵に行つて、倉地が始終身近に備へてゐる短銃をあちこちと求めめた。仕舞にそれが本箱の引出しの中の幾通かの手紙と、書き損ねの書類と、四五枚の寫眞とが、ごつちやに仕舞ひ込んであるその中から現はれ出た。葉子は妙に無關心な心持でそれを手にとつた。而して恐ろしいものを取扱ふやうにそれを體から離して右手にぶら下げて寢床に歸つた。その癖葉子は露程もその兇器に怖れを懷いてゐる譯ではなかつた。寢床の眞中に坐つてから短銃を膝の上に置いて手を取上げたまゝ暫らく眺めてゐたが、やがてそれを取り上げると胸の所に持つて來て頸頭を引き上げた。

きりつ、と胸切れのいゝ音を立てて彈筒が少し回轉した。同時に葉子の全身は電氣を感じたやうにびりつと戰いた。然し葉子の心は水が澄んだやうに揺がなかつた。葉子はさうしたまゝ短銃を又膝の上に置いてちつと眺めてゐた。

ふと葉子は唯一つ仕殘した事のあるのに氣が附いた。それが何人であるかを自分でもはつきりとは知らずに、謂はば何物かの餘儀ない命令に服従するやうに、又寢床から立ち上つて戸柵の中の本箱の前に行つて引出しを開けた。而してそこにあつた寫眞を丁寧に一枚づつ取り上げて靜かに眺めるのだつた。葉子は心竊かに何をしてゐるんだらうと自分の動作を怪しんでゐた。

葉子はやがて一人の女の寫眞を見詰めてゐる自分を見出した。長く／＼見詰めてゐた。……その中に、白癡がどうかして段々眞人間に還る時はさうもあらうかと思はれるやうに、葉子の心は靜かに／＼自分で働くやうになつて行つた。女の寫眞を見て何うするのだらうと思つた。早く死ななければいけないのだからと思つた。一體その女は誰れだらうと思つた。……それは倉地の妻の寫眞だつた。さうだ倉地の妻の若い時の寫眞だ。成程美しい女だ。倉地は今でもこの女に未練を持つてゐるだらうか。この妻には三人の可愛い娘があるのだ。今でも時々思ひ出す。さう倉地の云つた事がある。こん

ずふら／＼とよるけて、泣きやんで、部屋の中に倒れこみながらあたりを見廻した。居るに違ひないと獨り決めをした自分の妄想が破れたと云ふ氣は少しも起らないで、確かにゐたものが突然落ちてしまふか何うかしたやうな氣味の悪い不思議さに襲はれた。葉子はすつかり氣抜けがして、髪も衣紋も取り亂したまゝ横坐りに坐つたきりで、ばんやりしてゐた。

あたりは深山のやうに、いゝんとしてゐた。

唯、葉子の眼の前をうるさく行つたり来たりする黒い影のやうなものがあつた。葉子は何物と云ふ分別もなく始めは唯とらうるさいとのみ思つてゐたが、仕舞には堪へかねて手を舉げて頻りにそれを追ひ拂つて見た。追ひ拂つても／＼そのうるさい黒い影は眼の前を立ち去らうとはしなかつた。……暫らくさうしてゐる中に葉子は寒氣がするほどぞつと怖ろしくなつて氣がはつきりした。

急に周囲には騒がしい下宿屋らしい雑音が聞こえ出した。葉子をうるさがるしたその黒い影は見る／＼小さく遠ざかつて、電燈の周囲をきり／＼と舞ひ始めた。よく見るとそれは大きく黒い夜蛾だつた。葉子は神がかりが離れたやうにきよ／＼となつて、不思議さうに居住ひを

正して見た。

何處までが眞實で、何處までが夢なんだらう……

自分の家を出た、それに間違ひはない。途中から取つて返して風呂をつかつた、……何んの爲めに？ そんな馬鹿な事をする筈がない。でも妹達の手拭が二筋濡れて手拭かけの竹竿にかゝつてゐた、（葉子はさう思ひながら自分の顔を撫でたり、手の甲を調べて見たりした。而して確かに湯に這入つた事を知つた）それならそれでいゝ。それから雙鶴館の女將の後をつけたのだつたが、……あの邊から夢になつたのか知らん。あすこにゐる蛾をもや／＼した黒い影のやうに思つたりしてゐた事から考へて見ると、いま／＼しきから自分は思はず存丈の低い女の幻影を見てゐたのかも知れない。それにしてもゐる筈の倉地がゐないといふ法はないが……葉子は何うしても自分のして來た事にはつきり連絡をつけて考へる事が出来なかつた。葉子は……自分の頭ではどう考へて見ようもなくなつて、ベルを押して番頭に來て貰つた。

「あのう、あとでこの蛾を追ひ出して置いて下さいな……それからね、さつき……と云つた所

がどれ程前だか私にもはつきりしませんがね、こゝに三十恰好の丸首を結つた女の人が見えましたか」

「こちら様には誰方もお見えにはなりませんが……」

番頭は怪訝な顔をしてかう答へた。

「こちら様だらうが何んだらうが、そんな事を聞くんぢやないの。この下宿屋からそんな女の人が出て行きましたか」

「左様……へ、一時間ばかり前ならお一人お歸りになりました」

「雙鶴館のお内儀さんでせう」

圖星をさゝれたらうと云はんばかりに葉子はわざと鷹揚な態度を見せてかう聞いて見た。

「いゝえさうぢや御座いません」

番頭は案内にもさうきつぱりと云ひ切つてしまつた。

「それぢや誰れ」

「兎に角他のお部屋にお出でなかつたお客様で、手前共の商賣上お名前までは申上げ兼ねますが」

葉子もこの上の問答の無益なを知つてそのまゝ番頭を歸してしまつた。

葉子はもう何者も信用する事が出来なかつた。

びらないで置くがいゝよ」

「私時々本當に死にたくなつちまひます」。

葉子は途徹もなく貞世の噂とは縁もゆかりもないこんなひよんな事を云つた。

「さうだ俺れもさう思ふ事があるて。……落ち目になつたら最後、人間は浮き上るが面倒になる。船でもが浸水し始めたらずはあかんからな。……したが、俺れはまだもう一反り反つて見てくれる。死んだ氣になつて、やれん事は一つもないからな」

「本當ですわ」
さう云つた葉子の眼はいら／＼と輝いて、睨むやうに倉地を見た。

「正井の奴が来るさうぢやないか」
倉地はまた話題を轉ずるやうにかう云つた。葉子がさうだとさへ云へば、倉地は割合に平氣で受けて「困つた奴に見込まれたものだ、見込まれた以上は仕方がないから、空腹がらないだけの仕向けをしてやるがいゝ」と云ふに違ひない

事は、葉子によく分つてはゐたけれども、今までの秘密にしてゐた事を何んとか云はれやしないかとの氣遣ひの爲めか、それとも倉地が秘密を持つのならこつちも秘密を持つて見せるぞと云ふ腹になりたいたい爲めか、自分にもはつきりとは判

らない衝動に驅られて、何と云ふ事なしに、

「いゝえ」

と答へてしまつた。

「來ない？……それやお前、いゝ加減ぢやらう」

と倉地はたしなめるやうな調子になつた。

「いゝえ」

葉子は頑固に云ひ張つてそつぽを向いてしまつた。

「おいその團扇を貸してくれ、煽がずにゐては蚊でたまらん……來ない事があるものか」
「誰れからそんな馬鹿な事お聞きになつて？」
「誰れからでもないゝわさ」

葉子は倉地がまた齒に衣着せた物の云ひ方をすると思ふとかつと腹が立つて返辭もしなかつた。

「葉ちゃん、俺れは女の機嫌を取る爲めに生れて來はせんぞ。いゝ加減を云つて甘く見くびるとよくはないぜ」
葉子はそれでも返事をしなかつた。倉地は葉子の拗ね方に不快を催したらしかつた。

「おい葉子！　正井は來るのか來んのか」
正井の來る來ないは大事ではないが、葉子の虚言を訂正させずには置かないと云ふやうに、倉

地は詰め寄せて厳しく問ひ追つた。葉子は庭の方

にやつてゐた眼を返して不思議さうに倉地を見た。

「いゝえと云つたらいゝえとより云ひやうはありませんわ。あなたの『いゝえ』と私の『いゝえ』は『いゝえ』が違ひでもしますか知ら」

「酒も何も飲めるか……俺れが暇を無理に作つてゆつくりくつろがうと思つて來れば、いらん事に角を立てて……何んの藥になるかいそれが」

葉子はもう胸一杯悲しくなつてゐた。本當は倉地の前に突つ伏して、自分は病氣で始終身體が自由にならないうのが倉地に氣の毒だ。けれどもどうか捨てないで愛し續けてくれ。身體が駄目になつても心の續く限りは自分は倉地の情人でゐたい。さうより出來ない。そこを憐れんでせめては心の誠を捧げさしてくれ。若し倉地が明々地に云つてくれさへすれば、元の細君を呼び迎へてくれても構はない。而してせめては自分を憐れんでなり愛してくれ。さう歎願したかつたのだ。倉地はそれに感激してくれるかも知れない。俺れはお前も愛するが去つた妻も捨てゐるには忍びない。よく云つてくれた。それならお前の言葉に甘えて哀れな妻を呼び迎へよう。妻もさぞお前の黄金のやうな心には感ず

な寫眞が一體この部屋なんぞにあつてはならないのだが。それは本當にならないのだ。倉地はまだこんなものを大事にしてゐる。この女はいつまでも倉地に歸つて来ようと待ち構へてゐるのだ。而してまだこの女は生きてゐるのだ。それが幻なものであるか。生きてゐるのだ、生きてゐるのだ。……死なれるか、それで死なれるか。

何が幻だ、何が虚無だ。この通りこの女は生きてゐるではないか。危く……危く自分は倉地を安堵させる所だつた。而してこの女を……このまだ生のあるこの女を喜ばせる所だつた。

葉子は一刹那の違ひで死の境から救ひ出された人のやうに、驚喜に近い表情を顔一面に漲らして裂ける程眼を見張つて、寫眞を持つたまゝ飛び上らんばかりに突つ立つたが、急に襲ひかゝる遺溺ない嫉妬の情と憤怒とに怖ろしい形相になつて、齒がみをしながら、寫眞の一端を握へて、「いゝ……と云ひながら、總身の力をこめて眞二つに裂くと、いきなり寢床の上はどうと倒れて、物凄いい叫び聲を立てながら、涙も流さずに叫びに叫んだ。

店のものが慌てて部屋に這入つて来た時には、葉子はしをらしい様子をして、短銃を床の

下に隠してしまつて、しく／＼と本當に泣いてゐた。

番頭は已むを得ず、てれ隠しに、「夢でも御覧になりましたか、大層なお聲だつたものですから、つい御案内も致さず飛び込んで仕舞ひまして」と云つた。葉子は、

「え、夢を見ました。あの黒い蛾が悪いんです。早く追ひ出して下さい」そんな譯の分らない事を云つて、漸く涙を押拭つた。

かう云ふ發作を繰り返す度毎に、葉子の顔は暗くばかりなつて行つた。葉子には、今まで自分が考へてゐた生活の外に、もう一つ不可思議な世界があるやうに思はれて來た。而して動ともすればその兩方の世界に出たり入つたりする自分を見出すのだつた。二人の妹達は唯はら／＼して姉の狂暴な振舞ひを見守る外はなかつた。倉地は愛子に刃物などに注意しろと云つたりした。

岡の來た時だけは、葉子の機嫌は沈むやうな事はあつても狂暴になる事は絶えてなかつたので、岡は妹達の言葉にさして重きを置いてはゐないやうに見えた。

四十

六月のある夕方だつた。もう誰彼時で、電燈が點つて、その周圍に夥しく杉森の中から小さな羽蟲が集まつてゐる、さく飛び廻り、蚊がすさまじく鳴きたてて軒先きに蚊柱を立ててゐる頃だつた。暫らくめて來た倉地が、張出しの葉子の部屋で酒を飲んでゐた。葉子は瘦せ細つた肩を單衣物の下に突らして、神經的に襟をぐつと搔き合せて、きちんと膳の側に坐つて、華車な團扇で酒の香に寄りたかつて來る蚊を追ひ拂つてゐた。二人の間にはもう元のやうに滾々としてと泉の如く湧き出る話題はなかつた。偶に話が少し弾んだと思ふと、どちらにか差しきはるやうな言葉が飛び出して、ぶつんと會話を途絶してしまつた。

「貞ちゃん矢張り駄々をこねるか」

一と口酒を飲んで、溜息をつくやうに庭の方に向いて氣を吐いた倉地は、自分で氣分を引き立てながら思ひ出したやうに葉子の方を向いてか尋ねた。

「え、仕様がなくなつちまいました。この四五日つたら殊更らひどいんですから」
「さうした時期もあるんだらう。まあたんと

洗濯しておくのをすつかり忘れてしまつてね、今特別に外出を佐長にそつと頼んで許して貰つて、これたけ布を買つて来たんですが、縁を縫つてくれる人がないんで弱つて駈つけけたんです。大急ぎでやつていたでせうか？」

「お易い御用ですともね、愛さん！」

大きく呼ぶと階下にゐた愛子が平生に似合はず、あたふたと階子段を昇つて来た。葉子はふと又倉地を念頭に浮べていやな氣持になつた。

然しその頃貞世から愛子に愛が移つたかと思はれる程葉子は愛子を大事に取扱つてゐた。それは前にも書いた通り、強ひても他人に對する愛情を殺す事によつて、倉地との愛がより緊く結ばれると云ふ迷信のやうな心の働きから起つた事だつた。愛しても愛し足りないやうな貞世につらく當つて、何うしても氣の合はない愛子を蟲を殺して大事にして見たら、或は倉地の心が變つて来るかも知れないとさう葉子は何がなし思ふのだつた。で、倉地と愛子との間にどんな奇怪な徴候を見つけ出さうとも、念にかけても葉子は愛子を責めまいと覺悟をしてゐた。

「いゝえ相變らず送つてくれますことよ」
「木村つて云ふのはさうした男なんだ」
古藤は半ば自分に云ふやうに感激した調子でかう云つたが、平氣で仕送りを受けてゐるらしく物を云ふ葉子にはひどく反感を催したらしく、
「木村からの送金を受取つた時、その金があなたの手を焼きたぐらしかすやうには思ひませぬか」
と激しく葉子をまともに見詰めたが云つた。而して油で汚れたやうな赤い手で、せはしなく胸の眞鍮釦をはめたり外づしたりした。
「何故ですの？」
「木村は困り切つてゐるんですよ。……本當にあなた考へて御覽なさい……」
勢込んでなほ云ふ募らうとした古藤は、横も明け開いたまゝの隣りの部屋に愛子達がゐるのに氣付いたらしく、
「あなたはこの前お眼にかゝつた時からすると、又ひどく痩せましたねえ」
と言葉を反らした。
「愛さんもう出来て？」
と葉子も調子をかへて愛子に遠くからかう尋ね、「いゝえまだ少し」と愛子がふふのをしみに

げて頂戴な。古藤さん、今下には倉地さんが来ていらつしやるんですが、あなたは嫌ひねお遇ひなさるのは……さう、ぢやこちらでお話でもしますからどうぞ」
さう云つて古藤を、妹達の部屋の隣りに案内した。古藤は時計を見い／＼ぜはしさうにしてゐた。
「木村から便りがありますか」
木村は葉子の良人ではなく自分の親友だと云つたやうな風で、古藤はもう木村君とは云はなかつた。葉子はこの前古藤が来た時からそれを氣付けてゐたが、今日は殊更その心持が口立つて聞こえた。葉子は度々來ると答へた。
「困つてゐるやうですね」
「えゝ、少しはね」
「少し所ぢやないやうですよ僕の所に來る手紙によると、何んでも來年に開かれる筈だつた博覽會が再來年に延びたので、木村は父この前以上の窮境に陥つたらしいのです。若い中だからいゝやうなものあんな不運な男も少くない。金も送つては來ないでせう」
何んと云ふいづけな事を云ふ男だらうと葉子は思つたが、餘り云ふ事にわだかまりがないので皮肉でも云つてやる氣にはなれなかつた。

るだらう。俺れは妻とは家庭を持たう。然しお前とは戀を持にう。さう云つて涙ぐんでくれるかも知れない。若しそんな場面が起り得たら葉子はどれ程嬉しいだらう。葉子はその瞬間に、生れ代つて、正しい生活が開けてくるのと思つた。それを考へただけで胸の中からは美しい涙が滲み出すのだつた。けれども、そんな馬鹿を云ふものではない、俺れの愛してゐるのはお前一人だ。元の妻などに俺れが糸線を持つてゐると思ふのが間違ひだ。病氣があるのなら早速病院に進入するが、費用はいくらでも出してやるから。かう倉地が云はないとも限らない。それはありさうな事だ。その時葉子は自分の心を斷ち割つて誠を見せた言葉が、情けも容赦も思ひやりもなく、踏み躪られ穢されてしまふのを見なければならぬのだ。それは地獄の呵責よりも葉子には堪へがたい事だ。總令倉地が前の態度に出てくれる可能性が九十九あつて、後の態度を探りさうな可能性が一つしかないとしても、葉子には思ひ切つて歎願をして見る勇氣が出ないのだ。倉地も倉地で同じやうな事を思つて苦しんでゐるらしい。何んとかして元のやうな懸け隔てのない葉子を見出して、段々と陥つて行く生活の窮境の中にも、せめては暫ら

くなりとも人間らしい心になりたいたいと思つて、葉子に近づいて來てゐるのだ。それを何處までも知り抜きながら、而して身につまされて深い同情を感じながら、どうしても面と向ふと殺したい程憎まないではゐられない葉子の心は自分ながら悲しかつた。

葉子は倉地の最後の一言でその急所に觸れられたのだつた。葉子は倉地の眼の前で見る／＼しをれてしまつた。泣くまいと氣張りがながら幾度も雄々しく雄々しく涙を飲んだ。倉地は明らかに葉子の心を感じたらしく見えた。

「葉子！ お前は何んでこの頃さう他處々々しくしてゐなければならぬのだ。えゝゝと云ひながら葉子の手を取らうとした。その瞬間に葉子の心は火のやうに怒つてゐた。

「他處々々しいのはあなたぢやありませんか」さう知らず／＼云つてしまつて、葉子は沒義道に手を引つ込めた。倉地を睨みつける眼からは熱い人粒の涙がぼろ／＼とこぼれた。而して、

「あゝ……あ、地獄だ／＼」と心の中で絶望的に切なく叫んだ。二人の間には又もや忌はしい沈黙が繰り返された。

その時玄關に案内の聲が聞こえた。葉子はそ

の聲を聞いて古藤が來たのを知つた。而して大急ぎで涙を押し拭つた。二階から降りて來て取次ぎに立つた愛子がやがて六疊の間に進入つて來て、古藤が來たと告げた。

「二階にお通ししてお茶でも上げてお置き。何んだつて今頃……御飯時も構はないで……と面作臭さうに云つたが、あれ以來來た事の無い古藤に遇ふのは、今のこの苦しい壓迫から通れるだけでも都合がよかつた。このまゝ續いたら又例の發作で倉地に愛想を盡かさせるやうな事を仕出かすにきまつてゐたから。

「私一寸會つて見ますからね、あなた構はないでいらつしやい。木村の事も探つておきたいから」さう云つて葉子はその座を外づした。倉地は返事一つせずには杯を取り上げてゐた。

二階に行つて見ると、古藤は例の軍服に上等兵の肩章を附けて、胡坐をかきながら貞世と何か話をしてゐた。葉子は今まで泣き苦しんでゐたとは思へぬ程美しい機嫌になつてゐた。簡單な挨拶を済ますと古藤は例の云ふべき事から先きに云ひ始めた。

「御面倒ですがね、明日定期検閲な所が今度には室内の整頓なんです。所が僕は整頓風呂敷を

もいゝ、葉子の乗つて歸つて來た船に木村も乗つて一緒に歸つて來たら、葉子は或は木村を船の中で人知れず殺して海の中に投げ込んでゐようとも、木村の記憶は哀しくなつかしいものとして死ぬまで葉子の胸に刻みつけられてゐたらうものを。……それはさうに相違ない。それにしても木村は氣の毒な男だ。自分の愛しようとする人が他人に心を牽かれてゐる……それを發見する事だけで悲慘は十分だ。葉子は本當は、倉地は葉子以外の人に心を牽かれてゐると思つてはゐないのだ。唯少し葉子から離れて來たらしいと疑ひ始めただけだ。それだけでも葉子は既に熱鐵を吞まされるやうな焦燥と嫉妬とを感ずるのだから、木村の立場はさぞ苦しいだらう。……さう推察すると葉子は自分の餘りと云へば餘りに殘虐な心に胸の中がちくちくと刺されるやうになつた。「金が手を焼くやうに思ひはしませんか」との古藤の云つた言葉が妙に耳に残つた。

さう思ひ／＼布の一方を手早く縫ひ終つて、縫ひ目を器用にしごきながら眼を擧げると、そこには貞世が先刻のまゝ机に兩肘をついて、たかつて來る蚊も追はずにぼんやりと庭の向うを見續けてゐた。切り下げにした厚い黒漆の髪

の毛の下に覗き出した耳朶は霜焼けでもしたやうに赤くなつて、それを見ただけでも、貞世は何か興奮して向うを向きながら泣いてゐるに違ひなく思はれた。覺えがないではない。葉子も貞世程の齡の時には何か知らず急に世の中が悲しく見える事があつた。何事も唯々明るく快く頼もしくのみ見えるその底からふつと悲しいものが胸を抉つて湧き出る事があつた。取り分けて快活ではあつたが、葉子は幼い時から妙な事に應病が兒だつた。ある時家族中で北國の淋しい田舎の方に避暑に出かけた事があつたが、ある暇がらんと客の空いた大きな旅館屋に宿つた時、枕を並べて寢た人達の中で葉子は床の間に近い一番端に寢かされたが、どうしたか減でか氣味が惡くて堪らなくなり出した。暗い床の間の軸物の中から、置物の蔭からか、得體の分らないものが現はれ出て來さうなやうな氣がして、さう思ひ出すとぞく／＼と總身に震へが來て、逆も頭を枕につけてはゐられなかつた。で、眠りかゝつた父や母にせがんで、その二人の中に割りこまして貰はうと思つたけれども、父も母も、そんなに大きくなつて何を馬鹿をぶふのだと云つて少しも葉子の云ふ事を取り上げてはくれなかつた。葉子は暫らく兩親

と争つてゐる中に何時の間にか寢入つたと見えて、翌日眼を覺まして見ると、矢張り自分が氣味の悪いと思つた所に寢てゐた自分を見出した。その夕方、同じ旅館屋の二階の手摺から少し荒れたやうな庭を何んの氣なしにちづつと見入つてゐると、急に昨夜の事を思ひ出して葉子は悲しくなり出した。父にも母にも世の中の凡てのものにも自分は何かして見放されてしまつたのだ。親切らしく云つてくれる人は皆んな自分に虚事をしてゐるのだ。いゝ加減の所で自分はどんなに皆んなから突き放されるやうな悲しい事になるに違ひない。どうしてそれを今まで氣附かずにゐたのだらう。さうなつた曉に一人でこの庭をかうして見守つたらどんなに悲しいだらう。小さいながらにそんな事を一人で思ひ耽つてゐるともう留度なく悲しくなつて來て、父が何んとぶつても母が何んとぶつても、自分の心を自分の涙にひたし切つて泣いた事を覚えてゐる。

葉子は貞世の後姿を見るにつけてふとその時の自分を思ひ出した。妙な心の働きから、その時の葉子が貞世になつてそこに幻のやうに現はれたのではないかとさへ疑つた。これは葉子には始終ある癖だつた。始めて起つた事が、

葉子はそちらに立つた。貞世はひどくつまらなさうな顔をして、机に兩肘を持たせたまゝ、ぼんやりと庭の方を見やつて、三人の舉動などには眼もくれない風だつた。垣根沿ひの木の間からは、種々な色の薔薇の花が夕闇の中にもちらほら見えてゐた。葉子はこの頃の貞世は本當に變だと思ひながら、愛子の縫ひかけの布を取り上げて見た。それはまだ半分も縫ひ上げられてはゐなかつた。葉子の癪癪はぎり／＼募つて來たけれども、強ひて心を押し鎮めながら、「これつぽつち……愛子さん何うしたと云ふんだらう。どれ姉さんにお貸し、而してあなたは……貞ちゃんも古藤さんの所に行つてお相手をしてお出で……」

「僕は倉地さんに遇つて來ます」突然後向きの古藤は疊に片手をついて肩越しに向き返りながら云つた。そして葉子が返事をする暇もなく立ち上つて階子段を降りて行かうとした。葉子はすばやく愛子に眼くばせして、下に案内して二人の用を足してやるやうにと云つた。愛子は急いで立つて行つた。葉子は縫ひ物をしながら多少の不安を感じた。あの何んの技巧もない古藤と、癪癪が募り出して自分ながら始末をしあぐねてゐるやうな

倉地とがまともに打突かり合つたら、どんな事を仕出來すかも知れない。木村を手の中に丸めておく事も今日二人の會見の結果で駄目になるかも知れないと思つた。然し木村と云へば、古藤の云ふ事などを聞いてゐると葉子もさすがにその心根を思ひやらずにはゐられなかつた。葉子はこの頃倉地に對して持つてゐるやうな氣持からは、木村の立場や心持がわからな過ぎる位想像が出來た。木村は戀するもの本能から疾うに倉地と葉子との關係は了解してゐるのに違ひないのだ。了解して一人ぼつちで苦しめるだけ苦しんでゐるに違ひないのだ。それにも係はらずその善良な心から何處までも葉子の言葉に信用を置いて、何時かは自分の誠意が葉子の心に徹するのを、あり得べき事のやうに思つて、苦しい一日々々を暮してゐるのに違ひない。而して又落ち込もうとする窮境の中から血の出るやうな金を缺かさずに送つてよこす。それを思ふと、古藤が云ふやうにその金が葉子の手を焼かないのは不思議と云つていゝ程だつた。尤も葉子であつて見れば、木村に醜いエゴイズムを見出さない程暢氣ではなかつた。木村が何處までも葉子の言葉を信用してかゝつてゐる點にも、血の出るやうな金を送つてよこ

す點にも、葉子が倉地に對して持つてゐるよりは、もつと冷靜な功利的な打算が行はれてゐると決める事が出来る程木村の心の裏を察してゐないではなかつた。葉子の倉地に對する心持から考へると木村の葉子に對する心持にはまだ隙があると葉子は思つた。葉子が若し木村であつたら、どうしておめ／＼米國三界にゐ續けて、遠くから葉子の心を籲へす手段を講ずるやうな暢氣な眞似がして済ましてゐられよう。葉子が木村の立場にゐたら、事業を捨てても、乞食になつても、すぐ米國から歸つて來ないぢやゐられない筈だ。米國から葉子と一緒に日本に引き返した岡の心の方がどれだけ素直で誠しやかだか知れやしない。そこには生活と云ふ問題もある。事業といふ事もある。岡は生活に對して懸念などする必要はないし、事業と云ふやうなものではんで持つてはゐない。木村とは何んと云つても立場が違つてはゐる。と云つた所で、木村の持つ生活問題なり事業なりが、葉子と一緒になつてから後の事を顧慮してされてゐる事だとして見ても、そんな氣持である木村には、何んと云つても餘裕があり過ぎると思はないではゐられない物足りなさがあつた。縱し眞實になる程、職業から離れて無一文になつてゐて

が重くかぶさつて来て、腹部の鈍痛が鉛の大きな球のやうに腰を虐げた。それは二重に葉子をいら／＼させた。

「あなた方は一體何をそんなに云ひ合つていらつしやるの」

もうそこには葉子はタクトを用ゐる餘裕さへ持つてゐなかつた。始終腹の底に冷靜さを失はないで、あらん限りの表情を勝手に操縦してどんな難關でも、葉子に特有な仕方できり開いて行くそんな餘裕はその場には逆も出て來なかつた。

「何をと云つてこの古藤と云ふ青年は餘り禮儀を辨へんからよ。木村さんの親友々々」と二言目には鼻にかけたやうな事を云はるゝが、他しむ他しで木村さんからは頼まれとんだから、一人よがりの事は云うて貰はんでもがいのだ。それをつべこべ碌々あなたの世話も見ずにおきながら、云ひ立てなさるので、筋が違つてゐようと云つて聞かせて上げた所だ。古藤さん、あなた失禮だが一體いくつです」

葉子に云つて聞かせるでもなくさう云つて、倉地は又古藤の方に向き直つた。古藤はこの侮辱に對して口答への言葉も出ないやうに激昂して黙つてゐた。

「答へるが恥しければ強ひても聞くまい。が、いづれ二十は過ぎてゐられるのだらう。二十過ぎた男があなたのやうに禮儀を辨へず他人の生活の内輪にまで立ち入つて物を云ふは馬鹿の證據ですよ。男が物を云ふなら考へてから云ふがよい」

さう云つて倉地は言葉の激昂してゐる割合に、又見かけのいかにも威丈高な割合に、十分の餘裕を見せて、空嘯くやうに打水をした庭の方を見ながら團扇をつかつた。

古藤は暫らく黙つてゐてから後ろを振り仰いで葉子を見やりつゝ、

「葉子さん……まあ、す、坐つて下さい」

と少しもるやうに強ひて穩やかに云つた。葉子はそれ始めて、我れにもなくそれまでそこに突立つたまゝぼんやりしてゐたのを知つて、自分に背でないやうなとんきよな事をしてゐたのに氣が附いた。而して自分ながらこの頃は本當に變だと思ひながら、二人の間に、出来るだけ氣を落ち着けて座についた。古藤の顔を見るとやゝ青ざめて、額額の所に太い筋を立ててゐた。葉子はその時分になつて始めて少しづつ自分を恢復してゐた。

「古藤さん、倉地さんは少しお酒を召上つた所

だからこんな時むづかしいお話をなさるのはよくありませんでしたわ。何んですか知りませんけれども今夜はもうそのお話は綺麗にやめませう。如何？……又ゆつくりね……あ、愛さん、あなたのお二階に行つて縫ひかけを人急ぎで仕上げて置いて頂戴姉さんがあらかたしてしまつてあるけれども……」

さう云つて先刻から逐一二人の眞論を聴いてゐたらしい愛子を階上に追ひ上げた。暫らくして古藤はやうやく落ち着いて自分の言葉を見出だしたやうに、

「倉地さんに物を云つたのは僕が間違つてゐたかも知れません。ちや倉地さんを前に置いてあなたに云はして下さい。お世辭でも何んでもなく、僕は始めからあなたには倉地さんなんかに無ゐる誠實な所が、何處かに隠れてゐるやうに思つてゐたんです。僕の云ふ事をその誠實な所で判斷して下さい」

「まあ今日はもういゝちやありませんか、ね。私、あなたの仰しやらうとする事はよく分つてゐますわ。私決して仇やおろそかには思つてゐません本當に。私だつて考へてはゐますわ。その中、つくり私の方から何つていたとき度いと思つてゐた位ですからそれまで……」

どうしても何時かの過去にそのまゝ起つた事のやうに思はれてならない事がよくあつた。貞世の姿は貞世ではなかつた。苔香園は苔香園ではなかつた。美人屋敷は美人屋敷ではなかつた。

周囲だけが妙にもや／＼して心の方だけが澄み切つた水のやうにはつきりしたその頭の中には、貞世のとも、幼い時の自分のとも區別のつかない果敢なき悲しさがこみ上げるやうに湧いてゐた。葉子は暫らくは針の運びも忘れてしまつて、電燈の光を背に負つて夕闇に埋れて行く木立に眺め入つた貞世の姿を、恐ろしさを感ずるまでになりながら見続けた。

「貞ちゃん」

とう／＼黙つてゐるのが無氣味になつて葉子は沈黙を破りたいばかりにかう呼んで見た。貞世は返事一つしなかつた。葉子はぞつとした。貞世はあゝしたまゝで通り魔にでも魅かれて死んでゐるのではないか。それとももう一度名前を呼んだら、線香の上に溜つた灰が少しの風で崩れ落ちるやうに、聲の響きではろ／＼とかき消すやうにあのいたいけな姿は失くなつてしまふのではないだらうか。而してその後には夕闇に包まれた苔香園の木立と、二階の縁側と、小さな机だけが残るのではないだらうか……

普段の葉子ならば何んといふ馬鹿だらうと思ふやうな事をおど／＼しながら眞面目に考へてゐた。

その時階下で倉地のひどく激昂した聲が聞こえた。葉子ははつとして長い悪夢からでも覺めたやうに我れに歸つた。そこにあるのは姿は元のまゝだが、矢張りまがふ方なき貞世だつた。葉子は慌てて何時の間にか膝からずり落ちてあつた白布を取り上げて、階下の方にきつと聞き耳を立てた。事態は重大事らしかつた。

「貞ちゃん。貞ちゃん。」

葉子はさう云ひながら立ち上つて行つて、貞世を後ろから羽がひに抱きしめてやらうとした。然しその瞬間に自分の胸の中に自然に出来上らしてゐた結願を思ひ出して、心を鬼にしたがら、

「貞ちゃんと言つたらお返事をなさいな。何んの事ですす勘ねたまねをして。臺所に行つてあのすゝぎ返しでもしてお出で、勉強もしないでぼんやりばかりしてゐると毒ですよ」

「だつてお姉様私苦しいんですもの」

「嘘をお云ひ。この頃はあなた本當にいけないつた事。我儘ばかりしてゐると姉さんは聴きませんよ」

貞世は淋しさうな恨めしさうな顔を眞赤にし葉子の方を振り向いた。それを見ただけで葉子はすつかり打ち摧かれてゐた。水月のあたりをすつと氷の櫛でも通るやうな心持がすると、喉の所はもう泣きかけてゐた。何んといふ心に自分とはなつてしまつたのだらう……葉子はその上その場にはゐたゝまれないで、急いで階下の方へ降りて行つた。

倉地の聲に交じつて古藤の聲も激して聞こえた。

四十一

階下段の上り口には愛子が姉を呼びに行かうか行くまいかと思案するらしく立つてゐた。そこを通り抜けて自分の部屋に来て見ると、胸をあらはに襟を潤けて、セルの兩袖を高々とまくり上げた倉地が、胡坐をかいたまゝ、電燈の灯の下に熟柿のやうに赤くなつて、こつちを向いて威丈高になつてゐた。古藤は軍服の膝をきちんと折つて眞直に固く坐つて、葉子には後ろを向けてゐた。それを見るときや葉子の神経はびり／＼と逆立つて自分ながら何うしやうもない程荒れすさんで來てゐた。何んかもういやだ。どうしても勝手になるがよい、するとすぐ頭

しながら古藤を見やつて、又知らぬ顔に庭の方を向いてしまつた。

「そりやさうだ。馬鹿にされる僕は馬鹿だらう。然しあなたには……あなたには僕等が持つてる良心といふものがないんだ。それだけは馬鹿でも僕には判る。あなたが馬鹿と云はれるのと、僕が自分を馬鹿と思つてゐるそれとは、意味が違ひますよ」

「その通り、あなたは馬鹿だと思ひながら、何處か心の隅で『何馬鹿なものか』と思ひよるし、私はあなたを嘘本なしに馬鹿と云ふだけの相違があるよ」

「あなたは氣の毒な人です」

古藤の眼には怒りと云ふよりも、或る激しい感情の涙が薄く宿つてゐた。古藤の心の中の一番奥深い所が汚されないまゝで、ふと眼から覗き出したかと思はれる程、その涙をためた眼は一種の力と清さを持つてゐた。さすがの倉地もその一言には言葉は返す事なく、不思議さうに古藤の顔を見た。葉子も思はず一種改まつた気分になつた。そこにはこれまで見慣れてゐた古藤はゐなくなつて、その代りに胡魔化しの利かない強い力を持つた一人の純潔な青年がひよつこり現はれ出たやうに見えた。何を云ふか、

又いつものやうなあり来りの道徳論を振り廻すと思ひながら、一種の輕侮を以て黙つて聞いてゐた葉子は、この一言で、謂はば古藤を實際に思ひ存分押し附けてゐた倉地が手もなく彈き返されたのを見た。言葉の上や仕打ちの上やで如何に高壓的に出て見ても、どうする事も出来ないうやうな眞實さが古藤から溢れ出てゐた。それに刃向ふには眞實で刃向ふ外はない。倉地はそれを持ち合はしてゐるか何うか葉子には想像がつかなかつた。その場合倉地は暫らく古藤の顔を不思議さうに見やつた後、平氣な顔をして膝から林を取り上げて、飲み残して冷えた酒を、れかくいのやうに煽りつけた。葉子はこの時古藤とこんな調子で向ひ合つてゐるのが恐ろしくつてならなくなつた。古藤の眼の前でひよつとすると今まで築いて來た生活が崩れてしまひさうな危惧をさへ感じた。で、そのまゝ黙つて倉地の眞似をするやうだが、平氣を装ひつゝ煙管を取り上げた。その場の仕打ちとしては拙いやり方であるのを齒痒くは思ひながら、古藤は暫らく言葉を途切らしてゐたが、又改めて葉子の方に話しかけた。

「さう改まらないで下さい。その代り思つただけの事をいゝ加減にしておかに話しかけて

見て下さい。いゝですか。あなたと倉地さんとのこれまでの生活は、僕見たいな無経験なものにも、疑問として片付けておく事の出来ないやうな事實を感じさせるんです。それに對するあなたの辯解は詭辯とより僕には響かなくなりました。僕の鈍い直覺ですらさう考へるのです。だからこの際あなたと木村との關係を明らかにして、あなたから木村に偽りのない告白をして頂きたいんです。木村が一人で生活に苦しみながら響へやうのない疑惑の中に藻掻いてゐるのを少しでも想像して見たら……今のあなたにはそれを要求するのは無理かも知れないけれども……第一こんな不安定な状態からあなたは愛子さんと貞世さんを救ふ義務があると思ひますよ僕は。あなただけに限られずに、四方八方の人の心に響くといふのは恐ろしい事だと本當にあなたには思へませんかねえ。僕には側で見てゐるだけでも恐ろしいがなあ。人にはいつか總勘定をしなければならぬ時が来るんだ。いくら借りになつてゐてもびくともしないと云ふ自信もなくつて、ずる／＼つたりに無反省に借りばかり作つてゐるのは考へて見るに不安ぢやないでせうか。葉子さん、あなたには美しい誠實があるんだ。僕はそれを知つて

「今日聞いて下さい。軍隊生活をしてゐると三人でかうしてお話する機会はずうありさうにはありません。もう歸營の時間が逼つてゐますから、長くお話は出来ないけれども……それだから我慢して聞いて下さい」

それなら何んでも勝手に云つて見るがよい、仕儀によつては黙つてはゐないからといふ腹を、かすかに皮肉に開いた唇に見せて葉子は古藤に耳を假す態度を見せた。倉地は知らん振りをして庭の方を見續けてゐた。古藤は倉地を全く度外視したやうに葉子の方に向き直つて、葉子の眼に自分の眼を定めた。率直な明らかなその眼にはその場合にすら子供じみた羞恥の色を湛へてゐた。例の如く古藤は胸の金釦をはめたり外づしたりしながら、

「僕は今まで自分の因循からあなたに對しても木村に對しても本當に友情らしい友情を現はさなかつたのを取かしく思ひます。僕は疾うにもつと何うかしなければいけなかつたんですけれども……木村、木村つて木村の事ばかり云ふやうですけれども、木村の事を云ふのはあなたの事を云ふのも同じだと僕は思ふんですが、あなたは今でも木村と結婚する氣が確かに有るんですか無いんですか、倉地さんの前でそれを

はつきり僕に聞かせて下さい。何事もそこから出發して行かなければこの話は畢竟まけりばかり廻る事になりますから。僕はあなたが木村と結婚する氣はないと云はれても決してそれをどうと云ふんぢやありません。木村は氣の毒です。あの男は表面はあんなに樂天的に見えてゐて、意志が強さうだけれども、随分派つぱい方だから、その失望は思ひやられます。けれどもそれだつて仕方がない。第一始めから無理だつたから……あなたのお話のやうなら……。然し事情が事情だつたとは云へ、あなたは何故いやなやいと……そんな過去を云つた所が始まらないからやめませう。……葉子さん、あなたは本當に自分を考へて見て、何處か間違つてゐると思つた事はありませんか。誤解しては困りますよ、僕はあなたが間違つてゐると云ふ積りぢやないんですから。他人の事を他人が判斷する事なんかは出来ない事だけれども、僕はあなたが何處か不自然に見えていけないんです。よく世の中では人生の事はさう單純に行くもんぢやないと云ひますが、而してあなたの生活なんぞを見てゐると、それは極く外面的に見てゐるからさう見えるのかも知れないけれども、實際随分複雑らしく思はれますが、さうあるべき事

なんでせうか。もつと／＼ clear に sun-clear に自分の力だけの事、徳だけの事をして暮せさうなものだと僕自身は思ふんですがね……僕にもさうでなくなる時代が来るかも知らないけれども、今の僕としてはさうより考へられないんです。一時は混雜も來、不和も來、喧嘩も來るかは知れないが、結局はさうするより仕方がないと思ひますよ。あなたの事についても僕は前からさういふ風にはつきり片付けてしまひたいとは思つてゐたんですけれど、姑息な心からそれまでに行かずとも、いゝ結果が生れて來はしないかと思つたりして今日までどつちつかずで過ごして來たんです。然しもうこの以上僕には我慢が出来なくなりました。

「倉地さんとあなたと結婚なさるならなさるで木村も斷念めるより外に道はありません。木村に取つては苦しい事だらうが、僕から考へるとどつち附かずで煩悶してゐるのよりどれだけいかに分ります。だから倉地さんに意向を伺はうとすれば、倉地さんは頭から僕を馬鹿にして話を親身に受けては下さらないんです」

「馬鹿にされる方が悪いのよ」

倉地は庭の方から顔を返して、「どこまで馬鹿に出来上つた男だらう」といふやうに苦笑ひを

に向ひ合つて立つた。愛子はいつでもさうなやうにこんな場合でもいかにも冷静だった。普通ならはその年頃の少女としては、造り所もない羞恥を感じる筈であるのに、愛子は少し眼を伏せてゐる外にはしらへくとしてゐた。きやつきやつと嬉しがつたり恥かしがつたりする貞世はその夜はどうしたものかたゞ物愛げにそこにいよんぼりと立つた。その夜の二人は妙に無感情な一對の美しい踊り手だった。葉子が「二三」と合圖をすると、二人は兩手を腰背の所に置き添へて靜かに回旋しながら舞ひ始めた。兵營の中ばかりにゐて美しいものを全く見なかつたらしい古藤は、暫らくは何事も忘れたやうに恍惚として二人の描く曲線のさまへに見とれてゐた。

と、突然貞世が兩袖を顔にあてたと思ふと、急に舞の輪から外れて、一散に玄關側の六疊に駆け込んだ。六疊に達しない中に痛ましく嘔り泣く聲が聞こえ出した。古藤ははつと慌ててそつちに行かうとしたが、愛子が一人になつても、顔色も動かさずに踊り續けてゐるのを見るとそのまゝ立ち止つた。愛子は自分の仕達すべき務めを仕達せる事に心を集める様子で舞ひついでた。

「愛さん一寸お待ち」と云つた葉子の聲は低いながら帛を裂くやうに細解らしい調子になつてゐた。別室に妹の駆け込んだのを見向きもしない愛子の不人情さを憤る怒りと、命ぜられた事を中途半端でやめてしまつた貞世を憤る怒りとで葉子は自制が出来ない程慄へてゐた。愛子は靜かにそこに兩手を腰から降ろして立ち止つた。

「貞ちゃん何んですその失禮は。出ておいでなさい」

葉子は激しく隣室に向つてかう叫んだ。隣室から貞世のすゝり泣く聲が哀れにもまざ／＼と聞こえて來るだけだった。抱きしめても／＼飽き足らない程の愛着をそのまゝ裏返したやうな憎しみが、葉子の心を火のやうにした。葉子は愛子に嚴しく云ひつけて貞世を六疊から呼び返さした。

やがてその六疊から出て來た愛子は、さすがに不安な面持ちをしてゐた。苦しくつて堪らないと云ふから顔に手をあてて見たら火のやうに熱いと云ふのだ。

葉子は思はずきよとした。生れ落ちるとか病氣一つせずに育つて來た貞世は前から發熱してゐたのを自分で知らずにゐたに違ひない。

氣むづかしくなつてから一週間位になるから、何かの熱病にかゝつたとすれば病氣は可なり進んでゐる筈だ。ひよつとすると貞世はもう死ぬ……それを葉子は直覺したやうに思つた。眼の前で世界が急に暗くなつた。電燈の光も見えない程に頭の中が暗い渦巻きで一杯になつた。えゝ、一層の事死んでくれ。この血祭りで倉地が自分にはつきり繋がれてしまはないと誰れが云へよう。人身御供にしてしまはう。さう葉子は恐怖の絶頂にありながら妙にしんとした心持で思ひめぐらした。而してそこにぼんやりしたまゝ、突つ立つてゐた。

いつの間に行つたのか、倉地と古藤とが六疊の間から首を出した。

「お葉さん……ありや泣いた爲めばかりの熱ぢやない。早く來て御覽」

倉地の慌てるやうな聲が聞こえた。

それを聞くと葉子は始めて事の真相が分つたやうに、夢から眼覺めたやうに、急に頭がはつきりして六疊の間に走り込んだ。貞世は一際谷丈けが縮まつたやうに小さく丸まつて、座蒲團に顔を埋めてゐた。膝をついて側によつて後頭の所を觸つて見ると、氣味の悪い程の熱が葉子の手に傳はつて來た。

あます。木村にだけは何うした譯か別だけれども、あなたはびた一文でも借りをしてゐると思ふと寝心地が悪いと云ふやうな氣性を持つてゐるぢやありませんか。それに心の借金なら幾ら借金をしてゐても平氣でゐられる譯はないと思ひますよ。何故あなたは好んでそれを踏み躪らうとばかりしてゐるんです。そんな情けない事ばかりしてゐては駄目ぢやありませんか。……僕ははつきり思ふ通りを云ひ現はし得ないけれど……云はうとしてゐる事は分つて下さるでせう」

古藤は思ひ入つた風で、脂で汚れた手を幾度も眞黒に目に焼けた眼頭の所を持つて行つた。蚊がぶん／＼と攻めかけて来るのも忘れたやうだつた。葉子は古藤の言葉をもうそれ以上は聞いてゐられなかつた。折角そつとして置いた心のよどみが掻きまはされて、見まいとしてゐた穢いものがぬら／＼と眼の前に浮き出て来るやうでもあつた。塗りつぶし／＼してゐた心の壁に罅が入つて、そこから面も向けられない白い光がちらと射すやうにも思つた。もう然しそれは凡て餘り遅い。葉子はそんな物を無視してかゝる外に道がないと思つた。胡魔化してはいけな

いと古藤の云つた言葉はその瞬間にもすぐ葉子にきびしく應へたけれども、葉子は押し切つてそんな言葉をかなぐり捨てないではゐられないと自分から諦めた。

「よく分りました。あなたの仰しやる事は何時でも私にはよく判りますわ。その中私屹度木村の方に手紙を出すから安心して下さいまし。この頃はあなたの方が木村以上に神経質になつていらつしやるやうだけれども、御親切はよく私にも分りますわ。倉地さんだつてあなたのお心持は通じてゐるに違ひないんですけれども、あなたが……何んと云つたらいいでせうねえ……あなたがあんまり眞正面から仰しやるもんだから、つい向つ腹をお立てなすつたんでせう。さうでせう、ね、倉地さん。……こないやなお話はこれだけにして友達でも呼んで面白いお話でもしませう」

「僕がもつと偉いと、云ふ事がもつと深く皆さんの心に這入るんですが、僕の云ふ事は本當の事だと思ふんだけれども仕方がありません。それぢや屹度木村に書いてやつて下さい。僕自身は何も物敷寄らしくその内容を知りたいとは思つて譯ぢやないんですから……」

古藤がまだ何か云はうとしてゐる時に愛子が整頓風呂敷の出来上つたのを持って、二階から

降りて來た。古藤は愛子からそれを受取ると思ひ出したやうに憐れてて叫びを見た。葉子にはそれには頓着しないやうに、

「愛さんあれを古藤さんにお目に懸けよう。古藤さん一寸待つていらしつてね。今面白いものをお目に懸けるから。貞ちゃんとは二階……ゐないの？ 何處に行つたんだらう……貞ちゃん！」

かう云つて葉子が呼ぶと臺所の方から貞世が打ち沈んだ顔をして泣いた後のやうに頬を赤くして這入つて來た。矢張り自分の云つた言葉に従つて一人ぼつちで臺所に行つてすゝぎ物をしてゐたのかと思ふと、葉子はもう胸が過つて眼の中が熱くなるのだつた。

「さあ二人でこの間學校で習つて來たダンスをして古藤さんと倉地さんとお目にお懸け一寸コテイロンのやうで又變つてゐますの。さ」

二人は十疊の座敷の方に立つて行つた。倉地はこれをきつかけにからつと快活になつて、今までの事は忘れたやうに、古藤にも微笑を與へながら、「それは面白からう」と云ひつゝ後に續いた。愛子の姿を見ると古藤も釣り込まれる風に見えた。葉子は決してそれを見送さなかつた。

可憐な姿をした姉と妹とは十疊の電燈の下

と葉子は貞世の寢臺の傍にゐて、熱の爲めに肩がかきくになつて、半分眼を開けたまゝ昏睡してゐるその小さな顔を見詰めてゐる時でも、思はずかつとなつてそこを飛び出さうとするやうな衝動に驅り立てられるのだつた。

然し又短く感じられる方の期間にはたゞ貞世ばかりがゐた。末子として両親から嘗める程溺愛もされ、葉子の唯一の寵兒ともされ、健康で、快活で、無邪氣で、我儘で、病氣といふ事などはつひぞ知らなかつたその子は、引き續いて父を失ひ、母を失ひ、葉子の病的な呪詛の犠牲となり、突然死病に取りつかれて、夢にも現にも思ひもかけなかつた死と向ひ合つて、ひたすらに恐れをのゝいてゐる、その姿は、千丈の谷底に續く峴の際に兩手だけで垂れ下つた人が、その土がぼろ／＼と崩れ落ちる度毎に、懸命になつて助けを求めて泣き叫びながら、少しでも手がかりのある物に獅噛み附かうとするのを見るのと異ならなかつた。而かもそんなはめに貞世を陥れてしまつたのは結局自分に責任の大部分があると思ふと、葉子はいとしさ悲しさで胸も腸も裂けるやうになつた。貞世が死ぬにしても、せめては自分だけは貞世を愛し抜いて死なせたかつた。貞世を假りにいぢめ

るとは……まるで天使のやうな心で自分を信じ切り愛し抜いてくれてゐた貞世を假りにも没義道に取扱つたとは……葉子は自分ながら自分の心の持たさ恐ろしさに悔いても／＼及ばない悔いを感じた。そこまで詮じつめて來ると、葉子には倉地もなかつた。唯、命にかけて貞世を病氣から救つて、貞世が元通りにつやつやしい健康に歸つた時、貞世を大事に／＼自分の胸にかき抱いてやつて、

「貞ちゃんお前はよくこそ治つてくれたね。姉さんを恨まないでおくれ。姉さんはもう今までの事を皆んな後悔して、これからはあなたをいつまでも／＼後生大事にしてあげますからね」としみ／＼と泣きながら云つてやりたかつた。たゞそれだけの願ひに固まつてしまつた。さうした心持になつてゐると、時間は唯々矢のやうに飛んで過ぎた。死の方へ貞世を連れて行く時は唯々矢のやうに飛んで過ぎると思へた。この奇怪な心の葛藤に加へて、葉子の健康はこの十日程の激しい興奮と活動とでみじめにも害ひ傷つけられてゐるらしかつた。緊張の極點にゐるやうな今の葉子には左程と思はれないやうにもあつたが、貞世が死ぬか治るかして一と息つく時が來たら、何うして肉體を支へる事

が出來ようかと危まないではゐられない豫感が厳しく葉子を襲ふ。瞬間は幾度もあつた。

さうした苦しみの最中に珍らしく倉地が來て來たのだつた。丁度何もかも忘れて貞世の事ばかり氣にしてゐた葉子は、この案内を聞くと、まるで生れ代つたやうにその心は倉地で一杯になつてしまつた。

病室の中から叫びに叫ぶ貞世の聲が廊下まで響いて聞こえたけれども、葉子はそれには顧着してゐられない程無氣になつて看護婦の後を追つた。歩きながら衣紋を整へて、例の左手を舉げて鬘の毛を器用にかけ上げながら、應接室の所まで來ると、そこはさすがに幾分か明るくなつてゐて、開き戸の側の硝子窓の向うに嚴やかな倉地と、思ひもかけず岡の華車な姿とが眺められた。

葉子は看護婦のゐるのも岡のゐるのも忘れたやうにいきなり倉地に近づいて、その胸に自分の顔を埋めてしまつた。何よりもかによりも長い／＼間違ひ得ずゐた倉地の胸は、寒限りもない聯想に飾られて、凡ての疑惑や不快を一掃するに足る程なつかしかつた。倉地の胸からは觸れ慣れた衣ざはりとは、強烈な膚の匂ひとが、葉子の病的に高じた感覺を亂靡さす程に傳はつ

その瞬間に葉子の心はでんぐり返しを打つた。いとしい貞世につらく當つたら、而して若し貞世がその爲めに命を落すやうな事でもあつたら、倉地を大丈夫握む事が出来る、と何がなしに思ひ込んで、而かもそれを實行した迷信とも妄想とも例へやうのない、狂氣染みた精願が何んの苦もなくばら／＼に崩れてしまつて、その跡にはどうかして貞世を活かしたいといふ素直な涙ぐましい願ひばかりがしみ／＼と働いてゐた。自分の愛するものが死ぬか活きるかの境目に來たと思ふと、生への執着と死への恐怖とが、今まで想像も及ばなかつた強さでひしひしと感ぜられた。自分を八つ裂きにしても貞世の命は取りとめなくてはならぬ。若し貞世が死ねばそれは自分が殺したんだ。何も知らない、神のやうな少女を……葉子はあらぬことまで勝手に想像して勝手に苦しむ自分をたしなめる積りでゐても、それ以上に種々な豫想が激しく頭の中で働いた。

葉子は貞世の背を擦りながら、嘆願するやうに哀想を乞ふやうに古藤や倉地や愛子までを見まはした。それらの人々は何れも心痛げな顔色を見せてゐないではなかつた。然し葉子から見るとそれは皆んな廢物だつた。

やがて古藤は兵營への歸途醫者を頼むといつて歸つて行つた。葉子は、一人でも、どんな人でも貞世の身近から離れて行くのをにつらく思つた。そんな人達は多少でも貞世の生命と一緒に持つて行つてしまふやうに思はれてならなかつた。

日はとつぱり暮れてしまつたけれども何處の戸締りもしないこの家に、古藤がゐつてよこした醫者がやつて來た。而して貞世は明らかに陽チブスに罹つてゐると診斷されてしまつた。

四十二

「お姉様……行つちやいやあ……」

まるで四つか五つの幼児のやうに頑是なく我儘になつてしまつた貞世の聲を聞き残しながら葉子は病室を出た。折りからじめ／＼と降りつづいてゐる五月雨に、廊下には夜明けからの薄暗さがそのまゝ残つてゐた。白衣を着た看護婦が暗いだつ廣い廊下を、上草履の大きな音をさせながら案内に立つた。十日の餘も、夜晝の見界もなく、帶も解かず、看護の手を盡した葉子は、どうかするところ／＼となつて、頭だけが五體から離れて何處ともなく漂つて行くかとも思ふやうな不思議な錯覺を感じながら、そ

れでも緊張し切つた心持になつてゐた。凡ての音響、凡ての色彩が極度に誇張されてその感覺に觸れて來た。貞世が陽チブスと診斷されたその晩、葉子は担架に乗せられたその憐れな小さな妹に附添つてこの大學病院の隔離室に來てしまつたのであるが、その時別れたなりで、倉地は一度も病院を尋ねては來なかつたのだ。葉子は愛子一人が留守する山内の家の方に、少し不安心ではあるけれどもいつか暇をやつたつやを呼び寄せておからと思つて、宿計にぶつてやると、つやはあれから看護婦を志願して京橋の方の或る病院にゐるといふ事が知れたので、已むを得ず倉地の下宿から年を取つた女中を一人頼んでゐて貰ふ事にした。病院に來てからの十日——それは昨日から今日にかけての事のやうに短く思はれもし、一日が一年に相當するかと疑はれる程永くも感じられた。

その長く感じられる方の期間には、倉地と愛子との姿が不安と嫉妬との対象となつて葉子の心の眼に立ち現はれた。葉子の家を預かつてゐるものは倉地の下宿から來た女だとすると、それは倉地の犬と云つてもよかつた。そこに一人残された愛子……長い時間の間にどんな事でも起り得ずゐるものか。さう氣を廻し出す

下さつたのですよ。はつきり分りますか。それ、そこを御覽。横になつてから」さう云ひ、葉子は如何にも愛情に満ちた器用な手つきで、輕く貞世を抱へて床の上に臥かしつけた。貞世の顔は今まで盛んな運動でもしてゐたやうに美しく、活々と紅味をさして、房々した髪の毛は少しもつれて汗ばんで額際に粘りついてゐた。それは病氣を思はせるよりも過剰の健康とでも云ふべきものを思はせた。唯、その兩眼と唇だけは明らかに尋常でなかつた。すつかり充血したその眼は普段よりも大きく、二重瞼になつてゐた。その眸は熱の爲めに燃えて、おどろと何者かを見詰めてゐるやうにも、何かを見出さうとして尋ねあぐんでゐるやうにも見えた。その様子は例へば葉子を見入つてゐる時でも、葉子を買いて葉子の後ろの方遙かの所にある或る者を見極めようと有らん限りの力を盡してゐるやうだつた。唇は上下ともからばらになつて、内紫といふ柑類の實をむいて、天日に干したやうに乾いてゐた。それは見るもいたゞしかつた。その唇の中から高熱の爲めに一種の臭氣が呼吸の度毎に吐き出される、その臭氣が唇の著しいゆがめ方の爲めに、眼に見えるやうだつた。貞世は葉子に注意されて物

情げに少し眼をそらして、倉地と岡とのゐる方を見たが、それが何うしたんだといふやうに、少しの興味も見せずに、又葉子を見入りながらせつせと肩をゆすつて苦しげな呼吸をつづけた。「お姉さま……水……水……もう行つちやいや……」これだけ幽かにぶふともう苦しさに眼をつぶつてほろ／＼と大粒の涙をこぼすのだった。倉地は陰鬱な雨間、灰色になつたガラス窓を背景にして、突つ立ちながら、黙つたまゝ不安らしく首をかしげた。岡は日頃の減少に泣かない性質に似ず、倉地の後ろにそつと引きそつて涙ぐんでゐた。葉子には後ろを振り向いて見ないでもそれが眼に見るやうにはつきり分つた。貞世の事は自分一人でも背負つて立つ。餘計な憐れみはかけて貰ひたくない。そんないら／＼しい反社会的な心持さへその場合起らずにはゐなかつた。過ぐる十日といふもの一度も見舞ふ事をせずにあて、今更らその由々しげな顔付きは何んだ。さう倉地にでも岡にでも云つてやりたい程、葉子の心は棘々しくなつてゐた。で、葉子は後ろを振り向きもせずに、箸の先きにつけた脱脂綿を氷水の中に浸しては、貞世の口を拭つてゐた。

かうやつてものの稍々二十分が過ぎた。飾り氣も何もない板張りの病室には段々夕暮の色が催して来た。五月雨はじめ／＼と小休みくなく戸外では降りつゞいてゐた。「お姉様治して頂戴よう」とか「苦しい……苦しいからお藥を下ささい」とか「もう熱を計るのはいや」とか時々囁言のやうにぶつては、葉子の手に嚙り附く貞世の姿は何時も思氣を引取るかも知れないと葉子に思はせた。「ではもう歸りませうか……」倉地が岡を促すやうにかう云つた。岡は倉地に對し葉子に對して少しの間返事を敢てするのを憚つてゐる様子だったが、とう／＼思ひ切つて、倉地に向つて云つてゐながら少し葉子に對して歎願するやうな調子で、「私、今日は何んにも用がありませんから、こちらに残らしていただいて、葉子さんのお手傳ひをしたいと思いますから、お先きにお歸り下さい」と云つた。岡はひどく意志が弱さうに見えながら、一度思ひ入つて云ひ出した事は、とう／＼仕舞せずにはおかない事を、葉子も倉地も今までの經驗から知つてゐた。葉子は結局それを許す外はないと思つた。

て来た。

「どうだ、ちつとはいいか」

「お、この聲だ、この聲だ」葉子はかく思ひながら悲しくなつた。それは長い間闇の中に閉ぢこめられてゐたものが偶然燈の光を見た時に胸を突いて湧き出て来るやうな悲しさだつた。葉子は自分の立場を殊更に憐れに描いて見たい衝動を感じた。

「駄目です。貞世は、可哀さうに死にます」
「馬鹿な……あなたにも似合はん、さう早う落膽する法があるものかい。どれ一つ見舞つてやらう」

さういふしながら倉地は先刻からそこにゐた看護婦の方に振り向いた様子だつた。そこに看護婦も岡もあるといふ事はちやんと知つてゐながら、葉子は誰れもゐないものやうな心持で振舞つてゐたのを思ふと、自分ながらこの頃は心が狂つてゐるのではないかとさへ疑つた。看護婦は倉地と葉子との對話振りで、この美しい婦人の素性を呑み込んだと云ふやうな顔をしてゐた。岡はさすがに憤まじやかに心痛の色を顔に現はして椅子の背に手をかけたまゝ立つてゐた。

「あゝ、岡さんあなたもわざ／＼お見舞下さつ

て難有う御座いました」

葉子は少し挨拶の機会をおくらしと思ひながらもやさしくかう云つた。岡は頬を紅めたまゝ、黙つてうなづいた。

「丁度今見えたもんで御一緒したが、岡さんはこゝでお歸りを願つたがいゝと思ふが、さう云つて倉地は岡の方を見た。何しろ病氣が病氣ですから……」

「私、貞世さんには是非お會ひしたいと思ひますからどうかお許し下さい」

岡は思ひ入つたやうにかう云つて、丁度そこに看護婦が持つて来た二枚の白い上つ張りの中少し古く見える一枚を取つて倉地よりも先きに着始めた。葉子は岡を見るともう一つのたくらみを心の中で案じ出してゐた。岡を出るだけ度度山内の家の方に遊びに行かせてやらう。それは倉地と愛子とが接觸する機会をいくらかでも妨げる結果になるに違ひない。岡と愛子とが互に愛し合ふやうになつたら、なつたとしてもそれは悪い結果といふ事は出来ない。岡は病身ではあるけれども地位もあれば金もある。それは愛子のみならず、自分の將來に取つても役に立つに相違ない。……とさう思ふすぐその下から、どうしても蟲の好かない愛子が、葉子の

意思の下にすつかり繋ぎ附けられてゐるやうな岡を偷んで行くのを見なければならぬのが面倒くも妬ましくもあつた。

葉子は二人の男を案内しながら先きに立つた。暗い長い廊下の奥側に立ち列んだ病室の中から、呼吸困難の中からかすれたやうな聲でデフテリヤらしい幼児の泣き叫ぶのが聞こえたりした。貞世の病室からは一人の看護婦が半ば身を乗り出して、部屋の中に向いて何か云ひながら、頻りとこつちを眺めてゐた。貞世の何か云ひ募る言葉さへが葉子の耳に届いて来た。その瞬間にもう葉子はそこに倉地のある事なども忘れて急ぎ足でその方に走り近づいた。

「そろそろ歸つていらつしやいましたよ」と云ひながら顔を引つ込めた看護婦に續いて、飛び込むやうに病室に這入つて見ると、貞世は亂暴にも影臺の上に起き上つて、膝小僧も露はになる程取り亂した姿で、手を顔にあてたまゝおい／＼と泣いてゐる。葉子は驚いて影臺に近寄つた。

「何んと云ふあなたは聞き譯のない……貞ちゃんその病氣で、あなた、影臺から起き上つたりすると何時までも治りはしませんよ。あなたの好きな倉地の小父さんと岡さんがお見舞に来て

て倉地の後を追つた。そこにある廣場には櫓や櫓の木が疎らに立つてゐて、大規模な増築の爲めの材料が、煉瓦や石や、處々に積み上げてあつた。東京の中央にこんな所があるかと思はれる程物淋しく静かで、街燈の光の届く所だけに白く光つて斜めに雨のそよぐのがほのかに見えるばかりだつた。寒いとも暑いとも更に感じなく過ぎて来た葉子は、雨が襟間に落ちたので初めて寒いと思つた。關東に時々襲つて来る時ならぬ冷え日でその日もあつたらしい。葉子は軽く身震ひしながら、一圖に倉地の後を追つた。稍々十四五間も先きにゐた倉地は聲音を聞きつけたと見えて立ち停つて振り返つた。葉子が追ひ付いた時には、肩はいく加減濡れて、雨の滴が前髪を傳つて額に流れかゝるまでになつてゐた。葉子は幽かな光にすかして、倉地が迷惑さうな顔付きで立つてゐるのを知つた。葉子は我れにもなく倉地が傘を持つ爲めに水平に前げたその腕にすがり付いた。

「先刻のお金はお返しします。義理づくで他人からしていただくんでは胸がつかへますから……」

倉地の腕の所で葉子のすがり付いた手はぶるぶると震へた。傘からは滴りが殊更に繁く落ち

て、單衣をぬけて葉子の肌に滲み通つた。葉子は、熱病、患者が冷たいものに觸れた時のやうな不快な惡寒を感じた。

「お前の神經は全く少しどころかしとるぜ。俺れの事を少しは思つて見てくれてもよからうが……疑ふにもひがむにも程があつていゝ筈だ。俺れはこれまでどんな不貞腐れをした。云へるなら云つて見る」

さすがに倉地も氣にさへてゐるらしく見えた。「云へないやうに上手に不貞腐れをなさるのぢや、云はうつたつて云へやしせんわね。何故あなたはつきり葉子には厭きた、もう用がないとお云ひになれないの。男らしくもない。さ、取つて下さいましこれを」

葉子は紙幣の束をわな／＼する手先で倉地の胸の所に押しつけた。

「而してちゃんとおさんをお呼び戻しなさいまし。それで何もかも元通りになるんだから。憚りながら……」

「愛子は」と口許まで云ひかけて、葉子は恐ろしさに息氣を引いてしまつた。倉地の細君の事まで云つたのはその夜が始めてだつた。これほど露骨な嫉妬の言葉は、男の心を葉子から遠ざからすばかりだと知り抜いて慎んでゐた癖に、葉

子は我れにもなく、がみ／＼と妹の事まで云つて逃げようとする自分に惘れてしまつた。

葉子がそこまで走り出て来たのは、別れる前にもう一度倉地の強い腕でその暖かく廣い胸に抱かれたい爲めだつたのだ。倉地に惡たれ口をきいた瞬間でも葉子の願ひはそこにあつた。それにも拘はらず口の上では全く反對に、倉地を自分からどん／＼離れさせやうな事を云つて退けてゐるのだ。

葉子の言葉が募るにつれて、倉地は人目を憚るやうにあたりを見廻した。互々に殺し合ひたい程の執着を感じながら、それを言ひ現はす事も信ずる事も出来ず、要もない猜疑と不満に遮られて、見る／＼路傍の人のやうに遠ざかつて行かねばならぬ、——そのおそろしい運命を葉子は殊更に痛切に感じた。倉地があたりの見廻した——それだけの舉動が、機を見計つていきなりそこを逃げ出さうとするもののやうにも思ひなされた。葉子は倉地に對する憎惡の心を切ないまでに募らしながら、益々相手の腕に堅く寄り添つた。

暫らくの沈黙の後、倉地はいきなり洋傘をそこにながぐり捨てて、葉子の頭を右腕で巻きすくめようとした。葉子は本能的に激しくそれに

「ぢや俺はお先きするがお葉さん一寸……」と云つて倉地は入口の方にしぎつて行つた。折から貞世はすやうと昏睡に陥つてゐたので、葉子はそつと自分の袖を捕へてゐる貞世の手をほだいて、倉地の後から病室を出た。病室を出るとすぐ葉子はもう貞世を看護してゐる葉子ではなかつた。

葉子はすぐに倉地に引き添つて肩をならべながら廊下を應接室の方へ傳つて行つた。

「お前は随分と疲れとるよ。用心せんといかんぜ」

「大丈夫……こつちは大丈夫です。それにしてもあなたは……お忙しかつたんでせうね」

例へば自分の言葉は綾針で、それを倉地の心臓に探み込むと云ふやうな鋭い語氣になつてさう云つた。

「全く忙しかつた。あれから俺はお前の家には一度もよう行かずにゐるんだ」

さう云つた倉地の返事には如何にもわだかまりがなかつた。葉子の鋭い言葉にも少しも引けめを感じてゐる風は見えなかつた。葉子でさへが危くそれを信じようとする程だつた。然しその瞬間に葉子は燕返しに自分に歸つた。何をいゝか減な……それは白々しさが少し過ぎてゐる。

この十日の間に、倉地に取つてはこの上もない機会を興へられた十日の間に、杉森の中の淋しい家にその足跡の印されなかつた譯があるものか……さらぬだに、病み果て疲れ果てた頭脳に、極度の緊張を加へた葉子は、ぐらぐらとよろけて足許が廊下の板に着いてゐないやうな憤怒に襲はれた。

應接室まで来て上つ張りを脱ぐと、看護婦が噴霧器を持つて来て倉地の身のまはりに消毒薬を振りかけた。その幽かな匂ひがやうやく葉子をはつきりした意識に歸らした。葉子の健康が一日々々と云はず、一時間毎にもどろろ弱つて行くのが身に沁みて知れるにつけて、倉地の何處にも批點のないやうな嚴整な五體にも、心にも、葉子は遣り所のないひがみと憎しみを感ぜた。倉地に取つては葉子は段々と用のないものになつて行きつゝある。絶えず何か眼新らしい冒險を求めてゐるやうな倉地に取つては、葉子は、もう散り際の花に過ぎない。

看護婦がその室を出ると、倉地は窓の所に寄つて行つて、衣囊の中から大きな鰐皮のボツケットブックを取出して、拾間札の可なりの束を引き出した。葉子はそのボツケットブックにも色々の記憶を持つてゐた。竹柴館で一夜を過

ごしたその朝にも、その後の度々のあひびきの後の支拂ひにも、葉子は倉地からそのボツケットブックを受取つて、贅澤な支拂ひを心持よくしたのだつた。而してそんな記憶はもう二度とは繰り返せさうもなく、何んとなく葉子には思へた。そんな事をさせてなるものかと思ひながら、葉子の心は妙に弱くなつてゐた。

「又足らなくなつたらいつでも云つてよすががいゝから……俺れの方の仕事はだうも面白くなつて來をつた。正井の奴何か容易ならぬ悪戯をしをつた様子もあるし、油斷がならん。度々俺れがこゝに來るのも考へ物だて。紙幣を渡しながらかう云つて倉地は應接室を出た。可なり濡れてゐるらしい靴を履いて、雨水で重さうになつた洋傘をばささう云はせながら開いて、倉地は輕い挨拶を残したまゝ夕闇の中に消えて行かうとした。間を置いて道側に點された電燈の灯が、濡れた青葉を送り落ちて泥濘の中に憐のやうな光を漂はしてゐた。その中を段々南門の方に遠ざかつて行く倉地を見送つてゐると葉子は連もそのまゝそこに居残つてはゐられなくなつた。

誰れの履物とも知らずそこにあつた青葉下駄をつつかけて葉子は雨の中を玄關から走り出

抱いてゐる。その愛子が葉子に對して復讐の機命を見出したと此の瞬思ひ定めなかつたと誰れが保證し得よう。そんな事は疾うの昔に行はれてしまつてゐるのかも知れない。若しさうなら、今頃は、このしめやかな夜を……太陽が消えて失くなつたやうな寒さと闇とが葉子の心に被ひかぶさつて來た。愛子一人位を指の間に握りつづす事が出来ないと思つてゐるのか……見てゐるがよい。葉子は苛立ち切つて毒蛇のやうな殺氣立つた心になつた。而して靜かに岡の方を顧みた。

何か遠い方の物でも見つめてゐるやうに少しぼんやりした眼付きで貞世を見守つてゐた岡は、葉子に振り向かれると、その方に素早く眼を轉じたが、その物凄く無氣味さ、脊髄まで震はれた風で、顔色をかへて眼をたじろがした。

「岡さん。私一生のお頼み……これからすぐ山内の家まで行つて下さい。而して不用な荷物は今夜の中に皆んな倉地さんの下宿に送り返してしまつて、私と愛子の普段使ひの着物と道具とを持つて、すぐこゝに引越して来るやうに愛子に云ひつけて下さい。若し倉地さんが家に來てゐたら、私から確かに返しと云つてこれを渡して下さい。(さう云つて葉子は懷紙に拾圓

紙幣の束を包んで渡した)何時までかゝつても構はないから今夜の中にね。お頼みを聞いて下さつて？」

何んでも葉子の云ふ事なら口返答をしない岡だけれどもこの常識を外れた葉子の言葉には當惑して見えた。岡は窓際に行つてカーテンの簾から戸外を透かして見て、ポケットから巧緻な浮彫を施した金時計を取り出して時間を讀んだりした。而して少し躊躇するやうに、

「それは少し無理だと私、思ひますが……あれだけの荷物を片付けるのは……」

「無理だからこそあなたを見込んでお願いするんですわ。さうねえ、入用のない荷物を倉地さんの下宿に届けるのは何かも知れませんかね。ぢや構はないから置手紙を渡やといふのに渡しておいて下さいまし。而して婆やに云ひつけて明日でも倉地さんの所に運ばして下さいまし。

それなら何もいさくさはないでせう。それでもおいや？　いかゞ？　……よう御座います。それぢやもうよう御座います。あなたをこんなに晩くまでお引きとめしておいて、又候面倒なお願ひをしようとするなんて私もうかしてゐましたわ。……貞ちゃん何んでもないのよ。私今岡さんとお話してゐたんですよ。汽車の音でも何

んでもないんだから、心配せずにお休み……どうして貞世はこんなに怖い事ばかり云ふやうになつてしまつたんでせう。夜中などに一人で起きてゐて夢言を聞くとぞーつとする程氣味が悪くなりますのよ。あなたはどうぞもうお引取り下さいまし。私車屋をやりますから……」

「車屋をおやりになる位なら私行きます」

「でもあなたが倉地さんに何んとか思はれなさるやうぢやお氣の毒ですもの」

「私、倉地さんなんぞを憚つて云つてゐるのではありません」

「それはよく分つてゐますわ。でも私はしてはそんな結果も考へて見てからお頼みするんでしたのに……」

かう云ふ押問答の末に岡はとうとう愛子の迎へに行く事になつてしまつた。倉地がその夜は屹度愛子の所にゐるに違ひないと思つた葉子は、病院に泊るものと高をくゝつてゐた岡が突然眞夜中に訪れて來たので倉地もさすがに慌てずにはゐられまい。それだけの狼狽をさせるにしても、快い事だと思つてゐた。葉子は宿直部屋に行つて、しだらなく睡入つた當番の看護婦を呼び起して人力車を頼みました。岡は思ひ入つた様子でそつと貞世の病室を出

逆つた。而して紙幣の束を泥濘の中に敲きつけた。而して二人は野獸のやうに争つた。

「勝手にせいで：馬鹿つ」

やがてさう激しく云ひ捨てると思ふと、倉地は腕の方を急にゆるめて、洋傘を拾ひ上げるなり、後をも向かずに南門の方に向いてずん／＼と歩き出した。憤怒と嫉妬とに興奮し切つた葉子は躍起となつてその後を追はうとしたが、脚は痺れたやうに動かなかつた。唯々段々遠ざかつて行く後姿に對して、熱い涙が留度なく流れ落ちるばかりだつた。

しめやかな音を立てて雨は降りつゞけてゐた。隔離病室の有る限りの窓にはかん／＼と灯が點つて、白いカーテンが引いてあつた。陰惨な病室にさう赤々と灯の點つてゐるのは却つてあたりを物すさまじくして見せた。

葉子は紙幣の束を拾ひ上げる外、術のないので知つて、しを／＼とそれを拾ひ上げた。貞世の入院料は何んと云つてもそれで仕拂ふより仕様がなかつたから。言ひやうのない口惜涙が更に湧き返つた。

四十三

その夜遅くまで岡は本當に忠實やかに貞世の

病床に附添つて世話をしてくれた。口少ないし、やかによく氣をつけて、貞世の欲する事を、確め知り抜いてゐるやうな岡の看護振りは、通里一片な看護婦の働き振りととは丸で較べものにならなかつた。葉子は看護婦を早く寝かししてしまつて、岡と二人だけで夜の更けるまで氷糞を取りかへたり、熱を計つたりした。

高熱の爲めに貞世の意識は段々不明瞭になつて來てゐた。退院して家に歸りたいとせがんで仕やうのない時は、そつと向きをかへて臥かしてから、「さあもうお家ですよ」と云ふと、嬉しさうに笑顔を漏らしたりした。それを見なければならぬ葉子は堪らなかつた。どうかした拍子に、葉子は飛び上りさうに心が責められた。これで貞世が死んでしまつたなら、どうして生き永へてゐられよう。貞世をこんな苦しみ、陥れたものは皆んな自分だ。自分が前通りに貞世に優しくさへしてゐたら、こんな死病は夢にも

貞世を襲つて來はしなかつたのだ。人の心の恨いは恐ろしい：さう思つて來ると葉子は誰れに詫ひやうもない苦惱に息氣づまつた。緑色の風呂敷で包んだ電燈の下に、氷糞を幾つも頭と腹部とにあてがはれた貞世は、今にも絶え入るかと思はれるやうな荒い息氣づかひで

夢現の間をさまよふらしく、聞きとれない鑒言を時々口走りながら、眠つてゐた。岡は部屋隅の方に傾ましく突つ立つたまゝ、緑色を透して來る電燈の光で殊更ら青白い顔色をして、ちつと貞世を見守つてゐた。葉子は寝臺に近く椅子を寄せて、貞世の顔を覗き込むやうにしながら、貞世の爲めに何かし續けてゐなければ、貞世の病氣が益々重るといふ迷信のやうな心づかひから、要もないのに絶えず氷糞の位置を取りかへてやつたりなどしてゐた。

而して短い夜は段々に更けて行つた。葉子の眼からは絶えず涙がはふり落ちた。倉地と思ひもかけない別れ方をしたその記憶が、たゞ譯もなく葉子を涙ぐました。

と、ふつと葉子は山内の家の有様を想像に浮べた。玄關側の六疊でもあらうか、二階の子供の勉強部屋でもあらうか、この夜更けを下宿から送られた老女が寝入つた後、倉地と愛子とが話し續けてゐるやうな事はないか。あの不思議に心の裏を決して他人に見せた事のない愛子が、倉地を何う思つてゐるかそれは分らない。恐らくは倉地に對しては何んの誘惑も感じてはゐないだらう。然し倉地はあゝ云ふしたたか者だ。愛子は骨に徹する怨恨を葉子に對して

打つた。

若しこの音を聞かなかつたら、葉子は恐ろしさのあまり自分の方から宿直室に駆け込んで行つたかも知れなかつた。葉子はおびえながら耳を欲てた。宿直室の方から看護婦が草履をばた／＼と引きずつて来る音が聞えた。葉子はほつと息をついた。而して慌てるやうに身を動かして、貞世の頭の氷囊の溶け具合を驗べて見たり、振巻きを整へてやつたりした。海の底に一つ沈んでぎらつと光る貝殻のやうに、床の上で影の中に物凄く横はつてゐる鏡を取り上げて懷るに入れた。而して一室々と近づいて来る看護婦の足音に耳を澄ましながら又考へ續けた。

今度は山内の家の有様が宛らまざ／＼と眼に見るやうに想像された。岡が夜更けにそこを訪れた時には倉地が確かにゐたに違ひない。而して毎時の通り一種の粘り強さを以て葉子の言傳てを取次ぐ岡に對して、激しい言葉でその理不盡な狂氣染みた葉子の出来心を罵つたに違ひない。倉地と岡との間には暗々裡に愛子に對する心の争闘が行はれたらう。岡の差出す紙幣の束を怒りに任せて疊の上に敲きつける倉地の威丈高な様子、少女にはあり得ない程の

冷靜さで他人事のやうに二人の間のいきさつを伏眼ながらに見守る愛子の一種毒々しい妖艶さ。さう云ふ姿が宛ら眼の前に浮んで見えた。普段の葉子だつたらその想像は葉子をその場に

ゐるやうに興奮させてゐたであらう。けれども死の恐怖に激しく襲はれた葉子は何んとも云へない嫌惡の情を以ての外にはその場面を想像する事が出来なかつた。何んと言ふ淺ましい人の心だらう。結局は何んかも滅びて行くのに、永遠な灰色の沈黙の中に崩れ込んで仕舞ふのに、目前の食婪に心火の限りを燃やして、餓鬼同様に命を噛み合ふとは何んと云ふ淺ましい心だらう。而かもその醜い争ひの種子を播いた

のは葉子自身なのだ。さう思ふと葉子は自分の心と肉體とが宛ら蛆蟲のやうに汚く見えた。何んの爲めに今まで有つて無いやうな妄執に苦しみ抜いて、それを生命そのもののやうに大事に考へ抜いてゐた事か。それは尤で貞世が始終見てゐるらしい惡夢の一つよりも更に果敢ないものではないか。……かうなると倉地

さへが縁もゆかりもないもののやうに遠く考へられ出した。葉子は凡てのものを空しく憫れたやうな眼を舉げて今更ららしく部屋の中を眺め廻した。何んの飾りもない、修道院の内部

のやうな裸かな室内が却つてすが／＼しく見えた。岡の残した貞世の枕許の花束だけが、而して恐らくは(自分では見えないけれども)これ程の忙がしさの間にも自分を粉飾するのを忘れずにゐる葉子自身がいかにも浮薄な便りないものだつた。葉子はいかに心になると、熱に浮かされながら一歩々々何んの心のわかまりもなく死に近づいて行く貞世の顔が神々しいものにさへ見えた。葉子は祈るやうな詫びるやうな心でしみ／＼と貞世を見入つた。

やがて看護婦が貞世の部屋に這入つて來た。形式一遍のお辭儀を睡さうにして、寢臺の側に近寄ると、無頓着な風に葉子が入れておいた檢温器を出して灯にすかして見てから、胸の氷囊を取りかへにかゝつた。葉子は自分一人の手でそんな事をしてやり度いやうな愛着と神聖さを貞世に感じながら看護婦を手傳つた。

「貞ちゃん……さ、氷囊を取りかへますからね……」

とやさしく云ふと、囁言を云ひ續けてゐながら矢張り貞世はそれまで眠つてゐたらしく、痛々しいまで大きくなつた眼を開いて、まじ／＼と意外な人でも見るやうに葉子を見るのだつた。「お姉様なの……何時歸つて來たの。お母様が

た。出る時に両は持つて来たバラフィン紙に包んである包みを開くと美しい花束だつた。両はそれをそつと貞世の枕許において出て行つた。

暫らくすると、しとくと降る雨の中を、両を乗せた人力車が走り去る音が幽かに聞こえて、やがて遠くに消えてしまつた。看護婦が激しく玄關の戸締りする音が響いて、その後は寂術と夜が更けた。遠くの部屋でデフテリアに罹つてゐる子供の泣く聲が間遠に聞こえる外には、音といふ音が絶え果ててゐた。

葉子は唯々一人徒らに興奮して狂ふやうな自分を見出した。不眠で過ぎた夜が三日も四日も續いてゐるのに拘はらず、睡氣といふものは少しも襲つて来なかつた。重石を垂り下げたやうな腰部の鈍痛ばかりでなく、脚部は抜けるやうにだるく冷え、肩は動かす度毎にめりめり音がするかと思ふ程固く凝り、頭の心は絶間なくぎり／＼と痛んで、そこから遣り所のない悲哀と癪癢とが滾々と湧いて出た。もう鏡は見まいと思ふ程顔はげつそりと肉がこけて、眼の周りの青黒い暈は、さらぬだに大きい眼を殊更にぎら／＼と大きく見せた。鏡を見まいと思ひなばら、葉子は折ある毎に帯の間から懐中鏡を出して自分の顔を見詰めないではゐられ

なかつた。

葉子は貞世の寢息を伺つていつものやうに鏡を取り出した。而して顔を少し電燈の方に振り向けてぢつと自分を映して見た。夥しい毎日の抜毛で額の著しく透いてしまつたのが第一に氣になつた。少し振り仰いで顔を映すと頬のこけたのが左程に目立たないけれども、顎を引いて下俯きになると、口と耳との間には縦に大きな溝のやうな凹みが出来て、下顎骨が目立つていかめしく現はれ出てゐた。長く見詰めてゐる中には段々慣れて来て、自分の意識で強ひて矯正する爲めに、瘦せた顔も左程とは思はれなくなり出すが、ふと鏡に向つた瞬間には、これが葉子々々と人々の眼を飲たした自分かと思ふ程醜かつた。さうして鏡に向つてゐる中に、葉子はその投影を自分以外の或る他人の顔ではないかと疑ひ出した。自分の顔より映る筈がない。それなのにそこに映つてゐるのは確かに誰れか見も知らぬ人の顔だ。苦痛に虐げられ、悪意に歪められ、煩惱の爲めに支離滅裂になつた亡者の顔。葉子は脊筋に一時に水ををあてられたやうになつて、身震ひしながら思はず鏡を手から落した。

金屬の床に觸れる音が雷のやうに響いた。葉

子は慌てて貞世を見やつた。貞世は眞赤に充血して熱の籠つた眼をまんじりと開いて、さも不思議さうに中有を見やつてゐた。

「愛姉さん……遠くでピストルの音がしたやうよ」

はつきりした聲でかう云つたので、葉子が顔を近寄せて何か云はうとすると昏々として多愛もなく又眠りに陥るのだつた。貞世の眠るのと共に、何んとも云へない無氣味な死の脅やしが卒然として葉子を襲つた。部屋の中にはそこ中に死の影が満ち／＼してゐた。眼の前の氷水を入れたコップ一つも次ぎの瞬間にはひとりで倒れて壊れてしまひさうに見えた。物の影になつて薄暗い部分は見ると部屋中に擴がつて、凡てを冷たく暗く包み終るかも疑はれた。死の影は最も濃く貞世の眼と口の周りに集まつてゐた。そこには死が蛆のやうによりによりと蠢めいてゐるのが見えた。それよりも……それよりもその影はそろ／＼と葉子を眼がけて四方の壁から集まり近づくやうと脅めいてゐるのだ。葉子は殆んどその死の姿を見るやうに思つた。頭の中がい／＼と冷えて通つて汗を切つた寒さがぞく／＼と四肢を震はした。

その時宿直室の掛時計が遠くの方で一時を

やに言傳てをしておいて、お入用の荷物だけ造つて持つて來ました。これはお返ししておきま

す。さう云つて衣囊の中から例の紙幣の束を取り出して葉子に渡さうとした。

愛子だけならまだしも、岡までがとう／＼自分を裏切つてしまつた。二人が二人ながら見え透いた虚言をよくもあ／＼しら／＼しく云へたものだ。おほそれた弱蟲共め。葉子は世の中が手ぐすね引いて自分一人を敵に廻してゐるやうに思つた。

「へえ、さうですか。どうも御苦勞さま。

愛さんお前はそこにさうぼんやり立つてゐる爲めにこゝに呼ばれたと思つてゐるの？ 岡さんのその濡れた外套でも取つてお上げなさいな。而して宿直室に行つて看護婦にさう云つてお茶でも持つてお出で。あなたの大事な岡さんがこんなにおそくまで働いて下さつたのに……さあ岡さんどうぞこの椅子に（と云つて自分は立ち上つた）……私が行つて來るわ、愛さんも働いてさぞ疲れたらうから……よござんす、よござんすつたら愛さん……」

自分の後を追はうとする愛子を刺し貫く程睨めつけておいて葉子は部屋を出た。而して火を

かけられたやうにかつと逆上しながら、ほろほろと口惜涙を流して暗い廊下を夢中で宿直室の方へ急いで行つた。

四十四

敵きつけるやうにして倉地に返して仕舞はうとした金は、矢張り手に持つてゐる中に使ひ始めてしまつた。葉子の性癖として何時でも出來るだけ豊かな快い夜裏を送るやうにのみ倒れてゐたので、貞世の病院生活にも、誰れに見せてもひけを取らないだけの事を上達ばかりでもしてゐたかつた。夜具でも調度でも家にあるものの中で一番優れたものを選んで來て見ると、凡ての事までそれにふさはしいものを使はなければならなかつた。葉子が専用の看護婦を二人も頼まなかつたのは不思議なやうだが、どうぶふものか貞世の看護を何處までも自分一人でして退けたかつたのだ。その代り年とつた女を二人傭つて交代に病院に來さして、洗ひ物から食事の事までを賄はした。葉子は連も病院の食事では済ましてゐられなかつた。材料のいい悪いは兎に角、味は兎に角、何よりも穢ならしい感じがして箸もつける氣になれなかつたので、本郷通りにある或る料理屋から日々

入れさせる事にした。こんな噴飯で、費用は知れない所に思ひの外かゝつた。葉子が倉地が持つて來てくれた紙幣の束から仕拂はうとした時は、いづれその中木村から送金があるだらうから、あり次第それから理め合せをして、すぐその儘返さうと思つてゐたのだつた。然し木村からは、六月になつて以來一度も送金の通知は來なかつた。葉子はそれだから猶更の事もう來さうなものだと心待ちをしたのだつた。それがいくら待つても來ないととなつて已むを得ず持ち合はせた分がら使つて行かなければならなかつた。まだ／＼と思つてゐる中に束の厚みはどん／＼減つて行つた。それが半分程減ると、葉子は全く返済の事などは忘れてしまつたやうになつて有るに任せて惜しげもなく仕拂ひをした。

七月に這入つてから氣候は滅切り暑くなつた。樵の樹の古葉もすつきり散り盡して、松も新らしい緑に代つて、草木も青い焰のやうになつた。早く寒く續いた五月雨の名残りで、水蒸氣が空氣中に氣味悪く飽和されて、さらぬだに急に堪へ難く暑くなつた氣候を益々堪へ難いものにした。葉子は自身の五體が貞世の恢復をも待たずに／＼崩れて行くのを感じない譯には行かなかつた。それと共に物發的に起つ

先刻入らしつてよ……いやお姉様、病院いや歸る……お母様……（さう云つてきよろくとあたりを見廻しながら）歸らして頂戴よう。

お家に早く、お母様のゐるお家に早く……」葉子は思はず毛孔が一本々々逆立つ程の寒氣を感じた。嘗て母と云ふ言葉も云はなかつた貞世の口から思ひもかけずこんな事を聞くと、その部屋のかかにも、いり立つてゐる母が感ぜられるやうに思へた。その母の所に貞世は行きたがつてあせつてゐる。何んと云ふ深い淺間しい骨肉の執着だらう。

看護婦が行つてしまふと又病室の中はしんとなつてしまつた。何んとも云へず可憐な澄んだ音を立てて水筒りに落ちる雨垂れの音はなほ絶間なく聞こえ續けてゐた。葉子は泣くにも泣かれないやうな心になつて、苦しい呼吸をしなからもうつらうと生死の間を知らぬげに眠る。世の顔を見込んでゐた。

と、雨垂れの音に混つて遠くの方に車の轍の音を聞いたやうに思つた。もう眼を覺まして用事をする人もあるかと、何んだか違つた世界の出づきのやうにそれを聞いてゐると、その音は段々病室の方に近寄つて來た。……愛子ではないか。葉子は愕然として夢から覺めた人のやうにきつとなつて耳を欲てた。

もうそこには死生を脱想して自分の妄執の果敢なきをしみんと思ひやつた葉子はゐなかつた。我執の爲めに緊張し切つたその眼は怪しく輝いた。而して大急ぎで髪のはつれをかき上げて、鏡に顔を映しながら、あちこちと指先きで容子を整へた。衣紋もなほした。而してまたぢつと玄關の方に聞き耳を立てた。

果して玄關の戸の聞く音が聞こえた。暫らく廊下がごた／＼する様子だつたが、やがて二三人の足音が聞こえて、貞世の病室の戸がしめやかに開かれた。葉子はそしめやかにそれで開けた戸口から岡に一寸挨拶しながら愛子の顔が靜かに現はれた。葉子の眼は知らず／＼その何處までも從順らしく伏日になつた愛子の面に激しく注がれて、そこに書かれた凡てを一時に讀み取らうとした。小羊のやうに睫毛の長いやさしい愛子の眼は然し不思議にも葉子の鋭い眼光にさへ何物をも見せようともしなかつた。葉子はすぐい／＼して、何事も發かないではおくものかと心の中で自分自身に誓言を立てながら、「倉地さんは」

と突然眞正面から愛子にかう尋ねた。愛子は多恨な眼をはじめてまともに葉子の方に向けて、貞世の方にそれを外らしながら、又葉子を窺み見るやうにした。而して倉地さんが何うしたと云ふのか意味が讀み取れないといふ風を見せながら返事をしなかつた。生意氣をして見るがい。葉子はいらだつてゐた。

「小父さんも一緒にいらしたかいと云ふんだよ」

「いゝえ」

愛子は無愛想な程無表情に一言さう答へた。二人の間にはむづかしい沈黙が續いた。葉子は坐れとさへ云つてやらなかつた。一日々々と美しくなつて行くやうな愛子は小肥りな體を慎ましく整へて靜かに立つてゐた。

そこに岡が小道具を兩手に下げて玄關の方から歸つて來た。外套をびつしより雨に濡らしてゐるのから見ても、この眞夜中に岡がどれ程働いてくれたかが分つてゐた。葉子は然しこれには一言の挨拶もせず、岡が道具を部屋に置いておくが否や、

「倉地さんは何か云つてゐまして？」

と細言言葉に持たせながら尋ねた。

「倉地さんはお出でがありませんでした。で婆

く。もう一度心置きなくこの世に生きる時が来たなら、それはどの位いい事だらう。今度こそは考へ直して生きて見よう。もう自分も二十六だ。今までのやうな態度で暮してはゐられない。倉地に濟まなかつた。倉地があれ程ある限り、倉地のものを犠牲にして、而かもその事業と云つてゐる仕事はどう考へて見ても思はしく行つてゐないらしいのに、自分達の暮し向きは九でそんな事も考へないやうな寛濶なものだつた。自分は決心さへすればどんな境遇にでも自分を嵌め込む事位出来る女だ。若し今度家を持つやうになつたら凡てを妹達に云つて聞かして、倉地と一緒にならう。而して木村とははつきり縁を切らう。木村と云へば……さうして葉子は倉地と古藤とが云ひ合ひをしたその晩の事を考へ出した。古藤にあんな約束をしたがら、自世の病氣に紛れてゐたと云ふ外に、てんで真相を告白する氣がなかつたので今までも何んの消息もしないでゐた自分が尤められた。本當に木村にも濟まなかつた。今になつてやうやく長い間の木村の心の苦しさが想像される。若し貞世が退院するやうになつたら——而して退院するに決つてゐるが——自分は何を措いても木村に手紙を書く。さうしたらどれ程心が安く

而して軽くなるか知れない。……葉子はもうそんな境界が来てしまつたやうに考へて、誰れとでもその喜びを分かちたく思つた。で、椅子にかけたまゝ、右後ろを向いて見ると、床板の上に三疊敷を敷いた部屋の一隅に愛子が多愛もなくすやうと眠つてゐた。うるさがるので貞世には蚊帳を吊つてなかつたが、愛子の所には小さな白い西洋蚊帳が吊つてあつた。その細かい目を通した見る愛子の顔は人形のやうに整つて美しかつた。その愛子をこれまで憎み通しに憎み、疑ひ通しに疑つてゐたのが、不思議を通り越して、奇怪な事にさへ思はれた。葉子にはこゝしなから立つて行つて蚊帳の側によつて、

一愛さん、愛さん——

さう可なり大きな聲で呼びかけた。昨夜近枕に就いた愛子はやがてやうやく睡さうに大きな眼を睜かに開いて、姉が枕許にゐるのに氣がつくと、寢過ごしでもしたと思つたのか、慌てるやうに半身を起して、そつと葉子を窺み見るやうにした。日頃ならばそんな舉動をすぐ癪癪の種にする葉子も、その朝ばかりは可哀さうな位に思つてゐた。

「愛さんお喜び、貞ちゃんの熱がとうとう七度臺に下つてよ。一寸起きて来て御覽、それはいい顔をして寝てゐるから……静かにね——」

静かにねと云ひながら葉子の聲は妙に弾んで高かつた。愛子は柔順に起き上つてそつと蚊帳をくぐつて出て、前を合せながら寝臺の側に來た。

「ね？」

葉子は笑みかまけて愛子にかう呼びかけた。

「でも何んだか、大分に蒼白く見えますわね」と愛子が静かに云ふのを葉子は忙はしく引たくつて、

「それは電燈の風戸敷の故だわ……それに熱が取れば病人は皆んな一度は却つて悪くなつたやうに見えるものなのよ。本當によかつた。あなたも親身に世話してやつたからよ——」

さう云つて葉子は右手で愛子の肩をやさしく抱いた。そんな事を愛子にしたのは葉子としては始めてだつた。愛子は恐れをなしたやうに身をすばめた。

葉子は何んともなくちつとしてゐられなかつた。子供らしく、早く貞世が眼を覺ませばいいと思つた。さうしたら熱の下つたのを知らせて喜ばせてやるのにと思つた。然しさすがにその小さな眠りを搖り覺ます事はし得ないで、頻りと部屋の中を片付け始めた。愛子が注意の上に

て来るヒステリーはいよいよ募るばかりで、その發作に襲はれたが最後、自分ながら氣が違つたと思ふやうな事が度々になつた。葉子は心竊かに自分を恐れながら、日々の自分を見守る事を餘儀なくされた。

葉子のヒステリーは誰れ彼れの見界なく破裂するやうになつたが殊に愛子に屈竟の逃げ場を見出した。何んと言はれても罵られても、打ち据ゑられさへしても、居所の羊のやうに柔順に黙つたまゝ、葉子にはまどろしく見える位ゆつくり落ち着いて働く愛子を見せつけられると、葉子の痼癪は高じるばかりだつた。あんな素直な殊勝氣な風をしてゐながらしらへしくも妬を欺いてゐる。それが倉地との關係に於てであれ、岡との關係に於てであれ、ひよつとすると古藤との關係に於てであれ、愛子は葉子に打ち明けない秘密を持ち始めてゐる筈だ。さう思ふと葉子は無理にも平地に波瀾が起して見たかつた。殆んど毎日、それは愛子が病院に寢泊りするやうになつた爲めだと葉子は自分決めに決めてゐた——幾時間かの間、見舞に來てくれる岡に對しても、葉子はもう元のやうな葉子ではなかつた。どうかすると思ひもかけない時に明白な皮肉が矢のやうに葉子の唇から岡に向

つて飛ばされた。岡は自分が恥ぢるやうに顔を紅らめながらも、上品な態度でそれを堪へた。それが又猶更ら葉子をいらつかす種になつた。

もう來られさうもないと云ひながら倉地も三日に一度位は病院を見舞ふやうになつた。葉子はそれをも愛子故と考へずにはゐられなかつた。さう激しい妄想に驅り立てられて來ると、どういふ關係で倉地と自分とを繋いでおけばいゝのか、どうした態度で倉地をもちあつかへばいゝのか、葉子にはほと／＼見當がつかなくなつてしまつた。親身に持ちかけて見たり、よそ／＼しく取りなして見たり、その時の氣分氣分で勝手に無技巧な事をしてゐながらも、どうしても通れ出る事の出来ないのは倉地に對するこちん／＼固まつた深い執着だつた。それは情けなくも激しく強くなり増さるばかりだつた。もう自分で自分の心根を惘然に思つてそゝろに涙を流して、白らを慰めると云ふ餘裕すらなくなつてしまつた。乾き切つた火のやうなものが息苦しいまでに胸の中にぎつしりつまつてゐるだけだつた。

唯／＼一人貞世だけは……死ぬか生きるかわからない貞世だけは、この妬を信じ切つてくれてゐる……さう思ふと葉子は前にも増した愛着を

この病兒にだけは感じないでゐられなかつた。「貞世がゐるばかりで自分は人殺しもしないでかうしてゐられるのだ」と葉子は心の中で獨語した。

けれども或る朝そのかすかな希望さへ破れねばならぬやうな事件がまくし上つた。

その朝は曉から水が滴りさうに空が晴れて、珍らしくすが／＼しい涼風が木の間から來て窓の白いカーテンをそつと撫で通るさわやかな天氣だつたので、夜通し貞世の寢臺の傍に附添つて、睡くなるとさうしたまゝでうとうとと居睡りしながら過して來た葉子も、思の外頭の中が輕くなつてゐた。貞世もその晩はひどく熱に浮かされもせずに寢續けて、四時頃の體溫は七度八分まで下つてゐた。緑色の風呂敷をを通して來る光でそれを發見した葉子は飛び立つやうな喜びを感じた。入院してから七度臺に熱の下つたのはその朝が始めてだつたので、もう熱の剝離期が來たのかと思ふと、とう／＼貞世の命は取り留めたといふ喜悦の情で涙ぐましいままで胸は一杯になつた。やうやく一心が屈いた。自分の爲めに病氣になつた貞世は、自分の力でなほつた。そこから自分の運命は又劇らしく開けて行くかも知れない。此處開けて行

ものだ。何んと云ふ我儘な子だらう。(葉子は貞世が味覺を恢復してゐて、流動食では満足しなくなつたのを少しも考へに入れなかつた)

さうなるともう葉子は自分を統御する力を失つてしまつてゐた。血管の中の血が一じにかつと燃え立つて、それが心臓に、而して心臓から頭に衝き進んで、頭蓋骨はばり／＼と音を立てて破れさうだつた。日頃あれ程可變がつてやつてゐるのに、……憎さは一倍だつた。貞世を見つめてゐる中に、その瘦せ切つた細首に銀形にした兩手をかけて、一思ひにしめつけて、苦しみ悶く様を見えて、「そら見るがい」と云ひ捨ててやりたい衝動がむづ／＼と湧いて來た。その頭の廻りにあてがはるべき兩手の指は思はず知らず熊手のやうに折れ曲つて、烈しい力の爲めに細かく震へた。葉子は兇器に變つたやうなその手を人に見られるのが恐ろしかつたので、茶碗と匙とを食卓にかへして、前垂れの下に隠してしまつた。上瞼の一字になつた眼をきりつと据ゑてはたと貞世を睨みつけた。葉子の眼には貞世の外にその部屋のもの倉地から愛子に至るまですつかり見えなくなつてしまつてゐた。

「食べないかい」

「食べないかい。食べなければ云々」と小言を云つて貞世を責める筈だつたが、初句を出しただけで、自分の聲の餘りに激しい震へやうに言葉をや切つてしまつた。

「食べない……食べない……御飯でなくつてはいやあだあ」

葉子の聲の下からすぐかうした我儘な貞世のすねにすねた聲が聞こえた。葉子は思つた。眞黒な血潮がどつと心臓を破つて、膈下に衝き進んだと思つた。眼の前で貞世の顔が三つにも四つにもなつて泳いだ。その後には色も聲も痺れ果ててしまつたやうな暗黒の忘我が來た。

「お姉様……お姉様ひどい……いやあ……」

「葉ちゃん……あぶない……」

貞世と倉地の聲とがもつれ合つて、遠い所からのやうに聞こえて來るのを、葉子は誰れかが何か貞世に亂暴をしてゐるのだなと思つたり、この勢ひで行かなければ貞世は殺せやしないと思つたりしてゐた。何時の間にか葉子はたゞ一筋に貞世を殺さうとばかりあせつてゐたのだ。葉子は闇黒の中で何か自分に逆らふ力と根限りあらそひながら、物凄い程の力をふり排つて闘つてゐるらしかつた。何が何んだか解らなかつた。その混亂の中に、或は今自分は倉地の喉笛

に針のやうになつた自分の十本の爪を立てて、ねぢり擦掻きながら爭つてゐるのではないかと思つた。それもやがて夢のやゝだつた。暗きかりながら人の聲とも獸の聲とも知れぬ音響が幽かに耳に残つて、胸の所にさし込んで來る痛みを吐氣のやうに感じた次ぎの瞬間には、葉子は昏々として熱も光も聲もない物すさまじい暗黒の中に眞逆様に没つて行つた。

ふと葉子は擦むるやうなものを耳の所に感じた。それが音響だ／＼解るまでにはどの位の時間が経過したか知れない。兎に角葉子はがや／＼と云ふ聲を段々とはつき／＼聞くやうになつた。而してほつき／＼視力を恢復した。見ると葉子は依然として貞世の病室にゐるのだつた。愛子が後向きになつて病室の上にある貞世を介抱してゐた。自分は、自分はと葉子は始めて自分を見廻さうとしたが、身體は自由を失つてゐた。そこには倉地がゐる。葉子の喉根つこに腕を廻して、床の上に一方の足を乗せて、しつかりと抱きすくめてゐた。その足の重さが痛い程感じられ出した。やつぱり自分は倉地を死神の許へ追ひこく／＼としてゐたのだなと思つた。そこには白衣を着た醫者も看護婦も見え出した。葉子はそれだけの事を見ると急に氣のゆるむ

注意をして、その言もさせまいと氣を遣つてゐるのに、葉子がわざとするかとも思はれる程騒々しく働く様は、日頃とは丸で反對だつた。愛子は時々不承識さうな服付きをして、そつと葉子の舉動を注意した。

その中に夜がどん／＼明け離れて、電燈の消えた瞬間は一す部屋の中が暗くなつたが、夏の朝らしく見る／＼中に白い光が窓から容赦なく流れ込んだ。晝になつてからの暑さを豫想させるやうな涼しさが青葉の輕い匂ひと共に部屋の中に充ち溢れた。愛子の着かへた大柄な白の飛びも、赤いメリンスの帯も、葉子の眼を清々しく刺戟した。

葉子は自分で貞世の食事を作つてやる爲めに宿直室の側に在る小さな庖厨に行つて、洋食店から届けて来たソップを温めて鹽で味をつけてゐる間も、段々起き出て来る看護婦達に貞世の昨夕の経過を誇りがに話して聞かせた。病室に歸つて見ると愛子が既に目覺めた貞世に朝仕舞をさせてゐた。熱が下つたので機嫌のよかるべき貞世は一層不機嫌になつて見えた。愛子のする事一つ／＼に故障を云ひ立てて、中云ふ事を聞かうとはしなかつた。熱の下つたのに連れて始めて貞世の意志が人間らしく側

き出したのだと葉子は氣が付いて、それも許さなければならぬ事だと、自分の事のやうに心で辯護した。漸く洗面が済んで、それから寝巻の周圍を整頓するともう全く朝になつてゐた。今朝こそは貞世が乾度賞美しながら食事を取るだらうと葉子はいそ／＼と丈のの高い食卓を寝臺の所に持つて行つた。

その時思ひがけなくも朝がけに倉地が見舞ひに來た。倉地も涼しげな單衣に紺の羽織を羽織つたまゝだつた。その強健な、物を物としなばかりでなく、その目に限つて葉子は純島丸の中で語り合つた倉地を見出したやうに思つて、その寛濶な様子がなつかしくのみ眺められた。倉地も勉めて葉子の立ち直つた氣分に同じてゐるらしかつた。それが葉子を一層快活にした。葉子は久し振りでその銀の鈴のやうな澄み透つた聲で高調子に物を云ひながら二言目には涼しく笑つた。

「さ、貞ちゃん、姉さんが上手に味をつけて来て上げたからソップを召上れ。今朝は乾度おいしく食べられますよ。今までは熱で味も何もなかつたわね、可哀さうにさう云つて貞世の身近に椅子を占めながら、糊

の強いナプキンを枕から喉にかけてあてがつてやると、貞世の顔は愛子の云ふやうにひどく青味がかつて見えた。小さな不安が葉子の頭をつきぬけた。葉子は清潔な銀の匙に少しばかりソップをしやくひ上げて貞世の口許にあてがつた。

「まづい」

貞世はちらつと姉を睨むやうに窺み見て、口に
あるだけのソップを強ひて飲みこんだ。

「おやどうして」

「甘つたらしくつて」

「そんな筈はないがなえ。どれそれぢやも少し鹽を入れてあげますわ」

葉子は鹽をたして見た。けれども貞世は美味いとは云はなかつた。又一と口飲み込むと、もういやだと云つた。

「さう云はずとも少し召上れ、ね、折角姉さんが加減したんだから。第一食べないでゐては弱つてしまひますよ」

さう促して見ても貞世は金輪際あとを食べようとはしなかつた。

突然自分でも思ひも寄らない憤怒が葉子に襲ひかゝつた。自分がこれ程骨を折つてしてやつたのに、義理にももう少しは食べてよささうな

くれてしまつた葉子は、手紙を讀んだ瞬間にこれは造り事だと思ひ込まないではゐられなかつた。とう／＼倉地も自分の手から逃れてしまつた。やる瀬ない恨みと憤りが眼も眩む程に頭の中を攪き亂した。

岡と愛子とがすつかり打ち解けたやうになつて、岡が殆んど入り浸りに病院に來て貞世の介抱をするのが葉子には見てゐられなくなつて來た。

「岡さん、もうあなたこれからこゝには入らつしやらないで下さいまし。こんな事になると御迷惑があなたに懸らないとも限りませんから。私達の事は私達がしますから。私はもう他人に頼りたくはなくなりました」

「さう仰しやらずにどうか私をあなたのお側に置かせて下さい。私、決して傳染などを恐れはしません」

岡は倉地の手紙を讀んではゐないのに葉子は氣がついた。迷惑と云つたのを病氣の傳染と思ひ込んでゐるらしい。さうぢやない。岡が倉地の大でないとどうして云へよう。倉地が岡を通して愛子と慇懃を通はし合つてゐない誰れが斷言出来る。愛子は岡をたらし込む位は平氣でする娘だ。葉子は自分の愛子位の年頃の時の自

分の経験の二つが生き返つてその猜疑心を煽り立てるのに自分から苦しまねばならなかつた。あの年頃の時、思ひさへすれば自分にはそれ程の事は手もなくして退ける事が出来た。而して自分は愛子よりもつと無邪氣な、おまけに快活な少女であり得た。寄つてたかつて自分を欺しにかゝるのなら、自分にだつてして見せる事がある。

「そんなにお考へならお出で下さるのは勝手ですが、愛子をあなたにさし上げる事は出来ないんですからそれは御承知下さいましよ。ちやんと申上げておかないと後になつていさゝか起るのはいやですから。愛さんお前も聞いてゐるだらうね」

さう云つて葉子は疊の上で貞世の胸にあてる濕布を縫つてゐる愛子の方にも振り向いた。首垂れた愛子は顔も上げず返事もしなかつたから、どんな様子を顔に見せたかを知る由はなかつたが、岡は羞恥の爲めに葉子を見かへる事も出来ない位になつてゐた。それは然し岡が葉子の餘りと云へば露骨な言葉を恥ぢたのか、自分の心持を發かれたのを恥ぢたのか葉子の迷ひ易くなつた心にはしつかりと見窮められなかつた。是れにつけ彼れにつけもどかしい事ばかりだ

つた。葉子は自分の眼で二人を看視して同時に倉地を間接に看視するより外はないと思つた。こんな事を思ふすぐ側から葉子は倉地の細君の事も思つた。今頃は彼等はのう／＼として邪魔者があるなくなつたのを喜びながら一つ家に住んでゐないとも限らないのだ。それとも倉地の事だ、第二第三の葉子が葉子の不幸をいゝ事にして倉地の側に現はれてゐるのかも知れない。然し今の場合倉地の行方を尋ねあてては一寸むづかしい。

それからと云ふもの葉子の心は一秒の間も休まらなかつた。勿論今までも葉子は人一倍心の働く女だつたけれども、その頃のやうな激しさは嘗てなかつた。而かもそれが毎時も表から裏を行く働き方だつた。それは自分ながら全く地獄の呵責だつた。

その頃から葉子は屢々自殺といふ事を深く考へるやうになつた。それは自分でも恐ろしい程だつた。肉體の生命を絶つ事の出来るやうな物さへ眼に觸れれば、葉子の心はおびえながらもはつと高鳴つた。薬局の前を通るとずらつと列んだ藥瓶が誘惑のやうに眼を射た。看護婦が帽子を髪にとめる爲めの長い帽子ピン、天井の張つてない湯殿の梁、看護婦室に薄かい色をし

のを覺えた。而して涙がぼろ／＼と出てしかたがなくなつた。をかした。……どうしてかう涙が出るのだらうと怪しむ中に、やる瀬ない悲哀がどつとこみ上げて來た。底のないやうな淋しい悲哀……その中に葉子は悲哀とも睡さとも區別の出来ない重い方に壓せられて又知覺から物のない世界に落ち込んで行つた。

本當に葉子が眼を覺ました時には、眞蒼に晴天の後の夕暮が回してゐる頃だつた。葉子は部屋隅の三疊に蚊帳の中に横になつて寢てゐたのだつた。そこには愛子の外に岡も來合せて貞世の世話をしてゐた。倉地はもうゐなかつた。

愛子の云ふ所によると、葉子は貞世にソツプを飲まさうとして色々に云つたが、熱が下つて急に食欲のついた貞世は飯でなければ何うしても食べないと云つて聽かなかつたのを、葉子は涙を流さんばかりになつて執念くソツプを飲ませようとした結果、貞世はそこにあつたソツプ皿を取つてゐながらひ／＼返してしまつたのだつた。さうすると葉子はいきなり立ち上つて貞世の胸許を掴みなり寢臺から引きずり下ろしてこづき廻した。幸にゐ合した倉地が大

かつて、その中に激しい瘡を起してしまつたのだとの事だつた。

葉子の心は空しく痛んだ。何處にとて取りつくものもないやうな空しさが心には残つてゐるばかりだつた。貞世の熱はすっかり元通りに昇つてしまつて、ひどくおびえるらしい囁言を絶間なしに口走つた。節々はひどく痛みを覺えながら、發作の過ぎ去つた葉子は、普段通りになつて起き上る事も出来るのだつた。然し葉子は愛子や岡への手前直ぐ起き上るのも變だつたのでその日はそのまゝ寢續けた。

貞世は今度こそは死ぬ。とう／＼自分の末路も來てしまつた。さう思ふと葉子はやる方なく悲しかつた。總角貞世と自分が幸ひに生き残つたとしても、貞世は屹度永劫自分を命の敵と怨むに違ひない。

「死ぬに限る」

葉子は窓を通して青から藍に變つて行きつゝある初夏の夜の景色を眺めた。神秘的な穩かさ、と深きとは臍心に沁み通るやうだつた。貞世の枕許には若い岡と愛子とが睦まじげに居たり立たりして貞世の看護に餘念なく見えた。その時の葉子にはそれは美しくさへ見えた。親切な岡、柔順な愛子……二人が愛し合ふのは當然

でいゝ事らしい。

「どうせ凡ては過ぎ去るのだ」

葉子は美しい不思議な幻影でも見るやうに、電氣燈の緑の光の中に立つ二人の姿を、無常を見貫いた隠者のやうな心になつて打ち眺めた。

四十五

この事があつた日から五日経つたけれども倉地はばつたり來なくなつた。便りもよこさなかつた。金も送つては來なかつた。餘りに變なもので岡に頼んで下宿の方を調べて貰ふと、日前に荷物の大部分を持つて旅行に出ると云つて姿を隠してしまつたのださうだ。倉地がゐなくなると、刑事だと云ふ男が二度か三度色々な事を尋ねに來たとも云つてゐるさうだ。岡は倉地からの一通の手紙を持つて歸つて來た。葉子は直ぐに封を開いて見た。

一事重大となり姿を隠す。郵便では果を及ぼさん事を恐れ、これを主人に託しておく。金も當分は送れぬ。困つたら家財道具を賣れ。その中には何んとかする。讀後火中」
とだけ認めて葉子への宛名も自分の名も書いてはなかつた。倉地の手蹟には間違ない。然しあの發作以後益々ヒステリックに根性のひね

事もなく日を過ごした。

然し葉子の精神は興奮するばかりだった。一人になつて暇になつて見ると、自分の心身がどれ程破壊されてゐるかが自分ながら恐ろしい位感ぜられた。よくこんな有様で今まで通して來たと驚くばかりだった。寝臺の上に臥て見ると二度と起きて歩く勇氣もなく、又實際出來もしなかつた。唯、鈍痛とのみ思つてゐた痛みは、どつちかに臥返つて見ても我慢の出來ない程な激痛になつてゐて、氣が狂ふやうに頭は重くうづいた。我慢にも貞世を見舞ふなどと云ふ事は出來なかつた。

かうして臥ながらにも葉子は斷片的に色々な事を考へた。自分の手許にある金の事を先づ思案して見た。倉地から受取つた金の残りと、調度類を賣拂つて貰つて出來た纏まつた金とが何にもかにもこれから姉妹三人を養つて行く唯一つの資本だった。その金が使ひ盡された後には今の所、何をどうするといふ用途は露ほどもなかつた。葉子は普通の葉子に似合はずそれが氣になり出して仕方がなかつた。特等室などに遣入り込んだ事が後悔されるばかりだった。と云つて今になつて等級の下つた病室に移して貰ふなどとは葉子としては思ひも寄らなかつた。

葉子は贅澤な寢臺の上に横になつて、羽根枕に深々と頭を沈めて、氷嚢を額にあてがひながら、かん／＼と赤土に射してゐる眞夏の日の光を、廣々と取つた窓を通して眺めやつた。而して物心附いてからの自分の過去を針で採み込むやうな頭の中でずつと見渡すやうに考へ通つて見た。そんな過去が自分のものなのか、さう疑つて見ねばならぬ程にそれは遙かにもかけ隔たつた事だった。父母——殊に父の昔めるやうな寵愛の下に何一つ苦勞を知らずに清い美しい童女としてすら／＼と育つたあの時分が矢張り自分の過去のなだらうか。木部との戀に酔ひ耽つて、國分寺の櫓の林の中で、その胸に自分の頭を託して、木部の云ふ一語々々を美酒のやうに飲みほしたあの少女は矢張り自分ののだらうか。女の誇りと云ふ誇りを一身に集めたやうな美貌と才能の持主として、女達からは羨望の的となり、男達からは嘆美の空想とされたあの青春の女性に矢張りこの自分のなだらうか、誤解の中にも攻撃の中にも身然と首を擡げて、自分は今の日本に生れ、來べき女ではなかつたのだ、不幸にも時と處とを間違へて天上から送られた王女であるときで自分に對する矜誇に満ちてゐた、あの妖婉な女性にまが

ふ方なく自分のなだらうか。繪島丸の中で味ひ盡し嘗め盡した歡樂と陶酔との限りは、始めて世に生れ出た生甲斐をしみ／＼と感じた誇りがな暫らくは今の自分と結び付けていゝ過去のひとつのなだらうか。日はかん／＼と赤土の上で照りつけてゐた。油蟬の聲は御殿の池をめぐる鬱蒼たる木立の方から沁み入るやうに聞こえてゐた。近い病室では輕病の患者が集まつて、何かみだららしい雑談に笑ひ興じてゐる聲が聞こえて來た。それは實際なのか夢なのか。それ等の凡ては腹立たしい事なのか、哀しい事なのか、笑ひ捨つべき事なのか、歎き惧まねばならぬ事なのか。……喜怒哀樂のどれか一つだけでは表はし得ない、不眠の夜に交錯した感情が、葉子の眼から留度なく涙を誘ひ出した。あんな世界がこんな世界に變つてしまつた。さうだ貞世が生地の境に彷徨つてゐるのはまちがひやうのない事實だ。自分の健康が衰へ果てたのも間違ひのない出来事だ。若し毎日貞世を見舞ふ事が出来るのならこのまゝこゝにゐるのもいい。然し自分の身體の自由さへ今はきかなくなつた。手術を受ければどうせ當分は身動きも出來ないのだ。岡や愛子……そこまで來ると葉子は夢の中にゐる女ではなかつた。まさ／＼とした煩惱

て金盥にたゞへられた昇来水、腐敗した牛乳、刺刀、銃、夜更けなどに上野の方から聞こえて来る汽車の音、病室から眺められる生理學教室の三階の窓、密閉された部屋、しごき帯、……何んでも彼でもが自分の肉を喰む毒蛇の如く鎌首を立てて自分を待ち伏せしてゐるやうに思へた。ある時はそれ等をこの上なく恐ろしく、ある時は又この上なく親しみ深く眺めやつた。一定の蚊にさゝれた時さへそれがマラリヤを傳へる種類であるかないかを疑つたりした。

「もう自分はこの世の中に何んの用があらう。死にさへすればそれで事は済むのだ。この上自身も苦しみたたくない。他人も苦しめたくない。いやだ／＼と思ひながら自分と他人とを苦しめてゐるのが堪へられない。眠りだ、長い眠りだ。それだけのものだ」

と貞世の寢息を窺ひながらいつかり思ひ込むやうな時もあったが、同時に倉地が何處かで生きてゐるのを考へると、忽ち燕返しに死から生の方へ、苦しい煩惱の生の方へ激しく執着して行つた。倉地の生きてゐる間に死んでもものか：それは死よりも強い誘惑だつた。意地にかけても、肉體の凡ての機關が日茶々になつても、それでも生きてゐて見せる。……葉子は

而してそのどちらにも本當の決心のつかない自分に又苦しまねばならなかつた。

凡てのものを愛してゐるのか憎んでゐるのか判らなかつた。貞世に對してですらさうだつた。

葉子はどうかすると、然に淫かされて見界のなくなつてゐる貞世を、繼母がまゝ子をいびり抜くやうに沒義道に取扱つた。而して次ぎの瞬間には後悔し切つて、愛子の前でも看護婦の前でも構はずにおい／＼と泣きくづをれた。

貞世の病狀は悪くなるばかりだつた。

ある時傳染病室の醫長が來て、葉子が今のもうでゐては逆も健康が續かないから、思ひ切つて手術をしたらどうだと勸告した。黙つて

聞いてゐた葉子は、すぐ岡の差入れ口だと邪推して取つた。その後ろには愛子がゐるに違ひない。葉子が附いてゐたのでは貞世の病氣は癒さうと思つてゐた。葉子は貞世を全快させてやりたいのだ。けれどもどうしてもいびらなければゐられないのだ。それはよく葉子自身が知つてゐると思つてゐた。それには葉子を何んとかして貞世から離しておくのが第一だ。そんな相談を醫長としたものがある筈がない。ふむ、：

甘い事を考へたものだ。その復讐は屹度して

やる。根本的に病氣を癒してからしてやるから見てゐるがい、葉子は醫長との談話の中に早くもかう決心した。而して思ひの外手早く手術を受けようと思つて返答した。

婦人科の室は傳染病室とはずつと離れた所に近頃新築された建物の中にあつた。七月の央に葉子はそこに入院する事になつたが、その前に岡と古藤とに依頼して、自分の身近にある貴重品から、倉地の下宿に運んである衣類までを處分して貰はなければならなかつた。金の用所は全く途絶えてしまつてゐたから。岡が頻りと連絡しようと思つたのもすげなく斷つた。弟同様の少年から金まで融通して貰ふのはどうしても葉子のプライドが水知しなかつた。

葉子は特等と選んで日常りのいゝ服々とした部屋に這入つた。そこは傳染病室とは比べものにもならない位新式の設備の整つた居心地のいゝ所だつた。窓の前の庭はまだ掘りくり返したまゝで赤土の上に草も生えてゐなかつたけれども、廣い廊下の冷やかな空氣が涼しく病室に通りぬけた。葉子は六月の末以來始めて寢床の上に安々と體を横へた。疲勞が回復するまで暫らくの間手術は見合せるといふので葉子は毎日一度づつ内診をして貰ふだけする

へがたい事のやうに思はれ出したのだ。

暗い二階の部屋に案内されて、愛子は準備しておいた床に横になると葉子は誰れに挨拶もせずに唯泣き続けた。そこは運河の水の匂ひが泥臭く通つて来るやうな所だつた。愛子は煤けた陰子の蔭で手廻りの荷物を取り出して案辨した。口少々の愛子は姉を慰めるやうな言葉も出さなかつた。外部が騒々しいだけに部屋の中は猶更らひつそりと思はれた。

葉子はやがて靜かに顔を舉げて部屋の中を見た。愛子の顔色が黄色く見える程その目の空も部屋の中も寂れてゐた。少し襪を持つたやうに埃つぽくぐくする疊の上には丸盆の上に大學病院から持つて来た藥瓶が乗せてあつた。障子際には小さな鏡臺が、違ひ棚には手文庫と硯箱が飾られたけれども、床の間には幅物一つ、花活け一つ置いてなかつた。その代りに草色の風呂敷に包み込んだ衣類と黒い柄のパラザルとが置いてあつた。藥瓶の載せてある丸盆が、出入りの商人から到来のもので、縁の所に割げた所が出来て、表には赤い短靴のついた矢が的に命中してゐる畫が安つぽい金で描いてあつた。葉子はそれを見ると盆もあらうにと思つた。それだけでもう葉子は腹が立つたり情

けな なつたりした。

「愛さんあなた御苦勞でも毎日一寸づつは來てくれないぢや困りますよ。貞ちゃんの様子も聞きたしいね。貞ちゃんも軋んだよ。熱が下つて物事が分るやうになる時には私も癒つて歸るだらうから……愛さん」

毎時の通りはきくとした手答へがないので、もうぎりぎりして來た葉子は險を持った聲で、「愛さん」と語氣強く呼びかけた。言葉をかけるとそれでも片付けものの手を置いて葉子の方に向き直つた愛子は、この時やうやく顔を上げておとなしく「はい」と返事をした。葉子の眼はすかさずその顔を發矢と鞭つた。而して寢床の上に半身を肘に支へて起き上つた。車で揺られた爲めに腹部は痛みを増して聲を擧げたい程うづいてゐた。

「あなたに今日ははつきり聞いておきたい事があるの……あなたはよもや阿さんとひよんな約束なんぞしてはゐますまいね」

「いゝえ」

愛子は手もなく素直にかう答へて眼を伏せてしまつた。

「古藤さんとも？」

「いゝえ」

今度は顔を上げて不思議な事を問ひたゞすとぶふやうにちつと葉子を見詰めたがらかう答へた。そのタクトがあるやうな、ないやうな愛子の態度が葉子をいやが上にいらだたした。阿の場合には何處か後ろめたくて首を垂れたとも見える。古藤の場合にはわざとしらを切る爲めに大膽に顔を上げたとも取れる。又そんな意味ではなく、あまり不思議な詰問が二度まで続いたので、二度目には怪訝に思つて顔を上げたのかとも考へられる。葉子は疊みかけて倉地の事まで問ひ正さうとしたが、その氣分は摧かれてしまつた。そんな事を聞いたのが第一愚かだつた。隠し立てをしようとした以上は、女は男よりも遙かに巧妙で大膽なのを葉子は自分で自分の知り抜いてゐるのだ。自分から進んで内兜を見透かされたやうなもので、かしは一層葉子の心を憤らした。

「あなたは二人から何かそんな事を云はれた覚えがあるでせう。その時あなたは何んと御返事したの？」

愛子は下を向いたまゝ黙つてゐた。葉子は圖星をさしたと思つて嵩にかゝつて行つた。

「私は考へがあるからあなたの口からもその事を聞いておきたいんだよ。仰しやいな」

が勃然としてその齒噛みした物凄いの鎌首をきつと擡げるのだつた。それもよし。近くゐても看視の利かないのを利用したくば思ふさま利用するがいゝ。倉地と三人で勝手な陰謀を企てるがいゝ。どうせ看視の利かないものなら、自分は貞世の爲めに何處か第一流か第三流の病院に移らう。而していくらでも貞世の方を安樂にしてやらう。葉子は貞世から離れると一圖にそのあはれさが身に沁みてかう思つた。

葉子はふとつやの事を思ひ出した。つやは看護婦になつて京橋あたりの病院にゐると雙轉館から云つて來たのを思ひ出した。愛子と呼び寄せて電話で捜させようと決心した。

四十六

眞暗な廊下が古ぼけた縁側になつたり、縁側の突當りに階子段があつたり、日當りのいゝ中二階のやうな部屋があつたり、納戸と思はれる暗い部屋に屋根を打ち抜いてガラスを嵌めて光線が引いてあつたりするやうな、謂はばその界隈に深山ある待合の建物に手を入れて使つてゐるやうな病院だつた。つやは加治木病院といふその病院の看護婦になつてゐた。

長く天氣が続いて、その後に激しい南風が吹

いて、東京の市街は埃まぶれになつて、空も、家屋も、樹木も、黄粉でまぶしたやうになつた。暑句、氣持ち悪く蒸し／＼と病を汗ばせるやうな雨に變つた或る日の朝、葉子は僅かばかりな荷物を持つて人力車で加治木病院に送られた。後ろの卓には愛子が荷物の一部分を持つて乗つてゐた。須田町に出た時、愛子の車は日本橋の通りを眞直に一足先きに病院に行かして、葉子は外濠に沿つた道を日本銀行から暫らく行く釘店の横丁に曲らせた。自分の住んでゐた家を手他處ながら見て通りた心持になつてゐたからだつた。前晩の隙間から覗くのだつたけれども、一年の後にもそこにはさして變つた様子は見えなかつた。自分のゐた家の前で一寸車を止まらして中を覗いて見た。門札には叔父の名は無くなつて、知らない他人の姓名が掲げられてゐた。それでもその人は醫者だと見えて、父の時分からの永壽堂病院といふ看板は相變らず女關の楯に見えてゐた。長三洲と署名してゐるその字も葉子には親しみの深いものだつた。葉子が亞米利加に出發した朝も九月ではあつたが矢張りその日のやうにじめ／＼と雨の降る日だつたのを思ひ出した。愛子が櫛を折つて急に泣き出したのも、貞世が怒つたやうな顔をして

眼に涙を一杯溜めたまゝ見送つてゐたのもその玄關を見ると描くやうに思ひ出された。

「もういゝ早くやつておくれ」

さう葉子は、車の上から涙聲で云つた。車は轆轤を向け換へられて、又雨の中を小さく揺れながら日本橋の方走り出した。葉子には不思議にそこに一緒に住んでゐた叔父叔母の事を泣きながら思ひやつた。あの人は今何處に何うしてゐるだらう。あの白癡の兒ももう随分大きくなつたらう。でも渡米を企ててからまだ一年とは經つてゐないんだ。へえ、そんな短い間にこれ程の變化が……葉子は自分で自分に慟れるやうにそれを思ひやつた。それではあの白癡の兒も思つた程大きくなつてゐる譯ではあるまい。葉子はその子を思ふと何うした譯か定子の事を胸が痛む程厳しく想ひ出してしまつた。鎌倉に行つた時以來、自分の懷ろからもぎ放してしまつて、金輪際忘れてしまはうと暗く心に呪つてゐたその定子が……それはその場合葉子を全く惨めにしてしまつた。

病院に着いた時も葉子は泣き續けてゐた。而してその病院のすぐ手前まで來て、そこに入院しようとした事を心から後悔してしまつた。こんな落魄したやうな姿をつやに見せるのが堪

濡りなく流れ廻つてゐるやうな、すべ／＼と健康らしい、淺黒いつやの皮膚は何よりも葉子には愛らしかった。始終吹出物でもしきうな、臆つばい女を葉子は何よりも呪はしいものに思つてゐた。葉子はつやのまめやかな心と言葉に引かされてそこにゐることにした。

これだけ貞世から隔たると葉子は始めて少し氣のゆるむの覺えて、腹部の痛みで突然眼を覺ます外には多愛なく眠るやうな事もあつた。然し何んと云つても一番心に懸るものは貞世だつた。さゝくれて、赤く乾いた唇から漏れ出るあの喚言……それが何うかすると近々と耳に聞こえたり、ぼんやりと眼を開いたりするその顔が浮き出して見えたりした。そればかりではない、葉子の五官は非常に敏捷になつて、おまけにイリニュージョンやハルシネーションを絶えず見たり聞いたりするやうになつてしまつた。倉地なんぞはすぐ側に坐つてゐるなと思つて、苦しさに眼をつぶりながら手を延ばして疊の上を探つて見る事などもあつた。そんなにはつきり見えたり聞えたりするものが、凡て虚構であるのを見出す淋しさは嘘へやうがなかつた。

愛子は葉子が入院の日以來感心に毎日訪れて自世の容體を話して行つた。もう始めの日のや

うな狼藉はしなかつたけれども、その顔を見ればかりで、葉子は病氣が重なるやうに思つた。殊に貞世の病狀が輕くなつて行くといふ報告は激しく葉子を怒らした。自分があれ程の愛着を能めて看護してもよくならなかつたものが、愛子なんぞの通り一遍の世話で治る筈がない。又愛子はいゝ加減な氣休めに虚言をついてゐるのだ。貞世はもうひよつとすると死んでゐるかも知れない。さう思つて阿が替つて來た時に根柢り葉子に聞いて見るが、二人の言葉が餘りに符合するので、貞世の段々よくなつて行きつゝあるのを疑ふ餘地はなかつた。葉子には運命が狂ひ出したやうにしか思はれなかつた。愛情と云ふものなしに病氣が治せるなら、人の生命は機械でも造り上げる事が出来る譯だ。そんな筈はない。それなのに貞世は段々よくなつて行つてゐる。人ばかりではない、神までが、自分が自然法の他の法則で弄ばうとしてゐるのだ。

葉子は齒がみをしながらかゝ貞世が死ねかしと祈るやうな瞬間を持つた。日は經つけれども、倉地からは本當に何んの消息もなかつた。病的に感覺の喪失した葉子は、時々肉體的に倉地を慕ふ衝動に驅り立てられた。葉子の心の眼には、倉地の肉體に凡ての部

分は觸れる事が出来ると思ふ程具體的に想像された。葉子は自分で造り出した不思議な迷宮の中にあつて、意識の痺れ切るやうな陶醉にひたつた。然しその酩酊が醒めた後の苦痛は、精神の疲弊と一緒に動いて、葉子を半死半生の境に打ちのめした。葉子は自分の妄想に嘔吐を催しな

がら、倉地と云はず凡ての男を呪ひに呪つた。

愈々葉子が手術を受けるべき前の日が來た。

葉子はそれを左程恐ろしい事とは思はなかつた。子宮後屈症と診斷された時買つて歸つて讀んだ清澤な醫書によつて見ても、その手術は割合に簡單なものであるのを知り抜いてゐたから、その事については割合に安々とした心持である事が出來た。唯々名狀し難い焦燥と悲哀とは何う片付けやうもなかつた。毎日來てゐた愛子の足は二日おきになり、日おきになり段々遠ざかつた。岡などは全く姿を見せなくなつてしまつた。葉子は今更に自分の周りを淋しく見廻して見た。出遇ふかぎりの男と女とが何がなしに牽き着けられて、離れる事が出来なくな

る、そんな磁力のやうな力を持つてゐるといふ自負に氣負つて、自分の周圍には知ると知らざるを問はず、何時でも無数の人々の心が待つてゐるやうに思つてゐた。葉子は、今は凡ての人

「お二人とも何んにもそんな事は仰しやりはしませんわ」

「仰しやらない事があるもんかね」

憤怒に伴つてさしこんで来る痛みを憤怒と共にいつと押へつけながら葉子はわざと聲を利げた。而して愛子の舉動を爪の先きほども見逃すまいとした。愛子は黙つてしまった。この沈黙は愛子の隠れ家だった。さうなるとさすがの葉子もこの妹をどう取扱ふ術もなかった。岡なり古藤なりが告白をしてゐるのなら、葉子がこの次ぎに云ひ出す言葉で様子は知れる。この場合うっかり葉子の口車には乗れないと愛子は思つて沈黙を守つてゐるのかも知れない。岡なり古藤なりから何か聞いてゐるのなら、葉子はそれを十倍も二十倍もの強さにして使ひこなす術を知つてゐるのだけれども、生憎その備へはしてゐなかつた。愛子は確かに自分をあなどり出してゐると葉子は思はないではゐられなかつた。寄つてたかつて大きな詐僞の網を造つて、その中に自分を押しこめて、周囲から眺めながら面白さうに笑つてゐる。岡だらうが古藤だらうが何があてになるものか。葉子は手傷を負つた猪のやうに一直線に荒れて行くより仕方がなくなつた。

「さあお云ひ愛さん、お前さんが黙つてしまふのは悪い癖ですよ。姉さんを甘くお見でないよ。……お前さん本當に黙つてる積りかい……さうぢやないでせう、有れば有る無ければ無いで、はつきり分るやうに話をしてくれんんだらうね……愛さん……あなたは心から私を見くびつてかゝるんだね」

「さうぢやありません」

障子葉子の言葉が激して來るので、愛子は少し怖れを感じたらしく慌ててかう云つて言葉で支へようとした。

「もつとこつちにお出で」

愛子は動かなかつた。葉子の愛子に對する憎惡は極點に達した。葉子は腹部の痛みも忘れて、寢床から跳り上つた。而していきなり愛子のたぶさを掴まうとした。

愛子は普段の冷靜に似ず、葉子の發作を見て取ると、敏捷に葉子の手許をすり抜けて身をはした。葉子はふら／＼とよろけて一方の手を障子紙に突つ込みながら、それでも倒れるはずみに愛子の袖先きを掴んだ。葉子は倒れながらそれをたぐり寄せた。醜い姉妹の争闘が、泣き、わめき、叫び立てる聲の中に演ぜられた。愛子は顔や手に掻き傷を受け、髪をおどろに亂

しながらも、やうやく葉子の手を振り放して廊下へ飛び出した。葉子は糊塗とした足取りでその後を追つたが、連も愛子の敏捷さに叶はなかつた。而して障子段の障子の所でつやに喰ひ止められてしまつた。葉子はつやの肩に身を投げかけながらおい／＼と聲を立てて子供のように泣き沈んでしまつた。

幾時間かの人事不省の後に意識がはつきりして見ると、葉子は愛子とのいきさつを唯々惡夢のやうに思ひ出すばかりだつた。而かもそれは事實に違ひない。枕許の障子には葉子の手のさし込まれた孔が、大きく破れたまゝ残つてゐる。入院のその日から、葉子の名は口さがない婦人患者の口の端にうるさく上つてゐるに違ひない。それを思ふと一時でもそこにぢつとしてゐるのが、堪へられない事だつた。葉子はすぐ外の病院に移らうと思つてつやに云ひつけた。然しつやはどうしてもそれを承知しなかつた。自分が身に引受けて看護するから、是非ともこの病院で手術を受けて貰ひたいとつやは云ひ服つた。葉子から暇を出されながら、妙に葉子に心を引き付けられてゐるらしい姿を見ると、この場合葉子はつやにしみ／＼とした愛を感じた。清潔な血が細いしなやかな血管を

姿も自分の心も何處と云つて特別に變つた譯ではなかつたけれども、何處となく葉子の周圍には確かに死の影がさまよつてゐるのをしつかりと感じないではゐられなくなつた。それは葉子が生れてから夢にも経験しない事だつた。これまで葉子が死の問題を考へた時には、どうして死を招き寄せようかと云ふ事はかりだつた。然し今は死の方がそろ／＼と近寄つて來てゐるのだ。

月は段々光を増して行つて、電燈に灯も點つてゐた。眼の先きに見える屋根の間からは、炊煙だか、蚊遣火だかが薄すらと水のやうに澄み渡つた空に消えて行く。履物、車馬の類、汽笛の音、うるさい程の人々の話聲、さういふものは葉子の部屋をいつもの通り取り捲きながら、而して部屋の中は兎に角整頓して灯が點つてゐて、少しの不思議もないのに、何處とも知れずそこには死が這ひ寄つて來てゐた。

葉子はぎよつとして、血の代りに心臓の中に水の水を濁きこまれたやうに思つた。死なうとする時はとう／＼葉子には來ないで、思ひもかけず死ぬ時が來たんだ。今まで留度なく流してゐた涙は、近づく嵐の前のそよ風のやうに何處ともなく姿をひそめてしまつてゐた。葉子は慌

てふためいて、大きく眼を見開き、鋭く耳を鼓かして、そこにある物、そこにある響きを捕へて、それにすがり附きたいと思つたが、眼にも耳にも何か感ぜられながら、何が何やら少しも分らなかつた。唯々感ぜられるのは、心の中が譯もなく唯々わく／＼として、すがり附くものがあるれば何にでもすがり附きたいと無上にあせつてゐる、その目まぐるしい欲求だけだつた。葉子は震へる手で枕を撫で廻したり、シーツを掴み上げてぢつと握り締めて見たりした。冷たい脂汗が、掌に滲み出るばかりで、握つたものは何んの力にもならない事を知つた。その失望は形容の出來ない程大きなものだつた。葉子は一つの努力ごとくが、つかりして、又懸命に便りになるもの、根のあるやうなものを追ひ求めて見た。然し何處を探しても凡ての努力が全く無駄なのを、では本能的に知つてゐた。周囲の世界は少しのこだはりもなくずる／＼と平氣で日常の営みをしてゐた。看護婦が草履で廊下を歩いて行く、その音一つを考へて見ても、そこには明らかに生命が見出された。その足は確かに廊下を踏み、廊下は礎に續き、礎は大地に据ゑられてゐた。患者と看護婦との間に取り交はされる言葉一つにも、それを與

へる人と受ける人とが、ちやんと大地の上に存在してゐた。然しそれらは奇妙にも葉子とは全く無關係で没交渉だつた。葉子のゐる所には何處にも底がない事を知らねばならなかつた。深い谷に過つて落ち込んだ人が落ちた瞬間に感ずるあの焦燥……それが連續して止む時なく葉子を襲ふのだつた。深さの分らないやうな暗い闇が、葉子を唯々一人眞中に据ゑておいて、果てしなくそのまはりを包まうと静かに／＼近づきつゝある。葉子は少しもそんな事を欲しないのに、葉子の心持には頓着なく、休む事なく止まる事なく、悠々閑々として近づいて來る。葉子は恐ろしきにおびえて聲も得上げなかつた。而して唯々そこから近れ出たい一心に心ばかり焦りに焦つた。

もう駄目だ、力が盡き切つたと、観念しようとした時、然し、その奇怪な死は、すうつと朝霧が晴れるやうに、葉子の周圍から消え失せてしまつた。見た所、そこには何一つ變つた事もない。唯々夏の夕が涼しく夜に繋がらうとしてゐるばかりだつた。葉子はきよ／＼として底の下に水々しく漂ふ月を見やつた。唯々不思議な變化の起つたのは心ばかりだつ

から忘れ果てて、大事な定子からも倉地からも見放し見放されて、荷物のない物置部屋のやうな貧しい一室の隅つこに、夜具にくるまつて暑氣に蒸されながら崩れかけた五體を頼りなく横へねばならぬのだ。それは葉子に取つてはあるべき事とは思はれぬまでだった。然しそれが確かな事實であるのを何うしよう。

それでも葉子はまだ立ち上らうとした。自分の病氣が癒え切つたその時を見てゐるがよい。どうして倉地をもう一度自分のものに仕達せるか、それを見てゐるがよい。

葉子は臍心(へしこ)にたぐり込まれるやうな痛みを感じる。兩眼(りょうがん)から熱い涙を流しながら、徒然なままだに火のやうな一心を倉地の身の上に集めた。葉子の顔にはいつでもハンケチがあてがはれてゐた。それが十分も経たない中に熱く濡れ通つて、つやに新らしいのと代へさせねばならなかつた。

四十七

その夜六時過ぎ、つやが来て障子を開いて、段々満ちて行かうとする月が瓦屋根の重なりの上にぽつかり上つたのを覗かせてくれてゐる時、見知らぬ看護婦が美しい花束と大きな西洋

封筒(ふうとう)に入れた手紙とを持つて這入つて来てつやに渡した。つやはそれを葉子の枕許に持つて来た。葉子はもう花も何も見る氣にはなれなかつた。電氣もまだ来てゐないのでつやにその手紙を讀ませて見た。つやは薄明りにすかし／＼讀み憎さうに文字を拾つた。

「あなたが手術の爲めに入院なさつた事を岡君から聞かされて驚きました。で、今日が外出日であるのを幸ひにお見舞します。

「僕はあなたにお目にかゝる氣にはなりません。僕はそれ程偏狭(へんけつ)に出来上つた人間です。けれども僕は本當にあなたをお氣の毒に思ひます。倉地といふ人間が日本の軍事上の秘密を外國に漏らす商賣に關係した事が知れると共に、姿を隠したといふ報道を新聞で見た時、僕はそんなに驚きませんでした。然し倉地には二人程の外妻があると附け加へて書いてあるのを見て、本當にあなたをお氣の毒に思ひました。この手紙を皮肉に取らないで下さい。僕には皮肉は云へません。

「僕はあなたが失望なさらないやうに祈ります。僕は來週の月曜日から習志野の方に

演習(えんしゆ)に行きます。木村からの便りでは、彼は窮迫(きうぱく)の絶頂(てつてい)にあるやうです。けれども木村はそこを突き抜けるでせう。

「花を持つて来て見ました。お大事に。

古藤生

つやは岡へ／＼それだけを讀み終つた。始終古藤を遙か年下の子供のやうに思つてゐる葉子は、一種侮蔑するやうな無感情を以てそれを聞いた。倉地が外妻を一人持つてると云ふ噂は初耳ではあるけれども、それは新聞の記事であつて見ればあてにはならない。その外妻二人と云ふのが、美人屋敷と評判のあつたそこに住む自分と愛子位の事を想像して、記者ならば云ひさうな事だ。唯さう輕くばかり思つてしまつた。

つやがその花束をガラス瓶に活けて、何んにも飾つてない床の上に置いて行つた後、葉子は前同様にハンケチを顔にあてて、機械的に傾く心の影と戦はうとしてゐた。

その時突然死が——死の問題ではなく——死がはつきりと葉子の心に立ち現はれた。若し手術の結果、子宮底に穿孔が出来るやうになつて腹膜炎を起したら、命の助かるべき見込みはないのだ。そんな事を不圖思ひ起した。部屋の

「それをこの枕の下に入れておいておくれ。今夜こそは私久し振りで安々とした心持で寝られるだらうよ、明日の手術に疲れないやうによく寝ておかないといけないわね。でもこんなに弱つてゐても手術は出来るのか知らん……もう蚊帳を吊つておくれ。而して序でに寢床をもつとそつちに引つ張つて行つて、月の光が顔にあたるやうにして頂戴な。戸は寢入つたら引いておくれ。それから一寸あなたの手をお貸し。……あなたの手は温かい手ね。この手はいゝ手だわ」

葉子は人の手といふものをこんなになつかしいものに思つた事はなかつた。力を籠めた手で、さうと抱いて、いつまでもやさしくそれを撫でてゐたかつた。つやも何時か葉子の氣分に引入れられて、鼻をすゝるまでに涙ぐんでゐた。

葉子はやがて打ち開いた障子から蚊帳越しにうつりと月を眺めながら考へてゐた。葉子の心は月の光で清められたかと思ふ。倉地が自分を捨てて逃げ出す爲めに書いた狂言が計らず其筋の嫌疑を受けたのか、それとも恐ろしい賣國の罪で金をすら葉子に送れぬやうになつたのか、それは何うでもよかつた。縱令ばあが幾人あつてもそれも何うでもよかつた。唯々凡て

が空しく見える中に倉地だけが唯一一人本當に生きた人のやうに葉子の心に住んでゐた。互ひを墮落させ合ふやうな愛し方をした、それも今はなつかしい思ひ出だつた。木村は思へば思ふ程涙ぐましい不幸な男だつた。その思ひ入つた心持は何事もわだかまりのなくなつた葉子の胸の中を清水のやうに流れて通つた。多年の迫害に復讐する時機が來たといふやうに、岡までをそのかして、葉子を見捨ててしまつたと思はれる愛子の心持にも葉子は同情が出來た。愛子の情けに引かされて葉子を裏切つた岡の氣持は猶更らよく分つた。泣いても泣いても泣き足りないやうに可哀さうなのは貞世だつた。愛子はいまに屹度自分以上に恐ろしい道に踏み迷ふ女だと葉子は思つた。その愛子に唯一一人の妹として、若しも自分の命が無くなつてしまつた後は……さう思ふにつけて葉子は内川を考へた。凡ての人は何かの力で流れて行くべき先きに流れて行くだらう。而して仕舞には誰れでも自分と同様に一人坊ちになつてしまふんだ。……どの人を見ても憐れまれる。葉子はさう思ひ耽りながら、靜かに西に廻つて行く月を見入つてゐた。その月の輪郭が段々ぼけて來て、空の中に浮き漂ふやうになると、葉

子の睫毛の一つ一つにも月の光が宿つた。涙が眼尻から溢れて兩方の頰の所を擦ぐるやうにする――と流れ下つた。口の中は粘液で粘つた許すべき何人もない。許さるべき何事もない。唯々あるがまゝ……唯々一抹の清い悲しい静けさ。葉子の眼はひとりでに閉ぢて行つた。整つた呼吸が軽く小鼻を震はして流れた。つやが戸をたてにさうつとその部屋に這入つた時には、葉子は病氣を忘れ果てたもののやうに、がたびしと戸を締める音にも目覺めずに安らかに寝入つてゐた。

四十八

その翌朝手術臺に上らうとした葉子は昨夜の葉子とは別人のやうだつた。激しい呼鈴の音で呼ばれてつやが病室に來た時には、葉子は寢床から起き上つて、認め終つた手紙の紙袋を封じてゐる所だつたが、それをつやに渡さうとする瞬間にいきなりの嫌になつて、肩をぶるぶる震はせながらつやの見てゐる前でそれをずた／＼に裂いてしまつた。それは愛子に宛てた手紙だつたのだ。今日手術を受けるから九時までに是非とも立會ひに來るやうにと認めたのだつた。いくら氣丈大でも腹を斷ち割る恐ろし

た。荒磯に波又波が千變萬化して追ひかぶさつて来ては激しく打ち掛け、眞白な飛沫を空高く突き上げるやうに、これと云つて取り留めのない執着や、憤りや、悲しみや、恨みやが蛛手によれ合つて、それが自分の周囲の人達と結び附いて、譯もなく葉子の心を掻きむしつてゐたのに、その夕方の不思議な経験の後では、一筋の透明な淋しさだけが秋の水のやうに果てしもなく流れてゐるばかりだつた。不思議な事には疑入つても忘れ切れない程な頭腦の激痛も痕なくなつてゐた。

神がかりに遇つた人が神から見放された時のやうに、葉子は深い肉體の疲勞を感じて、寢床の上に打ち伏さつてしまつた。さうやつてゐると自分の過去や現在が手に取るやうにはつきり考へられ出した。而して冷やかな悔恨が泉のやうに湧き出した。

「間違つてゐた……かう世の中を歩いて來るんぢやなかつた。然しそれは誰れの罪だ。分らない。然し兎に角自分には後悔がある。出來るだけ、生きてる中にそれを償つておかなければならぬ」

内田の顔がふと葉子には思ひ出された。あの嚴格な監督の教師は果して葉子の所に尋ねて來

てくれるか何うか分らない。さう思ひながらも葉子はもう一度内田に遇つて話をしたい心持を止める事が出来なかつた。

葉子は枕許のベルを押してつやを呼び寄せた。而して手文庫の中から洋紙でちぢた手帳を取り出さして、それに毛筆で葉子の云ふ事を書き取らした。

「木村さんに。

「私はあなたを詐つて居りました。私は是れから他の男に嫁入ります。あなたは私を忘れて下さいまし。私はあなたの方にける女ではないのです。あなたのお思ひ違ひを十分御自分で調べて見て下さいまし。

「倉地さんに。

「私はあなたを死ぬまで。けれども二人とも間違つてゐた事を今はつきり知りました。死を見てから知りました。あなたにはお分りになりますまい。私は何もかも恨みはしません。あなたの奥さんはどうなさつておいでです……私は一緒に泣く事が出来る。」

「内田の小父さんに。

「私は今夜になつて小父さんを思ひ出した。小母様によろしく。」

「木部さんに。

「一人の老女があなたの所に女の子を連れて參るでせう。その子の顔を見てやつて下さいまし。」

「愛子と貞世に。

「愛さん、貞ちゃん、もう一度さう呼ばしておくれ。それで澤山。」

「岡さんに。

「私はあなたをも怒つてはゐません。

「古藤さんに。

「お花とお手紙とを離有う。あれから私は死を見ました。」

七月十一日 葉子

つやはこんなぼつり／＼と短い葉子の言葉を書き取りながら、時々怪訝な顔をして葉子を見た。葉子の唇は淋しく震へて、眼にはこぼれない程度に涙が滲み出してゐた。

「もうそれでいゝ難有うよ。あなただけね、こんなになつてしまつた私の側にゐてくれるのは……それなのに、私はこんなに零落した姿をあなたに見られるのがつらくつて、來た日は途中から外の病院に行つて仕舞はうかと思つたのよ。馬鹿なつたわね。」

葉子は口ではなつかしさに笑ひながら、ほろほろと涙をこぼしてしまつた。

募つた。葉子は手欄に兩手をついてぶる／＼と震へながら、その女を何時までも／＼睨みつけた。女の方でも葉子の仕打ちに氣附いて、暫らくは意趣に見返す風だったが、やがて一種の恐怖に襲はれたらしく、干物を竿に通しめせずにあたふたと慌てて干物臺の急な階子を駆け下りてしまった。後には燃えるやうな青空の中に不規則な屑紙の波ばかりが眼をちか／＼させて残つてゐた。葉子は何故にともしれぬ溜息を深くついてまんじりとそのあからさまな景色を夢かなどのやうに眺め續けてゐた。

やがて葉子は又我れに返つて、ふくよかな髪の中に指を突つ込んで激しく頭の地をかきながら部屋に戻つた。

そこには寢床の側に洋服を着た一人の男が立つてゐた。激しい外光から暗い部屋の方に眼を向けた葉子には、たゞ眞黒な立姿が見えるばかりで誰れとも見分けがつかなくかつた。然し手術の爲めに醫員の一人が迎へに來たのだと思はれた。それにしても障子の開く音さへしなかつたのは不思議な事だ。這入つて來ながら聲一つかけないのも不思議だ。と、思ふ／＼得體の分らないその姿は、その圍りの物が段々明らかになつて行く間に、たつた一つだけ眞黒なまゝ

で何時までも輪郭を見せないやうだつた。謂はば人の形をした眞暗な洞穴が空氣の中に出が上つたやうだつた。始めの間好奇心を以てそれを眺めてゐた葉子は見詰めれば見詰める程、その形に實質がなくつて、眞暗な空虚ばかりであるやうに思ひ出すと、ぞう／＼と水を浴せられたやうに怖毛を震つた。「木村が來た」。何と云ふ事なしに葉子はさう思ひ込んでしまつた。爪の一枚々々までが肉に吸ひ寄せられて、毛と云ふ毛が強直して逆立つやうな薄氣味惡さが總身に傳はつて、思はず聲を立てようとしながら、聲は出ずに、肩ばかりが胸かに開いてぶるぶると震へた。而して胸の所に何か突きけるやうな具合に手を舉げたまゝ、びつたりと立ち止つてしまつた。

その時その黒い人の影のやうなものが始めて動き出した。動いて見ると何んでもない、それは矢張り人間だつた、見る／＼その姿の輪郭がはつきり判つて來て、暗さに慣れて來た葉子の眼にはそれが岡である事が知れた。

「まあ岡さん——」
葉子はその瞬間のなつかしさに引き入れられて、今まで出なかつた聲をやるやうな調子で出した。岡はかすかに頬を紅らめたやうだつた。

而していつもの通り上品に、一寸臺の上に味をついて挨拶した。まるで一年も牢獄にゐて、人間らしい人間に遇はないでゐた人のやうに葉子には岡がなつかしかつた。葉子とは何んの關係もない廣い世間から、一人の人が好意を籠めて葉子を見舞ふ爲めにそこに天降つたとも思はれた。走り寄つていつかりとその手を取りたい衝動を抑へる事が出来ない程に葉子の心は感激してゐた。葉子は眼に涙をためながら思ふまゝの振舞ひをした。自分でも知らぬ間に、葉子は、岡の側近く坐つて、右手をその肩に、左手を疊に突いて、しげ／＼と相手の顔を見やる自分を見出した。

「御無沙汰してゐました」

「よく入らして下さつてね」
どちらから云ひ出すともなく二人の言葉は親しげにからみ合つた。葉子は岡の聲を聞くと、急に今まで自分から逃げてゐた力が恢復して來たのを感じた。逆境にある女に對して、どんな男であれ、男の力がどれ程強いものであるかと思ひ知つた。男性の頼もしさがしみ／＼と胸に逼つた。葉子は我れ知らずすがり附くやうに、岡の肩にかけてゐた右手を握らして、膝の上に乘せてゐる岡の右手の甲の上からいつかり

い手術を年若い少女が見てはゐられない位は知つてゐながら、葉子は何がなしに愛子にそれを見せつけてやりたくなつたのだ。自分の美しい肉體が酷らしく傷けられて、そこから静脈を流れてゐるどす黒い血が流れ出る、それを愛子が見てゐる中に氣が遠くなつて、そのまゝそこに打つ倒れる。そんな事になつたらどれ程快いだらうと葉子は思つた。幾度來てくれると電話をかけても、何んとか口實をつけてこの頃見も返らなくなつた愛子に、これだけの復讐をしてやるのでも少しは胸がすく、さう葉子は思つたのだ。然しその手紙をつやに渡さうとする段になると、葉子には思ひもかけぬ躊躇が來た。若し手術中にはいたない藝言でも言つてそれを愛子に聞かれたら。あの冷刻な愛子が面も背けずにちつと姉の肉體が切りさいなまれるのを見続けながら、心の中で存分に復讐心を満足するやうな事があつたら。こんな手紙を受取つてもてんで相手にしないで愛子が來なかつたら……そんな事を豫想すると葉子は手紙を書いた自分に愛想がつきてしまつた。

つやは恐ろしいまでに激昂した葉子の顔を見やりもし得ないで、おづ／＼と立ちもやらずにそこにかしこまつてゐた。葉子はそれが堪らな

い程癪に障つた。自分に對して凡ての人が普通の人間として交らうとはしない。狂人にもでも接するやうな仕打ちを見せる。誰れも彼れもさうだ。醫者までがさうだ。

「もう用はないのよ。早くあつちにお出で。お前は私を氣狂ひでも思つてゐるんだらうね。……早く手術をして下さいつてさう云つてお出で。私はちゃんと死ぬ覺悟をしてゐますからつてね」

昨夕なつかしく握つてやつたつやの手の事を思ひ出すと、葉子は嘔吐を催すやうな不快を感じてかう云つた。汚い／＼何もかも汚い。つやは所在なげたそつとそこを立つて行つた。葉子は眼で嘔み付くやうにその後姿を見送つた。

その日天氣は上々で東向きの壁は觸つて見たら内部からでもほんのりと暖か味を感じるだらうと思はれる程暑くなつてゐた。葉子は昨日までの疲勞と衰弱とに似ず、その日は起きるとから黙つて臥てはゐられない位、體が動かしたかつた。動かす度毎に襲つて來る腹部の鈍痛や頭への混亂をいやが上にも募らして、思ひ存分の苦痛を味はつて見たいやうな捨鉢な氣分になつてゐた。而してふら／＼と少しよろけながら、衣紋も亂したまゝ部屋の中を片付けようとして床

の間の所に行つた。懸軸もない床の間の片隅には昨日青嵐が持つて來た花が、暑さの爲めに蒸れたやうに萎みかけて、甘つたるい香を放つてうなだれてゐた。葉子はガラス瓶ごとそれを持つて縁側の所に出た。而してその花のかたまりの中に無手と熱した手をつつ込んだ。死屍から來るやうな冷たさが葉子の手に傳はつた。葉子の指先きは知らず／＼縮まつて行つて沒義道にそれを爪も立たんばかり握りつぶした。握りつぶしては瓶から引き抜いて手欄から戸外に投げ出した。薔薇、ダリア、小田卷、などの色とりどりの花がばら／＼に亂れて二階から部屋の下に當る汚い路頭に落ちて行つた。葉子は殆んど無意識に一掴みづつさうやつて投げ捨てた。而して最後にガラス瓶を力任せに敲きつけた。瓶は眼の下で激しく壞れた。そこから溢れ出た水が乾き切つた縁側板に丸い斑紋をいくつとなく散らかして。

ふと見ると向うの屋根の物干臺に浴衣の類を持つて干しに上つて來たらしい女中風の女が、ちつと不思議さうにこつちを見つめてゐるのに氣がついた。葉子とは何んの關係もないその女までが葉子のする事を怪しむらしい様子をしてゐるのを見ると、葉子の狂暴な氣分は益々

を離して、袂から取り出したハンケチでそれを押し拭つた。眼に入る限りのもの、手に觸れる限りのものが又穢らはしく見え始めたのだ。岡の返事も待たずに葉子は疊みかけて吐き出すやうに云つた。

「貞世はもう死んでゐるんです。それを知らないでもあなたは思つていらつしやるの。あなたや愛子に看護して貰へば誰れでも難有い往生が出来ませうよ。本當に貞世は仕合せな子で生れた。……おゝ、貞世！　お前はほんとに仕合せな子だねえ。……岡さん云つて聞かせて下さい、貞世はどんな死に方をしたか。飲みたい死水も飲まずに死にましたか。あなたと愛子がお庭を歩き廻つてゐる中に死んでゐましたか。それとも……それとも愛子の眼が憎々しく笑つてゐるその前で眼のやうに息氣を引き取りましたか。どんなお葬式が出たんです。早桶は何處で註文なさつたんです。私の早桶は貞世のより少し大きくはないと這入りませんよ。……私は何んと云ふ馬鹿だらう、早く丈夫になつて思ひ切り貞世を介抱してやりたいと思つたのに……もう死んでしまつたのですものねえ。嘘です……それなら何故あなたも愛子もつとしげく私に見舞には來て下さらないの。あなたは今日私

を苦しめに……なぶりにいらしたのね……」

「そんな飛んでもない！」

岡がせきこんで葉子の言葉の切れ目に云ひ出さうとするのを、葉子は激しい笑ひで遮つた。

「飛んでもない……その通り。あゝ頭が痛い。

私は存分に詛ひを受けました。御安心なさい

ましとも。決して御邪魔はしませんから。私は

散々踊りました。今度はあなた方が踊つてい

番ですものね。……ふむ、踊れるものなら見事

に踊つて御覽なさいまし。……踊れるものなら、

は……」

葉子は狂女のやうに高々と笑つた。岡は葉子の

物狂ほしく笑ふのを見ると、それを恥ぢるやう

に眞紅になつて下を向いてしまつた。

「聞いて下さい」

やがて岡はかう云つてきつとなつた。

「何ひませう」

葉子もきつとなつて岡を見やつたが、すぐ口尻

に酷たらしい皮肉な微笑を湛へた。それは岡の

氣先きをへし折るに十分な程の皮肉さだつた。

「お疑ひなさつても仕方がありません。私、愛

子さんに深い親しみを感じて居ります……」

「そんな事なら何ふまでもありませんわ。私

をどんな女だと思つていらつしやるの。愛子さ

んに深い親しみを感じていらつしやればこそ、今朝はわざ／＼何日頃死ぬだらうと見に來て下

さつたのね。何んとお禮を申していゝか、そこ

はお察し下さいまし。今日は手術を受けますか

ら、死體になつて手術室から出て來る所をよ

つく御覽なさつてあなたの愛子に知らせて喜ば

してやつて下さいましよ。死に行く前に篤と

お禮を申します。繪島丸では色々御親切を難有

う御座いました。お蔭様で私は淋しい世の中か

ら救ひ出されました。あなたをお兄さんとお

慕ひしてゐましたが、愛子に對しても氣恥しく

なりましたから、もうあなたとは御縁を斷ちま

す。と云ふまでもない事ですわね。もう時間が

來ますからお立ち下さいまし」

「私、ちつとも知りませんでした。本當にその

お體で手術をお受けになるのですか」

岡は惘れたやうな顔をした。

「毎日大學に行くつやは馬鹿ですから何も申上

げなかつたんでせうよ。申上げてもお聞こえに

ならなかつたかも知れませんわね」

と葉子は微笑んで、眞青になつた顔にふりかゝ

る髪のを左の手で器用にきき上げた。その

小指は瘦せ細つて骨ばかりのやうになりながら

も、美しい線を描いて折れ曲つてゐた。

と捕へた。岡の手は葉子の觸覺に妙に冷たく響いて來た。

「永く／＼お遇ひしませんでしたわね。私あなたを幽霊ぢやないかと思ひましてよ。變な顔付きをしたでせう。貞世は……あなた今朝病院の方から入らしたの？」

岡は一寸返事を躊躇つたやうだつた。

「いゝえ家から來ました。ですから私今日の御様子は知りませんが、昨日までの所では段々およろしいやうです。眼さへ覺めていらつしやると『御姉様々々』とお泣きなされるのが本當にお可哀さうです」

葉子はそれだけ聞くともう感情が脆くなつてゐて胸が張り裂けるやうだつた。岡は眼ざとくもそれを見て取つて、悪い事を云つたと思つたらしかつた。而して少し慌てたやうに笑ひ足しながら、

「さうかと思ふと、大變お元氣な事もあります。熱の下つていらつしやる時なんかは、愛子さんに面白い本を讀んでお貰ひになつて、喜んで聞いておいでです」

と附け足した。葉子は直覺的に岡がその場の間に合せを云つてゐるのだと知つた。それは葉子を安心させる爲めの好意であるとは云へ、岡

の言葉は決して信用する事が出来ない。毎日一度づつ大學病院まで見舞ひに行つて貰ふつや言葉に安心が出來ないでゐて、誰れか眼に見通りを知らせてくれる人はいないかと焦つてゐた矢先き、この人ならばと思つた岡も、つや以上にいゝ加減を云はうとしてゐるのだ。この調子では、疾うに貞世が死んでしまつてゐても、

人達は岡が云つて聞かせるやうな事を何時までも自分に云ふのだらう。自分には誰れ一人として胸を開いて交際しようといふ人はゐなくなつてしまつたのだ。さう思ふと淋しいよりも、苦しいよりも、かつと取り上氣せる程貞世の身の上が氣遣はれてならなくなつた。

「可哀さうに貞世は……嘔吐せしてしまつたでせうね？」

葉子は口裏をひくやうにかう尋ねて見た。

「始終見つけてゐる故ですか、そんなにも見えません」

岡はハンケチで頸の圍りを拭つて、ダブルカラの合せを左の手でくつろげながら少し息氣苦しさうにかう答へた。

「何んにもいたゞけないんでせうね」

「ソツプと重湯だけです、兩方ともよく食べなさいます」

「ひもじがつて居りますか」

「いゝえそんなでも」

もう許せない、と葉子は思ひ入つて腹を立てた。腸チブスの豫後にあるものが、食欲がない。そんなしら／＼しい虚構があるものか。皆んな虚構だ。岡の云ふ事も皆んな虚構だ。昨夜は病院に泊らなかつたといふ、それも虚構でなくて何んだらう。愛子の熱情に燃えた手を握り慣れた岡の手が、葉子に握られて冷えるのも尤もだ。昨夜はこの手は……葉子は眸を定めて自分の美しい指にからまれた岡の美しい右手を見た。それは女の手のやうに白く滑らかだつた。然しこの手が昨夜は……葉子は顔を擧げて岡を見た。殊更に鮮かに紅いその唇……この唇が昨夜は……

眩暈がする程一度に押し寄せて來た憤怒と嫉妬との爲めに、葉子は危くその場に有り合せたものに噛み附かうとしたが、辛くそれを支へると、もう熱い涙が眼をこがすやうに痛めて流れ出した。

「あなたはよく嘘をおつきなさるのね」

葉子はもう肩で氣息をしてゐた。頭が激しい動悸の度毎に振へるので、髪のは小刻みに生き物のやうに動いた。而して岡の手から自分の手

るやうに眺められた。神經の末梢が大風に遇つたやうにざわ／＼と小氣味悪く騒ぎ立つた。心臓が息苦しい程時々働きを止めた。

やがて芳芬の激しい薬滴が布の上にたらされた。葉子は両手の脈所を醫員に取られながら、その香を薄氣味悪く嗅いだ。

「ひと一つ」

執刀者が鈍い聲でかう云つた。

「ひと一つ」

葉子のそれに應ずる聲は激しく震へてゐた。

「ふた一つ」

葉子は生命の尊さをしみて、と思ひ知つた。

死若しくは死の隣りへまでの不思議な冒險……

さう思ふと血は凍るかと思はれた。

「ふた一つ」

葉子の聲は益々震へた。かうして數を讀んで行く中に、頭の中がしん／＼と冴えるやうになつて行つたと思ふと、世の中がひとりでに遠退くやうに思へた。葉子は我慢が出来なかつた。いきなり右手を振りほどいて力任せに口の所を掻き拂つた。然し醫員の力はすぐ葉子の自由を奪つてしまつた。葉子は確かにそれにあらがつてゐる積りだつた。

してもう一度その腕に……やめて下さい。狂氣で死ぬとも殺されたくはない。やめて……人殺し」

さう思つたのか云つたのか、自分ながらどつちとも定めかねながら葉子は悶えた。

「生きる……死ぬのはいいや……人殺し……」

葉子は力のあらん限り戦つた、醫者とも藥とも……運命とも……葉子は永久に戦つた。然し葉子は二十も數を讀まない中に、死んだ者同様に意識なく醫員等の眼の前に横はつてゐたのだ。

四十九

手術を受けてから三日を過ぎてゐた。その間非常に望ましい経過を取つてゐるらしく見えた容體は三日目の夕方から突然激變した。突然の高熱、突然の腹痛、突然の煩悶、それは激しい驟雨が西風に伴はれて風がかつた天氣模様のなつたその夕方のことだつた。

その日の朝から何んとなく頭の重かつた葉子は、それが天候の爲めだとばかり思つて、強ひてさうぶ風に自分を説服して、憂慮を抑へつけてゐると、三時頃からどん／＼熱が上り出して、それと共に激しい下腹部の疼痛が襲つて來

た。子宮底穿孔！ なまじつか醫書を読み噛つた葉子はすぐそつちに氣を廻した。氣を廻しては強ひてそれを否定して、一時延ばしに容體の回復を待ちこがれた。それは然し無駄だつた。つやが慌てて當直醫を呼んで來た時には、葉子はもう生死を忘れて床の上に身を縮み上らしておい／＼と泣いてゐた。

醫員の報告で院長も時を移さずそこに駆けつけた。應急の手あてとして四個の水囊が下腹部にあてがはれた。葉子は病衣が一寸肌に觸るだけの事にも、生命をひつぱたかれるやうな痛みを覺えて思はずきやつと絹を裂くやうな叫び聲を立てた。見る／＼葉子は一寸の身動きも出来ない位疼痛に痛めつけられてゐた。

激しい音を立てて戸外では雨の脚が瓦屋根を敲いた。むし／＼する書間の暑さは急に冷え冷えとなつて、にはかに暗くなつた部屋の中に、雨から逃げ延びて來たらしい蚊がぶ／＼と長く引いた聲を立てて飛び廻つた。青白い薄闇に包まれて葉子の顔は見る／＼崩れて行つた。瘦せ細つてゐた頬は殊更らげつそりとこけて、高々たる鼻筋の兩側には、落ち窪んだ兩眼が、中有の中を處嫌はずおど／＼と何物かを探し求めるやうに輝いた。美しく頬を打いて延びてゐ

「それは是非お延ばし下さいお願いしますから……お醫者さんもお醫者さんだと思ひます」

「私が私だもんですからね」

葉子はしげ／＼と岡を見やつた。その眼からは涙がすつかり乾いて、額の所には脂汗が滲み出てゐた。觸れて見たら氷のやうだらうと思はれるやうな青白い冷たさが生え際にかけて漂つてゐた。

「ではせめて私に立會はして下さい」

「それほどまでにあなたは私がお憎いの？」

「麻酔中に私の云ふ麻言でも聞いておいて笑話の種になさうと云ふのね。えゝ、よう御座います入らつしやいまし、御覽に入れますから。」

詛ひの爲めに瘦せ細つてお婆さんのやうになつてしまつたこの體を頭から足の爪先きまで御覽に入れますから……今更にお惻れになる餘地もありますまいけれど――

さう云つて葉子は瘦せ細つた顔にあらん限りの媚びを集めて、流眇に岡を見やつた。岡は思はず顔を背けた。

そこに若い醫員がつやを伴つて這入つて來た。葉子は手術の支度が出来た事を見て取つた。葉子は黙つて醫員に一寸挨拶したまゝ衣紋をつくるつて直ぐ座を立つた。それに續いて

部屋を出て來た岡などは全く無視した態度で、怪しげな薄暗い階下段を降りて、これも暗い廊下を四五間通つて手術室の前まで來た。つやが戸のハンドルを廻してそれを開けると、手術室からはさすがに眩しい豊かな光線が廊下の方に流れて來た。そこで葉子は岡の方に始めて振り返つた。

「遠方をわざ／＼御苦勞さま。私はまだあなたに肌を御覽に入れる程の莫連者にはなつてゐませんから……」

さう小さな聲で云つて悠々と手術室に這入つて行つた。岡は勿論押し切つて後に跟いては來なかつた。

着物を脱ぐ間に、世話に立つたつやに葉子はかうやうやくにして云つた。

「岡さんが這入りたいと仰しやつても入れてはいけないよ。それから……それから（こゝで葉子は何がなしに涙ぐましくなつた）若し私が微言のやうな事でも云ひかけたら、お前に一生のお願ひだからね、私の口を……口を抑へて殺してしまつておくれ。頼むよ。吃度！」

婦人科病院の事とて女の裸體は毎日幾人となつて扱ひつけてゐる癖に、矢張り好奇な眼を向けて葉子を見守つてゐるらしい助手達に、葉子は

瘦せさらばへた自分をさらけ出して見せるのが死ぬよりつらかつた。ふとした出来心から岡に對して云つた言葉が、葉子の頭にはいつまでもこびり附いて、眞世はもう本當に死んでしまつたもののやうに思へて仕方がなかつた。眞世が死んでしまつたのに何を苦しんで手術を受ける事があらう。さう思はないでもなかつた。然し場合が場合であらうなるより仕方がなかつた。

眞白な手術衣を着た醫員や看護婦に圍まれて、矢張り眞白な手術臺は裏場のやうに葉子を待つてゐた。そこに近づくとき葉子は我れにもなぐ急におびえが出た。思ひ切り鋭利なメスで手際よく切り取つてしまつたら嘔さつぱりするだらうと思つてゐた腰部の鈍痛も、急に痛みが止つてしまつて、身體全體がしびれるやうにしやちこばつて冷汗が額にも手にもしとどに流れた。葉子は唯一一つの慰藉のやうにつやを頼みた。そのつやの願ひますやうな顔を唯一一つの便りにして、細かく震へながら仰向けに冷やつとする手術臺に横はつた。

醫員の一人が白布の口あてを口から鼻の上にあてがつた。それだけで葉子はもう息氣がつかま程の思ひをした。その癖眼は妙に冴えて眼の前に見る天井板の細かい木理までが動いて走

踏してゐるのを見ると、葉子はかつと腹が立つて、その怒りに前後を忘れて起き上らうとした。その爲めに少しなごんでゐた下腹部の痛みが一時に押し寄せて來た。葉子は思はず氣を失ひさうになつて聲を上げながら、脚を縮めてしまつた。けれども一生懸命だつた。もう死んだ後には何んにも残しておきたくない。何んにも云はないで死なう。さう云ふ氣持ばかりが激しく働いてゐた。

「焼いて」

悶絶するやうな苦しみの中から、葉子は唯一言これだけを夢中になつて叫んだ。つやは醫員に促されてゐるらしかつたが、やがて一臺の蠟燭を葉子の身近に運んで來て、葉子の見てゐる前でそれを焼き始めた。めら／＼と紫色の焰が立ち上るのを葉子は確かに見た。

それを見ると葉子は心からがっかりしてしまつた。これで自分の一生は何んにもなくなつたと思つた。もういゝゝ誤解されたまゝで、女王は今死んで行く……さう思ふとさすがに一味の哀愁がしみ／＼と胸をこそいで通つた。葉子は涙を感じた。然し涙は流れて出ないで、眼の中が火のやうに熱くなつたばかりだつた。

又もひどい疼痛が襲ひ始めた、葉子は神の締

め木にかけられて、自分の體が見る／＼瘦せて行くのを自分ながら感じた。人々が呼吸氣味惡げに自分を見守つてゐるのにも氣が付いた。

それでとう／＼その夜も明け離れた。

葉子は精も根も盡き果てようとしてゐるのを感じた。身を切るやうな痛みさへが時々遠い事のやうに感じられ出したのを知つた。もう仕残してゐた事はなかつたかと働きの鈍つた頭を懸命に働かして考へて見た。その時ふと定子の事が頭に浮んだ。あの紙を焼いてしまつては木部と定子とが遇ふ機會はないかも知れない。誰れかに定子を頼んで……葉子は慌てふためきながらその人を考へた。

内田……さうだ内田に頼まう。葉子はその時不思議ななつかしさを以て内田の生涯を思ひやつた。あの偏頗で頑固で意地張りな内田の心の奥の奥に小さく潜んでゐる澄み透つた魂が始めて見えるやうな心持がした。

葉子はつやに古藤を呼び寄せるやうに命じた。古藤の兵營にゐるのはつやも知つてゐる筈だ。古藤から内田にぶつて貰つたら内田が來てくれない筈はあるまい。内田は古藤を愛してゐるから。

それから一時間苦しみ續けた後に、古藤の例

の軍服姿は葉子の病室に現はれた。葉子の依頼を漸く飲みこむと、古藤は一圖な顔に思ひ入つた表情を湛へて、急いで座を立つた。

葉子は誰れにともし何にともなく息を引き取る前に内田の來るのを祈つた。

然し小石川に住んでゐる内田は中々にやつて來る様子を見せなかつた。

「痛い／＼……痛い」

葉子が前後を忘れ我れを忘れて、魂を搾り出すやうにかう呻く悲しげな叫び聲は、大雨の後の暗れやかな夏の朝の空氣をかき亂して、慘ましく聞こえ續けた。

(一九一一年一月——一九一三年二月、白樺所掲)
(一九一九年五月、新作)

た眉は、目茶苦茶に歪んで、眉間の八の字の所に近々と寄り集まつた。かさ／＼に乾き切つた唇からは吐く息氣ばかりが強く押し出された。そこにはもう女の姿はなかつた。得體の分らない動物が悶々溝掻いてゐるだけだつた。

間を置いてさし込んで来る痛み。鐵の棒を眞赤に焼いて、それで下腹の中を處女はずる／＼廻すやうな痛みが来ると、葉子は眼も口も出来るだけ堅く結んで、息氣もつけなくなつてしまつた。何人そこに人がゐるのか、それを見廻すだけの氣力もなかつた。天氣なのか嵐なのか、それも分らなかつた。稲妻が空を縦つて走る時には、それが自分の痛みが形になつて現はれたやうに見えた。少し痛みが退くとほとと吐息をして、助けを求めるやうにそこに附いてゐる醫員に眼ですがつた。痛みさへ治してくれば殺してもいいといふ心と、とう／＼自分には致命的な傷を負はしたと恨む心とが入り亂れて、旋風のやうに體中を通り抜けた。倉地がゐてくれたら、木村がゐてくれたら……あの親切な木村がゐてくれたら……そりや駄目だ。もう駄目だ。……駄目だ。貞世だつて苦しんでいるんだ、こんな事で、痛い／＼／＼／＼／＼つやはゐるのか。(葉子は思ひ切つて眼を開いた。

眼の中が痛かつた) ゐる。心配相な顔をして、……うそだあの顔が何が心配相な顔なものか。……皆んな他人だ……何んの縁故もない人達だ……皆んな暢氣な顔をして何事もせずに唯々見てゐるんだ……この惱みの百分の一でも知つたらあ、痛い／＼／＼！ 定子……お前はまだ何處かに生きてゐるのか、貞世は死んでしまつたのだよ、定子……私も死ぬんだ、死ぬよりも苦しい、この苦しきは……ひどい、これで死なれるものか。こんなにされて死なれるものか……何か、何處か……誰れか……助けてくれさうなものだに……神様！ あんまりです……。

葉子は身悶えも出来ない流痛の中で、シートまで濡れ透る程な脂汗を體中にかきながら、こんな事をつぎ／＼に口走るのだつたが、それは固より言葉にはならなかつた。唯々時々痛い痛いと云ふのが慘たらししく聞こえるばかりで、傷ついた牛のやうに叫ぶ外はなかつた。

ひどい吹き降りの中に夜が来た。然し葉子の容體は險惡になつて行くばかりだつた。電燈が故障の爲めに來ないので、室内には二本の蠟燭が風に煽られながら、薄暗くともつてゐた、熱度を計つた醫員は一度々々その側まで行つて、

眼をそばめながら度盛りを見た。

その夜苦しみ通した葉子は明方近く少し痛みから廻れる事が出来た。シートを思ひ切り掀んでゐた手を放して、弱々と額の所を撫でると、度々看護婦が拭つてくれたのにも係はらず、ぬる／＼する程手も顔も脂汗でしど／＼になつてゐた。「逆も助からない」と葉子は他人事のやうに思つた。さうなつて見ると、一番強い望みはもう一度倉地に會つて唯々一日その顔を見たいといふ事だつた。それけ然し望んでも叶へられる事でないのに氣付いた。葉子の前には暗いものがあるばかりだつた。葉子はほとと溜息をついた、二十六年間の胸の中の思ひを一時に吐き出して仕舞はうとするやうに。

「枕の下へ」

と云つた。つやが枕の下を探すとそこから、手術の前の晩につやが書取つた書き物が出て來た。葉子は一生懸命な努力でつやにそれを焼いて捨てろ、今見てゐる前で焼いて捨てろと命じた。葉子の命令は判つてゐながら、つやが躊躇

が立派なものを揃くからだ……世の中の奴には俺れ達の仕事が無解らないんだ……あ、俺れはもう駄目だ。

瀬古——ともちゃん、そのおはぎの舌ざりは一體どんなだつたい……僕には今日はおはぎがシステイン・マドンナの胸のやうに想像されるよ。ともちゃん、お前のその帯の間に、マドンナの胸の肉を少しばかり買ふ金がありやしないか。

とも子——なかつたわ。私随分長い間何んにも貰はないんですもの。

瀬古——許しておくれ。ともちゃん、僕達はお前んちの貧乏もよく知つてるんだが……

瀬本——悪い。そんなに長く何んにも君にやらなかつたかい、俺れ達は全く悪いや。待てよ、と。ない。無い答だ。今頃やる物がある位なら疾の昔にやつてゐるんだ。

戸部——お母さん怒らないか。

とも子——偶にいやな顔はしてよ。

戸部——ちや君は、もうこゝには寄りつかなくなるね。(うなる)

とも子——そんなこと……餘計なお世話よ。私のしたいやうにするんだから。

瀬古——瀬古の若様がひかへてゐる間は大丈夫

夫だが……

とも子——人間さの悪い……よして下さい。

戸部——うなる。

瀬古——ともちゃん、頼むから毎日来ておくれ。頼むよ。僕達は一人居らずお前を崇拜してゐるんだ。お前が歸ると、この畫室の中は荒野同様だ。僕達は寄つてたかつてお前を讚美して夜を更かすんだよ。尤もこの頃は、餘り夜更かしをすると、なほのこと腹が空くんで、少し控へ氣味にはしてゐるがね。

とも子——何んて讚美するの。とも子の奴はおかめつ面のあばずれだつて。

瀬古——だが収入が無くつちやお前んちも暮らせないねえ。

とも子——知れたこつてすわ、馬鹿々々しい。

瀬本——ちや矢張りドモ又がいつたやうに、君は何處かに河岸をかへるんだな。

とも子——さあねえ。さうするより仕方がないわね。私は一體畫伯とか先生とかのくつ附いた畫かきが大概ひなんだけれども、いやよ、本當にあいつらは……何んていふと、お高くとまる癖に、ひとの體にさはつて見たがつたりして……けれどもお金にはなるわね。

あなた方見たいに食べるものもなくなつちや

私は平日だつてやり切れないわ。大の男が五人も寄つてゐる癖に全くあなた方は甲斐性なしだわ。

戸部——畜生……出て行け、今出て行け。

とも子——だから餘計なお世話だつてさつき云つたぢやないの。いやな戸部さん。(悔しさうに涙を眼にためる)

戸部——うなる。

云はれなかつたつて、出たけりや勝手に出ますわ、あなたのお内儀さんぢやあるまいし。

戸部——俺れ達の仕事が無解られないからつて、裏切りをするやうな奴は……出て行け。

瀬古——腹がすくと人は怒りつづくなる。戸部の氣むづかしやの腹がすいたんだから、謂はばベガサスに悪魔が飛び乗つたやうなものだよ。お前氣を悪くしちやいけないよ。

とも子——だつて戸部さん見たいな解らず屋つてないんだもの。畫なんてちつとも賣れない畫かきばかりの、こんな穢ない小屋に、私もう半年の餘も通つてゐてよ。餘程難有く思つてい……譯だわ。それを人の氣も知らないで……

戸部——貴様は(瀬古を指し)……いつの顔が見たいばかりで

ドモ又の死(禁無斷興行)

(これはマーク・トウエインの小話から暗示を)
(得て書いたものだ。)

人物

花田

澤本

戸部

瀬古

青島

とも子——モデルの娘

(譯名、生蕃)

(譯名、ドモ又)

(譯名、若様)

若き畫家

處 置

時 現代 氣候のよい時節

澤本と瀬古とがとも子をモデルにして畫架に向つてゐる。戸部は物憂さうに床の上に臥ころんでゐる。

澤本——(瀬古に) おい瀬古、ドモ又がうなつてゐるぞ、死ぬんぢやあるまいな。

瀬古——僕も全くなりたくなるねえ。死にたくなるねえ。……ともちゃん、お前もおなか

がすいたらう。

とも子——もう物をいつてもいいの、若様。

瀬古——いゝよ。おなかですいたらう。

とも子——そんなでもないことよ。

戸部うなる。

どうしたの、戸部さん、あなた死ぬとこなの。

まだ早いわ。

瀬古——ともちゃんはこゝに來る前に何か食べ

て來たね。

とも子——えゝ食べてよ、おはぎを。

澤本——駄目、あゝ俺れはもう駄目だ。(腹をかへる) 唾も出なくなつちまひやがつた。

瀬古——ふうん、おはぎを……強勢だなあ、いくつ食べたい。

とも子——まあいやな瀬古さん。

瀬古——而しておはぎはあんこのかい、きなか

のかい、それとも胡麻……白狀おし、どれを

いくつ……

澤本——瀬古やめなにか、俺れは本當に怒るぞ。

飢い時にそんな話をする奴が……あゝ俺れはもう駄目だ。三日食はないんだ、三日。

瀬古——澤本は生蕃だけに藝術家としての想像力に乏しいよ。僕が今こゝにおはぎを出すか

ら見てろ——ぢやない聞いてろ。ともちゃん

が家を出ようとする、お母さんが、ともや、

こゝにこんなものが取つてあるから食べてお

いでな、といつて、臥入らずの中から、ラー

ヴェンダー色のあんなこと、ネーブルス・エロー

のきなこと、あのヴェラスケスが用ゐたとい

ふフアーリツシ・グレーの胡麻

戸部うなり聲を立てる。

澤本——だから貴様は若様だなんて輕蔑される

んだ。そんなだらしない空想が俺れ達の藝術

術に取つて何んの足しになつて思つてゐるん

だ。俺れ達は眞實の世界に立脚して、根強い

作品を創り出さなければならぬんだ。だから……

俺れは残念ながら腹がからつぽで、頭

まで少し變になつたやうだ。

とも子——生蕃さんは普段あんまり大喧ひをす

るから、こんな時に困るんだわ。それに

してもどうしてこゝにゐる人造の畫はこんな

に賣れないんでせうねえ。

澤本——わかり切つてゐるぢやないか。俺れ達

だと困ると思つてさう聞いたんだ。俺れはガランス位ほしくはない。それは俺れのだ。俺れによこせ。

澤本——ガランスが無けりや、俺れだつて食へさうなものを辭退する譯ぢやないぞ。ドモ又いゝ加減をいふな。これは俺れんだ。

潮古——さうがつくするなよ。待て。今僕が公平な分配をしてやるから。(パレットナイフでチョコレットに筋をつける)これで公平だらう。

澤本——四つに分けてどうするんだ。

潮古——(澤本と戸部にチョコレットを食ひかゝせながら)最後の一片は勿論僕達の守護女神ともちゃんに獻げるのさ。僕は何んといふ幻滅の悲哀を味はねばならないんだ。このチョコレットの代りにガランスが出て来て見ろ、君達はこれほど眼の色を變へて熱狂しはしなからう。ミューズの女神も一片のチョコレットの前には、醜い老いぼれ婆に過ぎないんだ。(今度は自分が食ひかく)ミューズを老いぼれ婆にしくさつたチョコレット奴、藝術家が今復讐するから覺悟しろ。(ぼり〜と甘さうに食ふ。とも子の方に向け最後の一片をさし出しながら)ともちゃん、さあ。

とも子——まあいやだ、誰れがひとの食べかいたものなんか食べるもんですか。

潮古——(驚いた様子をしながら)え、食べない。これを。食べないとはお前偉いねえ。お前の趣味がそれ程ノールに洗煉されてゐるとは思はなかつた。全くお前は見上げたもんだねえ。お前は全くいゝ意味で貴族的だねえ。レディイのやうだね。それぢや僕が……

澤本と戸部とが襲ひかゝる前に潮古逸早くそれを口に入れる。

潮古——來た〜花田達が來たやうだ。早く口を拭へ。

花田と青島登場。

花田——(指をぼきん〜鳴らす癖がある)お前達は始終俺れのことを俗物だ〜といつてゐやがつたな。若様どうだ。

潮古——僕は汚されたミューズの女神の爲めに今命がけの復讐をしてゐるところだ。待つてくれ。(口をものが〜させながら物を云ふ)

花田——貴様俺れのチョコレットを喰つてゐるな。この畫室にはそのほかに食ふものはない筈だ。俺れはそれを昨日畫箱の中にちやんとしまつておいたんだ。

澤本——隠し食ひをしておきながら……貴様は

チョコレットで畫が描けるとでも思つてんか。神聖なる畫箱にチョコレットを……だから貴様は俗物だよ。

花田——何んともいへ。然し俺れがゐるなかつたら、お前達は飢ゑ死にするより仕方ないところだつたんだ。

澤本——まあいゝから、貴様の計略といふもの報告を早くしろ。

花田——さうだ。愚圖々々しちやゐられない。おい青島、堂脇は九頭龍の奴と一緒に來るといつてたか。

青島——そんなことをいつてたやうだ。何しろ堂脇のお嬢さんといふのは、僕は全く憧憬してしまつた。その姿に見とれてゐたもんで、おやぢの言葉なんか、半分がた聞き漏らしちやつた。

澤本——馬鹿。

青島——あの娘なら藝術家が本當にわかるに違ひない。藝術家の妻になるために生れて來たやうな處女だ。あの大俗物の堂脇があんな天女を生むんだから皮肉だよ。而してかの女は、藝術に對する心からの憧憬を踏みにじられて、遂には大金持ちの馬鹿息子のところにも片付けられてしまふんだ……あんな人

とも子——焼餅やき。

戸部——馬鹿（うなる）

澤本——あゝ俺れはもう駄目だ。死ぬ位なら俺れは畫をかきながら死ぬ。畫筆を握つたまゝぶつ倒れるんだ。おい、ともちゃん、惡體をついてるひまにモデル臺に上つてくれ。それにしても花田や青島の奴、どうしたんだ。

瀬古——全くおそいね。計略を敵に見すかされてむざ／＼と討死したかな。一體計略々々つて花田の奴は何をする氣なんだらう。

澤本——おい、ともちゃん……乗るんだ。君は俺れ達のモデルぢやないか。若様も描けよ。

瀬古——うん描かう。一體計略々々つて……おい生菴、ガランスをくれ。

澤本——その色こそは余が汝に求めんとしつゝあつたものなんだ。貴様のところにも無いんか。

とも子——ドモ又さんもお描きなさいな。人つてものはうなつてばかりゐたつてお金にはならないわ、自動車ぢやあるまいし。

澤本——ドモ又ガランスを出せ。

戸部——（自分の畫箱の方に這ひずつて行つて中を探しながら）無い。

瀬古——ベガサスの腰ぬけはないぜ。お前も起

き上つて描けよ。花田の畫箱はどうだ。（隣りの部屋から畫箱を持ち出して探しながら歌ふ）

「一本のガランスをつくれせよ

空もガランスに塗れ

木もガランスに描け

草もガランスに描け

□□もガランスにて描き奉れ

神をもガランスにて描き奉れ

ためらふな、恥ぢるな

まつすぐにゆけ

汝の貧乏を

一本のガランスにて塗りかくせ」

村山槐多も貧乏して死んだんだ。あゝあ、あいつの畫箱にもガランスは無かつたらうな。

描き奉つてしまつたんだから。

「天にまします我等の神よ」途中はぬかじます。

「我等に日用の襦を今日も一ぢやない」今日こそは與へ給へ。」序でに我等にガランスを與へ給へ。あとは腹がへつてゐるからぬかします。

「アーメン。」えゝと我等にガランスを與へ給へ。ガランスを與へ給へ。我等に日用の襦を與へ給へ。（銀紙に包んだものを探り出す）我等に（銀紙を開きながら喜色を帶ぶ）

日用の襦を……我等に日用の襦を……に跳り上つて手に持った紙包をふりまはす）ブラボー！／＼ブラビツシモ……おゝ太陽は登つた。

一同思はず瀬古の周圍に走りよる。

澤本——食へさうなものが出て來たんか。

戸部——ガランスか。

瀬古——澤本、お前はさもない男だなあ、なんぼ生菴と譯名されてゐるからつて、美術家ともあらうものが「食へさうなもの」とは何んだね。

澤本——食へさうなものが出て來たんかといつただけで、何んでさもない。あゝ俺れはもう駄目だ。食へさうなものなんて云つたら駄目になつた。

畜生、俺れは畫を描く。ガランスが無けりや血で描くんだ。

畫架の方に行きかける。

瀬古——いゝ覺悟だ。そこでともちゃん、これを何んだと思ふ。これは勿體なくもチョコレットの食ひ残りなんだ。

澤本と戸部と勢込んで瀬古に逼る。

戸部——俺れによこせ。

瀬古——これはガランスぢやないよ。

戸部——ガランスかつて聞いたのは、ガランス

られた運命だから如何することも出来ない。
奴は苦しんだ、而してその苦しみと無限の淋しみを、幾枚もの畫に描き上げた。風景や静物にも素晴らしいのはあるが、その女の肖像畫に至つては神品だといふより外に言葉がない。

瀬古——おい、それは誰れの事だい。ともちやん、お前覺えがある。

花田——まあ、あとでわかるから黙つて聞け。

……ところで、奴が死んで見ると、俺れ達彼れの仲間は、奴の作品を最も正しい方法で後世に遺す義務を感じるのだ。ところで、俺れは九頭龍にいつた、偉くもお前さんが押しも押されもしない畫屋さんである以上、畫屋とお前さんの譽れにもなるし沽券にもなる。一つお前さんあれを一手に引受けて遺作展覽會をやる氣はありませんか。さうしたら、九頭龍の野郎、それは耳よりなお話ですから、私も一つ損得を捨てて乗らないものでもありませんが、それ程先生方がお讚めになるもんなら、展覽會の案内書に先生方から一言づつでもお言葉を頂戴することにしたらどんなものでせうといやがつた。

瀬古——僕はいやだよ、そんなのは。僕等の藝術に先生方の裏書きをして貰ふ位なら、僕は野末でのたれ死をして見せる。

とみ子——えらいわ若様。

瀬古——ひやかすなよ。

花田——全くだ。第一俺れ達のやうな頸骨の固い謀叛人に對して、大家先生達が裏書きどころか、俺れ達と先生方と何のかゝはりあらんやだ。……ところで俺れはいつた、そんなら、こちらでお斷りする外はない。奴の畫はそんなけちな畫ではない。大手をふつて一人で通つて行く畫だ。さういふものを發見するのが畫屋の見識といふものではないか。さういふ見識から儲けが生れて來なければ、大きな儲けは生れない。

選本——俗物の本音を出したな。

花田——俺れがそんなことでもして大きな儲けをしたら俗物とでも何んとでもいふがいゝ。融通のきかないのをいゝ事にして仙人ぶつてお前達とは少し違ふんだから。……ところで九頭龍が大分頭を縦にかしげ始めた。まあ來て御覽なさいといったら、それですぐ上りますすといった。……ところで、これからは本當の計略になるんだが、……おい皆んな嚴

肅な氣持ちで俺れのいふことを聞け。お前達の中誰れでも、この場に死んだとして、今まで描いたものを後世に遺して恥ぢないだけの自信があるか。どうだ。生落どうだ。

選本——無くつてどうする。

花田——よし。瀬古はどうだ。

瀬古——僕は恥ぢる恥ぢないで畫を描いてるんぢやないよ。僕は描きたいから描くんだ。

花田——わかつた。ぢやその氣持ちは純粹だな。

瀬古——今更らそんなことを……水くさい男だな。

花田——ドモ又はどうだ。

戸部——出來たものは皆ないやだ。けれども人のに比べれば、俺れの方がいゝと俺れは思つてゐる。俺れはそれを知つてゐる。

花田——青島の心持ちはもう聞いた。青島も俺れも、自分の仕事を後世に残して恥かしいとは思はない。俺れ達は皆んな謂はば子供だ。けれども子供がいつでも大人の來ぢやないからな。

一同——さうだとも。

花田——ぢやいゝか。俺れ達五人の中一人はこの場合死なねやならないんだ。あとの四人

をモデルにつかつて一度でも畫が描いて見た
いなあ。

瀬古——そんなか。

青島——そんなだとも。

とも子——今日はもう私、用がないやうだから
歸りますわ。

戸部——俺れ用があるよ。くだらないことばか
りいつてやがる、俺れが描くから……

とも子——又うなりを立てて、床の上にへたば
るんぢやなくつて。

戸部——いゝから……こいつら、うつちやつて
おけ。

戸部ひとりだけとも子をモデルにして描
きはじめる。その間に次ぎの會話が行

はれる。

花田——全くとちやんに歸られちや困るよ。

青島、貴様餘計なことをいふからいかんよ。

兎に角皆んな氣を落ちつけて俺れの報告
を聞け。ドモ又もとちやんも、そこで聞い

てるんだぜ……待てよ、(時計を出して見よ
うとして、無くなつてゐるのを發見)時計もセ

ブンか。セブンどころぢやないイレブン位

だらうもう。いそがないと間に合はない。今
朝俺れは青島と手分けをして、青島は堂脇ん

ちの庭に行き、俺れは九頭龍の店に行つた。
連てたまらない奴だ。はじめの間は中々取

りつく鳥もなかつたが、たうとう利を以てお
びき出してやつた。名は今一すいへないが

私共の仲間に一人、圖抜けてえらい天才がゐ
る、油でもコンテでも全然拔群で美校の校

長も、黒馬會の白先生も藤田先生も、凡
そ先生と名のつく先生は、彼れの作品を見た

ものは一人残らず、唯々驚嘆するばかりで、
是非展覽會に出品したらといふんだが、奴、

旋毛曲りで、うんといはないばかりか、てん
で今の太家なんか眼中になく、貧乏しながら

も、黙つてこつ／＼と畫ばかり描いてゐた。
だから世間では、俺れ達の仲間の外に、奴の

ことを知つてゐるのは一人だつてゐやあしな
い。

澤本——うん全くそれはその通りだ。

花田——ところがその男が貧に逼り、飢ゑに疲
れてたうとう昨日死んでしまつた。

澤本——馬鹿をいふない。俺れは兎に角まだ生
きてるぞ。

花田——誰れが死んだのはお前だつてさういつ
たい。……ところで俺れ達は實に悲嘆に暮れ
てしまつた。一體俺れ達が、五人揃つて貧乏

のどんづまりに引きさがりながら、鼻歌ま
じりで勇んで暮してゐるのは、誰れにもあづ

けておけない仕事があるからだ。その仕事を
し遂げるまでは、縦令死神が手をついて迎へ

に來ても、死神の方をたゞ殺す位な勢ひで
やつてゐるんだ。その中でもがんばり方とい

ひ、力量といひ、一段も二段も立ち勝つてゐた
のは奴だつた。東京の隅つこから世界の美術

をひつくり返すやうな仕事が出るのを俺れ達
は彼れに於て待してゐた。だのに、餘りに

勝れたものは神も妬むのだらう、奴は倒れて
しまつた。奴は火だつた。焔だつた。奴の燃

えることは奴の滅びることだつたんだ。

戸部——貴様さういつたか。

花田——うむ。

戸部——よくいつた。

花田——俺れはまだかうもいつた、奴には一人
の弟があつて、その弟の細君といふのが、

心と姿との美しい女だつた。而してその
女が毎日俺れ達の書室に來てモデルになつて

くれた。俺れ達のやうな、物質的には無能力
に近いグルーブの爲めに盡してくれるその女

の志は美しいものだつた。奴は竊かにそ
の弟の細君に戀をしてゐた。けれども定め

だ。いゝか。ところでともちゃんの手スの兄貴にあたるのが、本當は俺れ達五人の仲間の一人で、それがともちゃんに戀をして、貧乏と戀との爲めに業半ばにして死ぬことになるんだ。今度はわかつたらう。……まだ解らないのか。……濟度しがたい奴だなあ。ぢや青島、實物でやつて見せるより仕方がない、あれを持ち込もう。

花田と青島黒布に被はれたる寢棺を擔き込む。

とも子——いや……縁起の悪い……

澤本——全く貴様はどうかしやしないか。

花田——さあ、ともちゃん、俺れ達の中から一人選んでくれ。俺れが引き受けた、お前の旦那は決して死なしないから。

とも子——だつてそんな寢棺を持ち込む以上は……

花田——死骸になつてこゝに這入る奴はこれだ。(といひながら、壁にかけられた石膏面を指す) こいつに繪具を塗つてお前の選んだ男の代りに入れればいゝんだよ。例へば俺れがお前に選ばれたとするね。本當にさうありたいことだ。すると、俺れの弟となつて、お前と夫婦になるんだ。而してこいつ

(石膏面) が俺れの身代りになつてこの棺の中にはひるんだ。

とも子——はゝあ……少し解つて来てよ。

花田——わかつたかい。天才畫家の花田は死んでしまふんだ。本當にもうこの世の中にはなくなつてしまふんだ。その代り花田の弟といふのがひよこり出来上るんだ。それが俺れさ。而してお前のハスさ。

とも子——はゝあ……大分解つて来てよ。

花田——な。そこに大俗物の九頭龍と、頭の悪い美術好きの成金堂脇左門とが、娘でも連れてはひつて来る。花田の弟になり切つた俺れがお前と一緒にこゝにゐて愁歎場を見せるといふ仕組みなんだ。どうだ仙人共もわかつたか。花田の弟になる俺れは生きて行くが、花田の兄貴なる本當の花田は死んだことにするんだ。ぢやない死ぬことになるんだ。

現在死なねばならないんだ。それだから俺れは始めから死ぬんだ(といつて聞かせてゐるのに。貴様達はまるで木偶の坊見ただか。……ところで俺れの弟は兄貴の志をついで天才畫家になるとしても、兎に角俺れが死なねばならぬといふのは悲壯な事實だよ。死にさへすれば、殊に若死さへすれ

ば、大抵の奴は天才になるに決つてゐるんだ。(石膏面をながめながら) 死は如何なる場合に於ても、嚴かな悲しいものだ。だから、犠牲を拂ふからには、俺れがともちゃんの手スとして選ばれる位(くらい)のことが必要になるんだ。

とも子——何もあなたなんかまだ選びはしないことよ。

花田——さうつけ／＼やり込めるものぢやないよ、女つてものは。

澤本——俺れはもう駄目だ。俺れは或る女を戀してゐた。而して飢ゑが逼つて来た、あゝ俺れは死んだ方がいい。俺れは天才畫家として畫筆を握つたまゝ死にたいよ。

とも子——花田さん、私、死ぬ人を旦那さんにするんぢやないのね。私の旦那さんが死ぬことになるのでせう。

澤本——さうつけ／＼やり込めるものぢやないよ、女つてものは。

花田——皆んな俺れの計略が解つたな。俺れ達は今俺れ達の共同の敵なるフィリステインと戦はねばならぬ時が来た。青島、お前と堂脇との遭遇戦についても簡單に報告しろよ。

青島——僕(わが)はかまはず堂脇の家の廣い庭にはひ

が書を描きついで行く費用を造り出すための犠牲となつて俺れ達のグループから消え去らなければならぬんだ。

瀬古——おい、花田、お前氣でも違つたのか。

僕達は藝術家だよ。殉教者ぢやないよ。

花田——藝術の爲に殉死するのさ。その位の意氣があつてもいいだらう。その代り死んだ奴の畫は九頭龍の手で後世まで残るんだ。

澤本——何んといふ智慧のない計略を貴様は考へ出したもんだ。そんなことを考へ出した奴は自分が先きに死ぬがいゝんだ。

花田——俺れが死んでいゝかい。さうだもう一ついふことを忘れてゐたが、死ぬ番にあ

たつた奴は、その裏美としてともちゃんを奥さんにすることが出来るんだ。この大事な條件をいふのを忘れてゐた。おいともちゃん：ドモ又、もう拙くのをやめるよ……ともちゃん、お前頼むから俺れ達五人の中の誰れでもいゝ、お前の氣に入つた人と本當に結婚してくれないか。

とも子——何んですねえ途轍もない。

花田——俺れ達五人の中に一人、お前の旦那にしてみてもいゝと思ふのがあつてお前いつかのろけてゐたぢやないか。

とも子——そりや、そりやゐないこともないことよ。

花田——待てよ。「ゐないこともないことよ」といふのは結局、ゐるといふことだね。

とも子——知らないわ。

花田——女が知らないわ」といつたら、もうしめたもんだ。お前が一人選んだら、俺れ達あとに残された四人は、綺麗に未練を捨てて、二人が一緒に出来るやうに、極力奔走する。

成功させるために屹度盡力する。だからお前、本氣になつてこの五人の中から選ぶんだ。そこに行く俺れ達ボヘミヤンは自由なものだ。ともちゃんだつて、俺れ達の仲間になつてくれる以上はボヘミヤンだ。ねえ。さうだらう。構はないから選び給へ。俺れ達は縦令選にもれても、ストイツクのやうに忍ぶから……心配せずに。俺れ達の方にはともちゃんを細君に持つのに反對する奴は一人もゐまい。どうだ皆ないゝか。よければ「よし」といへ。

一同——よし。

とも子——選んだらどうするの。

花田——そいつが残る四人の爲めに死ななければならぬんだ。

とも子——元談もいゝ加減にするものよ、人を馬鹿にして。(涙ぐむ)

花田——なあに、元談ぢやないさ。わけはない、ころつと死にさへすりやいゝんだよ。

戸部——花田、貴様は殘酷な奴だ。……ともちゃんをすぐ寡婦にする……そんな貴様。

花田——(初めて思ひついたやうに堪らない程笑ふ) 何んだ、貴様達はともちゃんのハスが本當に……

瀬古——死ななけりやならないんだらう。

花田——死ぬことになるんださ。

瀬古——同じぢやないか。

花田——同じぢやないさ。

青島——花田のいひ方が悪いんだよ。死ぬことになるんぢやない、つまり死んだことにするんだよ。わかつたらう。つまり死ぬんぢやない、死んでしまふこと……でもないかな。

花田——つまり、かうど。いゝか、頭を冷靜にしてよく聞け。いゝか。ともちゃんに選ばれた奴は實はその選ばれた奴の弟なんだ。いゝか。而してともちゃんとその弟とは前から夫婦なんだ。ともちゃん、俺れ達に理解と同情とを持つてゐて、モデルも飾へない程貧乏な俺れ達のためにモデルになつてくれたの

さん：あなた若様ね。きさくで親切で、顔付ききだつて一番上品で綺麗だし、お友達にはうつてつけない方ね。でもあなた、屹度日本なにかいやだつて外國にでも行つちまふんでせう。お大事にお暮しなさい。戸部さんは吃りで、痼癥持ちで、氣むづかしやね。いつまでたつてもあなたの畫は賣れさうもないことね。けれどもあなたは強がりなくせに變に淋しい方ね。……

戸部——畜生……

とも子——惡口になつたら、許して頂戴。でも私は心から皆さんにお禮しますわ。私見たいながらくした物のわからない人間を、皆さんで可愛がつて下さつたんですもの。お金にはちつともならなかつたけれども、私、何處に行くよりも、こゝに來るのが一番嬉しかつたの。ともどもに苦勞しながら、銘々が一番偉いつもりで、仲よく勉強してゐるのを見てゐると、何んだか知らないが、私時々涙がこぼれつちまひましたわ。……でも私、自分の旦那さんを極めなければならぬんだわ。いやになるねえ。私がいい人を選んで、どうか怒らないで頂戴よ。私、これでも身の程をわきまへて選ぶつもりですから……（急

に戸部の前かけ寄り、びつたりそこに坐り頭を下げる）戸部さん、私あなたのお内儀さんになります。怒らないで頂戴よ。私あなたのことを思ふと、變に悲しくなつて、泣いちまふんですもの……

戸部——君……冗談をいふない、冗談を……花田——ともちゃん、出來したぞ。全くお前に

似合はしい選び方だ。だがドモ又におはちが廻らうとは俺れも實は今の今まで思はなかつたよ。ともちゃんが戸部一人のものになつて明日から來なくなると思ふと、急に俺れ達の上には秋が來たやうだなあ……然しもう何もいふな。皆んなもう何もいふな。勇ましく運命に黙従する外はない。而して戸部ともちゃんとの未來を祝福しようぢやないか。

戸部——俺れはともちゃんをなぐつたことがある。

とも子——え、たしかに二度なぐられてよ。

戸部——それでも俺れのところ來る氣か。

とも子——行きます。その代り、今度こそはなぐられてばかりはゐないわ。

潮古——夫婦喧嘩の仲裁なら僕がしてやるよ。

戸部——餘計な世話だ。

とも子——（同時）餘計なお世話よ。

青島——氣が強くなつたなあ。

花田——それどころぢやない。もうおつつけ九頭龍等がやつて來る。おい若夫婦、お前達は今日は花形だから忙しいぞ。ともちゃん

ぢやない、奥さんは庭にお出なすつて、お兄さんの栞を飾る花をお集め下さいませんか。ドモ又、お前が描いた畫といふ畫は何んでも

かんでも持ち出してサインをしる。而して青島、お前一つこの石膏面に繪具を塗つてドモ又の死顔らしくしてくれ。それから澤本と瀧古とは部屋を片付けて……但し畫室らしく片

付けろよ。藝術家の尊嚴を失ふ程きちんと片付けちや駄目だよ。美的にそこいらを散らかすのを忘れちやいかんぜ。そこで俺れはと

……俺れはドモ又をドモ又の弟に仕立て上げる役目にまはるから……お前の畫は大抵隣りの部屋にあるんだらう。これはお前んだ。

これも……皆んな持つて行かう。

とも子は庭に、戸部と花田別室に入り去る。

青島——こんなアボロの面にくら繪具をなすりつけたつて、ドモ又の顔にはなりやしない

や。もう少し獅子鼻でできばくのある まあこれだな、ベトーエンで間に合はせるんだな。

りこんで畫を描いてゐてやつた。さうしたら堂脇がお嬢さんを連れて散歩にやつて来た。堂脇はこんな風に歩いて、お嬢さんはこんな風に歩いて。而して俺れの脇に突つ立つて畫を描くのをちつと見てゐたつげが、庭にはひりこんだのを怒ると思ひの外、ふんと感心したやうな鼻息を漏らした。お嬢さんまでが「まあ綺麗なこと」と御意遊ばした。僕はしめたと思つて、物をいひ出すつぎ徳に苦心したが、あんな海千山千の動物には俺れの言葉はともてわからないと思つて黙つてゐた。全くあんな怪物の前に行くに薄氣味の悪いものだね。さうしたら堂脇が案内をさしきり聲で、「失禮ながらどちらで御勉強です、大層お見事だが」と切り出した。僕は花田に教へられたとほり、自分の畫なんか何んでもないが、昨日死んだ仲間の畫は實に大したものだ、若しそれが世間に出たら、一世を驚かすだらうと、一生懸命になつて吹聴したんだ。いかもの食ひの名人だけあつて堂脇の奴すぐ乗りに氣になつた。僕は九頭龍の主人が來て見るこゝになつてゐるから、何んなら連れ立つておいでなさいといつて飛び出して來た。何しろお嬢さんがちか／＼動物電氣を送るんで、僕

はとても長くゐた、まれなかつた。どうして最も美を憧憬する僕達の世界には、ナチュール、モルトの外に美がよりつかないんだらうかなあ。

瀬古——どうかしてそのお嬢さんを描かうぢやないか。

青島——あの人がモデルになつてくれれば僕はモナリザ以上のものを描いて見せるよ、吃度。

瀬古——僕はワットーの精神でそのデカダンの美を見せはめてやる。

青島——見もしないで何をいふんだい。瀬古——君は藝術家の想像力を……

花田——報告終り。事務第一。さ、皆んな覺悟はいゝか。ともちゃん、さあ選んでくれ。

とも子——私……恥かしいわ。瀬古——お前の無邪氣さでやつちまひ給へ。

何、一と言、誰れつていつてしまへば、それだけのことだよ。

とも子——ちや一生懸命で勇氣を出して……けど、私がこれつていつた人は、いやだなんていはないで頂戴ね。でないと、私本當に自殺してよ。

花田——誓ひを立てたんだから皆んな大丈夫

だ。

瀬古は自信をもつて歩きまはる。花田は重いものを度々落して自分の方に注意を促がす。澤本は苦痛の表情を強めて同情を惹く。青島はとも子の前に來つてちつとその顔を見ようとする。戸部は畫箱の掃除をはじめた。

とも子——(人々から顔をそむけ)では始めて

よ……花田さん、あなたは才覺があつて畫がお上手だから、いまに立派な畫の會を作つて、その會長さんにでもおなりなさるわ。お嫁にしてもらひたいつて、學問の出来る美しい方が掃いて捨てる程集まつて來てよ吃度。澤本さんは男らしい、正直な生藩さんね。あなたとは随分口喧嘩をしました、奥さんが出來たら随分可愛がるでせうね、而してお子さんも澤山出来るわ。而して物干竿におしめが賑やかにならびますわ。青島さんは花田さんと一緒に會をやつて、吃度傳くなるわ。いまに皆んながあなたの畫を認めて大騒ぎする時が來てよ。而して堂脇さんとやらが、美しいお嬢さんを貰つて下さいつて、先方から頭を下げて來るかも知れないわ。けれどもあんまり浮氣をしちやいけなくつてよ。瀬古

た時、あなたなんて黙りこくつた醜男なん、
ゐるんだかゐないんだかわからなかつたんで
すけど、だんく、だんだあん好きになつて
来てしまひましたわ。花田さんが私の旦那さ
んに誰れでも選んでいゝつていつた時は、本
當は随分嬉しかつたけれど、あなたは乾度私
が嫌ひなんだと思つて随分心配したわ。

戸部——何しろ俺れは幸福だ……俺れは自分の
藝術の外には、もう何んにも望みはないよ。
……俺れはもう君をなぐらないよ。

とも子——（嬉しさに涙ぐみつゝ）なぐつても
いゝことよ。いゝから私を可愛がつて下さい
ね。私も一生懸命であなたを可愛がります
わ。あなたは寶の珠のやうに、可愛がれば可
愛がる程光りが出て来る人だつてことを、私
ちやんと知つててよ。あなたは泥だらけな寶
の珠だわ。

戸部——俺れは口がきけないから……思つたこ
とがいへない……

とも子の手を取つて引き寄せようとし
る。澤本突然戸を開けて登場。

澤本——おうい、ドモ又……と、あの、貴様の
その上衣をよこせ、貴様の兄貴に着せるんだ
から。その代りこれを着ろ……ともちゃん花

が取れたかい。それが。それをおくれ、棺を
飾るんだから……

澤本退場。……戸部とも子寄り添はん
とす。別室にて哄笑の聲。二人口惜しさ
うに離れたところに坐る。

とも子——今夜歸つたら、私すぐお母さんにさ
ういつて、いやでも應でも承知させますわ。
で、今度のあなたの名前は……

戸部——俺れは何んといふ名前にするかな……

とも子——いゝわ、私の名を上げるから、戸
部友又ぢやいけない。それぢやをかしいわ
ね。あのね……あなた又畫かきになるんでせ
う……

とも子近づかうとする。瀬古登場。
瀬古——ちよつとく。こゝにお前の畫がまだ
残つてゐたから……

戸部——うるさい奴だなあ……
瀬古退場。別室にて哄笑の聲。やがて一
同飾りを終つて棺をかついで登場。

花田——早く……もうやつて来るぞ。棺の
こつちにこの椅子をおいて……これをこゝ
に、おい青島……それをそつちにやつてくれ
……おい皆んな手傳へな。一時間の後には
俺れ達はしこたま御馳走が食へる身分になる

……おい皆んな手傳へな。一時間の後には
俺れ達はしこたま御馳走が食へる身分になる

んだ。生着、そんな及び腰をするなよ、みつ
ともない。……これで大體いゝ……さあ皆ん
な舞臺よきところに坐れ。若夫婦はその椅子
だ。何しろ俺れ達、一人の大事な女人を犠
牲に供して飯を食はねばならぬ悲境にある
んだ。ドモ又は俺れ達五人の仲間から消えて
なくなるんだ。ドモ又の弟はその細君のと
もちゃん旅の空に出かけることになるだら
う。俺れ達のやうに良心を以て良心に働く
人間がこんな大きな損失を忍ばねばならぬと
いふのは世にも悲惨なことだ。然し俺れ達は
自分の愛護する藝術の爲めに最後まで戦はね
ばならない。俺れ達の主張を成就するため
には手段を選んではゐられなくなつたんだ。

俺れ達はここの棺の中に死んで横はるドモ又の
靈にかけて誓ひを立てよう。俺れ達はこの友
人の死に償ひするだけの立派な藝術を生み出
すことを誓ふ。

一同——誓ふ。

花田——俺れ達は力を協せて、九頭龍といふ悪
ブローカー及び堂脇といふ似而非美術保護者
の金銭から、能ふかぎりの罰金を支拂はせる
ことを誓ふ。

一同——誓ふ。

花田——俺れ達は力を協せて、九頭龍といふ悪
ブローカー及び堂脇といふ似而非美術保護者
の金銭から、能ふかぎりの罰金を支拂はせる
ことを誓ふ。

一同——誓ふ。

花田——俺れ達は力を協せて、九頭龍といふ悪
ブローカー及び堂脇といふ似而非美術保護者
の金銭から、能ふかぎりの罰金を支拂はせる
ことを誓ふ。

一同——誓ふ。

花田——俺れ達は力を協せて、九頭龍といふ悪
ブローカー及び堂脇といふ似而非美術保護者
の金銭から、能ふかぎりの罰金を支拂はせる
ことを誓ふ。

一同——誓ふ。

花田——俺れ達は力を協せて、九頭龍といふ悪
ブローカー及び堂脇といふ似而非美術保護者
の金銭から、能ふかぎりの罰金を支拂はせる
ことを誓ふ。

青島 塗りはじめる。

澤本——あゝ俺れはもう駄目だ。興奮が過ぎ去つたら急に父腹がへつて来た。一體花田の奴餘計なことをしやがる奴だ。……あの可憐な自然児ともちやんも、人妻なんていふ人間じみたものに……あゝ、俺れはもう駄目だ。若様、貴様勝手に掃除しろ。

瀬古——僕もすっかり悲觀したよ。もとはつていへば青島が悪いんだ。堂脇のお嬢さんのモデル事件さへ無ければ、運命はもつと正しい道筋を歩いてゐたんだ。

青島——僕が悪いんじゃない、堂脇のお嬢さんが存在してゐたのが悪いんだ。お嬢さんの存在が悪いんじゃない、その存在を可能ならしめた堂脇のぢぢい存在してゐたのが悪いんだ。つまり堂脇のぢぢいが俺れ達の運命をつかり狂はしてしまつたんだよ……どうだ少しドモ又似て来たか……他人の運命を狂はした罪科に對して、堂脇は存分に罰せらるべきだよ。

澤本——さうだとも。何しろ彼奴の金力が美の標準を日茶苦茶にする爲めに使はれてゐたんだ。その爲めに俺れ達は三度のものも食へない程に飢えてしまふんだ。ドモ又が死んで色

づけのペトーエンになる結果に陥つたんだ。

ドモ又の命が買ひもどせる位の罰金を出させなけりや、俺れ達の腹の蟲は納まらないや。

瀬古——而してそれが結局堂脇や九頭龍を教育することになるんだからなあ。いくら高く買はせたつてドモ又の畫は高くはないよ。今度あいつらは生れてはじめて畫といふものを拜んだ。うんと高く賣りつけてやるんだなあ。

澤本——さうすると、俺れ達はうんと飯を食つて底力を養ふことが出来るぞ。

青島——さうだ。

澤本——あゝ早く我等の共同の敵なるフィリステイン共が来るといふなあ。おい若様、少し働かう。

二人であらかた畫室を片付ける。花田と戸部とはがはひつて来る。戸部は頭を虎斑に刈りこまれて髭を剃り落されてゐる。

花田——諸君、ドモ又の戸部が死んだについて、その令弟が急を聞いて尋ねて來られたんだ。

諸君に紹介します。

一同笑ひながら頭を下げる。

戸部——俺れ……ぢやない、俺れの兄貴の死顔を一寸見せてくれ。

青島——どうだこれで。(石骨面を見せる)

戸部——俺れの兄貴は醜男だつたなあ。

花田——醜男はいゝが髭が生えてゐないぢやないか。近所の人が侮みに來るとまづいから、刺り落した髭を植えてやらう。それから體の方も造らなきや。この棺を隔りに持つて……おいドモ又の弟、お前そこで残つたのにサインをしな。

戸部を残し一同退場。戸部しきりとサインをしてゐる。とも子花を持ちて入場。

とも子——(戸部とは氣がつかず次ぎの部屋に行かうとする)あの、御免下さいまし。

戸部——ともちやん……俺れだ……俺れだ……

とも子——あら……あなた戸部さんぢやなくつて。

戸部——俺れは君のハスで……戸部の弟だよ。

とも子——あらさうだわ。まあそれに違ひないわ。戸部さんの弟つて、戸部さんより若い方ねえ。

戸部——ともちやん……俺れは君に遇つた時から、君が好きだつた。けれども俺れは、女

なんか縁はないと思つて……諦めてゐたんだが……

とも子——御免なさいよ。私、はじめこゝに來

惜みなく愛は奪ふ

一

太初に道があつたか行があつたか、私はそれを知らない。然し誰れがそれを知つてゐよう、私はそれを知りたいと希ふ。而して誰れがそれを知りたいと希はぬだらう。けれども私はそれを考へたいとは思はない。知る事と考へる事との間には埋め得ない大きな溝がある。人はよくこの溝を無視して、考へることによつて知ることに達しようとは思ひだらうか。私はその幻覺にはもう迷ふまいと思ふ。知ることは出来ない。が、知らうとは欲する。人は生れると直ちにこの「不可能」と「欲求」との間にさいなまれる。不可能であるといふ理由で私は欲求を抛つことが出来ない。それは私として何んといふ我儘であらう。而して自分なら何んといふ可憐さであらう。

太初の事は私の欲求をもつてそれに私を結び付けることによつて満足しよう。私にはとて目あてがないが、知る日の來らんことを欲求

して満足しよう。

私がこの奇異な世界に生れ出たことについては、而してこの世界の中にあつて今日まで生命を續けて來たことについては、私は明らかに知つてゐる。この認識を誇るべきにせよ、恥づべきにせよ、私は胡魔化しておくことが出来ない。私は私の生命を考へてばかりはゐない。確かに知つてゐる。哲學者が知つてゐるやうに知つてゐるのではないかも知れない。又深い生活の冒險者が知つてゐるやうに知つてゐるのではないかも知れない。然し私は知つてゐる。この私の所有を他のいかなるものもくまらずこれは出来ない。又他のいかなる威力も私からそれを奪ひ取ることは出来ない。これこそは私の存在が所有する唯一つの所有だ。

恐るべき永劫が私の周囲にはある。永劫は恐ろしい。ある時には氷のやうに冷やかな、凍然としてよどみ互つた或るものとして私にせまる。又ある時は眼もくらむばかりかどやかし、瞬時も動搖流轉をやめぬ或るものとして私

にせまる。私はそのものの隅か、中央かに落された點に過ぎない。廣さと高さを點は持たぬと幾何學は私に教へる。私は永劫に對して私自身を點に等しいと思ふ。永劫の前に立つ私は何ものでもないだらう。それでも點が存在する如く私も亦永劫の中に存在する。私は點となつて生れ出た。而して瞬く中に跡方もなく永劫の中に溶け込んでしまつて、私はゐなくなるのだ。それも私は知つてゐる。而して私はゐなくなるのを恐ろしく思ふよりも點となつてこゝに私が私として生れ出たことを恐ろしく思ふ。

然し私は生れ出た。私はそれを知る。私自身がこの事實を知る主體である以上、この私の生命は何んといつても私のものだ。私はこの生命を私の思ふやうに生きることが出来るのだ。私の唯一の所有。私は凡ての懷疑にかかはらず、結局それを尊重愛撫しないであらうか。涙にまで私は自身を痛感する。

一人の旅客が永劫の道を行く。彼れを彼れ自身かのやうに知つてゐるものは何處にもゐない。陽の照る時には、彼れの忠實な伴侶はその影であるだらう。空が曇り果てる時には、而して夜には、伴侶たるべき彼れの影もない。その時彼

花田——その爲めには日頃の馬鹿正直を抛つて、巧みに權謀術數を用ふことを誓ふ。

一同——誓ふ。

花田——但し尻尾を出しさうな奴は駄つて引つ込んでゐる方がいゝぜ。それでは俺れ達四人は戸部ともちやんとに最後の告別をしようぢやないか。……戸部、お前のこれまでの藝術は、若くして死んだ天才戸部の藝術として世に残るだらう。然しそこでお前の生活が中断するのを俺れ達はすまなく思ふ。然しその償ひにともちやんを得た以上、不平をいはないでくれ、な。而してお前は新たに戸部の弟として新生面を開いてくれ。俺れ達はそれを待つてゐるから。ぢやさよなら。

一同交るゝ握手する。

花田——ともちやん、お前は俺れ達の力だつた。慰めだつた。お母さんだつた、可愛い娘だつた。お前と別れるのは俺れ達全くつらいや。だからお前の額に一度だけ皆んなで接吻するのを許しておくれ。なあ戸部いゝだらう。

戸部——よし、一度限り許してやる。

花田——ともちやんさよなら。(額に接吻する)とも子——さよなら花田さん。

澤本——俺れはまあやめとく。握手だけしとく。

く。

とも子——さよなら生藩さん。

青島——さよなら。(額に接吻する)

とも子——お大事に浮氣屋さん。

瀬古——唇をよくお見せ、あゝあ。(額に接吻する)

とも子——さよなら可愛い若様。

とも子さすがに感情せまつて泣き出す。

花田——よし。それからドモ又の弟にいふが、不精をしてゐると、頭の毛と髭とが延びて来て、ドモ又にあと戻りする恐れがあるから、今後決して不精髭を生やさないことにしてくれ。

とも子——そんなこと、私がせときませんわ。

戸外にて戸をたゞく音聞こゆ。

人の聲——えゝ、御免下さいまし、九頭龍で御座いますが、花田さんはおいでで御座いますか。

他の人の聲——私は堂脇ですが……

花田——そら來やがつた。……皆んないゝか大丈夫か……俺れ達は非常な不幸に遇つたんだぞ。悲しみのどん底にゐるんだぞ。此際笑ひでもした奴は敵に内通した謀叛人として皆んなで制裁するからさう思へ。九頭龍も堂脇も

……今開けます、一寸待つて下さい……九頭龍も堂脇もたまらない俗物だが、攻略上向腹を立てて事をし損じないやうに皆んな誓へ。

一同——誓ふ。

花田——泣ける奴は時々涙をこぼすやうにして、いゝか……ぢや開けるぞ。

澤本——花田、ちよつと待て……(茶碗に二杯水を入れて戸部の所へ持つて行く)おいドモ又貴様の涙をこの中に入れとくぞ。これはともちやんのだ。尻の後ろにやつとけ。慌ててこぼすな。

花田——しいつ。(観客の方に向いて笑ふのを制する)ぢや開けるぞ。皆んなしかめつ面をしてろ。

とも子はさつきから本當に泣いてゐる。戸部茶碗から水をすくつて眼のふちに塗る。花田戸を開けに行く。

幕

(一九三二年十月、「泉」所掲)

は私自身を何物にも代へ難く愛することから始めねばならない。

若し私のこの貧しい感想を讀む人があつた時、この出發點を首肯することが出来ぬならば、私はその人に更にひ進むべき何物をも持ち得ない。太初が道であるか行であるかを考へるのではなく、知り切つてゐる人に取つては、この感想は無視すべき無益なものであらう。私は自分が極めて低い生活途上に立つてゐるものであることをよく知りぬいてゐる。たゞ、今の私はそこに一番堅固な立場を持つてゐるが故に、そこに立つことを恥ぢまいとするもの。前にもいつたやうに、私はより高い大きなものに對する欲求を以て、知り得たる現在に安住し得るのを自己に感謝する。

二

私のいはうとする事が讀者に十分の理解を與へ得ないかと思はれる。人が人自身をいひ現はすのは一番容易なことであらねばならぬ。何んとなればそれはその人自身が最もよく知り抜いてゐる筈の事柄だから。

實際は然しさうではない。私達の用ひてゐる言葉は謂はば狼狽のやうなものだ。それは獲

物を取るには役立つけれども、私達自身に向つては妨げにこそなれ、役に立たない。或は擴大鏡のやうなものだ。私達はそれによつて身外を見得るけれども、私達自身の顔を見ることは出来ない。或は又精巧な機械といつてもよい。私達はそれによつて有らゆるものを造り出し得るとしても、遂に私達自身を造り出すことは出来ない。

言葉は意味を表はす爲めに案じ出された。然しそれは當初の目的から段々墮落した。心の要求が言葉を削つた。然し今は物がそれを占有する。吃する事なしには私達は自分の心を語る事が出来ない。戀人の耳にさゝやかれる言葉はいつでも流暢であるためしがない。心から心に通ふ爲めには、何んといふ不完全な乗物に私達は乗らねばならぬのだらう。

のみならず言葉は不從順な僕である。私達は屢々言葉の爲めに裏切られる。私達の發した言葉は私達が針ほどの誤謬を犯すやいな、すぐに刃を反して私達に切つてかゝる。私達は自分の言葉故に人の前に高慢となり、卑屈となり、狡智となり、魯鈍となる。

かゝる言葉に依頼して私はどうして私自身を誤りなく云ひ現はすことが出来よう。私は

己むを得ず言葉に潛む暗示により多くの頼みをかけなければならない。言葉は私を云ひ現はしてくれないとしても、その後ろにつゝましかかに隠れてゐるあの睿智の獨子なる暗示こそは、裏切る事なく私を求める者に傳へてくれるだらう。

暗示こそは人に與へられた子等の中、最も優れた娘の一人だ。然し彼女が憤み深く、穩かで、口づ容易にその面纱を顔からかきのけない爲めに、人々は屢々この氣高く美しい娘の存在を忘れようとする。殊に近代の科學は何んの容赦もなく、如何なる場合にも抵抗しない彼女を、幽閉の愛目にさへ遇はせようとした。抵抗しないといふ美德を適用して人は彼女を無視しようとする。

人間がどうして斯程優れた娘を生み出したかと私は驚くばかりだ。彼女は自分の美德を認めるものが現はれ出るまで、それを湛らうと企てたことが嘗てない。湛らうとした瞬間に美德が美德でなくなるといふ第一義的な眞理を本能の如く知つてゐるのは彼女だ。又正しく彼女を取扱ふことの出来ないものが、假初にも彼女に近づけば、彼女は見る／＼そのやさしい存在から萎れて行く。そんな人が彼女を捕へ得た

れは獨り彼れの裏にのみ忠實な伴侶を見出さねばならぬ、抑くとも、醜くとも、彼れにとつては彼れ以上のものを何處に求め得よう。かう私は自分を一人の旅客にして見る時もある。

私はかくの如くにして私自身である。けれども私の周囲にある人や物や物は明らかに私ではない。私が一つの言葉を申し出る時、私以外の誰れが、而して何が、私がその言葉をあらしめるやうにあらしめ得るか。私は周囲の人と物とにどう繋かれたら正しい關係におかれるのであらう。如何なる關係も可能ではあり得ないのか。可能ならばそれを私はどうして見出せばいいのか。誰れがそれを私に教へてくれるのだらう。……結局それは私自身ではないか。

思へばそれは淋しい道である。最も無力なる私は私自身にたよる外の何物をも持つてゐない。自己に矛盾し、自己に蹉跎し、自己に困迷する、それに何んの不思議があらうぞ。私は時々私自身に對して神のやうに寛大になる。それは時々私の姿が、母を失つた嬰兒の如く私の眼に映るからだ。嬰兒は何處をあてともなく匍匐する。その姿は既に十分憐れまれるに足る。嬰兒は屢々過つて火に陷る。若しくは水

に溺れる。而して僅かにそこから這ひ出ると、べそをかきながら又匍匐を續けて行く。このいたいけなさを憐れむのを自己に阿るものとみ云ひ逃げられるものであらうか。縱令道德がそれを自己耽溺と罵らば罵れ、私は自己に對するこの哀憐の情を失ふに忍びない。孤獨な者は自分の掌を見つめることにすら、熱い涙をさそはれるではないか。

思へばそれは醜しい道でもある。私の主體とは私自身だと知るのは、私を極度に嚴肅にする。他人に對しては與へ得ないきびしい鞭打を與へざるを得ないものは畢竟自身に對してだ。誘惑にかゝつたやうに私はそこに導かれる。答にはげまされて振ひ立つ私を見るのも、打撲に抵抗し切れなくなつて倒れ伏す私を見るのも、共に私が生きて行く上に、無くてはならぬものであるのを知る。その時に私は勇ましい。私の前には力一杯に生活する私の外には何物をも見ない。私は乗り越え乗り越え、自分の力に押され押されて未見の境界へと險難を侵して進む。而して如何なる生命の脅威にもおびえまいとする。その時傷の痛みは私に或る甘さを味はせる。然しこの自己緊張の極點には往々にして恐ろしい自己疑惑が私を

待ち設けてゐる。遂に私は疲れ果てようとする。私の力がもうこの上には私を動かして得ないと思はれるやうな瞬間が来る。私の唯一つの城郭なる私自身が見る／＼廢墟の姿を現はすのを見なければならぬのは、私の眼前を暗黒にする。

けれどもそれらの不安や失望が常に私を脅やかすにもかゝらず、太初は何のであるかを知らない私には、自身を措いてたよるべき何者もない。凡ての矛盾と渾沌との中にあつて私は私自身であらう。私を實價以上に値ぶみすることをしてしまい。私を實價以下に虐待することもしまい。私は私の正しい價の中にあることを勉めよう。私の價値がいかに低いものであらうとも、私の正しい價値の中にあうとするそのこと自身は何物かであらねばならぬ。縱しそれが何物でもないにしろ、その外に私の探るべき態度はないではないか。一個の金剛石を持つものは、その寶玉の正しい價値に於てそれを持つたうと願ふのだらう。私の私自身は寶玉のやうに尊いものではないかも知れない。然し心持に於ては寶玉を持つ人の心持と少しも變るところがない。私は私のもの、私のたゞ一つのもの。私

善者は救はるゝことが出来ないのだと。かういつて聞かされると私は偽善者の爲めに辯解をしないではゐられない心持になる。私自身が偽善者であるが故に自分自身の爲めに辯解しようとするだけではない。偽善者そのものになり代つて、偽善者の一人なる私が、義人に申し出たとは思はずにはゐられないのだ。

何事にも例外はある。その例外を殊更に色濃く描くのをひかへて見て貰つたら、偽善者といふものが、強味を以て弱味を彌縫する所に無恥な安住をしてゐるといふのは、少しさばけ過ぎた見方だとは云はれまいか。私は義人が次ぎの點に於て偽善者を信じていたゞきたいと思ふ。それは偽善者も亦心竊かに苦しんでゐるといふ一事だ。考へて見てもほしい、多少の強さと弱さとを同時に持ち合はしてゐるものが、二つの力の矛盾を感じないでゐられようか。矛盾を感じながら平然としてそこに無恥の安住をのみ續けてゐることが出来ようか。

偽善者よ、お前は全くひとひに遇はされた。それは當然な事だ。お前は本當に不愉快な人間だから。お前はいつでも然りく否々といひ切ることが出来ないから。毎時でもお前には陰險なわけへだてが附きまつはつてゐるから。お

前は憎まれていゝ。辱かしめられていゝ。惡魔視されていゝ。然しお前の心の隅の人知れぬ苦痛をそつと眺めてやる人はないのか。お前が人並みに見られたい爲めに、お前自身にさへ隠さうと企ててゐるその人知れぬ苦痛を一寸でも暖かく觸らうといふ人はないのか。偽善者よ、私は自身偽善者であるが故によくそれを知つてゐる。義人のすぐ隣りに住むと考へられてゐる罪人(己れの罪を知つてそれを悲しむ人)は自分の強味と弱味との矛盾を聲高く叫び得る幸福な人達なのだ。罪人の持つものも偽善者の持つものも畢竟は同じなのだ。ただ罪人は叫ぶ。それを神が聞く。偽善者は叫ばうとする程に強さを

持ち合はしてゐない。故に神は聞かない。それだけの差だと私には思へる。よきサマリヤ人と惡しきサドカイ人とは、隣り合せて住んでゐるのではない。偽善者たる私は屢々他人を偽善者と呼んだ。今にして私はそれを悲しく思ふ。何故に私は人と人との距てをこんなに大きくしようとはしたらう。

かういつたとて私は、世の義人に偽善者を判く手心をゆるめて貰ひたいと歎願するのではなく。偽善者は何んといつても義人からきびしく判かれるふしだらさを持つてゐる。私はたゞ偽

善者もその心の片隅には人に示すのを取てしない苦痛を持つてゐるといふ事を知つて貰へばいいのだ。それが私の辯解なのだ。

私もその苦痛は持つてゐた。人の前に私を私以上に立派に見せようとする虚妄な心はあり餘るほど持つてゐたけれども、そこに埋めることの出来ない苦痛をも全く失つてはゐなかつた。而してある時には、鳥が鵲の眞似をするやうに、罪人らしく自分の罪を上りに人と神との前に披露もした。私は私らしく神を求めた。どれ程完全な罪人の形に於て私はそれをなしたたらう。恐らく私は誰れの眼からも立派な罪人のやうに見えたと違ひない。私は斷食もした。不眠にも陥つた。瘦せもした。人の女の肉をも犯さなかつた。ある時は神を見出し得んためには、自分の生命を好んで斷つのを意としなかつた。

他人眼から見て相當の精進と思はれるべき私の生活が幾日か續いた後、私はある決心を以て神の懷に飛び入つたと實感のやうに空想した。弱さの醜さよ。私はこの大事を見事に空想的に實行してゐた。

而して私は完全にせよ、不完全にせよ甦生してゐたらうか。復活してゐたらうか。神によ

と思つた時には、必ず美しい死を遂げたその亡骸を抱くのみだ。粘土から創り上げられた人間が、どうしてかゝる氣高い娘を生み得たらう。

私は私自身を云ひ現はす爲めに彼女に優しい助力を乞はう。私は自分の生長が彼女の柔らかな胸の中に抱かれることによつて成就したのを経験してゐるから。而して人間そのものの向上がどれ程彼女——人間の不斷の無視にもかゝはらず——によつて運ばれたかを知つてゐるから。

けれども私は暗示に私を託するに當つて私自身を取ぢねばならぬ。私を最もよく知るものは私自身であるとは思ふけれども、私の知りかたは餘りに亂雑で不秩序だ。而して私は言葉の正當な使ひ道すらも十分には心得てゐない。その言葉の後ろに安んじて巢喰ふべき暗示の座が成り立つだらうかとそれを私は恐れる。

然し私は行かう。私に取つて已み難き要求なる個性の表現の爲めに、あらゆる有縁の個性と私のそれとを結び付けようとする嚴しい欲求の爲めに、私は敢て私から出發して歩み出して行かう。

私が餓えてゐるやうに、或る人々は餓えてゐる。

る。それらの人々に私は私を與へよう。而してそれらの人々から私も受取らう。その爲めには假りに自分の引込思案を捨ててかゝらう。許されるかぎり、に於て大膽にならう。私が知り得る可能性を存分に申し出して見よう。唯この貧しい言葉の中から暗示が姿を隠してしまはないう事を私は祈る。

三

神を知つたと思つてゐた私は、神を知つたと思つてゐたことを知つた。私の動亂はそこから芽生えはじめた。

ある人は私を偽善者ではないかと疑つた。どうしてそこに疑ひの餘地などがあらう。私は明らかに偽善者だ。明らかに私は偽善者である、さう言明するのが、どれ程偽善的な行爲であるぞとの非難が、當然喚び起されるのを知らない私ではない。それにもかゝはらず私は明らかに偽善者であると言明せねばならぬ。私は屢々私自身に顧慮する以上に外界に顧慮してゐるからだ。それは悲しい事には私が弱いからだ。私は弱い者の有らゆる窮策によく通じてゐる。僅かな原因ですぐ陥つた一つの小さな虚偽の爲めに、二つ三つ四つ五つと虚偽を

重ねて行かねばならぬ、その苦痛をも知つてゐる。弱いが故に強ひて自分を強く見せようとして、いつでも胸の中を戦慄させてゐねばならぬ不安も知つてゐる。苦肉の策から、自分の弱身を殊更に鎗剣に人の前には取り出して、不意に乗じて一種の尊敬を、さうでなければ一種の憐憫を、搾り取らうとする自演も知つてゐる。弱さは眞に醜さだ。それを私はよく知つてゐる。

然し偽善者とは弱いといふことばかりがその本質ではない。本當に弱いものは、その弱さから來る自分の醜さをも悲慘さをも意識しないが故に、その人はそのまゝの境地に満足することが出来る。偽善者は不幸にしかたゝ弱いばかりでなく、その反面に多少の強さを持つてゐる。彼れは自分の弱味によつて惹き起した醜さ悲慘さを意識し得る強さをも持つてゐるのだ。而してその弱さを強さによつて彌縫しようとするのだ。

強者がその強味を知らず、弱味を知らない間に、偽善者はよくその強味と弱味とを知つてゐる。人はいふだらう、偽善者の本質は、強味を以て弱味を彌縫するばかりでなく、その彌縫に無恥な安住を敢てする點にあると。だから偽

ことは出来なかつた。その程度までの偽善者になるには、私の強味が弱味より多過ぎたのかも知れない。而して私は自分の偽善が私の属する團體を汚染することを恐れて、而して團體の悪い方の分子が私の心を苦しめるのを厭つて、その團體から逃げ出してしまつた。私の卑陋はこゝでも私に卑陋な行をさせた。私の属してゐた團體の言葉を借りていへば、私の行の根柢には大それた高慢が働いてゐたと云へる。

けれども私は小さな聲で私にだけ囁きた。心の奥底では、私はどうかして私を偽善者から更に偽善者に導かうとする誘因を避けたい氣持がないではなかつたといふことを。それを突き破るだけの強さを持たない私はせめてはそれを避けたいと念じてゐたのだ。前にもいつたやうに外界に支配され易い私は、手厳しう外界に圍まれてゐる程、自分すら思ひもかけぬ偽善を重ねて行くのに氣づき、而してそれを心から恐れるやうになつてゐたのだ。だから私は私の屬してゐた團體を退くと共に、それまで指導を受けてゐた先輩達との直接の接觸からも遠ざかり始めた。これは私と偽善者であらぬやうになりたい。これは私と

して過分な欲求であると思はれるかも知れないけれども、偽善者は凡て、偽善者でなかつたらよからうといふ心持を、何處かの隅に隠しながら持つてゐるのだ。私も少しそれを持つてゐたばかりだ。

義人、偽善者、罪人、さうした名稱が可なり判然區別されて、それがびし／＼と人にあてはめられる社會から私が離れて行つたのは、結局悪いことではなかつたと私は今でも思つてゐる。

神を知つたと思つてゐた私は、神を知つたと思つてゐたことを知つた。私の動亂はそこから芽生えはじめた。その動亂の中を私はそろそろと自分の方へと歸つて行つた。目指す故郷はいつの間にか遙に距つてしまひ、而して私は屢々迷ひいたけれども、それでも動亂に動亂を重ねながらそろ／＼と故郷の方へと歸つて行つた。

四

長い廻り道。

その長い廻り道を短くするには、自分の生活に對する不満を本當に感ずる外にはない。生老病死の諸苦、性格の缺陷、あらゆる失敗、

それを十分に噛みしめて見ればそれでいゝのだ。それは然し如何に言説するに易く實現するに難き事柄であらうぞ。私は幾度かかゝる悟性の幻覺に迷はされはしなかつたか。而してかゝる悟性と見ゆるものが實際は既定の概念を尺度として測定されたものではなかつたか。私は稀にはボーロのやうに藻掻いた。然し私のやうには藻掻かなかつた。親戀のやうには情つた。然し私のやうには悟らなかつた。それが一體何にならう。これほど體裁のいゝ外貌と、内容の空虚な實質とを併合した心の狀態が外にあらうか。この近道らしい迷路を避けなければならぬと知つたのは、長い彷徨を續けた後のことだつた。それを知つた後でも、私はやゝもすればこの思はしい袋小路につきあたつてすご／＼と引き返さねばならなかつた。

私は自分の個性がどんなものであるかを知りたいために、他人の個性に觸れて見ようとした。歴史の中にそれを見出さうと勉めたり、藝術の中にそれを見出さうと試みたり、郷人の中にそれを見出さうと求めたりした。私は多少の知識は得たに違ひなかつた。私の個性の輪郭はおぼろげながら私の眼に映るやうに思へぬではなかつた。然しそれは結局私ではな

つて罪の根から切り放された約束を興へられたらうか。

神の懷に飛び入つたと空想した瞬間から、私が格段に瑕瑾の少ない生活に入つたことはそれは確かだ。私が隣人から模範的の青年として取扱はれたことは、私の誇りとしてではなく、私のみじめな懺悔としていふことが出来る。

けれども私は本當は神を知つてはゐなかつたのだ。神を知り神によりすがると宣言した手前、強ひて私の言行をその宣言にあてはめてゐたに過ぎなかつたのだ。それらが如何に弱さの生み出す空想によつて色濃く彩られてゐたかは、私が見事に人の眼をくらましてゐたのでも察すること出来る。

この時若し私に人の眼の前に罪を犯すだけの強さがあつたなら、即ち私の顧慮の對象なる外界と私とを絶縁すべき事件が起つたら、私は偽善者から一躍して正しき意味の罪人になつてゐたかも知れない。私は自分の罪を眞剣に叫び出したかも知れない。而してそれが恐らくは神に聞かれたらう。然し私はさうなるには餘りに弱かつた。人はこの場合の私を餘り強過ぎたからだといはうとするかも知れない。

い。若しさういふ人があるなら私は明らかにそれが誤謬であるのを自分の経験から斷言すること出来る。本當に罪人となり切る爲めには、自分の凡てを捧げ果てる爲めには、私の想像し得られないやうな強さが必要とせられるのだ。

このパラドックスとも見れば見える申し出では決して虚妄でない。罪人のあの柔和なレシゲネーションの中に、昂然として何物にも屈しないとする強さを私は明らかに見て取ることが出来る。神の信仰とは強者のみが興り得る貴族の團樂だ。私は羨ましくそれを眺めやる。然し私にはその入場券は興へられてゐない。私は單にその埒外にゐて貴族の物眞似をしてゐたに過ぎないのだ。

基督の教會に於て、私は明らかに偽善者の一群に屬すべきものであるのを見出してしまつた。砂礫のみが砂礫を知る。金のみが金を知る。これは悲しい事實だ。偽善者なる私の眼には、自ら教會の中の偽善の分子が見え透いてしまつた。こんな事を書き進むのは、殆ど私の堪へ得ない所だ、私は餘りに自分を裸かにし過ぎる。然しこれを書き抜かないと、私のこの拙い感想の筆は放げ棄てられなければならない。

本當は私も強い人になりたい。而して教會の中に強さが生み出した眞の生命の多くを曾く拾ひ上げたい。私は近頃ある尊敬すべき老學者の感想を讀んだが、その中に宗教に身をおいたものが、それを捨てるといふやうなことをするのは、如何にその人の性格の高貴さが足りないかを現はすに過ぎないといふことが強い語調で書かれてゐるのを見た。私はその老學者に深い尊敬を拂つてゐるが故に、而して氏の生得の高貴な性格を知つてゐるが故に、その言葉の空しい罵詈でないのを感じて私自身の卑陋を悲しまねばならなかつた。氏が凡ての虚偽と墮落とに飽滿した基督教の中にありながら、根ざし深く潛在する尊い要素に自分のけだかさを化合させて、嚴のやうに堅く立つその態度は、私を驚かせ羨ませる。私は全くそれと反對なことをしてゐたやうだ。私は自分が卑陋であるが故に、多くの卑陋なものを見てしまつた。私はそれを悲しまねばならない。然し私は自分の卑陋から、周圍に卑陋なものを見出しておきながら、高貴な性格の人があるやうにそれを見ないでゐることはさすがに出来なかつた。卑陋なものを見出しながら、しらしらしく見ない振りをして、寛大にかまへてゐる

聰明といふことから遙かに遠ざかつた多くの vulgarity が残つてゐるのを、私自身よく承知してゐる。私は全く凡下な執着に驅られて齷齪する衆生の一人に過ぎない。たゞ私はまだその境界を捨て切ることが出来ない。而して捨て切ることの出来ないの事、悪いことだときへ思はない。漫然と私自身を他の境界に移したら、即ち私の個性を本當に知らうとの要求を擲つたならば、私は今あるよりもなほ多くの不安に責められるに違ひないのだ。だから私は依然として私自身であらうとする衝動から離れ去ることが出来ない。

外界の機縁で私を創り上げる試みに失敗した私は、更に立ちなほつて、私と外界とを等分に向ひ合つて立たせようとした。

私がある。而して私がある以上は私に對立して外界がある。外界は私の内部に明らかにもその影を投げてゐる。従つて私の心の働きは二つの極の間に往來しなければならぬ。而してそれが何故悪いのだ。私はまだどんな言葉で、この二つの極の名稱をいひ現はしていか知らない。然しこの二つの極は昔から色々な名によつて呼ばれてゐる。希臘神話ではディオニッスとアポロの名で、又歐洲の思潮では

ヘブライズムとヘレニズムの名で、佛典では色相と空相の名で、或は唯物唯心、或は個人社會、或は主義趣味、凡て世にありとあらゆる名詞に對を成さぬ名詞はないといつてもいだらう。私も亦このアンティセシスの下にある。自分が思ひ切つて一方を取れば、是非退けねばならない他の一方がある。デューナスの顔のやうにこの二つの極は融渾を許さず相反してゐる。然し私としてはその二つの何れをも潔く捨てるに忍びない。私の生の欲求は思ひの外に強く深く、何者をも失はないで、凡てを味ひ盡して墓場に行かうとする。縱令私が純一無垢の生活を成就しようともこの存在に屬するものの中から何かを捨ててしまはねばならぬとなら、それは私には堪へ得ぬまでに淋しいことだ。よし私は矛盾の中に住み通さうとも、人生の味ひの凡てを味ひ盡さなければならぬ。相反して見ゆる二つの極の間に徨ふために、内部に必然的に起る不安を得ようとも、それに忍んで兩極を恐れることなく掴まねばならぬ。若しそれらを掴むのが不可能のことならば、公平な觀察者鑑賞者となつて、兩極の持味を翫擲して死なう。

人間として持ち得る最大の特権はこの外には

ない、この特権を捨てて、そのあとに残されるものは捨てるにさへ値しない枯れさびれた残り滓のみではないか。

五

けれども私はそこにも満足を得ることが出来なかつた。私は思ひもよらぬ物足らぬ發見をせねばならなかつた。兩極の觀察者にならうとした時、私の力はどう／＼私から遁れ去つてしまつたのだ。實驗のみをしてゐて、經驗をしない私を見出した時、私は何んともいへない空虚を感じ始めた。私が觸れ得たと思ふ何れの極も、共に私の命の糧にはならないで、何處にまれ動き進まうとする力は姿を隠した。私はいつまでも一箇所に立つてゐる。

これは私として極端に堪へがたい事だ。かのハムレットが感じたと思はれる空虚や頼りなきは又私にも存分にしみ通つて、私は始めて主義の人の心持を察することが出来た。あの人々は生命の空虚から救ひ出されたい爲めに、他人の自由にまで踏み込んで、力の限りを一つの極に向つて用ひつゝあるのだ。それはある場合には他人にとつて迷惑なことであらうとも、その人々に取つては致命的に必要なことなのだ。

物を見る事、物をそれ自身の生命に於てあや

私が私自身に歸らうとして、外界を機縁に

聰明そうめいにして上品じやうひんな人は屢々ひとしばしば假象かりやうに満足まんぞくする。

満足するといふよりは、人の現象と稱へるもの、人の實在と稱へるもの、畢竟は意識の——それ自身が假象であるところの——初めな遊戯に過ぎないと諦観する。そこに何等かの執着をつなぎ、葛藤を加へるのは、要するに下根粗笨な外面的見識に支配されての迷妄に過ぎない。それらの境を靜かに超越して、嬰兒の戯れを見る老翁のやうに凡ての努力と蹉跎との上に、淋しい微笑を送らうとする。そこには冷やかな、然し皮相でない上品さが漂つてゐる。或は又凡てを容れ凡てを抱いて、飽くまで外界の跳梁に身を任す。晝には歡樂、夜には遊興、身を凡俗非議の外に置いて、死にまでその恣まくな姿を變へない人もある。そこには皮肉な、然し熱烈な聰明が窺はれないではない。私はどうしてそれらの人を彈劾することが出来るよう。果てしのない迷執にさまよはねばならぬ人の宿命であつて見れば、各々の瞬間をただ楽しんで生きる外に残される何事があらうぞだ。その人達はいふ。その心持に對して私は白眼を向けることが出来るか。私には出来ない。

何んと多趣多様な生活の相だらう。それはそ

たゞ私は私自身を私に恰好なやうに守つて

行きたい。それだけは私に許される事だと思ふ
のだ。そしてその立場からいふと私はかの聰
明にして上品な人々と同情の人であることが
出来ない。私にはまださしし未練が残つて
ゐて、凡てを假象の戯れだと見て心を安ん
じてゐることが出来ない。そこには上品とか

には彼等のものを與へ、私には私のものを與へてくれる。而かも兩者は一度は相失ふ程に分れ別れても、何時かは何處かで十字路頭にふと出遇ふのではないだらうか。それは然し私が顧慮するには及ばないことだ。私は私の道を慕地に走つて行く外はない。で、私は更にこの筆を續けて行く。

六

私の個性は私に告げてかう云ふ。

私はお前だ。私はお前の精髄だ。私は肉を離れた一つの概念の幽霊ではない。また靈を離れた一つの肉の盲動でもない。お前の外部と内部との溶け合つた一つの全體の中に、お前がお前の存在を有つてゐるやうに、私も亦その全體の中で厳しく働く力の總和なのだ。お前は地球の地殻のやうなものだ。千態萬様の相に分れて、地殻は日まぐるしい變化を現してはゐるが、畢竟そこに見出されるものは、靜止であり、結果であり、死に近づきつゝあるものであり、奥行きのない現象である。私は謂へば地球の外部だ。單純に見るとそこには渾沌と草一とがあるばかりとも思はれよう。けれどもその實質をよく考へて見ると、それは他の星の世

界と同じ實質であり、その中に潛む力は一瞬時にして、地殻を思ひのまゝに破壊することも出来、新たに地殻を生み出すことも出来るのだ。私とお前とはある意味に於て同じものだ。然し他の意味に於て較べものにならない程違つたものだ。地球の内部は外部からは見られない。外部から見て、一番よく氣のつく所は何んといつても表面だ。だから人は私に注意せずに、お前ばかりを見て、お前の全體だと思つてゐるし、お前も亦お前だけの姿を見て、私を顧みず、恐れたり、迷つたり、臆したり、外界を見るにもその表面だけを伺つて満足してゐる。私に歸つて来ない前にお前が見た外界の姿は、誠の姿ではない。お前は私が如何なるものであるかを本當に知らない間は、お前の外界を見る眼はその正しい機能を失つてゐるのだ、それではいけない、そんなことでは縱令お前がどれ程離れて進んで行かうとも、急流を溯らうとする下手な泳手のやうに、無益に藻掻いて而かも一步も進んでゐないのだ。地球の内部が残つてゐるさへすれば、縱令地殻が跡方なく壞れてしまつても、一つの遊星としての存在を續ける事が出来るのだ。然し内部のない地球といふものは想像して見ることも出来ないだらう。それ

と同じに私のないお前は想像することが出来ないのだ。お前に取つて私以上に完全なものはない。さういつたとて、その意味は、世の中の人が概念的に案出する神や佛のやうに、完全であらうといふのではない。お前が今まで、宗教や、倫理や、哲學や、文藝などから提供せられた想像で測れば、勿論不完全だといふことが出来るだらう。成程私は惡魔のやうに恥知らずではないが、又天使のやうに清淨でもない。私は人間のやうに人間だ。私の今のこの瞬間の誇りは、全力を擧げて何んの躊躇もなく人間的であるといふことに歸する。私の所に惡魔だとか天使だとか、お前の頭の中でこれ上げた偶像を持つて来てくれるな。お前が生きたければならないこの現在にとつて、それらのものとお前との間には無益有害な廣い距離が挟まつてゐる。お前が私の極印を押された許可狀を持たずに、靈から引き放した肉だけにお前の身賣りをする、そこに實質のない惡魔といふものが、さも嚴めしい實質を備へたらしく立ち現はれるのだ。又お前が肉から強ひて引き離した靈だけに身賣りをする、そこに實質のない天使とい

主義の爲めには生命を捨ててもその生命の緊張を保たうとするその心持はよく解る。

然しながら私には生命を賭しても主張すべき主義がない。主義といふべきものはあるとしても、それが爲めに私自身を見失ふまでにその爲めに没頭することが出来ない。

矢張り私はその長い廻り道の後に私に歸つて来た。然し何んといふみじめな情けない私の姿だらう。私は凡てを捨ててこの私に頼らねばならぬだらうか。私の過去には何十年の遠きに互る歴史がある。又私の身邊にはあらゆる社會の活動と優れた人間とがある。大きな力強い自然が私の周囲を十圍二十圍に取り巻いてゐる。これらのものの絶大な重壓はこの

儼然な私をおびえさすのに十分過ぎる。私が今まで自分自身に歸り得ないで、あらゆる限りの躊躇をしてゐたのも、思へばこの外界の威力の前に私自身の無爲を感じてゐたからなのだ。而して何等かの手段を運らしてこの絶大な威力と調和し若しくは安協しようとかへ試みてゐたのだつた。而かもそれは私の場合に於ては凡て失敗に終つた。さういふ試みは一時的に多少私の不安を撫でさすつてくれたとしても、更に深い不安に導く媒になるに過ぎな

かつた。私はかゝる試みをする始めから、何かどうしてもその境遇では満足し得ない豫感を持ち、而してそれがいつでも事實になつて現はれた。私はどうしてもそれらのものの前に at home に自分自身を感じる事が出来なかつた。

それは私が大膽で且つ誠實であつたからではない。偽善者なる私にも少しばかりの誠實はあつたと云へるかも知れない。けれど少くとも大膽ではなかつた。私は弱かつたのだ。

誰れでも弱い人がいかなる心の状態にあるかを知つてゐる。何物にも信頼する事の出来ないのが弱い人の特長だ。而かも何物にか信頼しないではゐられないのが他の特長だ。兎は弱い動物だ。その耳はやむ時なき猜疑に震へてゐる。彼れは嚴密な石箱に身を託する事も、幽遠な深林にその住居を構へることも出来ない。彼れは小さな藪の中に彼れらしい穴を掘る。そして雷が鳴つても、雨が来ても、風が吹いても、犬に追はれても、獵夫に迫られても、逃げ廻つた後にはそのみじめな、壊れ易い土の穴に最後の隠れ家を求めるのだ。私の心も亦兎のやうだ。大きな威力は無盡蔵に周囲にある。然し私の怯えた心はその何れにも無條件的な

信頼を持つことが出来ないで、危懼と躊躇とに満ちた彷徨の果てには、我れながら憐れと思ふ自分自身に歸つて行くのだ。

然し私はこれを弱いものの強味と呼ぶ。何故といへば私の生命の一路はこの極度の弱味から徐ろに育つて行つたからだ。

こゝまで来て私は自ら任じて強しとする人と袖を談たねばならぬ。その人々はもう私に憫れねばならぬ時が来た。私はせうことなしに弱さに純一になりつゝ、益々強い人々との交渉から身を退けて行くからだ。ニイッチェは弱い人だつた。彼れも亦弱い人の通性として頑固に自分に執着した。そこから彼れの超人の哲學は生れ出たが、而してそれは強い人に恰好な背景を與へる結果にはなつたが、それを解して彼れが強かつたからだと思ふのは大きな錯誤といはねばならぬ。ルツソーでもショーペンハウエルでも等しくさうではなかつたか。強い人は幸にして偉人となり、義人となり、君子となり、節婦となり、忠臣となる。弱い人はまた一にして一個の尋常な人間となる。それは人々の好きくだ。私は弱いが故に後者を選ぶ外に途が残されてゐなかつたのだ。

運命は畢竟不公平であることがない。彼等

さの中、この尊さから退くことは、お前を死滅に導くのみならず、お前の奉仕しようとしてゐる社會そのものを死滅に導く。何故ならば人間の社會は生きた人間に依つてのみ造り上げられ、維持され、存続され、發達させられるからだ。

お前は機械になることを恥ぢねばならぬ。若し聊かもそれを恥とするなら、さう輕はずみな先走りばかりはしてゐられない筈だ。外部ばかりに氣を取られてゐずに、少しは此方を向いて見るがよい。而して本當のお前自身なるお前の個性がこゝにゐるのを思ひ出せ。

私を見出したお前は先づ失望するに違ひない、私はお前が夢想してゐたやうな立派な麥の持主ではないから。お前が外部的に教へ込まれてゐた理想の物差にあてはめて見ると、私はいかに物足りない存在として映るだらう。私はキャリバンではない代りにエーリヤルでもない。悪魔ではない代りに天使でもない。私にあるのは靈肉といふやうな區別は全く無益である。また善惡といふやうな差別は全く不可能である。私は凡ての活動に於て全體として生長するばかりだ。花屋は花を珍重するだらう。果物屋は果實を珍重するだらう。建築家はその特

を珍重するだらう。然し櫻の木自身にあつては、かゝる善惡差別を絶した所にたゞ生長があるばかりだ。然し私の生長は、お前が思ふ程迅速なものではない。私はお前のやうに頭だけ大きくしたり、手脚だけ延ばしたりしただけでは満足せず、その全體に於て動き進まねばならぬからだ。理想といふ疫病に犯されてゐるお前は、私の歩き方をもどかしがつて、生意氣にも私をさしおいて、外部の要求にのみ應じて、先走りをしようとするのだ。お前は私より早く走るやうだが、畢竟は遅く走つてゐるのだ。何故といへば、お前が私を用ひ抜いて、外部の刺激ばかりに身を任せて走り出して、何處かに行き着くことが出来たとしても、その時お前は既に人間ではなくつて、一個の専門家が即ち非情の機械になつてゐるからだ。お前自身の面影は段々淡くなつて、その淡くなつた所が、聖人や英雄の襪褌布で、つぎはぎになつてゐるからだ。その醜い姿をお前はいつか發見して後悔せねばならなくなる。後悔したお前はまたすぐと私の所まで後戻りするより外に道がないのだ。

だからお前は私の全支配の下にゐなければならぬ。お前は私に抱擁せられて歩いて行かな

ければならない。

個性に立ち歸れ。今までのお前の名譽と、功績と、誇りと、凡てを捨てて私に立ち歸れ。お前は生れる時から外界と接觸し、外界の要求によつて育て上げられて來た。外界は謂はばお前の皮膚を包む皮膚のやうになつてゐる。お前の個性は分化擴張して、而かも稀薄な内容になつて、中心から外部へ散漫に流出してしまつた。だからお前が、私をだし抜いて先走りをするの一面からいへば無理のないことだ。而してお前は私に相談もせずに、愛のない時に、愛の籠つたやうな行をしたり、憎しみを心の中に燃やしながら、寛大らしい振舞ひをしたりしたらう。而してそんな浮薄なことをする結果として、不可避的に心の中に惹き起される不愉快な感じを、お前は努力に伴ふ自らの感じだと強ひて思ひこんだ。お前の感情を訓練するのだと思つた。そんな風にお前が私と沒交渉な愚かなことをしてゐる間は、縱令山程の仕事をし遂げようとも、お前自身は寸分の生長をもなし得てはゐないのだ。而してこの淺ましい行為によつて、お前は本當の人間の生活を阻害し、生命のない生活に残り滓を、いやが上に人生の路上に塵芥として積み上げるのだ。花屋の爲

ふものが、さも嚴めしい實質を備へたらしく立ち現はれるのだ。そんな事をしている中に、お前は段々私から離れて行つて、實質のない幻影に捕へられ、そこに奇怪な空中樓閣を描き出すやうになる。而してお前の衷には苦しい二元が建立される。靈と肉、天國と地獄、天使と惡魔、それから何、それから何、對立した觀念を持ち出さなければ何んだか安心が出来ない、そのくせ觀念が對立してゐると何んだか安心が出来ない、兩天秤にかけられたやうな、底のない空虚に浮んでゐるやうな不安がお前を襲つて來るのだ。さうなればなる程お前は私から遠ざかつて、お前のいふこととなり、思ふこととなり、實行することとなり、一つ残らず外部の力によつて支配されるやうになる。お前には及びもつかぬ理想が出来、良心が出来、道德が出来、神が出来。而してそれは、皆私がお前に命じたものではなくて、外部から借りて來たものばかりなのだ。さういふものを振り廻して、お前はお前の金木細工を造り始めるのだ。而してお前は一面に、惡魔でさへが眼を塞ぐやうな醜い賤しい思ひをいだきながら、人の眼につく所では、しらん／＼しくも、自分でさへ恥かしい程立派なことをいつたり、立派なことを行つたりするの

だ。而かもお前はそんな蔑むべきことをするのに、尤もらしい理由をこしらへ上げてゐる。聖人や英雄の眞例をするのは———も少し聞えのい言葉遣ひをすれば———聖人や英雄の言行を學ぶのは、やがて聖人でもあり英雄でもある素地を造る第一歩をなすものだ。我れ、舜の言を言ひ、舜の行を行はば、即ち舜のみといふそれである。かくしてお前は、心の隅に容易ならぬ矛盾と、不安と、情けなさを感じながら、益々高く虚妄なバベルの塔を登りつめて行かうとするのだ。

悪いことには、お前のさうした態度は、社會の習俗には都合よくあてはまつて行く態度なのだ。人間の生活はその欲求の奥底には必ず生長といふ大事な因子を持つてゐるのだけれども、社會の習俗は平和——平和といふよりも單なる無事に執着しようとしてゐる。何事もなく昨日の生活を今日に繋ぎ、今日の生活を明日に延ばすやうな生活を最も面倒のない生活と思ひ、さういふ無事の日暮しのうちに、一日でも安きを偷まうとしてゐるのだ。これが社會生活に強い惰性となつて膠着してゐる。さういふ生活態度に適應する爲めには、お前のやうな行き方は大變に都合が悪い。お前の内部にと

れ程の矛盾があり表裏があつても、それは習俗的な社會の順着する所ではない。單にお前が殊勝な言行さへしてゐれば、社會は無事に治まつて泰平なのだ、社會はお前を褒めあげて、お前に、お前が心竊かに恥ぢねばならぬやうな過大な報償を贈つてよこす。お前は腹の中でお苦しむ苦笑ひをしながらかつて、その過分な報償に報ゆるべく、益々私から遠ざかつて、心にもない大馬の勞を盡しつゝ身を終らうとするのだ。

そんなことをして、お前が外部の壓迫の下に、虚偽な生活を送つてゐる間に、何時しかお前は私をだしぬいて、思ひもよらぬ聖人となり英雄となりおほせてしまふだらう。その時お前はもうお前自身ではなくなつて、即ち一個の人間ではなくなつて、人間の皮を被つた専門家になつてしまふのだ。仕事の上の専門家を私達は尊敬せねばならぬ。然し生活の習俗性の要求にのみ耳を傾けて、自分を置きざりにして、外部にのみ身賣りする専門家は、既に人間ではなくして、いかに立派でも、立派な一つの機械にしか過ぎない。いかにさみしくとも力なくとも人間は人間であることによつてのみ尊い。人間の有する尊

道のいかなるものであるかを説かうか。

先づ何よりも先に、私がお前に要求することは、お前が凡ての外界の標準から眼をそむけて、私に歸つて來なければならぬといふ事だ。恐らくはそれがお前には頼りなげに思はれるだらう。外界の標準といふものは、古い人類の歴史——その中には凡ての偉人と凡ての聖人を含み、凡ての哲學と科學、凡ての文化と進歩とを蓄へた、宏人もない貯藏場だ——と、現代の人類活動の諸相との集成から成り立つてゐる。それからお前が全く眼を退けて、私だけに注意するといふのは、便りなくも心細くも思はれることに違ひない。然し私はお前に云ふ。躊躇するな。お前が外界に向けて擴げてゐた鬚根の凡てを抜き取つて、先きを揃へて私の中に挿し入れるがいゝ、お前の個性なる私は、多くの人の個性に比べて見たら、卑しく劣つたものであらうけれども、お前にとつては、私の外により完全なものはないのだ。

かくてやうやく私に歸つて來たお前は、これまでお前が外界に對してし擧げてゐたやうに、私を勝手次第に切りこまざいてはならぬ。お前が外界と交渉してゐた時のやうに、善惡美醜といふやうな見方で、強ひて私を理解しようとし

てはならぬ。私の要求をその統合のまゝに受け入れねばならぬ。お前が私の全要求に應じた時に於てのみ私は生長を遂げるであらう。私にお前が従ふ爲めに結果される思想なり、言説なり行為なりが、假りに外界の傳説、習慣、教訓と衝突矛盾を牽き起すことがあらうとも、お前は決して心を亂して、私を疑ふやうなことをしてはならぬ。急かす、躊躇はす、お前の個性の生長と完成とを心がけるがいゝ。然しこゝにくれゝ、もお前に注意しておかねばならぬのは、今までお前が外面的の、約束された、習俗的な考へ方で、個性の働きを解釋したり、助成したりしてはならぬといふ事だ。例へば個性の要求の結果が一見内に屬する慾の遂行のやうに思はれる時があつても、それをお前が今まで考へてゐたやうに、簡單に肉慾の遂行とのみ見てはならぬ。同様に、その要求が一見内に屬するもののやうに思はれても、それを全然肉から離して考へるといふことは、個性の本性に背いた考へ方だ。私達の肉と靈とは、哲學者や宗教家が概念的に考へてゐるやうに、ものの二極端を現はしてゐるものでないのは勿論、それは差別の出来ない一體となつての個性の中には生きてゐるのだ。水を考へよう

とする場合に、それを水素と酸素とに分解して、どれ程綿密に二つの元素を研究した所が、何んの役にも立たないだらう。水は水そのものを考へることによつてのみ理解される。だから私がお前に要むところは、私の要求を、お前が外界の標準によつて、支離滅裂にすることなく、その全體をそのまゝ攝受して、そこにお前の満足を見出す外にない。これだけの用意が出来上つたら、もう何んの躊躇もなく邁進すべき準備が整つたのだ。私の誇りがなる時は誇りがとなり、私の謙遜な時は謙遜となり、私の愛する時愛し、私の憎む時憎み、私の欲するところを欲し、私の厭ふところを厭へばいゝのである。

かくしてお前は、始めてお前自身に立ち歸ることが出来るだらう、此の世に生れ出て、産衣を着せられると同時に、今日までに互つて加へられた外界の壓迫から、お前は今始めて自由にすることが出来る。これまでお前が、自分にある外界の型に嵌める必要から、強ひて不用のものとして、切り捨ててしまつたお前の部分は、今は本當の價値を回復して、お前に取つては矢張り必要缺くべからざる要素となつた。お前の凡ての枝は、等しく日光に向つて、喜んで若

めに一本の櫻の樹は花ばかりの生存をしてゐてもいゝかも知れない。その結果それが枯れ果てたら、花屋は遠慮なくその幹を切り倒して他の苗木を植ゑるだらうから。然し人間の生活の中に在る一人の人間はかくあつてはならない。その人間が個性を失ふのは、取りもなほさず社會そのものの生命を弱めることだ。

お前も一度は信仰の門をくぐつたことがあらう。人のすることを自分もして見なければ、何か物足りないやうな淋しさから、お前は宗教といふものにも指を染めて見たのだ。お前が知るであらう通りに、お前の個性なる私は、渴仰的といふ點、即ち生長の欲求を烈しく抱いてゐる點では、宗教的といふことが出来る。然し私はお前のやうな浮薄な歩き方はしない。

お前は私のこゝにあるのを疎々顧みもせず、習慣とか軽い誘惑とかに引きずられて、直ぐに友達と、聖書と、教會とに走つて行つた。私は深い危機を以てお前の例の先走りを見守つてゐた。お前は例の如く努力を始めた、お前の努力から受ける感じといふのは、柄にもない飛び上りな行ひをした後に毎時でも残される苦い後味なのだ。お前は一方に崇高な告白をしながら、基督のいふ意味に於て、正しく盗みにな

し、姦淫をなし、人殺しをなし、偽りの祈禱をなしてゐたではないか。お前の行が救ひなると人の義とせらるゝは信仰によりて、律法の行に依らずといつて、乞食のやうに、神なるものに情けを乞うたではないか。またお前の信仰の虚偽を發かれようとすると言ふといふもの、悉く天國に入るにあらず、吾が天に在す神の旨に逆るものののみなり」といつてお前を辯護したではないか。お前の神と稱してゐたものは、畢竟するに極くかすかな私の影に過ぎなかつた。お前は私を出し抜いて宗教生活に介つておきながら、お前の信仰の對象なる神を、私の姿になぞらへて造つてゐたのだ。而してお前の生活には本質的に何等の變化も來さなかつた。若し變化があつたとしても、それは表面的なことであつて、お前以外の力を天啓としてお前が感じたことなどはなかつた。お前は強ひて頭を働かして神を想像してゐたに過ぎないのだ。即ちお前の最も表面的な理智と感情との作用で、かすかな私の姿を神にまで捏ねあげてゐたのだ。お前には、お前以外の力がお前に加つて、お前がそれを避けるにもかゝはらず、その力によつて奮ひ起たなければならなかつたやうな經驗は一度もなかつたのだ。そ

れだからお前の祈りは、空に向つて投げられた石のやうに、冷たく、力なく、再びお前の上に落ちて来る外はなかつたのだ。それらの苦々しい經驗に苦しんだにもかゝはらず、お前は頑固にもお前自身を欺いて、それを清進と思つてゐた。而してお前自身を欺くことによつて他人をまで欺いてゐた。

お前はいつでも心にもない言行に、美しい名を與へる詐術を用ひてゐた、然しそれに飽き足らず思ふ時が遂に來ようとしてゐる。まだいくらか誠實が残つてゐたのはお前に取つて何んたる幸だつたらう。お前は絶えて久しく捨ておいた私の方へ顔を向けはじめた。今、お前は、お前の行爲の大部分が虚偽であつたのを認め、またお前は眞の意味で、一度も祈禱をしたことのない人間であることを知つた。これからお前は前後もふらず、お前の個性と合一する爲めに、いそしめねばならない。お前の個性に生命の果を見出し、個性を礎としてその上にありのままのお前を築き上げなければならぬ。

七

私の個性は更に私に告げてかう云ふ。
お前の個性なる私は、私に即して行くべき

家になつただけでは満足が出来なくなる。一體人は自分の到る處に自分の主でなければならぬ。然るに専門家となるといふことは、自分を人間生活のある一部門に賣り渡すことである。多かれ少かれ外界の要求の犠牲となることである。完全な人間——個性の輪郭のはつきりまとまつた人間になりたいと思はないものが何處にあらう。然るにお前はよくこの第一義の要求を忘れてしまつて、外聞といふ誘惑や、もう少し進んだ所で、社會一般の進歩を促し進めるといふやうな、柄にもない非望に驅られて、お前は甘んじて一つしかないお前の全生命を片輪にしてしまひたがるのだ。然しながら私の所に歸つて來たお前は、そんな危険な火山頂上の舞踏はしてゐない。お前の手は、お前の頭は、お前の職業は、いかに分業的な事柄に互つて行かうとも、お前は常にそれをお前の個性なる私に繋いでゐるからだ。お前は、大抵の分業にたづさはつても自分自身であることが出来る。しかのみならず、若しお前のしてゐる仕事に、到底お前の個性を満足し得ない時には、お前は個性の満足の爲めに仕事を投げ捨てることを意としないであらう。少くとも斯かる理不盡な生活を無くなすやうに、お前の個性の要求を

申出すらう。お前のかくすることは、無事といふことにのみ執着したが、人間の生活には不都合を來す結果になるかも知れない。又表面的な進歩ばかりをめやすにしてゐる社會には不便を起すことがあるかも知れない。然しお前はそれを氣にするには及ばない。私は明らかに知つてゐる。人間生活の本當の要求は無事といふことでもなく、表面だけの進歩といふことでもないことを。その本當の要求は、一個の人間の要求と同じく生長であることを。だからお前は安んじて、確信をもつて、お前の道を選ばないのだ。精神と物質とを、個性と仕事とを互に切り放した文明がどれ程進歩しようとも、それは無限の沙漠に流れこむ一條の河に過ぎない。それはいつか細つて枯れてしまふ。

私はこれ以上をもうお前にいふまい。私は老い親切の饒舌の爲めに既に餘りに疲れた。然しお前は少し動かされたやうだな。選ぶべき道に迷ひ果てたお前の眼には、故郷を望み得たやうな光が私に對して浮んでゐる。憐れな偽善者よ。強さとの平均から常に破れて、ある時は弱く、ある時は強さを羨む外にない弱さに陥る偽善者よ。お前の強さと弱さとが平均してゐないのはまだしもの幸だつた。お前は多

分そこから救ひ出されるだらう。その不均の撞着の間から僅かばかりなりともお前の誠意を拾ひ出すだらう。その誠意を取り逃すな。若しそれが純であるならば、誠實は微量であつても事足りる。本當をいふと不純な誠實といふものはない。又量定さるべき誠實といふものはない。誠實がある。そこには純粹と凡てとがあるのだ。だからお前は誠實を見出した所に勇み立つがいゝ、恐れることはない。

起て。そこにお前の眼の前には新たな視野が開けるだらう。それをお前は私に代つて云ひ現はすがいい。

お前は私にこの長い言葉が無駄に云はせてはならない。私は暖かい手を擡げてお前の來るのを待つてゐるぞよ。

八

私の個性は少しばかりではあるが、私に誠實を許してくれた。然し誠實とはそんなものでいゝのだらうか。私は八方摸索の結果すがり附くべき一莖の藁をも見出し得ないで、已むことなく覺えない私の個性。それは私自身に

芽を吹くべき運命に遇ひ得たのだ。その時お前は永遠の否定を後にし、無關心の谷間を通り越して、初めて永遠の肯定の門口に立つことが出来るやうになつたのだ。

お前の實生活にもその影響がない譯ではない。これからのお前は必然によつて動いて、無理算段をして動くことはない。お前の個性が生長して今までのお前を打ち破つて、更に新らしいお前を造り出すまで、お前は外界の壓迫に餘儀なくされて、無理算段をしてまでもお前が動く必要を見なくなる。例へばお前が外界に即した生活を営んでゐた時、お前は控へ目といふ道徳を實行してゐたらう。お前は心にもなく善行をし過ぎすことを恐れて、控へ目に善行をしてゐたらう。然しお前は自分の缺點を隠すことに於ては、中々控へ目には隠してゐなかつた、寧ろ恐ろしい大膽さを以て、お前の心の醜い秘密を人に知られまいとしたではないか。お前は人の前では、祕かに自任してゐるよりも、低く自分の徳を披露して、控へ目といふ徳性を満足させておきながら、慾念といふやうな實際の弱點は、一寸見には見つかからない程、綿密に上手に隠しおぼせてゐたではないか。さういふ態度を私は無理算段と呼ぶのだ。然し私に即し

た生活にあつては、そんな無理算段はいらないことだ。いかなる慾念も、畢竟お前の個性の生長の糧となるのであるが故に、お前はそれに對して應病であるべき必要がなくなるだらう。即ち、お前は、私の生長の必然性のためにのみ變化して、外界に對しての顧慮から伸び縮みする必要は絶対になくなるべき筈だ。何事もそれからのことだ。

お前はまた私に歸つて来る前に、お前が全く外界の標準から眼を退けて、私を唯一無二の力と頼む前に、人類に對するお前の立場の調和について迷つたかも知れない。幕地にお前が私と一緒に進んで行くことが、人類に對して迷惑となり、その爲めに人間の進歩を妨げ、從つて生活の秩序を破り、節度を壊すやうな結果を多少なりとも惹き起しはしまいか。さうお前は迷つたらう。

それは外界にのみ執着したれたお前に取つては考へられさうなことだ。然しお前がこの問題に對して眞剣になればなる程、さうした外部的な顧慮は、お前には老へようとしても考へられなくなつて来るだらう。水に溺れて死なうとする人が、世界の何處かの隅で、小さな幸福を得た人のあるのを想像して、それに祝福を

送るといふやうなことがとてもあり得ないと同様に、お前がまことに緊張して私に來る時には、それから結果される影響などは考へてはゐられない筈だ。自分の罪に苦しんで、荆棘の中に身をころがして、悶えなやんだ聖者フランシスが、その悔悟の結果が、人類にどういふ影響を及ぼすだらうかと考へてゐたかなどと想像するやうなものは、人の心の正しい尊さを、露程も味つたことのない憐れな人といはなければならぬ。

お前にいつて聞かす。さういふ問ひを發し、さういふ疑ひになやむ間は、お前は本當に私の所に歸つて來る資格は持つてはゐないのだ。お前はまだ徹底的に體裁ばかりで動いてゐる人間だ。それを捨てろ。それを捨てなければならぬ程に今までの誤謬に眼を開け。私は前後を顧慮しないではゐられない程、緩慢な歩き方はしてゐない。自分の生命が脅やかされてゐるくせに、外界に對してなほ閑從藤を繋いでゐるやうなお前に對しては、恐らく私は無慈悲な傍觀者であるに過ぎまい。私は冷然としてお前の惨死を見守つてこそゐるだらうが、一臂の力にも恐ろくなつてはやらないだらう。

又お前は、前にもいつたことだが、單に専門

はりアリストの群れに屬する者だといはなければならぬ。何故といへば、私は今私自身の外に依頼すべき何者をも持たないから。而してこの私なるものは現在にその存在を持つてゐるのだから。

私にも私の過去と未來とはある。然し私が一番頼らねばならぬ私は、過去と未來とに挟まれたこの私だ。現在のこの瞬間の私だ。私は私の過去や未來を、蔑ろにするものではない。縱令蔑ろにした所が、實際に於て過去は私の中に涵み透り、未來は私の現在を未知の世界に導いて行く。それをどうすることも出来ない。唯、私は、過去未來によつて私の現在を見ようとはせずに、現在の私の中に過去と未來とを攝取しようとするものだ。私の現在が、私の過去であり、同時に未來であらせようとするものだ。即ち過去に對しては感情の自由を獲得し、未來に對しては意志の自由を主張し、現在の中にのみ必然の規範を立しようとするものだ。

何故お前はその立場に立つのだと問はれるなら、さうするのが私の資質に適するからだといふ外には何等の理由もない。私には生命に對する生命自身の把握といふ事

が一番尊く思はれる。即ち生命の緊張が一番好ましいものに思はれる。而して生命の緊張はいつても過去と未來とを現在に引きよせるではないか。その時傳説によつて私は判斷されずに、私が傳説を判斷する。又私の理想は近々と現在の私に這入りこんで来て、このまゝの私のの中に三つのイズムを統合する。委しくいふと、そこにはもう、三つのイズムはなくては私のみがある。かうした個性の状態を私は一番私に親しいものと思はずにゐられないのだ。

私の現在がそれがある如くある外はない。それは他の人の眼から見ていかに不完全な、而して汚點だらけのものであらうとも、又私が時間的に一步その境から踏み出して、過去として反省する時、それがいかに物足りないものであらうとも、現在に生きる私に取つては、その現在の私は、それがあるやうにしかあり得ない。善くとも悪くともその外にはあり得ないのだ。私に取つては、私の現在はいつても最大無限の價値を持つてゐる。私にはそれに代ふべき他の何者もない。私の存在の確實な承認は各々の現在に於てのみ與へられる。だから私に取つては現在を唯一の寶玉として

が尊重し、それを最上に生き行く外に残された道はない。私はそこに背水の陣を布いてしまつたのだ。

といつて、私は如何にして過去の凡てを蔑視し、未來の凡てを無視することが出来よう。私の現在は私の魂にまづはりついた過去の凡てではないか。そこには私の親もある。私の祖先もある。その人達の仕事の含量がある。その人々や仕事をとり附んでゐた大きな世界もある。ある時にはその上を日も照らし雨も潤した。ある時は天界を果てから果てまで遊行する彗星が、その稀れなる光を投げた。ある時は地球の地軸が角度を變へた。それらのあらゆる力はその力の凡てを集めて私の中に積み重つてゐるのではないか。私はどうしてそれを蔑視することが出来よう。私は假りにその力も忘れてゐようとも、その力は瞬轉の間も私を忘れることはない。たゞ私はそれらのものを私の現在から遊離して考へるのを全く無益徒勞のことと思ふだけだ。それらのものは厳密に私の現在に纏りこまれることによつてのみその價値を有し得るといふことに私が付いたんだ。畢竟現在の中に攝取し盡された過去は、人が假りにそれを過去といふ言葉で呼ばうとも、私に取

すら他の人のそれに比して少しも優れたところのない——に最後の隠家を求めたに過ぎない。それを誠實といつていいのだらうか。けれども名前はどうでもいい。ある人は私の最後の到達を私の卑屈がさせた業だといふだらう。ある人はまた私の勇気がさせた業だといふかも知れない。たゞ私自身にはせざるなら、それは必至なある力が私をそこまで連れて来たといふ外はない。誰れでもがこの同じ必至の力に従うていつか一度はその人自身に歸つて行くのだ。少くとも死が間近に彼れに近づく時には必ずその力が来るに相違ない。一人として早晩個性との遭遇を避け得るものはない。私も亦人間の一人として人間並みにこの時個性と顔を見合はしたに過ぎない。ある人よりは少し早く、而してある人よりは甚だおそく。

これは少くとも私に取つては何れよりもいふことだつた。私は長い間の無益な動亂の後に始めて些かの安定を自分の裏に見出した。こゝは居心がいゝ。仕事を始めるに當つて先づ坐り心地のいゝ一脚の椅子を得たやうに思ふ。私の仕事はこの椅子に倚ることによつて最もよく取り運ばれるにちがひないのを得心する。私はこれからでも無数の煩悶と失敗とを繰り返す

ではあらうけれども、それらのものはもう無益に繰り返される筈がない。煩悶も必ず滋養ある食物として私に役立つだらう。私はこの椅子に身を託して、私の知り得た所を主に私自身のために書き記しておかうと思ふ。私はこれを宣傳の爲めに書くのではない。私の経験は貧しくして、とてもそんな普遍的な訴へをなし得ないことを私はよく知つてゐる。たゞ私に似たやうな心の過程にある少數の人がこれを読んで僅かにでも會心の微笑を幽ゆる事があつたら、私自身を表現する喜びの上に更に大きな喜びが加へられることになる。

秩序もなく系統もなく、たゞ喜びをもつて私は書きつづける。

九

センチメンタリズム、リアリズム、ロマンティズム——この三つのイズムは、その何れかを抱く人の資質によつて決定せられる。ある人は過去に現はれたもの、若しくは現はるべかりしものに對して愛着を繋ぐ。而して現在をも未來をも能ふべくんば過去といふ基調によつて導かうとする。凡ての美しい夢は、経験の結果から生れ出る。経験そのものからではない。

さういふ見方によつて生きる人はセンチメンタリストだ。

またある人は未來に現はれるもの、若しくは現はるべきものに對して憧憬を繋ぐ。既に現はれたもの、今現はれつゝあるものは、凡て醜く歪んでゐる。やむ時なき人の欲求を満たし得るものは現はれ出ないものの中にのみ潜んでゐなければならぬ。さういふ見方によつて生きる人はロマンティストだ。

更に又ある人は現在に最上の價值をおく。既に現はれ終つたものはどれほど優れたものであらうと、それを現在にも未來にも既現することは出来ない。未來にいかなるよいものが隠されてあらうとも、それは今私達の手の中にはない。現在に過去にあるやうな美しいものはないかも知れない。又未來に夢見られるやうな輝かしいものはないかも知れない。然しこゝには具體的に把持するべき私達自身の生活がある。全力を盡してそれを生きよう。さういふ見方によつて生きる人はリアリストだ。

第一の人は傳説に、第二の人は理想に、第三の人は人間に。

この私の三つのイズムに對する見方は過つてゐないだらうか。若し過つてゐないなら、私

轉されてゐるのだ。だから少し綿密な觀察者は、知と情との間に、情と意志との間に、又意志と知との間に、判然とはその何れにも從はせることの出来ない幾多の心的活動を見出すのだらう。虹彩を檢する時、赤と青との間に無限数の間色を発見するのと同じだ。赤青黄は元來白によつて統一さるべき假象であるからである。かくて私達が太陽の光線そのものを見窮めようとする時、分解された諸色をいかに研究しても、それから光線そのものの特質の全體を知悉することが出来ぬと同様に、知情の現象を如何に科學的に探究しても、心的活動そのものを握むことは思ひもよらない。歸納法は記述にのみ役立つ。然し本體の表現には役立つまい。この簡單な原理は屢々閑却される。科學に、從つて科學的研究に絶大の價値をおかうとする現代にあつては、歸納法の根本的缺陷は往々無反省に閑却される。

偕て私は歧路に迷ひ込まうとしたやうだ。私は再び私の當面の問題に歸つて行かう。外界の刺激をそのまゝ受け入れる生活を假りに習性的生活(habitual life)と呼ぶ。それは石の生活と同様の生活だ。石は外界の刺激なしには永久に一所にあつて、永い間の中にな

だ滅して行く。石の方から外界に對して働きかける場合は絶無だ。私には下等動物といはれるものに通な性質が残つてゐるやうに、無機物の生活さへが膠着してゐると見える。それは人の生活が最も緩慢となる所には何時でも現はれる現象だ。私達の祖先が經驗し盡した事柄が、更に繰り返されるに當つては、私達自身はもう自分の能力を意識的に働かす必要はなくなる。かゝる物事に對する生活活動は單に習性といふ形でのみ私達に残される。

チェスタートンが「いかなる革命家でも家常茶飯事については、少しも革命家らしくなく、尋常人と異ならない尋常なことをしてゐること」いつたのはまことだ。革命家でもない私にはかかる生活の態度が私の活動の大きな部分を占めてゐる。毎朝私は顔を洗ふ。而して顔を洗ふ器具に變化がなければ、何等の反省もなく同じ方法で顔を洗ふ、若し不注意の爲めにその方法で顔を洗ふ、若し不注意の爲めにその方法を誤るやうなことであれば、早つてそれを不愉快の種にする位だ。この生活に於ては私は全く過去の支配の下にある。私の個性の意識は少しもそこに働いてゐない。私はかゝる生活を無益だといふのではない。私はかゝる生活を有するが爲めに私の日常生活

はどれ程繁雜な葛藤から救はれてゐるか知れない。この緩慢な生活が一面に成り立つことによつて、私達は他面に、必要な方面、緊張した生活の欲求を感じ、それを達成することが出来る。

然しかゝる生活は私の個性からいふと、個性の中に屬させたいものかわるゐるものかが疑はれる。何故ならば私の個性は嚴密に現在に執着しようとし、かゝる生活は過去の集積が私の個性とは連絡なく私にあつて働いてゐるといふに過ぎないから。その上かゝる生活の内容は甚だ不安定な状態にある。外界の事情が聊かでも變れば、もうそこにはこの生活は成り立たない。而して私がこれからいはいはうとする知的生活の園内に這入つてしまふ。私は安んじてこの生活に倚りかゝつてゐることが出来ない。

又本能として自己の表現を欲する個性は、習性的生活にのみ依頼して生存するに堪へない。單なる過去の繰り返しによつて満足してゐることが出来ない。何故ならそこには自己がなくしてたゞ習性があるばかりだから。外界と自己との間には無機的な因縁があるばかりだから。私は石から、せめては草なり鳥獸になり

つては現在の外の何者でもない。現在といふものの本體をこゝまで持つて来なければ、その内容には全く成り立たない。

私は遊離した状態にある過去を現在と對立させて、その比較の上に個性の座位を造らうとする虚ろな企てには厭き果てたのだ。それは科學者がその實驗物を取扱ふ態度を直ちに生命にあてはめようとする愚かな、無駄な企てではないか。科學者と實驗との間には明らかに主客の關係がある。然し私と私の個性との間には寸分の隙隙も上下もあつてはならぬ。凡ての對立は私にあつて消え去らなければならぬ。

未來についても私は同じ事がいひ得ると思ふ。私を除いて私の未來（といはず未來の全體）を完成し得るものはない。未來の成行きを考へる場合、私といふ一人の人間を度外視しては、未來の相は成り立たない。これは少しも高慢な言葉ではない。その未來を築き上げるものは私の現在だ、私の現在が失はれてゐるなら、私の未來は生れ出て来ない。私の現在が最上に生きられるなら、私の未來は最上に成り立つ。眼前の緊張からゆるんで、單に未來を空想することが何んで未來の創造に塵ほどの

益にもなり得よう。未來を考へないまでに現在に力を集めた時、よき未來は創々にして創り出されてゐるのではないか。

センチメンタリストの癖ましくも甘い涙は私にはない。ロマンティストの快く華やかな想像も私にはない。凡ての缺陷と凡ての醜さを持ちながらも、この現在は私に取つていかに親み深くいかに尊いものだらう。そこにある強い充實の味と人間らしさは私を牽きつけるに十分である。この響應は私を存分に飽き足らせる。

十

然しながら個性の完全な飽滿と緊張とは如何に得がたきものであるよ。燃焼の生活とか白熱の生命とかいふ言葉は紙と筆とをもつてこそ表はし得ようけれども、私の實際の生活の上には容易に來てくれることがない。然し私にも全くないことではなかつた。私はその境界がいかに尊く難きものであるかを幽かながらも窺ふことが出来た。而してその醜陋味の前後にはその境に至り得ない生活の連続がある。その關係を私はこれから臚るげにでも書き留めておかう。

外界との接觸から自由であることの出来な私の個性は、縱令自立的な生活を導きつゝあつても常に外界に對し何等かの角度を保つてその存在を持続しなければならぬ。ある時は私は外界の刺激をそのまゝに受け入れて、反省もなく生活してゐる。ある時は外界の刺激に對して反射的に意識を動かして生活してゐる。又ある時は外界の刺激を待たずに、私の生命がある已むなき内面的の方に動かされて外界に働きかける。かゝる變化はたゞ私の生命の緊張度の強弱によつて結果される。これは知的活動、情的活動、意志的活動といふやうに、生命を分解して生活の状態を現はしたものである。人間の個性の働きを云ひ現はす場合にかゝる分析法によるのは私の最も忌む所である。人間の生命的過程に知情意といふやうな區別は實は存在してはゐないのだ。生命がある對象に對して變化なく働き続ける場合を意志と呼び、對象を變じ、若しくは力の量を變化して生命が働きかける場合を情といひ、生命が二つ以上の對象について選擇をなす場合を知と名づけたに過ぎないのだ。人の心的活動は三頭政治の支配を受けてゐるのではない。もつと純一な統合的な力によつて總

性を證據立てるものにはならない。さうある人は考へるかも知れない。

それでも私は道德の内容は絶えず變易するものだといひ張りたい。私に普通不易に感ぜられるものは、私に内在する道德性である。即ち知識の集成の中から必ず自己を外界に對して律すべき標準を造り出さうとする動向は、その内容へ緊張度の増減は論じないでに於て變化することなく自在するのを知つてゐる。然し道德性と道德とが全く異なつた觀念であるのは、誰れでも容易に判る筈だ、私に取つては、道德の内容の變化するのは少しも不思議ではない。又困ることでもない。たゞ變へようと思つても變へることの出来ないのは、道德を生み出さうとする動向だ。而してその内容が變化する和假定するのは私に取つて淋しいことだ。然し幸に私はそれを不安に思ふ必要はない。私は自分の經驗によつてその不易を十分に知つてゐるから。

知識も道德も變化する。然しそれがある期間固定してゐて、私の生活の努力がその内容を充實し得ない間は、それはどこまでも知識として、又道德として嚴存する。然し私の生活がそれらを乗り越してしまふと、知識も道德も習

性の園の中に退き去つて、知識若しくは道德としての價值が失はれてしまふ。私が無意識に、たゞ外界の刺激にのみ順應して行つてゐる生活の中にも、或は他のある人が見て道德的行爲とするものがあるかも知れない。然しその場合私に取つては決して道德的行爲ではない。何故ならば道德的である爲めには私は努力をしてゐなければならぬからだ。

知的生活は反省の生活であるばかりでなく努力の生活だ。人類はこゝに長い經驗の結果を綜合して、相互に依據すべき範律を作り、その範律に則つて自己を生活しなければならぬ。努力は實に人を石から篩ひ分ける大事な試金石だ。動植物にあつてはこの努力といふ生活活動は無意識的に、若しくは苦痛なる生活の條件として履行されるだらう。然し人類は努力を單なる苦痛とのみは見ない。人類に特に發達した意識的動向なる道德性の要求を充たすものとして感ぜられる。その動向を満足する爲めに人類は道德的努力に伴ふ苦痛を侵すことを意としない。この現はれは人類の歴史を莊嚴なものにする。

誰れが知的生活の所産なる知識と道德とを讃美しないものがあらう。それは眞理に對する人

類の倦むことなき精進の一路を示唆する現象だ。凡ての懷疑と凡ての破壊との間にあつて、この大きな力は嘗て磨滅したことがない。かのフェニックスが火に焼かれても、再び若々しい存在に甦つて、絶えず兩翼を大空に向つて張るやうに、この精進努力の生活は人類がなほ地上の正なる左筈として、長くこの世に榮えらだらう。

然し私はこの生活に無上の安立を得て、更に心の空しさを感じることはないか。私は空と答へなければならぬ。私は長い廻り道の末に、奇ねあぐれた故郷を私の個性に見出した。この個性は外界によつて十重二十重に囲まれてゐるにもかゝらず、個性自身に於て満ち足らねばならぬ。その要求が成就されるまでは絶対に飽きることがない。知的生活はそれを私に満たしてくれただか。満たしてはくれなかつた。何故ならば知的生活は何んといつても二元の生活であるからだ。そこにはいつても個性と外界との對立が必要とせられる。私は自然若しくは人に對してある身構へをせねばならぬ。經驗する私と經驗を強ひる外界とがあつて知識は生れ出る。努力せんとする私とその對象たる外界があつて道德は發生する。

進んで行きたいと希ふ。この欲求の緊張は私を驅つて更に異なつた生活の相を選ばしめる。

十一

それを名づけて私は知的生活 (Intellectual life) とする。

この種の生活に於て、私の個性は始めて獨立の存在を明らかにし、外界との對立を成就する。それは反射の生活である。外界が個性に對して働きかけた時、個性はこれに對して意識的の反應をする。即ち經驗と反省とが私の生活の上に表はれて来る。これまで外界に征服されて甘んじてゐた個性はその獨自性を發揮して、外界を相手取つて挑戦する。習性的生活に於て私は無元の世界にゐた。知的生活に於て私は始めて二元の世界に入る。こゝには私がある。かしこには外界がある。外界は私に攻め寄せて来る。私は經驗といふ形式によつて外界と衝突する。而してこの經驗の戰場から反省といふ結果が生れ出て来る。それはある時には勝利で、ある時には敗北であるであらう。

その何れにせよ、反省は經驗の結果を似寄りの部門に選び分ける。かく類別せられた經驗の堆積を人々は知識と名づける。知識を整理する

爲めに私は信憑すべき一定の法則を造る。かく知識の堆積の上に建て上げられた法則を人々は道德と名づける。

道德は對人的なものだといふ見解は一應道理ではあるけれども、私はさうは思はない。孤島に上陸したばかりの孤獨なロビンソン・クルソーにも自己に對しての道德はあつたと思ふ。何等の意味に於てであれ、外界の刺激に對して自己をよりよくして行かうといふ動向は道德とはいへないだらうか。クルソーが彼れの爲めに難破船まで什器食料を求めに行つたのは、彼れ自身に取つての道德ではなかつたらうか。然しクルソーはやがてフライデーを殺人者から救ひ出した。クルソーとフライデーとは最上の關係に於て生きることゝ互に要求した。クルソーは自己に對する道德とフライデーに對する道德との間に分譲點を見出さねばならなかつた。フライデーも同じ努力をクルソーに對してなした。この二人の努力は幸に一致點を見出した。かくて二人は孤島にあつて、美しい間柄で日を過ごしたのみならず、遂に船に救はれて英國の土を踏むことが出来た。フライデーが來てからはその孤島には對人的道德即ち社會道德が出来たけれども、クルソー一

人の時には、そこに一の道德も存在しなかつたと云はうとするのは、思ひ誤りでありはしまいか。道德とは自己と外界へそれが自然であらうと人間であらうととの知識に基する正しい自己の立場の決定である。だから、道德は一人の人の上にも、二人以上の人々の間にも當然成り立たねばならぬものだ。但し兩方の場合に於て道德の内容は知識の變化と共に變化する。知識の内容は外界の變化と共に變化する。それ故道德は外界の變化につれて又變化せざるを得ぬ。

世には道德の變易性を物足らなく思ふ人が少くないやうだ。自分を律して行くべき唯一の規準が絶えず變化せねばならぬといふ事は、直ちに人間生活の不安定そのものを豫想させる。人間の持つてゐる道德の後ろには何か不變な或るものがあつて、變化し易い末流の道德も謂はばそこに假りの根ざしを持つものに相違ない。不完全な人間は一氣にその普遍不易の道德の根元を把握しがたい爲めに、摸索の結果として過つてその一部を彼等の規準とするに過ぎぬ。一部分であるが故に、それは外界の事情によつては、修正の必要を生ずるだらうけれども、それは直ちに徹底的に道德そのものの變易

らば、私自身が社會を組み立ててゐる一分子であるのは間違ひのないことだから。私の欲する所は社會の欲する所であるに相違ない。而して私は不安と共に進歩を欲する。潤色と共に創造を欲する。その衝動を社會は今繼子扱ひにはしてゐるけれども——而して社會なるものは性質上多分永久にさうであらうけれども——その何處かの隅には必ず潛勢力としてそれが伏在してゐなければならぬ。社會は社會自身の意志に反して絶えず進歩し創造しつつあるから。

十二

こゝまでは縱令たどくしいにせよ、私の言葉は私の意味しようとする所に忠實であつてくれた。然しこれから私が書き連ねる言葉は、恐らく私の使役反抗するだらう。然し縱令反抗するとも私はこれで筆を擱くことは出来な

い。私は言葉を鞭つたことによつて自分自身を鞭つて見る。私も私の言葉もこの個性表現の困難な仕事に對して躊躇かも知れない。こゝまで私の伴侶であつた恐らくは少數の讀者も、絶望して私から離れてしまふかも知れない。私はその時讀者の忍耐の弱さを不満に思ふよりも、私自身の體驗の不十分さを悲しむ外はない。私は言葉の墮落をも尤めまい。かすかな暗示的表出をたよりにして兎に角私は私自身をいひ現はして見よう。

無元から二元に、二元から一元に。保存から整理に、整理から創造に。無努力から努力に、努力から超努力に。これらの各々の過程の最後のものが今表現せらるべく私の前にある。

個性の緊張は私を拉して外界に突貫せしめる。外界が個性に向つて働きかけない中に、個性が進んで外界に働きかける。即ち個性は外界の刺激によらず、自己必然の衝動によつて自分の生活を開始する。私はこれを本能的生(impulsive life)と假稱しよう。

何が私をしてこの衝動に燃え立たせるか。私は知らない。然し人は自然界の中にこの衝動の假の姿を認めることが出来ないだらうか。

地球が造られた始めにはそこに痕跡すら有機物は存在しなかつた。そこに、ある時期に至つて有機物が現はれた。それはある科學者が想像するやうに他の星體から隕石に進入して地表

に齎されたとしても、少くとも有機物の存在に不適當だった地球は、いつの間にかその發達にすら適合するやうに變化してゐたのだ。有機物の發生にたいで單細胞の生物が現はれた。而して生長と分化とが始まつた。その姿は無機物の結晶に起る生長らしい現象とは多くの點に於て相違してゐた。單細胞生物はやがて複細胞生物となり、一は地上に固着して植物となり、一は移動性を利用して動物となつた。而して動物の中から人類が發生するまでに、その進化の過程には屢々創造と稱せらるべき現象が續出した。續出したといふよりも凡ての過程は創造から創造への連續といつていい。習性及び形態の保存に固着してカリバンのやうに固着の生活にしがみ附かうとする生物をある神祕な力が鞭ちつゝ、分化から分化へと飛躍させて來た。

誰れがこの否む可らざる目前の事實に驚異せずにはゐられよう。地上の存在をかく奪き來つた大きな力はまた私の個性の核心を造り上げてゐる。私の個性はある己みがたい月に促されて、新たな存在へ躍進しようとする。その力の本源はいつでも内在的である。内發的である。一つの花から採收した月見草の種子が、同一の土壤に埋められ、同一の環境の下に生ひ出て

私が知識そのものではなく道徳そのものではない。それらは私と外界とを合理的に繋ぐ橋梁に過ぎない。私はこの橋梁即ち手段を實在そのものと混同することが出来ないのだ。私はまた平安を欲すると共に進歩を欲する。調色 (coloration) を欲すると共に創造を欲する。平安は既存の事態の調節的持續であり、進歩は既存の事態の建設的破壊である。調色は在るものをよりよくすることであり、創造は在らざるしものをあらしめることである。私はその一方にのみ安住してゐるに堪へない。私は絶えず個性の飛躍から再造に飛躍しようとする。然るに知的生活は私のこの飛躍的な内部要求を充足してゐるか。

知的生活の出発點は經驗である。經驗とは要するに私の生活の殘滓である。それは反省——意識のふりかへり——によつてのみ認識せられる。一つの事象が知識になるためにはその事象が「たび生活によつて濾過された」といふことを必要な條件とする。こゝに一つの知識があるとする。私がそれを或る事象の認識に役立つものとして承認するためには、縱令その知識が他人の經驗の結果によつて出来上つたものであれ、私の經驗も亦それを裏書きしたものでなければならぬ。私の經驗が若しその知識の基本となつた經驗と全然没交渉であつたなら、私は到底それを自分の用ひ得る知識として承認することは出来ない筈だ。だから私の有する知識とは、要するに私の過去を整理し、未來に起り來るべき事件を取扱ふ上の參考となるべき用具である。私と道徳とに於ける關係も亦全く同様な考へ方によつて定めることが出来る。即ち知識も道徳も既存の經驗に基いて組み立てられたもので、それがそのまゝ役立つためには、私の生活が同一軌道を繰り返して往來するの一番便利とする。而してそこには進歩とか創造とかいふ動向の活躍がおのづから忌み避けられなければならない。

私の生活が平安であること、而してその内容が調色されることを私は喜ばないとはいはない。私の内部にはいふまでもなくかゝる要求が大きな力を以て働いてゐる。私はその要求の達成を知的生活に向つて感謝せねばならぬ。けれども私は永久にこの保守的な動向にばかり膠着して満足するだらうか。

一個人よりも活動の運動になり勝ちな社會的生活にあつては、この保守的な知的生活の要求は自然に一個人のそれよりも強い。平安無事

といふことは、社會生活の基調となりたがる。だから今の程度の人類生活の様式にあつては、個人的の飛躍的動向を無視壓迫しても、知的生活の確立を希望する。現代の政治も、教育も、學術も、産業も、大體に於てはこの知的生活の強調と實踐とにその目標をおいてゐる。だから若し私がこの種の生活にのみ安住して、社會が規定した知識と道徳とに依據してゐたならば、恐らく社會から最上の報酬を與へられるだらう。而して私の外面的な生存權は最も確實に保障されるだらう。而して社會の内容は益々平安となり、調色され、整然たる形式の下に統合されるだらう。

然し——社會にもその動向は臆ろけに看取される如く——私には知的生活よりも更に緊張した生活動向の嚴存するのを何うしよう。私はそれを社會生活の爲めに犠牲とすべきであるか。社會の最大の要求なる平安の爲めに、進歩と創造の衝動を抑制すべきであるか。私の不満は謂れない不満であらねばならぬだらうか。

社會的生活は往々にして一個人のそれより遲鈍であるといへ、私の持つてゐるものを社會が全然缺いてゐると思はれない。何故な

知的生活以下に於てはさういふ譯には行かない。知的生活は常に外界との調節によつてのみ成り立つ。外界の存在なくしてはこの生活は働くことが出来ない。外界は常に知的生活とに對立の關係にあつて、而かも知的生活の所縁になつてゐる。かくしてその生活は自由であることが出来ない。のみならず知的生活の様式は必ず過去の反省によつて成り立つといふ事を私は前に申出した。既になし遂げられた生活は、縱令それが本能的な生活であつても、なし遂げられた生活である。その形は復と變易することがない。知的生活は實にこの種の固定し終つた生活の認識と省察によつて成り立つのである。その省察の持ち來たす概念がどうして宿命的な色彩を以て色づけられないでゐよう。

だから人の生活は或は宿命的であり或は自由であり得るといふ。その宿命的である場合は、その生活が正しき緊張から退縮した時である。正しい緊張に於て生活される間は個性は必ず絶對的な自由の意識の中にある。だから一層正しくいへば根柢的な人間の生活は自由なる意志によつて導かれ得るのだ。

同時に本能的な生活には道德はない。従つて努

力はない。この生活は必至的に自由な生活である。必至には二つの道はない。二つの道のない所には善惡の選擇はない。故にそれは道德を超越する。自由は自由であつて、自由ではない。二つの道の間に選ぶためにこそ努力は必要とせられるけれども、唯一筋道を自由に押し進む所に何んの努力の助力が要求されよう。

私は創造の爲めに遊戯する。私は努力しない。従つて努力に成功することも、失敗することもない。成功するにつけて、運命に對して謙遜である必要はない。又失敗するにつけて運命を顧みて辯護させる必要もない。凡ての責任は——若しそれを強ひていふならば——私の中にある。凡ての報償は私の中にある。

例へばこゝにある田園がある。その中には田疇と、山林と、道路と、家屋とが散在して、人々は各々そのある部分を私有し、田園の整理と平安とに勤んでゐる。他人の畑を收穫するものは罪に問はれる。道路を歩まないで山林を徘徊するものは懲戒される。それはさうあるべきことだ。何故といへば畑はその所有者の生計のために存在し、道路は旅人の交通のために設けられてゐるのだから。それは私に知的生活の鳥瞰圖を開展する。こゝに人がある。彼れはその田園

の外に據がる未踏の地を探見すべき衝動を感じた。彼れは田園を踏み出して、その荒原に足を入れた。そこには彼れの踏み進むべき道路はない。又掠奪すべき作物はない。誰れがその時彼れの踏み出した脚の一步について尤めだてをすることが出来るか。彼れが自ら奮つて一步を未知の世界に踏み出したことそれ自身が善といへば善だ。彼れの脚は道德の世界ならざる世界を踏んでゐるのだ。それは私に本能的な生活の面影をかすかながら影射させる。

黒雲を劈いて天の一角から一角に流れて行く電光の姿はまた私に本能の奔流の力強さと鋭さを考へさせる。力ある頭狀を描いて走るその電光のこゝかしこに本流から分岐して大樹の枝のやうに目的點に屈曲する支流を見ることがあるだらう。あの支流の末は往々にして、黒雲に吞まれて消え失せてしまふ。人間の本能的な生活の中にも越々かゝる現象は起らないだらうか。ある人が純粋に本能的の傾向によつて動く時、過つて本能そのものの歩みよりも更に急がうとする。而して遂に本能の主潮から逸して、自滅に導く迷路の上を驚地に墮れ進む。而して遂に何者でもあらぬべく消え去つてしまふ。それは悲壯な自己矛盾である。彼

も、多様多趣の形態を取つて萌え出づるといふドフリスの實驗報告は、私の個性の欲求をさながらに齟齬して見せてくれる。若しドフリスの intuition theory が實驗的に否認される時が来たとしても、私の個性はそれは單にドフリスの實驗の誤謬であつて、自然界の誤謬ではないと主張しよう。少くとも地球の上には、意識的であると然らざるとに係はらず、個性認識、個性創造の不思議な力が働いてゐるのだ。ベルグソンのいふ純粹持續に於ける認識と體驗は正しく私の個性が承認するところのものだ。個性の中には物理的時間を超越した經驗がある。意識のふりかへりなる所謂反省によつては握めない經驗そのものが認識となつて現はれ出る。そこにはもう他他の區別はない。二元的な對立はない。これこそは本當の生命の赤裸々な表現ではないか。私の個性は永くこの境地への歸還にあこがれてゐたのだ。

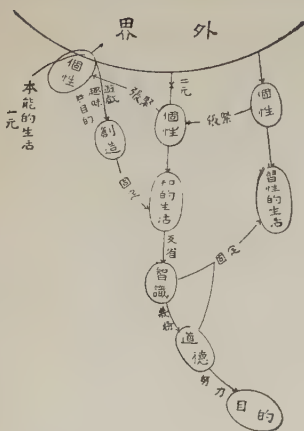
例へば大きな水流を私は心に描く。私はその流れが何處に源を發し、何處に流れ去るのかを知らない。然しその河は漾々として無邊際から無邊際へと流れて行く。私はまたその河の兩岸をなす土壤の何物であるかをも知らない。然しそれはこの河が億劫の年所をかけて自

己の中から築き上げたものではなからうか。私の個性も亦その河の水の一滴だ。その水の押し流れる力は私を拉して何處かに押し流して行く。ある時に私は岸邊近く流れて行く。而して岸邊との摩擦によつて、私を圍むがも私自身も、中流の水にはおくれがちに流れ下る。更にある時は、人がよく實際の河流で觀察し得るやうに、中流に近い水の速力の爲めに蹴押されて逆流することさへある。かゝる時に私は不幸だ。私は新たな展望から展望へと進み行くことが出来ない。然し私が一たび河の中流に持ち來されるなら、もう私は極めて安全で且つ自由だ。私は河自身の速力で流れる。河水の凡てを押し流すその力によつて私は走つてゐるのだけれども、私はこの事實をすら感じない。私は自分の欲求の凡てに於て流れ下る。何故ならば河の有する最大の流速は私の欲求そのものに外ならないから。だから私は絶対に自由なのだ。而して兩岸の摩擦の影響を受けねばならぬ流域に近づくに従つて、私は自分の自由が制限せられて来るのを苦々しく感じなければならぬ。そこに始めて私自身の外に嚴存する運命の手が現はれ出る。私はそこで是否むべからざる宿命の感じにおびえねばならぬ。

河の水は自らの位置を選択すべき道を知らぬ。然し人間はそれを知つてゐる。而してその選擇を實行することが出来る。それは人間の有する自覺がさせる業である。

人は運命の主であるか奴隸であるか。この問題は屢々私達を悩ませる。この問題の決定的批判なしには、神に對する悟りも、道德律の確定も、科學の基礎も、人間の立場も凡て不安定となるだらう。私もまたこの問題には永く苦しんだ。然し今はかすかながらもその解決に對する曙光を認め得た心持がする。

若し本能的生活が體驗せられたなら、それを體驗した人は必ず人間の意志の絕對自由を經驗したに違ひない。本能的な生活は一元的であつてそれを牽制すべき何等の對象もない。それはそれ自身の必然な意志によつて、必然の道を踏み進んで行く。意志の自由とは結局意志そのものの必然性をいふのではないか。意志の欲求を認めなければ、その自由不自由の問題は起らない。意志の欲求を認め、その意志の欲求が必然的であるのを認め、本能的境地に置かれた意志は本能そのものであつて、それを遮る何者もないことを知つたなら、私達のいふ意志の自由はそのまゝ肯定せられなければならない。



十三

躊躇は無理のないことだともいへる。單に功利的な立場からのみ考へればその躊躇は正當なことださへいへる。然し凡ての生存は、それが本能の及ぶだけ純粹なる表現である場合に最も眞であるといふ大事な要件が許されるならば、本能的な生活は私にとつて知的な生活よりもより價値ある生活である。若し價値をもつてそれを定めるのが不當ならば、より尊い生活である。而かも私はこの生活の内容を的確に發想することが出来ない。(それはこの生活が理智的表現を超越してゐるが故でもある)この場合私は比喩と讃美によつてわづかにこの尊い生活を偲ぶより外に道がないだらう。

十四

本能といふ意味を用ひるに當つて私は多少の誤解を恐れたいではない。この言葉は殊に科學によつてその正しい意味から墮落させられてゐる。といふよりは、科學が素朴的に用ひたこの言葉を俗衆が徹底的に歪め穢してしまつた。然し今はそれが固有の意味にまで引き上げられなければならない。ベルグソンはこの言葉をその正しい意味に於て用ひ始めた。ラッセル(私は氏の文章を一度も讀んだことがないけれど)も亦ベルグソンを繼承して、この言葉の正當な使用を心懸けてゐるやうに見える。

本能とは大自然の持つてゐる意志を指すものとも考へることが出来る。野獸にはこの力が野獸なりに赤裸々に現はれてゐる。自然科學はその現はれを観察して、詳細にそれを記述した。而してそれが人類の活動の中にも看取せられるのを附け加へた。この記述はいふまでもなく明らかな事實である。然しその事實から、人類の活動の全部が野獸に現はれた本能だけから成り立つとは科學は結論してゐないのだ。然るに人は往々にして科學の記述を適用しよ

うとする。これは單なる誤解とのみ見て過ごすことが出来ないと思ふ。

人間に人間である。野獸ではない。野獸が無自覺に近い心でなす所を人は十分なる自覺をもつてなしてゐるのである。若し人がその自覺を適用して、肉にまで至る愛の要求のない場合に、單に外觀的に觀察された野獸の本能に走つたならば、それは明らかに人間の有する本能の全體的な活動といふことが出来ない。同時に、人間の本能の中から野獸と共通な部分を理智的に引き離して、純靈といふやうな境地を再造しようとするのは、明らかに本能に對する謂れない迫害である。本能は分解とは兩立することが出来ない。本能はいつでもその全體に於て働かねばならぬ。人間の本能——野獸の本能でもなく又天使の本能でもない——もその本能の全體に於て働かねばならぬ。そこからのみ、若し生れるならば、人間以上の新しい存在への本能は生れ出るだらう。本能を現實のきびしさで受取らないで、ローマンティックに考へる所に純靈の世界といふ空虚な空中樓閣が築き上げられる。肉と靈とを峻別し得るものの如く考へて、その一方に偏倚するのを最上の生活と決めこむやうな禁慾主義の義務律

れの創造的動向が彼れを空しく自滅せしめる。
知的生活の世界からこれを眺めると、一つの愚かな蹉跎として眼に映ずるかも知れない。たしかに合理的ではない。又かゝる現象が知的生活の渦中に発見された場合には道德的ではない。然しその生活を生きた當體なる一つの個性に取つては、善悪、合理非合理の閑葛藤を插むべき餘地はない。かくばかり緊張した生活が、自己満足を以て生活された、それがあつたばかりだ。知的生活を基調として生活し、その生活の基準に慣らされた私達は動もするとこの基準のみを以て凡ての現象を理智的に眺めてゐはしないか。而して知的生活を一步踏み出した所に、更に緊張した純眞な生活が伏在するのを見落すやうなことはないか。若しさうした態度にあるならば、それはゆゑしき誤謬といはねばならぬ。人間の創造的生活はその瞬間に停止してしまふからだ。この本能的に對しておぼろげながらも推察の出来ない社會は、豚の如く健全な社會だといひ得る外の何者でもあり得ない。

自由なる創造の世界は遊戯の世界であり、趣味の世界であり、無目的の世界である。努力を必要としないが故に遊戯といつたのである。義

務を必要としないが故に趣味といつたのである。生活そのものが目的に達する手段ではないが故に無目的といつたのである。緩慢な、回顧的な生活にのみ圍繞されてゐる地上の生活に於て、私はその最も純粹に近い現はれを、相愛の極、健全な愛人の間に結ばれる抱擁に於て見出すことが出来ると思ふ。彼等の床に近づく前に道德知識の世界は影を隠してしまふ。二人の男女は全く愛の本能の化身となる。その時彼等は彼等の隣人を顧みない、彼等の生死を慮らない。二人は單に愛のしるしを與へることと受取ることとにのみ燃える。而して忘我的な、苦痛にまでの有頂天、それは極度に緊張された愛の遊戯である。その外に何者でもない。而かもその間に、人間のなし得る創造としては神祕な絶大な創造が成就されてゐるのだ。ホイットマンが「アダムの子等」に於て、性慾を歌ひ、大自然の雄々しい裸かな、姿を彫寫させるやうな瞬間を讚美したことに何んの不思議があらう。而してエマソンがその撤回を強要した時、敢然として耳を傾けなかつた理由が如何に明白であるよ。肉にまで押し進んでも更に悔いと憎しみを醸さない戀こそは眞の戀である。その戀の姿は比べるものもなく美しい。私

は又本能的生活の素材に近い現はれを無邪氣な小兒の熱中した遊戯の中に見出すことが出来ると思ふ。彼れは正しく時間からも外間からも超越する。彼れには遊戯そのものの外に何等の目的もない。彼れの表面的な目的は縱令一個の紙箱を造ることにありとするも、その製作に熱中してゐる瞬間には、紙箱を造る手段そのものの中に目的は吸ひ込まれてしまふ。そこには何等の努力も義務も附帶してはゐない。あの純一無雜な生命の流を、見守つてゐると私は涙がにじみ出るほど羨ましい。私の生活があゝいふ態度によつて導かれる瞬間が偶にあつたらば、私は甫めて眞の創造を成就することが出来るであらうものを。

私は本能的生活の記述を蔑ろにして、あまり多くをその讚美の爲めに空費したらうか。私は假りにそれを許してもらひたい。何故なら、私は本能的生活を知的生活の上位に置かうと思ふからだ。誰れでも私のいふ知的生活を習性的生活の上におかぬものはなからう。然し本能的生活を知的生活の上におかうとすれば場合になると、多くの人々はその躊躇を感じはしないだらうか。現在人類の生活が知的生活をその基調としてゐるといふ點に於て、その

し雀躍する。これは疑ひもなく愛の存する處には何處にも觀察される現象である。實際愛するものの心理と行爲との特徴は放射することであり與へることだ。人はこの現象の觀察から出發して愛の本質を歸納しようとする。而して直ちに、愛とは與へる本能であり放射するエネルギーであるとする。多くの人は省察をここに限り、愛の體驗を十分に噛みしめて見ることとせずに、遂早くこの觀念を受け入れ、その上に各自の人生觀を築く。この觀念は私達の道德の大黒柱として認められる。愛他主義の倫理觀が構成される。而して人間生活に於ける最も崇高な行爲として犠牲とか獻身とかいふ徳行が高調される。而して更にこの觀念が利己主義の急所を衝くべき最も鋭利な武器として考へられる。

さう思はれることを私は一概に排斥するものではない。愛が知的生活に持ち來たされた場合には、さう結論されるのは自然なことだ。知的生活にあつては愛は理智的にのみ考察されるが故に、それは決して生活の内部にあつてはくまゝの姿では認められない。愛は生活から假りに切り放されて、一つの固定的な現象としてのみ觀察される。謂はば理智が愛の周圍

——それはいかに綿密であらうとも——のみを廻轉し圍繞してゐる。理智的にその結論が如何に周囲で正確であらうとも、それが果して本能なる愛の本體を把握し得た結論といふことが出来るだらうか。

～本能を把握するためには、本能をその純粹な形に於て理解するためには、本能的生活中に把握される外に道はない。體驗のみがそれを可能にする。私の體驗は、縱しそれが貧弱なものであらうとも、愛の本質を與へる本能として感ずることが出来ない。私の經驗が私に告げる所によれば、愛は與へる本能である代りに奪ふ本能であり、放射するエネルギーである代りに吸引するエネルギーである。

他のためにする行爲を利己主義といひ、己れのためにする行爲を利己主義といふのなら、その用語は正當である。何故ならば利己といふ言葉は行爲を表現すべき言葉だからである。然し倫理學が定義するやうに、他のためにせんとする衝動若しくは本能を認めて、これを利己主義といひ、己れのためにせんとする衝動若しくは本能を主張してこれを利己主義といふのなら、その用語は正鵠を失してゐる。それは當然愛他主義愛己主義といふ言葉で書き改められ

なければならぬものだ。利と愛との兩語が自明的に示すが如く、利は行爲或は結果を現はす言葉で、愛は動機或は原因を現はす言葉であるからだ。この用語の錯誤が偶々愛の本質と作用とに對する混淆を暴露してはゐないだらうか。即ち人は愛の作用を見て直ちにその本質を揣摩し、これに對して本質にのみ名づくべき名稱を與へてゐるのではないか。又人は愛が他に働きの動向を愛他主義と呼び、己れに働く動向を利己主義と呼ぶならはしを持つてゐる。これも偶々、人が一種の先入偏見を以て愛の働き方を見てゐる證據にはならないだらうか。二つの言葉の中、物質的な聯想の附帶する言葉を己れへの場合に用ひ、精神的な聯想を起す言葉を他への場合に用ひてゐるのは、恐らく愛が他を益する時その作用を定うし得るといふ既定の觀念に制せられてゐるのを現はしてゐるやうだ。この愛の本質と現象との混淆から、私達の理解は思ひもよらぬ迷宮に迷ひ込むだらう。

十六

愛を傍觀してゐずに、實感から潛りこんで、これまで認められてゐた觀念が正しいか否かを檢證して見よう。

十五

法はそこに胚胎されるのではないか。又本能を現貨のきびしさに於て受取らないで、センチメンタルに考へる所に肉慾の世界といふ墮落した人生觀が假想される。この野蠻の過去にまでの歸還は、また本能の分裂が結果するところのもので、人間を人間としての莊嚴の座から引きおろすものではないか。私の生活が何等かの意味に於てその緊張度を失ひ、現實への安立から知らずく未來か過去かへ遠ざかる時、必ずかゝる本能の分裂がその結果として現はれ出るのを私はよく知つてゐる。私はその境地にあつて必ず何等かの不満を感じる。而して一步を誤れば、その不満を醫さんが爲めに、益々本能の分裂に向つて猪突する。それは危い。その時私は明らかに自己を葬るべき墓穴を掘つてゐるのだ。それを何人も救つてくれることは出来ない。本當にそれを救ひ得るのは私自身のみだ。

私の意味する本能を適用して、自滅の方に進むものがあるならば、私はこの上更にいふべき何者をも持たぬだらう。本當をいへば、誤解を恐れるなら、私は始めから何事をもいはぬがいゝのだ、私は私の柄にもない不羈な老婆親切をもうやめねばならぬ。

人間は人間だ。野獸ではない。天使でもない。人間には人間が大自然から分與された本能があると私はいつた。それならその本能とはどんなものであるかと反問されるだらう。私は當然それに答へるべき責任を持つてゐる。私は貧しいなりにその責任を果さう。私の小さな體驗が私に書き取らせるものをこゝに披瀝して見よう。

人間によつて切り取られた本能の流れを私は今まで漫然とたゞ本能と呼んでゐた。それは一面に許さるべきことである。人間の有する本能も亦大自然の本能の一部なのだから。然しこゝまで私の考察を書き進めて來ると、私はそれを特殊な名によつて呼ぶのを便利とする。

人間によつて切り取られた本能——それを人は一般に愛と呼ばないだらうか。老子が道の道とすべきは常の道にあらずと謂つたその道も或はこの本能を意味するのかも知れない。孔子が忠信のみといったその忠信も或はこれを意味するのかも知れない。釋尊の菩提心、ヨハネのロゴス、その他無數の名稱はこの本能を意味すべく構成されたものであるかも知れない。

然し私は自分の便宜の爲めに假りにそれを愛と名づける。愛には、本能と同じやうに既に種々な不純な感性的意味が膠着してゐるけれども、多くの名稱の中で最も専門的でなく、且つ比較的普遍的な内容をその言葉に含んでゐるやうだ。愛といへば人に常識的にそれが何を現はすかを臆ろけながらに知つてゐる。

愛は人間に現はれた神聖な本能の側きである。然し概念的に物事を考へる習慣に縛られてゐる私達は、愛といふ重大な問題と考察する時にも、極めて習慣的な外面的の概念に捕へられて、その真相とは往々にして對角線的にかけへだたつた結論に達してゐることはないだらうか。

人は愛を考察する場合他の場合と同じく、愛の外面的表現を観察することから出發して、その本質を見窮めようと試みないだらうか。ボロはその書翰の中に愛は二種みなく興へるバツといつた、それは愛の外面的表現を言能なくいひ現はした言葉だ。愛する者とは興へる者の事である。彼れは自己の所有から興へ得る限りを與へんとする。彼れからは今まであつたものが失はれて、見た所貧しくはなるけれども、その爲めには彼れは愛へないのみか、却つて欣喜

とを與へるだらう。人は、私のこの愛の外面の現象を見て、私の愛の本質は與へることに於てのみ成り立つと速断することはないだらうか。然しその推定は根底的に的をはずれた悲しむべき誤謬なのだ。私がその小鳥を愛すれば愛する程、小鳥はより多く私に攝取されて、私の生活と不可避的に同化してしまふのだ。唯、いつまでも分離して見えるのは、その外面的な形態の關係だけである。小鳥のしは鳴きに、私は小鳥と共に或は喜び或は悲しむ。その時喜びなり悲しみなりは小鳥のものであると共に、私にとつては私自身のものである。私が小鳥を愛すれば愛するほど、小鳥はより多く私そのものである。私にとつては小鳥はもう私以外の存在ではない。小鳥ではない。小鳥は私だ。私は小鳥を消さるのだ。(The little bird is my life, and I live him.) "I live a bird!"

…英語にはこの適切な愛の發想法がある。若しこの表現をうなづく人があつたら、その人は確かに私の意味しようとする所をうなづいてくれるだらう。私は小鳥を生きているのだ。だから私は美しい籠と、新鮮な食餌と、やむ時なき愛とを外物に恵み與へた覚えはない。私は明らかにそれらのものを私自身に與へてゐるの

だ。私は小鳥とその所有物の凡てを残す所なく外界から私の個性へ奪ひ取つてゐるのだ。見よ愛は放射するエネルギーでもなければ與へる本能でもない。愛は掠奪する烈しい力だ。與へると見るのは、愛者被愛者に直接の交渉のない第三者が、愛するものの愛の表現を極めて外面的に觀察した時の結論に過ぎないのを知るだらう。

かくて愛の本能に従つて、私は他を私の中に同化し、他に愛せらるゝことによつて、私は他の中に投入し、私と他とは俗網の經緯の如く、そこに自ら美しい生活の紋様を織りなして行くのだ。私の個性がよりよく、より深くなり行くに従つて、よりよき外界はより深く私の個性の中に取り込まれる。生活全體の實證はかくの如くして始めて成就する。そこには犠牲もない。又義務もない。唯感謝すべき特權と、ほゝ笑ましい飽滿とがあるばかりだ。

十七

目を舉げて見るもの、それは凡てが神祕である。私の心が平生の立場からふと視角をかへてゐる時、私の目前に開かれるものはたゞ驚異すべき神祕があるばかりだ。然しながら現存の世界に執着を置き切つた私には、かゝる神祕は神祕でありながらあたり前の事實だ。私は小兒のやうに常に驚異の眼を見張つてゐることは出来なくなつた。その現實的な、散文化的な私にも、愛の御きのみは近づきがたき神祕な現はれとして感ぜられる。

愛は私の個性を哺くために外界から奪ひ取つて来る、けれどもその爲めに外界は寸毫も失はれることがない。例へば私は愛によつてカナリヤを私の裏に奪ひ取る。けれどもカナリヤは奪はるゝことによつて幸福にはなるとも不幸福にはならない。かの小鳥は少くとも物質的に美しい籠(それは醜い籠にあるよりも確かにいゝことだらう)と新鮮な食餌とを以て富ませられる。物質の法則を超越したこの神祕に私を存分に驚かせ感傷的にさへする。愛といふ世界は何んといふいゝ世界だらう。そこでは白晝に不思議な魔術が絶えず行はれてゐる。それを見守ることによつて私は凡ての他の神祕を忘れようとしてさへする。私はこの賜物一つを持ち得ることによつて、凡ての存在にしみこみとした感謝の念を持たざるを得ない。

愛は與へる本能をいふのだと主張する人は、恐らく私のこの物語を聞いて啞ひ出すだらう。

私は私自身を愛してゐるか。私は躊躇することなく愛してゐると答へることが出来る。私は他を愛してゐるか。これに肯定的な答へを送るためには、私はある條件と限度とを附することを必要としなければならぬ。私が私と何等かの點で交渉を持つにあらざれば、私は他を愛することが出来ない。切實にいふと、私は己れに對してこの愛を感じるが故にのみ、己れに交渉を持つ他を愛することが出来るのだ。私が愛すべき己れの存在を見失つた時どうして他との交渉を持ち得よう。而して交渉なき他にどうして私の愛が働き得よう。だから更に切實にいふと、他の何等かの状態に於て私の中に攝取された時にのみ、私は他を愛してゐるのだ。然し己れの中に攝取された他は、本當をいふともう他ではない。明らかに己れの一部分だ。だから私が他を愛してゐる場合も、本質的にいへば他を愛することに於て己れを愛してゐるのだ。而して己れをのみだ。

但し己れを愛するとは何事を示すのであらう。私は己れを愛してゐる。そこには聊かの虚飾もなく誇張もない。又それは傲慢な云ひ分ともすることは出来ない。唯あるがまゝにあるがまゝに申出たに過ぎない。然し私が私

自身をいかに深くいかによく愛してゐるかを省察すると問題は自ら別になる。若し私の考へる所が謬つてゐないなら、これまで一般に認められてゐた利己主義なるものは、極めて功利的な、物質的な、外面的な立場からのみ考察されてはゐなかつたらうか。即ち生物学の自己保存の原則を極めて安閑に査定して、それを愛己の本能と結び付けたものではなかつたらうか。「生物發達の狀態を研究して見ると、利己主義は常に利他主義以上の力を以て働いてゐる。それを認めない譯には行かない」といつたスペンサーの生物一般に對しての偶然たる主張が、何んといつても利己主義の理解に對する基調になつてゐはしないだらうか。その主張が全事實の一部をなすものだといふことを私も認めない譯ではない。然しそれだけで満足し切ることを、私の本能の要求は明らかに拒んでゐる。私の生活動向の中には、もつと深くもつとよく己れを愛したい欲求が十二分に潜んでゐることに氣づくのだ。私は明らかに自己の保存が保障されただけでは飽き足らない。進んで自己を押し擴げ、自己を充實しようとし、而して意識的にせよ、無意識的にせよ、休む時なくその願望に驅り立てられてゐる。この切實

な欲求が、かの功利的な利己主義と同一水準におかれることを私は退けなければならない。それは愛己主義の意味を根本的に破壊しようとする恐るべき傾向であるからである。私の愛己の本能が若し自己保存にのみあるならば、それは自己の平安を希求すること、知的生活に於ける欲求の一形式にしか過ぎない。愛は本能である。かくの如き境地に満足する譯がない。私の愛は私の中に於て最上の生長と完成とを欲する。私の愛は私自身の外に他の對象を求めはしない。私の個性はかくして生長と完成との道程に急ぐ。然らば私はどうしてその生長と完成とを成就するか。それは奪ふことによつてである。愛の表現は惜みなく與へるだらう。然し愛の本體は惜みなく奪ふのだ。

アミイバが觸指を出して外側の食餌を握へこみ、やがてそれを自己の蛋白質中に同化し終るやうに、私の個性は絶えず外界を愛で同化するることによつてのみ生長し完成してゆく。外界に個性の貯藏物を投げ與へることによつて完成するものではない。例へば私が一羽のカナリヤを愛するとしよう。私はその愛の故に、美しい籠と、新鮮な食餌と、やむ時なき愛へ

した。その後彼れは長くビヤトリリスを見ることがなかつた。而してたび一度あつた。それはフロレンスの街に於てだつた。ビヤトリリスは一人の女伴れと共に紅い花をもつてゐた。而してダンテの挨拶に對してしとやかな會話を返してくれた。その後ビヤトリリスは他に嫁いだ。ダンテはその姫の席に列つて激情のあまり卒倒した。ダンテはその時以後彼れの心の奥の愛人を見ることがなかつた。而してビヤトリリスは凡ての美しいものの運命に似合はしく、若くしてこの世を去つた。文獻によればビヤトリリスは切なるダンテの熱愛に觸れることなくして世を終つたらしい。ダンテの愛はビヤトリリスと相互的に通ひ合はなかつた。(愛は相互的にみ成り立つとのみ考へる人はこゝに注意してほしい)ダンテだけが秘めた心の中に彼女を愛した。而かも彼れは空しかったか。ダンテはいかにビヤトリリスから奪つたことぞ。彼れは一生の間ビヤトリリスを浪費してなほ餘る程この愛人から奪つてゐたではないか。彼れの生活は淋しかった。飢饉であつた。然しながら強く愛したことのない人々の淋しさと比べて見たならばそれは何んといふ相違だらう。ダンテはその愛の獲得の飽満さを自分一人では抱へきれ

ずに、「新生」として「聖曲」として心外に吐き出した。私達はダンテのこの飽満からの餘剰にいかにも多くの價值を置くことぞ。ホイットマンも嘗てその可憐な即興詩の中に自分は嘗て愛した。その愛は酬いられなかつた。私の愛は無益に終つたらうか。否。私はそれによつて詩を生んだと歌つてゐる。

見よ愛がいかに奪ふかを。愛は個性の飽満と自由を成就することにのみ全力を盡してゐるのだ。愛は嘗て義務を知らない。犧牲を知らない。獻身を知らない。奪はれるものが奪はれることをゆるしつゝあらうともあるまいとも、それらに煩はされることなく愛は奪ふ。若し愛が相互的に働く場合には、私達は爭つて互に互を奪ひ合ふ。決して與へ合ふのではない。その結果私達は互に何物をも失ふことがなく互に獲得する。人が通常いふ愛するものは三倍の恵みを得るとはこれをいふのだ。私は豫期するとほりの獲得に對して歡喜し、有頂天になる。而して明らかにその獲得に對して感激し感謝する。その感激と感謝とは偽善でも何んでもない。あるべかりしものがあつたについての人の有し得る自らつ情である。愛の感激……正しくいふとこの外に私の生命はない。

私は明らかに他を愛することによつて凡てを自己に取り入れてゐるのを承認する。若し人が私を利己主義者と叫ばうとならば、私はさう呼ばれるのを妨げない。若し必要ならば愛倫的利己主義者と呼んでもかまはない。苟くも私が自發的に愛した場合なら、私は必ず自分に奪つてゐるのを知つてゐるからだ。

この求心的な容赦なき愛の作用こそは、凡ての生物を互に結び付けさせた因子ではないか。野獸を見よ。如何に彼等の愛の作用に相違ぶ(狀)が顕明に現はれてゐるかを。それが人間に至つて全く反對の方向を取るといふのか。そんな事があり得べきではない。たゞ人間は假面の下に自分自らを瞞着しようとしてゐるのだ。而して人間はたしかにこの偽善の天罰を被つてゐる。それは野獸にはない、人間にのみ見る偽善の出現だ。何故愛をその根柢的な本質に於てのみ考へることが悪いのだ。それをその本質に於て考へることなしには人間の生活には遂に本當の進歩合作は持ち來されないであらう。

知的生活の傾向はいつでも本能を墮落させ、それを第二義的な狀態に於てのみ利用する。知的生活の要求するものは不安定事である。こ

お前のいふことは風の昔に私がいひ張つた所だ。愛は與へることによつて二倍する、その不思議を知らないのか。愛を與へるものは與へるが故に富み、愛を受けるものは受けるが故に富む。地球が古いほど古いこの眞理をお前は今まで知らないでゐたのか、と。

私はそれを知らないではない。然し私はその提言には一つの條件をおく必要を感じる。愛が與へることによつて二倍するといふ現象は愛するものと愛せられたものとの間に愛が相互的に成り立つた場合に限るのだ。若しその愛が完全に受取られた場合には、その愛の恵みは確かに二倍するだらう。然し愛せられるものが愛するもののあることを知らなかつた時はどうだ。或はそれを斥けた時はどうだ。それでも愛は二倍されてゐる事と感ずることが出来るか。それは一種感情的な自觀の假想に過ぎないのではないか。或は人工的な神祕主義に強ひて一般的な考へを結び付けて考へる結果に過ぎないのではないか。

若し愛が片務的に動いた場合に、愛するといふことを恩恵を施すといふ如く考へてゐる人には、愛するといふ行為に一種の自己満足を感じずるが故に、愛する人の受ける心の豊さは二

倍になると主張するのなら、それは愛の作用を没我的でなければならぬと強言する愛他主義者としてはあるまじきことだといはねばならぬ。その時その人は愛することによつて明らかに報酬を得てゐるからである。報酬を得てそれが人からであらうと、神からであらうと、若しくは報酬を得ることを期待し得てする仕事が何んで愛他主義であらうぞ。何んで他に殉ずる心であらうぞ。愛するのは自分のためではなく、他人のためだと主張する人は、先づこの邊の心持を儼然と省察して見る必要があると思ふ。彼等はよく功利主義々々々々といつて報酬を目あてにする行為を蛇蝎の如く忌み惡んでゐる。然るに彼等自身の行為や心持にもさうした傾向は見られないだらうか。その報酬に對する心持が違ふ。それは比喩のものならぬ程凡下の功利主義より高尚だといはうか。私にはそんな心持は通じない。高尚だといへばいふ程それがうそに見える。非常に巧みな、而して狡猾な假面の下に隠れた功利主義としか思はれない。物質的でないにせよ、純粹に精神的であるにせよ、(そんな表面な區別は私には本當は通用しないが、假りにある人々の主張するやうな言葉遣ひにならつて)何等かの報酬が想像され

てゐる行為に何んの戲身ぞ、何んの犠牲ぞ。若し慈善といひ得べくんば、これこそ大それた忌しい慈善ではないか。何故なら當然期待されるべき功利的な結果を、彼等は知らぬ顔に少しも功利的でないものの如くに主張するからだ。

或はいふかも知れない。愛するといふことは人間内部の至上命令だ。愛する時人は水が低きに流れるが如く愛する。そこには何等報酬の豫想などはない。その結果がどうであらうとも愛する者は愛するのだ。これを以てかの報酬を目的にして行為を起す功利主義者と同一視するのは、人の心の絶妙な働きを知らぬものだ。私はそれを詭辯だと思ふ。一度愛した經驗を有するものは、愛した結果が何んであるかを知つてゐる、それは不可逆的に何等かの意味の獲得だ。一度この經驗を有つたものは、再び自分の心の働きを利他主義などとは呼ばない筈だ。他に殉ずる心などとはいはない筈だ。

さういふことはあまり勿體ないことである。愛は自己への獲得である。愛は惜みなく喜ぶものだ。愛せられるものは尊はれてはゐるが不思議なことには何物も尊はれてはゐない。然し愛するものは必ず奪つてゐる。ダンテが少年の時ビヤトリスを見て、世の常ならぬ愛を経験

とする。愛に手近い所からその事業を始め、右左往に賤利品を運び歸る。個性が強烈であればある程、愛の活動も亦目ざましい。若し私が愛するものを凡て奪ひ取り、愛せられるものが私を凡て奪ひ取るに至れば、その時に二人は一人だ。そこにはもう奪ふべき何物もなく奪はるべき何物もない。

だからその場合彼れが死ぬことは私が死ぬことだ。殉死とか情死とかはかくの如くして極めて自然であり得ることだ。然し二人の愛が互に完全に奪ひ合はないのである場合でも、若し私の愛が強烈に働くことが出来れば、私の生長は益々擴張する。而してある世界が——時間と空間をさへ憚無するほどの擴がりを持つたある世界が——個性の中につかりと建立される。而してその世界の持つ飽くことなき擴充性が、これまでの私の習慣を破り、生活を變へ、遂には弱い、はかない私の肉體を打壞するのだ。破裂させてしまふのだ。

難者のいふ自滅とは畢竟何をさすのだらう。それは單に肉體の亡滅を指すに過ぎないではないか。私達は人間である。人間は必ずいつか死ぬ。何時か肉體が亡びてしまふ。それを避けることはどうしても出来ない。然し難者が私

が愛したが故に死なねばならぬ場合、私の個性の生長と自由とが失はれてゐると考へるのは間違つてゐる。それは個性の亡失ではない。肉體の破滅を伴ふまで生長し自由になつた個性の擴充を指してゐるのだ。愛なきが故に、個性の充實を得切らずに定命なるものを齎いで死なねばならぬ人がある。愛あるが故に、個性の充實を完うして時ならざるに死ぬ人がある。然しながら所謂定命の死、不時の死とは誰れが完全に決めることが出来るのだ。愛が完うせられた時に死ぬ、即ち個性がその擴充性をなして遂げてなほ餘りある時に肉體を破る、それを定命の死といはないで何處に正しい定命の死があらう。愛したものの死ほど心安い潔い死はない。その他の死は凡て苦痛だ。それは他の爲めに自滅するのではない。自滅するものの個性は死の瞬間に最上の生長に達してゐるのだ。即ち人間として奪ひ得る凡てのものを奪ひ取つてゐるのだ。個性が充實して他に何んの望むものなき境地を人は假りに沒我といふに過ぎぬ。

この事實を思ふにつけて、いつでも私に深い感銘を與へるものは、基督の短い地上生活とその死である。無學な漁夫と税吏と娼婦とに

圍繞された、人眼に遠いその三十三年の生涯にあつて、彼れは比類なく深く善い愛の所有者であり使役者であつた。四十日を荒野に斷食して過ごした時、彼れは貧民救済と、地上王國の建設と、奇蹟的能力の修得を以ていざなはれた。然し彼れは純粹な愛の事業の外には何物をも擇ばなかつた。彼れは知的生活の爲めには、即ち地上の不安の爲めには何事をもち取てななかつた。彼れはその母や弟とは不和になつた。多くの子とその父から反かされた。ユダヤ國を擾亂するおそれによつてその愛國者を怒らせた。では彼れは何をしたか。彼れはその無上愛によつて三世に亘つての人類を自己の内に攝取してしまつた。それだけが彼れの已むに已まれぬ事業だつたのだ。彼れが與へて與へてやまなかつた事實は、彼れが如何に個性の擴充に満足し、自己に與へることを喜びとしたかを證據立てるものである。「汝自身に如く鄰人を愛せよ」といつたのは彼れではなかつたか。彼れは確かに自己を愛するその法悦をしみくゝと知つてゐた最上一人といふことが出来る。彼れに若し、その愛によつて衆生を攝取し盡したといふ意識がなかつたなら、どうしてあの目前の生活を破壊にのみ圍まれて憂如たることが出来

の生活にあつては、愛の本質よりもその現はれが必要である。内部の要求はさもあらばあれ、互に與へ合ふ事さへ行れば、それで平安は保たれてゆく。それ故に倫理道德は義務と戯身との徳を高調する。人は遂にこの固定的な概念にあざむかれる。而して愛のない所に、愛が行ふのと同じ行をする。即ち愛の極印なき所有物を外界に向つて恥ぢることもなく放射する。けれども愛の極印のない所有物は、一度外界に放射されると、またとはその人に返つて来ない。その時彼れにとつては行爲の結果に對する苦い後味が残る。その後味を胡魔化するために、彼れは人の爲めに社會の爲めに義務を果し、戯身の行をしたといふ諦めの心になる。而してそこに誇るべからざる誇りを感じようとする。社會はかくの如き人の動機、如何は顧慮することなく、直ちに彼れに與へるのに社會人類の恩人の名を以てする。それには知的生活にあつては獎勵的にさうするのが便利だからだ。そんな人はそんな事は齒牙にかけるに足らないことのやうに云ひもし思ひもしながら、衷心の満ち足らなから、知らず／＼それを齒牙にかけてゐる。かくてその人は愛の逆用から来る冥罰を表面的な概念と社會の賞讃によつて塗抹し、

社會はその人の表面的な行爲によつて平安をつないで行く／＼かくてその結果は生命と關係のない物質的な塵芥となつて、生活の路上に醜く堆積する。その堆積の餘弊は何んであらう。それは誰れでも察し得る如く人間そのものの死ではないか。

十八

愛は個性の生長と自由とである。さうお前ははいひ張らうとするが、と又ある人は私にいふだらう。この世の中には他の爲めに自滅を敢てする例がいくらでもあるがそれをどう見ようとするのか。人間までに發達しない動物の中にも相互扶助の現象は見られるではないか。お前の愛己主義はそれをどう解釋する積りなのか。その場合にもお前は絶対愛他の現象のあることを否定しようとするのか。自己を滅してお前は何をのを自己に獲得しようとするのだ。とある人は私に問ひ詰めるかも知れない。科學的な立場から愛を説かうとする愛己主義者は、自己保存の一機軸と見るべき種族保存の本能なるものによつてこの難題に當らうとしてゐる。然しそれは愛他主義者を存分に満足させないやうに、又私をも満足させる解釋ではない。私

はもつと違つた視角からこの現象を見なければならぬ。愛がその尙くことなき掠奪の手を擴げる烈しきは、習慣的に、なまやさいいものとのみ愛を考へ馴れてゐる人の想像し得る所ではない。本能といふ言葉が誤解をまねき易い屬性によつて煩はされてゐるやうに、愛といふ言葉にも多くの歪んだ意味が與へられてゐる。通常愛といへば、すぐれて優しい女性的な感情として見られてゐはしないか。好んで愛を語る人は、頭の軟らかなセンチメンタリストと取られるおそれがありはしないか。それは然し愛の本質とは極めてかけ離れた考へ方から起つた危險な誤解だといはなければならぬ。愛は優しい心に宿り易くはある。然し愛そのものは優しいものではない。それは烈しい容赦のない力だ。それが人間の生活に赤裸のまゝ現はれては、却つて生活の調子を崩してしまひはしないかと思はれるほど容赦のない烈しい力だ。思へ、たゞ假初めの戀にも愛人の煩はこけるではないか。たゞいさゝかの子の病にも、その母の眼はくぼむではないか。個性はその生長と自由とのために、夢によつて外界から奪ひ得るものの凡てを奪ひ取らう

今にしてそれが何人であるかを知る。それは私の祖先と私とが、愛によつて外界から私の裏に連れ込んで来た、謂はば愛の捕虜の大きな群れなのだ。彼等は各自自身の言葉を以て自身の一生を訴へてゐる。而して私の心にさへよ

き準備ができてゐるならば、それを聞き分け、見分け、その眞の生命に於て再現するのは可能なことであるのを私は知る。私は既に十分を持つてゐる。藝術制作の素材には一生かゝつて表現してもなほあり餘るものを持つてゐる。外界から奪ひ取る愛の働きを無視しては、どうしてこの明らかな事實を説明することが出来るようぞ。而かも私の愛はなほ足ることを知らずに奪はうとしてゐる。何んといふ飽くことを知らぬ烈しいそれは力だらう。

私達を貫く本能の力強き。人間に表はれただけでもそれはかくまでに力強い。その力の總和を考へることは、私達の思考力のはかなさを暴露するやうなものであらうけれども、その限られた思考力にさへ、それは限りなく偉大な、熱烈なものとして現はれるではないか。

十九

私は他を愛する形に於て凡てを私の個性のみ

中に奪つてゐる。私はより正しきものを奪ひ取るが爲めに、より善く、より深く愛せねばならぬ。自己を愛することゝ深く且つ善いに従つて、私は他から何を攝取しなければならぬかをより明瞭にし得るだらう。

愛する以上は、憎まねばならぬ一面のあるのを忘れることが出来ない、愛憎のなたにある愛、さういふものがあるだらうか。憎愛の二極を横無して、陰陽を統合した太極といふやうな形の愛、それは理論的に考へて見られぬでもないことではあるが、かくの如きものが果して私達人間の生活を築き上げてゆく上になくてはならぬ重大問題だらうか。少くとも私には、それは欲求であり得る外質を持つてゐない。

神の世界に於ては、或は超越的形而上學の世界に於ては、かくることは捨ておかれぬ喫緊事として考へられねばならぬだらう。然しながら一箇の人間としての私に取つては、それよりも大切な事は私が愛し且つ憎むといふ動かすことの出来ない嚴然たる事實があるばかりだ。この一見矛盾した二つの心的傾向の共存は、私をいらだたせ且つ不幸にする。何故ならば、私の個性はいかなる場合にも純一無雜な一路へとのみ志してゐるからである。

然しながらよく考へて見ると、愛と憎みとは、相反する二つの極を意味するものではない。憎みとは人間に變じた一つの形式である。愛の反対は憎みではない。愛の反対は愛しないことだ。だから、愛しない場合のみ、私は何ものをも個性の中に奪ひ取ることが出来ないのだ。憎む場合にも私は奪ひ取る。それは私が憎んだ所の外界と、而して私がそれに對して擲つたおくりものである。愛する場合に於ては、例へば私が飢ゑた人を愛して、これに一飯を遣つたとすれば、その愛された人と一飯とは共に還つて来て私自身の骨肉となるだらう。憎しみの場合に於ても、例へば私が私を陥れたものを憎んで、これに罵詈を加へたとすれば、憎まれた人も、その醜い私の罵詈も共に還つて来て私の裏に集積なのだ。それには愛によつての獲得と同じやうに永く私の裏にあつて消え去ることがない。私はそれによつて、不消化な石ころを受け入れた胃腸のやうな思ひをさせられる。私の愛の本能が正しく働いてゐる限りは、それは私の裏に溶けこま

ず、いつまでも私の本質の異分子の如くに存続する。私は常伴それによつて不快な思ひをしなければならぬ。誰れか憎まない人があら

よう。而して彼れは「汝等も亦我にならへ」といつてゐる。それはこの境界が基督自身のものではなく、私達凡下の衆も亦同じ道を歩み得ることを、彼れ自身が證言してくれたのだ。

やがて基督が肉體的に滅びねばならぬ時が來た。彼れは苦しんだ。それに何んの不思議があらう。彼れは自分の愛の對象を、眼もて見、耳もて聞き、手もて觸れ得なくなるのを苦しんだに違ひない。又彼れの愛の對象が、彼れほどに愛の力を理解し得ないのを苦しんだに違ひない。然し最も彼れを苦しめたものは、彼れの愛がその掠奪の事業を完全に成就したか否かを迷つた瞬間にあつたであらう。然し遂に最後の安心は來た。「父よ（父よは愛よである）我れわが身を汝に委ぬ。而して本當に神々しく、その辛酸に瘦せた肉體を、最上の満足の爲めに脚の下に踏み蹂つた。

基督の生涯の何處に義務があり、犠牲があるのだらう。人は屬すいふ、基督はあらゆるものを犠牲に供し、救世主たるの義務の故に、凡ての迫害と窮乏とを甘受し、十字架の死をさへ敢て堪へ忍んだ。だからお前達は基督の受難によつて罪からあがなはれたのだ。お前達も亦彼れにならつて、犠牲獻身の生活を送らなければ

ならないと。私は私一個として基督が私達に遺して行つた生活をかく考へることはどうしても出來ない。基督は與へることを苦痛とするやうな愛の貧乏人では決してなかつたのだ。基督は私達を既に彼れの中に奪つてしまつたのだ。彼れは私の耳に囁いていふ、「基督の愛は世の凡ての高きもの、清きもの、美しきものを攝取し盡した。惡しきもの、醜きものも又私に攝取されて淨化した。眼を開いて基督の所有の如何に豊富であるかを見るがい。基督が與へ且つ施したと見えるものすべては、實は凡て基督自身に與へ施してゐたのだ。基督は與へざる一つのものもない。而かも何物をも失はず、凡てのものを得た。この大歡喜にお前も亦與

かるがい。基督のお前に要求するところはただこの一つの大事のみだ。お前が總令凡てを施し與へようと、永遠の生命を失つてゐたらそれが何になる。お前は偽善者を知つてゐるか。それは犠牲獻身といふ美名をむさぼつて、自己に同化し切らない外物に對して浪費する人をいふのだ。自己に同化し切つたものに施すのは即ち自己に施すのだといふ、世にも感謝すべき事實を認め得ない程に、愛の隠家を見失つてしまつた人のことだ。浪費の後の苦々しい後味

を、強ひて笑ひにまぎらすその僥んだ顔付きを見るがい。それは悲しい錯誤だ。お前が愛の極印のないものを施すのは一番大きな罪だと知らねばならぬ。而して愛の極印のあるものは、縱令お前がそれを地獄の底に擲たうとも、忠實な犬のやうに逸早くお前の膝許に歸つて來るだらう。恐れる事はない。事實は遂に傳説に打ち勝たねばならぬのだと。

本當にさうだ。私は愛を犠牲獻身の徳を以て律し縛めてゐてはならぬ。愛は知的生活の世界から自由に解放されなければならぬ。この発見は私にとつては小さな発見ではなかつた。小さな弱い經驗ではあるが、私の見た所、存分にこれを裏書きする。私が創作の衝動に驅られて容赦なく自己を檢察した時、見よ、そこには生氣に充ち満ちた新しい世界が開展されたではないか。實生活の波瀾に乏しい、孤獨な道を踏んで來た私の衷に、思ひもかけず、多數の個性を發見した時、私は眼を見張つて驚かずにはゐられなかつたではないか。私が眼を据ゑて憚りなく自己を見つめれば見つめるほど、大きな眞實な人間生活の諸相が明瞭に現はれ出た。私の内部に充滿して私の表現を待ち望んでゐるこの不思議な世界、何んだそれは。私は

心血を瀉いで得たりとしてゐる道學者は災ひである。即ち知的生活に人間活動の外圍を限つて、それを以て無上最勝の一路となす道學者は災ひである。その人はいつか、本能的體驗の不足から人間生活の足手まとひとなつてゐた事を發見する悲しみに遇はねばならぬだらうから。

二十

愛せざる所に愛する眞似をしてはならぬ。憎まざる所に憎む眞似をしてはならぬ。憎し人間が守るべき至上命令があるとすればこの外にはないだらう。愛は烈しい働きの力であるが故に、これを逆用するものはその場に傷けられなければならない。その人は癒すべからざる諦めか不平かを以てその傷を纏帶する外道はあるまい。

愛は自足してなほ餘りがある。愛は嘗て物ほしげなる容貌をしたことがない。物ほしげなる顔を慎めよ。

基督は「汝等互にさばけなかれ」といつた。その言葉は普通受取られてゐる以上の意味を持つ

てゐる。何故なら愛の生活は愛するもの一人にかゝはることだ。その結果がどうであつたとしても、他人は絶対にそれを判斷すべき尺度を持つてゐない。然るに知的生活に於ては心外に規定された尺度がある。人は誰れでもその尺度に於てはめて、ある人の行爲を測定することが出来る。だから基督の言葉は知的生活に於てはむべきものではない。基督は愛の生中の如何なるものであるかを知つてをられたのだ。ただその現はれに於ては愛から生れた行爲と、愛の眞似から生れた行爲とを區別することが人間に取つては殆んど不可能だ。だから人は人をさばいてはならぬのだ。而かも今の世に、人はいかに易くさばかれつゝあることよ。

犠牲とか、献身とか、義務とか、使仕とか、服従の徳の詭かれる所には、私達は警戒の眼を見張らねばならぬ。かくて神學者は專制政治の型に則つて神人の關係を案出した。かくて政治家は神人の例に則つて君臣の關係を案出した。社會道德と産業組織とはそのあとに續いた。それらは皆同じ法則の上に組み立てられてゐる。そこには必ず治者と被治者とがあるらねばならぬ。而して治者に特權である所のもの

のは被治者には義務だ。被治者の所有する所のものは治者の所有せざるものだ。治者と被治者とは異つた要素から成り立つてゐる。かしこには治者の生活があり、こゝには被治者の生活がある。生活そのものにかゝる二元的分離はあるべき事なのか。兎にも角にも本能的な生活にかゝる分離はない。石の有する本能の方向に有機物は生じた。有機物の有する本能の方向に諸生物は生じた。諸生物の本能の有する方向に人間は生じた。人間の有する本能の方向に本能そのものは動いて行く。凡てが自己への獲得だ。その間に一つの斷層もない。百八十度角の方向轉換はない。

今のやうな人間の進化の程度にあつては、知的生活の棄却は恐らく人間生活そのものの崩壊であるであらう。然しながら、その故を以て本能的な生活の危険を説き、壓抑を主張するものがあるとするれば、それは又自己と人類とを自滅に導かうとするものだといはなければならぬ。この問題を私がこのやうに抽象的に出活ると異存のある人はないやうだ。けれども假りにニイチエ一人を持ち出して來ると、その超人的哲學は忽ち四方からの非難攻撃に遇はねば

う。それだから人間として誰れか憎鬱な眉をひそめない人があらう。人間が現はす表情の中、見る人を不快にさせる憎鬱な表情は、實に憎みによつて奪ひ取つて來た愛の鬼子(こ)が、彼れの裏にあつて彼れを刺戟するのに因るのではないか。私はよくこの苦々しい憎鬱を知つてゐる。それは人間が辛うじて到達し得た境界から私が一步を退轉した、その意識によつて引き起されるのだらう。多少でも愛することの樂しさを知つた私は、憎むことの苦しさを痛感する。それはいづれも本能のさせる業ではあるけれども、愛するより憎むことが如何に樂しからぬものであるかを知つて苦しまねばならぬ。恐らくはよく愛するものほど、強く憎むことを知つてゐるだらう。同時に又憎むことの如何に苦しいものであるかを痛感するだらう。而してどうかして憎まずにあり得ることに對して骨を折るだらう。

憎まない、それは不可能のことだらうか。人間としては或は不可能であるかも知れない。然し少くとも憎惡の對象を減ずることは出来る。出来る筈であるのみならず、私達は始終それを勉めてゐるではないか。愛と憎みとが若し同じ本能から生れたものであるとすれば、そ

れは必ず成就さるべきものだ。如何なるものも、ある視角から憎むべきものならば、他の視角から必ず愛すべきものであることに私達は氣附くだらう。こゝに一つの器がある。若しも私がその器を愛さなかつたならば、私に取つてそれは無いに等しい。然し私がそれを憎みはじめたならば、もうその器は私と嚴密に交渉をもつて来る。愛(あ)はもう一步に過ぎない。私はその用途を私が考へてゐたより他の方面に用ふることによつて、その器を私に役立てることが出来るだらう。その時には私の憎みは、もう愛に變つてしまふだらう。若し憎みの故にその器を取つて直ちに粉碎してしまふ人があつたとすれば、その人は愛することに於ても亦同様に淺くしか愛し得ない人だ。愛の強い人とは執着の強い人だ。憎みの場合に於ても、かかる人の憎みは深刻な苦痛によつて裏付けられる。従つて容易にその憎しみの對象を捨ててはしまはない。而してその執着の間に、ふとしたきっかけにそれを愛の對象に代へてしまふだらう。

かくして私の愛が深く善くなるに従つて、私はより多くを愛によつて攝取し攝取された凡てのものは、あるべき排列をなして私の裏に

同化されるだらう。かくて私の裏にある完き世界が新たに生れ出るだらう。この大歡喜に對して私は何物をも惜みなく投げ與へるだらう。然しそのなげ與へたものが如何に高價なものであらうとも、その歡喜に比しては比較にもならぬほど些少なものであるのを知つた時、況してや投げ與へたと思つたその贈品すら、畢竟は復た自己に還つて來るものであるのを發見した時、第三者にはたとひ私の生活が犧牲と見え、獻身と見えようとも、私自身に取つては、それが獲得であり生長であるのを感じた時、その時、私が徹底した人生の肯定者ならざる何人であり得よう。凡ての人がかくの如く本能の要求によつて生活し和交渉した時、そこに本當の健全な社會が生れ出ないで何が生れ出よう。凡ての行爲が義務でなく遊戲であらねばならぬとの要求が眞に感ぜられた時人間の生活がこれから如何に進展せねばならぬかの示唆は適確に與へられるのだ。この本能を抑壓する必要のある、若しくは抑壓すべき道德の上に成り立たねばならぬとの主張の上に据ゑられた人類の集團生活には見通すことの出来ないところがある。このうそを、あらねばならぬことのやうに力説し、人間の本能をその從屬者たらしめることに

ゐたら。少くとも事なき時に、私達がこの心持を蔑ろにすることがなかつたならば。

習性的生活はその所産を自己の上に積み上げる。知的生活はその所産を自己の中に貯へる。本能的生活は常にその所産を捨てて飛躍する。

二十一

私は激みに來た、而して暫らく渦紋を描いた。

私は再び流れ出よう。

私はまづ、愛を出発點として藝術を考へて見る。

凡ての思想凡ての行爲は表象である。

表象とは愛が己れ自ら表現するための煩悶である。その煩悶の結果が即ち創造である。藝術は創造だ。故に凡ての人は多少の意味に於て藝術家であらねばならぬ。若し謂ふところの藝術家のみが創造を司り、他はこれに與らないものだとするなら、如何して藝術品が一般の人に訴へることが出来よう。藝術家と然らざる人との間に愛の斷層があるならば、藝術家の表現的努力は畢竟無益ではないか。

一人の水夫があつて橋の上から落日の大觀を擅みにし得た時、この感激を人に傳へ得るやう表現する能力がなかつたならば、その人は詩人とはいへない、とある技巧派の文學者はいつた。然し私はさうは思はない。その莊嚴な光景に對して水夫が感激を感じた以上は、その瞬間に於て彼れは詩人だ。何故ならば、彼れは彼れ自身に對して思想的にその感激を表現してゐるからだ。

世には多くの唯の藝術家がある。彼等は人に傳ふべき表現の手段を持つてはゐないが、その感激は往々にして所謂藝術家なるものを遙かに凌ぎ越えてゐる。小兒——彼れは何んといふ驚くべき藝術家だらう。彼れの心には習慣の癖が固着してゐない。その心は痛々しい程にむき出しで鋭敏だ。私達は物を見る所に物に捕はれる。彼れは物を見る所に物を捕へる。物そのものの本質に於てこれを捕へる。而して睿智の始めなる神々しい驚異の念にひたる。そこには何等の先入的偏見がない。これこそは純眞な藝術的態度だ。愛はかくの如き階級を經て最も明かに自己を表現する。

けれども私達の多くはこの大事な一點を顧みないやうな生活をしてはゐないか。ジェームスは古來色々に分派した凡ての哲學の角合は、結局それとその構成者の塵資（temporal-being）に歸することが出来るといつてゐる。これは平言だといはなければならぬ。私達の生活の様式にも亦同様のことがいはれるであらう。ある人は前人が殘し置いた材料を利用して愛の（即ち個性の）表現を試みようとする。又ある人は愛の純粹なる表現を欲するが故に前人の糟粕を嘗めず、彼れ自らの表現手段に依らうとする。前者はより多く知的生活に依據し、後者はより多く本能的生活に依據せんとするものである。若し更にジェームスの言葉を借りていへば、前者を strong-minded と呼び、後者を tenacious と呼ぶことが出来るようか。

知的生活に依據して個性を表現しようとする人は、表現の材料を多く身外に求める。例へば石例へば衣裳、例へば軍隊、例へば權力。而して表現の基に重きをおいて、深くその質を省みない。表現材料の精選よりもその排列に重きをおく。「始めて美人を花に譬へた人は天才であるが二度目に同じことをいつた人は馬鹿だ」とヴォルテールがいつた。少くとも知的生活に固執する人は美人を花に譬へる創意的なことではない。然しそれを百合の花若しくは薔薇の

ならぬのだ。

権力と輿論とは知的生活の所産である。權威と獨創とは本能的の所産である。而して現世では、いつでも前者が後者を壓倒する。

釋迦は龍樹によつて、基督は保羅によつて、孔子は朱子によつて、凡てその愛の寶座から智慧と聖徳との座にまで引きずりおろされた。

愛を優しい力と見くびつた所から生活の誤謬は始まる。

女の持つ愛はあらはだけれども小さい。男の持つ愛は大きいけれども遮られてゐる。而して大きい愛は屢々あらはな愛に打ち負かされる。

ダギンチは「知ることが愛することだ」といつた。愛することが知ることだ。

人の生活の必至最極の要求は自己の完成である。社會を完成することが自己の完成であり、自己の完成がやがて社會の完成となるといふ如きは、現象の輪廻相を説明したにとど

まつて、要求そのものをいひ現はした言葉ではない。

自己完成の要求が過つて自己の一局部のそれに向けられた瞬間に、自己完成の道は前方もなく崩れ終る。

一人の人の個性はその人の持つ過去全體の總和に過ぎないといふだらう。否、凡ての個性はそれが持つ過去全體の總和に「へ」が加はつたものだ。而して、今は過去と未來とを支配し得る。

ラツセルは本能を區別して創造本能と所有本能の二つにしたと私は聞かされてゐる。私はさうは思はない。本能の本質は所有的方向である。而してその作用の結果が創造である。

何故に戀愛が屢々藝術の主題となるか。藝術は愛の可及的純粹な表現である。而して戀愛は人間の他の行為に勝つて愛の集約的な、而して全體的な作用であるからだ。

試みに沒我的愛他主義者に問ひたい。あなたはその主義を主張するやうになつてから、あな

たはあなた自身に何者をも與へなかつたのですか。縱令何ものかを與へたとしても、それは全然他を愛する爲めの生存に必要なために與へたのですか。然し與へられない爲めに悶死する人がこの世の中には絶えずあるのですね。それでもあなたはその人達を助け、爲めに先づ自分に必要なものを與へてゐるのですか。そこに何等かの矛盾を感じることはありませんか。

私は自分自身を有機的に生活しなければならぬ。そのためには行為が内部からのみ現はれなければならない。石の生長のやうにはなく、植物の萌芽のやうに。

一般の船が海賊船の重圍に陥つた。若し敗れたら、海の藻屑とならなければならない。若し降つたら、賊の刀の鋒とならなければならない。この危機にあつて、船員は銘々が最も驚的にその生命を死の威脅から救ひ出さうとするだらう。而してその必死の努力が同時に、その船の安全を保ち、船中にあつて彼れと協力すべき人々の安全をいはせるだらう。各員の間にはいはず語らずの中に、完全な共同作業が行はれるだらう、この同じ心持で人狼が常に生きて

れが人類進歩の切けになるやうなことはない。けれども愛の要求以上に外界の要求に従つた人たちの建て上げたものは、愛がそれを破壊し終る力を持たない故に、いつまでもその醜い残骸をとめて、それを打ち壊す愛のあらはれる時に及ぶ。

愛の純粹なる表現を更に切實に要求する人は、地上の職業にまで狭い制限を加へて、思想家若しくは普通意味せられるところの藝術家とならずにはゐられないだらう。その人々は愛が汚されざらんが爲めに、先づ愛の表現に役立たしむべき材料の厳選を行ふ。思想に増して純粹な材料を、私達人間は考へつくことが出来な。哲人又は信仰の人などといはれる人は――若しそれがまがひものでなかつたなら――こゝにその出發點を持つてゐるに違ひない。普通意味せられるところの藝術家、即ち藝術を仕事としてゐる人々は思想を具象化するについて、思想家のやうに抽象的な手段によらず、具體的な形に於てせんとするものだ。然しながらその具體的な形の中、及ぶだけ純粹に近い形に依らうとする。その爲めに彼等は洗煉された感覚を以て洗煉された感覚に訴へようとする。感覚の世界は割合に人々の間に共通であり、愛に

まで直接に翻譯され易いからである。感覚の中でも、實生活に縁の近い觸覺若しくは味覺などに依るよりも、非功利的な機能を多量に有する視覺聽覺の如きに依らうとする。それらの感覚に訴へる手段にも父等差が生ずる。同じ言葉である。然しその言葉の用ひ方がいかに藝術家の稟資を的確に表はし出すだらう。ある人は言葉とその素朴な用途に於て使用する。ある人は一つの言葉にもある特殊な意味を盛り、難多な意味を除去することなしには用ひることを肯んじない。散文を綴る人は前者であり、詩に行く人は後者である。詩人とは、その表現の材料を、即ち言葉と知的生活の極端から極度にまで解放し、それによつて内部生命の發現を動的にしようとする人である。だからその所産なる詩は常に散文よりも藝術的に高い位置にある。私は僅かばかりの小説と戯曲とを書いたものであるが、そのさゝやかなる經驗からいつても、表現手段として散文がいかに幼稚なものであるかを感じないではゐられない。私の個性が表現せられるために、私は自分ながらもどかし程の過り道をしなければならぬ。数限りもない捨石が積まれた後でなければ、そこには私は現はれ出て來ない。何故そんなこ

とをしてゐねばならぬかと私は時々自分を責めがゆく思ふ。それは明らかに愛の要求に對する私の感受性が不十分であるからである。私にもつと鋭敏な感受性があつたなら、私は凡てを捨てて詩に走つたであらう。そこには詩人の世界が截然として創り上げられてゐる。私達は殆んど言葉を飛躍してその後の實質に這入りこむことが出来る。而してその實質は驚くべく純粹だ。

或はいふ人があるかも知れない。私達の生活は昔のやうな素朴な單純な生活ではない。それは見透しのつかぬほど複雑になり難解になつてゐる。それが言葉によつて現はされる爲めには、勢ひ周到な表現を必要とする。詩は昔の人の爲めにだ。而して小説と戯曲とは今の人の爲めにだ、と。

私はさうは思はない。表現さるべき最後のものは昔も今も異なることがないのだ。縱令外面的な生活が複雑にならうとも、言葉の持つ意味の長い傳統によつて複雑になつてゐようとも、一人の詩人の徹視はよく亂れた絲のやうな生活の混亂をうち貫き、言葉をその純粹な形に立ち歸らせ、其手によつて書き下された十行の詩はよく、生の統流を眼前に展くに足るべ

花に譬へることはしない限りでない。その點に於て彼れは明らかに馬鹿でないことが出来る。十分に智者でさへあり得る。然しその人は個性の表現に於て Tolstoy の尊さを多く認めないで、亂雑な成行きに委せやすい。所謂事業家とか、政治家とか、煽動家とかいふやうな典型の人には、かゝる傾向が極めて多くあり易い。

全く實用のためにのみ造られた眞四角な建築物一つにも、そこに個性の表現が全然ないといふことは出来ない。然しながらその中から個性を、即ち愛を探し出すといふことは極めて困難なことだ、個性は無意味な用材の爲めに遺憾なく押しひしがれて、おまけに用材との有機的な關係から危く斷たれようとしてゐる。然し個性が全く押しひしがれ、關係が全く斷たれてしまつたなら、その醜い建築物といへどもそこに存在することは出来ないだらう。それは何んといつても、かすかにせよ、個性の側きよつてのみその存在をつなぎ得るのだ。けれども若し私達の生活がかくの如きもののみによつて圍繞されることを想像するのは滑しいことではないか。この時私達の個性は必ずかゝる物質的な材料に對して叛逆を企てるだらう。かゝる建築物の如きものが然しもつと見え

い、形では私達の生活をきびしく取り圍んでゐることはないだらうか。一人の野心的政治家があるとする、彼れは自己の野心を満足せんが爲めに、即ち彼れの衷にあつて表現を求めてゐる愛に、粗雑な、見當違ひた満足を與へんが爲めに愛國とか自由とか、國威の宣揚とかいふ心にもない旗印をかゝり上げ、彼れの奇妙な牽引力と、物質的報酬とを以て、彼れには無縁な民衆を煽動する。民衆はその好運に引き寄せられ、自分等の眞の要求とは全く關係もない要求に屈服し、過去に起つたある同じやうな立派な事件に、自分達の無價値な行動を強ひて結び付けて、そこに申譯と希望とを築き上げ、而してその大それた指導者の命令のまに、身命をさへ賭してその事業の成就を心がける。而して、若し運命がその政治家に苛酷でなかつたならば、彼れは屹然たる國家的若しくは世界的大事業なるものを完成する。然しそこに出来上つた結果はその政治家の肖像でもなく、民衆の投意でもなく、粗雑な不明瞭な重ね寫眞に過ぎない。而してそれは當事者たる政治家その人の一生を無價値にし、民衆全體の進歩を阻止し、事業そのものは、段々人間の生活から分離して、遂には生活途上の用もない瓦礫となつて、徒ら

に人類進歩の妨けになるだらう。このやうな事象は、その大小廣狭の差こそあれ、私達が幾度も繰り返して遭遇せねばならぬことなのだ。しかも私達は往々その悲しい結果を曉らないのみか、かくの如きはあらねばならぬ須要のことのやうに思ひなし易い。

けれども、嘗ひにして人類はかくの如き愛資の人ばかりからは成り立つてゐない。そこにはもつと愛の純眞な表現を可能ならしめようとする人がある。さうしないではゐられない人がある。そのためには彼れは一見彼れに利益らしく見える結果にも意はされない。彼れには思案すべきたゞ一事がある。それは彼れの方の及ぶかぎり、愛の純粋な表現を成就しようといふことだ。縱令その人が政治にかゝはつてゐようが、生産に従事してゐようが、税吏であらうが、娼婦であらうが、その粗雑な生活材料のゆるす限りに於て最上の生活を日指してゐるのである。それらの人々の生活はそのまゝよき藝術だ。彼等が表現に役立てた材料は粗雑なものであるが故に、やがては古い皮袋のやうに崩れ去るだらうけれども、そのあとには必ず不思議な愛の作用が残る。粗雑な材料はその中に力強く籠められる愛の力によつて破れ果て、そ

といふ考へは根柢的に間違つてゐる。若しそこを越えることの出来ない溝渠があるといふならば、私は寧ろ社會生活を破壊して、かの孤棲生活を營む獅子や秃鷹の習性に依らう。

然しかかる必要のないことを私の愛は知つてゐる。社會生活に對する概念の中に誤つた所があるか、個人生活の概念の中に誤つた所があるかによつて、この不合理な結論が引き出される。私は知つてゐる。

先づ個人の生活はその最も正しい内容によつて導かれなければならない。正しい内容とは何をいふのか。知的生活が習性的生活を是正する時には、私は知的生活に従つて習性的生活を導かねばならぬ。本能的生活が知的生活を是正する時には、私は本能的生活に従つて知的生活を導かねばならぬ。即ち常に習性的生活の上に知的生活を、知的生活の上に本能的生活を置くことを第一の仕事と心懸けねばならぬ。正しい内容とはそれだけのことだ。

習性的生活と知的生活との關係についてはいふまでもあるまい。習性的生活が知的生活の指導によつて適合を得なければならぬといふのは自明のことであるから。

然しながら知的生活が本能的生活によつて

指導されねばならぬといふことについては不服を有つ人がないとはいへない。知的生活は多くの人々の経験の總和が生み出した結果であり約束であるが、本能的生活は純粹な個性内部の衝動であるが故に、必ずしも社會生活と順應することが出来ないだらうとの杞憂は起りがちに見えるからである。

けれども私は私の意味する本能的生活の意味が正しく理解されることを希望。本能の欲求はいづれでも各人の個性全體の上に働くものである。その衝動は常に個性全體の飽満に伴つて起る。この例は車輦であるかも知れないが、理解を容易ならしむる爲めにいつて見ると、こゝに一人の男があつて、肉慾の衝動に驅られて一人の少女を辱しめたしよう。肉慾も一つの本能である。その衝動の飽満を求めたことは、そのまゝ許されることではないか。さうある人は私に詰問するかも知れない。私はその人に問い返して見よう。あなたが考へる前に先づあなたをその男の位置におけ。あなたが肉慾的にのみその少女を欲してゐるのに、あなたはその少女に近づく時、(全く固定的な道德觀念を度外視しても)何等の不満をもあなたの個性に感じなかつたか。あなたはまたあなた

たと見知らない少女の姿全體に、極度の恐怖と憎惡とを見出したらう。あなたはそれに少しでも打たれなかつたか。而してそこに苦い味を感じなかつたか。若しあなたに人並みの心があるなら、私のこの問に應じて否と答へるの外はあるまい。だから私はいふ。その場合あなたが本能の衝動らしく思つたものは、精神から切り放された肉慾の衝動にしか過ぎなかつたのだ。だからあなたはその衝動を行為に移す第一の瞬間に既に見事に罰せられてしまつたのだ。若しあなたが本當に本能の個性全體の衝動によつてその少女を欲するのなら、あなたは先づその少女にあなたの切ない愛を打明けるだらう。而して少女が若しあなたの愛に酬いるならば、その時あなたはその少女をあなたの愛に奪ひ取り、少女はまたあなたを彼女の裏に奪ひ取るだらう。その時あなたと少女とは二人にして一人だ。(前にもいつた如く)而してあなたは十分飽満な感じを以て心と肉とに於て彼女と一體となることが出来る。その時、その事の前に何等の不満もなく、その事の後は美しい飽満があるばかりだらう。(これは餘事に互るが好命な人のために附け加へておく。若し少女がその人の愛に酬いることを拒まねばならなかつた

きである。然しそれをなし得るためには、詩人は必ず深い愛の體驗者でなければならぬ。出でよ詩人よ。而して私達は直下に愛と相對し得べき一路を開け。

私は又詩にも勝つた表現の模範を音樂に於て見出さうとするものだ。かの單調にしては何等の意味もなき音聲、それを組合せてその中に愛を宿らせる仕事はいかに楽しくも快いことであらうぞ。それは人間の愛をまじり氣なく表現し得る樂園といはなければならぬ。ハーモニとメロデーとは眞に知的生活の何事にも役立たないであらう。これこそは愛が直接に人間に與へた愛子だといつていい。立派な音樂を聽く人を凡ての地上の羈絆から切り放す。人はその前に氣化して直ちに運命の本流に流れ込む。人間に取つては意味の分らない、餘りに意味深い、感激が熱い涙を誘ひ出す。而して人は強い衝動によつて、推進の力を與へられる。それが何處へであるかは知られない。たゞ望ましい方向にあるのは明らかに感知される。その時人は愛に乗移られてゐるのだ。美術の世界に於て、未來派の人々が企圖するところも、またこの音樂の聖境に對する一路の憧憬でないといへようか。色もまた色そのもの

には音の如く意味がない。面もまた面そのものには色の如く意味がない。然しながら形象の模倣再現から這入つたこの藝術は永くその傳統から遙れ出ることが出来ないで、その色その面を形の奴婢にのみ充ててゐた。色は物象の面と空間とを埋めるために、面は物象の量と積とを表はすためにのみ用ひられた。而して印象派の物象はこの固定概念に幽かなゆるぎを與へた。即ち繪畫の方面に於て、色と色との關係に價値をおくことが考へつけられた。色が何を表はすかといふことより、色と色との關係の中に何が現はれねばならぬかと云ふことが注意され出した。これは物質から色の解放への第一歩であらねばならぬ。然しこの傾向は未來派に至つて極度に高調された。色は全く物質から救ひ出された。色は遂に獨立するに至つた。

然し音樂が成就しただけのことを未來派は繪畫に於て成就し得てゐるだらうかといふ問題。白ら別に考へられなければならぬ。私達はこれらの藝術に對して何等具體的の知識を持つてゐるものでない。だから私はかゝる比較論に來ると口をつぐむ外はない。けれども未來派の傾向を全然斥けらるべきものだと言張する人に對しては、私は以上の見地からこの派

の傾向の可能性を申出ることが出来はしないかと思つてゐる。若し物象が具象化されなければ満足が出来ない人と人がいふならば、その人の爲めには、文學の領内に詩と小説とが併存するやうに、これまでのやうな繪畫を存続させておくのも亦妨げないだらう。然しながら美術家の個性が益々高調せられねばならぬ時はやがて來るだらう。その時になつて未來派のやうな傾向が起るのは、私の立場からいふと、極めて自然なことであるといはねばならぬのだ。

人間は十分に恵まれてゐる。私達は愛の自己表現の動向を満足すべきあらゆる手段を持つてゐる。厘毛の利を爭ふことから神を創ることに至るまで、僞らずに内部の要求に耳を傾ける人ほど、彼れは裕かに恵まれるであらう。凡ての人は藝術家だ。そこに十二分な個性の自由が許されてゐる。私は何よりもそれを重んじなければならぬ。

二十二

私はまた愛を出發點として社會生活を考へて見よう。社會生活は個人生活の延長であらねばならぬ。個人的欲求と社會的欲求とが軒輊する

求も亦その終極はその生活内部の全體的飽満にあらねばならぬ。縱令現在、その生活の基調は知的生活におかれてあるとしても、その欲求としては本能的の生活が目指されてゐねばならぬ。社會がその社會的本能によつて動く時こそ、その生活は純一無雜な境地に達するだらう。

こゝである人は多分いふだらう。お前の言葉は明らかにその通りだ。進化の過程としては、社會も亦本能的の生活に這入ることをその理想とせねばならぬ。けれども現在にあつては、個人には本能的の生活の消息を解し、それを實行し得る人があるとしても、社會はまだかゝる境地に達せんには遠い距離がある。かゝる状態にあつて、個人生活と社會生活とが軒輊するのは當然なことではないか、と。

私はこの抗議を背じよう。然しこの場合、改めねばならぬのは個人の生活であるか、社會の生活であるか、どちらだ。兩者の間に完全な調和を持ち來すために進歩させねばならぬ生活はどちらの生活だ。社會生活の現状を維持する爲めに、私達はこゝまで進んで來た個人生活を停止し若しくは退歩させて、社會生活との適合に持ち來さねばならぬといふのか。多くの人はさうあるべき事のやうに考へてゐるやうに見える。私は斷じてこれを不可とする。

變らねばならぬものは社會の生活様式である。それが變つて個人の生活様式にまで追付かねばならぬ。

國家も産業も社會生活の一樣式である。近代に至つて、この二つの様式に對する根本的な批判を取つて二つの見方が現はれた。それは個性の要求が必否的に創り出した見方であつて、徒らなる權力が如何とすべからざる一個の權威である。一時は權力を以て壓倒するこゝとも出來よう。然しながら結局は、現在の國家なり産業組織なりが、合理的な批判を以てそれを打撃し得るにあらずんば、決して根絶することの出来ない見方である。そのいふ二つの見方とは、社會主義であり、無政府主義である。

この二つの主義のかくまでの力強さは何處にあるか。それは、縱令不完全であらうとも、個性の全的要求が生み出した主義だからである。社會主義者は自ら人間の社會的本能が生み出した見方であると主張するけれども、その主義の根柢をなすものは生存競争なる自然現象である。生存競争は個性から始まつて始め

て階級争國に移るのだ。だからその點に於て社會主義者の主張は裏切られてゐる。無政府主義に至つては固より始めから個性生活の絕對自由をその標幟としてゐる。

社會主義はダーウィンの進化論から生存競争の原理を抜いてその主張の出発點としたことと前に述べた通りだ。クロボトキンはこれに對立して無政府主義を宣言するに當り、進化論の一原理なる相互扶助の動向を取つてその論陣を築いた。兩者共に、個性から發して動植物兩界の致命的要素たる本能であるとせられてゐる。一方の主義者は生存競争の爲めの相互扶助だと主張し、一方の主義者は相互扶助の爲めの生存競争だと主張する。私はこゝで敢て主義者の見地を裁斷しようとは思はないし、私達の自然科學に對する空虚な知識はそれをするこゝと許しはしない。

然し私はかういふことを申出して見たい。ケイペル博士がそのカント論に於て「生物學に於て取はれる動物本能は、畢竟人間にある本能の投現に過ぎない。認識作用が事物に適合するのでなく、却つて事物(現象としての)が認識作用に適合するのである」といつた言葉は、單に唯心論者の常套語とばかりはいひ掛け

場合はどうだ。その場合でも、彼れの個性は愛したことによつて生長する。悲しみも痛みも亦本能の糧だ。少女は永久に彼れの衷に生きるだらう。而して更に附け加へることが許されるなら、彼れの肉慾は著しくその働きを減ずるだらう。そこには事件の精神化が自ら行はれるのだ。若し然しその人の個性がその事があつたために分散し、精神が糜爛し、肉慾が昂進したとするならば、もうその人に於て本能の統合は破れてしまつたのだ。本能的な生活はもうその人とは係はりはない。然しそんな人を知的生活が救ふことが出来るか。彼れは道德的に強ひて自分の行爲を律して、他の女に對してその肉慾を試みるやうなことはしないかも知れない。然しその瞬間に彼れは偽善者になりてしまつてゐるのだ。彼れはその心に奸妬しつづけなければならぬのだ。それでもそれは知的生活の不安の爲めには役立つかも知れない。けれどもかくの如き不安によつて保たれる人も社會も災ひである。若し彼れがある動機から、猛然としてものと自己に眼當める程緊張したならばその時彼れは本能的生活の圈内に歸還してゐるのだ。だから知的生活の圈内に於ける生活にあつてこそ、知識も道德もなく叶はぬも

のであるが、本能的な生活の葛藤にあつては、知的生活の生んだ規範は、單にその傷を醜く蔽ふ繃帯にすらあたためることを知るだらう。その時精神は精神ではなく、肉慾は肉慾ではない。兩者は全くその區別を沒して、その結流の中に溶けこんでしまふ。單なる形の似よりから凡ての現はれと同一ものと見るのは、甚しき愚昧な見識である。

この二つの例は私の本能に對する見解を臆ろげながらも現はし得たではなからうか。かくの如く本能は、全體的な而して内部的な個性の要求だ。然るに知的生活はこれとは趣きを異にしてゐる。縱令知的生活は、長い間かゝつた、多くの人の經驗の集成から成り立つものだとはいへ、その個性に働く作用はいつでも外部からであつて、而かも部分的である。その外部的である譯は、それが誰れの内部生活からも離れて組み立てられたものであるからだ。それは生活の全部を統率するために、人間によつて約束された規範であるからだ。それなら何故部分的であるか。知的生活にあつては義務と努力とが必要なる條件として申出られてゐるからだ。義務にも、人間の欲求のある部分の棄捨が豫想されてゐる。ある欲求を壓抑する

といふ意識なしには、義務も努力も實行されしない。即ち個性の全要求の満足といふ事は行はれ得ない約束にある。若しかくる約束にある知的生活が生活の基調をなし、指導者とならなければならぬとしたら、人間は果して憂如としてゐることが出来るだらうか。私としてはそれを最上のものとして安んじてゐることが出来ない。私はその上に、私の個性の全要求を満足し、而かもその満足が同時によいことであるべき生活を追ひ求めるだらう。而してそれは本能的生活に於て與へられるのだ。本能的生活によつて知的生活は内面化されなければならぬ。本能的な生活によつて知的生活は統合化されなければならぬ。かくいへば、私が、本能的な生活は知的生活を指導せねばならぬと主張した理由が明らかにになると思ふ。

然らば社會生活は私がいつた個人の生活過程を遂にでも行かねばならぬといふのか。社會生活にあつては、知的生活をもつて本能的な生活の指導者たらしめ、若しくは習性的な生活をもつて知的生活の是正者たらしめねばならぬとでもいふのか。若し果してさうならば、社會生活と個人生活とはたしかに軒輊するであらう。私にはさうは思はれない。社會の欲

ある。神の欲する所と人の欲する所の間に、は、渡らるべき橋も綱もない。神と人とは全く本質を異にした二元として對立してゐる。

國家の組織が無反省にそのまゝ人民によつて肯定せられてゐた時代には、この神人關係の概念も亦無反省に受取れることが出来たらう。然し個性の欲求が、愛の動向が、體達せられた今にあつては、この神人關係の矛盾は直ちに苦痛となつて、個性によつて感ぜられる。生活根源の動向は凡て同じ方向に向上せなければならぬ。私達は既に石から人間に至るまでの過程に於て、同じ方向に向上して來た本能の流れを見た。私達の内部生活は獲得によつてのみ向上し飛躍するのを見た。然るに現存の宗教は、神にのみその動向を認めて、人間にはそれを拒まうとしてゐるではないか。

ある人は私に告げるであらう。時機に取り残されたものよ。お前は神人合一の教理が夙の昔から叫ばれてゐるのを知らないのか。神は人間と對立してゐるやうなものではない。實に人間の衷にあつて傾くべきものだ。人間は又神の衷にあつて傾くべきものだ。神と自己とを對立させるが故に人間は墮落するのだ。神の要求はそのまゝ人間の要求でなければならぬのだ。お前はそれをすら知らないで、一體何んの囁言をいはうとするのだと。然らば私はその人に向つて問ひたい。それなら何故今でも教壇の上からやむことなく犠牲の義務と獻身の徳とが高調して説かれなければならないのだらう。神は嘗て犠牲を拂ひ獻身を取つたか。(基督教徒はここで基督の生涯を引照するだらう。然し基督の生涯を犠牲でも獻身でもないことは前に説いた。然るに現在教壇からは、神にないものが人間にあらねばならぬとして要求されてゐるのはどうしたことなのか。私はそれが人間性の根本に對する理解の不十分から來てゐるのではないかと疑ふ。而してその疑ひに全く理由がないではあるまいと思ふ。神人合一といふ概念だけは自然の必要から建て上げられた。それは政治に於て、專制政體が立憲政體に變更されたのと同じく似てゐる。その形に於てはある改造が成就されたやうに見える。立法の主體は稍々移動したかも知れない。而かも治者と被治者とが全く相反した要求によつて律せられてゐる點に於ては寸毫も是正されてはゐないのだ。神と人とは合一する。その言葉は如何に美しいだらう。然しその合一の實が擧つてゐなかつたら、その美しい空論が畢竟何んの益になるか。

私はかくの如き妥協的な改良説を一番惡くしなければならぬ。それはその外貌の美しさが私をあざむきやすいからである。

宗教が國家の機械、即ち美しい言葉でいへば政務の要具たることから自分を救ひ出さねばならぬことは勿論ではあるが、現存の國家がその據りどころとする知的生活、その知的生活から當然引出される、元的見識から自分自身を救ひ出して、愛の世界にまで高まらなかつたら、それは永久にその權威を回復することが出来ないだらう。

私は神を知らない。神を知らないものが神と人との關係などに對して意見を申出るのは出過ぎたことだといはれるかも知れない。然し宗教が社會生活の一様式として考へ得られる時、その様式に對して私が思ふ所を述べるのは許されることだと思ふ。私の態度を憎むものは、私の意見を無視すればそれで足りる。けれども私は私自身を無視はしない。

教育といふものについても、私はこゝでいふべき多くを持つてゐる。然し聰明な讀者は、私が社會生活の諸部門について述べて來たところから、私が教育に對して何をいはうとするかを十分に見抜いてゐられると思ふ。私は徒ら

てしまふことが出来ない。そこには動かすことの出来ない實際的睿智が動いてゐるのを私は感ずることが出来る。惟ふに動物には、ダーウィンが發見した以外に幾多の本能が潜んでゐるに相違ない。而してそれがより以上の本能の力によつて、統合されてゐるに相違ない。然しながら十九世紀の生物學者は、眼覺めかけて來た個性の要求（それは十八世紀の佛國の哲學者等に負ふ所が多いだらう）と社會の要求との間にある廣い距離を感じたのではなくつたらうか。而して動物中に行はれる現状打破の本能を際立つて著しいものと認めたのではなからうか。然しその時學者達の頭の中には、個性は社會を組織するある小さな因子としてのみ映つてゐたらう。加之科學的研究法の必然的な條件として、凡てのものを二元的に見ることに慣らされてゐた。彼等はひとりで個性と社會とを對立させた。従つてその結論も個性と社會との中間性に重きをおいた場合には生存競争として現はれ、社會に重きをおいた場合には相互扶助として現はれたのだ。然し前者には社會が、後者には個性が、少しも度外視されてゐない。

私達はこの時代的着色から躍進しなければ

ばならぬと私は思ふ。私は個性の尊嚴を體驗した。個性の要求の前には、社會の要求は無條件的に變らねばならぬことを知つた。而して人間の個性に宿つた本能即ち愛が如何なる要求を持つかを語らう。而して更に又動物に現はれる本能が無自覺的で、人間に現はれる本能が自覺的であるのを區別した。自覺とは普通智の要求を意味する。個性は最早個性の社會に對する本能的要求を以て満足せず、個性自身、その全體の満足の中にのみ満足する。そこには競争すべき外界もなく、扶助すべき外界もない。人間は愛の擁にまで急ぐ。彼れの愛の動くところ、凡ての外界は即ち彼れだ、我れの正しい生長と完成。この外に結局何があらうぞ。

（以下十餘行内務省の注意により抹殺）

私はこの本質から出發した社會生活改造の法式を説くことはしまいと思ふ。それは自らその人がある。私は單にこゝに一個の示唆を提供することによつて満足する。私が持つて生れた役目はそれを成就すれば足りるのだから。

宗教も亦社會生活の一つの様式である。

信仰は固より人々のことであるが、宗教といへばそれは既に社會にまで擴大された意味をも

つてゐる。而して何故に現在の宗教がその權威を失墜してしまつたか。昔は一國の帝王が法皇の寛恕を請ふために乞食の如くその膝下に伏拜した。又ある佛僧は皇帝の愚昧なる一言を聞くと、一撈を残したまゝ、飄然として竹林に去つてしまつた。昔にあつては何かが宗教にかくの如き權威を附與し、今にあつては、何が私達の見るが如き退縮を招致したか。それは宗教が全く知的生活の羈絆に自己を委ね終つたからである。宗教はその生命を自分自身の中に見出すことを忘れて、社會的生活に全然適合することによつて、その存在を慥偉しようとしたからだ。國家には治者と被治者とがあつて、その間には動向の根柢的な衝突が行はれる。宗教は無反省にもこの概念を取つて、自分に適用した。神（つまり私はこゝで信仰の對象を指してゐるのだ。その名は何んでもいい）は宗教界にあつて、國家に於ける主權者の位置にある。彼れは人からあらゆる捧げものを要求する。人の生活は畢竟神の前にあつては無に等しい。神は凡ての權能の主體である。人は神の前にあつて無であることを榮譽としなければならぬ。神に對し自己を生牲にすることが彼れの有する唯一の權利（若しさういふ言葉が使へるらなで

にのみ限るやうになつた。かうなると男性は女性
性の分をも負擔して活動せねばならぬ故に、生
活の荷は苦痛として男性の肩にかゝつて來
た。男性はかくてこの苦痛の不満を發すべき
報を女性に要求するに至つた。女性は然しこ
の時に於ては、實生活の仕事の上で男性に何者
をか提供すべき能力を失ひ果ててゐた。女性
には單に彼女の肉體があるばかりだつた。而し
てその點から Prostitution は始まつたのだ。
女性は忍んで彼女の肉體を男性に提供すること
を餘儀なくされたのだ。かくて女性は遂に男性
の奴隸となり終つた。而して女性は自らがある
以上に自分を肉慾的にする必要を感じた。女性
は殊に著しい美的扮装、(それは極めて外面
的の)。女性は屢々練絹の外衣の下に襦袢の肉
衣を着る) 本能の如き嬌態、女性間の嫉妬反目
(姑と嫁、妻と小姑の關係はいふまでもあるま
い。私はよく婦人から同性中に心を許し合ふこ
との出來る友人のないことを聞かされる) はそ
こから生れ出る。男性は女性からのこの提供
物を受取つたことによつて、又自分自らを罰せ
なければならなかつた。彼れは先づ自分の家の
中に暴虐性を植ゑつけた。專制政治の濫觴を
こゝに造り上げた。而して更に悪いことには、

その生んだ子に於て、彼等以上の肉慾性を發揮
するものを見出さねばならなかつた。

これは私はいいないでも多くの讀者は知つて
而して肯んずる事實であらうと思ふ。私はこゝ
でこの男女關係の狂ひが何故最も悪い狂ひで
あるかをいひたい。この墮落の過程に於て最も
悪いことは、人間がその本能的要求を知的要求
にまで引き下げたといふ點にあるのだ。男女の
愛は本能の表現として純粹に近く止つ全體的な
ものである。同性間の愛にあつては本能は分裂
して、精神的(若し同性間に異性關係の假想が
成立しなければ)といふ一方面にのみ表現され
る。親子の愛にしても、兄弟の愛にしても皆等
しい。然し男女の愛に於て、本能は甫めてその
全體的な面目を現はして來る。愛する男女のみ
が眞實なる生命を創造する。だから生殖の事は
全然本能の全要求によつてのみ遂げられなければ
ならぬのだ。これが男女關係の純一無上の
條件である。然るに女性には必要に逼られるまゝ
に、過つてこの本能的欲求を知的生活的要求に
妥協させてしまつた。即ち本能の欲求以外の
欲求、即ち單なる生活欲の道具に使つた。而
して男性は卑しくもそれをそのまゝ使用した。
これが最も悪いことだつたと私はぶふのだ。

これより悪いことが多く他にあらうか。
樂園は既に失はれた。男女はその腰に木の葉
をまとはねばならなくなつた。女性は男性を恨
み、男性は女性を侮りはじめた。戀愛の領土
には數限りもなく假想的戀愛が出現するので、
眞の戀愛をたづねあてゐるためには、女性は過度
の警戒を、男性は極度の冒險をなさねばならな
くなつた。野の獸にも生殖を営むべき時期は
一年の中に定まつて來るのに、人間にかりは已
む時なく肉慾の爲めにさいなまれなければなら
ぬ。而かも更に悪いことには、人間はこの運命
の狂ひを悔いることなく、殆んど淫靡な態度で、
この狂ひを潤色し美化し、享樂しようとさ
へしてゐるのだ。

私達は幸ひにして肉體の方のみが主として
生活の手段である時期を通過した。頭腦も亦生
活の大きな原動力となり得べき時代に到達し
た。女性は多くを失つたとしても、體に失
つたほどには腦力に失つてゐない。これが女
性のその故郷への歸還の第一程となることを
私は祈る。この男女關係の墮落はどれ程の長
い時間の間に馴致されたか、それは殆んど計
ることが出来ない。然しそれが墮落である以上
は、それに氣がついた時から、私達は樂園への

な重複を避けなければならぬ。然しこゝにも教言を費やすことが許されたい。

子供は子供自身の爲めに教育されなければならない。この一事が見過されてゐたなら教育の本義はその隙間に滅びるのみならず、それは却つて有害になる。社會の爲めに子供を教育する

それは驚くべく悲しむべき錯誤である。

仕事に勤勉なれと教へる。何故正しき仕事を選べと教へないのか。正しい仕事を選り得たものは懶惰であることが出来ないのだ。私は嘗てある卒業式に列した。その校長は自分が一度も少年の時期を滑りぬけた経験を持たぬやうな鹿爪らしい顔をして、君主の恩父母の恩、先生の恩、境遇の恩、この四恩の尊き難有さを繰り返し説いて聞かせた。かのいたけな

少年少女たちは、この四つの重荷の下にうめくやうに見やられた。彼等は十分に義務を教へられた。然し彼等の最上の貴重な個性の權威は全く顧みられなかつた。美しく磨き上げられた個性は恩を知ることが出来ないとしてもいふのか。餘りなる無理解。不必要な老練親切。私は父である。而して父である體驗から明らかにいはう。私は子供に感謝すべきものをこそ持つて居れ。子供から感謝さるべき何者をも持つては

ゐない。私が子供に對して拂つた犠牲らしく見えるものは、子供の愛によつて酬はれてなほ餘りがある。それが何故分らないのだらう。正しき仕事を選べと教へるやうに、私は、私の子供に子供自身の價値が何んであるかを教へてもらひたい。彼れはその他の凡てを彼れ自身で處理して行くだらう。私は今假りに少年少女を私の意見の對象に用ひた。然し私はこれを中等教育にも高等教育にも延長して考へることが出来ると思ふ。學問の内容よりも學問そのものを重んじさせるといふこと、知識よりも暗示を與へるといふこと、人間を私の所謂専門家に仕立て上げないことなど。

二十三

私は更に愛を出發點として男女の關係と家族生活とを考へて見たい。

今男女の關係はある狂ひを持つてゐる。男女は往々にして争闘の状態におかれてゐる。かゝる事件はあるべからざることだ。

どれ程長い時間の間、馴致されたことであるか分らない。然しながら人間の生活途上に於て女性性男性の奴隸となつた。それは確かに筋肉勞働の世界に奴隸が生じた時よりも古いこ

とに相違ない。

性の殊別は生來の結果を健全にし確固たらしめんがために自然が案出した妙算であるのは疑ふべき餘地のないことだ。その變體が色々な形を取つて起り、ある時はその本務的な目的から全く切り放されたプラトニック・ラブともなり、又かゝる關係の中に、人類が思ひもかけぬ

よき收得をする場合もないではない。私はかゝる現象の出現をも十分に許すことが出来る。然しそれは決して性的任務の常道ではない。

だから私が男女關係のある狂ひといつたのは、男女が分擔すべき生殖現象の狂ひを指すことになる。男女のその他の關係がいかに都合よく運ばれてゐても、若しこの點が狂つてゐるなら、結局男女の關係は狂つてゐるのである。

既に業に多くの科學者や思想家が申出たやうに、女性性産つと哺育との負擔からして、實生活の活動を男性に依託せねばならなかつた。

男性は、野の郎があるやうに、始めは甘んじて、勇んでこの分業に従事した。けれども長い歲月の間に、男性はその活動によつて益々その心身の能力を發達せしめ、女性も能力はある退縮の結果すると共に、益々活動の範圍を廣めて行つて、遂にはその活動を全く家穡のこと

男女にとつては、本質的にいふと、それは少しも必要な条件ではない。又離婚即ち家族の分散が法の認許によつて成り立つといふことも必要な条件ではない。凡てかゝる條件は、社會がその平安を保持するために案出して、これを凡ての男女に強制してゐるところものだ。國家が今あるがまゝの状態で、民衆の生活を整理して行くためには、家族が小國家の状態で強國に維持されることを極めて便利とする。又財産の私有を制度となさんためには、家族制度の存立と財産繼承の習慣とが缺くべからざる必要事である。これらの外面的な情實から、家族は國家の柱石、資本主義の根據地となつてゐる。その爲めには、縱令妻の失はれた男女の間に、家族たる形體を固守せしめる必要がある。それ故に家族の分散は社會が最も忌み嫌ふ所のものである。

おしなべての男女も亦、社會のこの不言不語の強壓に對して柔順である。彼等の多數は愛のない所にその形骸だけを續ける。男性はこの習慣に依頼して自己の強權を保護され、女性はまだこの制度の庇護によつてその生存を保障される。而してかくの如き空虚な集團生活の必然的な結果として、愛なき所に多數の子女が生産される。而して彼等は親の保護を必要とする現在の社會にあつて（私は親の保護を必要としない社會を豫想してゐるが故にかくいふのだ）親の愛なくして育たねばならぬ。而して又一方には、縱令愛する男女でも、家族を形造るべき財産がないために、結婚の形式を取らずに結婚すれば、その子は私生兒として生涯購保の擯斥を受けねばならぬ。

社會からいつたならば、かゝる缺陷は縱令必然的に起つて來るとしても、なほ家族制度を固執することに多分の便利が認められよう。然し個性の要求及びその完成から考へる時、それはいかにも不自然な結果を生ずるであらうよ。第一この制度の強制的存在のために、家族生活の神聖は、似而非なる家族の交雜によつて著しく汚される。愛なき男女の結合を強制することは、そのまゝ生活の墮落である。愛によらざる産子は、産者にとつて罪惡であり、子女にとつて救はれざる不幸である。愛によつて生れた子女が侮辱を蒙らねばならぬのは、この上なき曲事である。私達はこれを救はなければならぬ。それが第一の喫緊事だ。それらのことについて私達はいかなるものの犠牲となつてゐることも出来ない。若しこの欲求の遂行によつて外界に不便を來すなら、その外界がこの欲求に適應するやうに改造されなければならぬ筈だ。

愛のある所には常に家族を成立せしめよ。愛のない所には必ず家族を分散せしめよ。この自由が許されることによつてのみ、男々の生活はその思ひむき虚偽から解放され得る。自由戀愛から自由結婚へ。

更に又、私は戀愛そのものについて一言を附け加へる。戀愛の前に個性の自己に對する深き要求があることを思へ。正しくいふと個性の全的要求によつてのみ、人は愛人を見出すことに誤謬なきことが出来る。而して個性の全的要求は容易に愛を異性に對して動かさないだらう。その代り一度見出した愛人に對しては、愛はその根柢から搖ぎ動かだらう。かくてこそその愛は強い。而して尊い。愛に對する本能の覺醒なしには、縱令男女交際にいかなる制限を加ふるとも、いかなる修正を施すとも、その努力は徒勞に終るばかりであらう。

二十四

もう私に私の饒舌から沈黙すべき時が來た。若し私のこの感想が讀者によつて考へられる

歸還を企圖せねばならぬ。一人でも二人でも、そこに氣付いた人は一人でも二人でも忍耐によつてのみ成就される長い旅に上らなければならぬ。

私はよくそれが如何に不可能事に近いとさへ思はれる困難な道であるかを知る。私も亦その狂ひの中に生れて育つて来た憐れな一人の男性に過ぎない。私は跌きどほしに跌いてゐる。然し私の本能のかすかな聲は私をそこから立ち上らせるに十分だ。私はその聲に推し進められて行く。その旅路は長い耽溺の過去を持つた私を淋しく思はせないではない。然しそれにもかゝらず私は行かざるを得ない。

この男女關係の狂ひから當然歸納されることは、現在の文化が男女兩性の協力によつて成り立つものではないといふ事だ。現時の文化は大は政治の大から小は手桶の小に至るまで悉く男子の天才によつて作り上げられたものだといつてゐる。男性はその凡ての機關の恰好な使用者であるけれども、女性がそれに與かるためには、ある程度まで男性化するにあらざれば與かることが出来ない。男性は巧みに女性を家族生活の片隅に祭りこんでしまつた。しかも家族生活にあつても、その大權は確實に男性に

握られてゐる、家族に供する日常の食膳と、衣服とは女性が作り出すことが出来よう。然しながら雙應の瞻衡と、晴れの場の衣裳とは、遂に男性の手によつてのみ巧みに作られ得る。

それは女性に能力がないといふよりは、それらのものが凡てその紙根に於て男性の嗜好を満足するやうに作られてゐるが故に、それを産出するもの亦自ら男性の手によつてなされるのを適當とするだけのことだ。

地球の表面には殆んど同數の男女が活きてゐる。而してその文化が男性の欲求にのみ適合して成り立つとしたら、それが如何に不完全な内容を持つたものであるかが直ちに看取されるだらう。

女性が今の文化生活に與からうとする要求を私は無下に斥けようとする者ではない。それは然しその成就が完全な女性の獨立とはなり得ないといふことを私は申出したい。若し女性が今の文化の制度を肯定して、全然それに順應することが出来たとしても、それは女性が男性の嗜好に降伏して自分達自らを男性化し得たといふ結果になるに過ぎない、それは女性の獨立ではなく、女性の降伏だ。

唯々外面的にでも女性が自ら動くことの出

来る餘地を造つておいて、その上で女性の眞要求を導き出す手段としてならば、私は女權運動を承認する。

それにも増して私が女性に望む所は、女性が力を合せて女性の中から女性的天才を生み出さんことだ。男性から眞に解放された女性の眼を以て、現在の文化を見直してくれる女性の出現を祈らんことだ。女性の要求から創り出された文化が、これまでの文化と同一内容を持つだらうか、持たぬだらうか、それは男性たる私が如何に努力しても、應酬することが出来ない。而して恐らくは誰れも出来ないだらう。その異同を見極めるだけにでも女性の中から天才の出現するのは最も望まべきことだ。同じであつたならそれでよし、若し異つてゐたら、男性の創り上げた文化と、女性のそれとの正しき相擁によつて、それによつてのみ、私達凡ての翹望する文化は成り立つであらう。

更に私は家族生活について申出しておく。家族とは愛によつて結び付いた神聖な生活の單位である。これ以外の意味をそれに附け加へることは、その内容を混亂することである。法定の手續と結婚の儀式とによつて家族は本當の意味に於て成り立つと考へられてゐるが、愛する

著作年表

一八九五年 (十八歳)

九月——斬魔劍

一八九八年 (二十一歳)

遠友夜學校校歌

一八九九年 (二十二歳)

花語り

一九〇〇年 (二十三歳)

人生の歸趣論文 (學會雜誌) 第三十四、五號所掲

五號所掲

札幌農學校校歌

一九〇一年 (二十四歳)

リビングガストン傳 (森本厚吉と共著)

七月——鎌倉幕府初代の農政 (札幌農學校卒業論文)

業論文

十一月——五日集 (短、長詩)

札幌獨立教會 (歴史、「聖書之研究」第十四、五、六號所掲)

一九〇三年 (二十六歳)

五月——獨旅短信

七月——草いされ

一九〇五年 (二十八歳)

ブランド (研究、一九〇五、六年にかけ「校友會雜誌」に發表。更に一九一九年四月、「白樺」に再掲)

一九〇六年 (二十九歳)

四月——イブセン雜誌 (一九〇八年三月「文藝會報」第五十三號所掲)

かんく蟲小説、一九一〇年十月「白樺」所掲

一九〇八年 (三十一歳)

四月——米國の田園生活 (文武會報) 第五十四號所掲

十二月——札幌獨立教會沿革 (獨立教會第三十七號附錄)

日記より (文武會報) 第五十四、五號所掲

一九〇九年 (三十二歳)

二月——半日 (短篇)

一九一〇年 (三十三歳)

四月——シエンキウウキツチ「西方古傳」(翻譯、「白樺」所掲)

五月——二つの道感、一白樺所掲

七月——老船長の幻燈、一白樺所掲

八月——も一度二つの道に就いて (白樺所掲)

十一月——叛逆者、ロダンに關する考察、白樺所掲

一九一一年 (三十四歳)

一月——或る女のグリンプス (後に或る女と改題、「白樺」に連載し始む)

二月——泡鳴氏への返事、「白樺」所掲

四月——『お目出度人』を讀みて (白樺所掲) 同級生 (雜文消息)

一九一二年 (三十五歳)

三月——ガルスウオーシー『小さい夢』(摸譯、「白樺」所掲)

一九一三年 (三十六歳)

二月——或る女のグリンプス 前篇 (本集の『或る女』二十一まで「脱稿」)

六月——ワルト・ホキツトマンの二斷面 (文武會報) 所掲。更に一九一九年一月「大觀」に再掲

草の葉 (ホキツトマンに關する考察)

一九一四年 (三十七歳)

一月——ストリンドベルヒ「眞夏の夢」

ならば、部分的に於てでなく、全體に於て考へられんことを望む。殊に本能的生活の要求を現實の生活にあてはめて私が申出した言葉に於てさうだ。社會生活はその總量に於て常に顧慮されなければならぬ。その一部門だけに對する凝視は、往々にして人を迷路に導き込むだらう。

私も亦部分的考察に走り過ぎた嫌ひがないとはいへない。私は人間に現はれた本能即ち愛の本能をもつと委しく語つてやむべきであつたかも知れない。然しもう云はれたことは云はれてしまつたのだ。

願はくは一人の人をもあやまることなくこの感想は行け。

二十五

あまりに明らかであつて、而かも往々顧みられない事實は、一つの思想が體驗的の検査なしに受取られるといふことだ。それは思想の提供者を空しく働かせ、享受者を空しく苦しめる。

二十六

ニイツチエが「私は自分が主張を固執するために焼き殺される場合があつたら、それを避け

よう。主張の固執は私の生命を値ひするほど重大なものではない。然し主張を變じたが故に焼き殺されねばならぬといふのなら、私は甘んじて焼かれよう。それは死に値ひするといふ意味のことをいつたさうだ。この逆説は正しいと私は思ふ。生命の向上は思想の變化を結果とする。思想の變化は主張の變化を豫想する。生きんとするものは、既成の主張を以て自己を金縛りにしてはなるまい。

二十七

思想は一つの實行である。私はそれを忘れてはゐない。

二十八

私の發表したこの思想に、最も直接な示唆を與へてくれたのは阪田泰雄氏である。この機會を以て私は君に感謝する。その他、私の内面的經驗に關はりを持つた人と物との凡てに對して、私は深い感謝の意を捧げる。

二十九

これは哲學の素養もなく、社會學の造詣もなく、科學に暗く、宗教を知らない一人の平凡な

善者の僅かばかりな誠實が叫び出した訴へに過ぎない。この訴へから此かでもよいものを聴き分けるよい耳の持主があつたならば、而してその人が彼れの爲めにより環境を準備してくれたならば、彼れも亦善者たるの苦しみから救はれることが出来るであらう。凡てのよきものの上に饒かなる幸あれ。

(一九二〇年三月十五日—三十一日)

新聞所掲)
二月——御嶽教の中教正となつた祖母(中央文學所掲) 批評といふもの(早稲田文學所掲) 松井和麿子の死(新潮所掲) 雜信一東(我等に連載し始む)
三月——『リビンググストン傳』の序第四版(序文) 將來の新劇團に對する二三の註文(早稲田文學所掲)
四月——『野性の呼聲』あとがき 春散文(新小説所掲)
五月——往來雜記(感想)、「大阪朝日新聞」所掲、「或る女」後篇脱稿 六月——著作集第九輯に於いて發表、「或る女」後篇の書後七月——若き友の訴へに對して(新潮所掲)
九月——『リビンググストン傳』の序第五版(序文)
十月——サムソンとデリラ(完稿) 大洪水の前(完稿) 聖餐(三幕戲曲) 三十一日完稿)
十一月——帝展の日本畫より 石山氏のそれへ(太陽所掲)、「三部曲」の書後。文學は如何に味ふべきか(講演筆記)「女學世界」所掲)

一九二〇年 (四十三歳)

一月——内部生活の現象(婦人の友所掲) 文藝と問題(新潮所掲) ルベックとイリーネのその後(感想)「文章世界」所掲) 美術鑑賞の方法に就いて(太陽所掲) 二月——イブセン研究(二、三月大學評論所掲)
三月——自分に云ひ聞かせる言葉(感想)「改造」所掲) 惜みなく愛は奪ふ(論文、十五日—三十一日)
四月——美術鑑賞の方法に就いて再び(雄辯所掲) 藝術に就いての一考察(中央公論所掲) 婦人解放の問題(改造所掲) ケーベル博士小品集(批評)著作評論所掲) 水野仙三氏の作品に就いて(水野仙三集の跋、此月二十五日深更) 再び本間久雄氏に(此月六日稿) 六月——早稲田文學所掲) 生活と文學(論文、文化生活研究所掲)
五月——溝を埋めよ(論文) 婦人公論所掲) 價値の否定と固定と移動(論文、一人間所掲) 六月——「情みなく愛は奪ふ」の書後(此月八日夜)
六月——信濃日記(新家庭所掲)

七月——イブセンの仕事振り(新潮所掲) 三つの希望 十五日 婦人俱樂部所掲)

八月——「桃多の歌へる」(批評)著作評論所掲) 愛(米川正夫氏に、二十九日時事新報所掲)

十月——『悲痛の哲理』(批評)「著作評論」所掲) 一つの提案(女性日本人所掲) 自分自身の覺醒(文學者の女性觀、「婦人公論」所掲) 卑怯者(短篇、二十三日ホキットマンに就いて) 新人會第二回學術講演會に於いて 旅する心の書後(十日)

十一月——文藝家と社會主義同盟に就いて(人間所掲) 備考——運命の訴へ(小説、未完稿、一九二〇年春作とのみにて月日不明)

一九二一年 (四十四歳)

一月——自己の要求(改造所掲) 秋散文二篇 婦女界所掲) 藝術の不變性、能樂文藝講演會にて、諸曲所掲) 白官舎長篇(星座)の前半(新潮所掲)
三月——一人の人の爲めに感想(自由教育所掲) 生活と文學(完稿)
四月——雜信一東(完稿)「小さな灯」の書後

譯、「小樽新聞」所掲)

二月——新しい畫派からの暗示(「小樽新聞」所掲)

四月——An incident (短篇「白樺」所掲)

七月——内部生活の現象

八月——幻想(「白樺」所掲)

一九一五年 (三十八歳)

三月——首途(「迷路」の序篇、「白樺」所掲)

宣言(七月—十二月「白樺」所掲)

九月——サムソンとデリラ(「三幕戯曲」、「白樺」所掲、未定稿)

一九一六年 (三十九歳)

一月——お末の死(短篇「白樺」所掲) 大洪水の前(四幕戯曲、「白樺」所掲、未定稿)

三月——フランシスの顔(短篇、「新家庭」所掲)

四月——恵迪寮歌集「序

七月——クロボトキンの印象(「新潮」所掲)

潮海(短篇、「時事新報」所掲)

八月——「松蟲」の序と跋

十一月——自我の考察(東北帝國大學農科大學講義部講演會講演)

一九一七年 (四十歳)

一月——「聖書」の權威(「新潮」所掲)

二月——「或る女」前篇の書後

三月——ミレー禮讃(「新小説」所掲)

五月——死と其の前後(戯曲、「新公論」所掲)

六月——惜みなく愛は奪ふ(「新潮」所掲)

七月——著作集に就いて(藝術制作の解放(「大觀」所掲) 平凡人の手紙(短篇、「新潮」所掲) カインの末裔(短篇、「新小説」所掲)

八月——「平凡人の手紙」に就いて(「讀賣新聞」所掲) クララの出家(短篇、此月十五日執筆、九月「太陽」所掲) 實驗室(短篇、此月十九日執筆、九月「中央公論」所掲)

九月——凱旋(短篇、此月八日執筆、十月「文章世界」所掲) 奇蹟の詠ひ(對話、此月二十日執筆、十月「東方時論」所掲)

十月——私の母(感想、「新家庭」所掲) ひ度い事二つ(感想、「中外」所掲) 藝術を生む胎(感想、「新潮」所掲) 迷路(長篇、「中央公論」所掲)

十二月——四つの事(感想、「新潮」所掲) 岩野鳴氏に(「讀賣新聞」所掲)

一九一八年 (四十一歳)

一月——曉園(「迷路」續篇、「新小説」所掲) 小きき者(「短篇」、「新潮」所掲) 動かぬ時

計(短篇、「中央公論」所掲)

二月——藝術を造るものは所謂實生活に非ず(感想、「新潮」所掲)

三月——「死」を畏れぬ男(小説、「新時代」所掲)

四月——想片(感想、「新潮」所掲) 林檎の野(「花の趣味と各國民性」といふ問に答へて、(「新小説」所掲) 石にひしがれた雜草(小説、「太陽」所掲) 生れ出づる慣み(小説、「大阪毎日新聞」に一部發表)

六月——武者小路兄(此月二十日執筆、七月「中央公論」所掲)

七月——ある六月の日記(「新潮」所掲) 岩き友に(此月九日執筆、八月「青年文壇」所掲)

八月——私の友達(「文章俱樂部」所掲) なる健全性(「文章世界」所掲)

九月——讀者に(「白樺」及び「新しき村」所掲) 旅する心(「讀賣新聞」所掲) 著作集に就いて

十月——運命と人(感想、「中外」所掲) 予に對する公開狀の答(「新潮」所掲)

十二月——私の父と母(「中央公論」所掲)

一九一九年 (四十二歳)

一月——小きき影(五月—十二日大阪毎日

愛の表現 リルト・ホキットマン（以下「泉」第二卷第一號所掲） リルト・ホキットマン（『草の葉』所掲）

二月——或る施療患者（小説）「泉」第二卷第二號所掲） ホキットマン詩集、出版

三月——斷橋（一幕戯曲）。ホキットマン第二輯を出すに當つて。永遠の叛逆（感想

以上「泉」第二卷第三號所掲）『湿地の火』の序

四月——骨（小説）。瞳なき眼（詩其一）。詩への邊陲（感想）以上「泉」第二卷第四號所掲） 農村問題の歸結（青年）所掲） 農場開放の顛末（帝國大學新聞）所掲）

五月——親子（小説）。瞳なき眼、詩其二）以上「泉」第二卷第五號所掲） 文化生活の基礎（文化生活）所掲） 藝術教育私見（藝術教育）所掲）

六月——獨斷者の會話 對話劇）。パルビュスの『クラルテ』の譯文を讀みて（感想）（以上「泉」第二卷第六號所掲） 農民文化といふこと（文化生活）所掲） 時評三つ（女性改造）所掲） 文化に就いて（文化講演集）所掲）

七月——行き詰れるブルジョア（文化生活）所掲）

所掲） 八月——歌十首（絶筆）「泉」終刊有島武郎記（心魂所掲）

備考——秋風（渡来前、札幌時代）たとへばな

し 歸朝後、札幌時代）北歐文學が與ふる教訓（未定稿、同上） テニス「ドラ」戯談、同上）の外、白者の廣告文がある。

絶筆

（版畫書齋で發見されたもの）

世の常のわが戀ならはかくはかりおそ
ましき火に身は焼くへき
幾年の命を人は遂げんとや思ひ入りた
るよろこひも見
修禪する人の如くに世にそむき靜かに
戀の門にのそまむ
道はなし世に道は無し心して荒野の土
に汝か足を置け
さかしらに世に立てりける我がこれ神
に似るまで思かしき今
生れ來る人は持たすなわかうけし悲し
き性とうればしき道
雲に入るみさこの如き一筋の戀とし知
れはやは足りぬ
蟬一つ樹とは離れて地に落ちぬ風なき
秋の靜かなるかな
明日知らぬ命の際に思ふこと色に出つ
らむあちさきの花
命絶つ咎しあらは手に取りて世の見る
前に我を打たまし

五月——地方の青年諸君に「寸鐵」所掲。美を護るもの(評論、文化生活講演集、私共の主張)所掲。泉(文化生活講演集、私共の主張)所掲。

六月——餘裕と文化論文「文化生活」所掲。七月——紅海を離れて散文、「週刊朝日」所掲。筆頭語(新文學)所掲。自然と人(文化生活)所掲。

十月——ホキットマン詩集「出づ」十一月——生活といふこと(文化生活)所掲。藝術家の生活に就いて(文章俱樂部)所掲。

備考——一房の葡萄、溺れかけた兄妹、碁石を飲んだ八つちゃん、僕の帽子の話(以上章話四篇、一九二一年作とのみにて月日不明)。

一九二三年(四十五歳)一月——宣言「つ」(改造)所掲。藝術に就いて思ふこと(大觀)所掲。自由は與へられず(文化生活)所掲。驚異(同上)廣津氏に答ふ(十九日)東京朝日新聞所掲。第四階級の藝術(一日)讀賣新聞所掲。片輪者童話(良姉の友)所掲。

二月——生活よりジャーナリズムを排せよ

(文化生活)所掲。野尻湖(婦女界)所掲。雪の日の思ひ出(母の友)所掲。

三月——片信(我等)所掲。主義はない(野依雜誌)所掲。讀曲(綾鼓)「新潮」所掲。御柱(幕物)、「白樺」所掲。

四月——反キリスト教問題より一般宗教批判(談話筆記、讀賣新聞)所掲。藝術と革命の關係、一二日時事新報所掲。私の態度(文章俱樂部)所掲。星座(完稿、五月著作集第十四輯に於いて發表)小兒の寝顔(感想「文化生活」)所掲。本書を讀みて(涙の底から)の序。

五月——子供の世界(報知新聞)所掲。想片(新潮)所掲。互の立場を認めよ(文化生活)所掲。ホキットマンに對する一英國婦人の批評(學藝)所掲。マルクス女史の女に就いて。教育者の藝術的態度(帝國教育)所掲。

六月——己れを主とするもの(文化生活)所掲。『太陽の沈みゆく時』の序(二十九日)朝。繰り返し(生活)を憎む(報知新聞)所掲。生活の歐化と文化生活(婦人公論)所掲。言葉と文字(オヒサマ)所掲。新舊藝術の交渉。

七月——描かれた花(改造)所掲。生命によつて書かれた文章(文化生活)所掲。獨りゆく者(同上)。子供の素樸さ(新潮)所掲。三大偉人の懺悔(婦人世界)所掲。『米國學生生活』の序(二十六日午後)「藝術と生活」の書後(三十一日午後)。

八月——心に沁みる人々(中央公論)所掲。火事とボチ(童話)「婦人公論」所掲。上田博士の就任を機に漢字制限に就いての意見を徴されたのに答ふ(三日讀賣新聞)所掲。木曾山中(婦女界)所掲。

九月——文藝に就いて(婦女新聞)所掲。十月——「泉」を創刊するに當つて。ホキットマンの「言葉の歌」から。ドモ又の死。小作人への告別(以上「泉」第一卷第一號所掲)。愛に就いて(大阪毎日新聞社主催文化大學講座講演筆記)。道德と道理(國民婦人會講演會に於いて)。

十一月——「靜思」を讀んで(倉田氏に)「泉」第一卷第二號所掲。十二月——前號記事梗概。「靜思」を讀んで(倉田氏に)承前(「泉」第一卷第三號所掲)。

一九二三年(四十六歳)一月——酒狂(小説)。文化の末路(感想)。

を以て葉子を生かして居る。先生の心の純情さは、生きようとするものは、微細なもので殺し得なかつたのである。純にして清朗な心を開いて人生の底を見極めようとして、其處に「何」を見出し得たか。或る女の『後篇』(以下、女)が一九一九年に至つて完成した事及びその終末が如何に暗いものであるかを、讀者は考へて見るが好い。

『或る女のグリンプス』は、先生の眞に際し初期の試作である。併し、作家としての先生の眞實な活動は、先生が教會を退き、教職を辭し、東京に轉住してから以後の事である。札幌は昔の先生を知り過ぎて居て、先生の更生を虚心に迎へてくれる處ではなかつた。その地を離れて始めて先生は新しい生活建設する事が出来たのである。生活と藝術とを不即不離に考へる先生にとつて、藝術に徹する爲めには、先づ生活の更新をしなければならなかつた。

生活更新の意志は漸次に固められつゝあつたのであるが、それを急激に實行せしめたのは、夫人の病であり、その死去である。先生の藝術は、夫人の死に依つて誕生したと言つても、過言でないと思ふ。「小さき者へ」一篇は、先生の再生の宣言である。信仰を棄てて心の支

柱を失ひ、夫人の死に會つて家庭生活の支柱を失ひ、凡てを失つて始めて、先生は藝術に再生したのである。母に取残された小さき者の運命を思ふ先生の愛憐の情に、讀者の時はぬれるであらうが、先生の瞳から輝き出る悲壯な人生肯定の意志を見落すほど、讀者は眼を曇らせなくてはならない。内に潜められた底力ある生きんとする意力は、一篇の言々句々に表はれて、讀者をして運命を直視せしめずにはおかない。小さい三つの影を背に負つて、力強く歩む先生の姿の尊さ。

「お前達の母上の死によつて、私は自分の生きて行くべき大道にさまよひ出た。」——大道に踏み出だして以來、即ち一九一六年以後の先生の仕事は、量に於て多く、質に於ても殆ど先生の代表作のすべてが、僅か數年間に完成された程素峭しいものがあつた。この集に收められた三つの名作も亦、私の云ふ第二期の間に書かれたものである。

『クララの出家』は、『カインの末裔』と好い對照をなす作品である。

「これも正しく人間生活史の中に起つた實際の出来事の一つである。」と云つて、聖クララの清い魂の戀が物語つ

てある。かくも清い聖クララも亦、人間であつた事を、はつきりと先生は見定めたのである。『クララの出家』に於て、先生は人間を清さの限りに於て眺めて見たのである。

そして、『カインの末裔』に於て、人間の醜惡の限りを見た。地に生きる生物として人間の姿がまぎ／＼と描寫されて居る。人間性の二つの兩極端を追求したこれ等の二作に於て、先生の人生に對する視野が如何に擴大されたかが窺はれる。しかもこの二作は作品として見るも、成功したものと言つて好い。殊に後者が人間性の醜惡な一面を描きながらも、藝術的氣品を失つて居らない事は、先生の人としての氣品があつて始めてなし得る事である。

「生れ出づる情み」の印象は、更に大きく廣いものがある。

「凡て、誕生を待つよき魂に對する謙遜な讃歌を唱へようとした。自然は大きな産尊だ。私はその産尊の一隅につゝましく坐つて華やかな誕生を祝する歌手でありたい。」(有島武郎全集第四卷、附録六一頁)

と云つて居られる。例ひ此の一篇が、素材のまゝの荒けづりなものであつたにせよ、その力強く迫る人間をめぐる自然の原始的な底力を感じ

「有島武郎集」の後に

誰の作を讀むにしても、其の作者の生活と思想とに結び付けて考へて見る事は、忘れてはならない事である。先生の場合に於て、特にこの事は大切である。

私は先生の生涯を、三つの時代に分けて見たい。

(一) 一九一〇年明治四十三年より一九一六年(大正五年)まで。先生三十三歳の時から、三十九歳の時まで。――「白樺」創刊の年から、安子夫人死去の年までである。

(二) 一九一六年より一九二〇年(大正九年)先生四十三歳の時。惜みなく愛は奪ふ「發表の歳まで」。

(三) 一九二〇年以後。

先生が札幌農學校在學時代、忠實なキリスト教徒であつた事は、作家としての先生を見る場合にも、看過出来ない事實である。信仰を見失ひ始めてから、始めて先生の藝術に對する眼が、本當に自由に發達し始めたのであるから。

米國留學時代に信仰を見失つて、迷路に立たれた時、先生は「破戒僧の様な稍々棄て鉢心持」(『リビングストーン傳』の序で入つて行かれたのが文學である。

三年有餘の留學を終へて歸朝した先生の生活にとつて、最早キリスト教は何の力にもならなかつた。先生は、「一人の文學愛好者として、教員でもして一生を過ごさうと云ふ決心を持つて歸朝されたのである。そして札幌は、信者としての先生を、教職に迎へたのである。淋しい雪國に埋れて居られた幾年かは、先生の魂を育てあげるのに十分な年月であつた。大として、父としての平和な月日が、魂の苦痛を包んで過ぎて行つた。かうして創作の春を待つ準備は十分に出来て居た。

明治四十三年四月、雑誌「白樺」が創刊されると共に、先生の文學的活動は始まつた。その心の準備に於て、その教養に於て、既に十二分なものがあつたと言つて好い。併し、私の言ふ第一期に於ける勞作は、『惜みなく愛は奪ふ』に表

現されて居る思想の萌芽である數個の論文以外には、短篇が多い。それ等の短篇は、十分に聰明を思はしめるものがあつても、未だ曉霧を脱し得ぬ魂の幻想である。

『或る女』の前篇(本集の「或る女」)は、初め或る女のグリンプスと題して一九一一年一月から一九一三年三月まで「白樺」誌上に連載されたものである。作品として、構想の上からも表現の上からも多くの缺點があるにしても、この作は先生に取つて好い試煉であつたに違ひない。この作に就て、先生は次の如くに語つて居られる。

「畏れる事なく醜にも邪にもぶつかつて見よう。その底には何があるか。その底に何もなかつたら、人生の可能は否定されなければならぬ。私は無力ながら敢てこの冒險を企てた。(有島武郎全集第四卷、附録六一頁)讀者は、胸を開いて、早月集子なる或る女に接しなければならぬ。彼の女は、女性の情愛を以て、先づ何よりも先きに、自分の神經の末端までも愛した。女性の盲目さを以て、自分のあらゆる才能を生かさうとした。併し、人は如何に彼の女を取扱つたか。如何に彼の女は周囲に反撥したか。――先生は、子に盲目な母の愛

有島生馬集

ぜひものはあるまい。

人間の姿を有りのまゝに描寫し、ある時は清く、或る時は醜惡の極を直視せしめ、そして、運命の黒い障に見据ゑられて居る人間の生命をまで思はしめる、廣く深い作は、先生の作において他に現代日本文學にその比を見ない。しかも、その人間愛の深さに於て、私に特に先生の作品を挙げたい。その作品の氣品は全く先生の人間愛から溢れる芳香である。

先生の作品を読んで、私達が先づ感ずること、同じ血にながる同族に感じる親しさである。疑ふ者は昔く先生のあの鋭角的な表現の印象から身を退けて、先生を眺めて見るが好い。私の言葉は、その後に首肯されるであらう。

何處からあの特異な表現形式が産れて來るのだらう。凡てのものを愛して止まぬ愛情と、僅かな惡も退けずにはおけぬ銳利な反省とは、一個の人間先生の心の隅にあるものまでも批判解剖し盡くし、生きるものの凡ての運命までもよりよくせずにはおかなかつたのである。この情熱と理性が筆に表はれた時、如何に鋭いものであつたか。この鋭い表現に心に沁み入らせてから、暫く身を退いて先生を眺めて見るが好い。

先生の思想の凝結したものとも言ふべき述作、

「惜みなく愛は奪ふ」を讀むにしてもこの態度を忘れてはならない。「少くとも五年以上の歲月を折りたゝんで築きあげた」(有島武郎全集第四卷附錄六二頁)と言つて居られる此論文は、その表現形式の特異さに於て先づ人の心を動かす。その表題に於て、「本能生活」の強調に於て、故に讀者に一步退いて讀む心の準備がなかつたら時として誤つて讀まないとも限らない。

若し讀者にしてこの準備があるなら、その内容を私が解説するまでもない。讀者は先づ讀み行く内に、先生の心へ心へと牽き入れられるであらう。讀後、離れて靜に先生を眺めるなら、純なる先生の魂を見る、純なる魂の苦闘を見る、と共に、讀者は人間有島氏に限りないなつかしさを覺えるであらう。純にして平凡なる人間、純なるが故に尊く、平凡なるが故にしたはしい。純なる平凡人有島武郎の魂の苦闘の跡、惜みなく愛は奪ふ」の一篇を、若し熟讀するならば幾多の疑問と衝動を起したその死に至る肯定から否定への徑路を辿ることも亦至難の事ではあるまい。

斯くも鋭く叫ばれた自己肯定も、やがて

崩れはじめなければならなかつた。他から權を奪ひぬいて、仲び行くまゝに獨り生きるには、先生の心は餘りに廣く暖かすぎた。自我の檢討を終へた先生は、眼を轉じて社會相を觀察し始めた。自己意志の肯定を、更らに社會に生きる一人としての正當なる生活を以て、裏付けようとした。

私の謂ふ第三期の勞作、第二期のものと比較するならば、より力強い太い線を描かれた人生觀察であると言へる。ドモ又の死」にみるやうな、原始的な生活意志がある。自らの手で生きるが故に新鮮な力がある。自由にして自然なるが故に妥協を知らぬ。妥協を知らぬものは現實の社會の下層に沈溺しなければならぬ。自然にして自由なる生活を、押しひしぐものは何か。

——「永遠の叛逆者」の前奏曲は奏ではじめられた。その途を阻むものは、燒きつくさるであらう。

生命まで燃焼しつくして——何處へ行く。獨り行く者の跡を追ふものは誰か。

昭和二年六月

織田 正信

鳩飼ふ娘

三度目に妻が逃げ出した時、もう無駄だと思つた。幾歳になつてもあの癖は直らない。私は直接男に手紙をやつて、今度はもう歸つて來られないやうな罫を作つた。

私は名論卓説に耳を傾けるのが嫌になつた。役所で其向の議論が湧いて面倒になる事があつても、黙つて済む事なら、打捨て置いた。さうすると大概は夫れで片付いて終つた。殊に問題が人生觀などいふ雑談に移ると席に堪へられなくなつた。皆んな盛氣凌ぎ、私には唯ださうとしか響かなくなつた。好きだつた専門以外の書物も閉ぢた、同じ人間を神様のやうに崇めるのも興がなくなつた。

女の居ない家の中は火が消えたも同じだつた。が、らりと内の容子が變つた。壁でも窓でも愛撫してゐた古書でも、申合せて今が今まで自分を許つてゐたやうに、急に素氣なく冷かな態度に變つた。トラス・テヴェレの借屋は私一人には廣過ぎましたし、明るく近代風の建築に厭が來た。どつちにしても永く其家に住ま

てゐる氣はなくなつた。

羅馬の公使館は其頃Mといふ町にあつた。歸途は電車にも乗らないで役所から極く近いヴィラ・ボルゲエゼ公園を一周し、ピアッツァ・

デル・ポポロの門から再び市内に還入つてデゼレ河を渡り、歩いて自家へ歸るのを目課にしてゐた。その役所から公園に行く近道にS町といふ東西の短い通があつた。朝夕僅か日光が射す許りで、霜解けなどは却々乾かなかつた。一體このルドヴキといふ區け貴族的な土地柄で、建築も新しいのが多かつたのに、S町計りは例外的のやうに周圍と異つてゐた。近所の往來には門櫓の立派な屋敷か、店といつても花屋か帽子屋の飾窓があるに過ぎなかつた。所がS町の角には古風な藥種屋があつた。其隣が靴屋、それに並んで荒物屋、肉屋、八百屋、仕立屋といふ風で、全く他と調子が變つて、陰氣な貧乏臭い空氣がいつも漂つてゐた。私は好んで其處を通抜けた。すると小娘が木履をつゝかけて自分の前を駈け抜けた。やつと歩ける位

な子が倒れて大きな口をあいて泣いた。こんな些細の事まで妙に私の氣を惹いた。何んでも裏表のない事が懐かしかつたのだ。S町を出ると廣いヴェネトの並木通で、古い市壁の一部と公園の入口とが見えた。其處では自用の自動車に着飾つた人々を乗せて勢よく走つてた。自分は沈んだまゝ、月曜に寄つて公園へ歩を移した。

謝肉祭の頃になると町を流して來る藝人が多くなつた。私は或る夕方S町で十計りになる男の子が盲目の爺の手引しながら俗謡を唄ふのを聞いた。爺の高い張金のやうな細い——軟かな少年の胸が今にも裂け相な聲——それが總身の毛孔から心臓の方へ傳はつて身體を震はせた。私は思はず立停つた。小銭が方々の窓から往來の石に落ちて跳返つた。其翌日S町の南側の中程に黄色な貸間札が下つてゐるのを見付けて一通り見た丈けで直ぐ契約した。それから一週間もして、又元の氣輕な下宿生活に歸つた。デュリヤが出入してから二月、結婚してからこれ八年目だ。

七階と七階の間に挟まれた五六間幅のS町は狭苦しくつて薄暗かつた。それでも朝夕の日は壁の灰色の石に光を觸れた。日が高くなる

小序

有島生馬

わの藝術をわの情をわの希望でも、
正義も光明でもない、もし太陽の夜を多く、
佛に三つの不能があふ、来るべき蛇のめあつたり、
又月と涙の胃袋を、餓のあつたり、私を又、
おだた来をしようた、おありの不能ささ、
りしく、廣告にも精神商人が私の氣をいれ、
どろろ、不老不死な医術と、
何の言も麻痺が、私を一度、
あや道徳の完成や、人道社会と出現し、
私を心得る、あんのかけたことを、
私乃藝術を絶望的、
である、
驚異的、

私乃藝術を絶望的、
である、
驚異的、

リヤの方がもつと肥えて頬が赤く愛嬌があつた。さう比べてみると餘り似てはゐない。髪の色も栗色な事や目の葡萄のやうに青い事位しか共通な點はなかつた。尤も其頃はデユリヤに似た女をよく方々で見やうと思つたから、ナナとデユリヤの姿似も自分でさへ的にはしてゐなかつた。

ナナは毎時褐色の上着を着てゐた。夫れが色目な彼女に似合つた。時々鳩を籠から出してやる事があつた。袖をまくり上げた細々した少女らしい腕に搦まつて鳩が勢よく翼を擴げ飛び立ち相な風をした。すると羽根をそつと押へて小さな圓い頭を頬にすりつけて可愛がつた。鳩はくつくと鳴いて彼女の顰物になるのを喜んでゐるやうだつた。若しデユリヤの娘があつたら、あんなでもあらうかと思ふ時もあつた。ナナはやつと十五位に私の目にはみえた。

もうシロツコのやうな生温い南風が吹いて、堅く閉されてゐた窓も開かれ窓掛の間から内の中的生活が窺はれるやうになつた。ナナは四五人の娘達と一緒に大きな仕事室に向つて帽子作りに餘念がなかつた。月曜日の朝早くから、上曜日の遅くまで、又月曜から上曜の夕暮まで、彼女等は絶間なく他の帽子作り作る單調な月日を送つた。こんな閉居められた休息のない日々の生活を見ると、若い娘達を憐んでか、それとも自分自身を憐んでか、それも分らないやうな憐みを感じた。牢屋だ、内縛も外縛も、放たれるのも繋がるのも、自分のやうな氣樂な人間も、あの籠の鳥も皆んな同じ事だ。到る處の陰に息苦しいやうな束縛の隠れてゐるのが修く堪へがたく目に付くやうになつた。

町へ來てから朝はよくボルゲエゼ公園の牧場へ朝飯の代りに牛乳を飲みに出かけた。柵の上へ角のある首を乗せた牛が大きな滑かな舌で鼻を嘗めてゐる傍に、清酒な椅子テーブルが備へられ、搾りたての乳とパン、菓子などが散歩に來る客の爲に供されてゐた。或日曜の朝、確か四月三四日頃だつたと覚えてゐる、私は例の通り牛乳店を出てから公園の奥の方へ進んで行つた。大きな櫟の下に芝生が巴々たる草化を咲かせ始めたのは既に二月以來の事である。羅馬の草は一年中青々してゐると云つていい位である。細い砂利を混へた小徑は綺麗に掃除が出來てゐて、軟い朝の空氣も快かつた。私は少し下坂にかゝつて大きな帯のやうな窪地の傾斜に臨んで立つた。森蔭になつたその一帯の湿地は古くは小川でも流れてゐた跡かと思はれ

た。涸れ果てた流の跡には半圓形の礫堤や、古びた噴水が僅かにあちこち残つてゐた。大理石を積上げた噴水の土臺は朽ち、青苔の厚い衣で掩はれてゐる。その間に清水は滲み出るやうに湧いてゐる。苔藓のやうな草が一面に繁茂した部分もあつた。此谷に沿つて段々下つて行くと動物園から流れて來る瀧で一つの小川が出來、やがて丘の陰の沼に落ちてゐる。私は窪地へ下りて行つた。そこには見上げるやうな大木が澤山あつた、その枝の下から遠くに運動場が廣々と見えた。自転車に乗る人、フット・ボールを蹴る人、タムブレロといふ片面の太鼓のやうなものを右手に持つて球を打合ふ遊戯者等が豆のやうに走り廻るグラウンドの上に、一面に大きな日があつた。眞直ぐ窪地を覗きつて上ると天上の愛地上の愛などの名品が凝められてゐるゲキラ・ボルゲエゼの美術館が一軒寂し相に建つてゐる。私はそつちに行くのはやめて右に曲り窪地に沿つて次第に登つた。樹木はやつと新芽を吹き出した青りであつた。足下には枯葉が積重きなつて黒く朽ちてゐた。奥床しい一種の音の匂が周圍に充ちてゐる。私は腰でも下ろされ出る場所を求めゐる可成り長い間歩き廻つた。段々濕っぽい窪地

と屋根と屋根との間を斜にぎらぎらした日光が敷石の上にまでといた。然しほんの日盛の一時だった。比較的緯度の高い羅馬のこんな町では日中のいかに烈しく射す時でも陰はひやりと感じられた。

部屋にゐさへすれば私は往來を眺め、向側の壁を見、壁で隠されてゐる日常生活の喧嘩のやうなその窓を見て昏した。又靜かに耳を傾けてこの井戸の底に似た往來で起る音、その反響にまで注意を拂つた。物賣りの呼聲は段々近代から消え行きつゝあるものの一つであるが、伊太利では未だその詩的な習慣が残つてゐる。色彩の施してある荷馬車でアチエトオザ噴泉の櫛詰になつた飲料水を賣つて歩く、「アアクワアチエトザー！」と云ふ諸のやうな呼聲は愉快な波動を硝子に傳へた。私はいつもその呼聲で目を醒ました。ナポリの血のやうな蜜柑でも、紫緋の無果花でもかうして賣りに來た。すると高い五階六階の上から、小さな籠に錢を入れて下げてやる。それに相當するだけの果物が籠に盛られて。Va bene! の掛聲で綱が手繰られる。小さな籠が搖れ乍ら引上げられる。私はそんなことも子供のやうに眺め與じた。前の部屋では毎日々々同じやうに釘を打つてゐる。

仕立屋の亭主は朝から晩までミシンをがたがた云はせながら毎時も同じ場所に坐つてゐる。之等忍耐強い然も快活な人々の單調な生活を見ながら、自分も慰めの少い單調な日を送つてゐた。

私の日や平の友達になつて呉れたものは獨り部屋と仕立屋の二人にはとゞまらなかつた。尙ほ様々な役者が代るゝ狭い町の中に表はれてやゝもすれば考へ込む私を紛らして呉れた。夫れは人間計りとも限らなかつた。肉屋の大も、八百屋の鸚鵡も、六階の黒猫も、向ひの鳩も皆な私にとつては友達だつた。互に何一つ言葉交はすのでもなかつたから、神さん達が八百屋で油を賣つて行くのも、大の吠えるのも、洗濯屋の娘が一日中唄つて居るのも、乃至鸚鵡がババ、ママとけたましく囀るのも、私にはどうせ同じ事だつた。私のエゴイズムはかうして自分を相手から認められる事なしに、此町の諸々の物から慰安や友誼を受けつゝあつたのである。

私の部屋と同じ三階の、真向うの窓に鳩が一羽伺つてあつた。緑色の籠の中で聖樂のやうに眞白な鳥は末廣に似た尾を擴げたり、羽撃をしたり、玉を弄むやうな鳴聲をしたり、退屈な風

もせず日を送つてゐた。

朝自分の目醒める頃は籠は大概もう窓の外に置かれてゐた。弱い春の日はあたるも鳩は小さな頭を縮めて目を細くした。アヴェエマリあの鐘が鳴る頃には又部屋の中へ運ばれた。娘達が其間に代るゝ水や豆やパン等を入れてやつた。云ひ忘れたがそのアツパルタメントには帽子屋の一家族が住んでゐて、年久松といふ風な四五人の若々娘達が毎日通つて來てゐた。然し主に鳩の世話をしたり、日曜には濯を綺麗に洗つてやつたりするのは矢張り家の娘のナナであつた。

かの少娘が窓の所へ來て鳩に餌をやつたり、籠を揺ぶつたり、話をしかけたりしてゐると母親がいつも大きな聲でナナ! ナナ! と呼ぶので、直ぐ私は娘の名を覺えた。それにナナはどうかすると逃げて行つたデュリヤに似てゐると思ふ事があつた。それでなくともナナにしろ白鳩にしろ大切な私の友達だつたから、その名は假令一度聞いた丈けでも忘れて終ふやうな事はなかつたらうと思ふ。

ナナは恐ろしく色の白い権のある、どつちかといへば少し寂しい顔容の娘で、神經質らしく笑ふ事も少く、いつも眞面目腐つてゐた。デ

の見物を制してゐた。

二人が公園の外へ引立てられ、突倒されん許りにして連れて行かれた頃は、見物人も増えてゐた。誰れ一人この若い女の處置に嘲るやうな面持をしない者はゐなかつた。

「これは何んと云ふ十字架を擔つて蹣跚と行く光景だ！ いゝ加減にしてやればいいに、何處まで引張つて行く積りだらう。」私は興奮した。彼等の行列は公園の門を出ると直ぐもう見えなくなつた。入れちがひに數臺の馬車が這入つて來た。痛いやうな淋しいやうな胸から思はず溜息を漏して私は踵を廻した。

落ちつかないで、散歩もそこゝに毎時より早く町へ歸つた。午餉の支度をする焦げつくやうな油臭い臺所の煙が陰氣な町に漂つてゐた。私は殆ど本能的に鳩の籠を見上げた。鳩は日光を樂むやうに光を浴びて白く輝いてた。螺旋形の暗い梯子段を登り自分の部屋に入つて又向ひの鳩を眺めた。ナナの内の中は靜かで毎時と少しも異つた容子はなかつた。一刻も早く知らせてやり度いとは思つた。人の好きな兩親はどんなに驚き歎く事だらう。それにしてもどうして知らせよう、何んと云つたらいいものか、私は様々に狐疑し躊躇して居るう

ちに午になつた。午からは友人を訪問する約束があつた、午後は内にゐなかつた。

友人と別れたのは八時頃だつた。S町のどの窓にも燈火がついて、どの鐵戸も閉されてゐた。

ナナの窓許りが開いてゐて、鳩の籠がいつになく未だ窓の外に出た儘になつてゐた。今頃内では、どんなに取込んでゐるだらうと思つた。

十時過ぎだつた。鐵扉の掛金を徐かに外づして部屋から町の容子を眺めた。こちら側の屋根の上から蒼白い月光がさつと斜めに流れてゐて、深い谷のやうな町の底近くまで照らしてゐた。ナナの窓にも月光が射して死灰色の扉

はいつの間にか閉されてゐた。その窓は何事も知らないやうに冷かに眠入つてゐる。暗い街燈の陰を影法師のやうな人が折々通つて行く計り、寂しい感が町全體を支配してゐた。

私は、際に椅子をすゑ、燐のやうな月光と籠に包まれた影とが作つてゐる家と家と壁と壁との間の小天をいかに荒寥た寂寥なものと考えたらう。自分は限りのない孤獨を感じた。

屹立した斷崖のやうな向側の壁を染めてる月影は少しづつ形を變へて、春の夜は更けて行つた。若しやナナが अस 此の扉をあけて顔を出しはしまいか。彼の少年が अस 此の下へ來て口

笛でも吹きはしまいかなど、色々空想してみたが、どこの窓もどこの窓も寢返り一つ打たうともせず愈々深い昏睡の裡に沈んで行きつゝあるかのやうに見えた。

翌朝例によつて水賣りの呼聲で目を醒ました。私は直ぐ氣にしてナナの窓を見た。鳩の籠は未だ外に出てゐなかつた。ことに由つたら警察に拘留されたまゝ昨夜は歸らなかつたのだらうか。

顔を洗つて終つた頃、ナナが寢間着のまゝ鳥籠を持つて窓へ出て來た。

私はおやつと思つた。胸がどき／＼する程吃驚した。八年前のデュリヤが再び其處に表はれた……私は本當にさう思つた。

ナナは毎時より一層沈着に取澄してゐた。私の見てゐるのには一向氣附かない風を装つてゐた。(勿論昨日の事件を私が知つてゐようとは夢にも知るまいが)その眞面目腐つた貞操

の女神のやうな高慢な額附が私には餘り滑稽で悲しかった。然しナナの今朝位美しかった事もなかつた。

ナナは西色の髪を房々と双方の肩の上にさげて、淺黄の寢間着の廣い襟の間から蒼白い胸を露はしてゐた。——なうだ、デュリヤのあの時

を離れ、灌木の林へ来た。其處等には珍らしく鳥が鳴いてた程、閑寂な別天地であつた。

坐り心地のいい木の根を選んで新聞を讀みかけたまゝ、林を見てゐると、近頃になく晴々とした気分になつた。時間はないやうに寂かだつた。

その寂寞を破つて突然頭の上に聲音が聞えた。私の陣取つた直ぐ背後には一つの低い土堤が築かれてゐて前の窪地の方しか見る事は出来なかつたのだ。その土堤の上へ一人の少年が飛び上つて私を驚ろかしたのであつた。然しその少年は私より一層驚ろいたもののやうにこつちをみて顔を凝くしながら直ぐ又土堤の裏に飛び下りて隠れて終つた。

少年は十六七でもあらうか、枯のついた白カラアなどせず、職人か何かのやうに縞のある布で二巻程頸を巻いて前で襟飾りのやうにその端を結んでゐた。希臘風な輪廓の正しい顔容はすぐ私の美術心をそゝつた。彼は神話中の人物かなんどのやうな印象を、薄暗い森の中に残して置いて消えて終つた。少年の皮膚の色艶や活々とした動作が私の胸に考へられたと云ふより、見てゐるやうに尙ほ目に浮んでゐた。森は静かだつた。何気なく自分の手を出して指を動かしてみた。四十といふ年齢は明かに皮膚や飛

び出てゐる血管に醜く刻まれてゐた。私はデユリヤの手の柔かで白かつた事や、その指に嵌つてゐた指環の形などを思ひ出した。青春を妬む心が憐れむべき自分に起つてきた。

私はもう一度今の少年を見たいと思つた。

徐かに土堤に近寄つてその上から頭を出してみた。其處は牧場の續きで、林も極めて浅く、遠くを行く馬車の響も聞え相に思はれた。これは全く意外だつた。然し私はそれ以上驚くべきものを見て殆んど倒れようとした。

私の目の下の雑木と草の間に二人の少年少女がゐた。木の葉を透して男の横顔のみが見られた。男は今の少年だつた。彼は相手の少女の額に臆病らしく接吻をしてゐた。

私は眩暈を感じた。その感動は今でも明かに解部してゐる事は出来ないが、何か神秘的なものだつた。

いつの間にか草の上に坐つてゐた私は間もなく立上つたが再び土堤へ近づくやうともしない代り、枯葉をがさ／＼云はせて其處から立去るにも忍びなかつた。新聞の上に無數の黒い線を唯だ茫然と見詰めてゐた。

ものの十分も過ぎた頃と思ふ、鋭い譴責の叫聲に愕然として私は再び我に歸つた。思はず

土堤の方へ行つてみた。土堤の下には憲兵が二人、白い革帶で劔を下げて立つてゐた。その一人が少年の肩に手をかけ怒鳴りながら小突き廻した。憐れな少年は土氣色になつておどろしなから顔に口もきけずゐる。襟飾りが解けて房々した髪の色が白い額に亂れた様子が私の心を傷けた。

少女は草の上に打伏せになつたまゝ泣いてゐた。私はそれを凝視するに忍びない氣がした。その意地の悪い憲兵が又少女に近寄つて無雜作に引起さうとした。彼女は目に腕をあてたまゝ身體を擡げた。

どうです、それが間違ひのないナナだつた。私の息は詰つて終つた。

憲兵は二人の住所や姓名を訊問し、鉛筆を動かしながら一々それを手帳へ書きつけた。ナナの青ざめた頬には後から後から涙が雨のやうに止度なく流れた。

今度又けは許すから、直ぐ歸れと先刻もあれ程云渡して置いたのに、又こんな不始末を仕出かすとは怪しからん、もう許されない一緒に警察まで来い。」と左も大事件でもあるかのやうに怒鳴り散らしてゐる。年をとつた方の憲兵は流石に憐愍の情を表はして、近寄らうとする二

美 少 年

彼は質に綺麗な青年であつた。

彼の事を回顧する時には、必ずその美貌も思ひ出さない事はない。彼の瞳眸は澄んだ青い葡萄色にも見えたり、或時はその裡に褐色の斑點を見たやうにも記憶してゐる。金色の髪を額の真中で左右へ分けて古い畫にある美術家のやうに長く伸ばしてゐた。それが又よく似合つて、一度でも自分に不自然な不快な感を起させた事がなかつた。

彼はよく帽子を脱いで手に持ったまゝ歩いてゐた。或時は日光がその軟い毛に輝いた。或時は風が來て分けた毛を散らした。そんな細い記憶まで心に彼を呼び起す種になるのであるが、寫眞を出して見ると却つて遠く彼は去つて終ふやうな心地がされる。寫眞は恐ろしく怖い顔にとれてゐる。少女のやうな皮膚の色艶と魅力とは皆んな消えてゐる。眞赤な細い唇は一字に堅く締つて、眉までも、眉手でも、頤でも、悉く彼の激しい意志の権化としかみえない。長くこの肖像を視詰めてゐると青年とは云

はれなくなる。彼の初々しい屈託のない少年らしき、時によれば處女のやうな柔和と優美な表情は影をかくし、默思する彼、叛逆者然に彼が鮮かに寫つてゐる。寫眞の彼は若い、既に成熟した人であつた。

七月の初必要があつて書架から解剖圖を取出し、座を拂つて書室へ持つて來た。此解剖圖は「Mittelschul-Buchhaltung」と云ふ大冊の一部で、實は自分も此表題を何んと發音すべきものか、又何んといふ字義であるか全く知らない。此本は油土と繪具と手垢で酷く占びてゐる。その油土と繪具の匂ひを嗅いで、憶出したのはやはり羅馬の裏町にあつた彼れの借り間の有様であつた。同書はテリエヌツキ・カルマンといふ博士の著で、洪牙利語で書かれた藝用解剖學として名高いものである。自分は暑い書室の中でこの解剖圖をひっくり返しながら、別れて久しい彼の事を考へた。繪具の散らかつた机の上には紫陽花が重い頭を傾けて、あの寂しい青い色で自分の瞑想する無形の道を明るくして

呉れた。

それから二週間程後である、ある朝思ひがけなくも洪牙利「Nemecy」の「Erdsegeal」といふ町から一通の書留郵便を受け取つた。差出人は Antoine Shina-Wan'szky といふので勿論自分が彼と呼んで來た青年の事である。八年目で突然彼の消息を得てどんなに喜んだらう。況して彼は常にかう云つてゐた。僕から渡りのない間は元氣で居るのだと思つて呉れ。若し死ぬ時或は死んだ時はきつと報知が行くと。彼から便りがあつた、而して夫れは死の通知ではなかつた。自分は一日中機嫌がよかつた。再びかの解剖書や寫眞を出して見た。手紙はやつと意味が通じる詩りの滅茶苦茶な伊太利語で書かれてゐた。自分丈けには様々な回顧を起させ興奮に供するものが潜んでゐるのであるが、他人に取つては至つて平凡な手紙にちがひない。大略左の通りである。

お前へ生れ故郷でどうして暮してゐる。お前の故郷の有様は幾度も／＼俺の老へあぐんだ事だ。手紙を出したいと思ひながら宛名を失つて終つて、それも心に任せなかつた。でも封筒に書いたやうな番地を

の面影に宛然だ！

デユリヤと私が識合になつたのはモンテ・カッテナといふ山の温泉場での事であつた。私は其夏一月計り彼女と一つホテルで暮して深く愛するやうになつた。周囲の事情も先づ申分がなかつた。夫れに拘らず結婚といふ最後の決心がいつまでもつかかつたのには一つの原因があつた。信賴してゐた友達が彼女の貞操に關して或る警告をして呉れたからであつた。

八月二十一日の夕方だつたと記憶してゐる。

突然公使からの電報で直ぐ羅馬へ歸らねばならなくなつた。其晩デユリヤの監督者だつた伯母さんの許可を得て、二人は長い散歩をしながら結婚問題に就いて話し合つた。利にどうしても解けない一つの謎、暗い所があつた。デユリヤは又それを解かうとして呉れなかつた。吾々は悲しい心に充たされたまゝ、冷い握手を交はして彼女の部屋の扉の前で別れた。私は一晩悶えて結婚を斷然思ひ切らうと決心した。

一番に乘らうと思つた私は未だ鶏の鳴かない内から荷造りを終つて馬車の來るのを待つてゐた。やがて馬の嘶を遠方に聞いた。もう永久に彼女と別れる時が來た。下男は蠟燭を片手に荷物を運搬しに來た。馬は鬣を振ひながら歩

き出した。ホテルの玄関から山道の房へ曲るとデユリヤの部屋の窓があつた。

「伯母さんに知れないやうに明朝はきつと御見送りをお願いしますから、私の窓を忘れないで見て下さい。」前夜彼女が云つた。私は約束通りその部屋の窓を見上げた。デユリヤは夜中一睡も出ななかつたやうな姿で、悲しげに窓際に立つてゐた。其寂しい彼女の寢間着姿は實に美しかつた。嘗て感じた事のないやうな誘惑と憧憬が其時から形そのまゝで私の胸に宿つた。妙なものでそれから後はデユリヤの事を考へると毎時際立つて眞剣な氣高かつた其瞬間の面影しか目に浮んで來なくなつた。而して再び彼女の純潔と貞操を疑ふまいと決心した。運命は遂に羅馬で其冬の十二月吾々を結婚させた。然し彼女は既に處女でなかつた。

ナナが鳥籠を持つて窓に表はれた時、八年前モンテ・カッテナのホテルの窓で朝早く私を見送つて呉れたデユリヤの再現を見た。二人は似てゐたのではない。全く同じだつたのだ。かう云つたら人は笑ふかもしれないが、私には決して笑ふ事の出來ない決して忘れる事の出來ない苦い實驗だつた。

程なくS町からピンチョの岸の上へ私は居

を移す事にした。その窓の前にはもう窓はなく、唯無數の屋根瓦が河原の石のやうに目の下に展けて見える計りであつた。(終)

又どれほどの人達が海に來て友と呼びかけたか知れない。

山に向つて云はれないこの言葉も、海に向つては容易に云ふのが常だ。海は人性を含み、山は神性を含んでゐる。

海は滑かで動く。所寄り、慕ひ、話しかける。觸れようとし、逃げようとする、

子供や犬も海をみると戯れずには置かない。

『白夜雨後の海より』

暑は中々衰へないと云ふのに、此處では涼し過ぎるやうな夜が屢々あつた。來て程なく全歐の大亂が持ち上つた。夢想さへ許されなかつた空前の戰禍は列強諸國及びそれに近接した小國を皆な呑込んで終つた。次で東洋まで飛火が及んだ。其頃になつても此高地の紫陽花は未だ生き残つてゐる。古寺の書院から湖を眺め、紫陽花を眺め、日々新聞の戰報に接し、自分は未だにヴァンベルスキイへの返事を投函せずに置いた事を悔いた。この形勢では郵便物の運命は計り知る事が出来ない。殊に獨、塊、洪への郵便電報は杜絶の有様ではあるまいか？

彼は故郷を簡愛してゐたが、夫れは洪牙利を意味するので、塊地利と獨逸には癒し難い反感を持つてゐた。若し洪牙利が塊國から獨立する義戰でもあつたらう、彼は先鋒軍たるを敢て辭さなかつたらう、然し今度のやうな無名の惡争に加はるのは必ず彼の本意ではあるまい。獨逸では既に十七歳から四十五歳までの國民軍の召集を行つたといふ。不本意ながら彼も何れ從軍せねばなるまい。不本意で從軍する彼は不幸である。若し嫌や／＼不本意な義務に服し、不本意な戰死でもする事があるとすれば尙更ら不幸だ。計らず彼の消息を受取つて喜んでか

らまだ幾日もたないのに、忽ちヴァンベルスキイの身上に一大異變が過つて來ようとは有爲轉變の世の中だ。彼の手紙の突然到着した事も今となれば却つて氣掛りになる。友情とか愛情とか云ふ事は一種ミステックなもののだ。之が悪い前兆にならないと誰れが保證して呉れる事が出來よう。彼の所謂死ぬ時、或は死んだ時が近づきつゝあるのではないか？ 今や彼は砲火と硝煙に包まれたまゝ一日々自分の視線から遠ざかつて行くやうな心細さを感じずに居られない。屍骸の山を想像に描いてゐる、微笑しつゝある澄みきつた彼の緑の目をそこへ並べてみる。自分は靜寂な湖畔に坐しながら烈しい砲聲を耳にする心地になれる。

こゝに幽かな裡から消えかゝつた彼の記憶を喚び起して書き添へてみよう。

羅馬ウケリーヤ・リペッタにある國立美術學校で初めて彼と識り合ひになつた。

初め自分は某伯爵夫人の個人的な一通の紹介で、ビンチヨの丘にある佛國アカデミーへ出入を許して貰つた。其處で逢つた友達が美術學校の自由教室の事を自分に話した。其組織など

を色々聞いて居るうちに自分も通學してみた。氣になつた。今度は其頃アカデミーの校長だつたカロリユス・デュラン氏から紹介して貰つて、美術學校へ行つた。何の面倒もなく一片の形式だけで直ぐ通學を許された。自分は此簡便に至つて重寶に考へ自由な氣風を嬉しく思つた。

自由教室と云ふのは美術學校の一部に設けてある撰科で、朝から晩までモデルが來て立つて居るのを、生徒は自由勝手に研究する所である。同一の姿勢は一週間つゞく。先生は一人も居ない。試験は受けたいと思つた時勝手に製作を教授會議に提出する事が出来る。然しそれは是非提出せねばならぬのではない。又其他の附屬課目も選擇が自由であるから、當時評判のよかつた解剖學の實習か古代陶案の講義位にしか、特別な生徒でなければ出席する者はなかつた。さう云ふ風だから生徒の種類も雜多で、長い間修業を積んだ者、未だほんの初歩の者、雜然と混つてゐた。

聖天使城附近のテヴェレの河岸に沿つて行く、甬道で張つた半圓形の素敵に大きな屋根が民家の上に屹然と聳えてゐる。夫れが自由教場の屋根である。十一月も末の曇つた日、守衛に連れられて、その屋根の下に立つた時の事は忘

考へ出してみた。或は此手紙がお前の手に届くかもしれない。(彼の發明にかゝる不思議な番用でも幸ひに判着はしたか) 愛する友よ、

善い手紙を書いてお呉れ。伊太利語は既に吾々二人にとっては困難な言葉にちがひないが、吾々にはこの不完全な言葉で心を通じ合ふより仕方がない。お前は どうして暮してゐる。お前の夫人はどうだ。(結婚の通知は彼の手は無事に着いて居たものとみえる) お父さんやお母さんもお變りないか。俺の爺は一年前に死んだ。俺は一度伯林のフリドリヒ街で若い日本人に會つて、お前の事を尋ねた事があつた。其人は直接お前を知らなかつたが、お前の作品を知つてゐた。名は覚えてゐないが、何んでも遊學生であるらしかつた。

何か報知して呉れないか。愛する友よ、一體お前の故郷はどう云ふ風になつて行くのだ。

俺の境遇は今はいま。羅馬で別れてから、獨逸、佛蘭西、露西亞、ペルシャ、ヒンドスタン、アフリカ等を無暗に旅行して歩いて、多く／＼學ぶ所があつた。今後兩三年の内には日本までの旅を企ててゐる。

日本に藝術を見る事は大きな楽しみ一つである。

二三日うちに三四枚の繪葉書を發送しよう。

去らば愛する友よ、毎時／＼元氣でお呉れ。お前の家庭も幸福であれ。

親愛なる洪牙利の友、

追信。シェベックは三四年前に死んだ相だ、五ヶ月前初めてシドロから聞いた。ウブラジン、カニツキ、ベンジヤンスキイ等の消息はその後聞かない。モギンは半年許り前自殺した、夫れを新聞でみた。

手紙の内に捕捉し難い空想や、情熱を見る事が出来ないのは物足りない。でも……露西亞、ペルシャ、ヒンドスタン、アフリカ等を無暗に旅行して歩いて、多く／＼學ぶ所があつた……と云ふ一行はまさ／＼彼の風格を忍ばせてゐる。自分は此行を繰り返して微笑せずにはゐられなかつた。遺傳的本能的な放浪生活、ボヘミアン流儀をよく發揮してゐた。彼の友達の間には様々の變化があつたらしい。又八年と云へば有つても不思議ではない。然しヴァンペルス

キイの一身には大した變化もなかつたやうにみえた。放浪は彼にとつて決して變化と稱する事は出来ない、却つて夫れが常態である。唯だ自分の知つてゐた彼は Antine Wendersky と名乗つてゐたのに、今度の手紙には Antoinette Wendersky となつてゐる。彼は素敵な日本の憧憬者である、或は其名を日本化する爲に——日本人の或者が其姓名を交配化したり、歐洲化したりするやうに、——したのではないだらうかと考へた。

今年の夏はどうしたものか、紫陽花が七而鳥のやうに様々の色を見せない内に、褪色して早く枯死して終つた。雨が少く暑氣は日々烈しくなつて来て、人の胃と頭を饑らせた。

手紙から一週間おくれて出した一枚の繪葉書が到着した。それは手紙に約束してあつたものの一つなのであらう。四年前に描いたと云ふ可成り大きな油繪の複寫で、寺院の前に立てる洪牙利人と云ふ題で老爺が一人、女の子が二人かいてあつた。自分は又彼の事を考へさせられた。彼の藝術やその發展についても考へさせられた。この繪には單に "him" としか署名してなかつた。

八月早々何十年來にないと云ふ暑を避けて自分は或る高山の麓の湖畔へ來た。東京の炎

れて、風のやうに軽く飄々然と形容すべき形で自分の傍を通り過ぎたとき、男だつたかと思つた。彼はめつたに人と話さなかつた。方々の群に立混つて暫時話を聞いて居るかと思ふと、例の飄然たる姿で餘所へ行つて終つた。彼は守衛の机に身體を載せかけて、頬杖などして守衛をからかつたりしてゐた。

二三週経つ間に、彼がいつも自分に對して細い注意を拂ひつゝある事に氣附き出した。彼の薔薇色の頬はぢきに赤くなりやすかつた。遠くの方から自分を視てゐる時、何氣なく彼の視線と自分の視線が相逢ふと、少し狼狽したやうに顔を赤くし、双手をかくしに入れたまゝ、其處を徐かに歩き出して終つた。

ある日食後の休みに、人氣の少くなつて椅子許り目立つ畫室の中で、自分は日本から來た手紙を讀んでゐた。何時の間にか彼が自分の傍に立つてゐたのを知らなかつた。手紙を讀み終ると彼は憤まじやかな、然も強い親みの力を自分にあげびかけて微笑んだ。至つて低く、不思議な伊太利語で話しかけた。

彼も多くの人と同じやうに、極く平凡な質問から初めた。日本の文字は上から下へ、右から左へ書くのだと云ふやうな事を説明しなければならなかつた。唯だ彼の質問には恐ろしく熱心な所があつて、其奥底に何者があるやうな感じが通つて來た。彼は日本語に就いて少し學びたい、これは久しい間の夢想であつたのだから許して呉れと繰り返し繰り返し云つた。

モデルが這入つて來た。小使が石炭を煖爐に投込んで行つた。學生が段々増えて來た。彼は又飄然と自分の傍を去つて終つた。

大れから二人は休憩時間とか、描き厭きた時とかに時々話し合つた。彼は穴の明く程自分の日だの皮膚だのを凝視して、何か神祕なる發明をしたやうに驚く事があつた。たつた一つの日でもほんとによく見た時は、どんなに美妙なものだらうか、そんな事を云つた。元來彼は必ず毎日朝から夕方まで學校へ來てゐたが實際に筆を持つて描いてゐる間は少なかつた。大概そこらをぶら／＼歩き廻つてゐた。若しくはボケツトから小さな本を出して熱心に讀んで居た。然し大れも二十分とは長く續かなかつた。彼の話は馬鹿々々しい程子供らしい所があつた、大れに拘らず何んとなく單位の異つた所があつた。歐羅巴は皆んな悪い人間許りだから、今に日本を取つて終ふ積りであるのだ。私だけが夫れを知つてゐるので、お前にそつと話してやるのだ

とか、聖書は餘り誰れでも讀む本で、讀んだ者は皆んな略ぼ同じ考へにならなければ止まない。丁度自然科學の平凡に似てゐる。今度出て來る偉人は聖書を讀んだ事のない人でなければならぬとか、こんな風な突飛な事を眞面目腐つて云つた。然し其底に言葉以外の或るものが何となく暗示されつゝある趣があつた。

一日吾々は放課後から聖ピエトロ學院へ行つた。入つてそこを暫時眺めたと思ふと、もう歸らうと袖を引張る。つまらない御寺だ、見ない方がいゝと云ふ。お前はよく見た事があるのかと聞いたら、初めて來たのだが、こんな寺は見ない方がいゝと無理に自分を引張つて外に出てしまつた。彼はいかなる記念物や美術品に對しても、多く興味を動かさなかつたやうに見えた。或は自分に其の感動を轉して居たのかもしれない。一度カペラ、システイナを見に行かうと云つたら、言葉左右に託してとうとう行かうとしなかつた。

或る週間には裸體の男が腰をかけて地面に何か書いて居るやうな姿勢が題であつた。其時初めて彼の素顔を見た、――毎時も彼は描いては消し、描いては消して、形の見える程描きつゞけた事がなかつたからだ――バックを眞白

れない。流石廣い室内も二つの大きな燐燐と人いきれとで蒸暑く、油、テレピン油、書用のパンの酸い匂等で息苦しく思はれた。百人餘の生徒は圓心に近い位置に立つた一人の嚴丈な裸體の女を幾重にも取巻いて、畫架をする、こゝは他の領分だと云はぬ許りに陣を張つてゐる。

一方の隅では二人づつ集まつて話合つてゐる。一方の隅では一人の女學生を四五人の男が取巻いてゐる。椅子に坐つて居るもの、立つて居るもの、笑つて居るもの、議論に花を咲かせて居るもの、やかましいと怒鳴るもの、餘り遠いので双眼鏡をもつてモデルの細部を研究しながら筆をとつてゐるもの、實に殺風景で小戰場の有様だ。

幸ひ自分が此室に這入つたのを多數の學生は氣附かずにゐた。然し入口に沿つて座を占めて居た人々は珍らし相に自分を見て私語した。此廣い、やかましい教室になれるため、一隅の椅子に座を占めて見てゐると段々自分を見物する人が増えて來た。巴里などちがつて日本人の少い土地柄ではあるし、日露戦争の有難迷惑な御蔭もあつたりして、止むを得ないがいゝ心持はしなかつた。

モデルは一時間のうち四十五分立つて、十五

分づつ休憩するのであつた。モデル臺の上に大きな時計があつて、時刻が來ると、方々から時間だ「時間だ」と怒鳴る。モデルは臺を下りて燐燐に近づいて休息した。

休憩時間の度に見物人が段々増えて來た。又自分を此畫室に誘つた青年が矢鱈と人々に紹介した。自分は休憩時間がなければいゝと思つた。然しこんな一種の刑罰もさう長くは續くまいと自ら慰めてゐた。

モデルが臺に登つたり、降りたりしてゐる間に時間がたつた。左うして又た日が終ち、週が變つて行つた。次の週には六十位の老爺が白いトオガを着て、演説でもするやうな姿勢でモデル臺に立つた。その次の週は又女のモデルであつた。モデルの多くは純粹な羅馬人が選ばれた。そのクラシツクな莊重な骨格と適度な肉附きとは總ての外國人を驚ろかした。齊均の正しい優良な人種と云ふ事はどのモデルも皆な個性を失はずに、然も共通して具へてゐた。段々自分にも羅馬人その他の地方の人との相違などが判るやうになつた。學生等は又東洋種の自分に慣れたと見えて、段々好奇心を失つて來た。漸くほんとに相手になり得べき人々が残つた。此時一人のポオランドの娘と、ヴァンベルス

キイとが日についた。圓顔の小じんまりと肥つた娘は眞赤な上衣など着て、毎時でも快活に笑つて、誰れにでも直ぐ身體をすりつけるやうにして話をした。他の多くの女學生が威權を保つて身のまはりに一種の峙を設けて居るのと異つて、いかにも無難作であつた。此無難作がその容貌以上に多くの男を引つけた。或人は淫賣だとも云つた、夫れは少し酷評であらうが、一寸そんな感の娘であつた。或時四人の學生が此娘をとりまいて話してゐるのを聞いた。

私は昨夜大使の夢を見た。その中で一番綺麗な女は天使が貴女でした。こんな告白を人の前で眞面目腐つてする男も男、それを平氣で笑つて聞いてゐる娘も娘だと思ふ事もあつた。此娘とヴァンベルスキの容貌がどことなく似てゐた。

ヴァンベルスキイと云ふ青年は自席にちつとして居られないで、よく足音のしないやうに徐かに畫室の隅々や廊下の方まで歩き廻る癖があつた。初めて人と人の間から彼の首だけ見た時は、少女だと思つた。彼はやつと十八歳位でもあつたらう。長い金髪を紺色の頭巾で更かくしてゐた。彼が双の手をズボンのかくしに挿入

が何等ヴァンベルスキイの才能を認める事が出
来ずに居るのも、よく知つてゐる。唯だヴァン
ベルスキイが二人に對して何んとも思つてゐな
いのが面白く思へた。

同國人の中でヴァンベルスキイの重きを置いてゐたらうと思ふ人物は、ウブラジンと云ふ猛な青年であつた。彼は身丈け六尺以上もあるらうかと思はれた。腕力で彼にかなひ相な男は畫室に一人も居なかつた。彼は毎日銀座のやうなコルソの通りを片手にバジを持ち、片手に林檎を持つて、交るゝ嘸りつゝ眞直ぐに上を見たまふ、素敵な勢で歩いて來た、するとちやんと頭丈けが群集の上に聳えてゐた。彼は毎週大きな畫布を畫室に持ち込んで來て、二三人ぶりの座席を一人で占領し、傍若無人に振まつた。然しその藝術は徒らに粗大で、ヴァンベルスキイの敵ではなかつた。二人は仲よき相に見えた。並んで往來を歩いてゐると、片方は大地を踏碎きさうに風を起し、虎のやうに歩いて行く。ヴァンベルスキイはこれに反し小男で彼の身長半分にみえた、煙か霞のやうに輕く、ウブラジンに撥かれて行くかと思へた。人はウブラジンをレオネ（獅子）と綽名し、ヴァンベルスキイをアンゼエルツチョ、マレデツト

と呼んだ。マレデットは呪はれたの義で、アンゼエルツォは同じ天使でもいたづら者の天使である。多くの羅馬の女は餘り長く彼の通り過ぎるのを眺めた。

ふゆす 冬休みの前、二十四日の晩はモギンの畫室に
あつて、降誕祭を祝ふ約束をした。此集合は
集まつて、降誕祭を祝ふ約束をした。此集合は
ハガリリに、
洪牙利人許りであつたが、自分も特に招かれた。
それはヴァンベルスキイの解釋に従へば、日
ほんじん ハガリリに 日本人も同じ人種であるからだといふ
のだ。これは一般に洪牙利人が日本人に對する
感情であるらしかつた。

其後彼の日本語研究は中々歩を進めた。日本語と洪牙利語との比較に趣味を持つて居たので、共通な文典共通な語源を見出すや手を拍つて喜んだ。彼は棒に刻まれて保存されて居るといふ洪牙利古語も多少識つてゐるらしかった。今は皆んな忘れて終つたが、日本語で水をミツ若しくはアカと云ふが、ミツが純粹の日本語である事も彼を喜ばせたと思へてゐる。降誕祭の夜、家で夜食を済せカンピドリヨの丘に近いモギンの書室へ向つた。恐ろしく暗い晩で、北風が寒かつたから、外套の襟を立てて急ぎ足で歩いて行つた。勿論初めて行く家なので暗くはあるし、困つたと思つた。穢い貧乏町

で道がごとくしてゐた。二三度往來の人に尋ねて段々近い番地になつた、すると薄暗い街燈のかげにぼんやり立つてゐる人がある。夫れはヴァンベルスキイで、自分待つてゐて呉れたのであつた。彼は外套も着ず、手まで水のやうになつてゐた。かくとも知らず定刻からおくれて行つた自分を取つた。彼は穢い露路を幾つも折れ曲つて、狭い階段を登つて行つた。

先に立つた彼は四階のある扉を叩いて、妙な言葉で云つた。――
言葉は二言三言云つたと思ふと、暗い廊下に赤い光線と強い油や、大蒜の匂が、白い煙と共に溢れ出た。室内は朦朧と見えた。

彼等は總立ちになつて吾々を迎へた。生暖い室内で、上衣を脱いで歌を唄ひながら、食物を作りつゝあつたのだ。二時間も前に出来る筈のものが木だ出来ないと、鍋を手に持ったシェバツクが云つた。ベンジヤンスキイは肉汁を掻きまはしつゝあつた。カニツキは机を出したりパンを切つたりした。モギンは石炭をつぎ皿を洗つた。獅子のウブラジンは來なかつた。彼は政府の留學生で、有名なバラツオ・ペネチアなる建物内にある、埃汚國大使館の晝室に寄宿して居たので、其方の會合に行かなければならぬからであつたらう。

にして、裸體を眞黒に描いてあつたが、自分は一見してこれがヴンペルスキイのやうな少年の手になつたものであらうかと思つた。次の週間には畫室の中にこんな描法を試みる者が急に澤山出來た。

間もなく彼は眞黒なバックの上に、大理石のやうに白い女を見事に描き上げた。模倣した學生等は目を見張つて驚いた。自分がその畫を賣めたらば、こんな者は餘り役に立たないと答へた。而して陰と光、調子、姿勢などの研究は澤山だ、今はもつとモデルそのものを研究したいと云つた。其後彼は寸法許し氣にして、夫れが爲め自分で様々な構式を作り、彫刻に用ゆる機械を使つてみた。りした。

彼の束縛し難い空想は彼をして神祕を愛さしめたかと思ふ。彼が常にポケットに秘めて愛讀してゐた小形な本は、何んとか云ふ洪牙利の星學者の哲學書だと聞いた事があつた。又彼は絶間なく放浪の空想を目で見るやうに設計してゐた。

或午休みに、自分は獨りで解剖學教室の廊下を往來して、午後の始業を待つてゐた。突然大聲で争ひながら二三人が近づいて來るのであつた。

ほら居た！

彫刻家のシェベックが、下手な畫家のベンジャンスキイの肩を叩いて云つた。ベンジャンスキイは尙ほ大聲で争つてゐた。もう一人はヴァンペルスキイで、黙つて二人の争を笑つてゐた。自分は何とはなしに動悸がした。

何んだ？ 何があつたんだ？

と訊いても、ヴァンペルスキイは答へない。

シェベックとベンジャンスキイは益々大聲で手まねを混へ、洪牙利語の荒い發音で争つてゐる。ヴァンペルスキイはもうおき降誕祭がある、二十三日から學校は休暇になる、そんな事を話しながら畫室の方に歩いて行つた。教室でシェベックを捕へた。自分はその事が矢張り氣にかつて居たのだ。シェベックは吾々からみるとずうと年上な、正直な、地味な、賢くない、既に勞れてゐると云ふ風の彫刻家で、ヴァンペルスキイのやうに貧しかつた。

何んだ？ どうしたんだつた？

正直な彼は未だ興奮してゐるやうに、毎時にも似ず高聲で次の話をした。

吾々がコルソの通りを歩いて來た、するとヴァンペルスキイが急に立停つて、學校の門の前で葡萄酒を積んだ馬車が倒れてゐて、酒が流

れてゐる。門を這入つて左側の廊下を日本人が散歩してゐると云つた。僕はヴァンペルスキイが豫言するのをよく知つてゐる。彼は優れたメディウムである。吾々はスピリティズムの信者であるが、ベンジャンスキイは少しも夫れを信じない。吾々が賤をしたのだ。二つの豫言がちゃんと當つてゐるのに、ベンジャンスキイは未だ何んのかのと云張つてゐる。恥知らずだ。彼は急に聲を低くして、

ヴァンペルスキイは天才だ。お前さう思はないか？

ヴァンペルスキイが天才だつて……ヴァンペルスキイが……あは……

と何時の間にか近寄つて來てゐたベンジャンスキイはシェベックを冷笑した。シェベックは手に持つてゐた木版を床に叩きつけて、椅子から立上り、ベンジャンスキイに喰つてかゝつた。喧嘩でもし相な勢であつたが、多勢が口笛を鳴らし、「戸外へ」「戸外へ」と制したので、二人は殘念相に黙つて終つた。ヴァンペルスキイは遠くから此有様を見て一寸肩を上げ、可愛らしく笑つた。

自分はシェベックが神様のやうにヴァンペルスキイを崇拜して居るのも、ベンジャンスキイ

果てゐた。そんな時彼は急に饒舌になつた。ペレグリンを着た身體を氷つた石壁にもたせて、東南東北に互る無邊無量の星界を眺め、得意な天文の祕密を説いた。彼にとつて様々な不思議や、奇説は空想ではなく、實在であつた。天界を地上に引下げて来ようとは彼の野心ではなかつた。獨り地上を離れて、空想界に赴くのが生れながらの傾向で欲望であつた。彼は亦「過去」を落した人のやうに、嘗て夫れを思出した事がなかつた。自分は、彼が私生兒で、大工の小僧、寺院の小坊主、芝居の子役などをして來た事があると聞いた許りだ。過去には餘り現實の苦味が残つてゐて、彼を苦しめ悲めたらう、又彼の未來には過去の經驗を役に立てる事が出来なかつた。彼は未來と創造と空想とを混同してゐた。避け得るだけ彼は現實を避けて通つた。現實の世界が彼の裡に増長するのは、精神的に彼が壓迫を蒙る事であつた。このうち何れかの世界を選び、そこに彼は本能的の燃えるまま活きねばならなかつた。彼は現實を超過したとも云へる、又進んで現實を蹂躪したとも云へる。弱者とも云へる、強者とも云へる。彼が所謂文明に對して甚だ冷淡だつたのも、文明を敵とし、反文明主義に與したのではない。唯だ

此物質の推移が彼の住む世界に何等大きな影響を及ぼし得なかつたに過ぎない。

ヴァンベルスキイは星座の刻々變つて行くのを指して、動いて居ると云つた。動いて居ると云ふのは吾々のいふ星の運行の意味ではなかつた。この静止して居るやうな地球が動きつゝあるのを感じると云ふのであつた。もつとびつたり云へば吾々は飄々として天空を歩む時の歡樂と美妙な調和を親しく感じ得るではないかと云ふのであつた。彼の世界は感ずる世界だつた。實在世界の識るといふ言葉は價值がなかつた。實際彼は空漠な事象に對して鋭敏な感觸を備へてゐたやうにみえた。感じて震へた。待ちあぐんだ人々が段々散り初めた。狐につまゝれたやうな話だが、今夜當院に彌撒はありやしないといふ流言が耳から耳へ傳はつた。一人去り二人去り群集は残り少くなつた。眞夜中の淋しい等の前に、百、二百の人が無意味に集まり、又無意味に散つた譯だ。唯だ其處に一種群集の氣分が生れた。地味な複雑な一幕が演じられたやうに思へた。吾々も歩き出した。ヴァンベルスキイは再びモギンの畫室へ歸ると云つて別れた。

白な石段は、龍宮の内部にあつたとしてもふさはしいものだ。冬休が二四日たつた或朝、朝日の漲つてゐるその石段へ來た。羅馬の限らない寺々が青い空に判然と浮んでゐた。廣場には花屋が露店を張つて居る。チョチャラと呼ばれてゐる田舎の少女等が、色彩の特殊な服を着、白手拭を四角に折つて頭に載せ、外國人と見れば花束の押賣りをしてゐる。賑かな往來を二つ三つ横斷すると、書生と淫賣婦の集窟だといふごちや／＼した町へ出た。

ヴァンベルスキイはその町で間借りをしてゐた。彼の家の前の肉屋には生々しい豚や、羊や、山羊の屍が丸のまゝ逆さに吊るしてあつた。窓の下に立つてその名を呼んでみた。彼は中二階のやうな部屋を借りてゐたのだ。

ヴァンベルスキイは忽ち顔を出して、手眞似で上へ云つた、

小さな部屋は寢臺と箆筒だけでもう一杯だつた。一脚の椅子一脚の机さへない。部屋に居れば彼は立つてゐるか寝てゐた。この狭い室内で彫刻を初めてゐた。休中に仕上げて終ひたといふ云つた。それは洪沙利政府が懸賞で何んとか云ふ有名な老政治家の記念碑を募つたのに應じる積りでかゝつてゐたのである。唯つた一枚

主人公のモギンも矢張り貧しい書家だつたら、模寫などして働きつゝ勉強してゐた。素敵な無性者で、着た外套を脱いだのと、被った帽子をとつたのをつひぞ見た事がない。彼は年中パイプを口に銜へたまゝ、何んでもする、恐らく食事申だけしかあのパイプは取つた事がないだらうと思はれた。繪を描いた後でも、筆についた繪具を壁なり、書架なり手當り次第になすりつけて、洗ふ事なしにその儘箱に仕舞つて終つた。彼は極めて口數をきかず、一人切りでせつせと自分の事をしてゐるやうに見えた。彼等は皆辛苦と缺乏に慣れていかなる事にも平氣で處して行けた。

珍らしく今夜は彼まではいよいよゐた。唄へと云はれば大きな美しい聲で平氣で唄つた。勿論ベンジャンスキイは有富で、お洒落で、放蕩者で、存氣で、少しぬけてゐたから、飲んででは駄いだ。シェベツクは一口も飲めなかつた。モギンは一番よく飲んだ。カニツキは餘り酒も飲まず、變人らしく人と話しもしなかつた。ヴァンベルスキイは何んにもしないで長椅子に仰臥したまゝ、歌がたえたとき、小聲でその間をつないだ。彼はいつもの調子で、自分を相手に國の平野、フィルドの事を話した。どう云

ふものか彼はモギンを好まなかつた。彼等が大浮かれに浮かれてゐるのを流眊に見、ランプの光に顔をそむけ、モギンもベンジャンスキイも獸物のやうな猶太人である、今夜は猶太風の御馳走を作つてゐるのだと軟かい言葉で思ひ切つた事をぶつてゐた。十時になつてやつと御手製料理が山程出来上つた。惡口を云つたものの、ヴァンベルスキイは中々よく唄つた。大蒜の匂が強い、自分も一口もいけなかつた。彼等はよく喰ひ、よく飲み、よく唄ひ、よく吹かし、よく騒いで、夜が更けて行つた。シェベツクは自分のために何か喰はれ相なものをとなくくれとなく獨り心配して哭れた。

十二時を合圖で、聖母最大寺に彌撒がある、と云ふ噂であつた。盛大な儀式を見たいのが抑抑の目的で此處へ來た自分は、十一時半頃野蠻な、快活な酒宴の席を辭した。擧つて行く筈であつたものが、寒風を恐れて、いざ行かうと云ふのは、ヴァンベルスキイ一人になつて終つた。彼はカニツキのベレグリンを借りて、身體に巻きつけ、突貫するやうに戸外へ出た。暗かつた空は漸く晴れて、降り相な星が表はれて來た。西南の方にはまだ雲の横はつてゐるのが見られた。二人の靴は石の上に氷るやうな音をた

てた。

祭の夜ではあるが、大概此邊の家は靜まり返つて、處々の酒舖から明るい光がもれて來た。寺へ近づくに従つて、二三人づつの人連に逢つた。忽ち眞黒な山のやうな聖母最大寺の前の廣場へ出た。

寺院の西方の正門を飾る廣い見事な階段の上には、既に群集が集まつて、扉の開かれるのを今か今かと待つてゐた。寺院は暗のやうに、幽かな火影さへもらさなかつた。時は遠慮なく過ぎた。その内誰れふふともなく今夜は東側の裏門が開かれるのだと傳へた。群集はぶつ／＼ひながら長い壁に沿つて東へ廻つた。こゝにも鐵の扉が突立つたまゝ動き相に見えなかつた。群集は耳を厚い扉にあてゝ、内の容子を伺つたが、が／＼いふ表の反響が聞かれる許りであつた。時が経つた。不平の聲が段々混つて來た。老婆などは念珠を採みながら、十字を切つて人々のキエザに對する嚴罰を誦れた。何時の間にか一時が過ぎ、二時近くなつた。自分はヴァンベルスキイの其時の容子をまざまざ思出し得る。彼は此上もなく愉快相であつた。天地の間に何／＼氣にかゝるものもないやうに打ち寛ぐいで、群集が傍に居るのも忘れ

翌朝早く又彼の訪問を受けた。何となく少し落着いてゐなかつた。錦繪に對して色々の意見を述べたり、質問をしたりした。自分はそれがどつちかと云へば二流三流の種類に屬すべき錦繪で、餘り價値はないと云つたが、そんな事は一向聞き入れなかつた。彼は例の解剖書を新聞で包んで持つて來てゐて、貸すから自分に見ろと云つた。言葉が分らないからと云ふ理由で頻りに斷つたが承知しない。方々を明けて説明しながら良い本であるから是非見る、挿畫を見た丈でも有益だからと云つて、とうとうその本を残して歸つて終つた。

其朝以來今日まで再びヴァンベルスキイを見ないのである。或はもう一生見ないかもしれない。

彼はそれから一週間程して可成な修業をなし送けた羅馬を後に立つたらしかつた。勿論自分には何等の挨拶もしなかつた。それはウブラジンに後から聞いた。ヴァンベルスキイは錦繪は自分が貰つたのだと彼に話した相だ。ウブラジンは呆れてゐた。

日本が獨逸に送つた最後通牒の期限はもう今

日限り大正三年八月二十三日で切れる事になつた。今後の雲行は豫想する事が出来ない。彼は死ぬかも知れない。自分は少くも彼からの手紙が無事に着いた事を知らせてやり度いと思つた。四五日前三枚の葉書を出した。折角書いた手紙はそのまゝにしてある。この山では紫陽花が未だよく咲き残つてゐる。

(大正三年八月二十三日作)

かう云ふ風に子供の繪畫は小學校の先生が考へてゐるやうな下手な自然の模倣だけではないのである。これは人形である。これは大である。これは山である。と單に形を傳へんとする記號や約束だけではないのである。もつと深い本質的な美術の要素が備はつてゐるのだ。人間の本能に基く美的表現の要素が、そこに湧き出して來てゐるのである。A子の畫でみてもそれは明かなことで、或時は寫生、ある時は想像、ある時は空想、ある時は調子と均齊、之等様々な要素が無邪氣な畫中に一つの律調によつてよく調和を得てゐる。

(「美術の秋」の「幼稚園の爲に」より)

然し私の検査しようといふのはあの大藝術家が指してゐる「自然を見よ」の内容ではなくつて、自由畫論者の「自然を見よ」主義の形式である。又上野の美術學校に於ける「自然を見よ」主義の形式である。凡て淺薄な見地にある寫實主義の見方である。彼等は口を開けば「自然を見よ」といふ。人間には眼が二つあるから、自然が見える筈ではないかといふ位な馬鹿々々しい自然の見方である。網膜上の形象と藝術上の認識とを全然混同した誤謬の上に立てられた議論である。「自然を見よ」といふ言葉は極めて簡單なやうであるが、その内容は到底補足し難い複雑さを持つてゐるのに氣付かないのであらうか。山本君の擧げた彼のレオナルドが指して自然と云つたもの、マテエが指して自然と云つたもの、ロダンが指して自然と云つたものでも、その各の内容はどれ程互に相違してゐるであらうか。自然なるものを、子供のために或る制限された範圍内に閉込めようとするのであれば幸である。

(「白夜雨稿」の「自由畫を辨ず」より)

の寫眞で着手し、既に幾度も改作した。休中には勿論三月といふ期限までもに、とても出来上り相には見えなかつた。然しそんな事は彼に問題にならなかつた。何處でも熱心に作りなほして、苦心に苦心を重ねた、内に居さへすれば爲たくも外にする仕事になかつたためでもあらう。

彼は殆ど着のみ着のまゝ、だつたから算笥の上に油土の彫刻と、二三冊の本が散らばつてゐる許りであつた。今日自分の所有になつてゐるあの解剖の書もその部屋その算笥の上に載つてゐたものである。自分があの本を手にして思ひ出したといつたのは即ち貧しいこの部屋のことである。彼は製本のばら／＼になるまで繰り返し繰り返し夫れを繕いて、必要なペーヂは暗夜でも直ぐ開き得る程親んでゐた。彼は二言目には必ず此本を出して見せた。

算笥の抽斗には素畫と紙屑がまるめて突込んであつた、紙屑にはまるで電信の記號のやうな文字が鉛筆で一面にかゝれてゐた。彼は所謂スピリティズムの生靈や、死靈と絶えず交通を感じてゐた。静かな夜など突然來て彼の肩をそつと叩いた。彼は鉛筆をとつて紙に對した。様々な文字が綴られ、言葉が出來、文章が出來た。

それのかゝれるのは非常に早かつた。夫は意味をなさぬものが出來たが、残りの何分の幾つかはよく預言をした。シエベヤクは彼を通じて故郷で死んだ妹と、死の瞬間及び死後通話をしたと云つた。ヴァンベルスキイは往來に居ても、畫室に居ても、時々靈魂の騒ぐのを聞くと云つた。彼は書間でも着くやつて震へてゐるやうな事があつた。

テヴェレの河岸へ二人で散歩に出かけた。風はあつたが空は益々紺碧に澄み渡つた。流の色は毎時も泥のやうに黄色かつた。學校の直ぐ向の彼が日々行くと云ふ料理屋へ行つた。初めて彼がいかに粗食してゐるかを知つて驚いた。彼は月々僅か二十五法の食料を拂ふのみであると云つた。

日が長くなつて空氣が温められた。畫室の中心にも麗かな日光がどうかすると直線を投げ込んで、學生を困らせるやうになつた。秋から冬、冬から春へと、随分長く畫室で暮したものだと云ふ自覺が人々の心にきざした。學生は三分の二位に減つて終つた。シエベツクや、カニツキも歸國した。ベンジャンスキイはポオランドの娘さんの後を追つて北の方へ行つて終つた。吾々はよく郊外へ行つた。枯死した草の

間に新芽を見、木末の青くなるのを見る頃の樂しさは、かうやつて郊外に出てこそしみ／＼味はれた。ヴァンベルスキイは懸賞の彫刻などは忘れて終つて、よく近郊へ出た。

春が來た。復活祭の前日から羅馬の空氣が眞赤に見えた。ヴァンベルスキイは恐れ戦いた。翌朝それはヴェスヴィヨ山が大爆發をやつた爲めだつたらうと分つた。復活祭の日の正午の鐘はその眞赤な羅馬の空で鳴り響いた、物凄かつた。

プラタノの葉は一日々擴がつて、街路に影を作るやうになつた。羅馬人は小さな卓をその木蔭に持出して、水を飲む頃になつた。稀れにヴァンベルスキイは自分の下宿を尋ねて來た。或日夏着の荷を解いたら中から一卷の江戸錦繪が出た。夫れを丁度遊びに來たヴァンベルスキイに見せた。どんなに彼は驚いたり、悦んだらう。三四日たつてからウブラジンに伴つて來てもう一度見せて呉れろと云つた。二人で話したり争つたりして、二時間も夫れを眺めてゐた。若しそんなに氣に入つたのなら、持つて歸つて御覽と進めた。ヴァンベルスキイは夫れを嬉し相に夾ば氣毒相にして、暫時貸して呉れろと夫れを大切に抱へて大満足で歸つた。

といふ長途を徒歩で二十日かゝつて、やつとアムステルダムに着いた。夜番の大作の前に立つた瞬間の狂喜と驚愕はもう言葉に餘つて終つた。それを言ひ表はす爲に、彼はむづくと飛上り、兩手を擡げて、絶大な奇蹟だと叫んだ。

彼の眼は今更のやうに耀き、まざまざと當時を思ひ出したかのやうに、手眞似をしながら、このやうに知らず識らず涙が流れて、とめどがなかった。繪の前に跪いたまゝ涕いた。それは最早や一面の繪畫ではなく、自然の復活で重い深い威力が人を壓して終ふ。頭を上げ得るものではないと云つた。彼の巨大な身體の隅々には、自己を表現する本能的必要が漲つてゐた。人が例へば美しいと云へば濟む所でも、彼は非常にと力を入れて云ひ張らねば氣が濟まなかつた。然し憶がれに憶がれた名畫の前に、空腹と疲勞とで倒れ込み計りになつて行着いた時の感情を、今彼がかく云うたとしても必ずしも誇張だと計りは思へなかつた。

彼は歸途ドレステンの畫堂を見た事も話した。かの若者は相變らず同じ調子で草を刈つて居る。來週土曜——夫れまでは肖像を描く筈だから——畫室に來ないかと云つた。自分は承諾して草の中から立上つた。遠くの林の中を散歩

して行く人や、馬車の驅けるのが見えて來て、自分は段々賑かな方へ出た。

由緒の古い數々の宮殿の中でも、バラツォ・ヴェネチアは十五世紀の木大僧正ベンボ(後に法皇パオロ二世)が大コロッセオの一部を破壊し、その石材を用ゐて造營せしめたもので、城郭に似た簡明至純而も莊重な風格が羅馬宮殿中の一傑作と賞讃されてゐる。建築家は様々なり山から様々なり人々に擬せられてゐるが明かでないといみえる。盛装せしめた五百人の從者を有つてゐたといふボルソ・デステもこゝに住んでゐた。佛王シヤアル八世の王宮にもなつた。羅馬人から今にその艷容と才徳を忘れられない奥國大使夫人のサロンにもなつた。ピオ十五世が千五百六十四年にヴェネチア共和國に與へたと云ふ古い關係から、今でも奧國大使館になつてゐる。建物が廣過ぎるせゐか、一部を割いて美術留學生の寄宿に宛ててゐる。ウブラジンも政府の留學生として、其處に住んでゐた。自分

は不案内にも、金びかのリブレを着て長い杖を突いた門衛が嚴めしく辭をしてゐる。大使館の表門から這入つた。受付の男は少し懷食に、右

に曲れ左に曲れ而して又右に曲れといふやうな事を早口に説明して呉れたが、とても分るものではない。忽ち道に迷つて廣い廊下をあちこち迂路つてゐた。灰色の壁、冷たい石版の廻廊、中庭から來る濕めつばい午後の蒼白な光、何一つ古い僧院のやうな感を與へないものけなかつた。幸ひ之も留學生の一人らしい青年が幾度も曲り、階段を上り下りし、廣い室を横ぎり案内して呉れた。淫靡のある高い入口の扉に、名刺が一枚書用紙のピン針で留めてあつた。ミッシェル・ウブラジン彼の名が讀まれた。

彼は優に三部屋を獨占してゐた。云ふまでもなく廣過ぎてゐた。入つて最初の部屋は少し暗くもあつたが、使ひ古るした彫刻用のモデル臺が一隅に塵だらけになつたまゝ捨ててあつた。許り、他に一物もなかつた。次の室はぶつ通して一つの畫室にしてあつた。中庭を北にして少し寒い位の光が十分に這入つてゐた。畫架が二つ四つ、櫥戸、卓、臺等が散らばつて隅に小さな寫臺が置いてある許り、かう云ふ單調な畫家の生活ぶりを由緒ある宮殿の一部に見るのは甚だ淋しい心地がした。

ウブラジンは其中で大股につしん／＼と歩いて、椅子を運んだりしたが、天井の高い室内で

獅子ウブラジンとエレル老人

讀み耽つてゐた本を草の上に投げ出し、起返つて其邊を見廻した。六月初めの朝日は青葉をもれ、大程高く伸びた牧草の上にあつた。何時の間にか着物はいづつとなつてゐた。動き易い草の上を風が渡つて行く。梳られては靡き、浪打つては流れ、伏しては起きしてゐる。軟かな其動搖が美しい人の前髪を動かしてゐるやうだ。

一人の逞しい若者が二日月形の大鎌を確かり兩手で握り、腰をする右から左へ身體と一緒に振り廻すと、草は將棋倒しに倒れて行く。寂かな林の蔭で草を刈る齒切れのいゝ鎌の音許り聞えてゐた。

倒れた草は日光に蒸され、強い蒸を放つた。甘い匂ひるやうな匂を嗅ぐと、鼻の爛れる思がする。枯草の匂ふ強い刺戟は様々な病人を出すといふが、自分は今更のやうに息苦しくなつて、ちつとしてゐられなくなつた。

軽い頭痛を感じながら、立上らうとして、直ぐ脚元の草の中に人の首があるのに驚いた。自分

より前に既にそこに來て居た人があつたのか、それとも後から來た人か、一向氣附かなかつた。彼も横臥したまゝ、顔の上に本を横けて、日光を遮りながらそれに耽讀してゐた。

其處はヴキルラボルゲエゼ公國の林の奥にあつた。めつたに人の來る處ではなかつた。自分と同じやうな此隱家を知つて居る人は抑々何者だらうと思ひ乍ら、草の間を透かしてみると、ウブラジンであつた。彼は帽子を目深に顔の上に載せて、褐色の頤鬚を時々無意識に動かし、大きな身體をどつしりと横たへて一心に讀んでゐた。周圍の底のないやうな寂寞を心地よげに領してゐる彼を驚ろかすに忍びない氣がした。そのまゝ立去らうと、一步二歩動き出すとその足音に氣附いてか、身體を起して彼は訝かし相に自分を見上げた。

自分は再び腰を下した。此處が公園中一番静かでない隱家であるとか、二人のうちどつちが早く來て居たであらうとか平凡な話を初めた。又ヴァンペルスキイの消息を尋ねてみた。プタ

ベストから來た一枚の葉書では兩三日中にソモギイへ歸ると書いてあつたと彼は答へた。開いた本を膝の上に伏せたまゝ、彼は兩手を後ろに突いて半身を起しなから話した。

彼の伊太利語はヴァンペルスキイ以上に拙かつたけれども、故郷は埃獨國境のプレスブルクで、獨逸語は母國語のやうに自由に話した。彼は獨逸語で細ひながら且つ手眞似を混へて説明した。

彼の會話はその體質なり、容貌なりと少しも異ならなかつた。武骨で、熱心で、精力に充ちてゐた。吾々は次第に繪の話を初めた。彼はミケランゼロとティントレットを揚げて、それ以外に眞の美術はないやうな事を主張した。彼は突然自分に向つて、和蘭陀に行つたかと訊いた。自分の未だとぶふ答へに、何故行かないのだと折返して追窮した。レムブラントの偉大を味ふ爲には、是非行く必要がある、羅馬で彼から何を學ぶ事が出来る、彼を識らないのは歐洲繪畫の眞髓を識らないのと同じ事だとぶつて、彼のレムブラント巡禮の話を初めた。

故郷に居た頃日夜この名匠に憧がれ、遂に和蘭陀行の旅を思立つた、今日の道の中に、僅か許りの路銀を懷中して喰はず飲まず、何百里

る惧がないと云ふ爲か、彼の戀人といふ娘が服屋に奉公でもして居たと云ふ爲か？

彼がかく詩人になつたのは戀故だつた。二十七八になる其日まで、戀らしい戀といふものを味はつた事もなく過して來た彼は、偶然な出来事で忽ち物の情を知り初めた譯である。或日コルソの通りを例の傍若無人の勢で進んで行く、とある四辻の角から、突然若い女が駈け出した。彼女は一人の友達と何か話しながら一寸横見をして來た拍子だつたので、あゝと云ふ間に、ウブラジンの横腹にぶつかつた。彼が身をかはしきへすれば突きあたつてくるのを強ち避け得ぬではなかつたが、餘所見をして居て向から勝手にぶつかつて來る彼女に腹が立つた。まゝよと猛進した來た勢で力をこめて彈ね飛ばしたから、ゴム人形のやうに二三間先きの人道と車道の間にある石に頭つまづいて、前にのめつてどたんと倒れた。我を忘れて少女を拘き起しながら、憤怒と恥辱とで目が眩み相な心地がした。一つは彼女に對して、一つは彼自身の無謀な態度に對してであつた。彼女は頬をすりむいてゐた。手の平からは血が出て眞白な腕まで流れて上着が染まつた。彼はそれを見とひやりとして今迄の慘忍な潮怒は忽ち惻隱の心に變つた、

娘は氣丈に起上つたが、跛を引いて一步も歩けない。彼はもう夢中でいやがる娘を遷々と擁き上げ、その友達の娘に案内させ、遠くもない彼女の家へ連れて行つた。負傷した娘を見知らぬウブラジンの腕に見た母親は、怒り、憎み、恨んだけれども、彼の並外れて巨大な、野蠻な人相には懼れ、戰かざるを得なかつた。小言一つ云ふ事も出来ないで娘を受取つた。彼が姓名と住所を告げ、面に眞實を表はし詫びて歸つた時は、母親もやつと安心した。其後ウブラジンは一睡する事も出来なかつた。翌朝早く見舞に行つて負傷は何んでもないと聞いた時、嬉しくも思ひ、物足らない氣もした。でも娘は三日外出する事は出来ないで、部屋を守つてゐた。ウブラジンは毎日見舞に行つて、娘にも逢つた。娘はサビイナと云つて、父親はもうとうに死んでゐなかつた。兄弟が二人と母親と四人暮であつた。サビイナは或商店へ通つて、いくらづつかの収入を生活のたしにしてゐた。傷は直ぐ平癒して終つたが、ウブラジンが心に負つた傷は反對に一日々深くなつて次第に爛れそこから血がにじみ出す程になつた。彼は不快したサビイナを見舞ふ術を知らなかつた。もう一度呻ね飛ばして負傷させ

るやうな機会に遇はぬものかとすら考へた。彼は發熱したやうに身體の置き所に窮した。絶えず喉が渴いて水許り飲んでゐた。製作する事も、會話する事も、眠る事も出来なくなつて宛處なく歩き廻つた。野でも山でも行き倒れて、せめて其處で眠らうとした。彼は胸中に點じられた小さな火が、か程の威力をもつて、彼全體を支配しようとは思ひまうけなかつた。無益に戰つて、常に敗れた。知らず識らず作詩を覺えて唯一つの慰安がそこに見出された。彼の詩といふ詩は悉く彼女に對する渴仰と興奮の記録に外ならなかつた。或る夕暮、ウブラジンはピンチヨの丘から、波打つ瓦の上に日の光のかぶさつて行く市の有様に眺め入つて、普通一般な情人の愁に心を奪はれてゐた。コルソで偶然起つた珍事、あの人を平氣で抱き起した事を思へば夢のやうである。彼はかの出来事のあつた爲に惱まされつゝある自分を憐み、悔恨の情に攻められながら一方には、それを無上の天恵のやうにも嬉しく樂しく考へた。考へあぐんで、あのサビイナを抱きかへた双の手を眺めた。もう何んにも、もう残つて居ない。今は何を握ればいゝのか何握ればいゝのかと、悶えた。石の欄干を堅く

は流石の彼も少し小さく見えた。晝架には半出
來の同じ人間をモデルにした二枚の肖像畫が載
せてあつた。どこかで見た顔だと思つたが、思
ひ出せなかつた。頭がつるりと秀げて、幅の廣
い緒に顔に片方の目丈九く涙ぐんだ鈍い光
を放つて、片方はつぶれたやうに小さく、凋び
て居た。臂の太い巻き上つた眉毛は目の上に落
ちて來て、陰鬱な影を作つてゐた。肉感的な大
きな鼻と叫い、唇——唇は一本もなかつた——
皆な此質の、肥えた老人の物質的な同時に神經
質な執着の強い性格を示してゐた。どうしても
見た顔だと思つた。さうだ、エレル老人だ。ど
うして彼がこゝへ來てゐるのだ？ 彼位特色
の強い顔は多く類がないのだから、一見直ぐ分
る筈であつたのに一寸思出せなかつたと云ふの
は、全く別々な方面で識つた二人を無理にウブ
ラジンとの關係で思ひ出さうと努めたからであ
つた。

ウブラジンは彼に引きかへ、骨張つて肉がご
り／＼と引締つて、双の眼が小さいながらに強
く光つてゐた。髪でも髭でも丁度紳名の獅子の
やうに白茶けた褐色を帯びてゐた。彼は猛獸
のやうに恐ろしい表情を持ちながら、又猛獸の
やうに親み易い何者かを持つてゐた。常に攻撃

的でありながらすきの多い大ざつばな所に無邪
氣で相手を安心させる美點があつた。彼は先づ
自分の思ふ事を十分ぶひたい性分であつた。立
つたまゝ時々歩きながら大きな聲を出して話し
た。

自分が書室に入つた時、彼はレクナム版の厚
い本を讀んでゐたらしかつた。やがて彼は其本
を取つて、これを讀んだ事があるかと云つた。
見ればゲエテの詩集である。その證明によれば、
今まで——ウブラジンは吾々より年長で二十七
八にもなつてゐた——嘗て詩といふものを讀ん
だ事がなかつたが、四五日前コルソの通りで何
氣なく本屋をのぞくと、ゲエテのこの詩集が目
についた。丁度詩を作り初めてゐたので直ぐ夫
れを買つて歸つた。ゲエテの詩は實に立派なも
のだと思ふが、俺の詩は先人のものを讀んだ事
なくして作るのだから、一層新鮮である。然し
これからは詩も勉強する。第一にゲエテを卒業
せねばならぬ。フアウストをも入れて、一週間
あればそれには十分である。それからシエクス
ピアとダンテを讀む。勿論原語でなければ無意
味なものだ。言葉？ 言葉なんか一週間も勉強
すればきつと讀める。俺に讀めるやうになる
んだ。それから詩作をして今年の秋に、ライプ

ツヒで出版させる。或友達がもう紹介して呉
れて、本屋との契約は略ぼ出来た。彼はその
詩集の必ず成功すべき事を堅く信じてゐた。か
くの如く彼は何事にでも強い自信を持つてゐた
——少くも本當に自信だけは持つてゐたのであ
るから、彼が大聲で力を込めてこんな事を眞面
目に斷言する時は、いかにも頼もしく、尤ら
しく見えた。氣の弱い者は威壓を感じて、さう
かと思ふやうになる。然し彼がいかにも大口で頰
張るにせよ、シエクスピアとダンテの鶴存には
驚かされた。

ライプツヒで彼が出版させると云つた詩の
原稿は一尺位の高さに三段に積んで、モデル
臺の上に載せてあつた。自分は僅かの間に、よ
くこんなに澤山書いたと驚くよりは、其原稿紙
の不思議なのに呆れた。原稿紙といふのは服地
の見本が張つてあつた細長い厚紙を伸したも
で、裏には羅紗の貼つてあつた痕がちゃんとつ
いてゐる。それに鉛筆で——力強い見事な筆蹟
で——詩句が一杯書き聯ねてあつた。彼は一體
何處からこんな厚紙を探して來たのだらう？
何んの必要からこんな廢物を利用せねばならな
かつたのだらう？ 單によく鉛筆が滑ると云ふ
爲か、どんなに力を入れて書きなぐつても破れ

料理屋であつた。學校から遠くない、ウィア・フレッキといふ裏町の露路の奥に中庭に向つて入口がついてゐた。四方とも高い建物の裏側の壁でかこまれてゐた。表通りを廻つてくれば何町も行かなければならぬやうな家と家とが、此裏隣りで顔突き合せて相接し、その窓から窓へ網が引張られ、洗濯物がずらりと掛けてある。天氣のいい日などは中庭へ卓を出して、滴のたれる乾物を賞美したり、窓から顔を出す口の悪い娘達にからかつたりした。そんな店の亭主とか神さんとかいふものは大體存氣で、人の好いものである。労働者であれ、學生であれ、紳士であれ、大通りの料理屋とはちがつて一向差別などは設けない。それで甘いものを喰せ、拂ひも賄い。吾々美術學生はいつもちやんとかう云ふ自由な穴を知つてゐる。勿論實用向からの發見であるが、外國から來て居る御嬢さんなどは夫れをアアテイステックと心得て、態々見物に連れて行つて呉れとせがむ。垢のついたフォクを氣にしながら大きなビフテキに膽をつぶし、襪襟の下つた窓を寫眞にまでとつて歸る。恐らく夫れが一生の冒險談の一つに數へられる位なものであらう。

吾々定連は常に五六人ゐた。多くは瑞西から

來てゐる畫家であつた。春になつた或日、自分が遅れて二時頃——元來吾々の食事には定刻がなかつた。店でも夫れを心得てゐる何時でも拒むやうな事はしなかつた。何かあるか？と云へば亭主はいつでもプロント「待つてゐました」と明瞭に答へ、そのあとへ直ぐ白か、黒か？とつけたして問ひ返した。黒といふのは赤葡萄酒を意味するのである。かう云ふ店(トラットリア)の習慣として若し酒を飲まない人があれば、可なり重い罰金を拂はねばならぬ事になつてゐた。——這人つて行くと連中は空になつた皿を前に置いて、その中へ煙草の吸殻を落しながら、空論に餘念なかつた。彼等の中に一人の見知らぬ老人がゐた。夫の低い横肥りの、身體の割に頭の大きな、偏首のやうに見えた(實は片目ではなかつたのであるが、彼は兩臂を机の上にもたせ、酒の入つた洋壺を兩の拳の間、に大切に置いて、前の方にかげんだまゝ動かさなかつた。唯だ時々重相に洋壺を唇に運んで又元の姿勢に歸つた。日だまりのやうになつた此中庭の春の日の反射と酒の氣とは彼の顔を火のやうに赤くした。日はどんよりと鈍つて、物を正視するに堪へない程だつた。諸てこれら魔賴的の外形に拘らず、どこかに聰明な相が

殘されてゐた、或は彼の鐘のやうな沈重に態度と、年齒の錆がさう思はせたのかもしれなかつた。連中は勝手々々な議論をして、誰も黙々彼に耳を傾けてやる者は居なかつたが、彼は平氣で彼々自分の云ふ夫の事を云つた。彼はセガンティニを論じてゐた。其中で、セガンティニは其天稟と性格に於て伊太利人と云ふ事は出來ない。古いゴオル人の復活して來たものだ。どうださう思はないか？とか、俺は決して複寫から批評する事をしまいと思ふ、大した誤謬を生ずる事がある、とか云ふ斷片的な言葉を覺えてゐる。後の言葉は友達が自分を日本から來た畫家であると云つて彼に紹介した時であつたと思ふ。彼は日本畫に關しても相應の議論をする事が出來た。

老人に酒を催促しながら、若い者に負けずによく語りよく論じた。激昂する事もなく、衰弱する事もないと云ふのがその會話の態度であつた。自分は何故人々が彼にもつと尊敬を拂つて耳を借してやらないだらうかと訝つた。議論では若い者の方が時々やり詰めてゐた。それに拘らず老人は彼等を支配する事が出來ず、若い者共は彼に下らうとしなかつた。此態度が自分をして老人に同情せしめ、若い者共を少し卑

毀れよと握りつめて、廣い空漠な市の上へ首垂れたまゝ、思ひ洗んでゐた。

彼が振り返つて其處に立つてゐるサビイナを見た時は、想像がそのまゝ實現されたのだと感ぜられた、その恍惚たる熱病的心狀は彼を幸ひした。平日の臆病とはにかみ性とは影をかくして、大膽な握手、思ひ切つた告白が自由に出来た。サビイナは黙つて耳を傾けてゐた。彼は此程度の邂逅を奇蹟であると考へた。然し彼自身も奇蹟以上の勇氣を振つてサビイナに對する事が出来たのだつた。彼女は別れに臨んでも、愛慇に再會を許して立去つた。ウブラジンはもう夢中だつた。どこをどう歩いて歸つたか分らなかつた。

ウブラジンの戀は急流のやうに滑つて、深淵に落ちて行つた。熱狂的な單純な戀の筋道はざつと以上の通りであつた。彼は無闇に獨り昂奮語りして、相手のいかなる女であつたかさへ、聞いて居る自分には判然しなかつた。兎も角今はひとの詩でも讀む程の餘裕がやつと出来た譯である。

彼の嚴丈な體軀も、意志の塊りのやうな容貌も、野蠻に近い動作も、運命と本能の威力に對しては土地程の抵抗力もないのを見ては恐ろし

かつた。同時に人間夢居の操人形の姿をこの獅子のウブラジンの上に見るのけ役割の妙が少し滑稽でもあつた。

彼は臂を伸して、モデル臺から服地見本の詩稿を取上げ、讀んで見るから聞いて居て呉れろと云つた。詩は獨逸語で書いてあつた。勿論自分には何が書いてあつたのか分らなかつたが、朗讀する太い聲の耳觸りが愉快であつたのと、畫室の中の光線をあびた偉大な姿勢が何カドラマティックであつたので、黙つて耳を併してゐた。彼は時々朗讀をやめて説明を試みた。讀んだ部分に一人の少女を肉親の父と誤り合つて、遂に父の喉に短刀をさしつけ、刻々にゐて行く、その父に向つて戀の甘さを説くといふやうな一節や、村人に悉く相手に嘲り罵りながら、故郷を飛び出す一節では殊に力を入れて悲壯な聲で呻つた。彼は自ら感動してスプリームだスプリームだと嘆賞にたへぬ風であつた。

自分は椅子を立ち、畫架の前に行つて、描きかけの二枚の肖像を比べてみた。ウブラジンもそこへ來て何故に描き直さねばならなかつたかといふ理由を説明した。赤い煙——酒で染まつ

て終つたあの煙、どうしたつてエレル老人に相違ない、と心に縛り返しながら自分はウブラジンを見上げて、——これはエレルさんだらう？さうぢやないか？と訊いた。

彼はひどく驚いた面持で自分を見詰めた。

「あゝ、さうだ、その通り。だがどうして……」

どうして、お前は夫れを知つてゐるのだ。

「俺は彼を度々カヴァロ・ネエロの料理屋で見た事がある。話をした事もあつた。然し此二三ヶ月は少しも姿を見せなくなつて終つてゐた。

「あゝさうか。さうだ、奴はよくカヴァロ・ネエロへ行つてゐた、本當だ。

彼は歎息するやうにさう云つた。而してエレル老人に對するオビニオンを窺ふかのやうに自分の顔を上げ／＼見た。

然し自分とエレル老人との間には、彼に讀まれるやうな何等の深い關係もなかつた。自分は今云つた通り、唯だ食事をしに行くカヴァロ・ネエロで時々一緒にゐたつたと云ふだけであつた。カヴァロ・ネエロと呼ばれる譯は黒馬の首が人口の上に看板に出てゐたからで、其下に二十文とか三十文とか葡萄酒半リイトルの値段が大きな文字で書きつけてあるといふ格の安

ブルクの些細な事までよく知つて居る一事であつた。彼の言葉に従へば、四十年前にある事業の爲其町に暫時住んでゐた事があるからだと言ふのである。これらの媒介や、同じ藝術にたづさはる事が直ぐ二人をして親密にした。のみならず此二人には當然相容るべき性格の一致があつたやうに自分には考へられてゐる。

ウブラジンが彼の肖像を描き初めてからは毎日來た。時にはポオツをすと云つても酔はらつてゐて、どうする事も出来なかつた。終ひには僅かの金でも彈制するやうな事があつた。

或日エレル老人はウブラジンの書室にコンニヤツクの壘を上着の下にかくして、這入つて來た。毎時になく少し調子がはずんで上機嫌だつた。何を思つたか百法の紙幣を二枚出して、お前には此間中から度々借があるから、元利合せてこれだけ取つて置いて呉れと云つた。彼は其外にも未だ來にした紙幣を澤山持つてゐた。可成り酔つて這入つて來た上に、コンニヤツクを二壘一人で煽つたから、椅子にもたれたがり、ぐつたりなつて終つた。正體を失つた彼は、思ひがけなくも洪牙リ語でべら／＼喋り出した。善段口にならないやうな事まで喋つた。出から彼は今日のやうな浮浪人ではなかつた事、

伯爵家に一人息子として育つた事、容貌の醜惡が一生祟つて苦しめぬいた事、様々な女に對する果敢ない戀、殊に絶世の美人と叫ばれた細君に對する戀、それらを話す時はもう泣いて居るか、呻つて居るか解らなかつた。ウブラジンは先刻から此老翁が瘡に障つてたまらなかつた。明日までも動き相もない落けたやうな醜い姿を見ると、じり／＼氣がいらだつて、身體中熱い鉛の湯が馳け廻るやうに思はれた。彼は我慢がしきれなくなつて叫んだ。

「あゝ、もう、もう澤山だ。歸つて呉れ。さあ直ぐ歸つて呉れ。誰れが貴様のやうな醜倒れの金なんか受取る奴がある。歸れ! もう澤山だ!」

ウブラジンは猿臂を伸ばして、エレルの襟首を掴んだ。

「歸つて行つて呉れ! 出て行つて呉れ!」

老人はぐつたりしたまゝ、解つたのか解らないのか身動きしようとしなかつた。

「さあ、歸れ! 金はこゝに入れてやる。」

彼の手に紙幣を握らせて、かくしに押込んだ。

老人は徐かに紙幣を取出して、夫れが果して二枚あるか、又破れでもないか、注意深く検査した。そして大事相に又夫れを藏めた。ウブラ

ジンは云ふに云はれぬ侮辱を受けたやうに感じた。

「出て行くが一寸待つて呉れ。未だ壘の底に残りがある!」

流石のウブラジンも一寸吞まれたらう。老人は又悠々と夫れを傾けて終つてから、ぶつ／＼獨語しながら、椅子を立上つた。彼はちやんと帽子を採して、夫れを被つて戸口の方へ近寄つた。

「愛らしい私の息子よ。お前には未だ人生の苦惱も悲哀も解らないのだ。何れ解る時が來たらう。俺のした事にそんなに腹を立てて呉れるな。俺は苦しい弱い人間だ!」

「馬鹿! 早く歸れ!」

ウブラジンは彼の背中へ尻を力一杯たゝきつけた。一人になる人きな寂寞が彼のの上に落ちて來て、重苦しい氣分に捕はれた。いくら考へまいとしてもエレル老人の事許り考へられた。彼には考へねばならぬ事があつたのである。

(プレスブルクの町福地に、彼は一人の親友を持つてゐた。その高い家の窓から北に當つて、廣々とした庭に立派な屋敷が望まれた。廣間から

怯であると思はれた。老人の限りの酒量と談議には吾々が立ちのくより外途がなかつた。

自分はツブラア、ブッフマンと云ふ二人の友と連立つて黒馬の酒屋を出た。露路のどこかで唄つてゐる女のいゝ聲が、細い張金のやうに四方の壁に響き渡つてゐた。

二人はこの老人に就いて様々な噂をして呉れた。彼は名をデエオルヂ・エレルと云つて、一時は美術批評家として有力な人であつた。未だビウギス・ド・シャヴァンヌが無名の青年畫家として一向世の中から顧みられなかつた時分、その天才技術を認め激賞した評論を初めて公けにし、此青年の爲前途を切り開いてやつたのは寔に彼であつた。春のサロンを二つに分離させる爲め奮闘したのも彼であつた。ゾラに痛快な攻撃を試みたのも彼であつた。彼は十九世紀末の新興藝術の爲、様々な大切な役を勤めたのであつたといふ。吾々から見れば二昔前の歴史のやうな大事件に關連した人を、かう目前に見るのは不可思議な心持がした。そして夫程の履歴を持つた老人を、何故之等青年が一も二もなく輕蔑しきつてゐるかが分らなかつた。尤も彼は方々の料理屋にまで借金を作つて、時には酒の上とは云ひながら、悲しむべき亂暴を演ずると

いふ事實も聞かされたのであつた。

ウブラジンがエレル老人の名を聞いた瞬間に、一種の緊張を精神に受けたのは見逃し得ない明瞭な事實であつた。何か神祕な豫想が自分を襲つた。ツブラア等の知らない或者がウブラジンとエレル老人との間にあるに違ひない。夫れでなければウブラジンがこんな吃驚したり、その感動を無理に抑へようと努めて、而も抑へきれない筈がない。

ウブラジンは老人に就いて知つてゐる丈の事を悉く話して呉れと云つた。自分はツブラアから聞いた事を思出し得た丈に話してやつた。その中には未だ彼の知らない事實もあつたらしかつた。彼は聞き終つてからも尚ほ默然と考へ込んでゐた。今度は自分が當然の權利としてエレル老人に對する彼のオピニオンを促した。

彼が老人を識つたのは別に誰れから紹介された譯でもなかつた。或日古着古道具等の市が立つ、カンボ・デ・ファイオリイの廣場に行つて、偶然小さな聖母のテンペラ畫を見出した事があつた。可成り損じてはゐるが、捨てがたいものだつたので道具屋の爺に十五法にまけよと云つ

た。爺は二十五法でなければ原が切れるのであるが二十法までならまけてもいいと云つた。彼は實際十五法より多く持つてゐなかつたのであつた。

そこへエレル老人が來たのである。失敬だが一寸見せて呉れろと彼の手から畫を取り上げ、眼鏡をかけて細かく角から角まで見てゐた。そして二十法ならば廉いものだから買つておやりと云つた。ウブラジンは當惑した。彼は老人を一見して外國人と知つたから、私は十五法でなければどうしても買はない。貴方が欲しければ譲りませうと道具屋に解らないやうに獨逸語で云つた。老人はウブラジンの爪先から頭の上まで見上げて、本當に異存はないかとこれら立派な獨逸語で念を押した。老人は一才迷惑な表情をした。實は懷中に十法、某しか持つて居ないのだ、此畫は明日まで貴方にあづけるから十法だけ借しては呉れまいかと切り出した。ウブラジンは驚いた。自分よりも尚ほ懷中の乏しい此男が買ふと云ふのである。貧しい人々とは思ひやりのいゝものである、直ぐ承諾した。二人はかうして議會ひになつたのであつた。

所が不思議なのは佛蘭西人であると自稱して居るエレル老人がウブラジンの生れたプレス

エレル老人が正體を失つてぐつたり椅子に埋まり、洪牙利語を喋り出した瞬間から、ウブラジンに或る疑が何處からともなく來て心に宿つた。此恐ろしい疑惑は彼の氣分をいら／＼させてから目前にだらしなない老人を見てゐるのが苦痛で堪へられなくなつたのだ。この一種の昇餐から彼は無理にも慘酷らしく老人を戸外に追拂つた。追拂つたものの一層重苦しい氣分に彼は捕へられて終つた。頭の中にプレスブルク町端れの窓から見たあの屋敷での殺人犯の光景が、浮ぶやうに想像された。考へ迷つて彼の頭は熱くなつて來た。どうにか判然解釋をつけねば立つても坐つてもゐられなくなつた。

―どうしてもさうだ。エレルはミスコレエツ伯に相違ない。

と叫びながら椅子から飛び上つて、急いで戸を明け廊下に出たが、その時はもう老人の姿は消えてなかつた。彼は廊下に熱して突立つて居る自分を見て戰ひた。俺は何んといふ氣狂ひだ？ 俺は抑々何んといふ無謀な考で何を企ててゐたのだ？ エレルは善良な憐むべき酔倒れだ。俺は彼を絞殺でもしかねない有様だつ

た。彼に何んの罪があるのだ？ 俺にとつて何んの恨があるのだ？

ウブラジンは冷靜になるかと思ふと又昇餐した。二つの力が身體の裡で互に争ひ合つて居る間にサビイナの姿がちよい／＼表はれては消えた。或時はサビイナがヨハンナのやうにも思はれた。ヨハンナがサビイナのやうにも思はれた。彼は日暮まで同一の考に支配されて何んにも手につかなかつた。考へあぐんで衰へをさへ感じて來た。彼はサビイナが戀しくて戀しくてたまらなくなつた。この問題を解釋して呉れるのは唯一人彼女が居る許りだとさへ思はれた。點燈の頃彼は破れた帽子を被つて往來に出た。パラツオ・ヴェネチアは影繪のやうに夕映の空にあつた。往來の馬車も自動車も歩く人も皆彼女の家へ向けて急ぐやうに見えた。

サビイナとその母親は今日の出來事や、プレスブルクの昔話を、さも熱心に聞いてゐた。それだけでももうウブラジンは今日半日の惡夢を洗ひ去つたやうに思つた。

ウブラジンの話を聞き終つた二人は互に顔を見合せて、ヨハンナに同情を寄せた。ミスコレエツ伯親子に對しては絶對の憎みを感じた。而してエレル老人が或はデエオルデ・フォン・ミ

スコレエツの後身でなからうか、怖ろしいと云つた。尤もウブラジンがさう思はせるやうに話したから、調子を合せためさう返事したに過ぎなかつた。

翌日も、その翌日も、その翌日もエレル老人は來なかつた。金のある間は飲んでゐるのだからと思つた。サビイナ親子はウブラジンを見る度に老人のその後の消息を尋ねた。ウブラジンは一時の苦しまぎれにあんな秘密を皆んな打明けて終つた事を深く後悔した。而してサビイナ親子の前に自分自身ひどく決斷のない男、主氣地のない男のやうに思はれた。どうしてもあつと明かな判斷を下す責任があると思つたが、それは餘り愛爾蘭な利己的な行爲だといま／＼しくもなつた。又或時はエレルを憐む心になつたり、或時は自分の無謀が恐ろしくなつたり、果して彼がデエオルデ・フォン・ミスコレエツであらうか？ と思つたりした。

ウブラジンは漸く薄暗くなつて來た晝室の中で、エレル老人の肖像畫を後ろにして尙ほ話を續けた。老人の顔は謎のやうに默してゐた。

四日目の朝……とウブラジンは四つ指を折

庭前の噴水に下りる階段までも手にとるやうに見えた。今は某といふ貴族の別荘になつて居るが、久しい間無住の廢屋であつた。ウブラジンは父達から其家の由緒を聞いた事がある。尤も其話は四十年前も昔に遡るのであるが、大概町の人は今でも記憶してゐる有名な事件であつた。

その問題の家にとも住んでゐたといふのは、フォン・ミスコレエツといふ伯爵である。プレスブルクでも家柄の貴族で、同時に金満家だつた。其上有名な美男であつたから、様々な婦人と關係して、常に浮名を流した。其好色な體様は未だ花の齡で早世して終つた。一人の息子が遺傳した。彼は父に引換へて珍らしい程の無男で、世間の笑物になつてゐた。それは先代が餘り罪を作つたから、神様の示された當然の誠めである。陰で噂した。彼が相當の年齢に達した時、殆んど強制的な結婚問題が起つた。自分の醜いのをよく自覺してゐた彼は一生結婚しまいと考へてゐたと傳へられた位だつたが、過つてその結婚に服従する事になつて終つた。

花嫁ヨハンナはワイスキルヘンと云ふ貴族の家から來た。ヨハンナは十三の時母親に別れ、父親の手一つに廿やかされて育つただけ、我儘な娘であつたが、それを償うて尙ほ餘りある

程の美人であつた。世間では二人の容貌を比べて花嫁が可哀相だとか、いくらか財産家だとは云へワイスキルヘン男爵の仕方でも譯が解らないとか評判した。然しフォン・ミスコレエツの若殿は幸福だつた。どんなに幸福であつたか云ひ盡されない程幸福だつた。

一人の幸福が二人の幸福である事もある。又もう一人の不幸を意味する事もある。ヨハンナは不幸であるといふ事が間もなく噂に上つた。彼女には別に意中の人が——夫れも一人ならず——あつたけれども、良人の強い嫉妬のため、どうする事も出来なかつたといふのであつた。然るにそれ以上恐るべき事實がやがて傳へられた。花嫁は結婚後いくらにもならないのに、不義を働いてゐる、而もその共謀者は誰れあらう娘を悲境に陥れたと云はれるワイスキルヘン男爵其人で、彼は反つて娘を唆かして婦道を誤らしむべく、様々な便宜を興へたのである。男爵の此盲目的な行爲は娘が憎いからでは勿論ない、又可愛いはかりからでもなかつた。實は故フォン・ミスコレエツ伯爵に對する深い遺恨からであつた。フォン・ミスコレエツ伯爵は彼の夫人と彼の名譽とを辱めた上、遂に彼女を悶死するに至らしめたのであつた。ドン・チャン——フォン・ミ

スコレエツ伯爵は苦惱といふ事を露ほども知らずに現世を去つた。彼の願はせて其の子をして彼の味つた苦惱の何分の一でもいゝから味はせてやりたいといふ執念に外ならなかつた。

デエオルデ・フォン・ミスコレエツ伯爵は男振こそ醜かつたが、十人並優れた聰明な青年であつた。而して父の分までもかの恐るべき自ら苦しめ損ふ的の良心(?)を餘分に持つて生れてゐた。彼が結婚によつて贏ち得た幸福は半歳と長く續かなかつた。彼は直ちに幸福を思切つて終つたが、束縛された神から逃れる事はどうしても出来なかつた。惡國は實に三年の久しい間彼を苦しめぬいた。彼は妻を支配する事も出来ず、自分自身を支配する事も出来なかつた。敗北者になつて終つた。ワイスキルヘン男爵の執念は思ふ存分に報い得られた譯である。

可憐なヨハンナの蒼白い顔を死の床に見た人は凄しい程美しかつたと云傳へてゐる。彼女に科せられた様々な不貞不義の罪名は、悉く無實であつたと云ふ噂が立つて深く憐れまれた。デエオルデ・フォン・ミスコレエツ伯爵は謀殺犯として嚴重に搜索されたが、遂に何年たつても捕縛されなかつた。多分人知れず自殺したらうと云ふ事であつた。

眞畫の出來事

子供達が砂の上を急いで歩いて行つた。歩いて行つて終つた。下駄の音か、砂利の音か夏の眞畫の居睡の裡に、それは煩はしい響でもあり、却つていゝ魔藥の一種でもあつた。幸彦の睡は醒めかゝつて、醒めきれないで、又無我境に戻つて行つた。その半意識から無意識に移る途は滑かだつた。だが籐の寢椅子を並べてこれもすや／＼睡つてゐるやうに見えてゐた細君の妙子はその時恐ろしい夢をみてゐた。

兩親の午睡してゐるヴェランダの前を、幸一が籐竿を引ずりながら歩いて行くと、五つになる彦次はその後から二三定の蟬の這人つた蟲籠を提げて、小鼻に汗をかきながらおくれまいとついて行つた。石の階段には裸の陽が射りつけてゐたから、灰色の房州石が妙に白く浮き上つて見えた。その階段の中段に一定の蜥蜴が尾を釣針型にひねつて、日向ぼつこしてゐた。それを見つけた幸一はきよつとして立寄り、思はず母を呼ぼうかとした。その時、蜥蜴は幸一の目を見詰めながらちよろ／＼階段の上を二三寸泳ぐやうに動いた。動くと黒くしか感じられなかつたその背が波打つてぎら／＼光つた。金色と紅玉の閃きを残して深い緑色に光つた。暗く／＼盛上つた兩眼は瞬きもせず幸一の目を睨みつけてゐた。どうしてやらうと幸一は考へた。蛙に似た喉をびく／＼動かしながら、さも思案ありげに見えるのが憎氣だつた。幸一は籐竿をあげて打つたが何も殺すつもりではなかつた。然し蜥蜴は遑早くもう石の中に消えて終つて、切れたしつばの先がびく／＼してゐた。蜥蜴の切れた尻の先が動いてゐる石段の上方に、半分捲上げた簾越しのヴェランダで、よく睡つてゐる兩親を見ると、蟬の聲よりしなない廣い庭の中が何か幸一に淋しく感じられた。おかあさん、おとうさん、呼ぼうかと思つてみたが、兄さんらしく思ひとまつて、砂利の上に竹竿をか

ついで影を運んで行つた。彦次も黙つてがらがら下駄で砂利の上を引きずりながら、兄さんの

あとについて行つたのだつた。

歩きながら、なぜおかあさんはあんなに睡いんだらうと幸一は少し不平になつてゐた。

さつき午飯のあとで、おとうさんは新聞を讀みながらヴェランダの籐椅子にねそべつてゐた。幸一は無理におかあさんの手を引張つて、そのそばの寢椅子につれて行き、お伽噺を讀んで貰はうとしたら、又ご本かい、何んだか今日は眠いから直ぐ居睡りして終ひますよ、それでもいい、さう云つた妙子はおとうさんの方を見て意味ありげにやりと笑つた。あなた怒つちやいやよ、本統にねむいんだからね、少し讀んであげますけれどもね。

妙子は急に幸一の首に手をまはし、その顔に激しく接吻しながら身體があつくなつた。お伽噺の本を幸一から受取つて、ばら／＼頁をひつくり返し、何か外のことを考へてゐた。

おとうさん、おとうさんもねむ相ね。妙子がさう云つてかざしたお伽噺の本のかげから隣の人をみると、もう新聞の屋根の下でねて終つてゐるのか、さつきのやうな笑顔を彼女の方へは向けてくれなかつた。

つて自分の目前に差つけ、言葉が続けた……扉を叩く者がある。来た……と思つた。俺は急いでかうボタンをかけ身構をしてそつと少し扉をあけてのぞいた。彼だ。俺は又扉を閉めて終つた。この扉を明けようか、明けまいか。若し一旦こゝを明ければ、俺は彼の心の心の底まで見抜いて彼を罰せねばならない時が来る。若しこのまゝ彼を歸して終へば、此四日間繰り返して来たやうな疑惑の裡に悶えねばならない、それは未だしもとして彼を取逃して終ふかもしれない、折角この大犯罪人を見出しながら、自分が今この好機會を逸したならば、誰が再び彼を捕へるだらう。彼は一生巧に法網を逃れて、天壽を全うするかもしれない。既に度々考へぬいた事であつたが、その瞬間かう考へると強い力が全身に溢れて来た。俺は何時の間に扉を明けて終つた。

— エレル老人は酔つてゐなかつた。俺の顔を靜かに見上げて、用心深く次の動作を見守るやうだつた。この沈着が忽ち俺をいら／＼させた。俺も黙つて彼の顔から何か讀まうとしたが、彼位物を隠すに都合のいい顔をもつものは二人とゐまい。俺は何んにも讀む事が出来なかつた。兎は非常な憎みと憤怒で、兎は憐憫と尊敬

で、俺は「お這入り」と云つて終つた。彼は少しも怖れる風なく徐かに室内へ這入つて来た。

— 俺は一部分の虚をも與へまいとしてかう云ふ風に……と彼は立上つて三四歩退いて見せた。その顔は怖ろしい疑惑と威嚇に充ちてゐた……後ろに退つて来た。老人はあすこに來て立寄り、帽子をぬいだ。俺はこゝに立つてゐた。

— デエオルデ・フォン・ミスコレエツ伯、それはお前だ！

— ウブラジンは鋼鐵の壁を突き破り相に右手を突出して前面を指した。同時に左の足でどしんと床板を蹴つた。自分は現場に立合つたやうな心地がした。

— デエオルデ・フォン・ミスコレエツ！

彼は繰返した。

— エレルは一言も云はなかつた。身動きもしなかつた。彼のふくれた赤ら顔は酒の外決して色の變る事はないのだ。出來得るだけ力を兩眼に集め彼を睨みすゑて、彼から何か讀まうとしたが夫れは無益に了つた。俺は少し疑ひ出した。デエオルデ・フォン・ミスコレエツの名は思つた千分の一の感動をも彼に與へ得なかつたからである。やがて彼は口の中で何か云つたやうだつたが、俺には聞きとれなかつた。禿げた

頭を一蓋して右手に持つてゐた帽子を被り、この肖像畫に一聲を與へながら、出來上つたのか？

— あれはもういゝのか？ 出來上つたのか？

— と横柄に云つた。俺は黙つて睨めてゐた。彼は徐かに出口の方に向返つて歩き出した。扉をあけて振向きもしないでそのまゝ出て行つて終つた。

— 俺は手持無沙汰に茫然としてゐた。彼を追馳けて捕へてやらうかと思つたが、決斷力は消えて終つた。而も一方に彼が自分を欺いてゐるといふ憤怒は少しも減じなかつた。又自分の卑怯なのが不快に堪へられなくなつて来た。確かにさうだ……と彼がゐなくなると再び自信が湧いて来た。然しもうその時は遅かつた。彼はその儘羅馬を立つて終つてゐたかも知れない。ウブラジンは昂奮して此物語をから結んだ。自分は半出來の肖像畫とウブラジンを薄暗い中に見比べて、憐れむべきエレル老人が獅子の鋭爪をかくの如くして逃れた事を私かに祝福した。然し果して彼がデエオルデ・フォン・ミスコレエツであつたと自分も斷言し得るのではな

ところでないしてゐるの。と幸一は馳けながら遠くの方から聲をかけた。彦次はだまつたまふり返つて兄さんを夢見るやうな目付で見た。ね、彦ちゃんね、行かない、蟬とりに、籠持たせてあげるよ。

うむ、嬉しいといふ顔でも嫌だといふ顔でもなく、いつもの夢見るやうな丸い目でぼんやり庭を見ながら兄に答へた。

二人が梅に別れて蟬をとりながら廣い庭の木立の間をぐる／＼まはつて、終ひにヴェランダの前に來かゝつたのはそれから二十分もしてからのことだつた。で、両親のすや／＼眠つてゐるのを階段の下から見上げた幸一は、なぜ大人はあんなに睡いんだらうともう一度い／＼しげに思つた。それが又丁度妙子の恐ろしい夢で目を醒まさうとしてゐた時でもあつたのだ。

つひぞ夢に見たことのない、死んだ父の顔が大きく枕の上にのつてゐた。目を堅くつむつて、八の字を寄せ苦し相にしてゐる。ぶく／＼水眠れにふくれゐるので普通の顔の倍位あると思はれた。無性髯が顔一面に生えてゐたが、髯の太さが小指ほどに見えてゐた。

顔の周りにはごちや／＼色々の人が集まつてゐて、少しでもよく父を見ようとしてゐた。妙子は一心に人の間をかき分けてなぜだか譯は分らないが恐ろしい父を見ようとしてゐた。そのうちどや／＼後から人の押寄せて來る氣配がしたと思ふと、ほらつと云つて子供を一人父の上に投げ出したものがある。それが幸一の姿だつた。目を圓く見張つたまゝの小さい顔が父の大きい顔にくつついて、例の太い髯が痛々しく幸一の頬にさゝつた。幸一お前はなぜそんなけがらはしいとこにあるの、さあこちへお出で、早く、早く。さう云はうとしても聲が出なかつた。胸をかきむしられる思がした。

おかあさん、さよなら、どこからとなくそんな聲がしたと思つたが、誰れが云つたのか分らなかつた。も一度幸一の聲が聞き度い。このまゝ分れてはたまらない。さう思ふまに幸一の顔も消え、父の顔も消え、寂しい暗い森のやうな處に來てゐた。幸ちゃん、幸ちゃん、聲をかざり妙子と呼んだので、幸彦ははつとして籐椅子から半身を起し慌てゝ妻を見た。妙子はお伽嚙の本を堅く握り締めたまゝ、青く堅くなつて幸ちゃんを繰返さうとしてゐた。

妙子、妙子どうした、妙子。

幸彦は烈しい動悸を押へながら、妻の名を呼びつけた。自分も何んだか恐ろしい夢にうなされて目を醒したやうに不安だつた。日のかんかん照つてゐる庭の中の暗い緑に憂鬱を感じて、たとへ僅かでも睡たことが悔まれる氣分だつた。

あゝ嫌だ嫌だつた。いつになく妙子は笑へなかつた。のみならず、夫の顔を見ると却つて泣き度くなつた。眼の奥からひとりでに涙がにじみ出た。

夢か。幸彦は思はず嘆息した。何か夢の内容を聞くのが怖れた。妻の恐ろしい夢は自分の罪のため、自分の罪は妻の夢の中にまで表はれるだらう、この理由ない恐怖と豫感がかれの氣分を益々めいらしして終つた。

さう夢みたのよ。私なんだつて晝間からこんな夢なんかみたんでせう。あゝ嫌だつた。さう云つて、妙子も半身起き上り、お伽嚙の本を肘掛けの上にのせ、あらはな兩手で、髯の後れ毛をかき撫でてゐた。

あら大變な汗、身體中びつしより、氣持が悪

さあ讀んでつてはおかあさん。こゝよ。幸一はかはい、指先で母の手にあるお伽噺の頁をまくと、紙は弓なりに二枚三枚まくれて行つた。さうこゝいらだつたね。うゝんこゝよ。幸一はもう一枚挿繪のある頁をまくつた。

「その箱の蓋を明けると中は時計に似た圓い日盛盤のある機械であつたが、針は羅針盤のやうにたつた一本きりしかなかつた。針はかち／＼時計のやうに音を立てゝ動いてはゐるが、不思議な事には、ある時は早く、ある時は極めて遅くしか進まなかつた。やがて針の針先がアルマンの胸の方角へ廻つて來ると、息が詰まるやうに苦しくなつて、全身しびれて終つた。そのうち針の先のまはるに従ひ、息苦しいのも、身體のしびれるのも忘れたやうに休んで終つた。やがて針は又一廻りして來た、アルマンは又前以上の苦しみを感じ出し……」聲はいつか消えて行つた。

おかあさん、感じ出し、それからどうしたのよ。
「前以上の苦みを感じ出し、箱を支へてゐた手を引かうとしても、手は糊付けに……」

おかあさんでは、それからどうしたのよ。
「手は糊付けになつたやうにびたりと箱に吸ひ

付き、足は……」
おかあさん。幸一はじれつたくなつて母の頬をつまみ上げた。妙子は眼をあいだが黒目は動かないで白日許り目立つて表れた。

「全身しびれて終つた。そのうち針の先が……と襲ひ來る激しい睡魔と戰ひ乍らも、讀み續けようとしたが、どこをどう讀んでゐるのかまるで分らなくなつてゐた。どうかこのまゝねかしておくれ、妙子にはその外の願はなかつた。

本を胸の上にのせたまゝ眠入つた母の顔を幸一はいいつになく不思議なもののやうに眺め入つた。妙子は色が白く、肉附のよい女盛りだつた。幽かに前齒がのぞかれる位に口を開いて匂ふやうな息をしてゐた。幸一は自分の顔を軟い母の腕の上にのせて、その頬と母の頬とを近づけ

なつかしい甘える心持でゐたが、二三分すると、もう一度小さい聲で、おかあさんと呼んでみた。無理におこして本を讀んで貰ふ氣もなかつたのだが、唯呼んでみたかつたのだ。妙子はそれに答へず少し上に向き直ると唇を動かした、口のなかでは玉のはじけるやうな小さな音がした。

幸一は指先で母の眉毛をなぞつてみたり、鼻の先のこり／＼する軟い部分をいぢつてみたりしてゐたが、妙子はとう／＼目を醒まさなかつ

た。

本統にもうねてしまつた。仕方がないな、さうあきらめながら幸一は胸の上の本をぬき取つて、その先を讀まうとした、一手は糊付けになつたやうにびたりと箱に吸ひ付き、足は感電したやうに……」自分で讀むにしては本が少しむづかし過ぎたので、流石先が知り度くつて仕方のない幸一も、再び本を母の乳の上にのせ、そつと目を醒ませないやうに寢椅子の隅から立ち上つた。おとうさんとおかあさんとは八の字をひつくりかへしたやうな位置に足と足を近寄せて、風通しのいいヴェランダの入口に向いてゐた。幸一は八の字の開いた方から二人の頭の間をぬけて、應接間から食堂、食堂から廊下、廊下から玄關と、弟の彦次を探して庭へ出て行つたのである。

往來に面した、ヴェランダとは反對の側にある門、その門の目蔭に彦次は梅の肩に右手をついてぼんやり往來を眺めてゐた。梅と呼ばれる女中はしゃごんで赤いめりんすの帯をこちらに向けてゐた。

彦ちゃん、蟬とりに行かない？ ……こんな

どつちだか僕知らない。

寢醒めでぼんやりしてゐた幸彦には二度目が醒めたやうな氣がした。つひぞ一人で門外へも出たことのない幸一だ、それがどうして見知らない女の人などどこへ行く筈があらう。然しそれがもし誰れかに連れられて行つたものとしたら、果して誰れだつたらう。この邊に識つた人は幾れもない。二三の人の名を彦次に訊いてみたが、それらしくもなかつた。

女中に訊いたら様子が分るだらうとひどく不安氣な幸彦は、彦次に海を呼びにやつた。

私氣がつかまenseんでしたが、臺所の窓からみてをりましたら彦様一人、御門の方から歸つてお出になりました。彦様、お兄様はと申しましたら、お兄さんあつちつておつしやつて、ずうとこちらへ御出になつたのでございます。

なに、どうしたの？

その時妙子は顔を洗ひ化粧を了へてさう訊きながら梅の後に來た。團扇を手に持つて。梅は少し赤くなつて半分奥様の方へ向き直つたまゝ答へようともしないで突立つてゐた。妙子は彦次を抱き寄せながらヴェランダの入口の椅子に

腰を下ろし、どうしたの……つて今度は幸彦の方へ訊いた。その場の氣配が何んとなく不安でならなかつた。

うん、あのなんだ、彦次のいふことが譯が分らないもんだから梅を呼んで訊いてみたのさ。幸彦にすれば、妙子には何も聞かさないで、そのことが何んでもなく済むのを願つてゐたのであるが、又それを無理に隠す譯にも行かなかつた。

彦ちゃんどうしたの。妙子は片手で坊主あたまを撫で廻はしながら、上から覗き込んで云つた。

なにあの幸一がどこかへ行つたんだとさ。

え、幸一が……どこへ。

彦次と婢をとつておとなしく庭の中で遊んでゐたのださうだが、今しがた門の外へ出て行つたので、彦次だけ歸つて來たといふのさ。

あら、幸一ひとりで。

それがよく分らないんだ。彦次の云ふことなんだから。

彦次は母の膝から少し怨めし相に父の方を見てむつくりしてゐた。

誰れかと一緒にでも行つたらしいんだが。彦ちゃん、お兄さん誰れかと一緒に行つたの。

聞いてみせただざりで黙つてゐた。

誰れとさ。母親は重ねて訊いた。

それが知らない人らしいんだよ。幸彦が引取つて答へた。

でも女、男。

女の、男。

女の、男。

女の人。誰れでせう女の人てば。

さあ清水のお嬢さんでもなし、赤倉さんや、並木さんの奥さんでもないらしい。

では久保田さんぢかない。

さういつて夫の顔を見上げたが、幸彦は子供を一心に見詰めたまゝ口を離さなかつた。

さうでもないらしいね。

下を向いて手がいぢつてゐた彦次の首を振るのを見た父親は、さも當惑らしく細君の方をみながら歎息した。妙子も眉を曇らせて、

その人はどこにゐたの。

あの御門の向の方。

向の方つてどこ、彦ちゃん懶巧だからよく話しておくれね。

三木さんの方。

三木さんの方、あんなところでお前達何してゐたの。

婢とつて……。

い。

おれも汗をかいた、莫迦に暑いんだよ。一體何度あるんだらう。

でも私のは冷汗よ。こらごらんさい、こんなですもの。彼女はさう云ひながら一寸襟を明けて見せ、急いで湯殿へ立つて行つた。幸彦は獨り午睡のあのすえたやうな淋しさを味ひ、風に吹かれ、欠伸をしたり、腕を撫でたりしてゐた。

おとうさん、さう云ひながら一段、おとうさん、又さう云ひながら一段、おとうさん、又一段、またくしながら右手の蟲籠をさもく、大事相に高くもたげて、彦次は階段を上つて父のそばにやつて來た。

どから見せてごらん。澤山とれたね。

一つ二つ三つ四つ。みんなよ。

みんなか。でもこれとこれとは違ふぢないか。

でも、みんなよ。

でも、みんなのか。

うん、みんな。これお兄さんがとつたの、これお兄さんがとつたの、これもお兄さん、こ

れもお兄さん。

みんなお兄さん許りぢないか。うん、みんなお兄さんとつたの。

さうしてお兄さんどうした。

お兄さん。お兄さんあつち行つた。

あつちつて。

あつち……

どこ。

あつち御門の外の方。

ひとりで。

うん。

彦ちゃん、お前なぜついて行かなかつたの。

くたびれたから先に歸つて來たの。

でも僕嫌だから。

何が嫌だつた。喧嘩でもしたの。

うん。だつて僕嫌だ。

何がさ。

だつて僕識らないんだもの。

識らないつて幸ちゃん誰れかと一緒に行つたの。

うん。

どんな人。

僕知らないな。

識らない人とかい。

うん。

幸ちゃんは識つてゐる人なのかい。

僕知らない。

お前どこかで見たことある人かい。

うん。

見たことない。

うん。……僕はこの蟬もつてつて梅に縁つけ

て貰ふの。

一寸お待ち、彦ちゃん。その人、男の人、

女の人。

女の人。

女の人。幸彦は思はず蟬返しにくり返した。

女の人と幸ちゃんと一緒に行つたの……

本統かい。

うん。

本統に、本統かい。

うん。

若い人か、おばあさんかい。

……。

若い人。

うん。

おばあさんかい。

うん。

どつち。

い淵に渦巻く水をぎら／＼白銀のやうに光らせ
てゐる許り寂しかった。

河原に下りた妙子は匂ふやうな水の近くに來
ると、迂曲した河下の岸に建つ温泉宿の二階に、
浴衣だの手拭だの、ゆもじだのといふ干物許り
鮮かに見えるだけだった。二人の子供に魚籠を
もたせた裸の男が腰まで水につかつて、鉈をも
ち、のぞきの上に丸く身をかゝめてゐるのが遙
かな中流で動いてゐた、然しそれが却て幸一と
その見識らない婦人のそこらにゐない證據のや
うで不安な感を増させるのみだった。

妙子は歩きにくい石の上を、思はず急ぎ足に
なつて温泉宿のある河下まで下つて行つた。頼
みにはしなかつたが、魚をとつてゐた男にも
呼びかけて訊いてみた。念のためその子供達の
顔までしげ／＼と眺めて、さつき夢の中で見た
悲しい幸一の顔を思ひ出したりして益々落付か
なかつた。

家並のはづれまで下つて、妙子は空しく引返
して來た。陽のかん／＼射すなかに傘も持たず
歩いてゐたので、額から流れる汗はふいてもふ
いてもとどめなく、着物の襟や、帯のあたりは
ぐつしよりになつてゐた。それでも無闇に急い
で、幾度下駄を踏みはづしたか知れなかつた。

まだ新しい下駄の齒はさ／＼くれ、墨の角々は
手は立つて了つた。

河沿ひの裏門に出入するため石垣の間に細い
階段が出來てゐる。その附近の河砂には晝顔が
繁殖してゐて、あはれな花が一面に咲いてゐた。
そこを極きうとして妙子はふと立停つた。一
足の小間下駄がちやんと揃へて草の間に脱ぎ捨
てゝあつたからである。

おやこれは私の下駄ぢやない。さう思ひなが
らそばに寄つてみると、銀で雲形の模様のある
薄紫の鼻緒のすがつたその下駄はたしかに見
覺がある。どうしてこんな突拍子もない處に
下駄が脱いであるだらう、而もそれが自分のら
しいので、妙子是不審にならざるを得なかつた。
で薄氣味悪く思ひながらも手にとつて裏を返し
て見た。飄然に成田屋の商標もあり、それは自
分のに相違なかつた。

この下駄がどうしてこんな處にぬいである
：あゝさうだった。きつとこの下駄だったに
違ひない、さう思ひ當ることがあつた。

四五月前のことだった。妙子が散歩に出よう
として、下駄をさがしてゐたら、女中がきのふ

の夕方旦那様がお歸りになつて、どんな
のでもい／＼から下駄を出しておくれつておつし
やつて、結局奥さんの小間下駄一足さげてその
まゝ又外へ出ていらした、と云つた。で妙子
は今現にはいてゐる新しい方のををつつかけて出
た。妙子はその時嫌な氣持がした。それは單に
一家の主人とも云はれるものが女下駄をさげて
門の外へ出て行つたといふだけで十分だった。
何んのためにその下駄が必要だったのか、それ
まで考へるのは餘りに思はしかつた。

然し聞かうか、聞くまいかと散々迷つた末、
大分卑下した心持で、半彦にそのことを切出し
て訊いてみた。

あなたきのふ私の下駄を一足お持ちになつた
相ね、一體それをどうなさつたの。

あゝ、あれか、あれはね、散歩から歸つて來
たら、門の處で下駄の鼻緒を切つて困つてゐた
人があつたから持つて行つて上げたのさ。

さう、そんならなぜ女中にもお持たせにな
らなかつたの、旦那様が見つともないぢやあり
ませんか、自分で下駄をさげて往來に出るなん
て。

見つともないかな。でも基督は乞食の足を洗
つたことがある。

その人どうして兄さんを連れて行つたの。：何か云つてゐて。

僕にも一緒に行かうと云つたけど、僕ひとり先に歸つて来た。

彦ちゃんはいゝ子だつたね。兄さんはなんだつて知らない人なんかと一緒に رفتんでせうね。

兄さんも嫌だつて云つたけど、無理に手を引張つて行つちまつた。

さう變な人ね。：梅、兎も角お前そこらまで見に行つて来ておくれな、爺やにもさういつと一緒に見てお貰ひ。

梅の出て行くのを見送つた妙子は、

おとうさん、私なんだか心配よ。

なぜ。

なぜつて、さつきの夢ね。嫌な夢だつたんで

すもの。

夢？

えゝ、幸一の夢だつたの。：幸一と死んだ

おとうさんの。それは氣味の悪い嫌な夢だつたの。

幸彦はそれになんとも答へないで、目をねむつたまゝ何か考へてゐた。

本統に嫌な夢だつたのよ。

妙子は云はうか云ふまいか、一寸彦次の氣持を氣にしながら、でもその嫌な夢を夫に話さないではゐられなかつた。

門の屋根に陽があたつてゐた。その上に夾竹桃の薄紅い花が高い枝で開いて、周囲の深い緑のなかから幽かな匂を落してゐた。夫婦はその下で外から歸つて来た梅に出逢つた。

梅どうして。

妙子が先づ呼びかけた。

三木さんの向の角まで行つてみましたがお見

えになりませんでした。

夫婦の頭にはその三木さんの向角が明かに描かれた。壊れた竹垣の角を曲ると、一目に岩鼻の遠くの方まで見える。一直線な街道の右側に二三軒農家があるものの、人の姿を隠すことは出来なかつた。

爺やは。

爺やはあちらへ見に参りました。

反對の方の道を指して云つた。梅が門の左へ行けば、爺やが右へ行つたのも頷かれた。そつちには四五十軒の農家や温泉宿が軒を並べてゐた。

しゃうのない子だね、一體どこへ行つて了つたんだらう。

妙子はじり／＼して来た。

ね、あなたどうしませう。

私はあつちへ行つてみよう。どこかそこらで蟬でもとつて遊んでゐるんだらうから、そんなに心配しないでもいいよ。

でも私心配よ……ぢあこつちを私捜して見ますわ。

幸彦は街道を横ぎつて森の深い山の方へ歩き出した。妙子は別荘の裏に沿つてゐる音無川の岸へ下りて行つた。

別荘の石垣の角から圓石を積み重ねた急な段が河底へ降りて行つてゐる。絶壁の上には雜木に掩はれた山が首をもたげねば半腹も見えないやうな角度で空を狭くしてゐる。向岸から幾本かの笕で用水や温泉が来てゐる。

石と石との間を白く流れる單調な水音で蓋は妙子の前に長はれた。妙子は石段を下りながら隣の別荘の東屋越しに見える上流を眺めやつたが人影さへなかつた。四五町河上の崩れた岸下にある蛇籠に陽があたつて、その邊一帯の深

もいや一緒にゐるの。

なぜでせう。

なぜ? ……、先からさう、いや。

遊ぶからとでもいふんですか。

そんなことではない。

おあなほ變ですね。

彼女は笑つてそれに答へようとした、然しその乾いた聲は泣くやうにしか聞えなかつた。

お子さんでも、あればいゝんだらうがな。

子供なんか生れつこないことよ。

意外に思ひ詰めた調子に、幸彦は胸にしむ心地がした。

本統になぜなんでせう。

なぜつてことはない、それはさうなの、昔も今も。

性が合はないとでもいふんでせうか。

分つてくれないの、ちつとも。…あなたは何だか、よく分つて下さるけど。

分る? 分るつてどう分るの。…私にはあなたの話も分りかねる。田代さんは立派で、よく出来て、その上誰れにでも親切な方だつて評判を聞いてゐます。…あゝ、よしませう、よしませう。そんなことを考へただけでも、かうしてゐることが濟まなくなるから。

濟まないのは私だつて同じね。妙子さんにも私なんだか悪くないやうな氣がする。…あなただつて。

おあもうかうして、おとなしく話だけしませう。近寄りつこないしに。

ね、どうぞさうして。

互に明るい顔を見合せて快活に笑ふことが出来たが、それと同時に二人の間に冷たい風が吹き通る氣がした。千代子は心持上身をのびし、坐りなほして、

妙子さん私のこと御存じないけど、實は私よく知つてゐるの。

さう、それは不思議ですね。

でせう。けど本統は私より亡くなつた父の方がなほよくあの方、あの方のおとうさんを知つてゐた。

さうですか、では古くからですね。

幸彦は何氣なくさういつたが、千代子の父の死が自殺だつたことを憶つた。さうして自殺の原因が關係銀行の破産にあつたことも薄々承知してゐた。だからその話の先をそれ以上聞き質すやうなことは云ふまいとした。

唯知つてゐるといふだけではなかつた。確かに。何か込入つた事情があつて、それから實際

も絶えて終つたの。…何しても先に死んだ人が損。

幸彦は本能的にある氣まづきを感じながら千代子の話を聞いた。千代子がこの言葉で何を幸彦に暗示しようとしたか、推察の出来る氣がした。

父が亡くなつてから、私はもう一日も楽しいと思つたことはない、それはない。…あの大磯時代、面白かつたわ。もう一度あんな子供に

なりたい。

さう云ひながら千代子は幸彦の手を膝の上に拾ひ上げた。

でも今更ら仕方がないぢありませんか。仕方がありませんね、仕方がないから悲しい。

妙子さんがあなたのところへおきまりになつた話、あの時直ぐお友達から聞いた、まさかあなたが妙子さんと結婚なさうとは思ひもつかなかつた。

千代子は急に袖を顔にあてた。

私口惜しかつた。

幸彦は酒の醒めたやうに、手の先まで冷たつて、ぢつとしてゐた。

おとうさんは私を命よりも可愛がつてゐてくれたから、…どんなに口惜しいだらうと思ふ

一體その女はどんな人か妙子は開きたかつた。然し幸彦はそれ以上話したくないやうだつたから、そのまゝになつて終つた。

妙子はいつとなく忘れて了つてゐたその事實を思出したのである。自分の胸に落ちないところを暖味にして置いたのが今更らぐやまれて腹立しかつた。なぜあの時十分疑を晴らして置かなかつたのだらう。さうさへして置けば、たとひそれがどんな嫌な事實でもこんなに苦しくはなかつたらうにと思婦に落ちて終つた。

兎も角彼女はその小間下駄を拾ひあげ、二つの不安な出来事からいつになく不快にされて、細い石段を登り裏門から木立の間をぬけてヴェランダへ歸つて來た。もしそこに幸一のおかあさんといふ可愛らしい聲さへ聞かれたら、すべては何んでもなかつたのであるが、家の中は森として誰れも歸つて來てゐる氣配はなかつた。

街道から外づれて、松林の下草原を喘ぎながら登つて行つた幸彦は、必ず幸一がそつちに連れられて行つたことを信じてゐた。

青草の匂の高い松の日蔭道は上りながらも密

の間に深く落込んで行つた。白百合も姫百合も散つた頃だが、日扇や撫子、藤袴などはよい程に咲いてゐた。藪からしや、芍薬、薔薇など、松の枝から枝にからまつて赤い目を遮り、山蔭の空氣を青く冷々とさせた。

三町も登ると音無川の一部分が木末から遠く望まれるやゝ開けた一握の平地に出た。そこは幸彦にとつて忘れられない恐ろしい場所だつた。

こなひだの夕暮、千代子が鼻緒の切れた小間下駄を捨てたのはそこだ。案の定下駄はそのまゝ藪蔭にころががつてゐた。雨にたゞかれ、露にうたれて泥まみれになつてはゐたが、見覺のある千代子の下駄はそのまゝになつてゐた。

二人は抱き合つて狭い坂道を緩々下りて來てゐた。時々立停つて尙堅く抱き合つたり、更らに手を組み變へたりして、暮れかゝる松林の寂しさを樂んだ。男が戦きながら女の唇を求めると、女はその頬を興へた。男がそれに疲れると女が代つて男の頬を求めた。男は女の髪に顔を押しあて、女は男の頸に接吻した。二人はどうしてそんなに戀しいのか、戀しさの湧いて來る底の深さを知ることが出來なかつた。締め合つて、からみ合つて、歩みもはかばかしくは進まなかつたが、でも女は唇を許

さなかつた。

その平地に來たとき、幸彦は千代子の手を振りほどこき、轎子脱ぎ捨て、兩足を投げ出して草の上に坐つた。雪の崩れかゝるやうに千代子も寄り添つて横に坐つた。その時千代子の鼻緒がどうした加減かぶつりと切れた。遠い音無川を松の間から夕空の下に見て、二人は黙つてゐたが、

でもやつぱりあなた妙子さんがいゝのよ。さう云つて寂しく鼻緒の切れた下駄を藪になげ入れた千代子のそのいぢらしい表情を幸彦はまさしく思ひ出した。

でもやつぱりあなた妙子さんがいゝのよ。いゝんでせうね、一緒にかうして暮してゐるんですもの、然し夫婦となればいゝとか悪いとか、そんなことは思はないんではないでせうか。

千代子は頼りなさ相に草を引抜いては、小さく千切つて捨てゝゐた。

ではあなたは。

暫らくたつて幸彦が千代子を見て訊いた。私あなたみたいに思へない。いや。どうして

に立つてゐた。

一寸寄つていらつしやいせんか。妙子にも御紹介しますから。

あら今頃！まあよしてよ。…初めて上るのにあんまり失禮。

さうですか、では又。書來て下さい。

幸彦は無理に勤めなかつた。運命が渦巻のやうに彼を引いて行く力に唯従つて行くこと云つてみたかつた。彼が無理にも千代子を引張つて妻の妙子の所へ行けばいいことは唯ぼ幸彦にも分つてゐた。

やがて人家を離れた河岸の草に出た。膝ほどある千茅の長い葉は夜露にしとつて、河風に幽かにゆられてゐた。黒い淵の底に流れ下る水音は遠くも近くも連らなつて漠然と二人の周圍を包んだ。

千代子は前に立つて月光のといかない暗い水の方を見てゐた。幸彦はすれ／＼にその後から肩越しに同じ方向を見てゐた。千代子の左手の甲と幸彦の右手の甲とが、草の葉の觸れ合ふやうに幽かにふれた。

二人は堅くなつて口がきけなかつた。

あの頃あなたは私のことなと思つていらしつたんでせう。幸彦が口を切つた。大磯で別れ

た頃。

彼はさう云ひながら二三歩しぎつて、太い楓の幹にもたれかかり、半身に月光を浴びた千代子の横顔を見守つた。

私はよつほど子供だつてよ…あなたは。

私はあの時、別れた時泣きました。本統に泣きました。あなたは覚えてゐないでせう。

え、覚えてゐないわ。

千代子は歎息しながら彼の方をまともに振向いた。

彼が十四で、千代子が十一だつた。その春千代子の父親は亡くなつた。三年つゞけて大磯の別荘に避暑しに來た千代子の一家はそれ切りも來なくなつた。その後幸彦が千代子に逢つたのは千代子の嫁に行くのがきまつた頃だつた。兄の龍衛が大學在學中チブスで急死したので、彼は久しぶりに千代子の家へ出入した。然しその頃二人はもう碌に口をきくのも氣恥しい年頃になつて終つてゐた。

その前の年、幸彦が千代子一家の東京へ歸るのを大磯停車場へ送つたのは二百二十日の晝があつた夕方だつた。もう時間だといふので亦

帽が小荷物をもつて、停車場前の掛茶屋から先に立つて出かけた。見る人も見送られる人も、一かたまりになつて停車場の入口に向つた。

幸彦は獨り掛茶屋の前の柳の樹の幹にかじりついたまゝ、歸つて行く人々の後姿を見ながら動かなかつた。彼の心はもう涙でふくれてゐた。

幸ちゃんもいらつしやいよ。

遠くから聲をかけたのは千代子の綺麗なおつかさんだつた。さう云ひながら日傘を振つて見せた。彼は懷しく思つた。

やがて赤い帯を締めた千代子が一人で彼のそばまで馳けて來た。さうして後から幸彦に抱き付いて、幸ちゃんどうしたの、こつちにいらつしやいよ、皆さんが待つてゐるぢありませんか、ね、何をそんなに怒つてゐるの。と耳に顔を寄せて云つた。

彼は口がきけなかつた。

龍ちゃんと唯囁してゐるんでせう。

さうぢかないよ。

ぢあ、いらつしやいよ、もうお別れぢかないでも。

彼は泣きながらやつと云つた。ぢあどうしたの。

と、それだけで泣けた。……でも長い間には段々段々忘れてゐた。怨むより戀しい方がやつぱり残るのね。こなひだの晩偶然お目にかゝつた時、私もうすつかり妙子さんのこと忘れてゐた。それは本統 本統に一寸思ひ出さなかつた。

月のあかるい晩だつた。千代子は女中一人連れて温泉宿を出で、散歩してゐると村端れでそれ違ひに幸彦に返つた。

聲をかけて呼びとめたのは千代子だつた。幸彦はどなたでしたつとつて月の光でしみじみ向き合つて立つてゐる千代子を見た。髪が黒く顔が青く冷く見えた。

お分りにならない。

千代子さんですか。

やつと憶ひ出して云つた。

おほゝゝゝ。あんまりお婆さんになつたからでせう。

さういふ譯ぢないんですけど、まさかあなたがこんな處へ来ていらつしやるとは思はなかつたもんですからつい失禮しました。

幸彦は別れて十年以上にもなる千代子の現在の位置や、心持も計りかねて、初めて會つた婦

人に對するやうな鄭重な態度で答へた。

私少し胃を悪くしたので、で、醫者に勧められ、二三日前からこゝへ来てゐます、女中とたつた二人ぎり。

さうですか、邊鄙な處ですから定めて御不自由でせう。私はこの少し河上の方に別荘があるので、七月の中頃から来てゐます、どうぞ用があつたら遠慮なく云つて下さい。

有難う、本統に。

どうも不思議な處でお目にかゝるんですね。同じ東京にゐながら、十年もお目にかゝれないで。

でも私はことによつたらお目にかゝれるかと思つて。

では私がこゝに来てゐることを知つていらつしやつたんですか。

なんだかそんなこと何つたやうよ……確かではなかつたけど。

話はそれからそれとぎれなかつた。

あなたお急ぎでせう。

云ひにくさうに千代子がきいた。

いゝえ、さうでもありません。月がいゝから少し散歩しませうか。

およろしいんですか。

えゝかまひません。

千代子は離れて立つてゐた下女のそばに小走りして行つて何か囁いてゐた。暗い松の影に白い浴衣のぼんやり見えるのが目にうつる夢のやうならば、昔の千代子に偶然めぐりあつて、二人でこの月に散歩しようとしてゐるのは心にうつる夢のやうだつた。結婚してもう七八年、妻の外に戀を涉ることを知らなかつた幸彦は一人事の前に立たされたやうに一瞬先の運命に胸を轟かせずにゐられなかつた。

どうも失禮、大變に。千代子は持つてゐた團扇を女中に渡し手ぶらで彼の方に来て云つた。

二人は街道を河上へ歩いて行つた。雄大なスカルピオン星座は正面の連山に落ちかゝつて、アンタレスの目立つた赤い光も海かつた。殆んど圓い月は三宿より尙ほ高く上つて、二人の影を前に落して行つた。千代子はその影を心竊に憐んだ。影が影に觸れて重なる時には自分が恐ろしくなり、離れる時にはわが影ですら寂しげだつた。

こゝが私の家です。

幸彦は月光を屋根にあびた門の前に來た時立つて云つた。夾竹桃は黒い幕のやうに門の空

嘘

の　　果

(常　子　の　手　紙)

序

清子さん、

もう二三年するとあなたも、色々な本や小説などを涉つて、一生懸命耽讀するやうな年頃になりますね。その時この小説があなたの目にとまらないとも限りません。よしあなたが氣付かずにも、あなたの友達等にはきつとこれをあなたに讀ませさうです。そんな事を思ふと小説をかいて、それを公けにする事は誰れにだつてかなり勇氣の要る事です。

御覽の通りこの小説に出て来る男女の青年は社會的生存に適しない、憐まるべき性格の持主です。實生活上背徳な彼等からあなたが何等感化を受けよう心配もありませんが、世間には随分凝り性な人もあるものだといふ話ですからこんな事を書いてみ

る氣になつたのです。

その話はいかうです。兄の創作の熱心な愛讀者の一人で、婚約のあるさる婦人が初め「生れ出る惱み」を讀んで木本のやうな漁夫を見出し、慇懃と懇に陥り、次に「石にひしがれた雜草」を讀んで、その婚約者にM子がAに對して持つたやうな恐怖を抱いて煩悶してみる。そのうち「或女」が出たので今度葉子になり済して終ふ。さうして今後自分の身の振方は次に出る有馬さんの小説奈何によつて決定するんだと公言してゐるといふのです。

何んと面白い話ではありませんか、作者には迷惑な事でせうが、第三者の私は氣の毒ながら面白いと思つてこの話を聞きました、一見いかにも其趣氣した仕業のやうですが、考へやうによつては生真面目な處もあると云へます。なぜなら美的假象は生活感情に影響する許りでなく、有機的

生活にまで影響を及ぼすものであると主張する一派の美學者もある位ですから。然しこの婦人の如きに至つては、到底フロオベルの輕蔑した事の現實を信ずる所の阿房其の一人たるを免かれないのはふまでもないでせう。

もとより私はあなたに小説中の人物の眞似をしてごらんなきといは煩てません。けれども藝術の味にもし交感といふものが全然缺けてゐたならば、吾々は決して完全な鑑賞に到達し得られるものではありませんまい。藝術的陶醉に於ける作品と主觀との相互の情緒を戀愛に譬へて、E. T. A. Hoffmann (密會)と云つた人もあります。だからあなたが此作を讀みながら御自分を彼等の位置においてみて、時に悲み、時に喜び、笑つたり泣いたりしたからと云つて、私は敢てあなたの道德的信念を疑ひもせず、ましてあなたを咎めて姦淫の罪を犯したものに齊しいと思ひません。惡に對する悔懼は私にしてみれば、潛在意識の底に隠されてゐる廣々とした一種の美の世界に過ぎないからです。

寶玉といふのは確か「紅樓夢」中の光源氏

どうもしないけど。

幸彦と千代子との大磯での交遊はかうしてぶつりと絶えて了つたのだつた。

その夜も月は圓かつた。幸彦は一人そつと庭に出て時々雲にかくされる月の中で涙もなく泣いた。彼は今その晩のことを思出したのである。さうして掛茶屋の前の柳のかじりついたまゝすねた、その時のことを思ひ出すかと千代子に訊いたのである。

さう本統、と千代子は感謝に充ちた低い聲で云つた。私ちつとも氣がつかかなかつたんだからご免なさいね。

なにもあやまつて貰ふやうなことぢありませんよ。

本統に悪かつたのよ。けど、あなただつてさうよ、兄さんの死んだ時来て下さつたでせう。あの時あんまり餘所々しくしてゐるんですけど。昔のことなんかまるで忘れたやうにこはい顔して、碌に口もきいて下さらなかつた。

さうでしたね。

なぜ。

なぜつて、あなたはあの時も田代さんへ行

くことがきまつてゐたでせう。

であなた怒つてゐたの。

ええ。だから私怒つてゐました……。

彼は黙つて突然風の幹にもたれて身體を起し、暗い瀬の方へ歩みよつた。千代子は後から追ひすがつていきなりその手をとつた。

幸彦は松林の下に、奥まつた谷のその平地、鼻緒の切れた下駄を千代子が投げ入れた藪、その前にぐたりと坐つたまゝ、放心した人のやうに耳を澄してゐた。

彼に森の聲が來た。遠い音無川の水の音が來た。又幽かな鳥の啼聲が來た。然し人らしい聲も氣配も谷の中から聞えては來なかつた。

やがて彼はそこを立上つて急いで谷の奥へ進んで行つた。無闇と早く進んで行つた。森は益々益々深くなる許りだつた。彼は遂に疲れた。汗は額に充ち、心臓は動悸を早めた。

四つんばひになり、高い岩角に幸彦は匍ひ上つた。青々とした無人の谷が目の前にあつた。彼は力一杯の聲を上げ、幸一、幸一と呼んでみた。幸一幸一ともう一度呼んでみた。

(大正十二年十一月十二日作)

本當のことを云はうと一生努めながら、遂に何にも云へないで死んで終ふ人もある。何でもない會話などにも、ひよつと落すやうに本當のことをぶつて終ふ人もある。一度も本當のことをぶひ得ないでも、大文豪のやうに云はれ、等身の著を作す人もあり、本當のことを云ひつゞけてゐても一市人として終始する人もある。

若い人達が戀の情みに白らを滅ぼしたりするのでも、本當のことが云へない、云つても通じないやうな場合が少なからう。

行爲を補ふ言葉であるのに、それをあべこべに言葉を補ふに行爲を以てする人もある。

(『夜雨』の「本當の言葉」より)

「戀よ戀、我中空になすな戀、戀に
は人の死なぬものは、無患の者の
心やな。」(謡曲——戀車荷)

彼の眼の前にあつた窓がごとんと一搖れ搖れてやがて動き出した。驛員に遮ぎられ、乗りそくなつた群集は國府津仕立のこの終列車を見捨て、閑の聲をあげながら、院線電車のおらつとほおむへと先を争つて、ぶりいぢの梯子段に駆け上つた。恐ろしい群集の下駄の響と、機關車の音に混つて驛夫の叫ぶ、まだ電車はありますといふ怒鳴聲とが、石炭の煙で曇つた電燈の下で渦巻いてゐた。

常子は赤い下唇を噛んだまゝで、その時汽車の窓の人込から伸び上つて彼に會釋しようとした。彼は眼だけで彼女の眼に答へた。常子は人に見えない位頭をかしげた。下唇を噛んでゐる一列の細い、白い齒茎が影の多い客車の中で妙に彼の心を引いた。……それからその圓い頬が、ほの白い頬が……いゝ匂ひした頬、熱かつた頬、それが彼に今日初めて味はつ

た許りの新しい接吻の感覺を蘇生へらした。
——瞬間、ほんの一瞬間、彼はどこかに行つてゐた。際限のない空々たる世界か、小さいあるこおずの蔭か。とにかく其時彼はぶらつとほおむに立つてゐなかつた。再びそこにゐると自覺した時には、常子のから數へて四五番目の窓が次第に早く彼の目前を通り過ぎつゝあつた。

横濱開港××祝賀祭の酔がまだ醒めきらないうやうな群集の中にて、彼は一人別な人を感じた。今日一日のゆるゆる騷擾は、今彼の眼と耳とを掠めて通つた汽車の窓同様忙しく、うるさく思はれる許りで、何一つ心の底までとはかなくなかつた。旗を振つたり、徽章を胸にかけたりして、充奮してゐる人々の手前、常子の像を安置した心の籠を内省すると、ある自負と同時に恥ぢねばならぬやうな心持をも感じた。

群集を離れ、彼は唯一人反対側の櫻木町行の電車ぶらつとほおむに降りて行つた。更けて用のない燈火が物凄く光る線路越しにぶりいぢの影を大きく黒く染めてゐるぎり、そこは寂しかつた。硝子張の待合室の中で彼は腰をかけてみた。そこにも人の影さへなかつた。彼は安心して伸をし、つゞいて欠伸をした。若い女性の前で半日緊張させてゐた注意力をかうして自由

に解放してやる事は全く快かつた。又欠伸をした、又欠伸をした。電車はまだ來なかつた。彼はぬいだばなま帳を、無意識に右手の親指と中指で黒いりぼんのあたりをばたばたと拂つた。煙のやうに塵埃が立つて、彼の鼻先に黄色い臭が漂ふと急に今日の夥しい人出、雑沓が考へ出された。聯想は帽子から今朝の事にながつた。帽子は一週間許り前下田の奥さんが中冗として彼に贈つたものだつた。それをかぶつて下田へ行つたのは、今朝がお初だつた。昔んな迷立ててその門を出た時、下田の奥さんはをりいぶ色の日傘をひろげようとしながら態と、彼の身體にそのふくやかな一の腕をふれた。彼は彼女の顔を上からのぞき込むやうに見た。奥さんはにつこりして、

「清さん、よく似合ひますことよ。」

さう外の人には謎めかしく云つた。二人だけに分つて外の人によく分らない事、これは夏子にとってどんなにか嬉しかつたらう。

辨天通の角へ來た時、遙か後におくれた連れを待たうと二人は足袋屋の角に立停つた。そこにも流れるやうな人の川が動いてゐた。連れの影を見失つた彼は、知らず識らず往來の真中へ出て又伸びしながら橋の方を振返つて一心に遠

の君のやうな人でしたね。彼の放縱極りない魂の動搖が「意淫」といふ言葉で非難される條があつたと思ひます、流行に目い字を探したものではありませんか。この場合「意淫」は丁度自由とか聰明とかの同義異辭にあたり、寶玉其人を譽揚せしめてゐます。(私が好んで奇矯の言を弄するものと思つては困ります、かの微笑に沈湎して「幻想を失へる動物」と云はれる人々の想像の貧しさをごらん下さい。又身を持するに聖者のやうだつたセザンヌ翁が描いたオプシエンヌな繪畫や、ヴェヌスの宮を知らぬと自ら云ふフォン・ケエル博士の人性に關する感想等總て之等をあなたはどうか觀察します。)

もとゞゞ激情は不徳を生み易いものです。然し又藝術をも生み出します。さうかと云つて藝術が不徳を生むと強ひられる謂れはありません。「藝術の頂は永へに懷疑の闇に閉されてゐて、現實の光は及びやうもないほどの高さに聳えてゐます。そこにのみ無限絶對な眞の自由といふものはあり得ると云はれます。世界中で一番精確な、一番實驗的な精神を持つた哲人等が恍惚と

してそこで崇嚴な情懷に酔ひ、思想の耀をもつて闇を輝してゐます。一オリヴィエはクリストフに彼等生存の理由を答へて、單に自由である喜びのためだと解釋してゐます。勿論その頂は吾々の容易に達し得べき心境でないのは云ふまでもありません。然し吾々が内省により自ら求むるものは果して何であるか。パンよりも、生存の權利よりも、尙ほ貴いものはその自由ではありませんか、いかに吾々が現實といふ室内で安住を得るにせよ、天に向つて開かれた窓の一つもそこにないものならば、どうして吾々は日光と空氣とを享ける事が出来ませう。もしその中で、窒息しないものがあるとすれば、それは精神的盲目の輩が徒らに生を貪り家のやうに生きんとする醜い姿に過ぎないでせう。兎も角かうしたあなたの自由は何物をもつても束縛する必要を私は認めません。あなたの藝術はあなたの道徳より大きい自由な世界であらせたい。たとひあなたの無經驗な激情はあなたを傷け得る事があるとしても、常子や清の激情が小説の中からあなたの現身にまづ手を伸し得ようとは思

ひもかけません。世間並には少し變な言廻しに聞えませうが、今私の云つた事の真意は大體お分り下さいましたか。

清子さん、

序でにもう一つ申上げて置きたいのはこの小説のうちに私はあなたの御両親——それにあなたのお名まで一寸許り預借した事です。それとお氣付きになつたら随分お怒りになるかも知れないと思ひますが、誰れよりもあなた御自身御承知の通り、私があなた方に振り當てた役割は全然勝手なもの虚構です。たまゞあなたの方のお名や位置や距離が私をこの落想に誘惑する機縁を作つたと云ふまでの事です。どうぞこの事は深く氣にとめないで下さい。あなたの方御一家に對する私の敬愛は今も昔も少しも變つてはをりません。本書の出版に當りあんまりよくないこの駄洒落に就いて改めてお詫びを申し上げます。

大正九年八月

輕井澤にて 著 者

つて來ると云つた。もう十二時はとつくにまはつてゐるのにと清は思つた。

「中根君。」

清が行きかけると後ろから又呼び戻された。づんぐり肥えた下田はまだそこに大儀さうに立ち停つてゐた。

「今日は妻連が色々ご面倒になつた上に、ご馳走にまでなつたさうだつたね、どうもそれは有難う……。」

さう云ふ風に纏を云つた。中根清はこれくしなげら、かのばなま帽をとつて一つお辭儀をした。いい人だのに、さう思ひながら改札口を出た。夏子も、常子も、智恵子も、智恵子の夫の上杉氏もだれもかれもみんな彼に殷勤な人だらけに思へた。この人達で今日一日楽しく過ごせて呉れたのだ。彼はだれにも悪意は持たなかつた。だれも亦彼に悪意を持たうとは思はなかつた。彼には原因の分らないやうな満足と、樂たいやうな喜が、心にも、血にも、肉にも、手にも、足にも、漲つてゐるのを今更らしく感じた。さすがに外は更けて冷々してゐた。盛んには花火の打ちあげられてゐた空には星や三日月が力弱く光つてゐる計り、祭の提灯もちらほら疲れ果てたやうにしか通らなくなつてゐた。然

しども満員の市内電車許りは、一乘客を運ぶすの分らないやうだつた。

下田さんは確かに歸らないと……ではこれから行かうか。彼は今常子と別れた計りで、下田の上機嫌な顔を見た許りで、急にこんな夏子の誘惑に悩み初めた。それは自分にも不思議なほど皆な別々な無關係な人々としてしか考へられなかつた。

突然ある句が彼の鼻を風のやうに掠めて通つた。彼は意外に思つて鼻で二三度忙しい息をしてみた。歩いて行くその足もとには大隅川の濁つた水が緩かな上げ潮で海の香をたへてゐた。この句ではたしかにない、さう思ひながら、後ろの方を振り返ると川口に立つ小さな燈臺の光が妙に寂しく彼の眼に映つた。その瞬間、再び風のやうにある句を嗅いだ。それがその句だつた。女の句だつた。若い女の句だつた。彼は汽車の中にある常子の方へ思をやつた。常子さんは、常子さん、新しい戀人をさう切なげに呼んで、半時間前まで接吻する事の出来たその頬やその首筋の思ひ出、慕はしいその句にひたると、氣もそゞろに亂れさうになつた。

急に思付いてその兩手を鼻に押しあててみた。そこにも常子はゐた。二人は知らぬ顔をし

ながら手と手だけが恐る恐るさつた。その時遠く離れて、互に包み隠し合つてゐた感覚と感覚が、ひつくり返つたやうに忽ち近づいて、その露骨な顔を見合せた。群集に押される眞似をしなげら、手が手を握り締め握り返した。心は互にうなづいた。やがてはそれだけで足りなくなつた。五本の指がしつかりからまり合つた。

二人はいつか連れにはぐれ、群集の後ろにさがつて、高い空の花火に見とれてゐる人々の隙に慌しくいぢくづけを取り交はした。それから三時間のうちに彼の兩手は常子の頬、常子の髪、常子の金紗お召、その足てを知つて終つてゐた。さうしていつかその手は常子の句で染つてゐた。今この兩手がそこにゐない常子を一しほ懐しく思はせぶりに幽かに匂つた。彼は暫らくその快い残香をかぐために佇んでゐた。

……常子さん。

もう一度暗闇に向つてこの新しい名を呼ぶだけでも、ある満足を得られようかと思つた。然し聲はそのまゝ自分の中に歸つて來た。氣力のぬけた體態を請ふやうなその聲は、自分にも醜かつた。眞夜中とはぶひながら恥かしけなく、浮氣な心でよその娘を求めて、その名をさも馴れ馴れしく呼んでゐる自分がいかにもさ

くを眺めた。往來半分だけに陽がさしてゐた。ばなま帽、二十七になる青年の血色のいゝ顔、その厚い胸を掩ふ白ちよつき、それに麗かな七月の日は耀いてゐた。下田夏子の熱い瞳は吸ひつけられるやうに彼の上に注がれて行つた。彼は陽に照され目映し相にして熱心に「町ほど先を眺めてゐた。あどけない無心なその表情は親切氣に心配相に見えた。それが又どの位彼女に嬉しかつたらう。やつと連れの日傘が近づいて来るのを彼は見つけた。くりいむ色ときき色と、それが確かに連れの二人の傘だつた。くりいむ色ときき色と拵れたり、他の邪魔な日傘に隠されたり、動いたり、停つたり、くりいむ色ときき色と、とききとくりいむ色とつれながら拵れながら段々近づいて來た。くりいむ色は智恵子のだつた。ときき色は常子のだつた。堅く口を結んだ常子の鹿爪らしい顔がやがて彼を群衆のなかに見附けた。肘で智恵子にそれを知らせながら、につこりした。水々しい娘だ、今更さらう思ひながら、彼は右手をあげ合圖をし、人波の中から夏子のそばへ歸つて來た。

「あなたには黒いのも、白いのも、どつちでも似合ふわ。仕方がない方ね。」

彼女は再び清の帽子の事をさう云ひながら往來の雑沓を利用しつゝその手をさがして、やや堅く握つた。喉が渇く位、彼女は此時くちづけに飢ゑる程かに饞へてゐた。譯もなく清は顔を赤めた……

この「清さん、よく似合ひますことよ。」とか、「あなたには黒いのも、白いのも、どつちでも似合ふわ。」とかぶつた夏子のなれ／＼しい言葉が、今ばなま帽をいぢりつゝある彼の記憶に浮び上つた。「仕方がない方ね。」それがいかにも三十を越した女盛りの夏子らしい言草だ。造瀬ないほど烈しい彼女の急はいつ思つてみても、獨身の彼を戦かせた。彼は先刻顔を赤めた事を思ひ出して、又獨りでゐながら胸を轟かせて顔を赤くした。

急に電車が來た。清は急に立上つた。降りた人が二十人許りもあつて、すいてゐた電車は益々すいて終つた、清の乗つた車掌臺の脇には乗客は一人もゐなかつた。

「この電車はどこで今の終列車と行違ひでした。」

車掌に近づいて彼が尋ねた、車掌は彼の風采に一瞥を與へながら存外丁寧に、「え蒲田と……いや鶴見でした。」

常子はどうしてゐました？ かう口に出して聞いたら、どんなにこの車掌が驚くだらう、さう思つたら彼は獨りでをかしくなつた。常子に別れてから彼はなんだか愉快で愉快でたまらなくなつてゐた。……何かにつけて無闇と笑ひたくつてたまらなかつた。

二

「やあ、中根君、どこへ。」

かう云はれて、彼は櫻木町停車場の改札口で突然腕を捕へられた。びくつきして常子の幻から目を醒したその當の先に夏子の夫なる下田忠次が祝賀の酒で上機嫌になつて二人の同僚らしい男とふらふらしながら立つてゐるのを見た。

「あはムムム、あはムムム。」

慌て、うろたへ、誤魔化す代りに、清は嬉し相に親みのある聲で笑つてゐた。下田もそれに引込まれて快げに笑つた。二人の間にはいつも此のこだはりもなかつた。清はこの恩人を自分の養父よりもいつも懐かしい人だと思つてゐた。××新聞の横濱支局長をしてゐた彼は、祝賀祭の記事で急用が出來たから本社まで行

叔母と一緒だったといふので、又あの日は御祭だつたといふので何んでもありませんでした、どうぞ御安心下さい。私は思ひもかけない最初の冒険を犯して全く夢のやうな心持で汽車にゆられて歸りました。恥かしくて恥かしくて伏日になって歸りました。あの祭の晩のことを考へると目がくらみ相です。肩が乾いて息苦しいうございます。さうして唯きまりが悪くてなりません。あなたに恥かし、私に恥かし、お月様に恥かしい——。

今夜は月も星も可愛らしく薄く光つてゐます。もし又お目にかゝれるとして、あゝ私はどうしたらいいでせう。私の肩をあなたはもう知つていらつしやいます。世界中であなただけが。今日まであなたのために私の肩を穢さずに置いたのは本統に嬉しうございます。でもなんだかお目にかゝるのが辛いやうな気がします。きまりが悪くつてならないのですもの。

不安な二日をやつと送りました。手紙を書きたくはございません、でももうこれ以上書かずにゐられません。今度お目にかゝつて小鳥のやうにおしやべりしようと思つて、云ふ事をためてゐました。でもかうして一行でも書けば少しは氣が済みます。

一體何を考へ、何をして暮してゐるとお思ひ？ 何一つ致しませんが、考へてゐる許り。しなくてはならない事澤山積つてゐますけれど、一人で考へて許りゐます。男の方は生活しなければならぬ。けれども女は一度人を思へば、懐かし、忍んで許りゐられるといふ幸福を持つてをります。つくづくさう思ひます。私は十分仕合せです。あなたは一概に私のやうなものでもお却けになりませんでしたもの。私はそれだけで満足してゐなければなりません、が、もしも、少しでも愛して下さるのなら、どんなに嬉しいか分りません。あなたの御言葉は嬉しうございました。きやうだいのやうに？ 本統にどうぞ、私もさう望みます。それが一番いいのでせう、きつと。……私はひがまずにさう思つてゐます、きやうだいのやうに、あなたは私を愛して下さるつて。

あなたが私にお厭きになつた時あぢうに致しませう。あなたは自分の事許りでなく、私の一生のためを考へてやるとおつしやつて下さいましたね。だから私も私のためよりあなたの事を考へたいと決心いたしました。でもあの晩あの北方の井戸で水を飲ませて下さつた時からして戀し、——私のもつてゐるだけのいゝ

もの——青春、ただそれだけです、それを總て差上げて終つて、戀死に死にたいと考へました。お笑ひになつてはいやです。でも本統に私は泣きたくなりました。あなたが知れないやうにそつとあの時泣きましたのよ。

私はもう外の人には誰れにも目を向けません、積りで。十四五になつた頃から私を見る人の目に氣付き初めました。けれどももうあなた一人を之からは眺めてゐませう。私があなたより先にあなたをお慕ひ申したのは私が悪いのですから、たゞ少し許りきやうだいのやうに愛して戴ければそれで嬉しい！

でもあなたがお厭だとおつしやればいつでも私はあぢうをいたします。そんな先の事考へると悲しくなりますから、今は今の幸福だけを思つてゐませう。私は何といふ仕合せ者でせう！このやうな仕合せのあとでは、きつと不幸が來ませう。けれどもそんな不幸は百よつても今のこの幸福にはむかへません。あなたは妙に私をよく見て下さいますのね、わかつてゐて下さるやうなね、それが嬉しうございます。

あの日も私が叔母に誘はれてほてるの、食事に行かなかつたら、あなたが御案内して下さらなかつたら、公園の出入を避けて海へ出なかつたら、

もしく惨めに感じられた。色情狂、この言葉を出して、誠にしてみた。

長者橋の河岸に沿つて歩いて行つた。常子を忘れようとしてみると、直ぐ今度は夏の誘惑に陥つた。それは段々彼の近づいて行く地の上にある誘惑だった。岸に近く碇泊してゐる荷船の弱い燈火が水の上で動いてゐる。船頭一家の眠は彼に夜の更けたみだらしをしみじみ思はせた。身にかけるものもあるかないかのやうな夏の闇の有様、その中に夏子が寝苦し相に眼をねむつて彼を待つてゐた。

その部屋は庭木戸を入つて一番奥まつた六疊だった。杉、あすなろの植込の間を飛石傳ひにそつと兩戸を叩く時の物恐れ、物恐れに伴ふ楽しさは五年の長い間いつまでも相應の新鮮さと刺戟を失はせなかつた。女を盗む樂みにも、物を盗む樂みにも、牢獄の恐怖を忘れさすほどの同じ強さの力が清んでゐた。

いつの間にか彼は例の交番の前まで歩いて來た。五年前のあの夜のこと、この交番の赤い電燈が身體をぶる／＼とと戦かせるほどの恐れを與へたこと、その追憶は今ほもう彼を苦笑せしむる役にしか立たなくなつてゐた。その角をまがりさへすれば下田の表門は日の前にあつ

た。彼は交番の方を見ながら角を曲つて表門の溜戸に手をかけてみた。締りがきちんとしてあつて、扉はがたんと動かなかつた。清はそこでこのまゝ歸らうとも一度思ひ直してみた。

下田さんに對してはその方がいゝ。さうだ……然し、然し奥さんには？……下田さんには又濟まない。でもかうして連れをまいたま

ま明日になつて終へば奥さんはきつと怒む、どんなひどい實際以上の邪謀をして吾々二人を怨むか知れない。それが彼のやうな男には我慢できない苦痛でもあつた。

表門の二三間先から露路へ這入ると、そこには勝手口の裏門があつた。旧人の歸り待つたためか、それとも彼を待つたためか、清は明けたまゝになつてゐた。引戸は案外大きな音を立てて暗闇の中にあいた。

三

事務室の大きなびゅうろを前にして廻轉椅子にをさまつた中根清は、先づ何よりさきに今交關脇の來信函から持つて上つて來た數通の書信を閲した。水色の西洋封筒に「TS」とのみにちあるを認めたのは直ぐ彼の心をときめかし

た。事務的な數通の書信にざつと目を通すと、最後にその水色の封筒をとりあけて、重さを一寸計つてゐた。これが當子から受取る第六番日の手紙であつた。

なつかしい清様、これからかう書くのを許して下さいませ、よろしうございませう、今日まで手紙をさしあげませんでした。今夜初めてかきます。

御手紙は今朝ほど頂きました。朝早く第一の配達で七時半から八時までの間、その頃私は髪を結ふりをしてをりました。店の上り框に小僧が置いてつて呉れたのを横目で見たが、帯をしめました。お願ひした時間に出して下さつたのね。直ぐにも手が出したいのを、ちつと控へてゐましたの。悲しかつたり、嬉しかつたりするの、母のそばでは困ります。人であつて讀まなくつてはなりませんからね。幾度椅子段の上から帯をしめながら封筒の字をのぞいてゐたでせう。でも一目で分りました。それから二階の私の部屋へ行つて封を切りました。遅くなつたのをそなたに心配して下さつたのですか。本統には難う。内の方は下田の

日を反射させて、まるで磨いだ計りの刃物に鈍
のあたつたやうな黄色、橙色がざらりとしてゐ
た。大きな北方の溪、ぶつふの丘、電車の中の
乗客の鼻の下の反射まで、悉く同じ色で染つ
た。女異人等のひらくさせる扇子も光つた。

三溪園の土はまだ盛にほつてゐて、蓮は病
み疲れたやうなあくどい匂を沼の畔りに漲らせ
てゐた。それは彼の神經を極度に刺激し、炎熱
の火事場、そんな息苦しい場所へ行合せた迷惑
さと思はせるほどだつた。彼はひとりりで青い
影を求め、待合軒の裏から後ろの丘へたどつて
行つた。蟲喰のない梅の青葉で埋まつた丘の小
徑には人影も見えなかつた。

その捨石に腰をかけてみると、來た甲斐あ
りと初めて思はれた。同時に彼にはかうして一
人になる事はその本來の性質に合はなかつた。
人を見ず、人に見られずにゐるのは物足りなかつ
た。で常子の手紙を読むといふ實際的な散歩
の目的に頭は直ぐいき初めた。目前の雑念を離
れ、何程か深みのある冥想に耽るといふやうな
経験は、他人の事として書物などで讀んだ外に
は自分ではまだ一度も味つた事すなかつた。

もう一度今朝の手紙を一字一句残さず繰返し
て讀んでみた。事務的な習慣から時計をはかつ

て十分かゝると思つた。(もし病ほどの熱心がある諸
君は讀み込んで見るといふ) 常子のペン文字は可な
り讀みづらく書かれてゐたためでもあつた。

「それほどでもない。どこか誇張したやうな
所、虚とらしい所がある。」さう清は思つてや
や寛ろぎを得た。然しどこまでが眞實で、どこ
からが嘘だらう。彼女の唇はまだ誰れにも穢
されてゐないといふが、……もつと進んで考へ
れば、果してまだ處女の誇を保つてゐるのか、
それさへ疑はれた。彼女がもう處女でないな
らば、さうあつて欲しいと望む我慾、それを
清は人のやうに、ある反省にまで持つて行かな
かつた。近頃流行る人道主義的な雑誌の一冊で
も讀んでゐたら、それ位の道徳心は養はれて
ゐたのだらうが。

彼はこの手紙と一緒に持つて來た、……
夏子に連れられて初めて常子を訪問した頃即ち
三月許り前からの手紙五通をひろげて、順々に
讀み出した。それによつて常子を思ひ出し、甘
いせんちめんなるな追憶にひたつてみたかつた
許りに。

唯今は失禮致しました。全く思ひがけない出

來事でございました。確にお話も致しませずお
詫の申上げやうがございません。折角遠方御越
し下しましたのに、

お名前には疾から存じあげてをりましたし、餘
所ながらはいつとも御姿を拜見してをりました
が、こんな突然お日にかゝる事が出来ようと
は存じてをりませんでした。

あなた様の装束をどんなに尊敬してをりま
したでせう。今後とも御役に立つ事があれば御
遠慮なく御申付け下さいまし、何んなりと喜
んで御用をお勤め致します。

慈善切符は母とも相談致しまして、出来るだ
け澤山御引受け致しませう。さうして今度の日
曜を樂みに待つてをります。

一時間前宅へ御出下さつた事まるで嘘のやう
でございます。初めての手紙にこんな事まで申
上げどうぞお許し下さいまし。

では御成功を祈り上げます。

五月二十五日

つね子

中根様

御禮の御手紙を頂き恐れ入りました。どうも
微力で折角の御酬いするほどのこと

つたら、船から上つて谷戸橋でそのまゝお別れして終つてゐたら、夜にならなかつたら、海岸通りの火花が初まらなかつたら、連れの方々に分れ分れになつて終はなかつたら、人と人との雑沓で私達もみくちやにされなかつたら、……とさう思ひます。ことによつたら故意に私が皆なをまいて、あなたと二人限りになつたなどと叔母は邪推しないでせうか？……さうして私を怒まないでせうか。清様、……私皆んな知つてゐますのよ。

あらこんな事申上げてお怒りになつては厭！では又きつとお目にかゝれるやうに。どんなにきまりが悪くつても、お目にかゝるのはかゝられないのよりずうとくようございます。ではさやうなら、お休みなさいまし。

あなたを思ひながら。 つね子
七月四日

彼は読み終るとはんかちいふを取出して顔の脂汗を拭つた。意味の解らないやうな一種の壓力に彼は頭を押へられる苦しさを感じた。思はず手紙を疊んで封筒に藏めると震へる手先で、それをびゆらおの奥へ押しやつて一つ深い

溜息をついた。もう一度それを讀み返す勇氣が無いほどの弱々しさをどこかに彼は感じた。

Horrible!

さう云ひながらある物憂さの身體を起して、西側の窓を明けに行つた。港の廣々とした青硝子のやうな波の上から幽かな海の響を混へた風が吹き込んで來た。彼は蘇生するやうな思で呼吸をした。

遠く眺めると今日も快晴。ぐらんどほてる前の東波止場に幾十のよつとが帆を張つたまゝ泊つてゐる。三角な帆は烈しい夏の陽をうけて目映しい極白と熱とに燃え耀いてゐた。

四

總領事一家は愈々明朝、函根の湖畔へ避暑するといふので、この二三日は少し多用だつた。度度書記官のB氏や、Q氏と一緒に領事の部屋へ呼ばれて行つて、留守中の仕事をぶひつけられた。實際にする仕事は彼のが勿論一番多かつた。學校を出て僅か五年の間に、今日の位置を贏ち得たのは、いかに平凡な事務をも厭はない彼の勤勉さと、温順で盲從的なその性質に由つたが、一つには外國語の達者なのが少なからず彼を幸

ひしたのだつた。外國語の達者は彼の頭といふより、その耳にあつた。耳のいゝのは遺傳的にも、家柄にも、幼少からの鍛錬にもあつた。

その日はそんな雑多な事務でまぎれた。然しなんとなく一日を憂鬱に過した。それは彼にとつては珍らしい事だつた。五時頃、もう片影が出来てから、橋際の領事館を出た。れいすや、眞珠の飾や、貝類、果眼細工、繪畫書、寫眞、びか／＼光らせた眞鍮道具、漆器、女服の仕立屋、西洋家具などの並んでゐる街の間を元町停留所の方へ歩いて行つた。日本人より支那人、支那人より西洋人等がより多くその狭い往來に群り、日のさめるやうな流行を街一杯にひろげてゐた。彼は杖をふる手をやめて、時計を出して、陽明の高さを店の屋根の上に眺め、久しぶりで三溪園の方へ行つてみたくなつた。で、ふじ屋に入つて米つた飲料を取つた。

本牧行の電車は込んでゐた。後ろの車掌臺に立つて異人や女異人の異つた匂の間に、さまつて、潮味といふねるを通つた。彼は内かくしに入れて來た常子の手紙を着物の上から無意識に一すきはつた。堅い西洋紙の角が明かにその指先にふれた。とんねるを出抜けると港外のはまともに西

た。再びお目にかゝる機会が近くあらうと思つてをりませんでしたので嬉しうございました。でも雨か、晴れかと昨日から今日の日曜を案じ暮しましたが、今朝のうちは雨、細い雨が霧のやうに降つてゐましたので、私はもうすつかり、あきらめてをりました。

もしあなた様が御見えになつたらと店のものに頼んで白金の教會へまゐりましたが、何んにも身にしみませんでした。いつだつてもたじ好きな歌を唄ひ、好きな人々の上を護つて下さいましと祈つてくるだけなのでございます。いつもは姉や母やお友達の事を祈ります。今日はあなた様のを祈りました。

教會から歸りましたら、御出がなかつたといふのでやつと一安心致しました。

午後の一時間は三時間位に思へました。その間もう一度邯鄲を読み返さうとして讀本をあけたまゝぼんやりしてをりました。したらお聲がきこえました。私は邯鄲の枕に一寸よりかかつてゐたやうな心持がしてをりました折なので、本統に嬉しうございました。

それに綺麗な花束を有難う存じます。どんなに嬉しうございませう。思ひがけなかつたのですもの。枯れたり凋んだりしては厭でございませう。

す。眺めて許りをります。

一寸いらしつて御用だけで、直ぐ御歸りになりましたので、それに下田の叔母と御一緒だったので、頭の中はいろいろの事がごたく／＼して何んにも考へられません。これ切りもうお目にかゝれないものと思ふのはつらうございます。又何かそのうち次の御用が出来ればいゝと思つたりして。

私のやうなみつともないものの寫眞をおとり下さいまして、どんなにをかしく、みにくく出来る事でございませう。お恥かしくてなりません。どうかあの寫眞が駄目になつてほしいやうな、よく寫つてほしいやうな心持が致します。それよりも私はほかにほしい寫眞がございすのよ。

もう横濱へ御歸りになつた時刻でございますね。叔母の處へ遊びに參ればお目にかゝれませうか。それなら私參り度く存じます。

又何か御用をさがして御云つけ下さいまし。今日お目にかゝれた事うれしうございますが、頭の中がごたく／＼して何も分らなくなつてをりますから、私のした失禮な事みなお許し下さいまし。ごきげんよう。

六月十五日

常子

御手紙を懇々有難うございます。唯今までそれを顔にあてゝ泣いてをりました。

一昨日お目にかゝつたのは幾ら考へても嘘のやうに思へます。でも色々の事柄がはつきり目に見えるのでございますから本統に違ひございません。昨日も今日もあなた様の事許り思ひつづけてをりました。私は今世の中で一番々々幸福なものと思つてをります。その幸福は死ぬまで續くものとも、また續かぬものともまるでそんな事は考へないでをりました。けれどもよく考へれば直ぐ分ることでございます。

あなた様のやうな方に一生親しくさせて頂く事は、又私だつていつまでもこのまゝでゐる事は、出来るものではございますまい。さう考へただけでももう悲しくなりません。

あなた様が永い事おつきあひしてゐるとおつしやつた叔父が羨ましくございます。叔母が羨ましくございます。羨ましくございます。あなた様にお目にかゝりました幸福は私のこれから先きの生命よりも必ず尊いものと思つてをります。

今までいろいろの人を見ました。又私に思

が出来ませんでつらう存じます。それにあんな御禮狀で、常はたゞもう喜んだと思召し下さいませ。切符の勘定書は別に差上げさせます。今度の事を友達仲間へ話ししたら、きつとあんなに中根さん、中根さんで申してをりました私の願が、とう／＼肩いたせぬだと申しませう。私の誠實の無駄にならなかつた事、それが嬉しうございます。

一昨日の邯鄲なんといふ御立派な御出来榮でございましたらう。「浮世の旅に迷ひきて迷ひきて、夢路をいつと定めん」あの次第のなだらかさ、雄々しい御聲のうちに、な／＼／＼したさむぼりつくな暗示が、一曲の背景になつてをります、楚の國羊飛山に近い、邯鄲の里に私共の魂をつれて行つて終ひました。

「一村雨の雨やどり、日はまだ残る中宿に、假寝の夢を見るやと」邯鄲の枕に就かれる所、盧生といふ少し粗暴な、でもどこかに熟のある求道者の書齋でもしてみようかといふ、やゝ投げやりな気分が大まかで、無雜作に出てゐてなるとも申されませんでした。

楚國の帝位に即かれ、凝光の都喜見城の榮華と、仙家のこんづ、かうがいゝ盃に一千歳の壽命を享けられる夢の段では、「御身代をもち

給ふべき其瑞相こそまします。」とたゞへられになるあなた様のあの時の威嚴貴祿は思はず私の襟を正させるほどおごそかでございます。

粟飯が出来たと知らせに来る、宿の亭主の扇子の音に、「盧生は夢さめて、／＼、五十の春秋の、榮花もたちまちにたゞ茫然と起きあがる。」一炊の夢幻劇、今までも私はずんぶんやたらに能を見ましたが、こんなに深い空想の世界へ導き入れられたためしはございませんでした。あなた様の藝術は何か特別な暗示の力を持つてをります、あなた様にはそんなおつもりがなくつても、見てをります私には本統にさうなのでございます。

私などがあなた様の藝術を批評するなんて、何んといふなまじきでございます。けれども私は眞面目で申上げてをるのでございます。本統にさう思ふ事でなければ私には一行も書けませんのでございますから。

もうよします、いつまで書いても、私が今まであなた様に抱いてゐた尊敬の情は書ききれないものではございません。

私のやうな感じ易い、ふる／＼易い心のものは、世間がそれだけ恐ろしいでございます。この方はいゝ方か、お慕ひする價值があるか、ない

か、それをどの位考へ抜くでせう。こんな事これはあなた様へ申上げないでいゝ事でございますが。

あなた様は外にも澤山私のやうないえそれ以上の崇拜者をお持ちでございます。けれども私は一向かまいません。私は私一人で勝手にあなた様の御榮え遊ばすのを蔭から祈つてゐればいゝのでございますから。それだけならばあなた様の御許しはなくとも、御迷惑のかゝる事でなし、私は私で許してもいゝと存じてをります。

女の方としてこんな事申上げるものでないかも知れませんが、あなた様は一面藝術家でいらつしやいます。私は觀衆の一人として感じたまゝを申上げるのでございます。どうぞお許し下さいまし。

今夜はもう皆休んで終ひました。大層おそくなりしましたからこれで失禮致します。

六月三日

つね子

中根清様

先程は御出下さいまして有難うございまし

後姿でも一寸した横向でも、いつもすつかり胸の中には壘み込まれてをりました。あなた様が初めて「して」をなさいましたのは××での夜計會我ではございませんでしたの？ そんな事を見物の人達が話合つてをりました。あの時の感動は忘れも致しません。白刃を提げて「あらおびたゞしの軍兵やな、我等兄弟うたんとて、多くの勢は騒ぎあひてこゝを先途と見えたるぞや、十郎殿、十郎殿、何とて御返事はなきぞ十郎殿。」あの時の血腥い殺氣を帯びた雄々しいお姿！ 御所の五郎丸が薄衣引かつき、唐戸の脇にたゞずむのを「まことの女ぞと油斷して」一瞥を與へてお通り過ぎなさうとする一瞬間の情味！ あゝした藝は殊に若い娘の心を引きむしるやうでございました。でも千手のやうなもの、班女のやうなものもあなた様のなまめかしい、艶つばい藝風は御成功なさいます。「重衡興に乗じ琵琶を引きよせ彈じ給へば、また琴の緒合に、合せて聞けば、峰の松風かよひ來にけり。琴を枕の短夜の轉寝夢も程なく東雲も、ほの／＼と明けわたる空の、あさまにやりぬべき、あさまにやなりなんと。」引離るゝ袖と袖との露涙は本統に、重衡と千手の別れほど私にその慕切れが残り惜しうございました。

班女でも、「さびしき夜半の鐘の音、雞籠の山に響きつゝ、明けなんとして別れを催し、せめて聞る月だにも、しばし枕に残らずして、又ひとりねに成りぬるぞや。翠帳紅間にまくらならぶる床の上、なれし会ふの夜すがらも、同穴の跡夢もなし。よしそれも同じ世の命のみをさりととも、いつまで草の露のまも、比翼連理のかたらし、其驪山宮のさゝめごとと、誰か聞きつたへて、今の世まで漏らすらん！」あの「中の舞」の流暢さ、女でありながら、これ等の女の幻にひたすら憧れ得る感激の深さは、全く藝術の賜物と涙を流しました。然しこの二月、月並會での濫い芭蕉も誠に結構に拜見致しました。一芭蕉に落ちて松の聲、あだにや風の破るらん。」風が窓から吹込んで燈火の消え易い、月がもれて眠りにくい、楚國小水の法華持經の山居の有様は私のやうな若い女の身にとりまして、縁遠いものに相違ございませんが、女人草木一切成佛するといふ華嚴經品の諸法實相の御教は宿びた藝術の匂に包まれてまことに「思ひの家ながら、火宅を出づる道」を暗示されるやうに私にも思はれました。「さと思ふな女として、さなきだに、あだなる芭蕉の、女の衣は薄色の、花染ならぬに、袖のほ

ころびも恥かしや。それ非情草木といつば、誠に無相真如の體、一塵法界の心地の上に、雨露霜雪の形を見ず。の段或は「面影うつる露の間に、山おろし松の風、吹き拂ひく、花も千草もちり／＼に花も千草もちり／＼になれば、芭蕉は破れ残るといふあの邊の幽玄な舞は全く夢幻的な現象の世界に私を連れて行つて終ひます。私があなた様によつてあんな藝術に接すると、あそこへ枯れた山の背で生命の炎が點ぜられ、玉林の中の新酒が沸返るやうにしか思はれません。」柳は緑、花は紅と知る事も、唯そのまゝの色香の、草木成佛の國土」がもしあるものならば、それが一番嬉しうはございせんか。

私は少しづつ、ほんの少しづつ、西洋の歌を叫ぶのを稽古してをります。謠曲とは全く異つた感覺を持つたものでございますから、能といふものの作り上げるあの舞臺の上の幻覺は私にとりまして誠に不可思議な力でございます。私にく恍惚の世界へ誘ふのでございませうか。

あなた様には私の心がお分りでございますか。自分の手をつれた事のないのは本統に驚異でございます。あんな單純な線だの色だの

をかけてくれたかと思はれる人も少しはあつたやうでございます。私からもさう云へば云へる人もございます。けれども私ちつとも驚きませんでした。いつもちつとしてゐて微笑んで許りをしました。

ところが私はあなた様を知りました。あなた様がたとへ能樂の歴とした家柄にお生れなならず、その藝の奥義に達せられず、お若いのに一角の立派な位置にお出にならずとも、私はきつとあなた様をおなつかしく等しい方と思うたでせう。それだのあなた様はあれほど豊かな天分を持つていらつしやいますんです。

どうぞ私の無作法をお許し下さいまし、あなた様に申し上げないで私は誰れに申しませう。悲しい事、辛い事、それを私は今日まで一人でちつと堪へて参りました。考へてみれば又これから先もさうせねばなりませんまい。

私はあなた様にお目にかゝらうなどとは夢にも願はず、唯他所ながら舞臺の上のあなた様をなつかしんでをりました。それがさも譯もなくお目にかゝれる事になりました。これが私の幸福の總てでなくてどう致しませう。

頂きました花が少し洩みかゝりました。枯れないやう凋まないやうにと氣をもんでをります。

す。でも、それがどうして出来る事でせう。私の好きな西洋せきちくは懐かしげに匂つてをりますし、だりあもまだ呼吸をしてをります。今まで知らなかつたやうな愛を花に注いでをります。

この一月程の間私は割合に自由がきゝました。それは兄が留守だつたからでございます、けれども今夜兵營から兄は歸つて参りませう。でも私はまだもう二度位お目にかゝれ相な氣がしてなりません。私は既にもう二度お目にかゝれました。これすら望外の喜でしたのに、もつと／＼お目にかゝり度いのでございますもの、本統にいけないつね子でございます。私は何も／＼考へないで前の通り小鳥のやうに微笑んで許りゐたらよかつたのでございませうに。

知らず／＼こんな慎みのない手紙を書いて終ひました。きつとお讀みになるのがお厭でございます。私の心なく申上げたこと、どうぞおさげすみ下さいませんやう、お忘れ下さるやう、御慈悲でございます。

六月十七日

つね子

(その次は祝賀祭の、週間ほ前に來た手紙)

急に大變おあつくなりました。もう本統の夏でございますのね。お障りもございませんか、私少し暑さ負けしてしまつていけません。

また今日も手紙を書きます。お邪魔だからと思ひながら、つい書くやうになりますの、欠しぶりですからお許し下さいまし。

私はこの間、まだお目にかゝらない前のあなた様に關する記憶を書き集めてみました。その中には日記の中からの抜書もございます。ここに書き切れない位の分量がございました。

一番早い記憶に残つてをりますのはあなた様が××堂でなされた春榮でございます。私はまだやつと十位でもございましたらう。あの時の「して」は此間亡くなりました××だつたと覺えてをります。あれが私の能を見て泣いた最初の記憶でございます。草色地の錦小袖、白の大口、

本統にりゝしい美しい御簪子で、増尾の太郎種直の愛弟、宇治橋の合戦に生け捕られた春榮殿は、御年恰好といひ、御器量といひ誠にこんなでもあつたらうと今だに思ひ出します。

それから春秋、年に二度か三度はきつとあなた様の御姿を舞臺の上で拜見致しましたから、

在や、その日歸りの客が狭い道をやらと自動
車、人力などふさいでゐた。白百合の盛りで
山も溪も賑かに見えたやうに、暗い道筋の岸も
都から來てゐる女客の派手な浴衣で明るく思
へた。どこへ行つても先づ清達の目につくもの
は白百合のやうな女だつた。

早雲寺や、玉垂れの瀧へ廻つて時を作り、×
×へ行つた。B氏はもう五十近かつたが獨身で
もあり、清をいゝ遊相手にしてゐた。やがて
顔なじみのある腐りかゝつた果實のやうな女が
二三人その座敷へ呼ばれて來た。

外の女がそばにゐる間、彼は常子の事をあ
まり思ひ出さなかつた。でも翌朝湯本を立つ時四
五枚の繪葉書を書く事を忘れ得ないほどには思
出した。夏子、常子、静江、貞子、お梅、だれ
も捨てがたく、だれもそれ／＼の情けを持つて
ゐるやうに思へた。彼は一人一人にふさはしい
文句を選んで書いた。十四五の時から清はその
實父や周囲の感化で既に既に復讐の戀を習ひ
覺えて終つてゐた。

その木曜日、彼は家で常子の手紙を受取つた。
家の方へ寄越す手紙はなるべく歐文か羅馬字で
書くやうにとふつたのを彼女は忘れなかつた。
清の母は無斷で時々女名前の手紙を開封して

みた。もしそれが清の身のためによくないやう
なもの——他所の細君との逢ひとか藝者からの
呼出し状のやうなものであれば、黙つて焼捨て
て終つた。彼は母に面と向つて何一つ怒れるや
うな男ではなかつたが、この無鐵砲な戰略に
は時々當惑してゐた。

Natsukushii Hakons kura no ohagaki
arigatō. Atsushi wa donnani odoroki-
mashita desho. Ano hoteru ni irashitta
no desu ka? Mā chittomo shirimasen-
deshta no yo. Sugu soba no Sokokura
ni atsushi mo anitachi to itte imashita
no ni. Keredo kore mo sekumereta
koto desu wa ne. Demo atsushi no koto
omoidashite kudashimashita no? Arigatō.
Moshimo ome ni kakureta no deshitara
donna ni ureshikatta desho.

Kondo no Sunday bontani ome ni ka-
karenu na? Uso de nai no? Atsushi uteshi.
Tango wa tsukku tsunori desu; ke-
redomo gogo de nakareba chotto dō de-
su ka?

Murimi ome ni kakurita nado mōshi-
masen no yo; atsushi itko desu kura.
Tada otsugō de; soshite oiya de nakareba
sō onegai itashimasu no; gozen demo ii
kamo shirenai wa. Moshi ome ni kaka-
retara sore ga mō saigo to omoimashō
ne.

Kakimurenai no!e donnani jiretai
desho. Demo hajimete Rōmaji ga suki
ni nrimashita no yo. Fushigim mono
yo. Muchigaidarake desho? Owarai ni
natte wa iya.

Dewa kore de sayōnara. Minna ome-
moji no uede. Gokigen yoo. Sayonara
a a a.

Tsuneko.

彼はこの手紙に對し次の十二日の日曜、午後
一時頃迄に品川の停車場へ行くといふ返事を書
した。やうしてその日が仲々待遠しかつた。祭
りの日の記憶はもう既に薄れて終つてゐたが、常
子の手紙は荒んだ彼の心に、外の女の持てない
誘惑を感じさせた。それが清に珍らしく嬉しく

が、普段全く意識にない世界を私のうちに有
有とつくるのでございます。私はまぎ／＼とそ
の世界を感じます。私の空想は若く生々して、
少しも鈍つてはをりませんもの！

今度の横濱の御祭に叔母が来いと申して呉
れます。参りませうか？ お目にかゝれますこ
と？

もう一度でいゝからお目にかゝりたいと
先日申上げた事を考へると顔が赤くなります。
本統にさうは思ひますけれども、思つた事をそ
のまゝ申上げるといふ無様はこの世の中の掟
ではございせんもの。どんなにお目にかゝり
度くとも、そんな事は申さないもの。私もう我
儘な自分勝手な事申上げせんもの。ですから今
日までの事お許し下さいまし。その時さへくれ
ば、又お目にかゝれる事もございませう。やつ
と近頃はさう思へるやうになりました。

先月頂いた花が散りました頃、こんなものが
出来ました。をかしいでございませう。

小さな蟲が空で

あつゐ、あつゐ
眞實中の空で。

あなたはどこ？

空にでも、そこにでも、
こゝにでも見えますわ。

あら小さい蟲が
戴いた紅い花へ、あゝ花もしぼんだ、
私のやうにもう。

きのふは消えた
今と思つたきのふは消えて終つた、
花も蟲もさう云つた顔よ。

い。
こんなもの取かしいから、どうぞお破り下さ
い。

六月二十四日

彼は暫らくうつり考へてゐたが、その捨
石を立上ると同時に、どうしてこんなまことら
しい、口からでまかせの嘘が書けるものかしら、
と呟いた。嘘だ嘘だ、皆んな嘘だ、さう思返し
ながら、名前や、人に見られて困るやうな部分
だけ丁寧に破り取つてあとをずた／＼に引裂い
てみた。さすがそれでも惜しい事をした
やうな心残りがあった。で歩きながらその紙切れ

を一枚一枚讀み返してみた。

「手紙に顔をあてゝ泣く——かゝつたのはいくら
考へ——やうに思へますけれど——こんな一片があつ
た。「もう一度でいゝから——申し上げた事——
——あります。本統——だと思つた事」「にかゝ
れないもの——うでございませう——のやうなも
の——だのに本統——どの紙切れにも、どの紙切
れにも同じやうな言葉が繰り返されて来た。

彼は何んだか少し面白くなつたので、それを
小徑のあちこち、清浄な地の上や、戀人等がそ
つと立寄り相な場所を人念に見つけないがら、五
六枚づつ方々へまき散らして行つた。桃色、水
色、薄紫、乳色、この戀文の散華はきつと自
分以外の戀人等にある軽い歡びを與へ得るだ
らうと思つたりした。

戀する人皆に皆に、歡びあれ！ さう云ひな
がら戀の散華をまいて歩いた。

五

翌日は日曜なのを幸、清は日記官と一緒に
行つた。そこはほてるで中食し、三時頃からぼ
つ／＼賑しい早川沿ひの坂道を下りて来た。滯

あとの一月、もう外出しないから今日だけ出して下さい。兄に頼むつもりです。こんな欺りを兄や母に云ふのが一番辛いけれど、それも我慢します。

今何していらつしやるの？ 私にはあなただ

けを思つてゐるのに、あなたはさうぢやないのね。一寸口惜しい！ つねは可哀想ではないこと？

私はあんまり派手過ぎて人目につき易くていけませんね。桃色の日傘なんか持つて。でもぢみなもの持つてゐないのですから仕方がない。我慢しておつき合ひ下さいね。

今度お目にかゝれても遠い先の事ね。お別れするとすぐ又逢ひたくなりますから困ります。

七月十五日

つね子

唯今までお店の奥で頭を押しつけてちつとしてをりました。もう之であちうかも知れないといふ、不吉な豫想で青ざめながら、あの日の事許り思ひ出してをります。

この二三日は涼しい風の通る部屋で一人留守番をして着物を縫つてをります。誰れもそばに

来ませんから、膝を崩したり、足を一寸横へ出したり、考へたり、ぼんやりしたりしてゐても何んにも云はれません。その代り縫物はちつとも捗りません。

縫ふ手を休め

その手を合せ、

つい拜むの、

叱られる許りで

よるべない心は

ついいのるの、

もうあぢう？

たつた一度

たつたもう一度、

縫ふ手を休め

その手を合せ、

せめて祈るその悲しさ。

なぜ御手紙が来ないだらうと毎日待つてをります。郵便は一日に大概六度配達されます。その時間もうちやんと分つてをりますから、大

丈夫私の手でお受取りします。なぜ来ないのかと郵便屋が怨めしくなります。自分を無望と知りながら、戀しい御手紙が早く頂きたいのですもの。どんなに戀しいかあなた御存じ。

七月十七日　小さい　つね子

今から和歌の會へ参ります。あなたが戀しい。

私ばんやりあの日を考へ出してをります、生れてから一番楽しかつたあのお祭の日を。いつでも忘れません。

今日は昨日よりずつと私きれいです。もしこれがお目にかゝりに行くのだつたらと思ひます。

七月十八日

取りいそぎ認め申候。

昨朝の御手紙にて、御言葉通り、折角の日曜の御約束を取消しに致し外用差控へ候處、あなた様は又御出かけに相成り候。由の御手紙今朝ほど拜見　萬一をあてにしてやはり参

り候へばよりしにと驚き、悲みに氣もみだ

響いたのだつた。

今日のたなばた様がお恵み下さいました。此間はほんの僅かなところでお目にかゝれなくなるのでした。私ももう歸らうと思つてゐましたの、もう三時過ぎてをりましたもの。叔母が御引留めしたのでせう。厭な叔母さんね。でもよく来て下さいましたのね。

けれどもさうとは知らず別にお怒りもいたしませんでした。きつと何かお都合が悪いのだからと存じてゐました。でも私は待合室の中で青ざめてゐましたでせう。遺棄ない氣がしてゐましたから。いつも恐しい時は知らず識らず祈禱のまねをするのですけれど、このやうな邪な行爲のための幸福を祈る氣にはなれませんでした。祈らうとする瞬間目が覺めます。きりすとのきびしい目をふつと思ふと顔があげられませんか。よるべないやうな心持の私です。それをちつとなら愛して下さるとおつしやいますのね。なぜ御言葉だけでいいから、たくさん愛するとおつしやつて下さらないの？ 私はあるたを戀した事だにも悔みません。却つて祝福をります。けれども不幸な戀だとは考へて

ゐます。あなたも御迷惑でせう。私も、私の最初の戀がこんな罪に似た思をしようとは考へてゐませんでした。私は前世にきつと何か重い罪を犯した者でせう。

何も知らない肉親のものに濟まないと思へたり、一度でもあなたと御一緒に通つた道は再びもう通れない氣がしたり、随分世の中が狭くなりました。叔母にも心の中では泣きながら御詫びしてをります。私そんな悪者ではございませんのに、こんな悪者になつて終ひました。あなたのお思ひになるよりもつと／＼初心な者です。皆んな戀がさせる業です。私があるに戀をしかける、そんな事をあなたに考へられるのすら苦しいございます。あきれたものだとおさげすみなさつていらつしやるに相違ありません。けれどもそれが私にとつてなんでせう、私盲目ではございません。

あなたの今朝程の御手紙、もうこれぎりのあぢうぢあないのかと思ひましたら、今まで堪へてゐた涙が一度に流れて、胸は板のやうに切なくなりました。

鏡に寫る私の眞青な顔にはもう紅い帯も、藤色の襷も、お白いも、帶止めも何一つそぐはないやうに思へます。けれども私を聞分のない我

儘者と思つてはいやです。どんな事でも私は同じ年頃の人より、よく飲込める積りです。決してあなたの御邪魔にはなりません。あぢうを申さなければならぬ時がくれば、きつと機嫌よくあぢうと申しませう。來年の春あなたは×國へ御洋行になるのでせう、おかくしになつても知つてゐます。今からその時の覺悟はしてをりますのよ。一月に一度でも結構ですからお逢ひ下さらない？ 少くもそれまでに七八通お目にかゝる事になりますわ。それで結構ですの。長い事お目にかゝらずにゐるのもいけないし、これだけなら決して無理な註文ではないでせう。機嫌よく、楽しくお星様方のやうに静かにそつと。

あの日は僅か三時間許りの間でしたがほんとにいい散歩でした。悪魔に御禮をぶふものでせうか、神様では少し變ですわね。けれど歸つてから一寸いけなかつたのよ。兄に叱られました。私黙つてあなたの事考へてゐましたからさう苦しくありませんでした。私が自分勝手に出歩くてですの。ほんとにさうです、この通り手紙も書いてゐます。ですから又當分お目にかゝられないでせう。私今度又お目にかゝる日が十日目なら、あとの二十日、二十日目なら、

Kimi tsukan toki,

ame hare yo; ame!

Anata wa atashi nado ikura nuretemo
ito omoi nasatta deshō ne? Nikirashii
wa. Momoware mo kowarete shinai-
nashite. Atashi mo nantonaku tsukarete
imashite. Itadaita ano kutanomo, kâsan
to isshoni tabete, "oh oishii, oh oishii"
to itta, kâsan mo oishii, oishii to ji-
nashite no yo.

Iroiro no koto atashi kangemasan;
atashi wa dō shitara ji no desu no?
Atashi niwa wakarinasen no yo. Mata
kurushinashite wa naranai no desu
ka? Nanimo omowanai de tada anata
o oshidai mōshite iru no ga ichiban
tanoshii no. Ome ni kakaru to mata
aitaku narimasu kara komarimasu.

Atashi bakari anata no yume o mite,
anata wa atashi no yume mo nite kude-
saranai no wa kuyashii kara, mō miru
no wa yume ni shinai ô.

Anata to isshō ni mōto nagai nagai
tabi ga dekiteru tanoshii deshō. Demo

sonna koto shitara tuihen tuihen. Tsune
wa sonna koto suru no kowai no yo.
Jiomennasii.

Dewa sayōnara. Oyasuminasai.

(その直ぐ翌日の手紙)

今夜からこの桃色の紙に致します。あやめ色
はさめ易いし申しますから、私達には不占で
ございませう。かうして手紙をかいてゐる間も
気が気でございませぬ。こんないらぬ苦勞を
たんとしなくてはならないのも誰れのためでせ
う。

今日は風がありました、やはり昨日ほどお
暑うございました。あなたは今日も御仕事だら
うと思ひました、昨日の事なごまると知らない
顔なされて！ 私もすましてゐますのよ。

今日から袋に刺繍を初めました。あなたの歌
をぬはうかと考へましたが、あんまりですか
ら止めましたわ。それであなたのお好きな花に
したいと思ひつきましたが、それも知らず、何も
かもやめ、よく伺つて置けばよかつたこと。
今夜髪を洗ひました。もうあんな重い桃割な

どに結つてゐなくともいいんですもの。それに
すつかりこはれて終ひましたもの。やつかいな
髪ね、でも思ひ出の一つなら、可愛い髪よ、や
つぱり。

秘密を抱いてゐるといふ事恐ろしいけれど
も、おもしろい所もあるのね。私がしてゐる
やうな事少しでも内へ知れたらどんなに大變で
せう。私の内の人は皆なきびしい人許り。さう
なつたら私とても内にゐられなくなりませう。
それは知れ切つた事です。私内を飛び出して死
ぬなり、どうなりするからいいとして、どんなに
内であなただを悪い人に思ふでせう。あなたの御
名はよごれて終ひますわ。私それが怖い、辛い、
だから大變な事はしたくないのよ。あなただつ
ておいやでせう。だからそんなあぶなつかしい
事しない方がいいの。でも今にきつと一度は知
れるでせう。あゝ私困つて終ふわ。さうなつた
ら私どうしていいか分らない、まるで子供よ。
どうぞ私をかばつて可哀想と思つて下さい。
私も内果ね、怖くつて震へてゐますのよ。
お日にかゝれば今の青さめた頬も紅く色づき
ます。あなたはそれに青い／＼とおつしやるの
ね。私には譯がわかりませんわ。

七月二十八日

つね子

るゝやうな存候。本統に何と申上げてよき事かと思ひ候。も早や何事も都合よくは参らぬものか、すべて神様に見はなされ候やうにて一向に悲しく候。たゞくあなた様のさうした御心づかひ御禮の申上げやうもなき程有難く存じをり候。

昨朝はその積りにて心がまへ着更へまで致居り候。ものを何故参らざりしか、繰返しく口惜み申候。朝あの御手紙を拜見せし時はがつかり氣ぬけ致し何事も手にさへつかず候ひしものを、やはり私無駄になる事を覺悟して御約束の時間に参ればよろしかりしに候。お断りの御手紙が朝までには着かずやとの御心配から慈々品川まで御運び下され候ひしかと思へば、今は誰も怨む由なく、一時聞早く着き過ぎたる御手紙がかなしくこそ候。

何卒もう一度お目にかゝれるやう御繰合せを願上候。私かく一圖にお慕ひ申上候失禮を深くとがめ給はず、その日と時と處と御示し下され候はゞ間違ひなく今度は参り候。東京中いやな人達で埋つてゐて何處へも私達の参る處なきやう存ぜられ候もうたてし。

ゆうべは夢にまみえ上げ候。まさしくとお目ににかゝりし夢！ あげがたの夢は正夢と申候。

とか、はかなき事も今はたのみに致され候よ。

七月二十一日、月曜

二三日おきに清のびゆらおや自宅にこんな手紙が舞ひ込んで来た。彼にも常子の事はいつからともなくなほざりに考へられないやうな心持がし出して来た。然し役所の方、謡曲の内稽古と出稽古で彼は相應にその日その日を忙し暮してゐたに、夏子といふ人もゐた、その外静江、貞子、お梅、そんな人の事も忘れは終へなかつた。とは云へ常子は水々しい娘だ。静江のやうに苦勞しぬいた女でもなく、貞子のやうに唯だぼんやり育つた御嬢さんでもなく、お梅のやうな黒人でもなかつた。叔母さんの夏子とよく似たやうな烈しい情を胸に包みながら、どこかまだ幼い夢の醒めきれない、自分勝手にさう歩いてもせずじてゐるやうな遺瀨なさが、いつもきまり切つた匂いしない花の様々を嗅ぎあきた彼に珍らしい素馨の香を放つのが常子だつた。彼は初めてその香を嗅いだ日の胸騒ぎを考へ出した。さうして此ちあすみの香にも亦餘り馴れ切つて終はないやうに、遠くはなして置いて、たゞ時々近づけて嗅いでみ

た。まさに咲いた許りの芳烈な花の香はそつと嗅ぐだけで十分だつた。彼はいつまでも軽い接吻で満足しようとした。

六

Natsukushii kata ni;

Sakihoto wa shitsurei itashimashita.

Yōyaku ome ni kakarete donnami
ureshii ka wakarimasen. Kyō wa hon-
toni ii hi deshite wa ne. Negai koto ome
ni kakarenakatta node iyami natte
imashita no yo. Demo kyō wa nanimo-
kumo tsugō yoku itimashita node ima-
mae ni kayashii koto mo miru
wasurete shimaimashita wa, "Atashi wa,
okrasu, otomodachi no toko de ano
fukuro koshirete ita no; dakara osoku-
natta no yo." to sō imashita no. Shi-
karumasen deshite kara dōzo goanshin.
Densha no nakakuni ame ni narimashita.
Yoshi ya yoshi,
mi wa mizu no tomo;
Yokohama ni

も。

さうなると大變、おゝ大變です。

聖なる母、まりあ様、お許し下さい。

私の誕生日覚えてゐて下さつて有難う。うれしかつてよ。どうぞいつまでも忘れないで下さい。私の神、戀人、あなた！

あなたの御誕生日はいつ？ 私内々で知らうと思つてゐたのですけれど分りませんでした。五月か、六月か、その邊があなたに丁度いゝやうな氣がしてゐますのよ。

早く九月になれば、九月になれば、そしてあなたの女郎花を見に行くの、うれしいわ。この秋はきつと仕合せでせうと思ひますの。書間は能く見て、夕方からお目にかゝれば、この上なく嬉しいと思ひます。

なるだけ早く、たゞそれだけ！ ……それと常子をいつも同じやうに愛してゐて下さうこと！

八月三日、その夜。 あなたの 常子

今朝も亦髪を結つてゐる時御手紙をいたゞきました。あなたの御手紙は封を切らない前の方

がうれしくて、讀んで終ふと何とも云へない悲

い心になります。

昨日は寝るまで御手紙を待ちこがれて失望してねました。今朝は多分！と思ふだけで私は

はしやいでをりました。私のこの願がとゞきました。

一つを得て二つを望み、二つを得て三つを望む、このはてしを知らない私の心、今更にこの心がおそろしい。この心が怨みになり

われとわが心の判斷が出來ずに、昨日も今日もかうしてをりました。これから又どうなりませう。もう考へる事も出来ません。物には始め

あり、さうして終りがございます。かうして始めあつた事は、やがてそれだけの終りがございませう。どうか終りをあらせたくない、そして終りの来るやうな氣もいたしませんけれども、

あるふああり、おめがめと眞實の事でせう。眞實の事はきつと私達にぶつかつて來る事でござい

ます。どうしててもやがて終りのあるものならば、せめてはその始めと終りをつなぐ間だけでも

多く、楽しく送りたい！そしてなるべから終りを遠くする事を唯つとめればいゝと思ひ

ます。それだけが私共人間に許された幸福の範圍なのでございませう。

多くの戀の落ち行く處、そこはどこです？

恐ろしい心地がします。もしもそこへ行かなくてはならなくなつたならば、身代りに私一人喜んで参ります。その時こそ私はあなたに立派に

あぐらを申上げて、あなたのあたゝかいお手から脱け出ます。さすが常子は常子だとあなたに

云はれたと思います。あなたを戀し、あなたを愛するのは、あなたを尊びあなたを幸福に

したいからです。さうしてそれがためにはさうしなければならぬものでございます。

果敢ない世の果敢ない戀に命を懸けて投げ入れて終ふこと、昔ならばいざ知らず、今の世の人間には思ひもよりまじい、哀れなものでござ

います。生ぬるい、冷たい戀の道かも知れませんが、それに従ふ事が今日の習はしと思へば、

悪いとも思はれません。かうしてゐられるだけでも私達は本統に幸福でございしますから。私

の心は静さを求めてゐます。他人を戀せず、静かなあなたを戀した事を知つて幸福とも今は

思ひます。然しあなたはそれのおやこしい心から、ある戀する少女を哀れとお思召になつた許

りに、つい、私の方へお傾きになつたのでせう。拾ひたくもない私を失望させたくない許りで、

…さう思ふと心は苦しくなります。どうぞこの事は許して下さい。私のこの罪は必ずい

Natsukushii kata ni :-

Ashta no asa kyôkai e mainimasu ;
keredomo omo ni kakareyo to wa omo-
musen ne. Ano kononita môshingeta
utu no yôni.

Utagurai tasogare no hikari de kono
teguni o anata o omoi nagara kaite
imasu. Anata mo atashi o wasurenide
kudaimasen ? Utsukushiku mo nantomo
nai watashi desu noni. Omo ni kakatte
ashita de ishinai. Ashita wa mata
Sunday ne. Anata o shinjite kono
machidôna nagai nanoka o sugoshi-
mashita koto yo.

Mô kurakutte kakumusen. Tada omo
ni kakaren yôni kore kara oinori
shimasô.

Shizumari kaketa omoi ga mata mid-
resome, waranamu kokoro ni nani
towa osotoshi koto de gozaimasu. Itsu
made kôshite iru wareni desô. Atashi
wa atashi no kokoro o shikatte orimasu

no. Demo sore wa suguni utaru mono
tomo omowarenasen ! Kawaiôna atashi
no kokoro yo.

Anata hitori no Tsune.

(以上 大宮季治氏 羅馬字譯)

なんだつてあんなに早く左様ならを云つて御
別れて終つたのでせう。御別れてから急に
無しくなつて、もう一度おそばに寄りそひたく
なりました。内へ歸るまでどこか道で又お目に
かゝれる奇蹟があらはれて呉れ、ばい、と思へ
ば、本統にそれがあり相に思はれる位、私の
心は變なものでした。

あなたはお車にお乗りになつて、どこへいら
つしやつたの。よしませう、よしませう、そ
んな事、もうこんな嫉妬をおこなすなんて、いけ
ないわね。でも初めての嫉妬だから私にはいつ
までもきつと忘れられないのでせう。

今朝は祈禱をしてふと顔を上げると、入口の
横にあなたが私の方を見ていらしたのです
もの、本統に驚きましたわ。神様の御宮で逢
をする、そんな人達が又とありますものでせう

か？ その謂か知りませんが、今日(けふ)は左様なら
のきずもして頂けませんでした。何んだつて忘
れたのでせう、毎日逢へるのでもないのに！

今更らそれを悔んでも仕方がない、諦めませ
う。今度の日曜と申上げたけれども、そんなに
長くお目にかゝらないのであるの厭です。もつと
早く逢はせて下さい。でもだめね、仕方がない
わ。もつとたんと逢はせて頂きたいけれども、
そんなにたんと逢へばおいやになるかも知れな
いし困つて終ふわね。

今日は大層元氣で喜ばし相だとおつしやつて
下さいましたのね。それはあなたが本統に少し
は可愛がつて下さると、さう思つたせゐなので
すわ。でも今はさうぢやないの、何だか悲しい
のよ、あなたに抱かれたまゝ、あなたのお胸に
顔を埋めて死んで終ひたい、そんな心地がして
ゐるのよ。

青ざめた顔して泣いてゐる私、桃色の顔して
お目にかゝる私、あなたは自由に私の頬をお
染めになる化粧師ね。

いつそ二人の間が公然になつて終つたら、た
とひそれはいたづらな不義な二人であるとして
も、どんなに私は嬉しいでせう。御一緒に旅も
出来る、箱根へでも、修善寺へでも、京都へで

私この頃は割に元氣です。一頃は病氣になり相でした。で驚いて自ら心をと直しました。毎日弟達を相手にぶざけたり、喧嘩したり賑かに暮してゐます。もと通り快活な活々した私になります。

それに昨日お日にかゝつたのです。つかり生き返りましたもの。これからもつと静かな心でお話をしたいと思ひますの、それにはあんな處でお日にかゝるのは厭、あなたもきつとお厭でせう。私は人一倍人に氣をかねる方なので困ります。人のぬない静かな美しい處つてものは東京にはないのでせうか。

人つてもものは近くより遠くの方が美しく立派に見えるものですに、あなたはさうでないと思つて嬉しうございます。私の立場を考へて下さるとおつしやつた最初のお言葉通りいつまでも私を尊敬してゐて下さいます、その事を考へると私は穴へ入りたい程はづかしくなります。どうぞ許して下さいませ。私いゝ子になりたいの、あなたに愛想を盡されなないに。

あなたは世の中の善に惡の香をつけ、惡に却つて善の味をつけてお終ひになる方ですね。あなたを見てゐると、あなたが善で、神様が惡

になつて終ひますもの。私にはもうあなたが唯一の善です、神様も怖くありません。……云云。

八月十一日、月曜。

花を戴いたあの日もこんなに晴れた暑い日でございました。今思出して泣いてをりました。

私については私よく分つてゐる積りで、だのにこの心ばかりは少しも分りません。あなたのやうな方をなんだつて無考へにお慕ひしたのでせう。それからしてが分りません。仇花のやうな私共の戀ではありませんか。

あの祭の夜は僅か四十日許り前ですのに、私にはどうしてもさうは思へません。もう遠い昔のやうな氣が致します。

此月日の間になめた苦みは生れて初めての経験でございます。また考へ直せば、こんな幸福も決してなかつたと信じます。人生にこんな悦びのある事を知らずによくも今年まで生きて來られたものと思ひます。二十になる今日まで嬉しいと思ひ、幸と思ひ、歡ばしいと思つた事、今考へれば皆なつまらない、下らないもの許りでした。それが初めて今分りました。で

もそれだけ世の中は小さくたつた一つになつて終ひました。

この尊い得たいものから、離れなくてはならないといふ考だけで、どれ程私は顛へあがるか、考へてみる勇氣もございません。

私はどうして長い一生を過しませうか、唯だ日暮しといふ事だけならば、どうにか過ぎて行くでせう。けれども私を捕へてはなさない過去の生々しい感情をどうしませう。それは一生の暗闇を照す光です。私には今日以上の歡びが來て私を過去から自由にくれる筈がないと思ひますから。……云々。

八月十三日

……私には過ぎてる方だ！ さう思ひながらとうとう深間へ落ちて戀して終ひました。あなたはどの位御迷惑でせう。段々それが分つて參りましたが、もう遅うございました。飛んでもない事をしてしまひました。どうぞ御許し下さい。

私の一生の事お考へ下さいませう、有難うございます。何と御禮を申上げませう。でも私、私の今の身がいやになりました。娘！

つか私が支拂をする時が参りませう、どうぞその時、常は嘘をつかなかつたときと思召させう。

これで私の心はよくお分りになりまして？

あなたは唯ちつと許り私を愛して下さればいいの。でも私はたくさん愛しますよ。仕方ないとお諦め下さいまし。私も仕方ないと諦めます、私の思つてゐる凡そ十分の一もあなたは私を愛しては下さらないといふ事を……。

私の心持、私の考へ方、私の望がかう

とお分りになれば、あなたも御安心でせう。どうぞ御安心下さい。内のものが嫁に行けと申せば、はいと云つてどこへでも参ります、婿をとれと申せばはいと云つて取ります、然しあなたの事は忘れません、その人は可哀想ですが、私がその大を愛せるかどうか、それはとても分りません。

今は許されるだけ長く、楽しい月日の続くやう祈つてゐます。篝のやうにばつと燃えて消えるより、油のあるうち同じ光と熱で輝いてゐる灯がしたはしうございますもの。

私のやうなおきやんな娘がこんな事しみじみ考へてゐると思ひもおかけにならないでせう。だからきつとあなたは今のまゝの關係

ではいつか、私が満足しないだらうと不安に思召していらつしやつたでせう。

幸か不幸か、私の友達等と人並でない考を持つて生れた私としては、そんな事はまるでちがつて考へてゐます。友達は仕方なしに私を優

れてゐるのだと思ふ顔に申します、けれども、自分ではこれが私を知らずく不幸にする性質だと思つてゐます。……云々。

八月五日

今日歌の會があつて参りました。此頃は歌にも興味がもてません。歌許りではございません何んにも。ことに題を出されて歌など詠めようと思はれません。

あなたを考へるのには大勢の人中にあるのはいけませんわ。一人で内にゐてちつとしてゐる方がいゝのよ。人中ではどうしてもいくらかそつちに氣をとられますから。そのいくらかの缺けるのが口惜しいのですわ。でも熱を病んでゐるやうにあなたを思ひ續けてをりました。唇許り聳きました、いつこの唇を濡して下さいませう。早くその日が来るやうに。

八月六日

私いゝ事を考へてきましたの。明日からでも一日おきか——或は毎日も、刺繍のお稽古をしに行かうと思ふのですの。午前とも午後ともはつきりきめずに、ですからあなたの御都合のいゝ時、午前でも午後でも自由に外出が出来るやうになります。内でさしつかへのない限りは。ですから前日まで何日何時までにとどこへとおしやつて下されば、私きつと参ります。

私は私の今してゐる事悪い事とは思ひません。人を戀ふといふ事は悪い事でせうか。先にはあんまり無理をして出たので悪い事のやうに心が咎めたりしましたのね。良心がしなれたといふ譯でなく、近頃は内證でお目にかゝる事、不幸に相違ないけれど、さうしなくてはならぬのだから仕方ない、さう思ひ切るやうになりました。どうして世の中で私一人が悪いでせう。

私今お別れしても三年程経つたら、きつと又御手に歸るやうな氣がしますの。これはをかしけれども、そんな豫覺がして仕方がないので。私が自由な私になつたら、何をさて置いても眞先にあなたの所へ行きますわ。

やつて頂戴！ そんな事私いやよ。どうぞいつまでも私を愛して下さい。私死ぬまで戀してゐる、それは出来ない事ではないのですもの！ 私どうせそんなに長く生きてゐようと思ひません。せいぜい三十五位で、唄にあるやうに死にたいと思ひますわ。笑つていやよ。ことによるとそれはあたります。ですからあなたを愛しつづける事も可能な譯でせう。あなたも三十五までなら愛してやるとお誓ひ下さつて？ それともあんまり長過ぎます？

私の若い日をみんなあなたを思ふ事のために費さうと思つてをります。ですからどんな一日も、どんな一時も、尊うございます。この楽しい生々した少女の日はいつまで続きませう？ その真中にあなたを飾つて私は生きてゐます。

一昨日教會へ参りました。御出にならないうと承知しながら、でも少し氣にかゝりましたわ。あの日から一週間になると繰返し思ひました。今日お友達に此間なんだった左様ならもしないであなた歸つて終つたの？」つてぶはれて赤くなりながら、「ええ、急に忘れて來た用を思ひ出して」つて云つた私を御想像下さい。高いすてんどぐらすを仰いで、どんな強い感情にひたつてゐたでせう。窓の隙から晴々した青空も、

ふはくした白雲も見えてゐました。雲のやうに少しも心配しないで知らない海の向うの國へでもなんでも行けたらどんな嬉しいでせう。

今日も亦御役所？ 私雲になれなければ、風になつて、そつとあなたの御部屋へ入つて行きたいわ。極く内證でそつと。さうすればあなたにも逢へるし、ことによるとお話も出来ませう。でもこれは勿論駄目！ それに夢をみる事もおやめにしようと思上上げたのだから、それも見られないし困つてね。(口惜しいから黙つてゐましたが、とう／＼此間の晩、お話しした夢見て終ひましたわ。)では仕方ないから、……ぢかにお目にかゝる外方法がないわ。これがやつぱり一番ね？

上杉さんのお稽古いかい？ 智恵子さんにお逢ひになつて？ 私からあげた繪葉書にあなたの方の夢見たつて事が書いたつたつてお話しならなくつて。あれはかうなの。

智恵子さんと私と長い事お話ししてゐましたの、勿論夢で、丁度その時分よ、あなたが少しもお便りを下さらなかつたのは。私それを大層心配の餘り、夢の中で智恵子さんにあなたの事聞いたの、どんなに聞きにくかつたでせう！ 本統に罪な方よ。夢にまで私に苦勞させるんで

すもの。

此間中澤山手紙を書きました、でもお見せないでもい、手紙自分を慰めるために書いたのですから皆んな破つて終ひました。

此頃はもう先程強くあなたを懷しんでゐません。先程戀しくはないの。いけません？ いでせう。私なんかね！

本統は……嘘よ！ 今でも戀しいの、先よりもつ／＼。なぜ先に戀しいだの、懷しいだのつて字をやたらに使つて、使ひへらして終つたのでせう！

今朝はめづらしくひいやりと致しますのね。御機嫌如何でいらつしやいますか。私は風邪を引き、齒が痛んでゐますけれども、何んでもない事と思ひます。外國に、齒痛みと悪い戀、つて諺がある相ではございせんか。だからあなたの事お案じしてゐますわ。

この頃はあなたの夢も見せんものよ。嬉しい筈なのに物足りなくて仕方がありません。見たいんです、夢でもいいから早くお目にかゝりたくなりました。私の眠てゐる時間はほんの少し

九月二日

娘！むすめだから大事なのでございませう。箱の中に入れておねばならないのでございませう。今の娘といふ身だけが大切なのでございませう。何一つしてはいけないのでございませう。勿論戀もしてはいけないのでございませう。

私の戀した方は唯一人です。その方は餘り戀してはいけないとおつしやいます。でも私はこの通り戀してをります。死んでもいいのです。私はもう先から決心してをりました。私の壽命を縮めてもいいから、あなたに愛して頂きたいと。だから私の一生の事をお考へ下さるなら、どうぞその積りでお考へ下さい。

でもその後色々考へました。然し今ではもう何も考へる餘地はなくなりました、何もかもあなたにお任せ申します。あなたにおすがりしてゐます。私はもう何も知らない、何も分らないめくらになつて終ひました。唯だあなたの御手に縋つて生きて行く計りです。どうぞあなたの御心のまゝになさつて下さい。御心のまゝになさつて下さい。

あなたをこれ程信じ、これ程愛してをります。私は總てあなたのものです、心も身體も總てあなたのものです。どうぞ御心のまゝになさつて

下さい。人を戀したと云つても心許り上げるのではいけない、まだ足らない、さう云ふ事も本統に心の底から段々分つて參りました。それならば、あゝそれも當然の運命でせう。私はあなたのものです、どうぞ御心のまゝになさつて下さい！私を本統の仕合せにして下さい。どうぞ愛して下さい。一時も忘れないで愛して下さい。いつまでも離さないで下さい。……云々。

八月十八日、月曜。

(此間の手紙數通その筋の注意により略す)

七

御手紙がとうとう、唯今夜の七時半の配達で參りました！待つ筈のない御手紙をいつの間にか待つてゐましたの。下さる筈がないと思ひながら、待つてゐたといふ事はをかしうございましたね。今は物の道理なんて忘れて終つてをります。

郵便つて投げ込んで行きました、随分ひどい配達ですわ。この世の中にはどんな大切な手紙があるものか、あの男には分らないのでせう。

可哀想な男ね。私は大きな柄の浴衣がけで、ぼんやり刺繍の材料になりさうな模様を雑誌からさがしてゐましたの、さうしてあなたの事を考へて……お目にかゝり度いつて……。

あの初めて御手紙を頂いたのは六月の二日でございましたから、今日でもう九月月になりまます。その同じ日に又御手紙を戴いたのは一層うれしうございました。その間御目にかゝつたのは八度、長いやうな、短いやうな氣がします。あなたといふものが私の考に入つて來ますと、總てががらりと一度にこはれて標準といふもの一つもなくなつて終ひます。

夏ももう終り近くなりましたね。領事の御家族は山からお歸りになつて、秋は私大變好きでございませう。冷いやうな、熱いやうな秋が！私が生れたせゐか、それともあなたの冷さにどこか似てゐるせゐか、とも思ひます。でもこれからは夏も好きになりませう。そこに色々な思出がありますから、さうして秋も、冬も、春も、段々今に、一年中が好きなやつて行くでせう！

でも秋風が吹くと扇子のやうに捨てられるのではないでせうか。うそね？嘘だつておつし

げました。さうしてかう書きました。中根さんは本職の方でないけれども、その道の由緒深い家柄にお生まれになつた、それは優れた私の大變崇拜してゐる藝術家です。どうぞあなたも好きになつて下さい。——でも考へてみますとあんまり好きになられたら大變でしたけれど……。

九月八日

八

夜は更けてゐますけれども一寸でいいから書きます。それでないとな明日中心配で折角の刺繡もどうなるか分りませんから。刺繡なんかたとひどうなつてもいいんですけども。

今日は本統にいやな日でした。御病氣のお知らせと本統の事、私嘘のやうな氣持がしてゐます、でもそんな嘘をつく人もないんですよ。ね。なんだつてそんな事になつたんでせう。心配するなとおつしやつても、しないでゐられませんか、今日は一日心配して暮しました。元氣よくはいでみて、ふつと通り魔のやうにその事を掠めて通るのでもう駄目になるのですもの。もう大丈夫とおつしやつて下さるま

ではいつまでも心配してゐます、心配するなとおつしやればおつしやるほど心配します、どうぞよくなつたら直ぐお知らせ下さい、本統に一刻も早く私を安心させるやうに！

こはい／＼。でもすぐもの通りにおなほりになりませう。死んではいやです、そんな事決して／＼ないと思ひながら、ついそんな時の怖い想像が目に浮ぶの。早くよくなつて下さい。ね。いつおなほりになつて、いつ逢つて下さるの？

今一時が打ちました。もしまだおねむりになれない程だつたらどんなにお苦しいでせう。もし私がお傍でお看護出来たらこんなに心配しないで済むでせう。急ごしらへの看護婦になりませうか？　之は大變いと思付でなくつて。あなたの御内の方はきつと廿く通るわね。でも内の方が駄目。それでやつぱり駄目！

御手紙に七日の日曜は熱が出たため行かれなかつたと思ひました時は息が苦しいやうでした。でも御病氣でいゝ、お心がさめたのよりはその方がいゝ、そんな薄情な心も一寸出ました。……

彼は仰向になつて寝ながらこゝまで常子の手

紙を讀んで來ると、思はず微笑し、子供に摸られたやうな愛情を感じた。桃色の洋紙はいつもの匂、何々の香料などいふより、女性の肌にみついてゐるやうなものと人工的な香で染まつてゐた。初めの内は何んとも思はなかつたこの香が、近頃は常子の手紙の文章そのものより餘計、彼女のそこへ表はれて來るやうな幻想を強ひられた。

小さなその二つ折の手紙を鼻の上に屋根にして、目をねむり、暫らく常子を考へ出してゐた。襟から帶のあたりが有り／＼と目に映つた。胸の呼吸が明かに思ひ出された。その癖顔はどうしてもはつきり見えなかつた。はつきりしないのでなほ戀しかつた。

彼は鼻の上の屋根を取つて二つに折り、一つ接吻してそれを肩にも入れず、無難作に枕の下に押込んで、半分寝返りを打ち壁を向いた。彼はこの四日間といふもの晝夜の差別なく眠りつゞけてゐた。

二三十分も過ぎた。玄關があくつと夏子は清の母に一寸挨拶して置いて、そつと二階へ上つて來た。様子は暗かつたが、上は下座敷よりも涼しい風が吹き通してゐた。

一間三尺の踊場から、四疊半の書齋があつ

なのですから、それで夢も見る閑がないのかも知れません。でも見る時は、うたゝ寝にも見るものね。あなたはもう私から離れていらつしやる下心で、夢でも逢つて下さらないのだときめて終ひました。悲しうございます。

昨夜も十二時過まで手紙を書きましたが、讀返すとお目にかけるのが厭になつて破つて終ひました。おうるさいだらうと思ひながら又書きます、ご免なさい。

——あゝつまらないわ、内へ歸つたつて何も樂みが待つてゐるんぢあないんですもの。——さう云つて刺繡の御櫓古から夕方歸つてまゐりました。

昨日の朝も教會へ行つてはいけないうつて云はれました。齒醫者へだけつて——あんまり日曜日も仕方がないわ。私許り悪いとどうも考へられませんか。私眞寺になつて終ひました。でも外の事に事寄せて云ひ譯をし、自分でも驚くやうな勇氣を出して、お白粉ぬつたり、着ものきかへたり、草履をはいて考へ／＼内を出ました。少しひどい事をかあさんに云はれたので、ではもうこれから一せつ出ませんつて、きつぱり申しました、私口惜しいんですもの、泣

き／＼あなたにひつつけましたの！ 心の中ならいつでも自由自在にお話が出来ますもの。悲しい事、口惜しい事、皆あなたにひつつけますの、それだけで慰められます、どんなに嬉ばしい事でせう、世界中にたつた一人でも私を愛して下さる方があつて事！ 親兄弟それは心の糧にはなりませんもの。

あなたはとう／＼入らつしやいませんか。教會の中はがらんとしてゐました。神様のいらつしやらない神殿といふものがありませうか！ 不届な神様よ。

でもね私は行つただけで安心しました。内を出るのに叱られても、泣いてもかまはなかつたの。あなたを靜かにお待ち申す事が出来たのですもの。たとへお逢ひする事が出来なくつてもすべき事は私致しましたのです。もしその上にお日にかゝれたら！

それは申すまでもありませんが、少し厭なものでした。恥かしいんですもの。あなたまだ覺えていらつしやるでせうきつと、——私は總てあなたのものです——どうぞ御心のまゝになさつて下さい。——あなたおずるいわ、私ひとりこのまゝま置いてきぼりにして——さう此間お別れた時申上げたんですもの。そんなこと

私云つてはならなかつたんではなかつたでせうか？ 自分ながら恥ぢてをります。けれどいゝわ、いゝわ私の云つた言葉の意味はもつと／＼深かつたんですもの！

教會の歸り、眺へて置いた本を、×屋へ取りに行かうとしてゐましたら、聖場の下で、車夫が奥さんまゐりませう、つて云ひましてよ。驚いて終ひました。私奥様？ 私奥様と見えて？ 奥様つてどんなもの？ こんな奥様でものがありますの？

もつとも昨日はぢみな風をしてゐました。もしあなたと御一緒だつたら、どんなに恥かしかつたでせう。やつぱり私これから派手につくりますわ。

その本は一字一句寶玉のやうなの！ いゝ本でしたわ。夢中で先許りいそぎましたので細々しい事は覺えてゐませんから、又ゆつくり讀んでお話し上げませうね。けれどもその中に×といふ主人公が出来ますの、やさしく、清く、すなほで、美しい中に、まるで反對の慘忍ともいふべきものが含まれてゐますの、私それをお考へて恐ろしくなつて終ひました。

昨日田舎へ歸るお友達があつたので、諸曲の本とあなたの望月のお寶眞とを館別としてあ

が突然がらりとあいた。御免下さいといふかすかな女の聲がした。夏子はびくつとした。もしや? さう思ひながら、急いで帯の間から細長い鏡を取り出し泣顔を直しにかゝつた。

やがてその女客はお母さんに連れられて二階の方へ来るらしかった。夏子はどうしようとする／＼してゐたが、清の枕元へ擦寄つて肩に手かけた。かすかな清の汗の匂は夏子に様々な事を一度に思ひ出させた。彼女の聲は自分でも不思議なほど和らいでゐた。彼の名を呼びつゝ搖ぶつた。

「え。」
清がさう云つてやつと目を開くと、目の前に夏子の顔があつた。少し充血した清の眼がにつこり笑つた。夏子も思はず引入れられてにつこりした。

「お客様らしいことよ。」

さう云つたが、清はそれに答へようともせず、いつの間に来ていらしつたと手を顔にあてたまゝ夏子の顔を見詰めつゝ尋ねた。さあああきつからと彼女は答へて、暗に手紙の事を思はせようとしたが、清はまるでそれを忘れてゐるやうに見えた。彼女の嫉妬はそれで少してれた。

女客は梯子段を上つて来た。

それは紅い帯を締めたまゝ貞子だつた。貞子は夏子を見て顔を赤くし闕の處に立つたまゝためらつた。

「さあどうぞ。こちらの方が風がよく通します。」

夏子は黒襦子の帯に一寸さはつた手で、麻の座蒲團をすゝめながら主人顔に云つた。その落着が益々貞子を小さくさせた。

「先生御病氣はいかゞでございます。両親からも宜敷申上げろつて……」

それだけ小聲でやつとこき云つて、桃割のおくれ毛をかきなでながら、夏子の方に向き直つた。さうして丁寧にお辭儀をした。

清はいつの間にか寢床の上にきちんと坐つてゐた。

「ねていらつしやいました。」

夏子は子供でもさとするやうに、極度の親みを見せながら云つて、「ねえと貞子の方へ顔を振り向けた。さうしてそのまゝじろく貞子のおつくりや、手柄を批評的に眺めてゐた。瘦せ形で父の高い貞子は兩袖を膝の上に載せ、その下で手を手でいぢりながら上體を少しづつに

かじめて、益々小さくなつて膝の上に目を落してゐた。

土曜日の夕方本牧へ行つて、水瓜とびいると一緒にやつた。その時突然三十九度五分發熱した、と清は話してゐた。女二人は互の間の葛藤も忘れて、床の中のでつれた清を眺めてゐた。

「だれお連れは。」

夏子は聞かざるやうに態と不平な顔をして見せた。

でせう。だから私いつも云ふのよ、Bさんよ悪女だつて! ほらごらんさ、これでこりるんですよ。」

清は唯にこ／＼笑ひながら貞子を眺めた。貞子も唯にこ／＼幸福相に笑つてゐた。

そこへお母さんがさいだあの塙とこつぷを持つて上つてきて、

「清さん、こんな御見舞を御二方から頂きましたよ。」

つて夏子からのぐえふあすの繻と貞子からのすばらしい果實の籠を、そこへ置いて見せた。

夏子はこの時初めて貞子に對してもある嫉妬を感じずにゐられなくなつた。

よくこそあの手紙を隠したり、輕率な怨言をぶつたりしなかつた。夏子は清の上機嫌なのを見て竊かに胸をなで下ろした。

て病人の寢床は床の間付の奥の八疊にのべてあつた。

清は胸のところまで水色の麻搔卷をかけ、片腕を裸のまゝその上に載せてゐた。色白な皮膚がしつとりと見えた。二三疋の蠅が追ひつ追はれつ、汗ばんだ彼の肌を吸つた。吸はれる度に筋肉が倦かびく／＼痙攣した、夏子は坐るなりそこにあつた團扇をとり、薬瓶の載せてある盆を心持押しやつて枕元近くにじり寄つた。彼女はやがてその左手を疊につき、團扇を持つた右手と一緒に半身をのばして、注意深く蠅を追つた。清は何んにも知らないでかすかな鼻を立ててゐた。寂かな室内に時々見えるやうな風が吹き込んで、掛物の裾は砂壁をこすつた。

夏子は彼の寝顔に見とれて、日あしの暑いのに態々やつて来た甲斐があつたかと竊かに思つた。目を覺したらどんな顔をして驚くだらうと、その瞬間を想像し、その瞬間を占有すべきものも彼女一人限りであるさう思ふのは樂しかつた。さうしてその楽しい瞬間は間もなく彼女が確實に握るべき幸福であつた。

然し彼女が清を驚かすより前に、先づ彼女が驚かねばならぬ番が廻つて来た。枕の下か

ら少し許りはみ出でゐた桃色の肌袋がその好奇心をそゝつた。深い考へもなくさつとそれを引張つてみた。案外易くそれはぬきとれた。夏子は持つてゐた團扇を思はず膝に落して吸はれるやうにその手紙を讀んだ。

1、夜は更けてゐますけれども一寸でもいゝから……

一體だれ、こんな閑々しい手紙を書くのは、夏子はさう思ひながら裏をひつくり返してみた。裏は白紙だつた。本文と關係のない二行許りの文句が書いてあつた。

今日は御宅の方へ上げる手紙ですけれども、羅馬字はいや面倒だから。その代り久原武雄つてものが代筆するのよ。武雄はけしからん男ね、こんな女の手紙を書きます。

夏子は眉をしかめ、急いで内側を開いてみた。戀しい懐しい清さま——あなたのだたつた一人ぎりの常。

なまいき！ さう云ひながら唇を喰ひしばると夏子は見ると青くなつた。惶て懷中に

その手紙を入れようとした。然し清はまだすやすや眠つてゐた。夏子は再びわく／＼しながら手紙の先を讀んだ。こゝはもう讀んだ、さう思ひながら——夜は更けてゐますけれども、いふ行を二三度夢中で繰返した。讀みたがらも彼女の頭の中には様々な光景が現れて来た。常子もやつぱりさうだつた、この考はとつて返し

のつかない手落のやうに彼女に思へた。彼女は落ちつかない心持でやつとそれを讀み了つた。このまんま持つて歸らうか？……暫らく思案してから、そつと又枕の下に押込んだ。すつかり隠れるまで押込んだ。さうしてそつとそこを立つて、足もとの壁の方の柱にもたれて坐つてゐた。

知らず／＼兩方の眼から涙が溢れて来た。はんかちいふを出してそれを押へるとなほ涙がにじみ出て来た。清さんが目を醒すまで、かうして泣いてゐよう！ さうだ。何んと清さんに云つていゝか分らないほど口惜しいから。さう思つて彼女は鼻の赤くなるまで口惜し泣に泣いた。

清はいつまでもすやく／＼眠つてゐた。もしやお母さんが上つて来やしないか、夏子の不安はそれ許りだつた。さうしてゐると玄關の格子戸

昨日御手紙嬉しいとは思ひましたが、まだむ
Sの事が氣にかゝりますわ、先に車でいらしつ
た所だわね。西洋人は綺麗ね。今日は私恐ろ
しくなりました。あなたは恐ろしい方ですわ。
何ぜだか、何故ともはつきりしないけれど、さ
う思つたら悲しくなつて終ひました。何ぜでせ
う。ささんの事考へると、私直ぐあのまだむ
Iを思ひ出しました、私にかう云はれたつてあ
なたは仕方がないでせう！

恐ろしい方、恐ろしい方よ。

明日雨でしたら十九日の金曜ね、四時から。
夜は×館の活動？面白相ですけれど私一
寸考へますわ。もしもそこで又まだむSに逢ふ
と大變だから。

九月十七日

思ひ出す事が多過ぎるので昨夜から惱しく時
を過してをります。又雨ね、昨日お目にかゝつ
て置いてよかつたこと。昨日は何かと有難うご
ざいました。

人のゐない時あの指輪はめてをります。本統
に綺麗ですね。夜電燈で見ると、あの王冠の
やうな上の玉が一層光りますの、あなたが下さ

つたのね。私今までの皆んな好きでありま
せんでしたから、こんな好きなのが出来てうれ
しい。いつまでも可愛がつて下さる誓ひのしるし
と思ひませう。

私があなたに不足を感じてゐるなんかとお
考へなさつてはいやよ。唯私にはまだはつき
り信じられませんが、云はゞ私の幸を。なぜ
あなたが自分のやうなものをこんなに愛して下
さるのか、それが分りませんの。夢を見てゐる
のではないか、だまされてゐるのではないか、
いゝ氣になつて蔭で笑はれるのではないか、信
じる事は貴いのですけれども、もし愛されてゐ
ると信じて、それがさうでなかつたらどんなに
私の自惚れた顔が滑稽なものでせう！
どうぞく可愛がつて頂戴！お約束指つ
切りしませうね。

あなた決してあのほてるにいらしつてはいけ
ません事よ。いゝほてるでせうけれど、でも決
していけません。なぜでもないけませんが、きつ
とよ。

車からそつとのぞいたのあなたはこちらを
向いてゐて下さいませんでした。左様ならのお
聲もおかけ下さいませんでした。淋しく物足り
なくお別れして歸りました。

お風呂に入つて、それからおかあさんに×館
の寫眞のお話をして、お菓子を喰べて、あなた
の代りに指環にきすして、朱塗りの箱に重い
頭を載せて伏せりました。

私時々神様が畏ろしくなりますの。ふつと
目が覺めたりした時、でもあなたの強いお手に
抱かれてゐるうちは大丈夫だと思つて安心して
ゐますわ。あなたの愛は不思議に大膽で少しも
卑怯ぢないのね。往來でもどこでも、勝手に
見ろつてお顔していらいしやるのね、私そんな
方好きよ、嬉しいわ。

それに私先からさう思つてゐたのですけれ
ども、人には誰れでもどこかいゝ所があるもの
よ、それを見出してくれる人がもしあつたら、
それはどんな仕合でせうと。さうしたら昨日あ
なたもさうおつしやつてね。たとへ美しいもの
があつても、もしそれを見る人がなかつたらつ
て、あなたは私から何か見つけて下さつたんで
すつてね。有難う、私どんなに嬉しいか分りま
せんわ。

あの髪今夜こはして終ひます。たつた二日し
かもたなかつたので母は驚いてゐてよ。根がゆ
るんだので、つれて痛くつて仕方なかつたんで

九

とう／＼雨になつて終ひました。續いておよろしいの？ 今日は何だか心細くてたまりません。

御病氣揚句の御出勤をどんなかとお案じてをります。何から申しませうね。御目にかれば、今日は！ よくいらしつてね！ 何時頃まで御閑？ どこに行きませう？ 久しくお目にかゝりませんでしたね！ つてかう云ふのね。私？ 常子はどうかとおつしやるの？ 常子はね、いつも通り元氣でかうしてをります。どうぞ御安心下さい。

今朝は御手紙をありがたう。お忘れなくよく下さいましたこと、本統に嬉しうございました。御病氣もおなほりになるし。

××堂が段々近くなりますのね。御稽古で御忙しいでせう。東京へは一週に二度づついらつしやるの？ 品川を素通りで。でもいゝわ、それがあなたのためになる事なら。

今度の會が評判のいゝやうにとそれ許り祈つてをります。でもわからずやの多い世の中ですもの、下らない評判なんか氣になさらない

方がいゝわ。どうぞお天氣だといゝのね、それも祈つておきませう。遠くから舞臺の上のあなたを、私だけのあなたと思つてみてゐるのは、お目にかゝる時と同じほど嬉しいわ。あなたが私の方をちよい／＼見て下さるやうな氣もするの。

御能に行くと云つても此頃は黙つてゐます。先の内は誰れにでも、あなたの事許り話してゐたのに、近頃は中根のな字も口へ出しませんのよ。誰れかに一寸御名前を云はれてもはつとして赤くなりませう。妙なもののね。

私はかあさんと兄弟とを愛する代り、あなた一人にお縋りしてをります。なぜなら私今まで愛つてものを本統に心から知りませんでした。薄情な娘だ、薄情な娘だと、どこでも云はれつけて來ました。それは一つにもう亡くなつたお父さんの罪もあるのです。お父さんが私がうる覺の頃から外の女と他所に住んでゐました。(即ち彼女が叔母と呼んでゐる下田夏子は、この父の一番末の異母妹にあたつてゐたのだ)。これで私は内の中にゐても外にゐても不幸な氣の知れない、人に隔りを置く變な娘になつて終ひました。私は兄弟の中でも一番感じ易い性質でしたから、自然ほかの人より早くから悲しい事が

心にしみて、ついひねくれたのでせう。ごも心の心からそんな娘ではないのを自分許りは知つてゐました。

今死にたいと思ひます。いつかはあなたも愛して下さらなくなりませうから。

今死ぬのが此上もない幸福ではございませんか。あゝどうして今日はこんな心細い事許りぢへるのでせう。御迷惑ねえ、堪忍して頂戴！ これからちよい／＼聲樂の稽古に通ひ出します。私がおかるなんか上手になるあてもなし、先生も好きではないのですが、折角やりかけたものですから少し又やりませう。

又書き過ぎましたのね。つまらない事許り、讀むのもお厭でせう。突然人が入つて來たので、急いで手紙を隠さうとして、こんなにいんきをこぼして終ひました。机も着物も疊もいんきだらけ。こんななに手まで眞黒よ。隠す必要のない時でも、つい隠したりするのはどこかやはり心がやましいからね……。

九月十三日

明日木曜でもお目にかゝれるのね、きつと？ 御病後は少しお瘦せになつて？

一寸お話しただけで、直ぐ歸ればまだしもよございました。それだのに御一緒に雨の降る外へ出ました。もう風は吹き初めてゐました。日も暮れかけてゐました。あなたは永い間の重荷を下ろしたやうに、その日の出来榮に御満足のやうに、嵐にも不拘いともより何んとなくはしやいで、どこか態とらしい所もお見えになりましたのね。

さうしてあんな家へお連れになるんですもの……

あなたがおひどいわ、あなたが御無理ですわ。たい驚きましたの、恐れましたの、恥ぢましたの、うろたへましたの、氣が轉倒しましたの、私どうしたのでございませう。まるでその特別の人間みたやうでございました……。處女の身體には心より嚴かなものがあるのでございませう。何んといふ恐ろしい心でございませう。尊い處女の自然には誰れも手を觸れてならないのでございませう。畏れねばなりません、心から畏れねばなりません。私は譯もなく唯恐しうございませう。譯もなく戦々慄々しました。私の惡かつた事は今度お目にかゝつて皆んなお詫び致します。靜かに考へればあなたにお悪い所は一つもございませせん。皆んな私の罪でござい

ます。あなたは今まで誰れにも易く出来ないやうな仕方です。私を可愛がつてゐて下さいました。本統にお氣の毒でございませう。私が惡かつたのでございませう。すまない、どうぞご免下さい！これがどうして私の本心でございませう。あなたに上げるものを私何一つ惜んだり、隠したりする、そんなけちな事致しませう！あの時私にも分らないもつと大きな力が私を支配したのでございませう。それが處女の實でもございませう。どうぞ恐れな私をお許し下さい。私にすら分らない敬虔な心持、どうしたら申上げられませう。何んとお詫致しませう。なんにももう分りませせん。大きな寂しさの中で泣いてゐます。常はこの通り泣いてをります。

晝が過ぎて又夜になりました。

なんといふ月！なんといふ雲でせう！澄み渡つた空に渦巻く雨後の黒雲が流れ、十六夜月が！今上らうとしてゐます！何千か何萬か、数知れぬ有ゆる雲の裾は黄金色に染められて輝き初めます。

生れて初めての恐ろしいあの夜はきのふでしたらうか、あなたの女郎花の面影も嵐にちぎられてめちやくちやになつて終ひました！

窓の前に高く聳え、互に枝を交はしてゐた大木は二本とも中程から無慙に折られ、丸木橋をかけたやうに倒れたまゝになつてゐます。二人の屍のやうでございませう。さゝくれた裂目が白く鮮かみに見えてゐます。昨夜傷けられたまゝの世界に、鏡のやうな月が上つて参りました。なんと云ふ皮肉でせう。私の顔もその光で蒼白く輝かれてゐます。

昨夜の歸途はひどい雷雨になつてゐました。人力の帆を太鼓にして雨が来てそれを破れさうにたゞきました。しぶきは帆の隙間から霧になつて吹き込み、稻妻は劍のやうな光を見せて、幾度も私を脅かしました。これこそ神罰とちつと我慢して、恐ろしいその筈にお許しの祈禱をしました。

神様にも、あなたにも、心苦しい、私なのに、なほその上内へ歸ればどんな小言が待つてゐるか知れないんですもの。母には、齒が痛んだから、能の歸り蘭醫者へ廻り神經をぬかれ、今迄友達のところでは休んでゐたと申しました、心の中ではかあさんご免なさいと泣いてあやまりながら。それから兄さんはとききました、なんといふ仕合せでせう、午後出た限りまだ歸らないと母が申しました。神様はまだこんな私を護

すもの。……もう九日ねるとあなたの女郎花が見られるのね、楽しみだわ。

九月十九日

長い……間、楽しみ……にして待つてゐた昨日があんな恐ろしい日だらうとは夢にも思ひがけませんでした。本統に何から何まで恐ろしい日でございました。……

かういふ常子の手紙を開いて読み初めたには読み初めたが、清はこの先を読む勇気を失つて終つた。顔からは脂汗がわれ知らず滲み出た。目をねむつても、目をあいても、醜い己れの姿を追ひ拂ふ事は出来なかつた。

颱風が漸く鎮まりながら朝になりました。どんな恐ろしい一夜をあなたはお過ごしになりました。お宅までお歸り着きになりましたか？（勿論彼はそこへ泊つた）汽車も電車も停つて終つたでせうに！

第一あなたの女郎花からが恐ろし過ぎました。「男山麓の野邊に寝て見れば、千草の花盛んにして、……蟲の音までも心有韻なり」わき

の道行が済み、男山の秋景になるともう寂しい氣持がして参りました。××氏の鼓も心にしみてよく響きました。

橋がかりからあなたが「なう 其花な折り給ひそ、花の色は蒸せる葉の如し……」とお讀み出した。なつた許りで私の胸はもう一杯になり、日には涙がたまりました。本統に昨日はどうかしてをりましたのね。

「後して一の、若男の面に黒風折、白大口に長絹はよく御似合ひでした。天下一品の頼風だと思ひました。」岩松そばだつて、山聳え谷廻りて、諸木枝を連ねたりからあの有名な「三千世界」まで夢中で何つてゐました、手に汗を握つて。

「おう曠野人稀なり、我古墳ならで又何物ぞ、骸を弔ふ猛獸は、禁するにあたはず。なつかしや聞けば昔の秋の風。一物凌過ぎる文句と節ではございせんか。私は身震ひを致しました。姉妹から放生川に身をなげた都の女の憐れさはもうちつとまともにには見てゐられなくなりました。」

「頼風心に思ふやう、さては我妻の女郎花になりけるよと、猶花色のなつかしく、草の袂も我袖も露觸れそめて立寄れば、此花恨みたる氣色にて、大の寄れば靡き退き、又立ち退けばもと

の如し。」

「草の袂」の節廻しは怨み聲とも、泣聲ともたとへやうがございせんでした。私は昨日樂術の美も純化も忘れてをりました。女の嫉妬と女の念力の恐ろじさしか考へられませんでした。頼風を怨む心と憐む心とよりございせんでした。こんな恐ろしいお能はどうぞ再びなさらないで下さいまし。いかにいふものか知りませんが、姥捨山の幸都婆小町だのといふものなさらないで下さいまし。若いあなたは唯若い感情を活して、そのまゝを唱へて下さい。もしあなたがそれをなさらなければ誰れがそれを致しませう。若い時代の若い天才はやはり若いでゐるの悲みを歌へばいゝものではございせんか。女郎花は何んだか私をぞつとさせました。もう二度と見たくなりませんでした。こんな事云つて失禮でございしますが欺りのない私の感情を申せばさうでございましたのよ。

そんな氣分でしたらお日にかゝらずに、直ぐ歸つて終へば本統はよかつたのでございす。でもそれが餘り惜いので、勇氣を出して樂屋の方を尋ねて貰ひました。お顔を見た時はやはりお逢ひしてよかつたといふ嬉しさが致しました。

と思つた時、初めはあなたに縋らうとしてみま
した、然しそれは無駄でした。さうして我知ら
ず神様の名を呼びました。神様は御手を下さ
しました、それはあなたが私をもとのまゝの羊
にして置いて下さつたからでございます。だか
ら神様は私共を救つて下さつたと申すのでご
ざいます。荷子はこはれ、瓦は飛ぶやうな暴風
雨でも、私共の家は救かつたのだと申すのでご
ざいます。

鬼も角恐ろしい日は過ぎました。今は一層あ
なたを好きになる許りでございます。

九月二十九日

(十月は二人にとつて多く記すべき程の出
來事もなく、夢のやうな戀を戯れてゐる間
に一月はあつてなく過ぎ去つて終つた。)

十

又手紙を差上げます。ご免下さい、用事はな
いんです。でもなぜ手紙を書くかお分りになり
まして？ あなたがきつと私の事をお忘れに
なつたらうと思つて、それが恐ろしいからです

わ。「忘れて下さいませんやうに」つて書きます
の。

黙つてゐるのは本統に怖いわ。忘れるといふ
事より、忘れられるといふのは、どれほどの事
でせう！ 私あなたには何んでもないものでせ
うからお目にかゝりたいと申上げるのも氣が引
けます。けれど覺えてゐて下さいとお願ひする
のは許されるでせう。覺えてゐて頂くだけはそ
んなに重い荷物にもならないでせうから。

あなた近頃はなんとなく遠い方におなりにな
つたのね。私のことなんか忘れて、外の美し
い方の事ばかり考へて楽しく日を送つていらつ
しやるのね。でも常はいつもあなたの赤い唇
を思ひ出して、どんなに懐しいでせう。私一番
あなたのお口元が好きなのですよ。お目も！
でもお笑ひになる日だけ時々怖い事があるの。
あなたの今までお愛しになつた方、今可愛がつ
ておあけになつてゐる方々はなんとおつしやつ
て？ やつぱり常子のやうに口元が好きとおつ
しやるでせう？ こんな事書く時私どんなに辛
いでせう。

あなたは先にも後にも唯わたし許り、わたし
を一番可愛がつて下さつたのだ、さう信じられ
たなら、どんなに／＼仕合せでせう？ あなた

の胸の中にある澤山の美しい方々の中で、私
が一番みにく／＼つて、にくらしいのだと思ふ事
どんなに辛いでせう。私あなたがどうしても愛
さずにゐられないほど立派な女に生れて來たか
つた事！ 私の一番の望はやつぱりあなたに
愛して頂きたい、あなたに離れたくない、あな
たと一生を……。だめですわ、あなたの心は
もう洋行で一杯ね。そんなに來年の春が待たし
いの？

その場になつてみるとあたしやつぱり嫉妬の
心つてももの持つてゐますのね。外の人を可愛が
つていらつしやると思ふと泣きますの……。でも
もし本統にさうだつたら……。
せるでお目にかゝつて、袖でお目にかゝつ
て、羽織をきてお目にかゝつたわね。今はもう
こおとを着る時節よ。あの最後にお目にかゝつ
た時、お話しした人ね、あめりかから歸つたとい
ふ方、叔母さんに連れられてさきをとゝ／＼初め
て内へ來ました。その事でも私どんなにお目に
かゝりたいか分りません。

もしあなたに少しでも私に對する嫉妬があつ
たらどれほど軽蔑しいでせう！

近頃はお手紙が頂けないで私許り書いてゐ
ますが、それがためか長い間御便りのないやう

つて下さるかと思つたが、亦疑ひもしました。今に今に何僧かの罰があたるのではないか？ さう思つて職きました。いつの間にかこんな大それた事を私がするやうになつたとどうして母が思ひませう。嵐の中を無事に歸つた事、それだけで母はもう喜んでゐました。

床に就くにはつきましたが、吹き廻る嵐が一刻々々家を揺つて船に乗つてゐるやうな不安を感じさせました。母は小僧達を指圖しながら二階へ上つたり、下へおりたりしてゐました。その騒々しい中であつたと呟りかけては一緒に、あなたとゐた夕方の恐怖に襲はれて夜着で顔を掩ひました。愈々風は烈しくなつたと見えて硝子のかけて落ちる音、枝のちぎれて飛ぶ音、木の裂け仰れる音、雨戸のふるへる音、頻りに聞えます。床に起き直つてちつとそれを聞いてゐるのは辛いものでした。心の中にも嵐は染つて狂ひ廻つてゐました。

一際強い疾風が吹きつけて来たかと思ふとたん、恐ろしい響を立て家中がぐらぐらと一揺れ揺れ、大きな物の落ちる音がしました。私はもう生きた心持はしませんでした。

「あゝ物干が落ちた。」母の聲でした。「とうとう落ちたの。」私が答へますと、「落ち

たものはもう仕方がない。」と云つて私を慰めて呉れました。

けれども私は電燈の消えて終つた暗闇の中に坐つて思はず手を合せて祈りました。さうする外仕方がございせんもの。嵐は私にとつて怒り、叱り、さいなみだとしか思はれませんでした。日暮れから、初夜、深更、私の通つて来た心の道に今も嵐は吹き荒んでゐます。魂は木の葉のやうに、命の幹からちぎりはなされ飛んで終ひさうに思はれました。「罰だ！罰だ！」としきりなしに繰返す聲を心が聞きま

した。家はたえず揺れてゐました、その中にあなたが現はれ、時々お聲を聞きました。いけない、いけない、あの方の事今思つたりしてはいけない。唯祈つて／＼この家の倒れないやう護つて頂かう——これが私の悔い、あめめるのが務めであるやうに思へ、一つに心を集めて祈禱しようとなりました。でもあなたは私を抱き、私を撫で、私をききなすつて、お笑ひになります。なぜそれが罪で愛されるのが恐ろしかつたのか、今になつてはもう分りません。私はあなたを信じてゐます。決して私を泣かせるやうな事、私の欲しないやうな事をなさる方でない事も知つ

てをります。それだのにあんなに恐ろしかつたのでございませう。何といふ譯もなく物怖ぢしたのでございませう。私はどうしてゐたのでせう、畏れてゐたのでございませうか。

晴れ渡つた今宵の空にあなたを想ひ出し、思ひ出してをります。でもあなたはこゝにいらつしやいません。幽かな淋しさにはいつも神様がいらつしやいませう。その代りあなたのある處には神様がいらつしやいません。なぜ神様もあなたもいつまでも私をお捨てにならないのでせう。もしくはなぜ一緒にゐて下されないのでせう。

いえこれは間違つた考へでした。私とあなたと神様と三人であるのでしたね。私それがやつと分りました。だからこれ程私は守護されてゐるのでせう。嬉しい／＼、私安心しませう。おや、今小さな地震がしました、こんな事書きながら胸がどきりとなりました。

月が高く上つて終ひました。あゝ嵐の中で身を震はせながら黙禱した時、私はまだ悪い？ 處女だと云ふ自覺を失ひませうと教會へ行き感謝の禮拜をしようと思つた時、家がこはれるか

私にはあなたのお心はよく分つてゐるつもりです。でもそんなにお心も變らないお心つてもがあるものでせうか！ 今の私の立場をどうお考へになりますの？ それを唯一言聞かせて頂き度のよ。あなたは私の靴です、羅針盤です。常子はあなたのお心通りに動かうとしてをります。こんなにまで従順な私をなぜあなたは黙つてみていらつしやるの。唯一言でいいのでございます。何んとかおつしやつて下さいまし。……云々

十一月六日

……昨夜久しぶり夢でお目にかゝりました。でもあなたは元気がなく、お言葉もかけて下さらないのです。さうしてどういふ譯かお目が眞赤なのです。不思議に思ひました。夢には叔父も叔母も出て來ました。口惜しく思ひました。久しぶりであなたに逢ふのに二人ぎりであられない事！

例の話は兄も前からの友達だけに賛成らしいのです。皆な的心持は、私は聞かないでもよく分つてゐます。又分らなくつてもかまひません。唯あなたのお考だけはあなたの口から

伺ひたいのです。どうぞ逢はせて下さい、決して私は泣いたり、わめいたり、あなたの御迷惑になるやうな事は致しません。たとへ身が八裂にされるやうな場合でも、私はあなたの名譽を穢したり、あなたに怨まれたりするやうな事はしない積りよ。それはあなたもお信じ下さるでせう！ ではきつと逢はせて下さい。お話しなければならぬ事がたんと積つて終ひました。……云々

十一月八日

世の中がつくづく厭になりました。死にたいと思ひます

あなたをお知り申してから、あなたの事を思はない過も日もございません。思ひあまつて作るともなく書きためた歌と詩を今夜纏めてお目にかけます。私は思ひつて字をこの半年の間、にどの位使つたでせう。先生や兄の手前戀なんて字は使へないので皆んな「思ひ」で間に合せて置きました。「君戀」だの「逢ふべき君」だの「書いて書いたらそれこそ大變々々」何を「思ひ」餘つてこんな吐息をついてゐるのか、誰れもまだ気がつかないやうです。若い娘がしきりに思

ひ「なやんでゐるのですから少しは分りさうなものね。口から出まかせのものの許りで少しの飾もなし磨もかゝつてをりません。お恥かしいものですが、そのうちから憐れな私といふもののお探し下さい。かうしてお目にかける時があると知つてゐたなら、あれほどの心の経験を皆た歌にして置けばよかつたと今になつて残念です。然しこれだけでももう生涯に二度と再び出來るものと思ひませんから、何んとかいとしまれ、たゞ捨てて終ふ事が惜いのでございます。これは私の若い片身です。楽しい戀のたつた一つの燃からでございます。私はあなたが夢にも知らないほど苦しんだり、戀しがつたり、惱んだりしました。そのあからさまな姿をたとへ根越しとは云へあなたに見られるのは口惜しい心持がします、けれどもそんな瘦れ我慢をする必要もありません。私は何よりもすなほで、單純であるべき徳をあなたから教へて頂きました。來月は例の歌の雑誌でしきりにこの物思ひをしますわ、人に知れない程度で！ 閑秀五人集つて云ふのですつて。五人の中で、私が一番若く、名もない作者です。私の歌がみで女らしくないの！ 歌なんか好きぢやありませんが、出來たからとつて置いたのが段々たまつた

な氣はしません。…………。

十月三十日

私どんなに横濱に住みたいか分りません。海岸通り、山下町、さうしてあなたのお家、あの海、山手の丘。その上横濱にさへゐれば偶然街の中でお目にかゝれる事がないとも限りませんもの。さうして色々な事がどんなに都合よくなるでせう。

ではお目にかゝれますのね、一度でもお目にかゝれば、私の氣も済み、心持よく左様なら申上げられるかも知れません。でもはつきりお別れして終ふのは今更どんなに悲しいでせう。今まではいつかしら又お目にかゝれるとそんなあてにならない事をあてにする樂みがありました。もしさうなればもう望は絶えて終ひます、でもいゝわ、いゝわ、私あなたの事忘れるやうに無理にしません。あなたもその方が却つてすつきりした心持におなりになっていゝでせう。

さうして私好きでもないあのあめりか歸りの人を無理に好きになつてみませう。その人は喜ぶでせう……云々。

十一月三日

あれだけの手紙に對しやつとお返事が頂けました。それだけでも私の機嫌は少し直りかけました。

けれどもお言葉をそのまゝ信じていゝのかどうか分りかねてゐます。やはりあなたはもう私なんかお見限りなさつたのだ、怒つていらつしやるのだと思はれてなりません。そんなひがみ自分でも悲しいのですけれど仕方がございせん。餘り疑深いつてお怒りになるかも知れませんが、こんなに私をさせてお終ひになつたのはどなたのせむ？ どなたが悪いの？

私それに怒つてはをりません、唯ちよつとやきもちをやいただけです。でも叔母さんの私に對する仕打は餘り酷うございます。あなたの名こそ云ひませんが……なぜそれを云つて呉れないのでせう……私が變な手紙のある男へ書いてゐるからと母にぶひつけて終つたらしいのですもの。さうして例の話をどんく進めてゐるらしいのですもの！ 母は年内にお嫁に行かなくてはいけないなどと昨日も申しました。女の身には他の女の心の心よく推察の出来るものですわ。自分一人の幸福が他の一人

の方の不幸になるのはどんなに辛い事でせうとそれ程私は叔母を思つてゐます。それなのに叔母には私の心持なんかまるで分りませんでせう。

もう決して私人を怒さうとは思ひませへん、こんなに苦しいものならもう澤山ですわ。なぜこんなに怒しいのでせう。あなたを怒するに私は私あんまり馬鹿過ぎたの……

あなたを忘れようと思つては努めます。さうすれば萬事都合がいゝでせうとそれは出来な事にも思はれますけれども、その方が御迷惑もなし、私にも身のためかも知れません。あなたも愛してゐるとおつしやる、私がさうなのも御承知でせう。ですから今このまゝお別れすれば一番幸ひなのでせう。

私、私、常はなんだつてあなたを怒しちやつたのでせう！ 今流れる涙は自分を憐む涙です。さうしてあなたにもすまない事をしたといふお詫の涙です。……云々。

十一月五日

うらみ顔の常子

……どうしてもお別れしなくてはならないのでせうか？

こゝまで讀むと清は事務室の廻轉椅子に腰をかけたまゝ身體をすとおぶの方へねぢまげた。そこには赤々と石炭の火が晩秋らしく燃えてゐた。

四五枚の白い紙に細々とペンで書かれた常子の手紙を握つた右手、彼はその右手が自分のものである事を忘れて終つたやうにぶらり肘掛けの下に垂れて目をむつた。目をつむつて光のない頭の中にその人の面影を見ようとした。まづ常子の胸がそこへ現はれて来た。それから肩、眼、鼻や頬の曲線、軟い髪の毛、首筋、耳、耳朶、その耳朶の觸覺、それから齒、それから舌!

彼は齒と齒との戦きながら觸れ合ふかすかな音をさへ聞くやうな胸騒ぎを感じた。

一日のあゝした常子との別れ方がいかにも物足らなく今は感じられた。それはその日だけの別れではなかつた。一寸したはずみから心の奥に手をかけた彼女との長い別れになるのだつた。異性の間で享け得る歡びの大方を半年の間も共にした常子との最後の別れだつた。それなのに又明日でも逢ふ時のやうな心でしか別れられなかつた。永い別れになるかも知れない

と、互に口では云つてみても、やはり唯左様ならと云ひ、どうぞ御大切に云ふ外二人に言葉はなかつた。それが物足りなかつた。その耳朶でも噛み切つて持つて来たかつたそんな心持がした。

その朝清が店の暖簾を滑つて這入つて行く、様々な茶壺の古めかしく並べられた喧返るやうな香の中で、茶を包んだり、茶を量つたりしてゐた小僧達は、聲を揃へて、いらつしやいと云つた、物買ふ客と思つたのだ。彼は主間の間を奥へ案内されて通つた。直ぐ店に續く疊敷の一間があつて、常子の兄さんらしい人がそこで取引先の商人と對話してゐた。屋號の染付けられた大きな茶吞茶碗が坐つた二人の間に置かれたのも目立つてゐた。兄さんかしら常子の? 多分さうだらう、それにしては案外美しくない人だ、さう思ひながら清は御店の二倍もありさうに廣い物置の奥へ導かれて行つた。天井まで積み重ねられた茶箱の間の薄暗がりには異様な感を彼に與へた。小僧はそこから奥へ向つて、常ちやん、常ちやんと呼んだ。主人の娘を、常ちやんと呼ぶのも彼には一種異様に響いた。常子は二階から駆け下りて来た。普段府のま

んま、お化粧もしないで、束髪もくづれかゝつてゐた。彼には常子がいともより一層丈が高く、肉付のいい娘に見えた。おやつと云つて立停つた彼女は赤くなり、急いで襟をかき合せた。其場合の常子、親けな本統に嬉さうに感謝で輝いた彼女を思つて、彼は今更に寂しくなつた。

あゝ時が来た。時はとうく常子をもぎとつて行くのだ。自分から彼女をもぎとつて行くのは時だ。然しその時の進んで来るのを黙つて自由にほつて置いたのは誰れだ。彼自身ではなかつたのか!

常子がいつともをといひの朝みたやうにお作りをせず、小さな瘦我慢を持たず、壓するやうな戀文を言かず、さうしてもう少しぬけてゐて、浮氣らしく見えなかつたなら! さうして自分の心を絶間なく他所へ散らさせる幾人かの女性があるて呉れなかつたなら! きつと彼女と自分とは結婚したらう。……然しそれはもう後の祭になつた。常子はもう嫁いで行く。永遠に別れて行く。常子は、自分はどうなる。一人の見識らぬ男が常子と結婚をする。誰れでもそれはいい。儒越ながら常子を上げようその上やんと處女といふ慰斗をつけて上げよう。その代りどうぞ鄭重に、大切に、彼女

のよ。かう云ふとえらさうですけれどね。

愛される喜びにもまさる、愛する喜びといふもの歌を作りながら自覺しました。さうして本統の心でいつも深く愛してさへれば運命は微笑んでゐる、所が少しでも愛が薄らげばすぐもう私の運命は苦い顔をして喜んではいけません。これはつく／＼私實驗しましたわ。これほどの眞實はございませんもの。

でも今はもうそれもみんなおしまひ！

どんなに熱い、どんなに楽しい、どんなに美しい思ひ出が人に知れずこの一巻にこもつてゐるのでせう！ 考へてごらんさい、うつりなるほどです！ もしも私が少しでもあなたから愛されたと思つたら、世間の娘達どれほど私を羨み妬むでせうね。もし位置を代へて私がその娘の中の一人だつたら、それこそどんなに火のやうになつてあなたの人を嫉妬するでせう。……あなたは私を愛して下さつた！ 勿體ないと思つてをります。

私、今こんな存気な事落着いて書いてなんかゐられる場合ではないの、それを態と書いてをりましたのよ。もう我慢がし切れなくなりましたからお尋ねします。あなたはどう遊ばしたの、私を見殺しになさるお積り、御返事も下さ

らない、逢つても下さらない！ ……云々。

十一月九日

……常は絶望の淵にをります、神様どうぞお手を下さい。私にはもうあの方の姿が見えなくなりしました。神様々々あの方は私を見捨てて終ひました！ どうぞお手を下さい……

十二日

……私の靈はあなたに上げて終ひましたから、もう誰れにやるものも残つてをりません。私は喪神した人のやうに驚く許り冷淡に結婚といふものの前に立つてをります、いいえ、立たされてをります。

今朝ほど私は冷かにきつぱり返事をして終ひました。私は自分でも不思議なほど冷え切つてをります。

然し私の口を漏れた冷かな一言のなんであるかを少し考へませば、飛んでもない事！ 取返しつかない事！ が刻々目前に逼つて来る譯でございます……云々。

十三日

十一

今まで私は泣いてをりました。あなたの前で一度も泣いた事のない私ですのに、きのふですらあゝして泣かずに、ほゝゑんでお別れして参りましたのに！

やつとの思でお目にかゝれどんなに嬉しかつたでせう。まして偶然とは云ひながら夜になつて又往來でお目にかゝれたとは。これほどの幸は全く神様のお恵みと感謝してをります、よく直ぐ私がお分りでしたのね、私は遠くからあなたを見付けてをりましたが、本統に銀座まで買物に出ていゝ事致しました。あなたのお迷ひの方が女でなくつてどんなによかつたでせう。でも一寸御爾儀一つした丈で他所の人間志のやうに通り過ぎたのですもの、少し悲しうございました！ もう私はなんとなく變つた、そんな事をしみて／＼考へさせられ、急に駆け出して母に縋りつき、固くその手を握り、思はず捻りましたら、母はびつくりして、なにをするの此子は、と往來の人に恥かしいやうなとんきよな聲を出しました。私をかしくなりましたわ。……

たをどうしたらいいのでせう。

あなたを残して、かうして私一人が先に行く以上、あなたから忘れられるのは覚悟しなければなりません。生れて来た甲斐があつたと思ふほど感謝されたあなたとの戀も見捨てて、あなたより先に片づくなんて私は天魔にでも見入られたのでしたらう、せめてあなたに一足でもおくれてから結婚すればよかつたと思つても、今はもう後の祭です。

どうにでもなれと諦めませう。

考へ出せば随分色々な事がありましたわね。晴れた日、曇つた日、雨の日、夏から秋、秋から冬。このなま／＼しい面影を抱いたま／＼かうして他へ嫁ぐのは、その人にも本統に濟まない事でせうね。…致方もございません。その人にだつて戀人があつたと云ふのですから、お互忘なんでせうけれど…。

昨日しめてをりましたあの紅い帯を持つて行くと申しましたら、そんな派手なものしめられますかつて母に叱られました。なぜつてき返しましたら、娘ではあるまいしと申しますの。人妻は紅い帯をしめてはならないのね？

せめてはその紅い帯のしめられる間、にくい當子でせうけれどもどうぞ堪忍して、少し可愛

がつてやつて下さることお願い出来ませんか？
もう出来ませんか？

十一月廿三日、新雪祭。

今日で十一月もお終ひです。左様なら十一月さん！何をしても何を聞いても私は今左様ならと云ひたいやうな気分です。

前の日曜の蟬丸の批評が出てゐる新聞を集め、せめてはそれを見て喜んでをります。M生といふ方の「あらゆる點に優れた趣味のほの見え、立派な一家見を具へた、今なくてはならない人」といふ批評は一番私を喜ばせました。なくてはならない人！これは本統に適當な言葉ですわ。九月二十八日の女郎花を思ひ出し、今はひとり寂しい思に耽けてをりますところよ。

明日は日取もしつかりきりませう、あの人が来る相ですから。私逢はないでゐようかと思つてゐます。好きでもきらいでもない人なんですけれども。…私もうどうなつてもかまひませんわ。

あゝ／＼もう一度過ぎ去つたあの熱がほしい、今だつてお名前を見てさへ顫へる心です。

でもあのころは本統に烈しい心持で暮してゐました。私の一生にたつた一人の方、それを外の方へ残して嫁ぐ私の心、あなたはきつと外の方を私よりもつとお可愛がりになりますせう、さう思ふと今になつてあなたを放すのが口惜しく、嫁ましようございます。私の心のどこにこんな嫉妬が隠れてゐたか、今が今まで知りませんでした。これは生れた時からもう持つてゐたのでございませうか？ 恐ろしいでございます！

どうぞ外の方愛さないうてお葬ひ下さいましな？ あゝ私もう行くのが厭で／＼なりません。これでは本統に困ります。でも今更らどうなりませう！ 前を向いても後を向いても、私の思ふやうになる事は一つもなくなつて終ひました。…云々。

十一月三十日

あの人は今日まだ参りません。どうなりますことやら。そんな事に一番平氣であるのが當の私でございます。なんといふ矛盾でございます。

参つてもちき私内へ歸ります。きつと／＼歸ります。さうしたらもう箱入娘でもなくなるで

を幸福にして貰はう。

清はそんな事をかれこれ思ひつゞけてゐたが、やがて思出したやうに手紙を持ち直して、その先を讀み出した。

態々御祝儀にお出下さつた上に、可愛なお祝物頂き有難うございました。私はどんなに驚いたり、喜んだり致しましたらう。もう嫁いで行かうといふ私にあゝしたあなたのお心盡しはつく／＼身に沁みました。あの鎖、あの金の鈴、うれしくつて鳴らし通しに鳴らしてをります。夜銀座通りでお目にかゝつた時も、おとの脇あきから右手を入れて、あの美しい鈴を玩具にしなから、その音を聞いて歩いてをりましたのよ。

もう一度あなたのきすを！　せめてもう一度切りでも！　さう願つてをりましたが、その願が叶へば、又更らに／＼その上を望みます。私はなんとといふあと引上戸でせう。こんなでは達つても／＼、これでいゝといふ時がいつ参りませう。私苦しく切ないけれども、諦めねばならぬ時は、あきらめます。

どれ程あなたに御禮申上げたらいゝのですか。あなたのやうな方に愛して頂けたのですか。

ら、たとひ私の身は泥水になつても厭ひません。積りでしたのに、何にかといたはつて下さつた上に、清いまゝ私を他の手に渡して下さるといふのは全くあなたが本統に私を愛して下さつたからでございます。それを思ふと泣いて感謝してをります。あなたの愛の深さはやつと今になつて分りました。あなたが本統に私を愛してゐて下さつたといふ一番いい證據がこれでございます。

でも私はやつぱりいつまでもあなたのものです、いつまでもあなたのものと呼んで下さい。外の人のものにはなれません。私の胸はあんまり小さくつてあなた以外の人を入れる餘地がもうございません。私きつと／＼またお目にかゝりますことよ。あなたどうぞ常子に逢つてやつて下さい。水澤といふ名は松本と變りませうが常子の名はいつまでも常子です、どうぞその變らない名の常子に逢つてやつて下さい。いつまでも／＼常子を忘れしないで、この美しくも賢くもない小さな常子がこんなあなたを戀ひしたつたこといつまでも忘れしないで下さい。この手紙の上にはば／＼落ちるこの涙を御覽遊ばせ！　いつまでも／＼愛して變らずにゐて下さいね。

昨夜はこゝまで書きましたが、あまり泣いたので書けなくなつてそのまゝ臥りました。床の中で思ふだけ泣き續けました。幾ら價値のない涙でもこんなに泣けばあなたも少しは憐れとお思ひ下さいませうね。

その人が好きだといふのでもなく、さうかといつて綺麗でもなく、お金や才能があると云ふでもなく、賢いのもなんでもないのに、かりそめにも行かうなどとなぜ常は申したものでせう。私の心はやつぱりぐら／＼なんですわね。母も今夜一人で仕事してゐたら、淋しくなつてたまらなかつた。お前が一寸ゐないでもこんなだから、これからどうして暮さうと思つたら、心細くて仕方がなかつた。／＼つて申しますの。「私ももう行くのいやになつたわ。つて一緒に泣きました。あんなに喜んでゐた母ですらさうですもの。お嫁に行つて終ふつて、思ふより存気なものでもないやうですわ。でもこれが私の運命でしたらう。私は初めて今度の話を聞いた時、今度は！　といふ豫感がしました。今はもうどうにもからにも動けない處までやつて來て終つてゐます。

唯さうなるとなほ戀しいあなた！　あゝあな

月が缺け、さうして又もと通りになる宵。今夜は月蝕ね、月蝕といふもの、あやしい神秘なものではなくつて。

私今あの人から指輪を受取りました。もうこれで身動きのならないといふ證據でございませう。昨晩は泊らないで今日また午後参りました。今日は何度も顔を合せましたが、まだ言葉は交して見ません。

色々一人で氣をもんでゐるやうです。私の歌を見たいつて兄に頼んだ相です。私いやだと答へましたの。でも見るなら見てもさしつかへありません、呑氣な人らしいから平氣かも知れませんが、今あの人胸には私といふものがどんなに清く愛らしく氣高く映つてゐるかと思ふと吹き出したくなります。これが人間の滑稽でなくつてどうしませう。尤も私さう思はれるやうな顔を一寸してゐますの、そんな事誰れにだつて知らず識らず出来るなんでもない事なのですもの！

然しからして思出してみますと、あなたのお顔より、あの人のお顔の方が今日逢つただけにやつぱり判然見えますの。長い間にはお互に段々顔も忘れませうね。仕方ない事ですけれども本統に厭な事ね。私の頬のこの黒子おぼえてゐ

て下さること？ こつちの頬の片笑鬨も！ それから右の目の下の泣黒子もきつといつまでも覚えてゐて下さいね。

十日頃お暇が出来ませうか、私一度叔父さんの處へ暇をひに行かなければなりませんから、そちらでお目にかゝれますと、では都合のいい日と時をお知らせ下さい。

もう一度お目にかゝれる事嬉しい！ どうぞどうぞたんとく可愛がつて下さい、もうくお終ひね。どうしても仕方がなくなつて終つたのね。御免遊して下さい、私本統に濟まなくつてなりません。

十二月七日

つい先程教會のくりすますから戻りました。これが最後のお参りでございます。赤や白や青の蠟燭のちか／＼光る焰を眺め、一人しみに泣いて参りました。

兎も角お目にかゝればお目にかゝる度、段々お痛はしくなつて、私の胸はいつも涙で一杯になります。本統に／＼濟まなかつた……私とう／＼こんな事をして終つたの、どうぞどうぞご免遊ばせ！

ああ、あともう二日。明日、あさつて……

あなたのために窓をあけ

あなたのために窓をしめ、

せめて二日ほどおそば近くで可愛がつて頂きたかつたことよ！

十二月二十四日、降誕祭の夜。

(以上八年四月、野方村にて)

十二

中根清は領事館で降誕祭の午餐によばれた歸りがけ、玄關脇の來信筒から、一通の手紙を受取つた。それは前夜くりすますの晩、夜更けで常子が最後の別を告げるために涙ながら書いて寄越したものだ。それを持つて海岸通りへ出て汽船帆模様な船を浮べた港の海に風に揺られて、満潮は石垣へ白波を打付けてゐた。彼はいつからとなく二十六日の夕暮を不意にも期待してゐた。此時初めて自分自身の心にも氣付いた。二十六日といふ日、その日午後三時

せう。お目にかゝらせて下さいませう？　こんな事人に知れたら大變々々。私忌はいい名を受けてもいゝ、あなたが唯可哀想よ。もう一度ゆつくりお口にかゝりお話がしたい……云々。

十二月一日

今夜は少し暇がありましたので一人静かにあなたの事を考へてゐましたら、又手紙がさしあげたくなりました。

今晚は！　かう云つてからあなたとお話をするのね。

先日あの方が来て、日取は二十六日ときまりました！　そんな忙しい事駄目ですと私が云張りましたが、なんの役にも立ちませんでした、こんな事は二年越しになるといけないとか、年内が忙し序にいととか、勝手な理窟のつくものですわね。さうして直ぐ旅行したいといふのだ相です。旅行なさるならお一人の方がいゝでせう。私なんかお連れになつたつて決して面白くはございませんよ、つて云つてやりたうございますけれど。

今日も薄暗くなつてから参りました。兄と何か面白相に話し合つてゐる容子です。

私は一人であるのが一番好きです。これ御承知でせう。一人でかうしてゐるのがどんなに幸ひでせう！　他の人と一緒にゐるのは辛い事です、ゐなくてはならないのはまだその上辛い事です。

私結婚したら、出来るだけの事を致します積りですが、もしかすると私の性格は結婚生活に不幸にしやすいかとも氣づかれますの。私は妙な女ですのね、自分で自分が時々怖くなるのですもの。行末の事など考へる時不思議な不安に襲はれます。いつそ白痴にでも生れついたらどんなに氣が樂でしたか知れません。

私は海の夫人のやうです。あのこはいふ大に溺視られながらずく海の底へ引込まれて行きます。私も通れやうがないと思ひました。あの人は今夜泊つて行く容子です。顔合せるのがいやで仕方がございません。

ですからもう少しこの机の前を立たずにゐませう。

さうして最後のお願ひを書きます。丁度いゝ折だと思ひますから。第一には御身體を御大事に遊ばして下さいといふ事！　お勤めや、お稽古や、お能や餘りお忙しいので、いつも御無理なさいますからどうぞ

十分御注意なさつて、私よりも長く／＼長生して頂きたい、たんと／＼お願ひはございますけれども、一番心配なのはやつぱりこのことになつて終ひます。あなたはちつとも御身體を大切になさらない方ですもの。世間のためにも私のためにも勿體なくて仕方がございませんわ。

それからもう外のお方をお可愛がり下さいませんやうに！

第三は來年はきつと洋行なさつてえらい／＼方におなり下さいますやうに！

第四のお願ひは少し申上げにくいのですが、……どうかこれぎりもう叔母さんの處のお稽古だけはおやめ下さい。何んといふ深い意味もないのでございますが、私その事を考へる度どうしても厭な心持になつて仕方がないのでございますもの。こんな妬み深い事を申上げてはおさげすみになるでせうが、一生の常のお願ひですからお許し下さいませね。

まだ嫁いでのから事、御能の事、今後の書信のこと、洋行からお歸りになつてからの事、澤山あります。が、懇張りが過ぎますから、これだけにしてお置ませう。(十二月六日夜書む)

今晚は！　また昨夜の續きを書き足します。

逢つたのは二十二日の事であつた。

「やつとあなたが、いゝ人になつて下さつたかと
思ふ時は、もうお別れする時だつたのね。」

常子は彼の手をいぢりながら云つた。

「こんなに下さつて下さつて嬉しいと、今までの半
年の間が恨めしくつて、急に悲しくなります
わ。どんなにお手紙を欲しがつたり、逢ひたが
つたり、泣いたり、心配したり、じれたりした
でせうに。夕暮れになると空をみて、なぜお手
紙を下さらないのかと消えるやうな思ふしたあ
れを考へると、自分ながら可愛くなつて終ひま
す。なんだつてこんなに素直な、しをらしい心
になり下つたかと口惜しくもなりました。でも
そんな事も皆んな思出になつて終ひませう。も
うこれからはさうしたいと思つたつて出来なく
なりますわ。」

さう云つて常子に泣かれた時、清は返す言葉
がなかつた。

「私自分でこんな運命を選びながら、……それ
はあなた許りの罪でないとお慰め下さつてもね
……矢張り私の罪なのに、こんな蟲のいゝ事は
云はれないんですけど、この後何年たつてもあ
なたのお心は變らないと信じさせて下さいまし
ね。いゝでせう？　よござんすかきつとよ？」

たとへあなたがどなたかと結婚なさつても、私
のやうにお心だけは變らないであると信じてを
りますわ。どうぞあなたもどこまでも私をお信
じ下さいね。」

「どうなりますか、私共の運命は何もう分ら
なくなつて終ひましたけれど、何事も神様にお
任せしませう。今迄私達を守つて下さつた神
様ですから、きつとこれからも、いゝやうにし
て下さるでせう。もしいゝその神様のお思召な
らば、私あなたと逢ひます、どんなに恐ろしい
道を通つても逢ひに参ります。死ぬとおつしや
る時、私死にませう、さう思へば何んにも怖く
ありません。あなたのお云付の事は神様のお言
葉だと思つて、きつと守ります。死んでも守り
ますからね。」

二人が心臓を泣ぐませて、その家を出た時、
夜の氣は氣味悪く冷えて、街燈さへいつもとは
違つて地の星の輝くやうに目に沁みた。常子は
清の腕に縋つて歩いた、清は常子を引ずるや
うにして歩いた、でも二人の心にはまだ隙のあ
る物足りなさか喰ひ込んでゐた。もう銀座へも
行かなかつた。暗い往來はいつとなく田町まで
來て終つてゐた。

停車場の明るみへ入るのを躊躇して、物陰を

探し、二人は最後の接吻をもう一度取交はさう
と立停つた。無遠慮な烈しい電車の音が頭の上
を通り過ぎた。常子の手は氷のやうに冷えてゐ
た。清は嗅ぎなれた常子の移香をもうこれ限り
と思つて喰いだ。これ限りと思つてその唇をも
吸つた。彼女は却つてもう泣かなかつた。清は
思はず熱い涙を流した。最後の別、この考は
二人で隠れた物蔭の暗闇のやうに暗く重く、清
の胸に初めてひし／＼と切なく通つて來た。
電燈に照された下で電車が擦られた時、二人
は並んだまゝもう黙つてゐた。常子は一言さめ
て顔へてゐた。

清はその時の事も思ひ出した。

十一月末頃から清は何となく疲れるやうに
思つたが、此頃ではそれを自分でも目立つて感
じ出した。常子も「お目にかゝる度而疲せ」なさ
るとよく云つた。かうして度々常子に逢つて、
過度の充奮を強ひられて別れて來ると、いつも
倦怠と烈しい頭痛とを感じた。歸つて床に入つ
ても仲々寢就かれないで、朝も早くから眼がさ
めて終つた。夜中夢ともつかない夢に熟睡を
妨げられ通した。

この二十六日の朝も、清は五時頃もう目をさ
ました。日がさめても、眠が淺かつたやうに覺

に彼女は××で嚴めしく松本定雄と結婚式を擧げる。新夫人松本常子は××の披露の宴會に出て、やがて湘南の新婦旅行へ出立すると云ふのだ。

何十通も何百通も常子はその戀を清に誓つた。清一人を命がけで愛すると云つた。さうしながら彼女は嫁いで行く。然しそれだからといつて清は常子の誓を嘘の嘘とは夢さう思はなかつた。思はない所ではなく幾度も彼女の口説にはたぢ／＼となつた程だ。眞剣な手紙の文句にも彼の心は壓しつけられて苦しんだ、それ程彼は彼女の眞實を身にかけてゐた。

それでも然し一點の疑惑は取去られなかつた。なぜなら世の中に愛するとか、思ふとかいふ位、信じにくい言葉は彼になかつたからだ。どうして人の心がそんなに容易に極められよう。戀は信ずるより疑ふのが眞實らしく思へた。彼女は自分ほど浮氣でない、それは十分信じてゐても、人生の一大事といふ結婚にすら束縛されたりしないほど常子の心は自由な心である、それをどうして清の不實な戀を重しに押へ付けて置かれよう。彼の戀、その複數の戀は偽る意志がなくつてもいつも多くの人の眞實を賣つて終つた。この狭い自分だけの經驗から割り

出して、どうも清には常子の言葉、常子の心を悉く信じ安心してゐる譯に行かなかつた。いくら常子が誓つてくれても疑が少くなるだけで、淺くはならなかつた。又いかほど逢つても逢つても違はない間の彼女の生活が別にあるやうに思はれてならなかつた。「なぜあなたが自分のやうなものをこんなに愛して下さるか、それが信じられません。」この常子の苦しみはたえず清にも付纏つてゐた。

かういふ清に、かういふ風に常子をも思つてゐる清の心に、二十六日といふ日がどう映るか、それを清は心待ちにしてゐたのだと氣付いたのだ。二十六日三時が鳴つて、日がくれ、夜になつて行つたら、その時こそ常子に對する彼の本統の戀しさが分りさうに思へたのだ。消え入るやうな悲しみ、身の置場もないやうな悶えに清は襲はれるかも知れない。さうしたら自分には思ふ存分にその呵責を受けよう。常子は涙を流しながら嫁いで行くのだ。自分が苛まれるだけ魂を苛まれ、泣けるだけ泣かう。さうしたら本統に戀に活きたやうな心持にもなれるだらうし、不實な自分の罪もそれで幾分淨められ、常子に對する詫にも少しはなるだらうと勝手な空頼みを頼みにしてゐたのだ。

最近一人はしげ／＼逢つた。十二月十日、常子は下田の叔父叔母の處へ暇乞に来ると云つて櫻本町の停車場で清と落合ひ、伊勢山から諏訪山の方まで散歩しながら話した。日が暮れかゝつてから急に彼女は別れて行つた。十五日三時には新橋驛でらんでぶうをして、その近所の奥まった一室で會つてゐる間に日が暮れて終つた。彼女が束髪を結び直し、顔を作つて戸外に出たのは九時過ぎだつた。風は寒かつたが、銀座通りは賑はつてゐた。きつと知つた人に遇ふかも知れないよと、二人は恐れながら、意地張り合つて負けたくない心持と、運試しの冒險的な快味とに操つられつゝ人通りの多い中を歩いた。臘脂色の金紗に、るい十六世模様の狩織、同じ色の長い襦袢をした彼女のすつきり丈の高い姿は歩道の人を悉く振向かせるほど派手で美しかつた。その晩常子は自分ながらかうした妖姿を惜むやうに見えた。常子は有樂町から品川まで、清は櫻本町まで電車に乗つて歸つた。十八日は西洋小間物を買ふのだと偽つて彼女は又横濱へやつて來た。ぐらんどほてるの海に向つた食堂で晚餐を共にした清は、自動車で品川まで彼女を送り届けた。途中は車内の明りをも消した。最後に又新橋の同じ家で

自分が常子に與へた總ての終りに残るものはたつたこれだけなのか。
手谷あり信じられ相なものは夢のかけらも清に残つてゐなかつた。

十三

霞ヶ浦の銃獵から清が歸つて來ると、横濱の町はもうすっかり正月気分になつてゐた。
停車場でB氏と別れ、跡込みに獲物をどつしりとせた俵の上から、門松と門松の間に張り波された縄、仰々しい賣出しの景氣よさを電燈の火影に眺めると都會の歡樂は又新な迷惑に相違なかつた。恐ろしい人込の間を車夫は威勢よく掛聲をかけて走つた。霞ヶ浦の眞菰の水も、大晦日の街の火も、二つながら清にいかにも活々とした實在に思へた。聲だか、音だか、都の雑多な響は蜂が唸るやうに耳にこもつて、たつた三四日のことであるが、さも長く聞かないものを聞くやうに感じられた。夜に見る往來の女、それはあの女がこの女がといふのではないが、みんな恐ろしく美しく見えた。靜江、貞子、お梅、夏子、それに常子のことも切なく思ひ出された。部屋火鉢も、普段車の心地よ

さも、養父母の顔も待ち兼ねるやうに懐しくなつた。俵は揺れながら人込を走つた、往來の人は車夫に劍突を喰ひ左右によけながらも賑かに笑つて、清の歸つて來たのを迎へた。

安月給取の梨通りな正月に、清は雜貨を視ひ、屠蘇に酔つた。流石に常子の事は何かにつけて思ひ出してゐた。三日の朝の事であつた。十枚許りの遅れ走せな年賀にまじつて彼女から一通の封書が届いた。常子からの手紙は思ひ設けてゐなかつたので驚いた。然し恐れるほど意外な驚ではなかつた。死んだと夢でみた人に逢ふほどの喜びを感じた。

買物といつて出て參りましたが、私は郵便局の片隅で、あなたに新年のお挨拶を申し上げます。ようとしてをります。それをお許し下さいませうか。でも改つてお芽出度うと申すのも妙に氣が咎めます。何んにもお芽出度い事はございません。

何から申しませう。たつた一週間、それなのに、あんまり遠くお離れ申して終つたやうで手紙を差上げるのも恐ろしいございます。二十六日に式を済せ、その晩は大磯、それから湯河原に

寄つて今は伊東まで參つてをります。避寒客が多くつてまるで東京のやうでございいます。少しも落着きません。早く歸りたいと思ひます。歸り度いと申しますけれどもどこへ私は歸りませう。

大晦日の日、六本松の處で、領事の御家族らしい方々ににお逢ひしました。あの小さな隨將もなつかしい氣がして、もし御一緒だったらと思つたら、胸が逼つて暫らく歩けませんでした。急に用が出來たとかで、あすあさつてにも京橋の方へ歸ります。

其後は續いておよろしいの？ 心配でたまりません。どうぞお大事に。突然お許しもなく手紙差上げて悪くはなかつたでせうか、お怒りにはならない？ 散々考へたあとです。でもこれでやつと私安心出來たやうな氣が致します。御免なせ。御機嫌よう左様なら！

正月一日、午後三時局にて。

殆ど一月ほど經て清は又常子の封書を受取つた。それには月日も名も番地もなかつた。消印には品川とあつた。
開いてみると便り是一行も書いてなかつた。

めた心持もはつきりしなかつた。でも今日は常子の結婚日だ」と直ぐ彼は心の中で叫んだ。何となく天気を氣にしながら床を出て二階の縁の雨戸を繰り初めた。

東にあたる港の空には薄霽菊色の綿のやうな層雲が重なり合つて、處々に曙の黄色を透してみせてはゐたが、雲の切れた上半分の空には日の光は見られなかつた、暗く曇つてゐた。今にも雨らし相にも、晴れ相にも思へた。瓦屋根と物干臺の上を横きる無數の電線の道、朝の烟、港の方の汽笛、彼はそれ等の物の上に常子の顔を、重ねて考へてみた。然し今日遽ぐといふ常子がどうしてもはつきり考へられなかつた。定刻に出勤したが、もう年内の仕事は大方片付いてゐた。B書記官と二三泊で鉄嶺に行く相談などして空しく時を費した。溝はこのすばおとが必ず彼の健康と寂寥とを恢復させて呉れるだらうとそれをも思つてみた。

三時が打つと待ちかねて領事館を出た。一人散歩でもして、徐かに常子の事を思出したい、それにはどこに行つてみようかと迷つてゐるうちに、いつもの海岸通りに出て來て終つてゐた。かの七月の一日夏子常子智恵子等と小船に乗つて横ぎつた沖には、冬の潮が流れて、青黒い三

角波が立つてゐる。帆船は幾つとなくつながら、今その邊を通つてゐる。一抹の石炭の煙が流れて動かずにゐるのも何んとなく非常に悲しく見える。彼は今更らしくその日を記憶に喚び起した。常子と過した半年の思出はどれもこれも皆んなもう返らぬ記憶にならうとしてゐる。

清は近頃恐ろしく決斷力が衰へてゐた。どこへ行かうと決斷するのが億劫な許りに、遂づるゝに家の門に歸つて來た。家に歸つてみて少しも面白くはなかつた。和服に着替へて終ふと珍らしくもきちんと机の前に坐つてみた。やたらと煙草をふかしながら、障子の中の硝子越しに前の屋根や鈍い色の空をぼんやり見てゐた。とうとう降りもせず天氣豫報通り「曇り」のまゝ日が暮れて行かうとしてゐた。

二十六日はもう暮れて行くぞ、常子はもう××での式を済めた頃だ、どんな花嫁が出來たものか、八時分はどんな心持でゐるものか、さう様々な事を考へてみようとした。然しそんな空想は容易に纏らなかつた。悲劇の主人公にふさはしい氣分、それを清にその時刻、その事件がおのづからきつと伴つて來て呉れるだらうと期待してゐたが、いつまでたつても特別な感情は湧いて來なかつた。

常子は結婚するのだ、今人妻になるのだ、と彼は自分に向つてさう囁いてみたが、この言葉にはもう此間中から餘り馴れ過ぎて終つてゐた。それにいくらか花嫁姿や祝言の場面を想像しようとしても、その日の時が、他の日他の時と特に異なる明瞭な幻を魔術的に清の目に示し得る筈はなかつた。却つてどんな恐ろしい悲劇的な空想よりも嘗て常子が無意味にぶつた言葉や、單純な動作の方が、餘程強く今も彼の感情に響いた。

彼は机の前でやゝもすれば様々な回想に陥つた。それがあつた事ならいかに此細な記憶でも直ぐ常子を懐かしく思はせたからだ。彼は自分の現實主義に呆れ、今更ら意外な失望を感じずにはゐられなかつた。

最後に印町で別れた頃、思はず涙を流した、最後の手紙を受取つた時も、そんな心持がしたのに、彼女の結婚すると、ふ今日にはもう清の心は常子から離れかゝつて終つてゐる。思へばあの時が二人の最後の別れであり、同時に魂の別れでもあつたのか。もう二度とあんな悲しい思はしないのか、人間散事かうも簡單に行つて終ふのか。これが常子のあれだけの喜び悲みに報ゆる自分の仕打なのか。常子が自分に與へ

を價值づけて呉れたのかも知れません。

でもあなたが、あゝおつしやつて下さった事も恨みません。あなたは私をどこまでも一人前のものとして見て下さったのですもの。唯嬉しいと思つてゐます。もし私が下らない人と戀に落ちたら、私の身は今時分どうなつてゐたか分りません。世の中にはあなたのやうない方……

清は之が果して反語でなく用ひられてゐるのかと顔が熱くなつた。

……あなたのやうない、方はたんとゐないのですもの。西山さんでも分ります。西山さんは私の一番いゝお友達の戀人です。それなのに私がこちらへ參ると聞いてから私に失禮な事を云ひました。それで私の友達は西山さんと喧嘩して泣きました。あゝ私本統にいゝ事致しました、あなたを好きになつてゐて……西山さんは私の心が西川さんのために震へる事を望んでゐたでせうけれども、私にはあなたがありません。西山さんがそれと知つたらどんな顔をしたでせう。知らせて驚かしてやり度い。私の戀は誇りです。でもあなたは恥とお思ひ遊ば

さないこと？ それを心配して私はえらくなりたいとあせりましたのよ。戀するなら何か一藝に優れた方を、尊敬出来る方を、さう思つてゐた私の希望はやつと屆きました。いかに多くの犠牲も厭ひません。

一月の末頃から私は長らく品川へ歸つてをります。四日の日歌を一纏めにし思ひ切つてお送りしたのもこの室からでございます。お受取り下さいましたでせうか。夫は旅へ出てをりましたし、その上私は身體の具合が何となく悪うございました。醫者に見て貰ふほどでもなく、母も今に直る一時の事だと申してをりました。月始頃はよく毎日雨が降りました。雨の音を聞いてゐると氣が滅入つて、ほとく死ぬほど情しうございました。あなたをまた思ひ出してゐたのでございます。そんな時は用筆筒から御手紙を出して、過ぎた日と思つて許してゐました。朝などはいつまでも蒲團を被つて泣いてゐました。幾度も手紙を差上げようと思ひましたけれども、あなたの御農みが恐ろしくつて、書いては破り、書いては破り致しました。手紙を上げるのが悪いならば、お目にかゝるのは尙更恐ろしい悪い事でせう。恐ろしい、恐ろしい事に思つて震へてをります。けれどもも

し悪い事が人間にないならば、神様の御慈悲といふものは何んの役に立ちませう。神様私はあなたの御旨に従ひ、あなた任せに致します。あなたの無量な御慈悲を崇めまふ。今までもさうでした。いつもあなたは十分に私を御守り下さいました。此上もお守り下さい。

此内二度ほど夏子叔母様に會ひました。他所からあなたの御健康がおなほりになつた事を聞き、此上なく喜んでをります。

こゝにも、もう長くはをりません。京橋へ歸りますか、それとも暫らくの間、近くの海岸へでも轉地致しますか、兎も角このなつかしい窓に又も別れて行かねばなりません。

二月二十日

今日一寸品川の家へ參りました。今夜は羽田へ歸らねばなりません。何か申上げませう。今をはづせば、又暫らく手紙が書きにくうございます。なれたこの机でかうして手紙を書くのが唯嬉しいのでございますから大目にごらん下さい。めつたに上げられない手紙と思ふと幾千萬の言葉を記せばいゝか急に迷ひます。なつかしいあなた！ あなたはまだ常子と云

清の目にも月並な短長の歌が二十首計り寫し取つてあつた。その多くは伊豆の旅の思出らしかつた。

○風に

懐みある心を
吹く風よ、
靜かに吹けよ
勞はりつゝ吹けよ。
海風よ。

○

海原に立つ波きえてあともなけん、
相思とて風に似たれば。

○床にて

疲れて眠れ
夢もみざらんと、
涙じむ目に
なほ讀みつゝ物語、
あはれそこにも
戀の雨風。

○
朝焼の紅色の襦袢まで、
つかのま人の戀しきものか。

又暫らく常子からの消息は絶えて終つた。
二月二十一日清は珍らしくも次の手紙を、
自宅の方で夜の配邊に受取つた。

十二月二十四日の夜中の二時、泣きながら最後の手紙をあなたに書いたこの二階で、我慢し切れなくなつて又この手紙を認めます。もしお讀みになるのがお厭だつたら、封のまゝお捨て下さつても恨みません。色々な事が思ひ出されます。星に占ひをした窓、夏の間はいつも蜘蛛が巢をかけた窓、物語のお姫様のやうな心持で遠くお臺場の方の燈火を眺めた窓、涙ぐみながらあなたを思ふ歌を作つた窓、どんなに離れがたい記念の多いこの窓でせう。そんな事を思出しただけでも泣いて終ひます。

でも人のものになつてゐて、まだ外の方を思ふのは悪い事でせう。どんなにか、あなたも御迷惑でせう。夫は大變私を愛して呉れるやう

に見えます。もしも私が好きな人と思つてると知つたら、きつと大變だらうと思ひますの、そんな風の人ですもの、熱情家で、私の冷いとは大分違ひます。さうしてあなたと似てゐる所が少しありますのは嬉しいの。感情を餘り隠さうとしない所、人をけなして自分を擧げる事をしない所、さうして萬年筆で書く字それも似てゐます。

いづぞや最後にあなたから頂いた御手紙、あれはまるで佛蘭西あたりの名高い何々夫人といふやうな方がお受取りになり相なお便りでした。さうではございませんの？ 私には少し似合はないと存じました。

私はあなたのおつしやるやうに、そんな戀のいゝ遊戯者ではなかつたんです、私は何人にも知らないほんの娘でした。あなたを戀するのには私には重荷だつたかも知れませんが、私は決してあなたの戀のお相手にはなれなかつたのでせう。私はあなたが戀しい許りに一生懸命に賢くならう、あなたに笑はれまい、あなたに捨てられまいとしました。遊戯や、呑氣な心では有りませんでした。終始心を張り詰めてゐなくてはなりません。なぜならあなたが私より百倍もえらかつたんですもの。それが私の戀

笑つていらつしやるの。

思はず火のやうに顔がほてりました。慌てゝ私は智恵子さんに話しかけてまぎらしました。あゝ私こそさう何ひたかつたのですもの。私はあなたがどこで何をしていたらつしやるか知らないのですもの。あの時あの同じ音楽を二階で聞いていらつしやつたのに、それも知らないと思さなければならなかつたのですもの。

歸りに皆さん御一緒に電車で途中までまゐりました。上杉さん御夫婦とはあの夏以來初めてお目にかゝりました。あの七月の日の通り餘り御變りになりませんでしたから、懐しい悲しい心持がしました。それに智恵子さんは何かにつけ慈とあなたのお噂をなさるのですもの。停車場で叔父と一緒にになりました時、初めてあなたもいらしつてゐた事を知りました。

思はず胸がふさがりました、驚きました。口惜しうございました。

神様なぜ逢せては下さりませんでした。今迄はよく二人を守つて下さいましたのに。神様！昨日お目にかゝりそくなつたといふ事まで、もうこんなに慈しさが増します。なぜ過ぎた日計りが慈しいのかと思ふと生きてゐるのがつらくなりしました。ではもうやめます。いつまで書いて

ても同じ事です。唯いつまでも私はやはりとのまゝの私です、常子でございます、さうお思ひ下さる事出来そうです？

三月六日

音楽會では清もそれとなく常子を探してみたが、つい見損なつて終つた。常子の手紙を取つてみると、いかにもそれが残念でもあり、自分の熱心が足りないやうで、申譯なく思へてならなかつた。彼女に對する戀は春と共に新しく芽ぐんで來た。既に處女を失つた常子、その心身に起つた變化、それを思ふ度清は誘惑に充ちた殆んど病的な惱みに襲はれた。邪念妄執だけはなぜか彼にとつて、彼の他の一切の精神の力より強い誘惑を持つてゐた。それを自ら警戒しながら、自らどうともし得なかつた。

過ぎた夏の頃の清と今の清とは不思議な位違つて常子を見た。我ながら己の變り行く戀の姿に驚かれた。

遂に清は人目につれてもいい、程度の文句にその思をついで、上杉智恵子といふ女名前を借りて、返事を書き上げた。出勤の途中、ぼすとの前に立つて、思はずあたりを見廻し、投書口の

蓋をあけ、重みのある西洋封筒を急いで投げ入れると、ずしんと底に落ちる音を聞いた。彼の「ちつぽけな良心」は薄氣味のよくない其音に驚かされて幽かな消息をもらしながら、急いでぼすとから遠ざかつて行つた。

十四

上杉智恵子さんからのお手紙、表書を見た時、不思議に思ひました、封を切らうとして、ことによると……といふ氣がしましたが、それは直ぐ望まない事に思へて終ひました。

何んといふ嬉しい驚でしたらう。

今あの驚、喜を思ひ返すのは不可能なやうです。はつとしてあたりを振り返りました。有難う、有難う、嬉しいございます。待つた甲斐がありました。あなたは矢張り御返事を下さいましたのね。

あなたはいつまでも靜かに私を思出してゐて下さつた。忘れもせず、亂さうともせず、遠くから私を見てゐて下さつた。

あなたは消しいとお書き下さいましたね。本統でございますか、少しでも淋しいとお思ひ下さいますか。嬉しいこと、私はそれを望んで

ふ女を覺えてゐて下さいませうか。こんな無駄の事を書かねばならぬほど、私共は遠々しくなつてをります。

定雄は此上なく私を愛して呉れます。私も愛してをります。そばにさへゐて呉れればさうでもございせんが、雨が降つたりすると矢張りあなたを思ひ出すので困ります。雨が降るときまつてあなたで心が洞み相に愛鬱になり、身も世もない惱しさを覺えます。雨につけての思出が多いせゐでもございませうか。

今は唯もう一度、唯もう一言申上げて、あちらにさせて下さいまし。私の本統に唯一人の戀人！ あなたこそ私の一生に唯一人の戀人でございまして、それは日に日に明かにはつきり私に見えて参ります。

唯これだけの事でございます。これだけの事でございませうけれども、これはどんなに大切な事でございませう。それをお目にかゝつてしつかり申さないで終つては一生心残りでございます。どうぞ私のこの願、お許し下さい。

これからは大を愛し、生活を楽しく幸福にするやうに努めますから、どうぞ御安心下さいませ。

でも心の月隅にあなたの面影をとめて置く

事は許されると思ひます。あゝ何んといふ美しい短い月日でございましたでせう。その時はそれほどとは思はずに過ぎて終つた事、今更ら勿體ないとも何んともぶひやうがございせん。

美しい夢は皆んな去つて終ひました。

あなたも私の顔お忘れ遊ばして？ では之で、丁度紙もなくなりまして、時間もありません。左様なら。お丈夫で幾千代かけてお榮え遊ばしませ。左様なら。左様なら。

(私は今羽田の××館といふのに別館を借りて住んでをります。品川よりは少しそちらへお近くなつた譯です。)

二、二十九日

久しく御無沙汰申しました。御變りもございせんか。

思ひついたやうに時々手紙を差上げる事失禮でない？ お許し下さる？……私無事でや

りこの羽田にくすぶつてをります。多分當分はこの家にかうしてをります。それからの事は適當な家でも見付かなければ分りませんが。

昨晩はBの音楽會でございましたから、無理

に都合をつけて帝劇へ参りましたの。ことによるとあなたも入らつしやるかも知れないと叔母から聞いてをりましたから、それが第一の理由で。こんな事申上げるのは悪いと存じますけれども、あんまり長くお目にかゝらないので、二人の間に死の國でも横はつてゐるやうな心細さが致しますのです。路傍の花だつて、一度目にしみた色が褪せて行くのは悲しいものです。あなたの影が段々消えるやうに思へますのです。それを惜まないでゐられませうか。遠くからでもいゝ、あなたの後姿でもいゝ、とこれだけの望で私参りました。

けれども叔父の取つて置いてくれた椅子があんまり前なと、人入だつたので、私の望も頼み少くなつて終ひました。

でもあなたは私に御氣付きになりました？ それだけでも伺ひたいと思つても、それも出来ませんの。

私の右には上杉さん御夫婦、左には北川さん、湯原さん、吉村さんといふ順で並んでゐました。すると吉村さんが湯原さんにこんな事云つてゐるのが聞きました。一中根さんは此頃どうなさつたか、常子さんに伺つてみませうか？ つて。さうして何か小聲で話しながらくすく

牡蠣の貝殻許り白々と目にしみます。白骨のやうなその貝殻がさも私のいゝ友達のやうにも思へてなりません。

考へてゐるとなんだか私自身が恐ろしくなり、一人でゐられないやうに恐ろしい感じがします。なぜでせう？ 早くもうちを引上げて、品川へなり、京橋へなり人のゐる所へ歸りたいと思ひます。

あなたのお手紙を又繰返して読んで、物足りない心地が致してをります。優しいお心といふものはまるで今日の雨のやうではございませんか。唯ぼうとしてゐる許りでございます。

こんな事退屈まぎれに書きました。お忙しいお方へ、どうぞご免遊ばせ。

三月九日

又今日も雨です。もう春らしい雨が降るやうになりました。雨傘をさして手紙でも出しに行

外に用がない日でございます。書くことも思ひ出せない

ほど退屈でございます。あゝ退屈でございます。死ぬほど退屈でございます。

三月十日

十五

清は約束の出稽古を電話で斷つて置いて、外套のぼけつとに常子の手紙をねぞこみ、五時半頃領事館を出た。彼は多忙しげに市内電車で櫻木町へ行き、そこで院線電車に乗替へた。その間始終誰れか知つた人に會はないかと、それが氣になつていつになく落着かなかつた。

猪田××館の半町ほど手前では停留場から乗つて來た俤を下りた。歩きにくいぬかるみ道を苦心して歩きながらも、いつまでもかうと決心がつかかなかつた。もし間がよかつたら××館に入つて夕食でもしてみようかと、その位な

あやふやな考を持つてゐたに過ぎなかつた。遠くから汽笛や、電車、自動車の響が聞えた。それを聞くと又横濱へでも、東京へでも、歸らうと思へば直ぐ歸れる、歸らうかさういふ氣も一方ではしてゐた。

彼が領事館を出た頃にはもう雨が霽れてゐた。然し空はまだ曇つて、雲が流んでゐた。暮れるに従つて西の方が茜して來た。ぽおつと赤くなると同時に暗くなつて行つた。往來の泥

濤でも、海苔干しの簾でも、沼地の蘆の枯葉で

も、板塀でも、したみでも、悉く連日の雨を含み、重ねに膿んで、この落方の方の光の中から清を見守つてゐた。彼は何んとなく落人の心を感じながら、その濡れた空氣の中を見臭い磯の方へ行つた。

水面から僅か許り盛土をした湿地の上に、船板などの塀を廻らした場らしい、それでゐてどこか淫らな趣の建物がこの邊の旅館、鐵

泉街であつた。彼は順々に屋號を讀んで行つた。××館は中でも割に小さな家だつた。角な曇硝子の行燈が門柱から往來をのぞいて、それにあはれな明りがついてゐた。然し空はまだ

明るかつた。彼は立停つて門内を覗いた。もしその瞬間そこから常子が夫と一緒に出來たらと思つて

みた。玄關までの敷石は清められ、盛鹽などがしてあり、障子はあけ放したまゝ、式臺には薙被

りの四斗櫓が一つずつゑあつた。誰れにでも、さあお這入り下さいと云つてゐる表情である。然し清にはそれが却つて氣味のよくない、陰森

に導く平坦な道のやうに見えた。暫らく躊躇してから、彼は小戻りして濡れた塀に沿つて河岸の方へ行つた。薪の積んである物置小屋の前で一人の爺さんがぼんぶで水を汲

をりました。私をお手放しになつて、何んとも
お感じ遊ばさないでいらつしやるとは思ひたく
ございませんでした。少しは淋しくいらつしや
るやうにと内實は願つてをりました。

あなたは今無理に私を欲するのでもなく、
只軟いお心で思出すとお書き下さいました。
私今やつと御手紙でさう云ふお心が分りました。
淡い戀で人を忍ぶ、この心は優しうござい
ます。誰も咎めは致しますまい。

でもこゝへ來てから二三度云ひやうのない愛
鬱に取つかれ、じれてじれてゐました。あなた
をあんまり思出したのでございます。でも泣
けなかつたのでひとりでにじれたのでございま
す。傍に人がをりますもの。

いつぞや一二度お話し九州の人の事餘り思
出しませんでしたけれども、此月の歌の雜誌に
あの人の切ない戀の歌が澤山載つてゐるのを読
んだ時は泣きました。私はあなたを思つて泣い
てゐるのに、その人は私を思つて見ぬ戀に泣
いてゐます。あなたのために作つた歌をあの人
は自分のためのものと萬一思込みはしなかつた
か、もしさうだつたら本統に濟まなく思ひます
わ。私にあなたといふ人がある事誰が知つてゐ
ませう。でもこれが世の中なのですわね。その

人は私を思つて泣いてゐるのに、私はあなたを
思つて泣いてゐるのに、あなたも誰れかを思つ
て泣いていらつしやるかも知れませんもの！

でも私の心は惡人とは思はれませんか、
神様もお罰しはなさらないでせう。今はお手紙
で心が利げられてゐます。死ぬほどあなたを
思ふ事なくしませう。あなたのまねをして、無
闇に人を欲しがるのはやめませう。あなたは元
からさうでしたの？

それでもお口にかゝるのはよくない事でござ
いませうね？

私は我儘に大事にされて暮してゐます。けれ
どもやつぱり昔は戀しうございます。夫婦とな
ればいかに我儘をしようとしても、ある點まで
しか我儘が通ります。結局は服従しなければ
ならなくなつて終ひます。今まで意地を張り通
して來た私ですが、今では喧嘩ですれば矢張
り妻の私から折れて出なければなりません。愛
されてみれば愛されるほど心の荷は重くなるん
です。何んとも云へない壓迫を感じさせられ、
又昔通り一人になりたいと思ひます。私
はいづつまでも一人で、ぼんやりして暮したい。
自由でゐたい。それは勿體ない我儘といふもの
でせうか？ 私一人が女の癖にこんな事を思

ふのでせうか、誰れでも嫁いだ人はこんな事を
考へるのではないでせうか。

では又きつとお手紙を頂かせて下さいまし。
これも私の我儘でございませうか。餘り蟲のよ
過ぎる註文でございませうか。ではあなたのお
氣の向くまでまたちつと我慢して待ちませう。
あゝ本統にどんなに私は喜んであなたのお手
紙に接吻しましたらう。あゝこんな事も私は
もう申してはなりません！ 私は奴隷でござい
ます。主人の望まない事、それはいかに私が望
む事でも許されないのでございます。

御機嫌よう。自由な鳥のやうにお話し遊ばせ。
段々春が近づいて参ります。いつまで私の冬は
つづくのでございませう。よそながらの夢を
承らないのも、久しい久しい感が致します。
久しいと書くだけで淋しうございます。

三月 八日

今日は雨が降つて、沖の方がぼろとけぶつて
をります。夫は毎日東京へ参り、夜は大概遅
くでなければ戻りません。唯今この別館には
客がゐなくなり、私一人でございます。どん
なに淋しいか分りません。岸に散らばつてゐる

ないでせうか。本統でせうか。でもかうして急に堪へがたく戀しくなつたのをみれば、やつぱり夢ではなかつたのでございませう。本統にお目にかゝれたのでございませう。現とも幻とも私には分り兼ねるほどのことですが。

世にも恐ろしい事、世にも恐ろしいと信じてゐた事、………。私には何ももう分りません。

世にも恐ろしい事、………。世

にも恐ろしい事とはあんな事なのでせうか。あんな事が世にも一番恐ろしい事なのでせうか。それにしては餘り當然の事のやうに思へます。

これがそんな怖いことなのでせうか。私は今ちつとも怖くはありません。只嬉しい、嬉しい許りです。今程幸福な事はないと思へます。

あなたが本統に本統に私を愛して下さつてゐる事がもう明か過ぎるまで明かになりました。あなたが私を本統に愛さないでどうして私はこんな幸福になる事が出来ませう。

夢にも思はれない幸福が昨夜突然に訪づれて参りました。私は何もかも忘れ、嬉しいに酔ひました。あなたははつきり誓つて下さいましたね。これから私を戀人にして下さるつて！

本統？
本統なの？

私がどれほどあなたを眞剣に一圖に愛してゐたかも今初めてお分りになりましたでせうね。さうして私との事が知れてもかまはないと思ひ下さるのですつて、さうして私とどこをお歩きになつても、誰の目にもふれても恐れないとおつしやつて下さいましたね。私も嬉しいつて息がつまり相でした。日蔭にあたものが、お日様を仰ぐ事が出来るやうな嬉しいさを感じてゐます。もうだれも怖くはなくなりました。さうして初めて私は本統にあなたのものになる事が出来ました。

私は恐ろしい事をしたと思へませんから、曲りなりに善い事をしたと思ひませう。神様のお許しがなくて出来る事は一つ地のの上にはない筈ですもの。

それにあなたのお心、あなたの意志、それは何んといふ力です。あなたは思ふ通りこの世の中をお動かしになります。あなたは何んといふえらい方でせう。(とどうぞ申上げる事をそのままお信じ下さい。昨夜一晩かう考へたのですから) あなたは私の戀人ですね。私がかう大きい聲で申上げられるのは今が初めてです。どんなに今迄それが物足りなかつたでせう。私はあなたを戀したつて事だけ私の生涯の

誇です。私ほど戀し、私ほど望みの叶へられた女が又とありませうか。私は全く仕合せです。

昨夜は何といふ嬉しい、都合のいい一時でしたか！ 全くお慈恵です。一昨夜のやうに折角にお出下さつたといふのに私のゐないやうな不運もございしますんですからね。

私が髪を結つてゐた鏡の中に、何か見えたやうに思ひました。驚いて窓の方を振向きました。その硝子にお顔が映つて恥かしい私の姿を笑ひながら見ていらつしやいましたのね。

隣室に人の來た氣配は感じてをりましたが、それがあなただらうなどどうして思ひましたらう！ あの時のお聲、それは地獄から私を呼び返すため、お呼び下さつたやうなお聲でした。

あゝあのお聲！

外はもう暗くなつて、私は部屋の中に堅くなつていつまでも突立つてゐました。私はどうすればいいのかわりませんでしたから。

あなたは昔のしなやかなるを静かにお明けになりましたのね。私は顫へてをりました。

あなたは少し煩がや減せになつてゐました。それが何故か大變悲しうございました。私の好きなお顔に私のこの手ごあてて私は嬉しい悲し

み込んでゐるらしく、波の音のたえたうちに、
單調なその水波みの音許り夕暮の静かさを亂し
てゐた。

××館が立つてゐる方を向いて、清も塹際
に立ちすくんだ。横濱、洲崎の方まで見える東
京灣は割に廣々と彼の目前に展けてゐた。清
の丈位な石垣の上の狭い芝生の上に、二棟の二
階建があつた。本館と別館との間には湯殿らし
い平家があり、ひよろ／＼とした煙筒から煙が
眞直ぐ上つてゐた。彼は注意しながら、塹のか
げを出、石垣を華奢な指先で一丈支へながら、
伸上つて内の様子を覗いた。もう家の内は暗い
時刻だのにこの部屋にも火はついてゐない。
それ許りでなく、人氣らしいものは少しも感じ
られなかつた。

清は手を石垣から離して、寂し相に自分の指
を眺めてゐたが、はにかちいふを出して一寸指
先を拭いた。彼の立つた四五間先の海中には海
苔を取るため様々な木の枝で作つた筏の頭が
林のやうに並んでゐる。その間を波のうねり
は息をしつゝ清の方へ動いてゐた。彼はもう一
度前と同じやうに伸上つて××館の内の容子
を窺つた。無益と知りながら二度も三度も同じ
事を繰返したが、暗い部屋はいつまでも暗く寂

しかつた。確かに留守だと思ふとひどく失望さ
れた。幽かなけみをすら感じさせられた。

彼は石垣と海の間の俣が許りな黒い砂の上
を歩いた。外套のほけつとに兩手を入れたま
ま行きつ戻りつして歩いた。その人が住んでゐ
る部屋、そのからつぽの部屋が直ぐ彼の目の前
にあると思ふとふふにふはれない戀しきで胸が
一杯になつた。もし常子に逢へたらどんなに嬉
しかつたらう。硝子戸の中の彼女は自分を見つ
ける事が出来たらうか、直ぐ庭下駄をはいて出
て來られたらうか、さうしてどんなに驚いたり、
喜んだりしたらう。……彼は様々な空想に耽り
ながら、やがて岸につないだ小舟にのぼつて、
艇に腰を下ろし、なほ常子を目の前におる人
のやうに考へつゞけた。

萬一常子があの二階にゐて、その上その夫が
ゐて、二人が睦まじげに夕食の膳にでも向つて
ゐる所だつたとしたら一體清はどうするつもり
だつたらう。それ等に對しては何んにも考へる
餘裕はなかつた。唯常子の留守なのを居ないの
を、それ許りくやんでゐた。然し彼の失望は實
に快い失望だつた。不安の伴はない、彼の「ち
つぽな良心」にも満足を得る、さうして
戀人としてのせんでいめんとるな悲哀を味ふに

適した、安價な快い失望に過ぎなかつたので
ある。

彼は長い間艇に腰をかけ、考へたり、海を
眺めたりしてゐた。光は海の上からも次第に消
えて行つた。水不線に近い空にはどこからとも
ない煙や霧が捲ひかぶさつて來た。やがて海の
底のやうに低い此邊の平地の上に、沖の船に、
小さい火がついた。潮は益々只吳く匂つた。海
苔とりの簗も、もうおぼろげに水と共に暮れた。
××館はいつまでも暗いまゝ黙つてゐた。清
も黙つて夜の中に隠されて行つた。兩上りの三
月十一日の宵は或る肉感的な温みでいつまで
も清を勞はつた。

やがて自分で自分の顔も見えないほど暮れて
から清がそこを立上つた時、では明日又來てみ
よう、さう暗い心が嘸かざるを得ないほど、
奪はれた常子は却つて懐かしい人妻になつてゐ
た。

十六

戀しい 清様
あゝ私は夢を見たのではないでせうか。昨夜
のことどうしても本統とは思へません。夢では

昨夜は遅くお歸りでしたらう心配してよ。

戀すれば

罪と知りつゝ

水をも踏む、

さめて眠く魂を

強ひて眠らし眠らす、

見果ぬ夢よ長かれ。

罪科に身を穢すも

心を賣るも惜しからざるに

なせひとりてに涙は流るゝや。

私はあなたにお目にかゝるのを的に、これ以

上きたなくなつたり、年とつたりしないやうに

しませうね。あなたとお分れした時分、お酒麗

するの張合がぬけてつまらなくなつてしやうが

なかつたのよ。それに引代へ今の私はどうでせ

う。こんな綺麗な化粧までしてゐます。

ゆうべは嬉しかったから、今夜は尚ほつま

りませんわ。また今度ね。左様なら、お休みなさ

い。私も寢巻に着替へませう。

三月十六日

十七

可愛いひとりのあなた！

お手紙はどれほど私を待たせたでせう。朝か

ら晩までそれ許り待ち暮しました。十六日の四

時頃お出しになつたのを、十八日のたつた今、

女中から受取りました。三時頃——四時頃でせ

うか。時計が停つてをります。

これからお返事を書いて、雨の中をあすこの

角まで出しに参ります。これ許りは誰れにも頼

むことの出来ない、大事な手紙なんですもの。

あゝ神様は何もかもいつもお守り下さいま

す。けれども私は罪人でせうか。私の罪は重

いのではないでせうか？

そんな事はないと思ひます。決して私は心

から悪い事をしてゐるのぢやありません。決し

て決して悪い事ではありません。私は私にか

う斷言するのでございます。どうぞあなたも常

にさう云つて下さいまし。誰れが私を石うち得

ます、誰れがあなたを審判し得ます。決して私

と同じことをしないでどうして神に誓へる者が

ありませう。誰れだつて私の場合になれば、か

うより外にはなれなかつたでせう。私にはこれ

が唯一つの道でした。たとひ外の人にもう一つ

の道を考へる事が出来ても、私には出来ませ

ん。怖い事ぢやない、罪ぢやない、誰れが私に

そんな事を云ひます？ あゝなんて醜い、偽

りな、本統の心を無くして、人のために許り氣兼

しながら生さねばならない世の中でせう。そん

な思をして私が生きてゐたつてそれがどれほど

自他の役にたちます！ 私はせめて自分を偽

らない。自分だけにでも役にたつ女になりたい

と思ひます。

けれどもお手紙を開いて読みながら、私は震

へて、がた／＼してをりました。恐ろしくつて

手も膝も震へました。齒もがたがたいつて合ひ

ませんでした。

何んといふ恐ろしさ、寂しさ、孤獨さでせう。

私はまるで世の中から追はれ、一人の道連れもな

い者のやうな心持がしてをります。

私はもうゐても立つてもゐられなくなりまし

た。手を合せたり、胸を押へたり、どうか氣を

落ちつけようとしてはゐましたが、目は何ん

にも見ません、耳は鳴つてゐます。今にも天が裂

け、禍が私唯一人の上に落ちて來さうな心

い思ひをしました。強い大膽なお心を矯しく、よく来て下さいました、といふ言葉も聲にあまりました。喉がつまつて終ひました。

下女がご膳を持つて上つて来た時、あなたは又窓からお部屋へお通じになつたでせう。私は何んだか申譯ない事をおさせするやうな心持がしました。でも御食事中、下女とお話なさるお聲が壁を透して来るのを聞くのは待遠しく、短い儘か計りの時間だのになぜ御食事などゆるゆるなさるのかと思ひました。御食事でもなさらなければ、尚ほ變に思はれたのですが……。

坂角苦心して来て下さつたのに、私あなたを十分御喜ばせる事も出来ず、申譯なく存じてをります。どうぞ免下さい。私どうしていつまでもこんな子供なものでせう。自分で口惜しくなつて終ひます。

電氣を消し、窓の障子をもととあけて、黒い後姿をお見送りしましたのに、私の方を見て下さいませんかでしたのね。何んだか泣き度い程淋しかったんですわ。もう一目見たかつたのに。

床に入つて暫らく枕に靠れうつとりと考へてをりました。悔いなく、嘆きなく、悲みなく、却つて心強く思ひ出してをりました。……

………床に私の惱ましい身體を横たへ、枕に私の小さい額を載せ、もう一度お目にかゝれるやうにと御慈悲を願つて、春のやうな夢に入りました。

戻りましたのはもう十二時を過ぎてをりました。何んにも知らないで……何んにも知らないで、………その癖私はいら／＼してをりました。

………何もかもいやく／＼つて強情を張り通しました。自分の歸りが遅かつたから、酒を飲んで歸つて来たから、それで私が怒つてゐるさう思つたでございませう。終ひにはとう／＼自分を厭つてゐるのかも申しました。

今朝も私に誰か外の人を思つてゐるのだからと申しましたから、やきもちやきだと云つて、怒りながら泣きました。本統に泣きました。あ苦しい。

もつと書きたいのですけれども紙がもうなくなりしました。明日にしますわ。もう一度、もう一度………でもそれはいけない事でせう？

三月十三日

いゝ紙がありませんから、こんな紙に書きます。

一昨夜のやうな事があつてはもう戀もお終ひだといつぞやおつしやつたのお覺えですか。ではあなたはもう私を愛しては下さいませんかの？何んですか心配になつて参りました。どうぞそんな事ないやうにね、お願いですからいつまでもいつまでも可愛がつて下さい。きつと誓つてね。あなたが外の方は誰れも見ないやうにあなたのお目を縫つておき度い。それを考へると氣になつてなりません。どうぞもう決してそんな事なさらないやうに。

今朝叔母の處から手紙をくれて是非そのうち遊びに來いと言つて奇越しました。そのうち一度訪ねるつもりです。叔母の處であなたとお會ひしたいわ。さうして濟した顔をして叔母のする事を見てゐたいわ。

たとひ一遍でもお目にかゝるといけませんのね。餘計戀しくつて、折角思ひ切りかけてゐたのに、又ものと通じになつて終ひましたもの。………これは私だけの事よ、では左様なら、左様なら。

三月十四日

世界は皆んな無かつたやうに消えて終ひましたけれども。

昨晚も十二時過ぎて夫は東京から歸りました。何んて忙しい人でせう。私はそれで床の中で××を読んでゐました。讀みながら時々枕に額をつけて「昨日のこと」思出してゐましたのよ。

私があなたより先に着いたので、本屋に腰をかけ、その主人と話をしてゐましたのは十分間位なのでしたらうが、其間に三度程店を出て橋の袂の方を見に行きました。あんまりお見えにならないので、橋まで行かうと考へました時、あなたが橋の方へお歩きになつていらつしやるのを見付けました。

その少し前通つた自動車の中にちらつと見えたとお姿をあなたぢあないかと思ひましたがやつぱりさうだつたのですわね。渾轉手と硝子戸越し何か話していらつしたでせう？

あなただと思ひました時、目の前を流れるやうな闇が通りました。悲しい、淋しい、口惜しい、取返しつかない事を又して終つたと思へて、氣が遠くなりました。でもふら／＼と本屋から往來へ出ました。さうして何もかも忘れてあなたに、よく来て下さいましてね、かう申上

げて終ひました。さうして二人切りで自動車の中へ入りましたのね。

讀んでゐる本が××でせう。それに少し昔の信仰が返つて來てゐたので、随分考へさせられました。此上重ねてお目にかゝるのは益々罪の上塗をする事だと思つたりしました。「悔い改めた時その時から淨められる」と長老はあの本の中で云つてゐるでせう。

でも私はまだそんな處まで行つてゐません。悪い事をしたと悔いる心も、もうこれ切りお目にかゝるまいとする心も、もつと可愛がつて頂きたい心も、いつまでもこの戀を續けてゐたい心も、皆んな同じ程度に強いんですもの。途中自動車の内からちらつと見たあの人、もし本統に大の兄弟だつたら、もしもあちらでこちらより、よりよく私達を認めたのだつたら、まあどれ程な騒ぎが起るといふのでせう。

私の身を置く處は明日からもうなくなります。母も兄も姉も、弟も、親類の人々も、あちらの父も母も八人の兄弟も、それに續く何十かの親類も、どんなに私一人を恨み悲みませう。私は呪はれ、揆たれ、粉微塵にされて、道端の泥の中へはふり出されなければなりません。それも怖くはないの、私はあなたを愛してゐます

もの、名譽だの命だの、そんなもの何んで惜しいと思ひませう。

でもね、兄さんがどんなに嘆くでせう。世間に對し、松本家に對し、どんなつらい思をしなくてはならないでせう。きつと死んで終ふでせう。兄は私などと全然違つたやうに考へるんです。妙に生れながら道德的觀念などの強い人です。私のやうな思想や感情をどれ程卑劣に憎み恐れてゐるか分りません。私は私の思想を胸の中に包んでゐますけれども、もしそれと分たらどんなに嘆き悲むか目に見えるやうです。あの人立場だつて同じ事です。これでもう滅茶滅茶です。妻にそんな事されるなんて、男として此上もない恥です、私を殺して、自分は死んでも、もう追ひつかないほどの思ひでせう。

あなたは？ あなただつて大變でせう。あなたの生みの御両親、御養父母、その他の方々もどの位あなたの痛手に憎まなければならぬでせう。もし萬一あなたが私と一緒に空にでも入らなければならなくなつたらどうしませう。領事館の方もお能の方も！ でも藝術家としてあなたの不名譽は幾分許されるやうな所もありませうが。

さうすると私はどうなります。私は死ぬか、

持がしました。あゝ今更何を驚き恐れるのでせう。

でも私達はどの位久しく、どの位賢く、清かつたでせう！ね、さうでしたらう。それなのに清くないと考へた方もあります。私が處女だった事、私のあの人は認めてゐませう。それだけで澤山。これは本統に都合のいゝ事でせう。あなたはいゝ事をして下さつたのよ。もう誰れが知つたつても關はない。さう思つても恐ろしい、怖い、怖い。なぜでせう。なぜ私の心は大膽な癖に始終恐れてゐるのでせう。なぜこんな弱い心に生れたのでせう。

かうなると益々戀しいのはあなたです。今ほど切なく、淋しく戀した事はなかつたやうな氣がします。あゝ懐しい、悲しい、戀しい、逢ひたい。なぜあなたはこゝにゐて下さらない。なぜ抱いて常の涙を拭いては下さらない。……私一人にもうこれ以上の物思ひは思ひあまります。

先夜私共二人の寫眞をお目にかけたのは子供のやうな他愛ない心からだつたのです。にお手紙を見てやつとあなたのお心持に氣付いた位、なんでもなく考へてゐたのでした。叱られてみると、しよけて終ひます。心ない悪い事

しました、堪忍して下さい。

私はあなたの外、何んにも望んでゐません。それはよくあなたにも御承知な筈なのに、私に大を愛せ、よい妻になれとおつしやいます。さうして眞實なんか見せて呉れるなどおつしやいます。これはあなたの御無理です。あなたは男です。これはあなたにさいました。私を愛しながら、外の方をお愛しになつてゐました。それも深くお愛しになるやうに見えました。考へれば如ましかつたんです。けれどもそれほど他に愛する方がありながら、私をもあんなに可愛がつて下さつたんです。それをどんなに感謝したでせう。今になつて始めてその事のどんなにむづかしかつたか、それがはつきり分ります。今私にその事があんまりむづかしいからです。

お目にかゝるのを恐れてゐます。何かそんな豫覽が私に初めて起つて參りました。でももう一度お目にかゝらせて下さい。書間は恥かしいけれども……二十日は仙臺から歸つて來た姉が來ますから、二十一日の午後なら出られます。もうこゝにお出になるのはいけません、危険です。どうぞ都合して、いゝ時といゝ處とを御返事下さい。ではお目にかゝるその待遠しい日まで。

嬉しい！お手紙、こない、お手紙破つて終はなければならぬですか。厭なの、どんなに厭でせう。でもお言付ですから諦めます。その代りまたいゝお手紙を下さい。お手紙で生きてゐます。どうしても破らなければならぬのなら、すつかり頭に入れてから破らうし、幾度も讀返してゐます。讀み返せば讀み返すほど息苦しくなります。

三月十八日

嘗ても今もあなたの 常子

昨日手紙を書いてから出しに行かうと思ひましたが、あんまり風が酷くつて歩けさうもありませんから、やめて一人で寝てゐました。もし外へ出て何か頭の上へでも落ちて來て死んだらどうしませう。私の死ぬのはそれまでの運命として、あなたに上げる手紙が私の袂の中にははひつてゐるでせう。大變だと思ひましたからです。大層な取越苦勞をしたものでせう。

だからお目にかゝつたのは一昨日になります。嘘のやうです。有つた事と思へません。でも唯樂しかつたといふ心持だけは残つて覺えてをります。目で見たら耳で聞いたりした外の

あの緩かな川も少しは波立つてゐるでせう。あなたが杖でお拂ひになつた薔の青々とした頭もどこかに流れて行つて終つたでせう。私の髪にと折つて下さつた紅い椿、あれをあの家へ置いて来て終つた事も思ひ出して、口惜しうございませう。いゝ色でしたもの。

自動車の事、どうも知れやしなかつたかといふ氣がします、それが少し面白くも思はれますの。でもあなたはお困りなさるでせうね。いゝ氣味よ！ 本統にいゝ氣味よ……嘘よ、それは嘘よ。私惡戯好きですから、御用心遊ばせ。私の辱あの上まゝ大事にしてあります。あなたのは？ 當になりませんわね。

なんだか私は今日少しはしやいでをります。これだけ書きましたけれども、減茶々々でお分りにならないでせう。

三月二十四日

十八

隣室の學生は二晩あて、本館の方へ移つて終ひました。なぜだかに私に分かりませんけれどもさうなつてみると、やつぱり私は人から離れてゐた方がいゝと思ひます。あなたの事思ふのに

いゝからです。

この間あなたが仕合せ過ぎる方と申しましたらう。あれは九州の人可哀想だと思つたからさう申上げましたのよ。あのこそ病氣ではあり、淋しい本統の獨法師です。私と文通をしてあの人の枯野のやうな心に初めてかすかな春が音づれたと書いてありました。短い私との友情の期間は思へば幸福だつたと書いてありました。

もし私にあなたといふものがなければ、どんなにもあの人を愛して上げる事が出来たでせう。同様私の夫も愛する事が出来たでせう。私はあなたのために大きな幸福を得ました、その代り數多くの幸福を捨てて惜みませんでした。

た。十のものを唯一つのあなたに代へました。私はどうしてこんなに色々の人を好きになる浮氣者なのでせう。でもそれは本統は何んでもない程度なんです。この位の程度では今までも數へ切れないほどの人がありました。あなただつてきつとさうでせう。

唯あなただけに不思議な魔力で支配されてるやうに引きつけられました。あなたは私の總てです。然しあなたにとつて私は總てではないでせう！ 九州の人に或は私が總てだかも知

れないのに、私にとつてあの方は確かに總てでない。これを前世の約束ごと、仕方のない因果とでもいふのでせう。何事も思ふやうには行かないと申上げたなら、思ふやうに行つたら大變だとおつしやいましたわね、忘れもしない去年の九月二十八日の嵐の日のこと。あの恐ろしかつた日のこと。

あなたにこんな勝手な手紙を書けるのも、いつまでの事か分りません。もつと／＼長く書きます。書けるだけ長く書きます。あなたはもうお讀みになるのがお厭でせう。もう暫らく我慢して頂戴。

朝起きて第一に思ふのは、今日も亦あなたに手紙書く事が出来るといふ事。自分ながら變な氣がします。可愛想だと思ひます、だつてお手紙を取く事が出来ないのです、せめては書く事が楽しいといはなければならぬのですもの。さうして日々起つた事は何んでも皆んなお話ししたいんですもの。どんな下らない事までも。昨日は少し氣持が悪くつて、とても書けなかつたので、短い散歩をして來ました。一寸した草原があつて、梅や椿の咲いてゐる處へ出ましたの。それは私の大好きな散歩道の一つですよ。

それとも一切を捨て、一切に捨てられて、
獨法師になつて、人を避け世を遁がれて終はね
ばなりませんまい、私はさう云ふ風にして隠れて
から、さてどうして暮しませう。どうして暮せ
るでせう。そんな時、肉親の涙や怨言を見聞き
するなんてとても私には我慢し切れませんか
ら、それらの總てから全然離れるため自分を隠
し滅しに行かなければなりません。

さうなつた時、あなただけは私を見捨てな
くつて？ 唯一人でも私の味方になつて下さ
つて？

あなたはきつとさうして下さる、他の人とは
違ふ、他の一切を振捨てても私の手を取つて救
けて下さる、さういふ氣がします。けれどもそ
れは私一人の思過しかも知れません。けれども
私はさう信じなくつては一刻もゐられません。
さう信じられない方なら、こんなに戀する事は
出来ませんもの。さう信じ抜いたからこそ、か
ういふ所へ來たのもですもの。

あなた恐れてはいらつしやらなくて？ 此言
葉を聞いてもう私を可愛がるのがお厭になりは
しなくつて？

私をさまで可愛がつては下さらないのでせ
う。そんな危い事まで犯して可愛がつて下さる

程、私は價値のある女ではないんですもの。
主よ、御心のまゝになさせ給へ！ いゝ教徒は
かう禱ります。どうぞ御心のまゝにして頂戴ね
：：私は、かうあなたに向つて申上げます。

でもこれでは本統に愛する心は物足りませ
ん。何が何でもきつと私を愛して下さい、さ
うお願いするこそ本統の心です。でも私あなた
に對してはさう云ひ切れないの。あなたの貴い
總てのものを私の爲めに下さいつて事まで押切
つて云ふだけの自信が私にはまだどうしてもな
いのですもの、口惜いけれども。

すると詰り知れなければいゝ、知らせさへし
なければいゝ、といふ所へ落ちて來ます。偽り
欺きの眞中で手を取つて生きてゐればいゝ、い
つまでもこのまゝでお別れしないで済みます。
ではどうぞ永久に、知れないやうにして下さい
ね、いゝでせう。いけないこと？

でもどんな弾みで知れないとも限りません。
そんな時はどこまでも、知らない知らないといふ
ひ張り切れるものかどうか、それは今から分り
ません。恐らくとても出来ない事でせう。でも
あなたにはいつも、みんなぐりうつく、とい
ふ運がついてゐて守られてゐるんですもの。そ
れに賢く總てを處理なさる事が出来るんですもの

の。心配しないであますわね。二人の間の秘密
は二人の胸だけにいつまでも藏めて、勿體ない
から誰れにも見せも聞かせもしますまいね。
：あゝこんな心細い安心立命が父とありませう
か？ どうぞ常をお憐れ下さい。云々。

三月二十三日

あなたが先日來て下さつたあの私の隣室に昨
夜から人が來ました。まだ若い學生で、病後の
養生とかに來たのですつて。どんな人か見たい
と思ひます。

唯今は私も一人きり、隣も一人きりです。
今朝夫の出がけに、私一人この部屋に置いて
行くのは心配ぢやないことと、あなたの事を思
ひ出しながら聞いてみましたら、夫は笑つてを
りました。

私達の聲など聞えませうから、私が若い妻
だといふ事は分つてゐませう。もしこれがあな
たのやうな人だつたら：。今夜も夫の歸りは
多分遅いでせう。でももう駄目、あなたはと
う二度とあの部屋へは來られなくなつて終ひ
ましたわね。

酷い風ね。この間御一緒に散歩した堤の下

ませんか。局は宿から近うございますから。
あの人のお風呂に入つてゐる間に、大急ぎで
これを書いて出します……。

三月二十八日

部屋の中は又一人になりました。かうして一
人あなたに書いてゐられる事はまあ何んといふ
仕合せでせう。今年はもうあなたに秘密な手紙な
ど書く事はない筈なのに、神様はどうしてか、
まだ楽しい日を興へて下さいます。然しその日
は何んだか短く、その上いきなり私を不運に落
さうとお思召からではないかとさへ思はれま
す。さう思ふと恐ろしくつて震へます。でも、
私にはあながつてゐて下さる！　さう思つ
ていつも心を取直しますの。

一昨日といふ日がもう十日も前のやうに思へ
ます。私は又あの日から今日まで大層色々な事
を考へて終ひました。また品川の家にあつたと
同じやうになつて終ひました。今の身も忘れ果
てたやうに。

いつぞや私は怖がらないと書いた手紙を持つ
て行つてぼすとい入れ、暫らく散歩してゐる間
に、もう恐ろしくつて／＼たまらなくなつて終

ひました。枯れ枯れの野道を泣きたい心で歩き
ながら、今までの心でゐては結局私の身は
破滅だと氣付きました。

さうだとは思召しませせん？

破滅です。あなたをこれ程戀しながら、外の
人を十分に愛する、そんな都合のいい事は出来
ませんもの。だからせめてあなたをもう少し薄
く思はなければならぬと考へつきましたの。
さうすると日が覺めたやうに、私はまあなんて
大變な事をしつゝあるのかと思つて震へました
の。心があんまり泣くと身體が疲れて終ひま
す。私は野道の真中で倒れ相になりました。

私は側の草原に行つて樹の根に腰を下ろし、
今でも私はあなたを愛してゐるか、それとも大
の方をより多く愛してゐるかで自分で自分に
たづねました。

夫は私を愛してゐて哭れます。然しなんと
なく私には物足りない所があります。私があ
なたを愛し、あなたに求めるやうなものを夫は
決して持つてをりません。早い話が夫は心の
ぬけてゐる私の身體だけを愛して、それで満足し
てゐるらしいんです。これでも本統の愛といふ
ものでせうか。私もあなたを戀しがりがり
しました。然しそれはそれだけを求めてゐるの

はありませせん。あなたの心まで得なければどう
しても私の氣は済みませせん。

私の戀しい人愛する人はやつぱり一人切だ
と心は答へます。眞に私を愛して哭れる事の
出来るのも只あなただと思ひます。(けれ
ども時々少し悲しいの。あなたのお心がどこか
へ行つて分らなくなる事があるんですもの)さ
うすると今まで羨んでゐた昔からの名高い物
語のどんなに若い、どんなに賢い、どんなに
美しい戀人達も羨ましくなくなつて終ひます。

もう／＼いそでさまだつて、じゆりえつとき
まだつて、ふらんちすかさまだつて、私は少し
も羨ましくなくなりました。ゑるてるさまが死
ぬまで慕はれたといふあの若い夫人を私は昔
からどんなに羨ましがつたり、同じやうな仕合
を欲しがつたりしたか知れませんでした。けれ
ども今は私自身嫁まれる身になりました。あな
たは御存じないでせうけれども、女は嫁んだり、
嫁まれたりするのが命です。あゝ何んて仕合
でせう。私仕合でございます。

どんな場合が來てもあなたは私を知らないとい
はおつしやらないでせう。私もうさう信じてゐ
ます。さう信じる事の出来る人を求めてゐまし
たのですから。私は私の騎士を探しあてまし

そこには穢ない子供が六人ゐて、私に「姉ちゃんどこへ行くの。つてきました。私は久しぶりで子供の相手になつて、鬼ごつこでもしようかと思ひましたけれど、もしその中の一人でもころんで、泣き出してしたら大變だからと思つてよしました。私は子供達の生々した目の光を眺めて思はず涙ぐみました。何んといふ美しい光でせう。近所でほんくを買つて来て分けてやりながら、「いつまでもさうして仲よく遊び。」といつて別れました。皆んなが大人しくほんくを受取つて呉れたので、私どんなに嬉しかつたでせう。その中の誰れか一人にでも、「いらない」なんかと斷られたら、私泣き出したかも知れませんもの。

さうされるのが私どんなに怖かつたのでせう。なぜなら私の小さい時はさういふ風の子でしたから。昔はそれをいふ事と思つてゐました。今はたとひ讐敵の手からでも好意をもつて與へられるものは有難うと受けた方がいと思ふ心持です。けれどもあの頃の心がまるで無くなつたのでもないと思ひます。人には少しすねたやんな所が見える方が、私好きです。なぜ私は儼んだ、すねた人間なのです、そのせいでこんなに見えるのかも知れません。

夫は私をどうしても戀など出来ない女だと申します。そんなに見えるでせうか。一でももし私が戀した事があるとお知りになつたら却つてあなたは氣持が悪くはない？」と申しましたら、それともさうだと云つてをりました。その癖自分は幾度も戀した事があるのに、やはり私に戀人なんかあつたと聞くのは厭なのでせう。男つて随分勝手なものですね。

私が聞けば、今迄にした色々な勝手なまねをいつの間にか得意で話出します。色々な國の女、でも日本に清い處女が待つてゐるやうな氣がした許りに、多くの人のやうな墮落はしなかつた。さうして見つけ得たのが私だ相です。

自分が清くないから、花嫁も清くなくつても仕方がないと諦めてゐたと申しましたから、あらさう、では大變損をしたと私申しましたの。さうではございませんか。でも内心は矢張りさうではないでせう。

どこでも夫婦は手紙を見せ合ふものだ相ですね。だから夫も私へ来る通信を見たりすけれども、私初からさう申しました。どんな手紙があなた宛に來ても私見ないから、私のもあなたには一切見させませんつて。……お友達は皆んな私一人のために書いて呉れるのに、あなた

にまで見せる譯には行きませんつて、きつぱり斷つて置きました。いゝ事をしました。昨日女中にもさう頼んで置きました。私宛の手紙はとつて置いて頂戴、あんまり澤山來ると氣まりが悪いからつて……。どうぞですからお手紙を安心して出して下さい。もう今日あたり頂ける頃と心待ちにしてゐます。なるべく時々下さい。朝の内着かなければ荷はいのよ。大變お逢ひしたらございます。花の春と一緒に吾々にいゝ日も亦来るやうに望みをかけて筆をとります。

三月二十七日

お手紙有難う。お能の方お忙しいんですつてね。伊勢山で阿漕をなさるんですか。いゝでございませうね。……拜見致したうございます。ことによると參られるかも知れません。もしさうすれば九月以來1年ぶりですわね。

唯今のお手紙によると、どうしても一つか二つあなたのお便りで私の手に届かないのがありさうな氣がして、不安でたまりません。明日の事かしこまりました。きつと參りませう。今度からお手紙はこの局宛にして下さい

つて下さるけれども、私一人でも一人ではないの。あなたに書くだけでも澤山の時間がかゝります。さうしてそれを出して、あなたから手紙は来てゐないかと局へ散歩へ参ります。それでなければ×××の續きを讀みます。それだけで十分一日はたちます。

あの本は大層面白うございます。一つ一つ皆んな大事件です。私の想像も出来ない世界計りです。誰れも／＼皆んな氣に入りました。なんて綺麗な人達でせう。Eが好きです。日本には一寸類がない少女でせう。Gも面白い女で、これも好きです。かういふ生活にも自由はあるものですね。自由は求めさへすればどこにでも得られるものらしいではありませんか。CがDの處へ行く所いゝと思ひましたわ。私がCなら死ぬまでDを愛し續けます、Dがどんなに世間的に墮落をしても、善惡を忘れても、私はDが好き、女つてものはかういふものね。好きなものはどこまでも好きな。でも自分を保護されるためにはやつぱり道徳といふやうなものも頼みにしますわ。でもそれは矢張りほんの上つ皮だけの事よ。

Fがそれと知りつゝ何ものかに引きずられて、もう後へ歸れなくなつて落ちて行く消筋、

獄に被つてゐた嘘の側面が段々假面でなくなつて終ふ順序、かう云ふ人をこれ以上に描くことは、人間の力には望めないでせう。

「惡魔の後へついて行つても、俺はやつぱり神様の子だ。」

Dはかう云ひませう。本統にさうです。小さいだけで私はやつぱりさうなのね、さうして多くの人々も？ 私はいこゝへ來ると、然し少し迷ひます。私は神様が怖くなつて來ると、祈ることも出来なくなるのですもの。神様の前では何かあなたの手をとるのが恐ろしいのですもの。あなたどうかして私からこの心持を綺麗に返のけて下さる事出来ないでせうか……云々。

四月四日

十九

下女は玄關で彼から帽子と杖を受取つて、どろ奥の六疊の方へと云つた。勝手を知つた清は一人で廊下傳ひにその部屋へ通つた。座蒲團二枚向合せて敷いた中に丸胴の桐の手焙りが置いてあつた。いけた櫻炭も半分がた灰になり、疾から彼の待たれてゐたこと語つてゐた。少し座蒲團を滑らし、袴をその上一杯にふく

らまして無難作に坐り、寒くもないのに火鉢の上に手を弱した。火鉢の眞上の電燈は清の眞黒な解かしたての髪に映つて艶々と光つてゐた。夏子の出て來るのがいつになく遅い、それには何んとかく總て改まつて客扱ひされるやうにも思へた。清にとつて此部屋は六年越しの馴みなので、今更ら日を引く何ものもなかつた。せめて四尺床のうすばたに滑つてある風柳を眺めて、受け長しの技巧的な崩さへ一寸氣を引かれながら、彼は袂から巻煙草を出してそれに火をつけた。

茶道具を持つて夏子が入つて來た。後手で襖をびつたりと締めて、

「お待ちせしましたね。」

さう云ひながら斜に坐つた。清は彼女の顔を見ただけでも、彼女は目を伏せてゐた。いつもはさうはしなかつた。何んのため態々呼びつけられたのか、清は少しそれを不安に思ひ煩ひながら、彼女の手に持つてゐる染付の急須を見やつた。……六年その長い間には二人の仲も色色に變つた、殊にこんな小さな心持のはぐれた場合などにそれと互にはつきり自覺し回顧した。煎茶は夏子の玉からたら／＼と茶碗の底に溜つた。それを見詰めたが二人とも外の事を

た。あなたです、あなたは強い大膽な方です。そのお心も尊いものに慕ひます。誰れに知れてもどうかまはない。このお言葉を聞くため、半年の間私は悶え悩んでゐたのだつたと今やつと分りました。私のやうな女の心を握るのは善惡の鍵ではございません。それだけならば戀人には限りません。それよりもつと大切なものです。云ふに云はれない不思議な氣合でございませう。あなたは強い、少しも卑怯でない。あなたは美しい、その上優れた藝術を持つていらつしやる。私はまあなんて仕合せでせう。かう思ふのが間違つてゐませうか。間違つてゐると誰れが云ひます。私の事を私が審判かないで、誰れに審判かれようとするものです。私はさう信じさう安心してをります。

繰返しても仕方のない事ですけれど、私は本統に取返しつかない事して終ひましたのですもの。どうせ一度は結婚しなくてはならなかつたでせうが、私が考へたより結婚は重荷でした。結婚して得たものより、それによつて失つたり、負はされたりしたものがどの位多く、どの位重いか知れませんが。身動きが出来ません。強ひてすればどの位大勢な人を痛めねばならないか分りませんもの。私は妻として最

上等の幸福を與へられたものの一人に相違ないと思つてゐますけれども、それも「妻として」です。「妻として」それほど妻といふものは厭はしいものに思へます。人は結婚して幸福でせうけれども、私には通用しない幸福です。それは私の性格から來てをりませう。娘の頃はどんなに樂しかつたでせう。心は伸々として自由でした。今一度何もかも振捨て、嗚々しく一人になりたい、一人の幸福の尊さを思ふと、一人になり得た瞬間直ぐ死んでも恨みはないほどそれが慕はしくなります。私のこの心をどうしたら、偽りでないと思へるやうに書き表はせるでせう。私奥さんは嫌ひです。最も惨めな奴隷も同じ事です……云々。

三月三十一日

今日もいゝお天氣ですのね。波の音が靜かで鶯が鳴き風が光つてゐます。もう花もそろそろ咲きませう。

あの小さな部屋に一人でをります。表の往來を兵隊さんが軍歌を合唱しながら澤山通ります。劍や鐵砲、重い靴の音が混り、皮と汗ともつかない匂や埃のあがる匂がこゝまで襲つて來

ます。その長い長い群が、ぞろ／＼いつまでも通ります。窓から首を出せば目の下に見えますけれども、私はこゝにちつと坐つて目をつむつてその通るのを聞いてゐます。私はかすかに顫へてゐます。若い人々！ それなのに淋しい悲しい聲ですのね。戰さへあれば死ぬ人々！ 私がかうしてあなたの事を思つてゐるのは、あの人々に對して少し濟まなく申譯なくも考へられます。長い群は通つて終ひました。軍歌の合唱も遠くなりませう。あの人達を思ふのとあなたを思ふ心持とそれを比べてみたりしてゐます。

でも私の顔は今大變に綺麗に見えます。これを書いてゐる机の向に立てかけた小さな鏡に私の顔が寫つてゐます。今日は違つた前髪に取つてみしたら、大層子供らしくなりました。目も、眉毛も、頬のふくらみも、今日はうつくしく見えます。どんなに嬉しいでせう。せめて本統にこの半分でも美しいのならどんなにいいかと思ひます。もし今こゝへあなたが入つていらしたなら、きつと綺麗だ、可愛いつておつしやつて下さるでせう。でもあなたは遠くにいらつしやる。何をして？ どんな楽しい事をして？ 私の事なんかすつかり忘れて？

毎日私一人で退屈だらうと皆様がおつしや

「お傍に行つてお世話がしたいから、急ぎしらへ看護婦になりませうか、なんて書いてあつたんですもの……よくあんなづう／＼しい考が浮ぶものだとつく／＼、未恐ろしい氣がしましたつけ。あなたには應と何んにも云はなかつたけれども、その時直ぐ姉に丈けは内々で要心するやうに注意して置いたには置いたけれど、女の末子といふので姉さんもあんまり甘やかして過ぎるし、あなたの職業から、妙に世間であなを別扱ひにするんですもの。それが皆んな惡かつたので、で實は常子の縁談もそれで早くしたの。嫁にさへやればと思つたのも油斷ね。清きさんで相手が相手だもの、そんな事なんか頓着しやしないわね……」

清は着ぎめてゐた、二重三重の恐怖は身體をぶる／＼震はせた。然し夏子も同様に震へてゐた。そこまで來ると急に言葉は淀んで終つた。彼女が……二十五の時、清は二十一だつた。たつた一人の自分の子供に慈々清子といふ名をつけたのも彼女ではなかつたか。

「こんな事私の口からあなたに云つたつて、あなたは蚊に刺されたほどにも思はないでせうね。あなたにすれば却つてお腹の中で私を喰つていらつしやるでせう！　きつとさうよ……」

さう思ふと私はもうどうしていゝか分らなくなつて、唯死んでお詫がしたくなる。あなたはね、きつと私が一番悪い、さう思つてゐるでせう。きつとさうよ。私が一番悪いんです、それはさうですわ。だから死んで姉さんにも、松本家にも、中村さんにも……常子にも詫を云ひませう。……ねえ清さん、あなたがさういふ風に考へて下されば、私はもう誰れにも合せる顔はありませんもの。第一あなたにだつて、この頭は上りませんわ、……あなたが皆んな覺えてゐるでせう。だからこんな事云ふ私がさぞ憎らしいでせう。腹が立つでせうね。」

彼女は暫らく打附いて泣いてゐた。

「でも清さん、私はあなたにも云分はある事よ。あなたが學校を出た許りの時から、今日までの位陰になり日向になり、出來るだけの事して上げたか、なぜそんなにしたか、その私の心持丈けは分つて下さるんでせうね。何一つでもあなたのためにならないやうな事私した覚えはなかつてよ？　それなのに今度と云ふ今度はこんなになるまで常子の事をこれん許りも打明けて下さらないんだもの。なぜ早くなんとか云つては下さらなかつたの。こつちから何度言出さうかと思つたか知れないけれども、今に云

つて下さるか、今か今かと思つてゐたのよ、本統にあんまりでせう。

今までだつてつまらない文の事で何遍か私にも相談して下すつた事があつたのに、常子は私の姪ぢやありませんか、初めて常子に引逢はせたのも私ぢやありませんか。あなたと常子がそれほどの仲ならばどうにでも仕やうがありましたものに、あんまり水臭い仕方をなさるわね。情けないと思つてよ。あの七月のお祭りの事も、あの手紙の事も、腹にすゑるほど私に惜しかつたわ。あなたの浮氣は諦めてゐても、今度ほど怨めしく思つた事はないの、それに常子が憎らしいんですもの。姪の癖になんだつて叔母の顔に泥をぬるやうな事をするんでせう。

私が清さん清きさんで大喧嘩してゐるのは常子だつて百も承知してゐる筈なのに……お能が好きになつたのも、あなたが好きになつたのも、もとは皆んな私のお仕込みぢやないの……本統になまいきな子ね。あなただつてさうよ。誰れにでも聞いてごらんさい、どの位私があなたを大切に思つてゐるか、陰に廻つては、後指一つ人にさゝせないやうにしてゐるのに、厭よあなたは何んともそれと思つて下さらないなんて。私があなたを最恨だつて事皆んなが知つ

考へてゐた。

「さつきは来て下さったんですつてね。」

「え、一寸御近所まで用があつたし、長らく御無沙汰だし、……それに是非急にお話したい事があつたので、丁度今夜は宿も留守だつたから来て頂かうと思つて。」

「急な話つてなんなんですか。」

「まあゆつくりにしませうね。」

「話す事は早く話して下さい。何んだかさうしないと落着かないから。」

「そんなに急がないでもいゝ事よ。……どうぞお茶でも一つ召上れ。」

夏子は茶をすゝめながら、少し微笑んでみせた。ぐづぐづに丸めてある束髪はやゝもすれば肉の厚い彼女の肩の上に落ちさうにした。上を向いては両手でそれを直さうとしてゐた。腕は袖口から露はに清の目の前に出た。腕と腕の腹ではさまれたその顔は少し上氣して心持右へかしげられてゐた。常子のより夏子の腕は太い、思はずさう。清は二人の身体や心を比べて餘念なく髪を直す彼女に見とれてゐた。

今度の阿清のことから二人は暫らく能く話をしてゐたが、突然夏子は自分勝手な時、その話をこんな風に持出した。

「清さん、あなたはあんまりの人ぢやなくて。本當に情けない事をして下さるのね。」

「なぜです……。」

清は濁つたとほけ聲を出した。

「なぜですつて？……清さんそれ所ぢやないでせう。そんな春氣らしい事を云つてゐてどうするの。」

「……。」

「昨日中村の奥さんが態々東京からそれがため来たんですよ。知つてゐるでせう。中村さん、中村銀藏さんの事、そら常子の表向の媒人をして呉れた人の奥さんですわ。……それも松本家から極く内々で頼まれて来たんですつて。」

彼女は右手で一吋縀子の帯の上から横腹を叩いて、思はず溜息をした。

「尤も定雄さんにはまだ何んにも云つてないんだ相ですが、あなたが××館宛で常子へお出しになった手紙も持つて来たことよ。……それから前月の二十一日、あなたは常子と一緒に向島へ行つて？」

「……。」

「行つたでせう！」

「……。」

「隠したつて駄目よ。それから分つたんですつ

てね。定雄さんの兄さんが常子を途中で見かけたんで、不思議に思ひ自動車の番號を覚えて置いて調べたから、直ぐもうあなたの方のした事は手に取るやうに分つて終つたんですつて、中村の奥さんからその話を聞きながら私ははら／＼しましたよ。」

夏子は黙つて暫らく高く持上つた自分の膝を見て涙ぐんでゐた。

「本統にあなたもあなただけでも、常子の人膽なには采れ返つて終ひましたよ。たつた此間片づいた許りぢやありませんか、それに……」

彼女の目からは急に泪がばら／＼とその膝の上にこぼれた。

「それに兄さん（常子の父）もあんなだつたし……。」

夏子は自分の身の上を考へ溜息をついたが、少し語調を變へ、

「あの子は小さい時からしんねりむつつりしてゐたけれど、まさかこんな事はし相にも見えない、陰氣らしい子だつた。いつでしなね、さう／＼九月の中頃あなたが下痢でねてゐた時、私見舞に行つた事があつたでせう。あの時思はず枕の下にあつた常子の手紙を見て私びっくりしたんでしたわ。仲々な子だと思ひました。」

二十

手が顫へて書けません。何度も書きかけては、あとからあとから込上げて来る涙にくれて、書きかけた紙を濡らしてしまひます。今私はまあ何んといふ恐ろしい陥穽に落ちて終つたのでせうね、清様。あなたはどんなにお困りでせう、どんなに御迷惑でせう、どんなに歎いていらつしやるでせう。さうしてこの先どうしようとしていらつしやるの、どうぞそれを私に聞かせて下さいまし。私はもう考へることも、書くことも出来なくなつて終ひました。

昨品川へ参りました歸り、局へ廻つてお手紙を受取り、暗闇を大急ぎで宿へ戻り、明るい様々な希望にかられながらそれを讀み初めました。あゝその時の驚き！まるで魂消える許りでした。どうしませう。お手紙を顔にあてゝわつと泣きました。

そこへ折悪しく夫が歸つて参りました。まだ何んにも知つてはゐません。初めは驚いたり、少し疑つたりしてゐながらも親切に勞はつて、どうしたのだと色々なだめて呉れました。けれど、さうされゝばされる程私は泣きたくなりま

した。品川からお母さんに叱られて歸つて來たと、罪もない人を罪にして傷はりましたので、夫は一層心を痛め、骨折つて慰めてゐました。夫の前でこんなに泣いた事は初めてですからこれによると却つて嬉しく、可憐らしくも感じたのでせう。あゝ、然しもしそれと知つたら、どんな苦みに夫は憫み、どんなに私を憎んだでせう。その場で直ぐ私を打つたり、蹴つたりしたかも、殺して終つたかも知れませんが。さう思ふともう切なくなつて總てを打ち明けて終ひたいと思ひました。けれども、いやゝ私だけの事ではない。大切な大切なあなたがある、さう思ひ返しながら勇氣をつけて、恥ぢながら詫言ながら身を悶えて泣きました。熱い涙は目からも、鼻からも……喉からも止め度がございませんでした。

どうして私達はこんな惨めな、恥かしい面目ない罪人になつて終つたでせう。いゝえ、もとかから罪人でした。けれどもかうなつて始めてそれが本統に分りました。目が覺めたやうに、夜が表になつたやうにはつきり目の前に私達の姿が表はれました。なぜ知れて終つたのでせう、なぜものまゝでゐなかつたのでせう、それが口惜しい、然し考へてみれば私達は當然な

處へとう／＼來たのでございませう。私は一晩中ではまんぢりともせず、夫のそばで考へました。夫はすや／＼こゝろよげに安眠してゐます。明りを消した床の中で考へる位執念深く考へられるものはありません。でも私は何を考へました。とう／＼當然な處へ來て終つたと、考へるのが考の終ひで、また始めでした。考は唯渦巻のやうにぐる／＼廻つてゐる許りでした。

夜が明けてから寝苦しい眠に入つたかと思ふと、直ぐ夢を見ました。あなたの日は涙に濡れ、あなたの胸は板で押へつけられてゐるやうに苦しいといふ夢でした。

私は病氣だと云つて起きませんでした。夫は心配しながらも先程出て参りました。本統に私は病氣でございませう。こんなに心が痛められ悩んでゐるのに、肉體が丈夫だからといつて、それで病氣でないといふ筈はございませう。

私はどうかしてあなたにお目にかゝり度い。一寸でもいいからお目にかゝつてあなたの心持を伺ひたい。父私の決心も聞いて頂きたい。それまでに私も決心を致しませう！もしそれまでに決心が出来なくつてもお目にかゝりさへすれば、その瞬間にきつと決心がつきませう。

てゐますよ、それにまるで他人か、かたきのやうに眞正面から私に恥をかゝせるやうな事なさるんですもの。私どうしていゝか分らなくなつて終つてよ。せめて私の百分の一でも、千分の一でもいいから、私の事も考へて下さらない。ね、いゝでせう。考へて下さる、下さいね、きつとよ。そんなあやふやな返事いや、…いや…：ではきつと誓つて下さい。さうすれば私にだつて考へがありますもの…。」

彼女の考といふのは清と常子との間に起つた思はしい今度の事件が大事に至らない前に、中村の奥さんと自分との二人に一切をあけて任せては呉れまいか。もしさうして呉れるならば、非常な破綻を見せずに、常子の幸福を計る事も、清の面目を保つ事も出来るやうどうにか盡力してみたいからといふのであつた。

夏子の聲は初め清に恐ろしかった。何を恐れるといふ事なしに、唯その聲、その日が恐ろしかった。夏子の云分には正當な條理に合はない點もあつた。矛盾もあつた。又二人の關係が暴露された場合を思つて豫め不安を感じるものは清一人に限られてゐる譯でもなかつた。又二人の交情がこれ切り降れる未練は清より夏子の方により多かつたかも知れない。だから清が

優勢な態度を取らうとすれば、取れない筈はなかつた。それなのに清は自分の犯した罪科といふより單に夏子を恐れて、意氣地なく震へてゐた。彼女の嫉妬憤怒が次第に緩み、その聲が和げられ、幾分づつ憐憫の調子に變つて來ると清はやつと胸を撫で下ろし蘇生の思をした。

「これはあなたや、松本家許りのためではないのよ。本統にあなたが常子を可哀想だと思つてやつて下さるなら、ね、どうぞさうして下さい。私達は決して二人の不爲になるやうにはしませんから。いくら莫迦にされたり、酷い目に逢はされたりしたつて、常子はやつぱり私の姪で、よし、あなたはあなたですもの…：自分や一家の恥を曝らすやうな事がどうして私に出來ます…：私の心持よくあなたには分るでせう。何もかも忘れてあなたの方を許さう、あなたの方の方にならうと私してゐるのよ。」

何を夏子が許し、何を二人が許されるのか、それは考へてみなかつたけれども、清は夏子の感情がやつと和げられて來たのと、許す味方になつて云はれた許りで、もうすつかり有頂天になつて、責任の幾分を彼女に譲つて終つたやうにひたすら喜んだ。憐れにも今常子の彼に對する深い信頼も慫も何もかも危く忘れられよう

としてゐる。二人にとつて最も危険な瀬戸際及び將來は一切をあけて、その想敵である夏子に委ねられようとしてゐるのである。夏子が常子をどうしようと思つてゐるのか、常子が夏子をどう思ふだらうか、それ等に關して清はまるで盲目だつた。

彼が遅い晚餐を振舞はれて、下田家の門を出たのは十時半だつた。月があつて、空も地上も霞んでゐた。彼は全く意氣銷沈の有様で首を下げたまゝ、月光の滲み込んでゐる白っぽい往來を見詰めながらこそゝと歸つて來た。目前に横る事件の漠然たる輪廓しか彼には見えなかつた。どこをどう突き破つて、どうぶ風に進んで行けばいゝのか、それ等に對する見當はつかなかつた。そこで自然夏子にぶはれたまゝ、彼女を頼みにする外はなかつた。彼女に任せて置けば甘くか下手にか、どちらかに片がついて行くだらう位に考へてゐた。なぜなら彼女以上に甘くこの場を切り抜ける名案はとて清にも思付相でなかつたからである。彼はいつの間にか夢中で家に歸つて來てゐた。玄關で下駄をはいたまゝ、こつぷに水を貰つて立続けに二三杯飲んだ。喉が渇いて眩暈がして倒れ相だつた。

死ぬ時があらうでも、死んでも愛し合ひませうね、きつと。

あなたにそれが出来ますか。私には出来ません。きつとやりとげます。それが私の生涯の事業でせう。厭になつたらよす、困つたらよすなんて事は人間として此上ない恥かしい事ではありませんか。そんな醜い心は人間の心ではありませぬわね。出来ると確信するのが出来るといふ事でせう。私達にそれが出来ないといふ事はない筈ですもの。

愛だけならゆるぐかも知れませんが、私は愛してゐる上に信じてゐます。でもあなたは私を信じてゐて下さるの？　どうぞ云つて下さい。今まで一度もそれを言つて頂きませんでした。あなたは只私を可愛がつて下さっただけ？　それともつとそれ以上のものがあつて、どう？　どうぞそれを聞かせて下さい。

あなたを疑つてゐるのぢあないの。さうおとりになつては厭、でも聞かせて下さい。今はその時が来たのですもの。……云々。

四月十日

昨夜手紙を差上げた後へとう／＼叔母から手

紙が参りました。至急會ひたいから、明日内へ来るやうにつて……あゝ私はもう何も恐ろしくなくなりかけてゐます。けれども手紙のなかに氣に入らない箇所がありましたので、「一層私は煩悶しました。で知んでも行くまいと思つてゐましたが、今朝局へ行つてお手紙を受取つてみて、それではやはり行つた方がいゝのかしらと思ひ直しました。」

ではどうしても参らなければならぬのでせうか。厭で厭で仕方がございません。今の私がどうして叔母に顔を合せられます。あなたのお指圖ですけれども、餘り慘酷でございませう！　どうしても氣が進みません。では思ひ切つて参りませうか。行かうか行くまいか、行つた結果はどうなりませう。不安で不安でたまりません。

では思切つてつらい思をしに参りませうか。一時にこゝを出かけます。その代り五時頃までに榎木町まで戻つて参るやうに致しますから、あなたはそこへ来てゐて下さいませんか。きつと来てゐて下さい。少し位遅れても必ず待つてゐて下さいましね。ではきつとお待ちします。私は叔母に逢ふより、あなたに逢ふため、そちらに参るのでございます。もう手紙では駄目です。

後程お目にかゝつて……氣がせきますから。

四月十一日、朝

二時半頃清はこの手紙を領事館で停車場から来た使ひの車夫に受取つた。彼は散々思ひ迷つた。事件の解決がちゃんつくまでは常子とは逢はない、文通もしないと思つて夏子に誓つたのである。然し今かうして常子の手紙を受取つてみると、夏子との約束より常子の身の上が餘計心配でならなくなつた。彼は誰れにも信實な戀人でなかつたやうに、又誰れにも不實な無情な男にもなれなかつた。

もう彼はぢつとしてゐられなかつた。蒼い顔をして室の内をあちこち歩き廻りながら、散々又迷つた揚句、やつぱり常子に逢はうと思つた。一度逢ひたいと思ふと、無暗に逢ひたくなつた。四時頃から慌て、彼は領事館を飛び出して終つた。

二十一

お別れして歸りながらも不安に顔へてをりました。私の方が先に歸つても、夫の方が先で

私の前にはあんまり澤山道が見え過ぎます。でもそのどこへ進みませう。道はこんがらかつた線のやうで見詰めてゐるうちに、どれがどうなるのか少しも分らなくなつて終ひます。

では御返事を直ぐ下さいまし。きつと逢はせて下さい。私は私の心を、どんなにさいなまれてもいゝから、あなたのそれを安らかにさせて下さい、さう云つて心をこめて、お祈りをしませう。どうぞいつまでも常子を忘れないで下さい。私を思つてさへ下されば、きつとあなたの心は軽くなります。私はさう命がけで祈つてゐます。どうぞきつと忘れないでどんな苦しい時でも私を思出して下さい。

四月七日

あゝあなたは、清様、あなたは私をお見捨てなさうとなさるの、もう今日は九日の晩です。その二日の間私はどれほど苦みましたらう。ごらんないさい私の顔を！ 私の目の色はこんなに物凄く光つてゐます。おゝ！ 自分ながら恐ろしいございます。誰れか部屋の中へ来てくれなければとても私は一人でぢつとしてゐられません。恐ろしい。私が今こんなに恐れてゐる

のは罪でも罰でも、そんなものではありません、常子です、この恐ろしい常子です。鏡をごらんない、私が寫つてゐます、若いまゝの、美しいまゝの私が寫つてゐます。

なぜ直ぐ御返事を下さいませぬ。私は恥しさを忘れ今日は三度も局へ参りました。まだ参りませんか、終ひにはかう尋ねましたが、お手紙は來てゐませんでした。……あゝ清様！

もしあなたが私から離れて行つてお終ひになるのならば、私はあなたを思切らうかと考へてみました。それが一番穩當な事らしく思へましたの。さうして私は一切を大に打明けて詫言ひ、離縁して貰ひませう。夫の名譽のためにも、私のためにも、家のためにも一番それがいいでせう。それよりも第一あなたのためにもきつとそれが一番よくはないでせうか、私は今誰れにいい事を考へようより、あなた一人のためにいい事を考へればそれでいいですわ。それにはどうしても私があなたを思ひ切らなければならぬのだと氣付きました、それはどんなに辛いでせう、私の命をとられて終ふ事でも。然し私は先からいかなる犠牲でもあなたのために拂ふと誓つてゐました、今その時が來ました。あなたのためにならばきつと笑つて死ねます。

どんな惨めな殺され方でも怨みは致しません。こんな不安とこんな苦しい涙とを取除いてくれるものがもしあればそれは極樂です。

私は泣いてをります。泣きながら神妙にあなたからお指圖の來るのを待つてゐます。あなたは私をお見捨てになりませぬ、あゝさうでした。一寸でもあなたを疑つたのは悪うございました。どうぞ許して下さい。私はあなたをいつも信じてをりました。あなたが私に誓つて下さつた言葉は一つ残らず胸に廻つて來ます。私はあなたを信じてゐます。いつまでもこの心を變へずに信じてゐませうね。

あなたは大胆で賢くいらした。いつでも二人の行く道をちゃんと選んで教へて下さつた。それがために私の歩いて來た過去の世界はあんなに美しく樂しかった。いかほどその過去の行爲が今私を苦めても、過去は過去として怖いようとは思ひませぬ。今の惨めさだけが、この今の私達だけが怨めしく、情けなくなります。

そんな事考へないで、もと通りいつまでも愛し合ひませうね。どうぞいつまでもいつまでも愛してゐて下さい。私は誓ひませう、きつとそれは出來ると。形の上ではあなたか、私のか

更ら申妻のない事でございます。あゝ苦しうございます。あなたはこれからどんなにも御幸福にお榮え遊ばしませ、あゝもう何も申上げますまい。どうぞ私にこの先の事を云つたりする事をさせないで下さいまし。もう書けません。唯一言清様、四月十日までは懸しう懸しうございまして。唯それだけ、これはきつと死ぬまで忘れずと思ひ續けてゐるでせう。

四月十二日

三十二

中三月おいて、七月十二日の朝新聞に中根清と松本定雄の妻常子とが、房州大原の海岸で心中したといふ記事が出た。清の位置職業の目立つただけに當時世間の話題を賑はした。記憶のいゝ讀者は地方通信員が書いたらしい二人の着物の報告なども思ひ出すかも知れない。

十日午前六時大原町××の海岸に縮緬の扱きにて結び合せたる若き男女の抱合死體漂着、警察署より係官出張檢視したるに……云々。男は二十五六歳、紺御召の夏羽織に結城の單衣を着し、献上博多の角帶

を締め、一見相場師か藝人體の美男にして、懷中せる紙人中には現金二百圓餘を所持し云々。又女は年齢十八九歳位、丈高く丸顔の頗る美人にして、左手に寶石入りの指輪三個まで嵌め、派手な金紗縮緬の羽織に夏菊と撫子の模様ある御袴を着し、細縞珍の花模様刺繍入りの帯を締め、藤の高彫美事なる金金具の帶留を付け、懷中には横濱××館にて撮影せる男の寫眞一枚を所持しゐたり、此兩人は……云々。

こんな風にいゝ加減な事がさも事實らしく田舎めいて書いてあつた。

常子が品川に歸つてから清は二度も三度も手紙を出したが、一度も返事は来ずに五六の二月は空しく過ぎて終つた。其頃から清は人が變つたやうに幽鬱になつてゐた、自分では神經衰弱のためだと他に云つてゐた。

七月の初頃松本定雄は神戸へ赴任する事になつた。それを機會に幾度か交渉のあつた常子の歸宅が再び問題になつた。其時になつて常子は初めて清に返事を出した。その手紙の目附は七月の一日だつた。清も直ぐそれに返事を書いた。

七月五日第一日曜日、中村銀蔵の屋敷へ松本、水澤兩家の代表者及び下田大郷が集まつて所謂親類會議が開かれた。その席に常子も呼び出された。彼女は口を緘して罪人のやうに首垂れ飽くまで黙つてゐた。會議は頗る順潮に運んで行つた。そのうち夏子が一言一言常子に向つて何か云つたかと思ふと、常子は突然顔を上げて叔母に喰つてかゝつた。顔の色は憤怒と嫉妬とに燃えて火のやうに輝いた。

「叔母さん！ 叔母さんの前ですけれども、あなただつてそんな事を云はれた義理ではないでございませんか。私は清さんを思へばこそ、かうして罪を悔いて謹慎してをります。これでもまだ足りないとおつしやるんですか。あなたもつと私をどうかしたいのですか。叔母さんは清さんを私から奪ひたい許りにそんな色々な難題を持ちかけて私をお虐めになるのね。私それだからちつとも御親切とは思ひません。……私も皆様の前で何もかも申上げて終ひます……」

かう云つて義理も恥も忘れ果てたやうに泣き狂ひ、夏子と清との長い間の關係を訴へ且つ口を緘めて黙つたので、會議の席は見る見る蜂の巣をひつくり返したやうな騒ぎになつて

も恐ろしいと思ひました。祈るにももう祈れない身ですから、苦痛は私を唯打ちのめさうとしてゐました。けれども歸つたのは私の方が先きでした。

歸つて来ると間もなく夫は床に就いて眠入つて終ひました。私も伏せるには伏せりましたが、目をあいてゐるのか、つぶつてゐるのか分りません。考は見えるやうに目の前を幻になつて通りました。どれもどれもはつきりしてゐて考^{かんが}とは思へない程でした。皆ながそのまゝ事實のやうに私を脅しました。私は身の置所もなく床の中で恐れて震へてゐました。

三時頃でした、私は夢中で夫を呼び醒ました。夫が驚いて床の上に坐り直ると、その膝の上に顔を押しあてたまふ私はわつと泣きました、私はとうとう總てを夫に打明けて終つたのです。どうぞ私のこの無謀な行爲を御許し下さい。でも夫は許してやると云つてくれませんでした。終ひには、お前の決心を頼み、どうかこれからいゝ妻になつて、いつまでも一緒にゐてくれと数願しながら、私と一緒に泣いて呉れました。

いつの間にか朝になつてゐました。夫は外出しようとは致しませんでした。二

人はやゝもすれば黙つたまふ海の方を眺め、時溜息をついて許りゐました。午まへ湯に入つて氣持がよくなつたからと云つて私は化粧などし、晴々した顔を夫に見せました。別れたあとまでも、私の事を美しく思ひ出して貰ひたかつたのでございます。さう思ふ心は獨りで泣いてゐました。

兎も角京橋に行つて下さい、私は必ずおとなしく待つてゐますからと先刻無理に夫を出してやりました。夫に宛てた詔狀はもう書いて終ひました。

どんなに夫が私を引留めてくれましたても、亦私が夫の寛大な切ない心に同情しましたも、このまゝこゝに私が止つてゐる譯には参りません。この決心を了解して下さいるのは天にも地にもあなた一人切りと思ひます。それでよろしうございます。常は満足してこの悲しい部屋を出て参りませう。

今更ら私はあなたに何んにも云ふ事はございません。今迄に云ひたいだけの事は大方云つて終ひました。もし云ひ残した事があつたとしても、此際それは皆んな無用な事になつて終ひました。

私はこれから風呂敷包一つ持つたまふ櫻の

咲いてゐる品川の家へ歸ります。夫は直ぐ私を離縁しても呉れますまいが、そのうちには記憶も薄らぎ段々私を忘れて呉れませう。その間に私もゆつくり考へたり、清いたり致します。夫は本統に不幸でした、可哀想でした。然しこの上私がそばにゐるのは益々夫を不幸にする許りでございませう。私はどうしても自らこ

こを追ひ出さなければなりません。

私は自分を幸福とか、不幸とかいふ世間並な言葉で批評しようとは思つてをりません。これが私にとつて本統の不幸かどうか、誰れが知つてゐませう。もし私があなたを怨んでゐるだらうと思召になるなら、それだけはおやめ下さい。私はあなたを怨んではをりません。唯これから先あなたの御迷惑になるまいと心がけてをる許りです。

私達の戀はもう夕暮だと昨夕おつしやいましたのね。ではもうぢき夜が來ませう。それも仕方がございませぬ。

もうお目にかゝる事も、手紙を差上げる事もございませぬ。ではどうぞ御大事に……。

あなたは私を最後の煙たとおつしやつてね。私はそれを信じたうございます。でも私は今おそばを離れて参ります。そんな事申しても今

年譜

明治十五年

十一月廿六日、横濱市月岡町税關官舎に生まる。當時父、武は横濱税關々長たり。壬午歳に生れたるの故を以て壬生馬と命名。

明治二十一年

横濱師範學校附屬小學校に入學す。

明治二十四年

七月父國債局長として東京に轉任せる爲め、一家を擧げて東京麹町永田町官邸に移る。——麹町小學校に轉學。

明治二十六年

五月父の退官の共に鎌倉山井濱に移住。——神奈川県師範附屬鎌倉小學校に轉學。

明治二十七年

十一月父の實業界に入れるを機會に復び東京に出づ。

明治二十八年

一月學習院入學。九月中等科に進級。この頃より古典文學及び蘇軾、蘇轍、蘇軾等の作品を耽讀す。

明治三十年

十人近くの友人、志賀直哉、田村寛貞等と共に、『睦友會雜誌』と題せる週覽雜誌を創立す。——この頃近衛院長が全學生に向つて懸賞文を課せし時、上級生を以て一等賞を受けたることあり。

明治三十三年

三月肋膜炎に罹る。——五月、鎌倉に轉地。——夏、熱海、銚子などに遊び、翌年九州に旅行し、父の郷里なる鹿ヶ島に赴き、川内平佐村に留る。——同地に於てカトリックの僧に會ふ。伊太利語等を能くする人にして、宗教談、伊太利文學藝術の話などを聴き、伊太

利に興味を持ち始む。落第す。

明治三十四年

七月外國語學校伊太利語科に受験入學。

明治三十七年

七月同校卒業。——即日洋書を學ぶ決心にて、藤島武二氏へ入門、その畫塾に寄寓す。

明治三十八年

四月、藤島氏の畫塾を去る。六月十三日、伊太利留學のため、獨逸船ローンに便乗し、日本を去る。シンガポールにて日本海軍の報に接す。——ナポリ港上陸。

夏期中、青年畫家増井清次郎と共に、ロツカデイアアバアといへる避暑地に赴く。『蝙蝠の如くは、この畫家をモデルとして、その當時の經驗を描けるものなり。』秋、アカデ

ミー・ド・フランスに入學す、當時カロールス・デラン氏院長たり。

十一月、羅馬國立美術學校に入學す。

明治三十九年

夏、カッシーノ、アアルチア、オルヴィエト地

終つた。夏子の夫の下田忠次がいかに寛大でも、その場の突然な出来事に對しどうにも手のつけやうがなかつた。夏子も初めて自分のやり過ぎに氣付き、後悔し、腹立て、泣いたが今更ら追着く事でもなかつた。

常子が清と突然姿を隠したのはその會議の翌翌日の出来事であつた。遺書が東京へ着いてからも死骸は上らなかつた。大原へ急行した清の養父・定雄、常子の母や兄は、死んだ二人の泊つてゐた××樓の二階の廊下へ出ては廣い海の上であてどもなく網を引いてゐる漁船の群を茫然と眺め、その底に漂つてゐる若い男女の死體を思つては涙にくれた。彼等は空しく二晩そこへ泊つて死體の上のを待つ間、二人のために建てる比翼塚の相談などをしてゐた位、内心もう彼等の戀を憐れ、その美しさを惜んでゐた。投身してから五日目の朝、ひとりでに死骸は岸へ打上げられた。二人の眼は四つながら魚の餌食になつて、頗る美人どころか二目とは見られない姿に變つてゐた。

尙ほ様々な事が傳へられた。二人が折角身を隠しに來たこの旅館に運悪くも羽田の××館にゐた料理番があるのを着いた

翌朝偶然常子が見つけた。その時彼女の顔は土のやうになつたとか、その當日の明け方四時近くなつて、朗々たる清の謠曲の聲を聞いたものがあるとかいふ類の事であつた。

清の遺書の一節には、自分は社會に對する責任を自覺すればするだけ、どうすることも出来ない重苦しい大きな力の壓迫を感じる。その力では自分を生かして置くまいとする意志であることを悟つた。然しこの瀬戸になつてもまだ戀を疑つてゐる。どうしても死ぬほど戀を信ずる事が出来ないのが残念だ。一生に唯一度でいゝから本統に戀を感じてみたい。もし死その瞬間にでも心から常子が自分を信じ戀してくれたやうに、自分も彼女の總てを信ずる事が出来たなら、それはどんな幸福な死か知れない。といふ意味が書かれてゐたといふし、常子には、自分は決して罪を悔いて身を滅すのではない、戀に酔つて酔つて此上もう醉ふ事が出来なくなつたのだから、あの夏子から清を奪ひとつて一緒に死ぬまでだといふやうな事が書かれてゐた。

でも清が横濱の家を出た時、果して心中する迄の覺悟があつたかどうか、それが疑問にされてゐたが、次の日曜の正午、清の養母がぼ

んぼん時計をかけようとして、鍵の入つてゐる分銅の函をあけたら、その中の片隅に彼の實印と銀行の通帳がちゃんと隠してあつたといふ事である。
(大正八年十二月九日、野方村にて)

死は暗夜に飛ぶ流星のやうな感動である。突然表はれて、すぐまた見えなくなる、その束の間の感動である。死は又音高く無限に放たれた強弓のやうである。その弦音に驚いて空を見詰める間に、矢はもう見失はれて終ふ。死者はその親しい見送りの人々に正しい路を示しつゝ海路を分け行く帆船に似てゐる。やがて帆影が消え、一條の船脚のあとも消える。海は又もとのまゝの海に歸つて終ふ。海が死だといふのではない。帆船が死者だといふのではない。帆船が死者吾々の傍から旅立つごとに人は驚いて死を見守る。吾々は自ら死ぬ時まで死を識ることは出来ないが、この感動によつて死を見詰める。

(白夜雨稿の「死とはより」)

科美術展覽會を起すに至れり。

大正三年

四月、上野美術學校に於て、「セザンヌの建設」なる題下に處女講演をなす。

夏、甲州舟津に滞在、その間になれる制作を第一回二科美術展覽會に「鬼」不二「村の一角」等六點出品。——十月、神田青年會館に於て「戦争と美術家」なる講演をなし、大戦後の趨勢を豫言す。

大正四年

六月、「歌人」(短篇集)を鈴木三重吉氏編現代名作集の(一)(第十七編)として出版。——九月、鈴木三重吉氏の勧めにより「死ぬほど」を新小説に發表。これ「白樺」以外の雑誌に寄稿せる最初のものなり。

秋、朝鮮——滿洲——奉天——北京等を父と共に旅行す。

大正五年

五月、里方の提議にて妻信子との間に離婚問題起り、幾多の紛争を重ねたる後、遂に離婚するの已むなきに至る。

六月、第二の短篇集、南歐の日を新潮社より出版。風俗壞亂の故をもつて發賣禁止となる。後忌諱に觸れたる作品「鳩飼ふ娘」を改竄して改版を出す。

八月、嫂、安子死す——輕井澤に赴き兄武郎の肖像を畫く。第三回二科展へ「或る詩人の肖像」切通し坂「等」出品。——紐育メトロポリタン座に於て演ずるオペラ「イリス」の背景を圖案す。

十月十九日、妻信子原田家より迎れて歸宅し、遂に原田家と斷つ。

十二月四日、父武を失ふ。

大正六年

九月、二科展覽會に「蚊帳」「カナリヤ」「金魚」「釣」を出品す。——同月新進作家叢書第七篇として「最君へ」出版。六月、九年間居住せし家より、その隣家の角屋敷現住宅へ轉居。

大正七年

武郎の一家と共に鎌倉、泉谷に避寒。四月、一家を擧げて京都へ行く。——三月、讀賣新聞に「新學童の爲めに」を掲載す、初めて自由畫

的提唱をなせるものなり。——九月「葡萄園の中」を春陽堂新興文藝叢書第十篇として出版。二科會出品「谷の竹藪」「花」「夕陽」「曙光」等六點。

大正八年

冬、熱海より大島へ到る。——五月、梅蘭芳來る、その贊を時事に公けにし、神戸までその妙技を追うて見に行く。「ロシアの婦人」「支那絹の日装」等二科出品。

大正九年

脚尖を病み鎌倉へ轉地を勧めらる。——間島道彦と交る。夏、輕井澤にて「白い道」「青い道」その他の畫作をなす。五月、ベルナル著「回想のセザンヌ」を讀文閣より、六月「死ぬほど」を春陽堂より、十二月「美術の秋」を讀文閣より出版。十月、曉子疫病に入院。十一月、鎌倉新渡戸博士別荘へ轉住す。

大正十年

樂樂亭海岸にて専ら繪畫、六月、同村内にて轉居。——一月「嘘の果」を新潮社より出版。田邊松坡先生の唐宋詩醇の講義に列す。「十

方を旅行す。九月——アメリカ留學中の兄武郎歐羅巴漫遊のため、ナポリへ上陸。ボンベイ、アマルフキ半島地方を旅行し、更に羅馬を振出しにフロレンス、ボローニア、ヴェニスの諸所を経てミラノに赴き、當時同所に於て開催中の萬國博覽會を見物せり。是よりスキツツルに入り、諸市を遊覽したる後、シャツハウゼンに暫く滞在し、同地に在るグスタアヴ・ガムベル、ブツフマン等の文學者美術家の群と交遊せり。後、ミュンヘン、ニュールベルヒ、ドレスデン、ライプチヒを経て、ベルリンに入り、それよりウィッテンベルヒに出で、諸詩星の舊蹟たるワイマアに赴く。尙フランクフルト、ケルンを経て和蘭に入り、ベルギーに出で、諸都市を一足して巴里に赴く。

明治四十年

二月巴里より英吉利に赴き、歸朝する武郎を見送り、巴里に留學の決心をなす。——格蘭ド・シヨミエル等に通學し、コラン、ブリー氏等の教授を受ける。

明治四十一年
アンヂヤベルに就きて彫刻を學ぶ。——夏、

スキツツルに旅行し、秋巴里に歸る。——この時開催せられたるセザンヌの回顧展覽會を見て、學校教育に嫌惡を感じ、遂に廢學して、自らアトリエを持ち制作に耽る。——ラムプランの「屠牛」をルウヴルに模寫す。

明治四十二年

一月南佛蘭西に旅行し、梅原龍三郎、秋山謙藏氏等とマントンに滞在。伊太利に旅行し、ビザを経て羅馬に出で、ナポリに赴く。復び北に上り、フロレンス及びヴェニス、ミラノを経て、マントンに歸る。それよりマルセイユ、グロノオブル、エビナル、アルサス・ロートリンゲン、ナンシイを経て巴里に歸る。——巴里滞在中交遊せる人々——藤島武二、湯淺一郎、荻原守衛、高村九太郎、山下新太郎、齋藤豊作、齋藤與里、白瀧幾之助、南燕造、梅原龍三郎氏等あり。

明治四十三年

マルセイユより宮崎丸にて印度洋を通りて歸朝。麹町下六番町に居を構ふ。——雜誌「白樺」創刊せられ、同志に寄稿す。若し「白樺」出でざりしならば、或は遂に文筆を執るに至ら

ざりしやも知れず。
七月四日、上野竹下臺に於て白樺社主催の下にて南蕨造氏と共に滯歐記念展覽會を開催し、七十點の制作を出品せり。南蕨造氏五十四點、これ恐らく日本に於ける個人展覽會の嚆矢ならん。

十一月、原田信子と結婚し、京阪地方へ旅行す。——この年ケーベル博士の肖像を畫く。

明治四十四年

八月、長女を挙げ、曉子と命名。
兄に伴はれて北海道に旅行す。——文部省展覽會に「宿屋の裏庭」を出品す。

大正元年

秋、白樺社主催の下に落選展覽會を赤坂三會堂に於て開催す。これ文展の審査に落選せる自信ある諸家の作品を集めしものなり。

大正二年

二月、最初の短篇集「編輯の如く」を洛陽堂より出版。——秋、文部省展覽會洋畫部に第二科併設の議を同志と共に當局に建議せるも容れられず、遂に文部省より獨立して、第二

昭和二年七月一日印刷
昭和二年七月五日發行

現代日本文學全集 第二十七篇

著者 有島武郎
著者 有島生馬

發行者 山本美

印刷者 杉山愛二

東京市牛込區市谷加賀町一ノ二

東京市麹町區内幸町一丁目參番地



發兌

東京市麹町區内幸町一丁目參番地
幸ビルディング

改造社

振替 東京 一四〇二番
電話 銀座 一四〇二番
銀座 五五七番

二月の夕陽「うるめる春」等を二科展へ出品。
——十二月姥谷松の屋敷を購入し轉居す。

大正十一年

發熱及び盲腸の發作漸く多し。——「ピアノ練習」「マリア」「朝の雪」「觀瀾亭」「神様の肖像」を二科展へ出品。

大正十二年

澤田節藏夫妻極樂寺に來住。——四月賀古病院へ入院。六月柏崎にて「自由畫」を囃ふの講演をなし自由畫の通弊を修正す。六月八日兄武郎死去、七月九日告別式を行ふ。九月一日大震災、二科展招待日にて上野にあり、家族は鎌倉にて音信不通。母は赤阪に弟行郎と別居。——甥三人を引取り鎌倉より番町本家へ轉住す。

大正十三年

二月十五日再び現住宅へ本家より轉居。——三月一日より三日間本家財を賣立し、北海道農場の譲與に着手す。五月「白夜雨稿」を金星堂より、同月「片方の心」をプラトーン社より、九月代表的名作選集第四十篇として

『蝙蝠の如く』を新潮社より出版。——九月末日入院、十月二日第一回盲腸炎手術を受く。経過不良。十一月十九日再手術を受く。十一月二十九日漏孔を存せるまゝ歸宅臥床。生死を危まる。

大正十四年

四月鎌倉より湯河原へ轉地療養す。——七月二十二日大學病院に入院、二十八日第三次の手術を受く。——九月十四日全快退院。——「看護婦」「牡丹」「山上の新緑」「菜の花」ある靜物「窓前雪景」等を二科展へ出品。——四月アルス美術叢書第一篇「セザンヌ」を臥床中譯了出版。

大正十五年

中野に畫室を建つ。——文化學院に教授す。——六月間島道彦氏の遺稿「若き科學者の隨筆」を新潮社より出版。——「海水着の肖像」「リラ色の洋装」「紺色の着物」「黒谷の赤松」「光悦寺の庭先」「日暮の露臺」の外四點を二科展へ出品。——十月京都へ、十一月京都より郷里鹿兒島縣川内へ歸省。武郎の遺産整理をなす。

昭和二年

三月藤村詩碑建設の計畫、抄り小諸へ實地檢分に到る。——四月一日より六日間、越にて山下、正宗、坂本と四人景星會展覽會開催、「大文字山」「琵琶湖」「妙義山」等二十五點を出品す。同二十五日より十日間芳野、紀州等へ旅行。五月十八日より十日間山陽山陰へ講演旅行。——六月朝日新聞社主催明治大正名作展覽會に「老爺及び白い道」出陳せらる。——七月現代日本文學全集第二十七篇として「有島武郎、有島生馬集」出づ。

GTU Library
2400 Ridge Road
Berkeley, CA 94709
(510) 649-2500

GTU LIBRARY



3 2400 00559 7558



改造社